

あ

相生垣秋津 (あいおいがき・しゅうしん/1896～1967年)

兵庫県生れ。川端画学校に学び、川合玉堂に師事。巽画会の研究会のメンバー、1920年国画創作協会展に入选。20年第一回来派美術協会展に出品。21年第一回赤人社展に参加出品。21年第一作家同盟にも加わった。関東大震災を機に郷里の高砂に帰る。以後、父の業務を継ぐと同時に、俳句に専念し、「ホトギス」の同人。昭和以降は俳句と絵画を融合する句画集を発刊した。1967年没、71歳。日本画、俳人

相川松瑞 (あいかわ・しょうずい/1894～1969年)

金沢市生れ。石川県立工業学校図案絵画科中退。その後上京し、1914年回文展に入选。22年前田家の委嘱により、紫野大徳寺塔中芳春院什物「伝相阿弥筆文殊菩薩」を臨模献上。関東大震災の後金沢へ帰り、金城画壇設立に参加。画壇の中心人物となって活躍する。父は木彫家の相川松涛。1969年没、75歳。日本画

相川松涛 (あいかわ・しょうとう/1856～1930年)

金沢市生れ。明倫堂に学び、大阪に出て藤沢南岳らに学ぶ。高村光雲に師事し、浮丸彫りを創出する。1887年石川県工業学校に招かれ教鞭。93年シカゴ世界博覧会で最高功績賞、1900年パリ万国博覧会で賞牌、04年セントルイス万国博覧会では金賞牌。次男は日本画家相川松瑞。1930年没、74歳。彫刻、美教

相澤豊治 (あいざわ・とよはる/1942年～)

新潟県生れ。1963年現代美術家協会展に初入選。63年平塚美術協会展に出品。71年平塚商業高校卒。71年平塚市内で木版画による個展を開催。鎌倉秀雄に師事し、94年院展に入选。連年入選のち96年院友。馬を主なテーマとし、2000年代には田植の風景や

工場などをモチーフに出品。日本画、版画

相沢石湖 (あいざわ・せきこ/1806～1848年)

江戸生れ。一橋家の絵師。文人画家春木南湖にまなぶ。人物花鳥画を得意とし、江戸城の御殿再建に際し下鈴口外の杉戸絵をえがいた。1848年没、42歳。観画楼主人。江戸時代後期の絵師

藍澤ミ子 (あいざわ・みみこ/1933年～)

新潟市生れ。30代半ばで、木版画を始めた。1972年県展に入选、74年奨励賞。97年県展賞。98年、無鑑査。画家谷川晃一氏に絶賛され、谷川氏の紹介により、2001年東京、京橋の画廊で個展。08年絵本『はしれ、きかんしゃちからあし』。版画、絵本、コラージュ

愛石 (あいせき/生没年不詳)

和歌山県生れ。文化～文政(1804～30年)のころに活躍。野呂介石にまなび、池大雅の画風をしたう。水墨、淡彩の山水画を得意とした。野呂介石、長町竹石とあわせて三石といわれた。江戸後期の画僧

会津勝巳・無心 (あいづ・かつみ/1905～1991年)

福島県生れ。浪江高等小学校卒、上京して青山の広瀬写真館に弟子入りした。1924年京都に移り、25年京都市絵画専門学校選科に入学、中村大三郎教室に学び、同校修了後、32年中村大三郎画塾に入門。28年帝展に入选、以後官展を中心に活躍。41年中村大三郎画塾をやめ、70年号を無心と改め、86年画集を刊行。1991年没、86歳。日本画

阿井正典 (あい・まさのり/1924～1983年)

1924年生れ。彫刻家阿井瑞岑の子、51年行動美術協会展で行動美術賞。60年集団60野外彫刻展(神奈川県近代美術館)に出品。抽象彫刻。神奈川県立近代美術館に作品収蔵。1983年没、59歳。彫刻

相武常雄 (あいむ・つねお/1949年～)

愛知県生れ。1973東京芸術大学美術学部工芸科卒。卒業制作がサロン・ド・プランタン

賞。75年同大学工芸科鍛金研究室研究生修了。日本現代工芸美術展で現代工芸賞。77年読売新聞社賞。80年現代工芸工芸会員賞。2000、03年日展で特選。79年日本現代工芸美術家協会会員。04年日展会員。モニュメントも多数制作。16年内閣総理大臣賞。17年文部科学大臣賞。21年日本芸術院賞。 **工芸家(鍛金)、造形**

青木宏峰・大乘 (あおき・だいじょう/1891～1979年)

大阪生れ。天王寺中学校卒業後、京都関西美術院に洋画を学び、京都絵画専門学校で日本画を学ぶ。1924～35年新燈社洋画研究所を開設、展覧会開催。以後日本画に転向。37～52年結城素明、川崎小虎と大日美術院を創立、新日本画の創造にこつとめ公募展を開いた。欧米及び中国に旅行し取材作を発表した。69年東京、大阪高島屋にて回顧展を、78年には朝日新聞社主催にて「米寿展」を開催した。兵庫県で没、87。 **洋画、日本画**

青木夙夜 (あおき・しゆくや/生年不詳～1802年)

京都生れ。韓国餘章王の後裔と称して余夙夜と称し、川長四郎を通じて池大雅に入門。大雅の原本に基づいた画を良く描いたとされているが、師とはその表現方法が異なり、おおらかな画風を示した大雅に対して、緻密で繊細な画風を示した。また、師の没後は双林寺内に大雅堂を建設して、その堂守となり2世大雅とも自称した。1802年没。 **江戸中期、後期の絵師**

青木世一 (あおき・せいいち/1954年～)

茨城県生れ。1979年東京藝術大学大学院美術研究科鍛金専攻修了。修了制作でサロン・ド・プランタン賞。82年文化庁国内研修員。98年現代日本美術展準大賞、群馬県立近代美術館賞。金属を素材とした作品を制作。88年頃よりベニヤ合板を素材に制作。97年より著名な名画を立体キット化した(AOKIT)シリーズを展開。 **立体、鍛金**

青木誠一 (あおき・せいいち/1949年～)

神奈川県生れ。1968年二科展入選。69、70年神奈川県知事賞。73年神奈川県美作品買上。82、87年一創会員賞。88年東京大丸個展。2008年日本橋三越本店で個展。 **洋画**

青木石農 (あおき・せきのう/1889～1968年)

長野県生れ。南画家笹澤樅亭に師事。信濃美術会結成に参加、委員のち会長。1968年没、78歳。 **日本画**

青木大乘・宏峰 (あおき・だいじょう/1891～1979年)

大阪生れ。天王寺中学校卒業後、京都関西美術院に洋画を学び、京都絵画専門学校で日本画を学ぶ。1924～35年新燈社洋画研究所を開設、展覧会開催。以後日本画に転向。37～52年結城素明、川崎小虎と大日美術院を創立、新日本画の創造にこつとめ公募展を開いた。欧米及び中国に旅行し取材作を発表した。69年東京、大阪高島屋にて回顧展を、78年には朝日新聞社主催にて「米寿展」を開催した。兵庫県で没、87。 **洋画、日本画**

青木千絵 (あおき・ちえ/1981年～)

岐阜県生れ。2010年金沢美術工芸大学大学院修了。18年「孤独の身体」(現代美術 艸居、京都)、17年「美術の中のかたち 一手で見る造形 青木千絵展 漆黒の身体」(兵庫県立美術館)、10年「青木千絵展」(ガレリアフィナルテ、名古屋)。20年「Arts Towada 十周年記念『インター+プレイ』」(十和田市現代美術館)、水と土の芸術祭 2018(旧齋藤家別邸、新潟)、05年日本漆工奨学賞を、19年に金沢・世界工芸コンペティション優秀賞。 **漆芸、立体**

青木鐵夫 (あおき・てつお/1940年～)

静岡県生れ。56年静岡県版画協会展協会賞。86年国展会友優作賞。2001年企画展「青木鐵夫・海野光弘二人展」開催。07年日本現代版画展(米国議会図書館)。10年現代日本版画50人展(イスラエル/ティコティン美術館)。国画会会員、藤枝美術協会会員。 **版画**

青木成実 (あおき・なるみ/1986年～)

徳島県生れ。洋画家の渡辺記世に師事。2010年国画会の国展で入選。11年鳴門教育大学大学院芸術系(美術)コース修了。国展絵画部奨励賞、国画会会友。2013年国展絵画部奨励。17年国展絵画部会友賞、準会員。18年青木成実油絵展を三越日本橋本店美術サロンにて開催。19年青木成実油絵展を高松三越本館美術画廊にて開催。 **洋画**

青木野枝 (あおき・のえ/1958年～)

東京生れ。1981年武蔵野美術大学造形学部彫刻学科卒、83年同校大学院造形研究科の彫刻コースを修了。95年 国立国際美術館で個展開催。2000年芸術選奨新人賞。12年「青木野枝ふりそそぐものたち」展、豊田市美術館、名古屋市美術館。19年「青木野枝ふりそそぐものたち」展、長崎県美術館。03年中原悌二郎賞優秀賞。09年 公益信託タカシマヤ文化基金タカシマヤ美術賞。17年芸術選奨文部科学大臣賞。21年紫綬褒章。多摩美術大学客員教授。鉄を媒介にした空間表現が特徴。彫刻、版画、美教

青木梅岳 (あおき・ばい かく/1866～1947 年)

三重県生れ。新宮市や田辺市などで活躍。その後、海南市に移り海南地区の文人たちの中心的存在だったという。南方熊楠の長男、熊弥が海南市藤白で療養生活を送った場所は、梅岳宅の近くだったとされる。1947年没、81歳。日本画、南画

青木蒲堂 (あおき・ほどう/1810～1872 年)

名古屋生れ。山本梅逸に師事。日本画、南画、水墨画、愛知県立美術館に作品収蔵。名古屋で没、62歳。日本画、南画、水墨画

青木美歌 (あおき・みか/1981～2022 年)

東京生れ。北海道育ち Royal College of Art / Ceramics and Glass コース修士課程修了(英国・ロンドン)。文化庁新進芸術家海外研修制度にて英国留学。武蔵野美術大学、工芸工業デザイン科ガラス専攻卒。2023年岐阜県現代陶芸美術館、長野県立美術館、三井記念美術館で超絶技巧17名に選抜。2022年没、41歳。ガラス工芸

青木由紀年 (あおき・ゆきとし/1940～没年不詳)

愛媛県生れ。1960年より彫刻制作をはじめ。以降、一貫して自然をテーマとした抽象彫刻を主とし、大分県美術展、おおい現代彫刻展、宮崎現代彫刻展、鹿児島現代彫刻展等に作品を発表。個展やグループ展にも積極的に取り組む。彫刻

青木陵子 (あおき・りょうこ/1973 年～)

兵庫県生れ。1999年京都市立芸術大学大学院ビジュアル・デザイン科修了。身近な自然、日常の断片、幾何学模様などといったさまざまな要素を、画面のなかに配し、それらを

伸びやかな線と色彩で紡ぎだしたように描かれるドローイング作品。主な個展に、2002年「クリテリウム 51」(水戸芸術館/水戸・日本)、05年「HAMMER PROJECTS Ryoko Aoki」(ハマー美術館/ロサンゼルス・アメリカ)、「ワイルドフラワーのたね」(ワタリウム美術館 オン・サンデーズ地下1階ギャラリー/東京・日本)。現代美術、ドローイング

青木龍山 (あおき・りゅうざん/1926～2008 年)

佐賀県生れ。1943年佐賀県立有田工業高校卒。51年多摩美術大学日本画科卒。66年日展入選の花器を外務省買い上げ。71年日展で特選。81年日展審査員、日本現代工芸美術展で特別会員賞。88年日本現代工芸美術展で文部大臣賞。日展評議員。91年日本現代工芸美術展審査員、日展出品作が日本芸術院受賞。日展理事。92年日本芸術院会員。2005年文化勲章。2008年没、82歳。工芸(陶芸)

青津清喜 (あおつ・せい き/1910～1993 年)

1910年生れ。32年東京美術学校卒。1950年日本水彩展・南薫造記念賞受賞(会友推挙)。1951年日本水彩展・奨励賞受賞(会員推挙)。1952年日本水彩画会福島県支部設立 第1回県水彩展開催。1961年 福島大学学芸学部教授。1966年 日本水彩展審査員。1993年没、83歳。水彩、美教

青根九江 (あおね・きゅうこ/1805～1854 年)

滋賀県生れ。彦根城下にて藩主御用の茶屋の家に生まれる。京に上って画を山本梅逸に師事。当時の画人名鑑「平安人物誌」嘉永五年版に登場。その現存作品は非常に希少で詳細は不明な部分が多く、現存作からは梅逸風の南頻南画花鳥図など秀作を残している。1854年没、49歳。江戸後期の絵師、南画

青野恭典 (あおの・きょうすけ/1937～2016 年)

作品は写真展・写真集の他、カメラ誌・山岳雑誌等に発表する傍ら、図鑑・ポスター・ポストカード・カレンダーなども多数手掛ける。日本山岳写真協会副会長、社団法人日本写真協会会員、日本風景写真協会指導会員、ネイチャーフォト「青」の会顧問、野生動物救護獣医師協会会員。2016年没、79歳。写真、図鑑・ポスター・ポストカード・カレンダー

青葉益輝 (あおば・ますてる/1939～2011年)

東京生れ。1962年桑沢デザイン研究所卒業後、株式会社オリコミに入社、主に東京都の公共ポスターを担当し、69年に退社、A&A 青葉益輝広告制作室を設立。72年ADC賞。82年ブルーノ国際グラフィックデザイン・ビエンナーレでグランプリ、87年ワルシャワ国際ポスター・ビエンナーレでグランプリ。個展を各国で開催、様々なグラフィックデザインの国際公募展で審査員、93年福岡県展で審査員。同年長野冬季オリンピックの第1回公式ポスターを制作。2011年没、72歳。**デザイナー、ポスター**

青柳正規 (あおやぎ・まさのり/1944年～)

大連生れ。1967年東京大学文学部美術史学科卒業。69～72年ローマ大学に留学、古代ローマ美術史・考古学を学ぶ。日本の歴史学者・考古学者(西洋美術史・西洋古典考古学)。勲等は瑞宝重光章。学位は博士(文学)(東京大学・1992年)。山梨県立美術館館長、学校法人多摩美術大学理事長、奈良県立橿原考古学研究所所長、石川県立美術館館長、公益財団法人せたがや文化財団理事長、東京大学名誉教授、日本学士院会員、2021年文化功労者。**美史、美術館長、美術大学理事長**

青山観水 (あおやま・かんすい/1830～1900年)

金沢市生れ。吉田公均に学んで南宗画を描いた。1894～1900年石川県立工業学助教諭として勤める。1900年没、71歳。**江戸末期～明治期の絵師、南画**

青山光佑 (あおやま・こうゆう/1938年～)

山形県生れ。1965年東京芸術大学大学院修了。小磯良平に師事。最初油彩画から立体を経て版画を手がける。71、73年クラコウ国際版画ビエンナーレ展、72、74年東京国際版画ビエンナーレに出品。山形大学教育学部教授。芸術院会員。**洋画、版画、美教**

青山 悟 (あおやま・さとる/1978年～)

東京生れ。1998年ゴールドスミスカレッジ・テキスタイル学科卒。2001年シカゴ美術館付属美術大学で美術学修士号取得。工業用ミシンを用いた刺繍作品で知られるアーティスト。大量生産のためのテクノロジーである工業用ミシンを用いて縫い上げられた刺繍作品を通じて、現代人の生活とテクノロジーとの関係性を批評し、失われつつある人間の感受性や創造

性について問題提起。**現代美術家、刺繍**

青山亘幹 (あおやま・のぶよし/1945年～)

神奈川県生れ。1969年東京芸術大学卒。71年シェル芸術賞1等賞、東京芸術大学大学院修了。72年新鋭選抜展1等賞。84年横の会展(以後毎回10回展まで)。92年日本橋高島屋で個展。94年日本橋三越本店、大阪三越、名古屋三越で個展。98、2000年日本橋三越本店で個展。**日本画**

青山 襄 (あおやま・のぼる/1901～2009年)

松江市生れ。松江中学校卒、東京美術学校西洋画科に入学し、藤島武二、岡田三郎助に師事。卒業後、西洋画科卒業生らと「上社会」を創設。1929年帰郷し、松江研究所の研展や旺玄社展などに出品。33年帝展洋画部で入選。出雲市大社高校の美術教諭として勤務。48年東京に居を移す。2009年没、108歳。**洋画、美教**

青山裕企 (あおやま・ゆうき/1978年～)

愛知県生れ。筑波大学人間学類心理学専攻卒。『ソラーマン』『スクールガール・コンプレックス』『少女礼讃』など、サラリーマン・女子学生・少女など、「日本社会における記号的な存在」をモチーフにしながら、自分自身の思春期観や少女・父親像などを反映させた作品を制作。2015年ユカイハンズ・ギャラリー開廊。16年ユカイハンズ・パブリッシング設立。19年Mr.Portrait(ミスター・ポートレート)という肩書で「個人向けポートレート撮影サービス」をはじめ。2007年「キヤノン写真新世紀」優秀賞。**写真、映像作家、現代美術**

赤井龍民 (あかい・りゅうみん/1898～1945年)

兵庫県生れ。1918年入浴して菊池契月の門下となり、22年帝展に入選し、その後数度入選していた。北海道で没、48歳。**日本画**

赤木範陸 (あかぎ・のりみち/1961年～)

大分県生れ。1990年東京藝術大学大学院を修了後、渡独し、95年に国立ミュンヘン芸術大学でマイスター・シューラーを取得。横浜国立大学大学院教授。蜜蝋を溶かして焼き付ける古代の絵画技法「エンカウスティーク」を応用した作品を制作。個展に、「濡れ色の神秘-

ENKAUSTIK エンカウステーク」(MOU 尾道市立大学美術館、2012)、「赤木範陸一湯浴みー展」(朝倉文夫記念館、大分、2002)、「錬金術師の軌跡」(大分市美術館、2001)。**洋画、蜜蝋**

赤坂三好 (あかさか・みよし/1937～2006年)

東京生れ。児童文学作家の谷真介、画家の水木連の弟。チェコ BIB 世界絵本原画展で1973年と75年に金牌賞。2期受賞は日本人として初めて。73年小学館絵画賞。小学館絵画賞選考委員。2006年没、69歳。**版画、絵本、挿絵**

明石秋室 (あかし・しゅうしつ/1793～1865年)

大分県生れ。佐伯藩の明石家を継ぎ、同藩の書物奉行。三浦黄鶴に漢学を、鏑木雲舟に画を学び、一時日田の私塾咸宜園にも学んだ。能書家として活躍したほか、詩や画にもその才を発揮した。1865年没、72歳。**江戸後期の絵師、能書家**

赤塚祐二 (あかつか・ゆうじ/1955年～)

鹿児島県生れ。1979年東京芸術大学美術学部油画専攻卒、81年東京芸術大学修士課程修了。61年コバヤシ画廊で個展。92年「ArtToday'92」セゾン現代美術館、長野。92、93、2022年「ライオン・ガンダー」が選ぶ収蔵品展色を想像する。「THE EIGHTIES 80年代の美術5川俣正・赤塚祐二」コバヤシ画廊、東京。**洋画、版画**

吾妻 篤 (あかづま・あつし/1937年～)

宮城県生れ。杉村惇に師事し、宮城県内の公立学校で教鞭。モチーフは、世界各国で出会った風景や物、塩竈の伝統文化など。河北美術展、日展、日洋展などで入選・受賞多数。日展会員、河北美術展顧問、宮城県芸術協会運営委員等を務めた。**洋画、美教**

赤羽末吉 (あかば・すえきち/1910～1990年)

東京生れ。1923年旧制順天中学校に進学。大連在住の画家・甲斐巳八郎と知り合い、1933年甲斐らの起こした「満州郷土色研究会」に参加。40年満州国美術展覧会(国展)の東洋画(日本画)で特選。42年の第5回まで3回連続して同部門特選。59年「民話屏風」により日本童画会展で茂田井武賞。65年サンケイ児童出版文化賞(『ももたろう』『白いゆゆう黒いゆ

ゆう』)、『スーホの白い馬』で68年に再度受賞。80年国際アンデルセン賞画家賞。1990年没、80歳。**日本画、絵本、舞美**

赤羽雪邦 (あかばね・せつぼう/1865～1928年)

長野県生れ。東京美術学校卒。尾崎雪瀨(せつとう)、橋本雅邦に学ぶ。1899年全国絵画共進会で1等褒状。1904年渡米、洋画の研究と日本画の紹介につとめ、18年帰国。1928年没、64歳。**日本画**

赤松雲嶺 (あかまつ・うんれい/1892～1958年)

大阪生れ。小山雲泉、姫島竹外に師事。1915年文展に入選。日本南画院同人をつとめ、南画塾「墨雲社」を主宰、後進の指導に尽力。写実味の強い水墨山水を得意とする。帝展審査員。官展を中心に活躍し、帝展・文展無鑑査。戦後は大集會に所属、大阪市展の審査員。1958年没、67歳。**南画、水墨**

AKI INOMATA (あき・いのまた/1983年～)

東京生れ。2008年東京藝術大学大学院先端芸術表現専攻修了。3Dプリンターで出力したプラスチック製の「宿」をヤドカリに渡し、引越す様子を観察した、移民や難民がテーマの「やどかりに『やど』をわたしてみる」シリーズ(09～)や、飼い犬の毛と自身の髪でケープをつくり、互いに着用する(犬の毛を私がまとい、私の髪を犬がまとう)(14)など、生き物との共同作業のプロセスを作品化する。人間とは異なる視点やふるまいを持つ動物たちとの共作を通して、人と生き物の関係性を再考する。12年岡本太郎現代芸術賞入選。14年 YouFab Global Creative Awards グランプリ、18年 Asian Art Award 2018 特別賞。近年の個展に、「AKI INOMATA: Significant Otherness 生きものと私が出会うとき」(十和田市現代美術館、2019～2020)、「Aki Inomata, Why Not Hand Over a "Shelter" to Hermit Crabs?」(ナント美術館、フランス、2018)などがある。多摩美術大学非常勤講師。武蔵野美術大学非常勤講師。女子美術大学非常勤講師。早稲田大学理工学術院電気・情報生命工学科嘱託研究員。デジタルハリウッド大学大学院特任准教授。**現代美術、立体、美教、美研**

秋岡美帆 (あきおか・みほ/1952～2018年)

神戸市生れ。1979年大阪教育大学大学院教育学研究科修了。風、光、樹々が見せる一

瞬の表情をカメラでとらえ、撮影したフィルムをNECO(New Enlarging Color Operation、拡大作画機)で麻紙やキャンバスに拡大プリントした作品を79年より発表した。90年代半ばから三重県内に居を構えて制作を続ける傍ら、大学で教鞭を執った。2018年没、64歳。現代美術、写真、版画、美教

秋葉長生 (あきば・ちようせい/1911～1978年)

千葉県生れ。川端画学校入学、山口蓬春の内弟子となる。63年日展で特選、白寿賞。66年菊華賞。日展会員。東京で没、67歳。日本画

秋元雄史 (あきもと・ゆうじ/1955年～)

東京生れ。東京藝術大学美術学部絵画科卒。作家活動をしながらアートライターとして活動。1991年に福武書店(現・ベネッセコーポレーション)に入社し、直島のアートプロジェクトを担当。開館時の2004年より地中美術館館長・公益財団法人直島福武美術館財団常務理事に就任、ベネッセアートサイト直島・アーティストティックディレクターも兼務。06年に財団を退職、07年金沢21世紀美術館館長に就任。10年間務めたのち退職し、東京藝術大学大学美術館館長・教授、練馬区立美術館館長、金沢21世紀美術館特任館長、国立台南芸術大学栄誉教授。ジャーナリスト、美術館長、美評50

秋山 陽 (あきやま・よう/1953年～)

山口県生れ。1978年京都市立芸術大学陶磁器専攻科修了。「Echoes: In the Beginning Was Clay」(QM Gallery Katara、カタール、2019)、「秋山陽へはじめに土ありき」京都市芸術大学ギャラリー@KCUA、2018)、「アルケーの海へ」(菊池寛実記念智美術館、東京、2016)など。2018年まで京都市立芸術大学で教鞭。受賞歴に、07年京都府文化賞、07年円空大賞、08年京都美術文化賞、10年MOA岡田茂賞工芸部門大賞、15年度日本陶磁協会賞金賞(2016)、陶芸、美教

秋山信子 (あきやま・のぶこ/1928～2024年)

大阪市生れ。1955年頃から人形作家大林蘇乃に師事し、桐塑・和紙貼・木目込等の伝統的な人形制作技法を学ぶ。さらに彫刻家伊藤鉄崖、日本画家生田花鳥女、漆芸家武石勇から彫塑を中心とする立体造形、彩色技法、乾漆をはじめとする漆芸技法を習得。60年日本

伝統工芸展に入選、大阪府教育委員会賞。以後同展を中心に作品を発表。96年重要無形文化財「衣裳人形」の保持者に認定。地元大阪の伝統芸能や沖縄やアイス、朝鮮半島や中国の少数民族などに関心を寄せ、各地の歴史や風俗に取材した情趣豊かな人形を制作。2024年没、96歳。人形

秋山亮二 (あきやま・りょうじ/1942年～)

東京生れ。父は写真家の秋山青磁。1964年早稲田大学文学部卒業後、AP通信社東京支局、朝日新聞社写真部を経て、67年にフリーランスの写真家。フォトジャーナリストの視点で国内外の社会問題を積極的に取材し、作品を発表。74年ニューヨーク近代美術館(MoMA)の企画展「New Japanese Photography」に森山大道、深瀬昌久らとともに出品。主な写真集に『津軽・聊爾先生行状記』(津軽書房、1978年)、『ニューヨーク通信』(牧水社、1980年)、『榎川村』(朝日新聞社、1991年)、『光景宛如昨—中国の子供達 II』(いずれも青艸堂)が日本と中国で刊行されて大きな反響。写真、フォト・ジャーナリスト

秋好稔弘 (あきよし・としひろ/1955年～)

大分県生れ。九州産業大学芸術学部で油彩画と版画を学んだ後、県下の高校で美術を指導する。大分県美術展や新潮流などのグループ展、個展を中心に作品を発表する。美教、洋画、版画

秋吉風人 (あきよし・ふうと/1977年～)

大阪生れ。2001年名古屋芸術大学卒、03年同大学大学院修了。11～18年までベルリンに滞在。色というよりもむしろ現象に近い金の絵具で空間が構成される《Room》、絵具を積み上げる事で絵画と彫刻の境界を交差する《A certain aspect (mountain)》など、「絵画」という概念の解体と再構築を実験的に続け、複数の絵画シリーズとして展開している。近年の個展に「We meet only to Part」(TARO NASU、東京、2018)「All fore one」(SEXAUER、ベルリン、2018)ほか。洋画、造形

坪 豊二 (あかつ・とよじ/1913～1943年)

茨城県生れ。1933年茨城師範学校卒業。35～41年教師。38年斎藤与里は、柴田三千春の同じタイトルの「花」と比較して、いほらき新聞紙上で評言。39年新文展に出品。40

年白牙会会友。1943年没、30歳。洋画

安芸真奈 (あげい・まな/1960年～)

高知県生れ。1982年高知大学卒。89～99年日本版画協会展。90年期待の新人大賞展。96～97年鹿沼市立川上澄生美術館木版画大賞展(栃木)。98年“Space”現代日本版画展(イスラエル・ティコティン美術館)。2003年“紙と版画”日本・オランダ版画展(オランダ Zaans Museum)。クラコウ国際版画トリエンナーレ特別展(ポーランド)。日本版画協会会員。版画

朝井観波 (あさい・かんぱ/1897～1985年)

東京生れ。川端画学校のち日本美術院研究所に学ぶ。荒井寛方に随いインドを訪れアジヤンター壁画を摸写。日本美術院院友となるが、平福百穂の画風にひかれ、脱退。荒木十畝に師事、読画会に属す。帝展・文展に入選。1985年没、88歳。日本画

浅井柳塘 (あさい・りゅうどう/1842～1907年)

徳島県生れ? 百々広年、谷口靄山に南画を学び、貫名海屋にも教えを受けたという。後に長崎に遊学して木下逸雲や僧鉄翁、清人徐雨亭らに画法を学んだ。維新前後の京都で、南画の名手の一人と目された。1873年京都博覧会に名を連ねた。1900年大阪南宗画会主催第1回全国南画共進会で2等銀牌。1880年京都府画学校「出仕」に任用。1907年没、66歳。南画、美教

浅川邦夫 (あさかわ・くにお/1932年～)

1932年生れ。52年福井県より上京。日本における現代美術ギャラリーの草分けの一つである南画廊(1956-79)に、開業から12年あまり勤め、その後2003年まで、自身が設立した画廊春秋(1968～2003年)を35年にわたって経営。足利市立美術館では開館当初より浅川邦夫から寄託を受け、テーマごとに企画展示。2019年700点に及ぶ浅川コレクションが足利市立美術館に寄贈。画廊、コレクター、浅川コレクション

浅川伯教 (あさかわ・のりたか/1884～1964年)

山梨県生れ。1927年朝鮮に渡り、李朝陶器や朝鮮民族の研究をはじめ。その古窯調査は約680箇所にも及び、朝鮮陶器を世界に紹介。30年間の朝鮮生活を終え、帰国後、愛

媛県砥部に窯を置き、作陶に勤めた。当時の朝鮮巨匠陶芸家からの信頼も厚く、朝鮮・李朝古陶磁研究の第一人者とされ帰国後は、朝鮮民族美術館を設立。また、柳宗悦とも親交があり、伯教の持ち帰った古李朝の壺をみて民芸運動のきっかけ。現在、浅川の眼にかなった陶磁は、日本民藝館及び一部東洋陶磁美術館に収蔵。1964年没、80歳。陶芸、コレクター(朝鮮・李朝古陶磁)、美術館

朝倉南陵 (あさくら・なんりょう/1756～1843年)

山口県生れ。徳山藩御用絵師朝倉家の養子。藩命により長崎に渡来した沈南頻の画風を学び、南頻風の花鳥画を描いた。徳山藩に仕えて永世小姓格となり、1831年隠居した後も優遇された。1843年没、88歳。江戸後期の絵師

朝倉雅子 (あさくら・まさこ/1941年～)

金沢市生れ。1963年金沢美術工芸大学油絵科卒。62年二紀会入選以後連続出品。75年二紀会選抜展佳作賞、同年同人推挙。北陸中日美術展大賞。76年安井賞展入選。87年セントラル美術館絵画大賞展、上野の森絵画大賞展入選。90年二紀展女流画家奨励賞佐伯賞。96年二紀会会員。99年二紀展宮永賞。2012年二紀会北陸支部長に就く。洋画

朝倉美津子 (あさくら・みつこ/1950年～)

京都市生れ。1972年京展で市長賞。90年京都市芸術新人賞。2016年個展「ORITATAMU」(東京・日本橋高島屋)。主なパブリックコレクション、東京国立近代美術館 京都国立近代美術館、国立国際美術館 British Museum(ロンドン) Cleveland Museum of Art(米国)ほか。染織、タピストリー作家

朝倉美彌子 (あさくら・みやこ/1944年～)

大分県生れ。東京家政大学卒。教員をしながら油彩画を描いていたが、40代から院展の那波多目功一に師事し、日本画に転向。2000年院展に入選。日本美術院院友。前田青邨記念大賞展、奈良県万葉日本画大賞展、雪舟の里 総社 墨彩画公募展など全国規模の公募展に出品、受賞。日本画、美教

浅野 修 (あさの・おさむ/1937年?～)

北海道生れ。多摩美術大学油画科卒。1989年十勝毎日新聞社70周年記念企画浅野修展。2000年WHC企画「浅野修油彩展」(ロンドン Daiwa Foundation Japan House 日英基金)。01年講座ブリティッシュ・インターナショナルカレッジで学生と寝食を共にし「浅野修の世界」をインスタレーション作品造りと講座をもつ。07年北海道立帯広美術館、「浅野修展」(主催 浅野修展実行委員会・十勝毎日新聞社、NHK 新日曜美術館(本編)「浅野修展」馬小屋時空の転写「北海道浅野修と市民300人の新しいアート」。11年から十勝芽室赤レンガ倉庫で、巨大じゃがいもアート製作。13年浅野修・神田日勝生誕75年記念展(神田日勝記念美術館企画)。
現代美術、インスタレーション、立体

浅野秀剛 (あさの・しゅうごう/1950年～)

秋田県生れ。浮世絵を独学で学び、浮世絵考証研究の第一人者。秋田県立能代高等学校、立命館大学理工学部数学物理学科卒。上京、日本浮世絵協会(現・国際浮世絵学会)で活動。通信教育で学芸員の資格をとり、34歳で千葉市教育委員会の学芸員。2007年、「初期浮世絵」で博士(哲学)(学習院大学)。千葉市美術館学芸課長を経て、財団法人大和文華館館長、2013年あべのハルカス美術館館長も兼任。**美史、美術館長、浮世絵考証研究の第一人者**

浅野竹二 (あさの・たけじ/1900～1998年)

京都生れ。京都市立絵画専門学校で日本画を専攻、途中油絵に手をそめました。再び日本画に復帰、土田麦僊の率いる「山南塾」に入塾し、国画創作協会展に出品するなど日本画家として活躍。31才より木版画の制作、小林清親の「東京名所」に触発され日本各地の名所や行事などを題材にした「名所絵版画シリーズ」を手がけ、一方で自由な表現のもとに創作版画を制作。芸艸堂版は昭和20年後半より版行をはじめ、多くの作品を発表。日本各地を題材とした作品は近年再評価。1996年没、98歳。**版画、日本画**

浅野梅堂 (あさの・ばいどう/1816～1880年)

播磨国浅野氏の支族。画ははじめ栗本翠庵につき、のち椿椿山の門人となる。花卉を得意とし、《果蔬図》(東京国立博物館)などがある。明清の書画を多数収集し、その集蔵目録である『漱芳閣書画記』を残す。1880年没、64歳。**江戸後期-明治期の絵師、コレクター**

浅野芳彦 (あさの・よしひこ/1954年～)

山梨県生れ。1977年東京藝術大学油画専攻科卒、79年東京藝術大学大学院修士課程修了。80年制作活動休止 環境美術の仕事に従事。90年半立体作品の制作を開始。93年TAMA美術展 審査員奨励賞(東京都)。2005年制作を半立体から立体作品に移行。09年KAJIMA彫刻コンクール 模型入選(鹿島KIビルアトリウム/東京都)。10年現在の技法、コンセプトによる制作を開始。**彫刻**

朝日 晃 (あさひ・あきら/1928～2016年)

広島市生れ。1974年広島県立師範学校卒。75年早稲田大学文学部芸術専修美術科卒。79年神奈川県立近代美術館嘱託、86年同美術館学芸員となり、94年に主任学芸員。2000年より新築された東京都美術館の事業課長。同美術館では、「戦前の前衛二科賞、樗牛賞の作家とその周辺」(1976年)、「鬚光・松本竣介そして戦後美術の出発展」(77年)、「写真と絵画 その相似と相異」(78年)など、日本の近現代美術に関して問題提起するような意欲的な自主企画展を指導する一方、「描かれたニューヨーク展 20世紀のアメリカ美術」(81年)、「今日のイギリス美術展」(82年)などの国際展も率先して開催した。85年広島市現代美術館開設準備事務局長となり、88年より同美術館開設準備室長となる。89年開館の同美術館の副館長に就任、90年退職した。以後、美術評論家として活動した。監修にあたった佐伯祐三、松本竣介に関する画集。東京で没、88歳。**美評、美研、学芸員、美術館長**

旭 玉山 (あさひ・ぎよござん/1843～1923年)

江戸生れ。象牙彫刻をまなび、1877年第1回内国勸業博覧会で最高賞の竜紋賞。81年石川光明(こうめい)らと彫刻競技会(のちの東京彫工会)を結成。東京美術学校教授、帝室技芸員。1923年没、81歳。**彫刻、美教**

朝比奈逸人 (あさひな・やすと/1951年～)

神奈川県生れ。東京藝術大学大学院美術研究科修士課程修了。銅版画を学ぶ。1980年信濃橋画廊エプロンで絵画による個展開催。「アート・ナウ」には82年、90年に出品。86年「現代日本の美術3 戦後生まれの作家たち」展(宮城県美術館)、87年現代日本美術展・企画部門「現代絵画の展望—平面と空間」(東京都美術館)、92年「現代美術への視点 形象のはざまに」(東京国立近代美術館、他)出品。この間大阪教育大学で教鞭をと

った。版画、美教

旭 正秀・奏宏（あさひ・まさひで/1900～1956年）

京都生れ。1918年京都府立第二中学校卒、東京朝日新聞社に入社、30年迄在勤。川端画学校に学び、22年日本創作版画協会会員。31年日本版画協会の会員。21年小泉癸巳男等と雑誌『版画』を創刊、「詩と版画」と改題）25年迄継続。26年素描社を創立、「デッサン社」と改名。30～37年3度の外遊。外務省、文部省後援による現代日本版画展開催委員。著書『大津絵』『日本の版画』『日本版画の技法』『開化の横浜絵』。47年日展委員。1956年没、56歳。版画、美普、雑誌、マスコミ

浅山蘆国（あさやま・あしくに/生誕年不詳～1818年）

大坂生れ。浮世絵師の父浅山蘆溪、須賀蘭林齋にまなぶ。役者絵、読み本の挿絵などをおおくかいた。1818年没、40歳。作品に「いろは国字忠臣蔵」「劇場(しばい)菊の戯」など。江戸後期の浮世絵師、挿絵

浅山芦溪（あさやま・ろけい/生没年不詳）

大坂生れ、浅山芦国の父。姓は浅山。芦溪と号す。文化から文政期に読本の挿絵を描いている。1806年刊行の『放家僧談』（節亭山人作）、09年刊行の『敵討氷上霜』（文亭箕山作）、24年刊行の『根篠雪（ねざさのゆき）』（文亭箕山作）などが挙げられる。江戸後期の大坂の浮世絵師、挿絵

浅利 篤（あざり・あつし/1912～1999年）

東京生れ。千葉商科大学卒。都内小中学校教員、日本出版文化協会、全日本科学技術団体連合会、日本美術工芸統制会を経て1師団1連隊4軍司令部に勤務。独立美術展第1回展に入選。美術文化展、新制美術展創立の会員。日本著作権協議会会友。1950年浅利式絵画診断法を発見。また後日、色盲矯正法を創案。73年、岩手県小岩井小学校校長を退職。児童画の研究に没頭。日本児童画研究会会長。1999年没、87歳。児童画、美教

足利紫山（あしかが・しざん/1859～1959年）

愛知県生れ。臨済宗総鬘で今北洪川に師事。儒学者安井息軒に漢学を学ぶ。1891年

大分市の萬寿寺の副住職となり、3年後に住職に就任。26年萬寿寺住職を退任、方広寺派管長に就任。31年初代臨済宗管長。筆跡は枯淡のうちに雅致に富み、孤高の風格を表わしている。1959年没、100歳。臨済宗の僧。方広寺派管長。画僧

あし川彦国（あしかわ・ひこくに/生没年不詳）

文政期に活躍。生没年不詳。画号は、彦国・ひこ国。よし国門人か。役者絵を描く。江戸後期の浮世絵師

芦 尚（あしたか・あしなお/生没年不詳）

大坂生れ。蘭英斎芦国（寛政末から隆盛をみた上方絵のうちで一派をなす）の門人かといわれる。文化末に役者絵あり。1820年没、44歳。江戸後期の大坂の浮世絵師

安次嶺金正（あしみね・かねまさ/1916～1993年）

沖縄県生れ。1941年東京美術学校油画科卒。41年文展入選。50年玉那覇正吉、金城安太郎・具志堅以徳と「五人展」結成。56年創元展（東京都美術館）入選、会員。61年琉球大学美術工芸科教授。72年沖縄造形教育連盟委員長。1993年没、77歳。洋画、美教

飛鳥井孝太郎（あすかゐ・こうたろう/1867～1927年）

石川県生れ。東京工業学校陶器玻璃工科でゴットフリード・ワグネルに師事して青磁を研究し、1890年卒業後、同志社波理須理化学学校陶磁器科長・教授等を経て、96年森村組に入社し、名古屋支店で洋食器の研究開発に従事。97年から農商務省海外貿易練習生としてヨーロッパに留学。1900年からヨーロッパ諸国を視察。帰国後、04年森村市左衛門、大倉孫兵衛らと日本陶器（のちのリタケカンパニーリミテド）を設立し、技師長に就任。10年解任された。森村からの激励を受け、貿易商の寺沢留四郎らと11年に千種町に帝国製陶所（のちの鳴海製陶）を設立し、取締役技師長に就任。1927年没、60歳。陶磁器技術者、美教、リタケカンパニーリミテドの技師長、鳴海製陶の技師長

小豆沢禮（あずきざわ・れい/1922～2010年）

島根県生れ。1944年京都市立絵画専門学校卒。県内の中学校で美術教師として83年まで勤める。池田遥邨に師事。日展会友、入31回。日春展入27回。奨励賞。京展賞。関展

賞。外務賞。京都府買上。元島根県日本画協会理事長、山陰中央新報社文化教室講師として島根の日本画界に尽力する。2010年没、88歳。美教、日本画

東 韶光 (あずま・しょうこう/1822～1914年)

東京生れ。1940年木村武山の内弟子。43年中村岳陵に師事。46年再興院展に出品、日展に出品(57年、61年特選、65年審査員、66年会員、84年評議員)。59年海老沢東丘らと茨城日画会を創立。66年茨城県芸術祭美術展覧会の審査員。笠間市で没、92歳。日本画

東 東洋 (あずま・とうよう/1755～1839年)

宮城県生れ。当初は父岩淵元方に画を学び、後に江戸で狩野梅笑に入門。京都、金沢、長崎などを巡遊後、京都にて定住。円山応挙、松村呉春などと親交し、四条派、円山派の画技を習得。東山新書画展に出品を重ね、仁和寺の障壁画を手掛けた。仙台の藩画員にえらばれ、仙台城二の丸や藩校養賢堂の障壁画制作。小池曲江・菅井梅閑・菊田伊洲とあわせて呼称される仙台四代画家の一人。1839年没、84歳。江戸後期の絵師

東 東菜 (あずま・とうらい/1807～1872年)

1807年生れ。東東洋の次男。父に四条派の画風をまなび、法橋の称号をうける。のち文人画に転じた。儒者大槻磐溪らにまなび、詩文にも長じた。1872年没、65歳。江戸後期の絵師、文人

麻生珠溪 (あそう・しゅけい/1876～1957年)

大分県生れ。1897年京都市美術工芸学校卒。99～1905年同校助教授、富岡鉄斎に師事。東京で川端玉章、寺崎広業に師事。大正期郷里の九重町に戻り、創作活動。初期は円山四条派の流れをくむ、後年は次第に南画に傾倒。日本画家としては高倉観崖や福田平八郎らに先んじる草分け的な存在の画家。1957年没、81歳。日本画、美教、南画

麻生秀穂 (あそう・ひでほ/1937年～)

1937年生れ。1990年東京芸術大学美術学部教授。モザイク、ステンドグラス、自然石など様々な素材によるパブリックアート作品を手がけ、国内外の各地に設置されている。東京藝術

大学名誉教授。造形、モザイク、ステンドグラス、美教

麻生マユ (あそう・まゆ/1951年～)

東京生れ。麻生三郎の子。1976年武蔵野美術大学大学院修了。90年～青山学院女子短期大学非常勤講師、91～96年武蔵野美術大学非常勤講師。81年個展(洋協ホール・銀座)。88年個展(愛宕山画廊・銀座)。93年個展(南天子ギャラリー-SOKO・新木場)。2002年個展(サエグサ画廊・銀座)(04・06・09)。彫刻、美教

麻生征子 (あそう・ゆきこ/1937年～)

島根県生れ。大阪学芸大学在学中の1959年以降、新制作展で作品の発表。69年、73年新制作展で新作家賞。75年から発表した「エリーゼのために」シリーズは、植物などの自然と女性をモチーフに、虚実の交錯する幻想的世界を描く。76年安井賞展で佳作賞。新制作協会会員。洋画

安達吟光・銀光 (あだち・ぎんこう/1853～1902年)

1853年生れ。70年頃頃、銀光の名前で戊辰戦争の錦絵を描き、74年以降、吟光と改名。作画期は70年～1900年、74年「講談一席読切」という大判錦絵50番続の役者絵を銀光の名で描く。77年西南戦争の錦絵の「鹿兒島新聞・河尻本陣図」、「鹿兒島新聞・熊本城戦争図」の辺りから活動が目立。吟光の画名で「東京名所」の作品がある。壬午事変、日清戦争、義和団の乱、議会関係といった報道画ともいえる錦絵が続き、役者絵、芝居絵、名所絵も描いた。「古今名婦鏡」や「貴女裁縫之図」などといった美人風俗画も描いた。89年宮武外骨の雑誌『頓智協会雑誌』に大日本帝国憲法発布をパロディ化した「頓智研法発布式」を描いたことで不敬罪。1902年没、49歳。浮世絵、版画、報道画

足立秋英 (あだち・しゅうえい/1825～1895年)

大分県生れ。杵築藩士足立祐広の長男。はじめ画を十市石谷及び田辺文琦に学び、23歳のとき藩主に従って江戸に至り、狩野探原に師事、光琳派の池田孤村にも学んだ。藩の御絵師として画道に励むかたわら、茶道、歌道、書にも長じた。1895年没、70歳。日本画

足達石泉 (あだち・せきせん/1836～1923年)

1836年生れ。11歳の時に前村洞泉に師事、狩野派を学んだ。84年内国絵画共進会で2等賞、86年東洋絵画共進会で3等。晩年は土陽美術会高知支部にも参加して、当時の高知における狩野派の主導者として知られた。1923年没、88歳。日本画

足立 徹 (あだち・とおる/1949年～)

東京生れ。1974年早稲田大学第一法学部卒。80年武蔵野美術短期大学美術科(美術教育)専攻卒、松阪市に戻り、学校法人津田学園幼稚園絵画講師と。この年、子供のための絵画教室を開く。1985年銀座泰星画廊で個展。1986年新制作展出品。1988年中部新制作展新人賞。美教、洋画

安達不伝 (あだち・ふでん/1911～1981年)

松江市生れ。竹内無憂樹について仏画を学んだ関係から仏画を得意とし、新樹社展で何度か受賞、同展と別れ、無所属作家。第二次大戦後は松江に定住。自己の画業に精進する一方、島根新樹社を結成して後進の指導に当たった。1981年没、70歳。日本画(仏画)

我妻碧宇 (あづま・へきう/1904～1970年)

山形県生れ。日本美術学校卒。1922年上京して中村岳陵に師事。29年院展で入選。36年名古屋にうつる。46年日展第1回展から毎回入選し、51年日展で特選、朝倉賞、白寿賞。61年岳陵門と日展をはなれ白土(はくし)会を結成。1970年没、66歳。日本画

阿出川真水 (あでがわ・しんすい/1879～1943年)

東京生れ。柴田是真・久保田桃水・野村文挙などに四条派を学ぶ。烏号会・日本画会・日月会・下萌会に所属。東京博覧会で三等賞牌。文展評議員。1943年没、65歳。日本画

跡部白鳥 (あとべ・はくう/1900～1973年)

熊本県生れ。堅山南風に師事。1923年再興第10回展で入選。25年日本美術院院友。戦後、日本画府展や大調和会展に出品し、大調和会委員。1973年没、73歳。日本画

跡見花蹊 (あとみ・かぢい/1840～1926年)

大坂生れ。跡見重敬の次女として生まれる。丸山応立・中島来章について、円山派の画風を研究、日根対山に師事し、南画を学ぶ。72年明治天皇御前揮毫する。75年には跡見女学校を建設し、教育に力を注ぐ。1926年没、85歳。日本画、跡見女学校を建設

穴明共三・柳瀬正夢 (あなあけ・きょうぞう/1900～1945年)

松山市生れ。1914年上京。日本水彩画会研究所に学ぶ。村山槐多から影響を受ける。未来派、キュビズム、構成主義に興味を抱き。未来派美術協会に入会。23年「MAVO」の結成に参加。ゲオルグ・グロスを研究。45年没、45歳。(出典 わ眼)洋画、デザイン、カラー、舞美

阿南竹垞 (あなん・ちくだ/1864～1928年)

大分県生れ。長崎で守山湘帆(1818～1901)に学んだ。八幡町に住み、明治・大正期の長崎の南画壇で活躍したが、後に兵庫に移り、さらに名古屋、東京に転居して、1928年没、64歳。南画

阿南東林 (あなん・とおりん/1896～1986年)

大分県生れ。佐久間竹浦に学び、京都に出て田近竹屯に師事。師の没後、京都で春秋画壇の結成に参加。1926年に朝鮮に渡り、鮮展等で活躍。46年に帰国し、別府市に居住。大分県美術協会展に作品を発表。56年別府市美術協会の創立に参加。南画を基礎に写実味を加えた山水画を多く描いた。1986年没、90歳。日本画、南画

阿南英行 (あなん・ひでゆき/1941年～)

大分県生れ。日本大学芸術学部で糸園和三郎に師事し、帰国後は大分県美術展をはじめ主体美術展、西日本美術展、日仏現代美術展などに作品を出品。糸園教室の門下生を中心に結成された土日会展を主な発表の場として活躍。洋画

阿波根昌鴻 (あはごん・しょうこう/1901～2002年)

沖縄県生れ。1925年にキューバへ移民。その後、ペルーへ移り34年日本へ帰国。帰国後は京都(一燈園)や沼津で学び、伊江島に帰った後はデンマーク式農民学校建設を志して奔走したが、建設中の学校は沖縄戦で失われた。敗戦後、伊江島の土地の約6割が米軍に

強制接収された際、反対運動の先頭に立った。「全沖縄土地を守る協議会」の事務局長や「伊江島土地を守る会」の会長。55年から56年沖縄本島で非暴力による「乞食行進」を行って米軍による土地強奪の不当性を訴え、56年夏の島ぐるみ土地闘争に大きな影響を与えた。伊江島補助飛行場内に土地を所有し、72年沖縄返還後も日本国政府との賃貸借を拒否し続けた。日本政府による米軍用地強制使用の不当性を明らかにするとして、内閣総理大臣や沖縄県収用委員会を相手取った軍用地訴訟を提起し、91年「反戦地主重課税取り消し訴訟」を起こすが、98年敗訴。84年「わびあいの里」計画のもと「やすらぎの家」、また基地撤去のために闘い、反戦平和の思いを伝えるため、自宅敷地内に反戦平和資料館「ヌチドツカカラの家」を自費で建設。84年開館。県内外から訪れる人々に戦争の愚かさや平和の尊さを説き続けた。98年阿波根の活動を取り上げたドキュメンタリー映画『教えられなかった戦争・沖縄編 阿波根昌鴻・伊江島の戦い』(映像文化協会)が製作。2002年没、101歳。著書に『命こそ宝―沖縄反戦の心』(岩波書店、1992年)『米軍と農民 沖縄県伊江島』(岩波書店、1973年)『人間の住んでいる島―沖縄・伊江島土地闘争の記録』(写真記録 自費出版、1982年)。2024年原爆の図、丸木美術館で個展。日本の平和運動家、写真

阿波連永子 (あはれん・えいこ/生誕年不詳～)

沖縄県生れ。滋賀県展で特選5回、京展特選4回、新制作展入選15回。1984年星野画廊で個展。90年木下美術館で個展、93年沖縄県浦添市美術館で個展、96年、2003年滋賀県立美術館で個展。滋賀県美術協会会員、世界スケッチの旅 89年～米、独、オーストリア、スイス、中国等。洋画

安彦講平 (あびこ・こうへい/1936年～)

岩手県生れ。東京足立病院、丘の上病院等の精神科病院にて〈造形教室〉を主宰。創設以来、「治療」や「教育」といった、上から与えられ、課せられ、外から評価・解釈されるものではなく、それぞれが表現活動の主体となって自由に描き、身をもった自己表現の体験を通して、その人その人の内に潜在している可能性を引き出し、もう一人の自分と出会い、自らを“癒し”支えていく「営みの場」を目指し、試行し続けている。美教、洋画、精神科医

安福信二 (あぶく・のぶじ/1936～2016年)

神戸大学で美術史を学ぶ。日動画廊に就職。1970年代前半西武百貨店渋谷店の美術

画廊に勤めた。1971年自由が丘画廊企画、西武百貨店渋谷店でアンディ・ウォーホル展を開催(国内初の個展)。1980年ギャラリー・トーションで草間彌生展を開催。ギャラリー雲を開廊。2016年没、80歳。ギャラリスト

阿部永暉 (あべ・えいき/1807～1869年)

秋田県生れ。幼いころから画を好み、青年になると家を弟にまかせて江戸に上り、狩野隆則の門人となって十数年学び、帰郷後は姉の嫁ぎ先である宮下村の阿部与五左衛門家に住んで絵を描いた。晩年には生家に戻った。1869年没、63歳。江戸後期の絵師

安部榮四郎 (あべ・えいしろう/1902～1983年)

松江市生れ。父直市のもと紙漉き職人の道に入る。1931年柳宗悦氏との出会いにより、出雲民藝紙を生み出す。以後出雲民藝紙のみならず、日本の和紙の発展のために尽力。68年重要無形文化財「雁皮紙」に認定。83年(財)安部榮四郎記念館を設立し、初代理事長に就任。1983年没、82歳。紙漉き職人、雁皮紙

河部貞夫 (あべ・さだお/1908～1987年)

大分県生れ。1930年東京美術学校に入学、松岡映丘に師事した。在学中に映丘門下の山本丘人、杉山寧らと瑠爽画社を結成。35年同校日本画科を首席卒。36～38年四日市市立商工学校に勤務。戦後は47年から瑠爽画社展の継続的グループ・一采社に参加。創造美術展、新制作展、日展にも出品。1987年没、79歳。日本画、美教

阿部七五三吉 (あべ・しめきち/1874～1941年)

大分県生れ。大分県師範学校を経て、1901年東京高等師範学校卒、同年佐賀県師範学校教諭、05年東京高等師範学校助教授。25～35年同校教授。日本手工研究会々長、創作工芸会々長。著書多く「高等小学校手工科新指導」「小学校手工方教方の実際」「手工作業工業、木材加工法」。1941年没、68歳。工芸、図画手工教育、美教

阿部春峰 (あべ・しゅんほう/1877～1956年)

福岡県出身。京都に出て菊池芳文に師事。1907年文展入選、08年3等賞、09年褒章。その後も文展、帝展にて出品・入選を繰り返す。27年帝展審査員。戦前の京都画壇を代表

する画家として活躍。京都で没、79歳。日本画

阿部信雄 (あべ・のぶお/1948年～)

兵庫県生れ。慶應義塾大学文学部卒、同大学院修士課程修了。1977年石橋財団ブリヂストン美術館学芸員、後に学芸部長。93年退職。89～92年東急 Bunkamura ザミュージアムのプロデューサーを兼任。ニューオータニ美術館顧問、鎌倉大谷記念美術館運営委員、セキ美術館(愛媛県)顧問。名古屋大学、学習院大学、成城大学、玉川大学、武蔵工業大学の非常勤講師。フジヤマミュージアム(山梨県)、久万高原町立久万美術館(愛媛県)顧問。現代美術、博物館学、美評、美教、学芸員

阿部平臣 (あべ・ひろおみ/1920～2006年)

福岡県生れ。東京美術学校卒、春陽会、自由美術協会展に具象画を出品。その後、アンフォルメル抽象画を描く。1959年行動美術協会展で新人賞、M氏賞。70年代には中近東シリーズに至る。郷里でも美術教師を務め、福岡の美術振興の功績。2006年没、86歳。洋画、美教

安部汎愛 (あべ・ひろえ/1906～没年不詳)

福岡県生れ。東京文化学院卒。1939年川南造船所入社、12年間勤務。52年町立茂木中学校勤務。市立片淵中学校勤務。その後、長崎市弥生町にてアトリエを営む。71年長崎県立美術博物館友の会講師。洋画、水彩、美教

阿部夫美子 (あべ・ふみこ/生誕年不詳～)

和紙人形の中西京子に師事。世界祝祭博・伊勢伝統ゾーンに五〇〇体ジオラマ制作。皇學館大學神道博物館に遷御の儀収蔵。鳥羽市戸田家遷御の儀と斎王群行二場面常設展示。二見町賓日館おかみぎ参り展示人形集「和紙夢幻」刊行。NHK「東海の技」出演。おかみぎ横丁神話の館「倭姫命」制作など。『日本神話の世界と和紙人形』より。和紙人形

安部真知 (あべ・まち/1926～1993年)

大分県生れ。女子美専師範科卒。1947年安部公房と結婚。自由美術協会などに出品。58年千田是也に勧められ安部公房作「幽霊はここにいる」の舞台装置担当。安部スタジオ、俳

優座、民芸の渡辺浩子演出作品の装置を担当。69年安部公房初演出「棒になった男」の装置などで紀伊国屋演劇賞。71年千田演出の俳優座の装置などで伊藤熹朔賞、72年千田演出「リア王」の装置で芸術祭優秀賞。1993年没、67歳。舞美、洋画

安倍基 (あべ・もとし/1942年～)

別府市生れ。1960年大分県立緑丘高校卒、生野祥雲齋に師事。63年家業の竹工芸を継ぐ。76年より日本伝統工芸展に出品、受賞1回。西部工芸展、日本花器茶器美術工芸展にも出品。80年日本工芸会正会員。82年日本伝統工芸展朝日新聞社賞。竹工芸

阿部雪子 (あべ・ゆきこ/1922～2018年)

金沢市生れ。叔父である石黒宗麿の勧めにより彫刻家をめざし、1950年金沢美術工芸専門学校彫刻科卒、畝村直久に師事。48年日展入選、53年文部省派遣留学生として渡仏、フランス国立美術学校ヤンセス教室に学ぶ。帰国後一陽展に出品、70年特待賞。一陽会会員。2018年没、96歳。彫刻

阿部陽子 (あべ・ようこ/1949年～)

岩手大学特設美術科卒。同校専攻科修了。ドイツのケルン美術大学留学を経て、制作活動。岩手芸術祭版画部門審査員・展開会・受賞多数。国内外の登山を続け、岩手県山岳協会指導員としての活動をもとに岩手県の山にスポットをあてる。国画会版画部会員・日本山岳会会員・盛岡RCC所属。版画

阿部芳文・展也 (あべ・よしふみ・?のぶや/1913～1971年)

新潟県生れ。絵は独学。1932年独立展に入選。38年創紀美術協会創立会員。39年美術文化協会創立に同人。40年満州、蒙古旅行。41フィリピンで軍報道部所属。52年美術文化協会脱退、無所属。51年サンパウロ・ビエンナーレ展、52年カーネギー国際美術展、53年インド国際美術展、55年ニューヨーク、ブルックリン美術館主催国際水彩画展に出品。53年のインド国際展には日本美術家連盟代表として渡印。59年以降ローマに定住。国際造型芸術連盟執行委員。60年グッゲンハイム賞、リュブリアナ国際版画ビエンナーレ展国際審査員。初期の超現実主義から晩年は抽象主義的作風。ローマ市で没、58歳。洋画、水彩、写真

安倍六陽 (あべ・ろくよう/1906～1987年)

新潟県生れ。川合玉堂に入門。1959年玉堂門下生にて三多圭会結成し、以後展覧会を連続二十四回開催。日本橋高島屋にて個展開催、以後連続十回開催。1987年没、81歳。
日本画

天岡均一 (あまおか・きんいち/1875～1924年)

兵庫県生れ。東京美術学校卒。高村光雲、竹内久一らにまなび、美術院で仏像修理に携わり、後、大阪で活躍。彫刻以外にも、造の工芸品や書道や絵画にも秀れ、酒好きで自由奔放な生活、豪気な人柄で交際範囲もひろかった。1903年内国勸業博覧会で「漆灰製豊公乗馬像」が3等賞。大阪難波橋の「ライオン像」の作者。1924年没、50歳。
彫刻、工芸

天津 恵 (あまつ・けい/生誕年不詳～2016年)

名古屋市生れ。常盤女学院卒。中央美術学院修了。和紙を貼ったキャンバスの上に、油彩やアクリル、パステル、墨などを重ね独特のマチエールを創出し、パリやニューヨークでも注目を浴びる。に出品。宇宙、太陽、花、街などをテーマに、明るい色彩の抒情的世界を築く。
洋画、版画、パブリックアート

尼野和三 (あまの・かずみ/1927～2001年)

富山県生れ。高岡工芸学校卒、棟方志功に出会い、木版画を始める。1955年頃から団体展に出品。62年に現代日本美術展で国立近代美術館賞。ノースウエスト国際版画展佳作賞、ルガノ国際版画ビエンナーレ展優秀賞、ザイロン国際木版画展2等賞、東京国際版画ビエンナーレ展佳作賞。66年日本版画協会展を最後にすべての団体から退会。71年に3年間の予定で渡米。木版による独創的な日本の抽象画として、海外では高く評価された。2001年まで滞在して客死、74歳。
版画

天野邦弘 (あまの・くにひろ/1929～2020年)

弘前市に生まれる。1947年県立青森工業学校卒。1962年シェル美術展・K賞。68年ピストイア(伊)国際版画ビエンナーレ展で1等。70年チェコ国際版画ビエンナーレ展でランプリ。国際版画展で一等、グランプリ、金賞。92年愛知県立芸術大学教授。2020年没、91歳。
版画、美教

天野大虹 (あまの・たいこう/1905～1999年)

兵庫県生れ。師・山口華楊。京都絵画専門学校卒。日展会友。晨鳥社幹事。日展16、帝展5、文展2回出品。画家であり詩人としても活躍。「晨鳥社」の名付け親として知られる。1999年没、94歳。
日本画

天野タケル (あまの・たける/1977年～)

東京生れ。1997年に渡米し、ニューヨークで版画を学ぶ。宗教画や静物画などの伝統的な題材とポップ・アートが融合、「NEW ART」と呼ぶ独自の表現方法で作品を制作。東京、香港、ニューヨーク、ロンドン、パリほか国内外で発表。また、アーティストのCD/LPジャケットやアパレルへのアートワークの提供など様々なコラボレーションも展開。2020年に初の作品集を出版。
版画、洋画、彫刻、デザイン

天野方壺 (あまの・ほうこ/1828～1894年)

愛媛県生れ。はじめ森田樵眠に師事、京都にて中林竹洞や貫名海屋、日根対山に学び、江戸で椿椿山の教えも受け、内国絵画共進会などで活躍。明治期、京都府画学校の教諭。1894年没、66歳。
幕末～明治期を代表する文人画家、美教

天野裕夫 (あまの・ひろお/1954年～)

岐阜県生れ。1978年多摩美術大学大学院彫刻科修了。79年美術文化展でプールブ一賞。84年高村光太郎大賞展で彫刻の森美術館賞。86年ロダン大賞展で美ヶ原高原美術館賞。92年半田市野外彫刻展で優秀賞。96年神戸具象彫刻大賞展で準大賞、神戸市民賞、日本現代陶彫展'96で金賞。2001年個展(中京大学アートギャラリーC・スクエア)。02年個展(刈谷市美術館)。05年多摩美術大学工芸学科客員教授。
彫刻、美教

天野喜孝・嘉孝 (あまの・よしたか/1952年～)

静岡市生れ。1967年アニメーション制作会社タツノプロダクションに入社。動画、原画を経て、徐々にキャラクターデザイン専任。天野嘉孝名義で『タイムボカン』等のアニメのキャラクターデザインを手掛。82年独立。95年アールビビン株式会社と版画作品の販売契約。83年「第14回星雲賞」アート部門受賞。84年「第15回星雲賞」アート部門受賞。85年「第16

回星雲賞」アート部門受賞。86年「第17回星雲賞」アート部門受賞。2000年“THE SANDMAN:The Dream Hunters”(ニール・ゲイマンとのコラボ)でアイズナー賞の最優秀漫画関連書籍部門を受賞、画家として「ドラゴン・コン賞」「ジュリー賞」。07年「第38回星雲賞」アート部門受賞。18年「インクポット賞」。画家、アニメ、キャラクターデザイナー、版画、イラストレーター、装幀、舞美

海宮 透 (あめのみや・とおる/1943年～)

東京生れ。東京造形大学彫刻研究室修了。佐藤忠良に学ぶ。1950年新制作展新作家賞。63年同会会員。山形教育学部美術教育科教授。彫刻、美教

飴村秀子 (あめむら・ひでこ/1928～2017年)

広島県生れ。1945年染色作家花房花子氏に師事、ろうけつ染を学ぶ。52年以降、山口県美術展覧会、光風会展、現代工芸展に出品。66年日展に入選。藍染作品に出会う。73年自宅に藍甕設置。78年現代工芸美術家協会会員、山口県芸術文化振興奨励賞。87年日展で特選。95年日展会員。98年日本現代工芸美術家協会評議員。2004年中国文化賞。06年日展評議員。07年日本現代工芸展で文部科学大臣賞。08年地域文化功労者表彰。17年日本現代工芸美術展で内閣総理大臣賞。2017年没、89歳。工芸(染色)

飴屋法水 (あめや・のみみず/1961年～)

1978年劇作家・唐十郎主宰の「状況劇場」に参加し、音響を担当。84年自身の劇団「東京グランギニョル」を結成し、演出・音響・美術などを担当した。87年アーティスト・三上晴子らと結成した「M.M.M.」では舞台上でメカニク的な装置と肉体を融合させ、サイバーパンクを思わせる世界観を展開した。90年代より現代美術を主軸とした活動を行うが、95年のヴェネチア・ビエンナーレ参加後、作品制作を休止。珍獣専門のペットショップ「動物堂」を経営した。2005年「消失」をテーマに水と、必要最低限の食物摂取のみで24日間箱に籠った「バング」展でアーティスト活動を再開。以降、根源的な生への関心を主題にした演劇、インスタレーション作品を制作している。東日本大震災で被災した福島県の高校生らとやりとりを重ね書き下ろした戯曲『ブルーシート』は、第58回岸田國土戯曲賞受賞。近年参加した主な展覧会に、「水と土の芸術祭 2012」(新潟県)、「国東半島アートプロジェクト 2012」(大分県)、「声ノマ 全身詩人、吉増剛造展」(東京国立近代美術館、2016)。現代美術、舞美、インスタ

綾岡有真 (あやおか・ゆうしん/1846～1910年)

東京生れ。柴田是真に師事。花鳥画を能くした。書画の版下作りをしていた父、綾岡輝松を継いで書画や図案の制作に従事。内国勸業博覧会の審査員。日本画

荒井 経 (あらい・けい/1967年～)

栃木県生れ。1990年筑波大学卒、92年同大学院芸術研究科修了。2000年東京藝術大学大学院文化財保存学専攻保存修復日本画修士課程修了、03年同大学院博士後期課程単位取得退学、04年博士(文化財)取得。03年東京学芸大学専任講師、05年准教授を経て、09年東京藝術大学保存修復日本画研究室准教授、18年～教授。日本画の材料技法、近代日本画技法史、東アジア近現代絵画の研究を専門とし、古典絵画の材料技法および模写の指導、日本画制作の指導、博士後期課程学生の学位論文の指導および審査を担当。文化財保存修復学会理事、横山大観記念館理事、美術文化振興協会評議員、文化財保護・芸術研究助成財団事業委員、明治美術学会会員などパブリックコレクション/筑波大学/愛知県立芸術大学/佐藤美術館/さくら市ミュージアム・荒井寛方記念館/ザ・シンフォニーホール/FUJIYAMAミュージアムなど国内外での個展、グループ展多数。無所属。日本画、美評、保存修復、美教

新井勝利 (あらい・しょうり/1895～1972年)

東京生れ。梶田半古に入門、次いで安田靫彦に師事。院展にて活躍していたが、戦時中は従軍画家として戦地に同行。戦後は画業に専念して古典文学や歴史画などに秀作を残す。院展同人・評議員、多摩美術大学名誉教授。1972年没、77歳。日本画、美教

荒井 孝 (あらい・たかし/1938年～)

栃木県出身。1969年東京芸大大学院終了。卒業後は院展を中心に活躍。76年院展奨励賞。紺綬褒章、足利市民文化賞、栃木県文化奨励賞、文部大臣教育功労賞、院展奨励賞、院展受賞作家選抜展(初音会賞)、院展入選多数、春の院展入選。院展の旗手として活躍。日本画

新井 碧 (あらい・みどり/1992年～)

茨城県生れ。2015年東京造形大学造形学部美術学科絵画専攻卒。22年京都芸術大学修士課程芸術研究科美術工芸領域油画専攻修了。主な展覧会に、「次風景 Post landscape」(ASTER、石川、2023)、「まばたきのシノニム」(biscuit gallery、東京、2022)、Art Collaboration Kyoto 2022 連携プログラム「Centre-Empty - 中空の行方-」(両足院、京都、2022)、「Collectors' Collective vol.6 Osaka」(TEZUKAYAMA GALLERY、2022)、国立国際美術館「ボイス+パレルモ」サテライト企画「Re: Perspective」(grafporch、大阪、2021)、「SHIBUYA STYLE vol.15」(西武渋谷店美術画廊、東京、2021)など。主な受賞歴に、「TURNER AWARD 2020」入選(2021)、「京都芸術大学 大学院修了展」優秀賞(2022)。**洋画**

荒金 透 (あらかね・とおる/1926年～2000年)

別府市生れ。戦後、宇治山哲平に師事。1950年スミル展にグループ「ネギ」のメンバーらとともに参加。62年、読売アンデパンダン展に出品。86年日仏現代美術展でクリティック賞。98年北の大地ビエンナーレ展で優秀賞。2000年没、74歳。**洋画**

荒川亀斎・重之輔 (あらかわ・きさい/1827～1906年)

松江市生れ。木彫りの彫刻等が有名であるが、機械器具の発明家でもある。幼少期から彫刻界の天童と謳われた。彫刻だけでなく、日本画、国学、書道、金工などを幅広く身につけた。1893年シカゴ万博に「稲田姫像」を出品して優等賞、1900年パリ万博に「征韓図」を出品して銅牌。1890年小泉八雲と出会い、その後も交流が長く続いた。1906年没、82歳。**彫刻、木彫、日本画**

荒川三郎 (あらかわ・さぶろう/1902～1986年)

福島県生れ。太平洋画研究所卒、同郷の水彩画家である相田直彦や、石井柏亭に師事。若松女子高校の教諭を勤めながら絵画制作、日本水彩画会、日本水彩連盟などを作品発表の場として活躍、会津美術協会会長として、会津洋画壇の重鎮として後輩の指導にあたった。1968年会津若松市文化功労賞。1986年没、84歳。**水彩、美教**

荒川豊蔵 (あらかわ・とよぞう/1894～1985年)

岐阜県生れ。陶業家、加藤与左衛門方で生まれる。1919年京都の名陶工宮永東山(1868—1941)を知り、陶業を本格的に修める。彼が陶工として飛躍を遂げたのは、27年北大路魯山人の主宰する鎌倉星岡窯に招かれてからである。30年故郷の岐阜県可児(かゐ)市大

萱(おおがや)に桃山時代の志野陶の名窯を発見、この地に古式の半穴窯を築いて古志野、瀬戸黒の制作に没頭し、その力量を桃山時代の美濃(みの)陶を現代に蘇生(そせい)させることに注ぎ、現代を代表する茶陶作家となった。55年重要無形文化財保持者。71年文化勲章を受章。1985年没、91歳。**陶芸**

荒木市三 (あらかき・いちぞう/1913～1990年)

三重県生れ。1980年重県立松阪商業学校卒、上京、4年先輩の中谷泰の世話になる。31年春陽会洋画研究所に入所。33年川端画学校に入学。37年満州事変で大陸に出征。47年春陽会展に入選。1990年没、77歳。**洋画**

荒木寛一 (あらかき・かんいち/1827～1911年)

1827年生れ。荒木寛友の父。荒木寛快の養子、人物花鳥画をまなぶ。山水は桜間青涯に師事。内国博覧会、絵画共進会に出品。皇居の杉戸に墨梅をえがいた。1911年没、85歳。**幕末-明治期の絵師**

荒木寛快 (あらかき・かんかい/1789～1860年)

江戸生れ。大西圭斎、渡辺崋山、桜間青涯らと親交。門下には実子荒木寛一、養嗣子の荒木寛敏がおり、のちの荒木派を創始した。当時の風俗美人画を得意とし名を上げた。1860年没、71歳。**日本画**

荒木寛敏 (あらかき・かんぼ/1831～1915年)

江戸生れ。8才の時に荒木寛快に入門、22歳で養子となる。1872年ウィーン万国博に「菊花図」を出品、褒章。87年皇居造営に際し杉戸絵を描きその後も多くの御用画に貢献。1900年帝室技芸員を拜命。画壇では日本美術協会の主軸作家として影響力を発揮し、文展開設後も審査員として旧派の求心的存在。1915年没、84歳。**日本画**

荒木寛友 (あらかき・かんゆう/1849～1920年)

江戸生れ、南画家荒木寛一の子。父に学んだ後、山本琴谷に師事し、南北合派の画を研究する。江戸後期には福岡の秋月藩黒田家に出仕、明治維新後は太政官などに出仕するなど新政府に仕えたが、1877年公職を辞して画業に専念。以降、日本南画協会、日

本美術協会などに参加、そのほか禁裏御所襖絵揮毛など。門下には川瀬巴水などを輩出。
1920年没、71歳。南画

荒木月畝 (あらかき・げつぽ/1873～1934年)

栃木県生れ。初め田崎草雲に学び、のち荒木寛畝・十畝に師事。1922年東京本郷に白光堂塾研究会(白光会)を興して多くの子女に日本画を教授。24年女性日本画家による翠紅会の結成に会員として参加。1934年没、61歳。日本画、美教

荒木元融 (あらかき・げんゆう/1728～1794年)

長崎県生れ。石崎元徳に師事し、洋風画をオランダ人にまなぶ。長崎の荒木元慶の養子。1766年唐絵目利兼御用絵師をつぐ。門下に実子、石崎融思、養子の荒木如元がいる。1794年没、67歳。江戸中期の絵師

荒木 剛 (あらかき・ごう/1911～1958年)

ソウル市生れ。1930年頃上京し、帝国美術学校に進学。卒業後、独立美術協会展に出品。38年長崎市で個展。39年美術文化協会の創立に参加。40年頃から国際写真情報社に勤務。46年家族と共に大分市に転居。48年油野誠一、廣瀬通秀らとともにソウル会を結成。1958年没、47歳。洋画、シチュール

荒木如元 (あらかき・じよげん/1765～1824年)

長崎県生れ。唐絵目利の荒木元融の養子となる。南蛮画の技法をまなび、若杉五十八とともに代表的洋風画家といわれた。1824年没、60歳。江戸後期の絵師

荒城季夫 (あらかき・すえお/1894～没年不詳)

東京生れ。1917年早大英文学科卒。25年日仏芸術社に勤め、後に『日仏芸術』編集主任。30年日本美術学校教授のち理事長。美術評論家として活躍。陸軍省情報部員と行った雑誌『みづる』(1941年1月)誌上の座談会「国防国家と美術」は、戦時下の美術統制に関する資料として歴史的に重要である。著書に『近代フランス絵画思潮論』(総合美術研究所、1936年)、『古代美と近代美』(青磁社、1943年)などがある。1929年から1933年にかけて、美術雑誌で古賀春江の二科展出品作を評した。ジャーナリスト、美教、美評

荒木千洲 (あらかき・せんしゅう/1807～1876年)

1807年生れ。長崎の人。渡辺秀実にまなび、花鳥、人物画を得意とした。父君瞻くんせんの跡をつぎ1826年唐絵目利となり、54年同頭取にすすむ。長崎奉行内藤忠明の命により「続長崎画人伝」を編集。1876年没、70歳。江戸後期-明治の絵師

荒木高子 (あらかき・たかこ/1921～2004年)

兵庫県生れ。華道末生流宗家の家業を継ぎ家元代行を務めたが、1956～60年大阪で現代美術を専門に扱う白鳳画廊を開設。翌年渡米し、NY・アート・スチューデント・リーグで彫刻を学び、帰国後は陶芸に取り組んだ。65年から個展で黒陶を発表し女流陶芸に参加、陶にシルクスクリーンで印刷する方法を考案した。聖書シリーズには78～79年取り組み日本陶芸展で最優秀作品賞。81年西宮市民文化賞、96年兵庫県文化賞。96年西宮市大谷記念美術館にて「荒木高子展 いきざまを焼く」を開催。2004年没、83歳。立体、陶芸、画廊主

荒木珠奈 (あらかき・たまな/1970年～)

1970年生れ。91年武蔵野美術大学短期大学部卒。その後のメキシコ留学で版画の技法に出会い、版画、立体作品、インスタレーションなど、幅広い表現の作品を発表してきた。2012年には活動拠点をニューヨークに移し、意識的に「移民」として暮らすことで新たな一歩を踏み出しており、「越境」「多様性」「包摂」というテーマに関心を寄せ、作品を制作している。23年東京・上野の東京都美術館で個展。現代美術家、インスタ

荒木探令 (あらかき・たんれい/1857～1931年)

山形県生れ。東京で狩野探美に師事。江戸川製陶所の納富介次郎にテレビン油描法をまなび、陶画もえがいた。狩野派の復興につとめ、晩年に狩野姓となる。1931年没、75歳。日本画、陶画

荒木経惟 (あらかき・のぶよし/1940年～)

東京生れ。千葉大学工学部写真印刷工学科卒。電通勤務を経て、独立。1964年写真集『さっちゃん』で第1回太陽賞。私家版を含め写真集を400冊以上発表し、「アラーキー」の

名称で多彩な創作活動を展開し、国内外で高い評価を得る。2008年オーストリア科学芸術勲章。2013年毎日芸術賞特別賞。写真

荒木弘訓 (あらかしひろのり/1946年～)

石川県生まれ。1969年金沢美術工芸大学日本画科卒。佐藤鬮夫に師事。73年日展に入選、84年日春展外務省買い上げ、86年・平成5年特選。2001年・15年年審査員。12年パリで個展。自然や時間をテーマに制作。近年は空を描く。日展会員。名古屋芸術大学名誉教授。日本画、美教

荒木飛呂彦 (あらかしひろひこ/1960年～)

宮城県生まれ。80年に『武装ポーカー』が手塚賞(主催=集英社)準入選、同作品で『週刊少年ジャンプ』にてデビュー(当時は荒木利之名義)。初連載は『魔少年ビーター』(83)。87年より『ジョジョの奇妙な冒険』シリーズの連載。物語全体のテーマを「人間讃歌」2003年に初個展「JOJO IN PARIS」をパリで開催。12年には同シリーズの第1部よりテレビアニメの放送がスタート。13年シリーズ第8部にあたる『ジョジョリオン』(2011～)で「文化庁メディア芸術祭」マンガ部門大賞。17年実写化映画『ジョジョの奇妙な冒険 ダイヤモンドは砕けない 第一章』が上映。18年に「荒木飛呂彦原画展 JOJO 冒険の波紋」が国立新美術館(東京)などを巡回。20年、「東京 2020 公式アートポスター」の制作。漫画、アニメ、ポスター

荒木 悠 (あらかしゆう/1985年～)

山形県生まれ。2007年ワシントン大学サム・フォックス視覚芸術学部美術学科彫刻専攻卒。10年東京藝術大学大学院映像研究科メディア映像専攻修士課程修了。文化の伝播や異文化同士の出会い、その過程で生じる誤解や誤訳から生まれる可能性に強い関心を寄せている。映像インスタレーションでは、歴史上の出来事と空想との狭間にある物語を編み出し、創造的に再現。2つの領域のあいだを揺らぎ続けるような作品群は、映画祭でも上映。18年ロッテルダム国際映画祭でタイガーアワード受賞。美術の分野では19年にヴィクトル・ピンチューク財団主催の第5回 Future Generation Art Prize に世界公募数 5800 のなかから最終候補のひとりに選出され、ヴェネチア・ビエンナーレ公式関連展にも出品。映像、インスタ

櫟 文峰 (あららぎぶんぼう/1891～1970年)

岐阜県生まれ。京都に出、加藤英舟に師事、四條派を学ぶ。京都市立絵画専門学校別科卒、橋本関雪に師事。1928年雪庵の雅号。寺院からの揮毫の依頼に応じ、師の画塾展に出品する程度で、世俗的なことに淡泊。戦後の51年ごろ妻子を京都に残し、単身で高山に帰郷、画作三昧の生活をおくる。1970年没、79歳。日本画

アラン・ウエスト (Allan・West/1962年～)

米ワシントン DC 生まれ。1978年コーコラン美術館付属美術学校入学。81年カーネギーメロン大学芸術学部絵画科入学。82年来日。85年つくば万博にて通訳、展示案内。87年カーネギーメロン大学学部卒。東京藝術大学日本画科入学(加山又造研究室)。92年同大学大学院修士課程卒。画家として活動。スミニアン美術館など世界各地で個展をひらく。日本では谷中と熱海にアトリエを構える。日本画

有坂隆二 (ありさかりゅうじ/1952年～)

栃木県生まれ。1977年東京芸術大学卒。88年以降個展、グループ展等で活躍。97年より幼児や小学生への造形教育に積極的に関わっている。造形、美教

在原古玩 (ありまらこがん/1829～1922年)

江戸生まれ。荒井尚春に師事、土佐派を学ぶ。日本美術協会会員。日本画会、日本漆工会会員。1922年没、93歳。江戸後期-明治の絵師、漆画

有馬かおる (ありまかおる/1969年～)

愛知県生まれ。1990年名古屋造形芸術短期大学プロダクトデザインコース卒。ドローイングを中心に、ペインティング、彫刻などを制作。プロジェクト「キマワリ荘」(1996～)の設立者。近年では、新聞を支持体とした日記的なドローイングシリーズや、線描による人物画のポートフォリオ。千葉県を拠点に活動を続け、国内外で数多くの展覧会に参加。主な個展に「有馬かおる展」(ワタリウム美術館、東京、2003)、「To See」(QT クイア・ソウツ、ニューヨーク、2018)など。現代美術、ドローイング、彫刻

有馬 侃 (ありまただし/1929～2010年)

島根県生まれ。森田茂に師事。高校教師。東光展入選、日展で特選2回、審査員。東光

会理事長。日展参与。2014年有馬侃展、出雲文化伝承館。2010年没、81歳。洋画、美教

有山定次郎 (ありやま・さだじろう/生没年不詳)

明治20～30年東京府神田において地本問屋、画工にして店舗を開いて自作のリグラフなどの作品を販売した明治中期における石版額絵の代表的な版元。作品;有山定次郎「東洋之貴嬢」石版筆彩。1891年有山定次郎「皇居二重橋御出門之図」石版筆彩91年有山定次郎「東京名所」シリーズ 12枚揃 石版筆彩、有山定次郎「大日本三景」石版筆彩。リグラフ、版画、版元(石版)

淡島雅吉 (あわしま・まさきち/1913～1979年)

東京生れ。1933年日本美術学校図案科卒。35年各務クリスタル製作所図案部に入所。47年日展に入選。50年淡島ガラス・デザイン研究所をおこす。53年通産省意匠奨励審議会専門委員会(～82年)。54年淡島ガラス株式会社創立。79年「しづくガラスの創案を中心とするガラス器デザイン」で国井喜太郎賞。東京都で没、66歳。立体、ガラス

安西七郎 (あんざい・しちろう/1913～2006年)

栃木県生れ。1926年栃木県立宇都宮中学に入学。同校の英語教師だった版画家川上澄生指導のもとに木版画制作。44年県立千葉中学校の社会科教師。68年千葉県在住の版画家船崎光治郎指導の「版画を作る会」に入会、制作を再開、数千点を作る。千葉市観光絵画コンクールにて4回受賞。千葉市内で個展多数開催。2006年没、93歳。版画

安澤剛直 (あんざわ・たけなお/1975年～)

東京生れ。家業が写真館だったため、幼い頃から写真家の父を見て育つ。大学中退後、日本写真専門学校卒。博報堂フォトクリエイティブ(現博報堂プロダクツ)入社。退社後、雑誌等経て渡米し、丸山晋一氏に師事。2006年An'z Photographyを設立。2009年株式会社アンズフォトに改名。2012年一般社団法人日本ウエディングフォトグラファーズ協会設立、初代会長。写真

安藤栄作 (あんどう・えいさく/1961年～)

東京生れ。1986年東京芸術大学彫刻科卒。91年彫刻制作と並行してパフォーマンス開

始。97年エッセイ集「降りてくる空気」を出版。17年平櫛田中賞。19年円空賞受賞。彫刻、パフォーマンス

安藤耕斎 (あんどう・こうさい/1862～1939年)

信濃国生れ。1897年伊那銀行創立発起人、下川路村村長、99年村長を辞任して下川路郵便局長。富岡鉄斎に私淑し入門。1911～26年京都に出、鉄斎の教えを受け、近隣を遊歴して揮毫。33年個展を日本橋・白木屋で開催。36、38年と日本橋・白木屋で鉄斎展を開催。1939年没、76歳。日本画

安藤更生 (あんどう・こうせい/1900～1970年)

東京生れ東京外国語学校卒。1924年早稲田大学仏文学科中退。会津八一に師事、23年奈良美術研究会を創設(のち東洋美術研究会)。29年研究誌「東洋美術」を創刊。38年中華民国に渡り、新民印書館に勤務。安藤が編集した『北京案内記』は北京に関する案内書とは名著、評価が高い。66年多摩美術大学教授。戦後は早稲田大学教授。鑑真研究をライフワークとし、「鑑真大和上伝之研究」で文学博士号を取得(1954年)。1970年没、70歳。美史、美教

安東菜々 (あんどう・なな/1948年～)

東京生れ。1974年京都市立芸術大学美術専攻科修了。76年クラクフ国際版画ビエンナーレで2席受賞。89年「ユーロパリア'89」(ベルギー)に出品。99年「現代版画21人の方向」(国立国際美術館)に出品。2005年「現代版画の潮流展」(町田市立国際版画美術館)に出品、版画

安東南豊 (あんどう・なんぼう/生誕年不詳～1977年)

大分県生れ。1911年小山正太郎に師事、14年東京高等師範学校卒。21年荒木十畝に師事して日本画を学ぶ。大正末年妻の実家のある水戸に移住。25年茨城美術展に出品、戦後も茨城県美術展(県展)に出品。55年県展で知事賞。県内の高校に奉職、教頭、校長。水戸市で没。洋画、日本画、美教

安東伸 (あんどう・のぶ/1935年～)

韓国京城府(現ソウル市)生れ。神戸女子薬科大学卒業後、帰県し、菅久に師事。大分県美術展をはじめ太平洋美術展、二紀展を中心に作品を発表。**洋画**

安藤梅峯 (あんどう・ばいほう/1777～1825年)

大分県生れ。日出藩絵師。富田石見守源吉盛の三男。名は罔儀。別号に真龍齋がある。幼いころから画を好み、のちに安藤をついで江戸に住み、狩野師信に学んだ。『日出藩御家中系図』の中に「梅峯初徳禄絵工実は富田石見守二男」との記載、日出藩の正式な絵師。1825年没、49歳。**江戸中期の絵師**

182

い

飯尾寿夫 (いのお・としお/1928～2017年)

大分県生れ。1951年熊本工業専門学校卒。30歳を過ぎた頃から、本格的に油彩画の制作。58年大分県美術展で県美術協会奨励賞。67年二紀会展に入選。97年二紀会展で同人賞。98年二紀会会員。2002年二紀会大分支部長。2017年没、89歳。**洋画**

飯岡千江子 (いのおか・ちえこ/1969年～)

三重県生れ。新風舎出版賞(色鉛筆画)、エクスマレッジMy Couple Story 大賞(色鉛筆画)、へびの文化賞大賞(クレパス画)、イギリス国際ミニプリント展(銅版画)、絵本『読み聞かせインソープ50話』よこたきよし・文/チャイルド本社、渋川市中村保育園壁画。**版画、ペン、壁画、鉛筆、クレパス、絵本**

飯島光峨 (いじま・こうが/1829～1900年)

江戸生れ。沖一峨に師事、南宋画を修める。同門に佐竹泰菴(永湖)、松本洋峨(楓湖)ら

がいて、1855師一峨が歿する。明治維新後、内国勸業博覧会に77, 81年出品、82, 84年内国絵画共進会に出品、85前年フェノロサらにより結成された鑑画会展に出品、96日本絵画協会第一回絵画共進会で二等褒状。花鳥画を得意とした。1900年没、71歳。**江戸後期-明治期の絵師**

飯田九一 (いゝだ・くいち/1892～1970年)

横浜市生れ。東京美術学校に入り、寺崎広業、結城素明に指導をうけ、卒業後川合玉堂に師事。久邇宮邸御居間の格天井の揮毫を拝命。横浜文化賞、神奈川県文化賞。香蘭会主宰。1970年没、78歳。**日本画**

飯田宗吉 (いゝだ・そうきち/1887～1978年)

徳島県生れ。旧制徳島県立徳島中学校卒、早稲田大学商科に学ぶかわら、1907年頃から、大下藤次郎が開設した水彩画講習所に通った。1912年徳島市千秋閣で開催された紅燈会展に参加。写真愛好家のグループ展だが、県内の洋画家の作品や大下藤次郎らの作品も展示した。写真家として活動した。1978年没、91歳。**写真、洋画、水彩**

飯田実 (いゝだ・みのる/1900～1974年)

水戸市生れ。太平洋画会研究所に学ぶ。1926年帝展で入選。27, 28, 29年帝展に出品。40年紀元二千六百年奉祝展に出品。48年茨城県美術展委員。51年一水会展、51, 52, 55年日展に出品。58年一水会会員。1974年没、74歳。**洋画**

飯田美郎 (いゝだ・よしろう/1921～2017年)

茨城県生れ。1944年東京美術学校工芸科彫金部卒。46年日展で入選(以後出品)。58年光風会会員。65年日展会員、現代工芸美術家協会評議員、同審査員。73年光風会評議員。76年個展開催(日本橋高島屋)、以後同所で個展開催。79年日本新工芸展審査員(82年も)。80年光風会展で辻永記念賞。2017年没、96歳。**彫金**

飯田竜太 (いゝだ・りゅうた/1981年～)

静岡県生れ。日本大学芸術学部美術学科彫刻コース卒、2014年東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術専攻修了。本や新聞といった紙を素材に言語の枠組みを外側からとら

える彫刻作品を制作。04年ガーディアン・ガーデン主催の第22回グラフィックアート「ひとつぼ展」にてグラ氏のミイラの調査に携わったので、「ミイラ博士」の呼び名もあった。1970年没、70歳。彫刻、美教、美術史

飯塚裕児 (いづか・れいじ/1904～2004年)

横浜市生れ。南画家の岸浪柳溪や仏画家の岸浪松濤に師事し、海洋画に関しては洋画家の東城鉦太郎に師事。21歳より東南アジア、ヨーロッパ各地を歴訪し、海洋画の研究に没頭。1930年雑誌の挿絵執筆を始める。講談社の『少年倶楽部』『幼年倶楽部』や誠文堂の科学雑誌に帆船画、艦船画、航空画の挿絵を描き、昭和10年代、強い人気を得る。1955年挿絵画家を辞め、油彩海洋画家へ転身。94年制作の戦艦大和の絵画は、2006年靖国神社遊就館に奉納。2004年没、100歳。挿絵、海洋画、油彩

飯森定省 (いもり・さだみ/1893～1968年)

石川県生れ。1918年東京美術学校西洋画科卒。15年文展に入選。27年金沢石黒ファーマシーで個展開催。57、58年ころアトリエを都内から熱海市に移し、以後同地で制作を続ける。1968年没、75歳。洋画

猪飼嘯谷 (いかい・しょうこく/1881～1939年)

京都生れ。谷口香嶺に師事して四条派の画法を学ぶ。京都美術協会展、文展などで活躍。1917年母校京都市立絵画専門学校の教授。19年井口華邨、池田桂仙らと共に日本自由画壇の設立に参加。花鳥や風景画なども描くが特に時代考察や時代衣装をよく研究して歴史風俗画や人物画の名手として知られている。1939年没、58歳。日本画、美教

猪飼 正 (いかい・ただし/1935年～)

名古屋市生れ。1970年 独学で銅版画をはじめ。84年版画グランプリ展入選。85年版画大賞展入選。版画「期待の新人作家」展で買上。86年CWAJ現代版画展～2000年出品。91年山画廊で個展。以降'93・'94・'96・'99年に個展開催。92年都版画賞展で受賞。85年以降 全国各地の個展で作品発表。版画

五十嵐彰雄 (いがらし・あきお/1938年～)

福井県生れ。1960年福井大学卒。64年シュル美術賞展(東京・京都)に出品。66年土岡秀太郎の「北美文化協会」に所属。70年代ミニマルアートやコンセプチュアルアートに刺激を受けた。紙に鉛筆のドローイングを繰り返し、画面を黒く覆いつくす作品を発表。80年代以降、絵画的イリュージョンを排除するような「ホワイト・ペインティング」を開始し、白い絵の具を塗り重ね、積層する筆致の痕跡を追求。76年多数のグループ展に参加。アメリカ・イギリス・オランダなど海外での発表。東洋的感性が高く評価されている。2000年以降、画面をサンドペーパーで削り取り、露わになったキャンバス地を見せる「物質としての絵画」を展開。現代美術、ドローイング

五十嵐光昭 (いがらし・こうしょう/1928～2019年)

福島県生れ。謹教小学校、若松四中に勤務。1953年千葉市に移住、1954年水彩連盟初出品、55奨励賞、56会友推挙、60会員推挙、72渡部 菊二賞、83文部大臣奨励賞。56～67年二科展に油絵を出品、66特選。62年～74 第一回福島県選抜秀作展から13回展まで招待出品。74年～78 亜細亜現代美術展出品、75外務大臣賞、他委員賞。76年～80ローマン派美術協会展招待出品、相談役。水彩連盟委員、水彩連盟千葉支部長、千葉県美術会常任理事、千葉県展事務局長、千葉市美術協会理事、千葉水彩展顧問、千葉福島県人会幹事長。2019年没、92歳。美教、水彩

五十嵐二郎 (いがらし・じろう/1931～2015年)

新潟県生れ。1956年文化学院美術科卒。1955年 水彩連盟展で、みづゑ賞受賞以後、同展で、三宅賞、会員努力賞。59年一陽展で特別賞、以後同展で、青麦賞、会員努力賞、野間賞。66～67年日動サロンで個展。1970年 安井賞展出品、水彩画研修のために英国留学。73年 新宿・小田急百貨店で個展。85年 別館日動画廊で個展。86年 新潟・大和百貨店で個展。2015年没、84歳。水彩

五十嵐威暢 (いがらし・たけのぶ/1944年～)

北海道生れ。1968年多摩美術大学卒。69年カリフォルニア大学ロサンゼルス校大学院修士課程修了。79～83年千葉大学工学部デザイン科非常勤講師。85年国際グラフィック連盟(～現在)、(社)日本グラフィックデザイナー協会理事。89年多摩美術大学美術学部二部(現在、造形表現学部)デザイン科教授(～1993年)。2011～15年多摩美術大学学長。彫刻、グ

グラフィックデザイナー、美教、学長

五十嵐竹沙 (いっしやう・ちくさ/1773～1844年)

新潟県生れ。父に絵を学んだ。1784年江戸に出て、鈴木芙蓉・酒井抱一・谷文晁等に絵を学んだ。1809年亀田鵬斎が越後国に来訪した際、信濃国佐久郡から千曲川畔まで同行。江戸では毎月7日大窪詩仏が詩聖堂で開いた詩会に参加し、15年詩仏・菊池五山・秦星池作『文人番付』の上位に掲載。1844年没、71歳。江戸後期の絵師

五十嵐久枝 (いがらし・ひさえ/生誕年不詳～)

東京生れ。桑沢デザイン研究所インテリア・住宅研究科卒業。1986～91年クマタデザイン事務所勤務。1993年イガランデザインスタジオ設立。商業から様々な空間デザイン・インスタレーション・家具デザインを中心に、プロダクト・幼児施設遊具など、携わる領域は「衣・食・住・育」に渡る。グッドデザイン賞審査委員、武蔵野美術大学教授。主な仕事に、TSUMORI CHISATO、une nana cool、Lunchのインテリアデザイン、TANGO、baguette、baguette life、おいしーいキッチンの家具デザインなど。インテリアデザイナー、インスタ、美教

五十嵐芳三 (いがらし・よしぞう/1927年～)

横浜市生れ。1949年新制作派協会展 以後毎年出品し、51年に新作家賞、55年に新制作協会賞。52年東京芸術大学彫刻科卒。56年新制作協会会員。61年東京芸術大学彫刻科講師。62～82年日本大学芸術学部講師。63年野外創作彫刻展(日比谷公園)以後毎年。64年京都国立国際会館内部彫刻制作のためAAAグループに参加。66年東京造形大学造形学部美術科助教授、71～91年教授、第7回現代日本美術展で受賞。68年第3回昭和会展で林武賞。79年資生堂ギャラリー(東京)で個展。彫刻、美教

井川洗厓 (いがわ・せんがい/1876～1961年)

岐阜県生れ。稲野年恒及び富岡永洗の門人。始め大阪に出て稲野年恒に師事した後、東京へ出て永洗に就き、師とともに『都新聞』に挿絵を描いた。多くの木版口絵を手がけた。太平洋画会に入会、卒業。大正期には新版画『新浮世絵美人合 八月 月』を村上という版元から出版。洗厓は、「作家に大衆作家というものがあるように挿絵画家も大衆芸術家である。特に挿絵家は色気を失っては駄目である」と発言。1961年没、85歳。挿絵、口絵、版画

生島三郎左 (いしま・さぶろうざ/生没年不詳)

生島藤七の兄。肥前長崎の人。わかもとき薩摩にいき、その地にすむ西洋人に南蛮画の技法をならう。螺鈿(らでん)をよくした弟とともに世に知られた。寛永(1624-44)のころ没したといわれる。江戸前期の絵師、洋風画派

生嶋順理 (いしま・じゅんり/1961年～)

熊本県生れ。東京造形大学美術学科卒。東京藝術大学大学院修士課程修了。1987、89、96年現代日本美術展。86、88年クラコウ国際版画ビエンナーレ展。90年インターグラフィック。90、91年クラコウ国際版画トリエンナーレ。91、93年マーストリヒト国際版画ビエンナーレ。94、97年国際版画トリエンナーレ(マケドニア)。東京造形大学教授。画家、版画、美教

生田花朝女 (いくた・かちょうじょ/1889～1978年)

大阪生れ。北野恒富、菅桶彦といった大阪画壇のトップに師事して日本画を学ぶ。恒富の画塾白耀社に属して、同社展や帝展、新文展、戦後からは日展にて活躍。初は菅桶彦の画風を継承。白耀社に属し、美人画や地元大阪の天神祭を題材にした作品も手掛けるようになる。また俳句作品も多数残している。1978年没、89歳。日本画

井口華秋 (いぐち・かしゅう/1880～1930年)

京都生れ。竹内栖鳳(せいぼう)にまなぶ。日本絵画協会絵画共進会、内国勸業博覧会、文展で受賞。1919年帝展開設に対抗して京都で池田桂仙らと日本自由画壇を結成。1930年没、51歳。作品に「信楽の郷一朝・夕」など。1930年没、50歳。日本画

井口雄介 (いぐち・ゆうすけ/1985年～)

カナダ生れ。2008年武蔵野美術大学造形学部建築学科卒。10年同大学大学院美術専攻彫刻コース修了。13年同大学大学院造形研究科博士後期課程修了。09年岡本太郎現代芸術賞(TARO賞)展で入選(川崎市岡本太郎美術館、神奈川県川崎市)。16年グランシップアートコンペ2016 グランシップ賞(静岡県)。彫刻

池内荷芳 (いけうち・かまほう/1903～1967年)

香川県に生まれる。1940年の紀元 2600 年奉祝展や新文展、日展などに出品。千葉県展の第1回展から出品し、第2回展では知事賞、第9回展審査員を務めた。1967年没、64歳。**漆芸**

池内 康 (いけうち・こう/1944年～1994年)

東京生れ。1972年より東京芸術大学壁画家ステンドグラス非常勤講師を務める。日本のステンドグラス作家の草分け的存在として活躍し、日本全国に数多くのステンドグラスを設置した。横浜国際会議場の大ステンドグラス(原画:平山郁夫氏による)のガラス造形を担当。1994年没、50歳。**ステンドグラス、美教**

池内美絵 (いけうち・よしえ/1973年～)

愛知県生れ。京都、大阪、神戸と居を変える。生きる事の本質を観察、研究、表現するアーティスト。約600匹のヤスデの飼育、博物館を楽しむための活動「MUSUME」、「KOBE 喫茶探偵団」などと並行して、飲み込んで排泄後、組み立てた人形「アリス(2008)」、精液の染み込んだティッシュで制作した「リース(2009)」、自身の尿で育てた「サフラン(2005)」。一見「かわいい」と思わせておいて、素材や背景を知ってしまった鑑賞者の脳裏からは消去しがたい“怪作”を制作。**現代美術、立体**

池内茂吉 (いけうち・もきち/1931～2012年)

秋田市生れ。1956年秋田大学学芸学部卒、中学校教諭となる。57年に自由美術展に入選以来、同展に出品を続け、67年佳作賞、会員。64年自由美術秋田を、71年に東北自由美術を結成して、リーダー的存在として活躍。82年自由美術展で「斜光」が平和賞。84年度県芸術文化章、89年度県芸術選奨受賞。2012年没、81歳。**洋画、美教、美普**

池上 奨 (いけがみ・すすむ/1957年～)

金沢市生れ。1984年金沢美術工芸大学大学院修了。主に個展やコンクールを中心に活動する。89年六甲アイランド CITY 彫刻展佳作賞。92年 KAJIMA 彫刻コンクール奨励賞。96年エストニア国際シンポジウム参加。無所属。**彫刻**

池上文僊 (いけがみ・ぶんせん/1887～1921年)

東京生れ。師野村文挙。四條派を学ぶとともに諸家の画風を研鑽、仏画、禅画を得意とする。達磨百図を描き禅画堂の号をおくられる。1921年没、33歳。**日本画**

池 玉瀾 (いけ・ぎょらん/1728～1782年)

京都生れ。池大雅の妻。初め柳沢其園に、後に大雅に南画を学ぶ。山水扇面を得意とし、大雅に似る画風ながら、女性らしい明澄な色彩と流麗な運筆に特徴がある。1782年没、54歳。**江戸中期の絵師、南画**

池沢青峰 (いけざわ・せいほう/1899～1960年)

大阪生れ。蔦谷龍岬に師事。日本画会無鑑査。1922年帝展で入選(以後帝展8回、改組帝展1回、新文展3回入選。42年再興院展に「練武」を出品。東京で没、61歳。**日本画**

池田 昭 (いけだ・あきら/生没年不詳)

イケダギャラリー 東京は1972年「Gallery VALEUR」として開業。その後、画廊名を「AKIRA IKEDA GALLERY」へ改名し、現在は「イケダギャラリー 東京(IKEDA GALLERY)」。アメリカ、ヨーロッパ、日本の現代美術作品を取り扱うアートディーラー。**ギャラリスト**

池田雲樵 (いけだ・うんしょう/1825～1886年)

三重県生れ。中西耕石、前田暢堂にまなび、伊勢津藩の絵師をつとめる。1880年京都府画学校の文人画教授となった。1886年没、62歳。**幕末-明治の日本画家、文人、美教**

池田栄廣 (いけだ・えいこう/1901～1992年)

広島県生れ。大分の牧皎堂や古庄九汀の指導をうける。京都に出て堂本印象、のち安田靫彦に師事。1927年帝展に入選。46年日展で特選。47年より院展に出品をはじめ、のちに日本美術院特待。47年院展で奨励賞白寿賞。51年院展、54年院展で奨励賞、白寿賞。1992年没、91歳。**日本画**

池田寒山 (いけだ・かんざん/1878～没年不詳)

東京生れ。寺崎広業に学ぶ。浪花青年画会互評員。大阪に住した。**日本画**

池田桂仙 (いけだ・けいせん/1931～2000年)

三重県生れ。南画家の池田雲樵の子。父に指導を受け、1874年父とともに京都に移住。京都府画学校に入学。17年文展で特選。26年第1回聖徳太子奉賛美術展に「夏溪煙雨」「寒山行旅」を発表。日本自由画壇、日本南画院の重鎮。2000年没、69歳。南画、版画

池田虹影 (いけだ・こうえい/1892～1956年)

岐阜県生れ。京都に出、竹内栖鳳に師事。1936年池田桂仙の姪星子と結婚。桂仙の未亡人たたくが没し、その遺志で池田家を嗣ぐ。1956年没、63歳。日本画

池田恒象 (いけだ・こうしょう/1915～1983年)

愛知県生れ。師堂本印象・三輪晁勢。文展、日展で入選を重ねる。日展会友。京都で没、67歳。日本画

池田幸太郎 (いけだ・こうたろう/1895～1976年)

佐賀県生れ。川端画学校に学び、東京美術学校日本画科卒。師結城素明。東京の風景を描き続ける。日本画府の理事。1976年没、81歳。日本画

池田孤村 (いけだ・こそん/1801～1866年)

新潟県生れ。1801年生れ。江戸で酒井抱一に光琳様式をまなぶ。また中国の明画(みんな)が様式も導入した。作品に「檜図(ひのきず)屏風(びょうぶ)」。編著に「光琳新撰百図」「池田孤村画帖」など。1866年没、65歳。江戸後期の絵師

池田三郎 (いけだ・さぶろう/1927～2005年)

金沢市生れ。49年石川県師範学校卒業。在学中に山口操助、宮本三郎に師事。54年二紀展同人賞。54年現代美術展県知事賞。69年同人。71年会員。77年二紀会委員。79年県立七尾養護学校初代校長に赴任し、勤務多忙により制作から離れ、80年二紀会を退会。2005年没、78歳。洋画

池田瑞月・翠雲 (いけだ・ずいげつ/1877～1944年)

金沢市生れ。1905年京都に出て木島桜谷に師事。07年頃に「翠雲」と号して金沢で画塾

を開いた。この頃から草木写生画を描きはじめた。11年金沢で武村常之助、木村杏園らと青々会を結成。14年十二双会を設立。24年金城画壇設立に参加。26年金城画壇展で監査員、北陸絵画協会30周年記念表彰。32年京都に戻り、同年木版画集『瑞月草花画譜』を刊行。32年実業家の加賀正太郎と出会い『蘭花譜』の原画制作にこりかかると。35年『草木写生画卷』全12巻完成。42年『蘭花譜』の原画完成。43年『草木写生画卷』続編2巻完成。1944年没、67歳。日本画、植物画、版画、画塾

池田泰真 (いけだ・たいしん/1825～1903年)

愛知県生れ。11歳で江戸の著名な蒔絵師・柴田是真に入門、25年間工房で働きながら蒔絵および絵画を習得する。その後、独立して一家をなし、数多くの門下生を養成したので、それらは世間から薬研堀派と称せられた。作風は師是真の影響を受けて、蒔絵額面、漆絵といった是真と同種の作品を制作しているが、いったい手軽な小品に佳作がみられ、江戸風を小気味よく味わわせるが、個性的ではなく、温厚な作品が多い。1896年帝室技芸員となる。1903年没、78歳。蒔絵師、漆絵

池田章将 (いけだ・てるまさ/1987年～)

千葉県生れ。金沢美術工芸大学工芸科漆・木工コース卒、同大学大学院修士課程修了。金沢で工房を構える。2023年金沢21世紀美術館で個展。2023年岐阜県現代陶芸美術館、長野県立美術館、三井記念美術館で「超絶技巧未来へ展」17名に選抜。漆木工

池谷雅之 (いけたに・まさゆき/1954年～)

静岡県生れ。愛知県立芸術大学美術学部で彫刻を学ぶ。静岡県舞台芸術センター(SPAC)や浜名湖館山寺美術博物館の勤務などを経て、現在は骨董市場で骨董品の修復と市場運営の手伝い。2019年に浜松市にある怪奇骨董秘宝館「鴨江ヴァンダーカンマー」を訪問した際に、館長の西川昌宏さんと意気投合。現在では、60点ほどが館内外に常設展示。17年浜松を中心に活動するアーティストで構成する「浜松 Open Art」の代表職も務めている。彫刻、修復、美普

池田 学 (いけだ・まなぶ/1973年～)

佐賀県生れ。1998年東京藝術大学美術学部デザイン学科卒、2000年同大学院修士課

程修了。日本、カナダ、アメリカなどを拠点に、丸ペンとカラーインクによって様々なサイズの綿密画を描いた。アメリカ・ウィスコンシン州マディソンで約3年間にわたり滞在制作を行った縦3×横4メートルの大作《誕生》(2013-16)。主な個展に「池田学展 The Pen—凝縮の宇宙—」(佐賀県立美術館など、2017)。**ペン、カラーインク、洋画**

池田光宏 (いけだ・みつひろ/1978年～)

1978年生れ。1994年日本大学芸術学部美術学科卒。97年東京芸術大学大学院美術研究科修了。窓をスクリーンとして人影の映像を映し出す作品「by the Window」が知られている。この方法で、2001年から、住宅、商店、オフィス、公共施設などで作品を発表。「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ」(新潟、2003年/2006年)、また、「AOBA+ART」(横浜、2008年)などの企画にも積極的に参加。08年文化庁芸術家在外研究員としてスウェーデンに滞在(2年間)。14年長岡造形大学准教授。**映像、洋画、インスタ、美教**

池田宗弘 (いけだ・むねひろ/1939年～)

東京生れ。1963年武蔵野美術学校彫刻科卒。自由美術展初出品、以後毎年出品を続ける。66年自由美術協会会員。70年自由美術展平和賞。77年彫刻の森美術館大賞展でS氏賞。83年文化庁在外芸術家研究員として一年間スペインに滞在。86年中原悌二郎賞優秀賞。87年現代日本彫刻展で宇部市野外彫刻美術館賞。88年神戸須磨離宮公園現代彫刻展でフェスピック神戸大会記念賞。ドン・キホーテシリーズを制作。**彫刻、版画**

池田遙村・遙村、遙、遙山人 (いけだ・ようそん/1895～1988年)

岡山県生れ。1910年大阪に出て、初めは天彩画塾で洋画を学ぶ。14年文展で水彩画が入選。後日本画に関心をもち、竹内栖鳳に師事。21年京都市立絵画専門学校に入学。28、30年帝展で特選。30～40歳代に全国を写生してまわり、53年画塾青塔社を設立。洋画風の写実表現から大和絵風表現に移り、戦後は文人的な独自の画風を完成した。76年日本芸術院会員、87年文化勲章。1988年没、93歳。**日本画、洋画、水彩、パステル、画塾**

池田良則 (いけだ・よしのり/1951年～)

京都市生れ。73年金沢美術工芸大学油画科中退。77年改組日展初入選。以後連続入

選。高光一也に師事。79年個展開催、以後個展・グループ展多数開催。84年改組日展特選。95年白日会会員。97年改組日展で特選。99、2000年文化庁派遣芸術家在外研修員としてメキシコ、グアナフアット大学留学、客員教授を兼ねる。02年日展会員。**洋画**

50

池田洛中 (いけだ・らくちゅう/1903～1982年)

京都市生れ。1919年加藤英舟に入門、京都市立絵画専門学校別科卒、研究科修了。33年堂本印象の画塾東丘社入塾。16年退塾し、川端龍子主宰の青龍社に参加。1982年没、78歳。**日本画**

池田龍甫 (いけだ・りゅうほ/1885～1974年)

盛岡市生れ。盛岡にいたるところに川口月村の弟子の吉田雪村に手ほどきを受けた。上京後は秋田の画人寺崎広業の主宰する天籟画塾に入り師事。1915年苦学の上東京美術学校卒。14年文展に入選、“在学中の入選は池田が初めて”と一躍着目を浴びた。以後文展や帝展に出品を重ね、通算で10回の入選。48年開校した県立美術工芸学校の設立に尽力した。開校後は同校の教授、のち岩手大学特設美術科講師として長く郷土の後進の育成。1974年没、89歳。**日本画、美教**

池長 孟 (いけなが・はじめ/1888～1955年)

神戸市生れ。池長通の養子。1917年京都帝国大学法科卒。牧野富太郎を援助し、会下山に植物研究所を開設。私立育英商業学校の校長を務め、神戸を世界的な文化都市にしようという意図で、莫大な私財を投じて、南蛮美術を体系的に収集。(南蛮美術とは、日本人の作品で、欧米や中国と関係の深い、異国趣味の美術品の事を言う)「欧米の影響が刻まれ、日本が広い世界の舞台に乗り出した象徴。宗教、風俗、地理、医学などとも関係があり、たんなる美術品に留まらず、日本近世文化史の主要な部分である」……「南蛮美術総目録」による池長孟の世界的美術品収集への情熱は、7000点以上の一流美術品、38年「私立池長美術館」を開設、1940年～44年一般公開。戦後、池長氏より神戸市が美術品ごと館を譲り受け、1951年「神戸市立美術館」として開館。65年「市立南蛮美術館」と改称。82年「神戸市立博物館」内に「南蛮美術館」を設け美術品を全部移転。1955年没、67歳。**コレクター、神戸市立博物館内の南蛮美術館**

池野 巖 (いけの・いわお/1926～1990年)

長崎市生れ。1943年、長崎市長崎商業学校卒。52～54年「1人会展」を結成。53年上京。53～57年矢上中学校で教鞭。57年絵画教室を開く。64年、「長崎平和美術展」を主唱し、以降12回展まで同展を開催。65～74年長崎造船大学附属高等学校で非常勤講師。67年「蒼炎」を結成。79年「ながさき平和8・9展」を提唱。70年代以降は著作など、書籍の表紙絵、挿絵を手がけた。85年長崎市に設置された佐多稲子の文学碑をデザイン。1990年没、64歳。洋画、水彩、美教、表紙絵、挿絵

池野観了 (いけの・かんりょう/1753～1830年)

石川県生れ。恩敬寺第十世住職・藤原覚円の子。京都の高倉学寮で学び寮司の学位を受けた。そのかたわら南画家の池大雅に師事し画技を学び、大雅没後も大雅様式を追究し「能登の大雅堂」と称された。1830年没、78歳。南画、画僧

池 玉瀾 (いけの・ぎょくらん/1727～1784年)

京都生れ。祖母は歌集『梶の葉』で知られる歌人梶、母も同じく歌人の百合。代々、才色兼備の家系で、祖母以来、祇園社門前の茶店を営んだと伝えられる。池大雅の妻となり、真葛ヶ原に居をかまえた。はじめ柳沢淇園、のち大雅に南画を学び、当時一流の女流画家として知られた。1784年没、57歳。江戸中期の南画家

伊坂義夫 (いさか・よしお/1950年～)

東京生れ。1969年本郷高校デザイン科卒。70年より作品発表。72年日の丸シリーズを制作。国内外で個展やグループ展を開催し、国際版画展などに出品。81年「リエカ国際ドローイングビエンナーレ・ベオグラード現代美術館買上賞」、86年「日本イラストレーション展特別賞」。コラージュで人気を得、ヨシダ・ヨシエ、岡本信治郎などとの共作発表や、光学機器の制作、音楽活動など幅広い活動を展開している。洋画、イラスト、版画

砂盃富男 (いさはい・とみお/1930～2001年)

前橋市生れ。銀行勤務の傍ら美術活動を行い、60年代には群馬の前衛美術グループの一員として活動。作品蒐集は、版画を中心とした400点を越えるコレクションに結実。銀行を退職後、1992年～2001年自宅を改装して始めた「イサハイ・ベル・イメージ美術館」では、

氏の逝去により閉館するまで、自身のコレクションを精力的に展示、公開。2006年群馬県立美術館主催で県庁昭和庁舎特別展示室と、高崎市美術館の2会場でのコレクション展を開催。コレクター、洋画、デカルコマニー、美術館

諫山麗吉 (いさやま・れいきち/1851～1906年)

大分県生れ。1875年上京して国沢新九郎の洋画塾・彰技堂に入門。1877年回内国勸業博覧会に出品、褒状。80年頃清国に渡り、数年上海に滞留したのちロンドンを経て、92年頃パリに至る。パリでは肖像画を描いたり、花鳥図などの日本画を手がけ。1900年渡仏した浅井忠とパリで再会。パリで没、55歳。洋画、日本画

井沢宏子 (いざわ・ひろこ/生没年不詳)

1962年パシリアル展に「呪詛」を出品(国立京都近代美術館所蔵)、67年「次元'67展」京都市美術館に出品。洋画、水彩、クレヨン、パシリアル

石井金陵 (いしい・きんりょう/1842～1926年)

岡山県生れ。はじめ古市金峨に画を学び、ついで市川東壑、岡本秋暉に師事。全国を遊歴して画技をみがいた。岡山市岩田町に画房を設けて多くの門下生を教えた。1903年大阪に戻り、天王寺北山町・小宮町に画房「桃谷山荘」を構えた。姫島竹外、森琴石とともに大阪南画壇の三長老と呼ばれた。1928年没、85歳。日本画、南画

石井茂雄 (いしい・しげお/1939～2005年)

東京生れ。1945年頃阿佐ヶ谷美術研究所の三輪孝に師事。50年文化学院美術科卒。国画会の画家大森啓助に師事。54年まで国画会展に出品。54年読売アンデパンダン展出品。55年個展(養清堂画廊)、また「制作者懇談会」に参加(飯田善國、池田龍雄、河原温ら)、同会員展に出品。58年菅野陽に銅版画を学ぶ。60年日本版画協会展で協会賞、会友。2005年没、66歳。洋画、版画

石井新三郎 (いしい・しんざぶろう/1915～1996年)

1915年生れ。帝国美術学校の学生により結成された「絵画」というグループの一員。ダリ風のシュルレアリスムによる「絵画的ポエジイ」を表現。「夏の午后」(1938年)作品は板橋区立美

術館所蔵。シュルレアリスム絵画。1996年没、81歳。洋画

石井双石 (いしい・そうせき/1873～1971年)

千葉県生れ。1905年5代浜村蔵六に入門。10年長思印会を主宰し、「雕虫(ちようちゆう)」を発行。31年東方書道会の創立に参加した。作品に明治神宮朱印、東京大学印など。1971年没、98歳。著作に「篆刻指南」など。篆刻

石井素堂 (いしい・そどう/1873～1920年)

高知市生れ。13歳の時に柳本洞素の門に入り狩野派を学び、のちに大阪に出て博物館陳列画を臨写して2年間自修した。鯉魚を専門に描いた。いったん帰郷し、1894年東京に出て川端玉章について学んだ。1901年には京都に行き今尾景年の門に入った。1920年没、48歳。日本画

石井武夫 (いしい・たけお/1940年～)

千葉県生れ。1963年東京教育大学教育学部専攻科修了。68年独立展に入選(81年会員)。74年個展開催(ギャラリー21、東京)。77年安井賞展で佳作賞。79年「第1回・明日への具象展」に招待出品。81年筑波大学芸術学系助教授(92年教授、同02年学群長、同2004年退官)。洋画、美教

石井 健 (いしい・たけし/1935年～)

台北市生れ。1960年九州プロック連合大学文化祭彫塑部金賞。61年長崎県展彫塑工芸部受賞。62年佐賀大学教育学部卒。佐賀県展日本画部受賞。64年長崎県展日本画部受賞。(約10年間活動を中断)。76年長崎県展知事賞。80年院展に「端島」入選。研究会員。日本美術院院友。工芸(彫塑)、日本画

石井鼎湖 (いしい・ていこ/1848～1897年)

江戸生まれ。鈴木鷺湖の次男。1859年仙台藩士の造船家三浦乾也の養子となり、63年石井家を継ぐ。父に絵を学び、幕末にフランス語も学ぶ。70大蔵省に出仕、公債証書や紙幣の下図図案を描く。一方、同10年中丸精十郎に洋画も学び、89年明治美術会創立に参加。97年日本南画会の結成にも参加。日本画、洋画幅広い活動を行った。長男は洋画家石

井柏亭、次男は彫刻家石井鶴三。1897年没、49歳。日本画、洋画、紙幣図案

石井 亨 (いしい・とおる/1981年～)

静岡県生れ。2014年東京藝術大学大学院美術研究科美術専攻博士後期課程修了。博士審査展野村賞(2013)受賞。2015年度文化庁新進芸術研修員2年、ビジティングリサーチャーとしてロンドンのVictoria and Albert Museumで研修。主な展示は、大和日英基金ジャン・ハウスギャラリー(ロンドン)、東京オペラシティアートギャラリー、富山県美術館、ホノルル美術館(ハワイ)、又、東京藝術大学大学美術館、Morikami Museum(マイアミ)、Victoria and Albert Museum(ロンドン)に作品が収蔵。洋画

石井幹子 (いしい・もとこ/1938年～)

東京生れ。お茶の水女子大学附属に通い、1962年東京芸術大学美術学部図案計画科卒。デザイン会社で照明器具のデザインに携わり、65～67年フィンランドとドイツの照明設計事務所に助手として勤務。帰国後68年石井幹子デザイン事務所を設立し、70年大阪万博、75年沖縄国際海洋博覧会の照明デザインを手がける。中東をはじめ海外での仕事をこなし実績を作った。日本に「ライトアップ」という文化を根付かせたパイオニア的存在。東京タワーやレインボーブリッジの照明を手がけるなど、日本の都市夜景に変革をもたらした。照明デザイナー

石内 都 (いしうち・みやこ/1947年～)

群馬県生れ。多摩美術大学デザイン科入学。大学2年より染織専攻するが中退。1994年グッゲンハイム美術館での「戦後日本の前衛美術」展に招待。ヴェネツィア・ビエンナーレの2005年日本代表。15年The J. Paul Getty Museumにて個展。17、18年横浜美術館にて個展。79年写真集「APARTMENT」および写真展「アパート」にて木村伊兵衛賞。99年東川賞国内作家賞、写真の会賞。2006年日本写真協会賞作家賞。09年毎日芸術賞。11年神奈川文化賞。13年紫綬褒章。14年日本人としては濱谷浩、杉本博司に次いで3人目のハッセルブラッド国際写真賞。22年朝日賞。写真

石王兵衛 (いしおうびょうえ/生没年不詳)

越前(えちぜん)(福井県)出身。応永(1394-1428)ごろの能面作家「六作」のひとり。尉(じょう)面

(老翁面)の一種である石王尉、朝倉尉を創作したという。別名に福来正友(ふくらい まさと)も、石翁。室町時代の能面師

石踊達哉 (いしおどり・たつや/1945年～)

満州生れ。東京芸術大学に学ぶ。在学中から新制作協会などに出品。1975年春季創画展に出品(76年春季展賞)。創画会、山種美術館賞展に出品。80年東京セントラル美術館日本画大賞展に招待出品。90年「両洋の眼 現代の絵画展」に出品。98年瀬戸内寂聴と「源氏物語絵詞」(講談社)を出版。2006年「両洋の眼 心に残る美術展」に出品。80年代からは個展を中心に活躍し、氏独自の前衛画風の魅力を展開。日本画

石上純也 (いしがみ・じゅんや/1974年～)

神奈川県生れ。2000年東京藝術大学大学院美術研究科建築専攻修士課程修了。04年「Junya.ishigami + associates」を設立。07年には東京都現代美術館の吹き抜け空間にて、14×13×7メートル、総重量1トンの立方体にヘリウムガスを入れて浮遊させた《四角いふうせん》を発表。18年には、パリの現代美術館・カルティエ現代美術財団で、初の大規模個展「石上純也—FREEING ARCHITECTURE」が開催。2010年ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展では《Architecture as air: Study for château la coste》で金獅子賞。現代美術、建築

石川寒巖 (いしかわ・かんがん/1890～1936年)

栃木県生れ。大田原中学卒業後、秋上京し、佐竹永邨に師事。1909年春病気の為帰省し、10年秋再度上京、小室翠雲の門下となり、25年日本画会展「麓」1等賞。25年日本南画院の同人。小杉放庵、小堀鞆音、荒井寛方と交友。25年、30～34年日本南画院に出品。1936年没、47歳。日本画(南画)

石川九楊 (いしかわ・きゅうよう/1945～)

福井県生れ。5歳で木村蒼岳塾に学ぶ。8歳で杉本長雲に入門。中学で垣内楊石に師事。福井県立藤島高等学校では、選択科目で書道を第一志望とした。1967京都大学法学部卒。師の垣内楊石から九頭竜川にちなんで「九楊」の名を授かる。67年同大学を卒業、三洋化成工業株式会社に入社(広報宣伝係)。78年会社を退職して書家として独立。79年京都市に「石川九楊研究室」を設立。85年美耶子は東京神田神保町に画廊を設立、生活の支

えとなる。京都精華大学客員教授。同大学表現研究機構文字文明研究所所長。書、美教

石川 響 (いしかわ・きょう/1921～2000年)

千葉県生れ。1942年東京美術学校区画師範科卒。岩手県立黒沢尻中学校にて教鞭。47年日展出品。50年退職し画業に専念。54年加藤栄三に師事。66年新日展特選・白寿賞、73年改組日展特選。76年日展審査員を務め、77年日展会員、90年から日展評議員。98年改組日展で内閣総理大臣賞。84年以降ボロボールドルマカメントなど海外で取材し、仏教をテーマとした作品を発表。2000年没、79歳。日本画

石川景雲 (いしかわ・けいうん/1882～1947年)

出雲市生れ。幼少から画技を好み、五月幟の武者絵等を描き、11、12歳の頃福庭玉溪に師事して一技庵、玉聲と号した。1902年21歳のとき京都に出て、今尾景年・梅村景山に師事四條派を修得する。04年頃帰郷し、郷里において画に専念した。1947年没、66歳。日本画

石川 賢 (いしかわ・けん/1938年～)

大分県生れ。1961年大分大学学芸学部卒。在学中の59年大分県美術展に入選。高文連美術部長、高教研事務局局長等を務め、県下における美術教育に尽力。画家工藤和男の勧めで、89年創元会展に入選。以後、同展を主舞台に本格的な作家活動を展開。93年創元会会員。洋画、美教

石川賢治 (いしかわ けんじ/1945年～)

福岡市生れ。1967年日本大学芸術学部写真学科卒。ライトパブリシティ入社。76年よりフリーランス・フォトグラファーとして活動、CF・スチールを数多く手掛ける。84年月光写真に取り組み、初の写真集『月光浴』(90年小学館)が一大センセーション。写真集に『神の降りた夜／新月光浴』(93年集英社)、『大月光浴』(96年小学館)、『月光の屋久島』(2000年新潮社)、最新刊は『月夜の晩に』(23年小学館)。DVD『月光浴 Moonlight Shower』(06年カルチュア・パブリッシャーズ)。展覧会も全国で多数開催。新たな月光写真の創作に挑む。写真

石川晃山 (いしかわ・こうざん/1821～1870年)

栃木県生れ。江戸で谷文晁にまなぶ。九州で鉄翁祖門らと親交をもち、のち備中倉敷にすむ。宋・元(中国)の画法を尊重した。1870年没、49歳。江戸後期の絵師

石川光明 (いしかわ・こうめい/みつあき/1852～1913年)

東京生れ。宮彫師の家に生まれる。1862年から絵画を狩野寿信に、86年からは牙彫を根付師・菊川正光に学ぶ。78年旭玉山と共に後の東京彫工会となる彫刻の研究会を始める。81年内国勸業博覧会で妙技二等賞。82年高村光雲と出会い親交を深めた。90年帝室技芸員、東京美術学校教授、文部省の美術展覧会審査員。東京彫工会で近代彫刻の発展に尽力した。93年シカゴ万国博覧会で優等賞。95年1内国勸業博覧会で妙技二等賞。1900年パリ万国博覧会で金賞。07年東京勸業博覧会と10年日英博覧会で一等賞と名誉金賞。「古代鷹狩置物」は代表作であり旭玉山の「官女置物」と並んで明治牙彫の屈指の傑作と評されている。1913年没、61歳。彫刻、木彫、宮彫師、牙彫

石川 舜 (いしかわ・しゅん/1936年～)

仙台市生れ。1953年国画会美術研究所に入り川口軌外に学ぶ。その後鳥海青児に師事。59年仙台に帰り、仙台アンデパンダンなど前衛展に参加、実験的な絵画やパフォーマンス作品を発表してきた。近年は大画面の油彩に取り組んでいる。洋画、パフォーマンス

石川真五郎 (いしかわ・しんごろう/1893～1972年)

徳島県生れ。1910年徳島中学校中退、黒田清輝、岡田三郎助に洋画を学んだ。24年二科展に出品、37年一水会展出品。43年一水会会員。40一水会の出品者十数名と「日本油絵会」を創立。戦後は、48年徳島県に帰郷し、以後徳島の風景を描き続けた。1972年自死、79歳。洋画

石川碩峰 (いしかわ・せきほう/生没年不詳)

江戸生れ。1824年序文をもつ種樹家(うえきや)金太編の本草書「草木奇品家雅見(かがみ)」に大岡雲峰らと写生図をえがく。江戸後期の絵師

石川大浪 (いしかわ・たいろう/1765～1817年)

旗本で大御番組頭を勤める。絵は狩野派から始めた。蘭学者としても知られた。舶来洋書の挿絵や銅版画を写し西洋画法を研究。オランダ人画家ウィレム・ファン・ロイエンの油彩の静物画を弟孟高と共に模写した。1796年の大槻玄沢の賛がある。墨画か淡彩画による洋風画で、「西洋婦人図」「天地創造図」など。1817年没、52歳。江戸後期の洋風絵師、墨画、版画

石川豊信 (いしかわ・とよのぶ/1711～1785年)

1711年生れ。西村重長門人と伝えられ、幅広柱絵判の美人画、女性の肌を垣間見させる「あぶな絵」の作例が知られ、その丸顔で温雅な美人様式は、次代の鈴木春信らに影響を与えた。子に狂歌師・石川雅望(六樹園、宿屋飯盛)がいる。1785年没、74歳。江戸中期の絵師、紅摺絵、漆絵、墨摺絵

石川直樹 (いしかわ・なおき/1977年～)

東京生れ。22歳で北極から南極までを人力で踏破。23歳で七大陸最高峰の登頂に成功。各地に残る先史時代の壁画を訪ね歩いた写真集『NEW DIMENSION』(赤々舎、2007)、北極圏の大自然とそこに生きる人々と向き合った『POLAR』(トルモア、2007)で日本写真協会新人賞、講談社出版文化賞、『CORONA』(青土社、2010)で土門拳賞。シリーズ『Ama Dablan』(SLANT、2019)など写真集を発表。初の著書『最後の冒険家』(集英社、2008)が開高健ノンフィクション賞。16～19年にかけて個展「石川直樹この星の光の地図を写す」が水戸芸術館現代美術ギャラリー、東京オペラシティアートギャラリーほか6館を巡回。写真

石川幸元 (いしかわ・ゆきもと/生誕年不詳)

1751～81年頃に活躍。狩野派。浮世絵師の一筆斎文調のはじめの師として知られる。江戸中期の絵師

石川柳城 (いしかわ・りゅうじょう/1847～1927年)

名古屋市生れ。生地の名古屋で中野水竹、吉田稼雲につき、京都で文人画をまなぶ。詩や書もよくした。名古屋で後進の指導につくした。1927年没、81歳。日本画、版画

石黒宗磨 (いしぐろむねまろ/1893～1968年)

富山県生れ。大正中期より作陶を開始、1935年京都八瀬に築窯。中国宋磁の高い品格と深みのある天目釉の技法を現代に再現し、55年鉄釉陶器の人間国宝に認定。日本工芸会理事。1968年没、75歳。陶芸

石黒連洲 (いしぐろ・れんしゅう/1907～1978年)

富山県生れ。大谷大学に進学、画を志し東京日本美術学校へ入学。柳宗悦に出会い、民芸運動に参画する。富岡鉄斎の画風に傾倒し、自己の芸術を確立、個展を多く開いた。第十九世真覚寺住職。画僧、民芸

石子順三 (いしこ・じゅんぞう/1928～1977年)

東京生れ。東京大学経済学部卒、同大学院と文学部美学在籍。1956年静岡県清水市の物流会社である鈴与倉庫に入社。営業課に籍を置いたが、評論活動を始める。戦前の前衛、アングラ芸術、デザイン、漫画などを対象に評論活動を展開し、独自の見解を示す。漫画評論においては先駆的存在。60年画家の伊藤隆史・鈴木慶則らと評画誌『フェニックス』を創刊。64年鈴与倉庫の親会社総務部を退社し静岡に家族を残して単身上京。本格的に評論活動を始める。1977年没、49歳。美評、漫評、美評

石河光哉 (いしこ・みつや/1894～1979年)

長崎県生れ。島原藩士の子。内村鑑三の門下生であり、師より正規の学校教育を受けることを論され、東京美術学校油絵科に入り特待生。卒業制作は帝展入選。1921年東京美術学校卒業後、前田寛治と渡欧。フランス留学後、『西洋宗教名画集』を出版、39年中国滞在の日記的記録を『旅人・寄寓者』として発行。アムステルダムにある内村鑑三の肖像画や矢内原忠雄の肖像画は好評を博す。内村のデスマスクを作成した。戦後は日展に入選、のち無所属。1979年没、85歳。洋画

石河有鄰 (いしこ・ゆうりん/1870～1952年)

名古屋市生れ。織田杏齋に師事し、南北合派を修める。博覧会や絵画共進会で褒状、銀牌、金牌を数多く受賞。新古美術会常務理事、日本美術協会委員をつとめる。1952年没、82歳。日本画

石崎元徳 (いしざき・げんとく/1693～1770年)

長崎県生れ。小原慶山にまなぶ。元文元年唐絵目利(からえめきき)兼御用絵師。晩年に失明、門人荒木元融の子融思を養子とした。1770年没、78歳。江戸時代中期の絵師

石崎光瑤 (いしざき・こうよう/1884～1947年)

富山県生れ。琳派の山本光一に師事。1903年竹内栖鳳に師事。京都の新古美術品展出品、12年文展入選。14年褒章、18年特選。19年帝展で特選。35年帝国美術院会員。36年京都市立美術学校の教授、栖鳳没後は私塾石崎塾を開校して後進の指導。16年のインド外遊を皮切りに大正～昭和初期にかけて度々にインド、ヨーロッパを取材。1947年没、63歳。日本画、美教、画塾

石崎融思 (いしざき・ゆうし/1768～1846年)

長崎県生れ。父の師であった石崎元徳の嗣子元甫が早世したため、石崎家を継いで唐絵目利(からえめきき)。初め父に画事を習い、のち元徳に油絵を習う。南蘋派、北宗系漢画など当時の長崎における諸流を学んで、写実的な人物画、花鳥画、山水画などを描いた。長崎の三名家と呼ばれる木下逸雲、僧鉄翁、三浦梧門は門人。1846年没、78歳。江戸後期の長崎派絵師、日本画、油絵

石里洞秀 (いしざと・どうしゅう/生誕年不詳～1783年)

駿河台狩野派三代目の狩野元仙に師事する。元仙没後、師家に入り遺子を教育する。九州黒田藩の絵師として活躍。1783年没。江戸中期の絵師

石澤正男 (いしざわ・まさお/1903～1987年)

東京生れ。東京帝国大学卒業。東洋工芸史を専攻。メトロポリタン美術館東洋部助手を経て、1933年東京美術学校講師。戦後は東京国立博物館美術課長などをつとめ、65年文化財保護審議会専門委員。70年大和文華館館長。1987年没、84歳。美史、美術館長

石島良則 (いしじま・よしのり/1902～1939年)

石川県生れ。京都市立絵画専門学校卒業後、西山翠嶂に師事。1932年帝展に入選、爾後官展に「冬日」「高雄の女」「想ひ」等を出品、35年京都市美術展で「供饌」が入賞。1939

年没、37歳。日本画

石田九野 (いしだ・きゅうや/1807～1861年)

上野(こうずけ)(群馬県)桐生(きりゅう)の人。幼少から画をこのむ。西陣織を研究、桐生広帯の紋様を花鳥風月など華麗な意匠に一新した。1861年没、55歳。江戸後期の絵師、図案

石田旭山・石田才次郎 (いしだ・ぎよくざん/1847～1926年)

石田有年の弟、松田緑山(二代玄々堂)に勤め学んだ。1868年石田旭山印刷所創業。1934年写真の印刷に必要なガラススクリーン(細かい網点を作りだすガラス製の網スクリーン)の国産化に成功したことが、その後の大日本スクリーン(現株式会社 SCREEN ホールディングス)誕生のきっかけとなり、写真製版機器総合メーカーへの第一歩を踏み出しました。1926年没、79歳。銅版画、写真印刷、大日本スクリーンを生む

石田恵嗣 (いしだ・けいじ/1975年～)

千葉県生れ。一般企業に勤めたのち、2006年からイギリスに留学し、09年にチェルシー・カレッジ・オブ・アート・アンド・デザイン卒。13年にロイヤル・カレッジ・オブ・アートを修了。以降、ヨーロッパを中心に活動を続け、絵本や童話などから着想を得た絵画作品を発表。2021年に日本初個展「FLOW」(アートフロントギャラリー、東京)を開催。受賞歴に、Lucy Halford Bursary(2012)、The Brenda Landon Pye Portrait Prize - Winner(2007)など。洋画

石田尚志 (いしだ・たかし/1972年～)

東京都生れ。絵を描くという行為自体に着目し、抽象的な線を1コマずつ描き、撮影することを繰り返す「ドローイング・アニメーション」の手法を用いて、映像作品やインスタレーション作品、ライブ・ペインティングを発表。「イメージフォーラム・フェスティバル 1999」で特選。2007年五島記念文化賞美術新人賞。主な個展に「石田尚志 渦まく光 Billowing Light:ISHIDA Takashi」(横浜美術館、2015)、展覧会に「あいちトリエンナーレ 2016」、「シャルジャ・ビエンナーレ 13」(2017)など。現代美術、映像、ドローイング・アニメ、インスタ

石田千枝子 (いしだ・ちえこ/1944～2021年)

東京生れ。日本水彩画会1978～86年。会津総合美術展入賞8回(会津美術協会会長賞、

教育長賞、会津若松市長賞、喜多方市長賞)。76～82年福島県水彩展 特選、会員努力賞。76～95年福島県美術協会展入賞5回(特選飛田賞)。81～2014年 県展佳作3回。82～84年日本水彩画会奨励賞、不破氏賞。98年異なる風土の出会い展。会津総合美術展審査員、日本水彩画会審査員 所属 日本水彩画会会員、福島県美術協会幹事、福島県水彩画会委員、会津美術協会理事、喜多方美術協会理事。2021年没、77歳、水彩、版画

石田瑞夫 (いしだ・みずお/1959年～)

石川県生れ。金沢美術工芸大学彫刻専攻卒、1985年同大学院終了。在学中の81年二科展入選、84年二科展で特選。84年現代美術展(石川)で最高賞。石彫を中心に制作を行い、京都・金沢で個展を開催。石彫シンポジウムや各種コンクールで受賞。彫刻

石田康夫 (いしだ・やすお/1934～1991年)

金沢市生れ。1957年金沢美術工芸短期大学専攻科修了、矩幸成に師事する。56年日展に入選、以降連続して入選、71、72年特選。生命感あふれる女性像など具象彫刻に真価を発揮する。日展評議員、日彫会運営委員、金沢美術工芸大学教授。1991年没、57歳。彫刻、美教

石田幽汀 (いしだ ゆうてい/1721～1786年)

兵庫県生れ。京都の石田半右衛門の養子となる。狩野探幽の系譜を引く鶴沢探鯨に絵を学んで禁裏の御用絵師となり、1757年法橋、77年法眼。1786年没、65歳。江戸中期の鶴澤派(狩野派の一派)の絵師

(参考)鶴沢派の技法を基礎に、京狩野や琳派風の豊かな装飾性と写生的な描写を加えた、濃彩緻密な画風を展開した。家は石田遊汀(守善)が継いだ。だが早世し、門人だった栢半兵衛が養子入りして石田友汀(叔明)と改名し石田家を継いだ。しかし、歴史的に重要なのは円山応挙、田中訥言、原在中、江村春甫、金工家の一宮長常らの師という点である。江戸初期に流行した江戸狩野と、写生や装飾、大和絵復古といった多様な展開をみせる江戸中期以降の京都画壇の間をつなぐ絵師として注目される。

石田有年 (いしだ・ゆうねん/1845～1916年)

1845年生れ。京都名所図が残されている。明治時代の銅版画家。1916年没、72歳。

銅版画

飯田美郎 (いしだ・よしろう/1921～2017年)

茨城県生れ。1944年東京美術学校工芸科彫金部卒。海野清に師事。46年日展で入選。58年光風会会員。65年日展会員、現代工芸美術家協会評議員、同審査員。73年光風会評議員。76年個展開催(日本橋高島屋)、以後同所で個展開催。79、82年日本新工芸展審査員。80年光風会展で辻永記念賞。土浦市で没、95歳。工芸(彫金)

石塚隆則 (いしづか・たかのり/1970年～)

神奈川県生まれ。現実にはありながら見えない「モノ」や「コト」を動物キャラクターにして彫刻やドローイング、絵画などで表現する。主な展覧会に「飛天」(ROPPONGI HILLS A/D GALLERY、2018)、「ねむりと死」(nu petit GARAGE、2017)、「かきかわ茶エンナーレ(2017)」、「けものアパートメント」(ヨコハマアパートメント、2015)、「totem」(nca | nichido contemporary art、2014)がある。作品は東京都現代美術館、笠間日動美術館に収蔵。彫刻、ドローイング、洋画

石塚輝雄 (いしづか・てるお/1917～2012年)

茨城県生れ。1934年旧制水海道中学校卒。35年山本瑞雲に師事。50年茨城県美術展に木彫「子供」を出品、53年より毎回出品。53年日展で入選、以後毎回出品。56年日彫展に出品、日本彫刻会会員。64年新日展で特選。76年日展会友。2012年没、95歳。彫刻

石塚洋四郎 (いしづか・ようしろう/1928～1975年)

新潟県生れ。1945年旧制相川中学卒。46年端島炭坑勤務。51年山田正孝に師事。55年東光展入選。56年長崎県展初入選。73年県展洋画部審査員。1975年没、47歳。洋画

石橋宏一郎 (いしばし・こういちろう/1911～1993年)

青森県生れ。八戸中学校卒業後しばらく家業に携わるが、1940年上京、川端画学校に入学。43年松本竣介の勧めで二科展に出品入選。49年新人賞、50年特待賞。二科会青森支部の支部長。中学生を集めて写生大会を開催、店の二階に石友美術教室を開き、後進の指導。81年二科会評議員。77年八戸市文化功労賞、89年青森県文化賞。1993年没、8

2歳。洋画

石橋武治 (いしばし・たけはる/1890～1971年)

茨城県生れ。水海道中学を卒業後、白馬研究所で洋画を学び。1911年東京美術学校西洋画科に入学、3年で中退。12年光風会展に入選。33年の帝展に入選。光風会評議員、日展委嘱。49年千葉県美術会の創立に参加し、審査員、常任理事。1971年没、81歳。洋画

石原豪人・林月光 (いしはら・こうじん/1923～1998年)

島根県生れ。日本大学芸術学部中退。18歳で満州に渡り、映画看板などを描く。1955年頃挿絵画家の仕事始める。40年間にわたって精力的に描き続けた。光文社の江戸川乱歩シリーズの挿絵(『魔法人形』ほか数巻のみ)、立風書房のジャガーバックスシリーズを始めとする怪奇系児童書、小学館の「なぜなに学習百科」シリーズ、各社の学年誌・少年雑誌・少女雑誌の怪獣・怪人・幽霊・妖怪・怪奇現象などのイラスト。平成に入ってからサブカルチャー雑誌やトレンド雑誌、家庭用ゲーム誌の挿絵までカバー。林月光名義でゲイ雑誌やSM雑誌の濃厚な挿絵。紙芝居・映画看板・カストリ雑誌・学習雑誌・少年雑誌・少女雑誌・芸能雑誌・新聞小説・劇画・広告・アメリカンコミックに至る。さらにはシスコのキャプテンウルトラチョコレートのパッケージと包装紙まで手が付け、ファミ通にスーパーマリオブラザーズの絵を描いた。1998年没、75歳。挿絵、イラスト

石丸春牛 (いしまる・しゅんぎゅう/1793～1860年)

福岡県生れ。長崎に来遊していた南画家の浦上春琴に従い京都で行き師事。明清の南画を研究。のち博多上新川端に帰郷、画業に専念、北宋風の山水花鳥を得意とした。門人に子の石丸僊舟のほか、姫島竹外、高川少萍、萱島鶴栖。1860年没、68歳。日本画

石丸大象 (いしまる・たいぞう/1910～1944年)

福岡県生れ。1935年京都市絵画専門学校日本画卒。36年関西在住の院展系作家を中心とする団体白御会の創立に参加する。37年院展に入選。38年頃大阪市の小学校で図画教師。福岡、八代、大阪と移住し、35歳の若さで死去。遺作は極めて少ない。1944年没、35歳。日本画、美教

石本秋園 (いしもと・しゅうえん/生没年不詳)

出生地不詳、生没年不詳。阿波国出身の国学者である小杉楯帖と関係が深かったとみられ、画業には不明な点も多い。1895年美術育英会(会頭:蜂須賀侯爵)が主催した蜂須賀家新築洋館室内装飾凶案審査会で一等。第一高等学校に納められた歴史画(東京大学駒場博物館蔵)などがあるほか、東京国立博物館には古画の模写や、法隆寺伝来の古物を写した図が今に伝わる。また、日本における女性の服装の変遷を、古画からの引用により図示した『歴世風俗 女装沿革図考』(明治44(1911)年出版)では、各図を秋園が手掛け、楯帖が校閲を担当。**日本画、模写**

石本 正(いしもと・しょう/1920～2015年)

島根県生れ。1940年京都市立絵画専門学校に入学。復員後日展に入選。以後2年間連続入選。50年より活動の場を創造美術に求め、第3回創造美術展で入選。64年よりしばしばイタリアに行き、中世イタリアに取材。74年の創画会設立後は同会の中心的存在として毎年出品。71年日本芸術大賞、芸術選奨文部大臣賞、以後全ての賞を辞退。2001年ふるさとに石正美術館開館。新たな美術文化の全国発信の拠点として、画家自らが指導する絵画教室をはじめとする様々な催しが展開。2015年没、95歳。**日本画、個人美術館**

石橋一貫 (いしばし・いっかん?/1898～1966年)

青森県生れ。早くから蒔絵に興味を持ち上京して松田権六に入門、のちに寺崎広業に師事する。破壊型の作家で、酒におぼれ生活に困窮していたという。戦時中はメタリコンの技術をかかれ軍属として台湾に赴いた。1966年没、68歳。**蒔絵、日本画**

石橋玉僊 (いしばし・ぎょくせん/1883～1945年)

青森県生れ。1893年頃に上京し、円山派の巨匠・川端玉章に師事して絵を学ぶと共に、高橋玉淵らと親交。明治末期に帰郷すると10代目源三郎を襲名し、父の後を受けて茶道・華道の師匠となった。特に華道では遠州流・好修斎石橋一翰と称したが、このことが玉僊の画風に多大な影響を及ぼしたといわれる。山水画や花鳥画を得意とし、特に牡丹を好んで描いたことから、「牡丹の玉僊」と呼ばれ、大正年間に帝展に入選。明治後半期以降には三社大祭にも関わり、二十六日町や塩町など多くの町内の山車の凶案を描き、制作を指揮した。1945年没、62歳。**日本画、凶案**

石原 昂 (いしはら・たくみ/1910～1973年)

北九州市生れ。若松尋常高等小学校卒業してまもなく上京し、1929年日本美術院同人であった藤井浩佑に師事、彫刻を学ぶ。東京美術学校塑造部在学中の33年帝展に入選、以後官展を活躍の場とし、57年回日展で特選。53日本彫塑家クラブに入会して以降は日本彫塑展にも併せて出品を続け、日展には具象の裸婦像を、日本彫塑展には抽象作品を発表。1973年没、63歳。**彫塑**

石元泰博 (いしもと・やすひろ/1921～2012年)

米国、サンフランシスコ生れ。1939年高知県立農業高校卒。同年、単身渡米、太平洋戦争がはじまり、収容所生活。終戦後は、シカゴのインスティテュート・オブ・デザイン(通称、ニュー・バウハウス)で、写真技法のみならず、石元作品の基礎を成す造形感覚の訓練を積む。桂離宮のモダニズムを写真により見出した作品で高い評価。丹下健三、菊竹清訓、磯崎新、内藤廣など日本を代表する建築家の作品を多く撮影。2012年没、91歳。**写真**

石山かずひこ (いしやま・かずひこ/1948～2013年)

福島県生れ。東京芸術大学大学院美術研究科油画専攻 修了。個展(みゆき画廊、ギャラリー・アートもりもと、画廊みゆーず、喜多方市美術館、アートスペース泉)。オーロ遊び展(アートスペース泉)。色と心とカタチ展(会津若松市文化センター)。六つの方位展(清澄画廊、ギャラリー・アートもりもと) 栃木県芸術祭美術展 出品及び審査員(2003年、2009年)。2014年まで文星芸術大学教授。無所属。2013年没、65歳。**テンペラ、水彩、美教**

石山太柏 (いしやま・たいはく/1893～1961年)

山形県生れ。柏倉雪章の内弟子となり太柏の雅号を受ける。寺崎広業にも師事。院展、文展、帝展などで入選。茶人としてもよく知られ宗幽、楽閑斎の号を持つ。1961年没、68歳。**日本画**

石山富彦 (いしやま・とみひこ/1918～2011年)

福島県生れ。文化学院本科美術学部在学中に石井柏亭や有島生馬らの指導を受け、石井、有島らが洋画団体の一水会を形成すると、以後同会や県展などを舞台に作品を発

表。油彩画のほか水彩画も手がけ、会津地方の風景や風物を描きました。1975年にヨーロッパを旅してからは、彼地を主題にした作品も多くのこした。2011年没、93歳。洋画、水彩

井津建郎 (いづ・けんろう/1949年～)

大阪生れ。日本大学芸術学部に進学後、1971年渡米。ファッション・カメラマンの助手を3年間。独立、ニューヨークを拠点として作品制作と発表。ニューヨーク州に住居とスタジオを構える。79年以来約40年間にわたって「聖地」を14x20インチのカメラで撮影、プラチナプリントによる表現を続ける。93年にアンコール遺跡撮影のため初めてカンボジアを訪れる。以後インド、ラオス、ネパール、インドネシア、ブータン、中東などアジアの聖地の撮影を精力的に行う。写真

泉川白水 (いづみかわ・はくすい/1872～1965年)

秋田県生れ。早稲田大政治科中退、群会議員、郡参事員、町会議員。1925年年武者小路実篤らと煙雲俱樂部を結成。26年新南画を創立し高島屋で個展。総理大臣賞。県の国宝重要美術調査委員。横手市文化功労賞。県文化功労章。俳句・短歌・書画をよくした。1985年没、94歳。南画

泉谷淑夫 (いづみたに・よしお/1952年～)

神奈川県生れ。1970年横浜国立大学教育学部美術学科に入学。国領経郎教室で学び、75年卒業。75年平塚市立大住中学校美術科教諭。神奈川県展特選。77年大賞。この頃、シュルレアリスムと社会派リアリズムの表現を追求。一陽会に出品を続け、93年会員。94年安井賞展に入選。94年岡山大学教育学部講師。～2018年同校教授。ウィーン幻想派の影響を受け、ポップ、ワイエスに傾倒。羊をモチーフとした幻想的な写実絵画を描く。大阪芸術大学教授。洋画、美教

泉 守一 (いづみ・もりかず/生誕年不詳～1814年)

江戸生れ。堤等琳(とうりん)に、狩野探信(守道)にまなぶ。名の守の字は探信にゆずられたもの。町絵師の頭(かしら)として日光などの社寺彩色御用をつとめた。武者絵を得意とし、美人画もえがいた。1814年没。江戸後期の絵師

伊勢専一郎 (いせ・せんいちろう/1891～1948年)

長崎県生れ。1919年京都帝国大学文学部美学及美術史科卒。支那の画論画史を専攻。「有竹斎蔵清六大家画譜」「支那の絵画」「芸術の本質」「西洋美術史」「董?蔵書画譜」「爽籟館欣賞第一輯」「自顧愷之至荊浩支那山水画史(東方文化研究所研究報告)」著書があり、東方文化研究所研究員、大阪市美術館嘱託などを勤めた。京都で没、57歳。東方文化研究所研究員(支那画論画史)、美史、美研

伊勢谷圭 (いせたに・けい/1920～2014年)

大阪生れ。1940年精華美術学院卒。41～44年赤松洋画研究所に学ぶ。47年～50年大阪市立美術研究所修。47年関西女流総合美術展結成。51年吉原治良を中心に具体美術メンバーとなる。62年二科特選。71年二科金賞。2014年没、94歳。洋画、具体

伊勢門水 (いせ・もんすい/1859～1932年)

1895年生れ。6歳で4世早川幸八に入門。前田青邨画伯が「銭を出して買いたいと思うのは門水の画だ」と言った。1932年没、74歳。日本画

磯田又一郎 (いそだ・またいちろう/1907～1998年)

京都市生れ。1915年京都市立美術工芸学校絵画科、28年京都市立絵画専門学校卒。研究科に進級、修了する。菊池溪月に師事し、在学中の27年帝展に入選。以後帝展・改組帝展・新文展にほぼ毎回入選。49年日展で特選。56年宇田荻邨による白甲社の結成に参加。53～80年まで華頂女子大学教授。京都市で没、90歳。日本画、水彩、美教

磯部草丘 (いそべ・そうきゅう/1897～1967年)

群馬県生れ。前橋中学卒伯父(おじ)の大塚保治と新海(しんかい)竹太郎の紹介により川合玉堂に入門。1924年帝展に入選、34年帝展で特選。群馬美術協会展の創設などにつくした。1967年没、69歳。日本画

板倉星光 (いたくら・せいこう/1895～1964年)

京都生れ。京都市立絵画専門学校卒。1915年文展に入選し、文帝展を通じて11回入選。1929、30年に特選。31年日展で推薦、新文展となってからは無鑑査。戦後は菊地塾に

扱ひ日展に依嘱出品をしている。作品は人物を主とし、ことに美人画を得意とした。1964年没、69歳。日本画

板津 邦夫 (いたづ・くにお/1931～2023年)

北海道生れ。北海道札幌東高等学校、1956年東京芸術大学彫刻専攻科修了。東京芸術大学では石井鶴三に師事。59年北海道美術協会会員。61年北海道教育大学旭川分校(現・旭川校)着任。65年自由美術協会会員。65年自由美術展自由美術賞。木の特性を生かした、土俗的風合いを持った自由で斬新な木彫作品で知られる。北海道教育大学旭川校の彫刻ゼミの卒業生らでつくる彫刻グループ「青銅会」の設立者・指導者。2023年没、92歳。彫刻、美教

板谷慶舟・広当 (いたや・けいしゅう・ひろまさ/1729～1797年)

1729年生れ。住吉広守に師事し、1773年幕府御用絵師となり、慶舟のち桂舟を名のる。76年広守没後の住吉家をつぎ、のち長男広行に住吉家をつがせ板谷姓にもどる。以後、板谷家は幕府御用絵師として桂舟、桂意を隔代に号した。1979年没、69歳。江戸中期-後期の絵師

井田照一 (いだ・しょういち/1941～2006年)

京都生れ。1965年京都市立美術大学西洋画科修了。69年パリに留学。70年代後半から、東京を中心に多数の作品を発表。76年 東京国際版画ビエンナーレ展文部大臣賞。77年日本現代版画大賞展優秀賞。80年 クラコウ国際版画ビエンナーレ展ポーランド名誉賞。2004年紫綬褒章。「Surface is the Between—表面は間である」というコンセプトを掲げ、版画を中心に油彩、ペーパーワーク、陶、ブロンズなど様々なメディアへと作品を制作。2006年没、65歳。現代美術、版画、洋画、彫刻、彫塑

板倉新平 (いたくら・しんぺい/1934～2004年)

岐阜県生れ。羽島高等学校在学中より絵画の道を志した。29歳でフランス・パリへ渡り、およそ18年間の滞欧期間に発表した作品は国内外で高い評価。帰国後は神奈川県にアトリエを構え、ひたむきに制作。無所属、岐阜県立美術館所蔵。2004年没、70歳。洋画、水彩、版画

板谷桂意 (いたや・けいしゅう/1760～1814年)

板谷派の祖、板谷慶舟廣當の子にして板谷派二代目。画を父に学び、徳川幕府に仕える。のち薙髪して桂意と号した。1814年没、54歳。江戸後期の土佐派の絵師

板谷桂舟弘延 (いたや・けいしゅうひろのぶ/1820～1859年)

住吉廣守の門人で、板谷家の祖廣當の子孫板谷廣壽の子。画を廣隆にまなぶ。江1859年没、39歳。江戸後期の絵師

板谷桂舟廣當 (いたや・けいしゅうひろまさ/1729～1797年)

江戸のやまと絵画家、住吉広守の門人。後に板谷家を興し、主家住吉家に次いで幕府の御用絵師となった。主家の篤い信任を得、広守が晩年病身と高齢で家業を継続し難くなった折には一時、主家の扶持や屋敷を預り、師の没後は桂舟の長男、広行が住吉家を継いだ。1797年没、68歳。江戸中期の絵師、やまと絵

150

板谷波山 (いたや・はざん/1872～1963年)

茨城県生れ。東京美術学校彫刻科卒。金沢の石川県立工業学校で彫刻を教えた。のちに陶磁科を担当して陶芸の道に入る。1904年東京田端に築窯して自立、日本美術協会展などで受賞を重ね、27年帝展工芸部の創設に際して審査員に推される。29年帝国美術院会員。34年帝室技芸員を経て53年文化勲章(陶芸家初の受章)。作風は端正で格調があり、とくに薄彫の文様に色をさした彩磁や、その上に半透明な釉をほどこした葆光(ほうこう)彩磁には定評がある。1963年没、91歳。陶芸、美教

一圓達夫 (いちえん・たつお/1948年～)

愛知県生れ。71年関西学院大学文学部美学科卒。66～68年具体美術展に出品。73年関西国画会展新人賞、80年世界版画展佳作賞など受賞多数。国内で個展を開くかわら83年ビエツラ国際版画展(イタリア)、87年国際版画交流展(韓国)、90年ザイロン国際木版画展(スイス)、93年太田万国博国際グラフィックアート展(韓国)、99年現代版画・21人の方向(国立美術館)などに出演。通常の木版スケールの違う大らかな拡がりをもった画面を創造し、木版に新生面を開く。フリーの版画家として活躍中。学院にはこの他「WORK-49」(学

生会館会議室7)がある。版画

市川其融 (いちかわ・きゆう/生没年不詳)

幕末期の江戸詰めの古河藩士。幕末江戸琳派の大家・鈴木其一の門弟。生没年不明だが、嘉永から安政年間に制作された作品が確認されている。江戸後期の絵師

市川君圭 (いちかわ・くんけい/1736～1803年)

滋賀県生れ。市川君障の父。京都で中国の元・明代の名画を研究、とくに鶏をえがく名人。門弟に張月樵(ちやうげっしやう)。1803年没、68歳。江戸時代中期-後期の絵師

市川里美 (いちかわ・さとみ/生誕年不詳～)

大垣市生れ。1971年旅行で訪れたパリにそのまま移住。その後独学で絵を学ぶ。こどもの世界をあたたく、生き生きと描き、世界で出版された絵本は80冊を超える。『春のうたがきこえる』(偕成社)で講談社出版文化賞絵本賞。『はしって！アレン』(偕成社)で第28回サンケイ児童出版文化賞美術賞。絵本

一木 淳 (いちき・とん/1898～1973年)

秋田市生れ。1916年上京、日本美術院の山村耕花に日本画を学ぶ、18年春陽会創立会員の長谷川昇に師事し、洋画に転向。25～36年春陽展に出品。27年Y氏賞。さし絵も手がけ、『新青年』掲載の江戸川乱歩の出世作「二銭銅貨」、「D坂の殺人事件」の他、『少女画報』、『女学世界』、新聞連載小説、国定教科書などにもさかんに描く。52年中川紀元、棟方志功らと日本芸業院を結成。墨絵や書もよくした。東京で没。75歳。74年「一木淳遺作展」(秋田市美術館)。1973年没、75歳。洋画、挿絵、墨絵

市之瀬廣太 (いちのせ・ひろた/1909～1995年)

岐阜県生れ。1927年岐阜県多治見工業制支彫刻科卒。27年大倉陶園に入社するが、29年退社して、構造社彫塑研究所に入所し斎藤素巖に師事。31年構造社展に初入選。32年同展研究賞を受賞し、両社会友。33年構造賞、34年会員。戦後、第1回日展に入選し以後同展に出品。54年日展で特選。55年日展に無鑑査出品。61年日展委嘱。62日展菊華賞。64年日展会員。91年個人美術館。1995年没、85歳。彫刻、個人美術館

一原有徳 (いちばら・ありのり/1910～2010年)

徳島県生れ。1927年通信省小樽貯金支局入局、43年間勤務。51年小樽市美術展出品。58年モノタイプが土方定一の目に留まり、土方の推薦によって60年メキシコ等を巡回した「現代日本の版画店」に出品、同年には東京画廊で個展。金属凹版に着手し、モノタイプと並行して制作。79年以降金属を熱して焼き付ける「Branding」シリーズ、ステンレスの鏡面を歪ませた「SUM」シリーズなどといったオブジェ作品を多数制作。また、83年「無題」(川崎市営競輪場外壁)、84年「炎」(小樽花園公園)、「炎Ⅱ」(銭函駅前)とモニュメント作品を制作。2010年没、100歳。版画、オブジェ、彫刻

市原華雲斎 (いちばら・かうんさい/1916～1995年)

大分県生れ。1929年別府市の竹細工製造販売業筆保の竹工部に入る。35年大阪の山口竹代斎に入門、37年関西工芸展に入賞。48年より杵築市に居住。同年より県美展等への出品を始める。75年より西部工芸展及び日本伝統工芸展に出品。西部工芸展で3回受賞。80年伝統工芸士に認定される。86年日本工芸会正会員。1995年没、79歳。工芸(竹)

一原五常 (いちばら・かずつね/1901～1961年)

徳島県生れ。旧制中学時代に上京し郁文館中学に編入、1925年東京美術学校西洋画科卒。22年帝国美術院展に入選。同展や中央美術展に出品。30代前半は九州に居を移し、佐世保、鹿児島などで教職に就いた。83年東京府大泉師範学校の教諭として勤務。42年故郷に戻り、地元の若い作家に絵を指導した。46年徳島県美術展覧会では、同級生の野間仁根とともに、とりまとめに尽力。1961年没、60歳。洋画、美教、美普

市原義之 (いちばら・よしゆき/1943年～)

徳島県生れ。金沢市立美術工芸大学日本画科、京都教育大学特修美術科日本画科に学んだ後、下保昭に師事。金沢市立美術工芸大学在学中の1965年、日展に入選、68年日春展に入選。73年、79年に日春展奨励賞、78年日春賞。80年日展で特選、81年無鑑査出品、82年特選。日展会員。95年、99年日展審査員。87年東京、名古屋、京都、徳島で個展を開催、92年から93年にかけては、東京、京都、徳島で個展を開催。日本画

市村緑郎 (いちむら・ろくろう/1936～2014年)

茨城県生れ。1962年東京教育大学教育学部芸術学科彫塑専攻卒。62年白日会展に「トルソー I、II」が入選、白日賞。67年白日会会員。83埼玉大学教育学部教授。77年日彫展で日彫賞。77年文部省短期在外研究員として渡欧。78、79年改組日展で特選。82年高村光太郎大賞展で「バランス」が佳作賞。84年大賞展で優秀賞。86年ロダン大賞展で「雲」が優秀賞、88年第2回同大賞展で彫刻の森美術館賞。87年日展会員。2002年に埼玉大学を定年退官し名誉教授となり、崇城大学芸術学部教授に就任。03年日展内閣総理大臣賞。06年日本芸術院賞。08年日本芸術院会員。同年日展理事(09年に常務理事)、日本彫刻会理事(12年に理事長)に就任。2014年没、78歳。彫刻、美教

一柳 慧 (いちやなぎ・とし/1933～2022年)

神戸市生れ。青山学院高等部在学中、1949～51年毎日音楽コンクール作曲部門で3年連続入賞(うち2回は1位)。54～57年渡米し、NYジュリアード音楽院で学ぶ。56～62年にオノ・ヨーコと結婚。59年同地のニュー・スクールでジョン・ケージの講座に参加し、影響を受けたことがきっかけで、図形楽譜や不確定性の音楽を取り入れ、フルクサスなどの前衛芸術活動に参加。85年フランス芸術文化勲章受章、89年毎日芸術賞、89年京都音楽賞大賞、99年紫綬褒章、2002年サントリー音楽賞、05年旭日小綬章受章、06年神奈川県文化賞、08年文化功労者、17年日本芸術院賞・恩賜賞。18年文化勲章受章。2022年没、89歳。作曲家、フルクサス

市山時一郎 (いちやま・ときいちろう/1911～1994年)

長崎県生れ。1932年長崎師範卒。47年納富進に師事。第9回一水会入選(以降94年まで連続出品)。50年日展に入選(以降通算21回入選)。51～55年佐世保美術研究所所長。54年佐世保洋画会発足。82年日展会友。86年紺綬褒章。87年佐世保市文化功労賞。90年サロンド・パリ展大賞。1994年没。83歳。洋画

一曜斎國輝 (いちようさいくにてる/1830～1874年)

二代歌川国輝。三代豊国の門人で、はじめ二代国綱と名乗っていたが、慶応元年頃に二代国輝と改めた。安定した筆力と写実的な表現力を兼ね備えた絵師で、鉄道錦絵をはじめとする開化絵を多く手がけ、その作品は資料的にも高く評価されている。1874年没、44歳。江

戸後期の浮世絵師

一色邦彦 (いっしきくにひこ/1935年～)

茨城県生れ。1962年東京芸術大学彫刻科専攻科修了。66高村光太郎賞。70年須磨離宮公園現代彫刻展で宇部市野外美術館賞。70年文化庁芸術家在外研修員として1年間渡欧。73年中原悌二郎賞展で優秀賞。76年長野市野外彫刻賞。82年彫刻の森美術館第2回高村光太郎大賞展で美ヶ原高原美術館賞。2020年「6つの個展2020」(茨城県近代美術館)に出品。彫刻

一色五郎 (いっしき・ごろう/1903～1985年)

茨城県生れ。1920年上京し、彫刻家長谷川栄作に師事。東京美術学校卒。23年東台彫塑会展に出品、1等賞。24年帝展で入選、32年回帝展で特選。36年文展招待展出品作が文部省買上げ。53年日展に出品(以後67年まで出品)。茨城県で没、82歳。彫刻

一筆斎文調 (いっぴつさい・ぶんちよう/生誕年不詳)

はじめ狩野派を石川幸元にまなび、のち浮世絵に転じて、1764～81年のころ江戸で活躍。その役者絵は勝川春章との合作「絵本舞台扇」で評判となった。美人画は鈴木春信の画風にちかみながら、より写実的。磯田湖竜齋との合作もある。弟子に頭光(つむりのひかる)らがいる。江戸中期の浮世絵師

逸然・性融 (いつねん・しょうゆう/1601?～1668年)

中国、明の黄檗宗僧侶。浙江の人。1644年来日し、長崎興福寺第3代住持となる。隠元の日本招請に尽力したほか、北宗画風の人物画・仏画にすぐれ長崎漢画の祖となった。1668年没、67歳。? 明の絵師、長崎漢画の祖、漢画派(北宗画派)

井爪丹岳 (いづめ・たんがく/1832～1900年)

和歌山県生れ。井爪與次兵衛の子。幼い頃から学問や画を好み、田辺の大江霞岳について学び、のちに京都に出て小田海僊の門に入った。研究熱心で、南北合法を以って新機軸を打ち立てた。師の海僊も丹岳を養子に迎えたいと願ったが、家業を継ぐために成らなかったという。しかし丹岳は公事の傍ら終生画を描いた。1900年没、69歳。日本画

条市功労賞を受賞。1992年没、74歳。彫刻

井出創太郎 (いで・そうたろう/1966年～)

東京生れ。1991年愛知県立芸術大学大学院美術研究科絵画油画専攻修了。87年より銅版画を制作。近年は、銅版画を襖、障子の形式で家屋に宿す作品へと展開。「相倉/その光と襖」(世界遺産合掌造り集落相倉旧山崎家)や「渡部家住宅その光と記憶」(重要文化財 渡部家住宅)、2008年から10年間続けられた「落石計画」(旧落石無送線送信局・北海道根室市落石岬)など、特定の「場」が積み重ねてきた時の記憶を掬いとりながら、自分の想いを重ね合わせ、寄り添う空間を作り上げた。版画

井出康人 (いで・やすひと/1962年～)

福岡県生れ。1988年東京藝術大学美術学部日本画専攻卒。93年東京藝術大学大学院美術研究科後期博士課程修了。93年東京藝術大学美術学部日本画科非常勤助手。95年年倉敷芸術科学大学助教授。日本画、美教

伊藤 彩 (いとう・あや/1987年～)

和歌山県生れ。2011年京都市立芸術大学大学院美術研究科絵画専攻修了。「Art Camp in Kunst-Bau 2007」(サントリーミュージアム[天保山]、大阪)でサントリー賞、「アートアワードトーキョー丸の内2011」でシュウウエムラ賞および長谷川祐子賞。国内外で活動し、「フォトドローイング」と呼ぶ独自の手法を用いた絵画、立体作品やインスタレーションを発表。2020年にクラウドファンディングで初の作品集『RAPID RABBIT HOLE』を刊行。主な展覧会に、「レゾナンス 共鳴 人と響き合うアート」(サントリーミュージアム[天保山]、大阪、2010)、「VOCA2010 新しい平面の作家たち」(上野の森美術館、東京)、「和歌山と関西の美術家たちリアルなリアルのリアル」(和歌山県立近代美術館、2015)、「AYA ITO & ATSUSHI KAGA IT HAPPENS TO BE」(Pallas Projects/Studios、アイルランド、2017)など。絵画、写真、立体、インスタ、フォトドローイング

伊藤五百亀 (いとう・いおき/1918～1992年)

愛媛県生れ。多摩帝国美術学校に入学。中途退学するも、その後も吉田三郎に師事し、本格的な創作活動を行った。1943年文部省美術展で特選。54、55年日展でも連続特選。日展審査員、日展評議員を歴任し、74年文部大臣賞を受賞、82年日本芸術院賞。91年西

伊藤響浦 (いとうきょうほ/1883～1961年)

山口県生れ。山内多門、川合玉堂に師事、のち巽画会会員となる。第九回文展に入選し褒状。文展に毎回入選。第一回、二回聖徳太子奉讃美術展入選。第四回新文展に入選。1961年没、78歳。日本画

伊藤桂司 (いとう・けいじ/1958年～)

東京生れ。中央美術学園卒業。1980年に雑誌「JAM」でデビュー。以後、広告・書籍・雑誌・音楽分野等のアートデザイン・映像制作、個展開催や展示会への参加、作品集の発表など幅広く活動し、99年ニューヨークADC(英語版:Art Directors Club of New York)アワードで金賞。2007年京都造形芸術大学教授。アートディレクション、グラフィックワーク、映像を中心に活動。グラフィックアーティスト。UFG(Unidentified Flying Graphics)Inc.代表、美教

伊東紅雲 (いとう・こうん/1880～1939年)

東京生れ。1894年村田丹陵門に入り、土佐派を学ぶ。1907年文展入選。15年3等賞。25年帝展委員に任命。安田靫彦、今村紫紅らの紅児会や、小堀鞆音の門に出入し、革丙会にも関係し、朱弦会に参加。故実に精しく、専ら歴史画を制作した。28年に明治神宮絵画館に「御元服図」を謹作。37年文展無鑑査。1939年没、59歳。日本画

伊藤熊太郎 (いとう・くまたろう/1860年頃～1930年頃)

生没年、生誕地等不明。1907～10年合衆国水産局の汽船アルバトロスのフィリピン遠征にイラストレーターとして参加。博物画家。図鑑や学術文献に多数の精密な魚類画を描いた。日本の魚類学者、刺胞動物研究者であった岸上鎌吉によって、画家としてヒュー・M・スミス(英語版)に推薦されたものと考えられる。アルバトロスによるフィリピンにおける調査の際に描かれた魚類画の多くは、スミソニアン博物館に所蔵。29～30年全3冊で刊行された田子勝彌編著の『日本魚介図譜』は、伊藤が描いたものであった。31～32年大日本水産会が作成した『日本水産動植物圖集』にも伊藤が描いた作品が収録。2016年に東京海洋大学図書館で開催された展示を契機として、荒俣宏が新たにスケッチ帖6冊、原画1,267枚を発見。画集の原画100点が、テレビ番組『開運なんでも鑑定団』に登場1930年頃没、70歳。？博物画、イラスト

伊藤公象(いとう・こうしょう/1932年～)

石川県生れ。1972年「美術工房 桑土舎」を設立。75年山本太郎詩集『鬼文』(青土社)の装丁を手がける。84年ヴェネツィア・ビエンナーレに日本代表として参加。「'85 潤沼・土の光景」を企画・主宰。主な個展に、「土の地平 伊藤公象展—人為と自然の間に」(富山県立美術館、1996)、「ウイルス—地の襲、海襲」(英国国立テート・ギャラリー・セント・アイビス美術館、イギリス、2022)、「伊藤公象 KOSHO ITO WORKS 1974-2009」(東京都現代美術館、茨城県陶芸美術館、2009)、「土のひだ」(ARTS ISOZAKI、茨城、2019)、「ソラリスの海《回帰記憶》のなかで」(ARTS ISOZAKI、茨城、2021)など。主な受賞歴に、「北関東美術展」グランプリ受賞(1977)、「インド・トリエンナーレ」ゴールドメダル受賞(1978)。2022年『伊藤公象作品集』を出版。**陶造形、装丁**

伊藤順三(いとう・じゆんぞう/1890～1938年)

東京生まれ。郁文館中学在学中に都田丹陵の門下。東京美術学校に入学し、結城素明に師事。1913年同校卒業。当時の日本画の先鋭な動きに加わり、異画会の若手として活躍しつつ、モザイク主催展、行樹社展、自由絵画展、黒耀社展、一月会展などに出品。1920年未来派美術協会の結成に関わり、第一回展に出品。大正半ばより、三越の図案部嘱託。1938年没、48歳。**日本画、図案**

伊藤深江(いとう・しんこう/1834～1899年)

通称福太郎。1863年に恵比須町乙名になり、また居留地係も勤めた。68年長崎取締役。のちに神戸に移り住み、同地で没した。画は三浦梧門に学び、特に蘆雁を得意とした。中村陸舟、守山湘帆とあわせて鉄翁・逸雲・梧門の後の長崎三大家とされる。1899年没、65歳。**江戸後期-明治期の絵師、長崎三大家**

伊藤真乗(いとう・しんじょう/1906～1989年)

真言宗醍醐派総本山、京都の醍醐寺で真言宗の奥義を修めた後、仏教教団・真如苑の開祖として、日本の仏教界のみならず、広く世界の宗教界に知られた存在。本尊の巨大な涅槃像を自ら謹刻し、「昭和の仏師」と呼ばれる側面を持っていた。釈迦如来、阿彌陀如来、聖観音、不動明王などの仏像に結実。1989年没、83歳。**木彫、僧**

伊藤 進(いとう・すすむ/1916～2014年?)

1916年生れ。12歳の時、父・忠次郎氏について修業し、その後、長島鬼一氏に師事し、技術を修得した。版元からの依頼により、浮世絵版画(歌麿、北斎、広重など)の復刻を行った。他に伊藤深水、奥村土牛、東山魁夷などの現代版画も手掛けた。美人画の紙の生え際を彫る技術(毛割り)は、大変な集中力と、高度な技術が要求される。86年区指定無形文化財保持者に認定。2014年没。98歳? **木版画習師、浮世絵版画復刻版**

伊藤千湖(いとう・せんこ/1885～1967年)

長野県生れ。同郷の南画家児玉果亭に師事。1913年師果亭の没後、雪村の筆意を重んじ所縁の常陸太田、大宮を遍歴。大正初め水戸市鉄砲町(現在の泉町付近)に居住、画室を塩原洞と称した。45年水戸市常盤町に転居。54年水戸市の神心寺本堂に襖絵「牡丹図」を奉納。1967年没、82歳。**南画**

伊藤総山(いとう・そうざん/1884～没年不祥)

1907年頃より渡辺版画店から、複製の浮世絵に代わる新しい版画で「新作版画」と呼ばれた輸出用の花鳥画の木版画を版行した。新版画としては1919～1926年に花鳥画と美人画を制作。21年渡辺版画店の主催により日本橋白木屋で行われた「新作版画展覧会」に出品。32年日本橋白木屋で開かれた「第三回現代創作木版画展覧会」に出品。**版画、日本画**

伊藤 存(いとう・ぞん/1971年～)

大阪生れ。京都市立芸術大学美術学部美術科卒。刺繍作品をはじめ、小さな立体作品、粘土を支持体とした粘土絵などを発表する。2000年からは、アーティストの青木陵子とともに手描きアニメーションや鉛筆画を中心とした共同制作を開始。近年は、数学者・岡潔の「情緒」といった思想と自身のコンセプトをひもづけたスタイルの作品も手がけている。2003年ワタリウム美術館、東京で個展。**現代美術、刺繍、立体、粘土絵、アニメ**

伊藤 隆(いとう・たかし/1947年～)

名古屋市生れ。愛知教育大学美術科卒。東京藝術大学大学院美術研究科修了。1980～81年スペイン王立美術学校付属人体研究所へ留学。81年ゴヤ特別展賞展出品、北展奨励賞。82年国展入選、以後2006年まで同展に出品。83～84年スペイン・マドリードにて

制作。山形大学非常勤講師、弘前大学教授を経て、2001～13年秋田大学教育学部教授。
秋田県芸術選奨。洋画、美教

伊藤隆史 (いとう・たかし/1933～1997年)

東京生れ。1952年に武蔵野美術学校に進学、54年中退。清水で鈴木株式会社勤務。
文芸活動を行っていた石子順造と出会う。57年石子が発起人となり立ち上げた、グループ
「白」の中心メンバーとして活動。当時、清水の伊藤の家に、グループ「白」の事務局がおかれ、
機関誌『白』の発行元。58年日本アンデパンダン展に出品、60年東京の村松画廊で「伊藤隆史・鈴木慶則2人展」が開催。60年石子、鈴木とともに「白」の名義で評画誌『フェニックス』を発行、
合作の印刷絵画を発表。61年その後は独自の道を歩んだ。1997年没、64歳。
洋画、文藝

伊藤隆道 (いとう・たかみち/1939年～)

札幌市生れ。東京芸術大学美術学部工芸科で金属工芸を専攻。ショーウィンドウディスプレイのデザインを皮切りに、彫刻、照明など幅広く立体造形の作品を手がける。鏡面のステンレスパイプを曲げ、モーター駆動により優美な造形を動かす作品を制作。1963年資生堂会館ショーウィンドウディスプレイのデザイン。75年彫刻の森美術大賞展廻る曲線のリング・大賞。93年東京芸術大学美術学部教授就任。2003年環境芸術学会会長就任。04年「伊藤隆道 動く彫刻・上海展」(上海城市規劃展示館)。デザイン、立体造形、動く彫刻、美教

伊藤卓美 (いとう・たくみ/1946年～)

宮城県生れ。洋画家の「伊藤悌三」の三男。父宛の版画家「馬淵聖氏」の版画年賀状と出会い本格的に制作を始める。1967年秋田の版画家「勝平得之氏」の影響を受け民俗芸能をテーマにした作品で初個展を開く。「宮沢賢治」の世界と併せてライフワークとして作品を制作。1979年日版会版画展に出品、新人賞・会友、「会員推挙」「日版会賞」「文部大臣賞」。2004年会長。自作の版画制作を優先すべく14年退会、以降無所属。「前川千帆」「武井武雄」氏等の影響を受けて木版画による手造りの「限定本」「歌留多」の制作。14年より、東京に残る“江戸”を探しての「東京江戸百景」を10年計画で制作。版画

伊藤隆康 (いとう・たかやす/1934～1985年)

兵庫県生れ。1958年東京芸術大学美術学部油画科卒。小磯良平教室に属し、同期に高松次郎、中西夏之、工藤哲巳がいた。卒業後、東横百貨店宣伝部に就職、ディスプレイ・デザインの仕事に従事する側ら、制作活動。当初から石膏などの素材を用いた造形作品をめざし、59年村松画廊で初の個展を開催、同年の3回シェル美術賞展で第一席。61年ナリ青年ビエンナーレ展に出品。61年いとう画廊での個展で「無限空間」シリーズの作品を発表。ライト・アートの先駆をなした「負の球」シリーズ、さらに「同時に存在する」シリーズを展開、石膏や土管による無限空間作品やオブジェを発表。69年国際サイテック・アート展「エレクトロマジカ」を山口勝弘らと開催、70年には大阪万国博覧会テーマ館の企画、デザインに参加。72年スペースデザイン事務所サムシングを設立、環境・空間デザインを本格的に手がける。78年商空間デザイン賞特別賞。84年作品集『無限空間-The Infinite』を刊行。1985年没、51歳。没後、85年に渋谷区立松涛美術館で個展。1985年没、51歳。造形、ライト・アート、オブジェ、環境・空間デザイン

伊藤龍雄 (いとう・たつお/生誕没年不詳)

1936年に発行された雑誌「スタアの1番」(スタア・春季臨時増刊)の表紙は伊藤龍雄氏の絵による「シーンパーカーに似た娘」。挿絵画家として戦前戦後と活躍。プロフィールは不詳。雑誌 婦人生活・55年9月表紙:伊藤龍雄/水谷八重子 好重/白雪姫:沢田重隆/中村扇雀 雪村いずみ/岸恵子/宇津井健/田中絹代。挿絵、表紙絵

伊東忠太 (いとう・ちゅうた/1867～1954年)

山形県生れ。帝国大学工科大学卒、同大学大学院に進み、のちに工学博士・東京帝国大学名誉教授。西洋建築学を基礎としながら、日本建築を本格的に見直した第一人者で、法隆寺が日本最古の寺院建築であることを学問的に示し、日本建築史を創始。それまでの「造家」という言葉を「建築」に改めた。「建築進化論」を唱え、それを実践するように独特の様式を持った築地本願寺などの作品を残す。正三位・勲二等瑞宝章・工学博士・東京帝国大学名誉教授・早稲田大学教授。1943年建築界で初めて文化勲章。1954年没、87歳。建築家、建築史家、日本画、版画

伊東陶山・3代目 (いとう・とうざん/1900～1970年)

京都生れ。京都市立美術工芸学校絵画科卒、大江良起に就いて画を学び、京都市立陶

磁器試験所に入り釉薬研究を行った。また祖父初代陶山、父二代陶山に就き作陶技術を修め、1938年三世陶山を襲名。29年帝展入選し、33年特選、皇太后陛下御買上。陶器研究のため中国、朝鮮に渡行すること前後3回に及び、戦後は日展に出品。江戸中期から伝わる京焼の代表様式である栗田焼を伝承。「栗田晨光花瓶」(昭31日展作、日ノ国交記念展出品、ソ聯買上)、「栗田白梅花瓶」(東宮御所落慶御祝謹製)。1970年没、70歳。陶芸

伊藤七男 (いとう・ななお/1953年～)

岐阜県生れ。1980年東京芸術大学大学院修了。現在は足利工業大学大学院で准教授。79年サトウ画廊(東京 銀座)で個展。90年 お茶の水画廊(東京)で個展。91年日本・ベルギー国際交流展。洋画、美教

伊藤仁三郎 (いとう・にさぶろう/1905～2001年)

京都生れ。京絵専を卒業後、土田麦僊の山南塾に入る。麦僊の門下が結成した柏舟社の中心メンバー。村上華岳の画風を継承する精神性の高い風景画を制作した。2001年没、96歳。日本画

伊藤柏台 (いとう・はくだい/1896～1932年)

京都生れ。1914年京都市立美術工芸学校卒、19年京都市立絵画専門学校卒。、在学中から密栗会などに参加。22年国画創作協会4回展、26年第5回展で入選し、同協会会友。28年同協会解散後は同志と新樹社を結成し、定期展を中心に画作を行うが、31年会員の脱退が相次ぎ同社は解散。1932年没、36歳。日本画

伊東盤特 (いとう・はんどく/1948年～)

静岡市生れ。東京造形大学デザイン科卒。木版画とシルクスクリーンを併用した技法による作品を制作し、リュブリアナ・ビエンナーレ展をはじめ、国内外の版画展に作品を発表。1986年英国国際版画ビエンナーレ招待出品、第1回ニューヨーク・ジュリート国際版画展準大賞。2003年企画展「伊東槃特・海野光弘二人展」を開催。春陽会会員、日本美術家連盟会員、大学版画学会会員、国際版画交流協会会員。版画

200

伊東英泰 (いとう・ひでやす/1875～1931年)

長崎県生れ。画を右田年英に学ぶ。東京日日新聞に挿絵を執筆したりと活躍した。1931年没、56歳。挿絵

伊藤 鈞 (いとう・ひとし/1938～2019年)

名古屋市生れ。1958年東京教育大学芸術学専攻科修了。62年山口大学に着任(同66年助教授、74年教授)。68年国立ローマ美術院でファッツイーニに師事。78年自由美術展に出品し平和賞。80年筑波大学教授に就任(97年退官)。92年カルロ・ニコリ大理石彫刻研究所に留学。97年筑波大学退官記念展覧会開催(つくば美術館)、2019年没、81歳。彫刻、美教

伊藤博次 (いとう・ひろじ/1919～1999年)

秋田市生れ。1941年帝国美術学校本科工芸図案科卒。映画会社に入社し、海軍航空本部の少年航空兵教育用映画の製作を担当。46年兄弟で新協工芸玩具研究所を設立、木製玩具を開発。52年秋田二科展の開催に協力し、東郷青児の知遇を得る。二科展に入選。55年一陽展に出品し、65年特待賞、会友。53年伊藤弥太ら県在住中央展出品者で〈秋田美術作家協会〉を結成し、63年寺田九空らと〈秋田県造形美術家協会〉を結成。67年野呂正男らと秋田美術学校を開校(72年閉校)。75年秋田市文化章受章、78年秋田県芸術選奨受賞。80年秋田県文化功労者表彰。91年初個展開催(秋田県総合生活文化会館)。96年文部大臣より地域文化功労章。97年紺綬褒章受章。1999年没、80歳。2000年秋田県立美術館で個展。玩具、洋画、美教

いとう・ひろし・伊東寛 (いとう・ひろし/1957年～)

東京生れ。早稲田大学教育学部卒。おもな作品に『ルラルさんのこわ』(ポプラ社・絵本につぼん賞)、『マンホールからこんこちは』(徳間書店・児童文芸新人賞)、『おさるのまいこち』、『おさるはおさる』(共に講談社・路傍の石幼少年文学賞)、『だいいょうぶ だいいょうぶ』(講談社・講談社出版文化賞絵本賞)、『ごきげんなすてご』、『ねこと友だち』(共に徳間書店)などがある。日本の絵本作家。別名は「伊東 寛」。童話やイラストも手がけている。『みんながおしゃべりまじめるぞ』でデビュー。「おさるのまいこち」シリーズ(路傍の石幼少年文学賞受賞)、「ルラルさんのこわ」シリーズ(絵本につぼん賞受賞)「ごきげんなすてご」シリーズ、など作品は多数。絵本、イラスト

伊東万耀 (いとう・まんよう/1921～1970年)

東京生れ。父は伊東深水。父に指導を受ける。人物、花鳥を最も得意として日展などで活躍し日展では内閣総理大臣賞、特選受賞。また日本美術院賞を受賞。1970年に画業半ばにして没、49歳。作品数も少なく入手は困難な作家の一人といえる。神奈川県立近代美術館、山種美術館などに所蔵されている。日展評議員。1970年没、49歳。 **日本画**

伊藤深游木 (いとう・みゆき/1954年～)

東京生れ。東京芸術大学大学院修了。平山郁夫に師事。1992年東京セントラル美術館日本画大賞展優秀賞、95年院展奨励賞。院展春季展入選、有芽の会出品、日本画と彫刻展出品。2005年日本橋三越個展、京都大丸個展、06年池袋西武アートフォーラム武部雅子・伊藤深游木2人展開催。実力急上昇の女流画家として将来を囑望。 **日本画**

伊藤八百叟 (いとう・やおそう/1835～1917年)

1835年生れ。木下逸雲の門下。家業は長崎奉行御用の八百屋で、八百屋惣右衛門と称した。蟹図は彼の最も得意とするところで、大いにこめてはやされた。1917年没、82歳。 **日本画**

伊藤康夫 (いとう・やすお/1931年～)

秋田県生れ。1951年秋田大学学芸学部卒。中学校のち高等学校の美術教諭。51年に酒田市の本間美術館で開催されたサロン・ド・メ展に衝撃を受けて、56～70年の二科展出品作は抽象的作品。66年新制作協会の紺野五郎、春陽会の由利耶一らとグループ〈范同人〉を結成し、71年まで秋田市と湯沢市で展覧会を開催。72年から新制作展に出品し、76年新制作東北展で新制作東北賞。78年新制作展で新作家賞、協友となり、98年新作家賞、99年会員。79年秋田県芸術選奨受賞。 **洋画、美教**

伊藤鷺城 (いとう・ろじょう/1873～1948年)

兵庫県生。本名又次。谷口香嶠(たにくち・こうきよ)に学び、歴史画を能く描く。妻伊藤小坡も日本画家。1948年没、75歳。 **日本画**

糸田芳雄 (いとだ・よしお/1926～1997年)

東京生れ。1944年川端画学校。48年大阪市立美術研究所修了。師：猪熊弦一郎。49年新制作協会展出品。50年新制作協会展で新作家賞。50年新制作協会協友。渡米。神奈川近代美術館買上。東京国立近代美術館買上。新制作協会会員。個展開催多数。1997年没、71歳。 **洋画**

井戸原亮二 (いどはら・りょうじ/1934年～)

出雲市生れ。1946年、移住先の中国瀋陽より帰国。57～61年まで国画会展に出品。59年松江で島根青年グループ青銅会を結成。62年以降は、自由美術展に出品し、68年に同展の反戦室で佳作作家賞。75年自由美術協会会員。2000年自由美術展で燦光賞。その他数多くの個展、グループ展等で活躍。 **洋画**

稲崎栄利子 (いなざき・えりこ/1972年～)

兵庫県生れ。武蔵野美術大学造形学部工芸工業デザイン学科を卒業後、京都市立芸術大学大学院美術研究科工芸専攻陶磁器修了。第42回朝日陶芸展秀作賞等。2017年より国内5カ所を巡回した「驚異の超絶技巧！—明治工芸から現代アートへ」展に出品。2023年岐阜県現代陶芸美術館、長野県立美術館、三井記念美術館で「超絶技巧未来へ展」17名に選抜。 **陶芸**

稲田吾山 (いなだ・ごさん/1880～1938年)

1880年山形県生れ。東京美術学校を経て、寺崎広業に師事し、旧美術研精会の委員。鎌倉で没、59歳。 **日本画**

稲田年行 (いなだ・ねんこう・としゆき/1925～2014年)

1925年生れ。版画家松田ハルミの夫、哲学者純丘曜彰、版画家稲田醜伊祐の父。東京美術学校卒、同専修科修了。安井曾太郎に師事。日本美術家連盟会員、大学版画協会会員、竹とんぼの会会員。岐阜大学名誉教授、浜松大学教授(～2000年)。位階は従四位。紺綬褒章。2014年没、89歳。 **版画、浮世絵研究、玩具収集家、美教**

稲田文笠 (いなだぶんりつ/1808～1873年)

愛知県生れ。画を谷文晁に師事し、江戸南画を学ぶ。文晁門下の俊英として活躍の後に帰郷し、吉田藩の御用絵師として吉田画壇で大いに活躍。山水図は水墨で六曲一双屏風に雄大な山水が描かれている、特に左隻は米法山水的な風景画に仕上がっており、文晁より受け継いだ文晁の技術の一端をうかがわせる作品。1873年没、65歳。江戶後期-明治期の絵師、南画

稲野年恒 (いな の ・ としつね / 1858 ~ 1907 年)

石川県生れ。東京で月岡芳年に浮世絵をまなび、のち京都の幸野楳嶺に師事。大阪にすんで、「毎日新聞」「朝日新聞」に小説の挿絵をかいた。1907年没、50歳。日本画、挿絵

伊奈信男 (いな の ・ のぶお / 1898 ~ 1978 年)

松山市生れ。1922年東京帝国大学文学部美学美術史科卒業後、美術史研究室の副手を務める。専攻は西洋美術史。1932年野島康三主宰の「光画」誌に「写真に帰れ」を発表し、近代的写真批評への道をひらく。第二次大戦中は内閣情報局に勤務。戦後写真評論を再開し、日本写真協会常任理事。1978年没、80歳。著作に「写真・昭和五十年史」など。1978年没、80歳。写真、美史、写真評論家

稲葉 桂 (いなば ・ けい / 1937 ~ 2016 年)

愛知県生れ。59年愛知学芸大学美術科卒。56~58グループ「前衛集団」に参加。56~69年行動美術協会展(新人賞)〈会友賞〉会員、退会。62・64年毎日現代日本美術展。69~73年「造形室アロ」「常滑造形集団」を結成・参加。壁画を主とした環境美術の制作に集中。71野外展「喜捨の会」を企画・参加(愛知県南知多町・大宝寺)。72野外展「72時間の行為」企画・参加(大宝寺)。78第1回エンバ賞美術展(芦屋市民センター)全国9都市を巡回。80'80年代への考察展(名古屋市博物館)。81ナゴヤ・ロサンゼルス市交換現代美術展(ロサンゼルス)。86名古屋駅南豊太閤架道橋壁画競作'87都市景観賞)。88'88名古屋港倉庫 現代美術フェスティバル。2016年没、79歳。洋画、壁画(環境美術)

稲葉春生 (いなば ・ しゅんせい / 1890 ~ 1976 年)

岡山県生れ。岡山県師範学校卒。県内の小学校で訓導や校長を歴任。1925年池田遙邨の紹介で竹内栖鳳が主宰する画塾・竹杖会の会員。29年帝展に入選。34年土田麦僊の

指導を受ける。第2次大戦後は岡山市にアトリエをかまえる。51年岡山県在住の日本画家による研究団体・青岡会を結成。54年からは岡山大学の講師を務め、後進の指導にあたる。61年学生や一般人を対象に日本画研究団体・青丘社を結成。円山・四条派の写生をもとに、花鳥画を多く残した。1976年没、66歳。日本画、美普、美教

稲葉治夫 (いなば ・ はるお / 1931 ~ 2010 年)

静岡県生れ。1956年東京藝術大学卒。60年松本英一郎、豊島弘尚らとともに新表現主義を結成。66年沼津市庁舎壁画作成。67年国際青年美術家展佳作賞。東京藝術大学卒業後は、東京造形大学にて教鞭をとる傍ら、精力的に国内に留まらずアメリカでも個展を開く。96年東京造形大学名誉教授就任。2002年沼津市立沼津高等学校・メディアセンター壁画作成。東京造形大学を退職後は、生まれ故郷の沼津に戻り、子供達に絵を描くことの楽しさや美術大学を目指す学生を指導。2010年没、79歳。洋画、壁画、美教

稲村退三 (いなむら ・ たいぞう / 1901 ~ 1994 年)

東京生れ。1927年東京美術学校西洋画科卒。34年熊岡絵画道場に入る。35年東光会展で入選。42年茨城師範学校教諭となり水戸に赴任。47年日展出品、以来5回入選。50年茨城大学教授(67年退官)。52年東光会会員。57年茨城県美術展洋画部審査員。71年勲3等旭日中綬章。東京で没、93歳。洋画、美教

稲元 実 (いなもと ・ まこと / 1946 ~ 2013 年)

石川県生れ。1969年武蔵野美術大学日本画科卒業。加藤東一に師事。71年日展に入選し、78、85年特選。昭和世代日本画展、次代への日本画展、セントラル日本画大賞展、山種美術館賞展等に出品。日展評議員。2013年没、67歳。日本画

乾 南陽 (いぬい ・ なんよう / 1870 ~ 1940 年)

高知県生れ。1897年東京美術学校卒。橋本雅邦、山名貫義、下村観山に師事、一時教職にあつた。旧文、帝展に数回出品せるほか、聖徳記念絵画館の「五箇条御誓文之図」及び東京府養正館の壁画等を執筆し、最近では東台邦画会、日本画会会員。東京で没、70歳。日本画

乾 由明 (いぬい・よしあき/1927～2017年)

大阪生れ。京都国立近代美術館勤務ののち、1975年母校京大の教授。西洋近代美術や現代陶芸の評論で知られる。97年金沢美術工芸大学長。2006年兵庫陶芸美術館館長。著作に「モネと印象派」「現代陶芸の系譜」など。2017年没、89歳。美史、大学長、美術館長、美評

狗巻賢二 (いぬまき・けんじ/1943～2023年)

大阪生れ。京都教育大学特修美術科彫塑中退(1972年)。2009年毎日新聞社賞を受賞。京都を拠点に活動する。2023年没、80歳。平面、立体

井上 厚 (いのうえ・あつし/1962年～)

東京生れ。1988年東京芸術大学大学院修士課程修了。86年日本版画協会展(以後毎年)、第5回ソウル国際版画ビエンナーレ(韓国)に出品。87年日本版画協会展で奨励賞。94、95年文化庁芸術インターシップ。版画

井上永悠 (いのうえ・えいゆう/1897～1978年)

京都生れ。第四回国画創作協会展に「静物」を出品、解散後は新樹社に参加する。東方美術協会を主宰。戦後は個展を中心に細密描写を発表、文学者との交流を深めた。197年没、81歳。日本画

井上孝治 (いのうえ・こうじ/1919～1993年)

福岡市生れ。福岡県立福岡盲啞学校中等部木工科で家具の製作などを学ぶ。1938年父親から盲啞学校の卒業記念に二眼レフカメラを贈らた。39年写真コンテストで初入選。50年から志賀島の米軍基地内の売店の写真部に勤務し、DPEとカメラ修理を担当。55年「井上カメラ店」を開業。57年聴覚障害者の写真クラブを主宰。59年撮影旅行で単身沖縄に渡り、4週間滞在。復帰前の沖縄の風景や人々の暮らしを多数撮影した。59年福岡県ろうあ福祉協会会長に就任。73年全日本ろうあ写真連盟を創設し、初代会長。76年全日本写真連盟(アマチュア写真家の全国組織)の西部本部の委員に障害者として初めて選ばれる。89年福岡市の百貨店・岩田屋のキャンペーン広告に昭和30年代の写真が採用され、大きな反

響を呼ぶ。復帰前の沖縄で撮った写真も同時期に再発見され、90年那覇市で写真展が開催。この年には、パリ写真月間にも出品。1993年没、74歳。写真

(南仏のアルル国際写真フェスティバルの招待作家に選出されるが、開幕直前に肺癌で他界。同フェスティバルでの個展が遺作展となり、アルル市から名誉市民に選れる。フランスのドキュメンタリー映画監督ブリジット・ルメースが井上孝治を取り上げ、96年年に短編、99年に長編映画を制作した。彼の名を世に知らしめた福岡の街角で撮られたスナップ、特に子供の世界に肉薄した写真は、土門拳などの仕事との親近性を感じさせる。井上本人は、木村伊兵衛と写真評論家・田中雅夫に大きな影響を受けたと語っている)

井上 悟 (いのうえ・さとる/1931～2022年)

東京生れ。東京芸術大学在学中より国画会展に入選し、新人賞。東京芸大大学院修了制作が大橋賞。63年国画会会員。74年安井賞展佳作賞。具象現代展、明日への具象展、日本秀作美術展に出品。現在、国画会会員、武蔵野女子大学名誉教授。2022年没、91歳。洋画、美教

井上佐之助 (いのうえ・さのすけ/1932年～)

大分県生れ。大分大学学芸学部卒業後、教職につき、早くから大分県美術展をはじめ大分前衛美術展、七人の会展など県内グループ展で活躍。1981年前衛美術グループ「位相」の結成に尽力し、県美術界に影響を与えた。版画も制作。洋画、版画、美教

井上 脩 (いのうえ・しゅう/1901～1942年)

広島県生れ。1930年東京美術学校卒。在学中帝展に初入選、以後帝展、文展、東光会展に作品を発表し38年東光会会員。1942年没、41歳。洋画

井上善教 (いのうえ・ぜんきょう/1911～1977年)

島根県生れ。覚専寺住職の六男。島根師範学校卒、同校教諭、のち同大教授となり、1975年に定年退職するまで長く教鞭を執り、多くの後進を育てた。おもに国画会展で活躍し、島根の洋画発展にも大きく尽力した。1977年没、66歳。美教、洋画

井上素川 (いのうえ・そせん?/1864~1926年)

高知県生れ。幼いころから画が得意で独学で描き、やや長じて柳本洞素に師事した。画業のほか、こは俳句を田所水哉に学び、俳号を象水と称した。1926年没、63歳。 **日本画**

井上長太郎 (いのうえ・ちやうたろう/1870~1951年)

大分市生れ。吉田博と吉田ふじをが学んだ不同舎での同窓として、大分県からは中本保策、井上長太郎、木付敏夫、山田英雄、宇佐美喜惣治が学び、不同舎に学んだかどうかは不明、佐藤平太郎が小山正太郎に師事。明治美術会に吉田嘉三郎、中本保策、井上長太郎に加えて、県下から吉武丈作、岡部昇丸、大矢廣、鶴清氣らが参加した。1951年没、81歳。 **洋画**

井上恒也 (いのうえ・つねや/1895~1979年)

静岡県生れ。1914年東京美術学校の日本画科に入学し、寺崎広業・川合玉堂に師事。花鳥画を得意とした。17年文展に入選。以来、帝展・日展で入選。49~78年毎年個展を開催。1979年没、84歳。 **日本画**

井上直久 (いのうえ・なおひさ/1948年~)

大阪生れ。金沢美術工芸大学産業美術科卒。卒業後の1971~73年広告代理店に勤め、後大阪府立春日丘高等学校に美術教諭として20年間勤務。学校勤務と並行して、異郷「イバラード」をテーマにした作品を描き、個展や画集を発表。1992年に学校退職後も精力的に活動し、95年公開のアニメ映画『耳をすませば』中の挿話「バロンのくれた物語」の背景画を制作して注目を集めた。2002~8年成安造形大学教授。07年スタジオジブリが製作した映像作品『イバラード時間(英語版)』を監督。 **美教、洋画、イラスト、アニメの背景画**

井上信道 (いのうえ・のぶみち/1909~2008年)

小倉市生れ。1934年東京美術学校(現東京芸術大学)彫刻科卒。42年新制作派協会展新作家賞。46年横浜美術協会 創立委員。53年自由美術協会会員。66年神奈川県美術展創立委員。68年オデッサ市に横浜市の寄贈として裸婦像を建てる。74年友好使節団の文化人代表として上海市を訪ねる。2008年没、99歳。 **彫刻**

井上博道 (いのうえ・はくどう/1931~2012年)

兵庫県生れ。1954年龍谷大学文学部仏教史学科卒。55年産経新聞大阪本社編集局写真部入社。66年フリーランス。83年大阪芸術大学写真学科勤務。88年(有)井上企画・幡設立。91年龍谷大学より龍谷賞。97年大阪芸術大学写真学科退職。日本写真協会会員。民族芸術学会会員。奈良市写真美術家協会会員。2012年没、81歳。 **写真**

井上肇 (いのうえ・はじめ/1932~2009年)

群馬県生れ。自由美術展、日本美術会アンデパンダン展、安井賞展に出品。兄の軍服を描いた作品で現代画廊の洲之内徹から高い評価を受けた。個展:現代画廊、紀伊國屋画廊。煥乎堂収蔵:「軍服」(洲之内コレクション)宮城県美術館。2009年没、76歳。 **洋画**

井上寛信 (いのうえ・ひろのぶ/1916~1985年)

福岡県生れ。福岡師範学校在学中より西日本美術展に出品。同校卒業後は小学校教諭、美術を指導。1938年独立美術展に入選、以後同展への出品を重ね、48年独立賞。51年独立美術協会準会員、58年会員。49年の福岡県美術協会再興に参加、個展を精力的に開催、画塾などでの指導にあたる。61年からは小中学校の校長を歴任した。1985年没、69歳。 **美教、洋画**

井上平八郎 (いのうえ・へいはちろう/1935年~)

大分県生れ。京都市立美術大学彫刻科卒。1957年行動美術展で新人賞・奨励賞・M氏賞、会員。59年全関西行動美術展に出品後、無監査委員。行動美術協会のほか、D、D、A等で作品を発表。 **彫刻**

井上稔 (いのうえ・みのる/1918~没年不詳)

独立美術京都研究所に入所、1935年新日本洋画協会にも参加。37年第7回独立美術協会展に入選。 **洋画**

井上稔 (いのうえ・みのる/1936年~)

京都生れ。野々内保太郎・きぬの次男。1957年日展に入選。59年京都学芸大学特修美術科日本画卒。59年全関西美術展に出品、佳作賞。兄良樹、加藤美代三・下保昭・福本達

雄・三谷青子らと朴土社結成。60年京都学芸大学専攻科美術修了。西山英雄に師事。日展に入選。61～70年大阪豊中の市立第四中学校の美術科教員。62年京展で読売新聞社賞。日展に入選。日展会友(出品委嘱)、朴土グループメンバー。日本画、美教

井上安治 (いのうえ・やすじ/1864～1889年)

江戸生れ。1877年月岡芳年に入門するが、78年小林清親に入門。「光線画」で人気を得た清親の画風を継承し、1880年以降、東京名所図を次々と発表。また、報道画にも筆をとっている。1889年没、25歳。版画、光線画、報道画

井上有一 (いのうえ・ゆういち/1916～1985年)

東京生れ。1935年青山師範学校卒業後に、小学校の教員をしながら画家を目指すか挫折。41年上田桑鳩の弟子となって書道に転向。森田子龍・江口草玄・中村木子・関谷義道と「墨人会」を結成して前衛的な書道を意図する。教員生活を続けながら創作活動を行い、内外の書道展・美術展に作品を発表。57年サンパウロ・ビエンナーレに出展した『愚徹』がイギリスの美術評論家であるハーバード・リードに絶賛された。58年ブリュッセル万国博覧会「近代美術の50年展」に手島右卿とともに日本を代表する書家として出展。1985年没、69歳。マザーギャラリーであったウナックトウキョウが、2000年「井上有一全書業」を出版。書

井上良斎 (いのうえ・りょうさい/1888～1971年)

東京生れ。錦城中学校卒業の頃、1905年より作陶に従事、三代目。板谷波山に師事。青・白磁・緑釉の壺、皿など独自の発色を示し、温厚な人柄そのままに気品の高い風格ある作調で愛好家に親しまれた。14年横浜に移窠。28年帝展入選。29年三越本店で個展。43年文展無鑑査。51年日展依嘱、同53年審査員を5回歴任、58年評議員。59年芸術院賞。66年日展理事、66年日本芸術院会員。67年春勲三等瑞宝章。67年社団法人現代工芸美術協会の副会長。横浜市で没、82歳。陶芸

井上玲子 (いのうえ・れいこ/1932年～)

長野県生れ。1966年富樫一氏に師事。自由美術展に出品(以後毎年)。71年自由美術協会会員。74年自由美術展で平和賞。76年神戸須磨離宮公園現代彫刻展エスキース優秀作品展出品。78年神戸須磨離宮公園現代彫刻展で神戸市公園協会賞。80年長野市野

外彫刻賞。88年神奈川県立近代美術館賞。彫刻

井野英二 (いのえいじ/1949年～)

東京生れ。1974～86年油彩画個展・グループ展多数。84～86年テレビ朝日「ウエザーショー」にてCG製作。88年木版画工房「そのぼしのぎ社」設立。89年木版画文集の製作開始。96年東京進化論の製作開始。日本各地を歩き回り、心に残る風景を作り続ける木版画家。その土地ごとで、木版画の冊子を制作し、定期的に発刊。版画、洋画

猪熊佳子 (いのくま・けいこ/1958年～)

京都生れ。1984年京都市立芸術大学大学院修了、修了制作は買い上げ賞。1990年川端龍子賞優秀賞、95年山種美術館賞優秀賞、98年京都新聞日本画賞展で大賞。98年以降NEXT展に連年出品を重ね、2006年東山魁夷記念日経日本画大賞展に出品。日展会友。日本画

猪瀬東寧 (いのせ・とうねい/1838～1908年)

茨城県生れ。1856年生家を出奔。58年京都に上る。59年南画家日根對山の学僕となる。62年郷里に帰る。68年江戸に出て、東寧と号する。81年内国勸業博覧会に出品し褒状、90年同会でも褒状。86年東洋絵画共進会に出品、1等褒状。97年東京南画会を結成。茨城県で没、70歳。日本画、南画

250

猪原大華 (いのほら・たいか/1897～1980年)

広島県生れ。京都市立絵画専門学校卒。絵画専門学校の在学中の1921年帝展入選。以降連続出品。24年土田麦僊に師事。37年西村五雲の五雲塾に入塾。同門であった山口華楊らと共に新たに晨鳥社を結成。同社展や戦後は日展に出品を重ねる。54、57年日展特選・白寿賞。60年会員。72年内閣総理大臣賞。74年日本芸術院賞・恩賜賞。64年紺綬褒章。74年勲三等瑞宝章、75年京都市文化功労者、76年京都府美術工芸功労者。29年京都市立絵画専門学校嘱託教員就任以来、絶えず美術学校の教員、教授。1980年没、83歳。日本画、美教

猪巻清明 (いのまき・せいめい/1894～1974年)

福島県生れ。福島県立工業学校漆芸科卒、上京して日本橋の漆芸会社で輸出用壁飾りの絵付けの仕事をした。1916年川合玉堂門下の菊池華秋に師事。20年帝展に入選、これを機に川合玉堂の画塾に入門した。21年福陽美術会の会員。44年郷里の会津若松に疎開し、戦後は地元で作画を続け、中央画壇と距離を置いた。1974年没、80歳。日本画

INOMATA・AKI (いのまた・あき/1983年～)

東京生れ。2008年東京藝術大学大学院先端芸術表現専攻修了。3Dプリンターで出力したプラスチック製の「宿」をヤドカリに渡し、引っ越す様子を観察した、移民や難民がテーマの「やどかりに『やど』をわたしてみる」シリーズ(09～)や、飼った犬の毛と自身の髪でケープをつくり、互いに着用する《犬の毛を私がまとい、私の髪を犬がまとう》(14)など、生き物との共同作業のプロセスを作品化する。人間とは異なる視点やふるまいを持つ動物たちとの共作を通して、人と生き物の関係性を再考する。12年岡本太郎現代芸術賞入選。14年 YouFab Global Creative Awards グランプリ、18年 Asian Art Award 2018 特別賞。近年の個展に、「AKI INOMATA: Significant Otherness 生きものと私が出会うとき」(十和田市現代美術館、2019～2020)、「Aki Inomata, Why Not Hand Over a “Shelter” to Hermit Crabs?」(ナント美術館、フランス、2018)。多摩美術大学非常勤講師。武蔵野美術大学非常勤講師。女子美術大学非常勤講師。早稲田大学理工学術院電気・情報生命工学科嘱託研究員。デジタルハリウッド大学大学院特任准教授。現代美術、立体、美教

いのまた・むつみ・猪俣むつみ (いのまた・むつみ/1960～2024年)

横浜市生れ。高校卒業後の78年にアニメ制作会社に入り、84年からフリーに。小説「宇宙皇子(うつのみこ)」「風の大陸」のイラストを描いたほか、アニメ「幻夢戦記レダ」「新世紀GPXサイバーフォーミュラ」、人気ゲーム「テイルズ オブ」シリーズなどのキャラクターデザインを手掛けた。2024年没、68歳。イラスト、デザイナー

波の伊八・武志伊八郎信由(なみの・いやはち/1751～1824年)

千葉県生れ。江戸中期、建築様式として欄間を飾る彫刻が流行。初代伊八こと、武志伊八郎信由は、10歳の時から彫刻を始め、躍動感と立体感溢れる横波を初めて彫って以来、作風を確立。同世代に活躍した葛飾北斎『富嶽三十六景』の代表作の一つ「神奈川沖浪裏」などの画風に強く影響を与えた。主に房総各地で約50の寺社に作品を納めた宮彫師。1824

年没、73歳。江戸後期の宮彫師、彫刻

伊庭靖子 (いば・やすこ/1967年～)

京都生れ。嵯峨美術短期大学版画科専攻科修了。自然光のなかの果実、クッション、陶器などの身近な対象物を自ら撮影し、その写真をもとに油彩画を制作。描く対象となる花器や器を透明なアクリルボックスの中に入れ、周囲の風景や光が映り込んだ状態を描画。参加した主な展覧会に「椿会展」(資生堂ギャラリー、東京、2007)、「虹の彼方 ことどこかをつなぐ、アーティストたちとの遊飛行」(府中市美術館、2012)。2003年京都府文化芸術奨励賞、11年滋賀県文化奨励賞。油彩、版画

伊原通夫・井原道雄 (いはら・みちお/いはら・みちお/1928年～)

パリ市生れ。1953年東京藝術大学美術学部油画科卒。61年フルブライト助成金、アリゾナ大学でのオリエンテーション研究。61年MIT 建築学部特別大学院研究、フルブライト助成金。62年MIT 建築学科の研究員。66年武蔵野美術大学講師。70年マサチューセッツ工科大学先端視覚研究センターフェロー JDR 第3回助成。77年ニューカッスル・カレッジ・オブ・アドバンスト・エド、ニューカッスル大学(オーストラリア)アーティスト・イン・レジデンス。2001年米国市民権取得。彫刻、美研、モニュメント、建築彫刻

伊 孚九 (い・ふきゅう/生没年不詳)

1720年中国の貿易商人として長崎に来航して以来、数度にわたり来朝する。南宋画法を伝え、池大雅、桑山玉洲ら日本の南画家に大きな影響を与えた来舶四大家(伊孚九・費漢源・張秋穀・江稼圃)の一人。中国、清代の画家、南宗画派(文人画派)

井伏鱒二 (いぶせ・ますじ/1898～1993年)

広島県生れ。早稲田大学に通う傍ら日本美術学校にも学ぶ。庶民的なペーパースとユーモアの中に鋭い風刺精神を込めた独特な作風を持つ。小説の挿絵、詩画集。「ジョン万次郎漂流記」で直木賞。他に「山椒魚」「多甚古村」「黒い雨」など。1966年文化勲章。1993年没、95歳。小説、挿絵、詩画集、水彩

一筆斎文調 (いっぴつさい・ぶんちよう/生没年不詳)

はじめ狩野(かのう)派を石川幸元にまなび、のち浮世絵に転じて、明和-安永(1764-81)のころ江戸で活躍。その役者絵は勝川春章との合作「絵本舞台扇」で評判となった。美人画は鈴木春信の画風にちかみながら、より写實的。磯田湖竜齋との合作もある。弟子に頭光(つむりのひかる)らがいる。**江戸中期の浮世絵師**

今井 彰 (いまい・あきら/生誕年不詳～2001年)

慶應大学経済学部卒、フランス語が得意。医学書専門の克誠堂出版の代表取締役社長。瀧口修造、遠藤周作、実川暢宏と交友。『本郷昔語り』6話まで発刊。2001年没。**前衛絵画のコレクター**

今井朝路 (いまい・あさじ/1896～1951年)

神戸市生れ。度量計測器製作販売輸出業を営む今井善兵衛の次男として誕生。1912年上京して日本画家の尾竹竹坡、国観兄弟のもとで学ぶ。15年に神戸に戻り個展を開催。川西英と親交を結び、油彩画を始める。詩、短歌、俳句もつくる。19年劇団「パルナス座」を結成。その後ヨーロッパへ遊学、パリの画塾で学ぶ。1951年没、55歳。**日本画、洋画**

今井 麗 (いまい・うらら/1982年～)

神奈川県生れ。2歳から6歳まで日本講話学校に通う。父は油絵画家の今井信吾。2004年多摩美術大学美術学部絵画学科油画専攻卒。09年多摩美術大学大学院美術研究科博士課程を満期退学。12年シェル美術賞本江邦夫審査員奨励賞。16年植本一子のエッセイ『かなわな』の装画を担当し、バタートーストの絵が広く知られるきっかけとなる。17年虎屋のやわらか羊羹「ゆるるか」のリーフレットに作品が掲載。18年初の画集『gathering』を刊行。**洋画**

今井景樹 (いまい・けいじゅ/1891～1967年)

三重県生。京美専卒、今尾景年に師事し、円山派を学ぶ。花鳥画を得意とした。1967年没、76歳。**日本画**

今井小藍 (いまい・しょうらん/1859～1922年)

高知県生れ。幼いころから紺屋の父・今井如藍に南画の手ほどきを受け、1871年河田小

龍の門に入り、小龍の次女・小桃とともに絵を学んだ。小龍の高弟として知られ、よく似た画法といわれる。門人に吉永梅里、小川窓月、若尾瀾水らがいる。1922年没、64歳。**日本画**

今井伴次郎 (いまい・ばんじろう/生没年不詳)

群馬県生れ。1911東美図画師範卒。東京府立第三女学校教諭。28年帝展に「勝浦海岸」を出品。他に「浅間連山」などの作品を残している。**洋画、美教**

今井文二 (いまい・ぶんじ/1945年～)

大分県生れ。1968年京都市立芸術大学日本画科卒。70年同校美術専攻科卒。70年新制作春季展に入選。新制作協会日本画部を経て創画展で作品を発表。「卓上」シリーズで評価を高める。81年京都日本画家協会選抜展で佳作賞。90年創画展で創画会賞。92年のち賛歌—日本画百人展でも優秀佳作賞。創画会准会員。**日本画**

今井政之 (いまい・まさゆき/1930～2023年)

大阪生れ。広島県立竹原工業学校卒業後、岡山県備前市に赴き備前焼の修行を始める。1952年京都に移り、初代勝尾青龍洞の門に入り楠部彌弌に師事。苔泥彩とよばれる独特の技法を生みだし、現代陶芸界に独自の領域を開拓。花や魚の模様を象嵌する技法の第一人者として知られ海外でも高い評価を受けている。文化勲章。公益社団法人日展名誉顧問、日本芸術院会員、国際陶芸アカデミー会員。京都府美術工芸家協会理事、社団法人日展常務理事、財団法人京都文化財団理事。2023年没、93歳。**陶芸**

今尾景祥 (いまお・けいしょう/1902～1993年)

京都生れ。京都市立美術学校卒。今尾景年の養嗣子。その画法を受け継ぐ。画壇にはあまり所属せずに個展を中心とした制作活動。皇室献上数回など高い評価を得た。各寺院の襖画を担当し、代表的な仕事では久保田金僊とともに京都黒谷の金戒光明寺方丈の襖絵「金地襖絵(虎図)」を揮毫。1993年没、91歳。**日本画**

今中クミ子 (いみなか・くみこ/1939年～)

大阪生れ。1965年芦屋市展で吉原治良の目にとまり、65年具体美術展へ出品、会員。具体美術協会在籍期間は1965～1972年。発泡スチロール板の支持体のうえ、赤や

青や黄の金属板が渦巻き状に埋め込まれたその作品は、見る角度によって様相を変え、イメージを固定させない。「オブティカルな」という評価は、この時期の具体の関心がどこにあるかも教えてくれる。69年グタイピナコテカで個展を開催した際には、展示室に紐を張りめぐらせる作品を発表。「ヒモによってもたらされる関係の図式」そのものを提示しようとするその試みは、同時代の、環境芸術の傾向に対する今中なりの応答。**洋画、具体、立体**

今中素友 (いまなか・そゆう/1886～1959年)

福岡市生れ。はじめ上田鉄耕に師事し、日本美術協会に入選する。1905年上京水上泰生の勧めで川合玉堂に入門、08年文展に入選し、その後も文展、帝展に何度も入選、無鑑査、戦後は日展委嘱。戦前期に博多築港記念博覧会や筑前美術会、福岡県美術協会展にも参加するなど故郷にも足跡を遺した。情趣に満ちた花鳥風月を優美に描いた。1959年没、73歳。**日本画**

今橋理子 (いまはしりこ/1964年～)

東京生れ。1987年学習院大学哲学科美術史専攻卒、同大学院に進み、93年博士後期課程満期退学。94年学習院大学より哲学博士の学位を取得、論文は「江戸時代花鳥画の研究 - 「写生」の認識と同時代博物図譜」。日本学術振興会特別研究員、東海大学専任講師。95年博士論文を刊行した『江戸の花鳥画』でサントリー学芸賞、芸術選奨新人賞。学習院女子大学助教授、2007年教授。国際日本文化研究センター客員助教授。2010年『秋田蘭画の近代』で和辻哲郎文化賞。秋田蘭画の研究から始まり、近世大和絵を専攻。**美史、学芸員、美教**

今森光彦 (いまもり・みつひこ/1954年～)

大津市生れ。写真を独学で学び、1980年代フリーランスとして活躍。以後、琵琶湖を望む田園にアトリエを構え、自然と人との関わりを「里山」という概念で追う一方で、世界各国を訪ね、熱帯雨林から砂漠まで広く取材。第20回木村伊兵衛写真賞、第28回土門拳賞、第48回毎日出版文化賞、第42回産経児童出版文化賞大賞。写真集に『里山物語』、『湖辺』、『今森光彦・昆虫記』、『今森光彦フィールドノート 里山』。写真集『スカラベ』、『里山—生命の小宇宙』(クレヴィス)出版。**写真**

維明周奎 (いめい・しゅうけい/1731～1808年)

若狭(福井県)の人。若州大成寺の物外について得度し、その後、相国寺山内慈雲院の大典頭常(1719～1801)について文字を学び、山内光源院16世の席を嗣ぐ。相国寺第百十一世として出世した人物。また維明は相国寺と関係の深かった伊藤若沖(1716～1800)に画を学び、中でも梅を描くことに優れた。江戸時代後期の臨済宗の僧、梅の画を描いた。1808年没、77歳。**江戸期の画僧**

入江早耶 (いりえ・さや/1983年～)

岡山県生れ。2009年広島市立大学大学院芸術学研究科博士前期課程修了。09岡本太郎現代芸術賞に入選、12年 shiseido egg 賞。入江は二次元のイメージを消しゴムで消し、その消しゴムカスを用いて立体を作り上げるアーティストです。**現代美術(立体、洋画)**

入江之介 (いりえ・しかる/1862～1935年)

福岡県生れ。吉嗣梅仙に南画を学び吉嗣拝山にも兄事、はじめ馬溪と号し、詩書画に堪能であったという。また、途中頭山満とともに国事に奔走。田能村竹田に私淑し研鑽に努めたともいう。大阪に住んで制作を重ね、1932年画集『百和楽』を刊行。遺作は極めて少ない。1935年没、73歳。**南画、詩書画**

入江泰吉 (いりえ・たいきち/1905～1992年)

奈良市生れ。1931年大阪に写真店「光藝社」を開く。45年大阪大空襲で自宅兼店舗を焼失、故郷の奈良へ引き揚げる。45年奈良の仏像がアメリカに接収されるとの噂を聞き、写真に記録することを決意。以来、奈良大和路の仏像や風景、伝統行事の撮影に専念し、『大和路』(東京創元社、1958年)をはじめ、『入江泰吉写真全集』(全8巻、集英社、1981年)など数多くの写真集を刊行。第24回菊池寛賞、勲四等瑞宝章。1992年没、86歳。92年奈良市写真美術館(現 入江泰吉記念奈良市写真美術館)開館。**写真、個人美術館**

入江為守 (いりえ・ためもり/1868～1936年)

京都生。冷泉為理の三男。貴族院議員、東宮侍従長、侍従次長の後、皇太后宮大夫兼御歌所長となる。余技として詩歌書画を楽しむも、一定の師をつくらず自ら学んだ。**書画、日**

本画

入江西一郎 (いりえ・ゆういちろう/1921～2013年)

京都生れ。父は入江波光。1958年山口華楊の画塾、晨鳥社に入門。63年新日展に「禿鷲」で入選。以後改組日展で受賞。99年日展評議員、2001年参与。2000年京都府文化省功労賞受賞。2013年没、92歳。 **日本画**

入野忠芳 (いのの・ただよし/1939年～)

広島市生れ。1945年原爆投下により被爆。62年武蔵野美術大学卒。75年現代日本美術展で大賞。2002年文化庁特別派遣芸術家在外研修員。06年広島文化賞。11年目黒区美術館の「原爆を視る」展に15才から30才までの油彩を出品予定だったが、配慮、同展は中止。 **洋画**

岩井昇山 (いわい・しょうざん/1870～1953年)

東京生れ。谷文晁派の画家吉沢雪庵に南画を学び、ついで松本楓湖の画塾安雅堂に入塾、歴史画を師事。1902年日本絵画協会日本美術院連合絵画共進会、13年表装競技会などの展覧会のみに参加、孤高の立場をとっていたと言われ現存作品も非常に少ない。1953年没、83歳。 **日本画**

岩井泉流 (いわい・せんりゅう/1714～1772年)

江戸に住んだ紀伊藩のお抱え絵師。紀伊藩6代藩主の徳川宗直に登用された人物です。泉流が江戸の狩野派で学んだことをよく示します。1772年没、58歳。 **江戸時代の絵師**

岩尾光雲斎 (いわお・こうんさい/1901～1992年)

別府市生れ。1914年橋本啓治郎竹工所に入門。17年独立。20年愛媛県松山市の浜田竹工所に入所。25年以来、各種の展覧会に出品し、度々高位入賞。35年商工省工芸展入選。80年個展「岩尾光雲斎竹芸展」を別府市で開催。大正後期より後進の指導・育成、竹芸産業の振興にも尽力し、その永年にわたる功労に対し県や市から再三顕彰された。69年卓越技能保持者優秀技能賞。87年大分合同文化賞。1992年没、91歳。 **工芸(竹)**

岩男 順 (いわお・じゅん/1914～1988年)

ソウル市生れ。川端画学校を経て、1939年東京美術学校彫刻科卒。戦後、大分県美術展や二紀展に作品を発表し、二紀会同人賞、選抜展佳作賞、82年二紀会会員。大分県美術協会彫刻部長、同会副会長を歴任し、大分大学教授として後進を育成。1988年没、74歳。 **彫刻、美教**

岩尾善幸 (いわお・ぜんこう/1953年～)

大分県生れ。早くから県美展やコンクール展に入選、受賞して注目を集める。しばらく制作を休止するが、1992年以降活動を再開し、自由美術展を中心に安井賞展、現代日本美術展、青木繁記念大賞展などコンクール展でも作品を発表。 **洋画**

岩尾秀樹 (いわお・ひでき/1924～2013年)

別府市生れ。東京美術学校在学中、学徒動員で仙台予備士官学校に入隊。戦後帰郷し、宇治山哲平と親交。1949、50年国画会展に出品し国画賞。58年国画会会員。73年別府大学教授。94年同大名誉教授。ネギ、スミレ会、七人の会、潮流の会等で話題作を発表するなど、県洋画壇を力強く牽引し続けた。2013年没、89歳。 **洋画、漆工芸、美教**

岩崎令兒 (いわさき・れいじ/1927年～)

東京生れ。敗戦後の焼け野原だった東京で、パリ・オペラ座の写真集に出会い美しいソシエの世界を知り、仕事にしたいと志す。谷桃子バレエ団『白鳥の湖』『ジゼル』ほか。テアトル・エコー上演の井上ひさし全作品など舞台照明。著書『舞台の光と陰』美しい光を得るために』ほか。元日本照明家協会会員、元日本工学院専門学校演劇科講師(1978～1999)。 **舞台照明デザイナー、美教**

岩佐古香 (いわさこう/生没年不詳)

愛知県生れ。京都絵専に学ぶ。谷口香嶽に師事。香嶽没後は竹内栖鳳に師事。京都住。 **日本画**

岩下三四 (いわした・みつし/1907～2000年)

鹿児島県生れ。鹿児島第一師範学校卒、地元で小学校教諭となるが、暫くして上京。熊

岡美彦の洋画研究所に通って絵を学んだ。1933年東光会展に入選、帝展入選。戦後は日展と東光会展を中心に作品を発表し、東光会副理事長などの要職を務めた。鹿児島大学教授。2000年没、93歳。洋画、美教

岩佐なを (いわさ・なを/1954年～)

東京生れ。早稲田大学卒。早稲田大学図書館司書として勤務しながら、創作活動を行う。詩誌「時計店」「生き事」「歷程」同人。銅版画で蔵書票(エクスリプリス)を多数創作。ドローイングや版画で、本や雑誌の挿画・装幀を手がける。季刊「嗜み」(文藝春秋)の山崎正和の連載エッセイに挿画を掲載、多くの作家の挿絵、表紙画、扉絵、挿画を描いた。2016年銅版画家・詩人としての全業績に対して第54回藤村記念歴程賞。画業では、84年新宿住友ビル版画ミニアチュールコンクールでグランプリ。海外の蔵書票(エクスリプリス)、91年チェコスロバキア蔵書票コンクールで協会長特別賞。2022年極小版画コンテストで文房堂賞。竹川画廊(銀座)で定期的に個展を開催した。詩人、版画、ドローイング、挿絵、装填、表紙絵、蔵書票

岩崎貴宏 (いわさき・たかひろ/1975年～)

広島県生れ。2003年広島市立大学芸術学研究科修了、05年エジンバラ・カレッジ・オブ・アート大学院修了。歯ブラシ、文庫本の葉、シャーペンの芯など身の回りにあるものを使って建築物を模した、繊細な立体作品を制作。本を建設中のビルに見立て、付属の葉を解いてクレーンを組み立てた「テクトニック・モデル」シリーズ。「リフレクション・モデル」シリーズを発表。第57回ヴェネチア・ビエンナーレ(2017)日本館の代表として出展し、「逆さにすれば、森」展を開催。そのほかの主な個展に、「ひかりは星からできている」(URANO、東京、2017)。現代美術、立体

岩田幸助 (いわた・こうすけ/1911～2007年)

山形県生れ。1928年兄が開業した写真館を手伝い、秋田市内百貨店の分店スタジオを担当。戦後『カメラ』など写真誌の月例コンテストで入選。土門拳、木村伊兵衛が提唱したリアリズム運動に共鳴、特に木村に私淑し、秋田での木村の撮影に同行し協力。52年<秋田写真家集団>結成に参加し事務局を担当。54年<集団秋田>の中心的存在として活躍。兄の岩田友記や八木下弘と共同で岩波写真文庫の『男鹿半島』(55年)『秋田県-新風土記-』(58年)の撮影を手がける。また、長年撮影を続けていた『山の分教場』が、55年日本写真美術展で

文部大臣賞、翌年報道写真賞。地元秋田でアマチュア写真家たちの指導者的役割を果たした。2007年没、96歳。写真

岩館智義 (いわだて・ともよし/1925～2016年)

秋田県生れ。戦後、上京して一水会の木下孝則に師事。一水会会員賞・会員佳作賞などを受賞。郷土でつちかわれた、清らかで、豊かな自然観がこじみでる風景画を得意とする。一水会会員。2016年没、91歳。洋画

巖谷小波 (いわや・さざなみ/1870～1933年)

東京生れ。尾崎紅葉らと硯友社を結成。のち創作童話を発表。また、おとぎ話の口演にも力を注いだ。童話「こがね丸」、童話集「日本昔噺」「世界お伽噺」など。1993年没、66歳。児童文学者・俳人

岩谷 徹 (いわや・とおる/1936年～)

福島県生れ。福島県立安積高等学校卒、東京水産大学(現在の東京海洋大学)に入学した。24歳で郡山市へ帰省。71年35歳でフランスに渡り、パリの屋根裏で28年間一度も引越す事なく生活し、150点のメゾチントを作成した。それらの作品のサイズは中から小作品が多く、カラー作品は主版ばかりでなく他のすべての色版もメゾチント技法を使った。35年間で大作20点を含む30数点の能面シリーズを完成させた。1999年に帰国。版画

いわむら・かずお (いわむら・かずお/1939年～)

東京生れ。1964年東京芸術大学工芸科卒。1970年『ぶくぶくのえほん』を発表、絵本作家としてスタート。83年『14ひきのシリーズ』がはじまる。『14ひきのあさごほん』で絵本こつぽん賞。85年『14ひきのやまいも』で小学館絵画賞。86年『ひとりぼっちのさいしゅうれっしゃ』でサンケイ児童出版文化賞。91年『トガリ山のぼうけんシリーズ』がはじまる。97年『かみがえるカエルくん』で講談社出版文化賞・絵本賞受賞。98年栃木県馬頭町に『いわむらかずお絵本の丘美術館』を開設。絵本、わたくし美術館

岩本和子 (いわもと・かずこ/1935年～)

1939年以降茅ヶ崎に住み、水彩画家・三橋兄弟治などに指導を受けた。東京芸術大学

(美術学部絵画科油画専攻)卒。1970年以降は個展をおもな作品発表。タイ、インドを訪れ、得たモチーフなどによる作品を制作。71年の個展の折、美術評論家の植村鷹千代からインドにゆくことをすすめられます。神奈川県女流美術家展にて神奈川県立近代美術館賞、同館の買い上。洋画

岩尾雪峰 (いわお・せつぽう/1808～1852年)

福井県生れ。越前福井藩士。早瀬蘭川にまなぶ。江戸詰めめるとき藩邸の襖絵をえがく。1852年没、45歳。江戸後期の絵師

岩壁富士夫 (いわかべ・ふじお/1925～2007年)

神奈川県生れ。東京美術学校日本画科卒。日本美術院同人。東京美術学校日本画科を卒後は奥村土牛、小谷津任牛に師事。日本美術院展に出品。1959年同院会友に推挙、75年美術院賞。77年から7年連続で奨励賞。83年横山大観賞、日本美術院同人、92年内閣総理大臣賞。2007年没、82歳。日本画

岩田 崇 (いわた・たかし/1942年～)

石川県生れ。1965年金沢美術工芸大学日本画科卒業。同年石川県教員となるとともに制作に励む。57年日府展に入選、82年秋華賞、83年評議員。84年今野忠一に師事し、86年再興院展に入選、93年奨励賞。日本美術院院友。日本画、美教

300

岩永てるみ (いわたが・てるみ/1968年～)

大分県生れ。1993年愛知県立芸術大学大学院修了。95年再興院展で入選(97年院友、2003年奨励賞、07年天心記念茨城賞、08年奨励賞)。2000年東京藝術大学大学院博士課程修了、個展(スルガ台画廊)開催。05年愛知県立芸術大学助手(06年講師、09年准教授。08年東山魁夷記念日経日本画大賞展に出品。日本画、美教

岩淵芳華 (いわぶち・ほうか/1901～1956年)

新潟市生れ。1915年上京し松本楓湖に学ぶ。26～29年中国旅行。31年山口蓬春に師事。32年帝展で入選。43年新文展で特選・47年日展で特選。48年下館市に移住。51年日展委嘱。53年日展審査員。東京で没、55歳。日本画

岩宮武二 (いわみや・たけじ/1920～1989年)

鳥取県生れ。1938年鳥取県立米子商蚕学校商業科卒、阪急百貨店に入社。1940年、丹平写真倶楽部に入会。45年大阪でフリーランスの写真家。55年岩宮フォトスを設立。関西を拠点に広告写真家として活躍する一方、精力的に作品を発表。66年大阪芸術大学教授・写真学科長に就任。1989年没、69歳。主な写真集に『かたち 日本の伝承 I・II』(美術出版社、1962年、日本写真協会賞年度賞)、『京 kyoto in KYOTO』(淡交新社、1965年、毎日芸術賞)、『宮廷の庭 I・II・III』(淡交新社、1968年、芸術選奨文部大臣賞)、『アジアの仏像』(集英社、1989年、日本写真協会賞年度賞)がある。写真、美教

岩本拓郎 (いわもと・たくろう/1951年～)

島根県生れ。東京藝術大学在学中より発表をはじめた岩本は、1960年代末より一貫して抽象絵画に挑み続け、東京国立近代美術館をはじめとして、多くの美術館に作品が収蔵されている。和紙に自動車用塗料によりストロークシリーズの他、銅版、油彩、アクリル、水彩等多彩な素材技法を駆使したこれまでのアブストラクトペインティングシリーズに加え、2014年にスタートしたオイルパステルとアレキド樹脂絵具による新シリーズを展開。現代美術、洋画

岩山豊郁 (いわやま・とよく/1929～2001年)

石川県生れ。1951年金沢美術工芸短期大学工芸科漆工専攻卒。56年より金沢市内の中学校で教鞭をとる。彫刻に転じ、58年二紀展で褒賞、65年二紀展で同人推挙。写実に基づいた人物像を制作する。2001年没、72歳。彫刻、美教

院 覚 (いんかく/生没年不詳)

院助の実子または弟子。1114年、関白の藤原忠実が発願した阿弥陀如来像を造立するが、保安元年(1120年)に忠実が関白から失脚すると連座して一線から退く。大治2年(1127年)に行われた日野新堂の仏像修理に参加し活動を再開すると、大治5年(1130年)待賢門院発願の法金剛院の造仏に参加し法橋に昇進、長承元年(1132年)には仏師として当時最高位の法眼位まで昇進。以降、保延2年(1136年)頃まで、法成寺や白川殿などで活動したとされる。平安時代後期の院派仏師

院吉 (いんきち/生没年未詳)

鎌倉末期に同派の院保や院宛の主宰する造像に参加している。天龍寺で釈迦三尊像を造り、1342年に御衣木加持をおこなっている(『天龍寺造営記録』)。天龍寺は後醍醐天皇の冥福を祈り室町幕府を開いた足利尊氏が弟の足利直義等と建立した。院吉の当時の京都における評価の高さが伺われる。文和以降の作品は知られていないが、貞治3年7月の地頭職の沙汰に関する文書があり、5年4月の『石清水八幡宮記録』の院広の記事に「故院吉法印子」とあるので、この間に亡くなったと考えられる。息子に跡を継いだ院広、院遵らがいる。

鎌倉時代後期-南北朝時代の院派仏師

隠元隆琦 (いんげんりゅうき/1592~1673年)

福建省生まれ。中国万福寺で費隱通容の法を継ぐ。逸然性融らの招請で来日。山城宇治に万福寺を開き、日本黄檗宗の祖となる。停滞していた禅宗の復興に貢献し、また、建築、書画、詩文、料理など、多くの分野に明の文化をもたらした。能書家として知られ、弟子の木庵、即非とともに黄檗三筆に数え、江戸前期の渡来僧

院助 (いんじょ/生誕年不詳~1109年)

覚助の子または長勢の子とも伝えられる。のちに定朝の七条仏所より分かれて七条大宮仏所を興す(院派の始まり。仏師の名が院の字で始まるのでこう呼ばれた)。承暦1(1077)年に白河天皇の御願寺である法勝寺金堂の造仏に携わり、法勝寺薬師堂の丈六大威徳明王像の造仏の功で兼慶と共に法橋となる。また長治2(1105)年には、円勢と協力して堀河天皇の病気平癒のため公家御所の諸像を造立し、同年尊勝寺新堂の造仏の功績により法眼に上った。嘉承2(1107)年釈迦三尊像を制作、天仁1(1108)年には堀河天皇の法事のため阿弥陀三尊像を造立するなど、文献に多くの事跡が遺るが、現存する作品は知られていない。平安後期の院派系仏師

314

う

上垣侯鳥 (うえがき・こうちょう/1909~1997年)

兵庫県生まれ。1926年小林柯白に師事。31年院展で入選30回。37年安田靱彦に師事。39年日本美術院院友。47年法隆寺の壁画の模写。49年東京藝術大学教材古画模写。50年院展奨励賞。65院展特別待遇。1997年没、89歳。日本画、水彩

植木須美子 (うえき・すみこ/1921年~)

新潟市生まれ。1961年日本版画協会国画会連続出品、81年日本版画協会会員推挙、新潟女流版画協会創立会員。84年無所属。版画、蔵書票

植木好正 (うえき・よしまさ/1950年~)

大阪芸術大学卒。中高等学校美術教師。1998年南仏旅行時、似顔絵を描き始めた。2024年3月13670人の似顔絵を制作。2024年3月日経分化欄で紹介。似顔絵(水彩)

上島鳳山 (うえしま・ほうざん/1875~1920年)

岡山県生まれ。辻鳳山は祖父にあたる。はじめ木村貫山、のち西山完瑛・渡辺祥益に師事。大阪に住し、人物・花鳥・動物画を能くした。能や狂言など古典芸能に精通した風俗画も多く手掛けた。1920年生れ、45歳。日本画

植田衣洲 (うえた・いしゅう/1855~1925年)

愛知県生まれ。吉田藩御用達植田七三郎(六代敏樹)の二男。松月堂古流の活花を幽照軒五道に学び、垂蔭亭苔石と称した。画は小華に学び、華椿系南画を受け継ぎ、牡丹、菊を得意とした。三ツ相栄昌寺観音堂天井画作成には大河戸晩翠、森田緑雲らとともに小華一門として参加。緑雲、晩翠なきあとは、三河のおける小華門の長老として活躍した。1925年没、7

1歳。日本画、南画

上田臥牛（うえだ・かぎゅう/1920～1999年）

兵庫県生れ。1931年川端画学校卒。小林古徑に師事。46年院展に入選。50年藤沢美術家協会に創立会員。51年再興院展をへて、新興美術院に参加。太陽展ほか出品。61年グループ「62層」を結成し、69年まで参加。日本画の材料を用いて、前衛的・抽象的表現を模索し、日本画の改革に意欲を示した。1999年没、79歳。日本画

上田魚行（うえだ・ぎょこう/1841～1900年）

徳島の人。藩の弓手・上田権右衛門の長男で、彼も弓術家だった。守住貫魚について住吉派を学んだ。俳人としても著名だった。1900年没、59歳。江戸後期-明治期の絵師

上田珪草（うえだ・けいそう/1904～1985年）

大阪生れ。1925年大阪美術学校卒業、郷倉千靱に師事、速水御舟、小林古徑に師事。28年再興院展に入選、以来連続して入選し、39年奨励賞、白寿賞、G賞。36年帝国美術院展入選。37年多摩美術大学助教授に就任。45年戦災により、夫人の郷里七尾市に疎開。日本美術院特待。1985年没、81歳。日本画、美教

上田公長（うえだ・こうちょう/1788～1850年）

大坂の人。松村月溪（一説には長山孔寅（こういん））にまなぶ。1850年没、63歳。作品に「公長画譜」「紀伊国名所図会」など。1850年没、62歳。江戸後期の絵師

植田正治（うえだ・しょうじ/1913～2000年）

鳥取県生れ。郷里である山陰地方の風物を多く撮影。代表作に、被写体をオブジェのように配置し撮影した「砂丘シリーズ」など。演出技法は植田調とよばれ、海外でも高い評価を得た。1995年鳥取県伯耆町に植田正治写真美術館開館。2000年没、87歳。写真、個人美術館

上田鉄耕（うえだ・てっこう/1849～1914年）

福岡市生れ。南画家上田桂圃の子。父に南画の手ほどきを受け、後に京都に出て中西耕

石、日根対山に師事。1887年頃博多矢倉門町に画塾を開き、多くの門弟を育成。富田溪仙や今中素友、富永朝堂らの俊英を世に送り、教育者としての功績は大きい。研究心旺盛で西洋画の長所を取り入れ南画の革新。1899年結成の九州美術協会の中心的存在、1907年東京勸業博に出展、明治期の福岡を代表する日本画家。1914年没、65歳。日本画、南画

植中直斎（うえなか・ちよくさい/1885～1977年）

奈良県生れ。師深田直斎・橋本雅邦・山元春挙。鎌倉で宗教家田中智学の教えを受け、西宮で療養。京都大学で沢村専太郎に美術史の指導を受ける。日本自由画壇結成。帝展推薦。歴史風俗画を得意とした。1977年没、91歳。日本画

上野若元・河村若元（うえの・じゃくげん/1668～1744年）

1668年生れ。学問を好み、特に歴史に通じていた。佐賀藩鍋島綱茂の側近として仕え藩主が没すると画家と製鐔（刀鐔の製作）を生業とした。河村若芝に逸然伝授の北宗画風の漢画と木庵伝授の鐔細工の技法を学んだ。鐔に「華山若芝」と記名したので師の若芝と混同されやすい。山本若麟は実子。1744年没、76歳。江戸中期の絵師、長崎漢画派、漢画派（北宗画派）、製鐔

上野紀子（うえの・のりこ/1940年～）

埼玉県生れ。日本大学芸術学部美術科卒。1973年、『ELEPHANT BUTTONS』（Harper&Row社）で絵本作家デビュー。夫・なかえ氏との作品「ねずみくんの絵本シリーズ」（ポプラ社）をはじめ、『ちいちゃんのかげおくり』（作・あまんきみこ、あかね書房）、『ぼうしをとってちょうだいな』（作・松谷みよ子、偕成社）など多数の作品で絵を手がける。絵本

上野彦馬（うえの・ひこま/1838～1904年）

日本で初めて写真店を開業した人。俊之丞の子。肥前（長崎県）の人。湿板写真術を研究し、1862年長崎で開業。化学書「舎密局（セイミキョク）必携」三巻を訳す。1904年没、66歳。日本で初めて写真店を開業

上野 誠（うえの・まこと/1909～1980年）

長野市生れ。1929年長野中学校卒、東京美術学校に入学、32年に中退。木版画を始めケーテ・コルヴィッツに私淑。37年国画会版画部出品。41年鹿児島屈指の指宿中学教諭、以後終戦まで教諭。52年上京制作活動に入り、52年アンデパンダン展に「原爆展ポスター画稿」を出品。57年東京国際ビエンナーレ、アンデパンダン展、平和美術展、日本版画協会展などに発表。「ケロイドの脚」(55年)、「焼けた五重塔」(57年)、「ヒロシマ三部作(男・女・鳩)」(59年)。作品群は海外での評価も高く、59年のライブチヒ国際書籍版画展で金賞、69年モスクワ、76年ブルガリアで個展。日本版画協会理事。松戸で没、70歳。版画

上野泰郎 (うへの・やすお/1926～2005年)

東京生れ。1948年東京美術学校日本画科卒。山本丘人の指導を受ける。50年春季展で春季賞。51年新制作協会日本画部となって新制作展に出品、52年、54年、57年新作家賞、59年同会会員。68年ヨーロッパ、その後も世界各地を巡遊、66年日本美術家連盟委員、69年多摩美術大学教授。96年日本美術家連盟理事長。98年東京・千代田の聖イグナチオ教会新聖堂のステンドグラスを制作。2001年佐倉市立美術館で「上野泰郎・渡辺学展」が開催。東京で没、79歳。日本画、ステンドグラス、美教

上原古年 (うえはら・こねん/1877～1940年)

東京生れ。梶田半古および松本楓湖の門人。日本画を学んでいる。岡倉覚三(天心)に招かれ5年間、日本美術院に勤務。日本絵画協会・日本美術院連合絵画共進会に出品、絵画審査員に嘱託、宮内省や外務省の用命を受け、作品を制作。紅児会会員、巽画会の評議員、国画玉成会の幹事。1928年新版画に属する制作に渡辺版画店から出版した木版画「道頓堀」が知られている。1940年没、62歳。日本画、版画

上原三三郎・三輪途道 (うえはら・みちよ/1966年～)

群馬県生れ。1989年に東京造形大学彫刻科卒。90年同大学彫刻科研究生修了。94年東京藝術大学大学院保存修復技術専攻修了。伝統的な仏像の制作技法である「木心乾漆技法」を応用して身近なものを制作モデルにしたオリジナルな木彫制作に取り入れている。彫刻

上原六四郎 (うえはら・ろくしろう/1848～1913年)

江戸生れ。1869年開成学校でフランス語を学び、翌年大学少得業生。文部省少助教となり、陸軍士官学校に出仕。軽気球製作御用取扱。82年文部省専門学務局音楽取調掛勤務、東京職工学校勤務、東京商業学校教諭などを歴任。89年東京美術学校数学講師、90年東京工業学校教諭・東京美術学校教諭。90年東京工業学校教授。91年東京音楽学校教授・東京美術学校教授。99年東京音楽学校が再び独立すると、高等師範学校教授と東京音楽学校教授を兼ね、高等師範学校では手工専修科主任教授。1902年退官するが、引き続き東京音楽学校では音楽史・音響学の講師を、東京高等師範学校では手工科の講師。1913年没、65歳。美教、音響学者・美術工芸教育者、手工

植松竹邑 (うえまつ・ちくゆう/1947年～)

東京生れ。1975年別府高等職業訓練校卒。75～82年西部工芸展に出品し、受賞。76～79年日本伝統芸展に出品。80年別府市から神奈川県に転居。93年サントリー美術館大賞展に入選。近年は、高度な技術を駆使した彫刻的な造形作品を多く制作し、海外の美術館に收藏。工芸、造形

植松包美 (うえまつ・ほうび/1872～1933年)

東京生れ。蒔絵師植松抱民の長男。蒔絵を父抱民に、図案を岸光景に学ぶ。古典蒔絵を研究、古典の妙味を生かした伝統的で技巧に優れた作品を制作。本阿弥光悦、尾形光琳に私淑。意匠様式には琳派趣味のものが多く、後年琳派風を脱して独自の様式をつくり上げた。1892年第1次漆工競技会・褒状。1900年パリ万国博・「料紙硯・手箱」出品。1914年東京大正博・銅牌、第11・13回帝展で審査員。東京で没、61歳。漆芸

上村次敏 (うえむら・つぐとし/1934～1998年)

福岡県生れ。1957年武蔵野美術学校入学。59年第3回シェル美術賞。61年丸善石油美術奨励賞選抜展入選。62年第2回太平洋青年美術家展に入選、63年パリ青年ビエンナーレ展に日本代表として宮脇愛子、渡辺恂三、工藤哲巳らと共に、フランス国立近代美術館に出展。同年、現代日本美術展入選、二紀会同人努力賞。82、86年、青木画廊で個展。1998年没、64歳。逆さ絵や錯視を利用した精密な作品が特徴。洋画

上山鳥城男 (うえやま・ときお/1889～1954年)

和歌山県生れ。1906年移民として渡米。南カリフォルニア大を卒業、ペンシルベニア美術アカデミーでまなぶ。46年ロサンゼルスに滞在中の画家幸徳幸衛らとともに日本人美術家団体の赫土社を創設。第二次大戦中は日系人収容所で制作活動をつづけた。1954年ロサンゼルスで没、65歳。洋画

潮田皓哉 (うしおだ・こうさい/1901～1981年)

茨城県生れ。加藤景雲、沢田政広に学ぶ。1946年新文展で入選。46年日展に出品、以後日展に出品。日彫会会員。新槐樹社に出品し、62年新槐樹社委員。東京で没、80歳。彫刻

丑久保健一 (うしくぼ・けんいち/1947～2002年)

東京生れ。1971年東京造形美術学校卒、宇都宮市を拠点に制作。現代彫刻、野外インスタレーションなどの作品を数多く制作。74年第1回北関東美術展で大賞。74年モダンアート協会展で優秀賞。75年彫刻の森美術館大賞展で優秀賞。79年文化庁芸術家在外研修員としてNYに滞在。81年丑久保健一彫刻展(宇都宮市文化会館)。81年栃木県文化奨励賞。85年インスタレーション「円錐から逆円錐 木々の流れ」。2002年没、55歳。彫刻、インスタ

牛島磐雄 (うじま・いわた/1903～1986年)

福岡県生れ。『祝という男』で1940年下半期の芥川賞候補となった牛島春子は妹。1922年頃、来目会に入会、来目会会員。1926年頃から古賀春江と親交を深め、交友は古賀の死まで続く。1975年、長崎で回顧展が開かれる。1986年没、83歳。洋画

歌川国明 (うたがわ・くにあき I/生没年不詳)

三代歌川豊国の門人。父は十四番組御徒士の平沢辰之助でその長男。作画期は弘化から慶応の頃、源氏絵、風俗画、芝居絵、横浜絵、風俗画などを描き、肉筆画も残す。弟は二代目歌川国明。江戸後期の浮世絵師

歌川国明・二代 (うたがわ・くにあき II/1835～1888年)

三代目歌川豊国の門人で初代歌川国明の弟。蜂須賀家の養子となる。1847年三代目豊

国の門に入る。作画期は嘉永頃から没年までにかけて役者絵、相撲絵、風俗画を描いている。万延、文久ごろ製作の横浜絵は初代国明の作と区別がつかない。明治になると蜂須賀国明と称して西南戦争の錦絵などを残した。1888年没、54歳。江戸時代末期から明治時代の浮世絵師

歌川国員 (うたがわ・くにかず/生没年不詳)

嘉永から慶応期に活躍。国貞門人と思われる上方の絵師。画号は一珠斎。風景画「浪速百景」や役者絵・美人画を残す。江戸後期の上方の浮世絵

歌川国清 (うたがわ・くにきよ/生没年不詳)

豊国の門人。幕府の小吏といわれる。俗称安蔵。一楽斎と号す。版本挿絵を描く。罪を得て八丈島(伊豆とも)に流される。浮世絵、挿絵

歌川国貞・豊国Ⅲ (うたがわ・くにさだ I/1786～1864年)

江戸生れ。一世歌川豊国の門人。1844年二世豊国を称したが実は三世目。亀戸豊国と呼ばれる。版画、肉筆画、絵本、挿絵本などを描き、浮世絵師中第一の多作家。妖艶な美人画で活躍、文政期後半には猪首で猫背に描くようになり、豊国襲名後は類型的となる。主要作品『大当狂言内』(1811頃)、合巻『修紫(にせむらさき)田舎源氏』、『蛭狩り』『江戸名所百人美女』。江戸で没、78歳。江戸後期の浮世絵師、版画、肉筆画、絵本、挿絵

歌川国貞・二代・四代豊国 (うたがわ・くにさだ II/1823～1880年)

江戸生れ。初代歌川国貞の門人。はじめ三代歌川国政を師事、ついで師の娘婿となり二代国貞を名のる。師の没後、四代豊国をつぐ。1880年没、58歳。幕末-明治の浮世絵師

歌川国貞・三代・四代歌川国政 (うたがわ・くにさだ III/1848～1920年)

江戸生れ。幼少から初代歌川国貞門下に学び、初代没後は二代国貞に学ぶ。1889年三代国貞を襲名。鉄道など、明治の開化を積極的に取材したことも知られる。1920年没、73歳。江戸末期-明治の浮世絵師、挿絵

歌川国郷 (うたがわ・くにさと/生没年不詳)

嘉永～安政5頃活躍。国貞門人。画号は一曜斎・立川斎・立川。役者絵・風俗画・名所絵を描く。[江戸後期の浮世絵](#)

歌川国輝・貞重（うたがわ・くにてる/生没年不詳）

歌川国貞（三代目歌川豊国）の門人。作画期は文政から安政の頃にかけてで、初めは歌川貞重と称し弘化4年頃まで子供絵、教訓絵などの錦絵を多く描く。1843年～1847年にかけての頃の錦絵「花のえん日商売のあきうど」において「貞重改国輝画」と落款しており、この時期に貞重から国輝に名を改めたと見られる。47年頃に国輝と改名したともいう。国輝と改めてからは嘉永から安政にかけて合巻の挿絵を多く手がけ、美人画、役者絵も描いた。さらに85年以降は二代国彦と名を改め、55年の「当世美人花之賑」などに「国輝舎国彦画」と落款している。また歌川芳艶と競って刺青の下絵を描いた。[江戸後期の浮世絵師、挿絵](#)

歌川国輝・二代・国綱・一蘭斎国綱（うたがわ・くにてる II/1830～1874年）

三代目歌川豊国の門人。文久ごろから二代目歌川国綱または一蘭斎国綱と称し作画活動をし始め、1865年頃国輝と改めた。国綱の時代には諷刺画や街道物、役者絵などで活動。国輝となって以降は四代目歌川国政との合作「東京十二景」をはじめとして「東京名所図絵」、「東京名勝」など開化絵を描く。「東京汐留鉄道蒸気車通行図」のような鉄道絵もかなり多く、蒸気機関車の描写は他の絵師よりもずっと精緻に観察して描いた。73年文部省が教育目的の錦絵104枚を発行し、「文部省製本所発行記」との朱印が押され、うち30枚は「曜斎国輝」のものである。73年ウイーン万博に「座敷日曜道具尽」を出品。1874年没、45歳。[江戸末期-明治の浮世絵師](#)

歌川国利・榎樹邦年（うたがわ・くにとし/1847～1899年）

三代目歌川豊国の門人。三代目豊国没後は二代目歌川国貞の門人。歌川の画姓を称し、1884年からは榎樹邦年とも称した。作画期は慶応から明治29年頃にかけてで、74年頃から銀座の風景、鉄道馬車、三井銀行などの名所絵の他、開化絵、切組絵、風俗画、また銅版の地図も描いている。1899年没、53歳。[明治時代の浮世絵師、銅板地図](#)

歌川国富（うたがわ・くにことみ/生没年不詳）

文政天保期に活躍。二代目豊国門人。画号は、富信・花川亭。役者絵・美人画を描く。[江](#)

[江戸後期の浮世絵師](#)

歌川国虎（うたがわ・くにこら/生没年不詳）

活躍期は文化から天保(1804—1844頃)期。生年不明(安政頃60余歳といふ)初代豊国の門人で、文化、天保期に作画があり、天才肌の絵師で生涯、独身を通した。また、師の代筆をつとめたともいわれ、残された作品は極めて少ない。特異の洋風風景画を制作。[江戸後期の浮世絵](#)

歌川国直・初代（うたがわ・くになお I/1795～1854年）

信濃生れ。初代歌川豊国の門下。合巻、滑稽本などの挿絵を制作。美人画、役者絵、洋風の風景画を描く。1854年没、60歳。[江戸後期の浮世絵師](#)

歌川国長（うたがわ・くになが/生没年不詳）

享和から文政年間に活躍。豊国門人。画号は一雲斎。豊国門下では、国政に次ぐ高弟。役者絵のほか、浮絵作品もある。[江戸後期の浮世絵師](#)

歌川国政（うたがわ・くにまさ/1773～1810年）

会津生れ。紺屋で働いたが役者の似顔が得意、初代歌川豊国に入門。1796年ごろから作画。錦絵では役者似顔絵が主、美人画にも佳品。99年の絵本『俳優楽室通』では師と合作する。1805、6年画業を廃した。その後は役者似顔の面を製造販売したといふ。1810年没、37歳。[江戸後期の浮世絵師、絵本](#)

歌川国政・四代、歌川国貞・三代（うただわ・くにまさ IV/1848～1920年）

江戸生れ。初代歌川国貞門下に学び、初代没後は二代国貞に学ぶ。1889年三代国貞を襲名。国貞襲名以降は豊斎、芳斎などと称した。鉄道など、明治の開化を積極的に取材したことでも知られる。1920年没、72歳。[江戸末期から明治の浮世絵師](#)

歌川国丸（うたがわ・くにまる/生没年不詳）

文化文政期に活躍。豊国門人。画号は、一円斎・五彩楼・軽雲亭・彩霞楼。美人画と浮絵を得意とし、版本挿絵も多い。[江戸後期の浮世絵師、版本挿絵](#)

歌川国麿 (うたがわ・くにまる/生没年不詳)

国貞門人。菊越名は菊太郎、初名房広のち国麿。天保後期～明治初期活躍。号は一円齋、松蝶楼、麿丸など。錦絵を得意としただけあって、多色摺りで江戸色を使用した。主な作品に「写生猛虎の図」「清国人図」などがある。**江戸後期・明治の浮世絵師**

歌川国盛・二代 (うたがわ・くにもり II/生没年不詳)

天保後期～万延期に活躍。国貞門人。画号は春升・胡蝶園・胡蝶庵・一宝齋・一龍齋など。**江戸後期の浮世絵師**

歌川国安 (うたがわ・くにや/1794～1832年)

江戸生れ。初代歌川豊国の門人。作画期は文化から没年にかけてで、1808年の役者絵に「豊国門人安画」と落款、豊国に入門、当初は豊国と同居。役者絵のほか美人画や浮絵、合巻の挿絵、団扇絵、肉筆画を描く。一時、画名を西川安信と称したが後に旧名の国安に戻った。歌川国安、歌川国丸、歌川国直の3人は豊国門下の三羽鳥といわれ、国安がその第一人者であった。1832年没、39歳。**江戸後期の浮世絵師、挿絵、団扇絵、肉筆画**

歌川国芳 (うたがわ・くによし/1797～1861年)

江戸生れ。15歳で歌川豊国の門下。30歳を過ぎ、水滸伝の英雄に取材、一連の作品で脚光。当時の浮世絵師の番付には、名所絵の広重に対し、武者絵の国芳として名前が掲った。筋骨隆々の武者絵を描く一方で、自身の大好きな猫をはじめ、魚や狸などを擬人化したコミカルで愛らしい戯画も多く描いた。反骨と風刺の精神に富んだ作品群は、当時の人々の圧倒的サポートを得、多くの門人が集まり、浮世絵師の最大派閥を形成。その系譜は昭和の日本画家まで連なっています。歌川国芳は、「奇想の絵師」などと呼ばれ、江戸で没、65歳。**幕末の浮世絵師、武者絵、奇想の絵師**

歌川貞虎 (うたがわ・さだとら/生没年不詳)

文政天保年間に活躍。歌川国貞の門人。画号は五風亭。**江戸後期の浮世絵師**

歌川貞秀 (うたがわ・さだひで/1807～1879年?)

千葉県生れ。初代歌川国貞の門人。幕末期、横浜絵、開化絵を手がけたほか、全国各地に取材した鳥瞰による一覽図を数多く描いた。横浜開港後は居留地風俗を多く描き、横浜絵の第一人者といわれた。1879年没、72歳。?**江戸時代後期、明治期の浮世絵師、横浜絵**

50

歌川重清 (うたがわ・しげきよ/生没年不詳)

本名は野沢貞吉。広重の門人で作画期は万延年間から明治期と長い、残されている作品は少ない。明治10年代からは本名の落款もみられ、その正確な構図と広重風には定評がある。号は一栄齋。横浜絵・開化絵を描く。**幕末-明治期の浮世絵師**

歌川豊国 (うたがわ・とよくに I/1769～1825年)

江戸生れ。人形師の息子として生まれる。幼少期に歌川派の創始者歌川豊春の元で学び、役者絵や美人画で絶大な人気を得た。また、錦絵、草双紙、読本などの挿絵の分野でも活躍。門下から国貞、国芳らの有力な絵師も輩出。のち門人豊重が二代豊国を称した。1825年没、57歳。**江戸後期の浮世絵師、錦絵、草双紙、読本、挿絵**

歌川豊国・二代 (うたがわ・とよくに II/1802?～1835?年)

生誕地、生没年不詳。初代歌川豊国門人。文政7年頃師の養子になり、初代の没後二代歌川豊国を襲名した。初代に比べると作品数は少ないが、師の画風をよく受け継いだ美人画、役者絵を描いた。また、風景画にも特色をみせている。1835年没、33歳?**江戸後期の浮世絵師**

歌川豊国・三代 歌川国貞 (うたがわ・くにさだ III/1786～1864年)

江戸生れ。一世歌川豊国の門人。1844年二世豊国を称したが実は三世目。亀戸豊国と呼ばれる。版画、肉筆画、絵本、挿絵本などを描き、浮世絵師中第一の多作家。妖艶な美人画で活躍、文政期後半には猪首で猫背に描くようになり、豊国襲名後は典型的となる。主要作品『大当狂言内』(1811頃)、合巻『彦紫(にせむらさき)田舎源氏』、『蚩狩り』『江戸名所百人美女』。江戸で没、78歳。**江戸後期の浮世絵師**

歌川豊国・四代・国政二代 (うたがわ・とよくに IV/1823～1880年)

江戸生れ。初代歌川国貞の門人。はじめ3代歌川国政を、ついで師の娘婿となり2代国貞を名のる。師の没後、4代豊国をつぐ。1880年没、58歳。幕末-明治の浮世絵師

歌川豊宣 (うたがわ・とよのぶ/1859～1886年)

二代目歌川国久の長男で三代目歌川豊国の孫、歌川国峰は弟。本姓は勝田、俗称金太郎。歌川の画姓を称し香蝶楼、一陽斎と号す。本所亀戸町に住む。明治時代に役者絵、武者絵などを残し、1884年絵画共進会で受賞。1886年没、28歳。浮世絵

歌川豊春 (うたがわ・とよはる/1735～1814年)

江戸生れ。初め京都へ出て狩野派鶴沢探鯨に師事、1764年江戸へ移り、鳥山石燕に入。肉筆美人画を多作、版画では丹絵(たんえ)時代の浮絵を風景画錦絵にも応用。洋風画法を取入れ、ヨーロッパ渡来の銅版画を木版画で復刻した作品も作る。主要作品は肉筆『仲秋名月』、浮絵『洛陽四条河原夕涼図』『阿蘭陀雪見之図』『紅毛フランカイン湊万里鐘響(しょうがい)図』、歌川派の祖。1814年没、79歳。江戸中-後期の浮世絵師、歌川派の祖

歌川豊久 (うたがわ・とよひさ/生没年不詳)

享和から文化年間に活躍。豊春門人。画号は梅花亭。美人画・風景画を描く。江戸後期の浮世絵師

歌川豊広 (うたがわ・とよひろ/1773～1830年)

歌川豊春の門人。芝片門前町に住んでいた。歌川豊春に入門し、一柳斎と称して、1788年頃から作画を始める。初代歌川豊国とは同門であったが、豊広の作品は、豊国より地味で、それが美人画、風景画にも現れている。豊春門下では、豊国に次ぐ実力者であったが、版本の挿絵が活動の主体で、山東京伝や曲亭馬琴らの作品に携わっている。豊国のように役者絵に没頭しなかったため、門人に安藤広重のような風景画家が輩出することになった。広重の師として、若干の風景画も残している。1830年没、57歳。江戸後期の浮世絵師、版元の挿画

歌川豊洋 (うたがわ・とよひろ/生誕年不詳～1829年)

歌川派の祖豊春の門人。同門の初代豊国と双璧とされるが、豊国に比して作画量は少なく、派手さの無い堅実な画風である。錦絵は寡作だが、黄表紙、合巻等の版本の挿絵を多く手がけたほか、肉筆画の優品が知られている。その静穏な画風は、門人の広重に受け継がれた。江戸後期の浮世絵師、版元、挿画

歌川広景 (うたがわ・ひろかげ/生没年不詳)

歌川広重の門人。安政から慶応(1854～1868年)大判錦絵「江戸名所道化(戯)尽」31枚揃制作。現在確認されている作品は65点、いずれも大判錦絵で、版本、摺物、肉筆浮世絵は確認できない。江戸後期の浮世絵師、大判錦絵

歌川広重 (うたがわ・ひろしげ/1797～1858年)

江戸生れ。幼少より絵を好み、15歳で歌川豊広の門下。美人画や役者絵を描いた。「東都名所」のシリーズを皮切りに、数々の風景画を制作、人気絵師となる。天保年間に保永堂から出版された全55図の「東海道五十三次」が大ヒットし、以降数々の東海道の風景画を描きました。花鳥画にも詩情溢れる優品を残し、最晩年に手がけた一大連作「名所江戸百景」では、四季折々の江戸の風景を、独特の視点と豊かな感性で描いた。同シリーズは、ゴッホが模写したことでも知られています。1858年没、61歳。江戸後期の浮世絵師

歌川広重・二代 (うたがわ・ひろしげ II/生没年不詳)

広重の門人で俗称を森田鎮平と云い、号を宣重という。初代の養女お辰(16歳)と結婚したが、のち慶応元年(1865年)妻22歳の時、離縁。その後、しばしば横浜に出向いて絵を売り込み、外国貿易が次第に盛んになっている時期「茶箱廣重」の名で外国人に知られた。幕末-明治期の浮世絵師

歌川広重・三代 (うたがわ・ひろしげ III/1842～1894年)

江戸生れ。初代広重の門人。2代広重と離婚した初代の養女と結婚。2代(実は3代)広重を名のる。横浜絵、東京名勝絵、文明開化絵をおおつかいた。1894年没、53歳。幕末-明治の浮世絵師

歌川広重・五代 (うたがわ・ひろしげ V/1890～1967年)

_四代目歌川広重の次男として生まれ、父が開いた書道塾を継いで経営。団扇絵など若干の作品を残した。「雪月花図」(紙本着色、浮世絵太田記念美術館所蔵)には「五世歌川広重」と落款しており、画面上部に「月」と墨書し中央部に浅草待乳山の雪景、下部に三囲神社と桜を描く。1932年写真師東々亭主人こと戸塚正幸とともに五世歌川広重の名で写真集『江戸の今昔』を刊行。1967年没、77歳。書店、日本画、写真

歌川房種 (うたがわ・ふさたね/生没年不詳)

歌川国貞門下で後に大坂へ移った貞房の門人。安政年間から明治30年代に活躍。画号は一笑斎・一瓢斎・桜斎。風景画・役者絵・源氏絵などがあるが、明治以降は開化絵や新聞挿絵を手がけた。江戸後期-明治期の浮世絵師、挿絵

歌川芳幾・落合芳幾 (うたがわ・よしゝ/1833~1904年)

江戸生れ。1849年歌川国芳に入門。55年安政の大地震で吉原の惨状を錦絵に描き名をあげる。61年歌川国芳が没し、芳幾は遊女屋風俗などを描いて浮世絵師の第一人者のひとり。66年兄弟弟子月岡芳年との無残絵の競作「英名二十八衆句」が発行。72年「東京日日新聞」の発起人となり74年錦絵版『東京日日新聞』に新聞錦絵を書き始め、錦絵新聞流行の先駆者。87年春陽堂から刊行された『新作十二番之内』の口絵を描き、これが木版口絵のはしり。東京で没、72歳。幕末-明治の浮世絵師、錦絵、木版口絵

歌川芳梅 (うたがわ・よしうめ/1819~1879年)

1819年生れ。1847年江戸で歌川国芳に入門。1857年大坂にこもり、役者絵、風景画、風俗画をかいた。1879年没、61歳。江戸後期、明治の浮世絵師

歌川芳員 (うたがわ・よしかず/生没年不詳)

江戸生れ。歌川国芳の門人。歌川の画姓を称し一寿斎、春斎、一川、一川斎と号す。江戸芝露月町に住む。作画期は嘉永頃から1870年頃にかきで、合戦絵、武者絵、花鳥画、草双紙の挿絵などを描いたが、横浜開港後は異人の生活風俗に興味を持ち、横浜絵を手掛けた。ただし鉄道がまだ日本に無い1861年に描いた「亜墨利加国蒸気車往来」や70年の「東京繁栄車往来之図」には、船ともトレーラーともつかない奇妙な汽車を描いた。江戸末期から明治の浮世絵師、横浜絵

歌川芳形 (うたがわ・よしきた/生没年不詳)

文久年間から没年まで活躍。国芳門人。画号は一震斎。武者絵を描き、合作「(御上洛)東海道」に参加。牧野候典医大伴良順の三男。幕末-明治期の浮世絵師

歌川芳艶・初代 (うたがわ・よしつや I/1822~1866年)

江戸生れ。歌川国芳の門人。武者絵を得意とした。刺青の下絵、江戸浅草奥山の生き人形の看板絵で知られた。姓は甲胡。通称は万吉。別号に一栄斎、一英斎。1866年没、45歳。江戸後期の浮世絵師

歌川芳鶴 (うたがわ・よしつる/生没年不詳)

天保から嘉永期に活躍。国芳門人。画号は一声斎。芳艶の友人で、芳艶に次いで国芳門に入る。武者絵を得意とした。江戸後期の浮世絵師

歌川芳虎 (うたがわ・よしとら/生誕年不詳~1880年?)

江戸生れ。歌川国芳の門人。武者絵、役者大首絵を得意としたほか、横浜絵、開化絵をおおくかく。明治初めの錦絵絵師番付では歌川禎秀と人気をあらそった。師の十三回忌のとき同門からしりぞけられ、以後孟斎と号した。姓は永島。通称は辰五郎。別号に一猛斎、錦朝楼。江戸後期-明治の浮世絵師、横浜絵

歌川芳藤 (うたがわ・よしふじ/1828~1887年)

江戸生れ。歌川国芳の門人。横浜絵、武者絵などのほか、おもちゃ絵をかき、「おもちゃ芳藤」とよばれた。1887年没、60歳。幕末-明治の浮世絵、横浜絵

歌川芳房 (うたがわ・よしふさ/生没年不詳)

安政から没年まで活躍。国芳門人。画号は一宝斎。浮世絵

歌川芳宗・二代目・新井芳宗 (うたがわ・よしむね II/1863~1941年)

初代歌川芳宗の末子。13歳で月岡芳年に入門。15歳で西南戦争錦絵を手掛けた。明治錦絵類、小説挿絵、口絵も描く一方、縮緬本の版元として知られる長谷川(西宮与作)より、夜

景や美人などを描いて、外国人向け木版画の制作にも関わった。縁あって新井芳宗を名乗る。1941年没、79歳。錦絵、挿絵、口絵、木版

歌川芳盛 (うたがわ・よしもり/1830～1885年)

歌川国芳の門人。武者絵、時局絵、花鳥画などを描き、とくに時局を諷刺した合戦絵を得意とした。また、三木光齋と号して南画も手がけている。明治以降、一時は内務省に勤務、1885年に退職してからは横浜に移った。横浜絵および輸出向けの花鳥画を描いた。1885年没、55歳。江戸後期、明治の浮世絵師、南画

内倉ひとみ (うちくら・ひとみ/1956年～)

鹿児島県生れ。1982年多摩美術大学大学院芸術研究科絵画科日本画専攻修了。2003、4年文化庁海外派遣研修生としてパリに滞在。アーティストインレジデンス、フランスシテイインターナショナルデザインより招聘。11年アーティストインレジデンス、フランスアルスルステック村より招聘。海外(独、中、仏)で個展。現代美術

内田 晃 (うちだ・あきら/1918～2004年)

埼玉県生れ。1971年第一美術展最高賞。元第一美術常任委員。元白日会員、審査委員。元大調和展会員。個展・外遊歴多数。2004年没、85歳。2005年埼玉県飯能市の名栗庁舎ギャラリーにて「画業70年をたどる内田晃」が開催。2004年没、86歳。洋画、版画

内田あぐり (うちだ・あぐり/1949年～)

東京生れ。武蔵野美術大学日本画科卒。1972年新制作協会展に選。以降74年より、同会展日本画部が独立した創画会展に出品。75、87、91年創画会賞、92年同会会員。創画会春季展で75、77、85～87年春季賞。85年日本画裸婦大賞展で佳作賞。93年山種美術館日本画大賞展で大賞。作品全体に絵具を濃厚に塗り重ねて重厚で奥深い世界観を創造、その真理には現代社会への強いメッセージ性が内包されており人間の在り方を問いかけている。日本画

内田青薫 (うちだ・せいくん/1902～1942年)

東京生れ。1917年川端画学校入学。21年より荒井寛方にて師事。26年聖徳太子展に出

品、27年からは連年院展に発表して院友から推された。37年脱退して新興美術院同人となり、41年再び院展に復帰。1942年没、41歳。日本画

内田稲葉 (うちだ・とうよう/1901～1983年)

鳥取県生れ。大阪に出て菅橋彦に師事。院展を中心に活躍する。関西展、大阪市展などにも出品・入選。有秋会委員、晨光会会員、留珠会員。1983年没、83歳。日本画

内田晴之 (うちだ・はるゆき/1952年～)

静岡県生れ。金属と磁石を主な素材とし、重力と浮遊感の共存する彫刻を多く手がける。近年は、土地の歴史に根ざした継続的な作品により、表現の幅を広げる。1984年日本国際美術展で大賞。97年現代日本彫刻展で大賞。98年中原悌二郎賞で優秀賞。94年 International Symposium of the Open Air Sculpture in Pusan '94(韓国)。2009年越後妻有アトリエンナーレ(新潟)。13年瀬戸内国際芸術祭 2013(香川)。15年 Sculpture by the Sea Bondi 2015(オーストラリア)。2013 瀬戸内国際芸術祭 2013(香川)。彫刻

内村皓一 (うちむら・こういち/1914～1993年)

盛岡市生れ。唐武主宰の「光友クラブ」で指導を受ける。1940年奉天市文官屯 18 部隊終戦まで写真に従事。1946年花巻で印刷業を営むかたわら、49年海外展への出品を始め、50年に英国ロイヤルアカデミーサロンでグランプリ。69年まで2,000点を超える入選、受賞。写真クラブ「皓友会」を結成し後進の指導を務めるかたわら、海外とのネットワークを生かし多くの交流展も開催した。73年岩手日報文化賞。83年花巻市勢功労者。1993年没、79歳。写真

内山雨海 (うちやま・うかい/1907～1983年)

東京生れ。浦上玉堂に私淑。1913年、棟方志功、小泉繁両人と三人展を開催。その後、下村為山に見出され、以後墨画の指導を受ける。書画一致を主張し、墨絵創作を行った。ドイツのレンベルト美術館で個展を開催。レンベルト芸術賞。毎日書道展審査員。東京美術院院長。1983年没、76歳。水墨画

内山 翔二郎 (うちやま・しょうじろう/1984年～)

神奈川県生れ。2008年日本大学藝術学部美術学科彫刻コース卒。日本大学藝術学部賞。09年財団法人北野生涯教育振興会で彫刻奨学金受賞。20年日本大学大学院芸術学研究科造形芸術専攻博士前期課程 彫刻分野修了。13年岡本太郎現代芸術賞・特別賞。
彫刻

内山 懋 (うちやま・つとむ/1940年～)

東京生れ。東京芸大(山口薫教室)、1967年フランス政府給費留学生、パリ国立美術学校留学、M・ブリアンションに習う。69年帰国。個展、グループ展中心に活動。83年池田20世紀美術館で内山雨海・内山懋展。**洋画、絵本挿絵**

宇津宮功 (うつみや・いさお/1945年～)

盛岡市生れ。1967年武蔵野美術大学造形学部卒、同時に渡仏。72年渡航後初の帰国。以後、フランスと日本を中心に、個展やグループ展出品多数。81年フォンダシオン・ヴァトリ一賞(ヴァトリ＝シュル＝マルヌ、フランス)。99年久慈市文化会館(アンバーホール)壁画《生物圏保護区No.257》完成。2007年「渡仏40年－パリで紡がれる神話世界 宇津宮功」展(石神の丘美術館)を開催。**洋画、現代美術、造形、壁画**

内海吉造 (うちみ・きちぞう/1831～1885年)

1831年生れ。鍋屋吉兵衛の子。加賀金沢にすむ。絵を佐々木泉竜にまなぶ。1869年阿部碧海経営の九谷焼の陶画工場工長。80年為絢社の社長となり、画工を養成した。1885年没、55歳。**陶画工**

内海吉堂 (うちみ・きちどう/1849～1925年)

江戸生れ。敦賀の画家、内海元紀の長男。森寛斎、塩川文麟に師事、花鳥、特に鯉図が有名。中国で旧跡名画に接し研さん、大成した。帰国後は南画に転向し、日本南画協会を結成。京都の青年絵画共進会に参加。1925年没、74歳。**日本画、南画**

内海元紀 (うちみ・げんき/1812～1887年)

福井県生れ。柴田善兵衛の長男として生まれたが、後に元孝の養子となり、内海家を継

いだ。京都へ上り、四条派の岡本豊彦に師事し、その後敦賀で活動。壮年期から晩年にかけては南画に傾倒した。1887年没、75歳。内海三代の二代目。**日本画、南画**

烏頭尾精 (うとお・せい/1932年～)

奈良県生れ。1956年京都市立美術大学卒。59年新制作展で新作家賞。60年奈良県文化賞。66年新制作協会日本画部会員。74年創画会設立・設立会員。76京都教育大助教授、82年同校教授。86年京都府立文化芸術会館にて『烏頭尾 精展』1993年京都日本画壇秀作展で優秀賞。96東京国際美術館(現多摩美術大学美術館)にて個展。99年京都市芸術功労賞、地域文化功労者文部大臣表彰。**日本画、美教**

内田百閒 (うちだ・ひゃっけん/1889～1971年)

岡山県生れ。第六高等学校を経て1914年東京大学独文科卒。陸軍士官学校などにドイツ語教官として勤務、34年から文筆業に入った。若くして夏目漱石門下に入り、小説家としては大成しなかったが、一種の精神的な美食家として知られ、ユーモアと俳味に富む唯美主義的な随筆に独特の味わいを発揮した。代表作『百鬼園随筆』(1933)、紀行『阿房列車』(54)、『内田百閒全集』(10巻、72)がある。谷中安規のお伽噺集。1934年 東京で没、82歳。**小説家、随筆家**

宇野 学 (うの・まなぶ/1973年～)

北海道生れ。東京芸術大学の大学院生のときに平川病院(造形教室)と出会い、病んでいると言われる表現者たちの作品と、その自由で創造的な場の空気に衝撃と感銘を受ける。ここにこそ自分が追い求めてきた真の芸術があると確信しボランティアとして通い続け、スタッフとして(造形教室)を切り盛りしている。**造形、美教、美普**

上野未央 (うの・みお/1948年～)

大分県生れ。1971年大分大学教育学部美術科卒。はじめ油彩画を描いていたが、74年に加山又造に師事し日本画に転向。同年創画展に初入選し、以後、同展で作品を発表。現在、創画会会友。**日本画、洋画**

海野美盛 2代 (うんの・びせい II/1864～1919年)

東京生れ。水戸派の彫金家盛寿の子。号は浅庵。幼少より家業を父に習い、絵画を酒井道一・河鍋曉斎・今尾景年に就いて学ぶ。鑄金を土台とした丸彫の人物・動物を得意とした。

1919年没、56歳。彫金、日本画

梅川三省 (うめかわ・さんせい/1911～1986年)

石川県生れ。1934～69年郵便局に勤務するかたわら制作に励む。40年山川秀峰に師事し、のち伊東深水、郷倉千鞆に師事。44年第5回青衿会展に初出品、49年青衿会賞。52年日月社展で奨励賞。56年再興院展に入選、71年奨励賞受賞。日本美術院特待。1986年没、75歳。日本画

梅沢晴峯 (うめざわ・せいけい/生誕年不詳～1864年)

柳河藩江戸詰め御用絵師。江戸木挽町狩野家の晴川院養信のもとで学び、1838年に焼失した江戸城西ノ丸の障壁画復旧にも晴川院の弟子として加わった。生年は不明だが、北島勝永と同世代であったと思われる。晩年は、鬼童小路の西に屋敷を賜って移り住んだとされる。子供が少なかったため、北島勝永の高弟、中島某を養子としたが夭折。その後、養子となった馨は絵師として後を継がなかった。1864年没。江戸後期の絵師

梅田恭子 (うめだ・きょうこ/1971年～)

東京生れ。多摩美術大学美術学部デザイン科グラフィックデザイン専攻卒、96年同大学大学院美術研究科デザイン専攻修了。94年から個展を中心に、東京、新潟、名古屋、大阪、神戸、宇部などで作品展を開催。2010、12、14年新潟絵屋で、16年砂丘館で個展開催。デザイン、版画

梅田俊作 (うめだ・しゅんさく/1942年～)

京都生れ。1980年ころから創作絵本を出版。1991年にアトリエを東京から徳島県に移す。主な作品に『このゆびと一まれ』(講談社・講談社出版文化賞)、『ばあちゃんのなつやすみ』(絵本につぼん賞)、『がまんだがまんどうんち』、『にんじゃごっこ』(以上、岩崎書店)、『しらんぷり』(日本絵本大賞)、『14歳とタウタウさん』(日本絵本賞特別賞)、『月の学校』(以上、ポプラ社)、『まんげつの夜』(佼成出版)、エッセイ『おやじオロオロ子はスクスク』(文芸堂)などがある。絵本

梅田正徳 (うめだ・まさのり/1941年～)

神奈川県生れ。桑沢デザイン研究所卒。1967年イタリアのカステリオーニ事務所にはいる。68年ドイツ国際工業デザインコンペでブラウン大賞。70年オリベッティ社にうつり、コンサルタントデザイナーをつとめる。79年帰国、梅田デザインスタジオ(現ウメダデザインスタジオ)を設立、家具のデザインを手がける。プロダクトデザイナー

梅田佳子 (うめだ・よしこ/1947年～)

福島県生れ。夫との共作に『ばあちゃんのなつやすみ』(絵本につぼん賞)、『ゆきみち』(ほるぷ出版)、『がまんだがまんどうんち』(岩崎書店)、『てんてんおやすみ』(新日本出版社)。長女との共作に『すえっこななちゃんシリーズ』3作(新日本出版社)。絵本

梅津 蕙 (うめつ・かおる/1946年～)

秋田県生れ。1971年東京藝術大学油画科卒。73年同校修士課程修了。73年平野政吉美術研究会講師。30代で来道、岩見沢教育大学で教鞭をとりながら、具象画家として活躍。2012年北海道教育大学退官、全道展事務局長。洋画、挿絵、版画、美教

梅津五郎 (うめづ・ごろう/1920～2003年)

山形県生れ。画業を志して上京し、森田茂・熊岡美彦に師事。東光展と日展を主な発表の場として活躍し、49年東光会会員。1956、64年日展で特選。62年仏留学。東光会副理事長。日展評議員。2003年没、83歳。洋画

梅野 隆 (うめの・たかし/1926～2011年)

福岡県生れ。父親は青木繁の友人で遺作の大半を所持していた梅野満雄。1951年、長崎経済専門学校(現・長崎大学経済学部)卒業後、(株)ブリヂストンに勤める傍ら、父の影響から美術品蒐集を始める。1985年ブリヂストンタイヤ大阪販売株監査役を退任。同年、東京・京橋に画廊「美術研究藝林」を開設。1997年、閉廊。1998年、北御牧村立梅野記念絵画館開館、館長に就任。2004年合併により東御市立となる。今西中通、伊藤久三郎、菅野圭介、吉田卓ら、忘れ去られた実力派の画家を発掘・顕彰することに力を入れてきた。著書に『美の狩人』(西田書店、1986年)、『美神の森にて』(西田書店、1992年)がある。20代後半から30代前半の久留米勤務時代に古賀春江作品の研究・蒐集に傾注し、諸方に散逸していた初期水彩画約50点余と油彩画数点の蒐集を行う。2011年没、85歳。洋画コレクター、画商、美術

100

100

館長

梅原藤坡 (うめはら・とうは/1904～1980年)

京都生れ。京都絵専卒。土田麦僊、石崎光瑠に師事する。帝展入選。1980年没、76歳。

日本画

梅村景山 (うめむら・けいざん/1866～1934年)

京都生れ。鈴木瑞彦、今尾景年に師事。1934年没、68歳。日本画

梅村景山 (うめむら・けいざん/1866～1934年)

京都生れ。初めは鈴木瑞彦に学び、後に今尾景年に師事。1894年日本青年絵画協会絵画共進会で三等褒状。1900年パリ万国博覧会で銅牌。1900年、01年二年連続して一等褒状。木島桜谷等と共に景年門下の逸材として知られた。1934年没、69歳。日本画

梅村翠山 (うめむら・すいざん/1839～1906年)

千葉県生れ。木版彫刻師の3代木村嘉平にまなび、そのかたわら銅版腐食法も研究。1871年神田弁慶橋に銅版彫刻の慶岸堂をひらき、官札製作にも従事。74年銀座に銅石版彫刻会社を創立した。作品に「江戸名所桜田之景色」など。1906年没、67歳。銅版画、銅石版彫刻会社経営

浦上春琴 (うらかみ・しゅんきん/1779～1846年)

岡山県生れ。浦上玉堂の長子。父の脱藩に伴い各地を遊歴した後、居を京都に構え、写生に基礎をおく温和な山水・花鳥を主に描いた。特に、洗練されて気品のある花鳥画の名手として知られた。田能村竹田、頼山陽ら多くの文化人との交流もあり、京都文人画壇に重きをなした。1846年没、67歳。江戸後期の絵師、文人

有楽斎長秀 (うらくさい・ながひで/生没年不詳)

1799年(寛政11)から天保後期(～1830年)に活躍。流光斎如圭(大坂の浮世絵師)の影響を受けた役者絵や美人画を描いて長く活躍。特に合羽摺の第一人者と評される。江戸後期の上方の浮世絵師、合羽摺

上部茁斎 (うわべ・せつさい/1781～1863年)

伊勢生れ。上部光映の養子となり、伊勢神宮外宮(げくう)の権禰直(ごんのねぎ)となる。岡村鳳水にまなび、おおくの門弟をそだてた。また茶にもすぐれた。1863年没、82歳。江戸時代後期の絵師

運慶 (うんけい/生誕年不詳～1224年)

父康慶とともに戦乱で荒廃した奈良諸大寺の復興、造仏につくす。建仁(けんじん)3年快慶と東大寺南大門仁王像を制作、法印となる。写実的で力づよい作風が武士の好みこあい、数おおい注文に応じ、鎌倉彫刻様式を完成させた。作品に奈良円成寺の大日如来像、興福寺北円堂の弥勒・無著・世親像など。1224年没。平安後期-鎌倉時代の仏師

雲谷等爾 (うんこく・とうじ/1615～1671年)

雲谷等益の二男。等與の弟。1637年までに一家を構え、39年法橋叙位。高野山安養院の障壁画制作が知られるほか、55年兄の等與、斎藤等室とともに禁裏造宮に参加。1671年没、57歳。江戸時代初期の絵師

雲谷等與 (うんこく・とうよ/1612～1668年)

雲谷等益の長男。等益没後雲谷宗家を継ぎ「雪舟五世」を称した。周防長門地方をはじめ、大徳寺碧玉庵襖絵を描くなど、京都方面でも活躍した。1639年法橋。67年法眼に叙せられた。等益様式を継承した画風を展開。1668年没、57歳。江戸時代初期の絵師

雲谷等璠 (うんこく・とうはん/1835～1724年)

雲谷等益の四男。1663年宗家であった長男等與の養子となり、68年家督を相続。「雪舟六世」を称した。64年に法橋、75年法眼。1709年隠居。父等益の影響よりは、むしろ雪舟画の影響を色濃くのこした作品を数多く描いている。1724年没、90歳。江戸前期の絵師

海野 経 (うんの・おさむ/1919～1998年)

盛岡市生れ。1941年創元会展入選。42年東京美術学校を繰上げ卒、応召。51年示現会展に出品、以後出品を続ける。53年日展に出品、以後出品を続ける。54年示現会会員。

69年岩手国体聖火台のデザインを担当。74年県教育表彰受賞。81～85年岩手大学教育学部特設美術科教授。84年「海野経ノート」画文集刊行。91年岩手県教育委員会から学術文化事績顕著者表彰。97年「海野経画集」刊行。画集刊行記念「海野経自選展」開催。岩手日報文化賞。98年盛岡市に自作の油彩作品60点を寄贈。1998年没、79歳。洋画、美教

海野燐斎 (うんの・かくさい/1748～1833年)

1748年生れ。備中(びっちゅう)(岡山県)庭瀬藩の江戸家老。釧(くしろ)雲泉と親交をむすび、画家として知られた。詩文もよくし、大窪詩仏らとまじわり、市河寛齋が主宰する漢詩結社「江湖詩社」にくわった。1833年没、86歳。江戸時代中期-後期の武士、絵師

海野清 (うんの・きよし/1884～1956年)

東京生れ。1902年都文館中学卒。11東京美術学校金工科卒。、自営制作に従事し、14年大正博覧会で2等賞。16年東京府金工美術展覧会審査員。19年東京美術学校助教授、32～56年教授。28年帝展に入選、特選。29年審査員、無鑑査出品者。47年帝国芸術院会員、日展審査員、運営会理事。全日本工芸美術家協会々長、日本彫金会々長、日本美術刀剣会常任審査員、彫金会の長老として要職。芸術院会員、文化財専門審議会専門委員、重要無形文化財(人間国宝)。東京で没、71歳。工芸(彫金)、美教

海野三岳 (うんの・さんかく/1851～1911年)

盛岡県生れ。父海野梅岳の影響で日本画の素養を身につけていた三岳は、1878年から4年間、東京府士族宮本三平の元で図画を学ぶ。宮本の師は洋画家川上冬崖であり、その門下には高橋由一や松岡寿など明治期の洋画家たちが多く、三岳も宮本から洋画の技法を学んだ。現在、三岳の描いた洋画は殆どが散逸しており、現存する作品の多くは日本画の中に洋画の技法を取り入れたものである。84年県立岩手中学校勤務。1911年没、60歳。11年亡くなるまで同校で美術を教えた。その教え子には金田一京助や石川啄木の他に、後に洋画家として活躍する五味清吉、清水七太郎、上野広一らがいる。日本画、美教

海野勝珉 (うんの・しょうみん/1844～1915年)

茨城県生れ。初代萩谷(はぎたに)勝平、伯父の初代海野美盛(よしもり)に彫金をまなぶ。1877年第1回内国勸業博覧会に出品し受賞。東京美術学校(現東京芸大)の雇員となり加

納夏雄に師事、94年同校教授。96年帝室技芸員。色彩感のある象眼(ぞうがん)と片切り彫りを得意とした。1915年没、72歳。代表作に「蘭陵王」など。彫金

海野建夫 (うんの・たけお/1905～1982年)

東京生れ。1928年東京美術学校金工科彫金部卒、31年同研究科修了。32年帝展で特選。37年年パリ万国博覧会で銀賞。52年東京学芸大学教授。55年光風会会員。58年日展会員。67年日展で内閣総理大臣賞。70年日本芸術院賞。75年勲3等瑞宝章。東京で没、77歳。工芸(彫金)、美教

海野美盛・二代目 (うんの・びせい-II/1864～1919年)

江戸生れ。水戸派の金工家初代海野美盛の甥・海野盛寿の子。海野勝珉の甥。2代海野美盛を名乗る。後に東京美術学校教授。丸彫の人物、動物が得意。また、日本画を酒井道河鍋暁斎に師事、1889年京都へ赴き、四条派の今尾景年にも学んだ。京都では小倉惣次郎(こついで)について西洋彫刻をも学んだ。甥に飛田周山がいる。息子の海野建夫も彫金家で東京学芸大学教授。1919年没、55歳。彫金、日本画、美教

海野光弘 (うんの・みつひろ/1939～1979年)

静岡市生れ。1952年静岡市立末広中学校に入学。日本教育版画協会所属の教諭・蒔田晋治を紹介され、以後版画制作。静岡商業高校卒業後は日立製作所東京本社に就職したが、20歳になった59年版画家としての道を歩む。1964年日本版画協会賞奨励賞。72年静岡県芸術祭賞。74年スイス美術賞展優秀賞。1979年没、39歳。93年島田市博物館が『海野光弘木版画展』を開催。2000年海野光弘版画記念館開設。1979年没、40歳。版画、美術館

え

栄松齋長喜（えいしょうさい・ちょうき/生没年不詳）

写楽と同時代に活躍。歌麿に勝るとも劣らぬ美人画作品の傑作を描いた。**江戸中期の浮世絵師**

江上瓊山（えがみ・けいざん/1862～1924年）

長崎市生れ。18歳頃より、守山湘鳳(しょうほん)に南画を、学んだ。長崎市立商業学校習字教師をへて、1905年京都師範学校教師。瓊山は大森知事の依頼を拝命し明治天皇・皇后への献上画四君子四幅対を揮毫。京都移住の前年には中国に遊び名蹟を訪ねた。京都においても、亡命清人である羅振玉や富岡鉄齋、桑名鐵城、犬養毅などとの交流の中で風雅を極めた。高島屋呉服店などで積極的に作品を発表し、1913年広島でも「瓊山書画展覧会」が開催された。1924年没、62歳。**南画、書家、美教**

絵金・弘瀬洞意（えきん・ひろせ・どうい/1812～1876年）

高知県生れ。土佐で狩野派を学び、江戸に出て土佐藩御用絵師の前村洞和に師事。土佐藩家老家・桐間家の御用絵師となるが、やがて「贋作事件」で失脚し、町絵師に下った。絵金が様式を確立した「芝居絵屏風」は、地元の祭礼に奉納され、祭りのたびに飾る文化が現代にまで受け継がれる。「絵師金蔵」を略した通称「絵金」は、絵師全般を指す言葉としても流布した。1876年没、64歳。**江戸後期-明治の絵師**

江口勝美（えぐち・かつみ/1936年～）

佐賀県生れ。1952年佐賀県窯業指導所勤務。57年現代日本陶芸展入選(朝日展)。61年西日本工芸展朝日新聞社賞(特選)、日展入選。62年佐賀県展知事賞受賞(翌年全国県展選抜展出品、文部大臣賞)。68年武雄古唐津系・小山路窯(東川登町内田屋)再興す。7

2年日本伝統工芸展最優秀賞(朝日新聞社賞)・日本伝統工芸会正会員。79年日本陶芸展日本陶芸展賞(優秀作品賞)・日本伝統工芸展日本工芸会奨励賞。81年『和紙染剥抜花文陶管』ヴィクトリア・アンド・アルバート美術館(英国)買上げ・日本伝統工芸展鑑査委員。89年国際芸術文化賞。日本伝統工芸展鑑査委員・佐賀美術協会理事審査・日本工芸会正会員。**陶芸**

江崎孝坪（えざき・こうへい/1904～1963年）

長野県生れ。前田青邨に師事する。1927年帝展入選。以後、官展を中心に活躍する。41年新文展特選。47年日展特選)また吉川英治『太閤記』などの小説挿絵も描き、黒沢明監督『七人の侍』の衣装考証を手掛けた。戦後は古典的な歴史画を多く描いた。1963年没、59歳。**挿絵、映画衣装、日本画**

江尻昭子（えじり・しょうこ/1951年～）

新潟県生れ。1974年東海大学芸術専修科(彫刻)卒。90～91年二紀展で奨励賞・優賞。98年絵画彫刻展招待出品(栃木県大田原市街かど美術館)。99年ソコク美術博覧会で総理大臣賞。2000年「江尻昭子彫刻展」新潟県立近代美術館。**彫刻**

江面忠信（えづら・ただのぶ/1959年～）

東京生れ。16歳から金銀砂子の技法を学ぶ。1981年立教大学経済学部卒。86年初個展。95年江面親子二人展「装飾料紙と彩箔」。97年「墨・中川幸夫、彩箔・江面忠信」展。98年名古屋三越美術サロンで「江面忠信扇面に見る彩箔の美」展。**彩箔**

江藤久美（えとう・くみ/1963年～）

大分県生れ。1983年嵯峨短期大学日本画科卒。大分県美術展、大分県日本画展などで作品を発表する一方、新興展にも出品し、2003年新興美術院賞(上地賞)、06年に会員努力賞(巢居人賞)。その創作活動は日本画にとどまらず、アクリルやテンペラ画材を用いた絵画や陶のオブジェなどの制作も行っている。**日本画、洋画、オブジェ**

衛藤勝夷・行高（えとう・しょうい/1790～1831年）

1790年生れ。はじめ矢野良勝に学び、勝夷と号した。のちに衛藤良行の学び、養子とな

り、行高と改称。1831年没、42歳。江戸後期の絵師

衛藤 駿 (えとう・しゅん/1930～1997年)

東京生れ。1953年慶應大学文学部卒。56年大和文華館研究員、64年同館学芸課長。65年米国ロックフェラー三世財団による在欧米東洋美術調査・研究のため欧米に留学し、66年帰国。71年大和文華館を退職して、71年母校慶應大学工学部助教授となり、77年同大学理工学部教授。79年東京大学非常勤講師としてアジアの美術を講じた。82～88年慶應大学日吉情報センター所長。90年慶應義塾大学高等学校長を兼務。90年茨城県歴史館館長となり、91年川崎市民ミュージアム館長。1997年没、66歳。美史、美教、茨城県立歴史館長、川崎市民ミュージアム館長

衛藤晴邨 (えとう・せいそん/1898～1971年)

大分県生れ。18歳の頃より竹田在住の佐久間竹浦に師事し南画を学ぶ。1920年京都に出て田近竹邨、水田竹圃に入門。また関西美術院にも通う。24年日本南画院展覧会に入選。26、27、36年帝展に入選。37年新興南画院をはじめ、42年大東南画院の結成に参加。50年頃大分に帰県し佐伯市に居住。県美術協会などで活躍。1971年没、73歳。南画

江藤日出男 (えとう・ひでお/1936年～)

東京都生れ。1952年東京芸大教授丸山不忘に師事し鑄金技術を学ぶ。61年東京芸大美術学部工芸学科に入学、67年同大大学院を修了、69年福岡教育大学助手、その後2000年まで教授。66年日展に入選、67年日本現代工芸美術展に入選し、以後入選を重ねる。76年日本現代工芸美術展で記念賞。日本現代工芸美術家協会会員となるが、79年退会。79年日本新工芸展で会員賞。日本新工芸家連盟会員。鑄金、美教

江藤 明 (えとう・めい/1929年～)

大分市生れ。1949年大分県師範学校本科卒。1953年国画会展に入選。53年大分県美術展で大分県知事賞。61年大分前衛美術会、80年「潮流の会」に参加。83年国画会展で国画会会員。89年別府市美術館長。別府大学で教壇に立った。洋画、美教、美術館長

衛藤良行 (えとう・よしゆき/1761～1823年)

肥後細川藩の絵師。11歳から矢野雪叟に学ぶ。柳川藩御用絵師北島勝永の兄弟子にあたる。水墨画から金箔、金泥を用いた華麗な着色画まで幅広い画域を持ち、矢野派の絵師として江戸後期に活躍。1823年没、62歳。江戸後期の絵師、水墨

榎 忠 (えのき・ちゅう/1944年～)

香川県生れ。独学で絵画を描き始め、1970年に結成した「ハプニンググループ ZERO (72年 JAPAN.KOBE.ZERO と改称)」では神戸の街を都市劇場に見立て、集団で繰り広げるハプニングを先導。万博のシンボルマークを体に焼き付け、銀座をふんどし姿で闊歩する《裸のハプニング》など単独のパフォーマンスも次々で行う。グループ脱退後の77年、自宅を会場とした個展「EVERYDAY LIFE MULTI」を開催。自らの体毛の半身分を剃り落とした姿(=半刈り)で街や電車の中を歩き回る、あるいはハンガリーへ出向くなどのパフォーマンスを行った。80年頃より、大砲や銃などの兵器を模した作品や、無数の金属部品を旋盤で磨き積み重ねたインスタレーションを発表。全長数十メートル、総重量数十トンといった大規模な作品も数多く手がける。国立国際美術館 開館 40 周年記念展「トラベラー:まだ見ぬ地を踏むために」(国立国際美術館、大阪、2018)など。(引用美術手帳)現代美術、パフォー、ハプニング、立体、インスタ

榎戸喜子 (えのきど・よしこ/1909～1969年)

長野県生れ。1931年女子美術専門学校日本画科卒。49年茨城県美術展に出品。52年創元展で受賞。54年茨城造形グループ結成。55年創元会会員。60年創元会退会、無所属。66年茨城県芸術祭第二部審査員。67～68年日本文化フォーラム主催のヨーロッパ文化使節団としてヨーロッパ各地を巡る。東京で没。60歳。日本画

榎本英子 (えのもと・えいこ/1942年～)

東京都生れ。1964年東京芸術大学美術学部彫刻科卒。66年東京芸術大学大学院修了。71年現代国際彫刻展コンクール賞(箱根)。78～88年アジア・アフリカ・ラテンアメリカ美術家会議・主催展参加。92～2000年山梨在住作家(CWY)展(クラブ)。97年佐谷画廊で個展。96～2000年峡北ブリーズ展(山梨 韮崎)。彫刻

榎本和子 (えのもと・かずこ/1930年～)

兵庫県生れ。49～51年美術文化展に出品。戦前から前衛絵画やシュルレアリスム写真で知られていた阿部展也に師事。福島秀子や漆原英子、草間彌生らと共に若手女性画家として、戦後の前衛を牽引した。58年シュル美術賞展佳作。79年デューラーの多面体に関する論文発表。洋画

榎本康三（えのもと・こうぞう/1955年～）

京都生れ。1977年彫刻家五里攻に師事。80年同志社大学経済学部卒。84年ムーダデザイン事務所設立。86年大阪モード学院インテリアデザイン科講師。87年アルンプラン株式会社一級建築士事務所設立。81年ヘンリー・ムーア大賞展、箱根彫刻の森美術館で佳作賞。82年日本国際美術展(位相曲面 8:1)神奈川県立美術館賞。92年M邸建築設計、静岡県磐田市都市景観賞。97年大宮市 梅林堂建築設計、大宮商工会議所優秀賞。彫刻、建築

江端芳市（えばた・よしち/1899～1986年）

愛知県生れ。小学校教師。1932年小野忠重、武藤六郎らが主宰する「新版画集団」の結成に参加。機関誌である『新版画』（32～35年）に出品。37年国画会展に出品、38年新文展に入選。43年の日本版画奉公会の発足時に会員。神奈川県立近代美術館蔵。1986年没、87歳。版画

江波戸陽子（えばと・ようこ/1988年～）

東京生れ。2011年多摩美術大学 絵画学科油画専攻 卒、13年多摩美術大学大学院美術研究科修士課程絵画専攻 修了。11年第16回福沢一郎賞。21年アワガミ国際ミニプリント展入選、星乃珈琲店絵画コンテスト優秀賞(岡村桂三郎氏推薦)。22年 Independent Tokyo 2022 審査員特別賞(かんの自然氏推薦)。洋画

海老沢東丘（えびさわ・とうきゅう/1905～1995年）

茨城県生れ。1929年太平洋美術学校夜間部に入学、31年卒業。36年山下りんに師事。39年木村武山に師事。43年中村岳陵に師事。46年日展で入選。47年笠間在住作家と常土社設立に参加。59年茨城日画会を結成。茨城県で没、90歳。日本画

海老原暎（えびはら・えい/1942年～）

東京生れ。1965年多摩美術大学絵画科油画専攻卒。72年パリ エコール・デ・ボザールにて2ヶ月間リグラフ研修。2003年「日常の窓シリーズ 2003」(ガレリア・グラフィカbis、東京)。2022年「海老原 暎 日常の窓」(靖山画廊、東京)。版画

海老原東丘（えびはら・とうきゅう/1905～1995年）

茨城県生れ。1929年太平洋美術学校夜間部に入学、31年卒。36年山下りんに師事。39年木村武山に師事、43年中村岳陵に師事。46年日展で入選、47年笠間在住作家と常土社設立に参加。59年茨城日画会を結成。茨城県で没、90歳。日本画

江馬細香（えま・さいこう/1787～1861年）

岐阜県生れ。江馬蘭斎の長女。画をはじめ僧玉湊(ぎょくりん)に、のち浦上春琴にまなぶ。詩は美濃をおとずれた頼山陽に師事。山陽の求婚を父がことわったといわれ、生涯独身をおした。梁川星巖、小原鉄心らとまじわり、詩の結社白鷗社を結成した。1861年没、75歳。江戸後期の絵師、詩人

江馬長閑（えま・ちようかん/1880～1940年）

小西春斎、山本利兵衛に師事し、旧帝展に出品、京都工芸美術協会評議員、京都工芸院の同人であった。1940年没、60歳。工芸(漆芸)

江村春甫（えむら・しゅんぽ/生没年不詳）

京都の人。狩野派の鶴沢探鯨(つるざわたんげい)にまなぶ。1790年禁裏造営の際、師とともに障壁画制作にこわった。江戸時代中、後期の絵師

円空（えんくう/1632～1695年）

各地に「円空仏」と呼ばれる独特の作風を持った木彫りの仏像を残したことで知られる。円空は一説に生涯に約12万体の仏像を彫ったと推定され、現在までに約5,300体以上の像が発見されている。円空仏は全国に所在し、北は北海道・青森県、南は三重県、奈良県までおよぶ。多くは寺社、個人所蔵がほとんどである。その中でも、愛知県、岐阜県をはじめとする各地には、円空の作品と伝えられる木彫りの仏像が数多く残されている。そのうち愛知県内で

3,000 体以上、岐阜県内で 1,000 体以上を数える。また、北海道、東北に残るものは初期像が多く、岐阜県飛騨地方には後期像が多い。多作だが作品のひとつひとつがそれぞれの個性をもっている。円空以外にも、多くの和歌や大般若経の扉絵なども残されている。1695年没、63歳。江戸前期の修験僧・仏師・歌人

塩月桃甫 (えんげつ・とうほ/1886～1954 年)

宮崎県生れ。東京美術学校卒。大阪の小学校教師を経て、1915年愛媛師範学校の美術教師として松山に来住。16年文展に入選。彼の在任期間は以後わずかに六年間であるが、後に愛媛県洋画壇の中心人物となる藤谷庸夫、松原一らを育て、本県洋画発展の基盤を築く。21年台北高等学校教授に転任、同地美術の指導者として活躍。戦後郷里に帰り、宮崎大学講師、宮崎県文化賞。1954年没、69歳。洋画、美教

円勢 (えんせい/生誕年不詳～1135 年)

長勢の子ども弟子ともいわれる。円派の祖。法勝寺、鳥羽(とば)証金剛院、尊勝寺などの仏像を制作し、康和4年法印となる。ほかに高野山大塔、法成寺などのおおくの造仏にたずさわったが、現存するものはない。天永4年清水寺の別当に任じられた。1135年没。平安時代後期の仏師

円地信二 (えんち・しんじ/1925～2015 年)

小松市生れ。1950年金沢美術工芸専門学校卒。50年日展入選。63、72年特選。66年光風会展寺内賞、72年中沢賞、93年文部大臣賞。一貫して人物画を描く。83年北国文化賞、91年石川テレビ賞。91年金沢美術工芸大学を退官。同大名誉教授。金城大学短期大学部美術学科長。2015年没、90歳。洋画、美教

遠藤健郎 (えんどう・たけお/1914～2009 年)

大連市生れ。1933年県立千葉中学卒。39年東京美術学校油絵科卒。学生たちが結成した同人グループ「デ・ザミ」に参加し、高田知明(後に浜田と改姓)らと3年在席時に田辺至が指導する版画教室エッチング部に所属。40～43年美術雑誌社アトリエ社勤務。戦後は中学美術教師を経て、48年～65年千葉市役所教育委員会勤務。戦後は風刺画的に描く。『巷の女』(1976)、『フラメンコ』(1982)、『市役所物語』(1991)、『魚河岸の人たち』(1995)、『景観』1992年

私の千葉市』(1999)などの銅版、石版画集や『白描戯画』(1956)、『てんでしのぎ』(1985)画文集。2005年千葉市美術館で回顧展。2009没、95歳。版画

遠藤教三 (えんどう・きょうぞう/1897～1970 年)

東京生れ。1921年東京美術学校卒。21～44年女子美術専門学校講師。21～30年毎年新興大和絵会に発表し、31～37年まで帝展に出品した。38～41年狩野光雅、長谷川路可と三人展を開き、42、43年文展に出品。戦後は専ら個展により発表した。54年資生堂、56、63年日本橋三越。『墨絵入門』『デザイン的美』『色の理解』『色彩教養』著書。1970年没、73歳。日本画、版画

遠藤てるよ (えんどう・てるよ/1929 年～)

東京生れ。1950年頃より絵本・児童書のさし絵の仕事にたずさわり、61年小学館絵画賞。主な作品に『なしとりきょうだい』『おやゆびひめ』『ゆみ子とつばめのおひか』などの絵本がある。絵本

遠藤利克 (えんどう・としかつ/1950 年～)

岐阜県生れ。1972年名古屋造形芸術短期大学彫刻科卒。70年代半ばより活動を始める。彼のコンセプトにおいて重要な位置を占める水を用いた作品を、75年最初の個展「水をよむ I」において発表。80年代に入り、木や水を素材として、そこに火を通し、円や方形といった簡潔な形態に仕上げた彫刻を制作。ヴェネチア・ビエンナーレをはじめとする数々の国際展に出品。90年代半ばから〈Trieb(欲動)〉シリーズ、2000年代半ばから〈空洞説〉シリーズを展開。彫刻、現代美術

円派 (えんぱ)

平安時代中期から鎌倉時代の仏師の一派。祖は定朝の弟子長勢、三条仏所を形成し京都を中心に活躍。仏師号に「円」の一字を持つことから名付けられ、同じく仏師号の一字に由来する慶派・院派とともに京都に仏所を構え、造仏活動を行う。円派は明円以降、奈良、鎌倉に主流が移り衰微する。平安時代中期から鎌倉時代の仏師の一派

お

及川聡子（おいかわ・さとこ/1970年～）

仙台市生れ。1993年東京造形大学日本画科卒。東京学芸大学大学院修了。2004年の佐藤美術館(東京)では墨と箔による表現を、05年ワッツ・アート・ギャラリー(仙台)の個展では透明感のある日本画を発表。2006年宮城県芸術祭賞。日本画

王 一亭（おう・いつてい/1867～1938年）

清末民初に活躍した実業家・書画家・銀行家・政治家。上海を中心に活動した実業家・銀行家として著名である一方、中国同盟会にも参加した革命派の人物である。また、画家としても優れた業績を残し、仏教徒としての活動も顕著であった。号は梅花館主・海雲楼主・白龍山人。1938年没、66歳。清の画家

王(加藤)欽古（おう・きんこ/1830～1905年）

京都生れ。小田海僊に入門、その後西国(現・山口県)に遊歴・江戸滞在を経て、関東・信越を遊歴、1867年田沼宿(現在の佐野市)の加藤家を相続。高久靄ガイト親交のあった葛生の吉澤家でも滞在・制作。82年「第一回内国絵画共進会」に出品、受賞。小堀鞆音と交流があり、岡田蘇水(文展出品)らを育てた。同時代の田崎草雲(足利)とは異なる要素をそなえていた。1905年没、75歳。南画

王 瑾（おうきん/1718～1810年）

肥前国加島藩家老・板部氏の子。京都で青蓮院宮に仕えたのち、信濃諏訪に隠棲。竹内式部、山県大弼の宝暦・明和事件に関わったためという説がある。1782年高島藩の二之丸騒動に功があり、藩主の厚遇を受けて、以後画作に専念。葡萄図を得意と。1810年没、92歳。江戸時代中、後期の絵師

大河内夜江（おうち・やこう/1893～1957年）

山梨県生れ。京都市立絵画専門学校に学び、菊池契月に師事。大正から昭和にかけて帝展、新文展で活躍し、戦後は京都を拠点に全国各地を遊歴しながら、雄大な山岳風景や溪谷の風景などを描いた。1957年没、64歳。日本画

王 治梅・王寅（おういん）（おう・やばい/1853～1889年）

中国江蘇省南京の人。上海にて画を専業とした。そのころ、上海に来た日本人が注目し、王氏の名声が高くなり、長崎の有志が来遊を請い、これを受けて1877年頃に来崎した。数年間、長崎を基点して各地を歴遊、長崎の南画家たちに多大なる影響を与えた。帰国後は上海に流寓した。山水人物蘭竹を得意とし、とくに米法の雨墨山水に優れる。1889年没、36歳。中国の絵師

大石真虎（おおいし・またら/1792～1833年）

愛知県生れ。はじめ張月樵に師事、のち吉川一溪につき仏画を、渡辺周溪に大和絵をまなんだ。「百将伝」「神事行灯」「百人一首一夕話」など版本の挿絵をおおくえがいた。1933年没、42歳。挿絵、江戸後期の絵師

大泉茂基（おおいずみ・もとき?/1913～1960年）

宮城県生れ。東北学院高等部文科を退学し、版画家を目指す。1949年に我が子のために制作した版画詩集「けやき」を出版。51年にはTVの音楽番組で朗読される詩の原稿を担当。57年には初個展を開催。その後2年間は最も充実した活動を展開し、抽象版画に新境地を開いた。1960年没、46歳。版画

大泉米吉（おおいずみ・よねきち/1910～没年不詳）

宮城県に生まれ、1931年東京美術学校を卒業後、和歌山県、新潟県、東京都、鹿児島県の旧制中学で48年まで美術の教師として勤務。大阪府庁に勤務し、府のポスターや出版物にカットや挿絵を描いた。79年大阪百景展を開いた。毎日新聞がこれを機に十景を選び紙面化した。1980(昭和55)年、毎日新聞社大阪社会部が「大泉米吉作品集 大阪十二景」(絵葉書)30を発行。美教、洋画

大出東臯（おおいで・とうこう/1841～1905年）

江戸生れ。上野(こうずけ)(群馬県)桐生(きりゅう)で前原互瀬について画をまなぶ。20歳のとき江戸にもどって藤堂凌雲の門弟となり花鳥画をおさめた。1905年没、65歳。作品に「風雨牡丹(ぼたん)」など。**江戸後期-明治の絵師**

大井真希（おおい・まき/1995年～）

富山県生れ。2017年多摩美術大学 美術学部工芸学科 陶専攻卒。19年筑波大学大学院人間総合科学研究科 博士前期課程 芸術専攻クラブ領域修了。19、23年いりや画廊(東京)で個展。2017年全国美術公募作品展 Belladonna Art 展・東京都美術館。18年「第54回神奈川県美術展」・神奈川県民ホール。2019年「平成30年度 筑波大学芸術賞茗溪会賞受賞作品展」筑波大学総合交流会館多目的ホール(茨城県つくば市)。**彫塑、彫刻**

大岩オスカル（おおいわ・おすかーる/1965年～）

サンパウロ生れ。1989年サンパウロ大学建築学部卒。東京(1991～2001年)、次NY(2002年～)と拠点を移し、制作活動。都市での生活体験を基盤に、それぞれの土地の環境と向き合いながら制作。2008-09年に東京都現代美術館、福島県立美術館、高松市美術館を巡回する個展を行い、16年の瀬戸内国際芸術祭では、直径12mのドーム内部を油性マジックの描画で埋め尽くすインスタレーションを制作。18年にはサンパウロのJapan Houseで、19年には金沢21世紀美術館で個展開催。**現代美術、洋画、インスタ**

大江霞岳（おおえ・かがく/生誕年不詳～1850年）

紀州生れ。名は一郎。大江龍民の実弟。南画をよくし、小田海僊に師事した。1850年没。**江戸後期の絵師**

大岡雲峰（おおおか・うんぼう/1765～1848年）

江戸生れ。旗本。高芙蓉、谷文晁らに画をまなぶ。山水・花鳥画を描いた。おおくの弟子をもち、初代歌川広重もまなんだとつたえられる。1848年没、84歳。**江戸後期の絵師、博植物画**

大岡春卜（おおおか・しゅんぼく/1680～1763年）

大坂の人。独学で狩野派画風を習得し、大覚寺性応門主の庇護の下、京都を本拠として活躍した。1735年法眼になったと推定される。いわば町狩野を代表する絵師。京都の妙心寺霊雲院の障壁画などの大作を残す一方、絵手本作家として「画本手鑑」、「画史会要」などを出版した。1763年没、83歳。**江戸中期の絵師、狩野派**

大岡 信（おおおか・まこと/1931～2017年）

静岡県生れ。東京大学文学部国文学科卒、読売新聞外報部記者の傍ら旺盛な創作を進めた。63年に新聞社を退社後は65年に明治大学助教授、70年に同大学教授、88年より東京藝術大学教授。50年代から美術評論家活動、56年に東野芳明や飯島耕一ら東京大学時代の仲間とシュウルレアリスム研究会を立ち上げた後、『美術批評』に美術評論「PAUL KLEE」を執筆。同誌の他『みづゑ』『美術手帖』等で活発な美術論を展開。59年に東京・日本橋の南画廊で開催された「フォートリエ展」カタログ作成に協力、同画廊主の志水楠男と知合い、同画廊を通じて国内外の現代芸術家と交流。加納光於、宇佐美圭司、嶋田しづ、サム・フランシス、ジャン・ティンゲリー。自ら版画や水彩画の制作。静岡県で没、86歳。**詩人、美術評、版画、水彩、美教**

大垣禎造（おおがき・ていぞう/1936年～）

京都生れ。京都新制作油絵彫刻所において桑田道夫氏の指導を受ける。仏政府の給費留学生として渡仏、国立パリ美術大学石版科及び、フリードランデル氏の銅版画アトリエに学ぶ。1956年関西新制作展 新作家賞。58年 関西総合美術展 関展賞。京展で市長賞。76年サロンインターナショナルベジエル版画部門銅賞。74年フランスへ移住。83年フランス国籍を取得。フランスの片田舎プレスベシュ村に移住。ロッテガロンヌ県の名誉県民。**版画**

大神宗維（おおがみ・たかゆき/1930～2002年）

福岡市生れ。1955年福岡学芸大学教育学部卒、中学校教員、安永良徳や原田新八郎に師事、彫刻を学ぶ。60年に日展に入選、日展を舞台に活躍し、86、88年特選。大学卒業年の第11回県展での県議会議長賞を皮切りに連続して受賞し、58年県美術協会会員。県内各地にブロンズ像が設置された。また福岡市中学美術研究会会長。2002年没、72歳。**美教、彫刻**

術家協会 会員。独立展で新人賞。2007年独立展 独立賞。08年独立展 会員。洋画

大川一男 (おおかわかずお/1914～2001年)

茨城県生れ。1929年京都図案協会研究生。30年伊東深木に師事。35年茨城会館開館記念美術展で3等賞。49年浦田正夫の指導を受ける。50年小林巢居人の知遇を得る。52年再興新興美術院展に出品、奨励賞、会友推挙。55年新興美術院会員。80年新興美術院理事。82年新興展で文部大臣奨励賞。2001年没、87歳。日本画

大久保一丘 (おおくぼいっきゅう/生誕年不詳～1859年)

神奈川県生れ、遠州横須賀藩の藩士、お抱え絵師として文化年間から安政年間活動。狩野派、四条派の画技を基礎としながら、江戸の司馬江漢および横須賀藩お抱え蘭学者・高森観好より学んだ洋風表現を取り入れ、独特の作品を残す。「真人図」と呼ばれる一連の逼真的な洋風半身人物像により、江戸期の洋風画に重要な足跡を印した。師・江漢にならった洋風富士図の作例も残す。1859年没。江戸後期の絵師、洋風画

大久保玉珉 (おおくぼぎょくみん/1874～1949年)

長崎県生れ。15歳頃に上京し、円山派の画家・川端玉章に師事。同門に平福百穂長崎へ帰郷し、1904～14年梅香崎女学校図画科の教師。東洋日の出新聞にも13年前後に勤めた。同社を退社後は絵画教室を開き後進の指導、個展を中心に活躍。13年閑院宮載仁親王来遊の折、玉珉が猛虎図を御前にて描いたことから、虎の絵が広く知られるようになったという。山本森之助と親しく過ごした。1949年没、75歳。日本画、美教

大久保智睦 (おおくぼともむつ/1978年～)

東京生れ。2007年佐藤国際文化育英財団奨学生、「新人選抜レスポワール展」(銀座スルガ台画廊、東京都)、再興院展に入選、国宝「源氏物語絵巻」(五島美術館蔵) 摸写。2009年東京芸術大学大学院美術研究科博士後期課程(日本画)修了、博士号(美術)取得。11年再興院展で奨励賞、天心記念茨城賞。日本画

大久保宏美 (おおくぼひろみ/1963年～)

横浜市生れ。1986年武蔵野美術短期大学専攻科修了。武蔵野美術短期大学修了制作優秀賞。93年神奈川県女流美術家協会展でQアート賞、会友推挙。97年神奈川県女流美

大久保婦久子 (おおくぼふくこ/1919～2000年)

現代皮革造形界を代表する作家。素材のもつ素朴さと柔軟さを十分にいかしつ、古代文化に想を得た堅牢で幻想的な作品を数多く発表する。1985年日本芸術院会員。2000年文化勲章。2000年没、81歳。皮工芸

大久保坦 (おおくぼゆたか/1924～2008年)

東京生れ。1949～88年湘南学園、湘南学園中学、高校で教鞭。木版画の大家で、日展に入選、日本板画会賞、日本板画院の会長。2008年没、84歳。版画、美教

大熊氏広 (おおくまうじひろ/1856～1934年)

埼玉県生れ。工部美術学校彫刻科でラグーザにまなぶ。1878年銀時計授与。卒業後工部省につとめ、88年渡伊、ローマ美術学校でモンテヴェデに学ぶ。「大村益次郎像」などおおくの銅像をつくり、文展の審査員。1934年没、79歳。1934年没、78歳。彫刻

大倉喜八郎 (おおくらきやちろう/1837～1928年)

新潟県生れ。18歳で江戸に出て、1865年年銃砲店を開業し、幕末、維新の動乱に乗じて販売を拡大。維新後は欧米視察のうえ、73年大倉組商会を設立して貿易および用達事業に乗り出し、台湾出兵、西南戦争、日清戦争、日露戦争の軍需物資調達で巨利。大正期には大倉商事、大倉鉱業、大倉土木の3社を事業の中核とする大倉財閥の体制を確立。渋沢栄一と協力して東京商法会議所設立に尽力するなど財界活動にも力を入れ、東京電燈はじめ多数の会社の設立に関与した。大倉高等商業学校(現東京経済大学)や大倉集古館も設立している。1923年没、91歳。政商の実業家、大倉財閥の創設者、美術館、コレクター

大倉 宏 (おおくらひろし/1957年～)

新潟県生れ。東京芸術大学美術学部美術学科卒。85～90年新潟市美術館学芸員。この後フリー美術評論、著書に『東京ノイズ』、共著『越佐の埋み火』、編集校正『洲之内徹の風景』、新潟絵屋代表。新潟まち遺産の会代表。砂丘館館長。2023年個展(水彩)。美普、洋画、美術館長

大蔵善雄 (おおくら・よしお/1930年～)

大分県生れ。1955年京都市立美術大学工芸科卒。64年大分県立芸術短期大学にて後進の指導にあたりながら、木版画制作をはじめ、白日会、日本版画会に作品を発表する。大分各地の祭りや民話を題材としたシリーズを展開する他、大分県関係の施設等の壁画デザインも多数手がけている。**版画、デザイン、美教**

大栗旌さん (おおぐり・しょうきん/1887～1963年)

徳島県生れ。海軍に服役し、1915年頃呉市で書家の宗像雲閣に師事。雲閣の没後上京し鉄道省に勤務。19年小室翠雲に師事し南画を学ぶ。日本美術協会展で入賞、25年帝展に入選。28、30、31、32年帝展に出品。日本南画院展には10回出品。東京南画会監査委員、環堵画塾展監査委員、南画連盟監査委員など、審査員。環堵画塾幹事、東京南画会幹事、日本南画院院友、日本南画連盟委員、鉄道省美術部委員。45年東京を離れ徳島に帰郷。戦後は、徳島にこどまって後進の指導にも力を注いだ。1963年没、76歳。**南画**

大河内正夫 (おおこうち・まさお/1920～2010年)

大阪生れ。東京美術学校卒、創造美術展に出品。以降新制作協会展、創画会展と画壇の発展と共に出品。1962、63、64年と三年連続して新作家賞(新制作協会展)。66年新制作協会日本画部会員。74年創画会会員。京都画壇秀作展や個展などにも発表。2010年没、90歳。**日本画**

大河内夜江 (おおこうち・やこう/1893～1957年)

山梨県生れ。菊池契月に師事。京都市立絵画専門学校選科卒業。帝展、美術展などで受賞多数。1957年没、64歳。**日本画**

大崎聡明 (おおさき・そうめい/1925～2005年)

大分市生れ。1954年二科展に入選以後、同展や大分県美術展を中心に作品を発表し、65年二科会会友、73年会友努力賞、二科会会員。68年JPS(日本写真作家協会)会員。70～81年大分県立芸術短期大学において後進の指導にあたり、73～95年大分県美術協会副会長兼写真部会長を務める。現在大分県美術協会名誉会員、大分県美術協会写真部名

誉会長。2005年没、80歳。**写真、美教**

大澤光民 (おおざわ・こうみん/1941～2023年)

高岡市生れ。1958年富山県職業補導所銅器科卒。越井銅器製作所に就業。69年大澤美術鑄造所を創立。2000年日本伝統工芸展高松宮記念賞。02年日本伝統工芸富山展富山県教育委員会賞。05年重要無形文化財「鑄金」の保持者に認定。2023年没、83歳。**金工(鑄金)**

大塩平八郎 (おおしお・へいやはちろう/1793～1837年)

大坂生れ。大阪町奉行所与力・大塩平八郎敬高の長男。与力職を勤めるかたは、陽明学を修め、30歳ころから自邸に「洗心洞」と名づけた塾を開く。1830年養子格之助に職を譲り、退職後は学問と教育に専念、晩年の田能村竹田とも親しく交わった。36年大凶作によって大坂市中に窮民が続出する惨状に際し、救急策を建議するが容れられず、翌年「救民」の旗をかかげて挙兵、敗れたのち自刃した。1837年没、44歳。**教育、日本画**

大島 勲 (おおしま・いさお/1916～1991年)

倉敷市生れ。1939年東京美術学校図画師範科卒。伊原宇三郎、南薫造の指導を受ける。熊本県、愛知県などの中学校で教員を務める。46年岡山師範学校で教鞭。柚木久太が会長を務め坂田一男が指導にあたった倉敷市玉島の洋画団体・火虹会に所属して研鑽を積み、50年創元会入選。51年日展に入選。52年創元会会員、79年創元会運営委員。73年岡山大学教育学部教授、82年美作女子大学教授。1991年没、75歳。**洋画、美教**

大島如雲 (おおしま・じょうん/1858～1940年)

江戸生れ。父高次郎に就て蝋型及鑄液彫刻術を学ぶ。1881年内国勸業博覧会に出品。爾後東京彫工会、日本美術協会、東京鑄金会等に出品し、又1900年巴里万国博覧会に出陳、金賞牌を受けた。1918年東京美術学校教授。東京で没、83歳。**工芸(鑄金)、美教**

大島成己 (おおしま・なるき/1963年～)

大阪生れ。1988年嵯峨美術短期大学総合美術研究所を修了。関西を拠点として活動。89年には、つかしんアニュアル'89(西武つかしんホール、尼崎)、「版から／版へ京都198

91展(京都市美術館)、1990年には、シガアニュアル'90(滋賀県立近代美術館)に出品。91年の「現代美術'91 素材いろいろ」展(徳島県立近代美術館)でも好評を博す。**版画**

大島 龍 (おおしま・りゅう?/1946年～)

札幌市生。1972年谷中安規に触れ木版画をはじめ。79年日伯現代美術展(サンパウロ・リオデジャネイロ)。80年スペイン美術賞展(バルセロナ)。84年シアトル(米)エドモントン、キャンベルリバー(加)。89年リブリアナ国際版画ビエンナーレ(ユーゴ)。90年カナダ美術賞展(ケベック・モントリオール)、オーストラリア国際版画展(シドニー・メルボルン)。91年ペルー美術展(リマ)。2001年個展:パリ、札幌。02年川の絵大賞展、特別賞(加古川)。05、06年パリで個展。07、08、09年ゆう画廊。**版画**

大城志津子 (おおしろ・しづこ/1931～1989年)

那覇市生れ。琉球大学美術工芸科初の女子学生、女子美洋画科を出ている。沖縄では高校教師として働き、柳宗悦の甥・柳悦孝に師事。87年東京調布に「大城織物工房」を設立、89年には沖縄のニシムイ美術村に工房を持ち、97年からは琉球大学にその後沖縄県立芸大に勤めている。彼女が残した「伝統の継承と創造、どちらも大切である」という言葉を残した。1989年没、68歳。**美教、織物**

太田義一 (おおた・ぎいち/1891～1937年)

山形県生れ。1915東京美術学校を卒業、帝展入選8回に及び、尚帝国女子専門学校の講師の職にあつた。1937年没、46歳。**日本画**

大滝由季生 (おおたき・ゆきお/1929～2023年)

石川県生れ。1950年大阪梅田でデザイン研究所に入所。64年洋画家を志す。65年一水会展に入選、以後毎年出品、69年会員。67年田崎広助門下。67年日展入選。77年日展特選。風景など金沢の風土を描き続ける。2023年没、97歳。**版画、洋画**

太田熊雄 (おおた・くまお/1912～1992年)

福岡県の小石原焼窯元の家に生まれ、廻り職人として同地で修業し、1936年に独立。日本民芸館展で活躍。日本民芸館賞を受賞、日本民芸協会々員、審査員。48年日本民芸協

会九州支部の創立に尽力。58年ブリュッセル万国博覧会でグランプリ。他に日本陶芸展、西部陶芸展などで活躍。71年黄綬褒章。80年伝統工芸士に認定。小石原焼の伝統的な技法に新しい力を注ぎこみ、晩年は県美術協会の顧問。後進の育成に努めた。1992年没、80歳。**民陶小石原焼、陶工**

大竹五洋 (おおたけ・ごよう/1931年～)

静岡県生れ。伊藤深水に師事。日展に10回入選。日象展評優賞銅賞。日月社展奨励賞。朗峰画塾所属。日象展評議員、鎌倉美術協会実行委員。**日本画**

大竹省二 (おおたけ・しょうじ/1922～2015年)

静岡県生れ。上海・東亜同文書院に学び、1942年学徒応召。45年東京に復員。46年GHQ(連合軍総司令部)広報部嘱託。50年INP(米通信社)東京支局・写真部長、50年フリーランスに。53年二科会写真部の創立会員。日本を代表する作家、俳優、芸術家などを撮影。特に女性のポートレートやヌードで一世を風靡した。92年日本写真協会功労賞。2015年没、93歳。**写真**

大竹英洋 (おおたけ ひでひろ/1975年～)

京都生れ。一橋大学社会学部卒。1999年より北米の湖水地方に野生動物、旅、人々の暮らしを撮影。主な写真絵本に『ノースウッズの森で』、『春をさがして カヌーの旅』、『もりはみている』など(以上全て福音館書店)。2011年NHKBS「ワイルドライフ」に案内人として出演。ノンフィクション『そして、ぼくは旅に出た。はじまりの森 ノースウッズ』(あすなろ書房)で「第七回 梅棹忠夫・山と探検文学賞」。18年「日経ナショナルジオグラフィック写真賞ネイチャー部門最優秀賞」。**写真**

大竹亮峯 (おおたけ・りょうほう/1989年～)

東京生れ。京都園部の伝統工芸大学校・木彫刻専攻卒業。木彫根付から欄間まで手がける一位一刀彫の東勝廣氏に幾度も訪ね門弟の許しを得て師事。修行して1年数ヶ月で根付公募展「現代木彫根付芸術祭」(2010)で大賞受賞。2023年岐阜県現代陶芸美術館、長野県立美術館、三井記念美術館で超絶技巧未来へ展17名に選抜。**木工**

大田耕士（おおた・こうし/1909～1998年）

兵庫県生れ。大谷中学卒。小学校教師をつとめ、新興教育運動に参加。1937年上京、美術風刺雑誌「カリカレ」を発行し、41年検挙される。51年日本教育版画協会を創立し翌年機関誌「はんが」を創刊、児童版画の普及。64年から教育版画コンクールを開催。1998年没、89歳。著作に「版画の教室」。1998年没、89歳。教育、版画

太田秋民（おおた・しゅうみん/1881～1950年）

福島市生れ。1904年東京美術学校日本画科に入学、荒木寛敏に師事。17年文展に入選。官展を舞台に活躍。31年帝展推薦となり、以後無鑑査出品。24年日華連合絵画展委員として訪中。19年発足の福陽美術会の理事。25年創立の東台邦画会会員。45年に福島市に疎開。第1回から3回の県展審査員。1950年没、69歳。日本画

太田善四郎（おおた・ぜんしろう/生没年不詳）

享保年間制作巻人形の創始者。善四郎は人形の技法を京都の伏見人形・仙台の堤人形から学んだと伝えられている。ひな人形の製法に大変優れており当時「おひな善四郎」と呼ばれていた。花巻人形の特徴として外側に色々な事柄が刻み込まれている。花巻市太田の歴史資料館には、沢山の花巻人形が展示されており、古型の一部は花巻市の有形文化財に指定。花巻人形

太田大八（おおた・だいはち/1918～2016年）

長崎県生れ。多摩美術学校卒業。『いたずらうさぎ』（福音館書店）ほかで小学館絵画賞、『かさ』（文研出版）で第18回児童福祉文化賞、1977年『やまなしもぎ』（福音館書店）で年国際アンデルセン賞優良作品、『ながさきくんち』（童心社）で第12回講談社出版文化賞、『だいちゃんとうみ』（福音館書店）で第15回絵本にっぽん賞、『絵本西遊記』（童心社）で第45回産経児童出版文化賞。1949年のデビュー以来、130作以上の絵本と230冊以上の児童書などの挿絵。2016年没、98歳。絵本、挿絵

太田 歳（おおた・とし/1914～2000年）

福岡県生れ。小倉師範学校卒業後、1936年東京美術学校日本画科に入学。在学中に大日本美術展、日本画院展などに入選。41年同校を卒業し、川端学資金小を受ける。川崎

小虎、東山魁夷に師事。46年日展に入選し、以後入選を重ねる。76年同会会友、82年特選を受賞。94年田川市美術館で回顧展が開催。2000年没、86歳。日本画

太田南海（おおた・なんかい/1888年～）

長野県松本市生れ。1905年に木彫家の米原雲海に入門。日本美術院を率いた岡倉天心に絵の才能を見出され、日本画の作品を残した。師匠の信頼が厚く、12年雲海塾を卒、雲海工房で活躍。善光寺仁王像の頭部など主要部分の制作や、松平直政公の巨大な騎馬像の仕上げにも携わった。30年東京から松本に拠点を移し、仏像や肖像、祭りの舞台を制作。文展や帝展への出品。35年頃「松本館」の新築に関わり、設計や室内の装飾彫刻などを手掛けた。1959年没、70歳。彫刻、日本画

大田南畝・蜀山人（おおた・なんぼ/1749～1823年）

1749年生れ。幕臣。松崎観海らにまなぶ。1767年「寝惚(ねぼけ)先生文集」でみとめられる。洒落本、黄表紙をおおくかき、「万載(まんざい)狂歌集」などで狂歌界の中心となる。寛政の改革後は一時、筆をおり支配勘定役などとして活躍。1823年没、75歳。江戸中、後期の狂歌師、戯作(げさく)者

太田雅光（おおた・まさみつ/1894～1975年？）

静岡県生れ。寸劇の舞台美術を手掛ける、演劇美術、美人画などに専念。松竹に入り新派の舞台美術を担当。鏑木清方門下で修行。1925年報知新聞連載の漫画の画を担当。26年二十一日會の機関雑誌「大衆文芸」の創刊時より挿絵担当。28年日本挿画家協会の創立に参加。30年「實際的絵画」を昭和書院より刊行。31年「歌舞伎十八番」シリーズの芝居版画を刊行、鳥居言人、田中良、名取春仙、水島爾保布、清水三重三らと日本劇畫協會を設立。戦後も歌舞伎役者絵を描き続けた。1975年没、81歳。？舞美、漫画、挿絵、版画、日本画

大谷一良（おおたに・かずよし/1933～2014年）

東京生れ。1957年東京外国語大学スペイン語科卒。総合商社の勤めを終え、96年フリーの版画家。畦地梅太郎に私淑、「アルプ」をはじめ「まいんべるく」「山と溪谷」「心」「岳人」などに表紙画やカット、文章を発表。'80年代から個展や共同展を開催。著書に「山のかげら」「山の絵葉書」「風のディヴェルティメント」など、共著多い。山岳

関連書の装丁・装画も数多く手がけた。2014年没、81歳。**版画、装丁、装画**

大谷光瑞（おおたに・こうずい/1876～1948年）

浄土真宗本願寺派第22世法主。第21世法主大谷光尊（明如上人）の長男。妻は貞明皇后の姉九条籌子（かずこ）。九条武子の兄。1902～13年3次に渡り大谷探検隊を組織し、敦煌、トルファン、ローラン、チベットなどを発掘調査、貴重な資料を収集し、シルクロード・西域文化研究に多大な貢献。1948年没、72歳。**書画、敦煌、トルファン、ローラン、チベットを発掘調査**

大谷有花（おおたに・ゆうか/1977年～）

神奈川県生まれ。2001年多摩美術大学美術学部絵画学科油画専攻卒、03年同大学大学院美術研究科絵画専攻を修了。03年VOCA奨励賞。10年毎日新聞社主催「第二回絹谷幸二賞」で絹谷幸二賞。09年神奈川県相模原市のシティセールスサポーター。秋田公立美術大学ビジュアルアーツ専攻准教授。作品は、主に油彩画が中心で、「ウサギねずみ」シリーズや「キミドリの部屋」シリーズ、「ライフ」シリーズ。**現代美術、洋画、美教**

大谷玲石（おおたに・れいせき/1906～1964年）

水戸市生まれ。1930年茨城工芸展に出品（以後出品、34年に県賞、48年県商工会議所会頭賞、58年茨城県知事賞）。32年東京美術学校金工科彫金部卒。36年文展で入選、以後入選を重ねる。49年回茨城県美術展で文部大臣賞。以後同展の審査員。53年日展で特選、朝倉賞（翌年無鑑査、60年出品委嘱）。1964年没、58歳。**金工**

太田秀隆（おおた・ひでたか/1951年～）

福岡県生まれ。山口芸術短期大学卒業後、家業（陶芸）を継ぐ。1974年日本民芸展で最優秀賞、以後も同賞を連続受賞。福岡県展にも入賞を重ね、西部工芸展にも出品し受賞を続けた。81年日本伝統工芸展にも連続して入選。86年西日本陶芸美術展では大賞。伝統を生かしながら現代の生活スタイルにあった作品を制作している。**陶芸**

太田正弘（おおた・まさひろ/1914～1978年）

福島県生まれ。相馬中学校卒業後、上京して東京美術学校日本画科に入学。1940年年同校卒業、40年福陽美術会展で福陽会賞。47年山本丘人に師事。48年創造美術展に入選、同展に出品を続け、創造美術は新制作協会日本画部、創画会と名称を変えたが、一環してこの会を主な発表の場とし、61年新制作協会会員、74年創画会の創立会員。1978年没、63歳。**日本画**

太田真理子（おおた・まりこ/1967年～）

東京生まれ。1991年武蔵野美術大学卒。92年版画協会展（史水画廊 恵比寿）。大学版画展 買い上げ賞。94年プリント21版画グランプリ・特選。95年多摩美術大学大学院修了。**版画**

大智勝観（おおち・しょうかん/1882～1958年）

愛媛県生まれ。東京美術学校卒。1913年文展で3等賞。14年日本美術院が再興されると同人。院展で活躍。横山大観との共著に「渡伊スケッチ集」がある。1958年没、76歳。**日本画、版画**

大出東臯（おおで・とうこう/1841～1905年）

江戸生まれ。桐生で前原互瀬、石田九野に学んだ。巻菱湖門下の中沢雪城の家に寄寓し、書道を修めた。また藤堂凌雲に花鳥画を学んだのち、諸国を遍歴した。一時期、瀬戸で陶器の下絵も描いた。1889年コロンブス博覧会出品の紋緞子織下絵を描いた。93年シカゴ博覧会に出品された森山芳平の四季草花模様卓被（東京国立博物館所蔵）の図案原画は東臯の作品。1905年没、64歳。**日本画、図案、陶器の下絵、書**

大塚楽堂（おおつか・がくどう/1870～没年不詳）

山口県生まれ。石川県の九谷焼で陶器原型の指導、1894年富山県工芸学校開校とともに金工科の教師として高岡に赴任し、1917年退職までの24年の間に多くの後進を育てた。01年設立された高岡金工会の初代会長を10年務めた。代表作の氷見朝日山公園の神武天皇像のほか、福井市足羽山公園の橋本左内像、兵庫県三田博物館の九鬼隆一男爵像、兵庫県高砂神社の工楽松右衛門像、京都市伏見乃木神社の村野山人像、青井記念館蔵「老

人」。美教、工芸(金工)、鍍金

大塚榛山 (おおつか・しんざん/1871～1944年)

群馬県生れ。郷土の俳人・河辺梅白らの勧めにより、20歳の時に上京して滝和亭に師事。南画の技法を学んだのち、京都、奈良で古美術を研究、桜井香雪から古美術の着色法も学んだ。また、10年の歳月をかけて法隆寺金堂壁画の修復にもあたり、以来、壁画家としての名声が高まった。その後も近畿地方の神社仏閣をまわり、特に平安時代に最も発達し、仏画などの彩色に用いられた切金について研究した。群馬県立近代美術館に法隆寺金堂壁画(6号壁阿弥陀浄土)の模写がある。1944年没、73歳。美研、日本画、壁画

大塚保治 (おおつか・やすじ/1869～1931年)

前橋市生れ。東京帝国大学哲学科卒。1895年大塚楠緒子と結婚し、大塚姓になった。妻・楠緒子は歌人、作家。大学卒業後、東京専門学校文学科講師となりホルトマンの美学を講義。1896年より四年間ヨーロッパに留学し、1900年東京帝国大学教授となり美学を講じた。東京帝国大学の美学講座を開いた初の日本人教授である。日本の美学研究の礎を築いた。25年帝国学士院会員。29年定年退官。1931年没、62歳。美学者、美教

大塚博 (おおつか・ひろし/1937～2004年)

秋田市生れ。1959年秋田大学学芸学部卒、中学校教諭となる。56年から秋田美術作家協会に出品。68年から自由美術展に出品し、74年平和賞受賞。85年秋田県芸術選奨受賞。2004年没、67歳。洋画、美教

大辻清司 (おおつじ・きよじ/1923～2001年)

東京生れ。1942年東京写真専門学校に学ぶ。53年伊藤幸作、浜田浜雄らと、「グラフィック集団」を結成。53年瀧口修造を指導者に、前衛美術集団「実験工房」に参加。1960年代以降、桑沢デザイン研究所、東京造形大学、筑波大学、九州産業大学などで教鞭、高梨豊、島尾伸三、牛腸茂雄、畠山直哉などの後進を育てる。個展に「大辻清司 写真展」東京画廊(1987年)、「大辻清司 写真実験室」東京国立近代美術館(99年)。96年日本写真協会功労賞。2001年没、78歳。写真

大友克洋 (おおとも・かつひろ/1954年～)

宮城県生れ。1973年上京し、「銃声」『漫画アクション』でデビュー。79年単行本となる自選作品集『ショート・ピース』(奇想天外社)刊行。80年「童夢」『アクションデラックス』(双葉社)の連載。84年日本 SF 大賞。「AKIRA」『ヤングマガジン』(講談社)の連載。84年単行本『AKIRA』第1巻(講談社)刊行。講談社漫画賞。88年大友自らが監督したアニメーション映画「アキラ」が公開。89年画集(講談社)刊行。2002年アメリカ『AKIRA』で、アイズナー賞最優秀国際アーカイブプロジェクト部門および最優秀国際作品部門受賞。13年紫綬褒章。アニー賞・ウィンザー・マッケイ賞。14年芸術文化勲章(フランス)オフィシエ受章。18年グッドデザイン賞。漫画、デザイン、映画監督

大豊世紀 (おおとよ・せいき/1950年～)

大阪生れ。1964年金沢美術工芸大学卒業。西山英雄に師事。77、98年日展特選。80年日春展日春賞(以後2回受賞)。2007年全関西展審査、09年日展審査員。05～10年京都精華大学講師。日展会員、大阪芸術大学講師。京都市在住。日本画、美教

大成 哲 (おおなり・てつ/1980年～)

東京生れ。2004年日本大学芸術学部卒。同年東京芸術大学大学院入学。2005年チェコ政府奨学金を取得しチェコ・プラハへ留学。プラハ美術アカデミー(AVU)とプラハ工芸美術大学(VSUP)に各1年ずつ在籍。08年東京芸術大学大学院修士課程を修了。22年ヤン・エヴァンゲリスタ・プルキニェ大学(UJEP)芸術デザイン学部ビジュアルコミュニケーション学科の博士号を取得。東京とチェコに滞在し、ガラス、石、木などを用いて彫刻、インスタレーションを制作。12年「VOCA展」で佳作。14年第一生命南ギャラリーでの個展「Tets Ohnari ∞ Egon Schiele」を開催。彫刻、現代美術、インスタ

大西金陽 (おおにし・きんよう/1858～没年不詳)

奈良生・石川県金沢に住した。弟子に木村杏園・木村雨山など。石川県の美術発展に貢献した。南画家

大西圭齋 (おおにし・けいさい/1773～1829年)

江戸生れ。豊前中津藩藩主奥平昌高に仕えた。はじめ宋紫石・宋紫山親子に師事、そ

の孫の宋紫岡にも学んだ。谷文晁の写山楼に入門。明代の画家・林良や、清の蒋廷錫にも学んだ。画人の荒木寛快とも交友。弟子に岡本秋暉・矢島群芳がいる。1829年没、58歳。江戸後期の南画家

大西酔月（おおにし・すいげつ/生没年不詳）

京都生れ。望月玉蟾(ぎょくせん)にまなび、山水・人物画を得意とした。1768年の「平安人物志」画家部の筆頭にあげられているが、作品はほとんどのこっていない。松村月溪の最初の師といわれる。江戸中期の絵師

大西清澄（おおにし・せいちょう/1919～2014年）

高知県生れ。1938～45年小学校教員を務め、戦後は衣料雑貨の販売や外食業を営むかたわら小説を書き、65年頃から独学で彫刻を制作。69年現代国際彫刻展に出品し、彫刻の森美術館に買上げられた。その後も現代日本美術展(1969・76・77)、彫刻の森美術館大賞展(1973)、須磨離宮公園の現代彫刻展(1974・76、いずれも受賞)に出品、彎曲するステンレスの鏡面を簡明かつ大胆に構成し、そこに四囲環境を多様に反映させる作風で評価。作品は高知市藤並公園、高知県早明浦ダム公園、高知県南国市に設置。2014年没、95歳。彫刻

大西椿年（おおにし・ちんねん/1792～1851年）

江戸生れ。幕府米蔵を管理する役人で、浅草蔵前に住んでいた。1809年京都の画家渡辺南岳について円山派の画法を学ぶ。のちに谷文晁を慕い、諸派の画法を独習した。江戸における数少ない円山派の画家として活躍、特に亀の画に人気があった。弟子に明治の洋画家川上冬崖がいる。1851年没、60歳。江戸後期の絵師

大西靖子（おおにし・やすこ/1942年～）

神奈川県生れ。1965年青山学院大学英米文学科卒。72年木版画を始める。版画協会展出品。日本板画院展(73年新人賞、76年同人推挙)。77年板画院退会。以後、無所属。版画

大沼憲昭（おおぬま・のりあき/1954年～）

金沢市生れ。1976年大谷大学文学部卒業。76年パシリアル美術協会入会。山種美術館賞展、京都選抜展、青垣、2001年日本画家選抜展、菅橋彦大賞展等に出品。90年京都新聞日本画賞展優秀賞、92年大賞受賞。93年までパシリアル美術協会会員。日本画、パシリアル

大野静方（おおの・しずかた/1882～1944年）

東京市生れ。16歳の時に水野年方に入門し絵を学んだ。鏑木清方らとともに烏合会発足時の会員。後に「吉野の義経」で日本美術院褒賞を受け、「婚礼」で日本美術院銅牌を受けた。1896年村岡応東、遠山素香らとともに巽画会を結成する。1904年に日本新聞に入社し、挿絵画家として活躍する。後に浮世絵を研究する。東京で没、63歳。日本画

巨野泉祐（おおの・せんゆう/1774～1837年）

福島県生れ。白河藩御用絵師。白河藩士・大野斗内の子。1823年の「三方領地替」による久松松平家の桑名移封に伴い同地に移った。1837年没、64歳。江戸後期の絵師

大野俊明（おおの・としあき/1948年～）

京都生れ。1972年京都二条城二之丸御殿障壁画模写事業に従事。73年京都市立芸術大学美術専攻科日本画専攻修了。84～93年横の会に参加。87年山種美術館賞展優秀賞。93年京都市芸術新人賞。成安造形大学名誉教授(美術領域)。京都日本画家協会会員。日本画、挿絵、美教

大野晴義（おおの・はるよし/1916～1998年）

東京生れ。スイス人画家コンラッド・メイリに師事。一水会会員に所属していたが、後に退会、無所属となる。日展、一水展などに出品。明るい色調と形に拘らぬ絵柄には、一種の直感的な味わいがある。個展には欧遊の旅情風景作品が多い。1998年没、82歳。洋画

大野廣子（おおの・ひろこ/1956年～）

東京生れ。1981年から86年創画会に出品。82年武蔵野美術大学日本画学科、84年同大学院を首席で卒。86年川端龍子賞展で最優秀賞、93年目黒雅叙園アートプライズで雅

叙園美術館賞特別賞。2003年東京大学安田講堂総長応接室のため「ニュートンのリンゴ 小石川植物園」を製作。04年NYにアトリエを構える。以後、アメリカ、ケニア、モンゴル、オーストラリア、ナミビアなど世界各地で滞在制作を行っている。日本画

大庭勝郎 (おおばかつろう/1931~1982年)

福岡県生れ。八幡高校を経て東京芸術大学油画科に入学、梅原龍三郎に師事。卒業後、春陽会に出品、春陽会賞、会員。1950年代半ばから、色彩を黒味のある青に絞り、形態を単純化した作品を制作、60年代には、粘着性ある白っぽい絵具の厚塗りでミニマルな形態を並置するまでに画面を抽象化した。70年代には具象に回帰し、独自の色調による裸婦の連作を発表した。1982年没、51歳。洋画

大橋正堯・康邦 (おおはし・まさたか?/1865?~没年不詳)

岡山県生れ。松原三五郎に師事。1901年新古美術品展で一等賞褒状。01年関西美術会に出品、翌年の批評会にて褒状。太平洋画会会員。1907、8、14年文展入選。09年文展で褒賞。この頃から康邦と称す。日本水彩画会に所属。神奈川県師範学校教諭。水彩、洋画

大淵 純 (おおぶち・じゅん/1960年~)

福岡県生れ。伝習館高校卒業後、1986年創形美術学校造形科研究課程を終了。その後東京で、個展、グループ展等多くの展覧会に発表。95年「VOCA1995 現代美術の展望ー新しい平面作家たち」展に推薦出品、これからの絵画を模索し続けている作家。洋画

大場清仁 (おおば・せいじん/1921~2008年)

茨城県生れ。1956年児玉希望、奥田元宋に師事。57年日月社展に初入選佳作賞、翌年も同賞。59年新日展に入選(以後出品)。78年日展会友。79年改組日展で特選。84年改組日展に「霧の教会」を出品。東京で没、87歳。日本画

大場清泉(おおば・せいせん/生没年不詳)

秋田県生れ。1921同郷の友人であり東京で活動する後藤忠光が主宰、創刊した版画と誌の雑誌「青美」に木版画を寄せた。また、後藤が関東大震災で帰郷した際に友人7名で

第1回秋田美術展覧会を開催。第2回展にも出品した。またその頃の『秋田魁新報』に『満洲スケッチ』や『満洲風俗』などの挿絵をしばしば寄せた。版画、日本画、挿絵

大場正男 (おおば・まさお/1928~2008年)

1928年生れ。孔版画の一種である、インキを透す特殊和紙を版材とするペーパー・スクリーン版画の発展興隆に注力した。56年孔版画を始める。69年CWAJ現代版画展(東京アメリカンクラブ)に出品(以降毎年出品)。97年文部省検定済教科書高等学校用(三省堂)の表紙絵に作品が採用。2000年福岡市文化賞。01年太宰府天満宮千百年祭『餘香帖』献納作家。福岡市で没、79歳。版画

大場吉美 (おおば・みよし/1946年~)

金沢市生れ。1968年金沢美術工芸大学グラフィックデザイン科卒。66、67年一陽展特待賞。68年文化庁県選抜展出品。75年一陽会会員。77年日本海造型会議結成。96年「現代アート表象」展を、98年「25人のインスタレーション」展を企画出品するなど、平面・立体にこだわらない多彩な活動を展開。金沢学院大学美術文化学部情報デザイン学科教授。2010年石川県文化功労賞。インスタ、立体、現代美術

大原呑響 (おおはら・どんきょう/生誕年不詳~1810年)

岩手県生れ。江戸で井上金峨に儒学をまなぶ。1795年松前藩(北海道)の前藩主松前道広にまねかれ蝦夷地にわたる。1796年老中松平信明の命により江戸で「地北寓談(くうだん)」をあらわす。画家としても知られた。1810年没。江戸後期の儒者、絵師

大原呑舟 (おおはら・どんしゅう/生誕年不詳~1857年)

大原呑響の子。柴田義董に師事し、四条派、狩野派、南画の統合した独自の画技を展開。父を継いで大原派を確立する。文鳳門主宰展観、加納硯圃主宰展観などに出品。また安政の御所造営の際には、小御所の杉戸画を任されるなど活躍。山水から花鳥、動物、人物まで幅広く描き特に山水の緻密な描写、迫力感は圧倒的に当時の他の画家とは一線を画していた。1857年没。江戸後期の絵師、大原派

大原治雄 (おおはら・はるお/1909~1999年)

高知県生れ。17歳で家族とブラジルに渡り、サンパウロ州のコーヒー農園で働いた後、開拓団として入植。1938年小型カメラを手に入れ、写真に没頭。51年市街地に生活を移す。農業経営の一方、60年代後半まで国内外のサロンに積極的に参加。1970年代から地元新聞などで紹介されるようになり、98年「ロンドリーナ国際フェスティバル」および「第2回クリチバ市国際写真ビエンナーレ」で、初の個展「Olhares(眼差し)」が開催され、大きな反響を呼ぶ。1999没、89歳。写真

大樋長左衛門・初代 (おおひ・ちやうざえもん I/1630~1712年)

京都の楽一入のもとで楽陶を行う。加賀藩に招かれた茶匠千宗室に同道し、金沢に入る。近くの大樋村(現在金沢市)に窯を築き、以後代々、藩の御用窯として茶陶を焼き続ける。1712年没、82歳。加賀大樋焼の開祖、陶芸

大樋長左衛門・九代 (おおひ・ちやうざえもん IX/1901~1986年)

金沢市生れ。生家は大樋焼窯元で、父の宗春に師事し、藩政期から続く伝統の窯を受け継ぐ。1958年日本伝統工芸展で入選、以後同展で活躍し、黒釉、飴釉、幕釉の抹茶碗の風雅な味わいに定評があり、大樋歴代陶工の中でも名工として数えられるにふさわしい。日本工芸会正会員。1986年没、85歳。陶芸

大樋長左衛門・十代・大樋年朗、大樋陶治斎(おおひ・ちやうざえもん X/1927~2023年)

金沢市生れ。九代大樋長左衛門の長男。1949年東京美術学校工芸科卒。56年「日展」北斗賞。57年「日展」特選・北斗賞。58年日本陶磁協会賞。61年「日展」特選・北斗賞。69年金沢美術工芸大教授。85年花三島飾壺「峙(そばだ)つ」で芸術院賞。大樋焼の名家十代当主。日展・日本現代工芸美術展・その他の個展などで大樋焼にとらわれない自由なかたちでの発表。文化勲章。2023年没、96歳。陶芸、美教

大平敬次郎 (おおひら・けいじろう/1903~1993年)

大阪生れ。1929年大阪美術学校卒。斎藤与里に師事。帝展、日展紀元2600年奉祝展入選。朝鮮美術展特選李王賞。東光会会員、審査員。豊光会(東光会大分支部)会長。大分県美術協会常任理事、大分県美術協会名誉会員。宇佐市金屋にアトリエを持ち、創作活動を続け、多数の絵画を宇佐市に寄贈。大分県立芸術会館にも作品「秋」が所蔵されている。

る。1993年没、91歳。洋画

大淵武夫 (おおぶち・たけお/1905~1958年)

兵庫県生れ。1924年東京美術学校彫刻科選科塑造部に入学。在学中から洋画に専念し、26年国画創作協会展(第1回国画会展)に『静かなる港』出品して、国画会奨学賞。29年同校卒業。30年国画会展で樗牛賞。33年国画会展で国画奨学賞。34年渡欧。35年パリでサロン・ドオトヌ、サロン・チュイルリイ等に出品。36年帰朝。37年国画会展に滞欧作を発表。国画会同人。以降も国画会会員として活躍。39年から陸海軍嘱託となり記録画を描くために従軍をし多数制作。46年戦後、日本美術展覧会委員を委嘱。58年自己の主宰の研究會「みねるば会」第1回展を開催。東京で没、53歳。洋画

大宮政郎 (おおみや・まさお/1930~2022年)

岩手県生れ。1948年岩手美術研究所入所。49年岩手県立美術工芸学校油画科入学。60年「岩手美術家会議」を結成、議長。63年前衛美術集団「集団N39」を結成(~69年)。79年盛岡で個展開催。92年「人動説芸術/大宮政郎の世界」(萬鉄五郎記念美術館)を開催。2010年「大宮政郎展 呼吸する北異のマグマ」(多摩美術大学美術館)を開催。2022年没、92歳。洋画

大村清隆 (おおむら・きよたか/1912~1988年)

福岡県生れ。1932年福岡師範学校を卒業、翌年上京し、山崎朝雲に木彫を学び、のち清水多嘉示に塑造を学んだ。38年新文展に入選。第8、9回展日展に入選。以後は日展を離れ、54年から自由美術展に出品、55年佳作賞、57年会員。木彫と塑造、両方の技術を駆使して労働者や婦人像等を主題とし、また肖像彫刻、モニュメントも数多く手がけた。1988年没、76歳。彫塑、木彫

大村西崖 (おおむら・せいがい/1868~1927年)

静岡県生れ。1893年東京美術学校彫刻科卒。東洋美術史専攻に転じ、96年母校の教授となる。また、田島志一とともに審美書院を設立し、『東洋美術大観』『真美大観』などの図録類の出版に努めた。『密教発達志』により帝国学士院賞を受賞し、明治・大正を通じて日本の美術史学の開拓者として活躍した。1927年没、59歳。美史、美教

代美術、版画、造形、立体

大村長府（おおむら、ちようふ/1870～1925年）

奈良県生れ。1888年上京、本多錦吉郎に師事する。89年明治美術会第1回展覧会出品。95年文学東洋哲学の研究に専心。1902年符阪なみと結婚。12年自己の画論「直観画」をつくりあげる。19年ローヤル・アカデミーへ出品。20年ソシエテ・デ・ザルティスト・フランセへ出品。1925年没、56歳。洋画

大本 靖（おおもと・やすし/1926～2014年）

北海道生れ。1954年日本版画協会入選。59年全道美術協会会員、北海道版画協会会員。80年米国パデュー大学、インディアナ大学等で実技講座。82年英国オックスフォード大学近代美術館で実技講座。84年札幌市民芸術賞。68～96年北海道教育大学講師。96年北海道文化賞。2014年没、88歳。版画

大森暁生（おおもり・あきお/1971年～）

東京生れ。愛知県立芸術大学美術学部彫刻専攻卒。写実的でありながら、幻想性の強い立体造形を生み出す。ファッションブランドとのコラボ作品や、アーティストへの作品提供など多方面で活躍を続ける。彫刻

大村廣陽（おおむら・こうよう/1891～1983年）

広島県生れ。1911年京都市立美術工芸学校絵画科卒、11年京都市立絵画専門学校に進学。11、14年文展に入選。14年絵専卒業後は、竹内栖鳳の主宰する画塾・竹杖会に入塾、花鳥動物画を中心に発表。29年帝展無鑑査、パリやベルリンなど、海外で開催された日本美術の展覧会にも精力的に出品。80歳代にも、大阪、京都、福山で回顧展を開催し、1983年没、91歳。日本画、版画

大森博之（おおもり・ひろゆき/1954年～）

栃木県生れ。1979年筑波大学大学院修士課程芸術研究科彫塑専攻修了。なびす画廊で1990年以降、10回以上個展。グループ展1981年「空間感情展」神奈川県立県民ホールギャラリー／神奈川。84年「あ・はれ展」千葉県立美術館／千葉。2007年「プライマリー・ワールド美術の現在 ―七つの〈場〉との対話」神奈川県立近代美術館・葉山／神奈川。現

大矢黄鶴（おおや・こうかく/1911～1966年）

新潟県生れ。はじめ児玉希望に師事し、後田中青坪に就いた。1936年文展「初秋」、40年奉祝展「爽秋」等があり、日本画会、日本画院にも出品した。戦後は、46年第1回日展に「雪晴れ」を出品し、以後46年秋より没する65年日本美術院に拠った。48年日本美術院院友、50年に奨励賞、57年「卯月の頃」が白寿賞・奨励賞。1966年没、55歳。日本画

大矢十四彦（おおや・としひこ/1940年～）

新潟県生れ。1962年東京芸術大学日本画科卒。62年新日展に入選、翌年も入選。66年よりは院展、春の院展に出品を重ねるようになり、同時に院展同人の今野忠一に師事。96年院展及び、2000年院展、01年院で奨励賞、2000年に春の院展奨励賞。父に日本画家大矢黄鶴、兄に同じく日本画家の大矢紀を持つ。富貴、椿、桜など花図や花鳥図を得意とする。日本画

大矢 紀（おおや・のり/1936年～）

長岡市生れ。日本画家。戦前から戦後にかけての日本画壇を代表する前田青邨、平山郁夫に師事。「生命の胎動」をテーマに山・樹木・花鳥・生物を描く。1955年に院展入選。79年に紺綬褒章。以後、6回受賞。84年前田青邨賞、2005年文部科学大臣賞、08年内閣総理大臣賞24年日本芸術院賞。日本美術院同人、評議員。日本画

大山富夫（おおやま・とみお/1956年～）

福島県生れ。1984年東京芸術大学大学院修士課程修了。86～89年オーストリア政府給費留学生として国立ウィーン応用美術大学に学ぶ。96年白日会展入選、以降、同展を中心に活動。個展多数。現在、白日会会員、池袋コミュニティカレッジ講師、朝日カルチャー横浜講師。洋画、ウィーン幻想派、美教

大山結子（おおやま・ゆうこ/生誕年不詳～）

埼玉県生れ。新宿美術学院の油画科に特待生、多摩美術大学に油画専攻卒。インターメディアをモットーとした活動を展開。多摩美術大学在学中、演劇『自来也』に役者として抜擢さ

れ、自来也役で出演。大山は東京芸術劇場にて上演された『火の鳥(ストラヴィンスキー)』にて主演。村上隆主催 GEISAI を夏に再開することとなり、カイカイキキギャラリーの招待作家として、キックオフイベントに出演。通称「うさぎ組」という芸術家 NGO の代表。現代美術、インターメディア・アーティスト、インスタ

岡倉秋水 (おかくら・しゅうすい/1869～1950年?)

福井県生れ。岡倉天心の甥。狩野芳崖に師事、フェノロサの鑑画会に出品。1889年東京美術学校に入学。90年より女子高等師範でおしえ、のち学習院教授。この間日月(じつげつ)会を小林呉嶺(ごきょう)らと結成。1950年?没、82歳。作品に「鷲」「包囲」。日本画、美教

岡崎桜雲 (おかざき・おうん/1932年～)

高知県生れ。1963年日展入選。全関西現代書展(審査員)、蒼狼社(委員)、国際書道文化交流協会(常任理事)、現代日本書家協会(顧問審査員)、等に初期の一時期参加。自作詩歌と現代書による個展 36回、桜雲会百人展等の社中展 124回。桜雲書道会主宰。日本歌人クラブ会員、四国地区幹事俳人協会々員。書

岡崎和郎 (おかざき・かずお/1930～2022年)

岡山市生れ。早稲田大学文学部芸術学専攻美術専修卒。同大学院美術史専攻。1950年代より本格的に作家活動を開始し、58年に読売アンデパンダンに出品。66年東京画廊にて個展開催。同時期に、独自の造形思想「御物補遺」を確立し、身の回りにおける平凡なもののやかたちをベースにした「オブジェ」の制作を始める。以来、「御物補遺」を基にした数多くのユニークな作品を発表。倉敷市立美術館(1997)、奈義町現代美術館(2001)、神奈川県立近代美術館鎌倉(2010)、北九州市立美術館(2016～17年)などで個展を開催。2022年没、92歳。オブジェ、彫刻

岡崎健治 (おかざき・けんじ/1940年～)

大分市生まれ。大分県立別府緑丘高等学校時代、洋画家の廣瀬通秀に師事。美術教師を続ける一方で、独立美術協会展や大分県美術展、グループ展等で作品を発表。1971年独立美術協会会友。77年大分県美術展で第1回OG賞。北九州絵画ビエンナーレ展や現

代美術選抜展など、各種コンクール展に選拔され、話題作を発表。洋画、美教

岡崎精郎 (おかざき・せいろう/1898～1938年)

高知県生れ。地主の家の長男に生まれる。中学卒業後、画家を志して岸田劉生に師事していたが、病気のため帰郷し、武者小路実篤の人道主義に傾むく。その後農民運動に参加し、1929年以降秋山村議、村長。32年全農高知県連委員長、全国労農大衆党高知県連会長に就任。32年仁西村争議で検挙されて懲役8カ月に処せられた。35年全農県連執行委員長となり、36年高知県議となった。1938年没、40歳。洋画

岡崎雪声 (おかざき・せつせい/1854～1921年)

京都生れ。1875年鈴木政美について蝋型(ろうがた)鑄造法をまなぶ。90年東京美術学校(現東京芸大)教授となり、91年欧米に留学。大型の鑄金にすぐれ、高村光雲作の木彫り原型から鑄造した皇居前の「楠木正成像」や、上野の「西郷隆盛像」などおおくの作品をのこした。1921年没、68歳。彫刻、鑄金、美教

岡崎立 (おかざき・りゅう/1950～2004年)

愛知県生れ。美学校(東京)で細密画、木口木版(こぐちもくはん)や造本を、五日市スタジオで銅版を学ぶ。主に野鳥をテーマとした作品を手がけ、個展などで作品を発表する。主な著書に山と溪谷社の『鳥百態』(1988)、『野鳥フィールド日記』(1995)などがある。2004年没、54歳。細密画(鳥類)

岩手県立工業学校を卒業後、上京。陸軍省に勤務の傍ら、太平洋画会研究所に通う。23年軽米町立軽米尋常高等小学校で教職に就く。以後、県内で美術教育に携わる。29年白日会展で白日賞。39年盛岡市で個展。47年盛岡市内高等学校美術連盟を結成、顧問となる。盛岡市で没、77歳。洋画、美教

岡田敦 (おかだ・あつし/1979年～)

北海道生れ。2003年大阪芸術大学芸術学部写真学科卒。05年東京工芸大学大学院芸術学研究科博士前期課程修。08年東京工芸大学大学院芸術学研究科博士後期課程修了 博士号取得(芸術学)受賞。17年東川賞 特別作家賞。14年北海道文化奨励賞。08年木村伊兵衛写真賞02年富士フォトサロン新人賞。写真、芸術学

岡田伊三次郎（おかだ・いさんじろう/生没年不詳）

大坂の地主で、資産家。蘇州版画コレクションを黒田源次氏、岡田伊三次郎氏、美術商の三隅貞吉らが協力して収集し、そして矢代幸雄氏らの尽力を経て、現在の東京文化財研究所の前身、美術研究所の開所記念展覧会「故岡田伊三次郎氏蒐集支那版画(姑蘇板)陳列」(1931(昭和6)年11月1～3日)で展覧された。2000年杜美術館に一括収蔵。蘇州版画コレクター

緒方一成（おがた・いっせい/1934～2006年）

熊本県生れ。東京芸術大学卒業後、1961年にパリに渡り、パリ青年ビエンナーレ、フレンヘン国際版画ビエンナーレをはじめ、日本現代美術展、東京国際版画ビエンナーレなどに作品を発表。71年に帰国。ドローイング、油絵、版画などを手がけた。2006年没、72歳。版画、洋画

岡 孝博（おか・たかひろ/1970年～）

広島県生れ。1996年日本大学芸術学部美術学科彫刻コース卒。98年日本大学大学院芸術学研究科造形芸術専攻博士前期課程修。2011年東京芸術大学大学院美術研究科先端芸術表現専攻素材と創造性研究生修了。2000、2011年新作家賞。12年会員。小林和作賞(美術振興小林和作基金/2023)。彫刻

岡田閑林（おかだ・かんりん/1775～1849年）

江戸の人。谷文晁にまなび、花鳥画を得意とした。1849年没、75歳。江戸後期の絵師

尾形喜代治（おがた・きよじ/1914～2012年）

山形県生れ。1934年石川確治に師事。36年上京し大太平洋美術学校に学ぶ。38年より澤田政廣に師事。41年新文展に入選。47、48年第3回・第4回日展で連続特選、59年新日展特選。日展参与。2012年没、98歳。彫刻

岡田琴湖（おかだ・きんこ/1862～1945年）

秋田県生れ。10歳の頃能代市檜山の画家豊島都山に絵を学ぶ。1880年平福穂庵(百穂の父)に師事。87年東洋絵画共進会で褒状。90年内国勸業博覧会妙技賞褒状。95年同博

覧会で褒状。89年から日本国内を巡り始め、92年から北海道から九州、中国大陸、朝鮮半島を回歴しては能代に帰るといふ生活を生涯にわたって続け漂泊の画家と称される。1945年没、83歳。日本画

岡田紅陽（おかだ・こうよう/1895～1972年）

新潟県生まれ。生涯をかけ富士山写真の礎を築く。紙幣や切手に採用された作品も多く、日本人が心のどこかにもつ富士山のイメージの原風景となっている。1952年に日本写真協会を創設。日本写真界の発展と写真文化の向上に貢献した。千円札の裏の写真で有名。1972年没、77歳。写真

尾形月山（おがた・げっさん/1887～1967年）

東京生れ。尾形月耕の子として生れる。父月耕より絵について師事。1900年連合絵画共進会三等褒状。同展、日本美術協会展で受賞を重ね、日月会、巽画会会員。日露戦争関係の錦絵を描いている。08年文展入選、第2回で三等賞、第3回、第4回で褒状。20年「月山」と改める(読みかたは変わらず「げっさん」)。人物や仏画に秀で、代表作に「大仏開眼供養図」、「達智門の図」。1967年没、80歳。浮世絵師、日本画、版画

尾形乾山（おがた・けんざん/1663～1743年）

京都生れ。呉服商、雁金屋の三男として生まれる。六歳年上の兄は尾形光琳。乾山は父の莫大な遺産が手に入っても、内省的で書物を愛し隠遁を好み、靈海・逃禅などと号して地味な生活を送った。1689年仁和寺の南に習静堂を構え、参禅や学問に励んだ。野々村仁清から本格的に陶芸を学ぶ。乾山の名は代々受け継がれていった。6代乾山(1851-1923年)はバーナード・リーチの師。1743年没、81歳。江戸中期の絵師、陶工

岡田秋嶺（おかだ・しゅうれい/1876～1941）

東京生れ。1897年東京美術学校日本画科卒。同級に結城素明がいる。无声会展や日本絵画協会と日本美術院の連合絵画共進会入選、また博物館嘱託として奈良で古画複写に携わる。私立中学校や東京女子高等師範学校を経て、1901～20年東京美術学校教授。図画教科書の作成。1941年没、65歳。日本画、美教

尾形 純 (おがた・じゅん/1962年～)

東京生れ。1995年東京芸術大学大学院美術研究科保存修復技術油画修了。97～98年文化庁芸術家在外研修にてニューヨークに留学。Rustin Levenson Art Conservation Associatesにてインターンにて実務研修。現代絵画の技法や保修復存技術の研究をおこなう。2004年ビエンナーレ KUMOMOTO II 熊本市長賞。15年 Griffin Gallery Open (ロンドン) Winsor & Newton ペンティングプライズ・ファイナリストに選出。洋画、保修復存技術研究

岡田春灯齋 (おがた・しゅんとうさい/生没年不詳)

京都の人。松本儀平に銅版画をまなぶ。1847年以後、諸国名所図や歴史絵などをおおく制作し、水月堂という屋号の店をひらいて販売した。幕末の銅版画家

岡田眞治 (おがた・しんじ/1968年～)

愛知県生れ。1987年愛知県立芸術大学日本画専攻卒業(89年大学院修了)。片岡球子に師事。再興第72回院展で初入選(90年院友、00、03年奨励賞)。96年第1回東京日本画新鋭選抜展に出品。2003年再興第88回院展第9回天心記念茨城賞。日本画

岡田誠也 (おがた・せいや/1928～1988年)

茨城県生れ。1950年茨城大学教育学部美術科卒。67年再興新興美術院展で入選、佳作(以後出品、68年会友、70年準会員)。71年新興美術院会員。1988年没、60歳。日本画

岡田蘇水 (おがた・そすい/1880～1942年)

栃木県生れ。1900年上京、佐竹永湖に師事した。02年より日本美術協会展、日本画会展、日本南宗画会展に出品、屢々賞牌をうけ、御前揮毫、宮内省買上等のことも幾度かあった。文展にも大正元年より6回にわたって「梅花書屋」「松林仙館」「夏山避暑」「秋山閑居」「秋戀横靄」等の山水画を出品。日本美術協会委員。東京で没、63歳。日本画

岡田為恭・冷泉為恭 (おがた・ためちか/1823～1864年)

京都生れ。京狩野派の画家である狩野永泰の子。父の没後間もなく、自ら冷泉姓を名乗ったが、王朝文化に傾倒し、1850年公家である岡田家の養子となり、岡田姓を名乗る。当時《伴大納言絵巻》(出光美術館)の所蔵者であった酒井忠義(ただあき)との交遊から佐幕派の

嫌疑をかけられ、64年長州藩浪士に斬殺された。若年より才能を発揮し、膨大な古典絵巻を模写し、大和絵の技法を習熟させ、王朝趣味の強い物語絵などを得意とした。1864年没、42歳。江戸後期の復古大和絵派の絵師

尾形探香 (おがた・たんこう/1812～1868年)

福岡藩御用絵師尾形家8代。洞霄の長子。1834年参勤交替に従って江戸に上り、鍛冶橋狩野家に入門、史料『尾形家累系』によれば探信守道に師事したという。翌年の探信逝去後は子の探淵守真についたと考えられる。江戸での修業期間は比較的短く、文政年中後半からは壱岐や別府、長崎などに赴いている。51年黒田藩江戸新御殿内部装飾の御用を父洞霄とともに務めたほか、その2年後には急の御用により長崎に赴き、長崎に来航中のロシア人使節団の活写をおこなっている。1868年没、56歳。江戸後期の絵師

小方仲由 (おがた・ちゅうゆう/生誕年不詳～1669年)

福岡藩御用絵師尾形家初代。黒田長政の代に藩に抱えられ、2代忠之の命により狩野探幽の門人となる。寛文年間の藩の記録には仲由の項には「絵畫」と註記されており、禄高も寛文年間で150石と記載されている。仲由の遺作は極めて少なく、具体的な画事については不明であるが、「桜井与止姫社古図」を藩主の諸願成就のため1651年描いて奉納。江戸前期の絵師

尾形洞谷・六代・守周 (おがた・とうこく VI/1753～1817年)

1768年福岡藩御用絵師尾形家5代守厚の養子となり、はじめ守周と称した。この守周の後半生、初代以来師事してきた鍛冶橋家から駿河台狩野家へ師家を変更し、90年狩野洞春美信から洞谷美淵の名を授かり、守義以来の「守」字を廃した。また、姓を公式に小方から尾形に改めたのもこの洞谷の代であった。師の洞春没後は同門で江戸詰の福岡藩絵師石里洞秀との関係を深めたことが知られる。1817年没、64歳。江戸後期の絵師

尾形洞春 (おがた・とうしゅう/1791～1863年)

福岡藩御用絵師尾形家7代。博多商人の子として生まれたが、『筑前人物志』によれば(6代)洞谷或日中島橋を過ぐ、江戸に上り、狩野洞白愛信に師事。1804年江戸滞在中に洞谷の養子となり、家督を相続している。伝統的な狩野派の法を守った。1863年没、72歳。江戸

後期の絵師

尾形洞眠（おがた・とうみん/1839～1895年）

福岡藩御用絵師尾形家9代で探香の長子。祖父洞霄に学んだが、1861年江戸修業から洞眠陽晴と号するようになり、恐らくこの時駿河台狩野家の洞春陽信に師事したものと思われる。86年家督を継ぐが、68年家業御免となり、初代仲由から9代続いた尾形家最後の絵師となった。1895年没、56歳。江戸後期-明治期の絵師、尾形家最後の絵師

岡田登志男（おかだ・としお/1914～1991年）

金沢市生れ。1933年石川県立工業学校窯業科卒、34年同校図案絵画科専攻科修了。同年金城画壇展で奨励賞。戦後宮本三郎に師事、48年二紀会創立より出品、57年同人優賞(最高賞)を受け、二紀会委員、北陸支部長を務めるも71年退会。晩年は金箔を貼りつけた画面に油彩を施し、前衛的な作品を描く。1991年没、77歳。洋画

岡 信孝（おかのぶたか/1932年～）

川崎市生れ。祖父である川端龍子の主宰する青龍社に入り画家としての経験を積む。1966年青龍社は解散、以後無所属となり精力的に個展活動を展開。義父に浜田庄司。信州へのゆかりは深く、善光寺大本願へ天井画と襖絵を描き寄贈。十代の頃より実父の影響を受け古美術蒐集の一面を持つ。沖縄県浦添市美術館、神奈川県川崎市民ミュージアムほか多数の美術館博物館、さらに大英博物館(イギリス)、東国大学博物館(韓国)にコレクションを寄贈。2012年成川美術館にて「傘寿記念岡信孝展」、10月韓国ロッテギャラリーにて「故宮の四季 日本画展」を開催。日本画

岡田米山人（おかだ・べいさんじん/1744～1820年）

大坂生れ。米穀商を営んでいたので、米山人と号す。伊賀藤堂藩に仕え、絵師となる。作品は、南画調を基本とし、大胆な筆使いを用いた迫力ある山水画などを得意とした。また、浦上玉堂や田能村竹田等ともよく交友した。子に岡田半江がいる。「秋山蕭寺図」が重美指定となっている。1820年没、76歳。江戸後期の絵師

岡田半江（おかだ・はんこ/1782～1846年）

大坂生れ。画を父岡田米山人に学ぶ。独自に南宋画の研鑽を積んで画技を修得。1809年、父の後を継いで伊勢藤堂藩に絵師として出仕。09年父との合作安積家障壁画の制作に取り組み活躍、その後大坂に戻り父の没後は大阪画壇の中心的な画家としての地位を確立、南画山水、花卉など緻密な描写を得意とした。また、浦上春琴など当時の一流文人・画家らと交流を深め詩文にも秀で、自らの作品に賛を付したものをよく残している。1846年没、64歳。江戸後期の大阪の絵師

小方守等・四代（おがた・もりとう IV/1695～1772年）

1695年生れ。福岡藩御用絵師尾形家3代守房の実子。1731年家督を継いでいる。32年守等とも併称するようになり、51年隠居して一角と改めている。遺作は少ないが、『筑前国産物絵図鑑』の製作に携わり、それに対する褒賞を受けた。1772年没、77歳。江戸中期の絵師

小方守房・狩野幽元（おがた・もりふさ/生誕年不詳～1732年）

宇都宮市生れ。福岡藩御用絵師尾形家第3代。探幽の下での修業中の1677年頃、同門の先輩であった小方守義に望まれて養子となり、のち小方家の家督を継ぎ、小方喜六と名乗るようになる。88年頃からは守房をもちいている。その後中橋狩野家の門に入り直し、1704～11年中狩野姓を許されて狩野幽元(友元)重信と名乗り、この頃法橋位も得ている。「画探幽に似て気韻あり」と評せられた。江戸中期の絵師

小方守義・二代（おがた・もりよし II/1643～1682年）

福岡藩御用絵師尾形家初代仲由の子で、父と同じく君命により狩野探幽の門人となる。画才が豊かであったとみえ、その画風は狩野常信を彷彿とさせるものであり、久隈守景、桃田柳栄、神足守周とともに探幽門下の四天王と称されていたらしい。守義の遺作は少なく、具体的な画事については不明であるが、1679年江戸において泊孫兵衛という博多の絵師とともに新房室造営に関わったことが知られている。1682年没、39歳。江戸前期の絵師

岡田裕子（おかだ・ゆうこ/1970年～）

東京生れ。1993年多摩美術大学を卒業し、94年同大学研究生を修了。2001年現代美

家の会田誠と結婚。2007年に製作・DVD販売された岡田の半生を描いたドキュメンタリー風ドラマ、『ふたつの女』（監督・ダーティ工藤）では会田誠と共演。10年より参加者をアーティストだけに固定しないオルタナティブなアートプロジェクトとしての人形劇団『劇団☆死期』を主催。取り扱い画廊はミヅマートギャラリー。現代美術

岡田佑里奈（おかだ・ゆりな/1995年～）

兵庫県生れ。2018年京都造形芸術大学卒、20年京都造形芸術大学大学院修士課程卒。個展、「Walk in a dream」(ARTDYNE Tokyo, 2021)、「It's gonna be AWESOME！」(YOD Editions、大阪、2021)。グループ展やアートフェアに、「grid」(biscuit gallery、東京、2022)、「Up_01」(銀座蔦屋書店、東京、2021)、「SHIBUYA STYLE vol.14」(西武渋谷店、東京、2020)。受賞歴、「ART AWARD MARUNOUCHI 2018」後藤繁雄賞受賞(2018)、「TOKYO FRONTLINE PHOTO AWARD#7」後藤繁雄賞受賞(2017)など。現代美術、洋画、写真

岡野薫子（おかの・かおるこ/1929～2022年）

東京生れ。科学映画の企画・脚本家を経て作家に。1964年初めての長編『銀色ラッコのなみだ』（実業之日本社）でサンケイ児童出版文化賞・NHK児童文学奨励賞。1977年『ミドリがひろったふしぎなかさ』（童心社）で講談社出版文化賞、2002年『岡野薫子の作品世界一文と絵と』（桜映画社）で教育映像祭優秀作品賞。2014年児童文化功労賞（日本児童文芸家協会）を受賞。2022年没、93歳。児童文学作家、絵本

150

岡 不崩（おか・ふほう/1869～没年不詳）

福井県生れ。狩野芳崖に師事し北宗派を究め、特に山水・花図を能くする。東京美術学校設立に際し第1回に入学。翌年抜推されて高等師範学校講師となる。同士と共に真美会を創立。全国連合絵画展覧会審査員。大東絵画協会評議員理事。帝国絵画協会会員。日本画

岡 文濤（おか・ぶんとう/1875～1943年）

京都生れ。京都市立美術工芸学校卒。京都市立美術工芸学校絵画科卒業後は、山元春挙に師事。1911年文展で入選。以来、文展、帝展など官展作家として活躍を示した。本来は花鳥画を得意としたが、14年文展の「梅雨の頃」では、雨中の田植え仕事をモチーフに、ま

た、その翌年には朝鮮風俗を題材にした「スリナビ」などを発表しており、多範囲にわたって画題を求め、晩年には文人画風の南画も取り入れた。1943年没、68歳。日本画、文人

岡部覚弥（おかべ・かくや/1873～1918年）

福岡県生れ。東京美術学校(現東京芸大)で加納夏雄、海野勝珉(うんの-しょうみん)に師事。母校でおしえたのち、明治37年から5年間ボストン博物館にこつとめた。1918年没、46歳。彫金

岡 不崩（おか・ふほう/1869～1940年）

福井県生れ。弱冠東京に出て、狩野友信及び狩野芳崖に師事し、1889年東京美術学校に入学した。90年東京高等師範学校講師となり、毛筆画の教育に尽瘁す。95年辞してし、一時九州に赴いたが、1900年東京に帰り、府立第二高等女学校教諭兼女子師範学校教諭。02年同志と謀り、真美会を創立し、自ら理事となり活躍す。晩年画界を退き、専ら意を古事、古典の研究に注ぎ、就中万葉集に関する貴重なる研究を遂げた。即ち刊行されたるものに「万葉集草木考」「古典草木雑考」があり、外に未定稿本多し。1940年没、72歳。日本画

岡 文濤（おか・ぶんとう/1876～1943年）

京都生れ。絵画専門学校を卒業、山元春挙に師事。旧文展第5回に「杉垣」を出したほか、8回9回と出陳したが、その後は官展から退いていた。1943年没、68歳。日本画

岡部昌生（おかべ・まさお/1942年～）

北海道生れ。1965年北海道学芸大学卒。76年北海道秀作美術展優秀賞。79年フランス滞在、80年北海道現代美術展優秀賞。85年ソウル・文芸振興院美術会館の環太平洋美術展、86年ソウル・YOON Galleryの招待13人展に出品。1988年オーストラリアで個展、ワークショップ開催。対象の上に紙をあて、上から鉛筆でその凹凸をこすり出すフロッターージュの方法を用い、その行為により時間・場所を剥ぎ取る。（「THE HIROSHIMA 広島市現代美術館所蔵作品による」図録 1991年）。現代美術

岡部昌幸（おかべ・まさゆき/1957年～）

横浜市生れ。早稲田大学第一文学部美術史専攻。同大学院文学研究科芸術学(美術史)

専攻博士前期課程修了。横浜市美術館準備室学芸員、東京都庭園美術館専門調査員等をへて、帝京大学大学院文学研究科日本史・文化財学専攻教授(美術史)、1997年に助教授、2012年教授、23年名誉教授。2017年群馬県立近代美術館館長に就任、2020年特別館長。日本フェノロサ学会会長等を兼務。西洋近代美術および日本近代美術、ジャポニズムを専攻。2024年梅野記念絵画館館長。美評、写真評論家、群馬県立近代美術館特別館長

岡村宇太郎 (おかむら・うたろう/1899～1971年)

京都生れ。京都市立絵画専門学校。1919年国画創作協会展で樗牛賞、会員。土田麦僊に師事、また新人作家の庇護者として著名な実業家内貴清兵衛の援助を受ける。28年国画創作協会展解散後、同志と新樹社を結成したが、のち画壇をひなれ独自に制作を続けた。1971年没、72歳。日本画

岡村葵園 (おかむら・きえん/1879～1939年)

鳥取県生れ。東京共立美術学館を経て、1902年東京美術学校を卒業、09年川端画学校日本画科の主任教授となり、一旦辞職したが、18年再び同職に就任。日本画の外に書道、漢籍等に造詣深く、後進の誘掖に当った。1939年没、60歳。日本画、美教

岡村吉右衛門 (おかむら・きちえもん/1916～2002年)

鳥取市生れ。旧制鳥取第二中学在学中に柳宗悦の講演を聞いて感動。民藝運動に参加する。1933年吉田璋也と柳宗悦の紹介で、芹沢銈介工房に入門、染色を学ぶ。37年日本民藝館主催、日本民藝協会展に入選。38年銀座のたくみ工芸店で初個展を行う。70年編著書を多数刊行。96年『岡村吉右衛門の仕事』を多摩美術大学附属美術館で行う。99年特別展『民藝運動と岡村吉右衛門』が鳥取県立博物館で行う。99年白石頭二編『岡村吉右衛門の芸術 型染め版画』が出版。フリーダ・ジャポソ社。中国大陸、沖縄、戦後は北海道を中心に日本各地を歩き、民俗、工芸を調査。成果生かした創作活動で知られる。2002年没、86歳。染織、染色、版画、民芸

岡村竹四郎 (おかむら・たけしろう/1861～没年不詳)

長野県生れ。1878年慶應義塾、ニコライ神学校、工部大学校附属美術学校に学ぶ。当時製紙界は幼稚にして日本で初めてコロームによる製紙方法で信陽堂をおこす。帝国印刷

と信陽堂を合併して1908年東洋印刷会社を創業し社長となった。妻は版画家の岡村政子。石版版下画家

岡村鳳水 (おかむら・ほうすい/1770～1845年)

京都生れ。京都にてで円山応挙にまなび、応挙十哲のひとりにかぞえられた。伊勢(いせ)(三重県)山田の岡村又太夫の養子となり、同地方に円山派の画風をつたえた。1845年没、76歳。江戸後期の絵師

岡本明久 (おかもと・あきひさ/1951年～)

富山県生れ。1973年東京芸術大学日本画科卒業。日春展初入選(以後21回)。76年日展入選(以後14回)。準会員、審査員2006、8年日展特選。日本画

岡本敦生 (おかもと・あつお/1951年～)

広島県生れ。1976年多摩美術大学大学院彫刻科修了。早くから国内外の彫刻シンポジウムに参加し、また野外彫刻展に出品するなど活躍を続け、89年朝倉文夫賞。96年中原悌二郎優秀賞。日本の石彫の代表的作家の一人。80年代前半は石塊の内部を空洞にし、表面のわずかな隙間から内部にセットされた照明器具の光が洩れるといったトリッキーな彫刻を制作。80年代後半からは表面を荒く削った御影石を細かく分割し、内部を空洞化した上で表面をもとのかたちどおりに組み直す「記憶体積」シリーズを開始し、その豊かな発想力でこれまでの石彫の概念を変革する試みを重ねてきている。彫刻(石彫)

岡本茂彦 (おかもと・しげひこ/1807～1844年)

京都生れ。父は岡本豊彦に画を学ぶ。御所の御使番を勤めた。1944年没、37歳。弘化二年塩川文麟らによって墓標が作られた。江戸後期の絵師

岡本信治郎 (おかもと・しんじろう/1933～2020年)

東京生れ。都立日本橋高等学校卒、(株)凸版印刷勤務ながら日本水彩画展、二紀展に出品。1956年初個展後、ヨシダ・ヨシエらと「グループ制作会議」を結成。62、63年シエル美術賞展で佳作賞。64年長岡現代美術館賞展で大賞。東京ビエンナーレ、現代日本美術展など国内外の展覧会に出品。日本のポップアートの先駆的役割を果たした。近年では、ポップア

ートを世界的な文脈で紹介する「International Pop」展(ウォーカーアートセンター、ダラス美術館、フィラデルフィア美術館を巡回)に出品、戦後日本の一傾向を示す美術家として、国際的な評価が高まっている。2020年没、87歳。洋画、水彩、ポップアート

岡本青輪 (おかもと・せいりん?/1915~1993年)

1915年生れ。河合玉堂の門下。玉堂に地位もお金もいらいぬ画家と評された。1993年没、78歳。千葉県ゆかりの作家。日本画

岡本池陽 (おかもと・ちよう?/生没年不詳)

通称は理右衛門、名は信敬。松村蘭台に師事した。藩政時代に信仰された大黒像を描いて特に著名で、その絵は「理右衛門大黒」と呼ばれ人気だった。江戸時代の絵師

岡本 巴 (おかもと・ともえ/1923年~)

長崎県生れ。1940年長崎県島原高等女学校卒、岡本氏と結婚後上京。64年頃より、小林観爾、佐藤太清に師事し日本画を学ぶ。72年「パナソール」日春展入選。73年日展入選。80年日展入選。日本画

岡本豊彦 (おかもと・とよひこ/1773~1845年)

倉敷市生れ。はじめ玉島の黒田綾山に師事、のち京都に出て呉春に入門。花鳥図や南画風の山水図をよくし、松村景文とともに四条派の中心人物となる。門下に塩川文麟、柴田是真らがいる。1845年没、72歳。江戸末期の絵師

岡本治男 (おかもと・はるお/1909~1985年)

1909年生れ。30年東京帝国美術学校西洋科に入学。高島達四郎、林武に師事。31年独立美術協会展に入選。45年終戦後、松阪の呉服問屋の帯絵を描く。また肖像画を制作して生計を立てる。この頃外山卯三郎と知り合う。51年自由美術家協会展に出品。52年岩中徳次郎、松浦莫章、佐藤昌胤らと律動美術協会を結成。53年自由美術協会を脱退し、第3回モダンアート協会展に出品。58年この年から10年間ほどはサロン・ド・ジュアン展、国際アートクラブ展に出品。65年東京日本橋三越の「日本、今日の美術展」に「顔シリーズ」を出品。三重県文化会館で個展(64点)を開催。70年この頃より「人間シリーズ」の制作。79年

津市新庁舎のために陶壁レリーフを制作。津市で没、76歳。1988三重県立美術館県民ギャラリーで「岡本治男展」(主催:追悼岡本治男展実行委員会)が開催。洋画、陶壁レリーフ

岡本緑郎 (おかもと・ろくそん/1811~1881年)

和歌山県生れ。文化8年生まれ。紀伊出身だと思われる。名は邦直、字は子温。山本梅逸風の南画をよくした。画域が広く紀伊各地に作品が残っている。1881年没、71歳。江戸後期~明治期の絵師

岡 熊嶽 (おか・ゆうがく/1762~1834年)

大坂の人。池大雅の高弟・福原五岳に師事。このときの同門に林圃苑などがいる。後に諸流派を独自に研究し画風を変え、山水図・人物図をよくした。木村兼葭堂と交遊、兼葭堂13回忌書画展に出品。尾張坂・上町に居住し、蘭の栽培で有名。享和から文化年間に挿絵の作画。1834年没、72歳。子息の琴嶽(1792~1830年)も唐絵師として著名となったが父より早く没した。江戸中期-後期の大阪の文人画家、挿絵

小川あぐり (おがわ・あぐり/1941年~)

神奈川県生れ。1992年新制作展入選。2015年新制作展で新制作賞。神奈川県女流展神奈川県立近代美術館賞。その他個展、グループ展等。洋画

小川雨虹 (おがわ・うこう/1911~2000年)

栃木県生れ。三尾呉石、中村貞以門下。時代考証と文楽を研究し、風俗画や美人画を能くする。日本美術院院友、春泥会員。2000年没、89歳。日本画

小川晴暘 (おがわ・せいよう/1894~1960年)

1894年生れ。奈良を中心に各地の仏像を撮り、1922年美術史家で書家・歌人としても名高い會津八一の勧めを受けて飛鳥園を創業。文化財写真の草分けとして知られる。美術史家小川光暘は次男、写真家小川光三は三男。1960年没、66歳。写真

小川洗二 (おがわ・せんじ/1905~1962年)

茨城県生れ。1931年東京美術学校図案科本科卒。中村岳陵、藤田嗣治らに学ぶ。在

学中より舞台装置を手掛ける。32～34年帝国美術学校図案科助教授。40読売新聞入社(客員)。42～45年情報局嘱託。その間、新聞小説の挿絵を制作。37年挿絵倶楽部設立。58年再興新興美術院展に出品、会員。千葉県で没、57歳。日本画、挿絵、舞美、美教、ジャーナリスト

小川専蔵 (おがわ・せんぞう/生没年不詳)

埼玉県生れ。千蔵とも書くが義成と名乗り、人物彫刻を得意とし「彫専」とも呼ばれた。弟子に小林栄次郎がいる。市内大麻生明導寺欄間彫刻、所沢市金乗院放光寺観音堂彫刻・集福寺法堂等が残されている。彫刻

小川孝子 (おがわ・たかこ/1908～1989年)

文化学院大学美術科第1回卒業生。パリへ留学、帰国後、1934年画家*村井正誠と結婚。戦後、画壇へと本格的にデビューした。モダンアート(抽象)のエリア、また、教育機関においても活躍。モダンアート協会・女流画家協会会員。1989年没、81歳。洋画

小川隆雅 (おがわ・たかまさ/生没年不詳)

秋田県横手地方によく鷹を描いた系譜があり、その継承者である。その生涯についてもよくわかっていないが、全国を放浪し、三重で亡くなったと伝えられる。その作品は狩野派の技法を根底にした鋭い筆致で、独自の画品がある。享保(1716-36)頃の人。江戸中期の絵師

尾川 宏 (おがわ・ひろし/1932～2018年)

広島県生れ、向井良吉に師事。石や木、金属など様々な素材を使った彫刻作品に取り組む。1967年紙を素材にした立体作品による「紙のフォルム展」を開催。求龍堂より『紙のフォルム』を出版、毎日出版文化賞。72年東京芸術大学講師。90年代インドネシアや樺太など戦争の碑文を製作。「紙」に近代型造形感覚を吹き込み、平面から立体へ、紙の創造性を探求。2018年没、86歳。彫刻、造形、美教

小川泰弘 (おがわ・やすひろ/1953年～)

和歌山県生れ。1978年東京芸術大学油画科卒。82年渡伊。84年イタリア・フラツタ国内コンクール第一位。89年文芸春秋で個展。96年ギャラリーためながで個展。洋画

小川 游 (おがわ・ゆう/1932年～)

満洲生れ。浦和中学校に編入学、高田誠に師事。東京芸術大学美術科卒業後、浦和市内の中学校高校の美術教師。2016年中札内美術村にて小川游作品館が開館。68年一水会賞。69年一水会に入会。74年一水会会員優賞を受賞。78年寺井力三郎らと遙土会を結成。98年埼玉文化賞。2016年中札内美術村にて小川游作品館が開館。洋画、浦和画家、美教、個人美術館

小川善規 (おがわ・よしのり/1941年～)

大分市生れ。1963年大分大学学芸学部卒。59年大分県美術展で入選、同展で活動。62年県教育長賞、83年、2007年、県美術協会賞。一方、61～70年グループ0展に出品し研鑽を続けた。62年東光会展に入選。83年、個展(大分銀行本店ロビー)。2013～17年大分県美術協会第10代会長。洋画、美普

沖 啓介 (おき・けいすけ/1952年～)

東京生れ。多摩美術大学美術学部彫刻科卒。主な展覧会:キヤノン・アートラボ「サイコスケープ」、第一回横浜トリエンナーレ、SMAAK(ボネファンテン美術館、オランダ)、「身体の夢」(京都国立現代美術館、東京都現代美術館)、Medi@terra(ギリシャ)、「Art Scope」(インドネシア)、Transmediale2008(ベルリン)。高祖父は沖冠岳(1817-1876)。東京造形大学特任教授。カーネギーメロン大学 STUDIO for Creative Inquiry 研究員。現代美術、エレクトロニック・アート、情報デザイン、映像、美教

沖 健次 (おき・けんじ/1950年～)

熊本県生れ。東京造形大学卒業後、クラマタデザイン事務所を経てジ・エアー・デザインスタジオ設立。主に家具・インテリアデザインを中心に活動。「タルラッチハウス」、「カクテルバジック六本木」。東京造形大学教授。著書:クリエイティブナウ『THE AIR』、作品集『速度空間』、『日本のインテリア・No1～4』、インテリアデザイン『空間の関係・イメージ・要素』(共編著)。インテリアデザイナー、美教

荻津勝孝（おぎつ・かつたか/1746～1809年）

秋田藩士。石橋四郎兵衛弘賢の次男として生れ、後に荻津勝猷の婿養子となった。狩野派を学び、その筆法に陰影を加えた迫真的な人物画を多く描く。1773年に源内来藩の折り、小田野直武、田代忠国らと洋風画の手ほどきを受けたと伝えられるが定かでない。8代藩主義敦(曙山)と9代藩主義和の2代に仕え、90年には天流切合棒術師範。1809年没、63歳。江戸後期の絵師

翁 譲（おきな・ゆずる/1947年～）

仙台市生れ。高校までを仙台で過ごす。1971年多摩美術大学彫刻科卒。70年代から人体をモチーフにした写実的な彫刻を制作。近年は木の素材感を残した作風へと推移し、他ジャンルのアーティストたちとのコラボレーションも展開。彫刻

荻生天泉（おぎゅう・てんせん/1882～1945年）

福島県生れ。1907年東京美術学校卒、橋本雅邦に師事。第1回文展初入選以来、文展・帝展・新文展・日展を中心に活動、有職故実を基調とした正統大和絵の作家で、松岡映丘・服部有恒らとならび日本美術史に残る作家。「霊山の北畠顕家卿」はじめ、多くの大作を神社仏閣に奉納。初代福陽美術会幹事長として後進の指導にもつとめた。1945年没、63歳。日本画

奥田郁太郎（おくだ・いくたろう/1912～1994年）

東京生れ。旧制中学在学中より画家を志し、川端画学校などで学びます。1945年から長野県白馬村の農家に借家し、赤貧の中作画に精進します。46年に一水会会員に、48年審査員に推挙。57年一水会委員を辞し、12年間住んだ白馬より松本市に転居し、生涯にわたり安曇野松本、上高地、木曾などの風景、風物を詩情豊かに描きました。1994年没、82歳。洋画

奥田輝一郎（おくだ・きいちろう/1910～2001年）

京都生れ。10代の頃は油絵を中心に創作活動、20歳前後から版画の制作。時代は、創作版画運動の全盛期。雑誌『白と黒』25号(1932年)の「松の芽」。白と黒社発行の『白と黒』『版芸術』『郷土玩具集』『土俗玩具集』『おもちゃ絵集』に毎月のように作品を送る。『版芸術』

37号35年)「全国郷土玩具集の4 伏見人形版画集」は、1冊すべて輝一郎氏の手による伏見人形作品集。日本版画協会展覧会第2～6回(32～37年)、京都工芸美術展覧会(32年)、市展第2、3、5～8回(昭和12～18年)に作品を出品。36年白と黒社の創作版画誌が最終号。戦後は、版画よりも油絵での創作活動が主となった。2001年没、91歳。版画、洋画

奥田輝芳（おくだ・きよし/1958年～）

滋賀県生れ。1983年京都市立芸術大学大学院美術研究科油画修了。主な招待展に、「新鋭美術選抜展」(1996・2000・2002年、京都市美術館)、「画廊の視点」(1996・2000年、大阪現代美術センター)、「Nippon Today」(2009年、ロストック市立現代美術館ドイツ)「安井賞展」、「吉原治良賞展」、「日本国際美術展」、「ジャンシエンバ賞美術展」、「現代日本美術展」、「現代日本絵画展」、「大阪トリエンナーレ 1996・2001」、「兵庫国際絵画コンペティション」など。京都芸術大学美術工芸学科教授。洋画、美教

奥田憲三（おくだ・けんぞう/1919～2003年）

石川県生れ。戦後双台社会員となり石井柏亭に師事。1948年より一水会連続入選、65年会員佳作賞、69年優賞。52年日展入選、63、67年特選。77年亜細亜現代美術展外務大臣賞、79年亜細亜大賞。日展会員、一水会常任委員。90年石川県文化功労賞、92年北國文化賞、96年金沢市文化賞受賞。2003年没、84歳。洋画、版画

奥田小由女（おくだ・さゆめ/1936年～）

大阪生れ。1955年日章館高等学校卒業後、人形作家を志して上京。72年日展特選、光風会会員。77年杉浦非水記念賞。79年日展審査員、83年現代工芸美術家協会の理事。88年日展評議員、文部大臣賞。90年日本芸術院賞、98年日本芸術院会員。2020年文化勲章。公益社団法人日展元理事長、一般社団法人現代工芸美術家協会理事長。人形

奥田正治朗（おくだ・しょうじろう/1901～1981年）

三重県生れ。1930年京都市立絵画専門学校研究科を修了。都路華香、西村五雲らに師事し、38年師が没した後、門下生の山口華楊が引き継いだ晨鳥(しんちょう)社に所属。26年帝展に入選して以後、帝展、日展に24回入選。日展会友。1981年没、80歳。日本画

小口卓也（おぐち・たくや/1947年～）

長野県生れ。1965年横浜市立展にて市長賞。70年 彩象美術協会 審査委員。73年 相模作家集団同人。星崎幸之助・二見利節に師事。66～73年 彩象美術協会展出品。広瀬功に師事。74～76年 現代美術協会展に出品。彫刻の森美術館賞、受賞（箱根）。91年 日動画廊昭和会展で日動火災賞。洋画

奥野稔和（おくの・としかず/1939年～）

京都市生れ。初め絵画を志していたが、1964年頃より写真に転じる。74年 パンリアル美術協会会員となり、93年退会。86年 滋賀現代絵画展でグランプリ、90年 現代版画コンクールで大賞。93年 大阪トリエンナーレ絵画部門でデュッセルドルフ市特別賞、ドイツに留学。94年 青木繁記念大賞展で石橋美術館賞、第24回現代日本美術展で大賞。琵琶湖やドイツの滞在地で撮影した風景写真をもとに、反転や拡大などの加工を施して独自の幻想的な世界を創出している。作品名の「V」は琵琶湖、「D」はドイツ、数字は作品の制作年と日付を表している。写真、版画、パンリアル

奥原晴湖（おくはら・せいこ/1837～1913年）

茨城県生れ。1854年古河藩士牧田水石に南画を学ぶ。65年上京、御徒町の画室を墨吐烟雲楼と命名、晴湖と号す。68年上野の戦火を避け、埼玉県熊谷市に転居。71年上野摩利支天横丁に春陽家塾を開業。74年川上冬崖らと文人グループ半閑社を結成。91年熊谷市に移り、画室を繡佛草堂（のち繡水草堂）と命名。1913年没、76歳。南画、画塾

奥原晴翠（おくはら・せいすい/1854～1921年）

福島県生れ。文人画家奥原晴湖に師事し、晴湖の養女。1903年内国勸業博覧会で「高秋朗月図」が褒状をうけ、11年文展で「春花・秋月」が入選。1921年没、68歳。日本画

岡村葵園（おくむら・きえん/1879～1939年）

鳥取県生れ。東京共立美術学館を経て1902年東京美術学校を卒業、09年川端画学校日本画科の主任教授となり、一旦辞職したが、18年再び同職に就任。日本画の外に書道、漢籍等に造詣深く、後進の誘掖に当った。書道、漢籍等に造詣深く、後進の誘掖に当った。1939年没、60歳。日本画

奥村厚一（おくむら・こういち/1904～1974年）

京都生れ。京都市立絵画専門学校卒。京都市立絵画専門学校を卒業後、西村五雲の画塾に入塾、画技を磨く。1929年帝展に入選。帝文展にて受賞を重ねる。71年日展で特選、また創造美術会の結成に参加。同会から新制作協会、創画会と作品を発表した。作風は風景画を中心に制作し当初は師の画風をよく継承していたが、中晩年からは水墨や洋画の技法を取り入れ独自の色彩表現を確立した。印名は、「厚一」「厚」「厚老」など。1974年没、70歳。日本画、洋画、水墨

200

奥村捨四郎・波々伯部金洲（おくむら・すてしろう・きんしゅう/1862～1930年）

明治から大正にかけて、三間印刷の画工として、三越呉服店の美人画ポスターを多数手がける。姓のヨミは諸説あり。1930年没、58歳。石版、ポスター

奥村石蘭（おくむら・せきらん/1834～1895年）

愛知県生れ。はじめ野村玉溪の門弟となり、1855年京都にいき横山清暉（せいき）にまなんだ。画業のほか篆刻（てんこく）隸書、俳句もたくみであった。1895年没、62歳。著作に「近古名臣図録」。幕末明治期の絵師

奥村利信（おくむら・としのぶ/生没年不詳）

江戸生れ。享保（きょうほう）寛延（1716-51）のころの人。奥村政信の門弟といわれ、漆絵の作品がおおく、美人画を得意とした。赤本、黒本、青本等に挿絵をかく。寛延のころには「作奴化物退治」3巻をえがいている。江戸中期の浮世絵師、漆絵、挿絵

奥村政信（おくむら・まさのぶ/1686～1764年）

江戸生れ。元禄期（1688～1704年）から錦絵誕生直前まで約60年の長期間活躍し、前錦絵時代を代表する絵師。生没年については異説もある。菱川師宣、鳥居清信風を基調に一流を確立。壮年期、版本を通じて京の西川祐信の影響も受ける。自負心が強く、晩年に至るまで研究心、開拓心を失わず、自身通塩町で版元奥村屋を経営した関係もあって、さまざまなくふうを試み、自ら版行した。ことに柱絵、浮絵を創製したことは高く評価されている。美人画、役者絵、花鳥画、武者絵と幅広く活躍、肉筆画、版本も多いが、初期の丹絵（たんえ）時代

の美人画はとくに優れ、生動感を抑え、柔和でふっくらとした優しさを感じさせる。代表作は『遊女張果郎』『遊色三幅ついで』『七夕(たなびた)』など。門下に奥村利信がいる。1764年没、78歳。江戸中期の浮世絵師、版元

オクヤナオミ (おくや・なおみ/1929～2020年)

石川県生れ。1950年金沢美術工芸専門学校油画科卒。65年渡仏。以後20年近く渡欧生活を送った後、東京で制作活動を行う。1999年小松市立本陣記念美術館で「12月ふたり展」、2005年同館にて「現代美術の行方」が開催される。アクリル絵具を用い、平滑で単純化された形による抽象表現を行う。2020年没、91歳。洋画

奥山由治 (おくやま・よしはる/1931～2003年)

山口県生れ。1955年東京武蔵野美術学校西洋画科卒。山口長男に師事。61年現代美術家協会会員、没年まで同会に出品。結婚により松江に居住し、75年ネパールの山岳地帯で労働する女性の姿をとらえた《ネパール風景》で安井賞入選。ネパールやスペインに取材した労働者の姿や、海や水門といった郷土の風景、戦没者への鎮魂といった社会派的なテーマを追究した。2003年没、72歳。洋画

小倉右一郎 (おくら・ゆういちろう/1881～1962年)

香川県生れ。1907年東京美術学校彫刻科卒。08年文展入選。13年大正博覧会に出品した「霹靂」で二等銀牌。16年文展で特選。20年渡仏、ロダンに師事。25年帰国した後は滝野川彫刻研究所を設立して後進の指導に当たった。戦後は郷里香川県に戻り、48年高松工芸高校校長に就任。その他にも香川県工芸美術総合展の審査員を務めるなど、香川の美術興隆に大きく寄与した。ブロンズ彫刻を得意とし、「三土忠造像」「弘法大師像」などの肖像で本領を発揮したが、木彫・石彫もこなし、「靖国神社忠魂碑」などの碑や仏像・静物・裸婦像などにも傑作が多い。1962年没、81歳。彫刻、美研、高松工芸高校校長

小倉惣次郎 (おくら・そうじろう/1843～1913年)

千葉県生れ。工部美術学校でV.ラグーザについて洋風彫刻を学び、明治の洋風彫刻の先駆者となる。また日本最初の大理石彫刻家として知られる。のちに後進の指導にあたり、その門から新海竹太郎、北村四海などのすぐれた作家が育った。主要作品『福島中佐像』東

京で没、70歳。彫刻(石彫)

小倉尚子 (おくら・なおこ/1946年～)

石川県生れ。1966年愛知文京短期大学を卒業し、上京。79年渡仏。85年第71回光風会展初出品、以降毎年出品し、92、94年光風奨励賞受賞、95年会友推挙。1年よりほぼ2年おきに個展開催。褐色の裸婦が灑される岩肌は故郷巖門付近の奇岩からイメージしたものだといふ。光風会会員。洋画

小倉柳村 (おくら・りゅうそん/生没年不詳)

1880、81(明治13、14)年と、小林清親が最も精力的に東京風景を描いている時期に並行して、一連の洋風風景版画を残すが、生没年および活動詳細は不明。作品は《日本橋夜景》《湯嶋之景》《向嶋八百松楼之景》《海運橋之景》《八ツ山之景》《浅草観音夜景》《芝愛宕山之景》《隅田川岸図》《御茶之水景》の9図が知られるのみ。版画(洋風)

小栗宗丹 (おぐり・そうたん/生誕年不詳)

常陸國小栗城主小栗満重の子とも伝えられるが正確には不明。京都相国寺に入り、周文に師事。そのほか牧溪、玉潤、夏畦ら当時の宋画人に私淑して独自の画風を構築。また、足利義政から扶持を受け、室町殿(花御所)の増築の際絵師として参加。周文没後はその後継者と言われた。門下に狩野正信がいる。室町時代中期の絵師

小栗伯圭 (おぐり・はくけい/1792～1837年)

愛知県生れ。字は士復。別号に素軒・修同館がある。松村呉春・松村景文に師事して四条派を学んだ。山水、花鳥、人物を描き、また詩文和歌をたしなんだ。書は王羲之の古法帖に学び、隸書をよくした。1837年没、47歳。日本画

大給近清 (おぎゆう・ちかたか/1884～1944年)

東京生れ。学習院を経て1954年東京美術学校西洋画科を卒業、久しく黒田清輝に師事し、27年黒田清輝の遺産による美術奨励事業開始とともに美術研究所においてその遺作の管理に当たっていた。美術研究所事務嘱託。1944年没、60歳。洋画、美研

奥村利信 (おくむら・としのぶ/生没年不詳)

生没年不詳。奥村政信の門人で、1710年代後半から1740年代(享保(きょうほう)～寛延(かんなん)年間)にかけて活躍。紅絵(べにえ)、漆絵(うるしえ)期の代表的絵師。画風は師の政信を追ってはいるが、潑刺(はつらつ)とした生気があり、柔和な量感に富む。美人画、役者絵を中心に、作画は1730年前後の十数年に集中、短命の絵師であったと思われる。代表作は『山下金作の大磯(おおいそ)とら』『瀬川菊之丞(きくのじょう)のくずのは道行(みちゆき)』『なつもやうむねあけ三幅対(さんぷくつい)』など。江戸中期の浮世絵師、紅絵、漆絵

小合友之助 (おごう・ともすけ/1898～1966年)

京都生れ。1916年京都市立美術工芸学校図案科卒。16年都路華香に師事し、西陣織の染織図案を研究した。32年帝展に入選し、36年文展で選奨。48、54年日展審査員。54年京都市立美術専門学校に勤務し、55年助教授、56年教授に就任し、後進の指導にあたりたり又染織工芸に新風を吹き込んだ。京都で没、68歳。工芸、染織図案、版画

尾崎雪濤・雪翁 (おざき・せつとう/1828～1910年)

大坂生れ。文人画にすぐれ、書道にも通じていた。1884年内国絵画共進会に「草廬(そうろ)三顧」を出品し賞をえた。1910年没、83歳。日本画

尾崎正義 (おざき・まさよし/1932年～)

長崎県生れ。1955年長崎大学学芸学部工科卒。57年自由美術協会展で佳作賞。長崎県展で県教育委員会賞。58年全国県展選抜展出品。65年自由美術協会会員。66年朝日油絵コンクールで朝日賞。71～72年渡仏サロン・ドートンヌ出品 無所属。74年九州新鋭作家展出品。94年長崎新美術展で奨励賞(九州電力賞)、長崎県展審査員等歴任。絵本、洋画

尾崎ユタカ (おざき・ゆたか/1956年～)

山梨県生れ。1976年東京芸術大学美術学部絵画科油画専攻入学。中林忠良教授に師事。80年東京芸術大学美術学部絵画科油画(版画研究室)卒。96年上野の森美術館・日本の自然を描く展(文部大臣奨励賞)。2002年モントリオール国際ミニチュアチュール版画ビエンナーレ<最高賞>。版画

小山内龍 (おさないりゅう/1904～1946年)

北海道生れ。上京独学して、1932年新漫画派集団会員となり。以後漫画、童画にわたって活躍していた。北海道で没、43歳。漫画、童画

小沢魚興 (おざわぎょう/1836～1888年)

1836年生れ。徳島藩御用絵師。別号に易雲斎がある。小沢輝興の子。はじめ父・輝興に学び、のちに守住貫魚について住吉派を学んだ。84年の内国絵画共進会に出品。1888年没、53歳。江戸後期-明治期の絵師

小沢 剛 (おざわ・つよし/1965年～)

東京生れ。東京芸術大学美術学部絵画科油画専攻卒業後、同大学大学院美術研究科壁画専攻修了。牛乳箱を世界最小のホワイトキューブとして見立てた「なすび画廊」シリーズ、「帰って来た」シリーズ。会田誠、大岩オスカルら昭和40年生まれのアーティストと結成した「昭和40年会」としてグループの活動も行う。主な個展に「小沢剛:あなたが誰かを好きなように、誰もが誰かを好き」(豊田市美術館、2012)、「帰ってきた Dr.N」(はじまりの美術館、福島県、2014)、「小沢剛 不完全-パラレルな美術史」(千葉市美術館、2018)。現代美術

尾澤正毅 (おざわ・まさき/1936～2010年)

長野県生れ。東京芸術大学美術学部を卒、彫刻家として活動、東京都の公立高等学校にて非常勤で教鞭。のちに福井大学に奉職し、教育学部にて助教授や教授、教育地域科学部の教授。2005年国民文化祭では彫刻部門の審査員。福井県立美術館では実技講座専門彫刻の講師。2010年没、74歳。彫刻、美教

牝鹿頂山 (おじか・ちようざん?/1899?～1938年)

1899年?生れ。本名春吉、1925年上京、羽下修三、関野聖雲、北村西望に師事す。旧帝展第7回より14回迄連年入選。1938年没、39歳。彫刻

押田翠雨 (おしだ・すいら/1892～1985年)

東京生れ。本名は押田スガ子。哲学者の井上哲次郎の次女として生まれる。1911年東京府立第二高等女学校卒。永地秀太に師事し洋画を学ぶ。24年二科会信濃橋研究所に入り、26年赤松麟作に師事。28年岡田三郎助の研究所に入る。32年小林萬吾に師事した。

戦後は日本画に転じ、47年水上泰生に学び、51年より野田九浦に師事して日本画院に入会。以後同会に出品し、65年日本画院展で記念賞。81年新宿三越で「押田翠雨日本画展」を開催し、6曲1隻の屏風『孝女白菊』（東京都近代文学博物館）を出品。東京で没、92歳。
洋画、日本画

小田海僊（おだ・かいせん/1785～1862年）

山口県生れ。はじめ京都に出て松村呉春に四条派の画を学ぶが、のち頼山陽の影響もあり南画に傾斜、元々明時代の諸大家の画法を熱心に研究し、画風を一変させる。彩色に巧みであり、山水、人物はじめ幅広い画域を有した。山陽、雲華、春琴らとともに、田能村竹田の京都での交遊グループを形成した。1862年没、78歳。**江戸末期の絵師、南画**

遠田運雄（おだ・かずお/1891～1955年）

金沢市生れ。1918年東京美術学校西洋画科卒。岡田三郎助に師事。15国民美術協会展、17年太平洋画会展入選。終戦まで朝鮮に移住。38年京城帝国大学講師、40年朝鮮美術展参与。同年帝展初入選。29年渡欧、30年サロン・ドートンヌ入選。50年日展審査委員長。金沢大学教授、金沢美術工芸短期大学講師。1955年没、64歳。**洋画、美教**

織田観潮（おだ・かんちょう/1889～1961年）

東京生れ。尾竹国観に師事大和絵を学ぶ。巽画会展で受賞、1915年文展に入選、褒状。文展、帝展に毎回入選し、35年帝展改組では第一部会の結成に参加。新文展にも無鑑査出品を続け、40年春の紀元二千六百年奉祝日本画大展には「道臣命」を招待出品。46年日展の委員、主に再興された日本美術協会展に出品を重ねる。1961年没、71歳。**日本画、版画**

織田杏齋（おだ・きょうさい/1845～1912年）

名古屋市生れ。絵師織田共樵の長男として生まれた。1862年父が死去し、張晋齋に師事。1874年写真館を開いた。84年内国絵画共進会で褒状、絵事功勞褒賞。宮内省御用品に選ばれた。1912年没、67歳。**写真、南画、七宝焼**

織田杏逸（おだ・きょういつ/1890～1970年）

名古屋生れ。杏齋の三男。はじめ石河有鄰に師事し、また京都絵専に学ぶ。卒業後は帰郷し、石川英鳳らと愛土社結成に参加。写生を重んじ、花鳥山水に秀でた。1970年没、80歳。**日本画**

織田共樵（おだ・きょうしょう/生誕年不詳～1862年）

張月樵のために薪水の労をとり、月樵のいるところ必ず共樵ありといわれた。使役のかたわら画を学んだ。藩主の命によって船遊びの岐阜提灯の画を描き、また東照宮や東別院対面所の彩色をなした。月樵没後はその子晋齋を指導した。1862年没。**江戸後期の絵師**

尾竹国一・尾竹越堂（おだけ・くいち/1868～1931年）

新潟県生れ。尾竹竹坡、尾竹国観の兄。「絵入新潟新聞」などに挿絵をえがく。1899年上京して、小堀鞆音にまなぶ。人物画を得意とした。明治末期から大正初期の文展で活躍。1931年没、64歳。**日本画**

尾竹国観（おだけ・こっかん/1880～1945年）

尾竹越堂、尾竹竹坡の弟、小堀鞆音に師事。20歳前後は日本絵画協会、日本美術院連合絵画共進会で活躍し、数多くの賞を受けた。1908年の「国画玉成会事件」で、兄竹坡とともに岡倉覚三(天心)・横山大観と衝突。伝統的な作画法を重んじる国観が日本画の革新を願う大観らと相いれるはずもなく、国観は画壇を追われてしまいます。1909年文展で二等賞、11年文展で3等賞。13年横山大観筆頭の学校派審査員によって不可解な落選。国観は、その類いまれなるデッサン力を生かした即興画を得意とし、教科書や雑誌の挿絵・ポンチ絵などを描き続けていました。ポンチ絵とは、明治時代に描かれた浮世絵の一種で、後の漫画の原型といわれている。1945年没、65歳。**日本画、挿絵、ポンチ絵、版画**

織田瑟々（おだ・しつしつ/1779～1832年）

滋賀県生れ。津田貞秀の長女として生まれる。彦根藩士石居信章を養子に迎え津田家を継いだ。1813年信章が病没。京都の三熊露香に入門、瑟々と号し織田姓を名のる。露香の描くデリケートな桜とは異なり、筆力あふれた力強い桜の描写に特色があり、織田桜の異名をとる。作品に「異牡丹桜図」（白鹿記念酒造博物館蔵）がある。1832年没、53歳。**江戸後期の絵師**

小田富弥（おだ・とみや/1895～1990年）

岡山県生れ。北野恒富に日本画をまなび、大正末期より挿絵界にはいる。時代小説、とくに股旅(またたび)もので活躍し、岩田専太郎とならぶ人気画家となる。挿絵に情熱をうしない、戦後は紙芝居などを製作。1990年没、94歳。挿絵

小谷元彦（おだに・もとほこ/1972年～）

京都生れ。1995年東京藝術大学美術学部彫刻科卒。97年東京藝術大学大学院美術研究科修士課程 彫刻専攻修了。2012年 Asian Cultural Council の助成にてニューヨーク滞在。99年プロジェクト賞、グアレネ・アルテ 99, Fondazione Sandretto Rebaudengo Per L'arte, トリノ、イタリア。2004年インターナショナル・アドバイザー・ボード トラベル賞、六本木クロッシング、東京。11年平櫛田中賞。彫刻

小田根五郎（おだ・ねごろう/1944年～）

京都生れ。1968年金沢美術工芸大学油画科卒。同年第53回二科展初入選。74年関西二科展奨励賞。75年金沢美術工芸大学油絵講師。79年第64回二科展特選。90年「金沢百景」を描き、北陸朝日放送で放映される。96年金沢美術工芸大学教授。98年二科会退会。2007年美大を辞し、名誉教授となる。過去の遺跡・遺物と現代との関わりを追求し、心象的に描き続ける。洋画、美教

小田野尚之（おだの・なおゆき/1960年～）

横浜市生れ。1985年再興院展で初入選(96年日本美術院賞、特待、97年奨励賞、02年招待)。89年東京藝術大学大学院博士課程満期退学、同校助手(99年退官)。92年東京セントラル美術館日本画大賞展で優秀賞。2002年MOA岡田茂吉賞優秀賞。第87回再興院展で「見送る人」が第8回天心記念茨城賞。日本画、美教

織田広延（おだ・ひろのぶ/1888～没年不詳）

1888年生れ。戦前作と思われる風景木版画制作。作家の詳細は不明。版画

小田部泰久（こたべ・やすひさ/1927～2008年）

福岡市生れ。富永朝堂に木彫を、のち安永良徳に塑造を学ぶ。1957年東京芸術大学彫刻科卒、同校専攻科も修了。56年新制作協会展へ出品するが68年無所属。62年グループ玄を結成。73年県美術協会副会長、会長、理事長など要職を歴任し、87福岡市文化賞。肖像彫刻や野外モニュメントを数多く制作するほか、抽象的でユニークな人物像も発表した。2008年没、81歳。彫刻

落合素江（おちあい・そこう/1831～1885年）

長崎県生れ。独学で油絵を習得したとも、長崎派の画家・玉木鶴亭から学んだとも伝えられる。絵具類は大浦で貿易業を営んでいたトーマス・グラバーを経由して手に入れていた。近代写真の祖上野彦馬とは写真をもとに遠近法や陰影の技法を取り入れた絵画を描いた。油絵以外にも水彩画や青貝を用いた漆器などの工芸にも秀でており、1877年第1回内国勧業博覧会に、絵と工芸作品を数点出品。特に軍艦を細密に描くことを得意とし、江崎栄造が鼈甲細工で軍艦を制作した際には、その下絵を描くとともに製造監督を務めた。門下生も数多く、長崎における油絵の普及、及び長崎名産の工芸品の継承に大きく貢献した。1885年没、54歳。洋画、水彩、工芸

落合芳幾（おちあい・よしき/1833～1904年）

東京生れ。1849年頃国芳に入門。安政初期から錦絵制作。役者絵、美人画をはじめ多方面で活躍し、早くして人気を得る。特に横浜絵や文明開化絵、残酷絵のシリーズなどが注目される。57年頃から合巻や雑書の挿絵にも執事。74～75年「東京日々新聞」に作画。同8年「東京絵入新聞」を発行してこれに時事画を描く。79年「歌舞伎新報」にも作画。以後明治中期まで挿絵画家として活躍する。1904年没、71歳。日本画、挿絵

落合朗風（おちあい・ろうふう/1896～1937年）

東京生れ。川端画学校卒。菊池契月次いで小村大雲に師事。当初は再興院展を中心に出品を重ねていったが、1921年より帝展に出品を始める。しかし、伝統と格式のある展覧会では自分の自由な表現ができないとして、31年より川端龍子の主宰する青龍社展に活躍の場を移し翌年同人に推挙。この青龍社も長くは所属せず34年に脱会。34に明朗美術(聯)盟を川口春波と共に結成した。夭折の画家であったが、独自に洋画(外光派)の技法を研究して伝統的な日本画の世界観に取り入れるなど、新しい日本画を常に画策した新感覚派の画

家であり、円熟期を見ることなく早死したのは日本画発展にとっても大きな損失であったとされている。印名は「常平」など。1937年没、41歳。日本画

越智 靖・オチ・オサム（おち・おさむ/1936～2015年）

佐賀市生れ。1955、56年二科展入選。前衛芸術集団「九州派」結成に参加。62年読売アンデパンダン展に出品。66～69年渡米。70年福岡文化会館で個展。78年サンフランシスコの画廊で個展。山口県で没、79歳。（出典 わ眼）洋画、九州派

越智恒孝（おち・つねたか/1894～1950年）

愛媛県生れ。1914年愛媛師範学校を卒業、小学校訓導を経て20年から49年まで県立松山高等女学校図画教師を務める。28年牧田嘉一郎・三好計加らと青鳥社を結成。30年愛媛美術工芸展創設に参加。30年二科展に入選、35年愛媛蒼原会結成に参加。47年愛媛美術協会創設委員・常任理事など本県洋画揺籃期の先達として活躍し、1950年没、56歳。洋画

音丸耕堂（おとまる・こうどう/1898～1997年）

讃岐彫を専門とする石井馨堂に弟子入りした後、独学で彫漆を学び、香川漆器の玉楮象谷に私淑した。分厚く塗り重ねた色漆の断面に表れる縞模様を生かした作品を数多く制作するなど、伝統的工芸技術をベースに斬新な作風を打ち出した。帝展初入選以降、同展、新文展、戦後の日展で受賞を重ねた。日本工芸会の創立に参加。紫綬褒章受章。人間国宝。1997年没、99歳。工芸、彫漆

小貫綾子（おぬき・あやこ/1912～1948年）

東京生れ。水戸高等女学校時代から油彩画を描き、卒業後熊岡美彦に学ぶ。1936年文展に出品。37年新文展に出品。38年い はらき新聞社主催第1回茨城洋画展覧会に出品、い はらき奨励賞。文展に出品。1948年没、36歳。洋画

小貫博堂（おぬき・はくどう/1879～1960年）

東京生れ。1902年東京美術学校日本画科を最優秀で卒業し、03年福島県立会津中学校図画教員として赴任し、東京美術学校に多くの子弟を入学させています。37年に教師を退職し、「図画研究」の私塾を開設。柔道、琴、尺八、謡曲は免許を得て、考古学の土器石器

の蒐集研究。1960年没、79歳。日本画、美教

小野一郎（おの・いちろう/1923～1993年）

大分県生れ。1945年東京美術学校日本画科卒。47年大分県美術協会展入選、以後9回受賞。53年新制作展に入選。60年記念新興美術院展入選。63年会員、70年会員努力賞。75年、77年山種美術館賞展に出品。この間、スミレ会、大京美術院の同人として活躍。大分県美術協会日本画部長。1993年没、70歳。日本画

小野雲鵬（おの・うんぽう/1796～1856年）

倉敷市生れ。黒田綾山について南画を学んだ後、14歳で京都に出、四条派の柴田義董に入門。義董の没後は、岸駒に絵画を学ぶ。修行を終えて帰郷し、在地のまま亀山藩のご用を務めて、士格に準ぜられる。山水画は南画と四条派の折衷的な傾向を持つものが多く、花鳥画には岸駒の影響からか江戸中期、長崎に来た清の画家・沈南蘋の系統を引く写生的で濃彩の加えられた鮮明な作品がある。1856年没、60歳。江戸後期-明治期の絵師

小野絵里（おの・えり/1949年～）

岡山県生れ。父・絵麻 母・二三子ともに画家。64年～9年間二科展に出品。1971年多摩美術大学卒。79年人人展に招待出品。83年安井賞候補。94年「平面とイメージの魅惑」展（練馬区立美術館）に出品。2000年から郷里と東京で小野絵麻・絵里展（人間と宇宙への眼差し）を開催。02年「戦後岡山の美術（前衛遠の姿）」展に両親と共に出品（岡山県立美術館）。洋画

小野崎如水（おのざき・こすい/1846～1917年）

秋田藩士。名は格蔵。平福徳庵に就いて学び、模写は師以上の腕といわれる。虎、布袋などを描いたものが多い。1917年没、71歳。日本画

小野茂明（おの・しげあき/1897～1994年）

福岡県生れ。1916年旧制嘉穂中学卒。21年上京、洋画家下村為山に師事。25年頃小室翠雲の画塾で南画を学んだ。筆谷等観をはじめ院展作家の指導を受けた。29年川崎小虎に入門。53年帰京63年松永冠山らとともに日本画グループ「玄霜会」を結成。以後同会の

250

中心的存在として後進を指導したり、県美術協会副会長、福岡県の日本画壇に功労があった。1994年没、97歳。日本画、美教

小野瀬進 (おのせ・すすむ/1924～2012年)

水戸市生れ。1944年茨城師範学校本科卒。47年白牙会展に出品、菊池五郎に学ぶ。50年小堀進に師事。54年白日会展で奨励賞(58年会員、80年委員、84年会員記念賞、86年特別賞、87年文部大臣賞)。55年日展で初入選(以後9回入選)。60年日展水彩作家協会結成。66年茨城県芸術祭美術展に出品。2012年没、88歳。水彩

小野田宇花 (おのだ・うか/1929年～)

東京生れ。1951年ベルギー大使館主催サロン・ド・プランタン二等賞。52年東京芸術大学彫刻科塑像部卒。54年東京芸術大学彫刻科塑像部専攻科卒。55年渡伊。ローマ国立美術学校に通い、ピエリ・ファッツィーニに個人指導を受け始める。61年バチカン主催イタリア全国学生展に一等賞を受賞(ローマ法王ヨハネ23世に献上)。ローマ国立美術学校卒。68年ユネスコ国際コンクール一等賞、女流展(ローマ)で彫刻部の一等賞、外務大臣賞。69年ギャラリーアッティコ国際コンクールに一等賞。98年アート未来展内閣総理大臣賞。2001年フランストゥルーズのジャポニーズフェスティバルロートレック芸術大賞。05年モナコ国際芸術祭ミシェル・ブキエ賞。彫刻、陶彫

小野忠弘 (おの・ただひろ/1913～2001年)

青森県生れ。東京美術学校卒。1942年福井県三国中学(現三国高)の教師。50年自由美術家協会会員。日本国際美術展、サンパウロやベネチアのビエンナーレに出品。絵画、彫刻からジャンク・アートを手がける。2001年没、88歳。洋画、彫刻、美教

小野田尚之 (おのだ・なおゆき/1960年～)

横浜市生れ。1985年再興院展で初入選(96年日本美術院賞、特待、97年奨励賞、2002年招待)。89年東京藝術大学大学院博士課程満期退学、同校助手となる(99年退官)。92年東京セントラル美術館日本画大賞展で優秀賞。02年MOA岡田茂吉賞優秀賞。再興院展で天心記念茨城賞受賞。日本画

小野寺周徳 (おのでら・しゅうとく/1759～1814年)

岩手県生れ。1792年から3年間江戸に滞在し医学の修業をした。絵は20歳代からはじめているが、江戸滞在中に谷文晁に絵を学んだと伝えられている。1707年家督を相続した。診察の合間に絵筆をとり、1801年には「六歌仙図」や「雲龍図」を制作した。07年花巻城本丸の改修工事で、障壁画を制作。襖絵「花鳥図の襖絵八枚」(愛宕町・妙円寺蔵)「双雲図六曲一双屏風(元箱崎家蔵・元県立博物館)」は花巻市指定文化財に指定。1814年没、56歳。日本画

小野寺久幸 (おのでら・ひさゆき/1929～2011年)

宮城県生れ。本吉郡小泉高等尋常小学校卒。1951年神奈川県鎌倉市覚園寺における重要文化財の木造薬師如来および日光菩薩・月光菩薩の各坐像の保存修理を行い、その仏像修理の力量を知らしめた。54年に東京国立博物館文化財修理室に勤務、翌年、財団法人美術院国宝修理所に就職する。75年同修理所所長・常務理事に就任。以後、国宝・重要文化財の彫刻作品の修理に専従するとともに、現場において後進の育成に努めた。88年から5年の歳月をかけた東大寺南大門の国宝金剛力士像2軀の本格解体修理に際して陣頭で指揮、その功績により、93年に東大寺から「東大寺大仏師」の称号が授与された。2000年に美術院国宝修理所所長を退き、常務理事専務に就任。2011年没、81歳。日本の文化財(仏像)修理技師、東大寺大

小野元衛 (おの・もとえ/1919～1947年)

大阪生れ。小野元澄・豊の長男として誕生。1927年成城学園の谷騰を中心とする昭和学園に入学。38年京都第二工業陶磁器科卒業、陶器研究所に入学。40年東京・文化学院美術部に入学。42年文化学院をやめて、近江八幡へ帰る。1947年没、28歳。洋画

小野蘭山 (おの・らんざん/1729～1810年)

京都の人。松岡恕庵に学ぶ。幕命により江戸の医学館で講義するかたわら、諸国で薬草を採集。著「本草綱目啓蒙」。1810年没、81歳。江戸中期の本草学者

小幡英資 (おばた・ひですけ/1930～2014年)

福岡県生れ。1949年福岡教育大学卒、小学校教諭、7年で退職。57年前衛グループ「九

州派」に参加し、「同年代人であり続けたい」と思う心から、地域での手作り美術館。74九州現代美術「幻想と情念」展(福岡県文化会館)。76年今日の美術展(福岡県文化会館)。81年福岡美術家協会展(福岡市美術館)。81年 韓・日現代絵画展(韓国文化芸術振興院美術会館ノウル)。2014年没、84歳。洋画、美教、九州派

小原慶山 (おはら・けいざん/生誕年不詳～1733年)

兵庫県生れ。江戸で狩野洞雲に学び、長崎にうつり河村若芝に師事。花鳥・山水・人物画にすぐれた。黄檗僧の頂相(ちんそう)肖像には喜多元規(げんき)の影響がみられる。1733年没。江戸時代前、中期の絵師

小原 憲 (おはら・けん/1904～1969年)

島根県生れ。平塚重一に勧められて木版画を開始。織田一磨が松江に開設した織田創作版画研究所で石版画と水彩画を学ぶ。1928年春陽会展に版画で入選。主に大正末から昭和初期にかけて様々な展覧会に出品し、島根の地にありながら、あたたかな木版画のぬくもりが感じられる創作版画を残した。1969年没、65歳。版画

小原樗山 (おはら・ちよざん/1862～1927年)

岩手県生れ。遠野市、十一面観音像がある福泉寺を造った棟梁。「樗山」は、彫刻の基礎となる絵の修行をした際の師匠、菊池黙堂から与えられた。花巻市の松山寺の本堂、石鳥谷町の不動明王の彫刻他、地元東和町をはじめ岩手、秋田、宮城でもお寺や神社を建てた。青森県三本木の正法寺本堂は小原樗山の名声を上げた名建築。樗山の功績を讃え、達磨和尚こと凌雲寺住職船越靈戒が碑文を書いた。70名の弟子を育てた。1927年没、55歳。宮大工、彫刻

小原信博 (おはら・のぶひろ/1949年～)

千葉県生れ。1973年武蔵野美術学園卒業。79年春陽会会員。79年詩版画集「接木宮殿」沖積舎刊行。版画

帯屋青霞 (おびや・せいゐ/1889～1977年)

長崎市生れ。24歳のとき観善寺14代方外和尚の素嵐に鉄翁系の南画を学ぶ。その後、

長崎での南画の振興に力を尽くし、1971年20周年記念長崎市展にて功労者表彰。長崎の南画界の第一人者で、四君子、特に梅画を得意とした画家。1977年没、88歳。南画

呉 炳学 (お・びよんはく/1924～2021年)

旧朝鮮平安南道生れ。1946年東京美術学校入学後中退。独学でセザンヌほか巨匠たちを深く研究し、独自の画風を生み出した。50年代から韓半島の伝統舞踊、仮面、仮面舞や陶磁器を題材にした作品を手がけた。韓民族の豊かな感性を反映させた作品は、その芸術性の高さから世界に誇るべき絵画と評価。68年個展(文芸春秋画廊、東京)、06年韓国ソウルで個展(仁寺洞学古齋)などの多くの個展を開催。21年「呉炳学・三浦千波展」(ギャラリー向日葵)。2001年『呉炳学画集』刊行。川崎市で没、97歳。洋画

小保方祥子 (おぼかた・さちこ/1966年～)

埼玉県生れ。1990年東京造形大学造形学部美術学科卒。92年東京藝術大学大学院美術研究科絵画(版画)専攻終了。ギャラリー現で個展。95年ソフィア国際版画トリエンナーレ(ブルガリア)。95年東京国際ミニプリント・トリエンナーレ(多摩美術大学附属美術館)。96年新たなる表現(ギャラリー椿、東京)。97～99年 SMALL SIZE COLLECTION ギャラリーなつかい b.p. 東京。版画

小又 光 (おまた・ひかる/1919～1978年)

茨城県生れ。熊岡絵画道場で学ぶ。1947、48、49、50、51、52年日展に出品。53年創元会会員、53、55、56年日展に出品。63年創元会茨城支部の創設に参力。1978年没、59歳。洋画

重石晃子 (おもいし・こうこ/生誕年不詳～)

1955年岩手県立盛岡短期大学美術工芸科卒。深沢省三、紅子に師事。72年女流画家協会展に会員賞バツ賞。75～78年フランス・トゥール美術大学に留学。76年フランス美術家協会ル・サロン展名誉賞。78年一水会展佳作賞。77年フランス美術家協会ル・サロン展会員。フランス・トゥール市主催の個展を開催。78年一水会展で一水会会員。82年日本画廊協会大賞。86年東京純心女子短期大学美術科教授。98年一水会展山下新太郎奨励賞。岩手県・萬鉄五郎記念美術館で「重石晃子・欠畑美奈子」展を開催。99年社団法人深沢沢

子野の花美術館館長に就任。**洋画、美教**

表立雲 (おもて・りつうん/1926～2021年)

富山県生れ。1965年大沢雅休に邂逅。本格的に書の世界にひかれる。46年日本書道美術院展初入選、49年書道芸術院展にて推薦読売新聞社賞。48年玄土社を結成、主宰となり現在に至る。中国の古典にも造詣が深く、臨書を継げながら、一貫して前衛書に打ち込む。2021年没、95歳。**書**

小山 硬 (おやま・かたし/1934年～)

熊本県出身。東京芸術大学日本画科卒。中学時代より画家を志す。東京芸大では日本画を専攻。卒業後は前田青邨に師事。1961年院展にて入選。以降、院展を中心に出品を重ねる。71、78年院展にて日本美術院賞・大観賞。81年文部大臣賞。88年内閣総理大臣賞。70年春の院展春季展賞(そのほか奨励賞数回)、73年山種美術館日本画大賞展にて優秀賞。68年愛知県立大学日本画科助手、79年同大学助教授、81年同校教授。**日本画、美教**

小山田チカエ (おやまだ・ちかえ/1922～2012年)

北海道生れ。上京後広告会社に勤めながら絵を描き、自由美術家協会に属し、1950年代には左翼系画家を集めた「ニッポン展」(前衛美術会主催)にも参加、52年小山田二郎と結婚。晩年は「美術・九条の会」にも参加。2012年没、90歳。**洋画**

雄山通季 (おやま・みちき/1899～1968年)

高岡市生れ。1916年京都で岸田劉生に師事し、劉生没後は中川一政に師事した。18年北国洋画協会展に参加。20年高岡に帰郷。29年村井盈人、久泉共三らと穹玄社を結成、30年丹緑社を結成した。31年国展に出品。この頃、牧野村村長をつとめた。48年村井盈人、関長造と散木社を結成。49年高岡市制60周年記念展覧会の委員をつとめ、高岡市展には第1回展から参加した。1968年没、67歳。**洋画**

折井愚哉 (おりい・ぐさい/1871～1934年)

1871年生れ。絵画を小山正太郎、橋本雅邦に、俳句を正岡子規にまなぶ。1901年大阪

朝日新聞に入社、のち郷里岡山の中学で図画をおしえた。1934年没、64歳。作品に「禪房対局図」、著作に「俳句の作り方と鑑賞葉(しおり)」など。**洋画、俳人**

織作峰子 (おりさく・みねこ/1960年～)

石川県出身。1981年度ミスユニバース日本代表。ニューヨーク大会に出場。ミスユニバース任期中に写真家・大竹省二と出会い、82年大竹スタジオに入門。87年独立。作品集「BOSTON in the time」を制作。世界各国の美しい風景や人物の瞬間を撮り続けている。大阪芸術大学教授・写真学科学科長。公益社団法人日本広告写真家協会 理事、一般社団法人日本写真著作権協会 理事。社団法人日本写真家協会正会員、日本写真芸術学会 評議員。2020 東京オリンピック・パラリンピック文化教育委員。**写真**

恩田秋夫 (おんだ・あきお/1924～2007年)

東京生れ。東京繊維専門学校を卒業、絵画研究所で学びました。1956年武蔵野美術学校西洋画科卒、油彩画家を目指しますが、63～68年母校武蔵野美術大学で木版画(板画)の大家棟方志功の助手。棟方から強い影響を受け、板画制作を始めた。昭和を代表する俳人の一人、加藤楸邨主宰の俳誌「寒雷」の表紙を手がけたことがきっかけとなり、芭蕉、蕪村、一茶などの古典俳句をモチーフとした板画制作に専念。2007年没、83歳。**版画**

279

か

快慶 (かゑい/生没年不詳)

康慶の弟子。東大寺の重源上人に帰依して安阿弥陀仏と号し、建久年間(1190～99年)東大寺復興造仏には運慶を助けて、正系仏師慶派一門の繁栄に大きな役割を果たした。宋風様式を取入れ、その写実的作風は「安阿弥様」として後世に大きな影響を与えた。89年の興福寺旧蔵『弥勒菩薩像』(ボストン美術館)をはじめ、東大寺南大門『金剛力士像』、同寺の

『僧形八幡神像』、また播磨、浄土寺『阿弥陀三尊像』、金剛峰寺『孔雀明王像』など遠隔の地にも活動範囲が及び、高齢で没するまで多数の造仏に従事した。**鎌倉初期の仏師**

甲斐虎山 (かゝい・こざん/1867～1961年)

大分県生れ。1880年加納雨篷と共に帆足杏雨に師事。村上姑南、広瀬濠田らに漢学をんだ。97年頃京都に出て活躍、1900年白須心華が東京で南画塾を始めると賛助員として加納雨篷と共に参加。朝鮮半島、中国北部を訪れるなどして画を深め、独特の作風を確立、その半生を大分の地を転々として作画に勤しんだ。1961年没、94歳。**南画**

甲斐サチ (かゝい・さち/1925～1995年)

別府市生れ。女子美術大学日本画科卒、後、駒井哲郎に師事。1959年以来春陽会に出品を続け、62年研究賞。第3回東京国際版画ビエンナーレに出品。68年春陽会会員。国内での個展のほか、ニューヨーク、メキシコシティなどで個展を開催している。1995年没、70歳。**日本画**

甲斐宗平 かゝい・そうへい/1902～1988年)

大分県生れ。京都市立絵画専門学校に学ぶ。20年「長崎美術展覧会」に出品。26年上京、中野の文化村に住み、講談社、平凡社の挿し絵を描く、仕事仲間に田河水泡ら。32年従軍画家として中国大陸に渡る。61年長崎県分化功労賞。72年鶴陽社結成。83年甲斐宗平個人展。85年甲斐宗平面集を発刊。長崎県美術協会名誉会員。1988年没。86歳。**挿絵、日本画**

甲斐武岡 (かゝい・たけくに/1932年～)

大分市生れ。1953年東京写真大学(現東京工芸大学)卒。55年フランス国際警察美術展入賞。58年全国報道写真展最高賞。国内の各報道写真展に出品し、受賞多数。**写真**

海藤日出男 (かゝい・ひでお/1912～1991年)

島根県生れ。東北帝国大学法文学部中退。1937年読売新聞社入社。経済部、整理部、外報部などを経て、48年文化部次長に就任。48～63年15回にわたって読売アンデパンダン展を開催、またマチス、ピカソ、ブラック、ゴッホなどの個展を開いた。75年華月出版編集長。

著書に「岡本太郎」など。1991年没、79歳。**美術ジャーナリスト、読売アンデパンダン展を開催**

垣内雲りん (かゝい・とうりん/1845～1919年)

富山県生れ。父垣内右りん、塩川文麟に師事。1871年高山に帰る。その後諸国を遊歴。82年第1回絵画共進会に出品入賞。以後内外の展覧会で賞を受ける。84年京都府画学校の北宗(円山四条派)の教官となる。1801年父右りん急逝のため金沢へ移り、01年まで画塾で指導。この年上京し、以後日本画美術協会、日本画会で活躍。1919年没、74歳。**日本画、美教**

改井徳寛 (かゝい・とくかん/1895～1951年)

富山県生れ。1913年富山県立工芸学校図案科卒、東京美術学校図案科に進学した。在学中の17年高岡で富山県初の洋画団体「北国洋画協会」を結成。18年に美術学校卒、市立高岡実科高等女学校(戦後、富山県立高岡高等学校に統合)の教師。20年愛知へ、31年東京へ転居した。33年から構造社会員。戦時中は仙台に疎開した。1951年没、56歳。**洋画、美教**

甲斐信枝 (かゝい・のぶえ/1930～2023年)

広島県生れ。清水良雄(光風会会員、童話雑誌「赤い鳥」の画家)に師事。清水の没後上京し、慶応義塾大学精神神経科に教授秘書。画家になることを決意。鈴木寿雄に童画を学ぶ。1970年に紙芝居『もんしろちょうとからすあげは』(童心社)を出版。85年『雑草のくらしーあき地の五年間一』で絵本につぼん賞、講談社出版文化賞。NHK 総合テレビジョンのドキュメンタリー「足元の小宇宙 絵本作家と見つける生命のドラマ」(放送日 2016年11月23日)、2017年同局の続編が「足元の小宇宙Ⅱ 絵本作家と見つける“雑草”生命のドラマ」として甲斐を紹介。2023年、97歳。**絵本**

開発好明 (かゝい・はつ・よしあき/1966年～)

1966年生れ。1993年多摩美術大学大学院修了。1995～96年NHK-BS2の番組『真夜中の王国』内のコーナー『開発くんがゆく』に出演。2001年サンキューアートの日を企画、制定。04年ヴェネチア・ビエンナーレ第9回国際建築展日本館「おたく：人格＝空間＝都市」

出品。16年開発好明個展「中二病展」市原湖畔美術館。16年リトルモア社から写真集「新世界ピクニック」出版。武蔵野美術大学、千葉大学、多摩美術大学で非常勤講師。現代美術、インスタ、パフォーマンス、美教

海北友松 (かみいほう・ゆうしょう/1533～1615年)

近江の人。海北派の祖。初め狩野派を学び、梁楷(りょうかい)などの宋元水墨画風に傾倒し、独自の気迫と情感に富む画風を完成させた。作品に建仁寺本坊方丈の「山水図」など。1615年没、82歳。水墨、安土桃山の絵師

海北友雪 (かみいほう・ゆうせつ/1598～1677年)

海北友松の長男。父の画風を受け継ぎ、装飾的画法を確立していく。海北友松・狩野探幽に師事。春日局の推挙により、徳川家光の愛顧を受ける。さらに子、海北友竹も画業を受け継いでおり、海北派の存続に貢献。1677年没、79歳。江戸初期の絵師、水墨

海北友三 (かみいほう・ゆうぞう/1740～1781年)

1740年生れ。海北友泉の3男。京都御所などの御用をつとめ、1766年法橋(ほつきょう)とされた。1781年没、42歳。江戸中期の絵師、水墨

海北友竹 (かみいほう・ゆうちく/1654～1728年)

1654年生れ。海北友雪の子。宝永6年京都御所造営のとき、清涼殿公卿(くぎょう)の間、学問所西の方三の間、仙洞御所常御所物置などに画をえかく。1728年没、75歳。江戸前期-中期の絵師、水墨

海北友徳 (かみいほう・ゆうとく/1763～1847年)

1763年生れ。海北友三(ゆうぞう)の子。1790年京都御所造営の際、障壁画をえがいた。1847年没、85歳。江戸後期の絵師、水墨

貝谷采堂 (かいや・さいどう/1786～1837年)

愛知県生れ。はじめ山本蘭亭について浮世絵を学び、のちに張月樵の門に入り南北合法の画をもって藩の絵用達を命じられ土格に列した。熱田神宮年中行事の絵七四図を描いた。1837年没、52歳。江戸後期の絵師

香川 猛 (かがわ・たけし/1937年～)

神奈川県生れ。1957年二科展初入選以後連続入選。59年横浜国立大学卒。68年二科展明治100年記念賞受賞、神奈川県美術展(コンクール)B氏賞。75年スケッチで訪欧。82年二科会会員。文化庁現代美術選抜展出品、神奈川県美術展(コンクール)美術奨学会賞。2006年二科会理事。07年二科展内閣総理大臣賞。19年二科会常務理事。洋画

賀川 督明 (かがわ・とくあき/1953～2014年)

東京生れ。1976年カガワデザインワークショップ有限会社を開業し代表。デザイナー、グラフィックデザイナーとして学校や会社案内パンフレット、商品カタログ等の企画製作を行う。祖父の賀川豊彦の活動開始100年を機に「賀川豊彦献身100年記念事業」に参画。2010年神戸の賀川記念館館長に就任。兵庫県ユニセフ協会理事を務め、12年全国国際協同組合年実行委員。2014年没、61歳。グラフィック・デザイナー、賀川記念館館長

香川良海 (かがわ・りょうかい/1947年～)

東京生れ。都立日本橋高等学校を卒業後、独学で水彩画をはじめ、日本水彩画展、二紀展などに出品。1956年ヨシダ・ヨシエらと制作会議を結成。読売アンデパンダン展に作品を発表し、シュル美術賞展や長岡現代美術館賞展で受賞。ユーモラスな形態の内に空虚感を込めたシリーズ作品により高い評価を得た。水彩、版画、立体絵画、オブジェ

垣内治雄 (かきうち・はるお/1931～2016年)

1931年生れ。1968年神奈川県美術展で大賞。85年横浜市民ギャラリーで垣内治雄展。自由美術協会(立体)会員。2016年没、85歳。オブジェ、彫刻

柿右衛門 (かきえもん)について

佐賀県有田町周辺でわが国初の磁器が焼かれたのは1610年代であり、その約30年後には、初代柿右衛門(酒井田喜三右衛門)によって日本で初めての色絵磁器が完成されたといわれる。政情不安の中国にかわり、有田の磁器がヨーロッパからの注文を受けるようになると、輸出向け色絵磁器の様式名もなった柿右衛門様式が完成されてゆく。柿右衛門様式の磁器は、「濁し手」と呼ばれる、色絵が美しく映える乳白色の素地に特徴がある。そこに描かれ

た色鮮やかな文様はヨーロッパ各国の王侯貴族の心をとらえ、ドイツのマイセンやオランダのデルフトなど各地で写しも作られた。**陶芸**

柿木 章 (かきのき・あきら/1926～2009年)

石川県生れ。父・柿木甫三(蒔絵)に師事。輪島市漆器研究所に勤務(～55年)。60年日展初入選、以後入選を重ね、95年改組日展特選。64年日本現代工芸美術展入選、66年第5回展で現代工芸賞。79年日本新工芸展に出品、86年日本新工芸会員賞。91年日工会展に出品、93年展で日工会会員賞、95年企画賞受賞。日工会評議員、日展会友。2009年没、83歳。**漆工**

鶴 亭 (かくてい/1722～1786年)

長崎の黄檗宗聖福寺の僧。熊斐から沈南蘋の画法を学び、かたわら黄檗絵画の影響も受けて独自の画体を創始。柔軟な線描と平面的に施された鮮明な着色を特色とする。20歳代半ば、還俗し大坂へ移住。画家として生活し始めた。京坂の黄檗僧、南画家たちと交流。画の弟子に葛蛇玉がいる。1777年宇治の万福寺紫雲院の住持となり、数年後退き、諸国遍歴ののち、江戸で没、64歳。作品に「牡丹綬帯鳥図」(神戸市立博物館蔵)など。**江戸中期、長崎南蘋派の画僧、黄檗派**

岳亭春信 (かくてい・はるのぶ/生没年不詳)

幕臣の妾腹の子と伝えられ。絵は堤秋栄、のち魚屋北溪に学び、文化期(1804～18)から幕末にかけて摺物や狂歌本の挿絵、錦絵などを描く。また戯作者として、合巻や読本なども執筆した。**江戸後期の浮世絵、挿絵、錦絵**

賀来飛霞 (かく・ひか/1816～1894年)

大分県生れ。帆足萬里に師事し、異母兄弟の兄佐之とともに医学、本草学を修める。また、一時杵築の画人十市石谷につき画技を学んだ。1834年兄とともに京都の山本亡羊を訪ね本草学の教えを受ける。生涯を通し全国各地を旅行して薬草・鉱物等を採集、多くの標本や図譜を残した。島原藩医を勤めていた兄の死後その職につき、のち78年小石川植物園取調係となった。1894年没、78歳。**植物絵**

景山守俊・(洞玉)・狩野永章 (かげやま・もりとし/1761年～没年不詳)

広島県生れ。実子に京狩野9代目になった狩野永岳と、狩野永泰、孫に永泰の子・冷泉恭がいる。上京し京狩野家に入門し、狩野姓と永章の名をもらったと考えられる。景山守俊は前名。京都の人名録『平安人物志』画の部に3度掲載。1813年版と22年版の記述より、この間に法眼。**江戸後期の絵師**

鹿児島寿藏 (かごしま・じゅぞう/1898～1982年)

福岡市生れ。福岡高等小学校を卒業後、人形制作の道に入る。1920年上京し、テラコッタを素材として制作を続けるが、32年楮やパルプ等を素材とする堅牢な躯体に自ら染めた和紙等を貼り重ねる「紙塑人形」の技法を完成。人形美術団体甲戌会を結成する。36年帝展に入選、新文展に入選、54年日本工芸会設立に際し正会員。日本伝統工芸展で審査委員。61年に紙塑人形のわざで重要無形文化財保持者。アララギ派の歌人としても著名。1982年没、84歳。**人形、紙塑人形**

葛西 康 (かさい・やすし/1905～1990年)

青森県生れ。師範学校を卒業し、1933年上京、鈴木信太郎に師事する。42年二科展で岡田賞を受賞。45年秋田へ疎開。65年秋田大学教授。70年一陽会会員に推挙。秋田の田園風景や男鹿、八郎潟を多く描く。1990年没、85歳。**洋画**

笠木 實 (かさぎ・みのる/1920～2018年)

群馬県生れ。1935年西田武雄が主宰するエッチング研究所に通い、銅版画プレス機を購入。35年同舟舎研究所に入所して田辺至の指導を受けた。41年東京美術学校油絵科卒。日本版画協会、国画会展にエッチングを出品。43年日本版画協会会員。戦後は南城一夫に師事し、油彩画に専念。48年春陽会に出品。49年桐生美術協会結成、副会長。49年群馬美術展で知事賞。岡鹿之助宅に寄寓。51年には春陽会賞、55年同会会員。64年武蔵野美術大学の共通絵画研究室に赴任して、以後90年に定年になるまで指導。2001年渋谷区立松濤美術館にて「今純三・今和次郎とエッチング作家協会」展が開催。画文集『魚狗の歌』『イワナの歌』『岩魚の谷、山女魚の溪』等を残した。2018年没、98歳。**洋画、版画、美教**

風倉 匠 (かざくら・しょう/1936～2007年)

大分市生れ。1956年武蔵野美術大学に入学、のち中退。60年吉村益信らとネオ・ダダイズム・オルガナイザーを結成。読売アンデパンダン展や現代日本美術展等に出品。パフォーマンスとしての自覚を強め、小杉武久や刀根康尚らの「グループ音楽」や土方巽の「暗黒舞踏」と共演する。国外での活動も目ざましく、「前衛芸術の日本 1910-1970」(パリ、ポンピドゥー・センター)、「巨大都市の原生」(ドイツ、オランダ他)、「第7回バングラデシュ・アジア美術ビエンナーレ」などでパフォーマンスを行い、高い評価を得た。2007年没、71歳。パフォーマンス、ネオダダ

笠原 勲 (かさはら・じん/1885～1955年)

新潟市生れ。1909年東京美術学校西洋画科卒。24年白日会の創立に参加。25年帝展に入選。35年創刊された新潟県の民俗誌「高志路」に東蒲原の歴史民俗に関して寄稿。38年新潟新聞などの臨時特派員として北京方面に従軍。53年県立津川高等学校の美術講師。1955年没、70歳。洋画、美教

風間和子 (かざま・かずこ/生誕年不詳～)

福島県生れ。福島県立高等専門学院卒。第56回福島県総合美術展 美術賞。第57回福島県総合美術展 美術奨励賞。第59回福島県総合美術展 奨励賞。1989年福島県勤労者美術展 労働大臣賞。2000年第54回 会津美術展 美術賞。01年 会津総合美術展 美術特別賞。02年 会津総合美術展 美術賞。99年 福島県美術協会展 会友特選。2000年 福島県美術協会展 会友特選。2003年 個展(会津若松市文化センター)。会津美術協会委員、福島県美術協会会員、福島県総合美術展依嘱、水彩連盟準会員。水彩

かさまつ三保子 (かさまつ・みほこ/1932年～)

東京生れ。父は日本画・版画家 笠松紫浪。1941年佐々木一郎(故・新制作協会会員)に師事。57～61年まで、モダンアート展・女流画家展に油絵を出品。62年木版画の制作をはじめ。72年 ギャラリーキクチ(東京銀座)で最初の個展。以後2002年まで個展開催、グループ展 21 回開催。洋画、版画

郭 徳俊 (KWAK Duck-jun/1937年～)

京都生れ。京都府立日吉ヶ丘美術工芸高校日本画科を卒。1956年の初個展以降、サンパウロ・ビエンナーレ展をはじめ、リュブリアナ国際版画ビエンナーレ展など、世界各地の国際版

画展に出品を重ねた。『TIME』の表紙を題材にした「大統領シリーズ」によって注目を集め、以降パフォーマンスやビデオ・アートの分野でも活躍し、多彩な創作活動を展開している。版画、パフォーマンス、ビデオ

梶川清彦 (かじかわ・きよひこ/1933～2019年)

長崎市生れ。独学で油絵と木版画をはじめ。日曜画家時代、白日会展、独立展、日本版画協会展に入選。1968年白日会会員。1991年同会を退会し、「絵はがき屋」版元、絵師として独立。油絵個展 2 回、木版画展 4 回、デッサン展を開く。2019年没、86歳。洋画、版画

梶川文龍齋 (かじかわ・ぶんりゅうさい/宝暦～文化)

宝暦年間(1751～1753)頃～文化年間(1804～1817)頃に活躍した蒔絵師で「官工梶川文龍齋」等の花押が捺されている作品が多く残ることから、徳川幕府のお抱え蒔絵師として名を残す。また、現存作品の書銘、花押の違いから少なくとも3代は続いたと推察されている。印籠、硯箱、盃などを残す。蒔絵師

梶川真人・菅真人 (かじかわ・まひと/1896～1983年)

鳥取県出身。菅橋彦の甥で菅家を継ぎ、菅真人(すがま・ひと)となった。やまと絵や歴史画を本領とし、橋彦風の風景画や有職故実の主題ですぐれた絵画を制作した。1983年没、87歳。日本画

カジ・ギヤスディン (1951年～)

バングラデシュ生れ。1970年バングラデシュ芸術大学卒。75年日本国政府国費留学生として来日。85年東京芸術大学より学術博士号取得。86、98年カジ・ギヤスディン画集出版 日本、バングラデシュ、インド、パキスタン、スペインで個展・グループ展多数。洋画

加地為也 (かじ・ためや/生誕年不詳～1894年)

和歌山県生れ。1875年渡米、米国で最初に絵画を学んだ作家。1880年作の「朝の飲水」がスタンフォード大学に所蔵。米国で最初に絵画を学んだ。81年第2回内国勸業博覧会にアメリカから出品(褒状?)。後に英、独に遊ぶ。(小笠原豊涯は1889年田村宗久に師事の

後、加地為也に師事した)。宮城県美に加地の「静物」が所蔵。1894年没。洋画

梶野玄山 (かじの・げんざん/1868～1939年)

石川県生れ。村田芝園、垣内右りんに師事。1887年真宗大谷派の高僧本誓寺住職松本白華の勧めで京都に上り、鈴木松年門下に入る。99年から7年間、大谷派真宗京都中学絵画科教授をつとめる。24年皇太子御成婚記念に孔雀の図を献上、御物として納められ、鈴木派の四天王随一と讃えられる。1939年没、71歳。日本画

鹿島清兵衛 (かじま・せいへい/1866～1924年)

大坂の酒問屋「鹿島屋」の当主鹿島清右衛門の次男、八代目鹿島清兵衛となる。1885年浅草の写真師・今津正二郎に写真術を学ぶ。88年小川一真、バルトンと共に築地乾板製造所を設立。89年日本写真会が結成され入会。93年大日本写真品評会が創立され副会頭に就任。95年木挽町現・中央区銀座)に写真館「玄鹿館」を設立。館主を弟・清三郎とし美術陳列館を併設。95年戸田氏共と日本幻燈会を創設。96年大日本写真品評会でX線写真の公開実験に成功。97年英照皇太后御大葬を日本初の夜間屋外マグネシウム閃光で撮影。鹿島家に離縁された後は、玄鹿館を閉鎖。1924年没、58歳。写真

梶本良衛 (かじもと・りょうえ/1951年～)

石川県生れ。1974年金沢美術工芸大学研究科修了。同年新制作協会展に出品、以後毎年出品し、77、87、91年新作家賞。76年日本海造型会議参加。79年より金沢彫刻展に毎回出品、83年グループEST出品以後毎回出品。85年神戸具象彫刻大賞展優秀賞。新制作協会会員。16年石川県立美術館主催「長谷川大治郎・梶本良衛 木彫二人展」開催。彫刻

梶山九江 (かじやま・きゅうこう/1840～1890年)

熊本県生れ。矢野派から岸派に転じた画家梶山九嶽(佐賀関出身)の子として熊本に生まれる。幼少より南画を好み、後長崎に赴き鉄翁に学んだと伝えられる。竹田に滞留し淵野桂僊にも学んだといふ。熊本南画界の中心人物の一人として活躍。1884年第二回内国絵画共進会に出品し褒賞を受けている。1890年没、50歳。南画

柏木俊一 (かしわざい・しゅんいち/1894～1971年)

静岡県生れ。韮山中学(現韮山高)卒。藤島武二に絵を見てもらい、本郷洋画研究所で学ぶ。近藤浩一路と従兄にあたる。岸田劉生らと交流しながら春陽会で活躍、1933年国画会会員。37年国画会客員。晩年は主に水墨画を制作。柏山人の雅号を用いた。1971年没、77歳。洋画、水墨

柏倉雪章 (かしわくら・せつしょう/1878～1925年)

山形県生れ。江戸時代後期の南画家、谷文晁の系譜に連なる小松雲涯に師事。上京して、明治期の日本画の大家で東京美術学校(現・東京芸大美術学部)の教授を務めていた川端玉章の門下生となり、師の一字をもらって雪章と号した。帰郷後は後進の指導にもあたった雪章。1906年「雲龍之図」山形県天童市寺津の法体寺の天井画。1925年没、46歳。日本画

柏崎栄助 (かしわざき・えいすけ/1910～1986年)

秋田県生れ。1935年東京美術学校図案科を卒業。36～38年ヨーロッパに游学し、その前後から沖縄漆工芸組合紅房にて琉球漆器のデザイン革新に取り組む。陶磁(アイボリーチャイナ)、ガラス(マルチグラス)、竹、花筵など各地の伝統産業、地場産業と積極的に関わりデザインの洗練に努めた。同24年から福岡市に定住して後進の育成にも尽力し、九州クラフトデザイナー協会および九州デザインコミッティの初代理事長やインテリアショップNIC(ニック)の顧問。1986年没、76歳。デザイン、陶磁

梶原貫五 (かじわら・かんご/1887～1958年)

福岡出身。上京し、1914年大正博覧会で受賞。光風会にも出品。東京美術学校卒業後、17年光風会で今村奨励賞。文展、帝展などにも精力的に出品。31年光風会会員。37～38年光風会評議員。戦後も日展に出品。1958年没、71歳。洋画

梶原琢磨 (かじわら・たくま/1876～1959年)

福岡県生れ。17歳の時アメリカに移住。シアトルで写真術を学ぶ。セントルイスで写真スタジオを開く。「タクマ・レンズ」の開発に当たる。油彩画家に転向。肖像画を中心に制作。セントルイス・アーティスト・ギルドで度々受賞。1926年カンザス・シティー美術館銀メダル。35年より

ニューヨークに移る。49年ザブリスキー賞。51年アメリカ美術家連盟から金メダル受賞。ニューヨークで没、83歳。ペンタックスのレンズの旧ブランド「タクマー」は彼から名づけられた。写真、洋画

梶原緋佐子 (かじわら・ひさこ/1896～1988年)

京都生れ。京都府立第二高等女学校卒。女学校在学中には同校美術教師日本画家、千種掃雲に学ぶ。本格的に菊池契月の門に入り、画技を習得。戦前は、帝展・新文展などで活躍。戦後は、日展に出品し、1947年日展にて特選・白寿賞。以降、入選・出品を重ね審査員・評議員。76年京都市文化功労章。特徴ある美人画の名手として有名。1988年没、91歳。日本画

50

春日基光・藤原基光 (かすが・もとみつ/生没年不詳)

珍海の父。奈良東大寺にすみ春日基光ともいわれた。宮廷絵師、従五位上、内匠頭(たくみのかみ)。応徳(1084-87)のころ高野山灌頂(かんじょう)堂で性信(しょうしん)入道親王の肖像をえがいた。土佐派の祖とされてきたが、確実ではない。初名は盛光。平安時代後期の絵師、土佐派の粗?

カズ・ヒロ・辻一弘 (かず・ひろ/1965年～)

京都生れ。高校3年の頃から、特殊メイクの第一人者ディック・スミスに手紙で教えるを請うなど独学で特殊メイクを学ぶ。高校卒業後に上京し、1991～99年黒沢明監督作「八月の狂詩曲」など30本近くに携わる一方で、代々木アニメーション学院で特殊メイクの講師。1996年渡米を果たし、巨匠リック・ベーカーのアトリエに所属、97年大ヒットSFコメディ「メン・イン・ブラック」でハリウッドデビュー。2007年でアカデミー賞のメイクアップ賞にノミネート。12年現代美術に転向し美術彫刻に専念。2017年アカデミー賞でメイクアップ&ヘアスタイリング賞。19年3月に米国籍を取得。それに伴い名前を辻一弘からカズ・ヒロ(Kazu Hiro)に改める。同年製作・公開の「スキャンダル」では主演シャーリーズ・セロンの特殊メイクを担当し、19年アカデミー賞のメイクアップ&スタイリング部門で受賞。メイクアップ・アーティスト、現代美術、美術彫刻

糠谷蘭汀 (かすや・らんてい/生誕年不詳～1819年)

愛知県生れ。張月樵の知多巡遊の折りに入門し、南北合法の画法を受け、真野桃蹊の『近世名家画譜』に掲載された。1819年没。江戸後期の絵師

片岡角太郎 (かたおか・かくたろう/1890～1934年)

大分県生れ。1917年東京美術学校卒業。在学中から朝倉塾に入り、19年帝展(「黎明」)が入選、以後連続入選した。26～29年フランスに留学。朝倉門下の逸材として期待されていたが、1934年没、44歳。彫刻

片小田栄治 (かたおだ・えいじ/1951～1995年)

東京生れ。1975年新制作派協会展で入選。77年東京藝術大学絵画科卒。79年同大学院絵画科修了。91年浅井忠記念賞展優秀賞、第20回現代日本美術展佳作賞、第55回新制作展新作家賞。94年安井賞展で入選。95年青木繁記念大賞展に出品、東京で没、44歳。洋画

片桐桐隠 (かたぎり・どういん/1759～1819年)

江戸生れ。片桐宗幽の子。2代狩野栄川、渡辺玄対に入門、花鳥山水画をえがく。元・明(みん)(中国)の画法を独習して人物画にもすぐれた。1819年没、61歳。江戸後期の絵師

片桐白登 (かたぎり・はくと/1908～1997年)

長野県生れ。1964年日本南画院展で文部大臣賞。以後審査員となった。74年紺綬褒章。86年に日中水墨画展で内閣総理大臣賞。日本南画院副理事長。中水墨画交流会名誉理事。1997年没、89歳。南画

片瀬和夫 (かたせ・かずお/1947年～)

静岡市生れ。現在はドイツのカッセル在住。1976年から在外日本人作家として国際的に活躍している。立体、現代美術

片野元彦 (かたの・もとひこ/1899～1975年)

名古屋市長生れ。はじめ洋画家を志し、木村荘八や岸田劉生の指導を受ける。草土社展や春陽会展、日本美術展等に出品。1920年画業の傍ら、染色の勉強を始め、26～32年頃、松

阪屋衣裳部の仕事を手がけ、34～39年まで衣裳作品展を開催。戦後、芹沢銈介や柳宗悦、河井寛次郎等の知遇を得て、56年から藍染絞りの再興を志し、以後、国展や日本民芸館展、個展等で作品を発表。67年国画会会員。68年名古屋C・B・Cクラブの文化賞。1975年没、76歳。洋画、衣装、藍染絞り

片山貫道 (かたやま・かんだう/1829～1900年)

江戸生れ。平戸藩の御用絵師・片山尚栄の子、絵を父および住吉派の住吉弘貫に学んだ。明治維新後、広田村(早岐)に閑居し、絵筆三昧の月日を送り、長崎や佐賀、福岡などを巡り、後進の指導にも尽した。三川内の絵師・今村豊寿もそのひとり。1884年「第2回絵画共進会」に出品して銀印章。90年源氏絵は宮内省の買い上げとなった。東京で没、71歳。江戸後期・明治期の絵師

片山 健 (かたやま・けん/1940年～)

東京生れ。武蔵野美術大学商業デザイン科卒。1966年絵本『マッチのとり』を自費出版。68年『ゆうちゃんのみさきーしゃ』を福音館書店から出版。絵本製作から離れ、鉛筆画を描いた。77年長男誕生を機に再び絵本製作。93年「タンゲくん」で講談社出版文化賞絵本賞。96年でんでんたいこのいのち」で小学館児童出版文化賞。絵本、鉛筆

片山攝三 (かたやま・せつぞう/1914～2005年)

ロシア生れ。1932年県立中学明善校卒、疋田晴久に師事し、35年より営業写真の道に入り、日本写真美術展、国際写真サロン等で入選を重ねる。戦後、観世音寺を皮切りに、臼杵の石仏や富貴寺等を取材、仏像写真の個展や出版を数多く行う。60年頃からライフワークとなる芸術家の肖像写真の撮影を開始、モノクロームによりその自然な風姿を捉え続けた。他にも富永朝堂、安永良徳らの彫刻写真を手掛けた。九州産業大学教授。2005年没、91歳。写真、美教

片山 武 (たけやま・たけし/1954年～)

北九州市生れ。1977年九州産業大学芸術学部卒。79年同大学研究生を終了。77～79年「版画グランプリ展」に出品。80年「アジア現代美術展」に出品。81年「福岡現代美術展」を企画(アートスペース・福岡市美術館)。81年「韓・日現代絵画展」(釜山文化芸術振興院)

82年「第2回日韓展」に出品し、以降運営委員。85年「第1回リュブリン国際反戦芸術トリエンナーレ」(ポーランド)出品。2000年須恵町立美術センター久我記念館(粕屋郡)で個展。宮崎県立美術館、福岡市美術館でトグラフの実技講座の講師。版画

片山利弘 (かたやま・としひろ/1928～2013年)

大阪生れ。独学でデザインを学び、サイト・アーティスト。50年代初頭、永井一正、木村恒久、田中一光とデザインの研究会『Aクラブ』を作る。1963年、スイスのガイギー社のアートディレクターになる。ハーバード大学カーペンター視覚芸術センターから招聘を受け、同センターで教育およびデザイン製作に携わりながら、建築空間におけるランドスケープ・デザインを主要なテーマとして国際的に活躍する。2013年没、85歳。デザイン、洋画

片山牧羊 (かたやま・ぼくよう/1900～1937年)

大阪で南画を学ぶ。1917年、京都で庄田鶴友に師事し日本画を学ぶ。また、山本竟山に書道を学ぶ。1921年上京し、蔦谷龍岬塾・鐸鈴社に入門、本格的に日本画を学びはじめ。1927年帝展に出品、特選。28年帝展に無鑑査出品。久邇宮家の格天井に「曼珠沙華」を描く。29帝展に出品。柳悦孝が書生として入門。塩出英雄が福山から上京し門下生となる。1937年没、37歳。日本画

片山未加 (かたやま・みか/生誕年不詳～)

横浜市生れ。新制作展、女流画家展、読売アンデパンダン展に出品。1956年渡仏、フリードリヒのアトリエで銅版画を学ぶ。60年帰国後は個展中心に発表。版画、洋画

片山楊谷 (かたやま・ようこく/1760～1801年)

長崎県生れ。鳥取新田藩(西館)に仕立て藩主池田定常にみいだされ、藩につかえる。のち京都の西本願寺に暮らし、「蓮下鯉魚図」などおおくの花鳥画をのこした。書にもたくみであった。1801年没、42歳。江戸後期の長崎派の絵師、黄檗派

片寄みつづ・貢 (かたより・みつづ/1921年～)

東京生れ。漫画としての名義は「片寄貢」。明治学院中学部中退。本郷絵画研究所で、辻永、中村研一より油絵を学ぶ。1939年漫画誌「カリカレ」に参加し、漫画家に。57年労働組

合・総評の機関紙「総評」に執筆。71年「労働漫画研究」発行。以後、中山ニ労と月刊「労働漫画」を発行。また、「漫画芸術研究」を発行。80年「戦後漫画思想史」(未来社)刊行。**漫画、版画**

勝川春英 (かつかわ・しゅんえい/1762～1819年)

勝川春章の門人。天明～寛政期(1781～1801)の役者絵界における中心人物の一人、役者大首絵を兄弟子の春好らと共に先駆的に刊行。写楽や豊国らに影響を与えた。門人に春亭、春扇らがいる。寛政文化期の相撲絵をたくさん残した相撲錦絵史上、第一の功績者。1819年没、57歳。**江戸後期の絵師**

勝川春好 (かつかわ・しゅんこう/1743～1812年)

勝川春章の門人で、役者絵を得意とした。江戸・長谷川町に居住したといわれる。春章門下では最古参で、師と同じく壺(つぼ)形の印を用いたので小壺ともよばれた。作画期は安永(あんえい)年間(1772～81)より没年ごろ。春好の役者絵は細判(ほそばん)がもっとも多いが、大判に独特な迫力をもつ名作が多い。1812年没、69歳。**江戸中、後期の浮世絵師**

二代**勝川春好・春扇** (かつかわ・しゅんこう II/文化文政期(1804～30)に活躍)

江戸の人。宮川春水の門人、旧来の鳥居派の、おもちゃ絵的な画風を排し、役者似顔絵を創始して一家をなした。文化文政期(1804～30)に活躍。春英の門人。美人画を描く。**江戸後期の絵師**

勝川春山・泉昌有 (かつかわ・しゅんざん/生没年不詳)

勝川勝章の門人で、作画期は天明～寛政期(1781～1801)頃。一時、泉守一(またはその父の寿香亭吉信)の門人となり泉昌有と称す。勝川派だが役者絵は寡作で、三枚続に鳥居清長風の長身の美人を群像で配した作品が知られる。他に黄表紙や読本の挿絵を手がけた。**江戸中、後期の絵師、黄表紙、挿絵**

勝川春章 (かつかわ・しゅんしょう/1726～1792年)

勝川派の祖。宮川春水の門人。鈴木春信らと共に錦絵の発展に尽力し、また一筆斎文調と協力して細判役者絵を創造した。晩年は肉筆美人画を多く手懸ける。適確な描写力と婉麗な作風は一世を風靡した。1792年没、67歳。**江戸中期の浮世絵師、勝川派の祖**

勝川春水・宮川春水 (かつかわ・しゅんすい/生没年不詳)

江戸の人。宮川長春の門人。師同様に肉筆美人画の制作を中心に活動し、地味な作風を旨とする。作画期は寛保(1741～44)ごろから明和期(1764～72)までだが、宝暦(1751～64)未から明和はじめにかけて、版刻武者絵本を若干例手がけている。**江戸中期の浮世絵師**

勝川春亭 (かつかわ・しゅんてい/生没年不詳)

寛政10年から没年に活躍。勝川春英の門人。美人画・役者絵・武者絵などを多数残している。文化期に作画された風景画には洋風の表現が施されており、注目される。**江戸後期の浮世絵師**

葛飾応為 (かつしか・おうい/生没年不詳)

葛飾北斎の三女。応為は号(画号)で、名は栄。応為は、3代目堤等琳の門人の南沢等明に嫁したが、針仕事をほとんどせず、父譲りの画才と性格から等明の描いた絵の稚拙さを笑ったため、離縁。出戻った応為は、北斎の制作助手も務めたとされている。80歳後半の北斎自筆の書簡でも応為を「腮の四角少女」と評し、自身の横顔と尖った顎の応為の似顔絵が添えられている。なお、北斎の門人の露木為一による『北斎仮宅写生図』にも、北斎と応為の肖像が描かれている(「北斎仮宅之図」紙本墨画 国立国会図書館所蔵)。天保初め頃には応為は出戻っており、北斎晩年の20年近く同居していたと推察できる。晩年は仏門に帰依たと伝わっている。残った作品は十数点。**江戸後期の浮世絵師**

葛飾戴斗・斗円楼北泉 (かつしか・たいと/生没年不詳)

江戸生れ。葛飾北斎の門人。北斎の門に入り斗円楼北泉と称した。1820年葛飾北斎から「戴斗」の号を譲られ二代目戴斗を名乗り、葛飾戴斗、玄龍斎戴斗と号す。北泉と称した時には『北斎漫画』二編の刊行に尽力。作域は広く肉筆画の他、版本の挿絵、錦絵なども手がける。画風は北斎の画法を最も忠実に継いでいる。『浮世絵師人名辞書』はこの戴斗について「…後大阪に至り、偽りて自ら北斎と称す、人卑みて犬北斎又は大阪北斎と呼べり」と

記している。門人に戴岳、北涯がいる。[江戸後期の浮世絵師](#)

葛 蛇玉 (かつ・じゃぎよく/1735～1780年)

大坂生れ。はじめ橋守国、および鶴亭に学ぶ。後に宋元の古画を模して一家を成した。鯉の絵を得意としたため「鯉翁」と呼ばれ、上田秋成著『雨月物語』にある「夢応の鯉魚」のモデルと言われる。1780年没、46歳。[江戸中期の絵師](#)

勝田 哲 (かつた・てつ/1896～1980年)

京都生れ。東京美術学校西洋画科卒、その後日本画に転進、山元春挙に師事。1926年帝展入選。第10回、12回帝展で特選。京都市立美術工芸学校指導を歴任。京都市文化功労者。日展審査員歴任。1980年没、84歳。[日本画](#)、[洋画](#)、[美教](#)

勝田幸男 (かつた・ゆきお/1941年～)

京都市生れ。1962年京都市立美術大学日本画科入学。67年主体美術協会展。68年文部省県展選抜展。76年ハワイホノルルアカデミーオブアーツ個展。[日本画](#)、[版画](#)

勝原伸也・立原位貫 (かつはら・のぶや/1951～2015年)

名古屋市生れ。25歳の時、一枚の浮世絵に感銘、ジャズのサクソプレーアーから浮世絵復刻の世界に入った。1976年浮世絵版画の制作、研究開始。江戸時代の浮世絵を現代に蘇らせた木版画家として国内外で高い評価。オリジナル版画も制作。挿絵も作成。2015年没、64歳。[版画](#)、[浮世絵復刻](#)、[挿絵](#)

勝部如春齋 (かつべ・じょしゅんさい/1721年～1784年)

西宮市生れ。絵は大坂で、狩野派の櫛橋正盈(くしはし・しょうえい)に学んだとされる。1763年左大臣九条尚実(ひさざね)より如春齋の号を賜った。森狙仙の師であったと言われ、また摂津池田と関わりが深く、荒木李谿にも画の手ほどきをしている。狩野派の画風をよく守り、水墨から濃彩、寺院の襖絵から細密画まで、様々な画題を描きこなした。1784年没、63歳。[江戸中期-後期の絵師](#)

勝又國男 (かつまた・くにお/1924～1999年)

盛岡市生れ。高橋忠弥に師事。岩手県芸術祭美術展で活躍。亡くなるまで地域の芸術分野のリーダーも務め、画業に打ち込んだ。1973年第一美術協会会員。故郷の風景を愛し、温かな人柄を感じさせる写実的風景を描いた。彩虹社美術協会創立会員、岩手芸術祭洋画部門理事。盛岡市で没、75歳。2000年美術を志す仲間たちによって追悼美術展が町公民館で開催された。1999年没、75歳。[洋画](#)

勝見 渥 (かつみ・あつし/1944年～)

北海道生れ。元北海道美術協会会員・近代美術協会会員。JR北海道アートデザイン企画室室長などを歴任。[画家](#)、[カツミギャラリー代表](#)

勝山繁太郎 (かつやま・しげたろう/生没年不詳)

明治の石版画家、1889年～1892年の風俗画、美人画、教訓歴史画を描いた。[版画](#)

勝谷木僊 (かつや・もくせん?/1894～1978年)

鳥取県生れ。大阪に移った。父は南画家の勝谷米荘。京都市立絵画専門学校に入学して西山翠嶂に師事、在学中帝展に入選。卒業後も翠嶂門下生として学び、堂本印象、上村松篁らと青甲塾の同人となった。戦後再び日展で活躍する。師の翠嶂没後は世間からも遠ざかり、写実一筋に大山山容に取り組んだ。1978年没、84歳。[日本画](#)

勝谷米荘は(かつや・もくそう?/1871～1925年)

岡山県生れ、山岡米華や日本画の大家である小室翠雲に師事した南画家。文展や帝展に出品、遺作には花鳥図や山水画など自然をモチーフにしたものが残っている。日本南画院同人、日本美術協会会員。子は日本画家の勝谷木僊です。1925年没、55歳。[南画](#)

門井鞠水 (かどい・きくすい/1886～1976年)

茨城県生れ。1911年巽画会展で一等褒状。15年清方門下による郷土会の運営に尽力。21年帝展で入選。57年永田春水、浦田正夫らと茨城日展会を結成。東京で没、90歳。[日本画](#)

加藤晃秀 (かとう・あきひで/1936～2015年)

京都美術大学日本画科卒業後、デザイン工房を設立し、各種工芸品企画に参画する一方、独特のタッチの“粋画”を創案されました。ニューヨークなどの各地で個展を開催し、海外からも注目を集めています。白と黒を基調にした大胆な構図で古都の風情を描き、木版画で再現しています。2015年没、79歳。粋画、版画

加藤安佐子 (かとう・あさこ/1938年～)

北海道生れ。1960年金沢美術工芸大学油絵科卒。72～82神奈川女流美術家協会会員。79年女流画家協会会員。80～88年一陽会会員。93年女流画家協会委員。洋画

加藤英華 (かとう・えいかり/1869～1942年)

福井市生れ。1885年小豆澤亭に水彩画を学ぶ。90年久保田米僊に師事、日本画を学ぶ。1909年久保田米斎らが発起人で「英華画会」が発足。11年香港、上海で二十数中国研究画家として行脚。28年広島福屋百貨店で「英華画伯支那風景展覧会」を開催。埼玉県で没、73歳。水彩、日本画

加藤英舟 (かとう・えいしゅう/1873～1939年)

名古屋市生れ。名古屋の奥村石蘭に学び、1890年京都府立画学校に入学、幸野煤嶺の薫陶を受けたが、煤嶺没するに及び岸竹堂に師事し更に竹堂の没後竹内栖鳳の門に入り、西村五雲と共に竹内栖鳳門下の先輩として知られた。花鳥動物を得意とし、その画風は質朴温雅、伝統的技巧を守り、小品の花鳥画に佳作を遺した。文展第6回出品の「かすみ網」で褒賞、28年帝展委員。京都東本願寺黒書院の障壁画を揮毫、22年皇后陛下の関西行啓に際しては川崎家よりの献上画を謹作した。1939年没、66歳。日本画

加藤一雄 (かとう・かずお/1905～1980年)

大阪生れ。1931年京都大学文学部哲学科(美学美術史)卒。34～50年京都市立絵画専門学校助教授を経て教授。50～61年京都市美術館学芸課。66～74年関西学院大学文学部教授。77年嵯峨美術短大教授。美術関係諸雑誌等に執筆多く、よどみない特有の文体でも知られた。主著に近代日本の絵画(河原書店)、日本近代絵画全集22(村上華岳、土田麦僊 講談社)、現代日本美術全集4(村上華岳、土田麦僊 集英社)、日本の名画4(竹内栖鳳-中央公論社などがある。1980年没、75歳。美評、美教

加藤景雲 (かとう・けいうん/1874～1943年)

宮大工の家業を習い、米原雲海に進められ21歳で上京し、高村光雲の門に入りました。1907年、岡倉天心の指導を受け、米原雲海らと日本彫刻会を組織し、以後、毎年彫刻展を開き活躍、木彫の鬼才と言われた。荒島八幡宮、東養寺、円光寺において景雲の作品を見ることができる。1943年没、69歳。木彫

加藤 聡 (かとう・さとし/1951年～)

愛知県生れ。1978年武蔵野美術短大卒。87年新制作展に入選。95年個展(名古屋市民ギャラリー)、97も開催。2000、01年新制作展で新作家賞。01年文化庁現代美術選抜展。03年個展(はるひ美術館 愛知)。洋画

加藤卓男 (かとう・たくお/1917～2005年)

岐阜県生れ。5代加藤幸兵衛の長男。多治見工業卒。帖佐美行、佐治賢使(さじただし)にまなび、フィンランド工芸美術学校に留学。1963年、65年日展特選。94年芸術院賞。95年人間国宝。ペルシャの古陶研究に力をそそぎ、幻の陶器といわれたラスター彩や三彩の復元などでも知られた。美濃陶芸協会会長。2005年没、87歳。陶芸

加藤千尋 (かとう・ちひろ/1974年～)

仙台市生れ、2003年東京藝術大学絵画科油画専攻卒。同大学大学院修了。空想の植物のような精緻な立体造形をインスタレーションとして発表。05年「夏の蜃気楼」を(群馬県立館林美術館)に出品。東京都在住。洋画、立体、インスタ

加藤常明 (かとう・つねあき/1947年～)

宮城県生れ。第5回現代日本彫刻展、第6回現代日本彫刻展優秀作品模型。彫刻

加藤貞子 (かとう・ていこ/1955年～)

秋田県生れ。1978年秋田大学教育学部美術科卒。中学校のちに秋田市内の高等学の

教諭。秋田大学在学中の77年に新制作展入選、新作家賞を4度受賞後の86年会員。80年「人形衆Ⅵ」、83年「カチカチ山」、87年「ハイハイ、おし様」、88年「満月の夜にはタンノリン」を安井賞展に出品。80年秋田県芸術選奨受賞。洋画、美教

加藤晃秀 (かとう・てるひで/1936年～)

京都生れ。京都市立美術大学日本画家卒。京の四季の風情を華麗な色彩で描く。1991年ニューヨーク・キャストアイアンギャラリー「Kyoto Romance」展。92年画集「京都ロマンス」(日本版・英文版)刊行。2001年『加藤晃秀版画集 京都物語』刊行。デザイン工房を設立し、各種工芸品企画に参画する一方、独特のタッチの“粹画”を創案されました。NYなどの各地で個展を開催、海外からも注目。日本画、版画

100

加藤東一 (かとう・とういち/1916～1996年)

岐阜県生れ。1947年東京美術学校卒業後、48年に山口 蓬春に師事。48年日展に入賞、52年特選、55年に特選・白寿賞。日展を中心に活躍。70年改組日展において内閣総理大臣賞。77年日本芸術院賞。88～93年に、金閣寺大書院障壁画五十二面の製作を手掛ける。95年文化功労者。兄に日本画家加藤栄三。1996年没、80歳。日本画

加藤藤次 (かとう・とうじ/1900～1991年)

会津生れ。1921年福島師範卒。35年大東会展入選。37年白日会展入選、以後連続入選。55年水彩連盟展入選、以後6回連続入選。67年水彩連盟会、以後16回出品入選。76年県展招待、以後毎回出品。77年 会津美術協会副会長、個性ある作家の育成に努めた。1991年没、91歳。水彩、教員

加藤友太郎 (かとう・ともたろう/1851～1916年)

愛知県生れ。陶工加藤与八の次男。1874年上京、2代目井上良斎の工場に入る。お雇い外国人のゴットフリード・ワグネル博士の元で窯業技術(石膏型)を学び、同博士を師事。77年江戸川製陶所に勤務し、82年独立友玉園を開き、ワグネル式窯を設けた。99年陶寿紅と呼ばれる下絵付けの赤色の釉薬を開発。1916年没、66歳。陶芸

加藤土師萌 (かとう・はじめ/1900～1968年)

愛知県生れ。1914年瀬戸初の創作者集団瀬戸凶案研究会設立。日野厚に陶芸凶案を学ぶ。21年まで愛知県窯業学校助手等を務め、陶磁器の凶案を習得。26年岐阜県陶磁器試験場に勤務、研究と作陶を行う。27年帝展入選(工芸部門が新設)。新文展、日展に出品を続け、日本伝統工芸展へと発表。37年パリ万国博覧会でグランプリ受賞。40年横浜市日吉に築窯、独立。中国明朝の黄地紅彩を復元。51年黄地紅彩が重要無形文化財に指定。金襴手・青白磁など磁器を研究。55年東京藝術大学に陶芸科が創られ初代教授就任。61年重要無形文化財「色絵磁器」保持者(人間国宝)認定。66年日本工芸会理事長就任。文化財保護審議会専門委員等を歴任。67年東京藝術大学名誉教授、紫綬褒章受章。教え子に鳴海要。1968年没、68歳。陶磁、美研

加藤英人 (かとう・ひでと/1954年～)

愛知県瀬戸市生れ、1976年日本大学芸術学部美術科卒。87年水彩協会展で協会賞。96年回安井賞展で入選。2001年第89回日本水彩展で内閣総理大臣賞。日本水彩画会会員。水彩

加藤文麗 (かとう・ぶんれい/1706～1782年)

愛媛県生れ。旗本加藤泰茂の養嗣子となって家督相続。武道の修練の傍ら幼少より画を好み、木挽町狩野家の絵師(狩野常信、周信)について狩野派の画法を学び、宝暦頃から没年まで絵手本などの作画。文麗と谷文晁の父麓谷とは旧知の仲であった、少年期の文晁の師となり、狩野派を伝えた。文晁の名は文麗にちなんだものと推察。文晁は伝来書に自ら文麗門下と称している。門弟に黒田綾山、高田円乗らがあり、円乗の門から菊池容斎が出ている。1782年没、78歳。江戸中期の江戸幕府旗本、絵師

加藤正之 (かとう・まさゆき/1830～没年不詳)

1830年生れ、51年開業。逆算して、活躍期は、51年～？没年月日は不詳。60歳まで現役で活躍したとして1851～1890の約40年間と考えられます。幕末～明治期の浅草派の代表的な根付師

加藤光馬 (かとう・みつま/1951～2019年)

大分市生れ。20代後半から「煩惱」のシリーズが大分県美術展で受賞。1981行動展でも作

品を発表して注目を集める。やがて身近な自然に取材した詩情あふれるシリーズ作品で英展(田川市美術館)や別府現代絵画展で大賞。行動美術協会会員。2019年没、68歳。洋画

加藤美代三 (かとう・みよぞう/1912～2012年)

兵庫県生れ。京都市立絵画専門学校(現京都市立芸術大学)卒。中村大三郎に師事。朴土グループメンバー。2012年没、100歳。日本画

加登瓦川 (かとう・こうせん/1931～2009年)

兵庫県生れ。独自の書風を確立した小坂奇石ほか、丹羽海鶴の高弟墨谷鶴村に師事。西宮市立西宮東高等学校、兵庫県立西宮北高等学校に勤め、高野山大学の講師。1959年日展に入選。70年関西展開展賞第一席。75年日本書芸院大賞。2000年西宮市民文化賞。生田神社、叡福寺、本間美術館、致道博物館、エンバ中国近代美術館、大阪音楽大学、奇可染基金会(北京)などに作品が収蔵。2009年没、78歳。書

門田二篁 (かどた・にこう/1907～1994年)

広島県生れ。1926年岩尾光雲斎に入門。28年後独立し、県内外の展覧会に出品。34年商工省工芸展に入選。以後、同展に入選1回、入選2回。71年以降花籠の制作に力を入れ、74年以降日本伝統工芸展(受賞2回)、西部工芸展に出品。77年、日本工芸会正会員。80年、統工芸士。82年勲七等青色桐葉賞。1994年没、87歳。工芸(竹)

角 浩 (かど・ひろし/1909～1994年)

茨城県生れ。1933年年東京美術学校西洋画科卒、岡田三郎助、藤島武二に師事。31年光風会展に入選。32年独立美術協会展に入選。37年渡仏しアカデミー・グラン・ショーミエール、アカデミー・コラロッシに学び、サロン・ドートンヌに入選。オトン・フリエツの推薦によりサロン・チュイレリー無鑑査。50年新制作派協会展で新作家賞。53年同会会員。62、63年アメリカを訪れ個展を開催。79年日伯国際展のためフ守ラジルを訪れ、フランススコ・コマンドール勲章。79年東京渋谷の東急本庄にて画業50年展を開催。トキワ松学園女子短大造形美術学科教授、73年より同科長。東京で没、84歳。洋画、版画

香取正彦 (かとり・まさひこ/1899～1988年)

東京生れ。金工家香取秀真の長男。1925年東京美術学校鑄金科卒。帝国美術院展覧会の工芸部門で30、31、32年続けて特選、無鑑査。戦後は戦争中に供出された仏具・仏像などの文化財修理・保護に尽力。49年から梵鐘制作を始め、比叡山延暦寺、成田山新勝寺、広島平和の鐘を手がける。53年芸術院賞。56年より日本伝統工芸展の審査委員を委嘱。77年梵鐘の分野で重要無形文化財保持者に認定、87年日本芸術院会員。1988年没、89歳。鑄金、梵鐘

金井鳥洲 (かみい・うじゅう・うしゅう/1796～1857年)

群馬県生れ。若いころ来遊した春木南湖に画を学び、江戸に上って谷文晁の門に出入りした。画僧雲室らの詩の結社、小不朽吟社の詩画会にも参加。帰郷して家を継いでからも長期にわたって西遊、この間頼山陽や篠崎小竹らと交わった。少量の墨でかすれるように描く焦墨渴筆を多用したみずみずしい山水図表現に特色がある。代表作に「月ヶ瀬探梅図巻」(東京国立博物館蔵)。〈著作〉「無声詩話」(坂崎坦編『日本絵画論大系』1巻)。1857年没、61歳。江戸後期の絵師、水墨、画論家

金井田英津子 (かみい・だ・えつこ/1955年～)

群馬県生れ。1980年筑波大学大学院修了。2004年長谷川摂子著「人形の旅立ち」の挿画作品で、第18回赤い鳥さし絵賞。版画、装幀、造本

金岩清隆 (かみい・わ・きよたか/1928年～)

福井県生れ。52年金沢美術工芸短期大学油絵科卒。53年小糸源太郎に師事。54年光風会展入選、65年会員推挙、67年退会。58年日展入選。67、81年特選。日展会友。軍鶏のスピードと無駄のないフォルムを追求し続けている。洋画

鼎 金城 (かみえ・きんじょう/1811～1863年)

大坂生れ。鼎春岳の子。岡田半江、金子雪操に師事。詩を広瀬旭荘(きょくそう)にまなび、「金城遺稿」がある。1863年没、53歳。江戸後期の絵師

鼎 春嶽 (かみえ・しゅんがく/1766～1811年)

池大雅の門人・福原五岳に師事。画に巧みで篆刻も嗜んだ。岡田米山人らと交流がある。

稲毛屋山の印譜『江霞印影』にその刻印が掲載されている。子の金城も画家となっている。南画家であるが、代表作の「四季耕作図屏風」のように身近な題材をテーマとする絵も多い。1811年没、46歳。江戸後期の絵師、南画、篆刻

金岡宗幸 (かなおか・そうこう/1910～1982年)

金沢市生れ。父幸一郎に師事。祖父の代より鋳物を家業とする。1939年砂張糸目鋳造の研究開発に成功。69年日本伝統工芸展に入選、70年東京都教育委員会賞。日本工芸会正会員。82年鋳造砂張で石川県指定無形文化財保持者。1982年72歳。鋳造、金工

金ヶ江和隆 (かながえ・かずたか/1947～1998年)

佐賀県生れ。窯元の長男。京都市立芸術大学陶磁器専攻科卒、帰郷し一時家業を継ぐ。1976年九州産業大学芸術学部デザイン科助手、のち助教授。73年から走泥社、75年九州クラフトデザイン協会、83年からクレイワークグループEMON、92年アジア現代彫刻会等団体に参加し、前衛的な作品に取り組み。世界炎の博覧会で日韓野外陶芸展を企画。1998年没、51歳。陶芸、デザイン、プロデューサー、美教

金沢虹坡 (かなざわ・こうは？/1900～1990年)

鳥取県生れ。1911年東京美術学校日本画科に入学し川合玉堂に師事し、卒業後も門下生として学んだ。中央展で受賞、その後は師の玉堂の教示に従い公募展出品を断念した。以来中央画壇から離れ、古来の日本画の探求に徹した。1990年没、91歳。日本画

金澤千代吉 (かなざわ・ちよきち/1882～1860年)

盛岡市生れ。盛岡藩御用鋳物師でもあった有坂家に弟子入りし、鉄器製作の技術を習得。有坂門で技量が傑出していた金澤は、数多くの展覧会などで賞を受けた。21歳の若さで盛岡物産品評会銅賞、岩手県物産共進会銀賞、日英博覧会一等賞、東京彫刻競技会褒状。1915年盛岡市長から、19年岩手県知事から、表彰。伝統技術の継承のために、鉄瓶製作を戦時中も許可された「南部鉄瓶技術保存会」の正会員。55年柴内魁らとともに第1回盛岡市市勢振興功労者。1860年没、78歳。鉄器

金島桂華 (かなしま・けいけい/1892～1974年)

広島県生れ。平井直水、竹内栖鳳に師事。1925年帝展で特選、27、28年で特選。写実に徹しながらも、新しい感覚と豊かな色彩による装飾性の強い花鳥画を得意とする。京都市立美術工芸学校教諭(1930から1939)、帝展審査員、日展運営会参事、芸術選奨文部大臣賞、日本芸術院賞受賞、日本芸術院会員、日展理事、勲三等瑞宝章受章、日展顧問、京都市文化功労賞受賞。1974年没、82歳。日本画、美教、パステル、水彩

金巻芳俊 (かなまき・よしとし/1972年～)

千葉県生れ。1999年多摩美術大学美術学部彫刻学科卒、2012年損保ジャパン美術財団選抜奨励展で新作秀作賞。国内外における作品の人気の上昇に伴い、現在では日本のみならず、台湾、中国、香港、アメリカ、フランス、ドイツ、英国などから作品購入のオファーが絶えない。「アンビバレンス」シリーズ。「メモト・モリ」シリーズ。彫刻、木彫

金山桂子 (かなやま・けいこ/1933年～)

広島県生れ。1956年女子美術大学芸術学部美術学科洋画科女子美術大学卒。57年光風会展に入選。57年女流画家協会展で入選。64年光風会会員。79年日展で特選。86年女子美術短期大学教授。88年日展会員。93年日展会員賞。2002年光風会理事。04年小山敬三美術賞。17年現在、日展会員、光風会名誉会員、女子美術大学名誉教授。洋画、美教

金子篤司 (かねこ・あつし/1922～2002年)

山口県生れ。神奈川一中卒業後、日本刀鍛錬伝習所に入門。1949年東京芸術大学美術学部木彫科入学。平櫛田中に師事。53年卒業。主に日展、日彫展で活躍。日展入選以後、15回入選。日展会友。日彫展会員。65年女子美術大学講師(以後18年間)。82年横浜美術協会会長。横浜美術協会理事・相談役。神奈川県で没、80歳。彫刻、美教

金子雪操 (かねこ・せつそう/1794～1857年)

江戸の人。伊勢(三重県)長島藩主の増山正賢(ましまま-まさかた)につかえ、画をおしえられる。のち釧(くしろ)雲泉に山水画法を、大窪詩仏に詩をまなび、京都で書をおさめた。のち大坂にすむ。山水・花鳥画にすぐれ、鼎(かねえ)金城らの門人がいる。1857年没、64歳。江戸後期の絵師

金子千恵子 (かねこ・ちえこ/1912～2001年)

兵庫県生れ。1938年東京に移転、洋画家・岡田三郎助に師事。40年鈴木千久馬絵画研究所人体部(石膏デッサン)に学ぶ。50年日展入選。52年創元会展準会員賞、会員。56年渡仏、アカデミー・グラン・ショウミエールに学ぶ。67年日本版画協会・吉田政次に版画の指導を受ける。71年日本版画協会展入選。72年立軌会展、会員。90年フランス・カーニュ市主催の第36回花の国際展覧会で日本美術部門一等賞。91年ジャパンフェスティバル招待出品。94年盛岡橋本美術館に作品を寄贈。2001年没、89歳。洋画、版画

金子哲男 (かねこ・てつお/1928～2018年)

茨城県生れ。小中学校教師。1970年茨城県芸術祭美術展で「雅一5」が茨城県市町村教育委員会連合会長賞。集団「版」に出品、1988年芸術公論賞。94年新構造展東京都知事賞。新構造社会員。2018年没、90歳。版画

金子米軒 (かねこ・べいけん/1883～1946年)

埼玉県生れ。小室翠雲・山岡米華に師事。1922年帝展で入選。25年帝展で再入選。28～33年帝展に入選。1946年没、63歳。日本画

金子政次郎 (かねこ・まさじろう/1870～1934年)

東京生れ。狩野派を学んだ後、1879年頃、スモリックに師事して石版画を学ぶ。一時期、独立開業したが、96年に佐久間真一の秀英舎石版部に入って石版画の指導に努めた。門人に織田東馬、織田一磨がいる。1934年没、65歳。版画

金子義償 (かねこ・よしづぐ/1940～2019年)

秋田県生れ。幼少時に聴力を失い、県立聾学校から1954年東京教育大学附属聾学校美術専攻科に転校。在学中の59年光風会展に入選し、76年会友、78年に退会。60年日展に入選以来、継続して出品。78年秋田市に転居。同年から日洋展に出品、同展で80・81年には三越奨励賞、82年日洋会運営委員、日展会友。85年秋田市文化団体連盟賞特別賞。87-89年インド、パキスタン、シルクロードを放浪。91年「選抜現代作家自選展-萬鉄五郎へのオマージュ-金子義償展」(萬鉄五郎記念館)が開催され、同年秋田県芸術選奨、93年日

洋展で安田火災美術財団奨励賞、95年委員賞。96年日展で特選。2019年没、79歳。洋画

矩 幸成 (かね・こうせい/1903～1980年)

金沢市生れ。1930年東京美術学校彫刻研究科修了、北村西望に師事。26年帝展に入選、以降連続入選。44年金沢へ帰り、46年金沢美術工芸専門学校の設立に尽力、51年大学へ昇格とともに教授に就任、69年退官して名誉教授。69年日展内閣総理大臣賞。日展評議員。1980年没、77歳。彫塑、美教

金重陶陽 (かねしげ・とうよう/1896～1967年)

岡山県生れ。父金重榊陽に師事。1921年ドイツ式のマップ窯を作る。30年土の生成法により桃山時代の備前焼の土味を出すことに成功。42年備前焼技術保存資格者に認定、52年備前焼無形文化財記録保持者に認定。54年岡山県無形文化財、56年重要無形文化財「備前焼」の指定を受ける。66年紫綬褒章。1967年没、71歳。陶芸

金曾大畔 (かねそ・たいはん/1911～1989年)

石川県生れ。1933年大阪美術学校日本画部専攻科卒。矢野橋村、佐藤太清に師事。53年日月社展入選、同展で受賞3回。31年日展入選。おもにエジプトの遺跡と風景を中心に、温かな色調の詩情豊かな作品を描いた。日展会友。1989年没、78歳。日本画

金田兼次郎 (かねだ・けんじろう/1844～1914年)

1844年生れ。象牙を主に扱った。浅草に住し、牙彫家および牙彫商として活躍。内外の博覧会に出品し、受賞を重ね、日本美術協会や東京彫工会の役員、審査委員などの重職を歴任した。1914年没、71歳。彫刻、牙彫家

金田勝一 (かねだ・しょういち/1970年～)

京都生れ。1995年京都市立芸術大学美術研究科(絵画専攻)修了後、京都を拠点に制作活動。2009年京都市立芸術大学で油画の教鞭。絵画、立体ともにFRP、樹脂を支持体とし、油絵具、ニス、アクリルラッカー、自動車用塗料、デカール、サーフェーサーなど、異なる素材を巧みに組み合わせ制作。金田の代表作であるF-1をモチーフにしたシリーズ《Human's Own》。洋画、美教

金田実生 (かねだ・みお/1963年～)

東京都れ。1986年多摩美術大学卒、88年同大学院修了。85年を皮切りに個展を開き、寡作ながらも、作品とテキストを発表。タブローや版画、デッサン。「アーティスト・ファイル2009—現代の作家たち」展(国立新美術館)や2014年「クインテット—五つ星の作家たち」展(損保ジャパン東郷青児美術館)出品により、現代を代表するペインターの一人と目される。**洋画、版画**

狩野伊川 (かのう・いせん/1775～1828年)

江戸生れ。狩野惟信の長男。1808年父の跡をうけ、木挽町狩野家をつぐ。1816年法印江戸城障壁画や朝鮮に贈呈する屏風を制作。大和絵の技法にも通じ、古今の絵画の模写にも力をそそぐ。木挽町狩野家の黄金期をささえたひとりである。1828年没、54歳。**江戸後期の絵師**

加納雨蓬 (かのう・うまう/1866～1933年)

大分県生れ。児玉蘆香に絵を学び、やがて甲斐虎山と共に帆足杏雨に師事。久留米梅林寺に参禅し、長崎大徳寺に寓するなど各地を転々としながら画技を深めた。1906年白須心華の南画塾に賛助員として参加、しばらく東京に在住した。07年南画会に出品した「晩秋富岳」が宮内省買上。1933年没、67歳。**南画**

狩野永雲 (かのう・えいりん/生誕年不詳～1697年)

出雲生れ。父は松江藩祖松平直政の御用絵師であった太田弥兵衛。1643年江戸へ出て狩野宗家の安信に入門、後に「狩野」姓を名乗ることを許された。松江藩二代藩主松平綱隆に仕え、68年には法橋。生年は不明だが70歳代の作品が知られ、1697年、江戸で没。《鷹図絵馬》(平浜八幡宮蔵)、《鷹図》(月照寺蔵)などの鷲鳥図の代表作が知られ、正統な狩野派様式を出雲に伝えた。子の永元、孫の永玄も松江藩の御用を務めた。**江戸前期の絵師**

狩野永岳 (かのう・えいがく/1790～1867年)

京都生れ。父は京狩野の絵師・影山洞玉(後の狩野永章)、弟は狩野永泰で、その子が

冷泉為恭。早くに才能を見いだされ京狩野8代・狩野永俊の養子となり、1816年永俊が没すると27歳で家督を継いだ。狩野派発祥の地京都に留まり、内裏をはじめ公家、寺社などに支えられ、近代まで画系を保持した京狩野家の九代目。狩野派の様式に四条派の写生画風を摂取し、特に奇矯な造形感覚や皴法に特徴が認められる。九条家、紀州徳川家、彦根藩井伊家などに仕え作画を行った。復古大和絵の冷泉為恭は甥、また岸竹堂は永岳に学んだ。1867年没、77歳。**江戸後期の絵師**

狩野永敬 (かのう・えいけい/1662～1702年)

1662年生れ。狩野永納の長男、京狩野家をつぐ。1702年没、41歳。**江戸前期の絵師**

狩野永錫・三谷永錫 (かのう・えいしゃく/生誕年不詳～1822年)

福岡県生れ。1785年狩野家に入門し、狩野の姓をゆるされる。93年法眼となった。1822年没。**江戸後期の絵師**

狩野永川院典信 (かのう・えいせんいん・みちのぶ/1730～1790年)

江戸生れ。2歳にして跡を継ぎ、六代目当主となる。母・妙性尼の教育のもと研鑽を積み、1741年徳川吉宗に御目見、以降、吉宗に厚遇される。48年年度の贈朝屏風を制作。62年法眼に叙され、63年奥御用を仰せ付けられる。64年度の贈朝屏風を制作。73年御医師並(ごいしなみ)となり、嫡子の狩野養川院惟信(1753～1808)も御医師子供並(医師に準ずる職格)となる。80年法印。1790年没、60歳。**江戸中-後期の狩野派の木挽町家の絵師**

狩野永徳 (かのう・えいとく/1543～1590年)

京都生れ。狩野宗家4代目の狩野松栄の長男として生まれ、祖父には狩野元信を持つ。父及び祖父より元信形式の画技を学び、織田信長に仕えて、その御用絵師として「安土城障壁画」、「洛中洛外図屏風」、「源氏物語図屏風」などを製作するなど活躍を示す。信長没後は、秀吉に仕えて「大阪城障壁画」などを製作。門下に狩野山楽、海北友松。代表作に国宝指定「洛中洛外図屏風」「唐獅子図屏風」「絵図屏風」など。尚、後年の狩野宗家12代目狩野永徳(狩野高信)と混同されることが多く、古永徳と称される場合もある。狩野宗家5代目、信長、秀吉のお抱え絵師。1590年没、43歳。**安土桃山時代の絵師**

狩野永章・景山守俊(洞玉) (かのう・えいしょう/1761～没年不詳)

広島県生れ。上京し京狩野家に入門し、狩野姓と永章の名をもらったと考えられる。実子に京狩野9代目になった狩野永岳と、狩野永泰、孫に永泰の子・冷泉為恭がいる。文化10年版と文政5年版の記述より、この間に法眼位を得ているのがわかる。息子の永岳は京狩野に新風を起し活躍した絵師であるが、その影には父・永章の支えがあったと想定される。**江戸後期の絵師**

狩野永川院典信 六代 (かのう・えいせんいん・みちのぶ VI/1730～1790年)

狩野古信の長男。父・古信と、養父の狩野玄信の相次ぐ死没により、2歳にして跡を継ぎ、六代目当主となる。12歳で徳川吉宗に御目見、以降、吉宗に厚遇される。1748年贈朝屏風を制作。62年法眼に叙され、63年奥御用を仰せ付けられる。64年度の贈朝屏風を制作。73年御医師並(ごいしなみ)となり、嫡子の狩野養川院准信(1753～1808)も御医師子供並(医師に準ずる職格)。1780年法印。1790年没、60歳。田沼意次や徳川家治に寵愛され、奥絵師四家のなかで木挽町家が台頭する端緒となる活躍。江戸狩野派に画風変革の気風をもたらした。1790年没、60歳。**江戸中-後期の狩野派の木挽町家の絵師**

狩野永泰 (かのう・えいたい/生誕年不詳～1842年)

狩野永章(景山洞玉)と俳人白絲の子として生まれる。兄に狩野永岳がいる。妻は俳人北川梅價の娘織乃。その三男が冷泉為恭である。父永章は狩野元信に憧れた復古調の京狩野の絵師で、中々の力量を持った絵師。『平安人物志』1822年、30年、38年版に載り、その記述から初め橘泰と名乗り、父を次いで二代景山洞玉、やがて狩野姓を受け其同、永泰と称したと想定される。また一時大坂に住み、大坂の絵師・和田呉山らと交流した。更に大坂城障壁画御用に参加、大坂の人名録『続浪華郷友録』にも名前が載り、伊勢守であったことが知られる。**江戸後期の京狩野の絵師**

狩野永納 (かのう・えいのう/1631～1697年)

京都生れ。狩野山雪の長子。母は狩野山楽の娘。狩野安信にも師事。1651年山雪の死により京狩野をついだ。山雪の草稿を永納が編集・増補し、91年に公刊した『本朝画史』は、日本絵画史研究の基本的文献のひとつとして名高い。1697年没、67歳。**江戸前期の絵師**

狩野永伯 (かのう・えいはく/1687～1764年)

1687年生まれ。狩野永敬の長男。はじめ父に、のち狩野主信(もりのぶ)にまなぶ。京狩野家5代をついだ。1764年没、78歳。**江戸中期の絵師**

狩野永良 六代 (かのう・えいりょう VI/1741～1771年)

狩野永伯の養子。京狩野第六代当主となる。31歳にして没した夭折の絵師。1770年扇絵を毎月描いて宮廷に献上する職を獲得し、以降この職は京狩野家に代々引き継がれていた。1771年没、31歳。**江戸中期に活躍した京狩野派の絵師、扇絵**

狩野養信 (かのう・おさのぶ/1796～1846年)

江戸生れ。狩野伊川院栄信の子で、木挽町狩野家9代目。1819年法眼、34年年法印。古絵巻類の模写などを通じて古典的なやまと絵の研鑽を積み、狩野派に新風を吹き込んで幕末の狩野派重鎮。代表作「源氏物語 子の日凶屏風」(遠山記念館蔵)。2度こわって統率した江戸城障壁画制作(39年西の丸と45年本丸)の実態は、「公用日記」(東京国立博物館蔵)によりかなり詳しく知ることができる。東京国立博物館編『江戸城障壁画の下絵』。1846年没、50歳。**江戸後期の絵師**

狩野賢信 (かのう・かたのぶ/1729～1780年)

1729年生れ。狩野伯寿の子。1760年父の跡をうけ、浅草猿屋町代地狩野家をつぐ。1780年没、52歳。**江戸中期の絵師**

狩野休伯 (かのう・きゅうはく/1577～1654年)

京都生れ。父に狩野松栄の4男で、兄には狩野永徳を持つ。父、兄が没した後、徳川秀忠に仕え、徳川幕府の御用絵師として活躍を示す。1625年に法橋に叙せられている。風俗画を最も得意として、風俗画を得意とした「花下遊楽図」(国宝指定)の筆者として名高い。1654年没、77歳。**江戸前期の絵師**

狩野元仙 三代(かのう・げんせん III /1685～1751年)

狩野洞春(2代)の長男。1724年父の跡をうけて駿河台狩野家を継ぐ。父と同じように御所の障壁画や朝餼贈呈屏風などの制作に参加した。門人に石里洞秀(同墓)がいる。1751年

没、67歳。江戸中期の絵師

狩野興以 (かのう・こうい/生誕年不詳～1636年)

栃木県生れ。のち刑部少輔。狩野光信の高弟。紀州の徳川家に仕え、のち法橋に叙せられる。牧溪や雪舟等の水墨画の古典的画法を研究し、人物・山水、草花等を能くした。光信の弟孝信の三子探幽・尚信・安信の指南を託され、その功を以て狩野の名を許された。1636年没。江戸前期の狩野派の絵師

狩野光雅 (かのう・こうが/1897～1953年)

和歌山県生れ。1919年東京美術学校日本画科卒、松岡映丘に師事。21年新興大和絵会結成に参加。31年より帝展に作品を発表し、第12、14回帝展で特選。38年国画院結成に参加。伝統的大和絵画法を用い、壮大なモチーフを扱い、迫力ある力強い表現をみせた。1953年没、55歳。日本画、大和絵、版画

狩野養川院惟信 II (かのう・これのぶ・ようせんいん/1753～1808年)

江戸生れ。狩野典信の長男。1764年奥御用を命じられ、江戸城本丸・西之丸に描く。81年、法眼。90年典信が没し、跡を継いで七代目当主となる。94年法印。父が寵愛を受けた徳川家治に引き続き厚遇され、田沼意次(1719～88)にも重用、木挽町家繁栄の時代を担った。典信の画風を継承しつつ、奥深い空間表現を開拓し、繊細な表現を得意とするなど、栄信・養信につながる様式の基礎を確立した。また、同時代の江戸画壇で展開していた諸要素を取り入れ、栄信、養信による新様式確立の基盤を整えた。江戸中、後期の狩野派の木挽町家の絵師

狩野山雪 (かのう・さんせつ/1589、90～1651年)

肥前生れ。狩野山楽の門人で女婿。宋の牧溪等を研究し、山楽よりも装飾的。京都の狩野派の中心的人物で山水・人物・花鳥獣を能くする。法橋に叙せられ、1651年没、63歳。江戸前期の絵師

狩野山楽 (かのう・さんらく/1559～1635年)

近江生。豊臣秀吉の近侍木村永光の子。姓は木村、名は光頼。狩野永徳に学び養子とな

る。二代將軍徳川秀忠の用命を受けて画壇の重鎮として活躍。筆法は強く装飾的で人物・鳥獣の動的表現に秀でる。1635年没、77歳。江戸前期の狩野派の絵師

狩野松栄 (かのう・しょうえい/1519～1592年)

狩野元信の三男。兄たちの早世により家督を継ぐ。1553年父元信の助手として石山本願寺の障壁画制作に参加。63年大徳寺に《大涅槃図》を制作して寄進。66年大徳寺聚光院障壁画を息子の永徳と共に制作。父の元信、子の永徳の間において知名度は低かったが、その暖かみのある優しい画風は高く評価されるようになっている。1592年没、74歳。安土桃山時代の絵師。

狩野春賀 (かのう・しゅんが/生誕年不詳～1751年)

狩野春湖の子。1749年宮川長春の一派をふくむ一門で日光東照宮修復事業に参加したが、その画料を着服し、1951年没、長春の弟子らによって殺害。この件で子の全信も八丈島に流罪となり、稲荷橋狩野家は断絶。江戸中期の絵師

狩野春湖 (かのう・しゅんこ/生誕年不詳～1726年)

長野県生れ。狩野春雪の弟子。その子春笑の後見人となり、狩野の名をゆるされ、稲荷橋狩野家をおこした。1726年没。江戸中期の絵師

狩野春雪 (かのう・しゅんせつ/1614～1691年)

1614年生れ。狩野元俊の長男。父の跡をうけて山下狩野家をつぐ。江戸城本丸の障壁画や朝鮮贈呈屏風(びょうぶ)の制作に参加。1691年没、78歳。江戸前期の絵師

狩野宗秀・元秀 (かのう・そうしゅう、もとひで/1551～1601年)

1551年生れ。狩野松栄の次男、狩野永徳の弟。1572年永徳と共に豊後国の大友宗麟に招かれ障壁画を描く。82年羽柴秀吉が、姫路城殿舎の彩色のために、宗秀を播磨国に招いた。90年天正度京都御所造営では永徳を補佐し障壁画製作に参加。94年頃法眼。99年桂宮家新御殿造営にあたり甥の光信を補佐し障壁画制作に参加。1601年没、50歳。安土桃山時代の狩野派の絵師

狩野素川 (かのう・そせん/1765～1826年)

1765年生れ。狩野賢信の子。父の跡をうけて浅草猿屋町代地狩野家をついだ。一説では宇多川徳元の子とされる。木挽町狩野家の伊川に匹敵する実力者といわれた。1826年没、62歳。江戸中-後期の絵師

狩野高信 (かのう・たかのぶ/1740～1795年)

1740年生れ。狩野英信の長男。父の跡をうけて中橋狩野家をつぐ。安永2年(1773)法眼となった。1795年没、55歳。江戸中期の絵師

狩野孝信 (かのう・たかのぶ/1571～1618年)

1571年生れ。狩野永徳の次男。兄光信の急死後、狩野派の最高指導者となる。1613年御所紫宸殿の「賢聖(けんじょう)の障子」をえがく。14年名古屋城本丸御殿の障壁画制作を主導した。1618年没、48歳。作品はほかに「後陽成天皇像」など。江戸前期の絵師

狩野雅信 (かのう・ただのぶ/1823～1880年)

1823年生れ。狩野養信(おさのぶ)の長男。1846年木挽町(こびきちょう)狩野家をつぐ。のち法印となり、維新後は図書寮付属博物館につとめた。門下からは狩野芳崖や橋本雅邦ら日本画革新運動を指導する画家が輩出した。1880年没、58歳。幕末-明治の絵師

狩野探淵 (かのう・たんえん/1805～1853年)

狩野探信守道の長男。1836年父の跡をうけて鍛冶橋狩野家をつぐ。江戸城本丸・西の丸の障壁画の制作などに参加。44年法眼となった。1853年没、49歳。江戸後期の絵師

狩野探淵守真 八代 (かのう・たんえん・もりざね VIII/生誕年不詳～1853年)

探淵を祖とする鍛冶橋狩野派の8代目。天保15(1853)年に法眼に叙される。1853年没。江戸後期の絵師

狩野探常 (かのう・たんじょう/1696～1756年)

1696年生れ。狩野探信の次男。兄探船の養子となり、鍛冶橋(かじばし)狩野家をつぐ。朝鮮への贈呈屏風などの制作にたずさわった。1756年没、61歳。江戸中期の絵師

狩野探信・七代・探信守道 (かのう・たんしん VII/1785～1836年)

狩野探牧守邦の長男。1796年家督を継ぐ。江戸幕府御用絵師の鍛冶橋狩野家の7代目。先祖に当たる鍛冶橋狩野家2代目の狩野探信守政と区別するため、探信守道とも呼ばれる。弟に祐清邦信、息子は探淵。1825年法眼。34年御医師並。弟子に沖一峨、目賀多信濟、深川水場狩野家の了承賢信、探水守常など。(探信守道は家を再興するため、祖先の狩野探幽に学び、その没骨的彩色法を復活させようとした)1836年没、50歳。江戸後期の狩野派の絵師

狩野探道・12世 (かのう・たんどう XII /1890～1948年)

東京生れ。探幽を祖とする鍛冶橋狩野家の12世。1903年狩野応信に就き始めて狩野派の画法を学び、その没後荒木探令に師事した。1915年東京美術学校日本画科卒、日本美術協会に出品し、同会委員、同会第一部審査委員、展覧会幹事をつとめた。代表作に東京都養正館壁画「天孫降臨図」。東京で没、59歳。日本画

狩野探美 (かのう・たんび/1840～1893年)

1840年生れ。狩野探淵の子。1870年海軍操練所製図所につとめる。82年第1回内国絵画共進会に「嫦娥図」などを出品して銀印を受賞。1893年没、54歳。作品はほかに「祇王祇女図」「山水」など。日本画家

狩野探幽 (かのう・たんゆう/1602～1674年)

京都生れ。1617年徳川幕府の御用絵師、4年後には、江戸城鍛冶橋門外に屋敷を拝領、禄高200石を受け、鍛冶橋狩野家を興した。宗家の貞信没後は名実ともに狩野家の中心的存在、江戸狩野の基礎を確立。幕府の命を受け、江戸城改築のたびに障壁画を担当。1626年京都二条城御幸殿の障壁画制作に際しては、一門を率いて制作。35年入道となり、探幽と号し、後に法眼、宮内卿法印に叙せられた。1674年没、72歳。江戸前期の徳川幕府の御用絵師

狩野探令・荒木探令 (かのう・たんれい V/1857～1931年)

山形県生れ。東京で狩野探美に師事。江戸川製陶所の納富介次郎にテレピン油描法を

まなび、陶画もえがいた。狩野派の復興につとめ、晩年に狩野姓。1931年没、75歳。日本画

狩野周信・三代 (かのう・ちかのぶ 木挽町Ⅲ/1660～1728年)

江戸幕府に仕えた御用絵師で、最も格式の高い奥絵師4家のひとつ木挽町狩野家の3代目。父は狩野常信、弟に狩野岑信、子に狩野古信がいる。1678年4代将軍徳川家綱にお目見え。1710年10人扶持を受け、13年に常信が没したため跡を継いだ。19年法眼に叙せられ、中務卿と称する。常信没後、有徳院・徳川吉宗の絵画指導をしていた。1728年没、69歳。弟子に、鳥山石燕、理豊女王、仙台藩お抱え絵師の荒川周良(如慶)など。江戸中-後期の絵師

加納告保 (かのう・つぐやす/1928～1997年)

鳥取県生れ、19歳にして小学校教員となり、21歳には画家と教職の二束のワラジをばく生活。壮年期にはシルクスクリーン印刷の技法をマスターし、抽象的なデザインや大山をモチーフにしたものなどを描き、独自の作風を確立していきました。晩年期には数々の賞を受賞し、全国に名を響かせる程の画匠となりました。1997年没、69歳。版画、デザイン、美教

狩野常信・二代 (かのう・つねのぶ 木挽町Ⅱ/1636～1713年)

父である木挽町狩野家の祖尚信を継いで第二代となる。父の歿後、叔父探幽の薫陶を受け、幕府の奥絵師となる。のち法印に叙せられた。また中院通茂にて和歌を学び能くする。狩野派の四大家の一人。1713年没、78歳。江戸前・中期の狩野派の絵師

加納鉄哉 (かのう・てっさい/1845～1925年)

美濃生れ。父より南画や彫刻等を学ぶ。1858年禅寺にて修行のため出家し、仏画や根付の制作に携わり鶴洲から彫刻を学んだ。68年還俗、尾張にて鉄筆画の技法について研究した後上京しその技法を用いた絵画や彫刻の制作を行う。81年内国勸業博覧会に出品、その後は日本および中国の古美術品の研究に携わった。83年頃には奈良に移住し84年、86年岡倉天心らと共に古美術の調査に携わる。87年東京美術学校にて教鞭。奈良に再度移住し木彫や銅像、乾漆像等の多彩な彫刻作品の制作を行い仏像の修復作業にも携わった。1925年没、80歳。彫刻、日本画、美教

狩野洞雲 (初代) (かのう・とうん I /1625～1694年)

後藤益乗の子、「古画備考」には立乗の子とある。妻は狩野永真の娘。書を松花堂昭乗に学び、絵を狩野探幽に学んでその養子になる。1667年文家して幕府の表絵師となり、駿河台狩野家を開く。74安信・常信らと京都御所の画を描く。91年大聖殿に「七十二賢及先儒ノ像」を描き、法眼に叙せられた。狩野派の画家の中でも常信と並び最上位に位置づけられる。1613年没、69歳。江戸前期の絵師

狩野洞益 (かのう・どうえき/生誕年不詳～1840年)

板谷広長の次男。狩野洞白(愛信)の養子となり、駿河台(するがだい)狩野家をつぐ。1840年没。江戸後期の絵師

狩野洞益・六代 (かのう・どうえき VI/生誕年不詳～1841年)

板谷広長の次男。狩野洞白(5代)の養子となり、駿河台狩野家を継ぐ。1841年没。江戸後期の絵師

狩野洞元 (かのう・とうげん/1643～1706年)

狩野信政の次男。分家して幕府の表絵師のひとつ、浅草猿屋町代地分家狩野家をたてた。作品として『黒駒大絵馬』があり、1697年に信州の大名戸田氏忠真が浅間信仰のため描かせ奉納したものである。木製丈3尺3寸8分、巾4尺5寸梓飾金具付絵馬面を全面金箔押として、これに大きく勇む黒駒を漆絵で描写。これは河口浅間神社に現存し有形文化財。1706年没、63歳。江戸前期の絵師

狩野洞壽・三世 (かのう・とうじゅ/生誕年不詳～1777年)

狩野洞琳の子。1762年朝鮮への贈呈屏風を制作。1777年没。江戸中期の絵師

狩野洞寿・六世 (かのう・とうじゅ VI/生没年不詳)

狩野洞隣の子。2世は洞琳、3世は洞壽、4世は洞庭、6世は洞寿。皆合葬。江戸後期の絵師

狩野洞春・二代 (かのう・とうしゅん II/生誕年不詳～1724年)

狩野洞雲(初代)の養子となり、1694年洞雲が没したため、駿河台狩野家を継ぐ。御所の障壁画や朝鮮贈呈屏風などの制作に参加。作品に『日光山縁起』。1724年没。江戸前中期の絵師

狩野洞春・四代・美信 (かのう・とうしゅん IV/1747～1797年)

狩野元仙(3代)の長男。幼くして父母を亡くし、父の門人の石里洞秀(同墓)の教育を受け、探幽の古法を守り、雪舟の筆意を学び努めて画風(駿河台風)をなし、一大名手とされる。狩野美信(よしのぶ)という名でも優れた画を残している。1755年駿河台狩野家を継ぐ。85年式部卿法眼に叙せられた。朝鮮贈呈屏風などの制作を手がける。1797年没、50歳。江戸中-後期の絵師

狩野洞春・八代 (かのう・とうしゅんⅧ/生没年不詳)

名は陽信。狩野洞白(7代)の子。江戸後期の絵師

狩野洞春・九代 (かのう・とうしゅんⅨ/生没年不詳)

狩野洞春(8代)の子。江戸後期の絵師

狩野洞春美信・四代 (かのう・とうしゅん・よしのぶ/1747～1797年)

福岡藩御用絵師・尾形家の師家である表絵師筆頭格・駿河台狩野家の4代で洞白の父。9歳で父を失ってからはその門人で黒田家江戸詰めの絵師であった石里洞秀(父)に絵を学ぶ。1785年法眼に叙せられている。64年(1764)朝鮮国王への献上用として屏風絵一雙を描いたことで知られる。1797年没、50歳。江戸中期の絵師

狩野洞春美信 (かのう・とうしゅん・よしのぶ/1747～1797年)

1747年生れ。狩野探幽や雪舟の画風を学んで一家を成し、駿河台初代洞雲益信に比し名手とされ85年式部卿法眼に叙せられた。64年幕府より朝鮮国王に贈る屏風や東叡山の客殿、壁、天井などのほか浅草観音に板額「天女奏楽図」を描いた。97年没、51歳。江戸中期の絵師

狩野董川・中信 (かのう・とうせん・なかのぶ/1811～1871年)

江戸生れ。狩野伊川院の第五子、浜町狩野友川助信の養子。通称は薫四郎、初号は幸川、のち董川、別号を全楽斎。幕府の絵師となり、法眼。1871年没、61歳。幕末-明治の絵師

狩野董川・二代 (かのう・とうせんⅡ/生誕年不詳～1871年)

狩野伊川の5男。浜町狩野家の友川の養子となって跡をつぎ、奥絵師となる。1844年法眼(まうげん)。江戸城本丸・西の丸の障壁画制作などに参加。1871年没。幕末-明治の絵師

狩野洞庭・四世 (かのう・とうてい IV/生誕年不詳)

名は興信。狩野洞壽の子。江戸中期の絵師

狩野洞白・五代 (かのう・とうはく V/1772～1821年)

狩野洞春(4代)の子。1797年駿河台狩野家を継ぐ。朝鮮使節に贈る屏風を描くなどをし、1813年大蔵卿法眼に上げられる。門下に尾形洞水がいる。1821年没、49歳。江戸後期の絵師

狩野洞白・七代 (かのう・とうはくⅦ/生没年不詳)

狩野洞益(6代)の子。1841年駿河台狩野家を継ぐ。平面芸術に優れ、同じ駿河台狩野派の前村洞和と共に多くの弟子、門人をもうけ画法を伝授した。弟子に河鍋暁斎などがいる。江戸後期の絵師

狩野洞琳・二世 (かのう・とうりんⅡ/1679～1754年)

狩野洞元の子。浅草猿屋町代地分家狩野家の寿石の子とも、狩野洞雲の門人ともいわれる。日光東照宮の装飾事業に参加した。1754年没、76歳。江戸中期の絵師

狩野洞隣・五世 (かのう・とうりん V/生誕年不詳～1820年)

初め元琳、後に洞琳また洞隣と改める。通称は久米吉之助、後に鏡之助と改める。狩野洞庭の子。祖父狩野洞壽の跡を継ぎ幕府の絵師となる。1820年没。江戸後期の絵師

加納俊治 (かのう・としはる/1929～2015年)

愛知県生れ。1948年藤井達吉に師事し、工芸和紙の制作をはじめ。58年高橋節郎に師事、第2回新日展に入選。63年日本現代工芸美術家展に入選。70年改組日展で特選、北斗賞。72年改組日展で特選。78年現代工芸美術家協会評議員。79年監事、83年常務理事、86年参事。日展審査員。79年会員、86年評議員、2009年参与。89年豊田芸術選奨受賞。90年日本現代工芸美術展で内閣総理大臣賞。91年個展「豊田芸術選奨受賞記念」(豊田市民文化会館)。文化交流と研修のため渡欧。96年愛知県芸術文化選奨文化賞。2000年豊田文化賞。2001年、小原和紙三人展-山内一生・加納俊治・小川喜数(豊田市民文化会館)。**工芸(小原和紙)**

狩野友信 (かのう・とものお/1843～1912年)

江戸生れ。狩野董川中信の長男。狩野雅信(ただのぶ)の門にはいる。のち川上冬崖、ワグマンに洋画をまなび、フェノロサらの鑑画会で活躍。1891年東京美術学校助教授。1912年没、70歳。**幕末-明治時代の絵師、洋画、美教**

狩野尚信 (かのう・なおのぶ 木挽町 I /1607～1650年)

京都生れ。木挽町狩野家初代。孝信の次男、探幽の弟、安信の兄。薙髪して自適齋と号し、幕府の奥絵師となり、多くの障壁画を描く。山水画に優れ、情緒ある作品を残した。1650年没、43歳。**江戸前期の絵師**

狩野美信 (かのう・なかのぶ 駿河台 V /ながのぶ/1772～1821年)

1772年生れ。江戸幕府御用絵師だった駿河台狩野家の5代目。狩野美信の子として生まれる。百官名は諸書で大蔵卿とされるが、父と同じ式部卿を名乗った時期もあるようだ。父に絵を習い、朝鮮通信使へ贈る贈答屏風や寛永寺法王宮殿の障壁画などを手掛けた。1813年大蔵卿法眼に叙された。1821年没、50歳。**江戸後期の狩野派の絵師**

狩野栄信・八代 (かのう・ながのぶ 木挽町 VIII /1775～1828年)

江戸生れ。狩野養川院准信の子木挽町狩野家の8代目。1802年に法眼、16年に法印。「草花群虫図」(東京国立博物館蔵)や「平家物語図」(板橋区立美術館蔵)がある。1828年没、53歳。**江戸後期の絵師**

加納夏雄 (かのう・なつお/1828～1898年)

京都生れ。奥村庄八、池田孝寿に師事。かたわら中島来章に画をまなぶ。1869年造幣寮につとめ、新貨幣の原型製作に従事。89年東京美術学校(現東京芸大)教授。帝室技芸員。1888年没、71歳。代表作に「月雁図鉄額」など。**彫金、美教**

狩野梅笑 (かのう・ばいしやう/1728～1807年)

父、梅春旭信と同様、幕府の御用を勤めたが、1763年頃から約30年間他狩野家から何らかの理由で義絶されており、名も藤原玉元と改め、中越地方を遊歴し制作を行っていた。93年一族との和解が成立し、翌年は公儀の御用を勤めている。1807年没、79歳。**江戸中、後期の絵師、徳川幕府の表絵師山下狩野家の分家、深川水場狩野家の絵師**

狩野伯寿 (かのう・はくじゆ/1678～1766年)

1678年生れ。狩野休山の次男。浅草猿屋町代地狩野家の寿石の養子となり、その跡をつぐ。1766年没、89歳。**江戸時代前期-中期の絵師**

狩野寿一 (かのう・ひさいち/1910～2003年)

千葉県生れ。1930年安井曾太郎に師事。37年一水会展出品、47年会員、53、58年一水会優賞、73年退会。56年渡仏。49年丸善にて初個展開催。58年三越にて滞欧油彩画展を開催。松下幸之助がコレクション。2003年没、93歳。**洋画**

狩野秀頼 (かのう・ひでより/生没年不詳)

桃山から江戸初期に活躍したと見られるが、伝歴については不明の点が多い。1569年(永禄12)の年紀がある(神馬図額)(島根県賀茂神社蔵)を描いており、元信の孫の可能性が高い。代表作に国宝《高雄観楓図屏風》(東京国立博物館蔵)がある。**安土桃山から江戸初期の絵師**

狩野博幸 (かのう・ひろゆき/1947年～)

福岡県生れ。1970年九州大学文学部哲学科美学・美術史専攻卒業。74年同大学院文学研究科博士課程中退。帝塚山大学助教授就任。80年京都国立博物館研究員、美術室長、京都文化資料研究センター長。その間、「没後200年 伊藤若冲」展(2000年)、「The Art

of Star Wars(スター・ウォーズ)展(2003年)、「曾我蕭白 無頼という愉悅」展(2005年)などを企画した。2006年京都国立博物館で開催された、文化庁海外展帰国記念「18世紀京都画壇の革新者たち」展を最後に退職、同志社大学文化情報学部教授に就任。2018年定年退任。日本近世美術史家、前京都国立博物館名誉館員

狩野古信 (かのう・ふるのぶ/1695～1731年)

木挽町狩野家五世。如川周信の子。画法を父に学ぶ。1728年父の後を継いで幕府の絵師となる。法印に叙せらる。1731年没、36歳。江戸中期の絵師

狩野芳崖 (かのう・ほうがい/1828～1888年)

山口県生れ。狩野雅信に学び、狩野派の伝統を受け継ぎ、明治初期、フェノロサに見いだされ、日本画革新運動の強力な推進者となった。東京美術学校創立に尽力。絶筆「悲母観音」は近代日本画の代表作、重要文化財。盟友たる橋本雅邦と共に、日本画において江戸時代と明治時代を橋渡しする役割を担うと共に、河鍋曉斎、菊池容斎らと狩野派の最後を飾った。幕末から明治期の日本画家で近代日本画の父。東京で没、60歳。日本画、美教、近代日本画の父

狩野正信 (かのう・まさのぶ/1434～1530年)

1463年には京で絵師として活動、幕府御用絵師。幕府御用絵師の小栗宗湛に師事。63年相国寺雲頂院の昭堂に十六羅漢を描いた。83年足利義政の造営した東山山荘の障壁画を担当。96年日野富子の肖像を描いた(『実隆公記』)。狩野派は、室町時代から明治に至るまで400年にわたって命脈を保ち、常に日本の絵画界の中心にあった画派。この狩野派の初代とされるのが、室町幕府に御用絵師として仕えた狩野正信。1530年没、97歳。室町時代の絵師、狩野派の祖

加納光於 (かのう・みつお/1933年～)

東京生れ。銅版画を独学。1953年ごろ瀧口修造を知り、56年タケミヤ画廊で個展。62年東京国際版画ビエンナーレで「国立近代美術館賞」、65年日本国際美術展で優秀賞。66年『半島状の!』シリーズ。69年函形立体のオブジェ作品制作。コラージュやフロッタージュ等展開。76年よりデカルコマニーを利用したリトグラフ連作『稲妻捕り』、一転して油彩画に興味

をむけ80年油彩画のはじめての作品群を個展『胸壁にて』発表。93年 セゾン美術館で個展開催。2005年旭日小綬章。版画、立体、コラージュ、洋画

狩野光信 (かのう・みつのぶ/1561/65?～1608年)

京都生れ。狩野永徳の長男。織田、豊臣、徳川の3氏に仕え、安土城、肥前名護屋城、二条城、伏見城などの城郭や寺院、禁裏の障壁画を制作。父永徳に比し繊細、優美な画風で宗秀、山楽らとともに永徳没後の桃山画壇を支えた。遺作は1600年園城寺勸学院『四季花木図』襖絵、05年法然院『花鳥図』襖絵、相国寺法堂『雲竜図』天井画、05年高台寺霊屋『浜松図』。三重県で没、47、43歳。桃山時代の画家

嘉野稔 (かのう・みのる/1930～2007年)

鹿児島県生れ。7歳の時、1人娘しかいない祖母の養子になる。芸大卒後、政府留学生として1957年に渡仏し、国際大学都市日本館に入る。ロマネスク彫刻に心酔し、創作を続け、パリで没、77歳。造形

狩野元信 (かのう・もとのぶ/1476～1559年)

京都生れ。狩野派の祖・狩野正信の子で、狩野派2代目。大炊助、越前守、法眼に叙せられ、後世「古法眼」と通称された。父・正信の画風を継承するとともに、漢画の画法を整理しつつ大和絵の技法を取り入れた。狩野派の画風の大成し、近世における狩野派繁栄の基礎を築いた。1559年没、83歳。室町時代の絵師

狩野安信 (かのう・やすのぶ/1613～1685年)

京都生れ。狩野孝信の3男で、永徳の末弟長信の女婿。従兄の貞信没後、狩野宗家を継ぐ。寛永年間(1624～44)江戸へ出、幕府御用絵師として中橋に屋敷を賜わり、中橋狩野の祖となる。寛永、承応、寛文、延宝度造営の内裏や、江戸城本丸、西の丸の障壁画制作に従事し、寛文2(62)年法眼に昇叙。主要作品は大徳寺玉林院『竹林七賢、四愛図』襖絵、三溪園『山水図』襖絵、『当麻(たいま)縁起絵巻』など。1685年没、72歳。江戸前期の絵師、中橋狩野の祖

狩野之信 (かのう・ゆきのぶ/1513～1573年)

京都生れ。室町期の狩野派画家で狩野派始祖狩野正信の子、狩野元信の弟とされる。禁裏の絵師としてよく仕え、丹青山水や花鳥などを得意としたが、その筆致は兄元信の物に酷似しており、当時では之信の落款や印章がよい物は元信筆の物とよく混同された。法眼に叙された後、剃髪して法号・性通を名乗る。代表作「四季耕作図」が重文指定。1573年没、60歳。室町～安土桃山時代の絵師

狩野養川院惟信・七代 (かのう・ようせんいん・これのぶ VII/1753～1808年)

江戸生れ。狩野典信の長男。1764年12歳で奥御用を命じられ、江戸城本丸・西之丸に描く。81年、29歳で法眼に叙任される。90年典信が没し、跡を継いで七代目当主となる。94年42歳という若さで法印に叙任される。父が寵愛を受けた徳川家治に引き続き厚遇され、田沼意次(1719～88)にも重用されるなど、木挽町家繁栄の時代を担った。典信の画風を継承しつつ、奥深い空間表現を開拓し、細緻な表現を得意とするなど、栄信・養信につながる様式の基礎を確立した。また、同時代の江戸画壇で展開していた諸要素を取り入れ、栄信、養信による新様式確立の基盤を整えた。1808年没、55歳。江戸後期の狩野派の木挽町家の絵師

狩野良信 (かのりょうしん・よしのぶ/1848～1919年)

狩野雅信の門人。狩野氏。狩野祐信の子。狩野派の正統の画家であったが、川上冬崖に洋画を学び、明治期に産業関係の版画の版下絵などを描いている。1884年絵画共進会にて褒状を受ける。1919年没、71歳。明治時代の狩野派の絵師、日本画、版下絵

狩野朗左門 (かのう・ろうのさもん/1911～2001年)

東京生れ。日本大学芸術学科卒。岡田三郎助に師事。芸術学を外山卯三郎に学ぶ。1930年槐樹社展、白日会展に出品。31年春台展に無鑑査。日本画に転向し、落合朗風に師事。35年巴里・東京新興美術展に出品。35年明朗美術連盟第2回展入選。36年明朗美術連盟の盟友、37年に同人、39年主席、42年明朗展まで同連盟を主宰。個展を39、40年銀座・鳩居堂、41、42年日本橋・白木屋で開催。調花画塾を主宰。49年銀座松坂屋で個展。光伸塾を主宰。女子美術大学、東京写真短期大学で講師。2001年没、90歳。洋画、日本画、画塾

栞田ちひろ (かしばた・ちひろ/1978年～)

福岡県生れ。2004年武蔵野美術大学大学院造形研究科美術専攻油絵コース修了。筆を使わず指と手で描いていく油彩画と、線を重ねていくボールペン画の双方を手掛ける。近作では鏡や水を使った作品も発表。13年ニューヨークの第101回ザ・カレッジ・アート・アソシエーション(CAA学会)の「畏れと憤悶の間で:東日本大震災における日本の若手作家の反応」という研究発表で作品が注目される。主な展覧会に「日本の美術を貫く炎の筆く線>」(府中市美術館)、「VOCA展2012」(上野の森美術館)、「MOT アニュアル2011-世界の深さのはかり方」(東京都現代美術館)などがある。現代美術

鎌木雲潭 (かぶらぎ・うんたん/1782～1853年)

江戸生れ。市河寛斎の次男。市河米庵は実兄。画を谷文晁に学び、大村藩御用絵師・鎌木梅溪の養嗣子となり自身も絵師として大村藩に仕える。文化年間には藩主大村純昌の命を受けて大村城下にて赴任。山水画・花鳥画を得意とした。子の梅亭(1804～1830年)・雲洞(1815年～1892年)も画家。門下に佐久間雲窓がいる。1853年没、71歳。江戸後期の南画家

鎌木梅溪 (かぶらぎ・ばいゝけい/1750～1803年)

長崎県生れ。長崎派の荒木元融にまなぶ。江戸にて清(中国)の画家沈南蘋風の花鳥・人物画をえがいた。1803年没、54歳。江戸中期-後期の絵師

鎌倉秀雄 (かまくら・ひでお/1930～2017年)

東京生れ。1946年安田靉彦に師事。51年再興院展で入選(81年同人、87年文部大臣賞、89年内閣総理大臣賞、2000年理事)。87年文化庁買上げ。90年日本橋三越で個展開催。東京で没、87歳。日本画

鎌田銀次郎 (かまた・ぎんじろう/1925～1986年)

静岡県生れ。1947年東京美術学校師範科卒。49年大潮会展入選。60年光風会展出品、入選。以後、73年まで連続出品、連続入選、光風会会友、無鑑査、会員。65年日展入選以後、7～8回連続入選。長崎県立保育短期大学教授。73年長崎県立女子短期大学教

授。1986年没、60歳。洋画、美教

蒲地清爾 (かまち・せいじ/1948年～)

佐賀県生れ。71年日本美術家連盟工房にて銅版画を始める。72年日本版画協会・準会員推挙、72年日動版画グランプリ展(78、83年も)。78年日本版画協会・準会員賞・会員推挙。国内外の国際版展に出品。度々受賞。版画

神坂松濤 (かみさか・しょうとう/1882～1954年)

京都生れ。菊池芳文に師事して日本画を学び、内国絵画共進会賞など各種の展覧会で受賞。一方、浅井忠に洋画を学び、工芸分野でも刺繍応用の原図制作や金唐革(きんからかわ)の復元制作に専念。また、親交のあった洋画家・須田国太郎の才能を早くから認め、東京・資生堂での初個展開催に尽力。1986年京都国立近代美術館の特別展に「暮れゆく街道」などが展示。日本画、洋画、刺繍原画、金唐革

神坂雪佳 (かみさか・せつか/1866～1942年)

京都に暮らし、明治から昭和にかけての時期に、絵画と工芸の分野で多岐にわたる活動。16歳で四条派の日本画家・小野村賢と鈴木瑞彦に師事して絵画を学び、6年後(明治20年)に川島織物で図案の仕事が始める³⁾と装飾芸術への関心を高め、1890年には品川弥二郎の紹介で図案家・岸光景に師事して工芸意匠図案を習い修めると、岸が傾倒した琳派に魅かれるようになった。『第五回内国勸業博覧会審査官列伝』によると工芸品に施された神坂のデザインは、ゆくゆくは国内と海外の博覧会や共進会、展覧会のほか漆工芸会青年会競技会に出展して賞与を100件超受けたと伝わる。京都市に技師として奉職した96年からグラスゴー出張を挟んで、1902年第2回全国模様図案競技会の審査員。1942年没、76歳。日本画、図案、琳派

神谷玉翠 (かみや・ぎよくすい/1899～没年不詳)

三重県生れ。1923年東京川端学校日本画科卒。58年長崎県展で長崎日日新聞社賞。59年長崎県展で県教委奨励賞。60年長崎県展で長崎県知事賞。68年長崎県展で文部大臣賞。71年長崎県展で長崎県知事賞。日本画

神谷幸子 (かみや・さちこ/1929～2009年)

岐阜県生れ。1949年岐阜師範卒(現 岐阜大学教育学部)、1977、80、81年新制作展新作家賞。82年新制作協会会員、82年朝日ジャーナル表紙に第45回展作品が掲載。96年岐阜市功労表彰(芸術文化振興)。2009年没、80歳。洋画

上矢 津 (かみや・しん/1942年～)

東京生れ。東京都立工芸高校卒業。1970年ジャパン・アート・フェスティバル優秀賞。73年アメリカ世界版画コンペティション最高賞、リュブリアナやクラコウなどの国際版画ビエンナーレに出品を重ねる。版を介して、転写、コラージュ、紙のカッティングなどを行い、現実のイメージを消去した造形表現を追究する。版画、コラージュ

神谷信子 (かみや・のぶこ/1914～1986年)

香川県生れ、一家で東京に移り、高等女学校で国文を教えながら、絵画研究所で指導を受け画家の道に入ります。浅草の神谷バー「神谷酒造」の4男と結婚、夫は戦病死。その後、画家広幡憲に心酔し同棲、広幡も1年半後、立川駅で事故死37歳。晩年までニューヨークで絵を描いていたが、病で帰国、1986年没、72歳。洋画

神谷飛佐至 (かみや・ひさし/1895～没年不詳)

金沢市生れ。1913年石川県立工業学校図案絵画科を卒業し、東京美術学校日本画科に進んだが中退。山内多門に師事した。金城画壇特別会員。29年帝展に入選。日本画

神山味會子・み江子 (かみやま・みえこ/1941年～)

千葉県生れ。1964年東京芸術大学美術学部芸術学科卒。70東京芸術大学美術学部彫刻科大学院了。73年第1回個展、以後個展にて作品発表。80年「陶彫展」「一陽会展」「ほとけの造形展」(現在まで)。96年富津市に審察(あながま)を築き六天窯工房を主宰。立体、陶彫

神谷万吉 (かみや・まんきち/1895～1969年)

愛知県生れ。岡田三郎助に師事。東京美術学校に学んだ。帝展、光風会展、太平洋画会展、槐樹社展などに出品。日本童画家協会や新興童画協会に参加し、児童雑誌「赤い

鳥」などに童画を掲載した。戦時中に鴨川市に移住し、鴨川文化協会など地域の活動にも参加した。1969年没、74歳。 **童画、洋画**

亀井玄兵衛・藤兵衛 (かめい・げんべい/1901～1977年)

和歌山県生れ。1919年山田耕齋師方に寄寓した。初め号藤兵衛を名乗り、53年玄兵衛に改めた。32年京都絵画専門学校卒、引続き研究科に入学した。早くより創作木版画を手がけ帝展、春陽会等に作品を発表。37～66年以降は専ら青竜社に作品を発表。50年社人、屢々受賞。50年同志と東方美術協会を創立。川端竜子に私淑し、師の作風でもあった豪快な画面に特色を示した。京都で没、75歳。 **日本画、版画**

亀倉雄策 (かめくら・ゆうさく/1915～1997年)

新潟県生れ。1933年日大二中卒、太田英茂主宰の共同広告事務所に勤務。38年日本工房に入社し、「NIPPON」や「カウパープ」など対外宣伝誌のアートディレクションを手がける。51年日宣美設立に参画。60年日本デザインセンター設立に参画し専務取締役。62年亀倉デザイン研究所を設立。朝日賞、毎日芸術賞をはじめとする内外の多くの賞を受賞。80年紫綬褒章、91年文化功労者。93年ニューヨークADCの“Hall of Fame”(殿堂)入りを果たし、94年ワルシャワ美術アカデミー初の名誉博士号を授かる。日本グラフィックデザイナー協会会長を78年設立時より16年務めた。代表作に、東京オリンピック、大阪万博、名古屋デザイン博、ヒロシマ・アピールズのポスターや、グッドデザイン、NTT、ニコン、ヤマギワのシンボルマーク・ロゴタイプがある。1997年没、82歳。 **グラフィック・デザイナー**

亀山知英 (かめやま・ともひで/1962年～)

群馬県生れ。1986年日本版画協会賞。88年創形美術学校卒。第56回日本版画協会展新人賞。95年パリ国際美術家会館滞在以来後滞仏。2000年パリ・ラ・ユヌ・ベルナール画廊にて個展。01年ニューヨークにて個展。現在パリ在住。 **版画**

鴨居 悠 (かめい・ゆう/1891～1949年)

日本の下着デザインの先駆者・鴨居羊子と、洋画家・鴨居玲の父。北松浦郡田平町出身。平戸藩士の末裔でもある。田平小学校卒業後、平戸猶興館をへて、熊本五高に進学。経済的な理由で退学を余儀なくされたが、その後京都大学英文科を卒業し、大阪毎日新

聞の記者として活躍。同社退職後は、北国新聞の主筆となり当時としては珍しい欧米特派員もつとめた。1949年没、58歳。 **デザイナー、ジャーナリスト**

蒲生羅漢 (かもう・らかん/1784～1866年)

1784年生れ。白河藩主松平定信に知遇を得て、谷文晁に師事し画技を磨く。1803年定信の命を受けて谷文晁を初め、岡本茲煇・星野文良・谷文一とともに「石山寺縁起絵巻」の模本製作および欠落した巻の補作を行った。大胆な筆致が特徴。白河藩が桑名に移封になっても白河に残り作画を続けた。弟子に佐竹永邨がいる。1866年没、80歳。 **南画**

鴨下晁湖 (かもした・ちようこ/1890～1967年)

東京生れ。松本楓湖の安雅堂画塾で歴史画を学び、巽画会に会員として出品。1907年文展で3等賞。15年文展に入選。31年帝展以降無鑑査出品。戦時中は茨城県常陸太田市に疎開。戦後、挿絵や装丁に従事し、出版美術家連盟会員。東京で没、77歳。 **日本画、版画、挿絵、装丁**

加守田章二 (かもだ・しょうじ/1933～1983年)

大阪生れ。京都市立美術大学工芸科陶磁器専攻に入学。富本憲吉、近藤悠三に師事。茨城県日立市の大甕陶苑を経て、栃木県の益子に移ったのち独立し、陶芸家としてデビュー。日本陶芸協会賞並びに高村光太郎賞を受賞。1969年から岩手遠野市で制作を始める。藝術選奨新人賞を受賞。1983年没、50歳。 **陶芸**

嘉本周石 (かもと・しゅうせき/1889～1976年)

出雲市生れ。島根師範学校卒業後、画家を志して上京。森琴石に学ぶ。1920年帝展に異例の2作品同時入選。翌年中国廬山や韓国に渡り、研鑽を深める。22年大阪で支那周70点展、34年東京で小原光雲挿花との共同展を催し、東西の画壇に広く認められた。40年梅田阪急百貨店での「嘉本周石近作日本画展」では三山(廬山・金剛山・富嶽)発表して好評を博した。この周石在阪25年間の活躍は、関西画壇で将来を囑望されたが、太平洋戦争激化のため、昭和20年日本南画院無鑑査の推挙を固辞し帰郷、大社町円山荘で南画家らしく、無欲枯淡の生涯を過した。1976年没、88歳。 **日本画、南画**

萱島鶴栖 (かやしま・かくせい/1827～1878年)

秋月藩士の家に生まれ萱島家を継いだ萱島鶴栖は、吉嗣梅仙とともにはじめ秋圃に師事し、独自の画法を求めていく。幕末期にあつて、太宰府に下向していた五卿らとも昵懇に交わったほか、近隣の神社に多くの絵馬を遺している。1878年没、51歳。江戸後期の絵師

柄澤 齊 (からさわ・ひとし/1950年～)

栃木県生れ。70年に日和崎尊夫の木口木版と出会い、氏に師事し、親交を深める。1971年創形美術学校版画科入学、74年同校研究科版画課程修了。75年に初個展、以来、木口木版を創造活動の中心に、版画の歴史や概念に対する鋭いまなざしで詩画集、装丁、コラージュ、オブジェ、絵画などへ表現領域を広げてきた。91年「柄澤齊木口木版画集1971-1991」刊行。1981年にスタートした木口木版による「肖像シリーズ」は2020年に50作に到達。06年栃木県立美術館、神奈川県立近代美術館鎌倉館で回顧展。(荒由)版画、装幀、オブジェ

唐杉庸平 (からすぎ・およし/1986年～)

富山県生れ。2011年東京造形大学美術学部造形学科絵画専攻領域卒。2012年「KONICAMINOLTA エコ&アートアワード」(コニカミノルタプラザ)。16年「TDW ART FAIR 2016」(東京デザイナーズウィーク内)。16年「Art Your Life`life&death`2016」(The Art Complex Center of Tokyo)。22年「ACT アート大賞展 2022」入選 (The Art Complex Center of Tokyo)。22年神奈川県美術展県立近代美術館賞。22年「Idemitsu Art Award2022」入選(国立新美術館)。現代美術、造形

河合英忠 (かわい・えいちゆう/1875～1921年)

東京生れ。浮世絵を右田年英に、歴史画を小堀鞆音(ともと)にまなぶ。1899年朝日新聞社に携わり、挿絵を担当。1913年文展に入選し、以後、文展、帝展に出品した。1921年没、47歳。日本画

河合榮之助 (かわい・えいのすけ/1893～1962年)

京都生れ。陶芸家初代瑞豊の四男。1921年京都市陶磁器試験場特別科卒。13年農商務省主催の「図案及び応用作品展」に入選。20年楠部弥弼らと赤土社を結成した。26年に

は聖徳太子奉賛展に入選、久邇宮家買い上げとなった。その後帝展、文展に出品、34年と40年の紀元 2600 年奉祝文展に出品、作品は宮内庁買い上げ、42年文展で特選、作品は政府買い上げ。戦後は日展に属し、52年審査員を務めた。1962年没、69歳。陶芸

川合喜二郎 (かわい・きじろう/1915?～1990年)

1915年生れ? 1931年国画会展に油彩画が入選。32年独立美術協会展、国画会展に出品。36年二科会に出品。42年二科会会友。版画は、37年国画展に木版が入選。38年に織田一磨らとまとめた版画集『むさしの風景』其の表紙絵・裏表紙絵を發表。戦後は、自由美術家協会の会員となり、64年には「主体美術協会」の創立に参加し、東京で没、75歳。洋画、版画

川合修二 (かわい・しゅうじ/1900～1987年)

岐阜県生れ。川合玉堂・富子(共に同墓)の次男。兄の川合真一(同墓)は化学者。1920年帝展初入選。27～34年帝展出品。37年より新文展無鑑査出品。玉堂作品『多摩の草屋』や俳句・和歌などの本の監修も行った。晩年は陶芸家として作品を残している。1987年没、87歳。日本画、陶芸

河合誓徳 (かわい・せいとく/1927～2010年)

大分県生れ。有田と京都で陶磁器の絵付けに従事した後1952年六代清水六兵衛に師事し、翌年、河合榮之助の後継者となった。77年日展で、特選・北斗賞、内閣総理大臣賞、日本芸術院賞等を受賞。2005年日本芸術院会員。64年頃、制作の主体を陶器から磁器に転換し、立体造形に重きを置いた陶彫的な作品や、独特の形の箱(=箱)や壺、陶板等に花卉や郷土大分の風景を鮮やかな発色で描いた独自の世界を築いた。2010年没、83歳。陶芸、立体

河合徳夫 (かわい・とくお/1956年～)

京都市生れ。河合誓徳の長男。1977年彫塑を山本格二に学び、81年父に師事し、陶芸の道に入る。84年から日展及び日本新工芸展等に出品し、93、2001年日展で特選、08年日展会員。日本新工芸展でも受賞を重ね、12年内閣総理大臣賞。13年日本新工芸家連盟理事に就任。磁器と陶器を制作するが、壺や陶板に表される花卉や鳥等の文様は、着色し

250

た磁土を用い浅いレリーフ状に表される。**陶芸**

川合小梅 (かわい・こうめ/1804～1889年)

和歌山県生れ。藩儒の川合豹蔵梅處の妻。野際白雪に師事したとされ、南画をよくした。特に花鳥、美人画を得意とした。当時の和歌山における女性画家の第一人者と称された。身の雑事を記した『小梅日記』でも知られる。1889年没、86歳。**南画**

川上拙以 (かわかみ・せつゐ/1901～1976年)

愛知県生れ。京都市立絵画専門学校卒。帝展、新文展にて出品、入選を重ね、戦後は日展に出品。主に、淡彩系の顔料で温和な筆致を特徴とした風景画や草花、動物の繊細な表現に秀でていた。代表作に『ぼくらのまへび(東京国立近代博物館蔵)』など。1976年没、75歳。**日本画**

川上澹堂 川上邦世 (かわかみ・たんだう・くによ/1886～1925年)

東京生れの彫刻家。川上冬崖の孫、弟は画家の川上涼花。1906年東京美術学校彫刻科選科卒。高村光雲に師事。07年第1回文展に出品。16年院展初入選し、戸張孤雁、中原悌二郎とともに院友推挙。18年院展試作展にて奨励賞。1925年没、39歳。弟子に中平四郎などがいる。(出典 わ眼)**彫刻**

川岸守哉 (かわぎし・もりや/1931年～)

石川県生れ。1952年金沢美術工芸短期大学日本画科卒。71年シェル美術賞展佳作。新制作展、圏展等に出品。現在、無所属。作品は神秘的でシュールな雰囲気を漂わせ、独自の心象風景を描く。**日本画**

川岸要吉 (かわぎし・ようきち/1931～2003年)

石川県生れ。1955年金沢大学教育学部を卒業し、都賀田勇馬に師事する。金沢市内の中学教諭を務めるかたわら制作活動を続け、67年東京教育大学芸術学科に内地留学し、木村珪二に学ぶ。61年日展入選、76、81年特選。日展会員。2003年まで金沢学院大学教授。2003年没、72歳。**彫塑、美教**

川北霞峰 (かわきた・かほほう?/1875～1940年)

京都生れ。幸野樸嶺、菊池芳文に師事。文展初期より帝展に亘つて出品し、第6回帝展には審査委員となつた。「晩秋」(第1回文展、3等)、「竹径春浅」(第2回文展、3等)、「浦の夕」(第3回文展、3等)、「溪間の秋」(第8回文展、3等)、「立川」(第9回文展、3等)、「海辺八題」(第10回文展、特選)、「吉野の奥」(第11回文展、特選)、「暮色」(第1回帝展)、「山寺の月」(第6回帝展)、「琵琶の音」(第13回帝展)等がある。又京都市立美術工芸学校に於て後進を指導。1940年没、66歳。**日本画、美教**

川北浩彦 (かわきた・ひろひこ/1962年～)

石川県生れる。父・良造に師事。1993年石川の伝統工芸展で入選。その後、同展や伝統工芸竹展等で受賞を重ね、2006年MOA岡田茂吉賞展で優秀賞。山中伝統の筋挽を巧みに応用した多辺挽で新境地を拓き、近年は素材そのものの量感を表現する形を求め、様々な器形と素材に挑んでいる。作家活動と平行して、木地師として漆芸作家の小森邦衛の仕事を請け負うほか、文化庁の木工芸の原材料に関わる調査協力、石川県挽物轆轤技術研修所での後進指導など、山中挽物を各方面から支えている。**木竹、人形、工芸**

川口月村 (かわぐち・げつそん/1845～1904年)

栃木県生れ。川口月嶺の長男。父に円山四条派をまなぶ。一時開拓使につとめたが、画業をつぎ、内国勸業博覧会、内国絵画共進会に入賞。1904年没、60歳。**日本画**

川口月嶺 (かわぐち・げつれい/1811～1871年)

秋田県生れ。1831年江戸で四条派の画人鈴木南嶺に師事。柴田是真とともに南嶺門下の双璧と称せられた。46年画業を伝え聞いた盛岡藩主南部利済により召抱えられた。その新鮮さとともに人々に受け入れられた。月嶺は次第に藩の中核的な画人となり、門下からは川口月村や船越月江などの多くの逸材が輩出した。1871年没、60歳。**江戸後期の絵師**

河口洋一郎 (かわぐち・よういちろう/1952年～)

鹿児島生れ。1976年九州芸術工科大学画像設計学科卒。78年東京教育大学大学院を修了。79年SIGGRAPHに参加。82年SIGGRAPHで河口が発表した自己増殖する造形理論である「グロースモデル(The GROWTH Model)」は世界中から集まったコンピュータ・グラフィック

ス関係者に絶賛。98年東京大学大学院工学系研究科・工学部人工物工学センター教授、2000年より東京大学大学院情報学環・学際情報学府教授。10年 SIGGRAPH で「ACM SIGGRAPH (英語版) Award : Distinguished Artist Award for Lifetime Achievement in Digital Art」受賞。18年デジタルコンテンツ協会会長。融合研究所会長。2023年文化功労者。**CGアーティスト**

川崎麻児 (かわさき・あさこ/1959年～)

東京生れ。1982年武蔵野美術大学日本画科卒。第14回改組日展で初入選(86、88年特選、96年会員)。89年文化庁芸術家在外研修員として渡伊。95年個展開催(2000年も開催)。97年山種美術館賞展で優秀賞第1席。2002年タカシマヤ美術賞。**日本画**

川崎正蔵 (かわさき・しょうぞう/1836～1912年)

川崎正蔵は(1896年)に第一線を引退してからの川崎は、造船事業家よりも美術収集家として社会的に有名であった。明治維新の後、日本の伝統的な美術品は欧米の美術愛好者のために輸出されることが多くなり、川崎は日本の美術品が国外へ流出することを恐れ、明治11年に築地造船所の経営に着手した頃から美術品を収集し始め、生涯にわたって2000余点の名品を買集めた。そして明治18年から着工した神戸・布引の本邸内に美術館を建て、収集した美術品を一般に公開した。その中でも、中国の元時代の名画で足利将軍家・織田信長・石山本願寺に伝来した顔輝作「寒山拾得二幅対」や、春日基光画「千手千眼観音」(いずれも後に国宝に指定された)は特に世間で有名であった。しかし、彼の収集した美術品の多くは、昭和2年の金融恐慌で川崎家が危機に陥った時に売却された。川崎は単なる美術収集家にとどまらず、自ら美術品の製作も行っている。明治33年にはパリ万国博覧会に大花瓶と大香炉を出品し、名誉大賞を獲得した。川崎はその後も七宝の名品を多く製作したが、1品も売却せず、「川崎の宝玉七宝」と名づけて美術愛好家に贈っていた。このパリ万国博覧会に出席するために、川崎は一族7人を引き連れてヨーロッパを巡遊し、イギリスの造船業と諸国の美術工芸を見てまわった。そしてこれが最後の社会的活動であった。その後は体調を崩し、健康回復を第一目標として、全国各地の別荘をめぐる「富豪の隠居」を行っていた。1912年没、76歳。**川崎造船所(現・川崎重工業)創業者、コレクター、川崎美術館(日本で最初の私立美術館)建設。貴族院議員。**

川崎朱三枝 (かわさき・すみえ/1939年～)

満州国奉天市生れ。1953年福岡県展入選。60年二紀会展入選。62年福岡教育大学美術科卒。56年西部女流美術朝日新聞金賞、北九州美術家連盟朝日準賞。78年二紀会同人推挙賞。80年二紀会選抜展佳作賞。84年川崎正弘と結婚(旧姓松尾から川崎となる)。87年炭鉱閉山のため愛知県名古屋市に転居。**洋画**

川崎麻央 (かわさき・まお/1987年～)

島根県生れ。2014年再興院展で初入選(21年特待)。16年石本正日本画大賞展で奨励賞。17年東京藝術大学大学院美術研究科博士後期課程日本画修了。18年初個展「川崎麻央日本画展」(日本橋三越本店開催。20年絵画の筑波賞展 2020で奨励賞、再興院展で第26回天心記念茨城賞・奨励賞。21年東山魁夷記念日経日本画大賞展入選。**日本画**

川崎美政 (かわさき・よしまさ/1807～1881年)

沼田月斎の門人。尾張藩士。作画期は安政から明治初期にかけてで、肉筆画を描いた。息子に川崎千虎がいる。1881年没、74歳。**江戸後期の浮世絵師、武士**

川島茂雄 (かわしま・しげお/1958年～)

東京生れ。1978年大分県別府職業訓練校に入学し、1年間竹工芸を学ぶ。卒業後、3年間、別府の岡崎竹邦齋に師事。1981年同校非常勤講師を務める。西部工芸展等に入選。後、神奈川県に転居し、1994年頃から竹の立体造形作品の制作に取り組み、割竹を紐で結束した大小の作品を国内外の個展や彫刻展で発表。1999年東京国際フォーラムで個展「NAN-O-TUBE」を開催。2001年頃からアメリカでの個展や現地制作等が活発となっている。**工芸**

川島 猛 (かわしま・たけし/1930年～)

高松市生れ。工業学校航空機科卒後、武蔵野美術学校油画科に学ぶ。読売アンデパンダン展等に出品を重ね、63年に渡米。以後、ニューヨークを活動の拠点として制作をつづける。象形文字を思わせる鮮やかな色面構成による作品を手がけ、ニューヨーク近代美術館の「1960年代の選抜コレクション」展に出品するなど高い評価を得た。**洋画**

川島睦郎 (かわしま・むつお/1940年～)

京都生れ。京都市立美術大学日本画専攻修了。1961年京都市立美術大学在学中に日展初入選。以降も出品を続ける。71、72年に日春展で日春宵を受賞。76年、78年には日展特選。86、96、2002年に日展審査員。79年京都・朝日画廊・セントラル美術館にて個展開催。83年東京・北辰画廊・京都・高島屋。89年、東京・三越／京都・高島屋。95年京都府企画展シリーズ(京都府立文化芸術会館)開催。し好評を得ている。日本画

川下靖彦 (かわしも・やすひこ/1967年～)

長崎市生れ。長崎大学教育学部美術科で絵画を井川惺亮氏に、トロンボーンを坂本辰則氏に、和声学と作曲法を原博氏にそれぞれ学ぶ。1988年日韓交流美術展参加。92年個展「SESSION」開催。93年枕崎ビエンナーレ「風の芸術展」入選、賞候補。94年長崎新美術展大賞。95年福岡現代美術集団 MJA 参加。96年デザイナー城谷耕生氏と大村市のモニュメント「KICHI」制作。載。平成11年(1999)福岡トロンボーンワークショップ参加。諫早交響楽団演奏会を指揮。西海町立西海北中学校教諭。洋画、音楽

河瀬秀治 (かわせ・ひではる/1840～1928年)

丹後の国生れ。旧宮津藩士。幕末の安政6年頃より、専ら国事に奔走。明治維新後は、県知事、県令を歴任。産業の振興に着目し、アメリカより農具を購入し、印旛県令時代には茶樹の栽培を奨励、群馬、入間両県では養蚕製糸の改良を図り、製糸工場を建設。1874年内務大丞。75年内務省博物館掛となって以来、内外の博覧会の事業、第1回勸業博覧会を企画。工芸美術の振興に尽し、岡倉天心、フェノロサらと共に明治の美術界に貢献した。大蔵、農商務大書記官を歴任し、80年渡欧、帰国後の81年退官。以後、実業界で活躍し、商業会議所の設立に参画。また「中外商業新報」を創刊し、富士製紙会社を創立した。1928年没、88歳。印旛県令、富士製紙創業者。内務省博物館掛。第1回勸業博覧会を企画。工芸美術の振興に尽し、岡倉天心、フェノロサらと共に明治の美術界に貢献した。

川瀬奮士 (かわせ・まろし/1941～2019年)

愛知県生れ。1961年陶磁器会社リタケの技芸科日本画部卒。67年今野忠一に師事。68年再興院展で入選(76年奨励賞、91年日本美術院賞、92年招待、00年同人)。97年再興院展で天心記念茨城賞。2019年没、77歳。日本画

川瀬伊人 (かわせ・よしひと/1973年～)

東京生れ。東京芸術大学在学中に安宅賞を受賞。2000年同学を卒業後、修士課程修了制作が同学買い上げとなり、修了模写が台東区買い上げとなる。03年より院展に出品。04年野村国際文化財団野村賞。05年東京芸術大学大学院を修了。各地で個展を開催。2008年院展で天心記念茨城賞を受賞。NHK大河ドラマ「風林火山」、「江」にて日本画制作及び指導を担当した。日本画

川田 幹 (かわだ・かん/1924～1999年)

東京生れ。1953年文化学院美術卒。洋画～版画へ。人間国宝であった芹沢銈介に師事し、型染絵を学び、後にその技法を用いて版画を制作した。63年ニューヨーク世界博、CWAJ 版画展に出品。73年日展特選。81年新日本工芸展で「北の海峡」が会員努力賞。82年「明日を開く日本新工芸」展優秀賞、日本テレビ賞、サンケイ新聞賞。1999年没、75歳。版画

河田小龍 (かわだ・しょうりょう、しょうりゅう/1824～1898年)

高知県生れ。土佐で南画家、島本蘭溪(しまもとらんけい)に師事したのち、京都に出て狩野英岳に狩野派を、中林竹洞に南画を学んだほか、アメリカから帰国した中浜万次郎(ジョン万次郎)の取り調べにあたり、その絵入りの記録『漂異紀畧』を記した。絵金とは師弟に近い関係にあり、芝居絵屏風も手掛けるなど、幅広い画風で知られる。端正で着実な筆致による人物画や、明治時代の土佐の風物を多く描いた。当時の高知にあって後進の育成にも尽力した。1898年没、74歳。日本画、儒家

川面 義雄 (かわづら・よしお/1880～1963年)

大分県生れ。1905年東京美術学校日本画科卒。08年審美書院に入り着色木版画を制作、また名品の復刻模写に従事。42～49年、54～63年徳川黎明会本「源氏物語」の着彩木版複製3巻を制作完成。53年文化財保護委員会から伝統技術保持者に選ばれた。59年複製木版技術の第一人者として紫綬褒章。1963年没、83歳。版画、復刻版画

川西英コレクション

神戸を拠点に活動した版画家の川西英(1894 - 1965)が収集した約 1,000 点の作品・資料群。独学の川西が私淑し、文通もしていた竹久夢二の作品・資料がその3分の1を占めています。恩地幸四郎、山本鼎、川上澄生などの創作版画のほか、村山知義、高見澤路直、ワルワール・ブブワのような前衛芸術家の版画作品をも含んでいます。国立京都近代美術館。[コレクター](#)、[版画](#)

河野太郎 (かわの・たろう/1907～2000年)

大分県生れ。1929年東京美術学校図画師範科卒。鹿児島県立女子師範学校や徳島県立女子師範学校で教鞭をとり、50年徳島大学学芸学部助教授(52年教授)。大学で後進の育成にあたるかわら主として東光会展に出品し、東光会委員や東光会徳島県支部長をつとめた。また地元美術界でも積極的に活動し、77年から4年間、徳島県美術家協会会長。戦後徳島の美術界に、強い存在感を示した作家のひとりである。2000年没、93歳。[洋画](#)、[美教](#)

河野棹舟 (かわの・とうしゅう/1868～1945年)

高知県生れ。はじめ宮田洞雪に学び、のちに京都に出て菊池芳文に学んだ。1892年の土佐品評会、94年の奈良博覧会、95年の第4回四国勸業博覧会、96年の日本絵画共進会に出品。帝国絵画協会、土陽美術会にも参加していた。1945年没、78歳。[日本画](#)

川畑春翠 (かわばた・しゅんすい/1882～没年不詳)

京都生れ。名は敬男。京美工卒。山元春拳の門人。大正9年インドに遊ぶ。[日本画](#)

河原 明 (かわはら・あきら/1948年～)

神奈川県生れ。1971年東京芸術大学美術学部彫刻科卒。73年東京芸術大学大学院美術研究科修了。71～77年新制作協会展(東京都美術館)。73、74年神奈川県美術展大賞・美術奨学会賞。1988 中之島緑道彫刻コンペで入賞(大阪府)。90年富士見町国際彫刻シンポジウム(長野県)。[彫刻](#)

河原修平 (かわはら・しゅうへい/1915～1974年)

倉敷市生れ。1933年上京、川端画学校、太平洋美術学校に学ぶ。34年太平洋画会展、東光会展に入選。37年東光会展でY氏奨励賞。37年新文展に入選。38年東光賞、40年東

光会会友、42年会員。47年佐藤一章絵画研究所で指導にあたるとともに自ら倉敷素描研究所を開設する。56年燈灰会を主宰。人物、風景、静物など幅広い画題に取り組み、とりわけ自画像を多く残している。1974年没、59歳。[洋画](#)、[美研](#)

河原大輔 (かわはら・だいすけ/1921～2006年)

東京生れ。父茂郷は日本画家。1947年東京美術学校彫刻科卒。福岡県立三潴高校に勤務。同58年頃に彫刻から洋画に転向。63年県立修猷館高校に赴任し、以後16年間、美術の指導に力を注ぐ。79年同校退職後は福岡美術研究所所長や九州産業大学芸術学部非常勤講師をつとめる。また71年瑠璃会を結成、同会と個展で発表を続ける。簡素化したフォルムを淡い色彩でまとめた廃船の連作をはじめ、暖かな色調の風景や花などを描いた。2006年没、85歳。[洋画](#)、[彫刻](#)、[美教](#)

川原田徹 (かわはらだ・とおる/1944年～)

鹿児島県生れ。東京大学文学部美術史専修課程中退。1979年サンシャイン版画版種別グランプリ展銅版画大賞。80年第2回北九州絵画ビエンナーレ優秀賞。81年西武美術館版画大賞展優秀賞。かぼちゃ、貝殻、樹木等を素材に生物学的空想世界を描き出す。トナス・カボチャラダムスと改名。2002年カボチャドキヤ国立美術館の館長。[版画](#)、[洋画](#)、[美術館長](#)

河原美比古 (かわはら・よしひこ/1948年～)

福岡県生れ。1972年東京芸術大学彫刻科を卒業。同校大学院を経て、75年九州産業大学に赴任。73年新制作協会展に入選。83年新制作協会新作家賞、85年会員。素材の木の存在感を活かしつつ、風景を連想させるような抽象作品を発表。[彫刻](#)、[木彫](#)、[美教](#)

河辺華拳 (かわべ・かきよ/1844～1928年)

河辺華陰の長男。父に教を受け後土佐、狩野、南宋の各派を研鑽して一家を成し、人物画を得意とした。森寛斎始め知名の士と交友。京都画学校に出入。1928年没、85歳。[江戸後期の絵師](#)

川辺忠孝 (かわべ・ちゅうこう/1929～2021年)

富山県生れ。1952年金沢美術工芸短期大学卒。54年西山翠嶂塾に入門。63年創造展
碧月賞、66年会員努力賞、1905年会員賞、98年審査員賞、99年創造美術会賞。そのほか
サロン・ド・パリなど国際展で受賞を重ねる。創造美術会会員。2021年没、92歳。日本画

川又常行 (かわまた つねゆき/1677～没年不詳)

新潟県生れ。宝永-寛保(かんぽう)(1704-44)のころ肉筆美人画をえかく。作品に「聞香美人」
など。江戸中期の浮世絵師、川又派の祖

川村雨谷 (かわむら・うこく/1838～1906年)

江戸生れ。1865年長崎奉行支配定役となり、在任中に木下逸雲、鉄翁祖門に文人画を
まなぶ。69年刑部省につとめ、大審院判事にすすむ。98年退官後は、文人画界の重鎮と
して活躍。1906年没、69歳。日本画

川村嘉久 (かわむら・かきゅう/1910～2010年)

石川県生れ。1929年石川県立工業学校図案絵画科卒。43年京都市展に入選。戦後高
光一也に師事。47年日展入選、以降72年まで出品。55年光風会会友、60年会員推挙。初
期は裏通りやひなびた街角を描き、近年は朝市で働く人々をテーマとする。2010年没、100
歳。洋画

河村熹太郎 (かわむら・きたろう/1899～1966年)

京都生れ。河村蜻山の弟。生家は京都の陶業家。1919年楠部弥次郎と赤土社を創立、
新陶芸運動をおこす。27年帝展に入選。35年高村豊周らの実在工芸美術会創立に参加、
同人となる。12年新文展特選。新文展・日展審査員。36年鎌倉に窯をうつす。1966年没、
66歳。陶芸

河村若芝 (かわむら・じゃくし/1638～1707年)

佐賀県生れ。長崎へ出て逸然に師事し、写生的な花鳥画、肖像画を描き、長崎漢画派の
基礎を築く。香炉、花瓶、刀剣装飾の金工にもすぐれ、人物、山水、竜虎、獅子などの図柄を
精巧に鏤金(るきん)した「若芝鐔」で人気を得た。主要作品「達磨図」「道者超元像」「布袋渡
河之図」。長崎県で没、69歳。江戸前期の絵師、長崎派、金工、漢画派(本宗画派)

河村清司 (かわむら・せいじ/1902～1995年)

大分県生れ。1919年香川県立高松工芸学校鍛金科卒。ロダンに憧れて21年から朝倉彫
塑塾の門下生となり、東京美術学校金工科に学ぶ。24年帝展に初入選以降、帝展、文展の
彫塑、工芸の両部門で活躍。36年には帝展無鑑査。戦後は、埼玉県美術協会創立に尽力
し、晩年は鹿児島県指宿市に居を移した。1995年没、93歳。彫刻、工芸

川村文鳳 (かわむら・ぶんぽう/1779～1821年)

岸駒に師事。岸駒門下でも最古参の有力門人であったと考えられる。岸駒のほか諸家
に出入りして、呉春をはじめ円山四条派の画風など江戸後期京都画壇の諸傾向を融合さ
せた独自の画風を確立した。本画の遺作はあまり多く確認されていないが、版本には『文
鳳鹿画』(寛政12年序)、『文鳳漢画』(『漢画指南』享和3(1803)年刊)、『文鳳画譜』(文化
10(1813)年刊)、『文鳳山水遺稿』(『文鳳山水画譜』(文政7(1824)年刊)が知られ、当時こ
あつてはかなり有力な画人であったことが推測される。1821年没、42歳。江戸後期の絵師、
版画

300

川村曼舟 (かわむら・まんしゅう/1880～1942年)

京都生れ。山元春挙に師事する。1916、17年文展で特選。のち文展、帝展の審査員、芸
術院会員。京都市立絵画専門学校(現京都市立芸大)教授、校長をつとめた。1942年没、63
歳。日本画、美教

河村李軒 (かわむら・りけん/1896～1953年)

徳島県生れ。1918年京都で池田春渚、のち甲斐虎山に学ぶ。20年から別府に居住。2
4年日本南画院に入選。28年帝展に「飛瀑」、30年帝展に「湯壑」が入選。36年日本南画院
院友。第1次、第2次県美協で活躍した。1953年没、57歳。南画

河本一男 (かわもと・かずお/1906～1962年)

松山市生れ。1925年朝鮮美術展で特選。27年東京に出て太平洋画研究所で中村不折
に師事。27年最年少で帝展に入選。29年太平洋画会準会員。以後松山に住み、玩具店を
営みながら製作活動が続ける。二科展に二度入選、42年以降創元会に所属。46年愛媛美

術協会の創設、運営に参画。51同会役員四七名と連結脱退、愛媛美術連盟を結成、52年合体して愛媛県美術会を結成。その間愛媛美術会の紛糾収拾に尽力する。53年から県美術会の理事長を勤め、現在の県展盛況の基盤を築く。彼の画風は清新な写実、その穏健着実な人柄とともに、後進に慕われながら、1962年没、57歳。洋画

川本末雄 (かわもと・すえお/1907～1982年)

熊本県生れ。1933年東京美術学校日本画科卒。美術学校卒業後、初め松岡映丘に師事し、39年山口蓬春に師事。36～44年東京文京区の京北中学校に勤務。48年日展に入選。49年日展特選、53年特選・白寿賞・朝倉賞。58年日展審査員を務め、59年同会員となる。71年日展で「新秋譜」が文部大臣賞。76年日本芸術院賞恩賜賞。68年日展評議員、77年理事、82年参事。54年以降現代日本美術展にもしばしば出品し、80年東大寺の昭和の大納経で揮毫を行った。97年熊本県近代文化功労者。1982年没、75歳。日本画、美教

河本 正 (かわもと・ただし/1922～2014年)

兵庫県出身。当初、川端龍子の青龍社に所属。青龍社展及び春季青龍社展で、計27回の入選を重ねるなど活躍を示していた。龍子の没後、青龍社が解散し、以降は日府展に参加。日府展賞、(児玉)三鈴賞などの受賞歴を持ち、社団法人日本画府副理事長を務める。1993年頃に当会を退会。風景画を中心に、霧、朝もやなどの細やかな表現で、幻想感漂う絵画世界を展開している。2014年没、92歳。日本画

河本真里 (かわもと・まり/1990年～)

愛知県生れ。2013年再興院展で入選。(15年院友、16年第22回天心記念茨城賞、奨励賞)。16年愛知県立芸術大学大学院博士前期課程日本画領域修了、修了模写「千手観音像」が大学買上げ、愛知県立芸術大学非常勤講師。17年「MITSUKOSHI ART RESORT 河本真里特集」(日本橋三越、東京)、個展(TSUKI ART GALLERY、東京)開催。日本画

川原井正 (かわらい・ただし/1906～2008年)

茨城県生れ。1924年川端画学校を経て、26年本郷絵画研究所に移り、岡田三郎助に師事。春台展にも数回出品した。31年古典協会の会員となり青山研究所で制作を続け、新宿三越等での協会展に出品。39年進藤章らと「菁々会」を結成。戦後は、絵筆を断ち、友人の

経営するメーターなどをつくる計器製造会社に勤めた。68年役員定年で63歳退職。69年自宅に事務所を置き、進藤章、葛西康と3人で「菁々会」を復活。2008年没、103歳。洋画

河原侃二 (かわら・かんじ/1897～没年不詳)

兵庫県生れ。洋画家を志して本郷洋画研究所で学ぶが途中でやめ、女子文壇社、報知新聞社の記者となる。俳優を志し、新劇団、築地小劇場、第二次芸術座などを経て、1926年高松プロに入社し時代劇に出演。「黄門漫遊記」では主演に。翌年松竹蒲田へ移り主演級の役が続く。戦後は東宝を経て、47年大映に入り、66年頃まで活躍した。俳優、版画

菅 一郎 (かん・いちろう/1894～1975年)

大分県生れ。1912年、大分中学校を卒業後上京。19年、同郷の先輩、片岡角太郎(彫刻家)の家に寄宿しながら川端画学校に通い、また片多徳郎宅へ出入りする。21年帝展で入選、特選。その後たびたび同展に出品し、37年以降の新文展では無鑑査。26年～42年佐伯中学校の図画教師として郷里の美術教育に貢献した。1975年没、81歳。洋画、美教

岸 岱 (がんだい/1782、1785?～1865年)

岸派の祖である駒の長子。画を父に学び、鳥獣を得意とした。1809年父岸駒と共に金沢に来て、前年の金沢城大火の修復で、城内二ノ丸殿の障屏画を描いている。従五位越前守に叙され、父と同じく有栖川家御用人であった。1865年没。江戸後期の岸派の絵師

神田一明 (かんだ・かずあき/1934～2024年)

東京生れ。神田日勝の兄。1959年東京芸大油画科卒。62・64年行動美術新人賞。65年全道展会員。71年行動美術賞。73年行動美術会友賞、会員推挙。77・78年安井賞展。85年具象絵画ビエンナーレ展。(收藏)北海道立旭川美術館、荒井記念館(木田金次郎美術館)。行動美術協会会員、北海道教育大学旭川校教授。2014年没、89歳。洋画、美教

神田周三 (かんだ・しゅうぞう/1894～1972年)

広島県生れ。中村不折、石井柏亭に師事。二科展創立展入選。広島美術院展審査員、一水会会員。37年ヘレン・ケラーの肖像画を描く。西観音寺町で被爆。多数厚塗りマチエール力強い筆致 生命感溢れる。1972年没、78歳。洋画

神田千里 (かんだ・せんり/1920～1999年)

大分県生れ。戦後、独学で油彩画の制作を開始。1952年自由美術協会展に出品。61年自由美術協会会員。スミレ会、大分前衛美術会、七人の会、潮流の会等に話題作を出品。大分県立芸術短期大学、別府大学等で教壇に立ち、後進の育成に尽力。92年大分県美術協会名誉会員。1999年没、79歳。洋画

神足高雲・守周 (かんだり・こううん/生没年不詳)

狩野探幽にまなび、久隅守景(もりかみげ)、鶴沢探山、桃田柳栄(りゅうえい)とともに探幽門下の四天王と称された。寛文(1661-73)のころに活躍。出羽(でわ)米沢藩(山形県)藩主上杉家につかえた。江戸前期の絵師

菅野 猛 (かんの・たけし/1963年～)

福島県生れ。1989年芝浦工業大学院建築工学修了。清水文夫アーキテクトにてプロダクトデザイン。1990年メーカー店舗制作、博覧会制作業務、インテリアデザイン。鉄工所、木工所工房にて制作。96年彫刻家篠田守男に師事。ストライプハウスギャラリー中心に個展で彫刻を発表。彫刻、インスタ

菅野 廉 (かんの・れん/1889～1988年)

宮城県生れ。1910年宮城県師範学校卒。1915年東京美術学校卒。戦前は二科で、戦後は河北美術展などで活躍した。35年河北美術展で河北賞。「蔵王の画家」と呼ばれる。64年宮城県芸術協会の創設に参加。84年宮城県美術館で菅野廉展を開催。1988年没、99歳。洋画

神戸武志 (かんばん・たけし/1832～2015年)

津市生れ。1955年東京教育大学教育学部芸術学科卒。56年再興院展で入選。61年S.A.S.(彫刻作家集団)に出品しS.A.S.賞。63～68年新樹会展に出品。64年国画会彫刻部創立に参加し第38回国展に出品。67年埼玉大学教育学部講師(69年助教授)。78年筑波大学芸術学系助教授(79年教授、96年退官)。2015年没、83歳。彫刻、美術

き

喜井黄羊 (きい・こうよう/1901～1997年)

徳島県生れ。関西芸術院を卒業後、1932年矢野鉄山に師事し、南画を学ぶ。新文展、日展などに出品する。大阪美術協会常任委員監査、吹田市美術家連盟役員、吹田市展審査員、大阪美術家協会委員。文部大臣賞、大阪府芸術文化功労賞、吹田市文化賞。紺綬褒章。由岐町名誉町民。富岡鉄斎の流派を受け継いだ日本画家。1997年没、96歳。日本画

祇園尚濂 (ぎおん・しょうれん/1713～1792年)

京都生れ。祇園南海の次男。紀伊和歌山藩士。38歳のとき不行跡を理由に城下を追われ、13年後に帰参、55歳で藩の儒官となる。漢詩と梅の水墨画をよくした。1792年没、79歳。江戸中期の儒者、水墨

祇園南海 (ぎおん・なんかみ/1676～1751年)

江戸生れ。祇園尚濂の父。木下順庵に師事。22歳で紀伊和歌山藩儒官となるが、放蕩無頼のため10年間城下追放。のち朝鮮通信使接待役、藩校講釈場の主長となる。文人画の先駆者のひとり。和歌山県で没、76歳。江戸前-中期の漢詩人、絵師、文人

鬼海弘雄 (きかい・ひろお/1945～2020年)

山形県生れ。法政大学卒業後、トラック運転手、造船所工員、など様々な職業を経ながら写真を始める。1973年より浅草寺で人物写真を撮り始め、45年にわたって続いた。APA賞特選、日本写真協会新人賞、伊奈信男賞、「写真の会」賞。写真集として『INDIA』(1992年、みすず書房)、『東京迷路』(1999年、小学館)などを上梓。2004年写真集『PERSONA』(ペルソナ)で土門拳賞。20年東川賞飛騨野数右衛門賞。東京で没、75歳。写真

菊川英山 (きくかわ・えいざん/1787～1867年)

江戸生れ。狩野派絵師の門人であった父や四条派の鈴木南嶺に絵を学び、友人であった魚屋北溪を通して、葛飾派(北斎派)の画風も習得した。美人画の妙手で、喜多川歌麿や鳥文斎栄之の次世代を担う美人画絵師の一翼として活躍。菊川派の祖となり、多くの門人を育成。1867年没、80歳。江戸後期の浮世絵師、菊川派の祖

菊川三織子 (きくかわ・みおこ/1944年～)

北海道生れ。1965年堅山南風に師事、再興院展で初入選(74年奨励賞、91年特待、93年招待、95年同人、2000年文部大臣賞、04年内閣総理大臣賞)。95年再興院展で天心記念茨城賞。埼玉県で没、77歳。日本画

菊田伊洲 (きくた・いしゅう/1791～1853年)

宮城県生れ。仙台藩の絵師菊田家をつぎ、狩野伊川にまなび、谷文晁とまじわる。東東洋、小池曲江(きよくこう)、菅井梅閑(すがい ばい かん)とともに仙台四大画家といわれる。1853年没、62歳。江戸後期の絵師

菊川英山 (きくかわ・えいざん/1787～1867年)

江戸生れ。鈴木南嶺(なんれい)に四条派をまなぶ。葛飾北斎、喜多川歌麿らの影響も受け、菊川派を形成。美人画を得意とした。蘇州版画の影響を受ける。1867年没、81歳。作品に「江都砂子香具屋八景」など。江戸後期の浮世絵師、菊川派を形成

菊沢武江 (きくざわ・ぶこう/1882～1975年)

埼玉県生れ。20歳頃寺崎広業門下の展覧会を見て画家にあこがれる。商売を学びながら深夜に絵の勉強。その後、人力車夫などをして生活費を稼ぎ、東京美術学校卒業(席次2番)。1915年文展入選。29年帝展で特選。その後帝展無鑑査となり帝展委員。1975年没、93歳。日本画

菊竹清文 (きくたけ・きよゆき/1944年～)

福岡県生れ。中央大学理工学部精密機械学科卒。「人間・自然・技術」を一体化した情報彫刻の制作。東京国立近代美術館賞、京都国立近代美術館賞、1985年にはフランス政府

から芸術文化勲章シュヴァリエ(騎士)章。98年の冬季オリンピック長野大会の聖火台を製作。94年F1レーサーのアイルトン・セナ追悼モニュメントを製作、ブラジルのセナ邸に設置。91年にボルドー湖畔に設置したフランス革命200周年記念モニュメント【La Paix (平和)】(Photo.2)は2000年に改めてボルドー市の文化ランドマークに選ばれ、夜間ライトアップなど環境整備がなされている。彫刻、デザイン、聖火台

菊池華秋 (きくち・かしゅう/1889～1946年)

山形県生れ。はじめ黒木華卿のち川合玉堂に師事。1914年文展に入選、以後第12回文展まで毎回入選。帝展には21年から入選を重ね、27年回帝展で特選、31年帝展推薦。35年第一部会の結成に実行委員。1946年没、57歳。日本画

菊池幸樹 (きくち・こうじゅ/1925年～没年不詳)

福島県生れ。1950年東京美術学校油画科卒。当時結成間もない前衛絵画運動団体のデモクラート美術協会に参加。前衛絵画を手がけた。この会が6年で解散。以降無所属、個展を中心に制作発表。洋画、デモクラート

菊池五郎 (きくち・ごろう/1885～1950年)

水戸市生れ。1911年東京美術学校西洋画科卒。東京、向島の水戸徳川邸内にアトリエを設け制作。23年関東大震災でアトリエ焼失、水戸に帰る。24年白牙会創立、24年白牙会展を水戸商工会議所で開催、出品。戦前、旧制水戸高等学校の講師、47年茨城県立美術館事務嘱託、翌年館長。1950年没、65歳。洋画、美教、美術館長、白牙会創立

菊池信介 (きくち・しんすけ/1963年～)

青森市生れ。1982年鎌倉学園高等学校卒。87年愛知県立芸術大学絵画専攻入学。福島県美術科中学教員。2005年ノブズ大賞入選・浅井慎平特別賞。2009年銀座で個展。神保町の檜画廊で個展。現代美術、洋画、立体、美教

菊池素空 (きくち・そくう/1873～1922年)

京都生れ。詩人菊池三溪の養子。京都画学校卒。幸野楳嶺に師事、四条派を学ぶ。浅井忠の後を継いで京都国立陶器試験場長になり、京都の陶磁器業の発達に貢献した。欧州歴

遊後、京都高等工芸学校講師。木製人形制作普及。1922年没、49歳。日本画、陶芸、美教、人形

菊池素香・文次郎（きくち・そこう、ぶんじろう/1852～1935年）

岩手県生れ。地元の画家、菊池黙堂に南画(文人画)を学び、その後、黙堂の師であった橋本雪蕉のもとに通い学んでいる。1884年内国絵画共進会に入選。92年「東京勸業博覧会」で入賞。素香から絵を学んだと伝えられているのが、船越靈戒と萬鉄五郎である。1935年没、84歳。日本画

菊池隆志（きくち・たかし/1911～1982年）

京都生れ。菊池契月の次男。菊池一雄の弟。1928年よりつづけて帝展に入選、34年特選。48年山本丘人らと創造美術を結成。以後、新制作協会、創画会などで活躍した。1982年没、71歳。作品に「雲」「交響詩画―嵐の海」など。日本画

菊池鑄太郎（きくち・ちゅうたろう/1859～1944年）

江戸生れ。はじめ洋画家・国沢新九郎の画塾に学ぶ。1876年工部美術学校の彫刻学科に入学し、イタリア人彫刻家ラゲールに師事。82年に同校を卒業。彫刻家として89年明治美術会の創立に参画。95年同会展で展覧会委員。96年黒田清輝・久米桂一郎ら新派の芸術家たちと白馬会を設立主要同人として活躍、白馬会第1回展では「久米民之助氏之像」を出展。98年白馬会研究所開設に伴い、1年間自宅を提供。1909年日英博覧会の開催にあたり、久米らとともに渡欧。我が国における洋風彫刻の先駆者の一人であり、肖像や塑像を得意としたが、晩年は石膏を用いた複製作りを専らとした。1944年没、85歳。洋風彫刻の先駆者、彫刻、白馬会研究所開設(自宅提供)

菊池黙堂（きくち・もくどう/1835～1899年）

岩手県生れ。花巻出身の橋本雪蕉に絵を学んだ。黙堂の号は雪蕉の号の一つであり、雅号をいだけたほどその画才を高評価されていた。1877年の雪蕉没後、未亡人のますを引き取り実母のごとく尽くしたとされている。松山市で没、64歳。日本画

聴濤襄治（きくなみ・じょうじ/1923～2008年）

兵庫県生れ。1943年小磯良平に師事。57年行動美術協会会友。55年ニュージオメリックアートグループの結成に参加。行動美術展において吉原治良の目に留まり、66年「具体美術協会」会員。67年空間から環境へ展に松田豊・今井祝雄と共に出展。70年日本万国博覧会みどり館での具体グループ展示に出展。最後の具体美術展である第21回展まで連続出展、環境芸術に関連した展覧会に出展。オブ・アート(錯視や視覚の原理を利用した作品)に取り組んだ。2008年没、85歳。具体、環境芸術、立体、オブ・アート

岸 映子（きし・えいこ/1948年～）

奈良県生れ。1985年滴翠美術館附属陶芸研究所専攻科修了。個展、グループ展;2010年セーブル国立陶磁器美術館(フランス)、2011年京都文化博物館、13年「Japanese Ceramics and Bamboo Art」ボストン美術館(アメリカ)に出品。99年ファエンツァ国際陶芸展銀賞。2013年京都工芸美術作家協会展文部大臣賞。収蔵：台北県立鶯歌陶磁博物館(台湾)、ヴィクトリア・アンド・アルバート美術館(イギリス)、ボストン美術館(アメリカ)。陶磁、立体、ウイーン幻想派

岸 光景（きし・こうけい/1839～1922年）

江戸生れ。父にまなび、土佐派、琳派の影響も受ける。内務省、大蔵省の製図掛、図案の改良にあたる。石川県や京都などの陶業・漆業地で図案を指導し、香川県に工芸学校を設立するなど、美術工芸の振興につくした。皇室技芸員。1922年没、84歳。図案、工芸学校設立、美教

岸浪百草居（きしなみ・ひやくそうきょ/1889～1952年）

群馬県生れ。南画家であった父・岸浪柳溪や、近代南画のリーダーの小室翠雲に学び、大正から昭和の文展、帝展、日本南画院展などで活躍。戦中・戦後には、三越百貨店美術部で何回か個展を開催。檜山義夫との共著で挿絵を提供。病に倒れ、《魚類図鑑 海魚の部》に引き続いて昭和天皇に献上する予定であった《淡水魚の部》については完成させることができず。1952年没、63歳。日本画、南画、挿絵

岸浪柳溪（きしなみ・りゅうけい/1855～1935年）

江戸生れ。1865年父に従い仙台へ赴き、藩の絵所、東東菜に入門し絵を学ぶ。70年大

江戸の画家福島柳圃に入門。72年足利の画家田崎草雲に入門。81年内国勸業博覧会に出品。82年竜池会、内国絵画共進会に出品。91年金沢で画業に専念。97年頃から北陸絵画共進会の若手作家の指導。以後全国絵画共進会や日本美術協会展、日本画会に出品を続ける。1916年帝室技芸員に推挙、辞退。1935年没、81歳。日本画

崖 南嶠 (きし・なんきょう/1769～1834年)

和歌山県生れ。紀伊藩の儒学者である崖熊野(1734～1813)の甥。後に熊野の養子となり、儒学者を継ぐ。野呂介石(1747～1828)や菅茶山(1748～1827)、古賀精里(1750～1817)など著名な文人とも交流があったようです。南嶠の絵には、当時流行した沈南蘋の影響を受ける。1834年没、65歳。江戸後期の絵師

岸野 香 (きしの・かおり/1966年～)

栃木県生れ。1989年女子美術大学芸術学部絵画科日本画専攻卒。92年東京芸術大学大学院美術研究科保存修復技術日本画修了。東京芸術大学美術学部日本画専攻助手、文星芸術大学美術学部美術学科日本画専攻助教授を経て、2008年女子美術大学芸術学部美術学科日本画専攻准教授、15年同教授。日本美術院同人。09、10年日本美術院賞<大観賞>。日本画、美教

北井 一夫 (きたい・かずお/1944年～)

中国生れ。1965年日本大学芸術学部写真学科中退。65年『抵抗』(未来社)を自費出版。69年成田空港建設に反対する三里塚の農民を取材、72年写真集『三里塚』(のら社)にて日本写真協会新人賞。76年『アサヒカメラ』誌に連載したシリーズで木村伊兵衛写真賞。主な展覧会に「タイムトンネルシリーズ Vol.20 北井一夫〈時代と写真のカタチ〉」(ガーデン・ガーデン、2004年)、「いつか見た風景」(東京都写真美術館、2012年)など。主な写真集に『村へ』(淡交社、1980年)、『1970年代 NIPPON』(冬青社、2001年)、『流れ雲旅』(ワイズ出版、2016年)、『過激派の時代』(平凡社、2020年)など。写真

北尾重政 (きたお・しげまさ/1739～1820年)

江戸生れ。家業の絵本や鳥居派などの画法を参考に、独学にて浮世絵を描き北尾派を創始。18世紀後半～19世紀初期において勝川春章・鳥居清長らと共に並び称された人気

絵師。1776年勝川春章と競作で『青楼美人合姿鏡』を刊行、その後、絵本に専念。理知的な美人画を得意、艶姿な女性を描いた春画作品にも秀作を残した。門人に北尾政美・北尾政演・窪俊満などを輩出。1820年没、81歳。江戸中、後期の浮世絵師、北尾派の祖、絵本

北尾政演・山東京伝・北尾葎齋政演 (きたお・まさのぶ/1761～1816年)

浮世絵師としては山東京伝、北尾政演(きたお・まさのぶ)として1789年まで活動。作画期は安永7年ころから文化12年前後(1778～1815年)であった。寛政の改革における出版統制により手鎖の処罰を受けた。銀座に喫煙用の小物販売店「京屋」を開き、自分がデザインした紙製煙草入れが大流行。1816年没、55歳。江戸後期の浮世絵師、紙製煙草入、戯作者

北尾政美・鋏形蕙齋 (きたお・まさよし/1764～1824年)

浮世絵師・北尾重政の門人。黄表紙や洒落本等の版本挿絵を多く描き、錦絵では浮絵や武者絵を手がけた。また北齋に先行して略画や鳥瞰図を描いたことが知られ、『略画式』などの略画絵本、江戸鳥瞰図をのこしている。1794寛政六年(1794)に津山藩の御用絵師となり、97年以降は鋏形蕙齋と改名し、肉筆画を描いた。1824年没、61歳。江戸中-後期の絵師、挿絵、浮世絵師、挿絵、絵本

喜田華堂 (きだ・かどう/1802～1879年)

岐阜県生れ。京都にてで岸派の岸駒、岸岱にまなぶ。嘉永年間に名古屋で絵師を開業、尾張名古屋藩にまねかれて御用絵師となった。1879年没、78歳。作品に「青坂山妙心寺縁起」。1879年没、77歳。江戸後期-明治時代の絵師

北上聖牛 (きたがみ・せいぎゅう/1891～1970年)

北海道生れ。北上峻山の甥。京都に出て竹内栖鳳に師事し、写実的な花鳥画を得意とした。文展・帝展入選。戦後は個展を中心に活躍した。1970年没、79歳。日本画

北川 薫 (きたがわ・かおる/1917～1987年)

石川県生れ。1938年上京して石彫家八柳五兵衛の門に入り、のち松村外次郎に師事。46年二科展に入選。51年二紀会彫刻部新設と同時に出品、55年奨励賞、61、62年同人努力賞、69年文部大臣奨励賞。二紀会委員。1987年没、70歳。彫刻

喜多川相説 (きたがわ・そうせつ/生没年不詳)

作品に記されている落款から、喜多川姓を名のっていたこと、72歳以上の高齢まで存命し、制作活動を行った。「法橋」の位に叙せられていること、作品に相説の款記と宗雪と記された印を用いているところから、俵屋宗雪の正当な弟子の一人と考えられ、宗雪没後の画房の中心の絵師。宗雪没後前田家の御用絵師として活躍。作風は、紙本で墨と淡彩を主調とし、宗雪と比較すると淡白で平板な趣である。江戸前期、琳派の絵師

喜多川月麿・菊麿 (きたがわ・つきまろ/生没年不詳)

寛政より文化文政の人。歌麿の門人。喜多川菊麿。後、月麿と改める。江戸馬喰町に住む。文化中、小伝馬町麿新道に住し家守となる。板刻の草双紙あり。文政以後は観雪と称して版画を廃す。江戸後期の浮世絵師、板刻

北川太郎 (きたがわ・たろう/1976年～)

兵庫県生れ。金沢美術工芸大学彫刻専攻卒、愛知県立芸術大学大学院彫刻専攻修了。文化庁新進芸術家在外研修(3年派遣員)により南米に派遣。2011年資生堂や朝日新聞、野村財団の協賛や助成を受け、ペルー共和国の首都リマにあるペドロ・デ・オスマ博物館(スペイン語版)で個展を開催。2000年アートタウン三好彫刻フェスタ 特選。03年キリンアートコンクール大賞。05年あまがさき平和モニュメントデザインコンペ 優秀賞。彫刻

北川宏人 (きたがわ・ひろと/1967年～)

滋賀県生れ。1989年金沢美術工芸大学卒、マリノ・マリーニなどの当時のイタリア具象彫刻家に憧れ渡伊。アカデミア美術学院ミラノ校とカラーラ校で学び、テラコッタの古典的彫刻技法を習得。帰国後一貫してテラコッタを使用した彫刻を制作。金沢21世紀美術館のコレクション展に出展するなど原始素材である土の素材感にアクリル絵具で生彩を与え、現代に生きる人間像を表現。彫刻、テラコッタ

喜多川藤麿・紅霞斎藤麿 (きたがわ・ふじまろ/生没年不詳)

喜多川歌麿の門人。数多くの画号をもっていたが、肉筆美人画の落款は、大半が「藤麿」であった。錦絵や版本の挿絵はほとんど見られないが、寛政-文政期(1789年-1830年)にか

けて、肉筆美人画の制作で活躍した。その画風は、師の歌麿風に追従せず、独自の雰囲気をも出している。歌麿弟子入り以前は南画を学んでいたと思われ、他にも窪俊満や歌川豊春との関係や、芸術を愛好した狂歌師らとの交流も指摘されている。寛政から文化頃に肉筆画の秀作がある。版画作品は少ない。江戸後期の浮世絵師

喜多元規 (きた・げんき/生没年不詳)

薩摩又は肥前生れ。鉄牛道機について黄檗(おうぼく)宗をおさめ、喜多宗雲、陳賢に画技をまなぶ。承応(じょうおう)-元禄(げんろく)(1652-1704)のころ長崎を中心に京都、江戸などで活動。黄檗宗の僧の肖像を陰影法で写實的にえがいた。江戸前期の画家、黄檗派

北沢収治 (きたざわ・しゅうじ/1890～1960年)

長野県生れ。1897年横浜商業学校に入学。1912年石版画師の細井種生に師事して版画技法を学んだ。16年日本水彩展に入選、17年二科展に油彩が入選。17年日本創作版画協会展に出品。20年木曾の福島小学校に赴任、長野県内で長年教職。28年松本昇、向坂次郎、中西義男らと淡交会を結成。31年日本創作版画協会が改組され日本版画協会になった際には創立会員に加わり、春陽会にも出品。戦後は版画制作からは遠ざかった。1960年没、70歳。版画、洋画、水彩、美教

北島勝永 (きたじま・かつなが/1795～1867年)

福岡県生れ。柳川藩士の家に生まれる。1802年から絵の修行を始め、最初の14年間は久留米藩の三谷永錫、博多の眠蝶齋耕景、大坂の森周峰ら狩野派の絵師に学ぶ。その後の6年間は細川藩の矢野良勝に学び、雲谷派の画法に大きな影響を受けた。二大流派を学んだうえに独自の画風を確立し、柳川藩の御用絵師として活躍。1867年没、72歳。江戸後期の絵師

喜多宗雲 (きた・そうん/生没年不詳)

1655～73年に活躍した黄檗派の画家。肖像画が多く、人物は隠元隆崎や木庵性瑠など比較的初期の来朝黄檗僧(→黄檗宗)に限定。濃淡による陰影を施した写實的作風、同一画題を同一構図で描いたものが多い。部分的に特殊な絵具による油彩技法を使用。主要作品に『隠元倚騎獅像』。江戸前期に活躍した黄檗派の絵師

装填

喜多武清 (きた・たけきよ/1776～1857年)

江戸生れ。谷文晁の画塾写山楼に入門。1796年『集古十種』編纂のために文晁とともに関西に遊歴し古社寺の宝物を調査・模写。狩野派や琳派を研究しその構図を冊子にした『武清縮図』を遺す。読本の挿絵を多く手がけて美人画や摺物、画譜も描いた。狩野派とりわけ狩野探幽を敬慕し、花鳥図・山水図を得意とした。渡辺崋山や曲亭馬琴、大田南畝、鋏形蕙斎らと交友した。1887年没、81歳。江戸後期の南画家、挿絵

喜谷繁暉 (きたに・しげき/1929～2009年)

兵庫県生れ、1952年京都市立美術大学卒。元具体美術協会会員(1965-1968年)、作品は芦屋市立美術館収蔵。2009年没、80歳。洋画、具体

北野等永 (きたの・とうえい/1839～1915年)

福岡県生れ。北島勝永の二男。万延元年に北野甫哉の養子となって北野姓を継いだため、勝永と姓が異なる。柳河藩分限帳に等永の藩への出任が確認される。また、北野家に伝来する史料の中に、藩用とされる粉本がある。1915年没、77歳。幕末-明治期の絵師

北原義雄 (きたはら・よしお/1896～1985年)

福岡県生れ。北原白秋の実弟(4男)。旧制麻布中学校卒。1924年義兄である洋画家・山本鼎の企画のもと、美術雑誌『アトリエ』を創刊し、アトリエ社を創立。1925年ゴッホ、ルノワール、セザンヌらの画集を刊行、西洋美術画集、油彩、水彩、パステルなどの各種技法書、個人作家画集など多くの美術書を編集、出版。戦後の1951年アトリエ社を復活し『アトリエ』を復刊。同誌は『みづゑ』や『中央美術』と並ぶ美術専門雑誌として作家を啓発するところが大きく、また、同社は美術書を専門とする出版社として確かな位置を占めた。1985年没、89歳。出版人、美術雑誌『アトリエ』を創刊し、美術出版社アトリエ社を創立

北村さゆり (きたむら・さゆり/1960年～)

静岡県生れ。1986年多摩美術大学絵画科日本画専攻卒。88年同大学大学院研究科修了。85年創画展入選。2006年度文化庁新進芸術家国内研修員。17年『中世ふしぎ絵巻』ウエッジ(文/西山克、画/北村さゆり)出版、18年造本装幀コンクールで受賞。日本画、挿絵、

喜多村豊景 (きたむら・とよかげ/1842～1888年)

1842年生れ。喜多村邦毅の次男で水溜米室の門人。伊勢の人、明治期に伊勢音頭を題材にした錦絵など描いている。1888年没、47歳。門人に端館紫川がいる。江戸後期-明治期の伊勢国の浮世絵師、錦絵

喜多村麦子 (きたむら・ばくし/1899～1986年)

名古屋生れ。森村宜稲に日本画の手ほどきを受ける。京都市立絵画専門学校別科卒。京都時代に土田麦僊と知り合う。第7回帝展入選後、4年連続入選。1986年没、87歳。日本画

北山寒巖 (きたやま・かんがん/生没年不詳)

江戸生れ。長崎の帰化人の末裔。父の道良(北山太郎)に絵を学び、漢画を描いた。寒巖は、幕府の与力となるが、蘭学者と交流し洋風画も描いた。江戸参府のオランダ人にオランダ語と洋画を学び、樊尼亀(ヴァン・ダイク)という名を与えられたと伝えられている。平賀源内の門人森島中良の『コンストン動物図譜』や『万国新話』のなかにも挿図を描いた。谷文晁は、西洋画の技法を寒巖とともに学び吸収したといわれる。江戸後期の絵師、洋風画

50

北山清太郎 (きたやま・せいじろう/1888～1945年)

和歌山県生れ。日本水彩画会大阪支部代表、日本洋画協会を設立し美術雑誌を発刊、展覧会を開催。美術の世界を離れ、アニメの世界に転向、北山映画製作所を設立。1945年没、57歳。アニメ、水彩、雑誌編集、北山映画製作所を設立、下川凹天、幸内純一と並び称せられる「日本初のアニメーション作家」のひとり。

吉山明兆 (きちざん・みんちょう/1352～1431年)

兵庫県生れ。京都伏見の東福寺に参禅し、大道一以の下で嗣法、また画を学ぶ。宋の羅漢画の名手李竜眠に学び、東福寺専属の画僧として活躍。生涯仏殿の管理役(殿主)であった、兆殿主、または兆殿司と称された。画法は、4代足利義持將軍から画賛される画力の持ち主。主に、仏像、羅漢、涅槃などの仏画、寒山拾得などの人物画に優れている。代表作十

六羅漢図(国宝指定)、「聖一國師像」、「四十八祖像」。1431年没、79歳。室町時代の画僧

帝展に入選。22年東京美術学校彫刻科卒。卒業制作が文部省買上げ。1927年中華民国雲南省立美術専門学校教授。29年に帰国。29年岩手県商工館金工部長。30年帝展に《自像》を出品。31年柳宗悦の東北民芸調査に同行。以後、たびたび柳の調査に協力。53年柳宗悦、バーナード・リーチの東北地方民芸調査の案内を務める。79年「彫刻70年の足跡—吉川保正展」が盛岡で開催される。盛岡で没、91歳。彫刻、美教

吉山明兆 (きつさん・みんちょう/1352~1431年)

兵庫県生れ。諱(いみな)は吉山。別号は破草鞋(はそうあひ)。大道一以の法弟として東福寺に在る。殿司(でんす)職になつたので兆殿司と称される。宋・元の画風を学んで独得な強い筆致と濃い色彩とを調和させた仏画画風を形成。また絵仏師の立場ではあつたが、水墨山水画をも描いていたと考えられている。代表作に「五百羅漢図」「涅槃図」など。1431年没、80歳。室町時代前・中期の臨済宗の画僧、仏画、水墨、山水

木寺 轍 (きでら・わたち/生誕年不詳~1954年)

長崎県生れ。1929年上京し、30二科に入選、後、二科会会友。鈴木信太郎に私淑し、戦時中に長崎や佐世保に移住して個展を開いた。終戦後は二紀会に出品。東京にて没。洋画

貴道草衣 (きどう・そうい/1899~1984年)

京都生れ。京都市立美術工芸学校絵画科を中退し、1918年山元春挙に師事。春挙の没後は川村曼舟に学ぶ。その後再び京都市立絵画専門学校に入学し、26年同校を卒業。19年帝展に入選し、以後昭和40年まで官展に入選を重ねた。後年は無所属。1984年没、85歳。日本画

木戸 修 (きど・おさむ/1950年~)

石川県生れ。1976年東京藝術大学大学院美術研究科彫刻専攻修了。修了制作展でサロン・ド・ブランタン賞。79年二科展で二科賞、83年ヘンリー・ムア大賞展優秀賞。ステンレスなどを素材とし、スパイラルと題したねじれの構造に新しい感覚を感じさせる。彫刻

木戸龍一 (きど・りゅういち/1937年~)

福岡市生れ。修猷館高校を経て、1960年福岡学芸大学美術科卒。76、77年現代日本美術展に、79年ヘンリー・ムア大賞展に出品、81年びわこ現代彫刻展で優秀賞。数多くの個展やグループ展でも、抽象彫刻の発表を続ける。他に、「炭鉱犠牲者復権の像」や「中野正剛氏」等の具象彫刻によるモニュメントも数多く手がける。九州造形短大学長や福岡県美術協会理事長を歴任し、福岡の美術文化の発展に大きく寄与した。2005年度福岡市文化賞。彫刻、木彫、美教

衣笠豪谷 (きぬがさ・ごうこく/1850~1897年)

倉敷市生れ。詩画を石川晃山に学ぶ。江戸に出て、画を佐竹永海及び松山延洲に学ぶ。京都では、中西耕石を訪ねて画の研究。1873~76年絵画研究のため清国に渡つたが、養鶏法の勉強、政府の勸農局、内務省、農商務省に勤務する一方、『清国式解卵図解』を著し、新しい孵卵法の普及。耐火煉瓦の研究、水蜜桃の栽培など大陸の産業をわが国に移植。1881年内国勸業博覧会に出品。82年絵画共進会では、漢画南宗派の部門で帆足杏雨らとともに褒状。退官後は、南画、山水画を制作。1897年没、47歳。日本画、南画

木内 岬 (きのうち・みさき/1920~2001年)

東京生れ。木内克の長男。1943年帝国美術学校本科彫刻科卒、第6回新文展で入選。48年自由美術家協会彫刻部の創立に参加。49年美術団体連合展に出品。70年武蔵野美術大学彫刻学科主任教授(90年退官)。73年新樹会展に出品(以後76年第30回展まで出品)。81年日本橋高島屋で個展開催。2001年没、81歳。彫刻、美教

木之下晃 (きのした・あきら/1936~2015年)

長野県生れ。日本福祉大学卒。中日新聞社、博報堂を経て、1973年フリーランスの写真家。71年『音楽家~音と人との対話~』(私家版、1970年)により日本写真協会新人賞。86年『世界の音楽家』(全3巻、小学館、1984年)により芸術選奨文部大臣賞。2005年日本写真協会賞作家賞。06年紺綬褒章。08年新日鉄音楽賞・特別賞。10年「木之下晃アーカイヴス」を設立。09年日本福祉大学客員教授。2015年没、79歳。写真

木下逸雲 (きのした・いつうん/1800~1866年)

肥前長崎の人。はじめ石崎融思に師事、来日した清(しん)(中国)の江稼圃(こうかぼ)に文

人画をまなぶ。山水、花鳥画を得意とし、長崎文人画の三筆のひとり。1866年没、67歳。江戸後期の絵師

木下応受 (きのした・おうじゅ/1777～1815年)

1777年生れ。円山応挙の次男。円山応震の父。母方の祖父木下萱斎の養子となって木下家をつぐ。父の画風をうけついで一家をなし、長沢蘆雪(ろせつ)、森徹山らとともに応挙門の十哲と称された。1815年没、39歳。江戸後期の絵師

木下泰嘉 (きのした・たいか/1957年～)

広島市生れ。1980年創形美術学校版画科卒。81年創形美術学校 研究科版画課程終了。93年文化庁芸術家国内研究員(木版の道具研究)。91年版画「期待の新人作家」大賞展(新宿伊勢丹)買い上げ賞。94年ひろしま美術大賞展 優秀賞(ひろしま福屋)。2001年第2回飛騨高山現代木版画ビエンナーレ(高山市)奨励賞。あおもり版画トリエンナーレ 2001(青森市)東奥日報社賞。版画

木下千春 (きのした・ちはる/1972年～)

北海道生れ。1995年武蔵野美術大学造形学部空間演出デザイン学科卒。2000年東京藝術大学大学院美術研究科修士課程修了、再興第85回院展で入選(2021年招待)。09年初個展「木下千春展」(みゆき画廊)。19年再興院展で日本美術院賞、第25回天心記念茨城賞。2020年再興院展で日本美術院賞。日本画

木下 春 (きのした・はる/1892～1973年)

福島町(現福島市)生れ。19年前田青邨に師事、20年第7回院展に「秋草」が初入選。以後、院展に出品、院展特待となる。また、俳人富安風生に師事、俳句を詠んだ。生涯独身で過ごし、73年療養先の福島で没、享年81歳。(佐)日本画

北井一夫 (きたい・かずお/1944年～)

満州生れ。日本大学芸術学部写真学科中退。『三里塚』『村へ』『いつか見た風景』『フナバシストーリー』『1990年代北京』などドキュメンタリー的な写真を撮影、発表。1972年日本写

真協会新人賞。76年木村伊兵衛写真賞。2013年、日本写真協会作家賞。出版物は膨大、2020年に平凡社より『過激派の時代』も発刊。個展も多数開催。写真

北尾重政 (きたお・しげまさ/1739～1820年)

江戸の人。北尾派の祖。独学で鳥居清満、鈴木春信らの画風を学び、一派を樹立。絵本さし絵を多く描き、美人画、風景画にすぐれる。俳諧、書道もよくした。1820年没、81歳。江戸中期の浮世絵師、北尾派の祖北尾派の祖、絵本、挿絵

喜多川式麿 (きたがわ・しきまろ/生没年不詳)

歌麿門人で、文化期に活躍。俗称東海林平次右衛門といひ、小石川水道端天神下に住す。錦画有り。文化年中没す(故法室本写本)。月麿門人説もあり。晩年の歌麿風の美人画を描く。江戸中期の浮世絵師

喜多川相説 (きたがわ・そうせつ/生没年不詳)

俵屋宗達、俵屋宗雪とおなじ「伊年(いねん)」印をもちい、宗達の後継者とつたえられる。遺作の落款によれば、法橋(ほっきょう)となり、72歳で存命。代表作に「四季草花図屏風(びょうぶ)」(根津美術館)。江戸前期の絵師、琳派

北川太郎 (きたがわ・たろう/1976年～)

兵庫県生れ。2000年金沢美術工芸大学美術工芸学部美術科彫刻専攻卒。07年愛知県立芸術大学大学院美術研究科(彫刻領域)修了。07～10年文化庁新進芸術家海外研修員(3年派遣)、ペルー(クスコ)。23年文化庁新進芸術家海外研修員(短期派遣)、イタリア(カッラー)。主な個展に2000年オスマ美術館(ペルー)、19年奈義町現代美術館(岡山)、20年高梁市成羽美術館、21年ときわミュージアム(山口)。(引用 ときの忘れもの)彫刻

喜多元規 (きた・げんき/1652～1704年)

江戸時代前期、承応～元禄期(1652～1704)頃に活躍した黄檗派を代表する画家。黄檗僧(→黄檗宗)や檀越(だんおつ。施主)らの肖像画、他宗の僧の肖像画など数多くの作品を残した。『長崎先民伝』によれば、南蛮絵(洋風画)にも長じていたとある、純粋な洋風画の遺作はなく、写實的描法による黄檗画像のなかにも油彩技法の使用を部分的にのみ。主要

作品に『隠元隆琦画像』(萬福寺)、『即非如一画像』(同)などがある。1704年没、52歳。江戸前期の絵師、黄檗派

北島勝永 (きたがわ・かつなが/1795～1867年)

福岡県生れ。柳川藩士の家に生まれる。1802年から絵の修行を始め、最初の14年間は久留米藩の三谷永錫、博多の眠蝶齋耕景、大坂の森周峰ら狩野派の絵師に学ぶ。その後の6年間は細川藩の矢野良勝に学び、雲谷派の画法に大きな影響を受けた。二大流派を学んだうえに独自の画風を確立し、柳川藩の御用絵師として活躍。1867年没、72歳。江戸後期の絵師

北川北斗 (きたがわ・ほくと/1931～2006年)

高松市生れ。東京藝術大学と武蔵野美術大学で学び、画家として様々な展覧会に出品。1960年一陽会展で一陽賞。以後一陽会常任理事として積極的な創作活動を展開。主な出品歴は、第13回、第18回安井賞、第11回日本国際美術展など。その功績は彫刻の森美術館、池田二十世紀美術館、香川県文化会館などに収蔵。2006年没、78歳。洋画

樹田紅陽・初代・国太郎 (きだ・こうよう I /1889～1958年)

小学卒業後、渡辺伝吉氏の門に入り1912独立創業。女子美術学校講師。東京市博覧会出品作「太平洋の怒涛」が知られる。岸本景春氏と交誼。渡辺同門に箸尾清氏。当時の写実的刺繍の隆盛のなかで育ち、「琳派」の意匠や昭和初期の工芸美発揚の意匠をもって衣装や調度品の刺繍制作をする。1958年没、69歳。意匠、刺繍

樹田紅陽・二世(国蔵) (きだ・こうよう II /1917～1987年)

小学校卒業後、祖父のもとで修業。戦中、戦後の困窮期をしのび、復興とともに和装の製造卸業を営む。50歳で工芸公募展に発表し始めたころ病をえる。以後闘病とともに刺繍指導、デザイン等に余生を尽くす。1987年没、70歳。刺繍

樹田紅陽・三世(きだ・こうよう III /1948年～)

京都生れ。祖父は初代樹田紅陽(国太郎)。1971年京都市立芸術大学美術学部西洋画科卒業。父、国蔵に師事。73年美村元一に師事。75年間所素基

に師事。80年東大寺昭和大納経櫃覆刺繍制作。90年祇園祭保昌山胴掛類復原刺繍制作、以降現在まで保昌山胴掛や船鉾の水引の復元・修理、函谷鉾天井幕の新調に携わる。2001年伝統文化賞(財団法人民族衣装文化普及協会)。05年国立京都迎賓館 大晩餐室几帳野筋刺繍制作。18年奈良国立博物館「糸のみほとけ展」に技法解説資料展示等に協力、京都府匠会会員。京都祇園祭山鉾連合会・調査員。(社)文化財保存修復学会会員。刺繍

北濱 淳 (きたはま・じゅん/1918～1995年)

石川県生れ。1943年石川師範学校研究科修了。中村研一・高光一也に師事。34年金城画壇展初入選。49年日展初入選、61年特選。47年光風会展入選、以後連続入選。金沢大学教育学部教授。日展会友。1995年没、77歳。洋画、美教

北原鹿次郎 (きたはら・しかじろう/1892～1939年)

福岡県生れ。1912年県立中学伝習館卒業後、東京美術学校彫刻科木彫部に入学、高村光雲に師事する。卒業後、助手、講師を経て、22年から東京高等工芸学校工芸彫刻部助教授。21年以降帝展に同23年以降院展に数回入選。38年北京師範大学教頭として北京へ赴任、北京で没、47歳。彫刻、木彫、美教

北原千鹿 (きたはら・せんろく/1887～1951年)

高松市生れ。1911年東京美術学校彫金科卒、1914年より21年まで東京府立工芸学校の教諭。27、28年帝展に続けて特選、30年推薦となつた。31年以来、帝展、文展、日展の審査員、49年日展参事。一方、昭和27年より日本美術協会展の審査員をも長くつとめた。戦後49年4月母校香川県立工芸学校復興のため小倉右一郎校長の懇望により帰郷、若い後進の指導に2年間当つた。彫金の大家として、一種稚拙味のある技法から高雅な匂いを漂わせる数々の名品を生んだ。又、大正末から昭和初めにかけて新工芸研究会「无型」の同人として活躍し、別に工人社を創めて彫金界の有力な新人作家を誘導育成した。高松市で没、64歳。彫金

北原龍太郎 (きたはら・りゅうたろう/1932～2013年)

長野県生れ。飯田高校を卒業後、関西大学に進学。哲学・美学を学び、大阪心斎橋美術

研修所で研修を重ね講師を勤めた後、画家として独立する。1970年フランス留学を経て、現代洋画「人気作家選抜66人展」へ招待出品。72年フランス・ル・サロンに入選、無鑑査会員。以降、国内外問わず精力的に創作活動に励み、数々の賞を受賞。2013年没、81歳。
洋画

喜多武清 (きた・ぶせい/1776～1857年)

江戸の人。谷文晁にまなび、花鳥画、人物画を得意。読み本の挿絵、美人画をえがき、古画の鑑定、模写もおこなった。作品に山東京伝の「優曇華(うどんげ)物語」の挿絵、画集に「扇面画譜」など。1857年没、81歳。
江戸後期の絵師、挿絵

北村明道 (きたむら・あきみち/1896～1962年)

高崎市生れ。1927年帝展に入選、28年入選。以後帝展、文展、戦後は日展に出品をつづけていた。日月社の委員で、また郷里の群馬県美術運営委員。中国に2回旅行し、歴史、風俗研究に興味をもっていた。代表作に日蓮上人一代絵巻がある。1962年没、66歳。
日本画

きたやま ようこ (きたやま・ようこ/1949年～)

東京生れ。文化学院芸術科卒。「ゆうたくんちのいばりいぬ」シリーズ(あかね書房刊)で講談社出版文化賞絵本賞、『りっぱな犬になる方法』(理論社)で産経児童出版文化賞推薦、路傍の石幼少年文学賞、『じんぺいの絵日記』(あかね書房)で路傍の石幼少年文学賞、『いぬうえくとくまざわくん5 いぬうえくんがわすれたこと』(あかね書房)で産経児童出版文化賞産経新聞社賞。
絵本

木塚忠広 (きづか・ただひろ/1948年～)

福岡県生れ。1971年九州産業大学芸術学部卒。76年「スイッチ・オブ・テン」(サン画廊/福岡市)に出品。77年「ゾディアック」結成に参加、77年から翌年にかまけて4回連続出品。78年「<存在・意識>」展を始め、一連の久留米展(石橋美術館)に出品。78年「版画教室」(IAF芸術研究室)の活動に加わり、翌年「現代美術研究会」を発案。82年「芸術機能展」(福岡市美術館)、84、85年「多数多様態展」(ギャラリーおいしほか)、84年「スクランブル・プラン」(福岡アパート/福岡市)に出品。86年「多様性の構築・展」(石橋美術館)を企画、出品。

87年「ARTIST'S NETWORK EXPANDED」に出品。90年「ミュージアム・シティ・天神」に出品。絵画空間の虚構性を意識した平面・立体作品を制作。久留米市で「PAF 絵画教室」を主宰。
現代美術、版画、立体

吉山明兆 (きつさん・みんちょう/1352～1431年)

淡路国(兵庫県)生れ。東福寺永明門派大道一以の門下で画法を学んだ。大道一以に付き従い東福寺に入る。初の寺院専属の画家として大成した。作風は、北宋の李竜眠や元代の仏画を下敷きにしつつ、輪郭線の形態の面白さを強調し、後の日本絵画史に大きな影響を与えた。第4代将軍・足利義持からもその画法を愛されている。東福寺には、『聖一国師像』や『四十祖像』、『寒山拾得図』、『十六羅漢図』、『大涅槃図』など。東福寺の仏画工房は以前から影響力を持っていた。明兆以後は東福寺系以外の寺院からも注文が来る。禅宗系仏画の中心的存在。工房は明兆没後も弟子達によって受け継がれ、明兆画風も他派の寺院にも広まって、室町時代の仏画の大きな流れとなってゆく。弟子に霊彩、赤脚子など。壁画の名手。1431年没、80歳。
室町時代前・中期の臨済宗の画僧、室町のアッシギヤルド、壁画

木戸龍一 (きど・りゅういち/1937年～)

福岡市生れ。修猷館高校を経て、1960年福岡学芸大学美術科卒。76、77年現代日本美術展に、79年ヘンリー・ムーア大賞展に出品、81年びわこ現代彫刻展で優秀賞。数多くの個展やグループ展でも、抽象彫刻の発表。他に、「炭鉱犠牲者復権の像」や「中野正剛氏」等の具象彫刻によるモニュメントも数多く手がける。また九州造形短大学長や福岡県美術協会理事長を歴任し、福岡の美術文化の発展に大きく寄与した。2005年度福岡市文化賞受賞。
彫刻、大学長

木内 岬 (きのうち・みさき/1920～2001年)

東京生れ。1943年帝国美術学校本科彫刻科卒。第6回新文展で初入選。48年自由美術家協会彫刻部の創立に参加。49年美術団体連合展に出品、以後各展に出品。70～90年武蔵野美術大学彫刻学科主任教授。73～76年新樹会展に出品。81年日本橋高島屋で個展。2001年没、81歳。
彫刻、美教

木下 章 (きのした・あきら/1927～2017年)

大分県生れ。1952年京都市立美術専門学校卒。上村松篁、奥村厚一に師事。59年～新制作春季日本画展で、春季展賞。1963年京都市立芸術大学助教授。79年には、同校教授。78年日田市より特別功労賞。フレスコ壁画の研究でも知られる。74年にはフレスコ壁画模写展を東京、京都で開催。2017年没、90歳。日本画、フレスコ、美教

木下逸雲 (きのした・いつうん/1800～1866年)

1800年生れ。画は、はじめ唐絵目利の石崎融思に学び、来舶清人の江稼圃・張秋穀からは南画の技法を修めた。その後も清人陳逸舟、徐雨亭にその画風を学んだ。さらに雪舟、狩野派・大和絵・円山四条派などの諸派や西洋画の画法を熱心に研究し、様々な技法を取り入れた。画僧鉄翁祖門と画を共に学び生涯の友となった。逸雲は筆が早く、遅筆の鉄翁と対極をなした。田能村竹田・頼山陽・広瀬淡窓など文人と交わった。1866年没、66歳。江戸後期の長崎の南画、南宗画派(文人画派)、鉄翁祖門・三浦梧門と共に長崎三大作家

木下 繁 (きのした・しげる/1908～1988年)

和歌山県生れ。1933年東京美術学校彫刻科卒。建昌大夢・清水多嘉示に師事。30年帝展初入選。以降新文展・日展に出品を続け、38、39年新文展特選。49、51年日展特選、69年文部大臣賞。一貫して裸婦を制作する。芸術院会員、日展常務理事。1988年没、80歳。彫刻、水彩、デッサン

木下千春 (きのした・ちはる/1972年～)

北海道生れ。1995年武蔵野美術大学造形学部空間演出デザイン学科卒。2000年東京藝術大学大学院美術研究科修士課程修了、再興第85回院展で初入選(2021年招待)。09年初個展「木下千春展」(みゆき画廊)開催。19年再興院展で日本美術院賞、天心記念茨城賞。20年院展で日本美術院賞。日本画

木下 春 (きのした・はる/(1892～1973年)

福島市生れ。福島高等女学校卒。1911年ころ佐々木杏雲堂平塚分院で療養中、前田青邨に出会った。治癒後帰郷し、本間国生に短期間師事、19年に上京して青邨の内弟子となった。20年院展に入選、のちに院展特待。21年蒼空邦画会展に入選。48年俳誌「若葉」の同人。68年『木下春句集』刊行。1973年没、81歳。日本画、俳人

紀 広成・山脇東暉 (きの・ひろなり・やまわき・とうき/1777～1839年)

京都の人。松村月溪に入門し、四条派の画風をまなぶ。人物花鳥画を得意としたが、師の没後は仏画をこころざした。1839年没、63歳。江戸後期の絵師

木伏大助 (きぶし・たいすけ/1969年～)

新潟県生れ。現在宮城県大和町に在住。知的障害をもつが、家庭や施設で幼い頃から絵に親しむ。ポスターや看板を記憶で描き、特に映画ポスターに強い関心をもつ。2005年「日常の冒険者たち」(国立民族学博物館)、2006年「記憶の物語」(もうひとつの美術館)等に出品。ポスター、洋画

木水育男 (きみず・いくお/1919～1997年)

福井県生れ。長い期間、美術教師として児童画の研究を続けた人物です。福井師範学校に入学し、美術の世界に入ります。その後、教職に就いた育男は、日本で初めて子どもたちに「自由な生き生きとした絵」を描かせることをモットーに、絵画の指導にあたりました。育男が指導した児童画は数々の賞を受賞、育男の指導スタイルが全国的に広まり、久保貞次郎の創造美育運動を牽引して、福井の美術教育に多大な影響を与えた教育者。福井瑛丸の会を主導。1997年没、78歳。創美、美教、版画

金 昌永 (キム・チャンヨン/1957年～)

韓国大邱市生れ。1982年来日後、。日本の抽象芸術の草分けとして活躍した斉藤義重に出会い、砂を用いた作品制作。87年現代日本美術展で受賞。99年銀座 西村画廊で個展。洋画

木村雨山 (きむら・うざん/1891～1977年)

金沢市生れ。1905年高等小学校を卒業後、当時名人といわれた加賀友禅染色家の上村雲嶂に師事、日本画を大西金陽に学んだ。23年独立し、以来加賀友禅の制作ひとすじに打込んだ。28年帝展に入選し、以後帝展、日展、日本伝統工芸展などで活躍した。55年友禅の部で重要無形文化財技術保持者(人間国宝)に認定、染色界での第1人者と評価された。65年紫綬褒章。76年勲三等瑞宝賞。その作品は日本画の技法を生かし、描線を自由に表

現し、彩色では片刷毛を使ったボカシに工夫をみせるなど、京友禅と異なった加賀友禅独自の作風を展開した。1977年没、86歳。染色

木村伊兵衛 (きむら・いへい/1901~1974年)

東京生れ。1924年日暮里に営業写真館を開業、かたわらアマチュア写真家として活動。30年花王石鹼広告部に嘱託として入社し商業写真を始める。30年ドイツ製小型カメラ(ライカA型)を入手、これをきっかけにスナップ・ショットで市井の人々の姿を記録し、日本の写真に新しい表現を切り開いた第一人者となる。32年伊奈信男、野島康三らとともに写真同人誌《光画》に参画。《日本工房》《中央工房》を拠点に報道で写真家としても精力的に活動。戦中は、東方社で日本の対外宣伝雑誌(FRONT)の写真を担当した。戦後は、カメラ雑誌をはじめ幅広く活動、代表的なシリーズに《秋田》《街角で》などがある。初代日本写真家協会会長。1974年没、73歳。1975年に木村伊兵衛賞(朝日新聞社主催)が設立され、日本の写真家の登竜門となる。1974年没、73歳。写真

木村磐男 (きむら・いわお/生没年不詳)

太平洋画会展1921、1925年に出品。第9回二科美術展覧会、1922年に出品。パリの風景(1930年)油彩。「南仏カーニュ、アルプスを望む」1928-29(昭和3-4)年頃。岡山県ゆかりの作家。洋画

100

木村雲溪 (きむら・うんけい/1829~1880年)

尾張(おわり)名古屋の人。野村玉溪について四条派の絵をまなび、写生画をよくする。1877年東京勸業大博覧会に「菜蔬聚集」「朝顔に小犬」を出品して注目。1880年没、52歳。幕末-明治時代の絵師

木村嘉平・3代 房義 (きむら・かへい III/1823~1886年)

文字の生動をもよく再現する筆意彫りで知られ、薩摩、加賀両藩版や、薩摩藩の木活字、鉛活字の制作も行った。刻本には、2代(1840)の市河米庵『墨場必携』(1836)、『江戸名所図会』松平冠山序や、3代の『小山林堂書画文房図録』(1848)など多数。特に米庵の書は、そのほとんどに刀をふるったという。1886年没、63歳。字彫り木版画、初代は山台生れ。1786年江戸に出て版木彫刻、1823年没。2代は京都生れ、五代まで続く。木版

木村華邦 (きむら・かほう/1903~1982年)

茨城県生れ。1920年上京し、関田華亭に花鳥画を学ぶ。21年日本南画会に初出品。22年松林桂月の天香画塾に入門。23年茨城美術展に初出品。48年日本水墨画創立展に出品。65年日本南画院評議員(67年理事、71年常任委員)。69年水墨画研究グループ黒曜会を主宰。71年関東水墨画研究会を主宰。神奈川県で没、79歳。南画

木村杏園 (きむら・きょうえん/1885~1957年)

金沢市生れ。染色家木村雨山の兄にあたる。初め金沢の南画家大西金陽について学び、1920年頃から京都に出て橋本関雪に師事。後中国に游学、南画の研鑽に努め、水墨、淡彩による山水花鳥を得意とした。22年帝展に発表して以来、帝展、日本南画院展、聖徳太子展その他に入選を続け、日展創設後は同展に作品を出品。また日本名勝絵百図を制作発表し、黄檗山万福寺方丈広間の襖絵「瀟湘八景」等の大作もある。京都で没、72歳。日本画、水墨

木村珪二 (きむら・けいじ/1904~1981年)

兵庫県生れ。1927年東京美術学校彫刻科本科塑造部卒。26年帝展に入選、以後官展に出品を続け、38、39年新文展で特選。戦後も日展に出品、たびたび審査員を務め、58年評議員となった。52年東京教育大学教授に就任。50年より白日会彫塑部常任委員、56年より日本彫塑家倶楽部(のちの日本彫塑会)運営委員。堅実な写実的作風で知られ、日展彫塑で重きをなした。1981年没、77歳。彫塑、美教

木村賢太郎 (きむら・けんたろう/1928~2019年)

東京生れ。東京芸大卒。1960年現代日本美術展で優秀賞。65年日本国際美術展で最優秀賞。66年昭和会展で優秀賞。68年インドトリエンナーレで金の楯グランプリ。74年「ひそかな笑」で中原悌二郎賞優秀賞。76年長野市野外彫刻賞。石彫による独自の抽象の世界を追求する。2019年没、91歳。彫刻、石彫

木村貞子 (きむら・さだこ/1903~1924年)

金沢市生れ。木村雨山の妹。伊東深水に師事。生来、日本画、短歌等を好んだが、1924

年没、21歳。日本画

木村繁之 (きむら・しげゆき/1957年～)

愛媛県生れ。1983年多摩美術大学大学院美術研究科修了。84～88年多摩美術大学油画科版画研究室助手。95、96年文化庁芸術家在外研修員としてイギリス・ロンドンで制作。97～2000年武蔵野美術大学非常勤講師。2001年多摩美術大学非常勤講師、東京造形大学非常勤講師。版画

木村樹美 きむら・じゅみ/1939年～)

北海道生れ。1962～64年福岡県展入選。66～75年二紀展入選。75年二紀展同人。75～76年滞仏。ナショナル・デ・ポザール、ル・サロン入選。77年イタリア・ピサ留学、プレスコ画を学ぶ。86年佐賀美術協会賞。87年西日本女流美術展大賞。洋画

木村恒久 (きむら・つねひさ/1928～2008年)

大阪生れ。大阪市立工芸学校(現大阪市立工芸高)卒。1960年日本デザインセンターにはいり、64フリー。77年個展「木村恒久のビジュアル・スキヤンダル原画展」で話題をよぶ。79年毎日デザイン賞。フォトモンタージュによって独自のパロディー世界をつくりだした。2008年没、80歳。グラフィック・デザイナー

木村八郎 (きむら・はちろう/1903～1979年)

愛媛県生れ。1911年上京、本郷絵画研究所に学び、岡田三郎助に師事。春台展、帝展、光風会で活躍。42年文展出品作で岡田賞、無鑑査。44年郷里八幡浜に疎開。八幡浜美術会を結成し地域美術の発展、後進の指導に努める。52年愛媛大学講師、愛媛県美術会創設に当たり、初代理事長。戦後愛媛美術の発展に大きい足跡を残す。1979年没、77歳。洋画

木村英輝 (きむら・ひでき/1942年～)

大阪生れ。1965年京都市立美術大学工芸科デザイン専攻卒。非常勤講師として大学に残る。ロック音楽プロデューサーとなる。70年代後半から80年代は、広告やポスターのデザインも含めたコンセプトチャルデザイナーとして活躍。60歳画家になることを宣言。壁画2005

年青蓮院門跡華頂殿襖絵-蓮三部作。07年京都市動物園壁画 Gorilla's daily life。09年関西国際空港壁画 Space veggies。デザイン、画家、壁画

木村秀樹 (きむら・ひでき/1948年～)

京都生れ。京都市立芸術大学西洋画科専攻科を修了、在学中に吉原英雄に師事し、版画を学ぶ。1974年東京国際版画ビエンナーレ京都国立近代美術館賞。クワウ国際版画ビエンナーレ、英国国際版画ビエンナーレなどの国際版画展で受賞。写真製版によるシルクスクリーン技法を使った観念的な表現を特徴としている。版画

木村表齋 (きむら・ひょうさい/1818～1885年)

滋賀県生れ。京都の塗師(ぬし)柴田藤兵衛にまなぶ。下京(しもぎょう)にすみ、真塗(しんぬり)や洗朱(あらいしゅ)の根来塗(ねごろぬり)にすぐれ、おもに飲食器をつくった。弟弥三郎が2代表齋を襲名した。1885年没、68歳。漆工

木村広吉 (きむら・ひろきち/1912～1990年)

松江市生まれ。呉服問屋を営んでいた十代木村重石衛門の二男。1932年京都市立絵画専門学校に入学、卒業後に同校研究科に進んだ。西山英雄に師事し、在学中に文展初入選、46年からは日展に出品、特選、白寿賞、日展会員。1990年没、78歳。日本画

北村幽林齋 (きむら・ゆうりんさい/1840～1887年)

高知県生れ。家は代々土佐郡久萬村初月村東久万に住み紺屋を営んでいた。1853年14歳にして前村洞泉の門に入り狩野派の画を学んだ。1887年没、48歳。日本画

木村義男 (きむら・よしお/1899～1985年)

松江市生れ。1914年松江で丸山晚霞を迎えて開催された水彩画講習会に参加。平塚運一、清野耕ら主催の洋画研究所郷土社で学んだ。15年運一の勧めで上京、川端画学校で藤島武二に師事。16年日本美術院展に入選。18年に帰郷し、中央画壇と島根とのパイプ役として島根画壇の振興に貢献。松江洋画研究所の発足にあたっては佐藤喜八郎、桑原羊次郎といった地元の有力者の助力を得て、森本香谷、草光信成らとともに結成に参加、後進の指導にあたった。45年島根洋画会の創立に参加、会長。1985年没、85歳。水彩

木村梨枝子 (きむら・りえこ/生誕年不詳～)

1984年創形美術学校研究科終了。87～91年在仏オリビエ・ドゥブレ氏に師事。86年春陽会新人賞。91年春陽会会員。98年安田火災美術財団奨励賞。2016年春陽展中川一政賞。4年～海外(パリ、プラハ)や日本各地で個展・グループ展多数。洋画

木村和仙 (きむら・わせん/1924～没年不詳)

1924年生れ。中村直入、吉田白嶺に師事。1911年「曠原社」結成に参加。大正末期～昭和初期帝展に出品。彫刻、木彫

木本晴三 (きもと・せいぞう/生誕年不詳～1998年没)

大阪府生まれの洋画家。赤松麟作や岡鹿之助に学ぶ。春陽会会員。1998年没。洋画

玉畹梵芳 (ぎょくえん・ぼんぼう/1348～没年不詳)

1348年生れ。臨濟(りんざい)宗。春屋妙葩(しゅんおく・みょうは)の法をつぎ、義堂周信に詩文をまなぶ。のち建仁(けんにん)寺、南禅寺の住持。將軍足利義持(よしもち)に重用されたが、1420年怒りにふれて隠遁(いんとん)し、以後消息不明。水墨画をよくし、代表作に「蘭石図」「蘭蕙(らんけい)同芳図」など。南北朝-室町時代の画僧、水墨

曲亭馬琴・滝沢馬琴 (きょくてい・ばきん/1767～1848年)

江戸の人。山東京伝に師事し、はじめ黄表紙などを書くが、1996年「高尾船字文」を始めとして読本を続々と著し、それを近世後期の小説の正統に位置させ、ひいては明治期にまで影響を及ぼすものとした。その作風は、中国白話小説に学んで、勧善懲悪を標榜しつつ、雄大な構想と豊かな伝奇性を備え、人情描写にも配慮した。長編の読本に力作が多く、「椿説弓張月」「三七全伝南柯夢」「近世説美少年録」「開巻驚奇侠客伝」「南総里見八犬伝」など。1848年没、81歳。江戸後期の戯作者、黄表紙

キヨナガ正憲 (きよなが・まさのり/1939年～)

旧満州生れ。東海大学工学部卒業後、高校教諭として大分に赴任。1978年独学でシルクスクリーン版画に取り組み、無限大∞をテーマとした作品を大分県美術展、シュル美術賞展、

北九州市ビエンナーレ、九州現代版画展等に発表。近年は、海外展にも積極的に出品を重ねている。版画

清原武則 (きよはら・たけのり/1906～1985年)

熊本県生れ。第二師範を出て木山小、春日小に勤め、戦後は1949年から18年間白川中学校の美術教師を勤める。36年東光展に初入選。36年文展入選。東光会でK氏奨励賞、M氏奨励賞を連続受賞。65年田代順七と渡欧してヨーロッパの古典と向かい合い、画壇との決別を決意。68年日展への出品をやめ、銀光展、熊日総合美術展以外の公募展から引退。1985年没、79歳。洋画、美教

清原 斉 (きよはら・ひとし/1896～1956年)

茨城県生れ。1915年松本楓湖に入門、23年今村紫紅らに学ぶ、23～35年『赤い鳥』同人、歌誌『多磨』の会員となる(35年)。三人社を結成。30年再興院展で入選。40年日本美術院院友。42年堅山南風に師事。54年再興院展で大観賞。55、56年再院展で連続して大観賞。56年日本美術院同人、東京で没、60歳。日本画

清原雪信 (きよはら・ゆきのぶ/1643～1682年)

江戸生れ。久隅守景の娘であり、母は狩野探幽の姪にあたる。探幽に学び、同門の清原氏平野守清に嫁したと伝えられる。寛文年間に活躍。探幽と土佐派の画風を融合した柔らかく典雅な作風で、古典的な人物画、物語絵、草花絵、仏画等を描いた。1682年没、39歳。江戸前～中期の絵師

清水六兵衛・6代 (きよみず・ろくべえ VI/1901～1980年)

大阪生れ。5代清水六兵衛の長男。京都市立絵画専門学校卒。1945年家業の京都清水焼をつぐ。伝統的な京焼の技法に釉薬や焼成の新技法をくわえる。56年芸術院賞。76年文化功労者。芸術院会員。1980年没、78歳。陶芸

清水六和 (きよみず・ろくわ/1875～1959年)

京都生れ。四世六兵衛の長男。絵を幸野梅嶺、製陶を父に学ぶ。五世六兵衛を継ぎ、六和と改名。陶磁器の化学的研究を行ない、典雅な趣をもつ清水焼をつくる。帝展審査員。19

59年芸術院会員。1959年没、84歳。陶磁

桐谷洗鱗 (きりや・せんりん/1877~1932年)

新潟県生れ。1897年上京し富岡永洗に入門、1905年永洗没後楠本雅邦に師事。1907年東京美術学校日本画科選科卒。07年文展に入選、08年京都、奈良の社寺をめぐり、10年「訪古画帖」を作る。京都の「日出新聞」に挿絵を描く。11年古代インド美術研究のためインドに渡り、タゴールらと交遊、岡倉天心とも会う。13年帰国、17年再びインドに渡り、アジャンタ壁画を模写。文展には16、17年出品、23年「大震災絵巻」、30年年楽山荘壁画21面などを制作、仏画の権威として活躍。この間、3年ポーランド・ワルシャワでの日本宗教芸術展に作品100余点を出品。1932年没、55歳。日本画

金城安太郎 (きんじょう やすたろう/1911~1999年)

那覇市生れ。山田真山に師事して日本画と彫刻を学ぶ。米国統治下、琉球政府時代の沖縄における新聞連載小説や雑誌などの挿絵によって知られ、「沖縄最初の挿絵画家」と評された。沖縄諮詢会の文化芸術課技官となり、東恩納美術村を経て、首里儀保に設けられたニシムイ美術村に参加し、沖縄美術の復興に先鞭をつけた。1951年から61年にかけて、『琉球新報』、『沖縄タイムス』両紙合わせて新聞連載小説の挿絵を手がけた。1999年没、88歳。日本画、挿絵

130

トセンター、キュレーター(南條史生)で、日下は衣食住をテーマとする3部作を発表。以降「衣」作品を中心に制作発表。95年アパレルデザイナーたちと「アイディーブティック」と称するユニットを結成。2004年までアイディーブティックを名乗った。電飾スーツなど奇抜な衣装を着て、美術展のオープニングパーティーや街頭へ出没するパフォーマンスで知られる。現代美術、パフォーマンス

日下八光 (くさか・はっこう/1899~1996年)

徳島県生れ。1924年東京美術学校日本画科卒。28年から4年にかけて朝鮮総督府博物館所蔵となっていた西域壁画を東京美術学校の委嘱により模写し、31年より約10年にわたり当時の皇室博物館で古画の模写に励む。37年東京府豊島師範学校講師、同40年東京府女子師範学校講師をつとめる。43年より東京美術学校に奉職し、44年同校助教授、45年同校教授。30年帝展で入選。この後32年帝展に出品。帝展、新文展、回日展に出品し、官展でも活躍。53~55年宇治平等院鳳凰堂装飾画の現状模写および復元を行い、つづいて55年から装飾古墳壁画の模写に従事した。模写を手がけた古墳についての研究書として67年に朝日新聞社から『装飾古墳』を刊行。昭和42年東京芸術大学を定年退官し、同学名誉教授となった。著書に『装飾古墳の秘密』(講談社)、『東国の装飾古墳』(近刊)がある。東京で没、96歳。日本画、模写、美教、美教

草刈樵谷 (くさかり・しょうこく/1892~1993年)

大分県生れ。佐久間竹浦(1876-1925)に学んだ後、京都に出て田近竹邨に師事し、大正・昭和初期の日本南画院で活躍。1942年新文展に入選。45年帰省、翌年より田能村竹田の住まいであった竹田荘に移り住み、田能村竹田研究に没頭しながら南画制作を続けた。1993年没、101歳。南画

草薙興宗 (くさなぎ・こうそう/1904~1936年)

秋田県生れ。はじめ秋田市の竹村壘邨に入門、1921年上京し、平福百穂の画塾白田舎に入る。27年には京都絵画専門学校に入学し、中村大三郎に就く。30年《東福寺終点》が帝展初入選、以後、洋画の手法を取り入れた緻密で清新な作品を次々と発表する。1936年没、32歳。日本画



日下淳一 (くさか・じゅんいち/1962年~)

横浜市生れ。1986年東京芸術大学美術学部絵画科油画専攻卒。88年同大学院美術研究科修士課程(榎倉康二研究室)修了。ピエロ・マンゾーニの影響を受け、箱作品の制作。88~94年株式会社乃村工藝社勤務。94年開催の「人間の条件」展(スパイラル/ワコールアー

草野絵美 (くさの・えみ/1990年～)

東京生れ。2011年慶應義塾大学環境情報学部在学中に、スタートアップを立ち上げ起業。東京を拠点に活動するアーティスト。レトロフューチャリスティックな作風と人工知能等、最新テクノロジーを用いた表現で知られており、英国のオークションハウスであるクリスティーズとグッチのコラボレーション・オークションでは、AI生成を使った3Dドレスを発表した。取引総額16億円記録。NFTアニメプロジェクト新星ギャルバース共同創業者兼、共同原案者。東京芸術大学非常勤講師。シンセウェーブ音楽ユニット Satellite Young 主宰・歌唱担当。現代アート、AI映像アート

具志堅以徳 (ぐしけん・いとく/1912～2009年)

那覇市生れ。1932年大嶺政寛・大嶺政敏・許田重勲・国吉真起・高里良美と龍舌会を結成。36年沖縄県工業指導所凶案部勤務。50年「五人展」結成、玉那覇正吉ら。2003年沖縄県立現代美術館(仮称)収蔵品展(那覇市民ギャラリー／沖縄県)『戦後の県庁通り(御成橋附近)』『戦後の首里風景 2(西森より赤平の坂)』出品、2009年没、87歳。洋画、水彩

串田孫一 (くしだ・まごいち/1915～2005年)

東京生れ。1932年東京高等学校(旧制)文科丙類に入学し、35年卒、東京帝国大学文学部哲学科で学び、38年同校卒。38年処女短編集『白椿』を刊行。卒業後は、上智大学で教鞭をとる。戦後、46年『永遠の沈黙 パスカル小論』を上梓し、『歷程』同人となる。旧制東京高等学校で教鞭をとり、55年、最初の山の本『若き日の山』を上梓、58年尾崎喜八らと山の文芸誌『アルプ』を創刊、83年に終刊するまで責任編集者を務めた。また矢内原伊作や宇佐見英治らが創刊した文芸誌『同時代』にも同人として参加。東京外国語大学教授、65年まで。東京で没、89歳。版画、挿絵、装丁、詩人、美教

串田光弘 (くしだ・みつひろ/1943年～)

東京生れ。父は哲学者で詩人の串田孫一、兄は俳優で演出家の串田和美。1966年兄・串田和美らが結成した劇団自由劇場の宣伝美術を担当。＊以後、オンシアター自由劇場が解散する96年まで、ポスターなどのデザインを手がけた。69年、『ビッグコミック』(小学館)表紙デザインを手がける。＊以後、98年までに1,000冊以上をデザインする。72年『ビッグコミックオリジナル』(小学館)表紙デザインを手がける。デザイン、表紙、宣伝絵

櫛橋栄春斎・正盈 (くしはし・えいしゆんさい/生誕年不詳～1765年)

大坂生れ。狩野(かのう)派の技法を修得、山水・人物をかいた。法橋(ほつきょう)。門下に森陽信(ようしん)。1765年没。江戸中期の絵師

釧 雲泉 (くしろ・うんせん/1759～1811年)

長崎県生れ。幼時、父とともに長崎に行き、中国人に教えを受けたため、中国語に通じていた。画は清人より学んだといわれるが不明。父の没後、1792、93年ころには、三備地方、讃岐の間を涉歴、98年ころには京都、1803年ころには江戸に至っている。この間、長町竹石、海野螭斎(かきさい)、皆川淇園(きえん)、亀田鵬斎(ほうさい)、大窪詩仏(おおくぼしぶつ)らと交流。06年詩仏とともに信濃を経て越後に遊歴。1811年没、53歳。江戸後期の絵師、南画

楠瀬南溟 (くすせ・なんめい/1743～1790年)

高知県生れ。狩野派の横山竹林斎に師事し画法を学んだ。大坂に出。当時大坂の土佐藩邸に親しく出入りしていた人に硯儒豪商の木村兼葭堂と親くなった。南溟は画の基本である芥子園画伝を兼葭堂に習い、大雅同門の福原五岳に南画の筆法を学んだ。1790年没、48歳。江戸中期の絵師、南画

楠瀬大枝 (くすのせ・おおえ/1776～1835年)

高知県生れ。楠瀬南溟の長男。父の跡を継いで藩吏となった。幼いころから谷真潮らについて学問を学び、国学者の道を進んだ。画は独学であり、松村蘭台を敬慕していた。1806年から南画家として活躍、桜花の画法を得意とした。日記『燧袋』を残している。文化・文政・天保期の土佐画壇の中心人物として知られている。1835年没、60歳。江戸後期の絵師、南画

葛原陽子 (くずはら・ようこ/1955～2012年?)

広島県生れ。女子美大卒。無所属。銅版画を得意とする。葛原陽子銅版画集2017年。二十代半ばで筆を折り、運命を静かに受け入れた諦念、夭折の女流画家。2012年没?、57歳。版画、洋画、コラージュ

久世建二 (くぜ・けんじ/1945～2020年)

福井県生れ。芦原焼二代天声の次男。1968年金沢美術工芸大学産業美術学科工業デザイン専攻を卒。70年名古屋で個展を開催、以来各地で精力的に個展を行う。87年、八木一夫賞現代陶芸展大賞。土の可塑性を生かした感性豊かな現代陶芸の世界を展開。2007～14年金沢美術工芸大学学長。2020年没、75歳。陶芸、大学長

九谷庄三 (くたに・しょうざ/1816～1883年)

石川県生れ。古酒屋(こざかや)孫次、粟生屋(あおや)源右衛門に陶画をまなび、小野窯の絵付けにこたがら。天保のころ青色顔料「能登呉須」を発見。1841年郷里の寺井村に工房をひらき、「庄三風」とよばれる金欄手(きんらんて)の技法を確立、輸出品としても好評。1883年没、68歳。陶画工

工藤和男 (くどう・かずお/1933年～)

大分市に生まれる。武蔵野美術大学卒業。昭和32年から創元展に出品を続ける一方、昭和40年第8回新日展に初入選し、以後、日展に出品。昭和45年以降、安井賞展にも7回出品している。北国の浜辺で働く漁師たちに取材しながら、極寒の風土に生きる人間像をモニュメンタルに描き続け、高い評価を得ている。創元会では長らく理事長を務め、現在は会長として後進の指導に当たっている。洋画

工藤敬三 (くどう・けいぞう/1888～1951年)

1888年生れ。郷里青森県で早坂寿雲に師事し、上京後前田照雲、内藤伸にまなぶ。日本木彫会会員となり、帝展、院展に出品、のち帝展無鑑査。東奥美術社、六華会の同人。仏像を得意とした。1951年没、63歳。彫刻

工藤 健 (くどう・けん/1937年～)

秋田市生れ。1962年東京芸術大学美術学部彫刻科卒。62年二科展で特選、65年二科展で金賞、66年二科会会員。71年多摩美術大学彫刻科専任講師、74年同助教授、89年同校教授。82年高村光太郎大賞展でジャコモマンズー特別優秀賞。2002年日本美術家連盟委員。06二科会理事。彫刻、美教

工藤正義 (くどう・まさよし/1906～1945年)

青森県生れ。青森師範学校卒、小学校教員、1927年、東京美術学校入学。在学中より太平洋画会、光風会、白日会等に入選。30年より兵庫県加古川市で中学校教諭となる。36年新制作派協会展入選。42年帰郷し、43翌年より青森師範学校教授。同年新制作派協会会友、戦時中に病を患い、1945年没、39歳。1984年「工藤正義遺作展」(弘前市立博物館)開催。洋画、美教

国井応文 (くにい・おうぶん/1833～1887年)

京都生れ。円山応震(まるやま-おうしん)の甥(おい)。円山応立(おうりゅう)にまなび、山水・花鳥画を描いた。1884年内国絵画共進会で褒状。1887年没、55歳。幕末-明治期の絵師

国井応陽 (くにい・おうよう/1867～1923年)

京都生れ。円山派の画家国井応文の子。円山派の画家。父に画を学ぶ。円山派の画家。1923年没、56歳。円山派の日本画家

国沢新九郎 (くにさわ・しんくろう/1847～1877年)

高知県生まれ。旧藩時代から軍務に服したが、1870年土佐藩侯の命でイギリスに渡り、ロンドンで西洋画を学んで『西洋婦人』などを描く。74年帰国して東京・麹町に画塾彰技堂を開き、当時西洋で油絵を勉強してきた唯一の人として多くの門人を教えた。弟子に本多錦吉郎、浅井忠がゐる。最初の洋画展覧会を新橋で開き、毎月弟子の作品展を催すなど、明治初期洋画の発展に尽くした。1877年没、29歳。彰技堂は本多錦吉郎が継承した。洋画

國司華子 (くにし・はなこ/1960年～)

1960年生れ。89年東京芸術大学大学院修士課程修了。90年再興院展で入選(95年、99年、2001年、06年に奨励賞受賞)。2005年院展で日本美術院賞(大観賞)並びに第11回天心記念茨城賞。14年再興院展で日本美術院賞(大観賞)(16年同人、17年文部科学大臣賞、19年内閣総理大臣賞)。日本画

久間清喜（くにま・きよき/1953年～）

福岡県大牟田市に生まれる。愛知県立芸術大学、同大学院で島田章三に師事。昭和59年より大分大学教育学部で美術の指導にあたる。この間、国展や中日展、東京セントラル美術館油絵大賞展などに出品。大分赴任後は上野の森美術館大賞展や現代日本美術展に選抜されたほか、九州現代版画展などにも積極的に取り組んでいる。最近では個展を中心に作品を発表。現在、大分大学助教授。**洋画、版画、美教**

国本克己（くにもと・かつみ/1921～1986年）

石川県生れ。1940年石川県立工業学校機械科卒。戦後小学校教諭となり、油絵を始める。48年二紀会出品、54年行動展出品、56年一陽展出品、北陸支部長を務める。79年一陽会を脱会し、一創会を設立。運営幹事・北陸支部代表を務める。「月と女シリーズ」で独自の画境を開く1986年没、65歳。**洋画**

久保佐四郎（くぼ・さしろう/1872～1944年）

東京生れ。人形師・吉野栄吉に人形作りを師事。1928年衣装人形の平田郷陽らと白沢会を結成、創作人形運動に参加。35年白沢会を発展させた日本人形社を設立、36年改組帝展に人形を出品。江戸末期に衰えた嵯峨人形の流れをくんで木彫盛り上げ彩色の人形を得意とした。近代人形運動の先駆者。埼玉県の笛畝人形記念美術館に嵯峨人形「人形遣い」「暫」「矢の根」、雛人形、芥子人形などが残るが、その他は戦災で焼失した。1944年没、72歳。**人形**

久保田耕民（くぼた・こうみん/1890～1969年）

岡山県生れ。17歳で出郷し郵便局に勤めるかたわら大阪美術学校に学び、永松春洋に師事して南画を学ぶ。1930年帝展に入選。号を耕民と改めた。40年大阪画家協会を設立し、同年日本南画協会理事。41年大阪有秋会を結成し、会長。耕民の画風は実写を基本に、花鳥、風景を得意とし、温かい色彩と装飾的な構成で人々を魅了し、関西画壇で一時代を画した。1969年没、79歳。**日本画、南画**

久保田桃水（くぼた・とうすい/1841～1911年）

京都生れ。横山清暉のち西山芳園に学ぶ。1887年皇居御造営の折、欄間に「芭蕉の図」

を描き、91年に芝離宮の洋間の天井に「四季草花の図」を揮毫、1902年伊太利万国美術展に「遊鯉の図」を出品。日本美術協会会員。1911年没、71歳。**日本画**

久保知子（くぼ・ともこ/1961年～）

和歌山県生れ。1983年渡欧、84年国立デュッセルドルフ美術大学に入学、ウルリッヒ・リュックリーム、トニー・クラッグに師事する。1991年マイスター・シューラーを取得し卒業。同年、スコットランドのエジンバラ・カレッジ・オブ・アートでのグループ展に出品。1992年、東京の資生堂ギャラリーで個展「第一回海外新進日本人作家紹介展 Tomoko KUBO」が開催される。同年、ドイツのGALERIE WOFRAM BACHのグループ展に出品(95年)。1993年東京のワコウ・ワークス・オブ・アートの「Gallery Selection」に出品、94年、同画廊で個展「久保知子新作展」を開催。1996年、徳島県立近代美術館の特別展「ゆたかーあなたも幸せになりたいでしょう」に出品。現在、デュッセルドルフ在住。**洋画**

久保吉郎（くぼ・よしろう/1942年～）

京都生れ。初めは手描き友禅の研究をしていたが、日本画に移行し水田慶泉に師事。次いで堂本印象の画塾東丘社に入塾。1968年に日展に初入選して以来、同会及び日春展、各地の百貨店や画廊を中心に出品を続ける。作品は端正な色彩により和みある花鳥、風景を展開している。また母方の先祖には鈴木百年、鈴木松年がおり両人の鑑定も行っている。**日本画**

窪島誠一郎（くぼしま・せい いちろう/1941年～）

東京生れ。印刷工、酒場経営などを経て、1964年小劇場「キッド・アイラック・ホール」を設立。79年夭折画家の作品を展示する「信濃デッサン館」を設立。97年戦没画学生慰霊美術館「無言館」を設立、その活動は野見山暁治とともに、2005年菊池寛賞受賞。主著に、『父への手紙』（筑摩書房）、『「無言館」の坂道』（平凡社）、『漂泊・日系画家野田英夫の生涯』（新潮社）、『高間筆子幻景』（白水社）、『戦没画家 巖光の生涯』（新日本出版社）などがあり、野見山暁治との共著「無言館はなぜつくられたのか」（かもがわ出版）がある。「無言館」「信濃デッサン館」各館主。**美術館、コレクター**

窪 俊満（くぼ・しゅんまん/1757～1820年）

江戸生れ。初めは楫取魚彦に学び、春満と称した。安永末頃に北尾重政門に入って北尾を称す。1782年楫取が亡くなると、画名を俊満と改めた。作画期は安永中葉から文化末年までに及ぶ。黄表紙10部、洒落本3部を描いた。画風は師の重政風というよりは鳥居清長風の美人画を描いており、俊満の地味な美人画は清長や歌麿の台頭にあって目立たずに美人画の作品は少なく、むしろ肉筆美人画が多くみられる。また紅嫌いの作品が良く知られている。俊満の紅嫌いは錦絵のほか、肉筆浮世絵にもみられる。特に狂歌摺物を得意とし、その点数は500点に及ぶという。寛政以後狂歌摺物や版本の作画に活躍したほか沈金彫りや貝細工などにも長じた多芸な人であった。1820年没、64歳。江戸後期の浮世絵師、戯作者、歌人

久保提多 (くぼ・ていと/1885～1955年)

青森県生れ。1903年東京美術学校予科に入学、04年に本科に進んだ。結城素明、岡田秋嶺、寺崎広業に指導を受け、下村観山が英国から帰国してからは下村教室に入った。卒業制作は本科一席。08年青森県立木造中学分校の図画教師。13年に上京して本郷駒込に住み、上野女学校の教員。14年帝大図書館の委嘱で春日駮記を模写。18年埼玉県立川越中学校教諭となり、以後川越を拠点に活動し、「日本彩科志」を執筆刊行するなど画業のほかにも文筆面でも活躍した。51年埼玉県川越川越市文化賞。51年同市で画業50年の記念展覧会を開催した。1955年没、70歳。日本画、美教

久保田鼎 (くぼた・かみえ/1855～1940年)

江戸生れ。1874年文部省に写字生として職を奉じ、77年には同省属に昇進し、90年帝国博物館主事に任命され、美術界に歩を進める契機となった。即ち同年東京美術学校幹事、92年臨時全国宝物取調掛、95年には同館理事、96年古社寺保存会委員を仰付けられた。98年東京美術学校教授を兼任、1900年同校々長心得を命ぜられた。07年奈良帝室博物館長、14年京都帝室博物館長、24年には再度奈良帝室博物館長を歴任した。23年帝室技芸員選衡委員、30年には宮内事務官として勅任され、31年帝室博物館評議員仰付けられ、それと共に要職を隠退したが、我が黎明期博物館事業に殆んど其生涯を捧げた功績は特記さるべきであらう。1940年没、86歳。美普、美教、博物館長

久保田金僊 (くぼた・きんせん/1875～1954年)

京都生れ。久保田米僊の次男。京都府画学校にまなび、父に師事。日清・日露戦争では従軍記者として戦争画を制作。1915文展に入選。舞台装置、時代考証でも知られた。1954年没、79歳。著作に「日本のをどり」など。1954年没、79歳。日本画、舞美

久保田耕民 (くぼた・こうみん/1890～1969年)

岡山県日生町生まれ。郵便局に勤めるかたわら大阪美術学校に学び、松永春洋に師事して、南画を学ぶ。号を香雲、香芸と称した。「秋糖」が帝展に入選。号を耕民と改めた。大阪画家協会を設立するとともに、日本南画協会理事、大阪有秋会会長として後輩の指導に当たり、日本画の普及に努めた。1969年没、79歳。南画

久保田桃水 (くぼた・とうすい/1841～1911年)

京都生れ。横山清暉(せいき)、西山芳園に四条派の画法をまなぶ。1902年イタリア万国美術展に「遊鯉の図」を出品、遠近法に筆力を発揮して名をあげた。1911年没、71歳。京都出身。日本画

久保田政子 (くぼた・まさこ/1934年～)

青森県生れ。1957年東京女子美術大学卒、無所属で活動。馬を描く画家として知られている。おり、日本中央競馬会・競馬博物館メモリアルホールに、顕彰馬のトウショウボーイ、メジロマックイーン、タイキシャトルなどを描く。61年～女流画家協会プールブー賞。78、79日仏現代美術展出品。2006年青森県文化賞。11年デーリー東北賞。14年紺綬褒章。18年デーリー東北新聞にて半生紀「政子を生きて」を連載。19年紺綬褒章再受章。洋画

久保田満明 (くぼた・みつあき/1874～1937年)

久保田米僊の長男として京都に生る。小学校を卒へるや直ちに米国オークランド中学校に学び、4年後帰朝。東京に遷り、はじめ洋画を原田直次郎に学び、後日本画を田崎草雲、橋本雅邦に就て学んだ。其後仏国に留学、滞在すること4年、帰朝後は三越呉服店及松竹興業会社に関係して衣裳考証、舞台装置等に従事し、故実考証に専念してゐた。尚日清戦役には成歓、牙山及威海衛に国民新聞記者として画筆をとつて従軍した事がある。1937年没、63歳。日本画、舞美

久保嶺爾（くぼ・れいじ/1940年～）

京都府出身。京都市美術大学卒。1962年日展に出品。日春展、京展、関西展などで受賞を重ね、75年に日展会友。86年日展特選。87、88、89年京都画壇日本画秀作展に出品。94年に平安建都千二百年記念古都を描く日本画展出品。95年に阪神大震災100人展出品など精力的に活動を続ける京都画壇の代表的作家。日展会員 京都日本画家協会会員。日本画

久保田桃水（くぼた・とうすい/1841～1911年）

京都生れ。横山清暉、西山芳園に四条派の画法をまなぶ。1902年イタリア万国美術展に「遊鯉の図」を出品、遠近法に筆力を発揮して名をあげた。1911年没、71歳。日本画

久保田米斎・満明（くぼた・べいさい/1874～1937年）

1874年生れ。アメリカのオークランド・ハイスクール卒。久保田米億（べい いせん）の長男。はじめ洋画を原田直次郎に学び、後日本画を田崎草雲、橋本雅邦に就て学んだ。其後仏国に留学、滞在すること4年、帰朝後は三越呉服店及松竹興業会社に関係して衣裳考証、舞台装置等に従事し、故実考証に専念してみた。雑誌「歌舞伎」の表紙画を担当した。1937年没、64歳。日本画、舞美

熊井恭子（くまい・きょうこ/1943年～）

東京生れ。1966年東京芸術大学ヴィジュアル・デザイン卒。75年日本クラフト展で新人賞。83年優秀賞。80年「FIBER ASART 展」(マニラ・メトロポリタン美術館)に出品して以来、「第13回ローザンヌ国際タペストリー・ビエンナーレ」や「第1回パース国際クラフトトリエンナーレ」等国际展に度々出品。83年大分県立芸術会館での初個展以来各地で度々個展を開催。93年ニューヨーク近代美術館で個展開催。93年「染と織・現代の動向II」(群馬県立近代美術館)、93年「ファイバーアート展」(福島県立美術館)等に出品。織物、造形

熊井 惇（くまい・じゅん/1914～2004年）

大分県生れ。1934年大分県師範学校卒。45年大潮展で特選。48年日展入選(22回入選)。51年光風会展入選。以後、日展、光風会展を主舞台に活躍。59年光風会会友。65年光風会会員。78年渡欧。81年大分県立芸術会館選抜秀作展に出品。88年画業50年記念

「熊井惇回顧展」を大分県立芸術会館で開催する。晩年は、重厚なマチエールで臼杵石仏等を描いた。2004年没、90歳。洋画

熊谷 榎（くまがい・かや/1929～2022年）

東京生れ。熊谷守一の次女。1951年日本女子大学卒。54年貼り絵で個展。油彩を描き始め、陶彫、陶絵を含め120回の個展開催。85年熊谷守一美術館を創立、25年間、同館の館長。2007年熊谷守一作品をすべて豊島区に寄贈。日本美術会会員。日本山岳画協会会員。2022年没、92歳。洋画、陶彫、陶絵、美術館長

熊谷喜代治（くまがい・きよじ/1912～1988年）

新潟市生れ。1935年新潟師範学校卒。在学中は諸橋政範の指導を受ける。小柳俊郎らと新潟油彩画協会を結成。41年結婚し熊谷姓に。戦後児童画教室を開く。49年頃からガラス絵を制作。70年小学校12年、中学校に23年勤務し退職。73年小田急ノルケでガラス絵展。81年富川潤一らと無限会結成。1988年没、76歳。洋画、ガラス絵、美教

熊谷紅陽（くまがい・こうよう/1912～1992年）

福岡県生れ。明治末に上野焼を復興させた熊谷家の15代目として生まれる。佐賀県立有田工業学校を卒業後、父の竜峯のもとで研鑽を積む。戦時中は軍務により満州(現・中国東北部)で製陶を行った。1953年全国陶磁コンクールで受賞。64年に日本伝統工芸展に初入選を果たし、66年からは入選を重ねた。69年九州陶芸展で秀作賞。茶陶としての上野焼の伝統に則った作陶を一貫して追求し、とくに茶入を得意とした。1992年没、80歳。陶芸

熊谷直彦（くまがい・なおひこ/1828～1913年）

京都生れ。京都の神職の家に生まれる。京都高倉家にて、有職故実を学んだ後、岡本豊彦の一番弟子であった、岡本茂彦に画を師事。1884年内国共進会にて「山水人物」が優賞。以降もパリ万博、シカゴ万博に出品するなど画業に活躍を示す。94年帝室技芸員を拝命。四条派の画技をよく継承した山水、人物、花鳥などに秀作を残す。1913年没、85歳。日本画

熊谷元一（くまがい・もといち/1909～2010年）

長野県生れ。1932年童画作品が『コドモノクニ』5月号に掲載。38年写真集『会地村一農村の写真記録』(朝日新聞社)出版。55年『一年生ある小学教師の記録』(岩波書店)で第1回毎日写真賞。68年絵本『二ほんのかきのき』(福音館書店)出版。百万部を超えるロングセラーに。90年日本写真協会功労賞。92年『画集 熊谷元一の世界』(郷土出版社)出版。93年長野県教育関係功労賞。阿智村名誉村民。94年文部大臣より地域文化功労者として表彰。94年『熊谷元一写真全集』全四巻(郷土出版社)で毎日出版文化賞特別賞受賞。2010年没、101歳。写真、版画、絵本

熊耳耕年 (くまがみ・こうねん/1869～1938年)

仙台市生れ。14歳の時父が没した。20歳の時に上京し、月岡芳年の内弟子、芳年没後は尾形月耕に師事。発刊時の河北新報の挿絵を描いた。1923年帰郷、初期の河北展で活躍した。1938年没、69歳。日本画、版画

熊倉順吉 (くまくら・じゅんきち/1920～1985年)

京都生れ。1942年京都高等工芸学校図案科卒。45年京都松齊陶苑に入門し、福田力三郎に師事。富本憲吉にも師事する。48年富本を中心とする新匠工芸会展に出品し、49、50年日展で入選、51年新匠会会員。55年日本陶磁協会賞。57年八木一夫らの前衛的な陶芸家集団走泥社に参加。同人となり、以後同展に出品する。58年ベルギー、ブリュッセル万国博覧会でグランプリ、62年チェコスロバキア、プラハ国際陶芸展で銀賞。東京・老番館画廊、伊勢丹で個展を開催。59年滋賀県立信楽窯業試験場嘱託、70年より京都工芸繊維大学工芸学部意匠工芸学科非常勤講師、72年より多治見市立陶磁器意匠研究所特別講師、84年より京都市立芸術大学美術学部非常勤講師。大津市で没、65歳。工芸、前衛陶芸家、美教

熊坂適山 (くまさか・てきざん/1796～1864年)

陸奥の人、1796年生れ。同郡梁川(やながわ)に移封された蝦夷(えぞ)地(北海道)松前藩の家老嶋崎波響(なみざき-はきょう)に絵をならう。京都に出、浦上春琴(うらがみ-しゅんきん)に文人画をまなび、松前藩の絵師となる。田能村竹田(たのむら-ちくでん)とまじわり、山水画、詩文にひいいた。「適山画譜」がある。1864年没、69歳。江戸時代後期の絵師、文人

熊坂允子 (くまさか・なおこ/1933年～)

1933年生れ。56年東京芸術大学芸術学科卒。70年渡米、メーランド・インスティテュート・カレッジオブアートで制作。78年彫刻家・画家のサーール・シュワルツ(Sahl Swarz: 1912～2004年)と結婚、鎌倉とイタリアのペローナに半年ずつ住んで制作。2008年より鎌倉に居住。日本でも個展を何回も開かれ、藤沢市などにはモニュメント彫刻。彫刻

熊沢 淑 (くまざわ・よし/1931年～)

1968年新制作展に出品。73、74、83年新制作展で新作家賞。90年新制作協会会員。「教育の道と芸術の道は両立できるはずだ」と恩師に言われたままに、小学校教師と現代美術作家の2足の草鞋をはき続け、退職後の闘病も乗り越え一途に活動してきた、女性現代美術作家・熊沢淑。戦争を挟んだ波瀾万丈の85年間の軌跡を織り交ぜながら、初期の鉛筆による繊細な抽象絵画からキャンバス地にミシンによる縫い目で自在に描く最新作。洋画、美教

熊代熊斐 (くましろ・ゆうひ/1712～1773年)

江戸時代の南宋画の先駆者。沈南蘋の彩色花鳥画の技法を多くの門人に伝え国内に広めた。この一派は南蘋派として知られ、当時の画壇に大きな影響をもたらした。唐風に熊斐と名乗った。代々唐通事であった神代家の養子となり、21歳で内通事小頭見習となり、小頭を経て稽古通事まで昇進するも役人としては生涯低い地位だった。画技は、はじめ唐絵目利御用絵師である渡辺秀石の門で学んだ。その後、1732年から1年あまり長崎に滞在中の沈南蘋に直接師事した。続いて来日した沈南蘋の弟子である高乾にも教えを受けた。日本人として沈南蘋の唯一の直弟子となり、その後南蘋流の彩色花鳥画の第一人者として多くの弟子を育てその画風を全国に広めた。当時、沈南蘋の作品は得難くその代用とはいえ、熊斐の画は高く評価され好事家などに多く求められた。徳川宗勝などはわざわざ清から絹を輸入させて熊斐に描かせている。熊斐は世俗には無欲で、師となった沈南蘋を生涯にわたり敬愛した。娘婿の森蘭斎は『蘭斎画譜』で熊斐の小伝を伝えている。門弟に宋紫石・鶴亭・森蘭斎等がいる。次男の熊斐文と三男の熊斐明も父を継いで絵師となった。1773年没、61歳。江戸中期の長崎で活躍した絵師、南蘋派

栗本翠庵 (くりもと・すいあん/1804～1880年)

1804年生れ。江戸住。画を山崎董烈に学ぶ。万延元年1860年没、76歳。江戸後期の
絵師

来栖重郎（くるす・じゅうろう/1928～2006年）

大阪生れ。小磯良平を師と仰いだが詳細不明。1956年独立展で独立賞。62年独立展で奨励賞。63年独立展で奨励賞。64年独立美術協会会員となる。以後毎回出品。その間、渡欧、新世代展、新潮展招待出品。2006年7月2日没、享年80歳。07年追悼・来栖重郎遺作展開催。(佐)洋画

くらた周一（くらた・しゅういち/1918～没年不詳）

長崎市生れ。父は初五郎、母はトウ(江戸時代の画人・熊斐の曾孫)。1941年京城医専卒業。59年第8回労美展を最初に各展覧会に出品。62年現展に出品し会友、現展に毎回出品。64年現展で会員。66年現展で運営委員。現展長崎支部長もつとめた。洋画

倉田松濤（くらた・しょうとう/1865～1928年）

秋田市生れ。本名は斧太郎だが、後に画号である松濤に改めた。別に百三段・毫碌先生・来世菩薩・餓鬼大将などと号する。はじめ平福徳庵について学ぶ。1928年没、63歳。日本画

倉田弟次郎（くらた・ていじろう/1870～1894年）

下総佐倉藩士倉田幽谷の第二子として生まれる。浅井忠の門人となり、洋画を学ぶ。1887年から91年頃まで越谷高等小学校に奉職、同年第3回明治美術会展に入選。森鴎外の「上野公園の油画彫刻会」の文中に批評あり。浅井忠のすすめにて上京、画道に精進す。94年1月16日没、享年24歳。(佐)洋画、美教

倉地比沙支（くらち・ひさし/1961年～）

名古屋市長生れ。1986年愛知県立芸術大学大学院油画専攻修了。96年文化庁国内研修員(インターシップ)。99年アーティストインレジデンスとしてタイ、シルパコーン芸術大学にて6ヶ月間の客員研究員として研究制作。2013、14年ART OSAKA(万画廊ブース・大阪)。愛知県立芸術大学美術学部油画専攻版画研究室教授。版画、美教

倉橋元治（くらはし・もとはる/1947～2018年）

神奈川県生れ。祖父の代からの林業を継ぐ。30歳の頃から表現活動始める。1988年ウッドアート・フェスティバル(東京)で大賞、89年神奈川県美術展で準大賞(立体)、県立近代美術館賞を受賞。91、92年現代日本美術展入選。ほかグループ展参加多数。東京、神奈川、イスラエルなどのギャラリーや美術館での個展多数。2018年没、73歳。町立湯河原美術館、ギャラリーNEW 新九郎(小田原)、丹沢美術館(秦野市)などで遺作展が開かれた。2018年没、71歳。彫刻(木彫)

倉俣史朗（くらまた・しろう/1934～1991年）

1934年生れ。東京都立工芸高等学校木材科卒、桑沢デザイン研究所リビングデザイン研究所リビングデザイン科卒。1965年フリーラテリアデザイン室(東京・銀座)に一年十ヶ月勤務し、いわゆる組科を卒業後、三愛宣伝課(東京・銀座)に約七年、次いで松屋インテリアデザイン室(東京・銀座)に一年十ヶ月勤務。1969年独立、「ク라마タデザイン事務所」を設立。60年代以降のデザイン界において世界的に高い評価を受けた。1991年没、57歳。埼玉県立近代美術館(2013年)で個展。1991年没、57歳。デザイナー

蔵元朝美（くらもと・あさみ/1933年～）

熊本県生れ。1951年海老原喜之助氏に師事。57～62二科展出品。63年朝日新聞社主催朝日油絵コンクール、熊日総合展熊日賞及び神奈川近代美術館賞。77年サロン・ド・トヌヌ展出品。80年サロン・ド・トヌヌ展アポリネール賞。95年日仏現代美術展で優秀賞。2001年フランスステレー財団芸術家協会会員、永久会員。03年日仏現代展グランプリ。07年サロン・ド・トヌヌ展で名誉功労賞。08年サロン・ド・トヌヌ展で名誉会員。洋画

栗田 宏（くりた・ひろし/1952年～）

新潟県生れ。白根市役所に勤務し、絵を描き始める。後、退職し絵に専念。「生成」「気」「密」などのテーマで制作。84・85年現代画廊、2000・02年新潟絵屋、04・05年画廊 Full Moon で個展。ほか新発田、豊栄、新潟、名古屋、山口などで個展。89年「新潟の絵画100年展」(新潟市美術館)、2000年「見えない境界 変貌するアジアの美術 光州ビエンナーレ 2000<アジアセクション> 日本巡回新潟展」(新潟県民ギャラリー)、04年「新潟の

美術 100 人」、06年新潟の作家 100 人展(県立万代島美術館)に参加。洋画

栗原一郎 (くりはら・いちろう/1939～2020 年)

東京生れ。小貫政之助に師事、1962年武蔵野美術大学西洋画本科卒、75年シェル美術賞展3席、76年安井賞展入選。86年立軌会会員。個展:池田20世紀美術館、フォルム画廊、日本橋三越本店、松坂屋本店、天満屋岡山店他。2020年没、81歳。洋画

栗本翠庵 (くりもと・すいあん/1784～1860 年)

江戸住。名は元統、字は伯資、杉説と称する。画を山崎董烈に学ぶ。1860年没、76歳。
江戸後期の絵師

栗本夏樹 (くりもと・なつき/1961 年～)

大阪生れ。1987年京都市立芸術大学大学院美術研究科漆工専攻を修了。乾漆、螺鈿、蒔絵などの伝統技法を駆使した斬新な立体造形で注目を集めた。94年西宮市大谷記念美術館で「小清水漸・栗本夏樹展 現代の造形・かたちといろ」を開催。94年フィラデルフィア美術館で開かれた「Japanese Design」展に出品。以後、漆の造形素材としての可能性だけでなく、漆にまつわる歴史や風土にも着目した制作活動を行ない、国内外の展覧会に多数出品している。2000～2001年文化庁派遣によりヴィクトリア&アルバート美術館客員研究員。16年より京都市立芸術大学教授。漆芸技法や修復に関する研究・普及活動にも取り組む。17年京都府文化賞功労賞を受賞。漆芸、立体造形、美教

車崎天真 (くるまぎき・てんしん/1878～1932 年)

群馬県生れ。14歳頃に古川竹雲に学び、田崎草雲に師事。1900年足尾鉍毒停止請願行動の一員として内部の見取り図や状況などを描写し、被害各地を巡回して実態を記録し、援助に尽力。帰郷後に小学校・中学校の図画専科教師。教え子に彫刻家の藤野天光、版画家の藤牧義夫からいる。「新聞縦覧器」「複式透視法による名所案内器」の特許取得。1932年没、54歳。日本画、美教

黒岩淡哉 (くろいわ・たんさい/1872～1963 年)

東京生れ。1894年東京美術学校彫刻科(第1期生)卒。98年東京美術学校の彫刻科助

手、兼教務。1900年パリ万博で金牌。14年大阪府立職工学校へ転任。30年勲六等瑞宝章。33年広島文理科大学教育学研究所第2回卒業生の記念品「ペスタロッチ像」制作。39年山本笙園、越田尾山ら共に工芸美術輸出報国会を結成。40年紀元二千六百年記念行事、記念レリーフ「神武天皇」制作。1863年没、91歳。彫刻、美教

黒川晃彦 (くろかわ・あきひこ/1946 年～)

東京生れ。1972年東京芸術大学美術学部彫刻科卒。74年東京芸術大学大学院彫刻科了。2004～08年多摩美術大学美術学部彫刻学科客員教授。08～14年多摩美術大学美術学部彫刻学科教授。78年昭和会展優秀賞(日動画廊)。80年高村光太郎大賞展優秀賞(彫刻の森美術館、箱根)。83年長野市野外彫刻賞。86年みなとみらい21野外彫刻展協賛賞(日本丸メモリアルパーク、横浜市)。89年横浜彫刻展・横浜美術館長賞。ミュージシャンとペンチを組み合わせた野外彫刻(ブロンズ)を次々と発表。彫刻、美教、写真

黒川洋孝 (くろかわ・ひろたか/1943 年～)

大分県生れ。1966年武蔵野美術大学卒。1973年独立美術協会展に入選。88年奨励賞。89年野口賞。90年二年連続で独立賞。93年独立美術協会会員。91、93年に安井賞展、98年小磯良平大賞展に出品。洋画

黒川弘毅 (くろかわ・ひろたけ/1952 年～)

東京生れ。1977年東京造形大学美術学部彫刻専攻卒。79年東京造形大学美術学部彫刻専攻研究室修了。91～92年文化庁奨励によりイタリア・ミラノ滞在。80年コバヤシ画廊で個展。2003年「黒川弘毅 饗宴—生成するエロース」府中市美術館、東京。06年宇都宮美術館で個展。07年かわさき IBM ギャラリー、神奈川で個展。彫刻

黒木郁朝 (くろき・いくとも/1944 年～)

宮崎県生れ。1961～68年版画協会展に出品、Modern Japanese Print (サンフランシスコ)に招待出品。79年木版画集「光の紙」を福岡画廊より出版。80年アジア美術展に招待出品(福岡市美術館)。84年木版画集「時の紙」ギャラリー・プチフォルムより出版。版画

黒木貞雄 (くろき・さだお/1908～1984 年)

宮崎県生れ。1930年宮崎県師範学校本科卒、31年同校専科卒、川端画学校洋画科で34年まで学ぶ。33年より版画家平塚運一に師事。後に恩地孝四郎にも教えを受けた。35年日本版画協会展に入選、35年国画会展に入選。38年日本版画協会展で版画道賞、400年2600年記念大賞次賞、同会会員。42年国画会展で褒状、52年国画会会友。55年画集『日向風物版画集』を刊行。宮崎県で没、74歳。版画

黒沢三郎（くろさわさぶろう/1914～2004年）

茨城県生れ。1953年二紀展で受賞。64年欧州スケッチ旅行。66年二紀展で同人賞。68年二紀会会員。69年滞仏。700年パリ、ニューヨークで個展。71年サロン・デ・ザンデバンダン出品。74年パリで個展。78年帰国。79年二紀会審査委員辞任、紺綬褒章。82年東京銀座・三越で個展開催。2004年没、90歳。洋画

黒田アキ（くろだあき/1944年～）

京都生れ。1967年同志社大学文学部卒業。78年ドイツで最初の個展。80年パリ・ビエンナーレに出品。ミロやジャコメッティなどを扱う世界的に有名なマール・ギャラリー（パリ）で個展。ヨーロッパ各国で数々の個展を開催。日本では93年東京国立近代美術館、国立国際美術館にて当時最年少で個展を開催。安藤忠雄などの建築家とのコラボレーションなど、他分野との交流も多い。現代美術、洋画

黒田宗傳・三代（くろだそうでん III /1931年～）

京都生れ。二代宗傳の長男として生まれる。父に師事、研鑽する。1962年宗傳を襲名。67年建仁寺の竹田益川管長より竹軒の号を賜る。竹器師

黒滝大休（くろたきだいきゅう/1907～1988年）

青森県生れ。1911年弘前中学校に入学、在学中に穴沢起夫が美術担当として赴任してくる。26年駒澤大学専門部に入学、27年予科に転じ、本郷絵画研究夜間部にも通った。27年穴沢起夫らと「未青社」を結成。32年駒澤大学を卒業し、弘前和洋裁高等女学校に就職。以後33年間高校で教鞭をとった。33年「未青社」を「紀元社」に改称し、新たに佐藤麻古杜らを加えて活動した。57年棟方寅雄と洋画グループ「鼓楼社」を結成。68年弘前美術作家連盟が創設され委員長。70年弘前博物館建設協議会を結成。1988年没、81

歳。洋画、美教、美普

黒田斉清（くろだなりきよ/1795～1851年）

福岡生れ。江戸後期の福岡藩主。致仕(1834)まで藩主として治績をあげた。長崎警衛の責任上ロシア、イギリスへの関心が深く、その海防論『海寇窃策』は幕末になって『海防彙議』に収録。一面鳥類、草木に詳しく、当時の「物産家相撲番付」では西の大関の地位を占める。『鵝経』『鴨経』『本草啓蒙補遺』などの著者らしく、シーボルトとの問答録『下問雑載』でも、世界各地の動植物について知識を披瀝している。特に興味をよせたのは日本人の起源と世界の人種で、シーボルトとの会見(1828)は「凡ナラザル」彼の「骨相イカン」を見るためであった。1851年没、56歳。博物絵

黒田綾山（くろだりょうざん/1755～1814年）

香川県生れ。備後(びんご)(広島県)の福原五岳、大坂の林園苑(ろうえん)にまなぶ。各地を遊歴、備中(びっちゅう)玉島(岡山県倉敷市)にすみ、文人画をひろめた。書や詩もたくみだった。1814年没、60歳。江戸時代中期-後期の絵師

黒崎義介（くろさきよしすけ/1905～1984年）

長崎県生れ。川端画学校でまなび、小茂田青樹(おもだせいじゅ)、安田靉彦(ゆきひこ)らに師事。1929年ごろから童画を手がけ、48年童画研究会を主宰。「講談社の絵本」や児童雑誌などにえがきつづけた。79年児童文学賞。1984年没、79歳。著作に「よしすけ昔噺(むかしばなし)童画集」など。童画

黒田辰秋（くろだたつあき/1904～1982年）

京都生れ。漆匠、黒田亀吉を父に生まれる。1923年京都市美術工芸展に『螺鈿竜文卓』を出品。京都市が買い上げ。24年頃に河井寛次郎の講演に感銘を受け、河井や柳宗悦らの民藝運動に加わる。29年上賀茂民芸協団を組織。34年個展初開催。68年皇居新宮殿の拭漆障大飾棚、扉飾、椅子、卓を制作。70年重要無形文化財「木工芸」保持者(人間国宝)認定。71年紫綬褒章。京都で没、78歳。漆芸、木工

黒沢三郎（くろさわさぶろう/1915～2004年）

日立市生れ。独学で絵を始める。1953年二紀展で受賞。64年欧州スケッチ旅行。66年二紀展で同人賞。68年二紀会会員。69年フランス滞在、70年パリ、NYで個展。71年サロン・デ・ザンデパンダン出品。74年パリで個展。78年帰国。79年二紀会審査委員辞任、紺綬褒章、82年東京銀座・三越で個展。2004年没、89歳。洋画

黒田 浩 (くろだ・ひろし/1942年～)

金沢市生まれ。1939年金沢美術工芸大学油絵科卒業後、同大研究所に進み、同大助手を勤めて、光風会、日展に出品を続けた。師は高光一也。男性人物画を得意とし、学生時代より頭角をあらわしたが、一時期筆を折る。2002年没、60歳。洋画

黒田綾山 (くろだ・りょうざん/1755～1814年)

高松生れ。最初の画の師は江戸の幕臣にして狩野派画家・加藤文麗、池大雅に私淑、1775年大坂に出て大雅の高弟・福原五岳に入門。同門の林閨苑と親友となる。80年備中玉島に遊歴し、売画をして暮らし、土地の人々と親交。岡山地域の文化集団の基礎を築いた。山陽道・讃岐・京坂など諸国を遍歴。亀山藩からは厚遇され終生俸禄が支給されている。綾山は明・呉派の銭貢の画風を敬慕。若き日の田能村竹田は綾山に画の批評を請うたという。書風は大雅に傾倒し独自の書風。1814年没、60歳。江戸中、後期の文人画家

黒部拈華 (くろべ・ねんげ/1856～没年不詳)

鳥取市生れ。日根対山のち李紹儀に師事して南宗武林派を修める。博覧会・共進会・展覧会ほか受賞多数。帝国絵画協会会員。日本画

黒柳正孝 (くろやなぎ・まさたか/1961年～)

東京生れ。東海大学教養学部芸術学科卒。春陽会に出品する一方で、東京国際ミニプリント・トリエンナーレ展、マレーシア国際現代版画展、ノルウェー国際版画トリエンナーレ展に出品、入選。1996年、第3回高知国際版画トリエンナーレ展で佳作賞。96年の第25回現代日本美術展において、下関市立美術館賞、徳島県立近代美術館賞。版画

鋸形蕙斎・北尾政美 (くわがた・けいさい/1764～1824年)

初め北尾重政に学んで北尾政美と号した。黄表紙の挿絵画家として世に出、江戸の鳥瞰

図を描いて有名になり、多くの絵本を制作。1794年津山侯の御用絵師となり、狩野惟信に学んで鋸形蕙斎、また紹真と名のり、版画制作をやめてもっぱら肉筆画を描く。作品『近世職人尽絵巻』(東京国立博物館)。1824年没、60歳。江戸後期の浮世絵師、挿絵、絵本、版画

鋸塚 勉 (くわつか・つとむ/1918～1993年)

長崎県生れ。1938年長崎県師範学校本科一部卒。69年長崎県展入選。71～85年東光展入選。東光会会友。1993年没、75歳。洋画

桑野博利 (くわの・ひろし/1913～2008年)

倉吉市生れ。京都市立絵画専門学校卒。中井宗太郎に学びながら研究科に進み、榊原紫峰に私淑。1939年年新文展入選、以後、戦後の日展まで出品。45～49年京都市立絵画専門学校で指導。53年池田遙邨に師事、青塔社に入った。71年紫峰没後は日展を離れ、広く指導を続けた。90、91年まで司馬遼太郎が週間朝日に連載した「街をゆく」の挿絵を担当。2008年没、94歳。日本画、美教

桑原甲子雄 (くわばら・きねお/1913～2007年)

東京生れ。東京市立第二中学校卒。1934年にライカC型を入手し、37年写真雑誌の月例コンテスト年間優秀者。40年に写真雑誌推薦作家として満洲を取材。44年外務省の外郭団体・太平洋通信社のカメラマン。48～74年写真誌『カメラ』『サンケイカメラ』『カメラ芸術』季刊写真映像『写真批評』の編集長。日本写真協会年度賞(1975年)、日本写真協会功労賞(1991年)。著書は、『東京昭和十一年』(晶文社、1974年)、『満州昭和十五年』(晶文社、1974年)、『私の写真史』(晶文社、1976年)、『一銭五厘たちの横丁』(岩波書店、2000年)2007年没、94歳。写真

桑山玉洲 (くわやま・ぎょくしょう/1746～1799年)

和歌山県生れ。ほぼ独学で絵を学ぶ。京都の文人画家の池大雅(1723～76)と親交を深め影響が顕著。白い顔料を大胆に散らして雪を表現した点は、来日した中国人画家である沈南蘋(1682～?)の画風に影響を受けた。1799年没、53歳。江戸中、後期の絵師、南宗画派(文人画派)

桑山忠明 (くわやま・ただあき/1932～2023年)

名古屋市生れ。1956年東京芸術大学卒。58年渡米、以降NY在住。61年NYで個展。ミニマル・アートを思わせる、モノクロームの緊張感漂う絵画を制作。変形キャンバスを使用することもある。近年は化学塗料を用いて、より人工的な美を追求している。96年千葉市美術館、川村記念美術館で個展。2023年没、91歳。洋画、現代美術(立体)

郡司和男 (ぐんじ・かずお/1930～1978年)

茨城県生れ。1958年東京芸術大学美術学部彫刻専攻科修了、第22回新制作展で入選し以後出品。60年新制作展で新作家賞。63年東京芸術大学非常勤講師。64年新制作展で協会賞。65年新制作臨会会員。75年「グループ偶」を結成、第1回展開催。78年金沢大学教育学部助教授。石川県で没、48歳。彫刻、美教

郡司硯田 (ぐんじ・けんでん/生誕年不詳～1975年)

水戸市生れ。天民の高弟。塀山南風に師事。1932年日本美術協会展入選、35年褒状。49年日本美術院小品展入選52年再興入選、以後入選を続出邦友。67年日光五大堂の格天井に花鳥画を奉納、塀山南風と日光東照宮の天井画の修復に従事。茨城美術会委員。茨城県美術展運営委員。茨城県文化団体連合理事。水戸市で没。日本画

け

芸阿弥 (げいあみ/1431～1485年)

1431年生れ。真芸とも称した。足利義政の同朋衆で、水墨画にすぐれ、父の能阿弥、子の相阿弥とともに三阿弥とよばれる。連歌もよくした。作「観瀑僧図」など。1485年没、54歳。室町中期の絵師

下条桂谷 (げじょう・けいこく/1842～1920年)

山形県生れ。米沢藩士の長男。1873年海軍省少秘書となり、のち海軍主計学校校長就任。退役後、97年貴院議員に勅選された。画家としては、初め米沢藩の絵師目賀田雲川に学び、上京後は鍛冶橋狩野の門下となって北宗画を修め、また大和絵、南画なども描いた。鑑識眼にもすぐれ、東京帝室博物館評議員を務めた。日本絵画名誉会員、日本美術協会終身会員で、79年佐野常民と竜池会(現・日本美術協会)をおこすなど美術界に大きく貢献。1920年没、78歳。大和絵、南画、北宗画

月 僊 (げっせん/1741～1809年)

名古屋生れ。7歳で得度、浄土宗の僧。仏門修行の傍ら、雲谷派の桜井雪館に画を学ぶ。その後上洛して知恩院に住し、円山応挙に師事して写実的画風の感化を受けた。与謝蕪村の影響も受け、さらに諸派に学んで独自の画風を確立。1774年伊勢国宇治山田の寂照寺を再興のため入山。画名が高まり画を請う者が絶えず。寺の伽藍・山門を建て、經典を購入して倉におさめ、山道の改修・天明飢饉の施米・宮川架橋・文化年間の伊勢大火罹災者の救済。門下に立原杏所・亜欧堂田善・村松以弘などがいる。1809年没、68歳。江戸時代中、後期の画僧

96 賢 円 (けんえん/生没年不詳)

円勢の次男として生まれる。現存する作品はほとんど無く、不明。1114年に父から兄と共に法橋に叙せられ、29年には仁和寺北斗堂にある仏像を製作したことにより法印に叙せられた。後に延勝寺、金剛心院等の仏像、『阿弥陀如来像』安楽寿院多宝塔に重宝。賢円の作品で唯一現存すると推定。『七仏薬師像』『六阿弥陀像』勝光明院に重宝。長円との共作とされている。平安時代の円派の仏師

元 賀 (げんが/生没年不詳)

下野国(栃木県)日光の人といわれる。室町後期の画家。雪舟の弟子であったといわれ、15世紀後半から16世紀にかけて活躍したと考えられている。遺作では花鳥画が多く伝わっている。室町後期の絵師

彦 一彦 (げん・かずひこ/1947年～)

1947年生れ。1984年「わらいうさぎをかいませんか」。85年「たいようはいしな」。86年「ぶんと・なかだ」。89年「猿島の七日間」。90年「かまどたいこん」、「どうさんとサメ」、**絵本、版画**

源 琦・駒井琦・源琦 (げん・き/1747～1797年)

京都生れ。円山応挙にまなび、長沢蘆雪とならび称された。唐美人図や花鳥画を得意とし、彩色にたくみであった。源(みなもと)姓から、源琦(げんき)とも称した。1797年没、51歳。**江戸中期-後期の絵師**

賢江祥啓 (けんこう・しょうけい/生没年不詳)

相模の出身、号は貧楽斎。建長寺の書記で通称啓書記。1478年上京して芸阿弥に師事、3年間画法を学んで鎌倉へ帰った。その後も上京し、南宋院体画の構成にならった水墨の山水画を描く。簡潔な構成と明晰(めいせき)な画風が特徴。代表作《山水図》(根津美術館蔵)など。**室町中期の画僧**

剣持 勇 (けんもち・いさむ/1912～1971年)

東京生れ。1932年東京高等工芸学校木材工芸科卒。商工省工芸指導所に入り技師となり、来日していた建築家のブルーノ・タウトに師事。椅子に求められる機能性の研究を行なう。52年日本人デザイナーとして初めて米国視察。55年剣持勇デザイン研究所を設立。スタッキングツール(秋田木工)をデザイン。日本独自のモダンデザインを目指すべくジャパニーズモダンを提唱。渡辺力・柳宗理・長大作・水之江忠臣らと共に日本のデザインの礎を創ったと言われる。1971年没、59歳。**デザイナー、デザイン研究所**

9

鳥山石燕について浮世絵を学び、勝川春章にも私淑していた。駿河小島藩・滝脇松平家の年寄本役として藩中枢に関与。1775年『金々先生栄花夢』で当世風俗を描き、安永天明期に自画自作の黄表紙を多数残し、洒落本や滑稽本などの挿絵も見られるが、錦絵は希少。76年執筆した黄表紙『鸚鵡返文武二道』が松平定信の文武奨励策を風刺。89年隠居し、1789年没、46歳。**江戸中期の戯作者、浮世絵師、黄表紙**

小池一誠 (こいけ・かずしげ/1940～2008年)

横浜市生れ。1962年多摩美術大学絵画科卒。主な展覧会:;68年トリックス・アンド・ヴィジョン展 盗まれた眼((東京画廊/村松画廊・東京)、個展中心に発表。2008年没、68歳。**洋画**

小池曲江 (こいけ・きょくこう/1758～1847年)

宮城県生れ。仙台藩士。江戸で松林瑤江に師事。沈南蘋の画や顔真卿の書をまなび、花鳥画を得意とした。東京の亀戸天神に岸駒との合作の花鳥画碑がある。1847年没、90歳。**江戸中-後期の絵師**

五井金水 (ごい・きんすい/1879～1942年)

大阪生れ。久保田桃水、中川蘆月らに絵を学び、船場派の山水花鳥を得意としたとされる。1903年内国勸業博覧会に『春暁』を出品。師の桃水、須磨対水らとともに「大阪の五水」と呼ばれ、関西を中心に広く好まれた。没年は1942年と推定、63歳。**日本画**

小池曲江 (こいけ・きょくこう/生誕年不詳～1665年)

絵師だった松村瑤江の弟子、画風を受けつぎ、中国の写生画のようなこまやかで美しい花鳥山水を描いた。この画風をはじめて東北地方につたえた。また、全国を旅行しながら絵を描きました。明治になって仙台藩「四大画家」のひとり。雲上寺には阿弥陀像を、松島の瑞巖寺には観音像を描いた石碑がある。1665年没。**江戸前期の仙台的絵師**

小石原 勉 (こいしはら・つとむ/1912～1998年)

京都生れ。独立美術京都研究所に入所。1935年新日本洋画協会結成に参加。37年独立美術協会展に入選。41年美術文化協会展で入選。47年美術文化協会の京都在住者で

恋川春町 (こいかわ・はるまち/1744～1789年)

結成の美術文化研究会(事務所は北脇昇方)に参加。1998年没、86歳。洋画

小泉智英 (こいずみ・ともひで/1944年～)

福島県生れ。1969年 多摩美術大学大学院修了。66年福島県総合美術展で文部大臣奨励賞。75年個展(資生堂ギャラリー)。85年山種美術館賞展に出品、現代日本画展に出品(海外巡回)。86年秋山庄太郎・小泉智英 二人展(村越画廊)。92年バルセロナ日本画美術展覧会に出品。2006年個展(村越画廊)。無所属。日本画

小泉巳之吉 (こいずみ・みのきち/1833～1906年)

1833年生れ。松島政吉の弟子。歌川貞秀、落合芳幾、月岡芳年、豊原国周の錦絵を担当している。1906年没、74歳。江戸末期から明治時代にかけての浮世絵版木の版師

小泉隆二 (こいずみ・りゅうじ/1907～1984年)

秋田県生れ。青山学院大卒、帰郷し、父の跡を継ぎ郵便局長。定年退職後、日本板画院展で十和田湖を題材にした作品が2年連続で入選。十和田湖や鉾山街など故郷の風景の版画、アメリカなどに外遊した際に描いた水彩画、大館市観光絵はがきの原画、郷土銘菓だった「鉾山最中」の箱を残した。1984年没、77歳。版画、水彩

鯉淵健治 (こいぶち・けんじ/生没年不詳)

水戸市生れ。集団「版」に出品。新構造展に出品、受賞。1969年茨城県芸術祭美術展で佳作。1970年茨城県芸術祭美術展で土浦市長賞。水彩

紅霞斎藤麿・喜多川藤麿 (こうかさい・ふじまる/生没年不詳)

喜多川歌麿の門人。数多くの画号をもっていたが、肉筆美人画の落款は、大半が「藤麿」であった。錦絵や版本の挿絵はほとんど見られないが、寛政-文政期(1789年-1830年)にかけて、肉筆美人画の制作で活躍した。その画風は、師の歌麿風は追従せず、独自の雰囲気をかもし出している。歌麿弟子入り以前は南画を学んでいたと思われ、他にも窪俊満や歌川豊春との関係や、芸術を愛好した狂歌師らとの交流も指摘されている。寛政から文化頃に肉筆画の秀作がある。版画作品は少ない。江戸後期の絵師

江 稼圃 (こう・かまぼ・Jiang Jia-pu/生没年不詳)

臨安(浙江省)の人。1804年以來しばしば来日し、長崎で文人画の指導、日本画壇が南宗画系山水画を学び取る端緒となった。中国よりも日本において著名。主要作品『溪山飛泉図』。来舶四大家の一人。(伊孚九・費漢源・張秋穀・江稼圃) 清の文人画家、南宗画派(文人画派)

康 慶 (こうけい/生没年不詳)

藤原期の太師定朝5代目の康朝の弟子と考えられ運慶の父、快慶の師。12世紀末に院派仏師や円派仏師といった旧勢力に圧せられていた慶派一門の勢力を挽回。南都の東大寺、興福寺の復興事業に当たっては運慶や快慶らとともに手腕。慶派発展の基礎を築いた。1177年蓮華王院五重塔の造仏の功で法橋となる。平安後期から鎌倉初期にかけて活躍した慶派の仏師

幸 慶 (こうけい/生没年不詳)

神田鍛冶町の仏師、関東真言律の総本山である靈雲寺(文京区湯島)の仏師。田安宗武の命によって愛染明王坐像(鹿沼市正藏院蔵)を制作。徳川家との関係もみられ、当時は名の通った仏師であったと考えられます。幸慶の作品は、本七件が知られています。1729年銘の東照権現坐像(栃木県日光市)等。江戸中期の仏師

黄 公望 (こう・こうぼう/Huang Gong-wang/1269～1354?年)

江蘇省生れ。博学の誉れ高く、一時仕官したがのち官を捨て、占い師などの放浪生活に入り、晩年、富春山に隠棲。巨然、董源(とうげん)の画法を学び独自の画風を完成。簡略な皴法(しゅんぽう)によるものと、淡彩で細密なものとの2作風あり、清らかな気韻が特色。代表作『富春山居図巻』(沈周本)、著書に『写山水訣』がある。1354年?没、85歳。中国、元末の文人画家で元末四大家の一人

高 嵩溪 (こう・すうけい/1760～1817年)

江戸生れ。高嵩谷(すうこく)の子ども、門人で婿養子ともいわれる。江戸浅草(せんそう)寺の狸々(しょうじょう)舞の画で評判になったという。1817年没、58歳。江戸中期-後期の絵師

高 嵩谷 (こう・すうこく/1730～1804年)

江戸生れ。英一蝶門人の佐脇嵩之に師事。山水のほか武者絵は狩野探幽の画法を研究。子に高嵩溪、嵩嶽がいる。嵩嶽は早死。嵩溪が二世嵩溪と号した。1804年没、75歳。日本画

幸田暁治 (こうだ・ぎょうや/1925～1975年)

京都生れ、京都市立美術工芸学校絵画科を経て、絵画専門学校卒。1955年池田遙邨の画塾青塔社に入塾、73年からは無所属、個展活動。1956～72年日展で10数回入選。京展、日春展、青塔社展等で受賞。71年山種美術館賞展では「収穫」が推選。作品は、童女を中心とする人物画ユートピアの風景、擬人風な花、動物を通じて心象的日本画の新しい内面を探求。1975年没、50歳。日本画

幸内純一 (こうち・じゅんいち/1886～1970年)

岡山県生れ。水彩画家の三宅克己に師事した後、1906年太平洋画会の研究所へ通った。08年三宅の紹介で漫画雑誌『東京パック』の同人、北澤楽天の門下生として政治漫画を描く。12年入社した東京毎夕新聞社では、5年にわたって一面の政治漫画を担当。17年アニメーション『塙内名刀之巻(なまくら刀)』を製作。23年のスミカズ映画創作社設立。31年公開の『ちよん切れ蛇』を最後にアニメーションの製作を辞め、再び政治漫画家として腕を振う。1970年没、84歳。漫画、アニメ、版画

河内山賢祐 (こうちやま・けんすけ/1901～1980年)

山口県生れ。1930年東京美術学校彫刻科卒。在学中から帝展に入選し、第4回新文展から無審査。しかし、活動の中心であった塊人社は、44年解散。55年頃まで活動。アカデミズムのなかで培われた堅実で重厚な人体造形を本領として、山口県内各地での肖像彫刻制作で活躍。1980年没、79歳。彫刻

高鶴 元 (こうづる・はじめ/1938年～)

福岡県生れ。上野焼窯元高鶴夏山の長男。1957年佐賀県立有田工業学校窯業科卒。家業を継ぐ。65年独立し粕屋郡久山町に築窯。68、69年に日本伝統工芸展で連続受賞、日本工芸会正会員。ハーバート大学での陶芸指導のため80年に渡米、ピーボディ博物館の

研究員等も務める。以後、極彩色のオブジェや陶板など前衛的な作品を日米で発表する。古上野焼の研究家。97年に福岡県文化賞受賞。陶磁

黄 土水 (こう・どすい、台湾語:”NG, Thó-Súi Huang Tu-Shui/ 1895～1930年)

台北市生れ。1915年台湾総督府国語学校(後の台湾総督府台北師範学校)公学師範科乙科を卒業。国語学校長隈本繁吉および総督府民政長官内田嘉吉の推薦を受け、15年東京美術学校彫刻科木彫部に留学、高村光雲の門下に入った。20年彫刻作品が台湾人としては初めて帝展に入選。22年『みかど雉子』と『双鹿』の木彫二点を宮中に献上。22年東京美術学校研究科を修了。1930年没、35歳。彫刻

河野 薫 (こうの・かおる/1916～1965年)

小樽市生れ。油彩、版画ともに殆ど独修で、日本版画協会、国展に版画を出品し、1954年日本版画協会会員。国画会では55年国画会賞、61年会員。64～65年外務省によるデンマーク、スウェーデン、イタリーにおける現代日本版画展に出品。65年にはクアラルンプールの現代日本版画展出品。1965年没、49歳。版画、洋画

幸野西湖 (こうの・せいこ/1881～1945年)

京都生れ。幸野模嶺の次男。兄は日本画家森本東閣。父と谷口香嶺に学び、京都美校絵画科卒。竹内栖鳳に師事。日本絵画協会第三回絵画共進会で二等褒状。1945年没、64歳。日本画

河野秋邨 (こうの・しゅうそん/1890～1987年)

愛媛県生れ。田近竹屯に師事。帝展などに出品。1921年水田竹圃らと日本南画院を結成。60年松林桂月らと同院を再興し理事長。海外での巡回展。1987年没、97歳。日本画、南画

河野次郎 (こうの・じろう/1856～1934年)

江戸生れ。足利戸田藩士・杉本奥太郎安志の三男。足利学校に入った。この頃、田崎草雲に南画を学んだ。1874年上京し高橋由一に洋画を学んだ。76年河野権平家に養子として入籍。76～82年愛知県師範学校に画学教員として勤務、一時期、愛知県中学校も兼務し

た。82～1806年まで長野県師範学校松本支校に勤務。06年長野市に「河野写真場」を開業。この頃に号を「無声」と改め、終生これを使った。1934年没、77歳。南画、洋画、美教、写真

河野鷹思 (こうの・たかし/1906～1999年)

東京生れ。1929年東京美術学校図案科卒。松竹の宣伝部に入り、ポスター、舞台美術、衣裳(コスチューム)、パッケージ、ディスプレイ、(屋外の)サインなど、幅広いデザインをこなした。名取洋之助の日本工房に参加。雑誌NIPPONのレイアウト、グラフィックデザイン担当。40～41年日本写真工芸社に参加し、『VAN』と『NDI』という対外宣伝誌のデザインを担当。戦後は、日宣美(日本宣伝美術会)にも参加。デザイン事務所「デスカ・DESKA (DESIGNERS KONO ASSOCIATES)」を59年会社組織として創設。仲條正義、福田繁雄、江嶋任、森下俊彦、日下弘らが参加。札幌オリンピックポスター、万国郵便連合100年記念切手、大阪万博日本政府館の展示デザインなど手がけた。旧第一勧業銀行のハート(赤地に白のハート)のロゴマーク。93年ロイヤルノサエティ・アーツから、ロイヤルデザイナー・フォア・インダストリー(英語版)に選出。62年女子美術大学教授、愛知県立芸術大学で教鞭を執る。66年講師、68年教授、83～89年学長。1999年没、93歳。グラフィック・デザイナー、商業デザインの草分けの1人、舞美、美教、学長

河野富弘 (こうの・とみひろ/1980年～)

愛媛県生れ。高校卒業後は大阪で美容師としての修行を積んだ。その後原宿のサロンで働くため、上京。雑誌『FRUITS』が街中でスナップ撮影をしていたり、裏原ブームがあったりと、ストリートカルチャーが色濃く残る当時の原宿は、彼にとって原風景。2000年代初頭から、大阪、東京、ロンドン、そしてニューヨークの四都市を舞台に、美容師、セッションスタイリスト、ヘッドプロップアーティストといった数々の肩書きでファッション・ビューティー業界に君臨してきた。14年から9シーズン連続で彼が制作したジュンヤワタナベコムデギャルソンのヘッドピースを知る人も少なくないだろう。17年頃には「キャリアの初めごろから興味があった」というウィッグメイキングを本格的に開始した河野。独創的でカラフルな彼のウィッグは、インスタグラム上で人気を博し、近年ではビョークやグライムス、マーク・ジェイクブス、メロン・マルジェラといった超ビッグネームとのコラボレーションも果たしている。美容師、セッションスタイリスト、ヘッドプロップアーティスト

高野 達 (こうの・とおる/1922～1983年)

熊本県生れ。1944年東京武蔵工業専門学校建築工学科卒。51年海老原喜之助に師事しデッサン、水彩を学ぶ。53年青々水彩展に出品し西日本新聞社賞。福岡市立住吉中学校ほか市内の公立中学校に勤務。64年示現会に初出品し、会友。64年日展に入選し、以後7回入選。70年示現会展で会員。穏和な画風を展開し、美術教育の現場で長く功労があった。1983年没、61歳。洋画、水彩、美教

幸野棋嶺 (こうの・ばいれい/1844～1895年)

京都生れ。9歳で円山派の中島来章の門に入り、梅嶺と号した。その後四条派の塩川文麟につき、号を棋嶺と改めた。明治維新のころは極貧であったが、漢籍を神山鳳陽に学び、また文人と交わり、中西耕石、前田暢堂に南画を学んで一家をなし、とくに花鳥画を得意とした。1880年に望月玉泉らと京都府立画学校を設立し、出仕。京都青年絵画研究会、京都美術協会を組織するなど、日本画の発展と後進の指導に尽力。その門より京都画壇を代表する竹内栖鳳、菊池芳文、川合玉堂、都路華香、上村松園らの画家が多数輩出した。93年帝室技芸員。1895年没、51歳。日本画、南画

こうの史代 (こうの・ふみよ/1968年～)

広島市生れ。中学生のころから漫画を描き始め、広島大学理学部に入学し、イラストマンガ同好会に所属。本職の漫画家を志して大学を中退し上京。とだ勝之、谷川史子らのアシスタントを経て、1995年「街角花だより」でデビュー。2004年「夕風の街桜の国」で第8回文化庁メディア芸術祭マンガ部門大賞、第9回手塚治虫文化賞新生賞。原爆とは何だったのかを伝える渾身の作品は田中麗奈主演。漫画

高 芙蓉 (こう・ふよう/1722～1784年)

山梨県生れ。20歳のころ京都いき儒学をまなび、刻印をはじめ。のち秦や漢の古印を手本とした作風で篆刻界を一変させ、印聖とよばれた。池大雅、韓天寿、柴野栗山らとしたかった。1784年没、63歳。江戸中期の篆刻家

高力猿猴庵 (こうりき・えんこうあん/1756～1831年)

尾張藩士。神社仏閣、世態風俗などを独自の浮絵のようにみえる描き方。1777年～1826年「猿猴庵日記」(未刊)などと称して身の回りのことから絵入りの記録を作成。82年『尾張劇場事始』(伊勢屋忠兵衛版)を版行。86年藩侯の供を務め、江戸から名古屋までの道中を記録、96年『東街便覧』を出版。95年絵図の『熱田正遷宮絵図』、翌年黄表紙『きつひむだ枕春乃目覚』を著した。1831年没、75歳。江戸時代の名古屋の浮世絵師

五雲亭貞秀 (ごうんてい・さだひで/1807～没年不詳)

初代歌川国貞の門人。横浜絵の第一人者。精密な鳥瞰式の一覧図で知られる。江戸後期、明治期に活動した浮世絵師、横浜絵

國府 理 (こくふ・おさむ/1970～2014年)

京都生れ。1994年京都市立芸術大学大学院美術研究科修了。「夢の乗り物」を思わせる大型の立体作品を制作。科学技術に対する強い関心を反映した作品は、造形表現のみならず、機器としての機能性も持ち合わせる。後に植物を取り込んで文明社会と自然環境を対比させ、その関係性を問い直す作品を発表した。93年より野村仁が主宰する「Solar Power Lab」に参加、ソーラーカーの制作やレース参戦、アメリカ大陸横断などを技術面で支えた。2009年「神戸ビエンナーレ」招待作家展、13年「あいちトリエンナーレ」に出品。2014年没、44歳。造形、彫刻

国府 克 (こくふ・かつ/1937年～)

京都生れ。京都市立日吉ヶ丘高校日本画科卒。1957年より堂本印象の東丘社に入塾。同社展と日展、京展を中心に出品。69年改組日展にて特選・白寿賞。京展では77年の京展賞を含み4度の受賞。日春展においても75年に奨励賞、87年には日春賞。日本画

国分文友 (こくぶん・ぶんゆう/1823～1900年)

1823年生れ。四条派の松村景文(けいぶん)にまなぶ。幕末、山階宮晃(やましなのみぎやあきら)親王につかえ、維新後は文人画に専念。1900年没、78歳。幕末-明治期の絵師

国米元俊 (こくまい・もととし/1879～1957年)

鳥取県生れ。国米24歳の時、山陰地方の古社時調査に訪れた岡倉天心に引き合わさ

れ、天心添え書きをもって奈良に赴き日本美術院(第2部)に入所、長らく仏像修理に携わった。メンバーほとんどが東京美術学校出身者のなか、わき目もふらず努力を重ね、頭角を現した。1957年没、78歳。仏像修理

小坂圭二 (こさか・けいじ/1918～1992年)

青森県生れ。野辺地中学校在学中に阿部合成に師事。42年東京美術学校彫刻科に入学して柳原義達に師事。46年東京芸術大学に復学し、菊池一雄教室に学ぶ。50年同校卒。50年から菊池一雄教室の助手。50、52年新制作協会展で新作家賞。52、3年東北十和田湖畔の「乙女の像」を制作中の高村光太郎の助手。59年新制作協会彫刻部会員。60年渡仏し、フランス国立美術学校に入学。ヤンセスに師事し、エジプト、ギリシャ、ヨーロッパ各国を旅して、62年帰国。70年大阪万国博覧会 Expo'70 のキリスト教館に「世界の破れを担うキリスト」を出品。73年「断絶の中の調和」がバチカン現代宗教美術館買上げ、74年東京カテドラル大聖堂に「太平洋の壺」が納入。80、81年高村光太郎大賞展で優秀賞。67年十字架の造型に興味を抱き、「ザ・クロス」、「新渡戸稲造」立像等、肖像彫刻も多く手がけた。1992年没、74歳。彫刻

小坂芝田 (こさか・しでん/1872～1917年)

長野県生れ。初め丸山山外に南画を学ぶ。1888年児玉果亭に入門、画塾竹仙山房で南画と書を学んだ。90年上京し、いとこの中村不折と同居する。浪速画会共進会、日本美術協会、日本画会などに出品し、受賞。1906年山岡米華らと日本南宗画会を創立し、文展開設に際し、正派同志会に参加。08年文展で3等賞、09、10、11年褒状、11、12年2等賞となり、山水画に秀作を残した。11年画塾積翠山房を開き、後進の指導にあたった。1917年没、45歳。日本画、画塾

小崎隆雄 (こさき・たかお/1929～2015年)

1929年生れ。東北大学教育学部卒。洋画家杉村博に師事。中学校の美術教師。66年光風会展に入選、74年会友。日展、日洋会展、河北展、県芸術展などで作品を発表。73年東北・北海道選抜美術展出品。82年日洋会展審査員。85～90年「仙台市彫刻のある街づくり」委員。85～98年宮城県美術館協議会の委員。68年日展に入選(以後入選18回、84年会友)、宮城県芸術祭美術展にて芸術祭賞。97年郵政大臣表彰、明仁天皇に拝謁。2002年

地域文化功労者文部科学大臣表彰。2015年没、86歳。洋画、美教

子鹿尚久（こしか・たかし/1922～2011年）

水戸市生れ。1950年彫刻家後藤清一に師事。54年塊土社設立に参加、54年二科展に入選し、57年二科展で特待賞。61年二科会会友、69年二科会会員。69年兜屋画廊（銀座）で個展開催。80年笠松運動公園（茨城県）に「虹」を制作。87年二科展でローマ賞。88年ローマに留学。2011年没、89歳。彫刻

越塚友邦（こしづか・ゆうほう/1875～1936年）

石川県生れ。はじめ陶画工として活動するが、1892年画家を志して上京し、橋本雅邦に師事。1900年日本絵画協会・第3回日本美術院連合絵画共進会に出品、三等褒状。04年二葉会展に出品し、二等賞。07年第1回文展に出品。14年再興第1回院展に出品。金城画壇特別会員。1936年没、61歳。陶画、日本画

小柴春泉（こしば・しゅんすい/1898～1943年）

1898年生れ、小室翠雲について学び、旧文展に1回、帝展に4回入選。旧日本画会員。1943年没、46歳。日本画

小柴春泉（こしば・しゅんせん/1898～1943年）

1808年生れ。小室翠雲について学び、旧文展に1回、帝展に4回入選。旧日本画会員。1943年没、46歳。日本画

小島一谿（こじま・いつけい/1899～1974年）

岐阜市生れ、のち横浜に移住。川端絵画研究所洋画部に通うが、日本画に転ずる。1916年前田青邨に師事。中島清之らと津登比会を結成。第13回院展で初入選。日本美術院賞、院展で奨励賞。日本美術院院友。横浜で没、75歳。日本画

小島敬三郎（こじま・けいざぶろう/1934～2010年）

山口県生れ。東京教育大学芸術学科卒、福岡県立高校教員。示現会展に出品。1971年示現会会員、2003年迄同展で途切れることなく活動した。79年熊本大学教育学部助教授、

2000年崇城大学教授に就任、退官後の15年からは北九州市立美術館長。明朗な色調と軽快でリズムミカルな造形で、生まれ育った門司の港風景を描き続けた。2010年没、76歳。美教、美術館長、洋画

小島信明（こじま・のぶあき/1935年～）

福井県生れ。大阪市立工芸高等学校卒。1958年より読売アンデパンダン展に出品。62年のアンデパンダン展ではドラム缶の中に本人が一日中立っているというパフォーマンスで注目を集め、篠原有司男らとの交流が始まる。64年に代表作〈立像〉を発表、来日中のジャスパール・ジョーンズに注目される。62年のパフォーマンスが〈立像〉。現代美術、彫刻、パフォーマンス

古嶋松之助（ふるしま・まつすけ？/生没年不詳）

東城鉦太郎に師事。戦時中に満州、中国北部中部に従軍画家。東城鉦太郎の「三笠艦橋の図」「日本海海戦」のレプリカを北蓮蔵ともに制作。1941年聖戦美術展に出品。41、42、43、44年海洋美術展に出品。洋画、軍事絵葉書

小島老鉄（こじま・ろうてつ/1793～1852年）

愛知県生れ。狩野派の吉川一溪、文人画の山本梅逸にまなぶ。江戸で詩人の大窪詩仏（おおくぼしぶつ）と交遊、のち帰郷して画業に専念、絵屋友七と称した。1852年没、60歳。江戸後期の絵師

小清水量造（こしみず・りょうぞう/1955年～）

神奈川県生れ。1979年武蔵野美術大学実技専修科研究課程修了、神奈川県国際版画アンデパンダン展（～'97）（神奈川県民ギャラリー）。80年日本版画協会展（～'81）（東京都美術館）。81年モダンアート展（～'98）で新人賞（東京都美術館）。84年川崎市美術展で優秀賞、85年特選（川崎市産業文化会館）。90年神奈川県美術展で特選、具買上げ（神奈川県民ギャラリー）。モダンアート協会会員。版画

下條桂谷（ごじょう・けいこく/1842～1920年）

山形県出身。米沢藩の絵師目賀田雲川に師事し、狩野派の画を学ぶ。維新後画業の傍

ら海軍主計学校長、海軍主計大監、貴族院議員などを歴任し政界に入る。1875年狩野探美らと古書画鑑賞会を結成。79年龍池会(現日本美術協会)の結成に参加。82年内国絵画共進会で審査員。83年巴里日本美術縦覧会に出品、87年日本美術協会委員長。1904年米国セントルイス万国博覧会では金牌。1920年没、78歳。日本画、日本美術協会委員長

呉昌碩 (ご・しょうせき/1844~1927年)

浙江省生れ。篆刻家であった父に篆刻を学ぶ。1856年学問を究め、各地の儒者として勤める。画を任伯年に学んで、本格的に開始する。82年には蘇州、ついで上海に居を構え篆刻と、画業で生活。94年に日清戦争が始まると、呉大徴の幕客として活躍を示す。1903年西湖畔に西泠印社を設立して、社長に就任。以降は会社経営、画家、篆刻家を業。1927年没、83歳。画家、篆刻

小杉武久 (こすぎ・たけひさ/1938~2018年)

東京都生れ。東京藝大在学中に水野修孝らと日本で最初のフリーミュージックとイベントを行う「グループ・音楽」結成。同時期にフルクサス運動に参加、ニューヨークやヨーロッパで同好の芸術家と接触。1964年、武満徹、一柳慧と Collective music 結成。美術館でサウンド・インスタレーションの発表も旺盛に行う。82年ポンピュク美術学校の客員教授赴任。86年パリのポンピドゥー・センターでの「前衛芸術の日本1910—1970」展に出品、会場でパフォーマンス。94年マース・カニングハム舞踊団日本公演(新宿文化センターほか)。インターメディアアート、即興音楽、サウンド・インスタレーションのパイオニア。2018年没、80歳。造形、インターメディアアート、即興音楽、サウンド・インスタレーションのパイオニア

50

小関綾子 (こせき・あやこ/生誕年不詳~)

東京生れ。福島県立喜多方高等学校中退。会津美術展で術協会賞、佳作13回。県水彩画展で特選、日本水彩画会賞、奨励賞3回。シルバー展 福島県知事賞、福島民友賞、県教育長賞。福島県美術協会展で佳作3回、会友佳作1回。福島県総合美術展で入選12回。2005年 会津総合美術展 会津美術賞。会津総合美術展 奨励賞 福島県水彩画会、イーゼル会。水彩

巨勢金岡 (こせの・かなおか/生没年不詳)

神泉苑の監で、従五位下采女正になったという。元慶四年(八八〇)、宮中に先聖師九哲像の壁画を描き、また、藤原基経の五十賀の屏風を描くなど、当時の画壇の第一人者として活躍。唐絵を日本化し「新様」と呼ばれる新しい様式をうみだした。作品は伝わらない。平安前期の絵師、巨勢派の祖

巨勢公望 (こせの・きんもち/生没年不詳)

巨勢金岡(かなおか)の子ども孫ともいわれる。兄公忠(きんただ)をつぎ、絵所(えどころ)長者となる。「源氏物語」絵合の巻に公望がえがいた大極殿の儀式の絵巻が登場し、「古今著聞集」にはあたらしい画風をしめた画家として位置づけられ、やまと絵画風成立の先駆とされる。名は公茂ともかく。平安中期の絵師、やまと絵画風成立の先駆

五粽亭広貞 (ごそうてい・ひろさだ/生没年不詳)

弘化から文久年間に活躍。画号は五粽亭。幕末の上方役者絵師の中心的存在。江戸後期の絵師

小竹信節 (こたけの・ふたか/1950年~)

東京生れ。東京造形大学中退。1975~83年演劇実験室◎天井桟敷の舞台美術を手がける。以後、寺山修司後期の演劇や映画の美術、衣装、照明などを担当。83年寺山修司の死去で天井桟敷が解散。演劇、オペラ、コンサートなどの舞台美術を手がけながら、造形作家としても活動を展開する。86年感傷の機械展(ポンピドゥーセンター、パリ)招待出品。NY・アート・ディレクターズ・クラブ銀賞。95年文化庁芸術家在外派遣研修員として渡英。劇団「ロイヤル・シェイクスピア・カンパニー」で1年間研修。97~2020年武蔵野美術大学空間演出デザイン学科専任教員、02年読売演劇大賞優秀スタッフ賞。20年武蔵野美術大学名誉教授。舞美、映美、造形、美教

小谷くるみ (こたに・くるみ/1994年~)

大阪生れ。2017年京都造形芸術大学油画コース卒、19年京都造形芸術大学修士課程修了。存在の痕跡や気配をテーマに絵画作品を発表している。近作に、自身のオカルト・ホラーへの興味から展開され、結露した窓に誰かが指で落書きしたようなイメージによって不確かな存在を浮き上がらせる「21g」シリーズ、支持体に染みついた錆を、時間や変容、事物の

痕跡の象徴として用いた「時間・痕跡(鏽)」シリーズなどがある。これまでの個展に、「ブラインド」(MEDEL GALLERY SHU、東京、2020)、「MESSAGE」(SUNDAY、東京、2019)、「SIGN」(西武渋谷店 美術画廊、東京、2019)など。(美術手帳)現代美術、洋画

小谷 謙 (こたに・けん/1920～2012年)

兵庫県生れ。1946年東京美術学校卒。56年行動美術協会会友。58年行動美術協会会員。60集団現代彫刻展 2回、3回も。61年宇部市野外彫刻展。63年現代美術京都秀作展 日本国際美術展。66、68、82、85、90年京都にて個展。2012年没、92歳。彫刻

小田部黄太 (こたべ・こうた/1959年～)

福岡市生れ。彫刻家小田部泰久の長男。1984年東京芸術大学美術学部彫刻科卒、92年から九州造形短期大学に赴任し、のち教授。95年から県美術協会会員として市・県美術展、グループ展などで、鉄材を溶接した構成的な作品を発表。彫刻、美教

小田部泰久 (こたべやすひさ/1927～2008年)

福岡市生れ。はじめ富永朝堂に木彫を、のち安永良徳に塑造を学ぶ。1857年東京芸術大学彫刻科卒、同校専攻科も修了。56年新制作協会展へ出品、68年から無所属。63年グループを結成。73年から県美術協会副会長、会長、理事長。87年福岡市文化賞。福岡の美術活動の発展に寄与した。肖像彫刻や野外モニュメントを数多く制作するほか、抽象的でユニークな人物像も発表した。2008年没、81歳。彫刻、モニュメント

江田正盛 (こた・まさのり/1948年～)

大分県生れ。1973年東海大学教養学部芸術学科卒。75年東京芸術大学大学院美術研究科修了。73年新制作協会展・新作家賞(東京都美術館)。80年回高村光太郎大賞展・佳作賞(箱根彫刻の森美術館)。83年神戸具象彫刻大賞'83(神戸ポートアイランド)。99年手で見ると展覧会パート2「江田正盛の世界」(横浜美術館)。彫刻

児玉素光・素行 (こだまそこう/1890～1966年)

長野県生れ。1906年下村観山に師事。1915年日本美術院習作展に出品、日本美術院院友。19年日本美術院試作展で乙賞。20年素行と号す(昭和に入り号を素光と改める)。26

年再興院展に入選(30年、32年入選)。30年木村武山に師事。東京で没、76歳。日本画

児玉成弘 (こだま・しげひろ/1932年～)

大分県生れ。1955年大分大学教育学部卒。59年二紀会展に初入選。62年行動美術協会展に入選。以後、同展を主舞台に活躍。83年行動美術協会展で奨励賞。91年行動美術協会会員。県下では、大分前衛美術会、7人の会、潮流の会等に参加。洋画

児玉靖枝 (こだま・やすえ/1961年～)

兵庫県生れ。京都市立芸術大学大学院美術研究科絵画専攻修了。2009年より東京や京都、大阪のギャラリーを中心に、展覧会シリーズ「深韻」を継続的に開催。近年のグループ展に、「モネーそれからの100年」(名古屋市美術館/横浜美術館、2018)、「Flower」(日本橋高島屋 美術画廊X、2015)、「ほっこり美術館」(横須賀美術館、2015)、「クインテット—五つ星の作家たち」(損保ジャパン 東郷青児美術館、東京、2014)に出品。洋画

牛腸茂雄 (ごちよう・しげお/1946年～)

新潟県生れ。1965年新潟県立三条実業高等学校卒、桑沢デザイン研究所リビングデザイン科入学、その後、リビングデザイン研究科写真専攻に進む。68年同校卒業。デザインの仕事と並行して写真を撮り続ける。77年「SELF AND OTHERS」(白亜館)を自費出版。78年本写真集と展覧会により日本写真協会賞新人賞。1983年没、36歳。写真

五蝶亭升 (ごちようてい・さだます/生没年不詳)

天保から嘉永期に活躍した大坂の浮世絵師。役者絵のほか、風景画で知られる。素封家で、流派の普及に私財を投じるが、晩年は四条派に転じたともいわれる。江戸後期の大阪の浮世絵師

古長康典 (こちよう・やすのり/1937年～)

旧満州生れ、大分市に育つ。大分大学学芸学部卒業後、1969年頃より独学で油彩画からシルクスクリーン版画に転向する。以後、県内で教鞭をとりながら、モダンアート展、大分県美術展などに作品を発表。76年モダンアート部門賞。89年モダンアート会員。洋画、版画

小塚省治 (こづか・しょうじ/1901～1942年)

1901年生れ。33年日本蔵書票協会を設立し、蔵書票を海外に紹介すると共に外国の蔵書票を国内に紹介するため、蔵書票専門雑誌『蔵書趣味』(33～38年)を創刊。毎号実物の蔵書票を貼り込み、文献、協会記事、各国蔵書界のニュースと解説を付して掲載。その年に制作された蔵書票を『日本蔵書票協会年報』(34～36)として刊行。特製会員本や上製頒布本などの『日本蔵書票協会蔵票集』(33～39)出版。1942年没、41歳。蔵書票蒐集、蔵書票を制作

小寺稲泉 (こでら・そうせん/1883～1945年)

名古屋市生れ。土佐派の森村宜稲に師事。復古大和絵派に傾倒した。日本美術協会展で受賞。鳥獣戯画を連想させるユニークな本作は、蛩を先頭にバッタや蝶々など様々な虫たちが大名行列を繰り広げる様子が描かれています。これは幕末から明治にかけて大名行列を揶揄する風刺画として流行した絵柄、稲泉が活躍したのは大正・昭和にかけて。純粋に絵柄の面白さを楽しんで描いた。1945年没、62歳。日本画、復古大和絵派

後藤愛彦 (ごとう・あいひこ/1905～1991年)

東京生れ。八幡中学で安藤義茂に指導を受ける。卒業後、八幡製鉄所で製図工として働いたのち、1933年青山熊治に師事、川端画学校で学ぶ。戦後八幡に戻り、佐藤一章に師事、東光会や日展に発表する。佐藤の死後は東光会を退会。73、74年のヨーロッパ、トルコ旅行をへて発表の場を東京から北九州に移し、原色に近い強い荒々しい筆触による独自の画境を拓いた。1991年没、86歳。洋画

後藤 学・学一 (ごとう・がく/1907～1983年)

高松市生れ。1925年より北原千鹿に師事し、東京美術学校金工科で清水南山、海野清に学ぶ。31年帝展に入選。31年同校卒。32年より香川県立工芸学校金工部で教鞭。58年香川県立高松工芸高等学校長および同県漆芸研究所長。上戸女子短期大学で講師。帝、文、日展に出品、入選。鉄や銅合金板を薄く打出した地に蹴鞠の風の線彫り、透彫、布目象嵌などを用いて文様を施し、古典的で繊細な作風を示した。高松市で没、76歳。彫金、美教

後藤杏塙 (ごとう・きょう/1907～1973年)

長野県生れ。橋本関雪に師事し、日本美術院院友となる。のち前田青邨の門下となり東都画壇的な画風を成した。1973年没、66歳。日本画

五島耕畝 (ごとう・こうほ/1882～1958年)

茨城県生れ。1901年上京し、荒木寛畝に入門し花鳥画を学ぶ。03年日本美術家協会展で2等賞、翌年会員。08年文展で入選。15年文展で褒状。30年帝展より無鑑査。37年茨城美術展審査員。日展委員。東京で没、76歳。日本画

後藤貞行 (ごとう・さだゆき・ていこう/1850～1903年)

箱根生れ。紀州藩士の次男。駿河国で育ち、1858年より和歌山で文武を学ぶ。廃藩置県後は東京などで兵馬術を学ぶ。74年よりフランス人デシャルムに西洋画を教わる。75年陸軍戸山学校の図画掛となる。80年から軍馬局に勤める。石版画、写真術などを学んだのち、高村光雲と知り合って木彫を学ぶ。84年駒場農学校に勤務。天皇の乗馬「金華山号」を銅像にして知られる。90年東京美術学校に勤務、楠木正成銅像の共同制作を行う。上野恩賜公園の西郷隆盛像(98年除幕)の犬「ツン」を制作。98年岡倉覚三(天心)の辞職に伴い美術学校を辞め、野にあって彫刻を行い、最後は盛岡にあったという。1903年没、53歳。彫刻

東京のデザイン学校に通う。76年東京で初個展。この頃から版画制作を始める。95年デザイナーの仕事を辞め、絵画に専念する。99年「シリーズVI[岩手の現代作家]ゴトウ・シュウ・田村史郎」展(萬鉄五郎記念美術館)を開催。「ゴトウ・シュウの平面世界」展(光と緑の美術館)を開催。2002年帰郷し、廃校になった小学校にギャラリーを開設。2000年「2012 MOMAS コレクション 第1期」(埼玉県立近代美術館)にて特集展示。2019年没、79歳。版画

後藤順一 (ごとう・じゅんいち/1948年～)

京都生れ。京都市立芸術大学を卒業後、フランス美術賞パリ展、海洋博を描く現代絵画展、シェル美術賞展、次代への日本画展などの展覧会に出品。1984年春の院展入選、92年院展奨励賞(以降も連続受賞)。93年春の院展奨励賞(以降も連続受賞)。96年には春の院展外務大臣賞。下田義寛に師事。日本画

後藤真吉 (ごとう・しんきち/1896～1961年)

大分県生れ。大分工業徒弟学校(現・大分工業高校)卒業後、1916年上京。洋画塾・川端画学校で洋画を学んだ。19年頃から中央美術展で活躍、24年帝展に入選。30年モスクワ経由でパリに渡り、絵画アカデミーに学びながらサロン・ドートンヌに出品。32年帰国。一時大連で教壇に立った。37年別府に住み光風会展や一水会展に発表。1961年没、65歳。洋画、美教

後藤末吉 (ごとう・すえきち/1931～2023年)

茨城県生れ。1950年茨城県美術展に入選。53年茨城大学教育学部美術科卒。53年茨城県美術展で受賞。54年日展展に入選(56年会員)、第10回日展に入選。77年茨城大学教育学部教授(96年退官、名誉教授)。86年芸術グラフ賞、芸術公論賞。95年パリ平成芸術祭で平和芸術大賞。96年国際秀作美術大賞(フランス)。2023年没、91歳。彫刻

後藤清一 (ごとう・せいいち/1893～1984年)

茨城県生れ。富岡周正に牙彫をまなぶ。東京美術学校(現東京芸大)で高村光雲に師事。木彫をはじめ。仏教に傾倒、作品のモチーフとした。1930年構造社会員。58年日展評議員となり、60年同展で「双樹」が文部大臣賞。1984年没、90歳。彫刻

後藤清吉郎 (ごとう・せいきちろう/1898～1989年)

大分市生れ。京都の関西美術院に学ぶ。生活に結びついた工芸に志し、和紙工芸に注目。その源となる技法をアジア諸国に求め、1927年より3年間インド各地を巡遊、研究する。42年国画会展に入選、42年新文展に入選。43年新文展、46年日展に出品。47年国展で会友、50年に会員、同展審査員。型染、印伝金唐革などの技法を和紙工芸に応用し、画面全体にモチーフをちりばめる装飾的な作風の調度などを制作。78年静岡県無形文化財に指定された。著書に『紙譜帖』『和紙印伝』『日本の紙』『紙と漆』『紙の旅』『紙漉村』。静岡県で没、91歳。工芸家(和紙)、版画

後藤忠光 (ごとう・ただみつ/1896～1986年)

秋田生れ。旧制秋田中学卒、本郷洋画研究所で学ぶ。1920年未来派美術協会展に出品。21年版画と詩の雑誌『青美』を創刊、21年ロシア人画家パーヴェル・リュムパルスキーに感化された版画を制作、22年日本創作版画協会展に出品。大震災後、大場清泉らと秋田美術

展覧会を開催。『秋田魁新報』に挿絵をしばしば掲載。26年上京凶案家として生計をたてながら版画も制作。1986年没、90歳。版画、挿絵、凶案

後藤貞行 (ごとう・ていこう/1850～1903年)

和歌山生れ。陸軍軍馬局などにつとめ、高村光雲に師事して馬の彫刻を得意とした。1890年東京美術学校(現東京芸大)雇となり、光雲のもとで「楠公像」の馬、「西郷隆盛像」の犬を制作。1903年没、55歳。彫刻

後藤良 (ごとう・なおし/1882～1957年)

東京生れ。彫刻家後藤貞行の次男。父貞行について彫刻を学び、また高村光雲について伝統的な木彫技法の修業に励んだ。1902年東京美術学校彫刻科(木彫)選科卒。14年東京美術学校彫刻科研究室に入り、能彫に専念し、戦後の晩年は研究と製作。能美会、能彫会の主導的役割を果たした。21年前記研究室を去ると共に本郷区駒込に制作室を建設し、後進の指導や前記能美会の中核的存在として活躍。戦後能美会を能彫会として再出発し、当展覧会や日展に「能彫」によって至高な彫技の程を開陳した。東京で没、75歳。彫刻、美教、彫研

後藤英彦 (ごとう・ひでひこ/1953年～)

福岡県生れ。水性木版で摺りあげる抽象。木版画の摺りに欠かせない本馬連(ハレン)の製造第一人者でもある。後進の指導、海外への発信にも熱心な版画家であり、技能保持者。版画、摺師、ハレン

古藤正雄 (ごとう・まさお/1907～1986年)

青森県生れ。美術院研究所卒。昭和初めに画家を目指し上京、板画家の故棟方志功と交友し制作に励んだ。1944年故郷に戻り、49年日本美術院同人、審査員。63年青森県文化賞、日本美術院賞、白寿賞。1986年没、79歳。洋画、版画

後藤充 (ごとう・みつる/1960年～)

新潟市生れ。1983年武蔵野美術短期大学専攻科商業デザイン修了。84年ヨーゼフ・ボイスが来日したさい、東京藝術大学で行った公開対話集会の実行委員長。田中一光デザイン

室、武蔵野美術大学造形学部視覚伝達デザイン学科研究室、中西夏之アトリエ在籍。個展中心に発表。2024年4月絵屋で個展。**洋画**

後藤彌太郎 (ごとう・やたろう/生没年不詳)

幕末～明治にかけて宮彫師の名家の後藤・石川・島村家があり、後藤家の内でも後藤彌太郎・功祐は名工と言われ、多くの作品 額堂に木彫が神社仏閣の欄間 が遺されている。成田山新勝寺の額堂(重文)彫刻は江戸深川の後藤勇次郎(二代目後藤弥太郎)の作。川崎市の長念寺の彫刻。**宮彫、木彫**

後藤龍二 (ごとう・りゅうじ/1940～2010年)

大分県生れ。大分大学学芸学部卒。1973年モダンアート協会展に入選。87年まで出品。77年安井賞展、78年北九州絵画ビエンナーレ展、92年青木繁記念大賞公募展等、様々な公募展に積極的に出品。2003年から2年間、日本文理大学非常勤講師。05年朝倉文夫記念館長。写実表現に定評。2010年没、70歳。**洋画、美術館長**

小西真奈 (こにし・まな/1968年～)

東京生れ。1993年コーコラン・スクール・オブ・アート卒。96年メーランド・インスティテュート・カレッジ・オブ・アート修了。「大学院時代は、1960年代からウィレム・デ・クーニングらとともに新世代抽象主義(ニューヨーク・スクール)を支えた女性画家、グレース・ハーティガン氏に師事。2006年VOCA展でVOCA賞。**洋画**

小波蔵安章 (こはぐら・あんしょう/1832～1886年)

首里生れ。唐名は毛文達。佐渡山安健に学んだ。1868年北京に行き、同地の絵師・周少白にも学んだ。帰国後に絵師主取となった。漢学にも優れ、著作に『霊夢記』がある。門人に安仁屋政伊、亀川盛軒、長嶺宗恭、義村朝義、喜友名安信らがいる。琉球処分の際には頑固党に属し脱清、1886年没、54歳。**沖縄の絵師**

小橋川朝安 (こばしがわ・ちようあん/1748～1841年)

首里生まれ。屋慶名政賀に師事して絵画を学び、尚穆王時代の1767年絵師として採用され王府に勤務した。絵師として7年経った後、絵と関係のない職種である納殿筆者になった。

御物奉行仮筆者に栄転。1795年に御物奉行筆者のかたわら、円覚寺において先王尚穆および尚哲の肖像画を描いた。1797年には進貢兼皇帝即位慶賀使として、北京大筆者という公務で中国に渡った。絵師としては顧問格として活躍し、歴代画家としては最高位である紫官に叙せられ、小橋川親方と呼ばれた。1841年没、93歳。**沖縄の絵師**

小橋陶復 (こばし・とうふく/1764～1820年)

岡山県生れ。幼い頃から絵を好み、寛政年間(1789-1801)に備南地方を遊歴中の釧雲泉に師事。清爽な山水画や雅趣のある墨竹・墨梅等を残している。伊部焼きに竹を描いたのは陶復が始まりといわれている。1820年没、56歳。**日本画**

小島辰之助 (こばたけ・しんのすけ/1892～1977年)

京都生れ。生まれ故郷の京都で鹿子木孟郎に師事した後上京、黒田清輝の下で画技を研く。日本画家の小島鼎子と結婚。記者や美術教師などの仕事の傍ら、組織に属さず制作を続けた。晩年は中村草田男の主宰する俳誌『萬緑』の表紙画を長く手掛けていました。1977年没、85歳。**洋画、マスコミ、美教**

小島鼎子 (こばたけ・ていこ/1898～1964年)

東京生れ。1915年東京府立第1高女卒。この年池上秀敏に師事し、24年より川端竜子に就いた。29年青竜社展で入選、第6回展「ペリカン」出品により社友。48年社人。14回展「睡蓮池」、19回展「山6月」等で奨励賞。第25回展では、連続25回出品記念賞。第35回展では連続35回出品により表彰。東京で没、65歳。**日本画**

小島廣志 (こばたけ・ひろし/1935～1996年)

東京生れ。洋画家の小島辰之助と、日本画家(青龍社)の小島鼎子の三男。東京芸術大学卒、二科会に出品。初期の抽象的で有機的形態の石彫、白セメント、硬質石膏と鉄などによる作品から1963年を境に具象的な木彫作品を制作。61年二科会金賞。62年「彫刻3人展—小島広志、掛井五郎、若林奮」(銀座画廊、東京)。69年開校した美学校に木彫刻工房を開く。72年吉祥寺のアトリエでイタリア蠟型美術鑄造を始め、木彫と共にブロンズ作品を多く発表。KOBATAKE 彫刻工房で後進の指導。77年平櫛田中賞。1996年没、61歳。**彫刻**

小林栄次郎 (こばやし・えいじろう/生没年不詳)

初代小林源八正信の弟子。技を大麻生村の山川専蔵に学ぶ。秩父市三峰神社、秩父神社、金鑽神社、長瀬町諏訪神社等に作品が残されている。他に秩父市本町屋台軒支輪彫刻(1890)、熊谷市第一本町区山車彫刻がある。彫刻

小林永濯 (こばやし・えいたく/1843～1890年)

江戸生れ。狩野永恵(かのう・えいとく)にまなび、近江(滋賀県)彦根藩主井伊家につかえる。維新後は浮世絵や新聞の挿絵を手がけ、1887年新吉原灯籠会の灯籠に月岡芳年(よしとし)とともに歴史画をえがいた。1890年没、48歳。著作に「万物雛形画譜」など。1890年没、47歳。幕末-明治時代の絵師、浮世絵、挿絵

小林易夫 (こばやし・えきお/1910～1996年)

岡山県生れ。1927年上京、太平洋画会研究所(太平洋美術学校)に学ぶ。28年帝展入選。30年太平洋美術学校卒業。49年岡山県美術展で審査員。52年日展で特選。53年光風会会員。54年玉野光風グループを結成、主宰。55年光風会展で審査員。70年光風会を退会。73年玉野光風グループ改め丹紅会として、毎年グループ展を開く。1996年没、86歳。洋画

小林 修 (こばやし・おさむ/1966年～)

群馬県生れ。1990年立教大学英米文学科卒。90年朝日新聞社に入社。出版写真部で「アサヒグラフ」「週刊朝日」などの撮影を担当。主な展覧会に「司馬遼太郎さんの歩いた道」展(画家・安野光雅氏との二人展、新宿紀伊國屋書店・丸善丸の内店・桑原史成写真美術館、2007年)、「小林 修写真展 司馬遼太郎の世界」(朝日新聞東京本社2階コンコースギャラリー、2018年)など。03、17、18、19年日本雑誌写真記者会賞最優秀賞。朝日新聞出版写真部長。写真

小林柯白 (こばやし・かほく/1896～1943年)

大阪生れ、今村紫紅、安田靉彦に師事し、1923年院展に出品、24、25年出品し、25年日本美術院同人。院展の外帝展文展にも出品、晩年の作として「長尾鳥」「せむらぎ」「磯」「竜安寺の庭」等がある。文展無鑑査、日本美術院同人。京都で没、48歳。日本画

小林観爾 (こばやし・かんじ/1892～1974年)

長崎県生れ。荒木十畝(じつぽ)にまなぶ。現京都市立芸大卒。1925年帝展で「芍薬」が特選。写実的で緻密な描写による花鳥画を得意とした。31年ベルリン日本画展に出品。1974年没、82歳。日本画

小林清栄 (こばやし・きよえ/1894～1987年)

三重県生れ。26歳のとき、鹿子木孟郎に師事。30歳で渡仏。戦後、1954年熊野市初代市長。三重県教育委員。代表作として「乃木將軍旅順入城図」が知られる。1987年没、93歳。洋画、版画

小林喜代吉 (こばやし・きよきち/1897～1983年)

青森県生れ。1937年海軍従軍画家として中国、蘇州に渡った。帰国後、中国を画題にした企画展を開催。1983年没、86歳。洋画

小林清子 (こばやし・きよこ/1947年～)

新潟県生れ。東京藝術大学大学院版画専攻を修了。1979年サンシャイン版画版種別グランプリ展石版画部門大賞以降、現代日本美術展や東京セントラル美術館版画大賞等で受章を重ねるほか、国際的な版画コンクール展でも高い評価。版画

小林源太郎・二代 (こばやし・げんたろう II/1799～1861年)

熊谷市生れ。一般に熊谷源太郎。初代小林源八正信を継いだ二代目。1845年越後へ旅立ち、以後、新潟県内にて「日本のミケランジェロ」と称された石川雲蝶との多くの共作を残した。源太郎の作品と伝えられているものは、高崎市・榛名神社双龍門、新潟県魚沼市・西福寺鐘楼、東松山・箭弓稻荷神社等がある。1961年没、62歳。彫刻(木彫)

小林 孔 (こばやし・こう/1927～2006年)

栃木県生れ。多摩造形美術学校を経て、1953年東京芸術大学美術学美術学部油画科卒。1954年からモダンアート展に出品、61年会友、64年会員。61～62年メキシコに滞在、シケイロスに師事、壁画の研究。毎年のように個展を開催、75年からサロン・ドートンヌに出品、

83年会員。86年徳島大学教育学部教授、87年総合科学部教授となり、後進の指導にあたる。1992年徳島大学退官記念展を徳島県立近代美術館ギャラリー、徳島県立21世紀館多目的ホールで開催。2006年没、79歳。洋画、美教

小林恒岳（こばやし・こうがく/1932～2017年）

東京生れ。1959年東京芸術大学大学院を修了、59年再興新興美術院に出品(62年会員、95年副理事長)。80年再興新興美術院展出品作が文化庁買い上。83年山種美術館賞展に出品。2017年没、85歳。日本画

小林呉嶺（こばやし・ごきょう/1871～1928年）

京都生れ。京都の日本画家今尾景年に師事、四条派の絵画を学ぶ。1895年日本青年青年絵画共進会で3等賞。90年内国勲業博覧会で入賞。96年後素協会の結成に参画、同年師の許しを得て上京し、日本絵画協会に参加。98年日本美術院の設立に際して評議員。1900年政治家金子堅太郎を会頭とする日月会を日本画家の岡倉秋水らと興した。日本美術協会や明治絵画会、文墨協会の委員や幹事を務めた。04年セントルイス万国博覧会で銀賞牌、06年の日本美術協会展で2等賞。06年文展が開設されると旧派の画家たちと共に正派同志会を結成、幹事に就任するなど東京における四条派日本画の重鎮として活躍。1928年没、57歳。日本画(四条派)

小林次男（こばやし・じなん/生誕年不詳～）

水戸市生れ。1976年東洋美術学校卒。82年国際版画ミニチュール展(韓国)で佳作賞(84、86、91年優秀賞)。83年国際ミニチュア版画展(アメリカ)で買上賞。85年ロックフォード・インターナショナル・ビエンナーレ(アメリカ)で買上賞。93年「今日の水戸の美術2-3人の版画家」展(水戸市立博物館)に出品。版画

小林如泥（こばやし・じよてい/1753～1813年）

出雲生れ。父のあとをつぎ、出雲(いずも)松江藩主松平治郷(はるさと)に大工方としてつかえる。曲げ物を得意とし、繊細な浮き彫りでも知られる。代表作に「菊桐文桐小箱」「桐袖障子」など。1813年没、61歳。通称は安左衛門。木工家

小林巢居人（こばやし・そきょじん/1897～1975年）

茨城県生れ。1917年画家を志し、小川芋銭に学ぶ。18年芋銭の勧めで平福百穂に師事。28年再興院展で入選。29年帝国美術学校助手。35年日本画科助教授、48年教授。37年新興美術院を結成、38年新興美術展より出品(43年脱退、50年新興美術院再興に参加、55年常任理事)。58年初個展(日本橋三越)開催、以後ほぼ毎年開催。茨城県で没、78歳。日本画

小林 忠（こばやし・ただし/1941年～）

東京生れ。1965年東京大学文学部美術史学科卒、68年同大学院人文科学研究科修士課程(美術史専攻)修了。東京国立博物館絵画室員、後、名古屋大学専任講師、助教授、東京国立博物館資料調査室長、情報調査研究室長を経て、学習院大学文学部哲学科教授。83年『江戸絵画史論』でサントリー学芸賞、95年内山晋米寿記念浮世絵奨励賞。99～2012年千葉市美術館館長。2013年～岡田美術館館長。20年瑞宝中綬章受章。『國華』主幹。国際浮世絵学会会長。岡田美術館館長。江戸時代絵画、特に浮世絵を専門とする。美史、美教、美術館長

小林照子（こばやし・てるこ/生誕年不詳～）

1958年株式会社コーセーに入社。美容研究・商品開発教育に携わる一方、モデルやタレントのメイクアップを数多く手がける。1983年ザ・ベストメイクアップ・スクールの校長に就任。85年コーセー初の女性取締役となる。同社の総合美容研究所長を経て、91年独立。10年青山ビューティ学院高等部東京校設立。「Sion Kyoto」設立。13年青山ビューティ学院高等部京都校設立。[フロムハンド]メイクアップアカデミーと青山ビューティ学院高等部東京校を原宿に移転。2024年2月NHK日曜美術館放映。メイクアップアーティスト、美容研究家

小林春規（こばやし・はるき/1953年～）

新潟県生れ。1970年日本アンデアシン展。「えほん風土記つきょうとふ」版画制作。日本美術会展、関西平和展などに出演、「日本版画協会展」「インターグラフィック展(ベルリン)」に出品。版画

小林松夫（こばやし・まつお/1909～1981年）

栃木県生れ。1927年栃木県師範学校同校卒。栃木県の小学校に勤務し、同僚の池田信吾に版画の手ほどきを受け、制作。川上澄生や池田らが発行していた版画誌『村の版画』に参加し、最終第19号(1934)まで発表。料治主幸の第26号(1932.7)をはじめ、第27・29・30・32・40・42号(1932～1933)に作品発表。戦後は青森県版画会が発行した『青森版画』に作品を発表。1981年没、72歳。美教、版画

小針樹生 (こばり・じゅしょう/1952年～)

東京生れ。平櫛田中の内弟子で木彫から象牙彫刻(牙彫[げちょう])に転向した父・小針敏生に師事。数少ない日本の象牙置物作家の1人。1981年日本象牙彫刻会に入会。88年日本象牙彫刻会を脱会、創人会に入会。96年日本象牙彫刻会に再び入会。2002年日本象牙彫刻会会長に就任。日本の象牙彫刻展で毎回の様に受賞。高島屋で個展。彫刻、木彫、牙彫

古叟盤谷 (こびき・ばんこく/1807～1885年)

伯耆国生れ。1829年伊勢参宮の旅に出て九州方面を歩き勤皇思想を持った。40年実家及び養家の医業を捨て、妻と子4人を残して諸国を遍歴、京坂の地で岡田半江に師事、3年後に名古屋の山本梅逸のもとに行き南画を学んだ。江戸で佐久間象山ら勤皇派知識人と交流し、幕府にこらまれ、53年信濃国松本城下に寄寓。住居を鋤竹齋と名づけ、家塾を開いた。弟子に藤森桂谷らがいる。58年から59年ほど諸国の旅に出るが、66年松本城下で書画大展示会を開いた。74年門下生により和睦社が結成され、盤谷が中心になって南画の研究を行なった。1885年没、79歳。南画

小堀安雄 (こぼり・やすお/1902～1970年)

東京生れ。1927年東京美術学校日本画科卒、父鞆音、川崎小虎、安田鞍彦に師事。28年帝展で入選、以後官展に出品。42年新文展で特選。日展委嘱。1970年没、68歳。日本画

駒井 琦・源琦 (こまい・き・げんき/1747～1797年)

京都生れ。円山応挙にまなび、長沢蘆雪とならび称された。唐美人図や花鳥画を得意とし、彩色にたくみであった。源(みなもと)姓から、源琦(げんき)とも称した。1797年没、51歳。江戸中

期-後期の絵師

駒形克己 (こまがた・かつみ/1953～2024年)

静岡県生れ。(株)日本デザインセンターを経て、1977年渡米。ニューヨークCBS本社などでグラフィックデザイナーとして活躍後、83年帰国。86年自身の事務所 ONE STROKE を設立し、以降「LITTLE EYES」、「紙の絵本」シリーズなど多数の絵本を同社より出版。2001年視覚障害者に向けた本、「折ってひらいて」「LEAVES」を日仏で共同出版。2004年フランス、グルノーブル市が、その年に生まれた子どもに本を贈るプロジェクト「ブックスタート」で絵本を制作。ニューヨークADC 銀賞、パリ PRIZE FOR CREATIVITY、2000年・10年イタリア・ボローニャ RAGAZZI 賞 優秀賞、02年スイス国際児童図書賞(F.E.E.)特別賞、06年 GOOD DESIGN・ユニバーサルデザイン大賞(九州大学病院小児医療センター病棟の環境デザイン)、24年没、70歳。造本作家、絵本、デザイナー

小松雲涯 (こまつ・うんがい/1832～1919年)

山形県生れ。はじめ服部武陵に学び、蘭湖と号した。のちに仙台に赴き菅井梅関、さらに江戸に出て春木南溟に入門し7年間修業し、南山と号した。その後全国各地を遊歴し、帰郷後、山形市見崎の鑓水家に婿養子に入った。のちに分家して村内に居を構えたが、終生小松姓を名乗った。専門画家として生計を営み、多くの門人を育てた。1919年没、88歳。日本画

小松 鈞 (こまつ・きん/1930年～)

長野県生れ。50年二紀展に出品。74年油彩から鞆ペンで描く。78～80年スペイン滞在。個展中心に発表。97年辰野美術館で代表作展。日本表現派同人。洋画、ペン画

小松洞玉 (こまつ・とうぎょく/1831～1893年)

1831年生れ。江戸に出て前村洞和に狩野派を学び帰郷、出任して牢番役を勤めた。晩年は画を専業とした。1893年没、63歳、江戸後期の土佐派の絵師。

小松芳光 (こまつ・ほうこう/1903～1993年)

金沢市生れ。植松包美(1872年～1933年)に師事。1927年帝国美術院展に入選。38年文

展で特選。46年日展で特選。戦後は日展を中心に活躍し、また金沢美術工芸専門学校の設立に参加して教授。70年退官し、同大学名誉教授。77年加賀蒔絵で石川県無形文化財保持者に認定される。日展参与。主に動物や植物をモチーフとした、高蒔絵、研出蒔絵や色漆の作品を製作。1993年没、90歳。 **工芸、美教**

小松 豊 (こまつ・ゆたか/1940年～)

北九州市生れ。1964年浪速短期大学絵画専攻科卒。「第8回シェル美術賞」で二等賞。65年「第8回日本国際美術展」招待作品。84年松本芳年率いる「九州制作会議」に参加。2007年北九州市立美術館にて回顧展。絵画空間における二次元性と三次元性を主題に、知的でユーモアあふれた絵画や立体を制作。 **現代美術、洋画、立体**

五味秀夫 (ごみ・ひでお/1922～2010年)

東京生れ。1946年東京美術学校油画科卒、同校同科研究科に進む。48年二科展に入選。51年J.A.N.の同人。52年春陽展に入選。以後連続出品。54年春陽展で春陽会賞。56年春陽会準会員。第1回シェル美術賞に応募シェル美術賞。57年春陽会会員。2010年没、88歳。 **洋画**

五味祥子 (ごみ・よしこ/1949年～)

甲府市生れ。1949年金沢美術工芸大学油画卒。卒業制作大学買上。53年二科展 特選。62年二科展で二科賞。95年銀座スルガ台画廊で個展、以後多数開催。97年二科展 パリー賞。198年二科会会員。2003年日本作家美術展 in 上海(上海)出品。04年二科ニューヨーク展出品、二科展 会員賞。06年画集出版。美術サロンゆたかにおいて出版記念展開催。16年二科展内閣総理大臣賞。二科会評議員。 **洋画**

小室怡々齋 (こむろ・いいさい/1837～1900年)

秋田県生れ。秋田藩士二葉代祐の三男、藩の御用絵師杉谷秀谷・津村洞養に就き、東洋絵画会(後の日本美術協会)の会員。1880年秋田勸業博覧会で賞牌。82年内国絵画共進会、84年内国絵画共進会、90年内国勸業博覧会に出品。狩野派ではあるが容齋派の前賢故実等を研究し、人物背景、調度等は粉本によらずに研究して描いた。多くの弟子を輩出(寺崎廣業、土屋秀禾、小場恒吉)。1900年没、63歳。 **江戸末期-明治期の絵師**

小本章 (こもと・あきら/1935～2017年)

東京生れ。1958年岐阜大学美術工芸科卒、62年東京教育大学芸術学科構成デザイン研修生を修了。71年から講談社フェーマス・スクールズにインストラクターとして勤務、81年アメリカ政府給費研修員として研修旅行に参加。内外の展覧会に出品し、65年、66年シェル美術賞展佳作賞、80年日本グラフィック展フォトグラフィ部門特選、83年現代日本美術展神奈川県立近代美術館賞。81年ヴラツラフ市立写真美術館(ポーランド)で個展を開催。写真を使って自然の風景とオブジェや現場でのスケッチなどを組みあわせた作品制作。2017年没、82歳。 **写真、版画、オブジェ**

小場恒吉 (おば・こうきち/1878～1958年)

秋田県生れ。1903年東京美術学校図案科卒。08年東京美校図案科助手、11年助教授。11年朝鮮古墳壁画模写のため朝鮮に渡った。16年美校を辞め朝鮮博物館事務嘱託となり、朝鮮総督府学務局古墳調査課員、朝鮮美術審査委員会委員を兼務。25年東京美術学校講師に復帰、工芸史を担当した。33年朝鮮総督府宝物古墳名勝天然記念物保存会委員を依嘱され、毎年朝鮮に行き古墳調査と高句麗壁画の模写を行った。46年教授。50年「日本紋様の研究」で芸術院恩賜賞。専門は紋様史の研究で、日本、朝鮮、中国の古墳古建築の装飾、絵画彫刻の絵紋様、工芸品の紋様など緻密な調査研究を行った。ほか「唐州南山の仏蹟」「楽浪王光墓」などの著書がある。1958年没、80歳。 **美史、美教、紋様研究**

小森邦衛 (こもり・くにえ/1945年～)

石川県生れ。樽見幸作に沈金をまなび、石川県立輪島漆芸技術研修所で赤地友哉から曲輪造、太田儔から籃胎をまなぶ。竹を編んだ文様と漆の塗りぼかしを組み合わせた作品で、日本伝統工芸展などで受賞。日本工芸会理事。2006年髹漆で人間国宝。 **工芸、人間国宝(漆芸)**

小森邦夫 (こもり・くにお/1917～1993年)

東京生れ。日大中退。斎藤素巖に師事、構造社展に出品。1953年日展で特選・朝倉賞。55年、56年特選。80年文部大臣賞。85年芸術院賞。89年芸術院会員。女性をモチーフにした作品がおおおい。作品に「腰かけた婦」「青春譜」など。1993年没、76歳。 **彫刻**

小谷津任牛 (こやつ・こんぎゅう/1901～1966年)

東京生れ。日本郵船につとめるかたわら川端画学校にまなぶ。在学中の1927年院展で入選。28年小林古径に師事。32、46年日本美術院賞。叙情性あふれる女性像をえがいた。36年日本美術院評議員。1966年没、64歳。日本画

小谷津雅美 (こやつ・まさみ/1938～2011年)

東京生れ。1953年再興院展で初入選(60年奨励賞、64年特待、92年招待、98年同人、2003年文部大臣賞)。55年安田鞆彦に師事。98年再興第83回院展出品の「終宴」が第4回天心記念茨城賞。2011年没、73歳。日本画

小山雲泉 (こやま・うんせん/1855～1911年)

和歌山県生れ。1878年中田熊峰に学んで南画を修めた。のちに大坂に出て堀江に住み、烟草業のかたわら筆をとった。其間、琴石、玉江、竹外らの先輩と交遊して研究に励んだ。また余技に篆刻を学び『千字文百顆印譜』を著した。赤松雲嶺はこの門から出た。1911年没、56歳。南画、篆刻

小山栄達 (こやま・えいたつ/1880～1945年)

東京生れ。鈴木栄暁、小堀鞆音(ともと)に師事。1911年文展で「兵燹(へいせん)」が入選、以後も文展、帝展に歴史画や武者絵を出品。1945年没、66歳。作品に「大衆勢」「雷鳴之陣」など。日本画

紺谷 力 (こんたに・つとむ/1941～2021年)

金沢市生れ。下口宗美に師事し、木彫、桐塑など人形の基本を学び、特に塑造彩色技法についての工夫を重ねる。1978年日本伝統工芸展で初入選。近年は伝統行事に取材した作品を手がけるなど、人形だけが持つ表情や所作を通して、日本人の心の原点とでもいへばきものを追求しながら創作活動が続いている。日本工芸会正会員。2021年没、80歳。木竹、人形、工芸

近藤孝太郎 (こんどう・こうたろう/1897～1949年)

愛知県生れ。1919年一ツ橋大学卒。同年、日本郵船会社に入社。20年ニューヨーク支店勤務。この時期、ゴッホや舞踊に傾倒する。21年退社し、フランスへ渡る。パリで絵画、演劇を研究し、木下杢太郎と交わった。22年「岡崎美術展」が開催、同展覧会にパリで制作した「笛吹く人」をはじめ七点の油彩画を出品。関東大震災に遭い、岡崎市立高等女学校絵画科嘱託教員。籠田町にアトリエを開く。25年「我々の会」を作り、洋画の展覧会を開き新人の育成。25年版画・詩・短歌の雑誌『版画』を創刊し、(第3号より詩・短歌雑誌『草原』と合併し『試作』と改名、日本の創作版画運動に先駆的役割を果たした。27年愛知県岡崎師範学校の学生と洋画研究会の会「新光会」を設立。1949年没、52歳。洋画、版画、美教、美普

近藤樵仙 (こんどう・しょうせん/1865～1951年)

熊本市生まれ。杉谷雪樵に師事し、1987年雪樵とともに上京、5年ほど東京に居ていったん熊本に帰り、雪樵の没した95年細川家に召されて再度上京した。以後細川家の御用をつとめながら、日本美術協会、日本画会を中心に作品を発表、宮内省買い上げや受賞を重ね、画壇的地位を固めていった。初期文展に入選を果たし、1907年には御前揮毫をおこなうなど、華やかな足跡を残したが、14年の文展落選を境に忽然と画壇から身を引き、東京、大阪、山梨、鎌倉などに居住しながら画壇とは関係のないところで仕事を続けた。1951年没、86歳。日本画

近藤翠石 (こんどう・すいせき/1870～1950年)

香川県生れ。藤田苔石に就て南宋画を学び、大阪に出て森琴石の門を叩き、従学六年一旦郷里に還り、さらに四国九州を始め、各地を遊歴し、後東京に出て文部省検定に合格して中等教育図画教員の資格を受け、豊岡、堺、桃山各中学校の教授となり、後職を辞し、大阪天王寺筆ヶ崎に閑居して、専ら彩筆に親み傍ら吟哦を好み、詩画相待を南宋の正派を発揮せんことを勉めた。1950年没、80歳。南画、美教

近藤大志 (こんどう・たいし/1959年～)

東京生れ。1987年多摩美術大学大学院研究科修了。86年行動美術協会展奨励賞、87年年新人賞、88年安田火災美術財団奨励賞、89年会友賞、90年行動美術賞 会員。安井賞展に5回出品。91年GREEN CAMOU FLAGEで賞候補。洋画

近藤高弘 (こんどう・たかひろ/1958年～)

京都生れ。人間国宝(染付)の祖父・近藤悠三と父・近藤闇のもとで育ち、25歳から陶芸の道を目指し、1994年には京都市芸術新人賞、2002年には文化庁派遣芸術家在外研修員として、エジンバラ・カレッジ・オブ・アート・マスターコース(イギリス)を修了。伝統的な染付作品を制作、その後、金属や鋳造ガラスなど新しいメディアを取り入れ、独自の造形表現を確立。93年プラチナ、金、銀、ガラスの混合物を粒状に結晶化させるオリジナル技法「銀滴彩」(特許取得)を生み出した。近藤の主な個展に「-手の思想-」(何必館・京都現代美術館、2017年)、「生水-うつついゆくうつわ-」(瀬戸内市立美術館、2016年)、「セルフポートレート」(伊丹市立工芸センター、2010年) **陶芸**

近藤日出造 (こんどう・ひでぞう/1908～1979年)

長野県生れ。岡本一平に師事。1932年杉浦幸雄、横山隆一らと新漫画派集団(戦後に漫画集団と改称)を結成、リーダー。64年日本漫画家協会初代理事長。「読売新聞」でなかく政治漫画をかいた。75年菊池寛賞。1979年没、71歳。 **漫画**

近藤康夫 (こんどう・やすお/1950年～)

東京生れ。1973東京造形大学造形学部。デザイン学科室内建築専攻卒業後、三輪正弘環境造形研究所に入社。1976グラマタデザイン事務所に入社。1981近藤康夫デザイン事務所を設立。2003株式会社エービーデザイン設立。受賞、1982第3回NSGショップ&ディスプレイデザインコンテスト“銀賞”。1985第6回NSGショップ&ディスプレイコンテスト“84ガラスデザイン大賞”。1988'87年度IID協会“協会賞”。1989国際インテリアデザイン賞“オフィス部門最優秀賞”、“AGB国際インテリアデザイン大賞”。アメリカ建築家協会デザイン賞“インテリア・アーキテクチャ賞”。1994第12回ナショップライティングコンテスト'93“サービス部門最優秀賞”。商環境デザイン賞'94“優秀賞”。国際照明デザイン賞。1996第14回ナショップライティングコンテスト'95“サービス部門優秀賞”。2001 2000年度「毎日デザイン賞」。2002 2001年IID賞インテリアスペース部門“部門賞”。 **デザイナー**

近藤由一 (こんどう・ゆいち/生没年不詳)

工部美術学校第一期生。近藤由一は、工部美術学校彫刻学科の第一期生。長沼守敬と近藤由一で制作の作品が残っている。山口市亀山公園にある毛利敬親の銅像で

す。長沼守敬は、東京美術学校塑造科の初代主任教授です。二人は日本近代彫刻史の先発作家。 **彫刻**

近藤悠三 (こんどう ゆうぞう/1902～1985年)

京都生れ。1917年京都市立陶磁器試験場付属伝習所轆轤科卒、同試験場で助手。21年陶磁器試験場を辞め、大和に窯を構えた富本憲吉の助手として師事。24年関西美術院洋画研究所でデッサンや洋画の研究。28年帝展で入選他、文展などで多くの作品を発表。50年日展で審査員。55年日本工芸会に所属。56年日本伝統工芸展で日本伝統工芸会賞。日本工芸会常任理事、陶芸部会長を歴任。53年京都市立美術大学陶磁器科助教授、56年同大学教授。65年学長。70年紫綬褒章、73年勲三等瑞宝章受章、京都市文化功労者表彰。74年京都府美術工芸功労者表彰。77年重要無形文化財「染付」の保持者(人間国宝)に認定。1985年没、83歳。 **陶芸、美教、学長**

近藤幸夫 (こんどう・ゆきお/1951～2014年)

愛知県生れ。96年慶應義塾大学理工学部助教授(美術史)。1983年慶應義塾大学大学院修了。80～96年東京国立近代美術館勤務(主任研究官)。96年慶應義塾大学理工学部助教授(美術史)専門、近・現代美術史。著書=『ブランクシー作品集』共訳、リポート、1994年論文=『鉄腕アトム』——作品解釈のための試論』東京国立近代美術館「手塚治虫展」カタログ、1990年「ブランクシー再考(1)-ブランクシー像の成立を巡る言説について」東京国立近代美術館研究紀要第5号、1996年『ニューウェイヴ』再考——1980年代前半の東京における現代美術の動向についての一考察』『芸術学』1号、三田芸術学会1997年など。2014年没、63歳。 **美教、美評、美史**

紺野五郎 (こんの・ごろう/1916～1997)

秋田県生れ。1936年秋田師範学校本科を卒業後、美術教諭。46年頃新制作創立会員の佐藤敬のデッサン会に参加。49年日本水彩画会展に出品、会員。49年新制作展に出品。62年新制作展で新作家賞、会友。66年伊藤康夫、由利耶一らと「范同人」を結成。71年新制作展で再び新作家賞、75年会員。84年浅井忠記念賞展(千葉県立美術館)に出品、84年秋田県芸術選奨。86年「紺野五郎自選展」(秋田県立美術館)を開催。88年湯沢市功労章受章。89年「人間賛歌 画業50年記念紺野五郎展」(秋田市／ギャラリー光悦洞)が開催。95

年秋田県文化功労者表彰。1997年没、81歳。水彩、洋画、美教

紺野修司 (こんの・しゅうじ/1933～2013年)

北海道生れ。1956年武蔵野芸術学校西洋画科卒。森芳雄に師事。57年東映動画のアニメーター募集に応募入社、アニメーター、アニメーション演出家。57年北海道美術協会主催道展で知事賞。62年主体美術協会会員。1964年、主体美術協会創立に参加・会員。東映動画のアニメーター、虫プロダクションの初のテレビアニメ「鉄腕アトム」の原画担当者・演出家としても知られる。2013年没、80歳。洋画、アニメ

金野新一 (こんの・しんいち/1916年～1992年)

1950年友人の画家・岡本唐貴の息子の白土三平をアトリエに招き入れて、山川惣治作の街頭紙芝居の彩色・模写の仕事を手伝わせる。61年日本美術会の事務局長。日本国民救援会の救援美術展に尽力。96年画集「金野新一作品集」が出版。96年練馬区立美術館で遺作展。1992年没、76歳。挿絵、絵本、版画

今道子 (こん・みちこ/1955年～)

神奈川県生れ。創形美術学校版画科卒業後、東京写真専門学校にて写真を学ぶ。1985年の個展「静物」より本格的な作家活動を開始。87年東川賞新人作家賞。91年個展「EAT Recent Works」(フォト・ギャラリー・インターナショナル[現PGI]、東京、1990年)にて、第16回木村伊兵衛写真賞。東京国立近代美術館、東京都写真美術館、シカゴ美術館、ヒューストン美術館、ヴァン・ゴッホ美術館などに作品が収蔵。写真

151

長野県生れ。1910年東京美術学校西洋画科卒。17年民衆本位の民衆美術運動を唱し、平和美術研究会、ついで平民美術協会を主宰。19年黒耀会結成に参加し、大震災まで毎年展覧会を開いた。20年演説会で検束され、以後しばしば検束。同年日本社会主義同盟に参加。多くの機関紙誌に挿絵。26年「小作人」を編集・発行。28年から読売新聞に漫画家犀川凡太郎として主に漫画の世界で活躍。38年漫画雑誌「バクショー」編集人。戦後は東筑農民組合連合会の会長、かたわら社会活動、美術活動をした。1975年没、88歳。洋画、漫画

齋藤彰男 (さいとう・あきお/1935年～)

東京生れ。父は日本美術院の経営者等を務めた齋藤隆三。1945年現・茨城県守谷市に移る。60年再興院展で入選(62年院友、84年特待)。62年東京藝術大学大学院日本画専攻修了。74年高松塚古墳壁画模写事業に従事。78年茨城県美術展覧会で大観賞。2019年「画業六十年を顧みて 齋藤彰男日本画展」(茨城県つくば美術館)開催。日本画

齋藤明 (さいとう・あきら/1920～2013年)

東京生れ。1938年父の遺志を継ぎ鑄金工房を運営する。47年高村豊周に師事、47年日展入選、以後14回入選。75年日展を去り、日本伝統工芸展に入選、以後入選を重ねる。93年鑄金で重要無形文化財保持者。2013年没、93歳。金工、鑄金

齋藤彩 (さいとう・あや/1981年～)

東京生れ。2003年女子美術大学洋画専攻卒業。03年 GEISAI ミュージアム 北原照久賞。04年 GEISAI 奈良美智賞、第一回フォイル・アワード グランプリ。05年 第25回グラフィックアート「ひとつぼ展」グランプリ。洋画、グラフィック

齋藤悦子 (さいとう・えつこ/1928～1999年)

満州生れ。終戦後父の郷里である金沢に移り、大学入学で上京するまで同地で過ごす。日展、現代工芸美術展、現代人形美術展等で活躍。精巧な木彫に繊細な彩色を施した、すらりとした優美な姿の女性像を特徴とする。佐藤忠良に師事し、確かな造形力に裏付けられ存在感を放っている。1999年、71歳。木彫、人形

齋藤弓弦 (さいとう・きゅうげん/1881～1974年)

あ

犀川凡太郎・望月 桂 (さいかわ・ぼんたろう/1887～1975年)

宮城県生れ。帝室技芸員だった小堀鞆音に師事、土佐派を研究。1903年美術協会に2点出品各二等賞。13年明治絵画会で三等賞。14年文展で入選、その後も文展・帝展で入選するかたわら、教科書の挿画も手がける。帝国絵画協会会員。戦後は地元に戻り、創作に励んだ。1974年没、93歳。日本画

齋藤佳三 (さいとう・けいぞう/1887～1955年)

秋田県生れ。東京音楽学校師範科に入学、中退。1916年東京美術学校図案科卒。同校講師を勤め、齋藤装飾美術研究所を創立した。主として美術工芸、服装方面で活躍。作曲をも試みた。著者に「世界の服飾史」「新しき民謡」などがある。1955年没、69歳。デザイナー、図案装飾、美研

齋藤 智 (さいとう・さとし/1936年～)

東京生れ。東京芸術大学油画専攻卒。1968年現代日本美術展、国際青年美術家展に出品。73年サンパウロ・ビエンナーレに出品、東京国際版画ビエンナーレ国際大賞。ピントの異なる写真を組み合わせた写真製版の作品を発表し、カメラのメカニズムを利用して人間の視覚の曖昧さを表現した作風が国際的に高い評価を得る。版画、写真

齋藤倭文緒・静雄 (さいとう・しずお/1904～1985年)

山梨県生れ。1923年日本美術学校に入学し日本画を学んだ。在学中の25年中央美術展で入選。26年日本美術学校卒。30年郷倉千靱の草樹社に入門。31年院展に入選。42年院友。67～69年3年連続して春季展、奨励賞。70年特待、71年無鑑査。1985年没、81歳。日本画、版画

齋藤寿一 (さいとう・じゅいち/1931～1992年)

川崎市生れ。1955年春陽会展で入選。58年渡仏、浜口陽三に学ぶ。60年シェル美術賞展でシェル賞。63年リュブリアナ国際版画ビエンナーレに出品。74年インド、ネパール旅行。75年川崎市幸区役所に壁画制作、川崎市文化賞。76年和光大学教授。79年千葉大学講師。東京で没、61歳。洋画、版画、壁画、美教

齋藤秋圃 (さいとう・しゅうほ/1768～1859年)

京都生れ。まず円山応挙に絵を学び、師の没後は大坂の森狙仙にも師事。九州への放浪の旅に出かけ、長崎では中国人画家江稼圃に入門を申し入れ、有田では陶器の絵付けや下絵制作なども手掛けた。秋月藩には1805年正式に抱えられ、28年家督を長子に譲るまで御用をつとめた。退隠後の一時期、須恵焼の絵付けにも携わる。太宰府に移住して多くの門人を育てた。「鹿の秋圃」と評されていた。1859年没、93歳。江戸後期の絵師、陶磁絵付け

齋藤忠誠 (さいとう・ちゅうせい/1926～1985年)

岩手県生れ。1950年、多摩造形芸術専門学校を卒業後帰郷し、57年岩手町在住者を主体とした美術団体「エコール・ド・エヌ」を創立。72年彫刻家・高見泰蔵らと岩手町産黒御影石を生かし石彫制作会を実施。73年から「岩手町国際石彫シンポジウム」を企画、開催。82年にパリで個展を開催、83年岩手県優秀美術選奨。1985年没、59歳。洋画

齋藤 昇 (さいとう・のぼる/1946年～)

秋田市に生まれる。1965年秋田大学学芸学部入学。自由美術会員・池内茂吉のアトリエに通う。岩手大学教育学部特設美術専攻科に進む。70年自由美術展に入選、佳作賞、74年会員、90年平和賞。78年日本画廊で個展。82～86年梅津薫、渋谷重弘らと新作家連合を結成。82年東京展で東京展賞。95年パステル画展開催(秋田市／響画廊)。88年秋田県芸術選奨受賞。洋画

齋藤久子 (さいとう・ひさこ/1914～1973年)

茨城県生れ。1931年東京女子美術大学洋画部に入学。34、35年東光会展で入選。41年東光会展で三星賞(43年会友、47年会員)。42年新文展で入選、47年女流画家協会委員。48年茨城県美術展で招待出品(57年審査員)。57年茨城美術家協会委員。1973年没、59歳。洋画

齋藤秀三郎 (さいとう・ひでさぶろう/1922年～)

宮城県生れ。1943年南満州工業専門学校鉱山工学科(大連)入学。52年九州大学農学部水産学科卒場。福岡市立姪浜中学校(理科)に就職。57年九州派に参加。「文明」など社会的な批評を題材に平面、立体、インスタレーションを問わず、98歳の現在でも作品制作を続ける。キャベツをモチーフとした銅版画は、銅板全体に細かなひっかき傷を作り、その

後、図柄の部分削って刷るメザチント技法による。現代美術、版画、オブジェ、九州派、
美教

齊藤博康 (さいとう・ひろやす/1941年～)

埼玉県生れ。1970年再興院展で入選(71年奨励賞、72年院友、90年特待)。71年東京藝術大学大学院修了。80年東京藝術大学助手。82年新潟大学助教授(91年教授)。98～2005年筑波大学教授。21年日本画40年の軌跡(天心記念五浦美術館)に出品。日本画・美教

齊藤雅之 (さいとう・まさゆき?/1942年～)

東京生れ。1967年武蔵野美術大学造形専攻科修了、同大学の助手。70年春陽展にて新人賞。銀座東和画廊で個展。72年春陽展にて準会員。75年イタリア・シエナ市主催の美術セミナーに参加。83年春陽会会員。87年春陽会5人会を小林裕児・杵間宏・三浦明範・坂田和之らと開催。2003年齊藤雅之油彩塾を新規開講した。洋画、画塾

齋藤満栄 (さいとう・みつえい/1948年～)

新潟県生れ。1971年多摩美術大学卒。74年堅山南風に師事。80年南風没後松尾敏男に師事。79年再興院展で初入選(91年奨励賞、94年特待、99年招待)。88年東京セントラル美術館日本画大賞展で佳作賞。2000年再興院展で日本美術院賞、第6回天心記念茨城賞。日本画

齋藤茂吉 (さいとう・もきち/1882～1953年)

山形県生れ。1905年正岡子規『竹の里歌』に出会い、作歌を志す。06年伊藤左千夫の門下となる。10年東京帝国大学医科大学(現在の東大医学部)医学科卒。21年欧州留学。(ウィーン大学およびミュンヘン大学に4年間留学)。37年帝国芸術院会員。40年『柿本人麿』で帝国学士院賞受賞。精神科医としても活躍する傍ら、旺盛な創作活動を行った。生涯に全17冊の歌集を発表し、全17907首の歌を詠んだ。山形県に齋藤茂吉記念館がある。1953年没、70歳。歌人、精神科医

齊藤勇太郎 (さいとう・ゆうたろう/1898～1980年)

茨城県生れ。1921年川端画学校洋画科卒。23年関東大震災のため大洗町に転居。24

年白牙会結成に参加。40年日立高等女学校講師。47年日立美術協会結成に会員参加。48年茨城県美術展に委員として出品。60年新世紀美術協会結成に参力。67年古稀記念回顧展(日立市市民会館)。1980年没、82歳。洋画、美教

齋藤隆三 (さいとう・りゅうぞう/1875～1961年)

茨城県生れ。1902年東京帝国大学文科大学国史科卒、07～16年迄三井家家史に事業史編纂の仕事に携った。14年日本美術院の再興、横山大観らと経営者の一人となり、常任理事。32年「江戸時代前半期の世相と衣裳風俗」の論文で文学博士。42年財団法人岡倉天心偉績顕彰会専務理事。著:日本美術院史(創元社44年)。横山大観(中央公論美術出版)58年岡倉天心(弘文館人物叢書)60年。1961年没、86歳。日本美術院常任理事、文学博士

サイウ良 (さいとう・りょう/1941年～)

福岡生れ。1966～68年リアカデミーグランド・ショミエールに学ぶ。70～74年クラコウ国際版画ビエンナーレ展(賞候補)(ポーランド)。74年ニューハンプシャー国際版画展審査委員賞(米)。75年国画会・国画賞。78年国画会・会友優作賞、フットプリント国際版画展買い上げ賞(米)95年ストックホルム国際版画展金賞。第三回「日本のアート展 in CANADA 2002」招待出品、加・オタワ下院賞受賞(加・チリワック市)。2006年日仏現代作家美術展・国際芸術文化大賞(サロン・デュ・ブラン)。版画

三枝雲岱 (さえぐさ・うんたい/1811～1901年)

山梨県生れ。1824年三枝家の養子になり、22歳で住職。竹邨三陽に師事し、のちに喜田華堂、日根対山、中西耕石らに学んだ。対山の影響により山水画、花鳥画にすぐれた作品を残した。80年明治天皇御巡幸に際し「玉堂富貴図」「御嶽新道図」を献上。82年内国勸業博覧会に出品、褒賞。1901年没、91歳。江戸後期-明治期の絵師

酒井鶯蒲 (さかい・おうほ/1808～1841年)

江戸生れ。築地本願寺の末寺である市ヶ谷浄栄寺住職、香阪壽徴(雪仙)の次男。酒井抱一の養子。抱一に学ぶ。抱一も鶯蒲をよく愛した事、水戸公に会った折抱一と共に席画をした事、書を良くし、茶道を好んだ。築地善林寺の長子を養子とし雨華庵3世酒井鶯一として継がせた。1841年没、33歳。江戸後期の江戸琳派の絵師、琳派

坂井 健 (さかい・けん/1948～2008年)

福井県生れ。1985年水彩連盟展入選。87年水彩連盟展受賞、県総合美術展入選、以後6回入選。89年第三文明展初入選、91年会津総合美術展、教育長賞。県美術協会展で特選(山川賞)。92年会津総合美術展、教育長賞。福島勤労者美術展、県知事賞。93年会津総合美術展で佳作賞。94年 県総合美術展、県美術準大賞。95年水彩連盟展、奨励賞(ヴィック賞)。98年水彩連盟会員。99年県総合美術展美術大賞。2008年 県総合美術展・洋画部門最優秀賞。2008年没、60歳。水彩

酒泉 淳 (さかい・ずみ・あつし/1920～2006年)

茨城県生れ。1935年緑陰社洋画研究所に学ぶ。1937年日本水彩画会展入選。38年白日会展で入選(47年会員、61年中沢賞、委員)。47年水彩連盟準会員(52年会員、のち委員。95年より顧問。48年日展で入選(54、58年特選、55年無鑑査、61年より委嘱出品)。86年文部大臣より地域文化功労者。2006年没、86歳。水彩

酒泉杏邨・五楓 (さかい・ずみ・きょうそん/(1877～1957年)

水戸市生れ。松平雪江に師事。1897年東京美術学校卒。川端玉章、山田敬中等に師事。その後小室翠雲の門に入り、南画を学ぶ。戦後土浦高等女学校の図画教諭を務める。1957年没、80歳。日本画、美教

酒泉五楓・杏邨 (さかい・ずみ・ごふう/1878～1957年)

水戸市生れ。松平雪江に師事。1897年東京美術学校卒業。川端玉章、山田敬中等に師事。その後小室翠雲の門に入り、南画を学ぶ。戦後土浦高等女学校の図画教諭。はじめ杏邨と号した。1957年没、79歳。日本画、美教

境 貴雄 (さかい・たかお/1978年～)

東京生れ。2005年東京藝術大学美術学部デザイン科卒。07年同大学院美術研究科修士課程デザイン専攻修了。07年小豆を顔に付けて髭に見立てたファッション『AZURER(アズラー)』のディレクター。芸能プロダクション「ビッグ・ブッキング・エンターテインメント(株式会社BBE)」所属。横浜美術大学講師。現代美術、写真、タレント、美教

酒井忠臣 (さかい・ただおみ/1946年～)

中国生れ。1969年武蔵野美術大学造形学部卒、造形専攻科に進学。70年九州産業大学芸術学部へ赴任。72年初個展。「1974—九州 可能性への意志」展、80年「アジア現代美術展」、85年「変貌するイマジネーション」、「九州現代美術展」に出品。「独立美術展」、「西日本美術展」、「北九州絵画ビエンナーレ」などの公募展にも出品。坂本善三を師と仰ぎ、深い精神性に基づく抽象造形を展開する。洋画、造形、美教

酒井忠康 (さかい・ただやす/1941年～)

北海道生れ。1964年慶應義塾大学文学部美学美術史科卒。64年神奈川県立近代美術館学芸員。その後、学芸課長、副館長を経て、92年より館長。2004年より世田谷美術館館長。79年:小林清親を論じた『開化の浮世絵師清親』で第1回サントリー学芸賞。近代美術の研究、現代美術の評論活動を行う。多摩美術大学美術学部芸術学科客員教授。美術館長、学芸員、美評

酒井道一 (さかい・どういつ/1846～1913年)

江戸生れ。山本素堂の次男。鈴木其一に琳派(りんぱ)の画法をまなぶ。酒井抱一の画風に傾倒し、酒井鶯一(おういつ)の養子となり、雨華庵4代をついだ。日本美術協会、帝国絵画協会の会員。1913年没、69歳。日本画

酒井梅齋 (さかい・ばいさい/生没年不詳)

紀州生れ。尾張の山本梅逸の門を出て、巧みに師の画風を伝えた。和歌山に住んで絵筆をとった。1879年頃に神戸に行き、海外輸出の陶器画の筆をとった。江戸後期-明治期の絵師、陶器画

酒井白澄 (さかい・はくちよう/1902～1985年)

福島県生れ。福島県立工業学校卒。1921年川端画学校に入学した。西沢笛畝、川端龍子に師事。26年院展に入選、3年連続入選。院友に推挙、29～32年師龍子に従って院展を脱退し、青龍社の結成に参加。社友として同展に第3回まで出品。以後、官展を中心に活動する一方、読画会、朝陽社、大調和会に参加。43年春日部たすくらと会津美術人会を結

成。県展審査員のほか、47～65年まで福陽美術会幹事長。1985年没、83歳。日本画

坂井眞理子（さかい・まりこ/生誕年不詳～）

山口県生れ。1962年女子美術大学洋画科卒。卒業後ニューヨーク・ブルックリン美術館付属美術学校に留学。日本への帰路、半年かけてヨーロッパを旅行。故・山室静主催の同人誌「海賊」「木の花」に長年、童話やエッセイを書く。現在、同人誌「野の風」に古代の女神について書いている。2013年池田20世紀美術館で個展。洋画、エッセイ

酒井幸雄（さかい・ゆきお/1925～1990年）

金沢市生れ。1950年金沢美術工芸専門学校油絵科卒業。田辺栄次郎、畠山錦成に師事。56年一水会展初入選。62年一陽展に入選、以後一陽会に所属し、68年青麦賞、78年会員推挙。透視画の技法を用い、シャープなだまし絵的室内や街角の情景を描く。1990年没、65歳。水彩、洋画

坂井淑恵（さかい・よしえ/1965年～）

千葉県生れ。1991年京都市立芸術大学美術科油画専攻卒。93年京都市立芸術大学大学院美術研究科絵画専攻修了。92年京都のギャラリー・ココの個展、以後、国内外の画廊・美術館で個展、グループ展に出品。99年の「クオテリウム40」（水戸芸術館）、2000年の「VOCA展」（上野の森美術館）で奨励賞。洋画

栄利秋（さかえ・としあき/1937年～）

鹿児島県生れ。1965年京都市立美術大学美術専攻科(彫刻)を修了。67年現代日本彫刻展で宇部興産賞、5回、11回、12回も。68年神戸須磨離宮公園現代彫刻展13回展で土方定一記念賞。86年みなとみらい21彫刻展で協賛賞。87年天理ピエンナーレ表統領部門賞、89年も同賞。90年大阪府門真市に石彫「内なる宇宙」制作。91年奈良市彫刻のあるまちづくり事業第1号として「華」制作。彫刻

坂上直哉（さかがみ・なおや/1947～2022年）

東京生れ。東京藝術大学美術学部絵画科油画卒業後、1972年「ステンレスで絵を描きたい」と日新製鋼の門をたたく。以降2012年まで日新製鋼嘱託として表現と技術の共同開発に

携わる。並行して84年より「アートワーク空」を主宰、アーティストとして設計と建築空間におけるワークを開始。95年「アートアソシエイツ八咫」を設立し外部とのネットワークによる恒久設置のアートワーク、展覧会企画・運営。一般社団法人日本建築美術工芸協会元理事。2022年没、75歳。美術家、都市空間～建築美術

坂寛二（さか・かんじ/1891～1928年）

石川県生れ。父は日本画家の坂藹舟。黒田清輝に師事し白馬会に所属したと伝わっている。奈良、大阪、金沢を転々とし、1917、18年の二科会で入選。18年日本画家の池田瑞月と絵画研究会創生会を結成。26年金城画壇展に3点出品。26年金沢市の商品陳列所で陶芸家と作陶瓷絵画展を開催した。1928年没、37歳。洋画

榎篁邨（さかき・こうとん/生没年不詳）

幕末から明治にかけて、藩書調所で活字御用出役として欧文教科書の翻刻にあたり、挿絵の原本模写。明治初期には油絵を描いた。オランダ軍の武装図であるテウプケンのオランダ語原書『Beschrijving hoedanig de Koninklijke Nederlandsche troepen・・・』の図版部分を模写。武器や旗、楽器を持つ兵士など陰影を意識しながら鮮やかに彩色、金唐皮で装丁され、佐竹家に伝わった。平戸松浦家他複数の大名家に模写本が存在。幕末～明治期の日本画、挿絵、洋画

彭城百川（さかき・ひやくせん/1697～1752年）

名古屋生れ。葉種商八仙堂に生れ、京都に出て職業画家としての生活をおくる。法橋に叙せられる。中国画系統の絵（主として明末画の影響を受けたもの）のほか、和画、俳画系統の絵も描く。祇園南海、柳沢淇園らとともに南画の先駆者としての存在意義は大きく、とくに、(南)画、俳句の両道に志した与謝蕪村に影響を与えた。京都で没、55歳。江戸中期の南画家、南画の先駆者

坂口寛敏（さかぐち・ひろとし/1949年～）

福岡県生れ。1975年東京芸術大学大学院油画修了。83年ミュンヘン美術アカデミー卒。東京芸術大学美術学部絵画科教授。99年「現代日本彫刻展」、宇部市野外彫刻館、山口（東京国立近代美術館賞受賞）。2000、03、06年越後妻有アートトリエンナーレ、新潟。200

6年「記憶・美術」小海町高原美術館、小海町、長野。06年個展 表参道画廊、東京。07年「坂口寛敏展」渋川市美術館・桑原巨守彫刻美術館、群馬。07年「プライマリーフィールド」神奈川県立近代美術館葉山館。洋画、造形、彫刻、美教

坂口正之 (さかぐち・まさゆき/1951年～)

1951年生れ。79年 来京芸術大学美術学部工芸科卒。81年大学院美術研究科修了。かねこ・あーとギャラリーで個展。現代日本美術展で佳作賞。10人の新鋭彫刻家たち〈現代彫刻センター(東京)・87年サルノトール・アラ(NY)個展。信機橋画廊(大阪)「第6M大阪現代アート、フェア'88」大阪府立現代美術センター(大阪)。彫刻

坂倉新平 (さかくら・しんぺい/1934～2004年)

岐阜県生れ。1960年モダンアート協会展新人賞。62年文化学院美術科卒。63年渡仏。神奈川県で没、70歳。洋画

坂田和之 (さかた・かずゆき?/1947年～)

長崎県生れ。1968年武蔵野美術大学副手、助手(短大美術科研究室)。72年武蔵野美術大学(レリ賞)。フランス留学(～73)。82年春陽会会員。86年富嶽文化大賞展奨励賞、[静岡県立美術館]。87年静岡現代美術展常葉美術館賞。91年個展[東京・資生堂ギャラリー]。常葉学園大学造形学部造形学科教授(造形学科長)。美教、洋画

坂田耕雪 (さかた・こうせつ/1871～1935年)

金沢市生れ。尾形月耕に師事、浮世絵を学ぶ。1896年大阪毎日新聞社に入り、菊池幽芳の「己が罪」「乳姉妹」などの新聞小説の挿絵を担当して好評を博す。1909年退社して能画の研究に専心し、巽画会会員。大阪市の依頼で大阪城天主閣内郷土歴史画中の「豊太閤」の肖像を描いた。14年文展に入選。1935年没、64歳。挿絵、能画研究

坂田英夫 (さかた・ひでお/1935～2023年)

長崎市生れ。日本大学芸術学部(油彩)中退。1963年長崎大学学芸学部美術科卒。65年自由美術展佳作賞。67年坂田英夫メキシコ留学記念個展(会場:県立美術博物館)、メキシコのシケイロスやタマヨに憧れ留学。70年渡米、活動。2023年没、87歳。洋画

坂田三男 (さかた・みつお/1932～2019年?)

富山県生れ。1955年金沢美術工芸短期大学日本画科卒。56年山口華楊の主宰する晨鳥社に入塾し会員。54年日展に入選。京展、関西展等で受賞。日展会友。花鳥画に優れた手腕を発揮した師に深く師事し、鳥や動物をテーマに、迫力ある独自の画風を展開。2019年没?87歳。日本画

坂 坦道 (さか・たんだう/1920～1998年)

石川県生れ。父は洋画家坂寛二。幼時に北海道に転居する。1944年東京美術学校彫刻科卒。43年新文展入選、戦後は日展に出品し、64年特選。82年日彫展で西望賞。82年札幌市市民芸術賞。64年北海道女子短期大学講師。日展会員。1998年没、78歳。彫刻、美教

50

坂根克介 (さかね・かつすけ/1945年～)

大阪生れ。1969年金沢美術工芸大学美術学科日本画専攻卒。西山英雄に師事。68年日展入選、76、78年特選。日春展、全関西展、京展で受賞。昭和世代日本画展、山種美術館賞展、次代への日本画展等に出品。日展評議員。日本画

阪本幸円 (さかもと・こうえん/1957年～)

福井県生れ。80年福井大学卒業。85～95年4回個展を福井県で開催。84年よりのグループ展に出品。92年現代日本美術展で東京国立近代美術館賞、94年エンバ美術コンクールで京都国立近代美術館賞、95年現代日本美術展で徳島県立近代美術館賞。ロックフォード国際ビエンナーレ'85(米 クラーク芸術センターギャラリー)、バトヴァン国際版画ビエンナーレ(89年 印 バトヴァン総合文化センター)などに出品。版画

坂(阪)本浩雪 (さかもと・こうせつ/1800～1853年)

1800年生れ。紀伊藩江戸詰の医師・坂本順庵甫道の長男。父から医学を学び、かたわら本草の学問を研究、余暇に筆をとって画を研究した。1844年医業を廃し、画道に精進し、草木花卉などの写生に専念した。桜の花に力を入れ、『浩雪櫻譜』を著している。また、諸国を歴遊し、奇木異草や多数の菌類も写生し、『菌譜』2巻を著した。『百卉存真圖』『百花圖纂』な

ど多くの著書。1853年没、54歳。植物画

阪本やすき（さかもと・やすき/1948年～）

大阪生れ。金沢美術工芸大学産業美術学科工業デザイン専攻卒業。森正洋の作品に感銘し白山陶器株式会社に入社。森の指導を直接受け、後に同社のデザイン室長。1983年陶磁器デザインコンペティション83年(ダウンライトシェード)が金賞。数々の展覧会で入賞。2001年(S型ドレッシングポット)がグッドデザイン特別賞・ロングライフデザイン賞。プロダクトデザイナー

坂本幸重（さかもと・ゆきしげ/1954年～）

熊本県生れ。1977年第三文明展奨励賞。80年日展・日春展入選。81年川崎春彦に師事。91年山種美術館賞展大賞(93招待出品)・日春展奨励賞(同'92)。92年五島記念文化賞美術新人賞。93両洋の眼「現代の絵画」展出品(同'96'97)・五島記念文化賞により93～94年イタリア・フィレンツェにて海外研修。94、97年日展特選。日本画

佐本義信（さかもと・よしのぶ/1895～1988年）

高知県生れ。1917年高知県師範学校卒、太平洋洋画研究所に学び、又高知県出身の石川寅治に師事。高知県に帰り中学校の図画教員、27年佐川高等女学校に赴任。かたわら木版画の勉強をした。32年より『土佐三十絵図』を制作。47年、アメリカ、クリーブランドの万国美術観光ポスター博覧会に、『土佐三十絵図』が出品され、戦後の日米親善には『土佐三十絵図』は重要な役割を果たして来た。1988年没、93歳。版画、美教

佐川華谷（さがわ・かこく/1867～1946年）

茨城県生れ。1889年巡査として勤務、奉職中渡辺小華、野沢白華の門人となる。1903年職を辞し画業に専念、上京し荒木十畝に花鳥画を、小室翠雲に山水画をそれぞれ学ぶ。1902年帝展、22年帝展で入選。27年年中国視察旅行に参加。第二次世界大戦中は茨城県那珂郡山方町に疎開。1946年没、79歳。日本画

佐久間雲窓（さくま・うんそう/1801～1884年）

飯山藩士の家に生まれた。通称は伴右衛門。谷文晁の弟子の鑄木雲潭に師事したと思

われる。後、渡辺崋山に入門し、その門下生のひとりである椿椿山に師事したとも伝わっている。煎茶を好み、琴もよくした。1884年没、84歳。江戸後期の絵師

佐久間晴岳（さくま・せいがく/1819～1885年）

1819年生れ。父は陸奥(むつ)仙台藩の絵師佐久間六所(ろくしよ)。江戸の狩野養信(かのう・おさのぶ)にまなび、塾頭となる。帰藩後、藩政改革派の家老芝多(しばた)民部の事件に連座して投獄、維新後ゆるされて漢学塾をひらいた。1885年没、67歳。江戸後期-明治時代の絵師

佐久間竹浦（さくま・ちくほ/1876～1925年）

大分県生れ。京都で田能村直入の私塾南宗画学校に入塾し、直入、田近竹邨に南画を学んだ。その後、郷里に戻って制作を続ける一方、後進の育成にも尽力し、幸松春浦、衛藤晴邨、草刈樵谷らを育てた。1925年没、49歳。南画

佐久間六所（さくま・ろくしよ/1792～1863年）

1792年生れ。狩野家にまなぶ。代々陸奥(むつ)仙台藩の絵師であったが、一時除籍され、六所の代に13代藩主伊達慶邦(よしくに)によって絵師に再任。1863年没、72歳。江戸後期の絵師

桜井雪館（さくらい・せつかん/1715～1790年）

茨城県生れ。江戸にてで雪舟流の画法を研究し、雪舟12代を自称した。雪館が弟子におしえた画の法則などは娘の桜井秋山によって記録され、1858年ごろ「画則」として出版された。1790年没、76歳。江戸中期の絵師

櫻井忠彦（さくらい・ただひこ/1946年～）

宮城県出身。多年にわたり洋画家として優れた創作活動を行うとともに、後進の指導・育成に努め、洋画界の発展と文化芸術の振興に寄与した。モザイク壁画、陶板壁画などの制作も行う。行動美術協会会員、宮城県芸術協会会員。洋画、モザイク、陶板壁画

桜井敏生（さくらい・としお/1940年～）

岡山県生れ。1964年武蔵野美術学校西洋画科卒。(61年より、桑沢デザイン研究所でアルバイトをし、卒業後助手として勤務)。70年桑沢学園 桑沢デザイン研究所講師勤務。74年新制作協会会員。88年東京造形大学講師勤務。2006年桑沢デザイン研究所、東京造形大学 講師辞任、新制作協会退会。69年新制作協会展彫刻部初入選。72年新制作協会展、彫刻部新作家賞。74年新制作協会会員。2009年個展東京造形大学 ZOKEI ギャラリー 東京/八王子市。彫刻、美教

佐倉功起 (さくらこうき/1931年～)

岐阜県生れ。日展を中心に活躍、主に写実風景画を制作する。特に湖畔や山岳などの新緑や紅葉、雪化粧の稜線などに圧倒的な描写力を有し四季折々の自然を表現している。日展会友。中日文化賞、日展・日春展入選多数、奨励賞など。日本画

桜庭藤二郎 (さくらばとうじろう/1913～1994年)

宮城県生れ。1932年に上京、36年青龍社展に入選。45年に能代市へ疎開、以後定住。47年秋田県美術展で文部大臣賞。53年再興院展に入選、55年郷倉千靱に師事し、院友。56年郷倉主宰の〈草樹社〉に参加。72年再興院展で奨励賞。76年特待推挙。1994年没、81歳。日本画

桜間青涯 (さくらませいがい/1786～1851年)

1786年生れ。三河岡崎藩主本多忠顕の家臣。渡辺崋山の弟子、花鳥山水画を得意とした。椿椿山らと親交。1851年没、66歳。江戸後期の絵師

さくらももこ (さくらももこ/1965～2018年)

静岡県生れ。1986年静岡英和女学院短期大学国文科卒業。84年在学時に「教えてやるんだありがたく思え!」が『りぼんオリジナル』(秋の号、集英社)に掲載されデビュー。卒業後出版社勤務を経て、『りぼん』誌に「ちびまる子ちゃん」を連載(86～96年)、89年同漫画で講談社漫画賞。90年フジテレビ系列でテレビアニメ化され爆発的な人気。「おどるポンポコリン」の作詞も手掛け、第32回日本レコード大賞。91年エッセイ集『もものかんづめ』(集英社)は、文庫版も併せて250万部のベストセラー。2000年書き下ろし雑誌『富士山』(新潮社、全5集)では編集長を兼ね、企画、取材、執筆。2018年没、53歳。漫画、エッセイ

佐香貫古 (さこうかんこ/1812～1870年)

徳島幡町の人。徳島藩御用絵師、渡辺広輝に入門し、のちに住吉広定について住吉派を学んだ。画技にすぐれ、性格は温良で、酒豪だったと伝わっている。隠居後は、新町刻町、通町、大道などに居を移した。1970年没、59歳。江戸後期の絵師

佐香美古 (さこうよしふる/1839～1910年)

徳島県生れ。佐香貫古の子。はじめ父・貫古について学んだが、17歳の時に江戸に上がり住吉弘貫に入門して学んだ。帰郷後は洋画を研究した。1910年没、72歳。江戸後期-明治の絵師、洋画

佐々木麻こ (ささきあさこ/生誕年不詳～)

大阪生れ。1962年京都市立芸術大学西洋画科卒。62年モダンアート展出品。62～65年鉄鷄会展出品。67年 スペイン王立サンフェルナンド美術大学デッサン科修了。68年パリ国立美術大学リグラフィ科修了。72年 版画の制作を始める。版画グランプリ入選、フランス賞美術展入選、NHK連続テレビドラマ「花くれぬい」のタイトル画制作。版画、洋画

佐々木一郎 (ささきいちろう/1914～2009年)

盛岡市生れ。1938年岩手県師範学校専攻科を修了、教諭。46年深澤省三、紅子の日曜図画教室に協力。途中教室を受け継ぎ68年まで続けた。63年一水会会員。65年県立美術館建設運動が始まり、事務局長。67年盛岡で個展を開催。70年岩手大学教育学部教授。95名誉教授就任。75年サロン・ドートンヌに出品。後に会員。盛岡市で没、95歳。洋画、美教

佐々木原善 (ささきげんぜん/生没年不詳)

秋田県生れ。師沈南蘋。秋田蘭画のところに洋画をてがけた画家。生没年不詳。江戸後期の絵師、日本画、洋画

佐々木香巖 (ささきこうげん/1870～1934年)

1887年京都府画学校(後に京都市画学校)に入学、93年田村宗立の媒酌で吉富朝次郎と結婚する。(祖父田中治兵衛は千山と号し、貫名海屋や梁川星巖に学び、維新の志士

らと交遊があった)1934年没、64歳。日本画

佐々木耕成 (ささき・こうせい/1928～2018年)

熊本県生れ。1958年武蔵野美術学校同校西洋画科卒。62年汎太平洋青年美術家展で国際青年美術家展賞。64年前衛美術グループ「ジャックの会」に参加。67年フォード財団の援助により渡米。85年帰国。2007年「ジャックの会」メンバーと再会し再び交流がはじまる。10、アーツ千代田 3331 にて個展開催。18年熊本県立美術館にて「変革の煽動者佐々木耕成アーカイブ」展が開催。群馬県で没、89歳。前衛美術、造形

佐々木尚文 (ささき・しょうぶん/1890～1970年)

岐阜県生。多治見で陶磁器絵付けの画工として働き、1908年上京して川合玉堂に師事。13年日本画会会員。第一部会の結成に参加。文展・帝展などで入選多数。戦後の45年から長野市に居住。1970年没、80歳。日本画

佐々木静一 (ささき・せいいち/1923～1997年)

ワルシャワ生れ。1951年早稲田大学文学部芸術学美術史専攻課程卒。在学中安藤更正に師事。51年神奈川県立近代美術館の学芸員。東京国立近代美術館に先だつ初めての日本の近代美術館であった同館の初代学芸員。初代館長村田良策および2代目館長土方定一のもと、多くの展覧会を担当。68多摩美術大学美術学部教授。「材料学」の研究に取り組んだ。なかでも、青色顔料であるプルシアン・ブルーの流通、洋風油彩技法やガラス絵、泥絵技法の伝搬に興味を持ち、海外調査を行った。日本的な絵画表現の例としての文人画、特に多くの油彩画家に関心を抱かれた近代文人画に注目し、論考を加えた。1997年没、74歳。学芸員、美史、美評

佐々木泉景 (ささき・せんけい/1773～1848年)

加賀生れ。京都で狩野(かのう)派の鶴沢探泉(つるざわたんせん)にまなび、加賀金沢藩につかえる。のち法眼にのぼり医師格の待遇をうけた。1848年没、76歳。江戸後期の絵師

佐々木泉竜 (ささき・せんりゅう/1808～1884年)

石川県生れ。佐々木泉景の次男。京都で狩野(かのう)派の鶴沢探泉(つるざわたんせん)に、江戸で狩野探信にまなぶ。加賀金沢藩につかえ、1852年法橋(まつきょう)となる。維新後は内国勸業博覧会、内国絵画共進会に出品。1884年没、77歳。江戸後期、明治期の絵師

佐々木大樹 (ささき・たいじゅ/1889～1978年)

富山県生れ。東京美術学校彫刻科本科木彫部卒。研究科に進み翌年終。1920、22年帝展で特選。22年平和記念東京博覧会で銀賞。28年帝展で帝国美術院賞。37年「塙保巳一の像」をヘレン・ケラー女史に贈った。38年以降文展、日展の審査員を11回。30年結成された日本木彫会に所属し、出品。34年帝国美術学校教授(翌年多摩帝国美術学校教授)。日展で58年評議員、73年参与。51～66年多摩美術大学教授。1978年没、88歳。彫刻、美術教

佐々木岳久 (ささき・たけひさ/1972年～)

宮城県生れ。1996年多摩美術大学美術学部絵画科油画専攻。相笠昌義、松本英一郎師事。第7回「現代美術小品展」(佳作)、第3回「日仏現代作家展」(大賞)、フィナーレ国際美術展サロン・ド・フィナーレ・パリ展・東京・大阪展第1回「日仏アートサロン」ふるさと美術展。絵画やオブジェが中心。銀塩銅腐蝕プリントという自ら開発した新技法を駆使しているのが特徴。現代美術、オブジェ

佐々木紀政 (ささき・のりまさ/1970年～)

広島市生れ。1994年 古屋芸術大学美術学部彫刻科卒。95年兵庫県に転居。95～2000年但馬木彫に参加。2000年呉市に転居。主に木材を使い、主に猫やオオサンショウウオなど、動物をモチーフとした作品を制作。彫刻(木彫)

佐々木原善 (ささき・はらぜん/生没年不詳)

秋田県生れ。横手城代戸村義敬とその子義通(後草園)の支援で安永末に江戸に出て、南蘋派の画家・松林山人(?-1792)に師事。師の没後は長崎へ行き、熊斐の三男熊斐明につく。帰郷後、後草園に南蘋派の画法を伝えた。40歳の頃、上京する途中で亡くなったと伝えられる。作品には(1789-1801)の年記をもつものが多い。江戸中-後期の絵師

佐々木秀子 (ささき・ひでこ/1960年～)

1960年生れ。多摩美術大学日本画専攻卒。第2回富嶽文化賞大賞。日本画

佐々木弘 (ささき・ひろむ/1930～2012年)

京都生れ。50年創造美術展初入選。79, 80, 82年創画展創画賞。84年声展結成。創画会会員。京都精華大学教授。2012年没、81歳。日本画、美教

佐々木林風 (ささき・りんふう/1884～1933年)

新潟県生れ。1902年東京美術学校予備過程入学、03年日本画科に進んだ。07年同校を卒業し、川端玉章に師事。1920年帝展に入選し、以後第10回展までほぼ毎回歴史画を中心に出品を続けた。この間、北白川宮邸の襖絵を制作。1933年没、50歳。日本画、挿絵、版画

笹沢操亭 (ささざわ・れきてい/1855～1935年)

長野県生れ。1873年島田桃溪に師事、85年水戸の木下華圃に師事。66年児玉果亭に入門。果亭より操亭の雅号。1891年京都市の日本画共進会に出品二等賞。各地の展覧会に出品・受賞。幾多の弟子の育成にも情熱を注ぎ、平林大虚、青木石農・庄村竹亭など、輩出。1913年南画家を主とする全県的規模の「信濃美術会」を発足、会長に就任。1935年没、80歳。南画、美教

笹戸千津子 (ささど・ちづこ/1948年～)

山口県出身。東京造形大学美術学科彫刻専攻卒。同大学彫刻研究室修了。東京造形大学は彫刻家の佐藤忠良らが創設に尽力した大学であり、一期生。佐藤忠良のモデルを三十年あまり務めた。1974、76年新制作展新作家賞。77年新制作協会会員。87年中原悌二郎賞優秀賞。93年神戸具象彫刻大賞展準大賞。彫刻

ささめやゆき・細谷正之 (ささめや・ゆき/1943年～)

東京都生れ。出版社の文芸部に所属、日本文学全集などの編集。1968年御茶の水美術学院に入学。69, 70年二科展に入選。70年にパリ、71年にNYで絵画を学ぶ。72年フランスのシェルブール美術学校で学ぶ。73年帰国細谷正之名義で版画や油彩画の作品を発

表。85年ベルギー・ドメルホフ国際版画コンクールで銀賞。90年代からは、ささめやゆき名義で活動。95年小学館絵画賞。99年「真幸くあらば」「秋が匂って」「眠れるままの女」で講談社出版文化賞(さしえ賞)。2000年『あしたうちにねこがくるの』で日本絵本賞。09年『彼岸花はきつねのかんざし』で赤い鳥さし絵賞。17年「さつ太の黒い子馬」でJRA賞馬事文化賞。絵本、版画、イラスト、洋画

佐治賢使 (さじ・ただし/1914～1999年)

岐阜県生れ。1938年東京美術学校工芸科卒。36年文展に入選。石川県立工芸学校での教職生活を経て、漆工芸家として独立。43年、46年、47年日展特選、51年同審査員、61年日本芸術院賞。78年帖佐美行らと日本新工芸家連盟を結成。86年創立の日工会(日本工匠会)会長。89年文化功労者、95年文化勲章。83年展文部大臣賞。96年芸術院賞。1999年没、85歳。漆芸、日本工匠会会長

佐竹永海 (さたけ・えいかい/1803～1874年)

福島県生れ。江戸で谷文晁にまなび、その高弟といわれた。のち近江(おうみ)(滋賀県)彦根藩主井伊直亮(なおあき)につかえ法眼となった。1874年没、72歳。江戸後期-明治時代の絵師

佐竹永湖 (さたけ・えいこ/1836～1909年)

江戸生れ。鳥取藩の絵師沖一峨に土佐派、狩野派をまなぶ。のちに佐竹永海の養子となった。維新後は内国勸業博覧会などに出品するかたわら日本画会の審査員をつとめた。1909年没、73歳。日本画、幕末-明治時代の絵師

佐竹永邨 (さたけ・えいそん/1845～1922年)

福島県生れ。蒲生羅漢、佐竹永海に師事。永海の次女と結婚し、佐竹姓を名のる。1877年内国勸業博覧会に「山水」を出品。日本美術協会委員、日本画会委員。正派同志会評議員などをつとめた。1922年没、78歳。日本画

佐竹永陵 (さたけ・えいりょう/1872～1937年)

東京生れ。1887年佐竹永湖に師事し後佐竹家の養子となった。永湖の父は谷文晁の高

弟佐竹永海、永陵は三代に当る。内国勸業博覧会、大正博覧会に出品して受賞し、初期文展で3等賞。日本美術協会に於て、受賞及宮内省御買上の榮に浴し、大正天皇の御前揮毫を奉仕。晩年は専ら日本美術協会に出品して文帝展に関係せず、作画の傍ら文晁の画風を研究し、その鑑定に従事。1937年没、66歳。日本画

佐竹義和 (さたけ・よしまさ/1775～1815年)

江戸生れ。秋田藩8代藩主義敦の子。1786年9代秋田藩主。領内産物の保護奨励、新田の開発、鉾山の改革、植林の勧め、90年には藩校・明德館を設立。1805年には藩政史『国典類抄』の編纂を命じ、義和の没後10代藩主義厚の時代に前編226冊、後編281冊が成立。書画も巧みで多くの作品を遺している。1815年没、40歳。江戸後期の書画、9代秋田藩主

佐竹義躬 (さたけ・よしみ/1749～1800年)

1749年生れ。佐竹義邦(よしくに)の子。出羽(でわ)久保田藩(秋田県)角館(かくの)だて城代。洋風画を小田野直武(なおたけ)にまなび、南蘋(なんぴん)派の影響も受け、桜、梅、牡丹(ぼたん)などの写生図をえがいた。1800年没、52歳。江戸中期・後期の絵師、武士

佐藤恵美 (さとう・えみ/1973年～)

千葉県生れ。1993年武蔵野美術大学短期大学部デザイン科卒。96年OギャラリーUP・S(銀座)。東京・長野・兵庫で個展開催。95年CWAJ現代版画展(アメリカンクラブ/麻布)。英国ミニアチュール版画展。台湾日本現代版画交流展(目黒美術館区民ギャラリー)。版画

佐藤杏子 (さとうきょうこ/1954年～)

茨城県生れ。1978年日本版画協会(毎年出品、95年準会員優作賞、同年会員)。80年多摩美術大学大学院修了。88年クラコフ国際版画トリエンナーレ(ポーランド、97、2009、15年にも出品)。89年個展(ギャラリー砂翁&トモス、東京、以後同画廊で個展多数)。92年茨城県芸術際美術展覧会(92年優賞、95年会友賞)。97年文化庁芸術家在外研修員としてプラハ(チェコ共和国)に滞在。97年国際ミニプリントビエンナーレCLUJ佳作賞(ルーマニア)。版画

佐藤敬助 (さとう・けいすけ/1951～2017年)

東京生れ。1971年日彫展入選(以降連続出品)・日展入選(以降連続出品)。74年日彫展奨励賞、日本彫刻会会友。76年東京教育大学大学院教育学研究科美術学専攻修了(修士課程)。日彫展日彫賞、日本彫刻会会員。80年筑波大学大学院芸術学研究科博士課程退学、長崎大学教育学部講師。81年日展会員。84年長崎大学教育学部助教授、日展特選、85年日展特選。2017年没、66歳。彫刻、美教

佐藤晃一 (さとう・こういち/1944～2016年)

高崎市生れ。1965年東京藝術大学工芸科に入学。69年同大学工芸科ビジュアルデザイン専攻卒、資生堂宣伝部に入社。劇団青年座のポスター。71年に資生堂を退社し、佐藤晃一デザイン室を設立。74年「ニュー・ミュージック・メディア」のポスターで独自の境地を開拓。77年日米グラフィックデザイン大賞のポスター部門とエディトリアル部門で金賞。78年劇団青年座「死のう団」等のポスター3点がニューヨーク近代美術館の永久保存。82～87年東京藝術大学デザイン科で非常勤講師。88年ニューヨーク近代美術館での「THE MODERN POSTER」展のために依頼されて制作したポスターが国際指名コンペ1席。91年に毎日デザイン賞。98年には「武満徹一響きの海へ」告知ポスター等で芸術選奨文部大臣新人賞。95年多摩美術大学美術学部デザイン科グラフィックデザイン専攻教授。99年高崎市美術館で「超東洋・佐藤晃一ポスターの世界展」が開催。08年にはイラストレーターの安西水丸、若尾真一郎とクリエイションギャラリーC8で「絵とコトバ 三人展」を開催、自ら詠んだ俳句とグラフィックを融合させた“俳グバ”を発表する。2016年没、71歳。グラフィック・デザイナー、美教

100

佐藤光華 (さとう・こうか/1887～1944年)

京都生れ、京都絵画専門学校卒、1920年第2回帝展に「吉祥天」出品以来数度入選、30年無鑑査となつた。出品作に「赫奕姫」「嬌婉」「漢織呉織」「菊慈童」「瑞鷹」がある。1944年没、57歳。日本画

佐藤光甫 (さとう・こうぼ/1893～1962年)

大分県生れ。日田郡立工業徒弟学校で髹漆と描金を学び、1911年同校卒業後、金沢の蒔絵師大垣昌訓に師事。15年帰郷し、母校で教鞭、傍ら日田漆器株式会社の事業にも従事。36年上京し、朝日工業株式会社漆工部技師となり、43年再度帰郷し、自営。商工展や文展、日展、海外の万国博覧会等にも出品し、度々受賞。1962年没、69歳。工芸(髹漆、乾

漆)、美教

佐藤恭子 (さとう・きょうこ/1954年～)

茨城県生れ。1978年日本版画協会(以後毎年出品、95年準会員優作賞、同年会員。80年多摩美術大学大学院修了。88年クラコフ国際版画トリエンナーレ。99年個展(ギャラリー砂翁&トモス、東京、以後同画廊で個展多数)。92年茨城県芸術際美術展覧会(92年優賞、95年会友賞)。97～98年文化庁芸術家在外研修員としてプラハ(チェコ共和国)に滞在。98年国際ミニプリントビエンナーレ CLUJ 佳作賞(ルーマニア)。版画

佐藤紫煙 (さとう・しうん/1873～1939年)

岩手県生れ。瀧和亭に就いて花鳥を学び衣笠豪石に山水画の描法を受けた。1896年明治天皇日本美術協会へ行幸の際、御前揮毫を仰付けられ、大正天皇に献上の揮毫まで凡20回の光栄を担った。97年京都府全国絵画共進会に出品作は1等賞、98年日本美術協会展で2等賞。1907年正派同志会第1会展で3等賞。18年秋には文展審査に慥らず南北画系作家と共に建白書を時の文相に提出。1939年没、65歳。日本画

佐藤淳一 (さとう・じゅんいち/1963年～)

宮城県生れ。1987年東北大学工学部卒業後、武蔵野美術大学短大部に学ぶ。90年代半ばから大型カメラやピンホール・カメラで水門を撮影した写真を制作。近年はデジタルの特性を活かした写真映像を個展やインターネット上で発表。写真

佐藤潤四郎 (さとう・じゅんしろう/1907～1988年)

福島県生れ。1934年東京美術学校金工科卒。36年各務クリスタル製作所入社。38年新文展に入選。以後出品を続け、47年日展で<クリスタル花器>が特選。52年日展で審査員。クリスタル花器、吹込ガラス花器等の作品を残し、東京で没、81歳。(佐) ガラス工芸

佐藤昌胤 (さとう・しょういん/1907～1970年)

三重県生れ。1921年三重県立津中学校に入学。同校の先輩の丹羽文雄の影響を受け、文学を志し上京した。川端画学校で油絵の修業を始め。曾宮一念の指導を受けた。28年帝展に入選。300年から春陽会に出品し、48年に準会員、後に会員。1970年没、63歳。伊勢

湾台風を題材にした絵画で知られる。1970年没、63歳。洋画

佐藤省三郎 (さとう・しょうざぶろう/1917～1994年)

和歌山県生れ。東京高等工芸学校卒。1939年から3年間、徳島市内で教職につく。戦後は画材店「すばる」を経営。また、徳島大学で教鞭。55年代に上京し、東京家政大学教授、武蔵野美術大学教授を歴任。自由美術協会会員。国画会展、日本アンデパンダン展、読売アンデパンダン展、G展などに作品を出品。武蔵野美術大学名誉教授。1994年没、77歳。洋画、美教

佐藤仁宗 (さとう・じんそう/1911～1942年)

熊本県生れ。構造社展で構造賞。第4回文展で入選、特選。将来を嘱望されてゐた。逝去と同時に構造社では会友から会員に推挙。1942年没、32歳。彫刻

佐藤静司 (さとう・せいじ/1915～2021年)

郡山市生れ。1931年県立安積中学校を中途退学、上京。三木宗策の門に入る。36年改組帝展に入選。40年正統木彫会に出品。50年日展で特選。51年日展で無鑑査。52年日展で出品依嘱。63年日展で菊花賞。審査員、評議員等を歴任。文部大臣賞を受賞。97年勲四等瑞宝章。戦後の福島県の彫刻界を先導。2001年没、106歳。(佐) 彫刻

佐藤太清 (さとう・たいせい/1913～2004年)

京都生れ。1931年福知山実践商業学校卒。上京。33～36年児玉希望塾に内弟子。花鳥画と風景画を融合させた独自の花鳥風景画を確立。43年文展入選。66年新日展に出品作で文部大臣賞、日本芸術院賞。80年日本芸術院会員、88年文化功労者、92年文化勲章。93年福知山市名誉市民。2004年没、93歳。福知山市佐藤太清記念美術館。日本画、個人美術館

佐藤辰治 (さとう・たつじ/1916～1963年)

福島県生れ。水彩画家の荒川三郎に学び、16歳で上京、太平洋画学校等で絵画を学ぶ。27歳新文展で入選。戦後は兵庫県に移り住み、独立美術協会に出品。喜多方や本市に絵画研究所を開設し、多くの後進を育てた。抽象絵画の会津地方における中心的存在

で、ミクストメディア(顔料だけでなく、さまざまな素材を用いて制作。1963年没、47歳。**洋画、絵画研究所**

佐藤民雄 (さとう・たみお/1946年～)

兵庫県生れ。71年ウィーンに渡る。国立ウィーン応用美術学校に学ぶ。75年テンペラ画制作。95年画文集『私のモーツァルト紀行』(求龍堂)刊行。日本橋三越で個展。**洋画、テンペラ**

佐藤多持 (さとう・たもつ/1919～2004年)

東京生れ。1937年東京美術学校日本画科に入学。40年日本画院展に入選。41年繰上げ卒業。戦後は山本丘人に師事。油絵も試み、47年油彩作品を旺玄会展に出品。49年読売アンデパンダン展に日本画を出品。57～96年知求会を結成、発表の場とした。85年「水芭蕉曼荼羅 佐藤多持の世界」(池田 20世紀美術館)、86年「創造の展開—佐藤多持代表作展」(青梅市立美術館)が開催された。2004年没、85歳。**日本画、洋画**

佐藤土筆 (さとう・つくし/1911～2004年)

大分県生れ。大分県師範学校卒業後、京都市立絵画専門学校に学ぶ。1937年青龍社展に入選。同校卒業後は上京し、川端龍子に師事。46、47年青龍社展で奨励賞。50年社人に推挙。66年川端龍子の死で青龍社が解散すると、同年、社人有志とともに東方美術協会を結成し、同会員として活躍。2004年没、93歳。**日本画**

佐藤哲也 (さとう・てつや/1959年～)

島根県生れ。1983年多摩美術大学(加山又造教室)卒。86年「セントラル美術館日本画大賞」入選。95年春の院展入選。2004年前田青邨記念大賞展にて奨励賞。05年着物デザイナーとして著名人の着物のデザインも手がける。**日本画、デザイン**

佐藤時啓 (さとう・ときひろ/1957年～)

山形県生れ。1981年東京芸術大学美術学部彫刻科卒。83年同大学大学院美術研究科彫刻専攻修了。90年東川賞新人作家賞。93年メルセデス・ベンツ・アート・スコープ賞、フランス滞在。94年文化庁在外研修員としてイギリス滞在。2015年芸術選奨文部科

学大臣賞。東京芸術大学美術学部先端芸術表現科教授。2023年土門拳記念館館長。美術家、**写真、美教**

佐藤利宗 (さとう・としむね/1937年～)

長崎県生れ。1960年長崎大学教育学部卒。66年長崎県展初入選。68年長崎県展知事賞。69年西日本洋画新人秀作展、銀賞。71年長崎県展知事賞。72年全国県展選抜展、文部大臣賞。76年長崎県展知事賞。77年全国県展選抜展、文部大臣賞。80年長崎県展西望平和賞。85年佐藤利宗、松田綏(すい)一 2人展。**洋画**

佐藤暢男 (さとう・のぶお/1926年～)

神奈川県生れ。旧制横浜市立鶴見工業学校卒業後、1966年日本版画協会会員となる。クラコウ国際版画ビエンナーレ、国際版画協会展など、国内外の版画コンクール展に出品。**版画**

佐藤 昇 (さとう・のぼる/1936年～)

大分市生れ。1959年大分大学学芸学部卒。56年大分県美術展に入選。61年東光会展に入選。以後、東光会展、大分県美術展を主舞台に活躍。72年東光会会員。ペインティングナイフを多用した重厚なマチエールが特徴で、初期・津久見の石灰山、中期・愛知の採土場、国東の石仏を描く。**洋画**

佐藤 均 (さとう・ひとし/1875～1926年)

仙台生れ。1902年東京美術学校西洋画科選科卒。第7回白馬会展に<初春>初入選、以後、10回展、13回展に入選するなど黒田清輝門下で活躍する。とくに肖像画を得意として生計を立てていた。07年第1回文展に<初秋>初入選。24年頃、下谷区谷中上三崎南町43に居住。26年4月東京で没、享年52歳。(佐)**洋画**

佐藤文雄 (さとう・ふみお/1904～1998年)

秋田市生れ。1923年東京美術学校西洋画科に入学し、藤島武二に師事、研究科修了後は槐樹社の牧野虎雄に師事。30年帝展に入選。33年旺玄社(現・旺玄会)の創立に参加。39年パリに滞在し、藤田嗣治からピカソを紹介されたり、猪熊弦一郎や宮本三郎たちと知り合

う。62年大久保作次郎、川島理一郎らの新世紀美術協会に参加。62年から資生堂ギャラリーで継続的に個展開催。67年秋田県立美術館で個展開催。73年新世紀展で黒田清輝賞。80年文部大臣賞。77年日伯現代美術展日伯賞。86年秋田県文化功労者。94年紺綬褒章。1998年没、94歳。洋画

佐藤正持 (さとう・まさもち/1809～1857年)

東京生れ。春木南湖や谷文晁らに師事、浮世絵版画を学んで新機軸を出す。日本神話や歴史上の出来事などを描き、「紙芝居」の元祖とも呼ばれる。1829年頃から江戸を離れ西遊の旅に出、36～42年丹後国宮津に滞在し、藩主本庄宋秀の御用絵師を務め、領内地区や風景写生画なども手がけた。54年大坂屋源介(林孚一)の庇護の下で8巻本の「皇朝画史」を制作中病没。1857年没、48歳。江戸後期の絵師、浮世絵版画

佐藤元彦 (さとう・もとひこ/1939～2023年)

函館市生れ。1961年多摩美術大学日本画科卒。郷倉千鞆に師事し、師の没後は門下の今野忠一に師事。62年日本美術院展初入選、65年院友推挙。94年の出品作で翌年秋田県芸術選奨受賞。2005年日本美術院特待。2023年没、84歳。日本画

佐藤康宏 (さとう・やすひろ/1955年～)

宮崎県生れ。1978年東京大学文学部美術史学専修課程卒業、80年同大学院人文科学研究科修士課程修了、東京国立博物館技官、81年文化庁文化財保護部美術工芸課技官、89年同絵画部門文化財調査官、2000～20年東京大学文学部教授。08～16年放送大学客員教授。雑誌『UP』(東京大学出版会)の439号(2009年5月)から589号(2021年)まで「日本美術史不案内」を連載。20年『若冲伝』で芸術選奨文部科学大臣賞。「登録美術品調査研究協力者会議」の座長。美史(近世絵画史)、美教

盛岡短期大学美術工芸科卒。56年新制作派協会展に入選。60年新制作展で新作家賞。65年舟越保武の《長崎26殉教者記念像》の制作助手。70～2002年和光大学文学部芸術学科講師。99年舟越保武、照井榮らとともに「新制作協会彫刻部会員5人展」(MORIOKA 第一画廊)に出品。新潟県で没、77歳。彫刻

佐藤至良 (さとう・ゆきよし/1929～2013年)

大分市生れ。1949年以降長く県立大分商業高校で教鞭を執りながら、大分県美術展や新世紀群などのグループ展にて活躍した。65～70年自由美術展に出品、71年白日出品の頃から木版画を主として手がけるようになる。以降、白日出展、日版会展を中心に作品を発表。日本版画会の副会長、現代木版画の普及活動にも貢献した。2013年没、84歳。版画、美教

佐藤陽子 (さとう・ようこ/1949～2022年)

戦後日本を代表する版画家の池田満寿夫(1934 - 1997)による、初期から晩年までの活動を網羅した約800点の作品群。池田と彼の長年にわたるパートナーであった佐藤陽子氏が運営していたM&Y事務所から2007年に京都国立近美に寄贈。池田がデビューを飾った東京国際版画ビエンナーレなど、数々の国際展に出品された代表作に加え、初期の貴重な豆本などが含まれます。国立京都近代美術館所蔵。2022年没、72歳。ヴァイオリニスト、声楽家、エッセイスト、コレクター(M&Yコレクション)

里中満智子 (さとなか・まちこ/1948年～)

大阪生れ。大阪芸術大学教授。2018年公益社団法人日本漫画家協会理事長。描いた作品数は19年時点で500を超える。作品に「あした輝く」、「天井の虹」、「今が正念場」等。2023年文化功労者。漫画

里の家芳滝・中井芳瀧 (さとのや・よしたき/1841～1899年)

1841年生れ。歌川芳梅(よしうめ)の門人。大坂の浮世絵師として知られ、役者絵、美人画にたくみであった。のち和泉(いづみ)堺(さかい)にこうつた。1899年没、59歳。幕末-明治時代の浮世絵師

里見明正 (さとみ・あきまさ/1912～1974年)

埼玉県生れ、1936年東京美術学校油画科卒。浦和画家の須田剋太と同じく光風会に所属し、浦和市の別所沼畔にアトリエを構え、須田のアトリエと隣り合っていた。別所沼対岸(稲荷台)の林倭衛のアトリエにも須田としばしば訪れた。また、寺内萬治郎の門下生が集まる武蔵野会に参加した。42年新文展に入選、特選。県北美術家協会会長、熊谷市教育委員長などを歴任し、文化の振興にも貢献した。作品は埼玉県立近代美術館に所蔵。1974年没、62歳。洋画、浦和画家

里見米菴 (さとみ・べいあん/1898～1993年)

富山県生れ。1932年年京都市立絵画専門学校研究科修了。土田麦遷、郷倉千靱に師事。25年国画創作協会第1回春季展に入選。34年帝展に入選。42年再興院展に初入選。テーマはインドや東南アジア地域の神話や歴史画多く、群像を巧みに構成し独自の装飾的表現となっている。日本美術院特待。1993年没、95歳。日本画

佐渡山安健 (さとやま・あんけん/1806～1865年)

首里生まれ。佐渡山安懿の六男。屋慶名政賀(吳著温)、小橋川朝安(向元瑚)に絵画を学ぶ。1828年王命により花鳥画を描いて褒賞。33年には馬図、花鳥図、虎図などを描き賞賜された。33年黄冠に叙された。37年専ら国王の御後絵の制作に従事し、尚円王以下各王の御後絵のほとんどを描いた。46年にフランス艦が来航した際には、王命により仏郎西人之図を描いている。1865年没、59歳。江戸後期の絵師

佐野 昭 (さの・あきら/1866～1955年)

江戸生れ。工部美術学校でラゲージに師事。黒田清輝、久米桂一郎と交遊。1895年明治美術会展に出品。96年白馬会創立会員となる。赤坂離宮、新帝國議事堂の装飾彫刻を手がけた。1955年没、89歳。作品に「可美真手命像」など。彫刻

佐野光穂 (さの・こうすい/1896～1960年)

長野県生れ。菊池契月に師事して四条派風の写実画を修得。官展中心に出品を重ねる。後に富田溪仙に師事して、南画を修め、院展に出品。1930年聖徳太子奉讃美術展に(椿花図)で入選。以後連続入選。37年白御会の結成に参加、同会代表。1960年没、64歳。日本画、南画

佐野常民 (さの・つねたみ/1822～1902年)

佐賀県生れ。常民は幕末から明治の時代を背景に、政治・産業・科学・芸術の幅広い分野で先進的な活動をし、数々の業績を残しています。日本赤十字社の創設者としてはあまりにも有名ですが、その社長を務めていた明治初期、当時衰退しつつあった日本美術界の現状に危機感を抱いて、1879年現日本美術協会の前身となる龍池会を結成して、伝統美術の

保護・振興に尽力しました。佐野は美術工芸の振興を掲げて、上野の不忍池畔の天竜山生池院を会場に龍池会をつくった。これは74年、佐野がオーストリア・ハンガリーの万国博覧会に行った際、イタリアでラファエルやミケランジェロや、レオナルド・ダ・ヴィンチなどの名画や彫刻をみて深く心を打たれて以来の関心事であった。当時は狩野法印が上野博物館の老雇員をしたり、弟子の橋本雅邦が1本1銭で扇面に山水画を描いたり、また狩野芳涯が郷里に帰って養蚕と妻が荒物屋をやって飢えをしのぐなど、画家たちが貧窮のどん底に落ちた時代であった。龍池会はこうした美術工芸家たちの貧窮を知った佐野がこれを救済するためにつくったものだが、87年日本美術協会に発展した。佐野が最後まで会長、会員数も創立当初の19人から、佐野が亡くなった1902年には1440人に増加。1902年没、80歳。現日本美術協会の前身となる龍池会を結成、美普

佐野比呂志 (さの・ひろし/1919～2013年)

徳島県生れ。徳島師範学校卒業。「素直大胆」を理念とし、独立美術協会の独立展を中心に作品を発表、1955年同会会友。師範学校卒業後は美術教師。第6回徳島県芸術大賞、徳島県文化賞受賞。20年に渡り徳島県美術家協会会長。67年徳島県教育委員会教育功労賞、公益財団法人美育文化協会指導者賞。96年徳島県の美術の発展と教育に尽力した功績により、徳島県文化賞。2013年没、94歳。洋画、美教、美普

佐野洋子 (さの・ようこ/1938～2010年)

北京生れ。武蔵野美術大学デザイン科卒。デパート宣伝部でのデザイナー勤務を経て、ベルリン造形大学でトグラフを学ぶ。1974年に刊行された絵本《おじさんのかさ》で注目される。《だってだってのおばあさん》《わたしのぼうし》《空とぶライオン》今も読み継がれている絵本を発表。77年に刊行された《100万回生きたねこ》は、200万部以上のロングセラーとなっている。80年前後からはエッセイも執筆し、その著作として《神も仏もありませぬ》《シズコさん》《役に立たない日々》。2003年紫綬褒章受章、08年巖谷小波文芸賞受賞。2010年没、72歳。絵本、エッセイスト

佐原和行 (さはら・かずゆき/1946～2006年)

愛知県生れ。水彩画家であった父の影響を受け、東京藝術大学の脇田和教室に学び、春日部たすくに師事。やがて透明な輝きと安らぎに満ちた独自の作風を確立しました。93年

池田20世紀美術館で個展。水彩連盟会員。2006年没、60歳。水彩

佐原和行 (さばら・かずゆき/1946～2006年)

愛知県生れ。東京藝術大学脇田教室に学び水彩では珍しく数十回もの丹念な重ね塗りの技法を独自に用い、油彩に匹敵する深みと水彩特有の透明感を併せ持つ水彩画を生み出した。1984年昭和会展に招待出品(日動画廊・以降'87年まで出品)。91年世田谷美術館展'91(世田谷美術館・出品以降毎年出品)。92年個展(ミキモトホール・'94年、'97年)、93年「みずゑ・佐原和行の世界展」(池田20世紀美術館)。2006年没、60歳。同年遺作展開催(ごらくギャラリー)パブリックコレクション:池田20世紀美術館・豊川市役所。水彩

佐原和人 (さばら・かずひと/1975年～)

東京生れ。アクリル絵具などの水溶性の画材に水を多用し、にじみやぼかしを作る技法で、絵画作品のみならず「モーション・ペインティング」と名付けた絵画と映像の中間となる作品群も制作。身体感覚に基づいたワークショップを通し参加者に調香してもらった香りの心象風景を描く「観香倶楽部」という試みなども行なった。現在、東邦大学、帝京科学大学講師。2015年愛育病院(芝浦)エントランスロビー絵画制作、17年トヨタカレンダー原画制作。水彩、現代美術、美教

三水公平 (さみず・こうへい/1904～1990年)

長野県生れ。1929年津田青楓洋画塾に入塾。32年二科展に入選。32年京都洋画協会に参加。33年独立美術京都研究所に入所。35年新日本洋画協会に参加。40年美術文化協会会員。ジャワ島の出版社から『陣中写生画集』(第462部隊編纂)を発行。戦後は、サロン・ド・ジュワンや豊島区美術協会会員。1990年没、86歳。洋画

坂寛二 (さか・かんじ/1891～1928年)

石川県生れ。父は日本画家坂藹舟。上京して黒田清輝に師事、白馬会に所属したと伝えられる。奈良、大阪、金沢に住まい、1931、32年二科会に入選。26年金城画壇展に出品。26年金沢市の商品陳列所で陶芸家と作陶瓷絵画展を開く。1928年没、37歳。日本画、洋画

沢 オイ (さわ・おい/1944年～)

金沢市生れ。父田辺栄次郎、母藤井多鶴子。67年武蔵野美術大学産業デザイン科卒業。研究室助手、講師を経て1995年同大教授。68年一陽会展入選、72年会員推挙。84年一陽会野間賞。金属素材と油彩を複合させ、遠近法を駆使した直線と球体でシャープな抽象作品を制作。現在、一陽会運営委員。洋画、立体、美教

佐脇健一 (さわき・けんいち/1949年～)

大分県生れ。1977年東京芸術大学大学院修了。二紀展、ロダン大賞展、ヘンリームーア大賞展、現代日本彫刻展に出品。79年大分大学にて指導。一貫してブロンズや鉄等を素材として、空間的な広がりを持つ「風景彫刻」に取り組む。80年代半ばには「廢墟」の風景表現。88年『表相一炉心の構造』(89年)等で原子炉、プルトニウム貯蔵施設等を未来の「廢墟」として再現。モノクロ写真に青色の油彩で彩色したフォトドローイング、クルミの木で作った箱に塔などの小品を入れたウッドワーク、作品を環境と関連付けて展示するインスタレーション、映像作品など。彫刻、インスタ、美教

佐脇嵩之 (さわき・すうし/1707～1772年)

江戸生れ。英一蝶の門にまなぶ。狩野(のう)派の画風から脱し、浮世絵にちかづいた。風俗画がおおい。1772年没、66歳。江戸中期の絵師

沢 宏毅 (さわ・こうじん/1905～1982年)

滋賀県生れ。15歳で京都に出て西山翠嶂の内弟子となり、1931年帝展入選。1934年京都市立絵画専卒。34年帝展に入選、43年最後の文展で特選。48年既成画壇に反発して山本丘人、上村松篁画伯らと創造美術会(のち創画会)を結成。代表作に「寂寥の海」「海の対話」「響む」。1982年没、77歳。日本画

沢田重隆 (さわだ・しげたか/1918～2004年)

東京生れ。東京高等工芸学校図案科卒。企業広告、装丁、挿絵、油彩など多方面で活躍。一陽会賞、シェル賞。デザイナーとして、企業の広告・PRを制作し、朝日広告賞・ADC賞・ACC賞。『生料の下町 東京根岸』をはじめ、日本の都の景観や人々の暮らしを現代の眼で捉えるシリーズの絵にライフワークとして取り組んだ。2004年没、86歳。洋画、装丁、挿

絵、デザイナー

澤田 惇 (さわだ・じゅん/1933～1993年)

京都市生れ。陶芸家澤田痴陶人の長男。1958年京都市立美術大学陶磁器科卒。師の富本憲吉の推薦で砥部の梅野精陶所に入所。日常食器の開発に取り組み、新しい呉須やデザインの開発に貢献。69年伊万里陶苑に招かれ痴陶人の軸轡を担当すると共に伊万里焼の新しいデザイン開発に従事した。退職後、有田窯業大学校講師、86年大分県立芸術短期大学教授。1993年没、60歳。陶芸、美教

澤田俊一 (さわだ・しゅんいち/1926～2003年)

京都市生れ。陶芸家の澤田重人は実子。1963年日本美術会事務局長選出。63年日本共産党中央委員会発行の「文化評論」誌に「第16回アンデパンダン展によせて」を発表。91～95年日本美術会附属研究所「民美」所長。2002年熊谷樞、紺野修司、滝平二郎、谷内栄次、鳥居敏文、永井潔らとともに『有事法制』に反対する美術家の声明を発表。東京で没、77歳。洋画

150

澤田政廣・政広・晴広 (さわだ・せいこう/1894～1988年)

熱海市生れ。20歳の時上京して山本瑞雲に師事し木彫を学ぶ。1918年太平洋画会研究所に入所。21年帝展に入選、その後特選(4回)。1925年東京美校彫刻科別科卒。朝倉文夫に師事。戦後は日展に出品、日展参事、審査員。51年芸術選奨文部大臣賞、52年芸術院賞。61年号を晴広から政広に改める。62年日本芸術院会員、79年文化勲章。64年日本陶彫会会長、70年日本彫塑家連盟理事長。仏教彫刻を多く手がけ、代表作に「連如上人像」「大聖不動明王」。熱海市に沢田政広美術館。1998年没、94歳。彫刻、木彫、個人美術館

沢田石民 (さわだ・せきみん/1905?～1944年)

京都生れ。日本画を志し、京都市立美術工芸学校を経て、1927年京都市立絵画専門学校卒。土田麦僊に師事し、国展での入選を重ね、国展解散後は新樹社展や麦僊門下の山南塾展で活躍。麦僊没後は林司馬らと柏舟社展を結成した。1944年没、39歳。日本画

澤田痴陶人 (さわだ・ちとうじん/1902～1977年)

京都生れ。京都市立陶磁器試験場付属伝習所正科卒。1934年有田窯業試験場で陶芸図案を指導。43年佐那具陶磁器研究所(三重県)で中国陶器を研究。50年知山窯(岐阜県)に入る。60年佐賀県嬉野町に移住、多くの窯元デザインの仕事をを行う。68年伊万里陶苑の創設に加わり、顧問デザイナー。97年大英博物館ジャンシギャラリーで日本人の陶芸家として初めて個展開催。1977年没、75歳。陶芸、デザイナー

澤田佳孝 (さわだ・よしたか/1948年～)

愛知県生れ。愛知教育大学を経て東京芸術大学大学院を修了。1973年大分県立芸術文化短期大学に赴任。大分県美術展をはじめ、九州現代彫刻展、九州アート・ナウ、大分現代彫刻展やグループ展に作品を発表する。彫刻

沢野慎平 (さわの・しんぺい/1947年～)

京都市生れ。1972年金沢美術工芸大学美術科日本画専攻卒。73年東丘社に入塾し、堂本印象に師事。75年日展入選、92年特選。82年日春展で日春賞、84年奨励賞。86年京都画壇秀作美術展、90年京都新聞日本画賞展に出品。日展会友。日本画

澤藤馥子 (さわふじ・ふくこ/1936年～)

岩手県生れ。1960年東京女子美術大学洋画科卒。深沢省三・紅子に師事。70年一水会展佳作賞。71年女流画家協会展でアサヒ絵具賞。73年一水会展で安井奨励賞。74年一水会会員。76年女流画家協会展会員。89年一水会変革のため会友。93年女流画家協会展で桜井悦賞。洋画

沢村専太郎 (さわむら・せんたろう/1884～1930年)

滋賀県生れ。京都帝大卒。東京高師などの教員をへて、雑誌「国華」の編集に従事。1920年京都帝大助教授、のち教授。東洋美術の研究で知られた。1930年没、47歳。著作に「日本絵画史の研究」。美史

榎木野衣 (えのき・のい/1962年～)

埼玉県生れ。同志社で哲学を専攻。のち東京に移り、1991年に評論集『シミュレーションニ

ズム』(1991年、増補版=ちくま学芸文庫)を刊行。著作に『日本・現代・美術』(新潮社、1998年)、『戦争と万博』(2005年)、『後美術論』(2015年、第25回吉田秀和賞)、『震美術論』(2017年、平成29年度芸術選奨文部科学大臣賞。キュレーションした展覧会に「アノーマリー」(レントゲン芸術研究所、1991年)、「日本ゼロ年」(水戸芸術館、1999-2000年)ほか、福島の高岡地区で開催中の“見に行くことができない展覧会”「Don't Follow the Wind」では実行委員を務め、アートユニット「グランギニョル未来」(赤城修司、飴屋法水、山川冬樹)を結成、展示にも参加している。美評、学芸員

150

沢 令花 (さわ・れいか/1896~1970年)

新潟県生れ。1922年日本美術学校日本画科卒。25年レー化粧品広告部から資生堂意匠部に移籍。26年花椿石鹼梱包装紙、資生堂月報の題字ロゴ、27年包装紙改定。27年機関誌「チェーンスタア」の表紙デザイン、ポスターデザイン制作、御婦人手帳の挿絵。26~28年ウインドーバック(小型ポスター)を手がけた。27年の包装紙の椿は優れたデザイン。29年退社、図案社「明風社」を開く。独立後も図案、広告、挿絵を制作。レー化粧品に復帰、部長。戦後はコーセー化粧品のアートディレクター。1970年没、74歳。図案、ポスター、挿絵、デザイン

三川義久 (さんかわ・よしひさ/1941年~)

東京生れ。1963年慶応大学法学部政治学科学位取得。59~64年東京のアートアカデミーでディプロマ取得、脇田和に師事。71年岡野和子と結婚後、ドイツに移住。71~76年デュッセルドルフ美術大学にてGerhard Hoehmeに師事。99年Peter Zimmerman(マンハイム)にて2度の個展。2002年ドイツのFHアーヘン大学教授就任。ドイツで高い評価。洋画

山東京伝・北尾政演・北尾葎斎政演 (さんとう・きょうでん/1761~1816年)

浮世絵師としては山東京伝、北尾政演(きたお・まさのぶ)として1789年まで活動。作画期は安永7年ころから文化12年前後(1778~1815年)であった。寛政の改革における出版統制により手鎖の処罰を受けた。現在の銀座に喫煙用の小物販売店「京屋」を開き、自分がデザインした紙製煙草入れが大流行。1816年没、55歳。江戸後期の浮世絵師、戯作者

161

し

四夷星乃(しい・ほしの/1901~1965年)

大阪生れ。清水谷高等女学校在学中より北野恒富のもとに出入りし、1920年卒業後、本格的に師事する。14年画塾「白耀社」において活躍、同門の星加雪乃、別役月乃、城田花乃とともに恒富門下の「雪月花星」といわれた。恒富の死後は中村貞以に就く。院展中心に出展、43年院友。1965年没、64歳。日本画

塩川高敏 (しおかわ・たかとし/1948~2017年)

長野県生れ。1973年東京芸術大学大学院美術研究科油画専攻修了、74年同校助手。79国展新人賞。85年国展会員。86年神奈川県展で神奈川県立近代美術館賞。2001年尾道市立大学教授。のち副学長。2017年没、69歳。洋画、美教

塩川文鵬・一堂 (しおかわ・ぶんぼう・いちどう/生誕年不詳~1907年)

京都生れ。父は日本画家塩川文麟。画を父に学び、のち中国で南画を研究した。文展入選。1907年没。日本画

塩谷定好 (しおたに・ていこ・さだよし/1899~1983年)

鳥取県生れ。生涯にわたって山陰地方を撮り続け、日本芸術写真の草分け、海外においても評価が高い。1919年写真愛好会「ベストクラブ」を創設。26年写真雑誌「アサヒカメラ」創刊号コンテストで一等。国際写真サロンなど多数の展覧会、コンテストで入選、受賞。芸術写真研究会会員、日本光画協会会員、国際写真サロン特待員会会員として作品発表。75年出版『塩谷定好名作集』82年西ドイツ(当時)ケルン美術館の「フォトグラフィ1922-1982」展に出品、フォトキナ栄誉賞。83年日本写真協会功労賞。1983年没、89歳。写真

塩見允枝子（しおみ・みえこ/1938年～）

岡山市生れ。1961年東京芸術大学音楽学部楽理科卒。小杉武久らと「グループ・音楽」を結成し、即興演奏やテープ音楽の制作を行う。1963年ナム・ジュン・パイクに、ハプニングやイベントを創始した集団フルクサスを紹介され、64年NYに渡る。65年メールによるイベントのシリーズ「スペシャル・ポエム」を開始。65年帰国。69年音楽や映像、美術、舞踊など多様なジャンルの融合の実験として開催されたクロストーク・インターメディアに参加。70年活動の拠点を大阪に移し、言葉と音を軸にした室内楽や、劇場的な作品を発表。90年代から電子テクノロジーへの関心を示し、詩的な発想と独自の方法論で、音と視覚的要素を結合したパフォーマンスを編み出す。欧米での数々のフルクサス展に参加し、マルチプルの作品や出版物を出品。95年パリ、98年ケルンで個展。**音楽と美術を融合、パフォーマンス、フルクサス**

鹿見喜陌（しかみ・きよみち/1948年～）

大阪生れ。1972年金沢美術工芸大学美術学科日本画専攻卒。堂本印象に師事。71年日展に入選、77年、90年特選。日春展、全関西展、京展で受賞。山種美術館賞展、次代への日本画展、昭和世代日本画展等に出品。日展会員。**日本画**

敷田一男（しきた・かずお/1927～2004年）

福岡県生れ。1942年八幡商業高校を中退後、八幡製鉄に入社。京都の菅蘇堂、八幡の藤田隆治に日本画を師事。福岡県展、日本画府美術展を中心に活躍。福岡県美術協会では85年～92年福岡県美術協会理事、93年から2001年まで同協会日本画部会委員。2004年没、77歳。**日本画**

直原玉青（じきはら・ぎよくせい/1904～2005年）

岡山県生れ。大阪美術学校で矢野橋村にまなぶ。1930年帝展に入選。のち日本南画院展、日展に出品。58年青玲社を結成し、主宰。60年日本南画院再興に参加、91年会長。兵庫県淡路島の国清禅寺住職。俳句を高浜虚子にまなび、句画禅一如を説いた。2005年没、101歳。**南画**

重岡建治（しげおか・けんじ/1936年～）

ハルビン生れ。1958年定時制高校卒業、圓鑄勝三の元を訪れ、住み込みで弟子入り。61年入選を皮切りに日展では以後70年まで9回の入選を。60年エミリオ・グレコへ師事。71年ローマの国立アカデミア美術学校へ留学。日本各地にモニュメントが設置。イタリアの市庁舎モニュメント製作。63年日彫展奨励賞、65年日彫展日彫賞、74年インターナショナルアカデミア美術展金賞、77年伊東市制30周年記念モニュメント、80年高村光太郎大賞展佳作賞、86年大阪市南港緑道彫刻公募大賞。**彫刻**

重岡良子（しげおか・よしこ/1953年～）

京都生れ。1977年京都府日本画新人展で大賞。78年京都府日本画選抜展に出品、買い上げ。改組日展で入選、87年特選。下保昭に師事。79年京都市立芸術大学大学院修了。86年個展(日本橋東急ほか)開催。87年日春展で日春賞。2001年日本画展で毎日学校美術館名誉館長賞。**日本画**

重 春塘（しげ・しゅんとう/1833～1904年）

1833年生れ。河北春谷に南画を学ぶ。京都府画学校で教えた。1904年没、71歳。**日本画、美教**

重田照雄（しげた・てるお/1934～2016年）

鳥取県生れ。1963年東京芸術大学専攻科彫刻専攻修了。63年回モダンアート展奨励賞。71年会友賞受賞。73年彫刻の俊鋭たち9人展出品。モダンアート展を中心に作品を発表。野外彫刻展・野外モニュメント制作。79年金沢大学教育学部教授。92年金沢駅付近のホテル前にモニュメント「樹林の精」を制作。モダンアート協会会員。2016年没、82歳。**彫刻、美教**

重松岩吉（しげまつ・いわきち/生没年未詳）

NYのインデペンデント・スクール・オブ・アーツに留学。1921年二科展、第2回未来派美術協会展に出品。1922年、三科インデペンデント展に出品。同年、中川紀元、神原泰、古賀春江らとともに二科会系の前衛美術団体「アクション」の創立同人。23年丸ビルにおける未来派美術協会展に参加。昭和初期、台湾や中国を放浪。中国近代絵画の一大コレクションを形成した外交官・須磨弥吉郎と知り合い、作品を買い上げてもらう。京都国立博物館に作品

が収蔵。洋画、未来派

重松鶴之助 (しげまつ・つるのすけ/1903～1938年)

松山市生れ。旧制松山中学校に入学。松山時代、雑誌『白樺』の影響を受けて文芸や絵画の回覧雑誌『楽天』を発行。松山中を中退して上京。岸田劉生に心酔、影響を受け、春陽会、国画会に入選。1926年東京府美術館での同館開館記念「第1回聖徳太子奉賛美術展」に「閑々亭肖像」を招待出品。31年日本共産党に入党。東京市委員会などで活動し、後に党関西地方委員会責任者。33年姫路連隊の出征兵士へ反戦ビラを配布し逮捕。堺市の大阪刑務所で自死、35歳。洋画

進来 哲 (すすき・てつ/1905～1981年)

大分県生れ。東京美術学校に進んで藤島武二に師事し、同校在学中から帝展や光風会展に入選。争後は大分に帰り、県立高校や県立芸術短期大学で指導、日展や光風会展、県美術展などを主な作品発表した。1977年2期にわたって県美術協会長。1981年没、76歳。洋画、美教

志田政人 (しだ・まさと/1958年～)

秋田市生れ。秋田高校卒業後、1981年に渡仏、フランス国立高等工芸美術学校(メチェダール)ステンドグラス科に入学。同校在学中と卒業後の一年間に600あまりの教会のステンドグラスを取材・撮影。85年帰国し東京・赤坂に『アトリエ・ルプランス』を設立。2000年パリ近郊イヴリー・シュル・セーヌに研究のための自宅兼アトリエを設立。ステンドグラス制作、美研

薮 関牛 (しとみ・かんぎゅう/生没年不詳)

大阪生れ。薮関月の子。父に画をまなび、書、篆刻にもすぐれた。「女諸礼綾錦」「插花百練」などの版本の挿絵をえがいた。「古状揃具註鈔」など往来物の著作がある。一説に1843年天保14年没。江戸時代後期の絵師、篆刻、版本の挿絵

薮 関月 (しとみ・かんげつ/1747～1797年)

大坂生れ。薮関牛の父。大坂で版元千種(草)屋をいとなむ。月岡雪鼎に画をまなび、山

水画、人物画にすぐれ、法橋。「伊勢(いせ)参宮名所図会」「日本山海名産図会」などの挿絵。1797年没、51歳。江戸中-後期、大阪の絵師

土農 力 (しのう・りき/1966年～)

金沢市生れ。1987年日展初入選。89年金沢美術工芸大学日本画科卒、91年同大大学院修了。2000、03年日展で特選。日春展、京展、現代美術展等で受賞多数。2000年より金沢学院大学で日本画の指導にあたる。学院大学教授。日展会員。日本画、美教

篠崎孝司 (しのざき・たかつかさ/1951年～)

栃木県生れ。九州産業大学芸術学部美術科卒。1989年より作陶を開始。足利市のルンビニー園の利用者の作品に輝きを見つけ、美術工芸班を立ち上げる。2001年太古より受け継がれた水留音を中心とした陶製創作楽器を作り始める。足利市在住。陶芸

篠崎輝夫 (しのざき・てるお/1929～2005年)

千葉県生れ。1951年光風会初入選。52年千葉大学教育学部美術科卒、成田町立成田中学校の美術教諭。55年笹岡了一に師事。59年日展に入選。62年光風会会員。64年新日展で特選。79年光風会特別賞。80年日展会員。光風会常務理事、日展評議員。2005年没、76歳。洋画、美教

篠崎俊泰 (しのざき・としやす/1954年～)

長野県生れ。1972年フォルム洋画研究所で学ぶ。76～78年渡仏。83～84年文化庁在外研修員として渡米。87年和歌山版画ビエンナーレに出品、佳作賞。91年版画工房設立。洋画、版画

篠原昭登 (しのはら・あきと/1927～2020年)

長野県生れ。東京第三師範(現東京学芸大)美術科卒。田崎廣助に師事。1952年光風会、一水会に入選。58年日展で入選。90、94日展で特選。審査員を経て会員。一水会には棚田シリーズ、日展へは里山シリーズ、木崎湖などで取材、山のもつ立体彫刻のような力強さで新たな取り組みを始めている。2020年没、93歳。洋画

篠原勝之（しのはら・かつゆき/1942年～）

札幌市生れ。1963年武蔵野美術大学を中退、グラフィック・デザイナーとしてデザイン会社に勤務。67年絵本作家として活動を開始。自作の絵本のほか、絵本など児童書の挿絵を多数手がける。73～79年唐十郎主宰の劇団・状況劇場のポスターや舞台美術を手がける。85年ビルの解体現場で出会った有機的な鉄の姿に衝撃を受け、「鉄のゲージツ家」としてダイナミックな鉄の作品を制作。86年 KUMA'S FACTORY 設立。鉄、ガラス、石、版画、作陶と表現は多岐にわたる。2009年小学館児童出版文化賞。15年泉鏡花文学賞。彫刻、絵本、挿絵、舞美

篠原道生（しのはら・みちお/1960～1992年）

1960年生れ。多摩美大油絵科、大学院を卒業後、4ヶ月間イタリアに滞在。帰国後、美術団体に帰属する事なく、赤や緑の原色を使った絵を描き、詩を綴り「何故生きるのか」を問い続けました。1992年自死。洋画

四宮金一（しのみや・きんいち/1938年～）

香川県生れ。1964年に第8回シュル美術賞展佳作賞、65年香川県展第30回記念賞、68年には四国現代美術展大賞。77年には奨学金を受けてNYに渡り、ブルックリン・ミュージアム・アート・スクールに学ぶ。82年には日本国際美術展大賞、同年、エンバ美術賞展、国立国際美術館賞、84年には日仏現代美術展大賞、85年にはジャパン・エンバ大賞。洋画

四宮義俊（しのみや・よしとし/1980年～）

神奈川県生れ。2003年東京藝術大学美術学部絵画科日本画専攻卒。卒業制作でサロン・ド・ブランタン賞、台東区長賞、平山郁夫奨学金賞。'08年同大学院博士課程修了博士号（美術）取得。平面絵画をベースに立体作品、アニメーション作品、書籍の装画やテーマビジュアルなどを含め幅広く制作。'15個展「ソッキ」-四宮義俊の新しい夜明け- [アートスペース 羅針盤]。'17『劇場版ポケットモンスター20周年記念ビジュアル』16『ラ・フォル・ジュルネ・オ・ジャポン 2016』テーマビジュアル。'15『記憶の森を育てる意識と人工知能』茂木健一郎／著（集英社）装画。映像作品として、'15NHK-AC 共同キャンペーン『もったいない』で明日は変わる』アニメーションCM監督。'16『君の名は。』『回想シーン』演出・原画・撮影。『この世界の片隅に』水彩画。などを担当。日本画、水彩、装画、アニメ、映像

篠山紀信（しのやま・きしん/1940～2024年）

東京生れ。1963年日本大学芸術学部写真学科卒。ライトパブリシティに入社、広告写真で頭角をあらわす。68年フリー。ヌードやアイドルの写真をはじめ、つねにあらたな分野や手法にいでんて話題をよぶ。73年芸術選奨新人賞、80年毎日芸術賞。写真集に「激写—135人の女ともだち」「NUDE」「シノラマ・ニッポン」「五代目坂東玉三郎」など。2024年没、83歳。写真

芝川照吉・コレクション（しばやま・てるきち/1871～1923年）

1823年生れ。毛織物商として栄えた大阪の芝川商店の東京支店に勤務しながら、若い洋画家・工芸家を支援した芝川照吉が遺した約180点の作品・資料群。青木繁、岸田劉生、石井柏亭、坂本繁二郎、小川千甕などの絵画や素描とともに、藤井達吉、富本憲吉、バーナード・リーチ、河合卯之助などの工芸作品、さらには芝川旧蔵書のような関連資料も含まれています。（国立京都近代美術館収蔵）1923年没、52歳。コレクター

柴田 治（しばた・おさむ/1964年～）

山形県生れ。1990年東京芸術大学大学院建築科修了。2006年初個展、以後年2～3回開催。08年絵画教室アトリエ光彩舎設立。16年日本水彩展で大下藤次郎賞。日本水彩画会会友、宮城水彩画会会員、宮城県芸術協会会員、講師：NHKカルチャー、青葉アートスクール、仙台リビング。水彩

柴田義董（しばた・ぎどう/1780～1819年）

岡山県生れ。京都で四条派の松村月溪にまなぶ。人物画を得意とし、月溪門の高弟。門下に前川五嶺、大原吞舟。1919年没、40歳。物館など。1819年没、39歳。江戸後期の絵師

柴田真哉（しばた・しんさい/1858～1895年）

江戸生れ。柴田是真の次男。養父は池田泰真。幼少期より是真に蒔絵を、土佐光文から土佐派の画法を学んだのち、山名貫義に師事して大和絵の修練を積んだ。有職故実に基づく歴史画に優れ、日本青年絵画協会において活躍した。第3回内国勸業博覧会妙技賞、第

4回青年絵画共進会一等褒状受賞。1895年没、37歳。日本画、漆芸

柴田善二（しばた・ぜんじ/1936～2023年）

福岡市生れ。1960年東京芸術大学彫刻科卒。62年同専攻科を修了。小田部泰久らと福岡在住の彫刻作家グループ「玄」を結成。福岡学芸大学助手を経て、のち福岡教育大学教授。64年国画会展で新人賞、会友、66年に会員。96年福岡市文化賞。動物をモチーフとする、ユーモラスで荒削りな木彫作品を制作。2023年没、87歳。彫刻(木彫)、美教

柴田俊明（しばた・としあき/1967年～）

名古屋市長生れ。1990年東京造形大学造形学部美術学科絵画専攻卒。97年東京芸術大学大学院美術研究科博士後期課程美術専攻単位取得満期退学。89年東京で初個展、以後18回の個展を開催。95年昭和会展招待作家。新制作協会に所属し、91年新制作展に入選。2006年新作家賞。94年東京芸術大学大学院における修士論文で、『パーヴェル・フィロノフ絵画理論研究序説—分析的芸術論と作品にみられる彼の世界観に関する一考察—』を発表。武蔵野美術学園講師、新制作協会協友。洋画、美研

柴田敏雄（しばた・としお/1949年～）

東京生れ。1968年東京藝術大学美術学部絵画科油画専攻入学。74年東京藝術大学大学院美術研究科絵画専門課程油画専攻大学院修了。75～79年ベルギー文部省より奨学金をうけ、同国セント市、王立アカデミー写真科入学、写真を始める。日本国内および海外でも個展を開くなど活躍。自然の中にある人工物を写した写真が特徴的。87～2007年東京総合写真専門学校にて教示。88～91年筑波大学専任講師。92年木村伊兵衛写真賞。写真

柴田正重（しばた・まさしげ/1887～1942年）

愛媛県生れ。早くより京阪地方にて工芸を修業。1914年上京白井両山の門に入り、その没後は建島大夢に師事。一時桂華と号したが、又本名に帰った。帝展第2回、3回で特選となり、以後無鑑査として連年出品、25年帝展委員。1942年没、56歳。彫刻

柴田三千春（しばた・みちはる/1910～1968年）

水戸市生れ。1929年菊池五郎に師事。38年光風会展に水彩画出品。38年白牙会会

員。47年日展で入選。48年茨城県美術展で入選。49年茨城県美術展で無鑑査出品。50年創元会展で会員。57年白日会展入選。59年白日会展に出品。67年茨城県芸術祭美術展に出品、中村彝賞。1968年没、58歳。水彩

柴田祐作（しばた・ゆうさく/1925～2021年）

千葉県生れ。水彩画家の小堀進に師事日展、白日展、水彩連盟展などに出品し、日展で岡田賞、特選、白日展で中沢賞。2003年日展出品作で文部科学大臣賞。2021年没、96歳。水彩、洋画

柴原 雪（しばはら・ゆき/1916～2010年）

台湾生れ。東京文化服飾学院デザイン科卒業。服飾デザイナーとして活躍。1949年彫刻家の水船六州に師事。本格的に油絵を描き始める。57年一陽会展初出品。59年台湾で個展開催。64年日華美術交友会を亜細亜現代美術校友会と改称し、理事長を務め、国際的な美術展を開催。アジアの国々との交流に力を注ぐ。2010年没、84歳。版画、洋画

柴宮忠徳（しばみや・ただのり/1938～2007年）

長野県生れ。東京学芸大学美術科卒。1972年安井賞展に入選。73年現代の幻想絵画展、76年の精鋭120人展に招待出品。80年から立軌会展に出品し、立軌会と個展を中心に活動した。2007年没、69歳。洋画

司馬老泉（しば・ろうせん/1841～1910年）

名古屋市長生れ。幼い頃から画を好み、はじめ喜田華堂に学び、事情があつて破門され、のちに張月樵に師事。はじめ弘齋と号し、1862年に長崎に行き3年して帰った。また木下逸雲に従つて南画を学び、諸国を遊歴して住居を定めず、放浪のすえ、1910年没。76歳。江戸末期-明治期の絵師

渋谷敦志（しぶや・あつし/1975年～）

大阪生れ。一ノ瀬泰造の本に出会い、報道写真家を志す。1996大学在学中に一年間、ブラジル・サンパウロの法律事務所働きながら本格的に写真を撮り始める。ホームレス問題を取材したルポで国境なき医師団主催の99年MSFフォトジャーナリスト賞。アフリ

カへの取材。2002、London College of Printing 卒。日本写真家協会展金賞、コミカミノルタフォトプレミオ、視点賞・視点展 30 回記念特別賞。新聞や雑誌への寄稿や、著書等多数。ノンフィクション『まなざしが出会う場所へ——越境する写真家として生きる』を新泉社より刊行。写真

渋谷 修 (しぶや・おさむ?/1900~1964 年)

石川県生れ。上京後、「未来派美術協会」や「MAVO」などの団体に活躍した。1925~29 年は関西で趣味人向けに絵はがきや蔵書票を手掛けた。渋谷がデザインした広告マッチのラベルを取り上げた研究書「渋谷修 Zコレクション相関図」を、兵庫県西宮市の市道と豊(72)が出版。1964 没、64 歳。蔵書票、版画、デザイン

渋谷栄一 (しぶや・えいいち/1929~2011 年)

北海道生れ。道学芸大(現道教育大)卒。1959 年の北海道版画協会の旗揚げ展に参画。春陽会、日本版画協会、全道展(全道美術協会)で会員。全道展では60年奨励賞、61年会友推薦、62年会員。75年岡部昌生、玉村拓也、花田和治、矢崎勝美、渡会純介と「版と6人」を結成。76年、國松明日香、堀内掬夫の両氏を加え、79年には石垣光雄(故人)、上野憲男の両氏も入って、70年代後半の道内美術シーンを代表するグループ展。2011 年没、82 歳。版画

渋谷栄太郎 (しぶや・えいたろう/1897~1988 年)

宮城県生れ。東北中学校卒業後上京、太平洋画会に学んだ。1922 年平和博覧会に入選、25 年帝展入選、6 年間毎年入選し日仏芸術展を主催したり、美術団体「杜栄社」を主催、昭和初期から仙台での美術の普及に寄与した。1988 年没、91 歳。洋画

島内松南 (しまうち・しょうなん/1881~1962 年)

高知県生れ。種田豊水、柳本素石に師事。1896 年から日本美術協会に出品、1900 年1 等褒賞。01 年に上京し、山水画を橋本雅邦に、歴史画・人物画を梶田半古に学んだ。07 年文展で3 等賞、同年、土陽美術会の結成に参加。22 年に帰郷し、高知の日本画壇の発展に尽くした。1962 年没、81 歳。日本画

島 一行 (しま・かずゆき/1931~1996 年)

佐賀県生れ。1954 福岡教育大学美術科卒、中学校で81 年まで美術教諭。60 年独立美術協会展に入選、78 年同協会会友。65 年福岡県美術協会会員。事務局長や理事、洋画部委員を歴任。70 年の筑紫美術協会結成や80 年の福岡美術家協会結成に参加、両会でも事務局長。特に筑紫美術協会では87 年からは理事長に就任し、会の運営や発展に尽力した。1996 年没、65 歳。美教、洋画

島津俊一・冬樹 (しまづ・じゅんいち/1910~1958 年)

1910 年生れ。独立美術京都研究所に入所。35 年新日本洋画協会に参加。34 年龍安寺の大珠院に下宿を始めた。35 年独立美術協会展に入選。37 年頃から「俊一」のほか「冬樹」の名で作品を発表。1958 年没、48 歳。洋画(前衛)

島田章三 (しまだ・しょうぞう/1933~2016 年)

神奈川県生れ。1954 年東京芸術大学美術学部油絵科に入学。第 31 回国画会展へ出品、国画会賞、三年後には同会会員。66 年愛知県立芸術大学の教官として赴任し、67 年安井賞。68 年から一年間、愛知県在外研究員としてヨーロッパへ留学し、古典から現代に至る西洋絵画の系譜を再確認した。なかでもキュビズム系の画家たちの作品から大きな刺激を受けて帰国。愛知県立芸術大学の助教授、そして74 年教授。2000 年芸術院会員、01 年愛知県立芸術大学学長。2016 年没、83 歳。美教、学長、洋画、版画

島 眞一 (しま・しんいち/1942~2008 年)

東京都生れ。1966 年武蔵野美術大学造形学部美術科彫刻専攻卒。66~71 年美術科助手。71~85 年スペインに渡り、精力的に作品を制作。アルタミラ洞窟壁画からスペインの現代美術に至るまでのスペイン絵画の特質研究。アントニオ・タピエスの影響を残しながらも繊細で理知的な作品を出品。日本画廊と名古屋市のギャラリー A.C.S を中心に、国立市の画廊岳、相模原市のギャルリヴェルジェで個展。92 年武蔵野美術大学教授。2008 年没、66 歳。現代美術、美教

島田節子 (しまだ・せつこ/1947 年~)

宮城県生れ。1970 年武蔵野美術大学短期大学部油絵科卒。71 年同専攻科修了。73 年

モナコ現代美術展出品。75年日本版画協会展出品。77年陽会展出品(新人賞、岡鹿之助賞)。中華民国国際版画ビエンナーレ(台湾)。クラコウ版画ビエンナーレ(ポーランド)。現代日本版画展ティコティン美術館(イスラエル)。**洋画、版画**

島田雪谷 (しまだ・せつこく/1828～1884年)

福井県生れ。岩尾雪峰に北宗画を、礪西涯(はざま・せいゐ)に文人画をまなぶ。藩主父子の松平慶永、茂昭の命でしばしば制作にあたる。武技をこのみ、槍術にひいた。1884年没、57歳。**江戸後期-明治時代の絵師**

礪西涯 (はざま・せいゐ/1811～1878年)

山口県生れ。小田海僊(かいせん)に文人画をまなぶ。花鳥・山水・人物をえがいた。1878年没、68歳。**江戸後期-明治期の絵師**

島田忠恵 (しまだ・ただえ/1933年～)

栃木県生れ。埼玉大学学芸部卒。1955～64年創形会展出品。63年全国彫刻コンクール応募展で鎌倉近代美術館賞。64年毎日新聞「現代日本美術展」コンクール部門入選、自由美術家協会会員。**彫刻**

島田文雄 (しまだ・ふみお/1948年～)

栃木県生れ。東京藝術大学美術学部工芸科陶芸専攻卒、1975年同大学大学院美術研究科修士課程工芸専攻修了、同大学美術学部非常勤講師。73年日本伝統工芸展に入選、77年日本工芸会正会員。77年以来三越等で度々個展を開催。97年から中国や韓国で招待教授として指導。国際陶芸展の審査員。2003年東京藝術大学美術学部教授。大学院時代に青白磁の研究を始め、次いで彩磁に組み独自の釉薬の開発を進めている。轆轤に優れ、端正な形の器胎に花卉文様を施した青白磁や彩磁、釉下彩の磁器を制作。**工芸、陶芸、美教**

島 珠実 (しま・たまみ/1937～1999年)

1937年生れ。日本女流版画協会の創立メンバー。50年代に版画家。62年アメリカで510部限定で出版した「THE MODERN JAPANESE PRINT」に平塚重一・渡辺禎雄・畦地 梅太

郎・吉田政次らと共に「愛する日本の10人の版画家」の一人。「Tamami Shima-Ukiyoe」と呼ばれ欧米で高い評価。また、織田作之助や坂口安吾の書籍の装幀も手掛けています。1999年没、62歳。**版画、装丁**

島田墨仙 (しまだ・ぼくせん/1867～1943年)

1867年生れ。福井藩の島田雪谷の次男。初め父に四条派を学び、1896年橋本雅邦に入門し、本格的に画の修業を始め、日本絵画協会第3回共進会に出品した『致城帰途』で認められる。歴史人物画の分野を志し、有職故実(ゆうそくこじつ)や漢籍を川崎千虎と信夫恕軒に学び、また日本古来の肖像画の技法の研究に努めた。第5回内国勸業博覧会に出品した『大石主税(ちから)刺鼠之図』で著名となり、文展、帝展に主として気品の高い歴史人物画を発表した。1942年新文展出品作は帝国芸術院賞を受けた。1943年没、76歳。**日本画、版画**

島田美津 (しまだ・みつ/1926年～)

大分県生れ。はじめ福岡で松尾晃華、吉本尚二に日本画を学び、のちに京都の岩澤重夫に師事する。1969年の福岡県展、福岡市展でそれぞれ最高賞。70年県美術協会会員。74年日展入選、その後も入選を重ね、のち会友。75年から10年間、堂本印象塾である東丘社の会員となる。他に、京都日本画家協会の会員になり、日春展にも出品を続けた。京都系の花鳥画の伝統を受け継ぐ。**日本画**

島田由紀子 (しまだ・ゆきこ/1909～2007年)

大分市生れ。女子師範学校に通う頃から美術教師・山下鉄之輔について油彩画を学び、同校卒業後は、県下の小学校や豊州女学校の教壇に立ちながら制作。1936年光風会展に入選、翌年画家を志して上京。同郷の佐藤敬や、猪熊弦一郎らの知遇を得て、彼らが結成した新制作派協会展に出品。戦後は女流画家協会の創立に参加するとともに自由美術家協会展でも作品を発表し、64年以降は、自由美術から分裂した主体美術協会に所属して活躍。2007年没、98歳。**洋画、美教**

島村小湾 (しまむら・こわん?/1829～1882年)

高知県生れ。家は代々染工。明治5年頃から県庁に製図係として勤務した。画を河田小

龍に学び、山水画、花鳥画を得意とした。中島敬朝の曾祖父にあたる。1882年没、53歳。
江戸後期-明治期の絵師

島村俊明（しまむら・しゅんめい/1855～1896年）

江戸生れ。家は代々の宮彫師。16歳のとき東京両国回向(えこう)院の欄間に十六羅漢を彫刻し、評判となる。18歳で家業をつぐ。牙彫(げちょう)にすぐれ、内国勸業博覧会などに出品、受賞。代表作に牙彫「藤原鎌足像」。1896年没、42歳。彫刻、牙彫、宮彫

島村信之（しまむら・のぶゆき/1965年～）

埼玉県生まれ。1989年武蔵野美術大学造形学部油絵学科卒。91年武蔵野美術大学大学院研究科美術専攻油絵コース修了。白日会展初出品(東京都美術館、以後毎年出品)。92年白日賞。95年T賞。98年U賞、2001年三洋美術奨励賞。03年文部科学大臣奨励賞。93年白日会会員。95年白日会会員選抜展(日本橋三越・東京)。07年前田寛治大賞展大賞。個展6年個展(あかね画廊)。97年銀座柳画廊'02'11)。洋画

島本蘭溪（しまもと・らんげい/1772～1855年）

高知県生れ。島本与市の三男。幼いころから学問のかたわら書画をよくし、松村蘭台に師事した。たびたび大坂に出て懐徳書院・中井竹山に師事して儒学を学ぶとともに、福原五岳に画を習い、木村兼葭堂と交遊した。書画と学問の寺子屋を経営していた。1855年没、84歳。江戸後期の絵師

島谷 晃（しまや・あきら/1943～2010年）

神奈川県生れ。1988～89年文化庁芸術家在外研究員として渡米。個展で発表。壁画も多い。2001年「島谷晃の世界 鳥になった画家」が池田20世紀美術館で開催。2010年没、67歳。洋画、版画、水彩

島屋純晴（しまや・じゅんせい/1955年～）

金沢市生れ。1982年金沢美術工芸大学大学院修了、彫刻家清水九兵衛に師事。現代日本彫刻展、京都美術展などに入選。直線と曲線を共存させたフォルムは安定しており、現代風な野外モニュメントとして異彩を放っている。近年は、石やガラスと組み合わせた新しい

金属造形を手がけている。彫刻

清水亀藏（しみず・かめぞう/1875～1948年）

広島県生れ。1896年東京美術学校研究科、99年塑像科に入り加納夏雄、藤田文蔵に師事、1902年研究科を修了。09年香川県立高松工芸学校に勤めたが、病気で15年退職。四国八十八カ所を巡礼、奈良で古美術を研究。のち上京、大正天皇即位記念献納の金装飾太刀を製作中に没した岡部寛弥の後を次いで完成。19～45東京美術学校教授。この間帝室技芸員、日本彫金会会長、帝国美術院会員。帝展第4科設置以来出品を続け、作品には香推宮及住吉神社に納められた「黒味製鍍金の金燈籠」、第10回帝展の「梅花文印櫃」、戦後の「切嵌平象嵌毛彫額面十二神将図」「竜文花瓶」などがある。1948年没、73歳。彫金、美教

清水九兵衛・七兵衛（しみず・きゅうべい、VII/1922～2006年）

名古屋市生れ。東京藝術大学工芸科鑄金部等で学び、1951年に六代清水六兵衛の養嗣子となり陶芸。陶芸家としての評価が高まる一方で「もの」と周囲の空間に対する関心が深まり、64年に初めて彫刻作品を発表。68年に「九兵衛」を名乗り、陶芸制作から離れ、アルミニウムを主な素材とする彫刻家として活動していきます。80年六代六兵衛の急逝を受けて七代六兵衛を襲名しました。その作品は、土の性質や焼成によるゆがみを意図的に用いたものであり、そこで得られた経験を、陶とアルミを組み合わせた作品、和紙やクリスタルガラスによる作品。2006年没、84歳。陶芸、彫刻

清水曲河（しみず・きょくか/1747～1819年）

江戸の人。董九如(とうきゅうじょ)、文晁(たにぶんちょう)にまなび、山水花鳥を得意とした。1819年没、73歳。江戸中期-後期の絵師

清水公照（しみず・こうしょう/1911～1999年）

兵庫県生れ。1933年龍谷大学文学部仏教学科卒。泥仏の制作を始める。69年東大寺執長、東大寺学園長。71年の元旦より毎日、絵日記を描き始める。1991年姫路市立美術館にて寄贈作品記念展を開催。93年姫路市芸術文化賞芸術文化大賞。94年姫路市書写の里・美術工芸館が開館。第207世、第208世東大寺別当、華嚴宗管長 昭和の大仏殿大修理を

成し遂げるとともに、書画や泥仏をはじめとする陶芸作品の方でも著名1999年没、88歳。書画、彫刻(泥仏、陶芸)、僧、東大寺別当、華嚴宗管長

清水三溪 (しみず・さんけい/生誕年不詳)

清水比庵の弟。比庵や川合玉堂らと野水会に参加した。日本画

清水七太郎 (しみず・しちたろう/1889～1967年)

盛岡市生れ。1912年東京美術学校西洋画科入学。岩手初の洋画団体「北虹会」の中心人物として活躍。15年清水が中心となり、盛岡在住の洋画家たちによる美術団体「七光社」を設立。「七光社」には五味清吉、橋本八百二らも参加。清水は東京美術学校の5年先輩にあたる萬鐵五郎と親交があったことでも知られている。萬は自分の主宰した円鳥会や会員である春陽会に出品することを勧め、清水の制作に助言。文化服装学院や目白中学の教師。東京や盛岡で個展を開催。ブラジルで没、78歳。洋画、美教

清水秋全 (しみず・しゅうぜん/1706～1766年)

岩手県生れ。特に国学と和歌に優れていた。他にも算学や測量などにも優れていた。1751年七代藩主の命を受け、盛岡の中野橋から江戸日本橋までのおよそ百四十里(約550キロ)の風景や町並み、名所、旧跡などを描いた『増補行程記』の製作に取り掛かる。この行程記には建物や名物、名産、名勝地など克明に記録されている。『増補行程記』二巻の他に『名所道順記』『神代文字四十三種の伝』などの著書がある。1766年没、61歳。江戸中期の絵師、道中図

清水伸 (しみず・しん/1947年～)

新潟県生れ。武蔵野美術大学で山口長男に師事。77年にパリへ拠点を移し、89年より佐渡とパリで制作。日仏両方の地で発表を重ねる。主な新潟での個展は94年(倉庫美術館)、2001・06年(知足美術館)、04年(佐渡市博物館ギャラリー)、09・15年(ギャラリーはたる縁・佐渡)など。新潟市美術館、新潟県立近代美術館・万代島美術館に作品収蔵。洋画

清水誠一 (しみず・せいいち/1946～2010年)

山梨県生れ。1967年新潟大学医学部を中退し、上京。すいどーばた美術学院で学ぶ

が、ほどなく独学で制作活動。デビューは69年現代日本美術展。初個展は72年、神田の田村画廊。マルセル・デュシャンに傾倒していた清水は、当時の作品を次のように記述している。1回目は、「動力用モーターが3台廻り、空中に大きな楕円の輪が吊るされ、楕円の中を円形蛍光灯20個が筒状に光を発する」もの。2回目は、「画廊のコンクリートの床に穴を掘り」画廊の名前が入ったガラスの看板を埋めるもの。3回目は1日のみで、「白い傾斜した大きなベニヤ・パネルをトラックに積み、田村画廊と近くにあったときわ画廊とのあいだを20回通過するイベント」。77年パリ青年ビエンナーレに出品。この頃には、コンクリート板などを線描で覆い尽くす「マーク・ペインティング」をシリーズ化。80年代はおもに「クランク・ペインティング」のシリーズを展開、1色の背景に直線と曲線が規則的に並ぶ、運動感をみせる絵画である。98年頃からコンピューターを使用し、絵画制作を行なう。写真を取り込みソフトで加工、旧作の画面に入れ込んだりし、したいに具象的な形象が画面を覆ってくるようになる。2009香川県のソフトマシーン美術館での個展。山梨県で没、64歳。現代美術、造形

志水晴児 (しみず・せいじ/1928～2005年)

東京生れ。東京藝術大学彫刻科卒。1954年院展で入選。57年行動美術協会会員。抽象彫刻の先駆者的存在として60年代から活躍。63年全国彫刻コンクールで大賞。64年現代日本美術展で最優秀賞。環境彫刻のまかランドスケープ設計、都市景観整備に携わり、丹下健三とのコラボレーションも多い。代表作に皇居東御苑の湧泉彫刻、在日トルコ大使館の彫刻群、新宿西口グリーンビル彫刻、新幹線富士宮駅広場設計など。78年吉田五十八賞。2005年没、77歳。彫刻

清水遠流 (しみず・とおる/1938～2013年)

富山県生れ。1964年独学で木版画多色摺りの研究を始める、70年木版画展「雪国シリーズ」(その一)。73年木版画集「巴里の秋」出版記念展。77年円窓和紙による木版画多色摺法を完成。83年木版画集「天平の仏像」出版記念展。2013年没、75歳。版画

清水南山 (しみず・なんざん/1875～1948年)

広島県生れ。1896年東京美術学校彫金科卒、96年研究科に入つて加納夏雄、海野勝珉につき、さらに1899年塑造科に入学、藤田文蔵に師事した。1902年研究科修了後は自営して彫金にはげみ、09年香川県立工芸学校に奉職。大和にあつて古美術の研究にふけ

つたが、法隆寺佐伯定胤にみとめられ、やがて上京して、大正天皇御即位記念に司法省より献納の金装飾太刀の製作半ばのものを岡部寛弥没後ひきついで完成。1919～45年東京美術学校教授。34年帝室技芸員、35年日本彫金会会長。35年帝国美術院会員。27年帝展第四科の設置以来、審査員あるいは無鑑査として出品。1948年没、74歳。彫金、美教

清水信行 (しみず・のぶゆき/1950年～)

京都生れ。京都市立芸術大学卒。1972年改組日展に入選。74年日春展で入選。以降、両展やグループ展への出品を中心に活躍。84年日仏現代美術展国内賞。東京セントラル美術館大賞展、京都画壇日本画秀作展、全関西展などに出品。東京、大阪、京都を中心に個展を毎年開催。日本画

清水比庵 (しみず・ひあん/1883～1975年)

岡山県生れ。京都帝国大学卒。司法官から安田銀行に転じ、さらに古河銀行、古河電気工業日光精銅所に勤務。1930年日光町から懇請されて町長に就任。町政に励むかたわら、歌誌「二荒」を発行。39年町長を辞してから、歌・書・画に没頭。雑誌「窓日」を主宰。画は川合玉堂・奥村土牛らとともに学んだ。1975年没、92歳。日本画

清水久和 (しみず・ひさかず/1964年～)

長崎県生れ。1982年長崎日本大学高等学校産業デザイン科卒。84年桑沢デザイン研究所インダストリアルデザイン科卒。89年業キヤンキヤン株式会社入社。94年「第6回あかりのオブジェ展」(岐阜市)《チューチューシャネリア》日比野克彦賞。95年 Canon CLC 800(デジタルカラー複写機)《ドインフ》賞。98年個人事務所 SABO STUDIO 活動開始(東京)。99年東京デザイナーズウィーク「デザインプレミア」にて《アイスのさじ》GRAND PREMIO 賞。2004年桑沢賞。07年《IXY DIGITAL 10》グッドデザイン賞。オブジェ、デザイナー

清水三重三 (しみず・みえぞう/1893～1962年)

三重県生れ、1919年東京美術学校彫刻科卒。22年帝展入選、挿絵に活躍するようになり、出版美術家連盟理事、挿絵作家クラブ副会長をつとめるなどむしろ、挿絵画家として知られていた。挿絵の代表作に「鉄火奉行」(毎日新聞連載)、「お伝の方」などがある、東京で没、69歳。挿絵、彫刻

清水美三子 (しみず・みさこ/1963年～)

東京生れ。1988年女子美術大学芸術学部絵画科洋画専攻(版画)卒。94年文化庁芸術インターンシップ研修員。91年シロタ画廊。93年平安画廊(京都)95'97'00'03'06。94年養清堂画廊0'03'06'08'12'15。94年 GALLERY TAGA(東京)96'98'00。GALLERY TAGA2'14'16'18。93年安田火災美術財団奨励賞展で新作優秀賞。93年記念春陽展で春陽会賞。94年現代日本美術展で神奈川県立近代美術館賞。版画

清水康友 (しみず・やすとも/生誕年不詳～)

東京生れ。早稲田大学にて東洋史、東洋美術史を学ぶ。1917年創業の美術倶楽部代表、全国農業組合連合会(JA)美術委嘱コンサルタント、損保ジャパン美術財団奨励賞展推薦委員、淑徳大学公開講座講師、日本美術専門学校特別講師などを歴任。東京都美術館、国立新美術館における各公募展の外部審査員。美術と社会とのかかわりに着目し、美術評論家として美術史研究、講演、執筆活動、美術に関するコンサルティングを行う。鳥羽美花展—奈良薬師寺 カタログテキスト(2010)、福田千恵展—日本橋高島屋 カタログテキスト(2013)を執筆。第8回富山国際現代美術展 アートシンポジウムパネリスト(2018)。『書 21』(匠出版)に「美術鑑賞の眼」を連載中。美普、美評、美教

清水由朗 (しみず・よしろう/1961年～)

和歌山県生れ。1986年東京藝術大学美術学部日本画専攻卒。86年再興院展に入選(96年奨励賞、2000年日本美術院賞・大観賞、11年文部科学大臣賞)。92年創価大学教育学部講師(99年助教授、2009年教授)。94年セントラル美術館日本画大賞展で佳作賞。2005年日本美術院同人。日本画、美教

清水良治 (しみず・りょうじ/1935～2016年)

愛知県生れ。1960年金沢美術工芸大学彫刻専攻卒。長谷川八十、のち柳原義達に師事。61、62年新制作展 新作家賞。72年新制作展会員推挙。75年昭和会展で昭和会賞。81年中原悌次郎賞・優秀賞。86年大阪南港道彫刻作品で優秀賞。須磨離宮公園現代彫刻展で東京国立近代美術館賞。2001年金沢美術工芸大学退官。2016年没、81歳。彫塑、美教

SHIMURA Bros (しみら・ぼろす/1976年、1979年～) ユカとケンタロウの姉弟

ユカは1976年横浜生まれ。多摩美術大学卒業後、英国セントラル・セント・マーチンズ大学院にて修士号を取得。ケンタロウは79年生まれ。東京工芸大学 映像学科卒。姉弟ユニット。2009年度文化庁メディア芸術祭アート部門優秀賞。カンヌ及びベルリン国際映画祭で上映。日本国内外の美術館で作品の展示を行い、恵比寿映像祭への出品や、NTU CCA Singapore のレジデンスプログラム参加。17年 ArtReview Asia 誌の A Future Greats に選ばれました。14年年度ポーラ美術振興財団在外研究助成を得て拠点をベルリンに移し、現在はオラファー・エリアソンのスタジオに研究員として在籍。愛知芸術文化センター・愛知県美術館オリジナル映像作品の第30作の制作作家に選出され、第二次大戦中に「命のビザ」を発給した杉原千畝を起点に、現在も続く難民問題について考察した映像作品『Butterfly upon a wheel』(2022年)を制作。映画

志村節子 (しみら・せつこ/1941年～)

東京生まれ。慶応大学卒業後、東京芸術大学へ。同大大学院修了。1972～75年に仏政府給費生として渡仏。パリ、エコール・デ・ボザールなどで学ぶ。2012年日本橋高島屋で個展。立軌会同人、女流画家協会会員。洋画

志村ふくみ (しみら・ふくみ/1924年～)

京都市生まれ。1955年母の手ほどきを受け、滋賀県近江八幡市で植物染料による糸染めと紬織りを始める。後、黒田辰秋、富本憲吉、稲垣稔次郎らに師事。57年日本伝統工芸展に出品し、受賞。以後3回続けて受賞。93年まで同展に出品。64年以降度々個展を開催。68年京都市嵯峨に転居、藍建てを始める。78年日本工芸会理事に就任。82年回顧展「志村ふくみ展」(群馬県立近代美術館)が開催。83年京都府文化賞功労賞。また著書『一色一生』により大佛次郎賞。84年衣服研究振興会の衣服文化賞。85年「志村ふくみ展」(大分県立芸術会館)。「現代染織の美 森口華弘・宗廣力三・志村ふくみ」(東京国立近代美術館)が開催。86年紫綬褒賞。90年重要無形文化財紬織保持者に認定。93年文化巧労者。94年「志村ふくみ展」(滋賀県立近代美術館)。2014年京都賞。工芸(染色)

下川千秋 (しもかわ・ちあき/1909～2000年)

岐阜県生まれ。1924年伯父の奥山秋石に絵を学ぶ。33年京都市立絵画専門学校に入学、36年同校研究科に進む。37年新文展に入選。31年同科を終了した後、副手を同49年まで努める。50年宇田荻郎に師事。戦後も日展に発表を続け、のち会友となる。京都市展でも受賞。65年から10年間、佐賀大学で教鞭をとった。2000年没、91歳。日本画、美教

下川凹天 (しもかわ・へこてん/しもかわ おうてん/1892～1973年)

沖縄県生まれ。日本の漫画家、アニメーション作家である。凹天はペンネームで、本名は下川貞矩(しもかわさだのり)。1973年没、81歳。漫画、アニメ、「日本初のアニメーション作家」のひとり

下川 勝 (しもかわ・まさる/1950年～)

大分県生まれ。1968年東京に移る。74年群馬県館林市にアトリエを構える。国内外の美術館・画廊等での個展やグループ展で発表。69年から98年ごろまでは細密緻密な作風の絵画表現を主とした。2005年頃より、山・川・海・都市を歩き邂逅したモノたちを素材にした平面作品制作。洋画、立体、インスタ

下口宗美 (しもぐち・そうび/1904～1984年)

石川県生まれ。初代中村秋塘に師事。その後京都で、素焼き人形の北村祥鳳に師事。1946年帰郷し、木彫人形作家として活動を始め、49年現代人形美術展に特選受賞、日展・日本伝統工芸展で活躍し、日本工芸会正会員。1984年没、80歳。人形(木彫)

下田賢司 (しもだ・けんじ/1944年～)

東京生まれ。20歳で住宅設備会社を経営。西部百貨店勤務の安福信二さんが自由が丘画廊を紹介。実川暢宏画廊主が進める作品をコレクション。山口長男、リウーハン、北井一夫(写真)、中川幸夫、斎藤義重、八木一夫等、現代美術中心に1000点のコレクションを達成。1991年成増にアートスペースシモダを開業。15年間コレクション展を開催。大作は静岡県美に寄託。現代美術コレクター

下田ひかり (しもだ・ひかり/1984年～)

長野県生まれ。嵯峨芸術大学短期大学部卒、イラストレーション青山塾に2年在籍したの

ち、現代美術へ転向。2008年よりギャラリーでの発表を開始し、15年より発表の場をアメリカを中心に海外へ移行、現在に至る。**現代美術、洋画**

下村清時 (しもむら・きよとき/1866～1922年)

江戸生れ。下村観山の兄。能面制作をへて中年より彫刻をはじめ、大正3年日本美術院再興とともに院友となり院展に出品。8年同展に出品した「観音像」で脚光をあび、同人に推された。大正期の院展彫刻を代表するひとり。1922年没、57歳。作品は「太子像」など。**彫刻**

下村兼史 (しもむら・けんじ/1903～1967年)

佐賀市生れ。1920年慶應義塾大学文学部予科に入学。21年病気のため中退し帰郷。22年日本の野鳥生態写真の原初となるカワセミを撮る。28年鹿児島県荒崎の鶴類の写真集一冊が昭和天皇へ献上。30～39年農林省鳥獣調査室に勤務。日本全国各地を歴訪し、主に天然記念物の鳥や希少種などを撮影。35年英国での万国自然写真博覧会に出展した作品が国際的な評価を受ける。39年以降は映画界に転身し、監督、演出・脚本家として活躍。傍ら野鳥観察紀行、鳥類図鑑などを多数執筆。67年毎日映画コンクールにおいて特別賞。1967年没、64歳。**写真、映画監督、鳥類図鑑**

下村 宏 (しもむら・ひろし/1947年～)

和歌山県生れ。1970年大阪芸術大学美術学科卒。73年カールスルーエ国立美術大学入学、油絵と版画を専攻。79年カールスルーエ国立美術大学卒。80年グループ展；銅版画(クライネクーンストハウス、西ドイツ)。個展：銅版画(画廊ビュッフェファイブ)他。83年個展；銅版画(松村画廊)。**版画**

下村正一 (しもむら・まさいち/1914～2014年)

金沢市生れ。1932年京都市立美術工芸学校絵画科卒、37年年京都市立絵画専門学校本科卒。東丘社に入り、堂本印象に師事。36年文展初入選、戦後は日展で活躍。22年金沢美術工芸専門学校講師、以後、55年金沢美術工芸大学を教授で退官するまで後進の指導にあたる。日展会友。平成元年金沢市文化賞受賞。2014年没、100歳。**日本画、美教**

赤 鶴 (しゃくつる/生没年不詳)

生没年不詳。名は吉成、一透(刀)斎と号した。世阿弥の《申楽談儀》によると、近江在住の作家で、鬼系の作面を得意としたようで、その活躍期は南北朝時代と考えられる。後世の伝書類は十作の一人に数え、能楽諸家の所持面中、おもな鬼面はほとんど彼の作にあてられている。そのため真作を同定することは困難で、むしろ行道面中の各種鬼面から能面の鬼系の諸タイプが成立してくる過程で、最も名をのこした作家と考えるべきであろう。**中世の能面作家**

周 維卿 (しゅう・い きょう/1918～没年不詳)

遼寧省生れ。1930年頃から写実派の画師邵鶴亭について花鳥工筆画を習い始める。のち宋元時代の筆法を学び、主として花鳥山水画を描く。47年中国大連市で日本人土師信子と結婚。54年旅大市第一回美術展覧会出品以来入選入賞を重ねる。以後、遼寧省美術展などに出品。81年門司に入港、初めて日本へ来る。81年長崎市好文堂書店にて、長崎来住記念第一回作品展を開催。長崎県美術協会会員。85年長崎県美術展覧会の審査員。**日本画**

100

寿好堂よし国 (じゅこうどう・よしくに/生没年不詳)

大坂生れ。浅山蘆国(あしくに)の門人と推定されている。1813年～1832年おおくの役者錦絵をえがく。**江戸後期の浮世絵師**

秋月等観 (しゅうげつ・とうかん/生没年不詳)

薩摩生れ。もと島津氏の家臣。姓は高城と伝える。出家して山口に赴き、雲谷庵の雪舟の弟子となる。1490年71才の雪舟から印可の自画像を与えられ、92年鹿児島に帰り福昌寺の住持となる。93年入明する。在明中は、雪舟像に青霞(社董)なるものに着賛してもらったり、96年北京会同館にて『西湖図』(重文・石川県立美術館蔵)を描いた。秋月は如水宗淵とともに雪舟に学んだ数少ない弟子の一人で、画風は雪舟様式を受け継ぐもので、花鳥画の作例が多い。**室町後期の画僧**

首藤雨郊 (しゅとう・うこう/1883～1943年)

大分市生れ。1901年大分県師範学校卒。大分県師範学校の訓導を勤める。休職して京

都市立絵画専門学校に学んだ後、復職して大分県立臼杵中学校、大分県師範学校などの
図画教員。画道に専念しようと退職して、再び京都市に転居。1925年帝展に
入選。四条派風の作品から後半は南画の近代化をめざした作風へと変って
いった。1943年没、60歳。日本画、美教

松好齋半兵衛 (しょうこうさい・はんべえ/生没年不詳)

流光齋如圭の門人、大坂島の内岩田町(別名清水町)に住む。作画期は寛政7年
(1795年)から文化6年(1809年)の間にかけてで、師の如圭と同じく似顔の役者
絵を描いた。ほかに絵入り根本(ねほん)の挿絵や肉筆画も手がけている。狂歌も
たしなみ、戯場好人の名で作を残す。文化年間に没したという。門人に春好齋北洲
がいるが、ほかに寿好堂よし国、真好、雪好、露好も門人かといわれている。
江戸後期の大阪の浮世絵師、挿絵

周 襄吉 (しゅう・じょうきち/1907～1978年)

愛媛県生れ。1929年二科展に入選。東京美術学校(現東京芸大)卒。戦後は自由美術家
協会展出品をへて、50年モダンアート協会の創立に参加。抽象画を制作した。文化学院講
師。1978年没、70歳。作品に「砂漠の護摩」など。洋画

春好齋北洲 (しゅんこうさい・ほくしゅう/生没年不詳)

大阪生れ。松好齋半兵衛の門人で、大判役者絵を多作した。春梅齋北英、春曙齋(しゅん
しよさい)北頂ら門人もおおく、文政(1818-30)のころ上方浮世絵界の勢力を浅山蘆国(あしく
に)の一派と二分した。狂歌もたしなむ。通称は治兵衛。別号に雪花亭。江戸後期の浮世
絵師

春曙齋北頂 (しゅんしよさい・ほくちょう/生没年不詳)

大坂の人。春好齋北洲の門人。1822年、文政5年ごろから天保のはじめにか
け、役者の錦絵をえがいた。1840年の版本挿絵もある。姓は井上。江戸後期の浮世絵師

春梅齋北英 (しゅんばい・さい・ほくえい/生誕年不詳～1836年)

春好齋北洲の門人。春江、春江齋、雪華楼などと号し、特に春梅齋北英の名で知られ
る。流光齋－松好齋－春好齋の系譜に連なる上方浮世絵界の主要絵師として活躍した。

大判の役者絵を中心に読本挿絵の作品などがある。1836年没。江戸後期の浮世絵師

正 墻 薫・適処 (しょうがき・かおる/1818～1875年)

鳥取県生れ。因幡(いなば)鳥取藩士。佐藤一斎、篠崎小竹(しのぎきしゅうちく)にまなぶ。藩
儒として学制改革、産物会所吟味役として殖産興業につとめた。1873年56歳の時に久米郡
松神に移り、私塾を開いて近郷の子弟の教育につとめ、そのかたわら詩書画をよくした。187
5年没、58歳。著作に「杞憂録」「研志堂詩鈔」など。武士、詩画書

祥 啓・賢江祥啓 (しょうけい/生没年不詳)

相模の出身、号は貧楽齋。建長寺の書記で通称啓書記。1478年上京して芸阿弥に師
事、3年間画法を学んで鎌倉へ帰った。その後も上京し、南宋院体画の構成に
よらった水墨の山水画を描く。簡潔な構成と明晰(めいせい)な画風が特徴。代表作《山水図》
(根津美術館蔵)など。室町中期の画僧

城 景都 (じょう・けいと/1946～2021年)

愛知県生れ。1970年シェル美術賞展で佳作賞。近藤正治らと芸術グループ・南蛮美術を
結成。74、76、77、79、81年個展(青木画廊、東京)。77～81年国際青年美術家展。画集
『女の学問』(青木画廊)刊行。1978年、第21回安井賞展に入選。カラーエッチング集『追憶
の女』(青木画廊)刊行。82年人人会会員。第8回日仏現代美術展で入賞。84年『城景都
花の形而上学』(美術出版社)刊行。88年『城景都全版画集』(阿部出版)刊行。2021年没、
75歳。版画

昇 齋 一景 (しょうさい・いつけい/生没年不詳)

はじめ景昇齋と号し、のちに昇齋。人物表現に滑稽味が強く感じられるのが特徴。また画
風が三代歌川広重に似ているところから、初代広重の弟子広景と後の名とする説もあるが、
詳細は不明。明治4～5年に作品がみられ、その画風は京都四条派の影響が強く、鉄道錦
絵にも伝統的な名所図がとり入れられている。江戸後期-明治期の絵師

庄 司 達 (しょうじ・さとる/1939年～)

京都市生れ。生後間もなく名古屋へ転居。京都市立美術大学彫刻科で辻晋堂、堀内正

和らに学ぶ。名古屋市立工芸高校のデザイン科教諭、当時同校の教諭でもあった現代美術家の久野真と知り合う。1968年頃から緊張と弛緩、空間へのひろがり、環境への影響力といったことに意識を向けた布による作品を制作。名古屋、京都での個展活動を中心に、現代日本美術展、日本国際美術展などにも出品し、布を扱う作家として知られる。スケールの大きな作品を発表するようになって、海外での展覧会や、舞台芸術、公共空間でのモニュメント制作など幅広い活動を行なうと共に、名古屋芸術大学などで後進の指導。造形、立体、舞美、モニュメント、美教

庄司竹真（しょうじ・ちくしん/1854～1936年）

江戸生れ。初め柴田是真に師事して蒔絵を学び、同門の高橋応真や松野応真らと並んで十哲と称された。また、日本画の制作に専念し、日本美術協会にて活躍する。是真の次男・柴田真哉の指導に当たり、日本青年絵画協会の結成に尽力するなど、後進の育成に貢献した。第一回内国勸業博覧会褒状、第2回内国絵画共進会褒状。日本画、漆芸

庄田鶴友（しょうだ・かくゆう/1879～1948年）

奈良県生れ。京都市立美術工芸学校絵画科卒。山元春舉に師事。第5回内国勸業博覧会で褒状。第1回文展入選。井口華秋、池田桂仙、上田萬秋、林文唐らと自由な制作を目指して「日本自由画壇」結成。1933年帝展で推薦。京都市立絵画専門学校教授。1948年没、68歳。日本画、版画、美教

庄田常章（しょうだ・つねあき/1946年～）

金沢市生れ。1966～68年渡欧。71年金沢美術工芸大学卒業。76年シェル美術賞展3席。80年同展佳作賞。78、80～82年昭和会展出品。84年日本国際美術展群馬県立近代美術館賞。86年渡米。93年NICAF参加。版画、洋画

蒋廷錫（しょう・ていしゃく・Jiang Ting-xi; Chiang Ting-his/1669～1732年）

江蘇省常熟の人。諱は文肅。康熙42(1703)年の進士。庶吉士から累進して礼部右侍郎、戸部尚書、文華殿大学士となる。『古今圖書集成』『大清會典』『聖祖實録』の編集にあたる。また花鳥の写生画を得意とした。著述に『尚書地理今釈』『秋風集』『片雲集』がある。(コトバンク)。1732年没、63歳。中国、清代の学者、画家

定朝（じょうちょう/生誕年不詳～1057年）

仏師康尚の子。流麗ないわゆる和様(定朝様)と称される仏像彫刻様式の完成者。また、仏所の組織機構を確立し、のちの仏師の世襲と流派が生じるもとになった。仏師で僧綱の位についた最初の人。唯一の現存する作品として、平等院鳳凰堂の本尊阿彌陀如来坐像がある。1057年没。平安中期の仏師

昇亭北寿（しょうてい・ほくじゅ/1763?～没年不詳）

寛政末期から文政期に活躍。北斎の門人。北斎の洋風表現を受け継ぎ、明暗を単純化した色面・配色で、独特の洋風風景画をつくる。「北寿浮絵上手」と評され、風景画以外の作品は少ない。江戸後期の浮世絵

生野徳三（しょうの・とくぞう/1942年～）

大分市生れ。1964年武蔵野美術大学彫刻科卒。父祥雲齋に師事。かたわら此君亭工房のクラフト制作に携わる。74年祥雲齋の没後、作家活動に入る。79年初入選以来、日展に毎年入選し、98年特選。80年から日本新工芸展に毎年出品し、度々入賞、2016年文部科学大臣賞。89年日展会友。主に竹ひごを重ねた櫛目編による造形的な作品を制作。工芸、竹

成忍（じょうにん/生没年不詳）

高山寺明恵の弟子、優れた画技を持ち、鎌倉時代(13世紀前)、明恵周辺の絵画制作に大きな役割を果たした。成忍制作が立証できる現存作品はないが、明恵の縄床樹上座禪の姿を写した「明恵上人像」は成忍筆の可能性が高い。鎌倉時代の画僧

松林山人・林 稚瞻（しょうりんさんじん/?～1792年）

長崎の人。熊代熊斐(くましろうゆうひ)にまなぶ。京都から大坂をへて江戸で名をあげる。沈南蘋(しんなんびん)流の花鳥画をよくした。1792年没。江戸中期-後期の絵師

如拙（じよせつ/生没年不詳）

絶海中津(ぜつちゅうしん)が『老子』の「大巧は拙なるが如し」にちなんで名づけたという。伝記については不明な点が多いが、本朝画史や「墨梅図」の賛によると九州出身で、応永

年間(1384年-1429年)室町幕府4代将軍足利義持の命により「瓢鮎図(ひょうねんず)」を描いたこと、文安5年(1448年)夢窓疎石の碑銘を刻む石を探すために義持の命で四国に出向いたこと(『臥雲日件録』)、などが知られる。足利将軍家と密接な関係を持ち、相国寺にいたことはほぼ確実である。相国寺の画僧雪舟に祖と仰がれ、狩野派や長谷川等伯などによって日本における漢画(唐絵)の祖としての地位を与えられた。**南北朝時代から室町時代中期の画僧、漢画(唐絵)の祖**

ジョサイア・コンドル (Josiah Conder/1852~1920年)

イギリスの建築家。工部大学校(現・東京大学工学部)の造家学(建築学)教師として来日し、傍ら明治政府関連の建物の設計を手がけた。辰野金吾ら、創成期の日本人建築家を育成し、明治以後の日本建築界の基礎を築いた。のちに民間で建築設計事務所を開設し、財界関係者らの邸宅を数多く設計した。日本女性を妻とし、日本画、日本舞踊、華道、落語といった日本文化の知識も深かった。河鍋曉斎に師事して日本画を学び、与えられた号は曉英。1920年没、68歳。**日本画、建築、河鍋曉斎に師事して日本画を学ぶ**

ジョー・D・プライス (Joe D. Price/1929~2023年)

江戸時代の日本絵画を対象にするアメリカ合衆国の美術蒐集家。財団心遠館館長。京都嵯峨芸術大学芸術研究科客員教授。1953年にニューヨークの古美術店で伊藤若冲『葡萄図』に出会って以来、日本語を解さないながら自らの審美眼を頼りに蒐集を続け、世界でも有数の日本絵画コレクションを築いた。収集した作品は伊藤若冲を中心に当時日本であまり人気のない作者のものが多かったが、次第に日本で逆輸入的に評価されていった。葛蛇玉のように、ほとんど無名だった者もある。ロサンゼルス郊外に鑑賞室などを併設した豪邸を構える。全コレクション約600点のうち約200点が自宅の心遠館所蔵、約200点がロサンゼルス・カウンティ美術館(ロサンゼルス郡立美術館、en:Los Angeles County Museum of Art)の日本館(en:Pavilion for Japanese Art)に寄託、190点が2019年に出光美術館に売却されている。2023年没、94歳。**若冲、江戸期絵師のコレクター**

白井雨山 (しらい・うざん/1864~1928年)

愛媛県生まれ。1885年上京、本多錦吉郎に西洋画を、渡辺省亭・望月玉泉に日本画を学び1893年東京美術学校彫刻科卒。松尾馬城に南画を学ぶ。1885年上京して東京でも教え

る。一方、本田錦吉郎に西洋画を、渡辺省亭・望月玉泉に日本画を学び、83年石川県立工業高等学校教諭を経て、98年母校の東京美術学校(のちの東京芸術大学)助教授となり、木彫科のほか、彫塑科を新設してその発展に努める。1901年から2年間渡欧してドイツ、フランスに留学。04~20年年帰国して教授。彫塑のほか文人画にも優れた。また文展・帝展の審査員として活躍し、北村西望・建皇大夢などの英才を育てた。29年門下生・建皇大夢作の胸像が母校の庭に建てられた。1928年没、64歳。**美教、美普、彫刻**

白井華陽 (しらい・かよう/生誕年不詳~1836年)

新潟県生まれ。画を呉北汀(ごほくてい)に学び、江戸で亀田鵬斎(こうさい)に儒学、京都で岸駒(がんく)、岸岱(がんだい)父子に画をまなぶ。花鳥画を得意。1836年没。著作に「画乗要略」。**江戸後期の絵師**

白石白雲齋 (しらいし・はくうんさい/1918~2012年)

先代である父岩尾光雲齋に教えられた別府生まれの職人。1970年代に初の展覧会を行ってから、全国の展覧会に作品を出品し続けました。白雲齋は特に、荒々しく、無造作に交差しているように見える編み方の「やたら編み」を得意としていました。2012年没、94歳。**工芸(竹)**

白石隆一 (しらいし・りゅういち/1904~1985年)

岩手県生まれ。1923年上京。その後川端画学校に学ぶ。岡田三郎助に師事。1928年帝展に入選。以後、文展、日展に出品。30年東京美術学校研究生。清水良雄の門下生。42年光風会会員となる。54年一関市に一関美術研究所を開設し、10年間後進の指導に当たる。岩手県で没、81歳。**洋画、美教**

白石由子 (しらいし・よしこ/1956年~)

東京生まれ。Chelsea School of Art 学士号・修士号取得。1974~76年に、カナダ、バンクーバーに移住し、82年からロンドンを拠点に活動。80年代、具象絵画が主流であったロンドンにおいて、初期はロシア構成主義を思わせる作品を制作していたが、次第に画面上の要素は垂直、水平に整えられたよりシンプルなものへと変化していき、「色」を中心としたミニマルなスタイルを確立する。白石作品が持つ色は、視覚的な要素としてではなく、作品の持つ温度とし

て、時には言語としても機能する。また、色を中心に確立されたスタイルは、立体、インスタレーション、パブリックアートといった作品でも遺憾無く発揮され、近年その活動分野は音楽や建築のプロジェクト、キュレーションなどは多彩な展開をみせている。**洋画、立体、インスタ、パブリックアート**

白井直賢 (しらい・なおかた/生没年不詳)

生没年不詳。文化(1804-18)ごろの京都の人。円山応挙(おうきよ)にまなび、ネズミの絵を得意とした。字(あざな)は子斎。**江戸後期の絵師**

白井洋子 (しらい・ようこ/1947年～)

福島県生れ。聖徳学園短大卒。1997年水彩連盟展で荒谷直之介賞。99年水彩連盟展で春日部たすく賞。喜多方市美術館で白井洋子展。98年有隣室ギャラリー(白井洋子の世界展)。2008年損保ジャパン美術財団奨励賞。09年損保ジャパン美術財団選抜奨励展出品。13年横浜そごう個展、上野松坂屋個展。15年女流水彩画家5人展 出品。09年から出品 各百貨店個展、松屋(銀座)、松坂屋(上野)、井筒屋(博多)、東急(渋谷・長野)、中合(福島・会津)他多数 現在、水彩連盟委員(事務局長)、横浜美術協会理事、日本美術家連盟会。**水彩**

白井嘉尚 (しらい・よしひさ/1953年～)

静岡県生れ。1977年東京藝術大学美術学部卒。79年同大学院美術研究科修士課程修了。代表的なシリーズに、「鏡のフロッタージュ」「フリージグソーパズル」「シャーベットのよう」に「版によるドローイング」「森のなかの花」等がある。静岡の美術界では80年代に、「風景」展、(1986年、清水市文化会館)や「現代アートフェスティバル in 清水」(1987年、鈴与倉庫)等の企画が美術家らにより催され、世代を越えた交流が生まれていた。白井は、そうした流れにおいて重要な役割を果たし、制作のみならず、キュレーションも手がけるようになった。そうした活動には、「A-Value」展(1988-1995年、全8回)、「めぐりアート静岡」(2014-2020年、全8回)等の企画がある。「A-Value」展を含む80年代の静岡の美術界の状況については、静岡市美術館での「Shizubi Project7 アーカイヴ/1980年代—静岡」(2019年)において多くの資料により紹介されている。**洋画、版画、美普**

白尾勇次 (しらい・ゆうじ/1927年～)

石川県生れ。1959年武蔵野美術大学卒業。油彩を南政善、水彩を春日部たすくに学ぶ。67年水彩連盟展初入選、73年渡部菊二賞(最高賞)、委員となるも81年退会。日本国際美術家協会を設立し、創立会員。同年安田火災美術奨励賞展秀作賞。フランス・スペインなど海外展にも多数出品。サロン・ブラン美術協会会長。**洋画、水彩**

白瀧吉堯 (しらかた・よしか/1936年～)

松江市生れ。1961年島根大学教育学部卒業し美術教諭として奉職。97年県立松江商業高等学校を最後に退職。その間、61年青銅会結成に参加、以来毎年同展を開催し出品。79年一水会展に入選(以後連続入選)他、佳作賞、有島奨励賞、一水会賞。81年日展に入選(以後連続入選)。92年一水会会員。95年日展会友。師は日展参与の田中春弥。美教、**洋画、水彩**

白土三平 (しらと・さんぺい/1932～2021年)

東京生れ。画家・岡本唐貴の長男。1948年頃、父の友人の画家・金野新一の紹介で、街頭紙芝居の模写・彩色の仕事を手伝い始める。51年紙芝居「ミスタートモチャン」を制作。57年貸本漫画『こがらし剣士』(巴出版)で漫画家としてデビュー。日本漫画社の長井勝一と出会い、貸本『甲賀武芸帳』刊行。59年長井勝一が新たに設立した三洋社から貸本『忍者武芸帳』刊行。60年週刊誌での初連載となる「風の石丸」『週刊少年マガジン』(講談社)が始まる。61年「サスケ」『少年』(光文社)の連載を開始する。63「シートン動物記」と「サスケ」で第4回講談社児童まんが賞。64年「赤目プロダクション」設立。長井勝一とともに『ガロ』(青林堂)を創刊し、「カムイ伝」の連載を開始する。テレビアニメ「少年忍者 風のフジ丸」(原作:白土、東映動画)がNETテレビ系列で放映。同年映画化。67年映画「忍者武芸帳」(監督:大島渚、配給:ATG)が公開される。71年「カムイ伝」(第一部)完75年「神話伝説シリーズ」『ビッグコミック』(小学館)連載。82年「カムイ外伝 第二部」『ビッグコミック』連載。83年『BE-PAL』(小学館)にエッセイ「白土三平フィールド・ノート」連載。88年「カムイ伝 第二部」『ビッグコミック』連載。95年『ラピタ』(小学館)にエッセイ「白土三平の好奇心」連載。2021年没、89歳。**漫画**

白簀史朗 (しらはた・しろう/1933～2019年)

山梨県生れ。岡田紅陽に師事後、世界の名峰、そして日本国内の名峰を撮影した日本山岳写真の第一人者。その重厚で壮大な作品は国内外で高い評価を受けている。

2000年にスイスのアルバート・キング I 世記念財団より山岳写真家としては初の「功労勲章」を授与された。2019年没、86歳。写真

白山松哉 (しらやま・しょうさい/1853～1923年)

江戸生れ。絵(まきえ)を小林好山に、彫漆、螺鈿を蒲生(かもう)盛和にまなぶ。1905年東京美術学校(現東京芸大)教授。伝統様式を踏襲した精細な蒔絵を得意とした。1923年没、71歳。作品に「梅蒔絵硯箱」「蝶牡丹蒔絵沈箱(じんばこ)」など。漆芸

しりあがり寿 (しりあがり・ことぶき/1958年～)

静岡市生れ。1975年 静岡県立静岡高等学校卒、81年多摩美術大学美術学部グラフィックデザイン学科卒。キリンビール株式会社入社。パッケージデザイン、広告宣伝等を担当。「しりあがり寿」名でマンガ活動を始める。85年単行本『エレキな春』でデビュー。94年キリンビール退社。漫画家として独立し、有限会社さるやまハゲの助を設立。96年『流星課長』『ヒゲのOL 藪内竹子』などサラリーマン三部作、『瀕死のエッセイスト』発行。『真夜中の弥次さん喜多さん』を翌年にかまけて発行。2000年『ゆるゆるオヤジ』『時事おやじ 2000』で文藝春秋漫画賞。2001年『弥次喜多 in DEEP』で手塚治虫文化賞マンガ優秀賞。02年朝日新聞で四コマ漫画「地球防衛家のヒトヒト」連載。渋谷宇田川町しりあがり寿歴史資料館(渋谷ノルコパースクエア7)。06年神戸芸術工科大学先端芸術学部教授。デザイン、漫画、美教

城下り子 (しろした・るりこ/1948～2008年)

東京出身。父方祖父は梅原龍三郎、父はフランス文学者の梅原成四。慶応義塾大学哲学科卒業。舞台美術を多く手掛け、平面作品だけでなく、環境問題をテーマにした造形野外作品を発表し、インスタレーションアート作品を得意とした。1990年古河「四季の径」彫刻大賞展で佳作。'90、'91、'96 多摩川野外美術展(東京)で倫雅美術奨励賞(彫刻)。「88「ファイナル 1988 言葉展」動く現在展(東京)、「91、'94、'96「ダンス・コスモス」の舞台美術制作、日本 SIP 委員会副委員長や、国際野外の表現展実行委員会委員長を歴任した。2008.3.1-3.15 亡くなる直前に娘の城下万奈と「二人展」を催した。享年 59 歳。没後、2010 作品集「城下り子」を夫の城下洋二、娘の城下万奈の編集で刊行された。2008年没、60歳。造形、舞美、インスタ

城谷耕生 (しろたに・こうせい/1968～2020年)

長崎県生れ。1990年 ICS カレッジオブアート(東京)、インテリアデザイン科卒。91年渡伊。ISIA FIRENZE(イタリア国立工業芸術アカデミー)入学。95年ミラノにて、グランデザイン最優秀賞受賞(イタリア工業デザイン協会主催)。ARBOS 社(イタリア)、UP&UP(イタリア)、AURA COLLECTION(京都)のアートディレクターを務める。96～2005年イタリアの建築雑誌『ABITARE』の編集協力員。2000～02年長崎県窯業技術センターの外部指導員。01年エンツォ・マリー氏の助手として波佐見焼の染付け研究を行う。02年 STUDIO SHIROTANI を設立。03年自身のブランド KOSEI で磁器コレクション「TIPO」を発表。04年パークハイアット東京のオリジナルギフトコレクションをデザイン。04年 NAGANO(福岡、ナガノインテリア工業株式会社)のアートディレクター。06年別府(大分)の竹職人と小石原焼(福岡)の陶芸家グループの研究指導を開始。07年「デザイン希望峰—清水久和/、竹下洋子/城谷耕生の活動」展(長崎県美術館主催)開催。2020年没、52歳。デザイナー、染付研究

白田貞夫 (しろた・さだお/1933～2017年)

山形県生れ。学業修了後、日産自動車に務める。武蔵野美術大学油絵科卒業の英子夫人と知り合い、1966年銀座3丁目目で開廊。版画は小さなスペースでも数多く扱えるため、版画を中心に扱うこととした。画廊のマークは具体のメンバーでもあった岡田博による。70年常設展示のスペースを確保するため、銀座7丁目に移転する。以後、国内外の作家が発表を行ってきた地下の空間は、版画家だけでなく、若手を含め多くの作家の寄りどころとなってきた。69年福地靖の詩画集の刊行以来、2003年までプロデュースした版画集は45集にのぼり、美術界に着実な軌跡を残してきた。画廊で発表をしてきた作家に、日和崎尊夫、中林忠良、司修、島州一、黒崎彰、柄沢齊、多賀新、坂東壮一、小林敬生、山中現、丹阿弥丹波子、李禹煥らがいる。特異なところでは現代美術家の加賀谷武の個展を定期的に行なっている。76年日本現代版画商組合が設立されると理事として活動、85～91年同組合理事長を務め、その後も理事、名誉理事として版画界に貢献した。16年作品や記録写真による「シロタ画廊 50年の歩み展」が開催された。19年には生前から企画に関わってきた「李禹煥全版画 1970—2019」が刊行された。画廊は白田没後、英子夫人とスタッフにより運営されている。東京で没、84歳、シロタ画廊主

白野文敏 (しろの・ふみとし/1934～2021年)

大分県生れ。1953年独立展初入選。以後、同展を主な作品発表の場とする。57年多摩

美術大学卒。59年大分県美術展で文部大臣賞。68年私学教育美術在外研修員として渡欧。69年国際青年美術家展。現代美術選抜展(文化庁主催)出品。73～74年文化庁派遣芸術家在外研修員として渡欧。74年現代日本美術展に出品したり個展等を開催。独立美術協会会員。2021年没、87歳。洋画

新宮 晋 (しんぐう・すすむ/1937年～)

大阪生まれ。1960年東京芸術大学絵画科卒業、イタリア政府奨学生として渡伊 60-62年ローマ国立美術学校で絵画を学ぶ。66年よりミラノで立体作品制作を始める。71-72年ハーバード大学視覚芸術センターより客員芸術家として招かれ渡米。風や水で動く立体作品で世界的に著名な作家であり、高さ数メートルのパブリックアートの作品も多く手掛けている。また、彫刻に限らず、舞台演出、絵本の執筆など多彩な活動を行っている。98年「三宅一生パリ・コレクション 1999春夏」の舞台装置を手がける。2001年東京銀座のメゾン・エルメスで個展「自然との出会い」を開催。02年毎日芸術賞特別賞。07年円空大賞。10年旭日小綬章を受章。主な国内外のネットワークは01年メゾン エルメス(東京銀座)、12年メルセデス・ハウス(アメリカ、ニューヨーク)など多数。動く彫刻、絵本、舞台

神 祥子 (じん・さちこ/1988年～)

1988年生れ。2016年武蔵野美術大学大学院造形研究科美術専攻油絵コース修了。2016年「シークレット・ドア」(ティル・ナ・ノーグギャラリー、東京)、16年「トーキョーワンダーウォール公募 2016 入選作品展」(TWS 渋谷)、15年「他人の夢」(YOYOGIART GALLERY、東京)。13年「第49回神奈川美術展」平面立体部門近代美術館賞。洋画

宍道憲一 (しんじ・けんいち/1937年～)

島根県生れ。一級建築士。退職後、趣味で再び絵筆を握る。1996年画商の依頼を受け、「大社 100 景」を制作、吉兆館(大社町)で初個展を開催。得意とする風景画ではあるが、建築パースで培った建造物の表現力には卓越したものがある。「平田 100 景」「出雲路 100 景」「JR 風景画 100 景」など精力的に制作。建築、洋画

新谷英夫 (しんたに・ひでお/1907～1995年)

金沢市に生まれる。県立工業学校を経て、1927年東京美術学校彫刻科入学、吉田三郎に師事。42年新文展初入選。戦後は野外彫刻を手がけ、51年神戸生田神社境内で戦後初の野外彫刻展を開催。以後、各地にモニュメントを制作。84年まで武庫川女子大学教授をつとめた。兵庫県文化賞、神戸市文化賞受賞。1995年没、88歳。彫刻、美教

進藤武松 (しんどう・たけまつ/1909～2000年)

東京生れ。1929年構造社彫塑研究所に入り、斎藤素巖に師事。36年新文展入選、38年新文展特選、52、53年第8回・第9回日展で共に特選・朝倉賞。67年新日展文部大臣賞。73年日本芸術院賞、83年芸術院会員。女性像を中心に堅実な写実作品を制作した。2000年没、91歳。彫刻

進藤裕代 (しんどう・やすよ/1947年～)

静岡県生れ。2013年第10回小磯良平大賞展佳作賞。国会会議員。洋画

真道黎明 (しんどう・れいめい/1897～1978年)

熊本県生れ。太平洋洋画研究所卒。1915年日本美術院研究会員となり日本画に転向。堅山南風、横山大観、安田靫彦、小林古径らに指導を受ける。16年院展入選。院展に出品を続け、75年に院展内閣総理大臣賞。独自に中国、朝鮮に度々外遊して東洋美術の造詣を深め、神秘的な風景画の画風を確立し、米国や欧州でも個展を開いた。1978年没、81歳。日本画

神中糸子 (じんなか・いとこ/1860～1943年)

和歌山県生れ。1877年我が国初の官立の美術学校である工部美術学校に入学し、フォンタネージ、サン・ジョバンニに師事する。同校に入学した女子は神中糸子以外にも山下りんら六名がいた。80年末に同校を退学した後、小山正太郎の私塾『十一会』に入塾し、油画を学ぶ。生涯独身を貫き、明治女学校、日本女子美術学校、東京女子高等師範学校などで図画、洋画の講師を務め指導にあたった。文展などに出品し、1907年文展出品作は総理大臣買い上げ賞となった。山下りんらと共に女流画家の草分け的存在として知られる。1943年没、83歳。洋画、美教

沈 南蘋 (しん・なんぴん・Shen Nan-pin/1682～没年不詳)

浙江省呉興の人。沈銓とも呼ばれる。緻密な描写による彩色鮮やかな写実的花鳥画を描いた。享保16(1731)年12月3日から同18年9月18日まで長崎に滞在し、熊斐(ゆうへい)に画法を伝えた。熊斐の門下は長崎派のうち南蘋派を形成。その清新な写生画は江戸時代後期画壇に新風を吹込み、南画、写生画をはじめ多くの流派に著しい影響を及ぼした。主要作品『鹿鶴図屏風』『水辺猫図』『花鳥図』(東京国立博物館)、『餐香宿艶図』(宮内庁三の丸尚蔵館)。(コトバンク) **中国, 清の絵師**

新納琢川 (しんのう・たくせん/1895～1960年)

金沢市生れ。1924年金城画壇展の創立に参加、25年会員となる。25年飛鳥哲雄らと金沢洋画研究所を開設、26年金沢洋画協会第1回展を商品陳列所で開催。31年第2回茜刺同人洋画展を開く。小学校で図画を教え、高光一也に影響を与える。大正から昭和戦前にかけて、本県の主要な洋画家の一人である。1960年没、65歳。 **洋画、美教**

新保甚平 (しんぼ・じんぺい/1949年～)

石川県生れ。パリ国立美術学校留学を経て1977年金沢美術工芸大学油絵科卒。81年新制作協会展初入選、92年同展新作家賞。95年昭和会展優秀賞。97年安井賞展出品。98年文化庁派遣芸術家在外研修員として、イタリアで学ぶ。2010年新制作協会会員。12年石川県立美術館主催「風景巡礼 新保甚平展」開催。テンペラ技法と油彩技法を併用し、叙情的風景を描き続けている。 **洋画**

す

吹田草牧 (すいた・そうぼく/1890～1983年)

大阪生れ。洋画から日本画に転向し、竹内栖鳳、土田麦僊に学ぶ。1918年文展で入選。19年から国画創作協会展に出品。29年から帝展に出品。39年山南会を結成。1983年没、93歳。作品に「伊豆夏景」など。 **日本画**

末政哲夫 (すえまさ・てつお/1932～2016年)

石川県生れ。1955年金沢大学教育学部美術専攻卒。大学では米林勝二、のち二紀会では堀義雄に師事。58年二紀展に入選。選抜展で選抜展賞。水、光、雲のような自然事象を立体に還元し、ステンレスや鉄を用いて幾何学的に表現することを制作課題とした。二紀会委員。2016年没、84歳。 **彫刻**

菅井梅関 (すがい・ばい・かん/1784～1844年)

仙台市生れ。根本常南から画技を学ぶ。のち江戸に出て谷文晁に師事。やがて文晁のもとを去り京坂に遊学、さらに長崎に出て江稼圃の教えを受けた。10年程長崎に滞在したのち大坂に移り、頼山陽や篠崎小竹をはじめ多くの文人と交友、晩年は仙台に戻った。1844年没、60歳。 **江戸後期の絵師**

須賀松園・二代 (すが・しょうえん II/1898～1979年)

東京生れ。父親の初代松園に蝨型鑄造の技法を学ぶ。1935年に二代目松園を襲名。43年新文展特選。日展会員、日本新工芸家連盟参与日本現代工芸美術展、日本伝統工芸展などでも活躍。74年国指定無形文化財保持者。1979年没、81歳。 **工芸、鑄金**

155 **須賀松園・三代** (すが・しょうえん III/1925～2006年)

富山県生れ。東京藝術大学工芸科鑄金部卒。日展、日本現代工芸美術展、日本新工芸展に出品。日展会員。日本新工芸家連盟理事。日本鑄金家協会顧問。86年に三代松園を襲名。94年に地域文化功労者として文部大臣表彰。2006年没、81歳。 **工芸、鑄金**

菅田幸子 (すがた・さちこ/生誕年不詳～)

1973年コラムデザインスクール卒、87大阪市立美術館付設美術研究所、日本美術家連盟会員2006年～。OギャラリーUP・S(銀座)で個展。93年上野の森美術館大賞展 特別優秀賞。93年マスターズ絵画大賞展で大賞(東京麻布美術工芸館)。 **版画**

菅藤霞仙 (すがとう・かせん/1889～1952年)

広島県生れ。昭和初期に神戸市内の中学校で美術を教えた。1927年神戸美術協会の「県展」委員、28年春陽会展に油彩画が入選。版画も手掛け、29～31年川西英・北村今三・春村ただを・福井市郎と「三紅会」を神戸で結成。日本版画協会展に出品。36年神戸コドモ夏期講習会「絵を習う会」で川西英とともに版画の講師。油彩画を国画会展に発表、入選。46年世羅西町の小学校分校で美術の講師。1952年没、63歳。洋画、版画、美教

日本大学藝術学部美術学科彫刻科卒。71年日本大学藝術学部研究科修了。東京で初個展。2000年岩手県へ移住。03年『子どもの時間』菅沼緑展(萬鉄五郎記念美術館)を開催。05年「街かぞ美術館アート@つちざわく土澤」(花巻市)の企画運営に携わりながら同展へ出品。06年個展(熊谷守一美術館)を開催。彫刻

菅野聖子 (かんの・せいこ/1933～1988年)

仙台市生れ。福島大学学芸部図工科で美術を学ぶ。卒後抽象画を制作。1958年神戸へ移居、61年英字新聞のコラージュ作品に取り組む。60年代半ば、吉原治良率いる「具体美術協会」の展覧会に出品。視覚詩・コンクリートポエトリーを研究グループ「ASA」にも加わり、この頃《作品》(67年)のような、極めて細密な描線による直線的なパターンが無数に集積する、代表作品のシリーズが生み出された。68年具体美術協会会員。71年個展(グタイピナコテカ・大阪)。大阪大学、京都大学で物理、数学関係を学び、《いたるところ微分不可能な関数族のみたす方程式(2)》(1988)を発表。1988年没、55歳。洋画、コラージュ、具体

菅久 (すが・ひさし/1926～2014年)

大分県生れ。1947年中・高等学校で教壇に立つ一方、本格的な油彩画の制作を開始。50年二紀会展に入選。以後、同展を主に活躍。86年二紀会会員。93年同会委員。50年のネギ、その後のスマイル会、80年の潮流の会等に参加し、県洋画壇に新風を送り続けるとともに、数多くの展覧会評も手掛けた。2014年没、88歳。洋画、美教

菅真人・梶川真人(すが・まひと/1896～1983年)

鳥取県倉吉市出身。菅楯彦の甥。楯彦に師事。1937年には大森富平、直原放青らと三艸社を結成、大阪三越で展覧会を開催。楯彦の画風を継承し、歴史風俗画を多く描いた。

1963年楯彦没後には顕彰活動の中心となり、74年倉吉博物館開館にあたっては、楯彦を美術部門の柱とするべく貢献。1983年没、86歳。日本画

須賀通泰 (すが・みちやす/1930～2000年)

川崎市生れ。東京美術学校卒、1958年同大学院を修了。62年に渡仏し、65年までパリの国立高等美術学校で学ぶ。68年読売アンデパンダン展で入賞。70年東京ビエンナーレで優秀賞。74年にヴェネツィア・ビエンナーレに出品し、77年にはパリのグランパレで個展を開催。85年文化庁芸術選奨文部大臣賞。90年日本芸術院会員。95年文化功労者。2001年須賀通泰美術館が開館。2000年没、70歳。彫刻

菅谷晴亮 (すがや・せいりょう/1906～1970年)

茨城県生れ。1925年茨城美術展で入選(以後毎回出品、29、31、37年展で県賞)。41年永田春水に師事。46年日展で入選。50年茨城県美術展で水戸市長賞。66年茨城県芸術祭美術展で委託出品。55年児玉希望に師事。59年茨城日画会創立会員。1970年没、64歳。日本画

菅玲子 (すが・れいこ/1928年～)

ソウル市生まれ。1946年大分県師範学校女子部本科卒。49年洋画家菅久と結婚。1955年二紀会展に入選。65年二紀会同人。2010年二紀会展で同人賞。11年東日本復興祈願・芸術クリスマス展で、復興祈願芸術大賞。大分県洋画壇における女流画家の第一人者として活躍。洋画

頭川政始 (づかわ・まさし/1933年～)

富山県生れ。1957年日展入選。60年金沢美術工芸大学工業デザイン卒。建材会社のデザイナーとして就職、20歳代後半で退社。自宅にこもって鉛筆画に没頭した。前衛美術会会員。鉛筆による細密画で独特な画風をもって知られる。デザイン、水彩、鉛筆画、前衛美術

菅原精造 (すがわら・せいぞう/1884～1934年)

山形県生れ。17歳のときに上京し、東京美術学校の漆工科撰科に入学。日露戦争が終結した1905年晩秋、二十一歳で横浜からフランスへ出航、その後一度も帰国せず、生涯を

パリ中心に過ごした。菅原は渡仏後すぐ、工芸の道を志し、ロンドンからパリに戻ったアイリーン・グレイとの知遇を得、彼女と共同制作した「夜の魔術師」をサロンに初出品、評判を呼ぶなど、次第に漆芸家としての地歩を固めていく。1934年パリで没、50歳。工芸、漆芸

菅原大三郎（すがわら・だいざぶろう/1873～1922年）

1873年生れ。96年東京美術学校彫刻科卒。97年中尊寺金色堂の修理以来、新納忠之介と共に仏像の修理に携わった。1919年唐招提寺の修理の大半を了して、美術院を辞した。唐招提寺の大修理の様相は和辻哲郎著『古寺巡礼』の中に述べられ、父のことはS氏として記されている。千手観音の修理関係図だけでも優に二百枚を越える膨大なもの。播州清水寺山門の仁王を造り了えて、1922年没、49歳。彫刻、仏像修復

菅原健彦（すがわら・たけひこ/1962年～）

東京生れ。94年五島記念文化賞美術新人賞。95～96年滞独。98年MOA岡田茂吉賞優秀賞。第7回上野の森美術館大賞展大賞。日経日本画大賞。蔵丘洞画廊で個展。京都造形大学教授。日本画、美教

菅原安男（すがわら・やすお/1905～2001年）

京都生れ。父は菅原大三郎。1908年奈良県に転居。23年日本美術院新作展で入選。27年再興院展で入選（46年日本美術院賞）。28年東京美術学校彫刻科木彫部卒。36年奈良日本美術院で仏像修復に従事。44年東京美術学校助教授。54年新制作展会員。69～73年東京芸術大学教授。東京で没、96歳。彫刻、仏像修復、美教

菅原安男 II（すがわらやすお/1905～2001年）

京都生れ。父は菅原大三郎。幼少時に奈良に移り17歳の時に死別した父から直接の彫刻の手ほどきを受けた事はないとされるが、東大寺知足院の三宅英慶師の指導により奈良の仏像に親しみ、東京美術学校にて高村光雲、関野聖雲、平櫛田中らに師事。卒業後奈良に戻り、明珍恒男、小川晴暘、小林剛、志賀直哉と親交。作風に大きく影響した事を懐述している。新納忠之介と共に日本美術院草創期から、現場主任として仏像修理を行ってきた、草分け的存在です。1944年東京美術学校助教授に就任。院展・新制作展を中心に写実的な肖像から仏像、構成的要素の強いオブジェ的な動物像まで、幅広い作風を展開し活躍した。

東京で没、96歳。彫刻、仏像修復、美教

杉浦康平（すぎうら・こうへい/1932年～）

東京生れ。1955年東京藝術大学建築学科卒。56年高島屋宣伝部に実習生。第6回日宣美展で日宣美賞。フリーになり、デザイン事務所を主宰。57年日宣美展で特選。62年会員賞。58年ADC賞で銅賞。61年毎日産業デザイン賞で部門賞（グラフィック・デザイン）。64～67年ウルム造形大学（ドイツ）客員教授。71年講談社出版文化賞でブックデザイン賞。87～2002年神戸芸術工科大学教授。97年毎日芸術賞、紫綬褒章。2010年神戸芸術工科大学アジアデザイン研究所所長。19年旭日小綬章受章。グラフィック・デザイナー、美教

杉浦俊香（すぎうら・しゅんこう/1844～1931年）

東京生れ。独学で画技を身に付け、中国、欧米へ自作を携えての視察旅行なども行う。1903年内国勸業博覧会に《二十四孝図》出品、06年五二共進会美術部出品作で特選。26年フィラデルフィア万博出品で金牌受賞。画壇からは距離を置いて独自に絵画制作に励み、個展での作品発表を続けた。絵画に関する数点の著作も残している。1931年没、87歳。日本画

杉浦康益（すぎうら・やすよし/1949年～）

東京生れ。1975年東京芸術大学大学院陶芸専攻修了。79年東京のかねこあーとギャラリーで個展。河原の石を型取りし同一の形を反復した《陶による石の群》を発表し、注目を集める。以後、より大きな岩の作品を自然の風景の中に配置するインスタレーションを手がけ、84年びわこ現代彫刻展、85年ヘンリー・ムーア大賞展に出品。94年手びねりによる無数の有機的な形態を積み上げた「陶の木立」シリーズ、2000年植物の構造を精緻に再現した「陶の博物誌」シリーズを発表。陶磁、陶彫、インスタ

須木一胤（すき・かずたね/1873～1936年）

徳島県生れ。1900年脇町中学校教諭となり、図画・地理・英語を教え、02年徳島県師範学校教諭として図画を担当し、28年退職。在職中には文部省、東京美術学校、日本美術院などの講習に参加して、日本美術史を学び、徳島にひろめました。1936年没、64歳。美教、美史

杉崎 隆 (すぎさき・たかし/1966年～)

新潟県生れ。1988年東海大学教養学部芸術学科卒。90～93年新潟県展。92～93年「アートヒル三好ヶ丘彫刻フェスタ」優秀マケット展。97年斉藤清美術館(柳津町)にブロンズ像「会津の子ども達」制作(共同制作)。97年野外彫刻国際シンポジウム小作品展。彫刻

杉谷雪樵 (すぎたに・せつしょう/1827～1895年)

雪舟の流れを汲む雲谷派支流で、熊本藩の御用を務める矢野派に属する、熊本藩最後の御用絵師。晩年は上京して日本美術協会などで活躍。熊本における近代日本画家の先駆と評される。1895年没、68歳。幕末-明治期の絵師、近代日本画家の先駆

杉田 豊 (すぎた・ゆたか/1930～2017年)

埼玉県生れ、埼玉県立浦和高等学校卒。1953年東京教育大学芸術学科卒。57年日宣美展奨励賞。79年ボローニャ国際児童年記念ポスターコンクール最優秀賞、ボローニャ国際児童図書展グラフィック賞、第26回産経児童出版文化賞美術賞。80年「うれしいひ」(至光社)第11回講談社出版文化賞絵本賞。84年ブルノ・グラフィックデザインビエンナーレ特別賞。90年「みんなうたってる」(至光社)産経児童出版文化賞。97年アジアゴージャス国際切手芸術賞。2017年没、87歳。絵本、グラフィック・デザイナー

杉田陽平 (すぎた・ようへい/1983年～)

津市生れ。2008年武蔵野美術大学造形学部油絵科卒。多くのアートコレクターに支持されている。若手作家ながらも完売作家。主な展覧会に個展「曇り空の中に、どこまでも鮮やかな色を探して」(2022年、GALLERY X BY PARCO:渋谷PARCO)。2007年「シェル美術賞2007」(中井康之審査員賞)。個人活動とは別にアート集団「じゃぼこか」の一員。現代美術、洋画

杉野和子 (すぎの・かずこ/1945年～)

1945年生れ。68年武蔵野美術大学造形学部芸術デザイン専攻卒。2000、01、03年新制作展で新作家賞。01年文化庁現代美術選抜展出品。04年新制作協会で会員。13、16年神奈川県女流展で神奈川県立近代美術館賞。洋画

年岩手県師範学校卒。教諭～79年まで。58年盛岡にて初個展。59年二科展に初出品。63～68年前衛美術集団「集団N39」を結成。64年モダンアート展に出品。98年ウラジオストク・ビジュアルアート・ビエンナーレ(ロシア)に出品。盛岡市で没、78歳。洋画

杉村治兵衛 (すぎむら・じへい/生没年不詳)

作画期は延宝(1673～81)末から元禄(1688～1704)末頃、浮世絵草創期に菱川師宣と共に活躍した絵師。江戸通油町に住したと伝えられ、画系については不詳である。現存作品は少ない。浮世絵版画で一枚絵を制作した先駆者と評される。江戸前期、浮世絵草創期の浮世絵師

杉村 孝 (すぎむら・たかし/1937～2023年)

石彫家・北川薫に師事。太平洋美術学校に学んだ。中日展、富嶽文化賞展などで受賞。美術批評家の石子順造と深く交友した。2023年没、85歳。彫刻

杉本亀久雄 (すぎもと・きくお/1920～1992年)

奈良市生れ。1944年関西学院大学卒、卒業後毎日新聞社に入社、66年まで在職し、大阪本社学芸部美術記者。自由美術家協会展に出品、49年自由美術家協会会員。50年同協会の村井正誠ら抽象系作家が分離独立結成したモダンアート協会に創立会員として参加。66年個展を東京・日動サロンで開催、隔年おきに日動画廊本・支店で個展。夫人は作家の山崎豊子。1992年没、71歳。洋画

杉本聡子(すぎもと・さとこ/1982年～)

神奈川県生れ。2007年多摩美術大学美術学部絵画学科油画専攻卒。07年同大学大学院美術研究科絵画専攻油画領域入学。07年「トーキョーワンダーウォール2007 入選作品展」(東京都現代美術館/東京)。08年「アジアデジタルアートアワード入賞作品展」(福岡アジア美術館/福岡)。洋画

杉本 繁 (すぎもと・しげる/1946年～)

東京生れ。1971年多摩美術大学彫刻科大学院卒、二科会彫刻部会員。ステンレス、御

影石を使用。彫刻

杉本貴志 (すぎもとたかし/1945～2018年)

東京生れ。1968年東京芸術大学美術学部工芸科卒。72年にファッションデザイナー山本耀司による初めてのアパレルショップ「ワイズ」の内装、バー「ラジオ」の内装を手掛けた。73年設計会社「スーパーポテ」を設立。75年にはグラフィック・デザイナー、田中一光と共に西武百貨店の環境計画に参加し、西武セゾングループのデザインディレクターとして、国内の店舗の立ち上げを行った。80年無印良品の創立にも参加。90年代にグランドハイアットシンガポールのレストラン「Mezza9」の内装を手掛けた。パークハイアット・ソウル、ハイアットリージェンシー・京都など、国内外のハイアットホテルの内装に加え、シャングリラ、ザ・リッツ・カールトンホテルのインテリアも手がけた。代表作に銀座グラフィックギャラリー(1986年)や成田ゴルフクラブ(1989年)、レストラン「響」(1998—2002年)、妙見石原荘(2007年)などのインテリアがある。92～99年武蔵野美術大学造形学部空間演出デザイン学科教授。85年'84年毎日デザイン賞。85'85年インテリア設計協会賞。86年'85年毎日デザイン賞。2001年 Restaurant Design of the Year 受賞。01年国土交通大臣賞。07年 KU/KAN 賞。08年 Interior Design Magazine Hall of Fame Awards 2008。2018年没、73歳。デザイナー、ホテルインテリア、美教

杉本みゆき (すぎもと・みゆき/1955年～)

青森県生れ。1975年嵯峨美術短期大学洋画科卒。87年盛岡で初個展(MORIOKA 第一画廊)。以後、2003年まで毎年開催。95年「VOCA展 1995 現代美術の展望—新しい平面の作家たち—」(上野の森美術館)に出品。98年東北現代作家選集'98 Part III 杉本みゆき展(アース・アーク美術館)を開催。洋画、版画

杉山明博 (すぎやま・あきひろ/1942年～)

静岡県生れ。木を用いて様々な造形を行う。子供の造形表現の研究にも長年携り、造形に関わる書籍も多く出している。静岡大学教授、名古屋造形芸術大学大学院・静岡文化芸術大学・常葉大学造形学部非常勤講師。造形、美教

杉山光鳳 (すぎやま・こうほう/1903～1983年)

宮城県生れ。東京美術学校本科卒。横山大観に師事。のち荒木十畝の門をたたいた。戦

時下夫人の実家を頼って1941年から62年まで、類家、鯨に居住。中央展、日展、創造展、日本画院展に出品。八戸の農地調整委員。上京して日本画院を中心に出品し、受賞を重ね、米国ロサンゼルスで個展開催。1983年没、80歳。日本画

杉山昌文・冬樹 (すぎやま・まさふみ?/生誕年不詳～1939年)

独立美術京都研究所に入所。1935年新日本洋画協会にも参加。38年独立美術協会に入選。独立美術京都研究所に入所。35年新日本洋画協会にも参加。34年龍安寺の大珠院に下宿。35年独立美術協会展に入選。37年頃から「俊一」のほか「冬樹」の名で作品を発表。1939年没。洋画

杉山吉伸 (すぎやま・よしのぶ/1937年～)

栃木県生れ。1959年宇都宮大学学芸部美術科卒。寺島龍一に師事。83、89年改組日展特選。95年光風会展文部大臣賞。2007年栃木県文化功労者。日展会員、光風会会員。洋画

鈴木昭男 (すずき・あきお/1941年～)

平壤生れ。1963年名古屋駅でおこなった《階段に物を投げる》以来、自然界を相手に「なげかまけ」と「たどり」を繰り返す「自修イベント」により、「聴く」ことを探求。70年代にはエコー楽器《アナラポス》などの創作楽器を制作し、演奏活動始める。88年一日自然の音に耳を澄ます《日向ぼっこの空間》を発表。96年に街のエコーポイントを探る「点音」プロジェクトを開始。ドクメンタ8(ドイツ、87年)、大英博物館(イギリス、2002年)、ザツキン美術館(フランス、04年)、ボン市立美術館(ドイツ18年)、東京都現代美術館(19年)など、世界各地の美術展や音楽祭での展示や演奏多数。75年沖縄国際海洋博覧会に音響彫刻とアナラポスC(深海のこだま)が採用。76年「音のオブジェと音具展・鈴木昭男の世界」南画廊、東京。88年音のプロジェクト《日向ぼっこの空間》遂行・網野町高天山、京都府。94年ベルリン滞在を機に、サウンド・インсталレーションの制作を始める。96年ゾナムビエンテ・フェスティヴァル・ベルリンにて「点音」を始める。パフォー、サウンド・アーティスト、インスタ

鈴木恵麻 (すずき・えま/1972年～)

神奈川県生れ。1997年東京芸術大学美術学部日本画専攻卒。99年東京芸術大学大

学院美術研究科日本画修士課程修了、春の院展に入選、2002年院展に入選、04年春の院展で奨励賞。07年再興院展で奨励賞。09年天心記念茨城賞。日本画

鈴木鷺湖 (すずき・かこ/1816～1870年)

千葉県生れ。天保7・8(1836・7)年頃に江戸に出、晩年の谷文晁に師事する。中国の故事人物画を得意とし、山水、花鳥画などにも多くの作品を残す。石井鼎湖の父、石井柏亭・鶴三兄弟の祖父。1870年没、54歳。南画

鈴木和道 (すずき・かずみち/1955年～)

東京生れ。1981年東京芸術大学大学院を修了し、ウィーン応用芸術大学で3年間学ぶ。84帰国し、85年まで東京芸術大学非常勤講師。以降、ウィーン派絵画スクール設立。セントラル美術館大賞展佳作賞、北の大地大賞展、文化庁芸術祭賞受賞。現在無所属で活動し、個展・グループ展多数開催。洋画、ウィーン幻想派

鈴木盛久 1父は13代鈴木盛久。1938年東京美術学校工芸科入学。香取秀真や内藤

春治などに師事。64年文部省在外研究員として、ヨーロッパ各国で鍍金技術を調査。67年現代工芸展で外務大臣賞。73年東京藝術大学教授就任。79年第14代鈴木盛久を襲名する。1982年没、63歳。工芸、美教

鈴木幹二 (すずき・かんじ/1921～2003年)

愛知県生れ。61～92年岩田寛太郎・木下富雄・佐藤宏・鈴木幹二と共に「版画五人展」(愛知県美術館)を開催。永年大府市民美術展の審査員。ニューヨーク近代美術館、愛知県美術館収蔵品。国画会会員。愛知県で没、82歳。版画

鈴木清 (すずき・きよし/1943～2000年)

福島県生れ。1969年東京総合写真専門学校卒。『カメラ毎日』に「シリーズ・炭鉱の町」を発表(～1970年、全6回)。以後、看板描きをしながら写真家活動を続ける。72年『流れの歌 soul and soul』(自費出版)刊行。76年『ブラーマンの光 THE LIGHT THAT HAS LIGHTED THE WORLD』(自費出版)刊行。83年『天幕の街 MIND GAMES』写真集、個展に対して日本写真協会賞新人賞。85年東京総合写真専門学校講。92年『天地戯場 SOUTHERN BREEZE』(自費出版)刊行。個展「母のうみ」に対して第17回伊奈信男賞。95年土門拳賞。9

8年『デュラスの領土 DURASIA』(自費出版)刊行。2000年没、56歳。写真

鈴木拳山 (すずき・きよざん/1842～1915年)

愛知県生れ。1852年頃から稲田文笠の門で学び、のちに江戸に出て鈴木鷺湖に師事した。明治元年以後、号を拳山と改め、深く画事を研究するため、近江、美濃、信濃、伊勢の各地を遊歴した。終生独身を通し、酒を飲んで描く生活を送った。1915年没、74歳。日本画

鈴木敬三 (すずき・けいぞう/1959年～)

愛知県生れ。1982年大阪芸術大学美術学科膠彩画ゼミ卒。東三河の若手絵画研究グループ「研展」に参加。ゼミ卒業生によるグループ「組展」創立。84年大阪美術協会展朝日新聞社賞。85年大阪美術協会展奨励賞。94年第三文明展奨励賞。99年「東海テレビ墨画展 現代・墨への挑戦2000」準大賞。2000年富山県水墨美術館「公募：墨画トリエンナーレ 富山2001」最優秀賞。00年ペンリアル協会会員。水墨、ペンリアル

鈴木空如 (すずき・くうにょ/1873～1946年)

秋田県生れ。1798年東京美術学校日本画選科入学入学後、古美術研究の権威である山名貫義(つらよし)や、仏教美術研究の第一人者である大村西崖(せいがい)に師事。空如は研究科(現大学院)に進み、1907年修了。その後、空如は仏画家としての道を歩み、法隆寺金堂壁画の原寸大の模写を三組制作、近代の仏教美術史研究に大きな足跡を残した。1946年没、73歳。古仏画の模写、日本画

鈴木阜雲 (すずき・こううん/1903～1947年)

茨城県生れ。高田疎石に師事。1929年茨城美術展で入選。(33、35、40年出品)。横山大観と文通を行い、中央画壇への出品を勧誘される。1947年没、44歳。日本画

スズキコージ (すずき・こーじ//1948年～)

静岡県生れ。1987年「エンソくん きしゃにのる」(福音館書店)で小学館絵画賞、88年「ガラスめだまときんのつなのやぎ」(福音館書店) & 89年「やまのディスコ」(架空社)で絵本にっぽん賞、2004年「おぼいドライブ」(ビリケン出版)で講談社出版文化賞絵本賞、07年浜松市、浜松ゆかりの芸術家受賞、08年「旅ねずみ」(金の星社)で赤い鳥さし絵賞。09年「ブラッキンダ

ー」(イーストプレス)で日本絵本賞大賞。**絵本、マンガ、映画、ポスター、舞美、壁画**

鈴木香峰 (すずき・こうほう/1808～1885年)

東京生れ。幕臣の子。吉原宿の脇本陣扇屋の婿養子となり、問屋として采配を揮うかわらわら歌や書画に親しんだ。絵は四谷の大岡雲峰に学び、のち福田半香にも指導を受けた。幕末期に多く現れた地方在住の南画家のひとり。1871年ウィーン万国博覧会、71年内国勸業博覧会への出品。1885年没、79歳。**南画**

鈴木繁男 (すずき・しげお/1914～2003年)

静岡市生れ。1935年柳宗悦門下となり、その後、陶芸家の道に進むことを決意。18歳から書生として宗悦のもとで暮らし、生涯にわたって師事。60年磐田市中央町に窯を構えた。腰を痛めて59歳で作陶を断念。93年浜松市に遠州民藝協会(日本民芸協会支部)を設立。宗悦は実子である柳宗理よりも、繁男こそを民藝運動の後継者として考えていた。**漆芸。民藝運動家、陶芸**

鈴木瑞彦 (すずき・ずいげん/1848～1901年)

京都生れ。四条派の塩川文麟こまなぶ。1891年京都市美術学校教授。山水・花鳥画を得意とし、内国絵画共進会などで受賞。1901年没、54歳。**日本画**

鈴木ジェームス寛 (すずき・ジェームス・ひろし/1933年～)

1933年生れ。1963年ジミー鈴木展(日本橋画廊・東京)。神奈川県立近代美術館、東京国立近代美術館に作品収蔵。**洋画**

鈴木清一 (すずき・せいいち/1895～1979年)

水戸市生れ。1913年県立水戸中学校卒。19年東京美術学校卒、同研究科に進む。21年帝展で入選。30年兵庫県神戸市に転居、兵庫県美術家連盟に参加。37年新文展で無鑑査出品。42年兵庫県新美術家協会結成、委員長。戦後は画壇と関係を断ち制作に専念。79年神戸市文化賞、神戸市で没、84歳。**洋画**

鈴木草牛 (すずき・そうぎゅう/1905～1988年)

茨城県生れ。1926年東京美術学校日本画科入学。29年茨城美術展で入選。31年頃みやこ新聞社に漫画記者として入社。37年茨城新聞社の従軍記者として中国に渡る。48年竜ヶ崎中学校美術教師。62年、65年茨城県美術展運営委員。688年新興美術院理事。69年九月会創立。72年から数度に渡り外遊。茨城県で没、83歳。**日本画、漫画、ジャーナリスト、美教**

鈴木守一 (すずき・しゅいつ/1823～1889年)

江戸生れ。鈴木其一の子。父・其一に画を学び、その模作を数多く残す。1842年頃に其一の跡を継ぐ。74年のウィーン万国博覧会に出品。酒井抱一の孫世代として、幕末から明治にかまけて活躍。其一の鮮やかな彩色、明快な構図などを継承しつつ、抱一の情趣を重んじる表現を受け継ぎ、多岐にわたる画題を描いた。明治期において江戸琳派様式を展開させた点で重要な画家。1889年没、66歳。**江戸後期-明治期の絵師**

鈴木大麻 (すずき・たいま/1901～1975年)

三重県生れ。初め小茂田青樹、のち前田青邨に師事。1927年再興院展に入選、29年日本美術院院友、以後院展に入選、40年紀元二千六百年奉祝美術展にて入選。1975年没、74歳。**日本画**

鈴木武志 (すずき・たけし/1895～1978年)

福島県生まれ。太平洋画会研究所、アカデミー・ジュリアンに学ぶ。中村不折に師事。太平洋美術会参与。1978年没、83歳。**洋画**

鈴木忠実 (すずき・ただみ/1935年～)

大分市生れ。宮崎武夫に師事。大分県美術展、大分県日本画展などで作品を発表する一方、新興展にも出品を続け、1987年会員努力賞(単居人賞)、93年に文部大臣奨励賞。新興美術院常任理事、大分県美術協会日本画部長、大分県日本画協会会長。**日本画**

鈴木長吉 (すずき・ちょうきち/1848～1919年)

埼玉県生れ。岡野東竜斎に師事し、蟬型鑄造を学び、1874年起立工商会社の鑄造部の監督、96年帝室技芸員。85年ニュールンベルク万国金工博覧会に出品の「鷲」は、江戸時

代の蠟型鋳物の伝統をよく伝え、日本の鋳造技術の水準の高さを世界に示す。代表作に「銀製百寿花瓶」(宮内庁蔵)、「波濤文水盤」(東京芸大蔵)、「鷲置物」(東京国立博物館蔵)など。「十二の鷹」(東京国立近代美術館蔵、2019年度に重要文化財に指定)は、93年シカゴ万国博覧会に出品された全作品の中で最も高い評価を得た。同時にシカゴ万博出品された、「銅鷲置物」1893年作は2001年重要文化財指定。1919年没、71歳。 **工芸、鋳金**

鈴木潮司 (すずき・ちようじ/生没年不詳)

静岡県生まれ。東京に出て明治から昭和にかけて活躍した日本画家の島崎柳鳴(りゅうう)に入門、画塾の展覧会に出品した。 **日本画**

進来 哲(すずき・てつ/1905～1981年)

大分県生まれ。1930年東京美術学校卒。藤島武二に師事。27年光風会展、帝展に入選。以後、光風会展、新文展、日展等を中心に活躍。61年大分県立芸術短期大学教授。77～81年大分県美術協会第3代会長。80年日展会友。同年大分合同新聞文化賞。1981年没、76歳。 **洋画、美教、美普**

鈴木年基・雷齋 (すずき・としもと/生没年不詳)

月岡芳年の門人、大阪の人。1875年大阪の錦絵新聞「新聞圖繪」を執筆、その版元八尾善から別に「地球全世界雷名鏡」シリーズを刊行。77年版行の西郷隆盛など西南戦争の立役者達を大判の大首絵で描いた「文武高名伝」(大判揃物、点数不明)や、同戦争の場面を大判三枚続で描いた錦絵。同じ年に鈴木雷之助の名で自身が編輯兼出版人、絵草紙『薩摩大戦記』六編を綿屋喜兵衛から出版。明治の初年ごろ大判「大日本名所寫真鏡」を7番まで計14景を刊行。 **大阪の明治期の浮世絵師、版画**

鈴木朝潮 (すずき・ともみ/生誕年不詳～)

横浜市生まれ。1985年東京芸術大学美術学部油画科卒。87年東京芸術大学油画大学院壁画研究室修了。90年代初頭よりコンクリートを使ったオブジェ「雨の記憶」を発表。2000年代より「雨の記憶」岡針鋼網を使い銅版画の制作。自作オブジェ写真でフォトエッチングの技法により銅版画を制作。16年『版画芸術』No171、「デジタル版画の現在」にて6ページの特集。85年東京芸大卒業制作に対し『大橋賞』。86年『第4回日本イラストレーション展』大

賞。89年『第3回 THE ART 展 ペイント部門』大賞。90年『第4回 THE ART 展 フォトグラフ部門』大賞。 **現代美術、オブジェ、版画、イラスト、フォトグラフ**

鈴木豊次郎 (すずき・とよじろう/1897～1967年)

東京れ。1921～25年農展に図案を出品。24年東京美術学校図案科卒業、東京高等工芸学校嘱託となる(28年助教授、44年教授)、51年千葉大学工学部教授、翌年茨城大学文理学部教授(63年退官)。57年茨城デザイン協会を結成。水戸市で没、70歳。 **デザイナー、美教**

鈴木南嶺 (すずき・なんれい/1775～1844年)

江戸生まれ。渡辺南岳らにまなび、江戸円山派の画家として活躍。のち丹後(京都府)田辺藩主牧野家につかえた。1844年没、70歳。 **江戸後期の絵師**

鈴木信男 (すずき・のぶお/生誕年不詳～2002年)

水戸市生まれ。1946年菊池五郎に師事。48年茨城師範学校美術科卒。51年水彩連盟展に入選(85年小堀進賞、92年文部大臣奨励賞、94年春日部たすく賞)、第6回茨城県美術展覧会で美術館長賞。52年白日展に入選、資生堂賞(54年白日賞。55年奨励賞)。53年日展に入選。55年水彩連盟準会員(60年会員)。84年茨城県芸術祭美術展覧会にて中村彝賞。2002年没。 **水彩**

鈴木準中 (すずき・のりなか/1919～没年不詳)

上海生まれ。青山学院高商部卒。戦後文化学院図案科に学び、アパレル業界で成功。その後、独学で版画を勉強、日本版画協会展、現代童画展、日本版画院展に出品。鮮やかな色使いで評価。アンティークランプ、民芸品、仏像をテーマにした作品が多い。海外コレクターに人気。 **版画**

鈴木梅山 (すずき・ばいせん/生没年不詳)

祖父は玉林齋梅枝、父は団平(遊景齋梅山か)。三代続いた本荘藩の御用絵師とみられる。狩野派の流れをくみ、俗に「鳥こ梅山」と呼ばれるほど鳥の絵を得意としたという。明治初年に没していること以外に詳しい伝記がない。 **江戸後期-明治の絵師**

鈴木治男 (すずき・はるお/1947年～)

茨城県生れ。74年金沢美術工芸大学美術学科油画卒。75年金沢にて初個展、以後金沢や東京等で毎年個展開催。76年金城短期大学開学と同時に講師となる。(87年助教授、92年教授)。81年メキシコ、ベラクルス州立大学美術学部にて研修(私学在外研修員)。86年自由美術協会展初入選、以後94年まで出品。91年日本海造型展出品、以後2008年まで出品。10～14年金城大学短期大学部学長。現在 日本美術家連盟会員、石川県美術文化協会会員。洋画、美教

鈴木春信 (すずき・はるのぶ/1725～1770年)

江戸生れ。神田に居住。1760年頃紅摺絵を描き、65年多色摺木版画の錦絵を始め、浮世絵版画技法上に貢献。浮世絵史において一大転換期。絵暦交換会の場で錦絵と呼ばれる多色摺木版画の完成。蘇州版画の影響を受ける。900点前後の錦絵を発表。新鮮な技法を駆使して、古典的な抒情や日常生活の心理的機微を、当世風俗や実在のモデルに託して表現。彼の描く女性の姿態には妖艶というより清雅な趣がある。主要作品『風流やつし七小町』『お百度参り』『座敷(坐舗)八景』『風俗四季歌仙』『藤原敏行朝臣(秋風)』『おせんの家屋』。江戸で没、45歳。江戸中期の絵師

鈴木久雄 (すずき・ひさお/1946年～)

清水市生れ。武蔵野美術大学彫刻科に学ぶ。1969年より行動美術展に出品、70年同展新人賞。73年会友賞、74年行動美術賞、75年同会会員。71年ユーゴスラヴィア国際彫刻シンポジウムに招かれて制作、72年イタリア・フェリオローの石切場で制作し、作品はレニャーノ野外美術館に収蔵。75年以降現代日本美術展、宇部の現代日本彫刻展に出品、77年に宮崎県総合博物館賞。美ヶ原高原美術館でのヘンリー・ムア大賞展では、83年佳作賞、85年には白御影石のブロックを積みあげ、コルテン鋼板とともにワイヤーロープで縛った作品でマンズー特別優秀賞。美ヶ原のロダン大賞展でも88年に優秀賞。個展も87年佐谷画廊、90年に南天子画廊。彫刻

鈴木尚和 (すずき・ひさかず/1958年～)

横浜市生れ。多摩美術大学卒。1988年スタジオワークスを設立。作家活動として全国

各地にモニュメントやオブジェを設置。また、インテリア・プロダクト・環境&空間デザインまでデザインの領域を超越して活動を展開。近年は、地方自治体の企画デザインアドバイザーも兼務し、地方に眠る技術を生かしたプロダクトデザインを多数発表。JAPANブランドにも参加。個展・グループ展等多数発表。造形、モニュメント、オブジェ、空間デザイナー

鈴木広行 (すずき・ひろゆき/1950年～)

愛知県生れ。1973～77年渡仏し、ウィリアム・ヘイターの「アトリエ17」で学ぶ。75年個展開催(シロタ画廊、東京)、77年リュブリアナ国際版画ビエンナーレに出品。82年名古屋芸術奨励賞。87年西武美術館版画大賞展(西武美術館、東京)に出品、2005年クレモナ国際版画展に出品。版画

鈴木博 (すずき・ひろし/1930年～)

金沢市生れ。1953年金沢美術工芸短期大学油画科卒。宮本三郎に師事。49年二紀展初入選、55年奨励賞、58年二紀会同人優賞、73年菊華賞、75年文部大臣賞受賞。59年安井賞展出品し、以後5回入選。74年東京国際具象ビエンナーレ、翌年日本現代美術展にそれぞれ招待出品。幻想的な少女像や道化師を主なテーマとする。洋画

鈴木治男 (すずき・はるお/1947年～)

茨城県生れ。74年金沢美術工芸大学美術学科油画卒。75年金沢にて初個展、金沢や東京等で毎年個展開催。76年金城短期大学開学と同時に講師となる。(87年助教授、92年教授)。81年、メキシコ、ベラクルス州立大学美術学部にて研修(私学在外研修員)。86年自由美術協会展初入選、以後94年まで出品。91年日本海造型展出品、以後2008年まで出品。10～14年金城大学短期大学部学長。現在 日本美術家連盟会員、石川県美術文化協会会員。洋画、美教

鈴木百年 (すずき・ひやくねん/1825～1891年)

京都生れ。初め北宗画を学び後四条派の画風をよくした。岸連山に師事する。山水画を得意とし、鈴木派と呼ばれる流派を生み出した。鈴木松年は子供。1891没、64歳。江戸後期-明治期の絵師

鈴木表朔（すずき・ひょうさく/1874～1943年）

滋賀県生れ。1884年頃京都に出て、蒔絵師鈴木長真の養子となり鈴木表朔を名乗る。後に髹漆に転じ二代木村表齋に師事した。高い評価を評価は得て、1909年伊勢神宮の神宝、11年御大礼に際して高御座、御帳台、万歳幡の塗を担当。16年内務省御用となった。1943年没、69歳。工芸(髹漆、京塗表派)

鈴木表朔・二代（すずき・ひょうさく II/1905～1991年）

1905年生れ。父・表朔の元で漆塗りの技法を学ぶ。1926年聖徳太子奉讃展入選。37年パリ万国博銀賞。74年鈴木表朔作品集出版(光琳社)。85年京都府文化賞功労賞。1991年没、86歳。漆塗、陶芸

鈴木表朔・三代（すずき・ひょうさく III/1932～2013年）

京都生れ。鈴木貞次(二代表朔)の長男。幼い頃から父に塗りの基本を学ぶ。1944年京都市立日吉ヶ丘高等学校漆工科に入学。50年卒業後、東京芸術大学美術学部に入學、53年卒業制作を日展に出品し入選。日本現代工芸美術展、日展などの展覧会に出品し、数多くの入選を果たす。新しい漆技法の開拓にも貪欲に取り組んだ。2013年没、81歳。漆塗、陶芸

鈴木芙蓉（すずき・ふよう/1753～1816年）

長野県生れ。江戸に出て、谷文晁の師渡辺玄対に画を学んだといわれ又多くの文人と交わった。のちに文晁が大成させた江戸南画の一翼を担った。1796年阿波(徳島)藩主蜂須賀氏に召され藩の御用絵師。代表作に98年の「那智山大暴雨景図」(静嘉堂文庫蔵)がある。1816年没、63歳。江戸中・後期の絵師、江戸南画

鈴木雅明（すずき・まさあき/1981年～）

愛知県生れ。2004年名古屋造形芸術大学洋画コースを卒、08年愛知県立芸術大学大学院美術研究科油画専攻修了。05年夢広場はるひ絵画ビエンナーレ大賞、シェル美術賞2005グランプリ受賞。主な個展に、「Artificial Light」(ギャラリーヴァールール、愛知、2022)、「都市の光/机上の光」(神戸元町歩歩琳堂画廊、兵庫、2022)。現代美術、洋画

鈴木美江（すずき・みえ/1932年～）

東京生れ。日本画家望月春江の長女。終戦前後の一時期山梨県甲府市に疎開。高等学校在学中、寺内萬治郎と朝倉撰にデッサンを学んだ。東京藝術大学日本画科に入学、在学中に日本画院に初出品で初入選、卒業直後に日展初出品初入選、さらに卒業翌年の1956年に日本画院展で日本画院賞、日展で《三人》が特選白寿賞を受賞、早熟の女性画家として脚光を浴びた。初期は色面構成による群像、後には岩絵具や箔を塗り重ねる単身像へと変化しながら、一貫して女性をテーマに描き続けている。日本画

鈴木康（すずき・やす/生誕年不詳～）

多摩美術大学本学卒。りゅう画廊版画「期待の新人」大賞展買い上げ賞。1999年ACT大賞。98、2000年春陽展奨励賞。版画

鈴木頼子（すずき・よりこ/1963年～）

津市生れ。1988年日本具象版画展で優秀賞、日本版画協会展に出品。89年創形美術学校版画科(研究科)卒。パリ国立美術学校作品交換展に出品。JACAイラストレーション展に出品。90年期待の新人作家大賞展で優秀賞。91年現代日本美術展で兵庫県立近代美術館賞。92年21世紀版画グランプリ展で特別賞。日本版画協会展で第60回記念賞。版画

鈴木緑園（すずき・りょくえん/1856～1910年）

秋田市生れ。秋田藩士黒川孝之の次男9歳の時、実母の縁戚の鈴木一貫の養子。1877年佐伯製陶所に入り、松寿軒の号で秋田万古焼を制作。生来の器用さに鍛錬を重ね、絵画、書、彫刻なども造詣が深く、抜群の妙技をふるった。81年明治天皇巡幸の際、休憩所となった佐伯家で御前製作を行い、茶器を献上するとうちに浴した。87年頃佐伯窯が廃業となり、巡査となる。91年河辺郡川添村下黒瀬の長谷川七太郎氏の煉瓦窯で秋田焼を再興するが、長く続かず、再び巡査となる。1910年没、54歳。陶芸

鈴木亮平（すずきりょうへい/1914～1999年）

東京生れ。東京美術学校師範科に入学、伊原宇三郎に師事。卒業後、福島県立会津工業学校に赴任、以降市内の高校の教職を勤めながら、県展や日展などに作品を発表しました。人物画のほか、会津の風物や風景を描いた作品を残しています。また戦後間もない頃に

会津若松市出身の洋画家である石山富彦と知り合い、ほぼ毎年「鈴木亮平・石山富彦二人展」が開催するなど、終生交流を持ち続けました。1999年没、85歳。美教、洋画

鈴木照次 (すずた・てるじ/1916～1981年)

佐賀県生れ。1938年東京高等工芸学校卒。稲垣稔次郎に師事し型絵染を学ぶ。56年新匠会会員。59年以降日本伝統工芸展に毎回出品し、62年正会員。64年同会理事、西部支部幹事長を務め、福岡県の染織作家にも、指導的な役割を果たした。大正初期に途絶えた鍋島更紗の研究に取り組み、その技術を復元するのみならず、伝統的な鍋島更紗の文様を現代的な感覚でもって甦らせた。77年芸術選奨文部大臣賞。78年紫綬褒章。1981年没、65歳。染色、鍋島更紗

鈴木景山 (すずむら・けいざん/生没年不詳)

張月樵、後に山本蘭亭の門人。作画期は天保から慶応の頃にかけてで、嘉永のころ古渡町(名古屋市中区)東輪寺門前に住み浮世絵を描く。また山本蘭亭の跡を継ぎ大須観音山門の懸行灯を描いて好評を得た。門人に、後に土佐派に転向した日比野白圭がいる。江戸後期の名古屋の浮世絵師

須田一政 (すだ・いっせい/1940～2019年)

東京生れ。1962年東京総合写真専門学校卒。1967～70年寺山修司主宰の演劇実験室「天井桟敷」の専属カメラマンとして活動。71年フリーランス。76年「風姿花伝」により日本写真協会新人賞。83年写真展「物草拾遺」等により日本写真協会年度賞。85年「日常の断片」等により東川賞国内作家賞。97年写真集「人間の記憶」(クレオ、1996年)により土門拳賞。2001～13年までワークショップ「須田一政塾」を主宰。14年日本写真協会作家賞。2019年没、78歳。2019年没、78歳。写真(引用 富士フィルム)

須田敏夫 (すだ・としお/1931年～)

名古屋市生れ。1951年愛知県立愛知工業高等学校図案科卒。74年朝日カルチャーセンター第一期生となり銅版画の手ほどきを受ける。80年彩歌銅版画集「銀箭」塚本邦雄歌・書肆季節社限定35部刊行。85年日本版画協会会員。版画

須田悦弘 (すだ・よしひろ/1969年～)

山梨県生れ。1992年多摩美術大学グラフィックデザイン科卒。木彫によって生み出される精巧な植物の彫刻作品は、インスタレーションとして展示。93年移動式の展示空間をリヤカーで引き、銀座の道路沿いのパーキングメーターに駐車、展示する「銀座雑草論」でキャリアをスタート。原美術館やアサヒビール大山崎山荘美術館、国立国際美術館、丸亀市猪熊弦一郎現代美術館などで作品を発表。シドニー・ビエンナーレ2012などの国際展のほか、個展「Flower|Non-Flower: Suda Yoshihiro」(毓繡美術館、台湾、2017)などがある。原美術館には常設作品として《此レハ飲水ニ非ズ》(2001)が展示。彫刻、インスタ

須藤宗方 (すどう・むねかた/生没年不詳)

水野年方の門人。1901年山中古洞らとともに烏合会の結成に加わった。創設者14名の一人。1902年烏合会展に作品を発表。大正期に主として木版の口絵を描いた。当時の口絵は錦絵と同様の製作方法で描かれた。13年春陽堂から刊行の雑誌「新小説」第18巻第9号に掲載された「野菊」の口絵を描いたほか、15年刊行の小島孤舟の『さくら草紙』前後終、和田天華の『愛の鬨』前後終及び翌16年刊行の新田静湾の『恋の淵瀬』前後終の口絵を担当。全て樋口隆文館から出版。同門に前述の鍋木清方、竹田敬方、大野静方のほか、荒井寛方、池田蕉園、水野秀方、小山光方らもいた。(引用ウキペディア)浮世絵師、日本画、口絵

須藤康花 (すどう・やすか/1978～2009年)

福島県生れ。2007年多摩美術大学大学院修士課程を修了。02年東京国際ミニプリント・トリエンナーレ入選、第13回ARTBOX大賞展入選、05年東京国際ミニプリント・トリエンナーレ入選、第7回欧米国際公募・ドローイング・版画・デザインコンクール優秀賞(版画「昇華」。デザイン「彼岸」)、国際プリントビエンナーレ「IOSIF ISER」2005入選、国際ビエンナーレ「graveur de lunes」-月の版画-入選、第9回日本・フランス現代美術世界展入選。東京で没、30歳。洋画、版画

須永高広 (すなが・たかひろ/1960年～)

埼玉県生れ。1985年創形美術学校版画家卒。日本版画協会展'85,'88賞候補。87年

「WORK7」展('88,'92)。個展(フタバ画廊)。89年 日本版画協会展(山口源新人賞)。日本版画協会展受賞者展山口源版画展。文化庁現代美術選抜展。90年 第4回 中華民国国際版画ビエンナーレ。ストリートギャラリー'90in いせさき展。92年 第5回 中華民国国際版画ビエンナーレ。94年 個展(ギャラリー21+葉)。ストリートギャラリー'94in いせさき展。日本版画協会準会員。 **版画**

スプツニコ、スプツニ子・尾崎マリサ優美 (Sputniko/1985~)

東京生れ。2006年英国のロンドン大学インペリアル・カレッジ卒(数学とコンピューター・サイエンスの複専攻)。10年英国王立芸術学院(ロイヤル・カレッジ・オブ・アート, RCA)修士課程を修了。テクノロジーによって変化していく人間の在り方や社会を反映させた映像インスタレーション作品を制作。13~17で伊藤穰一所長のマサチューセッツ工科大学(MIT)メディアラボで、Assistant Professor(アシスタント・プロフェッサー)、デザイン・フィクション研究室(Design Fiction Group)創設・主宰。17年東京大学大学院特任准教授(生産技術研究所 RCA-IIS デザインラボ)。19年東京芸術大学美術学部デザイン科准教授。17年世界経済フォーラムのヤング・グローバル・リーダーズとカルチャー・リーダーに選出。20年ダボス会議に登壇。19年 TED フェロー(英語版)に選出。19年 DE&I 推進を掲げて株式会社 Cradle(クレードル)を起業。21年 NFT アートのオークションで作品「ムーンウォークマシン、セレナの一步」が最高額で落札。21年香港最大のデザインフェスティバル「de Tour」に、全長 290 メートルのシルクの布を使用した「Red Silk of Fate -The Shrine」を出品。 **映像インスタ、デザイン、美教**

須磨對水 (すま・たいすい/1968~1955年)

大阪市生れ。生粋の大阪人で義理の父の久保田 桃水に絵を学んだ。京の職画(着物の絵や襦袢など職人としての絵描きのこと)を30年もするなど苦労している。大正から昭和にわたり大阪画壇を代表した画家。1948年大阪府文芸賞(翌年から大阪府芸術賞に名称変更された)を受賞。1955年没、87歳。 **日本画**

住友寛一 (すみとも・かんいち/1896~1956年)

父は男爵の住友吉左衛門友純(住友家 15 代当主)・母は住友吉左衛門友親の長女の満寿、その長男として生まれる。芸術宗教に心惹かれ、事業には興味を示さず、若くして絵画に傾倒したため廃嫡され、1916年分家。分家する前は、'12より寛一の補導係に就任した黒崎

幸吉(後の聖書学者)に面倒を見てもらっており、二人は15一年間渡米している。分家以降は好みの芸術・宗教を愛し、画家・美術品収集家として過ごす。鎌倉の自邸に伊東陶山親子を招いて作陶、また岸田劉生(12-1-11-11)とも交流を持った。親交のあった米津嘉圃は「その生活態度は世俗を超越して芸に遊ぶ、中国文人高士の姿を彷彿させるものがあった。孤独と純粋を愛する人で、美と醜を分かれ真偽を瓢別する非凡な能力の所有者であった」と寛一のことを語っている。'60(S35)旧住友財閥住友家の美術コレクションを保存展示するための機関として財団法人泉屋博古館が設立。収蔵品は、住友吉左衛門友純が収集した中国古代青銅器類の他は、寛一が収集した中国書画が中心である。特に中国の殷、周時代を中心とした青銅器、日本・中国の銅鏡、仏像、明・清時代を中心とした中国書画などが名高い。また鎌倉市の景観重要建築物「村上邸」の茶室は、鎌倉にあった寛一邸から移築したものである。著書に『無為庵製陶図録』(1926)、『南田と石濤』(1953)がある。1956年没、60歳。 **画家、コレクター**

100

墨江武禪 (すみのえ・ぶぜん/1734~1806年)

名は道寛。字は子全。通称は莊藏。別号に心月など。月岡雪嶺に画を学ぶ一方、中国絵画に関心を寄せ、個性的な画風を確立した。1806年没、72歳。 **江戸中期の絵師**

住吉具慶・二代 (すみよし・ぐけい II/1631~1705年)

江戸生れ。1682年京都から江戸に移住し、幕府の奥絵師となる。大和絵を江戸に広めたが、大和絵系統の画家で幕府に召使えられた最初の人で、以後住吉家は幕末期まで代々幕府の御用絵師として仕える。74年妙法院堯恕法親王の許で剃髪して具慶と号し、91年法眼に叙せられた。作品は絵巻物が多く、72年作の「管崎八幡宮縁起」や「洛中洛外図」、父との合作の「東照宮縁起絵巻」などがある。1705年没、74歳。 **江戸前期の大和絵の絵師**

伝 住吉具慶 (すみよし・ぐけい I/1612~1705年)

京都生れ。江戸前期の住吉派の画家。住吉派の祖である如慶の嫡男。延宝2年(1674)剃髪して法名を具慶とし法橋に叙せられる。天和3年(1683)幕府御用絵師となり、貞享2年(1685)には奥絵師となり、住吉派興隆の基礎を築く。元禄2年(1689)には法眼に叙せられる。父の画風を守り、多くの種寺社縁起絵巻や画帖を描いた。1705年没、93歳。 **江戸前期の住吉派の絵師**

住吉如慶 初代(すみよし・じょけい I/1599～1670年)

堺で土佐光吉、光則父子に学んだ後、京都に移る。1654年土佐光起と内裏障壁画をかく。61年薙髪して如慶と名のり、また法眼に叙せられる。後西天皇の勅を奉じて住吉絵所を再興し、62住吉家をたてた(住吉派の祖は鎌倉時代の住吉慶恩と伝えられるが末流がなく後西天皇の勅命で住吉姓となる)。天海僧正の取持ちで家康に拝謁、東福門院の御用を勤めるなど、江戸にやまと絵を伝える。作品には「堀河夜討絵巻」のほか大小の絵巻物がある。1670年没、72歳。江戸前期の大和絵の絵師(土佐様式)

住吉内記・弘貫 (すみよし・ないき・ひろつら/1793～1863年)

江戸生れ。住吉広行の次男。住吉派。兄広尚(ひろなお)の死後家督をついで幕府の御用絵師となる。土佐派の古典をいかし、紫宸殿(しんでん)の賢聖障子(けんじょうのしょうじ)をえかく。技巧の卓抜なことにより狩野家同様旗本に列された。1863年没、71歳。江戸後期の住吉派の絵師

住吉廣一・九代 (すみよし・ひろいち IX/1866～1906年)

廣賢の子。1906年没、39歳。住吉派の画家、日本画

住吉広賢・八代 (すみよし・ひろかた VIII/1835～1883年)

1835年生れ。住吉派の7代住吉弘貫(ひろつら)の養子となる。狩野友信らとともに明治78年来日したフェノロサの日本美術研究に協力。1883年没、49歳。江戸後期-明治期の住吉派の絵師

住吉広賢 (すみよし・ひろかた/1835～1883年)

1835年生れ。住吉派の7代住吉弘貫(ひろつら)の養子となる。狩野友信らとともに明治78年来日したフェノロサの日本美術研究に協力。1883年没、49歳。江戸後期-明治の絵師

住吉弘貫 (すみよし・ひろつら/1793～1863年)

江戸生れ。住吉広行の次男。住吉派。兄広尚(ひろなお)の死後家督をついで幕府の御用絵師となる。土佐派の古典をいかし、紫宸殿(しんでん)の賢聖障子(けんじょうのしょうじ)をえかく。技巧の卓抜なことにより狩野家同様旗本に列された。1863年没、71歳。江戸後期の住吉派の絵師

じ)をえかく。技巧の卓抜なことにより狩野家同様旗本に列された。1863年没、71歳。江戸後期の住吉派の絵師

住吉広尚・六代 (すみよし・ひろなお VI/1781～1828年)

1781年生れ。住吉広行の長男。住吉派。父の跡をついで幕府の御用絵師となる。和画(大和絵)の鑑定にすぐれていた。1828年没、48歳。江戸後期の住吉派の絵師

住吉廣道 (すみよし・ひろみち/1599～1670年)

大阪生れ。はじめ土佐光陳と名乗った、土佐光吉の門人であったが、1661年に剃髪して如慶の号を賜り、さらに後西天皇の命で、鎌倉中期の画家住吉慶恩の画を復興するために姓を住吉と改め、のち法眼を叙任。穏やかで繊細な土佐派の画風を踏襲しながらも親しみやすい人物描写や漢画的な表現を加えた画風を特徴として、子の具慶(住吉廣澄)が後を次いで住吉派を確固なものとした。1670年没、71歳。江戸前期の土佐派の絵師

住吉広守・四代 (すみよし・ひろもり/1705～1777年)

江戸生れ。住吉広保の次男。住吉具慶の孫。住吉派。1731年幕府の御用絵師となる。朝鮮国王へおくる屏風などを制作。子がなく、弟子の板谷慶舟の子(広行)を養子とした。1777年没、73歳。江戸中期の住吉派の絵師

住吉廣保・三代 (すみよし・ひろやす/1666～1750年)

具慶の子。法名は至石。幕府の御用絵師となる。1750年没、82歳。江戸中期の絵師

住吉広行・内記 (すみよし・ひろゆき/1755～1811年)

1755年生れ。住吉派の板谷慶舟の長男。住吉広守の養子となり、1781年幕府の御用絵師となる。寛政の内裏新造にあたって紫宸殿(しんでん)の賢聖障子(けんじょうのしょうじ)などをえかいた。1811年没、57歳。江戸中期-後期の絵師

磨墨静量 (するすみ・せいりょう/1925～2001年)

台北生れ。旧制五高理科甲類(現・熊本大学)を卒業後、国立福岡少年院に法務教官として勤務。独学で美術を学び、昭和20年代後半には西日本美術展に出品を重ね、1955年ら

自由美術展にも3年連続入選。57年「九州派」の結成に深く関り、「グループ Q18 人展」に出品。59年「グループ西日本」を立ち上げて、「九州派」から離脱。その後、グループ西日本展（西日本美術協会展）を中心に作品発表。2001年没、76歳。洋画、九州派

諏訪 敦（すわ・あつし/1967年～）

北海道生れ。1994～95年文化庁派遣芸術家在外研修員マドリッドに在住、エントリーした第5回バルセロナ財団主催国際絵画コンクールで大賞。東京藝術大学、東北芸術工科大学、広島市立大学などで、非常勤講師や准教授。99年に暗黒舞踏の先駆者、大野一雄と大野慶人の親子を長期取材したシリーズ作品の制作。2013～18年まで、国吉康雄作品模写プロジェクト代表（公益財団法人 福武教育文化振興財団助成）。13年より財団法人山本美香記念財団評議員。2015年 光村図書出版 高等学校美術教科書 平成27年度新版『美術3』にインタビューと図版が収録。精密画を描く。18年より 武蔵野美術大学造形学部油絵学科教授。洋画、美教

諏訪 鷺湖（すわ・がこ/1764～1849年）

紀州 通称は兼次郎。岡本小平太道率の二男に生まれ、江戸の諏訪新左衛門親次の養子となり、明和8年に跡を継いだ。武官の職にあつて画をよくした。10代藩主・徳川治宝に同行して紀州へ行った際、熊野を遊歴し、那智滝を模写した。また、公命で富士山に登り、その真景を写生して藩主に献上した。1849年没、85歳。江戸後期の絵師

120

せ

関口雄輝（せいきぐち・ゆうき/1923～2008年）

埼玉県生れ。洋画家・古川弘に指導を受ける。東京美術学校で日本画を学ぶ。復学し同校教授の安田靉彦に指導を受けた。東山魁夷に師事。日本美術協会総裁賞。52～54年

文部省給費留学生としての渡仏。冬の北海道の風景を描いた作品で好評を博した。79年、83年日展で特選。98年と2004年には京都の永観堂・禅林寺のための障壁画を制作、奉納した。2005年札幌に関口雄輝記念美術館が開館。2008年没、85歳。日本画、個人美術館

西湖 せいこ/1859～1931年）

長崎県生れ。五島若松の極楽寺の善亮の次男。日本画を京都で幸野謀嶺に学んだ。東京の伝通院で仏教を学んだあと、北海道や台湾を回り、岩手地方では住職を勤めた。1918年兄の死の19年五島若松に戻り、同寺の第17世の住職。作品は、山水、花卉などとともに仏画を描き、仏画に特に長じていた。1931年没、72歳。日本画、仏画

西 悟（Author:・SEIGO/あーさー・せいご/1955年～）

1955年生れ。アカデミーオブアートカレッジ絵画学科修士終了。カリフォルニア美術大学卒。青山学院大学経済学部中退。東京日本橋のギャラリー砂翁、高知のギャラリーファウストで作品発表、2022年高校美術教師を終了。アートスタジオセイゴ絵画教室は継続開校。洋画、美教

清風与平・清風與平（せいふう・よへい/1850～1914年）

大阪の田能村直入に師事、日本画、南画を学ぶ。その後、京都の2代清風与平の弟子となり陶芸に転向。1878年3代与平を襲名する。初代、2代が培ってきた伝統京焼の技法を研鑽。今までの作域にはなかった青磁、白磁の透かし彫りや「釉下彩」技法を用いた近代陶芸を展開。93年帝室技芸員に就任。95年には緑綬褒章を受章した。京都陶磁器協会組合長。1914年没、64歳。陶芸

瀬川康男（せがわ・やすお/1932～2010年）

愛知県生れ。福音館書店のこどものもの仕事を皮切りに、多彩なタブロー、版画、スケッチ、絵本を制作。初期の絵本は松谷みよ子、松野正子などの文に挿絵をつける形で作成。1975年以降は文・絵ともに自作の絵本も制作。その仕事は、童画の枠を超えた現代的な「児童出版美術」の域に達し、BIB（ブラチスラヴァ絵本原画展）グランプリや国内の出版文化賞、国内外で高い評価を獲得。2010年没、78歳。洋画、版画、絵本、挿絵

関合正明 (せきあい・まさあき/1912～2004年)

東京生れ。川端画学校で学んだ。27歳渡中国。満州国の文教部嘱託画家として働きながら満州国主催美術展覧会で特賞。「黄土坡美術協会」を結成。1947年から2年間のみ国画会に参加。後は完全に画壇をほたれ、挿絵や装丁の仕事のかたわら個展での作品発表と句集・随筆集の執筆に専らし、そしむ独行の画家・文人として活動。2004年没、92歳。2007年神奈川県立近代美術館で関合正明展開催。**洋画、水彩、パステル画、素描、挿絵、装丁、写真**

関岡功夫 (せきおか・いさお/1924～没年不詳)

1924年生れ。1945年関岡仙太郎氏(初代扇令)について修業。60年以後、二代目扇令を継いだ。江戸時代から続く摺師の系統、日本橋石町松村系の流れを汲む木版画摺師。伝統的な浮世絵の覆刻だけでなく、現代版画の創作にも工夫を凝らし、精力的に取り組んだ。16色の色を使って順序摺している。84年区指定無形文化財保持者に認定。弟子の川島秀勝さん(区指定無形文化財保持者)が技術を継承。子息の関岡裕介さん(区登録無形文化財保持者)が木版画摺師として三代目扇令を継いでいる。**木版画摺師、現代版画**

関源司 (せきげんじ/1939年～)

新潟県生れ。1963年東京芸術大学美術学部工芸科卒。70年改組日展入選、70年現代工芸美術展で大賞。71年全国県展選抜展文部大臣賞、現代工芸美術展記念賞、77年彫刻の森美術館日本の現代工芸展大賞、88年サントリー美術館大賞展'88出品。67年より金沢美術工芸大学で指導。同大名誉教授。**金工、美教**

関田華亭 (せきた・かてい/1866～1919年)

水戸市生れ。晩年の野口幽谷に師事。日本美術協会展などで受賞を重ね、日本画会評議員。文展開設では旧派の正派同志会の結成に評議員として参加。渡辺華山、椿椿山の遺風を慕い、花鳥画を得意とする。1919年没、53歳。**日本画**

関税 (せき・ちから/1899～1989年)

茨城県生れ。1909年茨城師範学校卒、教職の道に進む。熊岡美彦に師事。33年第1回東光会展で入選(以後東光会展に出品)、33年回帝展で入選。50年水戸市立上中妻小学

校を退職。水戸で没、90歳。**美教、洋画**

石田齋 (せき・でんさい/生没年不詳)

京都の人。玄々堂の門人。堅田落雁、粟津晴嵐、貴船社など京都近郊の名所をえがいた銅版画をのこしている。**幕末-明治時代の版画家**

関根将雄 (せきね・まさお/1920～2013年)

埼玉県生れ。1941年東京美術学校日本画科卒。同年研究科在学中に応召。46年復員後伊東深水に師事。46年日展入選。54年日本美術協会展で受賞。55、66年日展、新日展で特選・白寿賞。72年日展委嘱を辞任し、以後無所属。81年埼玉県教育功労表彰。83年埼玉県文化功労賞。87年文部大臣地域文化功労賞。さいたま市で没、93歳。**日本画**

関根雲停 (せきね・うんてい/1804～1877年)

江戸生れ。大岡雲峰に弟子入りして絵を学び、花鳥図を得意とした。服部雪斎、中島仰山らと共に活躍した。「写真」の枠を超える芸術的な表現力によって描かれている。本草書は、師雲峰との共作「草木錦葉集」や「草木奇品家雅見」がある。その後、博物学研究グループ「蕨籟会」の絵師。雲停の博物画は、「博物館獣譜」「博物館魚譜」「博物館禽譜」「博物館虫譜」が東京国立博物館に収蔵されている。植物学者牧野富太郎は、イギリスのボタニカルアート第一人者としてW.H.フィッチを賞賛、雲停を「東洋のフィッチ」として敬意を払い、その植物画を蒐集し切り貼りされることなく高知県立牧野植物園に収蔵。1877年没、73歳。**博物画**

関野晃平 (せきの・こうへい/1943～2014年)

神奈川県生れ。多摩美術大学でデザインを学び、重要無形文化財保持者の木・漆工芸家黒田辰秋に入門し、12年間、木地作りから髹漆、加飾までの全工程を単独で行う技術を修得。素材を徹底的に生かし堅牢で美しい実用の器物を制作した。作家としてより職人としての道を歩み、銘や箱書は記さず作品は個展等で発表。平成27年には藤沢市民ギャラリーで「第14回藤沢市30日美術館 漆に生きる 関野晃平」が開催された。2014年没、71歳。**漆工芸**

關 敏 (せき・びん/1930～2023年)

東京生れ。1951年東京都立立川高校卒。東京芸術大学彫刻科に入学して、平櫛田中、菊池一雄の教室で学ぶ。同期に江口週、湯原和夫、らがいた。55年東京芸術大学彫刻科卒。57～61年彫刻3人展(江口週、湯原和夫、関敏)を開催。63～67年秋山画廊で個展。67年「札幌建設の地」記念碑を制作。72年剣持勇墓碑を制作。86年インド旅行で古代彫刻に関心を持つ。89年中国旅行に際して書、篆刻の勉強をする。2023年没、93歳。**彫刻、篆刻**

瀬島好正 (せじま・よしまさ/1913～2000年)

北海道生れ。新制作協会、神川県展で活躍、多摩美術学校教授。1983年銀座自由ヶ岡画廊で個展。平塚市美術館作品所蔵。2000年没、87歳。**洋画(抽象)、美教**

雪窓普明 (せつそう・ふみん/Xue-chuang Pu-ming/生没年不詳)

中国、元の禅僧画家。松江(上海)の人。雲巖寺、承天寺などの寺を歴住した禅僧、余技に水墨で没骨(もっこつ)技法による“らん”を描き名声を得た。その作品は日本に多く伝わり、室町時代の水墨画家、ことに玉えん梵芳(ぎょくえんぼんほう)らに多大の影響を与えた。遺品としては1343年の『蘭図』4幅(宮内庁三の丸尚蔵館)が著名。著書に『画蘭筆法記』があったが散失。**画僧、水墨**

瀬戸 照 (せと・あきら/1951年～)

神奈川県生れ。1970年神奈川県立小田原城北工業高校デザイン科卒。71年美学校細密画工房にて立石鐵臣氏に師事。2003年「スーパーリアルイラストレーション展」G8ギャラリー東京。2014年「本物を超えて展」福井市美術館。以後石や植物などの細密画を描き続ける。**洋画、細密画**

瀬戸 浩 (せと・ひろし/1941～1994年)

徳島市生れ。1964年京都市立芸術大学工芸科陶磁器専攻科卒。65年栃木県益子に築窯。72～73年インディアナ大学、南コロラド州立大学講師として招聴され渡米。74年以降、ストライプの文様を用いて国内外の個展や公募展(招待作家)に出品。1994年没、53歳。**陶芸、工芸**

瀬戸正人 (せと・まさと/1953年～)

タイ生れ。東京写真専門学校卒、深瀬昌久のアシスタント、1981年フリーランスの写真家として独立。87年新宿に山内道雄とギャラリーPLACE M開設。95、96年木村伊兵衛写真賞、自伝エッセイ『トオイと正人』(99)で新潮学芸賞。作品集に「バンコク、ハノイ1982-1987」(90)、台湾の街道筋に立ち並ぶ電飾を施したガラスの箱の中で、ピンロウという嗜好品を売る女たちを捉えた「binran」(08)等がある。木村伊兵衛写真賞の審査員を務めるなど、写真界で幅広い活動を続けている。清里フォトアートミュージアム副館長。**写真**

銭亀賢治 (ぜにがめ・けんじ/1938年～)

加賀市生れ。1958年金沢美術工芸短期大学彫刻科卒。67年日展入選、73、78年特選。一貫して女性像を制作し、若い女性の姿態を見事な均衡の内にとらえて、女性らしい情感に満ちた仕草や、伸びやかな生命を感じさせる。日展会員。**彫刻**

瀬畑 亮 (せはた・りょう/1974年～)

東京造形大学造形学部美術学科卒業。セロハンテープを使って造形物や絵画やインスタレーション等、様々な芸術表現を行っている。ニチバン株式会社と専属契約を結ぶ世界で唯一のセロテープを用いるアート作家。創作活動において、ニチバン株式会社のセロテープを利用する。これはニチバン社公認の「セロテープアートの第一人者」でもある。ニチバン株式会社と専属作家契約を結んでいる瀬畑だけが発案者として「セロテープアート」の名称を使用することを認められている。**現代美術、立体、インスタ、セロハン作家**

瀬辺佳子 (せべ・よしこ/1945年～)

愛知県生れ。1970年東京芸術大学美術学部彫刻科大学院修了。71年新制作協会展、以後毎年出品(東京都美術館)、76～85年グループ「伍の会」出品(文芸春秋画廊)。85、90、97年個展(みゆき画廊)。2000年具象彫刻がおもしろい展(朝日アートギャラリー)。**彫刻**

善 円・善慶 (ぜんえん/1197年～没年不詳)

作風は当時流行の慶派との関係を見逃すことができないが、やや趣を異にした穏やかさをもつ。1221年の十一面観音立像(奈良国立博物館)、1223～26年ごろの地藏菩薩(ぼさつ)立像

(堀口家旧蔵)、25年京都・海住山寺でつくった東大寺指図(さしず)堂釈迦如来坐像、叡尊(えいぞん)の発願による47年西大寺愛染明王坐像。これらは50センチメートルにも満たぬ小像だが、細緻(さいち)な技巧をみせている。善円、善慶、善春ら善派の仏師たちは、西大寺関係の仕事が多い。**鎌倉中期の仏師**

善慶・善円 (ぜんけい/1197~1258年)

1197年生れ。奈良西大寺の叡尊(えいぞん)に重用される。建長元年銘の西大寺の清凉寺式釈迦(しゃか)如来立像、奈良般若(はんにゃ)寺の文殊菩薩(もんじゅぼさつ)像、鎌倉極楽寺の釈迦如来坐像などを制作。従来善円の子(もしくは弟子)とされてきたが、1983年善円と生年が一致することがわかり、両者の同一人説が有力となった。1258年没、62歳。**鎌倉時代の仏師**

千家元麿 (せんげ・もとまろ/1888~1948年)

東京生れ。府立第四中学校(現・都立戸山高等学校)中退。父は男爵千家尊福、母は画家小川梅崖(本名・豊)。1913年頃から武者小路実篤をはじめ(白樺派)の作家と交わる。18年第一詩集『自分は見た』を刊行。自然や庶民の生活をもとに平明な口語による人道主義的な作品を発表した。ほか詩集『虹』戯曲集『青い枝』など。1948年没、59歳。**詩人、洋画**

仙石翠淵 (せんごく・すいえん/1801~1885年)

長野県生れ。独学で画を学び、美術工芸にも優れていた。1837年自作の硯箱を諏訪高島藩主に献上。40年埴原村村の秋葉神社拜殿の天井画を描いた。49年、49歳の時に旅の絵師・伊勢の碧鳳から本格的な絵の手ほどきを受けた。57年内田村牛伏寺の欄間に墨絵で「雲龍」「松鶴」「山水」を描いた。67年「榎原村図書館」を藩主に献上、帯刀を許可された。維新後も「青緑楼閣山水図」「開智学校図」「聖駕お小休図」「農業の図」「養蚕の図」などを描いた。1885年没、85歳。**日本画、天井画、墨絵**

千住博 (せんじゅ・ひろし/1958年~)

東京生れ。慶應義塾普通部・慶應義塾高等学校を経て、2浪後、1982年東京芸術大学美術学部絵画科日本画専攻卒。87、同大学院博士課程修了。94年MOA岡田茂吉賞、絵画部門優秀賞。創立100周年のヴェネツィア・ビエンナーレで優秀賞。2000年河北倫明賞。

2002年大徳寺聚光院別院襖絵完成。現在、京都造形芸術大学学長・同国際芸術研究センター所長、同付属康耀堂美術館館長。**日本画、ウィーン幻想派、大学長**

善春 (ぜんしゅん/生没年不詳)

鎌倉時代に大和国(現在の奈良県)で活躍した善派の仏師。善慶の子。1288年元興寺の聖徳太子像(現存、重要文化財)を造像。1276年西大寺の大黒天像(現存、重要文化財)を造像。80年西大寺の興正菩薩叡尊像(現存、重要文化財)を造像。興正菩薩像は叡尊80歳の寿像(像主の生前に作った肖像のことで、迫真の写実に成功した面貌、量感ある体軀、そこに刻まれた力強く動きのある衣文によって、老いてなお活力に富む像主の彫出に成功しており、鎌倉後期彫刻の中で傑出した作品である。主に大和の西大寺で叡尊に重用され法橋となった。西大寺の興正菩薩叡尊像は鎌倉時代の奈良仏師の象徴。**彫刻、仏師**

仙蝶斎素峯 (せんちょうさい・そほう/生没年不詳)

筑前生れ。出来町竜蔵院の住職。多芸多能の人で、筑前の狩野派・眠蝶斎耕景の門人とされる。旧柳河藩主の立花家に作品が4点伝わっていることから、藩の御用絵師であった可能性は高い。福厳寺の板戸に描かれた人物密画は素峯の筆とされる。活動期は、北島勝永と同時期の江戸後期と思われる。弟子に富次郎(南汀)がいる。**江戸後期の画僧**

そ

宋紫岩 (そう・しがん/生誕年不詳~1760年)

浙江省の人。1758年長崎に渡来。沈南蘋(しん・なんぴん)の弟子といわれ、西洋画風をとり入れた細密な花鳥画を得意とした。宋紫石は弟子。1760年長崎で没。**清、中国の絵師**

宋 紫岡 (そう・しこう/1781~1850年)

1781年生れ。宋紫山の子。宋紫石の孫。江戸の人。家代々の画業をつぎ、父祖の画風をつたえた。1850年没。70歳。江戸後期の絵師

宋 紫山 (そう・しざん/1733~1806年)

1733年生れ。宋紫石の子。南蘋派。絵を紫石にまなぶ。花鳥山水を得意とした。1806年没、73歳。江戸中期-後期の絵師

宋 紫石 (そう・しせき/1715~1786年)

江戸生れ。長崎で熊代熊斐に師事、沈南蘋の画法を修め、清人画家宋紫岩に画法を学び、江戸に帰り、宋紫石を名乗る。沈南蘋の画風を江戸で広め当時の画壇に大きな影響を与えた。国立科学博物館の展示。写真左の開かれている本が巻之五。1976年平賀源内『物類品隲』(ぶつるいひんしつ)全6巻の内第5巻「産物図会」の挿図を手がけ、『ヨンストン動物図譜』を模写している。山水・花卉に優れる。江戸の人。1786年没、72歳。江戸中期-後期の絵師、南画、

曾我紹仙 (そが・しょうせん/1521~1555年?)

飛驒生れ。北陸越前国飛驒の朝倉氏に仕えた秀文の弟子式部蛇足(曾我宗丈)の子といわれるのが、一般的な説であり、正確な出自は不明。秀文様式の豪放な筆使いを修得する一方で、南宋時代の画家牧溪の画を加味して後年の曾我派の基礎を築いた画家と言われており、子の曾我直庵に受け継がれていると推測されている。1555年没? 34歳? 安土桃山時代の絵師

曾我蛇足 (そが・じゃそく/生没年不詳)

不明な点が多い。一説には室町末期の画家で、1491年京都・大徳寺真珠庵の襖絵「四季山水図・四季花鳥図・滄墨(はつぼく)山水図」を描いたとされるが、近年の研究では、「蛇足」はある特定の画人をさすものではなく、曾我家の代々の画家がその画業を継承したことを意味する別号(軒号)であったとの見方をしている。初代兵部墨溪(ぼつけい)以下、式部宗丈(そうじょう)、兵部紹仙(しょうせん)、宗誉(そうよ)と、この号は受け継がれた。前記の真珠庵襖絵を制作したのはこのうちの2代式部(夫泉)宗丈で、越前(えちぜん)(福井県)の朝倉家の家臣

の出である初代墨溪を父とし、朝倉家と一休宗純(そうじゅん)との深い関係から、一休の塔所である真珠庵の襖絵を描いたと考えられる。墨溪の師、周文の様式に学びつつも、周文流にはみられない枯淡な画趣に特徴がある。なお「赤蠅(せきじょう)」印をもつ『山水図』(群馬県立近代美術館)が数点伝わり、作風から真珠庵襖絵の作者と同一とみられている。室町末期の絵師

曾我紹仙 (そが・しょうせん/1521~1555年?)

飛驒生れ。北陸越前国飛驒の朝倉氏に仕えた秀文の弟子式部蛇足(曾我宗丈)の子といわれるのが、一般的な説であり、正確な出自は不明。秀文様式の豪放な筆使いを修得する一方で、南宋時代の画家牧溪の画を加味して後年の曾我派の基礎を築いた画家と言われており、子の曾我直庵に受け継がれていると推測されている。1555年没?、34歳? 安土桃山時代の絵師

曾我宗誉 (そが・そうよ/生没年不詳)

「本朝画史」は曾我紹仙(しょうせん)の子とするが、夫泉宗丈(ふせん-そうじょう)の別号にも宗誉がありあきらかでない。最近の研究では曾我派は始祖兵部墨溪(ひょうぶ-ぼつけい)、2代夫泉宗丈、3代兵部紹仙とつながり、4代目が宗誉とされる。またこの歴代が曾我蛇足(じゃそく)を名のつたともいわれる。室町時代の絵師

曾我直庵 (そが・ちよくあん/生没年不詳)

堺曾我派の祖・曾我直菴の子とされる。堺曾我派は、朝倉家の庇護を受けた越前の曾我派を前身とし、天正期(1573~92)頃から大阪の堺を中心に活躍した。直菴は、等伯、友松に伍す覇気をもった直菴の画風に比べて、古格を遵守しながらも柔和な表現を特色とする。直菴の後を受けて人物画や花鳥画も遺しているが、作品の大半が鷲・鷹・隼などの猛禽を描いた鷲鳥図であり、画鷹の名手として声名を高めた。作画期は17世紀前半から半ば頃。安土桃山時代の絵師?

曾我直庵 (そが・ちよくあん/生没年不詳)

明から来朝した秀文(越前朝倉氏の家臣曾我氏を継ぐ)の弟子とされる。式部蛇足に画を学び、豪放な筆使いで対象物を抽象化させた秀文画を修得。その後、独自に元・明の画

風を研鑽したとされているが、他説では曾我紹仙の子であると言う説もある(式部蛇足の子が曾我紹仙であるとも言われる)。越前朝倉氏が滅びると堺に移住して、曾我派を立て直した画家と言われているが、正確な歴はあまり多くない。代表作に「涅槃図(重文指定)」、「鷹之図屏風(桃山時代)」など。**安土桃山時代の絵師？**

十河雅典 (そごう・まさのり/1943年～)

東京生れ。1969年東京芸術大学美術学部工芸科ビジュアルデザイン専攻卒。73年マドリッドに滞在(翌年帰国)。75年茨城大学助手(93年教授、2009年退官)。80年NACC展でグランプリ受賞。82年安井賞展に出品。83年現代日本美術展に出品。93～94年文部省在外研究員としてローマに滞在。**洋画、美教**

菌部雄作 (そのべ・ゆうさく/1934年～)

群馬県生れ。多摩美術大学を卒業。国際青年美術家展、現代日本美術選抜展、ウィーン国際版画ビエンナーレ展、リュブリアナ国際版画ビエンナーレ展、クラコフ国際版画ビエンナーレ展審査委員賞。ドローイングアクティヴィティ展(ポーランド)、ワールドプリント3展(USA)、インターグラフィック'84(東ベルリン)、ART OF TODAY '84(ブタペスト)等々に出品。**版画**

園山晴巳 (そのやま・はるみ/1950年～)

福岡県生れ。1972年東京造形大学絵画科卒。76年日本版画協会版画展で新人賞。76～78年文化庁在外芸術家研修員として欧米に滞在。79年個展(養清堂画廊、東京)開催。81年リュブリアナ国際版画ビエンナーレ(スロヴェニア)に出品(83年・85年・87年・89年)。85年和歌山版画ビエンナーレで佳作賞(87年優秀賞、89年買上賞)。**版画**

空 充秋 (そら・みつあき/1933年～)

広島県生れ。1957年多摩美術大学卒。63～64年メキシコに滞在。64年東京オリンピックの選手村に、石彫「石のスピーカー」を制作。84年呉市美術館に作品設置。86年みづとみらい21彫刻展で優秀賞・神戸須磨離宮公園現代彫刻展で大賞。88年田中原悌二郎賞。63～64年メキシコに滞在。**彫刻、版画**

孫 雅由 (そん・あーゆ/1949～2002年)

大阪生れ。在日韓国人二世。上京して高山登の教えを受け、その後、多摩美術大学に入学するが自主退学。自らのパフォーマンスを写真やムービーで発表していたが、1970年代後半から本格的に平面作品を制作、当初は銅版画や素描を中心に、のちには油彩画やアクリル画も発表、線へのこだわりを一貫して見せた。後年は人智学の研究にも取り組み、思索的かつ感覚的な独自の絵画世界を展開させた。2002年没、53歳。**パフォーマンス、写真、版画、洋画**

15

た

田井 淳 (たい・あつし/1953年～)

金沢市生れ。76年金沢美術工芸大学油絵科卒。78年創形美術学校造形研究科修了。独立展入選。独立展で1993年野口賞、94年独立賞。96年会員。北陸における独立出品者の中心となって活動。2009年特集「田井淳展-無限の中へ」開催(石川県美)。12年「田井淳展-40年の歩み」開催(石川県しいのき迎賓館)。13年現代美術展美術文化大賞。**洋画**

大雅堂清亮・大雅堂三代 (たいがどう・せいりょう III/1807～1869年)

大雅堂三代目。二代目堂守の月峰の息子。1869年没、62歳。**江戸後期の絵師、画僧**

平良美樹 (たいら・みき/1984年～)

1984年生れ。東京学芸大学書道専攻を卒業後、日本の昔話をテーマに書を用いた立体作品を制作。2006年のGEISA#10で銀賞。国内外のグループ展、アートフェアで作品を発表。地方に伝わる口承文芸をもとに作品制作。麦茶で染められ、縫い合わされた硬い麻布が登場人物となって立ち上がり、その表面には物語が漢字と片仮名でぎっしりと書き込まれます。布の質感と文字の筆触が古色を漂わせる一方で、抽象化された作品のフォルムはどこか

滑稽で、独特のユーモアをもたらします。**立体、布に書**

田浦隆透 (たうら・たかどう/1934年～)

金沢市生れ。1956年金沢大学卒。70年一陽会展初出品入選。73年新制作協会展に入選。76年現代美術家協会展に入選・新人賞。以後同会に出品を続け、日本海造型会議、北陸中日美術展、個展等で発表。**洋画、現代美術**

田岡春径 (たおか・しゅんけい/1887～1969年)

徳島県生れ。1917年小室翠雲に師事。大東南画院同人、日本美術協会委員。日本南画院理事をつとめる。千葉稲毛に移住してからは郷土の美術振興に尽力、春葉会を主宰。1969年没、82歳。**日本画、南画**

高井研一郎 (たかい・けんいちろう/1937～2016年)

長崎県生れ。20歳のとき、手塚治虫の薦めで漫画家を目指し上京。1956年「リコちゃん」『少女』でデビュー。手塚治虫、赤塚不二夫のアシスタント。60年代の赤塚の仕事への貢献度はたかく、キャラクターの造形化をはじめ、下書き線のきれいなことは評判。86年林律雄原作で「総務部総務課山口六平太」『ビッグコミック』の連載を開始、人気を獲得。単行本で80巻(731話)に及んだ「プロゴルファー織部金次郎」『ビッグコミックスペリオール』。「ソーギ屋ケンちゃん」家業をもち立てていく男を描いた。映画「男はつらいよ」の漫画版を林律雄の脚色で描いた。2016年没、79歳。**漫画**

高岡何有 (たかおか・かよう/1914～1989年)

徳島県生れ。1938年京都市立絵画専門学校本科卒。同校在学中に、山口華揚、中村大三郎に師事。加藤一雄に美学を学び、大きな影響を受けた。39年徳島で林鼓浪らがつくっていた日本画グループ金泥会に参加。44年に県立三好高等女学校教諭となり、72年に県立徳島工業高等学校を退職するまで、県内各地で教壇に立った。徳島新聞文芸欄の挿画の連載などでも活躍した。1989年没、75歳。**日本画、挿絵、美教**

鷹尾俊一 (たかお・しゅんいち/1950年～)

熊本県生れ。1973年日本大学芸術学部彫刻科中退。81年和会展優秀賞。83神戸具象

彫刻大賞展優秀賞。84年高村光太郎大賞展特別優秀賞。89年「秘めたフォルムを刻む」鷹尾俊一彫刻展(池袋西武アートフォーラム)。94年鷹尾俊一彫刻展、日動画廊。96年 TUES 鷹尾俊一展、美ヶ原光源美術館。**彫刻**

高尾みつ (たかお・みつ/生誕年不詳～)

仙台市生れ。1951年女子美術大学芸術学部洋画科に入学。桜井悦、中山巍、森田元子に師事。学外では大沢昌助に終生師事。52年二科展で入選。55年同大学卒、56年同大学の助手、専任講師、助教授、教授。61年女流画家協会会員。65年二科展で特選。68年女流画家協会展にて女流画家協会賞及びH夫人賞、委員。76年二科会退会。85年女子美術大学の海外研究員としてアメリカ、カナダ、ヨーロッパなどの美術学校を回る。2006年青梅市立美術館にて「高尾みつ展」開催。女子美術大学名誉教授。**洋画、美教**

高木岩義 (たかぎ・いわよし/1939年～)

大分県生れ。1962年大分大学学芸学部卒。児玉成弘の勧めで油彩画の制作を始め、73年行動美術協会展に入選。以後、同展を主舞台に活動を展開。94年行動美術協会展で会友賞、行動美術協会会員。デカルコマニーを駆使した、鮮烈な色彩の抽象画家。**洋画**

高岸昇 (たかぎし・のぼる/1934年～2000年)

名古屋市長生れ。東京芸術大学油画科卒。63、64年シュル美術賞展佳作賞。78年文化庁芸術家在外研究員でウィーン留学、フランドル、ドイツの古典技法を学ぶ。安井賞展、国際形象展などの出品。98年調布市文化会館で回顧展。新制作協会会員。2000年没、66歳。**洋画、イラスト、ウィーン幻想派**

高岸まなぶ (たかぎし・まなぶ/1949年～)

東京生れ。1976年日大芸術学部絵画科卒。89年春陽会へ初出品以来各賞を受賞。91年オギサカ大賞展優秀賞、ジャパン大賞展佳作賞。95年春陽会賞。97年安田火災海上美術財団奨励賞。97年春陽会会員。99年せんたあ画廊にて個展。2005年春陽会で中川一政賞。**洋画**

高木清次 (たかぎ・せいじ/1948年～)

陶芸家高木二郎が父、九州産業大学芸術学部写真学科卒業後、1975年日本現代工芸

展、改組日展に入選。2002年日展で特選。**陶芸**

高木雪居（たかぎ・せつきよ/生没年不詳）

尾州藩重臣。文武両道に秀でる。行動的な性格で、藩の世継ぎに関する陳述書で幕府より幽閉されたり、若い志士たちを集めて「金鉄堂」を組織し、明治維新に活躍するなどした。和歌や絵にも気力あふれる作が多く、はじめ谷文晁に問い、のちに竹洞に学び、本格的な作風、技術も進んで取り入れた。**江戸後期-明治期の絵師**

高木長葉（たかぎ・ちようよう/1887～1937年）

三重県生れ。1919年より個展に依り作品を発表し、20年同志と共に蒼空邦画会を結成、日本画の創造運動に従った。29年銀座資生堂に意匠部長として入社し、翌年同社より広告美術の研究を目的として欧洲へ出張し、35年退社。1937年没、50歳。**日本画、意匠、美研**

高久茂雄（たかく・しげお/1916～1975年）

水戸市生れ。1934年日本大学芸術科別科中退。35年森山朝光に木彫を学ぶ。39年後藤清一に師事。40年構造社展で入選。47年日展で入選。49年茨城県美術展で県教育長賞（57年審査員）。50年茨城彫塑家協会設立に参加。53年茨城県美術展で茨城新聞社賞。68年水戸市展で運営委員。水戸市で没、59歳。**彫刻**

高崎 興（たかさき・こう/1908～1985年）

東京生れ。1915年茨城県笠間市に移住。23年木村武山に師事、のち前田青邨に師事。25年茨城美術展で入選。27年日本美術院試作展で入選。30年再興院展で入選。47年常土社結成。48年日本美術院院友。80年特待。72年茨城県芸術祭審査員。茨城県で没、77歳。**日本画**

高崎 奨（たかさき・すすむ/1928～2001年）

長崎市生れ。1950年長崎県師範学校卒。53～79年風会に12回入選。54、65、68年日展入選。65年長崎県展知事賞。82年長崎県展審査員。88年長崎県展審査員。文部大臣より教育功労者表彰。2001年没、73歳。**洋画、美教**

高嶋祥光（たかしま・しょうこう/1894～1987年）

山形県生れ。上京し、太平洋画会研究所や山形市出身の南画家後藤松亭に学んだのち、山内多門、小室翠雲に師事し、帝展に入選。戦後、美術団体「春光会」創設。1938年に陸軍省囑託従軍画家とし《黄河作戦従軍絵巻》。《童心懐古》（六曲一双屏風）など。1987年没、93歳。**日本画、版画**

高巢典子（たかす・のりこ/1940～2013年）

福岡県生れ。1963年多摩美術大学絵画科（油絵）卒業後、ブラジルへわたり、マナブ間部に師事。翌年帰国し、染色に転進。73～2007年九州造形短期大学で染色を指導。97年スペインに渡航し版画を習得。蠟結染で花や多肉植物、スペインの古都の建造物を大胆かつ色鮮やかに描く。蠟結染に油彩を組み合わせるなど、表現は幅広い。主に日展、新工芸展、福岡県展にて活躍。2013年没、73歳。**染色、版画、洋画、美教**

鷹田其石（たかた・きせき/1871～1946年）

富山県生れ。1889年東京美術学校に入学。在学中には岡倉天心、フェノロサ、橋本雅邦、川端玉章に師事。さらに同校研究科に進み、インド・ペルシヤ・中国・日本の古画の研究に打ち込む。94年卒、山梨や栃木で中学校教諭を勤める。1900年退職、作品制作と論文執筆に専念する。書もよくし、書画一体論を唱えた。1946年没、75歳。**日本画、美教、美研**

高田円乗（たかだ・えんじょう/生誕年不詳～1809年）

江戸生れ。加藤文麗の門人。狩野養川院惟信の門人で狩野氏を称す。『江戸方角分』に「御徒隠居」と記されてあるため、江戸幕府御徒士衆。名筆で知られており、画卷や絵本などを描いた。『前賢故実』を表した菊池容斎の師徒士繋がりからか、大田南畝や朋誠堂喜三二と交流。麟祥院には複数の作品が残っており、更に師の文麗や弟子の容斎の作品も伝来していることから、画系ぐるみの深い繋がりがあったとも想定される。1809年没。**江戸中-後期に活動した狩野派の絵師、画卷、絵本**

高野天民（たかの・てんみん/1894～1982年）

茨城県生れ。1894年生れ。上京して滝和亭につき南画を学び、のちに古沢雪田の門人となった。郡司硯田は天民の高弟。1982年没、89歳。**日本画**

高野正哉 (たかの・まさや/生没年不詳)

土佐出身。川端玉章に日本画を学ぶ、1905年太平洋画会研究所設立と同時に鶴田吾郎・高野正哉・中原悌二郎・中村彝と入所。1906年白馬会赤坂溜池研究所入所時期に親しくなった友人に鶴田吾郎・広瀬嘉吉・白山仁太郎・雨宮雅郷とともに高野正哉がいた。鶴田吾郎は大連でロシア人イリヤ・ニンツアと再会し、ニンツアが日本へ行くというので、高野を訪ねるようこと勧めた。19年ニンツアをエロシエンコが起居する新宿の中村屋に連れて行き、そこで中原悌二郎はニンツアと知り合い、モデルを依頼。ニンツアをモデルに代表作となる《若きカフカス人》を制作、未完成のまま19年院展に出品。版画は1914年ころから制作、「高野正哉画会」を設け、「自画自彫画」による装幀・表紙絵・扉絵・カットなどの依頼に応じていた。木版、装幀、表紙絵、扉絵、水墨、カット

高久靄厓 (たかく・あいかい/1796～1843年)

栃木県生れ。南画を学び、仙台、越後、江戸等を巡る。江戸では谷文晁に師事すると伝えられる。1835年京都、大坂へ遊学。晩年は、江戸両国の晩成山房に移り住んだ。江戸では、渡辺崋山・椿椿山らと交流、蛮社の獄で崋山が捕らえられた際には、椿山とともに救援に尽力した。1843年没、47歳。江戸後期の絵師

高久茂雄 (たかく・しげお/生誕年不詳～1975年)

水戸市生れ。1934年日本大学芸術科別科中退。35年森山朝光に木彫を学ぶ。39年後藤清一に師事。40年構造社展で入選。47年日展で入選。49年茨城県美術展で県教育長賞(57年審査員)。53年茨城県美術展で茨城新聞社賞。68年水戸市展で運営委員。水戸市で没。彫刻

高倉観崖 (たかくら・かんがい/1884～1957年)

大分市生れ。1905年京都市立美術工芸学校絵画科卒。竹内栖鳳・山元春挙に師事。14年文展で入選、褒状。15、16、18年文展入選。その後画壇を離れ、俳画を描いた。1957年没、73歳。日本画、俳画

高久隆古 (たかく・りゅうこ/1810～1858年)

白河藩主・阿部氏の家老の子として生まれる。江戸で依田竹谷に画を学ぶ。のち、京で浮田一蕙に復古大和絵の技法を学ぶ。江戸に戻り、高久靄厓の跡を継いで、南画と大和絵をあわせた独自の画風を確立。のち高久家を離れた。1858年没、48歳。江戸後期の絵師、南画

高崎 興 (たかさき・こう/1908～1985年)

東京生れ。1915年茨城県に移住。23年木村武山に師事、のち前田青邨に師事。24年上京。25年茨城美術展で入選。27年日本美術院試作展で入選。30年再興院展で入選。35年京都へ移住。47年常土社結成。48年日本美術院院友、80年特待。72年茨城県芸術祭審査員。茨城県で没。77歳。日本画

高澤七郎 (たかざわ・しちろう/1914～1981年)

石川県生れ。東京美術学校を主席で卒業し、1981年80歳で没するまで、独特の技法を使って漆絵画を製作した。漆絵では第一人者で、文展の無鑑査となる。孤高の作家とも称された。暁鳥敏(晩年東本願寺坐主)に師事、仏教にも精通。漆と金などを重ねて表現する漆絵は神秘的な世界を表現している。著作に、「超古代文明のメッセージ」がある。1981年没、67歳。漆絵

高嶋 茜 (たかしま・あかね/1949年～)

東京生れ。1974年日本大学芸術学部彫刻科卒。71年第一美術協会で大賞。以後賞多数。94年福井県展 50回展で記念賞。2000年第一美術協会で安田火災美術財団奨励賞。彫刻

高嶋祥光 (たかしま・しょうこう?/1894～1987年)

山形県生れ。太平洋画会研究所や山形市出身の南画家後藤松亭に学んだのち、山内多門、小室翠雲に師事、帝展に入選を重ねた。1945年の東京空襲で罹災、多くの貴重な画稿、資料、作品はすべて灰燼。山形市に引き上げ、戦後、美術団体「春光会」創設、山形から日本画の振興に尽力。1987年没、93歳。日本画

高島九峰 (たかしま・きゅうほう/1846～1927年)

山口県生れ。萩藩の藩医の高嶋良台の長男。弟に日本画家・地質学者の高嶋北海、高嶋得三がいる。宮内省図書御用掛をつとめ、随筆吟社の客員もつとめた。弟の北海が画を描き、九峰が詩文を書き作品を多く残す。「大正詩文」にも寄稿。著書に『九峯詩鈔』がある。1927年没、82歳。書画

高島圭史 (たかしま・けいし/1976年～)

兵庫県生れ。2001年再興院展初入選(10、11、13年奨励賞、同賞受賞)、12年日本美術院賞、天心記念茨城賞。03年日本美術院院友。04年財団法人佐藤国際文化育英財団の奨学生。06年東京芸術大学大学院美術研究科博士後期課程(日本画)修了。08年菅橋彦大賞展で佳作賞。09年富山大学芸術文化学部講師。日本画、美教

高須敬司 (たかす・けいし/生誕年不詳～1997年)

茨城県生れ。1935年春陽会洋画研究所修了。39年東京高等師範学校研究科卒。40年頃太平洋美術学校に学ぶ。小堀進に学び、水彩連盟展に出品。52年白日会展に入選(53年スター賞、準会員、55年準会員奨励賞、58年会員)。56年日展に入選。72年茨城県芸術祭美術展に審査員として出品。1997年没。洋画、水彩

高田敬輔 (たかだ・けいほ/1674～1755年)

近江生れ。京狩野第4代永敬に学ぶ。師の没後は仁和寺門跡に重用され、江戸進出もはかつて、中林竹洞の『竹洞画論』において奇想の画人曾我蕭白と並び称され、時には蕭白の師とも云われてきた。中央絵師として名をあげる一方で、故郷に戻り弟子を育成する。1755年没、81歳。江戸中期の絵師

高田直彦 (たかだ・なおひこ/1931～2019年)

東京生れ。1954年東京芸術大学在学中に陶磁器研究会を組織。55年東京芸術大学美術学部工芸科卒。61年特許庁意匠課勤務、61年に三重大学教育学部美術科に出向し、工芸史、工芸論、工芸の講義を担当。73年外研究員として1年間エジプトに留学。伝統工芸展、クラフト展などに数回出品。83年三重県美術展覧会の工芸部門審査員。84年三重県美術展覧会の運営委員。85年三重大学教育学部美術科教授。陶技としては、錬上手、青磁、彫文白磁、鉄釉などきわめて幅が広い。2019年没、88歳。陶芸、美研、美教

高津明美 (たかつ・あけみ/1947年～)

熊本市生れ。熊本を拠点に、染色工芸家として活躍。2012年現在、日展会員、現代工芸美術家協会評議員。染色

高梨豊 (たかなし・ゆたか/1935年～)

東京生れ。1957年日本大学芸術学部写真学科卒。59年桑沢デザイン研究所リビングデザイン科(夜間)へ入学、61年日本デザインセンターに入社。広告写真の第一線で活躍。64年本写真批評家協会新人賞。67年パリ国際青年ビエンナーレ写真部門最高賞。68年中平卓馬、多木浩二、岡田隆彦とともに写真同人誌『PROVOKE』を創刊(1970年活動休止)。84、93年度日本写真協会賞年度賞。91年写真の会賞。93年赤瀬川原平、秋山祐徳太子と「ライカ同盟」を結成。代表作に『都市へ』(1974年)、『町』(1977年)、『東京人 1978-1983』(1983年)、『初國』(1993年)、『地名論』(2000年)、『NOSTALGHIA ノスタルジア』(2004年)、『囲市』(2007年)など。2009年、個展「光のフィールドノート」(東京国立近代美術館)を開催。2012年、写真集『N』で第31回土門拳賞。同年、個展「Yutaka Takanashi」(アンリ・カルティエ・ブレッソン財団、パリ)を開催。写真

高波壮太郎 (たかなみ・そうたろ/1949年～)

東京生れ。1973年多摩美術大学油彩科卒。在学中より中本達也氏に師事。1990年に高島屋大阪店で開催した初個展以来、高島屋各店の美術画廊で個展を重ね、その回数には延べ100回を数える。洋画

鷹野隆大 (たかの・りゅうだい/1963年～)

福井県生れ。早稲田大学政治経済学部卒。「セクシュアリティ」「都市」「近代」などのテーマを基軸とした作品を多数発表。2006年セクシュアリティを問う写真集『In My Room』(2005)で木村伊兵衛写真賞。1998年から毎日欠かさず何気ない日常を撮り続ける「毎日写真」シリーズや、裸身の鷹野と被写体がともに並ぶポートレート写真「おれと」シリーズ、地面や壁に映る、都市を行き交う人々の影を撮影した「影」シリーズなどがある。2010年に「写真分離派」を設立。写真

高橋雲亭 (たかやまし・うんてい/1872～没年不詳)

群馬県生れ。滝和亭に師事して南宗派を研究。帝国絵画協会、日本南宗画会会員。日本画

高橋和彦 (たかやまし・かずひこ/1941～2018年)

盛岡市生れ。2018年没、77歳。洋画

高橋清 (たかやまし・きよし/1925～1996年)

新潟県生れ。新制作協会会員。東京美術学校彫刻家を卒業後、メキシコ美術研究のため渡墨、ヴェラクルス大学彫刻科主任教授。帰国後、金沢美術工芸大学教授。1994年メキシコ政府よりアギラ・アステカ勲章。1996年没、71歳。彫刻、美教

高橋源吉・柳源吉 (たかやまし・げんきち/1858～1913年)

江戸生れ。高橋由一の長男。1883～84年柳姓を名乗った。父より油彩技法を学ぶ。1877年工部美術学校に入学、アントニオ・フォンタネージより、本格的な美術教育を受ける。十一(字)会を結成。89年明治美術会結成と運営に関わる。由一から引き継いだ天絵(てんかい)学舎や、明治美術会が運営する明治美術学校(泰西美術学校)で指導を行う。80年天絵学舎内白受社が刊行した日本初の美術雑誌『臥遊席珍』の主幹を務め、82年浅井忠との共書で図画教科書『習画帖』を天絵学舎から出版、これが絵画的図画教科書として認められ89年文部省編纂『小学習画帖』として刊行。『高橋由一履歴』の編集し、また由一の東北風景スケッチを元に、石版画制作。1901年明治美術会が解散すると、画壇との関係を断つ。1913年没、55歳。洋画、高橋由一の長男、図画教科書

高橋広湖 (たかやまし・こうこ/1875～1912年)

熊本県生れ。1897年上京松本楓湖の安雅堂画塾に入門。99年日本絵画協会・日本美術院連合絵画共進会に出品、以後同展で受賞。異画会、紅児会、二葉会等に参加。1907年国画玉成会の結成に際し発起人となる。この頃五浦の日本美術院研究所で制作する。08年国画玉成会展覧会において、安田靉彦と共に天心より審査員に指名される。10年文展で3等賞。11年韓国、中国を旅行、帰国後東京で没、37歳。日本画

高橋草坪 (たかやまし・そうへい/1802、1803～1833年)

大分県生れ。1822年同地を旅行中の田能村竹田(たのむらちくでん)に画才をみいだされ、その門に入った。竹田の東遊に同道し、京坂にもその名を知られたが、1833年没、30歳又31歳。『筍竹蜻蜓図(じゅんちくせいえんず)』。江戸後期の絵師、南画

高橋輝雄 (たかやまし・てるお/1913～2002年)

名古屋市生れ。1936年京都仏教専門学校卒。京都独立研究所で須田国太郎にデザインの指導を受ける。大津・帰命寺の住職、木版画を制作。2002年没、89歳。版画

高橋秀年・天山 (たかやまし・ひでとし/1953年～)

東京生れ。1979年東京造形大学卒。今野忠一に師事。80年再興院展で入選(92年奨励賞、93年日本美術院賞、95年招待、99年同人、2003年文部科学大臣賞)。99年再興院展で天心記念茨城賞。2008年雅号を天山と改める。日本画

高橋弘明 (たかやまし・ひろあき/1871～1945年)

東京生れ。松本楓湖の門人。宮内省外事課に勤めデザインなどの仕事に携わった後、1907年に版元の協力を得、木版画を制作。新版画の発展において一翼を担い、風景や美人、動物など様々な画題に取り組んだ。特に江戸の風景を詩情豊かに写し出した作品は国内外を問わず高い評価を博した。1945年没、74歳。浮世絵、版画

高橋萬年 (たかやまし・まんねん/1897～1956年)

秋田市生れ。1913年上京し、寺崎廣業に入門。1年半で帰郷。独学で修行を積み、廣業門下の天籟画塾展に出品。23年日本美術院展に入選。戦後は、日本画家協会秋田県支部理事長、46年以降館岡栗山ら県内在住の日本画家たちと「有象社展」を開催。1956年没、59歳。58・83年に「高橋萬年遺作展」(秋田市美術館)、98年に「高橋萬年の画心展」(秋田県立近代美術館)が開催。1956年没、59歳。日本画

高橋貢 (たかやまし・みつぐ/1928～2018年)

秋田県生れ。1945年角館中学卒。46年上京。広幡の友人・野口弥太郎の推薦で帝国美術学校の聴講生、独立美術協会の吉岡憲の指導を受ける。後、廣幡の友人・山本蘭村の勸

めで文化学院美術部に移り、同氏や新制作協会の三田康に教えを受ける。斎藤義重のアトリエにすることが次第に多くなり、影響を受ける。49-52年美術文化展に出品。52-54年「日本国際美術展」に出品。グラフィック・デザイナーとなって生計を立てる道を選ぶ。84年からはグループ(秋耕会)の指導者を依頼され、90年より会長。2018年没、90歳。洋画、グラフィック・デザイナー

高橋陽子 (たかみよし・ようこ/生誕年不詳～)

東京生れ。女子美術大学卒。主な仕事先・学研、小学館、主婦の友社、PHP、マキノ出版、毎日新聞社、朝日新聞社他。著書は「陽子ママの土曜日の子育て」「陽子ママの子育てのオキテ」「陽子ママの子育て探検隊」「陽子ママのアタフタ日記」学研刊。漫画・イラスト・版画

高橋理三郎・白光 (たかみよし・りさぶろう/生没年不詳)

馬を中心として製作し、盛岡高等農村学校(岩手大学農学部)で馬の構造を学んだ。彫は独学であったが、その作品は秩父宮殿下への献上品に選ばれるほか、日本美術会美術展覧会に入選。高く評価されている。彫刻(木彫)

高畑 正 (たかみはた・ただし/1948～1977年)

福島県生れ。1967年大阪芸術大学美術科入学。72年進行性筋萎縮症と宣告。74年第10回∞展に出品。77年高畑正・田島征彦二人展(岩瀬ギャラリー)。1977年没、29歳。79年高畑正遺作展(県文化センター)開催。85年高畑正遺作展(湯川村:村公民館)開催。2008年絵筆にかけた青春高畑正展(喜多方市美術館)。水彩、鉛筆

高森碎巖 (たかもり・さいがん/1847～1917年)

1847年生れ。別号に自知斎など。江戸に出て服部蘭台に儒学を、山本琴谷に画を学んだ。1917年没、70歳。日本画

高松潤一郎 (たかまつ・じゅんいちろう/1941年～)

北海道生れ。1960年東京都立豊島高等学校卒、64年立教大学理学部数学科を中退。以後、油彩で幻想絵画を描き続けている。親が早くに死去したため、母親の弟である映画俳

優の室田日出男と長く一緒に生活した。青木画廊で個展。洋画

鷹見明彦 (たかみ・あきひこ/1955～2011年)

北海道生れ。1980年中央大学文学部哲学科卒。20代後半から音楽雑誌『中南米音楽』(後に『ラティーナ』と改称)に音楽、本、美術等の評論を執筆。90年頃から『美術手帖』に展覧会評を始め、評論活動が活発化。99年から東京藝術大学美術学部の油画科、以後同大先端芸術表現学科、彫刻科等で、また2000年から茨城大学教育学部、04～07年武蔵野美術大学日本画科の非常勤講師を務める。環境、自然、神秘といったモチーフをもとに文明論を構想し、美術評論の数々は若い作家へのエールとなった。前橋市で没、55歳。美評、美教

高森碎巖 (たかもり・さいがん/1847～1917年)

千葉県生れ。江戸にでて服部蘭台に儒学を、山本琴谷に文人画をまなぶ。山水、花鳥を得意とした。作品に「五百羅漢図」などがある。1917年没、71歳。日本画

高村豊周 (たかむらとよちか/1890～1972年)

東京生れ。彫刻家高村光雲の三男。兄は彫刻家・詩人の光太郎。東京美術学校鑄金科で津田信夫に師事、1915年卒業後、新しい工芸美術の確立を目ざし、26年无会(むかい)を結成した。27、28、29年帝展で連続特選。帝展、文展、日展で審査員、理事等を務め、東京美術学校教授(33～44年)。35年実在工芸美術会を設立して新様式の樹立に努めた。50年芸術院会員、64年重要無形文化財保持者。また詩歌を与謝野鉄幹・晶子夫妻に学び、歌集『露光(ろこう)集』がある。1972年没、82歳。鑄金、美教

高村右暁 (たかむら・ゆうきょう/1867～1954年)

金沢市生れ。加賀藩細工所出仕狩野派絵師の家に生まれ、幼時祖父玄佳に絵筆の運び方を習う。垣内右りんに師事。中央始め各地の共進会展に出品、多くの褒状を受ける。その間展覧会出品画など宮内省御用を受ける。子弟の教育にも情熱を傾け、門下生百余名を数える。北陸絵画協会などに参加、北陸画壇の向上発展に貢献。1954年没、87歳。日本画、美教

高村有隣 (たかむら ゆうりん/1891～1981年)

茨城県生れ。1913年千葉薬学専門学校卒。その後内務省衛生試験所嘱託を経て東洋薬品株式会社の創設に尽力。36年茨城工芸展で銀賞(以後出品、38年第5回展で銅牌賞、40年第6回展で推奨)。51年茨城県美術展で知事賞、県内の女子高等学校の講師等としても活躍。1981年没、89歳。 **工芸、洋画、美教**

高谷重生 (たかや・しげお/1901～1972年)

倉敷市生れ。玉島小学校の代用教員を務めながら文部省の中等教員検定試験に合格し、矢掛高等女学校に勤務する。1935年に上京し、女学校に勤めながら制作活動を行う。43年新文展に入選。以後、日展に入選。その他、光風会、東光会で活躍。晩年はインドネシアを旅行し、バリ島などに取材した作品を残す。1972年没、71歳。 **洋画**

鷹田其石 (たかた・きせき/1871～1946年)

富山県生れ。1889年東京美術学校入学、岡倉天心、フィノロサ、橋本雅邦、川端玉章に師事します。94年同校研究科卒業。山梨や栃木の中学校にて教鞭を執ります。1900年画家として画業に専念し多くの作品を残しました。インドやペルシャ、中国の古画を研究し、特に東洋思想に裏打ちされる「雅観主義」(あらゆるものの中に深く存在する真理「雅」の精神を己の人格「心眼」を通して深く観ることを主張した独自の画風を切り開きました。墨画や色彩画により、山水画、風景画、仏画を多く描き、生涯にわたり確固たる信念と画論を持ち制作活動を続けた画家です。1946年没、75歳。 **日本画、美教、墨画**

高田敬輔 (たかた・けいほ/1674～1756年)

滋賀県生れ。家は代々製薬業をいとなむ。狩野永敬に師事し、僧古礪(こかり)に水墨画をまなぶ。近江(おうみ)(滋賀県)信楽院(しんぎょういん)の天井画などをえがく。60歳で法眼となった。1756年没、82歳。 **江戸前-中期の絵師**

高田吉朗 (たかた・よしろう/1957年～)

岐阜市生れ。1982年多摩美術大学大学院美術研究科彫刻専攻修了。83～86年中米ホンデュラスにて美術教育に携わる。96年第6回日本現代陶彫展。96年優秀賞(土岐市・

岐阜)。2002年第3回日本ユーモア陶彫展優秀賞(土岐市・岐阜)。2001、2、3年小野画廊で個展。 **彫刻、陶彫**

高橋英吉 (たかはし・えいきち/1911～1942年)

宮城県生れ。1936年東京美術学校卒、同年文展に「少女像」を発表、39年特選。41年東邦彫塑院会員となり、同年秋には文展無鑑査出品。遺作にガダルカナル島に於て制作した「不動明王」及び「聖観音」等がある。1942年没、31歳。 **彫刻**

高橋介州 (たかはし・かみしゅう/1905～2004年)

金沢市生れ。1929年東京美術学校卒業、海野清に師事。29年帝展に入選、以来新文展、日展に出品。41年石川県工芸指導所所長として県内工芸界をリード。石川県美術文化協会理事長、石川県美術館長をつとめる。82年加賀象嵌で石川県指定無形文化財保持者に認定。日展参与。2004年没、99歳。 **金工**

高橋 和 (たかはし・かず/1935年～)

盛岡市生れ。1954年岩手県立盛岡第二高等学校卒。55年岩手芸術祭で佳作賞。57年岩手県立盛岡短期大学美術工芸科卒。深沢省三・紅子に師事。女流画家協会展でブルービー賞。59年一水会展に出品。60年中滝製薬(現カネボウ薬品)宣伝課にデザイナー勤務。69年女流画家協会会員。83年スペインを取材旅行。91年女流画家協会展で小川孝子賞、委員。 **洋画**

高橋克之 (たかはし・かつゆき/1967年～)

福島市生れ。1992年に福島大学教育学部卒、95年福島大学大学院を修了。94、2003ね年VOCA展(上野の森美術館)や、95～2014年東邦画廊(京橋)での個展など、現在まで多数の個展とグループ展を開催。美術評論家・千葉成夫氏が「彼は世界を「テクスチャー(手触り、肌ざわり)」として捉えるという特異な感性を持っている」と論じるように、高橋克之の絵画は、表面にいきものが蠢いているような独特の質感を持つのが特徴。 **洋画**

高橋勘次郎・初代 (たかはし・かんじろう I /1793～1865年)

岩手県生れ。宮大工を学び、仙台で修行を重ね、1853年長男の豊吉と共に近畿、山陽

地方で遊学をし帰郷。大興寺境内にある土仏観世音堂は高橋勘次郎親子の作品と言われている。これは、勘次郎親子が七年の歳月をかけ、46年完成させた。宮野目三獄神社拜殿、盛岡市北山の願教寺本堂向拝の竜墓股の彫刻がある。1865年没、73歳。彫刻”土仏観音堂を建立した南部の名工”

高橋杏村 (たかみよし・きょうそん/1804～1868年)

岐阜県生れ。若い頃に京都に出て竹洞に師事して南画を学んだ。帰郷して1844年に「鉄鼎学舎」を開き、漢籍と画法を伝授した。門人は大変多く、尾張から三河に遊歴しその地方にまで門人がいた。子の湘雲もまた画をよくした。1868年没、64歳。南画、画塾

高橋玉淵 (たかみよし・ぎょくえん/1858～1938年)

江戸生れ。兄の高橋応真、のち川端玉章にまなぶ。1884年内国絵画共進会、内国勸業博覧会、日本青年絵画協会で受賞。1900年パリ万博に出品。川端画学校などでおしえ、川合玉堂の長流画会に参加した。1938年没、81歳。日本画、美教

高見澤路直・田河水泡 (たかみざわ・ろちよく、たがわ・すいゝまう/1899～1989年)

東京生れ。1922年除隊し帰国、日本美術学校に入学。村山知義らが主宰する前衛芸術集団『マヴォ』に参加し、26年退団(高見澤名)。昭和初期の子供漫画を代表する漫画家。代表作『のらくろ』ではキャラクター人気は大人社会にも波及し、キャラクターグッズが作られた。関野準一郎にエッチングを学び、51年東京ビエンナーレ展に入選、一線美術展に出品、59年同会委員。児童漫画の礎を築くとともに現代漫画の育成にも寄与した。夫人は文芸評論家の高見澤潤子。江戸時代から近代の戯画・漫画資料約550点を寄贈。神奈川県で没、90歳。漫画、版画、コレクター

高橋 清 (たかみよし・きよし/1925～1996年)

新潟県生れ。1952年東京美術学校彫刻科卒。57年新制作協会展にて新作家賞・大阪市長賞。58年マヤ文化およびメキシコ美術研究のため渡墨、11年間の滞在中個展開催7回(メキシコ国立芸術院美術館等)、ヴェラクルス大学にモニュメント群の制作。ヴェラクルス大学彫刻科・教授就任。67年新制作協会会員に推挙され、以後同展に毎年出品。70年金沢美術工芸大学教授。94年メキシコ政府よりアギラ・アステカ勲章。1996年没、71歳。

勲三等瑞宝章。73年中原悌二郎賞。83年東京野外彫刻展にて大賞。長野市野外彫刻賞。88年メキシコ国立国際現代美術館(ルフィノ・タマヨ美術館)、新潟市立美術館個展開催。94年石川県立美術館にて個展開催。1996年没、71歳。彫刻、美教

高橋広湖 (たかみよし・こうこ/1875～1912年)

熊本県生れ。父に雲谷派の画をまなび、のち松本楓湖の門にはいる。「小松内府重盛」「蒙古襲来図」など歴史画を得意とし、巽(たつみ)画会の幹部として活躍した。1912年没、38歳。日本画

高藤鎮夫 (たかみよし・しずお/1910～1988年)

名古屋市生れ。1931年加藤頭清に師事し、40年紀元2600年奉祝展に入選。以後新文展に連年出品し、戦後も日展に第1回より出品。54年日展、58年新日展でともに特選。59年無鑑査出品。61年3年間委嘱出品。63年審査員。64年日展会員。日展を中心に、日本彫塑会、MC彫塑家集団などでも活動した。名古屋で没、78歳。彫刻

高橋松亭・弘明 (たかみよし・しょうてい/1871～1945年)

松本楓湖の門人。宮内省外事課に勤めデザインなどの仕事に携わった後、1907年版元の協力を得、初めて木版画を制作する。新版画の発展において一翼を担い、風景や美人、動物など様々な画題に取り組んだ。特に江戸の風景を詩情豊かに写し出した作品は国内外を問わず高い評価を博した。1945年没、74歳。浮世絵、木版画

高橋草坪 (たかみよし・そうへい/1803～1834年)

大分県生れ。画家長谷部柳園に学ぶ。田能村竹田に弟子入り、行動を共にする。師の勧めで京都など各地を外遊し浦上春琴、帆足杏雨などと親交を深め、その後は大坂を中心として活躍するが、大坂で没、32歳。江戸後期の絵師

高橋常政 (たかみよし・つねまさ/1949年～)

東京生れ。1972年講談社フェーマススクルーズコンテストで大賞。73年創形美術学校卒。74年青木画廊で個展。78年渡欧、ウィーン派のエルンスト・ホックス、ルドルフ・ハウズナーに師事。みゆき画廊、ユマニテ東京等で個展。洋画、版画、イラスト、立体、ウィーン幻想派

高橋天山・高橋秀年 (たかやし・てんざん/1953年～)

東京生れ。1979年に東京造形大学を卒業。油彩画より日本画に転向し、院展常任理事・今野忠一に師事する。99年日本美術院同人、のち評議員。あとえ天山主宰。2008年に雅号を高橋天山とする。日本画

高橋豊吉 (たかよし・とよきち/1819～1908年)

岩手県生れ。初代勘次郎の長男として生まれた。叔父の橋本雪蕉に下絵のための絵画を学び、父をしのぐ名工となった。県内には豊吉の建築した社寺が多く残されているのが、代表的なものに花巻市矢沢の胡四王神社の拝殿及び上り下り竜の彫刻、鳥谷崎神社本殿、水沢市黒沢寺本堂などがある。1908年、没、90歳。彫刻(木彫)

高橋秀年・天山 (たかよし・ひでとし/1953年～)

東京生れ。1979年東京造形大学卒、今野忠一に師事。80年再興院展で入選(92年奨励賞)。93年日本美術院賞、95年招待、99年同人、2003年文部科学大臣賞。99年再興院展で天心記念茨城賞。日本画

高橋弘明 (たかよし・ひろあき/1871～1945年)

東京生れ。松本楓湖の門人。宮内省外事課に勤めデザインなどの仕事に携わった後、1907年に版元の協力を得、初めて木版画を制作する。新版画の発展において一翼を担い、風景や美人、動物など様々な画題に取り組んだ。特に江戸の風景を詩情豊かに写し出した作品は国内外を問わず高い評価を博した。1945年没、74歳。浮世絵、版画

高橋弘明 II (たかよし・ひろあき/1871～1945年)

東京生れ。本名松本勝太郎。伯父松本楓湖に日本画を学び、後に高橋家養子となる。松本姓に関連する松亭の号で、小学校教科書・雑誌・新聞などの挿絵を手がける。1907年古錦絵商前羽商店で浮世絵版画の複製制作に関わっていた際、渡辺庄三郎の依頼で輸出用に木版画を試作、販売。好評を博し、以後渡辺版画店で新作版画を制作、海外に輸出する。21年弘明に改号。1945年没、74歳。浮世絵、版画

高橋鳳雲 (たかよし・ほううん/1810～1858年)

江戸生れ。高橋宝山の弟。7代幸慶の門にあり、また宮内卿師長板伊之助に師事。江戸蔵前の札差伊勢屋嘉右衛門の依頼により、釈迦三尊、五百羅漢など仏像700体をつくり、鎌倉建長寺におさめた。1858年没、49歳。江戸後期の仏師

高橋雅之 (たかよし・まさゆき/1947年～)

山形県生れ。1970年現代美術の一断面(東京国立近代美術館)。71年多摩美術大学絵画科卒。71～72年田村画廊・ときわ画廊にて個展。73年3人展(菅木志雄、李禹煥、高橋雅之)駒井画廊。81年4人展(榎倉康二、高山登、村岡三郎、高橋雅之)ギャラリーK。83年風景との出会い(宮城県立美術館)。洋画、水彩・鉛筆・コラージュ

高橋万青 (たかよし・まんせい/生没年不詳)

出身地、生没年不詳。1955年茨城県美術展で教育長賞、56年で県町村会長賞、57年いばらき新聞社賞、58年知事賞。59年同展に無鑑査出品。60年第15回展への出品が同展最後の出品。日本画

高橋萬年 (たかよし・まんねん/1897～1956年)

秋田市生れ。1913年上京、寺崎廣業に師事。23年院展に入選。45年日本美術院小品展覧会で美術院賞。46年院展で無鑑査出品。郷土の田園風俗を主題として作品を描いた。地元画家の育成に力。秋田で没、58歳。日本画

高畑 勲 (たかひた・いさお/1935～2018年)

三重県生れ。1959年東京大学仏文科を卒業後、東映動画(現・東映アニメーション)に入社。68年には劇場用長編初演出となる『太陽の王子 ホルスの大冒険』を完成。74年『アルプスの少女ハイジ』、76年『母をたずねて三千里』、79年『赤毛のアン』一連のテレビシリーズを手がけ、80年代には作品の舞台を日本に移し、風土や庶民生活のリアリティーを追求。85年にスタジオジブリの設立に参画し、88年『火垂るの墓』、91年『おもひでぽろぽろ』。日本人の戦中・戦後の歴史を再考するスケールの大きな作品をつくっていく。そして2013年デジタル技術を駆使して手描きの線を生かした水彩画風の描法に挑んだ傑作2013年『かぐや姫の物語』

語』を生み出し、ひとつの頂点に達した。2018年没、82歳。映像、アニメ(ジブリ)

高松順蔵・高松小埜 (たかまつ・じゅんぞう/1807～1876年)

土佐藩の儒学者、歌人。幕末志士たちの影響を与えた。楠瀬大枝に画を、壬生水石に書と篆刻を学び、江戸に出て経書を修めた。歌や絵もたしなみ、文人や学者との交流もあった。坂本龍馬の姉・千鶴が洲順蔵に嫁ぎ、龍馬も時折高松家へ訪れたり手紙を出している。1876年没、69歳。江戸後期、土佐藩の儒学者、歌人、絵師、篆刻

高見澤路直・田河水泡 (たかみざわ・ろちよく?/1899～1989年)

東京生れ。日本美術学校図案科卒。美術学校では抽象画家として活動。高見澤路直を名乗り、前衛美術グループ・MAVOに参加するなどした。後、漫画家田河水泡と名を変え活躍した。日本のダダ運動の先駆をなす。1989年没、90歳。洋画、漫画

高見修司 (たかみ・しゅうじ/1950～1989年)

1950年生れ。中央大学を中退。絵具とキャンバスを衝動買いし、絵を描き始めます。南洋の島で永住を図ったものの病気のため帰国。結婚後、妻の実家に近い新潟に住み、臨時雇いで職を転々としながら絵を描き、個展も開いています。素朴でユーモアある独創的な世界を創り上げつつありましたが、1989年没、38歳。洋画

高見泰蔵 (たかみ・たいぞう/1921年～)

岩手県生れ。東京美術学校卒業。家業を継ぐため一戸町へ戻り、彫刻、水墨画を制作。斎藤忠誠との交友関係から、美術団体「エコール・ド・エヌ」および「岩手町国際石彫シンポジウム」の指導・助言者として大きな役割を果たす。彫刻、水墨

高村東雲 (たかむら・とうん/1826～1879年)

1826年生れ。江戸の仏師高橋鳳雲の弟子となり、のち独立して高村東雲と改名。鳳雲の建長寺山門の『五百羅漢』の造像を助けた。東雲は当時まったく精彩を失っていた仏像彫刻界にあって、わずかに伝統を守り一家をなした。門下に高村光雲がいる。1879年没、53歳。彫刻、仏師

高村豊周 (たかむら・とよちか/1890～1972年)

東京生れ。高村光雲の三男、高村光太郎の弟。金沢美術工芸大学名誉教授。日本芸術院会員。津田信夫に入門、1915年東京美術学校鑄造科本科卒。19年岡田三郎助、長原孝太郎、藤井達吉らと装飾美術家協会を設立。26年東京美術学校助教授。26年工芸団体・无型(むけい)を組織し、35年、実在工芸美術会結成に参加。33年東京美術学校教授、49年金沢美術工芸専門学校(現・金沢美術工芸大学)教授、日展運営会参事、日本芸術院会員。58年日展理事、鑄金家協会会長。64年重要無形文化財保持者(人間国宝)に認定。67年勲三等旭日中綬章。1972年没、82歳。鑄金、美教

高村正之 (たかむら・まさゆき/1912～1976年)

福岡県生れ。県立宗像中学を卒業後、帝国美術学校を経て、東京美術学校日本画科に入学、結城素明に師事。同校卒業後に白木屋百貨店美術部、東京宝塚劇場設計課の勤務を経て、福岡第一師範学校に赴任し、のち福岡学芸大学教授。この間、西部美術展や九州日本画会展等に出品し、福岡県美術協会再興や玄霜会創立に参加。また日本美術院展に入選し、院友。1976年没、64歳。日本画、美教

高村右暁 (たかむら・ゆうきょう/1867～1954年)

金沢市生れ。加賀藩細工所出仕狩野派絵師の家に生まれ、幼時祖父玄佳に絵筆の運び方を習う。垣内右りんに師事。中央始め各地の共進会展に出品、多くの褒状を受ける。その間展覧会出品画など宮内省御用を受ける。子弟の教育にも情熱を傾け、門下生百余名を数える。北陸絵画協会に参加、北陸画壇の向上発展に貢献。1954年没、87歳。日本画

高森碎巖 (たかもり・さいがん/1847～1917年)

千葉県生れ。江戸にでて服部蘭台に儒学を学ぶ。山本琴谷に文人画をまなぶ。山水、花鳥を得意とした。作品に「五百羅漢図」などがある。1917年没、71歳。文人

高森 俊 (たかもり・しゅん/1932年～)

千葉県生れ。1952年創造美術教育協会に入会。ホームレイン『親と教師に語る』により子どもの心理を学ぶ。57年多摩美術大学(洋画科)卒。中学校の美術教師となり、幼児から大人までの絵にあらわれる心の研究を続ける。93年中学校退職。講演活動、子どもの絵を見

ながらの子育て相談、著作活動などを続け現代に至る。児童美術教育研究所「小さな原始人」主宰。著書に『子供とともに伸びる教師』『わが家の小さな原始人』『少年非行 こんな絵を描く子どもは危ない』『子どもの絵と教育の45年間 創造美育の実践児童画集』他。**児童美術教育者、美普、児童美術教育研究所「小さな原始人」主宰**

高森登志夫 (たかもり・としお/1947年～)

千葉県生れ。1970年東京芸術大学油絵科卒。72年同大学院修了。74年回シェル美術賞展1等賞。78年日本国際美術展国国際美術館賞。84年浅井忠記念賞展優秀賞(千葉県立美術館)。91年浅井忠記念賞展(千葉県立美術館)。**洋画**

100

高谷重生 (たかや・しげお/1901～1972年)

倉敷市生れ。玉島小学校の代用教員を務めながら文部省の中等教員検定試験に合格し、矢掛高等女学校に勤務する。1935年に上京し、女学校に勤めながら制作活動を行う。43年新文展に入選。日展に入選を重ねる。その他、光風会、東光会で活躍した。晩年インドネシアを旅行し、バリ島などに取材した。1972年没、71歳。**美教、洋画**

高山樗牛 (たかやま・ちよぎゅう/1871～1902年)

山形県生れ。文芸評論家。帝国大学哲学科卒。在学中、上田敏らと「帝国文学」を創刊、その編集に従事。1896年卒業と同時に第二高等学校の教授。のち退いて雑誌「太陽」主幹。はじめ日本主義を唱え、ニーチェ主義を経て晩年は日蓮に傾倒。小説「滝口入道」、評論「美的生活を論ず」など。『日本美術史』で文学博士号を得る。1902年没、31歳。**文芸評論家、樗牛賞、美教**

田賀亮三 (たが・りょうぞう/1930～2008年)

東京生れ。金沢第二中学校を経て、1952金沢美術工芸短期大学油画科卒。59年自由美術展に出品し、以後毎回出品、70年自由美術賞受賞。64～65年パリ国立高等美術学校にフランス政府給費留学生として留学。73～76年日本アンデパンダン展に出品。自由美術家協会運営委員。2008年没、78歳。**洋画**

田河水泡・高見澤路直 (たがわ・すいぼ/1899～1989年)

東京生れ。日本美術学校図案科卒。美術学校では抽象画家として活動。高見澤路直を名乗り、前衛美術グループ・MAVOに参加。卒業後の1926年、講談社に持ち込んだ創作落語が採用され、落語作家・高澤路亭として活躍。漫画家に転向し、28年「少年倶楽部」にて初の連載漫画となる『目玉のチビちゃん』を連載。筆名を田河水泡とする。31年「少年倶楽部」にて『のらくろ二等卒』を発表。同作は一大ブームが巻き起こし、『のらくろ』シリーズは足かけ11年に渡る長期連載。41年内閣情報局の圧力により『のらくろ』他の執筆を禁じられるが、戦後の58年には復活。「丸」にて『のらくろ自叙伝』の連載を開始。67年「のらくろ漫画全集」が刊行され、第二次のらくろブームが起こった。晩年には笑いの研究にも取り組み、81年には『滑稽の構造』を発表。1989年没、90歳。**漫画、洋画(MAVO)**

田川 奨 (たがわ・すすむ/1915～1994年)

大分県生れ。1939年東京美術学校日本画科卒業後、大分県内で教鞭をとりながら大分県美術展を中心に作品を発表。68年県内の日本画普及を目的に大分県日本画協会を設立し、75年会長。75～80年大分県美術協会副会長。1994年没、79歳。**日本画、美教、美普**

滝 秋方 (たき・しゅうほう/1903～1979年)

島根県生れ。1923～27年韓国、満州、中国及び印度に旅行した。31～38年大阪朝日新聞社絵画嘱託の仕事にたずさわった。津田青楓、矢野橋村らにより37年創立された、墨人会倶楽部の会員で、また秋方ほか小杉放庵、渡辺大虚により39年創立された圏外社を主宰した。名古屋で没、76歳。**日本画、水墨**

瀧 一夫 (たき・かずお/1910～1973年)

福岡市生れ。県立中学修猷館から東京美術学校彫刻科塑造部に進む。1924年同校卒業後、陶芸に転向。瀬戸、京都の陶磁試験場で釉薬研究の後、作家活動に入る。日展、現代日本陶芸展、日本現代工芸美術展などで活躍。日展、現代工芸展では審査員を歴任し、各種国際展にも出品。58年から佐賀大学教育学部助教授、のち教授となり、九州陶芸界の若手育成に貢献した。1973年没、63歳。**陶芸、美教**

滝 和亭 (たき・かてい/1830～1901年)

江戸生れ。16歳のとき大岡雲峰に入門し、1850年長崎に游学、僧鉄翁、木下逸雲、清人

陳逸舟らと交わり、明清画を学ぶ。14年間北越を漫遊。明治維新後、内国勸業博覧会で受賞。竜池会、東洋絵画会、日本美術協会にわたって日本画旧派の重鎮として活躍。中国画論にも通じ、西洋美術の摂取を図った新派に対して、伝統美術を守ることに意を注いだ。93年帝室技芸員。東京帝国大学の東洋日本美術史の初代教授となり、美術雑誌『国華』を主宰した滝精一は和亭の長男。1901年没、71歳。日本画

滝川 巖 (たきかわ・いわお/1936～2019年)

金沢市生れ。1958年一水会展入選。79年まで出品。59年金沢美術工芸大学油画科卒。63年一水会展佳作賞。65年一水会会員。79年一水会を退会、一創会創立に参加、88年まで会員出品。81年より銀座にて毎年個展開催。85、86年安井賞展出品。88年一創会を退会し、風土会客員。90年風土会会員。2019年没、83歳。版画、洋画

滝川武雄 (たきかわ・たけお/1914～1975年)

金沢市生れ。1933年石川県師範学校卒、教職に就き、長く県内各校の教鞭に立つ。38年大潮会展特選。40年二科展初入選、41、42年入選。47年二紀展入選。54年一水会展入選、以後一水会、日展を発表の場とする。56年一水会展船岡賞、57年一水会会員、61年会員優賞。65年渡欧。1975年没、61歳。堀忠義、奥田憲三氏等と共に北陸の一水会を率い後進を指導した。長男の巖は洋画家、次男真人は日本画家。美教、洋画

滝川真人 (たきかわ・まさと/1945年～)

金沢市生れ。1968年金沢美術工芸大学絵画専攻日本画を卒業後、教員生活を送りながら制作に励む。67年日展初入選、96年特選。また68年から日春展に出品し、84年奨励賞受賞。現代美術展(石川)で72、74年最高賞。日展会友。日本画、美教

瀧澤邦行・静雄 (たきざわ・くにゆき/1888～1964年)

埼玉県生れ。曲亭馬琴として知られる瀧澤興邦の末裔。1913年日本水彩画会創立会員。日本の国花である桜の写生と研究。画歴の大要は、文展(現在の日展)入選数回、個展を開くこと数十回、28年昭和天皇に名桜選集を献上、39年桜花水彩十二図が秩父宮・高松宮両妃台覧の栄を受けた。飯能美術協会の設立に尽力画壇発展の為に功献した。1964年没、76歳。水彩

参考 瀧澤家には滝沢馬琴の遺稿、渡辺崋山の掛軸、その他数多くの貴重な文化財を蔵していたが、その散逸をおそれ、すべてを天理大学に贈り、保管を一任した。

滝沢天友 (たきざわ・てんゆう/1871～1908年)

長野県生れ。高村光雲とともに、善光寺の仁王像にかかわった。1907年善光寺より制作依頼された高村光雲は、友人であった飯山市愛宕町の彫刻家滝沢天友に仁王像制作の協力を依頼、引き受けた滝沢天友は若くして死去。1908年没、37歳。木彫

滝沢馬琴・曲亭馬琴 (たきざわ・ばきん/1767～1848年)

江戸の人。山東京伝に師事し、黄表紙などを書くが、1996年「高尾船字文」を始めとして読本を著し、それを近世後期の小説の正統に位置させ、ひいては明治期にまで影響を及ぼした。中国白話小説に学んで、勧善懲悪を標榜しつつ、雄大な構想と豊かな伝奇性を備え、人情描写。長編の読本に力作が多く、「椿説弓張月」「三七全伝南柯夢」「近世説美少年録」「開巻驚奇侠客伝」「南総里見八犬伝」など。1848年没、81歳。江戸後期の戯作者

瀧本光國 (たきもと・みつくに/1952年～)

福岡県生れ。1977年イタリアに渡り、ミラノで活躍する豊福知徳に師事。伝統技法を守りながら、45年にわたり一貫して木彫の作品を制作。古い仏像修復の専門家としても活動。80年代、豊福の影響を受けてレリーフ状の抽象彫刻を制作。90年代に表現を変化させ、具象へと近づいて行きます。具象とは言っても、不定形のイメージを掴もうとする意識の働きを象徴する。彫刻

田口 壮 (たぐち・さかん/1910～1945年)

大分県生れ。1933年京都市立絵画専門学校に入学し、36年同校卒。34年に吉岡堅二、福田豊四郎らと新日本画研究会を結成。34年帝展に入選。38年新傾向の日本画を目指す同志と軌線美術を結成。つづいて岩橋英遠や山岡良文らと歷程美術協会を創設した。1945年没、35歳。日本画

田口米作 (たぐち・べいさく/1864～1904年)

下野国生れ。小林清親の弟子で、日清戦争の頃から戦争をテーマにした錦絵で注目を集める。清親の去った『團圓珍聞?』には、似顔絵やヨーロッパで流行りだした手法を効果的に用いた漫画を毎号執筆していた。師の清親が重厚な石版画を多用したのに対し、米作は絵筆を使った軽妙な作風で人気を得た。1904年没、40歳。浮世絵、漫画

田窪恭治 (たくぼ・きょうじ/1949年～)

愛媛県生れ。建築家や写真家と協力し領域的に広い活動を始め、過去の建造物を修復再生する活動を行っている。フランス・ノルマンディーの礼拝堂再生プロジェクトを手がけ、仏芸術文化勲章オフィシエ受章。多摩美術大学客員教授、聖心女子大学講師。現代美術、美術

宅間正一 (たくま・しょういち/1914～1982年)

甲府市生れ。1933年詫間宝石彫刻研究所を創立。以後、山梨の伝統工芸であった。水晶彫刻を芸術の域に高める。日展や全国伝統工芸展などにおいて多数の受賞歴。第1階優秀技能章、現代の名工。黄綬褒章、勲五等瑞宝章。1982年没、68歳。宝石(水晶)彫刻、宝石彫刻研究所

田畔司朗 (たぐろ・しろう/1917年～没年不詳)

1917年生れ。第1回安井賞候補、第7回安井賞候補。1958年シェル美術賞展(神奈川県立美術館)で大賞。春陽会展に出品。洋画

武石弘三郎 (たけいし・こうざぶろう/1878～1963年)

新潟県生れ、洋風彫塑界の先覚、長沼守敬の愛弟子として1901年東京美術学校塑造科最初の卒業生。ベルギーに渡り、8年間滞留研究を続け、ブリュセル国立美術学校で優等生。09年帰国、青壮年期は文展、帝展に出品。戦後は発表がなく、穩棲の老後生活だった。大理石彫刻も早くから手がけ、代表作には、秩父宮登山姿や西園寺公、北白川宮、森鴎外、川端玉章らの胸像。鎌倉で没、85歳。彫刻

武腰善平 (たけごし・ぜんぺい/1843～1907年)

石川県生れ。九谷庄三(しょうざ)のもとで陶画をまなぶ。1872年金沢産物方役所の命で東

京にでて、増上寺山内各寺院の陶器御用をつとめ、かたわら九谷焼の販路拡張にあたった。1907年没、65歳。陶画

武志伊八郎信由・波の伊八(たけし・いはちろうのぶよし/1751～1824年)

千葉県生れ。江戸中期、建築様式として欄間を飾る彫刻が流行。初代伊八こと、武志伊八郎信由は、10歳の時から彫刻を始め、躍動感と立体感溢れる横波を初めて彫って以来、作風を確立。同世代に活躍した葛飾北斎『富嶽三十六景』の代表作の一つ「神奈川沖浪裏」などの画風に強く影響を与えた。主に房総各地で約50の寺社に作品を納めた宮彫師。1824年没、73歳。江戸後期の宮彫師、彫刻

竹下金鳥 (たけした・きんちょう/生没年不詳)

戦前から戦後にかけて内田美術書肆より『光琳風虫くらべ』(1928 全3冊)、『年中行事遊楽図』(1932 1)、『応用小品 落葉垣 乾』(1934)、『名残名月 ももちくさ』(1935 全2冊)、『千波万波』(1935 全2冊)や金鳥・横『琳派百華譜』(刊年不明 木版6図)などの木版図案集、その他に木版画『遊楽絵四図』(内田美術書肆 刊年不明)の制作がある。(出典:版画堂)。図案、版画

竹下舟遊 (たけした・しゅうゆう/1899～1864年)

長崎県生れ。三川内の絵師今村豊寿に日本画を学ぶ。その後京都絵画専門学校に進み、吉岡梅仙の弟子となり、狩野派を学んだ。1931年帰郷、旧上波佐見村陶器意匠伝習所の教師。戦後は中学校の絵画教師をしたり、波佐見焼きの陶画を描くこともあった。1964年没、65歳。日本画、陶画、美術

竹田敬方 (たけだ・けいほう/1873～1942年)

東京生れ。始めは1887年水野年方に人物画を学び、91年から川端玉章に師事して山水画を学んでいる。日本青年絵画協会、日本美術協会、鳥合会、巽画会などに作品を出品した。1907年正派同志会の評議員になり、09年川端画学校の教諭。明治絵画会の幹事、審査員。1942年没、70歳。日本画、美術

竹田博志 (たけだ・ひろし/1946年～)

富山県生まれ。1970年、早稲田大学第一文学部仏文学科卒、日本経済新聞社に入社。文化部美術担当記者として約40年にわたり世界のアート動向を取材。95年東京本社文化部長。96年東京本社文化部編集委員。2010年8月、日本経済新聞社を退職。11年多摩美術大学客員教授に就任。同時期に六花亭製菓が運営する「中札内美術村」の館長に就任。『日本経済新聞』2004年2月15日朝刊に「美の美目のヒント①—古賀春江」を執筆。ジャーナリスト、美術館長

武田美穂 (たけだ・みほ/1959年～)

東京生れ。日本大学芸術学部油絵科中退。1987年『あしたえんそく』でクレヨンハウス絵本大賞、絵本作家としてデビュー。91年『となりのせきのますだくん』は絵本にっぽん大賞、講談社出版文化賞絵本賞。92年度青少年読書感想文全国コンクールの課題図書(低学年の部)に選ばれ、代表作。91年『ふしぎのおうちはおキドキなのだ』で絵本にっぽん賞。2001年『すみっこのおぼけ』で日本絵本賞読者賞(山田養蜂場賞)、けんぷら絵本の里大賞。07年に『おかあさん、げんきですか。』(文:後藤竜二)で日本絵本賞大賞、同読者賞。作家・森絵都とコンビを組んだ「にんきもの本シリーズ」。絵本、イラスト、挿絵、キャラクターデザイン

竹内 一 (たけうち・はじめ/1963年～)

東京生れ。1987年多摩美術大学油画専攻卒。87年 新制作展入選。2002、5年 新制作展で新作家賞。06年新制作協会会員。06年 損保ジャパン選抜奨励展出品。09年個展「確かな音」(銀河に掲載)、日本美術家連盟会員、キリスト教美術協会会員。洋画

竹内久一 (たけのうち・ひさかず/1857～1916年)

江戸生れ。初め堀内龍仙、川本洲楽に師事し、牙彫刻を学び、1880年奈良見物のおり古仏像に感銘、木彫の再興を志して正倉院御物(現宝物)や社寺の古美術を研究、模作した。93年シカゴ万国博覧会に『伎芸天像』(→伎芸天。東京芸術大学大学美術館)を出品、木彫着色に優れ、高村光雲、石川光明とともに明治初期三大彫刻家の一人に数えられた。東京美術学校彫刻科初代教授、文展審査員、皇室技芸員を務め、後進の木彫指導にも尽した。1916年没、59歳。彫刻、美教

竹内不忘 (たけうち・ふぼう/1909～2011年)

長野県生れ。川端画学校に学ぶ。1931年日本美術協会で銅賞。35年東邦彌弼院賞。37年文展に出品、38年東邦彌弼院恩賜賞。65年日展審査員、66年日展会員。79年紺綬褒章。90年池袋西口公園に『平和の像』を建立。故郷である東御市には東御市立小学校の『太陽の子』、東御市役所前市民交流広場の『雷電像』。2011年没、101歳。彫刻

武内光仁 (たけうち・みつひと/1947年～)

高知県生れ。1960年代アヴァンギャルド集団「前衛土佐派」の最年少メンバーとして活躍。65年新象作家協会展初出品、佳作賞。97年<TOSA-TOSA'97 こんなアヴァンギャルド芸術があった！ 高知の1960年代>(高知県立美術館)。個展(東京・井上画廊)以後、毎年開催(東京・アンファン、ホシヤ他)。98年アウトドア・ワンマン・ショウ(白木谷アトリエ)。2001年アート電車制作(高知県立美術館企画)。前衛土佐派事務局、新象作家協会会員。立体、彫刻

竹添履信 (たけぞえ・りしん/1900～1934年)

東京生れ。嘉納治五郎の長男。竹添進一郎の養嗣子。東京高師附属中学卒。若山牧水に師事、嘉納登仙、二九十八の筆名で「創作」に短歌を発表。また春陽会をへて国画創作協会に出品。1932年国画会会友。1934年没、35歳。歌人、洋画

竹田敬方 (たけだ・けいほう/1873～1942年)

東京生れ。日本画家の水野年方に人物画を、1891年からは川端玉章に山水画を学ぶ。画業に邁進し、青年絵画協会臨時展や内国勸業博覧会などで作品を発表。1901年日本美術院と日本絵画協会の共催による連合絵画共進会で2回連続して二等褒状。日本美術協会や日本画会・異画会の会員。1901年文墨協会評議員。07年新派に対抗して結成された正派同志会に参加し、評議員。09年師・玉章が主宰する川端画学校の教諭に就任し、後進の指導に尽力。1942年没、69歳。日本画、美教

竹林高行 (たけばやし・たけゆき/1889～1970年)

奈良県生れ。木工の神様といわれた竹内久一に師事。28歳で奈良に戻り、仏像修理、仏像彫刻作品制作の携わり、その後、81歳で没するまで、奈良一刀彫の名工として知られた人

物。竹内の大作、伎芸天像(シカゴ万博出品・東京藝大蔵)も、竹林高行が手伝った。1970年没、81歳。木彫、奈良一刀彫

竹原春朝齋 (たけはら・しゅんちようさい/生誕年不詳~1801年)

大岡春卜の門人で坂本朝汐齋に学ぶ。名所図会の絵師。1768年刊で増谷(升屋)自楽作の浮世草子『加古川本草綱目』巻5冊の挿絵を皮切りに、69年頃刊行の『上難波宮祭礼行列記』、半井金陵作『世間化物質気』など、大阪の版元升屋大蔵(彦太郎)の画工を務める。狂歌本の例としては、1777年刊行の絵入り本『狂歌寝さめの花』一冊(芥河貞佐・玉雲齋貞右編)がある。江戸中-後期の大阪の浮世絵師、挿絵

竹内吟秋 (たけうち・ぎんしゅう/1831~1913年)

石川県生まれ。加賀(金沢藩士浅井長右衛門)の長男。1878年山代温泉の塚谷誠について陶法を修め、79年には自費で私学校を開き陶画法を教えた。80年には九谷陶器会社の支配人となり、81年には東京へ出て、85年にはG.ワグナーについて陶画法を学んだ。作風は細密な筆法で赤と金彩を駆使し、中国風図案の影響を強く受け、華麗な色絵法を完成した。94年石川県立工業高校の教職についた。1913年没、82歳。陶工(絵付師)、美教

竹内柳蛙 (たけうち・りゅうあ/生没年不詳)

茨城県生まれ。猿島郡境町の人。河鍋晁斎の画風を慕い、門人の真野亭に学んだ。五代目。日本画

竹内柳蛙・小国政?・五代目国政 (たけうち・りゅう/生没年不詳)

四代目歌川国政の長男で門人。始めは絵を父に学ぶ。1891年頃に歌川国政の名を継いで「五代目国政」の落款を用いている。95年以降、四条派の画家飯島光峨の門下「竹内柳蛙」と名乗った。「五代目国政筆」と落款された作品以降にも「小国政」と落款した作品を多数発表。91年頃から後の「小国政」は別人であるのかは不明である。代表作として「魯国皇太子御着之図」や「明治二十四年美濃大地震の図」。日清戦争の錦絵などを描いており、柳蛙の作品としては日露戦争物が多く見られる。1923年の関東大震災以前に没したともいわれる。明治期の日本画

武田幾丸 (たけだ・いくまる/生没年不詳)

落合芳幾の門人。一交齋、松花楼と号す。作画期は慶応から明治の頃にかけてで、風俗画や開化絵を残している。江戸末期-明治時代にかけての浮世絵師

竹田霞村 (たけだ・かそん/1884~1955年)

島根県生まれ。東京美術学校に入学、下村観山、川端玉章に師事し研鑽を続けたが、日本画壇内の抗争を嫌い会派に属さなかった。1916年故郷へ帰り、画趣至る時絵筆をとる恬淡な生活を続けた。特に四条派や琳派の画風に傾倒し、装飾的で気品ある花鳥画を遺している。1955年没、71歳。日本画

竹田敬方 (たけだ・けいほう/1873~1942年)

東京生まれ。1887年水野年方について人物画を学び、91年川端玉章に師事して山水画を修め、早くから日本青年絵画協会、日本美術協会で活躍した。1901年には文墨協会評議員、09年川端画学校教諭となり、明治絵画界にも幹事或は審査員。「源義家過勿来関図」(日本青年絵画協会臨時展)「祭礼図」(第4回内国勸業博覧会)同「少女遊劇図」(第1回日本絵画共進会)。「田子富士図」及「夕月」(東京勸業博覧会)。1942年没、70歳。日本画、美教

竹田耕三 (たけだ・こうぞう/1946年~)

名古屋市生まれ。1969年日本染飾作家協会理事長四代目田端喜八氏に師事。70年株式会社竹田嘉兵衛商店入社。76年藍染めと絞り技法の研究を始める。84年ギャラリーじゅらくにて「竹田耕三絞り展」。2006年衣裳デザイナーワダエミ氏より、正月特番「里見八犬伝」で、絞り衣裳協力を依頼される。ニューヨーク日本クラブギャラリーにて、「竹田耕三・キルト服部早苗二人展」。絞工芸美術協会会長、日本藍染文化協会代表、(財)日本伝承染織振興会評議員、絞りコミュニティー顧問。染色、絞り作家

竹田大助 (たけだ・たいすけ/1927~2008年)

名古屋市生まれ。陸軍士官学校在学中に終戦。1948年頃からほぼ独学で絵を描き始めた。49年名古屋市長良中学校に奉職し、61年まで中学校の教師を続けた。50年日本アンデパンダン展に出品し、自由美術協会展にも出品。制作時期は、その後の約10年ほど。52年には美術文化協会に移り、54年には美術文化協会の内紛を契機として、堀尾実、水谷

勇夫らとともに脱会、55年匹画会を結成し、発表。愛知県で没、81歳。洋画、教

武田健夫 (たけだ・たけお/1913～2013年)

東京生れ。1932年『新版画』の感想文を小野忠重に送ったことをきっかけに、小野との交友が始まり、9月「新版画集団」(同年4月結成)に参加。36年東京帝国大学経済学部卒。日本興業銀行に就職。37年回日本版画協会展、41年造型版画展に出品。54年日本版画協会展会友。52年春陽会展出品、61年には版画部会員。東京で没、100歳。版画

武谷雪嶺 (たけたに・せつれい/1896～1981年)

岡山県生れ、師川合玉堂・山内多門の高弟、日本画会展・各展覧会に入選受賞多数、山水画。1981年没、85歳。日本画

武永慎雄 (たけなが・まさお?/1913～1997年)

広島市生れ。映画館に勤務する傍ら、独学で油彩画を学び、東光会会員、理事。日展会員、日展審査員。仏画と民家を描いた。1945年に被爆。日本の田園風景、とりわけ、広島県下にある茅葺き屋根の民家を精力的に描き続け、熊野の民家も多く描いています。1997年没、84歳。2013年はつかわち美術ギャラリーで生誕100年武永慎雄展。洋画

建部綾足・寒葉齋 (たけべ・あやたり/1719～1774年)

1719年生れ。20歳郷里の陸奥弘前を出奔、全国を遊歴。はじめ伊勢派の俳諧宗匠として活動。また長崎で絵画をまなび寒葉齋の画号で一家をなす。宝暦13年賀茂真淵に入門、俳諧をすてて19音の片歌説をととなえ、片歌道守の称号。晩年「西山物語」「本朝水滸伝」などの読み本をあらわした。1774年没、56歳。江戸中期の国学者、俳人、画家

武部雅子 (たけべ・まさこ/1960年～)

神奈川県生れ。1990年東京藝術大学美術学部絵画科日本画専攻卒(95年後期博士課程満期修了)。92年再興院展入選。98年「花と緑 自然を描く展」(佐藤美術館)優秀賞。2006年春の院展春季展賞。10年再興院展奨励賞(11年、14年)。11年春の院展春季展賞・郁夫賞(12年、14年)。15年日本美術院展日本美術院賞・大観賞、第21回天心記念茨城賞。日本画

建部凌岱 (たけべ・りょうたい/1719～1774年)

江戸生れ。弘前藩の家老・喜多村家の次男。20歳で出家して説教僧。歌人、随筆家、読本作家、国学者としても活躍し、俳諧を通して出会った南画家・彭城百川に影響を受け、俳画をはじめ画事にも秀でた凌岱は、中津藩・奥平家の支援を受け、ほかの江戸の絵師に先駆けて、1750年に長崎へ游学。唐通事の熊代熊斐や唐絵目利の石崎元徳らに色鮮やかで写実的な花鳥画を学んだ。54年山水画で知られる来船清人の費漢源に師事。1774年没、55歳。江戸中期の絵師、俳画、南画

150

竹宮恵子 (たけみや・けいこ/生誕年不詳～)

1968年漫画家プロデビュー。少年愛をテーマとした「風と木の詩(うた)」(1976～84年)は人間ドラマの傑作として、その後の少女漫画の世界に大きな影響を与える。SF漫画「地球へ…(テラへ)」や「天馬の血族」など、幅広いテーマの代表作多数。第9回星雲賞コミック部門、第25回小学館漫画賞、第41回日本漫画家協会賞文部科学大臣賞。京都精華大学名誉教授、日本漫画家協会理事、日本マンガ学会会長。2014年紫綬褒章。20年には徳島県文化賞。漫画、美教

竹村渭川 (たけむら・いせん/1877～没年不詳)

高知市生れ。幼いころから画を好み、小松洞玉門下の中谷一近に手ほどきを受け、ついで種田豊水に学んだ。94年上京して滝和亭の門に入り、和亭が没するまで6年間師事した。明治40年、土陽美術会の結成に参加した。日本画

竹村篁邨 (たけむら・こうそん/1867～1920年)

秋田県生れ。祖父は竹村四勿軒。平福穂庵に師事した。はじめ篁邨於菟といひ、のちに耕芸、秀穂などと号した。山水を得意とし、俳句、書、彫刻も巧みで句の時はひさご庵と号した。1920年没、53歳。日本画

竹邨三陽 (たけむら・さんよう/1799～1857年)

甲府市生れ。甲府学問所の徽典館で友野霞舟らに学び、のちに尾張名古屋で山本梅逸、中林竹洞に師事した。江戸、伊豆、長野、岐阜、愛知、京都と遊歴し、その後甲府に戻

り、父の設立した私塾で絵画をはじめ、漢学や書道を庶民に教授したと思われる。門人に三枝雲岱、渡辺天麗、村田昆棟、斎藤溪雲、古屋葉雅、中丸精十郎らがいる。1857年没、58歳。江戸後期の絵師

武村文海 (たけむら・ぶんかい/1797～1863年)

1797年生れ。角館における文芸一般の指導者で、角館付近に多くの作品が残っている。角館で文海が切り開いた四条派の画法は、平福文浪、穂庵、百穂へと引き継がれた。1863年没66歳。日本画

多胡逸斎 (たご・いっさい/1802～1857年)

茨城県生れ。1826年津和野藩家老多胡家の養子となる。家老職を主に九代茲尚・十代茲方の治世時で勤め、江戸藩邸での在勤中には、江戸の文人画家たちと広く交流を持ち、絵は片桐桐陰、桜間青厓、谷文晁に学び、椿椿山、高久靄厓、立原杏所らと交際し、特に渡辺崋山と親密であった。逸斎が購入した清人画家俞宗礼の画帖を崋山に一時預け、共に研鑽した逸話が知られる。42年十一代茲監との間で政策上の相違があり隠居。後は津和野にて画事に専念した。1857年没、55歳。江戸後期の画家

田坂美代子 (たさか・みよこ/1955年～)

山口県生れ。1977年東京女子美術大学洋画科卒。在学中、独立美術展入選。以後4回入選。79年女流画家協会入選。以後10回入選。80年西日本美術展奨励賞。宇部市現代日本絵画展入選。山口県展入選。91年西日本女流美術展大賞。女流画家協会所属。洋画

田澤 茂 (たざわ・しげる/1925～2014年)

青森県生れ。軍隊生活を経て1948年まで鉱山・炭鉱などで働く傍ら、絵を描き始める。53年猪熊弦一郎主宰の純粹美術研究所に入会、53年新制作協会展に入選。67年新制作協会会員。75年安井賞展出品。故郷・津軽の風土、民話や神話、神仏群像、鬼や妖怪などを題材に、ユーモアを込めた絵画作品を発表。2014年没、89歳。洋画

多田敬一 (ただ・けいいち/1900～1981年)

京都生れ。京都市立絵画専門学校卒。入江波光に師事する。1926年国画創作協会展で

入選、27年会友。29年帝展で入選。以後、帝展、新文展、日展にたびたび入選。49年から法隆寺金堂壁画、平等院鳳凰堂扉絵などの模写に専念。1981年没、80歳。日本画

田近竹邨 (たちか・ちくそん/1864～1922年)

大分県生れ。田近陽一郎の子。郷里で淵野桂僊に、京都で田能村直入にまなぶ。京都府画学校卒。1896年日本南画協会に参加。1908年文展から14年まで連続受賞。21年日本南画院を結成。1922年没、59歳。日本画、南画、版画

田代忠国 (たしろ・ただくに/1757～1830年)

1757年生れ。佐竹義敦(曙山)、義和の二代に仕えた秋田藩士、秋田蘭画の作者の一人。忠国という名は藩主義敦から賜った。小野田直武と同様、1773年に平賀源内から洋画法を直接教示されたとの説がある。直武画を範として描いたものも多く、濃彩細密な写実的表現を特色とする。1830年没、73歳。秋田蘭画

多田北鳥 (ただ・ほくう/1889～1948年)

松本市生れ。蔵前高工図案科選科、川端画学校に学び、凸版印刷図案部、市田オフセット印刷意匠部長、東京図案研究所長等を歴任。1922年実用美術研究所サン・スタジオを創設し商業美術の向上と後進の指導に努力した。又新興日本童画協会常務委員、全日本産業美術連盟常任委員をつとめ、実用版画美術協会を主宰した。著書に誠文堂発行「多田北鳥図案集」。静岡県で没、60歳。デザイナー、商業美術の普及

館 震舫 (たち・かほう/1808～1853年)

新潟県生れ。画ははじめ清水曲河に師事し、のちに岡田閑林に学んだ。その後菊池容齋にもついて、花鳥・人物・山水画を得意とした。1853年没、46歳。江戸後期の絵師

田近竹邨 (たちか・ちくそん/1864～1922年)

大分県生れ。田近陽一郎の子。郷里で淵野桂僊に、京都で田能村直入にまなぶ。京都府画学校卒。1896年日本南画協会に参加。1908～14年文展で連続受賞。21年日本南画院を結成。1922年没、59歳。日本画、南画、版画

橋 守国 (たちばな・もりくに/1679～1748年)

大坂の人。狩野(のう)派の鶴沢探山の門人。その画法をつたえるためおおくの絵本を刊行し、浮世絵におおきな影響をあたえた。1748年没、70歳。作品に「絵本故事談」「絵本鶯宿梅」など。**江戸中期の絵師**

橋 保国 (たちばな・やすく/1715～1792年)

大坂の人。橋守国の子、門人。父について狩野派の画法を学び、父の業を継いで主に絵本の挿絵を描いた。父との合作もある。著作として、1755年刊行の『絵本野山草』5巻5冊、57年刊行の『画志』3冊、79年刊行の『絵本詠物選』5巻。そのうち『絵本野山草』は、165品にも及ぶ植物の特徴を精緻な図とともに記述した本である。宝暦5年までに法橋、70年までに法眼位。1792年没、78歳。門人に、婿養子の橋保春、また橋守行も父守国か保国の弟子だったと想定される。**江戸中期の絵師**

立原位貫 (たちばら・いぬき/1951～2015年)

名古屋市生れ。25歳の時、一枚の浮世絵に感銘、ジャズのサクソプレーヤーから浮世絵復刻の世界に入った。1976年浮世絵版画の制作、研究開始。江戸時代の浮世絵を現代に蘇らせた木版画家として国内外で高い評価。オリジナル版画も制作。挿絵も作成。2015年没、64歳。**版画、浮世絵復刻**

立原杏所 (たちばら・きょうしよ/1785～1840年)

立原翠軒の子。水戸藩士。初め水戸の町人画家林十江に、のち谷文晁に学んだ。さらに渡辺崋山、椿椿山、高久靄厓らと交わり、品格高い花鳥虫魚図を得意とした。主要作品『芦荻鴛鴦図(ろてきえんおうず)』『松下弹琴図』『雪月花』『水藻遊魚図』『葡萄図』。1840年没、65歳。**江戸後期の南画家**

龍右衛門 (たつえもん/生没年不詳)

生没年不詳。世阿弥の《申楽談儀》などから、福井県東部で南北朝から室町初期ころ活躍した作家のように考えられている。後世の能楽伝書類では十作の一人に数え、若い男女や尉の面を得意としたと伝える。世阿弥のころの観世座にはその尉面があったといわれ、小面や曲見(しやくみ)、慈童や喝食の類に、彼の作に擬せられるものが多いが、真作を同定するこ

とは困難である。**南北朝から室町初期ころ活躍した能面作家**

十作とは；日光一弥勒、赤鶴鬼、越智、龍右衛門女男尉、夜叉、文蔵女、小牛尉、徳若アヤカシ、三光ベシミ尉、日氷霊、是を十作ともいふなり

立木義浩 (たつきよしひろ/1937年～)

徳島県生れ。1958年広告制作会社アドセンター設立時にカメラマンとして参加。69年フリーランス。女性を中心に、著名人の撮影を多数手がける。同時に世界中でスナップ写真を日常的に撮り続け、多くの作品を世に送り出す。65年日本写真批評家協会新人賞、写真集に『マイアメリカ』『東寺』など、2012年『Tokyo』、16年『動機なき写真 just because』、18年『舌出し天使』、19年『20C』、20年『Afternoon Paris』他多数。**写真**

辰馬悦叟 (たつま・えつそう/1835～1920年)

近代文人画の巨匠富岡鉄斎(1836～1924)と親交が深く、鉄斎作品を蒐集。現在そのコレクションの多くは、辰馬考古資料館の所蔵。辰馬氏が清荒神清澄寺の篤信者であったことから、没後、境内に頌徳碑を建碑することになりました。当山第37世法主坂本光浄(1875～1969)は、石碑の篆額(一番上に刻まれた題字)を依頼するために、初めて京都の鉄斎を訪ねました。鉄斎と光浄の交流に繋がった。1920年没、85歳。**西宮の酒造家、北辰馬家初代当主、富岡鉄斎のコレクター**

辰巳四郎 (たつみ・しろう/1938～2003年)

東京生れ。1957年早稲田大学第一法学部入学。59年早稲田祭ポスター・パンフレットの表紙コンテストで金賞。61年早稲田大学を卒業し、武蔵野美術大学本科商業デザイン入学。62年日宣美展に入選。65年武蔵野美術大学卒、電通に入社。66年「カフカ全集・審判」(中河原暉朗・辰巳四郎)で日宣美展特選。67年「法王庁の抜け穴」(中河原暉朗・辰巳四郎)など4点で特選。朝日広告賞、毎日広告賞など大小さまざまなコンペに専念。68年電通を退社、フリーランスのイラストレーター。演劇実験室◎天井桟敷「さらば映画よファン篇・スター篇」の美術を手がける。72年ADC賞で銀賞。この頃から雑誌をはじめ、小説など書籍の表紙、挿画、装丁を手がける。75年『イラストレーションナウ 辰巳四郎の世界』(立風書房)刊行。2003年没、65歳。**デザイン、イラスト**

立見榮勇 (たつみ・ひでお/1940年～)

東京れ。1959年金沢市立工業高等学校電気科卒、日立製作所に入社(97年退社)、洋画家栗原信などに師事。65年二紀展に入選(81年宮本賞、85年文部大臣賞、2002年栗原賞、11年内閣総理大臣賞)。82年現代美術選抜展(文化庁)出品(86年にも出品)。88年現代茨城美術展に出品。99年現代茨城作家美術展に出品(以後毎回出品)。**洋画**

田鶴濱洋一郎 (たつるさわ・よういちろう/1949年～)

栃木県生れ。個展、グループ展多数。海外(韓国、ベトナムなど)での交流展へも参加。東京都在住。茂木町にアトリエを持つ。「なかがわまちアートフォレスト2011」の選考委員のひとり。和紙に墨で抽象作品を制作。**現代美術**

建石修志 (たていし・しゅうじ/1949年～)

東京生れ。1972年、東京藝術大学美術学部工芸科ビジュアルデザイン専攻卒。サロン・ド・プランタン賞。73年連載小説のイラスト。75年個展「変形譚」(永井画廊、東京)。76年画集『凍結するアリスたちの日々に』(深夜叢書社)刊行。詩画集『悪徳の暹羅雙生児もしくは柱とその崩壊』(詩・相澤啓三、沖積舎)刊行。77年画集『変形譚』(沖積舎)刊行。79年絵本『もりでみつけたおともだち』(作・舟崎靖子、偕成社)刊行。80年絵本『おおかみと七ひきの子やぎ』(作・グリム、訳・矢川澄子、集英社)刊行。87年個展「少年は石の傍らに微睡む」(青木画廊、東京)。2006年東京イラストレーターズ・ソサエティの会員。11年画集『leaf/poetry—紙片の狭間へ—』(青木画廊)刊行。**幻想的絵画、イラスト、絵本、挿絵**

館井啓明 (たてい・ひろあき/1937～1995年)

ソウル生れ。1961年武蔵野美術大学油絵科卒、福島青美会参加。61～71年西川産業株式会社デザイン部入社、福島市内中合デパートにおいて個展開催、アンデパンダン展出展。71～74年渡仏。赤光社会員、帰国後も急逝するまで、ヨーロッパ、北米、南米、インドなど精力的にスケッチ旅行を行う。1995年没、58歳。99年北海道七飯町に館井啓明記念アトリエ館が開館。2011年アメリカニューヨークにおいて遺作展「ラスト・サムライ」が開催。**現代美術、洋画、個人美術館**

館岡栗山 (たておか・りつざん/1897～1978年)

1897年生れ。秋田師範中退。近藤浩一路、安田靫彦に師事。1933年院展入選。45年郷里の秋田県にかえり、なまほげなど郷土の風物をえがいた。1978年没、81歳。作品に「秋田芸能」など。**日本画**

建島朔弥 (たてはた・さくや/1944年～)

サイゴン(現ホーチミン市)生れ。1968年東京芸術大学美術学部彫刻科卒。68～71年パリ国立高等美術学校(レーグ教室)留学。76年昭和女子大学短期大学部専任講師。79年昭和女子大学短期大学部助教授。80年文部省初等中等教育局教科書調査官。98年日本大学芸術学部教授。**彫刻、美教、教科書**

立山周平 (たてやま・しゅうへい/1944年～)

宮崎県生れ。京都市立美術大学で日本画を学ぶ。ライフワークとして桜を描く他にも都市環境、街造りの中に、多くの建築壁画あるいは街のモニュメントやオブジェを制作。**日本画、壁画、モニュメント、オブジェ**

立山 崇 (たてやま・たかし/1933～2004年)

福岡県生れ。1956年早稲田大学中退。師は大沢昌介。1956年二科展入選。65年二科展特選。神奈川県民展受賞、ロータリアン賞。73年二科展でローマ賞。79年伯展最優秀賞。2001年二科展で内閣総理大臣賞。2004年没、71歳。**洋画**

立脇泰山 (たてわき・たいざん/1886～1970年)

兵庫県生れ。京都市美術工芸学校で日本画を学んだ。関西日本画壇の竹内栖鳳に師事、文展、帝展に入選、中央画壇で活躍。1913年満願寺滞在中には、のちの「異色の画家」と称された当町出身の日本画家谷角日沙春も泰山から日本画を学んでいる。戦後は、兵庫県日本画家連盟委員長。65年兵庫県文化賞。1970年没、84歳。**日本画**

田中案山子 (たなか・あんざんし/1906～1970年)

東京生れ。田中以知庵にまなぶ。29年院展に入選。32年院友。37年小林巢居人らと新興美術院を結成。戦後、新興美術院を再興。55年からは個展を中心に活躍した。1970年

没、64歳。日本画

田中 薫 (たなか・いさお/1944年～)

神戸市生れ。1968年京都市立美術大学彫刻科卒。69年現代日本美術展 13回東京国立近代美術館賞、14回で神奈川県立近代美術館賞。76年神戸須磨離宮公園現代彫刻展で朝日新聞社賞、7回で神戸ポートアイランド博覧会協会賞、8回で兵庫県立近代美術館賞、9回で神奈川県立近代美術館賞、10回で神戸市緑化芸術賞、11回で土方定一記念賞、12回で宇部市野外彫刻美術館賞。79年ヘンリー・ムア大賞展で特別優秀賞。4回彫刻の森美術館賞。第10回中原悌二郎賞優秀賞。79年現代日本彫刻展で大賞。82～83年文化庁派遣芸術家在外研修員でメキシコ研修。彫刻

田中以知庵 (たなか・いちなん/1893～1958年)

東京生れ。松本楓湖にまなび、1922年春陽会創立の際に客員、29年日本南画院同人。新文展、日展に出品し審査員。1958年没、64歳。日本画

田中栄作 (たなか・えいさく/1933年～)

群馬県生れ。1952年武蔵野美術学校入学、55年同校を中退、東京藝術大学に入学し、行動美術展で「行動美術賞」。58年東京芸術大学彫刻科卒。清水多嘉示に師事。60年行動美術協会会員。61～62年渡欧 Academie de la Grand Chaumiere に学ぶ。ユーゴスラヴィアの国際彫刻シンポジウムで最高賞。行動美術展を中心に、朝日選抜秀作美術展、日本国際美術展、現代日本彫刻展など、国内外で活躍。武蔵野美術大学教授(本学空間演出デザイン学科)。長崎県立美術館壁画レリーフのデザインを行った。彫刻、美教、デザイン

田中木芽 (たなか・このめ/1935～1996年)

秋田市生れ。1958年東京芸術大学美術学部工芸科漆芸部卒、翌年専攻科を修了。61年、漆によるパネルや器を中心に初個展を開催。しかし、漆アレルギーが治らず油絵に転向し、73年新制作協会会員の瀬島好正に師事。77年神奈川県女流美術家協会展に出品し、84年横浜市長賞、86年神奈川県知事賞、87年協会賞、88年会員。82年モダンアート展に出品、94年会員。1996年没、61歳。彫刻

田中嘉三 (たなか・かぞう/1909～1967年)

茨城県生れ。1923年木村武山に師事。29年日本美術院試作展で入選。37年再興院展に初出品、以後院展、戦後には春の院展でも活躍。39年茨城新聞社の従軍記者として中国に渡る。47年常土社結成。47年奥村土牛に師事。47年再興院展で日本美術院賞(49年白寿賞、院友推挙)。水戸で没、58歳。日本画

田中亀水 (たなか・きすい/1820～1867年)

熊本生れ。肥後熊本の人。肥後土佐派の祖福田太華にまなび、のち京都で吉田公均(こうきん)につき文人画をおさめる。草花や人物をえがく。土佐家にも出入りした。1867年没、48歳。江戸後期の絵師

田中信太郎 (たなか・しんたろう/1940～2019年)

東京生れ。戦時中日立市に疎開。1958年茨城県立日立第一高校卒。1960年代から60年間にわたり制作をつづけ、日本美術界を牽引。読売アンデパンダン、ネオ・ダダ・オルガナイザーに参画、幾何学的でミニマルな立体表現で知られ、80年代以降抽象的な平面に立体を組み合わせるオリジナルな作品を手掛けた。没後2020年に市原湖畔美術館とアートフロントギャラリーで個展が開かれた。アーティゾン美術館に新たに6作品が収蔵され、エントランスを飾る常設の彫刻作品(1986)とともに人気。2019年没、79歳。彫刻

田中日佐夫 (たなか・ひさお/1932～2009年)

岡山市生れ。同志社大学短期大学部英語科卒、立命館大学文学部史学科に編入した後、立命館大学大学院文学研究科日本史学専攻修士課程修了。龍村織物美術研究所、滋賀県教育委員会文化財保護課に勤務。1972年成城大学文芸学部助教授、79年教授。84年『日本画 繚乱の季節』でサントリー学芸賞。88年『竹内栖鳳』で芸術選奨文部大臣賞。94年秋田県立近代美術館館長。99年紫綬褒章。2004年旭日小綬章。2009年没、77歳。美教、美史、美術館長

田中抱二 (たなか・ほうじ/1815～1885年)

江戸生れ。幕府の御用商人。酒井抱一に学び、同門の四天王の一人といわれる。俳句にも秀でた。1885年没、70歳。江戸後期の絵師

田中頼璋 (たなか・らいしょう/1868～1940年)

島根県生れ。はじめ山口県萩(はぎ)の森寛齋にまなび、1899年上京、川端玉章に入門。1908年文展で入賞。16、17年と連続特選。24年から帝展委員。写生風の山水画をえがいた。1940年没、73歳。代表作に「挂瀑四致」。日本画

田中蘭谷 (たなか・らんこく/1884～1959年)

千葉県生れ。苦学して美術関係の学校を卒業し、甲府の中学校に就めたとされる。その後、米山朴庵に師事し、23歳の時に谷村に移り、絵甲斐絹の下絵を描きながら絵の道に専念し、藤井霞郷の紹介で小室翠雲の門に入った。1930年帝展に入選、以後入選を重ねた。東京に画室を持ち、東京と谷村を行き来する生活となった。1959年没、75歳。日本画

田中宏治 (たなか・こうじ/1969年～)

愛知県生れ。1989年長崎造形美術学院に学ぶ。90年長崎県展で西日本新聞社賞。91年二紀展初入選、以降多数入選。92年長崎県展で市長賞。93年長崎県展で西日本新聞社賞。96年長崎新美術展奨励賞。97年西部二紀展奨励賞、長崎県展毎日新聞社賞。98年大王大賞展秀作賞、西部二紀展西部二紀賞、長崎県展野口彌太郎賞、第52回二紀展奨励賞。99年個展開催。洋画

田中光常 (たなか・こうじょう/1924～2016年)

静岡県生れ。北海道大学水産学部に進学、岡田弥一郎に師事する。戦後から北極や南極などで動物写真を撮影続け日本の動物カメラマンの先駆け。撮影地は他にアラスカ、シベリア、カナダ、中南米、アフリカ、ガラパゴスなど地球全土に渡り、撮影。1971年日本写真協会年度賞。89年紫綬褒章。2000年勲四等旭日小綬章。著書は100冊を超える。田中光常動物写真事務所取締役、日本フォトリサーチセンター会長、日本ペンダ保護協会会長。2016年没、92歳。写真(動物)

田中信太郎 (たなか・しんたろう/1940年～)

東京生れ。上京し「フォルム洋画研究所」に在籍。72年ヴェネチアビエンナーレ日本代表。60年代のアンデパンダン展、ネオ・ダダ・オルガナイザーズで活躍、戦後の前衛美術の旗手

のひとり。65年「トランプシリーズ」椿近代画廊(東京)。68年「点、線、面」東京画廊(東京)。80年「田中信太郎」村松画廊、東京画廊(東京)、緊張感を孕んだミニマルな絵画、彫刻作品は倉俣史郎を筆頭にデザイナーや建築界に影響を与えた。《風景は垂直にやってくる》(85)を発表。ブリヂストン本社ロビー彫刻《そのとき音楽が聴こえはじめた》(86)。2001年「饒舌と沈黙のカノン」(国立国際美術館)開催。日立市のアトリエで精力的に制作。洋画、彫刻、ネオタダ

田中親美 (たなか・しんび/1875～1975年)

京都生れ。大和絵師の父に絵を、多田親愛に書を学ぶ。1894年「紫式部日記絵巻」を初めて模写。以後「源氏物語絵巻」「平家納経」などを復元模写、古筆を集めた「月影帖」など多くの複製本を刊行、平安朝美術の復元・鑑識・普及に努めた。59年芸術院恩賜賞。1975年没、100歳。日本画

田中草辰 (たなか・そうしん/1847～1927年)

群馬県生れ。幼いころから画を好み、はじめ上杉勝重に入門して日光廟の彩色に随行、のちに田崎草雲に師事。人物画を得意とし、特に達磨図を好んで描いた。内国勸業博覧会などでも受賞。中年で筆を断ち政界に入った。1927年没、80歳。日本画

田中 武 (たなか・たけし/1982年～)

北九州市生れ。2009年佐藤太清賞展で特選、福知山市長賞。2010年九州産業大学課程芸術研究科美術専攻博士後期課程修了。2011年トリエンナーレ豊橋 星野真吾賞展で大賞。第30回損保ジャパン美術財団選抜奨励展に出品。12年東山魁夷記念日経日本画大賞展に出品(15年出品)。個展「隠／暗」(日本橋高島屋)、以後毎年開催。日本画

田中利広 (たなか・としひろ/1932年～)

京都市生れ。1951年愛知県立刈谷高等学校卒業。父・鉄邦から鍛金を学び、金属工芸の道に進む。日本金工展で文化庁長官賞、日本工芸会賞などを受賞。日本伝統工芸展で入選、全国各地で個展「銀の工芸展」の開催を重ねる。工芸(金工)

田中訥言 (たなか・とつげん/1767～1823年)

愛知県生れ。京都で土佐光貞にまなぶ。法橋(ほつきょう)。古画の模写をとおして古土佐派

の技術を研究、復古大和絵派の祖といわれる。門人に浮田一蕙、渡辺周溪。1823年没、57歳。江戸後期の絵師、復古大和絵派の祖

田中日華 (たなか・にっか/生誕年不詳～1845年)

京都の人。四条派の岡本豊彦にまなび、高弟のひとりといわれる。人物・花鳥・草花画を得意とした。1845年没。江戸後期の絵師

田中惟之 (たなか・のぶゆき/1935～2013年)

1935年生れ。長年、横浜にアトリエを構えて制作をした横浜ゆかりの画家。中学在学中に洋画家の國領経郎を生涯師事。日洋会に出品。2013年没、78歳。洋画

田中春弥 (たなか・はるや/1914～2010年)

福岡県生れ。中学卒業後上京、川端画学校を経て東京美術学校図画師範科に入学し、伊原宇三郎に学ぶ1950年に一水会展と日展に入選。以後も一水会展で入選、受賞を重ねて会員となり、のち委員。日展でも、特選や文部大臣賞など受賞を重ね、会員、のち評議員。人物やメキシコの遺跡、楽器などのモチーフを経て、後年は信州や阿蘇などに取材した広大な風景画を展開。2010年没、96歳。洋画

200

田中松太郎 (たなか・まつたろう/1863～1949年)

富山県生れ。印刷研究のために西洋を巡り、日本の印刷技術及び三色版印刷に一進歩をもたらし、1941年毎日新聞社から印刷功労賞。ホシの会の会員。1949年没、87歳。美術印刷

田中 実 (たなか・みのる/1923～2016年)

愛知県生れ。1942年埼玉県師範学校本科第一部卒。48年寺内萬次郎に師事、第34回光風会展で入選(56年会員)。49年水彩連盟展で入選(54年会員)。50年日展で入選(52年岡田賞、78年会員、84年会員賞、90年評議員)。93年個展(東京セントラル美術館)開催。2016年没、93歳。洋画、水彩

田中有美 (たなか・ゆうび/1840～1933年)

京都生れ。田中親美(画家)の父。従兄の岡田為恭の内弟子として宮中の絵仕事にしがたが、幼少の明治天皇の遊び相手をつとめる。1884年宮廷画家。1933年没、95歳。日本画

田中陽子 (たなか・ようこ/生誕年不詳～)

京都生れ。1970年和光大学芸術学科卒。斎藤壽一、萩太郎に師事。小野忠重版の会出席。71年より、養清堂画廊11回、川上画廊、伊勢丹、松屋、ルートギャラリー全国で個展。さつぽろ国際現代版画ビエンナーレスポンサー賞、川上澄生美術館木版画大賞展大賞。版画

田中米吉 (たなか・よねきち/1925～2021年)

山口市生れ。1945年宇部工業専門学校機械科卒。58年独立美術協会会友。69年現代日本彫刻展で宇部市野外彫刻美術館賞、7回で秀作賞、8回で毎日新聞社賞、10回で埼玉県立近代美術館賞、11回で大賞。82年山口県選賞芸術部門受賞。2021年没、96歳。彫刻

田中頼章 (たなか・らいしょう/1868～1940年)

島根県生れ。はじめ山口県萩(はぎ)の森寛斎にまなび、1899年上京川端玉章に入門。1908年文展で入賞。16、17年連続特選。24年帝展委員。写生風の山水画をえがいた。1940年没、73歳。代表作に「挂瀑四致」。日本画

田中蘭谷 (たなか・らんこく/1884～1959年)

千葉県生れ。高等小学校卒業後、苦学して美術関係の学校を卒業。甲府の中学校にこつとめたとされる。米山朴庵に師事し、23歳の時に谷村に移り絵甲斐絹の下絵を描きながら絵の道に専念し、藤井霞郷の紹介で小室翠雲の門に入った。1930年帝展に入選し、以後入選を重ねた。この頃から東京に画室を持ち、東京と谷村を行き来する生活となった。1959年没、75歳。日本画

棚田康司 (たなか・こうじ/1968年～)

兵庫県生れ。1993年東京造形大学造形学部美術学科Ⅱ類(彫刻)卒。95年東京藝術大学大学院美術研究科彫刻専攻修了。2001年文化庁芸術家在外研修員として7ヶ月ベルリンに滞在。2016年インドネシア・ソンドゥンに2ヶ月、シンガポールに1ヶ月滞在制作。2005年に「第8回岡本太郎記念現代芸術大賞」特別賞。23年10月NHK日曜美術館で放映。

彫刻(木彫。一本造り)

棚谷 勲 (たなたに・いさお/1943～1998年)

神戸市生れ。1968年東京芸術大学絵画科卒、70年東京芸術大学大学院小磯良平教室修了。72年私家限定版50部「TRANSUDE」銅版画集刊行。73年私家限定版100部「地層」銅版画集刊行。74年私家限定版70部「月と砂山」銅版画集刊行。76年高島屋百貨店日本橋店画廊個展。76年「MOMBACH 幻想」作品集・限定500部村松書館より刊行。87年「絵画思考」画論集・村松書館刊行。東海大学教養学部芸術学科教授。東京で没、55歳。版画、パステル

田辺栄次郎 (たなべ・えいじろう/1910～1998年)

石川県生れ。石川師範卒。1937年二科展に入選、のち二紀会に出品し同人。58年一陽会会員。南フランスの陽光あかるい農村や民家などをこのんでえがいた。1998年没、88歳。洋画

田辺和郎 (たなべ・かずろう/1937年～)

横浜市生れ。JAF展、毎日国際展、毎日現代展などに大型の版画作品を発表。1963年シエル賞3位。77年国際青年美術家展文部大臣賞。79年サンシャイン版画展孔版版画部門大賞。96年横浜にて「版17」の結成に参加。現在は日本版画協会会員。版画

田辺竹雲齋 初代 (たなべ・ちくうんさい I/1877～1937年)

兵庫県生れ。1890年初代和田和一斎に入門。1901年独立に際し、師より竹雲齋の号を譲り受ける。後堺市に転居。03年年内国勸業博覧会入選。15年初個展開催。24年農展三等賞。25年パリ万国現代装飾美術工芸博覧会銅賞。28年堺美術会を組織し、日本画と工芸を展覧する。36年大阪府知事より功労者表彰。多くの弟子の育成にも貢献。1937年没、60歳。工芸(竹工)

田辺竹雲齋 (三代) (たなべ・ちくうんさい III/1940～2014年)

大阪生れ。父二代竹雲齋のもとで竹に親しみ、1964年武蔵野美術大学を卒業後、初代竹雲齋の弟子の塚由忠義に学び、本格的に竹工を始めた。69年二代から小竹の号を授か

り、91年三代を襲名。64年日展に入選して以来、日展、日本現代美術展、日本現代工芸展、大阪工芸展、全関西美術展に出品、矢竹を直線的に構築した造形的な作品で注目。三代襲名後は、歴代同様、毎年大阪高島屋で個展開催。2014年没、74歳。工芸(竹工)

田辺竹雲齋 (二代) (たなべ・ちくうんさい II/1910～1998年)

大阪生れ。父初代竹雲齋に竹工を学ぶ。はじめ小竹雲齋と号した。1931年帝展に入選以来帝展、文展、戦後の日展に出品。37年初代没後、二代竹雲齋を襲名。52年日展で特選・朝倉賞、53年無監査、後審査員、評議員。59年大阪府芸術賞。62年日本現代工芸美術協会評議員。76年竹芸50年記念展開催。79年日本新工芸美術家連盟創立、総務委員。80年日本新工芸展で内閣総理大臣賞。81年勲四等瑞宝章、83年紺授褒章。1998年没、88歳。工芸(竹工)

田辺竹雲齋(四代) (たなべ・ちくうんさい IV/1973年～)

大阪生れ。父三代竹雲齋のもとで竹に親しみ。1999年東京藝術大学美術学部彫刻科卒、現大分県立竹工芸訓練センターで2年間学び、修了後、三代のもとで竹工芸に従事。2006年小竹、17年四代竹雲齋を襲名。竹工芸の伝統的な技術の習得に努め、工芸作品やオブジェ、インスタレーションを制作し、日本伝統工芸展や国内外での個展等で作品を発表。工芸(竹工)、オブジェ、インスタ

田辺房子 (たなべ・ふさこ/1915～1965年)

1915年生れ。女流画家協会会員。1965年没、50歳。神奈川県立近代美術館に作品所蔵。洋画

谷内栄次 (たにうち・えいじ/1928年～)

東京生れ。1955年日本美術会会員。58年『生命のひみつをさぐる』の挿絵。64～67年日本美術会事務局長。67年伊藤和子らと美術グループ「日本現実派」を結成。67年日本美術会の代表として東ドイツの「ケーテ・コルヴィッツ生誕100年記念」国際版画展、同国際美術会議に派遣。69年日本現実派解散。73年日本アンデパンダン展実行委員長。75年葉山嘉樹『海に生きる人々』(新日本文庫)のカバー絵を担当。85～89年日本美術会附属研究所「民美」所長。95～2001年日本美術会総会で代表。2004年『九条の会』アピールを広げる美術

の会」(略称・九条美術の会)の呼びかけ人。挿絵、表紙絵、日本美術会代表

谷内こうた (たにうち・こうた/1947～2019年)

川崎市生れ。1965年明星学園高等学校卒。叔父の谷内六郎の勧めで絵本を描き始める。69年『おじいさんのばいおりん』を出版。71年『なつのあさ』でポーロニャ国際児童図書展グラフィック賞。83年『かぜのでんしゃ』で講談社出版文化賞絵本賞。BIB金のりんご賞。90年代には叔父六郎も担当した『週刊新潮』の表紙絵も手掛けた。83年にフランス・ルーアンに移住。2019年没、72歳。洋画、絵本

谷角日沙春 (たにかど・ひさはる/1893～1971年)

兵庫県生れ。京都の画家立脇泰山に学ぶが、1914年京都に出て菊池契月に師事。18年文展に入選、20年上京して吉原に住み、遊女をモデルとした作品を制作。20年帝展に入選。24年契月塾に戻る。33年帝展で特選。新文展、日展に出品。61年頃より仏画へと傾倒。作品は大正期特有の異風な傾向から、師契月ゆずりの端正な表現へと移り、仏画の世界にも生かされた。大阪日本橋の谷口美術館に所蔵。1971年没、78歳。日本画

谷川義美 (たにかわ・よしみ/1947年～)

佐賀県生れ。現在は神奈川県在住。神奈川県美術展で県民ホール開設記念賞、神奈川県同美術協会展の「ハリ賞」、日本アンデパンダン展実行委員長などを歴任。洋画、水彩

谷 幹々 (たに・かんかん/1770～1799年)

林氏の出で名は波満。号は翠蘭。文晁の先妻。17歳のとき文晁と結婚。画を文晁に学ぶ。1799年没、29歳。江戸中期-後期の女流絵師

谷口香嶠 (たにくち・こうきょう/1864～1915年)

京都生れ。1878年東京に出て医学を学ぶが、79年翌年生家に戻り家業を手伝いながら、『芥子園画伝』や『漢画早学』で絵を独学。83年京都の幸野楳嶺に入門し、84年京都府画学校北宗画科に入学。88年『美術叢誌』刊行に尽力。90年内国勸業博覧会で三等妙技賞。91年京都私立日本青年絵画共進会で「経政遇怪」で2等3席。91年挿絵を手掛け、著書『光琳画譜』を刊行。93年京都美術学校教諭、94年京都市美術工芸学校の教諭。95年内国勸

業博覧会において3等1席。95年竹内栖鳳、菊池芳文、山元春挙と共に『雍府画帖』を出版。1900年パリ万国博覧会で銅牌。1907年文展で3等賞。09～12年京都市立絵画専門学校教授。工芸図案家としても優れる。弟子に猪飼嘯谷、野長瀬晩花、伊藤小坡、津田青楓、水越松南。1915年没、51歳。日本画、幸野楳嶺の弟子で、菊池芳文、竹内栖鳳、都路華香とともに楳嶺門下の四天王、美教

谷口山郷 (たにくち・さんごう/1914～2000年)

富山県生れ。1933年太平洋美術学校で洋画を学ぶ。後に川端画学校に転じ、日本画を専攻。48年小川中学校美術教諭。52、53年再興新興美術展に入選。55年同展で努力賞、準会員。第6回同展で会員。毎年読売アンデパンダン展へも出品。58年岩崎巴人、長崎莫人らと日本表現派を結成し出品。74年「廢家シリーズ」を描き始める。92年朝日町立ふるさと美術館で「異端の日本画家三人展」開催。2000年没、86歳。日本画、美教

谷 善徳 (たにくち・ぜんとく/1968年～)

石川県生れ。1991年金沢美術工芸大学卒。師、今野忠一、松本哲男。93年春の院展初入選(以降26回入選)。98年回春の院展奨励賞(以降'05'11'13'14'15'17'18受賞)。99年院展奨励賞(以降'04'05'06'07'11'14'18'19'20'21'22受賞)。2001年文化庁現代美術選抜展出品。18年天心記念茨城賞。日本画

谷口晶之 (たにくち・まさゆき/1943～2015年)

別府市生れ。1966年多摩美術大学卒。65年国画会展に入選。72年国画賞。77年サントリ賞と会友優作賞、国画会会員。73年から大分県立芸術短期大学で教壇に立ち、79年同短大助教授、89年教授。2015年没、72歳。洋画、美教

谷 洗馬 (たに・せんば/1885～1928年)

東京生れ。富岡永洗の門人。雑誌『少年倶楽部』や『日本少年』などに武者絵を描いた。馬絵を自らのライフワークとした。1927年には改正された『馬術教範』の挿絵を担当。馬好きが高じて自宅の半分を厩舎にして家族で馬を飼い、三児の名前に馬の字をつけるほどの馬尽くしであった。1928年没、43歳。武者絵、挿絵

谷保玲奈 (たにほ・れい な/1986年～)

東京生れ。ドミニカ共和国、ボリビアで幼年期過ごす。多摩美術大学大学院美術研究科
絵画専攻日本画領域修了。2014年『ARKO』大原美術館での滞在制作作品を発表、五島
記念文化賞美術新人賞。21年東山魁夷記念日経日本画大賞、21年神奈川文化賞未来賞
個展:「谷保玲奈展 共鳴」横浜美術館(2018)、「谷保玲奈展 菟荷」横浜三溪園旧燈明寺本
堂(2020)など個展開催。日本画

谷 文一 (たに・ぶんいち/1787～1818年)

江戸生れ。江戸薬研堀の医師利光澹斎の二男。文晁の長女宣子を妻として谷姓を名乗
った。画を文晁に学ぶ。その画は四条派風を取り入れ、将来を嘱望されたが、1818年没、31
歳。江戸後期の絵師

谷 文二 (たに・ぶんじ/1812～1850年)

江戸生れ。文晁の長男として生まれる。名は、義宣、号は萍所。田安藩に仕える。父に
学ぶが、父ほどに画名は上がらなかった。1850年没、38歳。江戸後期の絵師

谷 善徳 (たに・よしのり/1968年～)

石川県生れ。1991年金沢美術工芸大学卒。93年春の院展初入選。94年院展入選(99
年奨励賞、2018年第24回天心記念茨城賞)。98年春の院展奨励賞。99年院展奨励賞。2
001年文化庁現代美術選抜展出品。日本美術院特待。日本画

谷口靄山 (たにくち・あいざん/1817～1899年)

富山県生れ。江戸で谷文晁、高久靄厓(たかく-あい かい)に、さらに諸国遊学ののち京都
で貫名海屋(ぬきな-かい おく)にまなぶ。1880年から京都府画学校につとめる。96年の日本
南画協会設立に尽力した。1899年没、84歳。江戸後期-明治時代の絵師

谷口ジロー (たにくち・じろー/1947～2017年)

鳥取県生れ。66年鳥取県立鳥取商業高校卒。京都でサラリーマン生活を送ったのち上
京。『犬を飼う』で小学館漫画賞審査員特別賞、『「坊っちゃん」の時代』(共作・関川夏央)で
手塚治虫文化賞マンガ大賞。海外にも活躍場を広げ、2003年『遙かな町へ』で「アングラー

ム国際漫画祭」のベストシナリオ賞、優秀書店賞、鳥取市が舞台の『父の暦』はスペインでも
賞を受けた。11年フランス文化賞シュブリエを受賞。2017年没、69歳。漫画

種田豊水 (たねだ・ほうすい/1832～1899年)

山口県生れ。京都の小田海僊に花鳥画を、尾張の初代金城一國齋に漆塗りの技をまぶ。
土佐の鞍師種田家をつぎ、維新後人力車の背面に蒔絵をほどこし、豊水蒔絵と評判。晩年
は日本画で官設展覧会に入賞。1899年没、68歳。幕末-明治時代の絵師、漆芸

田根 剛 (たね・つよし/1979年～)

東京生れ。ATTA-Atelier Tsuyoshi Tane Architects 代表。フランス・パリを拠点に活動する。主
な作品に「エストニア国立博物館」「弘前れんが倉庫美術館」「アルサーニ・コレクション財団・
美術館」など。2036年完成予定の「帝国ホテル 東京 新本館」デザイン・アーキテクトを担当。
建築(美術館、博物館)

タノタイガ (たのたいが/生誕年不詳～)

東京生れ、仙台で育つ。東京造形大学彫刻科卒。東北芸術工科大学大学院修了。木彫
を創作表現の核としながら、ビデオやインターネットなどの今日的なコミュニケーション・メデ
ィアを使った作品を発表。またアートと社会を繋ぐユニークな活動を展開している。仙台市在
住。美術家、立体、ビデオ、メディアアート、パフォーマンス

田畑秋涛 (たばた・しゅうとう/1879～1964年)

京都生れ。画家を志し、明治・大正期に活躍した日本画家の菊池芳文に弟子入り。文展
に出品、11回の入選。特に「柿に鳥図」という作品は第7回文展に入選、褒状も受けた。192
9年秋日華展に参加するために、支那を漫遊。1964年没、85歳。日本画

玉木鶴亭 (たまき・かくてい/1807～1879年)

1807年生れ。玉木家は、代々唐船掛宿町筆者役(長崎港)に出入する唐船に関する貿易
事務を司る職務を勤め、1831年家業をつぐ。幼少より絵事を好み、とりわけ洋画に長けてい
たし、茶道、生花等も行う文化人であった。「特に油絵に至りては、天保年間、年三十余にし
て既に独特の妙品あり。殊に人物風景を能くし、云々」『玉木家記』。1874年長崎師範学校

予科図面科教師。1879年没、72歳。幕末維新の洋画、美教

玉井鷲溪 (たまい・がけい/生誕年不詳～1862年)

伊勢生れ。1806年名古屋に来て永坂養二の門に入り外科を学び、灰取町長栄寺門前に住んで医を業とした。寂照寺の僧・月僊に円山派を学び、さらに中林竹洞の門に入り南画を学んだ。元明清の墨画を残した。花鳥山水すべて中林竹洞に似ていた。1862年没。江戸後期の絵師、南画、墨画

玉井敬泉 (たまい・けいせん/1889～1960年)

金沢市生れ。1907年石川県立工業学校図案絵画科卒、山田敬中・結城素明に師事。上京して農商務省東京工業試験所吏員。14年文展初入選。19年京都日本画無名展首席天賞、その年帰郷。山脇こう雲らと六耀会の発足に参加。石川県工芸奨励会評議員、金城画壇会員。1960年没、71歳。日本画

玉置環斎 (たまき・かんさい/1829～1912年)

絵を戸塚茗溪に学び、幕臣の書画家・浅野長祚(ながよし)(梅堂)に仕えた。1912年没、83歳。書画、書画鑑定

玉城末一 (たまき・すえかず/1897～1943年)

大阪生れ。京都市立絵画専門学校(現京都市立芸大)卒。1922年帝展に入選。25年国画創作協会展に出品。28年新樹社結成にくわわるが、29年解散後、画壇からはなれる。「節子」などの人物画をえがいた。1943年没、47歳。日本画

玉田多紀 (たまだ・たき/1983年～)

兵庫県生れ。多摩美術大学造形表現学部造形学科卒、古紙ダンボールを使用し、生き物の造形美や性質をユニークに捉えた立体作品を制作。国内外の展覧会やウィンドウディスプレイ、TVメディアや動画配信、ワークショップなど幅広く活動。2023年平塚市美術館で個展。造形、立体、ウィンドウディスプレイ、動画

玉那覇有公 (たまなは・ゆうこう/1936年～)

沖縄県生れ。琉球紅型宗家城間家十四代・城間栄喜(しろま えいき)に師事。伝統的な紅型技法を習得後も各種の古染型が伝える意匠や技法についての研究。沖縄産生地の風合いを生かしながら現代感覚に沿った作品を発表して高い評価。デザインには特に沖縄の草花が多く使われ、色彩も華やかで美しい。1996年重要無形文化財「紅型」保持者に認定。染織(琉球紅型)

玉那覇正吉 (たまなは・まさきち/1918～1984年)

那覇市生れ。1944年東京美術学校彫刻科塑造部卒。50年安次嶺金正・安谷屋正義・金城安太郎・具志堅以徳と「五人展」結成51年「ひめゆりの塔」設計、《乙女像》(立像)制作。春陽会入選。66年春陽会会員。琉球政府文化財専門委員。琉球大学美術工芸科教授。1984年没、66歳。彫塑、美教

玉村善之助・方久斗 (たまむら・ぜんのおすけ・ほくと/1893～1951年)

京都生れ。号は方久斗。京都市立絵画専門学校に学び、菊池芳文に師事。1915年再興院展に入選。19年院展を脱退。21年村雲毅一らと高原会を結成。22年第一作家同盟の結成に参加。24年にはマヴォ、アクション、未来派美術協会などの前衛グループが合同した三科造形美術協会の結成に、日本画家として参加。同会解散後は、中原実らと単位三科を創立。30年方久斗社を創立、主宰。35年同会を解散し、同会と大乘美術会のメンバーと新興美術家協会を結成、のちに美術新協と改称。43年歷程美術協会、明朗美術連盟、美術新協が合同した日本作家協会の会員。前衛美術運動に力を注ぎ、著書に『世の中』などがある。1951年没、58歳。日本画

玉村方久斗・善之助 (たまむら・ほくと・ぜんのおすけ/1893～1951年)

京都生れ。京都市立絵画専門学校に学び、菊池芳文に師事。1915年再興院展に入選。19年院展を脱退。21年村雲毅一らと高原会を結成。22年第一作家同盟の結成に参加。24年にはマヴォ、アクション、未来派美術協会などの前衛グループが合同した三科造形美術協会の結成に、日本画家として参加。同会解散後は、中原実らと単位三科を創立。30年方久斗社を創立、主宰。35年同会を解散し、同会と大乘美術会のメンバーと新興美術家協会を結成、のちに美術新協と改称。43年歷程美術協会、明朗美術連盟、美術新協が合同した日

本作家協会の会員。前衛美術運動に力を注ぎ、著書に『世の中』などがある。1951年没、58歳。 **日本画**

田宮 進 (たみや・すすむ/1924～2003年)

秋田市生れ。東京美術学校日本画科卒、埼玉、千葉、東京などで教員をつとめる。戦後、洋画に転向し、1952年自由美術展に入選。国画会の庫田毅に師事し、53年国画会展初入選。55年モリシグ賞受賞、56年会友、61年会員。2003年没、79歳。 **美教、日本画、洋画**

田村彰英 (たむら・あきひで/1947年～)

東京生れ。1967年東京総合写真専門学校本科卒、69年同校研究科卒。写真集「TAMUPHOTOGRAPHS」により、1984年日本写真協会新人賞。写真展の開催実績多数。 **写真**

多邨 常 (たむら・つね/1925～2006年)

大分県生れ。少年時代から絵を始め、15歳で県美術展に入選。戦後も県美展を中心に作品を発表。また、一時転居していた山梨県の県展で受賞。創元会会友。帰県後はもっぱら県美展と個展を通じて自作を世に問い続けた。この間、県内各地の絵画教室で後進の指導に当たった。2006年没、81歳。 **洋画、美教**

田村一二 (たむら・いちじ/1909～1995年)

京都生れ。1930年京都市教員養成所卒、小学校勤務の傍ら、鹿子木孟郎の画塾に通う。32年休職し京都府立師範学校専攻科で絵画を学ぶ。卒業後は京都市滋野小学校の特別学級を担当、障害児教育に着手。34年独立美術京都研究所に入所、35年独立美術協会展に入選。40年美術文化協会の会員。42年著書『忘れられた子等』、44年に『手をつなぐ子等』を出版。44年石山学園、46年近江学園、61年一麦寮を設立し、障害児教育を先導。1995年没、86歳。 **美教(障害者)、洋画**

田村豪湖 (たむら・ごうこ?/1873～1940年)

新潟県生れ。橋本独山、佐竹永湖等に師事し、嘗て日本画会々員、美術研精会々員。日本美術協会或は初期文展に出品。1940年没、68歳。 **日本画**

田村彩天 (たむら・さいてん/1889～1933年)

石川県生れ。東京美術学校(現東京芸大)卒。寺崎広業(こうぎょう)にまなぶ。1920年帝展に初入選、25年、27年で特選。のち帝展審査員。1933年没、45歳。 **日本画**

田村水鷗 (たむら・すいおう/生没年不詳)

師系・経歴不明。江戸の人ともまた京都の人ともいわれるが定かではない。画風は土佐派や住吉派を本格的に学んだあとが見られ、菱川師宣の美人画風に影響を受け、元禄(1688～1704)から享保期(1716～36)ごろにかまけて、肉筆美人画を専門に手がけた。土佐派など諸派を折衷したその優美な美人画風は特徴的で、品格が高いと評価。 **江戸中期の浮世絵師**

田沼武能 (たむら・たけよし/1929～2022年)

東京生れ。東京写真工業専門学校卒。1949年にサン・ニュース・フォトスに入社、木村伊兵衛に師事。『藝術新潮』嘱託などを経て59年フリーランス。65年アメリカのタイム・ライフ社と契約。ライフワークとして世界の子どもたち、人間のドラマ、武蔵野や文士・芸術家の肖像を撮り続けている。95～2015年(公社)日本写真家協会会長。79年モービル児童文化賞、85年菊池寛賞。90年紫綬褒章、2002年勲三等瑞宝章を受章、03年文化功労者、19年写真家として初めて文化勲章を受章。20年朝日賞特別賞。日本写真著作権協会会長。日本写真保存センター代表。東京工芸大学芸術学部写真学科名誉教授。2022年没、93歳。 **写真、美教**

多邨 常 (たむら・つね/1925～2006年)

大分県生れ。独学で油彩画を学ぶ。1946年大分県美術協会展に入選。同展を主舞台に活躍。49年大分県教育委員会賞、50年特選。85、89、90、95、97、98年大分県美術協会賞。93年大分県美術協会優賞。杵築市の自宅にアトリエを構え、絵画教室を主宰。後進の育成に努めた2006年没、81歳。 **洋画、画塾**

田村鉄之助 (たむら・てつのすけ/1853～1926年)

江戸生れ。家は代々江戸錦絵の摺師(すりし)。1889年創刊の美術雑誌「国華(こっか)」の木版印刷を担当し、古画複製にもつづいた。1926年没、74歳。 **木版摺師**

多和圭三 (たわ・けい・ぞう/1952年～)

愛媛県生れ。1978年日本大学芸術学部美術学科彫刻専攻卒。80年日本大学芸術学部芸術研究所修了。2009年多摩美術大学教授。95年タカシマヤ文化基金新鋭作家奨励賞。03年中原悌二郎優秀賞。07年文化庁買上優秀美術作品。彫刻、美教

俵屋宗雪 (たわらや・そうせつ/生没年不詳)

俵屋宗達の後継者で、その弟とも弟子とも言われるが定かでない。宗達存命中は、工房を代表する画工の一人。1639年養寿寺の杉戸絵8枚の内4枚を描く。42年ごろ法橋。42年八条殿内に御内儀御殿を造営し、その化粧之間、客之間の襖絵を描く(「今枝民部留書之内」成巽閣蔵)。43年金沢に下り、前田家の御用絵師。50年狩野探幽と共に、前田利治の江戸屋敷に草花図を描いた。(金沢地方には宗雪の後継者が制作した多くの伊年印草花図屏風が残されており、その伝統は江戸時代末頃まで続いた)江戸前期の琳派の絵師

俵屋宗達 (たわらや・そうたつ/生没年不詳)

能登か加賀生? 桃山から江戸初期にかけての画家。俵屋は家号。伊年・対青軒の印を用いた。宗達光琳派、いわゆる琳派の祖。京都の上層町衆の出身とみられ、本阿弥光悦書の和歌巻の金銀泥下絵を描き、また扇面画や色紙絵などに大和絵の伝統を新解釈した斬新な装飾的画法を示し、水墨画にも新風を吹き込んだ。「風神雷神図」など屏風(びょうぶ)の大作も多い。1643年没か。桃山、江戸前期の絵師、宗達光琳派、下絵、扇面、色紙、水墨

丹阿彌岩吉 (たんあみ・いわきち/1901～1992年)

東京生れ。1917年横山大観に入門、19年再興院展に入選、21年も入選。19年院展試作展で甲賞。昭和期に落合朗風らの明朗美術連盟展に参加。36年には同人。36年東京日本橋の白木屋で個展。以後連年個展を開催。東京銀座鳩居堂画廊、東京日本橋三越、日本橋白木屋、東京日本橋店で個展。1992年没、91歳。日本画

丹保喜三郎 (たんぼ・きさぶろう/生誕年不詳～)

東京生れ。1948年茨城大学教育学部美術科入学、52年茨城県美術展に彫刻が入選、63年抽象作家集団「創」の結成に参加。67年茨城県芸術祭美術展に入選。1971年県立中

央青年の家にモニュメントを設置。74年北関東美術展に出品、同年行動展に出品。75年銀座ミヤマ画廊で個展。95年コンピュータグラフィックスによる作品を発表。彫刻、コンピュータグラフィックス

263

ち

周 秀 (ちかひで/生没年不詳)

詳細は不明。豊原国周の門人。慶応から明治期に活躍。役者絵あり。作品少ない。江戸後期-明治の絵師

力石遷交 (ちからいし・せんこう/生没年不詳)

水戸藩士。通称は勘五郎。花鳥人物をよくした。江戸期の絵師

千 種 (ちぐさ/生没年不詳)

作者の千種は室町時代の能面師で大和に住み、いわゆる六作の一人として有名である。神楽筒。室町時代の能面師

六作とは：増阿弥、千種、福来、宝来、春若、石王兵衛

筑濱喜代美 (ちくはま・きよみ/1953年～)

別府市生れ。鈴木忠実に師事し日本画を学ぶ。大分県美術展、大分県日本画展などで作品を発表する一方、新興展にも出品を続け、2005年に京都市長賞、11年に会員努力賞(祥光賞)。現在、新興美術院会員。日本画

千葉成夫 (ちば・しげお/1946年～)

岩手県生れ。早稲田大学文学部美術史学科大学院博士課程修了。東京国立近代美術館研究員を経て、中部大学教授。現代美術逸脱史 1945-1985(晶文社、1986年/増補・ちくま学芸文庫、2021年)。87年ミニマル・アート(リプロポート)。90年美術の現在地点(五柳書院)。94年奇蹟の器 デルフトのフェルメール(五柳書院)。2006年末生の日本美術史(晶文社)。08年絵画の近代の始まりカラヴァッジオ、フェルメール、ゴヤ(五柳書院)。12年カラヴァッジオからの旅(五柳書院)。美評、美教、美史

千葉 勝 (ちば・まさる/1926~1987年)

岩手県生れ。1959年にイタリアに渡って以来、四半世紀かの地を拠点にした。千葉が好んで使ったバート・シェーナという茶色の絵具が、イタリアのトスカーナ地方の古都シエナに由来している。生涯シエナの街と自然を愛し、それらを描き続けた作家。83年帰国。1987年没、61歳。2019~20年岩手県立美術館で個展。水彩、洋画、版画、スタンドグラス、陶板

長 円 (ちやうえん/生誕年不詳~1150年)

円勢の長男として生まれる。父や実弟とされている賢円と共に多くの作品を残したといわれているが、弟と同じく現存する作品はほぼ皆無である。1105年に父から尊勝寺に祀られている像を製作した事により、法橋に叙せられる。32年には法辻巖院に祀られている仏像を製作した事で法印に昇格した。後に清水寺の別当や大和の興福寺の住職も務めたが、後に辞退した。『檀像薬師如来像』1103年制作。父との共作。平安時代の円派の仏師

張 月樵 (ちやう・げっしょう/1772~1832年)

滋賀県生れ。名古屋に来て活躍した。南画の山田宮常の画才を慕い、四条派系でありながら南画系の画家たちと交流し、合作も多く残している。活躍期は中林竹洞、山本梅逸の若年期にあたり、若い梅逸に画を教えたのも張月樵である。また、各地で障壁画を制作したり、山車の幕の下絵を描くなど、多彩な活動を見せている。大石真虎、貝谷采堂、織田共樵、沼田月齋、横井金谷ら多くの門人がいる。1832年没、60歳。江戸後期の絵師

鳥橋齋栄里 (ちやうきやうさい・えいり/生没年不詳)

1794~96年(寛政6から8年)頃に活躍。細田栄之の門人。作品数は少ない。「山東京伝」「富本豊前掾ぶぜんじょう」などの肖像画、「三ヶ之津草嫁美人合」など艶麗な大首絵の

ほか、肖像画にも優れる。江戸後期の浮世絵

鳥高齋栄昌 (ちやうこうさい・えいしやう/生誕年不詳)

寛政5-12(1793~1800年)頃活躍。鳥文齋栄之門の高弟で、師の清雅さに対し、卑近な美人画を描く。大首絵・三枚続に優品が多い。短い作画期にも関わらず、200点に及ぶ作品を残した。江戸後期の浮世絵師

張 秋穀 (ちやう・しゅうこく/生没年不詳)

杭州府仁和県の人。幼い頃より画を好み倪瓚・呉鎮に私淑してそれぞれ山水図・蘭竹図を独学。1786年来日。88年春木南湖の訪問を受け費晴湖とともに筆談を交わし画法・書法を伝授。渡来時は秋谷(昆)と名乗ったが帰国後は秋穀(莘)に改称したと考えられる。画風も一変し、秋谷は水墨画が稀に淡彩画で作品数も少なく、秋穀では主に彩色花鳥画となる。秋穀の作は船載され、惲寿平の法に倣った没骨法を日本にもたらした。文人画家の渡辺華山や椿椿山は大きく影響を受けている。江戸中-後期の長崎に来舶した清人画家、南宗画派(文人画派)日本に文人画の画法を伝える。

来舶四大家;伊孚九・費漢源・張秋穀・江稼圃

張 晋齋 (ちやう・しんさい/1813~1875年)

1813年生れ。張月樵の長男。画を父に学び、また書を蝸庵に受け、ともに巧みだった。1875年没、63歳。江戸後期-明治の絵師

長 大作 (ちやう・だいさく/1921~2014年)

満洲生れ。1945年東京美術学校建築科卒。47年に坂倉準三建築研究所に入社。57年「藤山愛一郎邸」、58年「八代目 松本幸四郎邸」建築の設計から家具のデザインを手がけ。60年「低座イス」を発表して同年グッドデザイン賞。72年長大作建築設計室。2014年没、93歳。建築、デザイン

鳥文齋栄之 (ちやうぶんさい・えいし/生没年不詳)

天明後から没年まで活躍。幕府の奥絵師・狩野栄川院典信に絵を学ぶ。喜多川歌麿(きたがわ・うたまる)と並び称される1780~1800年頃を代表する美人画絵師。旗本(武士)とい

う異色の出自を持ち、その影響が優雅で上品・洗練された美人画で人気を博した。江戸後期の浮世絵師

鳥高齋栄昌 (ちょうこうさい・えいしょう/生没年不詳)

鳥文齋栄之の門人で、昌栄堂とも号した。作画期は1798年(寛政五年)頃から寛政後期までと短い、錦絵の美人画を数多く描いた。歌麿の影響を受けた大首絵に優れた作品が多い。代表作に鳥橋齋栄里と合作した大判錦絵の揃物(郭中美人競)がある。江戸後期の浮世絵師

長勢 (ちょうせい/1010～1091年)

定朝(じょうちょう)の弟子で円派の祖。法勝寺の造仏の功で仏師として初めて法印に叙せられた。広隆寺の日光・月光菩薩、十二神将像が現存。1091年没、81歳。平安中期の仏師

陳逸舟 (ちん・いっしゅう/生没年不詳)

浙江省生。諱は?、字は元?、別号に小鸚鵡洲画史。1827年来日。王?媽・王原祁の画風をつぐ山水や梅花図を能くした。鉄翁祖門、と交わる。道光30年(嘉永3年・1850)存、歿年未詳。木下逸雲、鉄翁祖門、三浦梧門「長崎南画三筆」が学ぶ。滝和亭、谷口藹山が陳逸舟に師事。清代の画家

珍海 (ちんかい/1091～1152年)

1091年生れ。藤原基光(もとみつ)の子。東大寺東南院の覚樹に三論を醍醐寺三宝院の定海(じょうかい)らに真言をまなぶ。興福寺維摩会(ゆいまえ)など三会の講師(こうじ)をつとめる。浄土教に関心を持ち「決定(けつじょう)往生集」をあらわす。絵にもすぐれ天下第一絵師とよばれ、おおくの密教図像や仏画をえがいた。1152年没、62歳。平安時代後期の画僧

陳賢 (ちんけん/Chen Yin/生没年不詳)

中国、建寧府甌寧県の出身。泉州府南安県の九日山延福寺に住して仏画を画いた。人物像は写実的で顔貌に隈取を施して陰影を際だてている。陳賢の作品は渡来した黄檗僧によって日本にもたらされ黄檗絵画に影響を与えた。萬福寺に遺される「観音図」(隠元賛)は1977年重要文化財に指定。中国明末期の絵師

沈南蘋 (ちん・なんぴん/1682～1760年)

浙江省呉興(中国)出身。1731年に長崎に来航し、約二年間滞在。その間に熊代熊斐、宋紫石などをはじめとして、多くの日本人画家に指導し、写生性がつよい彩色花鳥画を長崎を中心に広める。当時狩野派が中心とされていた画風(ご)「南蘋派」として新風を興し、後の円山応挙、渡辺崋山など花鳥画家に大きな影響を与えた。印名は「南蘋」「沈詮之印」など。1760年没、78歳。中国の江戸時代の絵師

20



塚越源七 (つかごし・げんしち/1922年～)

栃木県生れ。軍属として孔版印刷を始める。1965年若山八十氏に師事し孔版画を習得。孔版での新たな版の可能性を追究、試行錯誤しそれを芸術的な域にまで高める。蔵書票制作。この様な技法で芸術作品を制作する上での黎明期を支えた。80年日本美術協会賞。版画、蔵書票

都賀田勇馬 (つがた・ゆうま/1891～1981年)

金沢市生れ。石川県立工業学校を経て東京美術学校に入学、朝倉文夫に師事。1914年大正博覧会に入選。21年第3回帝展に入選、以後連続して入選。戦後は47、48年日展で特選。40～42年石川県立工業学校で指導。52年ハニベ巖窟院を創設。金沢市文化賞、小松市文化賞受賞。1981年没、90歳。彫刻、美教

塚原哲夫 (つかはら・てつお/1933～2012年)

栃木県生れ。1956年東京藝術大学日本画家卒、サロン・ド・ブランタン賞。57年同日本画専修科修了。85年栃木県文化功労者章。2001～03年文星芸術大学教授。08年佐野市立吉澤記念美術館で「塚原哲夫展—永遠の刻を奏でる異色の日本画」開催。2012年没、79

歳。日本画、美教

塚本快示（つかもと・かいじ/1912～1990年）

岐阜県生れ。江戸中期から続く美濃焼の窯元に生まれ11代「快山窯」を継ぐ。小山富士夫の影響で青白磁の研究を始め、影青官窯、磁州窯などの古陶片から中国宋代の青白磁技法の再現に取り組む。また、陶芸デザイナーの日根野作三に学び、クラブ運動に参加し、日用品としての陶磁の製作も積極的に行った。端正なフォルムと、素地が乾ききらないうちに刻み込まれる繊細な文様を特徴とする青白磁の作品は国内外で高い評価を受ける。人間国宝。勲四等旭日章受章。1990年没、78歳。陶芸

塚本雪湖（つかもと・せつこ/1870～1933年）

茨城県生れ。松平雪江に学び、のちに高久隆古を慕い、人物画をよくした。1933年没、64歳。日本画

塚本万之助（つかもと・まんのすけ/生誕年不詳～1925年）

茨城県生れ。鈴木鶯古に学び、東山、北陸を周遊した。小野蓬善寺に作品が残っている。1925年頃没。日本画

塚脇 淳（つかわき・じゅん/1952年～）

京都生れ。1979年京都市立芸術大学美術専攻科彫刻専攻修了。同年、京都市立芸術大学制作展で市長賞、京展で美術懇話会賞。82年エンバ賞美術展で優秀賞。野外彫刻も多数制作、兵庫県三田市城山公園に設置した《地上より》で87年本郷新賞。80年より神戸大学教育学部で教鞭。2003年に西宮市大谷記念美術館で個展を開催。彫刻、洋画、美教

月岡耕漁（つきおか・こうぎょ/1869～1927年）

東京生れ。1881年横浜の伯父宮内林谷のもとで陶器絵付図案を約3年学ぶ。83年からは東京府画学伝習所で結城正明に指導を受ける。87年月岡芳年の指導に就く。89年頃には尾形月耕に師事。1910年日英博覧会で入賞、宮内省御用品。版下絵では1893年以来『風俗画報』挿絵の筆を執り、98年頃から能楽に関する挿入画を専らとし「能画の耕漁」として知られた。版画は、『能楽図絵』前編・後編・続編を1897～1902年に刊行、全260図、目録5図

（大黒屋松木平吉版）。1927年没、58歳。日本画、版画、挿絵

月岡雪溪（つきおか・せつげい/生没年不詳）

大坂生れ。月岡雪鼎及び月岡雪斎の門人。雪鼎の次男で雪斎の弟である。父の雪鼎に絵を学んだ後、兄の雪斎にも学んだ。主に天保(1830年-1844年)の頃、風俗人物画を能く描いた。1854年刊行の秋艸編の俳諧書『豊国桃青百人一句』(うつしはまかみひやくにんいっく)1冊の挿絵を手掛る。法橋に叙せられた。江戸後期の**大坂の浮世師**

月岡雪斎（つきおか・せつさい/生誕年不詳～1839年）

大坂生れ。月岡雪鼎の長男。父雪鼎と狩野派の吉村周山に絵を学んだ。天明(1781年～1789年)末から天保(1830年-1844年)の頃に活躍し、1787年頃父と『和漢名家画繡』を合作。78年父雪鼎が法眼になると同時に法橋に推免せられ、更に父同様法眼。人物画や花鳥画を得意としていたが、特に肉筆美人画にその手腕を発揮した法眼期になると当世美人に加え古典的主題を得意とするようになった。子に雪操と雪洞、門人に弟の月岡雪溪がいる。雪斎の養子になったとされるのが月岡芳年である。江戸後期の**大坂の浮世絵師**

月岡雪鼎（つきおか・せつてい/1710～1786年）

近江生れ。月岡雪斎、月岡雪溪の父、狩野派の高田敬輔に師事。西川祐信の影響で風俗画家となる。絵本類、肉質美人画、秘画などが数多く残されているが、中でも肉質美人画を得意とした。大坂で没、76歳。江戸中期-後期の**絵師、絵本類、肉質美人画、秘画**

月岡芳年（つきおか・よしとし/1839～1892年）

江戸生れ。河鍋曉斎、落合芳幾、歌川芳藤らは歌川国芳に師事した兄弟弟子。落合芳幾は競作もした好敵手。多くの浮世絵師や日本画家と他の画家が、芳年門下、画系に名を連ねた。衝撃的な無惨絵の描き手としても知られ、「血まみれ芳年」の二つ名でも呼ばれる。浮世絵不況時に成功した浮世絵師であり、芳年は、「最後の浮世絵師」と評価されることもある。東京で没、53歳。歴史絵、美人画、役者絵、風俗画、古典画、合戦絵など多種多様な**浮世絵を手がけ浮世絵師**

繼岡リツ（つきおか・りつ/1939年～）

横浜市生れ。女子美術大学付属高等学校、女子美術大学洋画科卒。女子美術大学洋画研究室助手、高崎芸術短期大学教授を経て、文化庁在外特別研究員としてイタリアブレラ美術学院へ留学。女子美術大学付属高等学校・中学校長(2009～2013年)、学校法人女子美術大学理事。女子美術大学大学院美術研究科洋画研究室兼任講師、女流画家協会、立軌会同人、日本美術家連盟会員。美教、洋画

月谷初子 (つきたに・はつこ/1869～1945年)

東京生れ。1881年12歳の時、ラゲーサに師事した小倉惣次郎に彫塑を学ぶ。1896年彫工会展で入選。横浜で陶芸作家宮川香山の弟子になる。各地の窯場を巡る「窯ぐれ」として放浪生活をした。1915年愛知県に窯を開く。「忍焼」の窯印として窯主。原型師(陶磁器の形象人形など塑像の原型を作る職人)。名古屋で没、76歳。陶芸、陶彫

槻間秀人 (つきま・ひでと/1953年～)

北海道生れ。1983年金沢美術工芸大学美術学科工芸デザイン専攻卒業。83年日展初入選。78年日本現代工芸展入選、84年現代工芸賞受賞。現代工芸会会員。金工

佃政道 (つくだ・まさみち/1901～1992年)

岡山市生れ。「岡山洋画研究会」に参加し、児島虎次郎・吉田苞の指導を受けた。中学校で料治熊太と出会い、その交友は生涯続いた。1924年東京美術学校卒。29、30年日本水彩画会展に入選、会員、50年まで所属。30年に料治熊太の勧めで版画制作。32～60年愛知県立瀬戸窯業学校の美術教員。名城大学建築科の講師(60～78)。61～92年岩田覚太郎・木下富雄・佐藤宏・鈴木幹二と共に「版画五人展」(愛知県美術館)を開催。71年『版画大和路』(徳間書店)を出版。愛知県で没、91歳。水彩、版画、洋画、美教

辻勸之 (つじ・かみじ/1933年～)

京都生れ。1952年父辻晋六の下陶芸制作に入り、坪井一男に洋画を学ぶ。54年走泥社展に出品、同人にぶり解散迄全走泥社展に出品。60年清水焼デザインコンクール入賞。67、68年京都市クラフト展で銅賞。96年アメリカ・ロサンゼルス「現代日本のクラフト&ジュエリー展」出品。98年走泥社50周年展を最後に解散。99年KYO10展協会を立ち上げ、2002年新陶彫協会に改称。陶磁、立体

辻玄順 (つじ・げんじゆん/1803～1880年)

茨城県生れ。土浦藩医の家に生まれ、紀州和歌山藩医・華岡青州の門に学び、拔擢されて塾頭になった。1880年没、78歳。江戸後期の絵師、華岡青州門の塾頭

辻修平 (つじ・しゅうへい/1945年～)

京都生れ。1968～73年杉浦康平事務所に勤務。74年辻修平デザイン研究室を開設(～現在)。87年いろはの絵展-辻修平とTHE CA WORK SHOPによるCGカリグラフィ(ギンザ・グラフィック・ギャラリー)。写真家の奈良原一高、増田彰久、郷津雅夫、田原桂一、バービー・山口、パフォーマンス・アーティストの折元立身らの写真集をデザインするほか、ミニシアター・ユーロスペース(渋谷)のパブリシティ・デザインも手がける。グラフィック・デザイナー

辻志郎 (つじ・しろう/1932～2003年)

富山県生れ。井波木彫刻師の市山玉香に弟子入、1956年日展に入選。64年加藤頤清に師事し、65年新日展で特選。68年澤田政廣に師事し、69年改組日展で特選。80年高村光太郎大賞展で特別優秀賞。83年「富山県置県100年記念 新世紀博」会場のシンボルタワー「新世紀の旅立ち」制作。90年現代日本具象彫刻展に優秀賞。90年日展評議員。日彫会運営委員。93年地域文化功労者文部大臣表彰。2002年日展で文部科学大臣賞。2003年没、71歳。彫刻

辻惟雄 (つじ・のぶお/1932年～)

愛知県生れ。1961年東京大学大学院博士課程中退。東京大学文学部教授、千葉市美術館館長、MIHOMUSEUM館長などを歴任。1970年に刊行された『奇想の系譜』(美術出版社)で、又兵衛、山雪、若沖、蕭白、芦雪、国芳を「奇想の画家」としていち早く再評価し、琳派や文人画、円山派などを中心に語られてきた近世絵画の見方を大きく変えた。日本美術の特質を「かざり」「あそび」「アニミズム」に見て、装飾工芸から幽霊画、春画、漫画まで幅広く論じる。他の主な著書に『日本美術の歴史』(東京大学出版会)、『奇想の図譜』『あそぶ神仏:江戸の宗教美術とアニミズム』(ともにちくま学芸文庫)、『辻惟雄集』全6巻(岩波書店)など。2016年文化功労章。文学博士、美史、東京大学教授、美術館長

津島寿山 (つしま・じゅざん/生誕年不詳～1923年)

茨城県生れ。立原杏所に学んだ篠原香山に師事。のち上京し南画を研究、花鳥山水を多く描いた。日本美術協会に出品し数回にわたり受賞、その他の博覧会においても受賞。東京南画協会評議員、文墨協会評議員などを歴任。1923年没。 **南画**

辻村八五郎 (つじむら・はちごろう/1914～2003年)

東京生れ。岡田三郎助から本格的に絵画を学び東京美術学校師範科卒、光風会へ出品。1946年日展で入選。辻永に師事、49年日展で特選、無鑑査出品、会員。光風会理事、日展で内閣総理大臣賞、日展参与。長野県内の美術家たちに与えた影響は大きく後進の指導にも力を入れた。2003年没、89歳。 **洋画**

辻本和之 (つじもと・かずゆき/1937～1997年)

東京生れ。1953年毎日新聞学生美術コンクール優勝。60年慶応大学文学部卒。美術史専攻(レオナルド・ダ・ヴィンチ研究)。60～64年鎌倉近代美術館でキュレーター。64年より没年までイタリア・ローマに居住。68年アチレアレー国際美術展(シチリア)で一等賞。69年コルチアーノ展で一等賞。70年イタリア美術展(スロヴェニア)招待作品、70年国際タイル・デザイン応募展(ナポリ)入賞。1997年没、60歳。 **洋画**

薦 健三 (つた・けんぞう/1936年～)

金沢市生れ。寛永寺坂美術研究所終了後、山口操助、岡田登志男に師事。1954年二紀展入選。56年独立展入選、64年同会会友推挙。67年水彩連盟展初出品、小学館賞。68年行動展入選、76年奨励賞、78年会友賞。人物とその生活空間を、立体派的に複数の視点でとらえて構成する。 **洋画**

津田信夫 (つた・しのぶ/1875～1946年)

千葉県生れ。1900年東京美術学校鑄金科卒。東京美術学校助教授、1919年教授。23年から3年間、ヨーロッパに留学。帝展に工芸部設置のため尽力し、27年その審査員。35年帝国美術院会員、37年帝国芸術院会員。フランスからアカデミー勲章及びエトアール・ノール勲章を贈られた。代表作に東京日本橋の鑄造装飾獅子・麒麟。1946年没、81歳。 **鑄金、美教**

蔦屋重三郎 (つたや・じゅうざぶろう/1750～1797年)

通称蔦重(つたじゅう)。狂名蔦唐丸(つたのからまる)。蜀山人、京伝らと親交があり、洒落本・黄表紙などを次々と出版。また、写楽・歌麿らの浮世絵版画の版元として、天明・寛政期(一七八一―一八〇一)の江戸文化に指導的役割を果たした。 **江戸中期の地本問屋、蔦屋の主人、版元**

蔦谷竜岬 (つたや・りゅうこう/1886～1933年)

青森県生れ。1910年東京美術学校日本画科選科卒。寺崎広業に師事。15年文展に入選し、18年文展で特選。19年帝展に無鑑査出品、20、21年帝展特選。24年帝展委員、以後帝展に出品。29、31年帝展で審査員。大和絵的な装飾性を盛り込みながら、清楚な水墨画的妙味の風景画を得意とした。作品に「雨情三題」「妙音慈雨」など。1933年没、47歳。 **日本画、水彩**

土岡春郊 (つちおか・しゅんこう/1891～1959年)

福井県生れ。土岡秀太郎の兄。東京美術学校(現東京芸大)卒。1927～35年本格的な鳥類の画集「鳥類写生図譜」を刊行。その半生を花鳥画制作と鳥類の生態研究にささげ、「鳥の春郊」といわれた。1959年没、67歳。 **日本画**

土岡秀太郎 (つちおか・ひでたろう/1895～1979年)

福井県生れ。土岡春郊の弟。武生中学卒。1922年木下秀一郎らと福井市で北荘画会を結成し、前衛芸術運動を推進。30年福井市市に画廊アルト会館をたてる。53年北美文化協会を組織。古九谷の研究家、「定本古九谷図説」をあらわした。1979年没、83歳。 **美普(前衛芸術運動を推進)、美研(古九谷の研究家)**

土田泰子 (つちだ・ひろこ/1985年～)

福井県生れ。2007年フランス国立デザイン大学留学。08年名古屋芸術大学デザイン学科卒。09年朝日現代クラフト展準グランプリ受賞。無数の安全ピンやマドラー、温度計などの日用品を巧みなアイデアとコンセプトによって美しい造形へとつくりあげる。「コンセプチュアル・アート」を発表。18年平塚市美術館で個展開催。内外で個展、グループ展などで活躍

中。コンセプト・アート

土田 実 (つちだ・みのる/1906～1945年)

金沢市生れ。金沢第一中学校を中退し上京、彫刻を志し北村西望に師事。1926年二科展に入選、以後続けて出品し、39年推奨を受ける。浅野孟府らとともに石川県における二科会彫刻部の草分け的存在。忠愛美術院展に出品。1945年没、39歳。彫刻

土谷 武 (つちたに・たけし/1926～2004年)

京都生れ。1949年東京美術学校彫刻科卒。51年新制作展に入選。57年新制作協会会員。61～63年渡仏し、パリの国立高等美術学校で学ぶ。67年茨城県笠間市稲田で本格的に石彫を始める。80年平櫛田中賞受賞。94年芸術選奨文部大臣賞。東京で没、78歳。彫刻

土谷良夫 (つちや・よしお/1949年～)

1949年生れ。76年武蔵野美術大学大学院修了。加藤東一に学ぶ。静岡県立清水南高校、静岡県立静岡高校、静岡県立松崎高校に勤務。92年富嶽ビエンナーレ展大賞。日本画、美教

都築真琴 (つづき・まこと/生没年不詳)

明治時代後期の画家です。写実的で精密な山水・花鳥の表現に優れた日本画を多く残しており、のちには鍋木清方、池田輝方らと青年挿絵画家の集まり「烏合会」を結成し、明治時代後期の新しい日本画の発展に貢献した。日本画

筒井正雄 (つつい・まさお/1916～没年不詳)

長崎県生れ。1935年白日会展入選。37年新構造社展入選。51年日本水彩画会展入選。55年日本水彩画会会友。61年日本水彩画会会員。64年九州地区代表審査員。日本水彩画会佐世保支部長。佐世保水彩画協会会長。長崎県水彩画協会副会長を歴任。水彩

堤 等琳・初代 (つづみ・とうりん I/生没年不詳)

雪舟の後裔を称しており、享保から天明期に活躍した。摺物や団扇絵、貼交絵を描いてい

る。門人に堤等琳(2代目)及び堤等琳(3代目)がいる。「見立三歌人」摺物 泉守一、勝川春英と共画 プーシキン美術館所蔵。江戸中期の堤派の絵師、摺物、団扇絵、貼交絵

常岡文亀 (つねおか・ぶんき/1898～1979年)

兵庫県生れ。岡田秋嶺、戸部隆吉、小泉勝爾らの指導を受け、東京美術学校日本画科を卒業、結城素明に師事する。帝展・日展・各種展覧会に出品、受賞。細密描写による華麗な花鳥画でその画才を認められる。東京美術学校教授。日展会友。1979年没、81歳。日本画、美教

常田 健 (つねだ・けん/1910～2000年)

青森県生れ。1928年川端画学校入学。30年からプロレタリア美術家同盟研究所で学ぶ。33年青森県に帰郷。農民運動の関係者として検挙、拘留される。36年二科展に出品し入選。50年青森県美術会の創立に参加。55年日本美術会会員。91年青森県文芸協会賞。97年青森県文化賞。「常田健 土蔵のアトリエ美術館」。2000年没、90歳。洋画、個人美術館

津江篤郎 (つゑ・とくろう/1915～2003年)

長崎県生れ。京都高等工芸学校図案科卒。1951年毎日新聞商業デザイン奨励賞。52年二科商業美術部観光ポスター・コンクール等、デザインにて入賞入選。53年二科展洋画部入選。77年二科展まで24回連続入選。78年現代美術家協会へ出品。82年会員。2003年没、88歳。洋画

角田磐谷 (つのだ・ばんこく/1889～1970年)

福島県生れ。石川尋常小学校卒業後、上京し高森碎巖に師事。1909年寺崎広業の天籟画塾に入門。19年福陽美術会の結成に参加。日本画会展、巴会展、官展へに出品を重ねた。26年帝展に入選、以後9回入選。36年坂内青嵐の後をうけ、福陽美術会幹事長。戦後は県内での活動に専念し、県内美術振興につとめた。県展では第1回展から運営に尽力し、審査員、運営委員を歴任。64年県文化功労賞、同年福島市で画業50年展開催。1970年没、81歳。日本画

角田行夫 (つのだ・ゆきお/1912～1994年)

福島県生れ。会津中学校在学中に渡部菊二、春日部たすくの指導を受けた。日本水彩画会展を主な発表の舞台として活躍する一方、会津の文化・美術の振興にも尽力し、市の教育委員長や市議会議員もつとめた。1994年没、82歳。水彩

椿井仏所 (つばい・ぶっしょ/生没年不詳)

14世紀中ごろから奈良地方を中心に活躍した仏所。慶派から分かれたと見られ、興福寺内、南円堂に近い椿井郷に住んでいたのもこの名がある。1369年(仏子椿井舜覚房法眼慶秀)が春日神宮寺の十一面観音を修理した記録をはじめとして、16世紀にかまけて成慶、集慶、舜慶など慶の1字を付した人物が多く、高間、登大路、富士山などの興福寺系仏所は、この椿井仏所から出ている。14世紀中頃から活躍した仏師

津端道彦 (つばた・みちひこ/1968～1938年)

新潟県生れ。1886年上京、福島柳圃に南宗派を家び、94年山名貫義に就て住吉派を、96年旧平戸藩絵師片山貫道に土佐派を学んだ。1902年日本美術協会歴史部の主事、10年同会第一部委員に嘱託。帝国絵画協会、異画会の会員、日本画会の客員。明治天皇、大正天皇の御前揮毫の光栄に浴したことがあり、文展では又2等賞1回、3等賞2回、褒状1回を受けた。日本美術協会其他に於ては銀牌及銅牌を受けること数十回に及び5度宮内省御買上の栄に浴した。1938年没、71歳。日本画

坪井上之丞・玉水・ムー (つばい・うえのじょう/1889～1975年)

茨城県生れ。若年より絵を好み、玉水と称した。中年に至って木村武山に師事し、号をムーとした。俳人でもあり翠泉と号した。1975年没、87歳。日本画

坪内好子 (つぼうち・よしこ/1966年～)

東京生れ。1989年女子美術大学芸術学部絵画科版画専攻卒。89年大学版画展(町田市立国際版画美術館卒業制作にて女子美術大学版画研究室買上賞。期待の新人作家大賞展で買上賞(新宿伊勢丹ギャラリー)。94年個展(養清堂画廊)。95年ARTBOX大賞展で岩亀アート賞(東京)。96年さっぽろ国際版画ビエンナーレミヤコ版画賞展入賞(大阪)。2005～07年ブラチスラヴァ(スロヴァキア)美術アカデミーにてデュシャン・カーライに師事。版画

坪田政彦 (つばた・まさひこ/1947年～)

兵庫県生れ。1970年大阪芸術大学美術学科卒。76年アートナウ'76(兵庫県立近代美術館)、ブラッドフォード国際版画ビエンナーレ(イギリス)。79年リュブリアナ国際版画ビエンナーレ(ユーゴスラビア)。86年日本アートフェア(セントラル美術館・東京)。88年日本国際美術展(東京都美術館・京都市美術館)。大阪芸術大学教授。版画、美教

露木為一 (つゆき・いっしつ/生誕年不祥～1893年)

江戸の人。葛飾北斎の門人。作として明治期に北斎とその娘の葛飾応為ことお栄を描いた「北斎仮宅之図」(紙本墨画、国立国会図書館所蔵)が知られている。「北斎仮宅之図」は北斎が83歳の時、榛馬場の辺りに40歳頃と思われるお栄と住んでいた時の様子を再現したもので、北斎がこたつ布団を背にかまけながら絵を描き、それをお栄が見つめている様子が描かれ、また画面の上部には以下の説明が記されている。浮世絵師

露木恵子 (つゆき・けいこ/1943年～)

大阪生れ。1968年東京芸術大学美術学部大学院美術研究科修了。67年春の院展に初入選して以来、院展や春の院展に出品を続け、79年日本美術院院友。72年から大分大学で教鞭をとる一方、大分県美術展にも出品をはじめ、全国県展選抜展にもしばしば選出される。81年宇都宮大学に移り、助教授を経て96年から20年まで教授を務めた。現在は個展やグループ展を中心に作品を発表している。日本画、美教

津村洞養 (つむら・どうよう/1843～1905年)

秋田県生れ。初め父に学び、1852年江戸に出て、狩野洞庭・洞白、さらに河鍋暁斎について学んだ。84年発足の秋田伝神画会に参加、91年同会の絵画品評会で審査委員。82年内国絵画共進会、84年内国絵画共進会などに出品、90年内国勸業博覧会で褒状。門人には小室怡々齋・田中竹翠・石井楽水らがいる。洞達、洞仙と3代続いた藩の御用絵師。1905年没、62歳。江戸後期-明治の絵師

鶴沢探鯨 (つるさわ・たんげい/生誕年不詳～1769年)

狩野派鶴沢家2代。父鶴沢探山の跡をつぎ、禁裏御用絵師をつとめた。法眼(まげん)。1769年没、八十余歳。作品に旧明眼院障壁画。江戸中期の絵師

鶴沢探索・3代 (つるさわ・たんさく III/生誕年不詳～1797年)

父は鶴沢探鯨(たんげい)。狩野派鶴沢家3代。円山応挙の最初の師ともいわれている。法眼(ほうげん)。1797年没、名は守熙。作品に興福院障壁画。江戸中-後期の絵師

50

鶴沢探山 (つるさわ・たんざん/1655～1729年)

1655年生れ。狩野(かのう)派鶴沢家の祖。元禄のころ狩野探幽門下から選抜され、禁裏御用絵師となる。宝永期の内裏造営、享保(きょうほう)期の東宮御殿建造に際し障壁画をえがいた。法眼(ほうげん)。1729年没、75歳。作品に「鉄拐(てつかい)・山水図」。江戸前-中期の画家

鶴沢探泉 4代(つるさわ・たんせん IV/生誕年不詳?～1816年)

父は鶴沢探索。狩野(かのう)派鶴沢家4代。法眼(ほうげん)。1816年没。名は守之。日本画、江戸時代後期の絵師

鶴見厚子 (つるみ・あつこ/1951年～)

東京生れ。1975年多摩美術大学絵画学科油絵専攻卒。個展中心に発表。85年神奈川県美術展で大賞・神奈川県女流展で協会賞。90, 99, 2009年鎌倉近代美術館賞。92NY SOHO International Art Competition 4位。2012年「ドローイングとは何か」展 奨励賞。2012年「ドローイングとは何か」展 奨励賞。洋画

55



丁 雲鵬 (てい・うんぽう/1547～1628年?)

休寧の人。道釈画を得意とし、多くの仏画を制作したが、董其昌、米万鐘らとも交友。珍奇

な画風を確立し、明末期の奇想派の一人として知られている。1628年?没、81歳?明末期の画家

貞斎泉晁 (ていさい・せんちよう/生没年不詳)

文政後期から弘化年間に活躍。号は貞斎・素月園など。溪斎英泉(1791～1848)門人。俗称吉蔵、錦絵草紙あり。江戸後期の浮世絵師

蹄齋北馬 (ていさい・ほくば/1770頃～1844年?)

魚屋北溪と共に北齋門下の双璧と称せられる。版画作品では、狂歌摺物、狂歌本挿絵などが多く知られ、錦絵の作例は少ない。晩年は肉筆画に傾注するようになり、歌川派の美人画様式を取り込んだ、面長で切れ長の目をした独自の女性像を数多く描いた。1844年?没、74歳?江戸後期の絵師、版画

鄭 相和 (てい・そうわ/1932年～)

韓国生れ。1956年国立ソウル大学校美術大学絵画科卒。67年渡仏。69年来日して神戸に住み、信濃橋画廊(大阪)、元町画廊(神戸)、村松画廊(東京)等で個展。77年再渡仏し、パリで制作に専念。78年韓国20年動向展(ソウル、国立現代美術館)、81年韓国現代作家展(ブルックリン美術館)、83年韓国現代美術展(東京都美術館)、87年シカゴ国際絵画展等に出品。現代画廊(ソウル、1983・86・89)、ギャラリー上田(東京、1983・86・91)、元町画廊(神戸、1988・92)等で個展。洋画、版画

出口飛鳥 (でぐち・あすか/1962年～)

京都生れ。1986年東京造形大学造形学部美術学科卒。92年「アートヒル三好ヶ丘'92彫刻フェスタ」優秀マーケット展。94年「木彫フォークアート・おおや」入選。96年小田原アートフォーラム'96(旧小田原市立城内小学校/神奈川県)。97, 98年ふれる彫刻100展(神奈川県立生命の星・地球博物館)。彫刻

出口佳子 (でぐち・よしこ/1943～2019年)

東京生れ。1962～65年独立展出品、93年独立展で中山賞、独立美術協会会友。第75回展で独立賞、会員。78～91年神奈川県美術展出品・88年美術奨学会賞。82～95年神奈

川県女流美術家協会展出品、84年協会賞、85年会員、88、93年知事賞上賞、91年安藤為次賞、94年県立近代美術館賞。85年女流画家協会出品、97年ヴィッツ画材賞。88、89年ぎやらりいセンターポイントで個展。2019年没、76歳。洋画

出口常智（でぐち・つねとも/1925年～）

1925年生れ。神奈川県立近代美術館が作品所蔵。洋画、水彩

手銭吾郎（てぜに・ごろう/1967年～）

神奈川県生まれ。1992年東京芸術大学美術学部工芸科卒、94年東京芸術大学大学院鍍金専攻修了。94年個展(ギャラリー美遊)。94～2000年日本現代工芸美術展入選。98年個展(ギャラリーU)。99年日本現代工芸美術展工芸賞。94～98年東京藝術大学美術学部取手校非常勤講師。多摩美術大学教授。第9回日展で特選。工芸、立体、美教

手塚登久夫（てづか・とくお/1938～2015年）

栃木県生まれ。二科会会員、梟をモチーフとした作品で知られる。東京芸術大学彫刻科にて学び同大学教授も務める。2015年没、77歳。彫刻、美教

テッド・タナベ（てっど・たなべ/1943年～）

東京生まれ。1964～70年渡米、ニューヨーク、他で学ぶ。以後、イラストレーターとして活躍後、フリーランスアーティストとなりニューヨーク、シカゴ等アメリカ各地、東京で個展を開き独特の作風が好評を博す。スポーツグラフィックスで有名。イラスト

鉄翁祖門（てつおう・そもん/1791～1872年）

長崎県生まれ。臨濟宗。長崎春徳寺の住持。石崎融思に師事、のち清しん(中国から来日した江稼圃(こうかま)に文人画をまなぶ。木下逸雲、三浦梧門とともに長崎三大文人画家と称された。1872年没、81歳。江戸後期の画僧、南宗画派(文人画派)

寺内信一（てらうち・しんいち/1863～1945年）

山口県生まれ。工部美術学校でイタリア人彫刻家のヴィンチェンツォ・ラゲーザの指導を受けた。卒業後、常滑や瀬戸、有田、清国、砥部で後進の育成に力を注いだ。明治期における陶

彫制作者の一人である。有田工業学校校長。1945年没、82歳。陶彫、陶芸

寺内曜子（てらうち・ようこ/1954年～）

東京都生まれ。1977年女子美術大学芸術学部造形学専攻卒。78年同大学研究科修了。81年 St.Martins School of Art, Sculpture Advanced Course 修了。83～84年ヘンリー・ムーア財団フェローとして Camberwell School of Art でアーティスト・イン・レジデンス。79～98年20年間ロンドンで作家活動。98年帰国。彫刻や、インスタレーションを制作・発表。個展;かみらん舎(東京、1991,2017他)、Victoria Miro(ロンドン、1993他)、メンヒエングラッドバッハ市立美術館(ドイツ、1992)、Chisenhale Gallery(ロンドン、「パンゲア」豊田市美術館(2021)など。彫刻、インスタ

寺尾恍示（てらお・こうじ/1929～1987年）

京都生まれ。清水焼の陶家に生まれる。1959年八木一夫を中心に京都で結成された前衛陶芸家団体「走泥社」に参加、63年脱退、以降作陶から離れ、鉄、ステンレスパイプ、木、プラスチック、樹脂、金属等自由に素材を用い実験的な作品に挑む。64年「現代美術の動向—絵画と彫塑」展、現代国際陶芸展と続けて国立京都近代美術館で作品を発表。国立京都近代美術館所蔵の《プラスの世界》(64年「現代美術の動向」展出品)は、表面に無数の釘が整然と打ち込まれた陶製の彫刻で、古代の石碑のような存在感を放っている。75年器の用途をもつやきものづくりこどりがかる。83年金銀彩に亀裂を入れた「彩釉裂シリーズ」を手掛ける。1987年没、58歳。彫刻、陶芸

寺門 晃（てらかど・あきら/1935年～）

茨城県生まれ。1955年 ROZO 群に参加。58年茨城大学教育学部美術科卒。67年国際青年美術家展佳作(69年大賞)。69年渡仏。70年ジャン・アートフェスティバル。73年オステンド・ヨーロッパ大賞展(ベルギー)で銅賞。2015年ギャラリー・オカベで個展。洋画

寺門幸藏（てらかど・こうぞう/1895～1945年）

茨城県生まれ。上京して、葵橋洋画研究所で黒田清輝に絵を学びました。その後、東京で活動を続けていましたが、1923年の関東大震災を機に東京を離れ水戸へ移り、24年水戸在住の洋画家の菊池五郎(1885年～1950年)や林正三(1893年～1947年)らと共に、茨城県内

初の本格的な美術団体である白牙会の創立に加わり、茨城の洋画会の隆盛に貢献。静物画や風景画を描いた。1945年没、50歳。洋画

淵上白陽のもとで雑誌編集を手伝う傍ら油絵を独学。1928年造型美術家協会美術展覧会に出品。モスクワ、パリを中心に滞在。30年帰国。30年プロレタリア美術大展覧会に出品、同展ポスターデザインを手がける。以後、第5回展まで毎回出品、ポスターを担当。31～42年広告美術の仕事に携わる。1983年没、78歳。洋画、ポスター、デザイン

寺田有恒（てらだ・ありつね？/1947年～）

千葉県生れ。1971年東京芸術大学美術学部工芸科卒（ビジュアル・デザイン専攻）。71年株式会社横浜高島屋宣伝部入社。72年株式会社CBSソニーデザイン室入社。76年個展（フタバ画廊）。77年神奈川県美術展（'83まで。78年個展（ギャラリー銀座三番館）、（77ギャラリー）。2010年横浜美術大学教授。版画、美教

寺田健一郎（てらだ・けんいちろう/1931～1985年）

福岡市生れ。西南学院高校在学中の、1948年頃から、伊藤研之に師事。51年二科展に入選、以後毎年出品。58年に共同アトリエ「青の家」を構え、若手作家の交流の場をつくった。82～84年九州派の活動に参加。76年二科会を退会し、無所属。大胆なフォルムと鮮やかな色彩を特徴にした、おおらかな抽象表現主義的な画風を展開。絵画以外にも、エッセイ執筆、テレビ出演など多彩な活動を行った。1985年没、54歳。洋画、九州派

寺西進三郎（てらにし・しんざぶろう/1938～2017年）

和歌山県生れ。林武、里見勝蔵に師事。本名、寺西進。富士山、奥入瀬溪流、生まれ育った和歌山の故郷等を主題に、様々な風景画、民家を描く事で知られる。数多くの新人作家を輩出した美術商としての一面も兼ね備え持っており、特に林喜市郎、澤田文一、妹尾一朗を育てた画商として知られる。1970～2002年ブロードウェイギャラリー創業、公募による新人賞展を主催し、新人発掘。2017年没、79歳。画商、洋画

寺村輝夫（てらむら・てるお/1928～2006年）

東京生れ。早稲田大卒。小峰書店、あかね書房につとめる。1961年「ぼくは王さま」でナンセンス童話の新風をまきおこし、毎日出版文化賞。82年絵本「おしゃべりなたまごやき」で国際アンデルセン賞優良賞。82年文京女子短大教授、97年同女子大教授。2006年没、77歳。児童文学作家、絵本、美教

寺山修司（てらやま・しゅうじ/1935～1983年）

青森県生れ。1858年第一歌集「空には本」で前衛歌人としての地位を確立。俳句も残した。劇作・演出、映画製作・監督、評論など多彩な活動を展開した。67年横尾忠則、東由多加、九條映子らと演劇実験室◎天井桟敷を設立、主宰。代表作は、長編叙事詩「地獄篇」、放送劇「山姥」、戯曲「毛皮のマリー」など。1983年没、48歳。詩人、歌人、劇作家

寺山静峰（てらやま・せいじほう/生没年不詳）

茨城県生れ。明治・大正期の四条派の画家で《軍鶏と芭蕉》などの作品が残っている。日本画

55年盛岡短期大学美術工芸科卒。年新制作協会展入選。以後毎回入選。74年新制作協会会員。新制作の先輩でもある岩手出身の彫刻家・舟越保武の助手をつとめた。75年彫刻の森美術館大賞展に《とんがり帽の男》を出品。2000年萬鉄五郎記念美術館で個展を開催。東京で没、88歳。彫刻（石彫）

天章周文（てんしょう・しゅうぶん/生没年不詳）

生没年不詳。相国寺の禅僧となり、都管の役につく。画を如拙に習い、のちに如拙の後を継いで足利幕府の御用画師となる。1423年に幕府の使節とともに朝鮮にゆき、このころすでに優れた評価を得ていたと思われる。応永詩画軸の名品や、それに続く室町中期の掛幅には、周文筆を伝称するものがたいへん多いが、真跡はまだ確定されず、高名なわりには謎の多い作家である。室町時代中期の画僧

と

十市王洋 (といち・おうよう/1831～1897年)

大分県生れ。杵築藩士十市石谷の長子として生まれた。1852年家督を継ぐが、58年隠居を願い出て受け入れられ、跡は弟が継ぐ。画作はそのころからのものが多く、伝統的画法を基本としながらも近代性をおびた設色や構図も試みている。77年頃より各種展覧会に活躍し、84年内国絵画共進会では審査委員。晩年は杵築に帰り、多くの門人を指導した。1897年没、66歳。江戸後期～明治期の絵師

土井 典 (どい・のり/生誕年不詳～2017年)

新潟市れ。1955年女子美術大学図工科卒。69年澁澤龍彦の依頼によりハンス・ベルメーの球体関節人形の模像を制作。四谷シモンと相前後して球体関節人形を制作。74年初個展「エロティックな函」(画廊マツ・グロッツ、東京都)開催。75年までマネキン制作会社勤務。2011年「輝く女たち—その強さ、儚さ、複雑さ」(茨城県近代美術館)出品2017年没。立体、人形

董 九如 (とう・きゅうじょ/1745～1802年)

1745年生れ。幕臣。宋紫石(そうしせき)にまなんで沈南蘋(しんなんびん)風の花鳥画にすぐれ、晩年は墨竹をえがいた。1802年没、58歳。編著に「宋紫石四君子画譜」「宋紫石蘭譜」。江戸中期-後期の絵師

遠坂文雍 (とおさか・ぶんよう/1783～1852年)

江戸の人。谷文晁(ぶんちよう)に師事し、山水・花鳥画をよくした。1852年没、70歳。江戸後期の絵師

藤堂凌雲 (とうどう・りょううん/1809～1886年)

伊勢生れ。山本梅逸に師事。維新後上京し、花鳥画をえがいた。門下に大出東臯(とうこう)がいる。1886年没、78歳。日本画

堂本漆軒 (どうもと・しっけん/1889～1964年)

京都市生れ。富田香漆に師事し漆芸を学んだ。1928年帝展で入選、43年まで文帝展入選8回、戦後は日展に作品を発表し、51年以来出品依頼、54年日展審査員、晩年は日展評議員。官展以外は京都市展、京都工芸展などにも出品し、京都工芸作家協会理事、全日本工芸美術家協会京都支部の要職。日本画家、堂本印象の実兄にあたる。1964年没、75歳。漆芸

遠坂文岱 (とおさか・ぶんたい/生誕年不詳～1873年)

遠坂文雍(ぶんよう)の孫。江戸の人。1873年没。幕末-明治時代の絵師

遠坂文雍 (とおさか・ぶんよう/1783～1852年)

江戸生れ。谷文晁門下。田安德川家に仕えた。次男・仲雍(字:蟻夫、号:逸斎、通称:丹二郎、天保の頃活躍)、孫の文岱(名:則男もしくは正雄、別号:五清堂・十友園、通称:松次郎)と三代続けて画家になる。1852年没、69歳。江戸後期の南画家

藤氏憲承 (とうし・けんしょう/生没年不詳)

伝歴は不詳。藤氏憲承の名称は《円窓美人図》に「羽陰藤氏」(朱文方印)「憲承之印」(白文方印)の二顆の印章があることによる仮称である。筆致は鋭く、透徹した出来栄であり、優れた画才の持ち主であることがわかる。秋田蘭学。江戸時代の絵師

東條七郎 (とうじょう・しちろう/1912～1942年)

徳島市生れ。大阪美術学校に学び、同校専攻科と東京美術学校に学んだ。東京美術学校専攻科終了後、一時大阪美術学校で副手を勤めた。東光展や新興美術展、新興独立美術展などに出品。1935年に発会した徳島青年美術家クラブに参加し、原菊太郎や渡瀬政近らと交流。36、40年徳島市で個展開催。自宅に洋画研究所を開設。1942年没、30歳。洋画、美教、洋画研究所

等本 (とうほん/生没年不詳)

茨城県生れ。永正年間の常陸国出身の画僧。画法は雪舟、周文の流れをくみ、花鳥をよくした。作品は扇面が多く、関東・東北地方にみられる。**室町時代の画僧**

堂免修 (どうめん・おさむ/1951年～)

神奈川県民展、1997、96、94年(神奈川県民ホール)。94～99年、2001、02年時のかたち展(横浜市民ギャラリー)。01年安田火災奨励賞。個展:Oギャラリー、銀座。96、98、4、6、10、12年。K'sギャラリー14、15年。F分の1・2、4、9、13年。**洋画**

東洋齋斐章 (とうようさい・あやあき/生没年不詳)

生没年等不詳。東洋齋斐章と号して、1882年に朝鮮事変を描いた大判3枚続の錦絵「花房公使朝鮮国応接之図」(函館市中央図書館、東京経済大学図書館所蔵)1点を描いたことが知られる。版元は大倉孫兵衛。**明治期の浮世絵師**

斗円楼北泉・二代目戴斗 (とおえんろ・ほくせん/生没年不詳)

江戸生れ。葛飾北斎の門に入り斗円楼北泉と称した。1820年葛飾北斎から「戴斗」の号を譲られ二代目戴斗を名乗り、葛飾戴斗、玄龍齋戴斗と号す。北泉と称した時には『北斎漫画』二編の刊行に尽力。作域は広く肉筆画の他、版本の挿絵、錦絵なども手がける。画風は北斎の画法を最も忠実に継いでいる。門人に戴岳、北涯がいる。**江戸後期の浮世絵師、挿絵、錦絵**

十市王洋 (とおち・おうよう/生誕年不詳～1897年)

大分県生れ。十市石谷(せきこく)の子。豊後杵築藩士。父に画の手ほどきをうけ、田能村竹田に私淑(ししゅく)。長崎の鉄翁祖門(てつとうそもん)、国学者の物集高世(むずめたかよ)にもまなぶ。和歌もよくした。1897年没。**江戸後期-明治の絵師**

十市石谷 (とおち・せきこく/1793～1853年)

大分県生れ。豊後杵築藩士。文人画家の田能村竹田と親交、長崎の鉄翁祖門は「古法をもちてよく新趣をい出す」と石谷の画を評している。1853年没、61歳。**江戸後期の絵師**

富樫寅平 (とがし・とらへい/1906～1951年)

新潟県生れ。1922年新発田商業学校卒。26年年佐藤哲三ら「野人社」を結成し、野人社展を開催。28年二科技塾に入り、本格的に絵画を学ぶ。29年一九三〇年協会展、30年同展出品、独立美術協会に参加。独立美術協会展には第1回展(1931)より出品。37年独立美術協会賞。43年同会会員。北原白秋の詩集や巖谷小波の童話などに挿絵を描く。1951年没、45歳。**洋画、版画、挿絵**

外狩素心庵 (とがり・そしんあん/1893～1944年)

愛知県生れ。曹洞宗大学を出て、1913年二松学舎を卒、同年中外商業新聞社に勤務、美術記者として独自の境を開き。評論批判は斯界の注目を惹き、古美術に関する造詣深く、美術骨董界に貢献。24年同社学芸部長、28年参事、43年嘱託。書道・絵、詩や句も作った。南画は数回展覧会に出品。1944年没、52歳。**美評、ジャーナリスト、南画**

時田直善 (ときた・なおし/1907～2000年)

千葉県生れ。1926年川端画学校の全課程修了。36年青龍社展初入選(37年奨励賞、39年青雲大賞、奨励賞)。48年青龍社展に出品し社人。67年前年解散した青龍社有志と共に東方美術協会を創立。千葉県で没、93歳。**日本画**

常盤大空 (ときわ・たいくう/1913～1983年)

福島県生れ。1932年石川中学校卒業後、上京して川端画学校日本画科に入学、主に岡村葵園の指導を受けた。40年院展に入選。戦時下は帰郷し教職につき、一時は応召した。復員後再び上京し、堅山南風に師事した。戦後も院展を中心に活動、67年日本美術院同人、74年院展で文部大臣賞。1983年没、70歳。**日本画、美教**

常磐光長・土佐光長・藤原光長 (ときわ・みつなが/生没年不詳)

生没年不詳。土佐、藤原の姓でも呼ばれる。後白河院の命で《年中行事絵巻》の制作の中心となったほか、1173年最勝光院御所障子に藤原隆信とともに日吉行幸などの図を描いた。《伴大納言絵詞》の作者とも伝えるが、確証はない。土佐三筆。**平安末期の宮廷絵師、土佐派四世**

得田 耕 (とくだ・たがえす/1857～1932年)

石川県生れ。1878年石川県師範学校卒。上京して彰技堂に入門、本多錦吉郎につき洋画を学ぶ。82年石川県に戻り金沢・輪島などで教鞭をとり、早田三四郎に洋画を教える。89年明治美術会創立の発起人。晩年は金沢市備中町のアトリエで、南画や仏画を描いた。1932年没、75歳。洋画、美教

徳田八十吉・初代 (とくだ・やそきち I /1873～1956年)

石川県生れ。荒木探令・山本永暉に日本画を、松本佐平に陶画を学ぶ。色釉の調合技法について研究し、独自の深厚釉を開発する。1953年上絵付(九谷)で国の助成を講ずべき無形文化財に認定される。また、中村研一、碓伊之助など多数の作家に絵付の指導をするなど、近代九谷焼の発展に尽くす。1956年没、83歳。陶磁

徳田八十吉・二代 (とくだ・やそきち II /1907～1997年)

石川県生れ。初代徳田八十吉の養子となる。凶案を浅野廉に、釉薬を安達正太郎に、日本画を玉井敬泉に学ぶ。また、富本憲吉に陶画を学び、芸域を広める。1946年より日展で活躍。56年二代を襲名。日展会員。石川県指定無形文化財九谷焼技術保存会の二代会長。1997年没、90歳。陶磁

徳田八十吉・三代 (とくだ・やそきち III /1933～2009年)

石川県生れ。初代および二代徳田八十吉に師事。1955年日展入選、71年日本伝統工芸展入選、以後入選受賞、作家としての地位を確立。青手古九谷の持つ上絵釉薬の美しさを現代に生かす工夫を重ね、「彩釉」という色釉の濃淡で表現する独自の作風を生み出す。97年彩釉磁器で重要無形文化財保持者に認定。2009年没、86歳。陶磁

徳永卓磨 (とくなが・たくま/1939年～)

神戸市生れ。神戸高校卒、金沢美術工芸大学油画科卒、スペイン国立サン・フェルナンド大学で油絵を1年間学ぶ(29才)その後毎年夏季に現地写生を継続。作品発表:個展:1964年以来 43回、主な会場:兵庫県民会館、プラネットブルー神戸、東京紀國屋画廊、金沢ギャラリー香林坊21、神戸まちづくり会館、三木堀光美術館、サンパル神戸市民ギヤ

ラー、アートホール神戸、スペイン カンポ・デ・クリプターナーの市立博物館【2回】、その他個人ギャラリー多数 グループ展:多数 ・出版:画集4冊、他3冊 ・16mm映画2作 ・ビデオ1作。受賞歴:兵庫県教育組合芸術文化賞 現代芸術賞、半どんの会文化賞、ASOCIACION Cultural el BURLETA(スペインのとある町の文化賞。洋画

徳永幸子 (とくなが・ゆきこ/1938年～)

富山市生れ。富山中部高校卒、金沢美術工芸大学油画科卒、佛教大学通信教育(学芸員資格習得)。作品発表:個展:6回 富山県民会館、堀川画廊、BB プラザ美術館(神戸市)他。2人展・グループ展多数:神戸、東京、富山、金沢。出版:画集3冊、他3冊。紙芝居:3作、公演。その他:RIC 絵画サロン Mar 主宰、ミニ・プチわたくし美術館主宰。洋画

得能節朗 (とくのう・せつろう/1930年～)

岡山県生れ。軍医であった父の勤務で、栃木・中国旅順・東京など転地。1951年金沢美術工芸短期大学専攻科修了。畝村直久に師事。51年日展入選、67、68年特選、82年会員賞。67年日彫展日彫賞。95年日展内閣総理大臣賞。日展評議員、金沢美術工芸大学名誉教授。彫塑、美教

得能良介 (とくのう・りょうすけ/1825～1883年)

1883年生れ。薩摩鹿児島藩士。維新後新政府に在り、民部大丞兼大蔵大丞、大蔵省紙幣局長をへて78年初代印刷局長となる。ヨーロッパの印刷技術を導入し、国産紙幣の製造に力をそそいだ。1883年没、59歳。官僚、石版、紙幣

徳弘董斎 (とくひろ・とうさい /1807～1881年)

高知県生れ。江戸で下曾根金三郎に洋式砲術、広瀬台山(たいざん)らに文人画をまなぶ。帰郷後は砲術をやめ、画で一家をたて、橋本小霞(しょうか)とならび称された。1881年没、75歳。江戸後期・明治の砲術家、絵師

徳力善雪 (とくりき・ぜんせつ/1599～1680年)

父善宗のあとを継いで京都・西本願寺絵所の絵師となり、1636年西本願寺御影堂障壁画を制作。飛雲閣障壁画を補修。《親鸞聖人絵伝》8幅(西本願寺、1660年)、《蕭湘八景図

卷) (東京国立博物館)。遺作から見て、狩野派の流れをくむことは疑いないが、狩野山雪門人説と狩野探幽門人説とがあり、どちらとも決め難い。1680年没、81歳。江戸初期の狩野派系の絵師

土佐経隆・藤原経隆 (とさ・つねたか/生没年不詳)

はじめ有房を名のる。土佐権守(ごんのかみ)となり、のち土佐派の始祖といわれる。1251年(内裏の紫宸殿(しんでん)に賢聖障子(けんじょうのそうじ)をかく。絵所預(えどころあずかり)。従五位下、中務大輔(なかつかさのたいふ)。鎌倉時代の絵師、土佐派の始祖

土佐広周 (とさ・ひろちか/生没年不詳)

土佐行広の子。1439年(絵所預、同年「後小松院七回忌本尊」をかいたという。「天稚彦(あめわかひこ)草子」(ベルリン、国立東洋美術館)が今日知られる唯一の真筆。1492年までの生存が「親長(ちかなが)卿記」でわかる。室町時代の絵師

土佐光章 (とさ・みつあき/1848～1875年)

1848年生れ。土佐光文(みつぶみ)の子。土佐派。文久3年伊予介(いよのすけ)、慶応2年左近衛将監(さこんえのしょうげん)となった。1875年没、28歳。幕末-明治期の土佐派の絵師

土佐光淳 (とさ・みつあつ/1734～1764年)

1734年生れ。土佐光芳(みつよし)の長男。土佐光貞の兄。延享元年(絵所預(えどころあずかり)となる。寛延元年(桃園天皇の大嘗会(たいじょうえびょうふ)を制作。1764年没、31歳。江戸中期の土佐派の絵師

土佐光起 (とさ・みつおき/1617～1691年)

大坂(おさか)生まれ。光則(みつなり)の子。絵所預となり(光元以来中絶していた土佐家の絵所を再興する。光長(みつなが)・光信(みつのぶ)と併せて土佐三筆と称される。1691年没、75歳。江戸前期の土佐派の絵師

土佐光一 (とさ・みつかず 25世/1872～1965年)

1872年生れ。光章の長男。東京美術学校卒。1894年(青年絵画共進会展)で入選。1907

～35年(旧制)県立静岡中学校(現、県立静岡高等学校)に勤務。40年(静岡美術協会)展覧会の委員長。太平洋画会の会員となり、太平洋美術学校の講師。1965年没、93歳。日本画、美教、土佐派 25 世

土佐光貞 (とさ・みつさだ/1738～1806年)

1738年生れ。土佐光芳の次男。土佐光淳の弟。宝暦4年(分家して、宗家の兄とともに絵所預となる。寛政2年(内裏造営の際、宗家の土佐光時をたすけ、障壁画の制作にあたった。1806年没、69歳。江戸時代中期-後期の絵師

土佐光孚 (とさ・みつざね/1780～1852年)

京都出身。土佐光貞の子。父光貞につき土佐派の画技を学ぶ。10歳にして、新造内裏清涼殿の布衣紙(に「墨画名所図」仙洞御所小書院の小襖(こたて)に「花鳥図」などを書く。その後絵所預(かり)になり、正四位上に至る。父よりも評価が高く幕末土佐派の代表格とされる。1852年没、72歳。江戸後期の土佐派の絵師

土佐光重・藤原光重 (とさ・みつしげ/1675～1710年)

京都出身。本名は藤原光重。藤原行光(土佐行光)の子として生まれ、兄には宗家を継いだ藤原行広(土佐行広)がいる。禁裏の御用を務め左近将監、従五位下を叙任。内裏仙洞御所障壁画制作の際には他の土佐派画家や狩野は画(から)と共に参加。1710年没、35歳。南北朝時代の絵師

土佐光祐 (とさ・みつすけ/1675～1710年)

1675年生れ。土佐光成の子。1696年(父の跡をついで絵所預となる。1709年(狩野常信らとともに内裏、仙洞御所に障壁画をかいた。1710年没、36歳。江戸前-中期の絵師

土佐光親 (とさ・みつちか/生誕年不詳～1725年?)

土佐光起(みつおき)の次男。土佐光成(みつなり)の弟。備後(びんご)(広島県)福山藩(つつかえ、安川)と改姓して土佐派の画風をつたえる。1725年?没。江戸前期-中期の絵師

土佐光時 (とさ・みつとき/1764～1819年)

1764年生れ。土佐光淳(みつあつ)の子。父の跡をついで絵所預(えどころあずかり)となる。寛政2年内裏造営の際、円山応挙、岸駒(がんく)、叔父(おじ)土佐光貞(みつさだ)らとともに障壁画の制作にあたった。1819年没、56歳。江戸中期-後期の絵師

土佐光祿 (とさ・みつとみ/1794~1849年)

1794年生れ。土佐光時(みつとき)の子。父の跡をついで絵所預(えどころあずかり)となるが、その画業はあきらかでない。1849年没、56歳。江戸後期の絵師

土佐光長・藤原光長、常磐光長 (とさ・みつなが/生没年不詳)

土佐、藤原の姓でも呼ばれる。後白河院の命で《年中行事絵巻》の制作の中心となったほか、1173年最勝光院御所障子に藤原隆信とともに日吉行幸などの図を描いた。《伴大納言絵詞》の作者とも伝えるが、確証はない。土佐三筆。平安末期の宮廷絵師

土佐光成 (とさ・みつなり/1647~1710年)

1647年生れ。土佐光起(みつおき)の長男、土佐光親(みつちか)の兄。延宝(えんぽう)9年父の跡をついで絵所預(えどころあずかり)となり、内裏、仙洞(せんとう)御所の絵事御用をつとめた。1710年没、65歳。江戸前期-中期の絵師

土佐光信 (とさ・みつのぶ/生没年不詳)

土佐光弘(みつひろ)の子と推定。宮廷絵所預(えどころあずかり)を務め、官位も刑部大輔(ぎょうぶのたいふ)従(じゆ)四位下にまで上り、多くの所領を有して土佐派の栄位を確立。宮廷、公家(くげ)や幕府・武家、寺社に盛んに作画活動。制作範囲は幅広く、屏風(びょうぶ)、絵巻、肖像画、仏画をはじめ工芸品の下絵にまで及ぶ。光信は平安時代以来培われてきた大和絵の正統的な継承者であったが、漢画や中国画の画風も取り入れた。1469~1522年没。作例(こ)に『狐(きつね)草子絵』『北野天神縁起』(文亀本。京都・北野天満宮)、『清水寺縁起』(東京国立博物館)などがあげられる。土佐三筆。室町後期の和絵絵師、土佐派の栄位を確立

土佐光則 (とさ・みつのり/1583~1638年)

光吉の子(一説に弟子とも)。和泉国堺に父光吉と共に隠棲して土佐派の画系と家系を守つ

ていたが、のち京都に移住。絵所預となる。「源氏物語画帖」(東京国立博物館蔵)などの作品がある。1638年没、56歳。安土桃山・江戸前期の絵師

土佐光弘 (とさ・みつひろ/生没年不詳)

土佐行秀(ゆきひで)(一説に土佐行広(ゆきひろ))の子。1430年後花園天皇の大嘗会(だいじょうえ)に行秀が悠紀屏風(ゆきびょうぶ)を、光弘が主基屏風(すきびょうぶ)をかく。43年絵所預(えどころあずかり)となる。中務丞、土佐権守(ごんのかみ)。室町時代の絵師

土佐光文 (とさ・みつぶみ/1812~1879年)

京都生れ。土佐光孚の次男。土佐光章の父。土佐光祿の養子。絵所預となり、従四位下備前守となった。安政度御所障壁画制作では、画工頭を務めた。絵師としては東山春秋画会に参加し、解散後は中島来章、塩川文麟と如雲社を創設。門人に川辺御楯、川崎千虎らがいる。1879年没、68歳。江戸後期~明治の土佐派の画家、日本画

土佐光茂 (とさ・みつもち・みつしげ/生没年不詳)

土佐光信(みつのぶ)の子。大永(たいえい)3年(1523)ごろには父の跡をついで絵所預(えどころあずかり)となり、1569年ごろまで活躍。従四位下、刑部大輔(ぎょうぶのたいふ)。大和絵装飾画の代表的作家、作品に「桑実(くわのみ)寺縁起絵巻」「浜松(はま)図屏風(びょうぶ)」などがある。名は「みつしげ」ともよむ。戦国時代の絵師

土佐光吉 (とさ・みつよし/1539~1613年)

京都生れ。土佐光茂の次男として生まれ兄に土佐米元を持つ。兄米元が足利将軍家に仕えていたが、戦死、後を継ぐも、一時期将軍家及び宮中との関係が中絶。その後、宮中へ調進の御年扇、御月扇を再興して献上し関係を再興させ左近将監、従五位下に叙任。代表作源氏物語画帳が重文指定。安土桃山時代、江戸前期の絵師

土佐行秀・藤原行秀、春日行秀 (とさ・ゆきひで/生没年不詳)

土佐行広(ゆきひろ)の子(一説に弟)。1413年報恩院僧正隆源の命で称光天皇の御代始(みよのはじめ)三壇法本尊(醍醐(たいご)寺)をかく。19年正五位下、修理亮(しゆりのすけ)。19

年絵所預(えどころあずかり)。「融通念仏縁起絵巻」(清凉寺)の作者のひとり。38年ごろまで制作。室町時代の絵師

後、白日会展、改組日展を主舞台に活躍。2003年白日会展に出品し、準会員奨励賞。白日会会員。洋画

土佐行広 (とさ・ゆきひろ/生没年不詳)

土佐広周の父。将監に任官。南北朝期半ばに興隆したやまと絵の流派土佐派の絵師のなかで、初めて土佐姓を称した。記録では1403~1451年の在世が確認でき、1429年入道して経光を称した。宮廷、院、幕府で広範な画作に従事する。代表作には清凉寺「融通念仏縁起絵巻」(1417頃)の一部がある。肖像画にも長じ、「足利義持像」(1428)、「山科教言室像」(1406)制作、京都鹿苑寺「足利義満像」(1408,現存)、三寶院「満濟准后像」(1434,現存)などが彼の筆とみなされている。室町やまと絵様式の一典型を創った。その様式による現存作品として京都妙心寺春浦院「福富草子絵巻」、「十二類合戦絵巻」(個人蔵)。室町初期の土佐派の絵師

戸田ツトム (とだ・つとむ/1951~2020年)

東京生れ。1971~73年桑沢デザイン研究所に入学。73~77年工作舎に入社。雑誌『遊』や書籍のエディトリアルワークを担当。77年戸田オフィスを設立。寺山修司・幻想映画特集 映写技師を撃て(西武劇場)のカatalogをデザイン。78年演劇実験室◎天井桟敷「奴婢訓」 「観客席」のポスターデザインを担当。85年『エリック・サティ』(マルク・ブルデル著、リポート、1984年)ほかで、第16回講談社出版文化賞・ブックデザイン賞。89年フルDTPによる『森の書物』(河出書房新社)刊行。93年桑沢賞。99年作品集『D-ZONE/TZTOM TODA エディトリアルデザイン 1975-1999』(青土社)刊行。2000年D-ZONE/戸田ツトム展(ギンザ・グラフィック・ギャラリー)。2008~18年神戸芸術工科大学デザイン学部教授。論文「シンボルから陰影へグラフィックデザインにおける象徴表現への批判と諧調表現の近代史」で神戸芸術工科大学から博士(芸術工学)。2020年没、70歳。グラフィック・デザイナー、美教

土佐行光 (とさ・ゆきみつ/生没年不詳)

文和(ぶんな)元=正平(しょうへい)7年(1352)絵所預(えどころあずかり)。従四位上、越前守(えちぜんのかみ)。「地藏験記絵巻」「十王図」などをかいたとされる。明徳元=元中7年(1390)子の光重(みつしげ)が絵所預となっており、このころ死去したとおもわれる。南北朝時代の絵師

戸田博子 (とだ・ひろこ/1958年~)

金沢市生れ。1980年金沢美術工芸大学絵画専攻日本画業。78年日展に入選、97年、2007年日展特選。84年現代美術展で最高賞、95年日春展で日春賞。日展会友。日本画

年 英 (としひで/生没年不詳)

はじめ芳年について浮世絵を学び、1889年青年絵画共進会に出品する。87年頃より新聞挿絵や役者・風俗画、また日清・日露の戦争絵も描く。浮世絵、挿絵

戸津 侃 (とつ・ただし/1930年~)

東京生れ。行動美術協会会員。「宇部野外彫刻展」、「彫刻日動展」、「足立区展」、「葛飾区美術家展」、「栃木県千年の扉展」、「原野展」、「行動展」に出品。<モニュメント等>日仏海洋学会賞メダル、昭和薬科大学、足立区庁舎前、岡山県山陽町庁舎前、佐久市立近代美術館、中国上海瑞金大厦ロビー、葛飾区小菅東スポーツ公園、那須友愛の森、余笹川ふれあい公園、太田原市病院椿寿荘中庭、春日部市梅原病院前、侃侃庭彫刻園。彫刻

富田裕夫 (とみと・ひろお/1921~2013年)

金沢市生れ。1949年日展入選。50年金沢美術工芸専門学校油画科卒。58年一水会展入選、以後一水会へ連続出品。64年個展開催。65年一水会展佳作。64年一水会会員。72年「ヨーロッパの旅」個展開催。76年日展会友。初期より一貫してヨーロッパの聖堂を中心とした町並みを描き続けた。2013年没、92歳。洋画

十時梅厓 (ととき・ばいゝ/1749~1804年)

大坂生れ。儒者伊藤東所にまなぶ。伊勢(三重県)長島藩につかえ、藩校文礼館を再興。書画、篆刻(てんこく)にもすぐれた。1804年没、56歳。著作に「天臨閣娛観」「清夢録」など。江戸中期-後期の儒者、書画、篆刻、大阪南画

利光敏郎 (としみつ・としろう/1934年~)

大分市生まれ。1955年大分大学学芸学部卒。55年一水会展、56年東光会展に入選。62年東京学芸大学に国内留学し、倉田三郎に師事。94年記念白日会展に入選。以

十時 良 (ととき・りょう/1933年～)

東京生れ。1944年長崎市に疎開後、大分市に転居。54年大分大学学芸学部卒。57年自由美術協会展に入選。以後、同展を主舞台に活躍。66年自由美術協会会員。94年自由美術協会展で平和賞。別府現代絵画展をはじめ、各種コンクール展に精力的に出品。

洋画

百々 広年 (とど・こうねん/生誕年不詳～1856年)

京都の人。四条派の山脇東暉(やまわき・とうき)、(紀広成(きの・ひろなり))にまなび、山水雑画をえがいた。1856年没。江戸後期の絵師

百々 俊雅 (とど・としまさ/1939年～)

大阪生れ。1963年金沢美術工芸大学美術学科日本画専攻卒。71年日展に入選し、89年、2009年特選。日春展、全関西展、京展で受賞。90年菅楯彦大賞展出品、93年準大賞。94年川端龍子賞展入選。金沢美術工芸大学名誉教授。日展会友。日本画、美教

外村 吉之介 (とのむら・きちのすけ/1898～1993年)

滋賀県生れ。1925年関西学院大学神学部卒。32年手織物の創作活動。国画会会員。48年倉敷民藝館の初代館長に就任。53年倉敷本染手織研究所を設立。65年熊本国際民藝館を設立。館長に就任。日本民芸協会常任理事。1993年没、95歳。民藝運動家、染織家、コレクター、館長

飛田 周山 (とびた・しゅうざん/1877～1945年)

茨城県生れ。20歳の時から久保田米僊に学び、後竹内栖鳳に学び、更に前期日本美術院研究科に入り、橋本雅邦に師事。1906～41年文部省より国定教科書の挿絵を嘱託従事。12、15年文展で褒状。17年文展、19年帝展で特選。20年帝展無鑑査出品。25年帝展以来審査委員、改組文展に出品。日本画院に作品発表。1945年没、69歳。日本画

戸邊 信敏 (とべのぶとし/1927年～)

長崎県生れ。1958年長崎県展受賞。66年日本水彩画会展奨励賞。69年日本水彩画

会展会友奨励賞。74年創元会展会友奨励賞。76～79年創元会会員。日本水彩画会会員選抜展連続出品(81年まで)。84年長崎県展審査員。水彩

50

戸部 隆吉 (とべりゅうきち/1886～1921年)

石川県生れ。母校の東京美術学校や東京女高師(現お茶の水女子大)で東洋彫刻史をおしえる。1921年没、36歳。没後に遺稿の一部が「日本仏教美術の研究」として刊行。美史(彫刻)、美教

戸祭 友古 (とまつりりゅうこ/1828～1869年)

茨城県生れ。椿椿山の門人で花鳥をよくした。また人見淇堂について画法を研究した。1869年没、42歳。日本画

富田 呉舟 (とみた・ごしゅう/生没年不詳)

水戸の人。松平雪山の門人。花鳥を得意とした。日本画

富田 末男 (とみた・すえお/生誕年不詳～1974年)

水戸市生れ。1913年東京美術学校図案科卒。14年東京大正博覧会に出品。17年茨城県物産陳列館技手。23年頃より日本刺繍の改良を試み、のち「綴刺繍」を創案。33年帝展で入選。48年茨城県美術展で文部大臣賞。68年茨城県より功績賞。69年勲5等瑞宝章。1974年没。工芸(刺繍)

富田 菜摘 (とみた・なつみ/1986年～)

東京生れ。2009年多摩美術大学絵画学科油画専攻卒。不要となった日用品や電子機器、廃材を丁寧に組み立て、動物の立体作品を制作している。身近にある廃材を使ったワークショップの開催、店舗やテレビ番組の美術制作、ミュージックビデオのアートワークなども担当し、幅広く活動している。個展に、「富田菜摘 スクラップ・ワールド」(ヤマザキマザック美術館、愛知、2020)、「クリエイティブリユースでアート! ×富田菜摘『ものものいきもの』展」(調布市文化会館たづくり、2020)、「中吊りの日々」(ギャラリー東京ユマニテ、2018)、「Wonder Orchestra」(Bunkamura Gallery、東京、2017)など。廃材利用、立体

富永和弘 (とみなが・かずひろ/1959年～)

佐賀県生れ。1982年 武蔵野美術短期大学工芸デザイン科専攻科卒。82年白山陶器株式会社入社、デザイン室に勤務。90年九州クラフトデザイン展で(ウェーブ)がグランプリ。98年個展「ひらひら、ハナひらいていく白磁」(INAX ガレリアセラムカ、東京)を開催。2000年グッドデザイン賞特別賞、中小企業庁長官賞。デザイン、陶芸

富永謙太郎 (とみなが・けんたろう/1904～1985年)

静岡県生れ。小学校卒業後に上京して絵看板屋で働きながら、絵を学ぶ。1927年独立して、商業美術工芸社を設立。31年漫画家島田敬三と知り合い、ポケット講談社の子供雑誌の挿絵を描き始める。32年菊池寛「妻は見たり」(『日の出』)、「結婚街道」(読売新聞)や江戸川乱歩「地獄の花嫁」などの現代小説、探偵小説の挿絵。作家クラブ名誉会員。岩田専太郎、志村立美とともに挿絵界の三巨匠とされた。1985年没、81歳。挿絵

富永雪旦 (とみなが・せつたん/1876～1913年)

茨城県生れ。はじめ松平雪江に学び、上京して望月玉泉に師事。1911年美術展覧会に出品。1913年没、38歳。日本画

富永直樹 (とみなが・なおき/1913～2006年)

長崎県生れ。東京美術大学彫刻科塑造部で同郷の北村西望のもとで学ぶ。1936年文展に入選。50年日展で特選。第7回、8回展で特選受賞。53年日展審査員。54年日展会員、以後、評議員、理事、常務理事、事務局長、理事長を歴任。77年事務局長時代に『日展史』の編纂を企画し理事長時代(1979-83年)にその刊行を開始。72年改組日展出品作で日本芸術院賞。74年日本芸術院会員。沖電気の国産四号電話機(1949年)をデザイン。金沢美術工芸大学の客員教授。84年勲三等瑞宝章、89年文化勲章、90年長崎県名誉県民顕彰。2006年没、93歳。彫刻、インダストリアル・デザイナー、日展史、日展理事長

富張広司 (とみはり・ひろし/1936年～)

茨城県生れ。1957年茨城大学教育学部美術科卒。74年モダンアート展で新人賞、75年奨励賞。76年モダンアート協会会員。78年文化庁芸術家在外研修員として渡米。88年クラコフ国際版画ビエンナーレ(ポーランド)に出品。89年「富張広司木版画展」(茨城県立

県民文化センター)。92年富張広司木版画展(茨城県つくば美術館)開催。版画

富山治夫 (とみやま・はるお/1935～2016年)

東京生れ。『女性自身』誌、朝日新聞出版写真部の嘱託カメラマン。1964年『朝日ジャーナル』誌の連載「現代語感」の写真を分担。66年よりフリー。78年写真展「JAPAN TODAY 現代語感」(インターナショナル・センター・オブ・フォトグラフィー、NY)を開催。78年講談社出版文化賞。80年日本写真協会年度賞。2003年紫綬褒章。05年スポニチ芸術大賞。12年旭日小綬章。写真集に『現代語感』(中央公論社、71年)『佐渡島』(朝日新聞社、79年)『京劇』(全2巻、平凡社、1980年)『禅修行』(曹洞宗出版部、2002年)『現代語感 OUR DAY』(講談社、2004年)。2016年没、81歳。写真

戸村後草園・義道 (とむら・こうそえん/1768～1854年)

1768年生れ。81年藩主佐竹義敦(曙山)に拝謁し、1801年父の隠居により34歳で横手城代。詩歌、書画に通じた。画ははじめお抱え絵師の狩野秀東に学ぶが、父義敬の代に佐々木原善を江戸や長崎に遣わして南蘋派を学ばせており、帰郷した寛政期以降、その指導により南蘋派の花鳥画を多く描いた。28年年隠居した後は、ますます書画に力を注いだ。1854年没、86歳。江戸後期の絵師

戸村茂樹 (とむら・しげき/1951年～)

青森県生れ。1976年岩手大学教育学部特設美術科卒。84年イベサ国際版画ビエンナーレ(スペイン)に出品。95年「シリーズII [岩手の現代作家] 渡部吟子・戸村茂樹」展(萬鉄五郎記念美術館)。2003年「自然を見つめて—戸村茂樹展」(八戸市美術館)を開催。11年「私たちがIMA(いま)在ること—7人の現代美術家たちによる」展(岩手県立美術館)に出品。2015年「戸村茂樹展ドローイングと銅版画」(MORIOKA 第一画廊・舷)開催。版画、ドローイング

富田古観 (とみた・こかん/生誕年不詳～1832年)

愛知県生れ。幼い頃から画を好み、知多巡遊中の張月樵を招いて画を学んだ。巢見来山に次いで、この地方では名声があったという。江戸後期の絵師

富田末男 (とみたすえお/1885～1974年)

水戸市生れ。1913年東京美術学校図案科卒。14年東京大正博覧会に出品。17年茨城県物産陳列館技手。23年年頃より日本刺繍の改良を試み、のち「綴刺繍」を創案。33年帝展で入選、以後34年、36年、38年と出品。48年茨城県美術展で文部大臣賞。68年茨城県より功績賞。69年勲5等瑞宝章。1974没、89歳。刺繍

友田九溪 (ともだ・きゅうけい/1862～1918年)

金沢市生れ。陶画を内海吉造・岩波玉山に、絵を幸野楳嶺・池田九華に学ぶ。また、納富介次郎・ワグネルに陶磁器の製造や顔料の調製を学ぶ。87年～91年金沢工業学校の陶画科で教える。同年、金沢に友田組を設立し陶磁器と洋式顔料の製造をはじめ。内国絵画共進会などに出品。1918年没、56歳。日本画、陶画、美教

知永論香 (ともなが・ゆか/1944～1987年)

青森県生れ。1967年弘前大学美術科卒。68年東京学芸大学専攻科卒。白日会を中心に活躍。1987年没、43歳。洋画

土門 拳 (どもん・けん/1909～1990年)

山形県生れ。1933年東京・上野の宮内幸太郎氏の写真館にて写真の基礎を学ぶ。35～39年名取洋之助主宰の日本工房に所属し報道写真を撮り始める。58年『ヒロシマ』、60年『筑豊のこどもたち』の作品により報道写真家としての名をはせる。『古寺巡礼』は63年に第一集を発刊し、75年第五集で完結。71年『古寺巡礼』の業績菊池寛賞。73年紫綬褒章。1990年没、81歳。83年酒田市に土門拳記念館開館、全作品を所蔵、常設展示。写真、個人美術館

岩手県女子師範学校専攻科卒。51年上京し、小学校の教員として働く(74年まで)。第5回二紀展に入選。74年 渡仏。アカデミー・グラン・シヨミエールで学ぶ。75年サロン・ドートニス、サロン・デ・ザンデパンダに出品。81年国際女流画家協会会員展(ピカルディ美術館、フランス)に出品。95年「シリーズⅡ[岩手の現代作家]木村正・豊川和子」展(萬鉄五郎記念美術館)を開催。東京で没、78歳。洋画、美教

豊島 猛 (とよしま・たけし/1902～1989年)

長崎市生れ。1924年小林万吾に師事、美術学校教授藤島武二主宰の川端画学校に入

学。25年東京美術学校(現:東京芸術大学)西洋画本科入学、在学中長原孝太郎、小林万吾、岡田三郎助、和田英作らに学ぶ。30年東京美術学校西洋画本科卒。大阪府立富田林高校、福島県立安積高女、平戸高女、平戸猶興館高校、海星学園などで教える。57年新世紀美術協会会員。76年日展入選。78年白亜美術協会会員。1989年没、87歳。美教、洋画

豊嶋康男 (とよしま・やすお/1953年～)

群馬県生れ。1977年東京藝術大学卒、79年同大大学院修了。79年群馬青年美術展で優秀賞。2001年県展で県教育文化事業団会長賞。群馬工芸美術会会長。工芸(金属)

豊田勝秋 (とよだ・かつあき/1897～1972年)

福岡県生れ。県立中学明善校を経て東京美術学校鑄造科に進み、津田信夫に師事。同研究科を終了後、東京高等工芸学校在職中に結成した新進作家グループ「无型(ムケイ)」で活躍。1927年創設の帝展工芸部に連続入選。現代工芸草創期の旗手的存在41年帰郷。戦後は通産省産業工芸指導所九州支所長、佐賀大学・鹿児島女子短期大学教授。県美術協会をはじめ各方面に活躍し、後進の育成に努めた。1972年没、75歳。鑄金、美教

豊田笠州 (とよだ・りゅうしゅう/1874～没年不詳)

茨城県生れ。別号に静観などがある。はじめ松平雪江に学び、のちに上京して松本楓湖に師事した。日本画

豊原国周 (とよはら・くにちか/1835～1900年)

江戸生れ。初め豊原周信、のち歌川国貞の門人となった。美人画、役者大首絵を描く。浮世絵師の最後を飾った人といわれる。東京で没、65歳。幕末-明治期の浮世絵師

豊福孝行 (とよふく・たかゆき/1934～2013年)

福岡県生れ。1953年県立明善高校卒、東京藝術大学美術学部に入學し、林武に学ぶ。同大学専攻科修了後、神奈川県内の中学や高校の教員。68年九州産業大学芸術学部講師に赴任し、2004年教授として退任するまで後進の指導に当たった。おもに個展や小グループで活動し、フォービスム風の素早い筆致とメリハリのある色調を生かしながら、力強い構成の作品を描いた。2013年没、79歳。美教、洋画

豊福知徳（とよぶく・とものり/1925～2019年）

福岡県生れ。富永朝堂に師事。1950年より新制作派展に参加。59年高村光太郎賞。60年ベネチア・ビエンナーレ出品を機にイタリア・ミラノに定住し国際的に活躍。木彫による具象から抽象に転じる。84年吉田五十八賞。90年毎日芸術賞。2019年没、94歳。彫刻(木彫)

寅若 繁（とらわか・しげる/1938～2006年）

石川県生れ。松任農業高校在学中に絵を描き始め、57年現代美術展初出品、石川県美文化協会賞。58年一水会展入選。65年農村を描く「くろつちグループ」を結成。71年一水会会員。身近な農村の風景や女性を、おおらかに表現し、大自然の恵みに感謝と祈りを込め、親しみのある作品を描き続けた。2006年没、68歳。版画、洋画？

鳥居清貞（とりい・きよさだ/1844～1901年）

13歳のとき歌川国芳の門に入って芳郷と称したが、1861年国芳が没したのち三代目鳥居清満の門下となった。作画期は安政5年(1858年)から没年の頃にかけてで、80年喜昇座の新築で奥役となり、主に芝居番付などを描く。1901年没、58歳。息子に四代目鳥居清忠。江戸末期-明治期の浮世絵師

鳥居清忠（とりい・きよただ/生没年不詳）

鳥居清信の門人とされる。江戸に住む。作画期は享保から寛延の頃にかけてとされ、紅絵や漆絵の役者絵、浮絵などの他、肉筆画を残す。一枚摺の役者絵では、1718～44年頃までの作が確認されている。江戸中期の浮世絵師

鳥居清忠・四代目（とりい・きよただ IV/1875～1941年）

東京生れ。鳥居清貞の門人でその長男。1892年土佐派の川辺御楯に絵を学び、その傍ら父の清貞にも付いて鳥居派の画風を学んだ。鳥居派六代目の三代目鳥居清満に後継者が無かったので四代目清忠を継ぎ、鳥居派宗家七代目となる。歌舞伎座、新富座の看板絵、番付などを描いた。明治末期には木版口絵も手がける。1941年没、67歳。演劇画に多大な貢献をした家系。浮世絵師、版画、鳥居派宗家七代目当主

鳥居清忠・言人・五代目（とりい・きよただ・ことんど V/1900～1976年）

東京生れ。1915年立教中中退。15年言人と号し鳥居派独特の芝居絵看板を描き、歌舞伎界の重要な存在。29年8代目宗家を継承。その後画号を清言と改め、さらに62年5代目清忠を襲名。一方、舞台美術、美術考証家としても活躍。66年日大芸術学部講師。代表作に「髪」(日本画)、「夏妓」(版画)、芝居絵「俊寛」「雷神不動北山桜」など。1976年没、76歳。浮世絵師、舞美、鳥居派八代目宗家、版画

100

鳥居清経（とりい・きよつね/生没年不詳）

江戸の芝居番付の版元中島屋伊左衛門の子。初代鳥居清満にまなび、役者絵にすぐれ、ほかに錦絵美人画もある。宝暦-安永(1751-81)のころ活躍し、黒本、黄表紙などの草双紙の挿絵も多数えがいた。江戸中期の浮世絵師、挿絵

鳥居清長・四代（とりい・きよなが IV/1752～1815年）

江戸生れ。鳥居家3代の初代清満にまなび。1787年ごろ鳥居家4代をつぐ。大判の続き絵を考案し、役者絵のほか、長身で健康的な美人を群像形式でえがく美人画で知られる。1815年没、64歳。作品に「当世遊里美人合」「柳下納涼図」など。江戸中期の浮世絵師

鳥居清信・初代（とりい・きよのぶ I/1664～1729年）

1664年生れ。初代鳥居清元の次男。鳥居派の始祖で鳥居家初代。父と大坂から江戸にうつり、芝居の看板絵をかく。一枚摺りの役者絵を考案、瓢箪足(ひょうたんあし)、蚯蚓描(みみずがき)という鳥居派独自の画法を創造。美人画にもすぐれた。1729年没、66歳。代表作に「上村吉三郎の女三の宮」「風流四方屏風」。江戸前期-中期の浮世絵師

鳥居清倍・二代（とりい・きよます II/1706～1763年）

鳥居家2代目に擬せられる。清信の長男とも弟とも伝えられる。丹絵・漆絵による、すぐれた役者絵・美人画を残した。主な作画期は宝永から正徳期(1704～1716)とされる。鳥居清信とともに鳥居派の基礎を築いた。大々判丹絵に勇壮な作品が多い。1763年没、57歳。江戸中期の浮世絵師

鳥居清光（とりい・きよみつ/1938～2021年）

鳥居派8代目・5代清忠の娘で、伊藤清永に師事し、油彩画を学ぶ。東京芸術大学日本画科卒、日生劇場のデザイン室や技術部に勤務。父に鳥居派の画法を習得。1976年女性浮世絵師とし、82年鳥居派9代目を襲名し、清光を名乗る。木版画や鳥居派伝統の歌舞伎絵看板だけでなく、歌舞伎の衣裳や舞台美術も手がけ、舞台装置図のような立体図も制作。86年エイボン芸術賞、88年長谷川伸賞、94年日本演劇興業協会賞、2016年松尾芸能賞特別賞。05年黄綬褒章。東京で没、83歳。浮世絵師、舞美、鳥居派9代目

鳥居清満 (とりい・きよみつ/1735~1785年)

江戸生れ。鳥居家3代目当主で、2代清倍(きよます)の二男と伝え、宝暦から明和(1760年代)の浮世絵界を指導し、芝居看板、番付絵のほか、細判役者絵や草双紙の挿絵も多く描いた。しかし、画風は鳥居派の様式を遵守しながらも力感・生動感に乏しく、1768年ごろ一筆斎文調(いっぴつさいぶんちょう)や勝川春章(かつかわしゅんしょう)による役者似顔絵が出現すると、それによってかわられたが、鈴木春信(はるのぶ)に少なからぬ影響を与え、鳥居清長・清経(きよつね)らの優れた門人を育てた。江戸中期の鳥居派の浮世絵師、挿絵

鳥居清満・五代 (とりい・きよみつ V/1787~1868年)

鳥居派5代目当主で、初代清満の孫。8歳のころ鳥居家4代目清長の門に入り、画名は初め清峰、清長の没後、1815年に清満と改める。清峰時代は美人風俗画や草双紙の挿絵を描いたが、清満襲名後は鳥居家当主として看板絵・番付絵に専心した。1868年没、81歳。江戸後期の鳥居派の浮世絵師、挿絵、看板絵

鳥居清満・六代 (とりい・きよみつ VI/1832~1892年)

2代清満の長男で、俗称栄蔵、初名清芳(きよよし)。父の没後清満と改名し、鳥居派6代目当主となった。1892年没、60歳。江戸後期の鳥居派の浮世絵師

鳥居清元 (とりい・きよもと/1645~1702年)

大坂生れ。女形役者であったが画才があり、道頓堀の劇場で絵看板を描くことがあった。1687年江戸に移り難波町に住み、役者を廃業して絵描きを家業とした。元禄3年(1690年)には市村座の絵看板を描く。1702年没、58歳。初代鳥居清信は次男とされる。この清元を開祖とした画系は鳥居派と称し、歌舞伎の絵看板専門の画派として続いている。江戸前期-中

期の浮世絵師、鳥居派の祖

鳥居清元・二代(とりい・きよもと II/1789~没年不詳)

鳥居清長の門人。作画期は寛政から安政にかけてのころとされる。鳥居派の絵師として保存されることの少ない芝居の絵看板や番付などを手がけることが多かったため、今日までに伝わる作品は少ないが、肉筆画で清長風の美人画などが残っている。浅草寺には1859年に奉納された「関羽図絵馬」があり、その画技が非常に優れたものであったことがうかがえ、また「七十一翁」すなわち71歳と署名しているため、逆算すると寛政元年の生れということになる。江戸中期-後期の鳥居派の絵浮世絵師

鳥居言人 (とりい・ことんど/1900~1976年)

東京生れ。父の七代目鳥居清忠から鳥居派の画法を学ぶ。1914年小堀鞆音塾に師事、土佐派を学ぶ。雑誌の挿絵、家業の看板絵も手がけた。18年鏑木清方に師事し美人画を描く。美人版画制作は29~35年制作。29年に『創作版画、昭和風俗美人集』を創美会(酒井好古堂)から限定300部で刊行開始、41年父(清忠)死去に伴い鳥居家八代目当主。62年、七代目の名跡を継承し、清忠と改称。70年忠雅急逝、歌舞伎座等の看板絵を描いた。1976年没、76歳。浮世絵、鳥居家八代目当主、挿絵、版画、美教

鳥居忠雅 (とりい・ただまさ/1904~1970年)

東京生れ。1921年四代目清忠に師事し、鳥居派の芝居絵を学ぶ。43年歌舞伎座などの絵看板や番付を描いており、第二次世界大戦後は主として歌舞伎座、国立劇場、御園座などの絵看板、番付、筋書などを描いた。また渡辺木版美術画舗から新版画の作品を発表している。日本劇画院展にも作品を出品しており、66年木版画「隈取十八番」、68年の「続隈取十八番」、「歌舞伎隈取図説」があげられる。74年鳥居家の姓を許された。77年木版画集『歌舞伎十八番』全三巻を著す。東京で没、65歳。浮世絵、日本画、版画

鳥居昇 (とりい・のぼる/1918~2011年)

1918年生れ。師、辻久。1963年辻久理事長、桜庭彦治、馬淵聖、鳥居昇らで神奈川光風会創立。光風会会員。日展会友。2011年没、93歳。洋画

鳥越烟村 (とりごえ・えんそん/生没年不詳)

岡山藩士で、文雅を好み、特に詩画を得意とした。浦上春琴に南画を学び、早くから家督を子息に譲って自適の生活を送った。後に梅澹の画名で中国・九州地方を遊歴する。活動の最盛期は天保年間(1830—1843)の終わり頃から弘化年間(1844—1847)頃と推測される。烟村は田能村竹田の「竹田荘師友画録」に登場し、酒を愛し、母に孝養を尽くした逸話が伝えられている。江戸後期の絵師

鳥巢水子 (とりす・みずこ/1925～2004年)

長崎県生れ。津田塾大学英文科卒。1972年新田淑子主宰の織物教室で染織を学び始め、74年から志村ふくみに師事。76年日本伝統工芸展に入選。沖縄の読谷村花織に出会い、花織、花倉織などの技法をもとにした豊かな色彩の織物を製作するようになる。以後入選を重ねて正会員。79年文部大臣賞、83年にはNHK会長賞。沖縄に伝わる花織、花倉織などの技法をもとに豊かな色彩の独自の織物を制作した。日本工芸会正会員。北村武資に学んだ紹織を組み合わせた鳥巢独自の「花紹織」を創り出した。91年紫綬褒章、99年勲四等宝冠章を受章。2004年織りの組織が分かる作品集「私の花織・花紹織」を出版した。2004年没、79歳。染織

鳥山 明 (とりやま・あきら/1955～2024年)

愛知県生れ。1978年に週刊少年ジャンプ(集英社)にて「ワンダー・アイランド」でデビュー。80年に担当編集者である鳥嶋和彦のアイデアを受けて連載を始めた「Dr.スランプ」でブレイク。81年同作品にて第27回小学館漫画賞。81年テレビアニメ化され「んちゃ」「ハイチャ」などの流行語を生む国民的人気作。「Dr.スランプ」の人気を引き継いだ「DRAGON BALL」は、単行本のシリーズ累計発行部数が3億部を越える超人気作。アニメは世界40ヶ国以上で放映。ドラゴンクエストシリーズなどゲームのキャラクターデザインでも有名。デフォルメしたキャラクター造形。2024年没、68歳。漫画、デザイナー

鳥山石燕 (とりやま・せきえん/1712～1788年)

江戸生れ。狩野玉燕周信の門人。肉筆画、絵馬の制作。絵本、絵手本もある。『鳥山彦(石燕画譜)』(1773)。『百鬼夜行』(1776)、『続百鬼』(1779)、『百鬼拾遺』(1781)、『画図百鬼徒然袋』(1784)妖怪絵本。俳諧を江戸座の東流窓燕志に学んだ関係で絵入俳書の挿絵も多い。浮世

絵師の喜多川歌麿や歌川豊春など多くの門人を育成。浮世絵との繋がりは緊密である。1788年没、76歳。江戸中期の狩野派の町絵師

頓田室子 (とんだ・むろこ/1934年～)

長崎市生れ。武蔵野美大油絵科卒業。一陽会会員。一陽会特別賞受賞。一陽会賞受賞。1978年東京兜屋画廊にて1年毎に定期個展を開く。日本美術家連盟会員。洋画

な

内藤春治 (ないとう・はるじ/1895～1979年)

盛岡市生れ。1910年釜師有坂安太郎に入門、16年南部鑄金研究所に入り松橋宗明に学ぶ。19年に上京し香取秀真に師事。20年東京美術学校に入学、25年鑄造科を卒業、研究科へ進み、28年終了後同校の助手。26年、高村周豊らと「无型」を結成し、津田信夫らの昭和初期における新工芸運動に参加。27年帝展に入選、29年帝展で特選、30年無鑑査。35年无型同人を中心に実在工芸美術会を結成。44年東京美術学校教授。52年日展参事、58年日展評議員、60年日展参与。55年日本芸術院賞。62年皇居新二重橋の照明飾台、橋ゲタなどの装飾デザインを担当。正倉院御物の鏡の研究と仏像修理でも知られ、奈良薬師寺の薬師三尊、鎌倉大仏の修理委員。東京で没、84歳。鑄金、美教、仏像修理

内藤 廣 (ないとう・ひろし/1950年～)

横浜市生れ。1976年早稲田大学大学院修士課程修了。フェルナンド・イゲラス建築設計事務所(スペイン・マドリード)、菊竹清訓建築設計事務所を経て、81年内藤廣建築設計事務所を設立。2001～11年東京大学大学院にて、教授・副学長を歴任。07～09年グッドデザイン賞審査委員長。主な建築作品に、海の博物館、安曇野ちひろ美術館、牧野富太郎記念館、倫理研究所富士高原研修所、島根県芸術文化センター、日向市駅、高知駅、虎屋京都

店、旭川駅、静岡県草薙総合運動場体育館、とらや赤坂店、高田松原津波復興祈念公園
国営追悼・記念施設、銀座線渋谷駅など。建築(美術館、博物館)

内藤政勝 (ないとう・まさかつ/1906～1982年)

栃木県生れ。雑誌『書窓』に魅せられて発行人の志茂太郎を訪ね、1935年より造本を手がけ、特に42年頃志茂を介して関野準一郎と知り合ってから版画を贅沢に用いた豪華本の数々を世に送った。関野準一郎『絵本西遊記』(1943)『雨月物語』(1944・45)、若山八十氏『河童愛情記』(1948)、関野『古事記絵巻』(1949)、恩地孝四郎他『博物譜』(1950)、版画としては武井武雄が主催した賀状交換会「榛の会」第9～20回へ参加。1982年没、76歳。造本、版画

内藤陽三 (ないとう・ようぞう/1860～1889年)

1860年生れ。工部美術学校卒。82年皇居御造営事務局に於いて洋式建築の正殿模型の製作。83年宇都宮三郎にまわかれて愛知県常滑(とこなめ)に美術研究所を設立。粘土彫刻や石膏(せっこう)型の製法などをおしえる。86年ドイツに留学するが帰国途中の1889年没、30歳。彫刻、陶彫、美教

内藤 礼 (ないとう・れい/1961年～)

広島市生れ。1985年武蔵野美術大学造形学部視覚伝達デザイン学科卒。2018年度毎日芸術賞、芸術選奨文部科学大臣賞。1997年ヴェネツィア・ビエンナーレ国際美術展の日本館にて「地上にひとつの場所を」を展示。2001年ベネッセアートサイト直島の家プロジェクトで古民家「きんざ」に「地上にひとつの場所を」の直島ヴァージョン「このことを」を設置。2002年香川県の直島で個展。2003年アサヒビール芸術文化財団芸術賞。14年東京都庭園美術館で個展。18年水戸芸術館にて大規模個展。20年金沢21世紀美術館にて個展。現代美術、造形、インスタ

直木 昭 (なおき・あきら/1937～2020年)

長崎市生れ。長崎往来の野口弥太郎・山下充などの画家たちの影響によりプロへの道へ進む。1953年水彩連盟展に出品受賞し、54年に会員。65年渡仏し留学。67年帰国し、滞欧作展。73年再渡仏。78年滞欧作品展。2020年没、83歳。水彩

長井雲岬 (ながい・うんぺい/1833～1889年)

1833年生れ。越後の人。16歳の時、長崎を訪れ、鉄翁の門に入る。木下逸雲にも学んだ。雲岬は、その逸雲から与えられた号。1867年アメリカ人神学博士フルベッキの周旋により近江の老山、越後の澗川を訪ね、さらに清国に遊んだ。同地では、徐雨亭ら文人たちとの交流を楽しんだという。1889年没、56歳。江戸後期-明治の絵師

中井汲泉 (なかい・きゆうせん/1892～1970年)

京都生れ。京都市立絵画専門学校で竹内栖鳳らから日本画を学ぶ。2年生で文展入選。1929年盛岡中学校に着任。退職後「盛岡方言絵はがき集」の制作を手掛ける。民俗絵画「大津絵」に想を得て、「南部絵」の制作を志す。木綿の布に糊で描き、染めて地色を白く残すという「染絵」の技法。56年には郷土玩具や染絵を通して岩手の民芸を全国に紹介した功績により、岩手日報文化賞。京都で工芸喫茶「わびすけ」を開店し、染絵や絵はがきを中心とした創作活動を行う。1970年没、78歳。日本画、「南部絵」、染絵、美教、美普、

永井 潔 (ながい・きよし/1916～2008年)

前橋市生れ。裕伊之助らに師事。二科番衆技塾、本郷岡田三郎助美術研究所で学ぶ。日本美術会の創立に参加、事務局長、附属民主主義美術研究所所長。一水会優賞、さくら新人賞。学校法人中央労働学園理事長、法人が経営する東京文科アカデミー、武蔵野外語専門学校の理事長・校長を歴任。書籍の装幀にも携わり、児童書の挿絵も描いた。絵本雑誌『キンダーブック』、講談社『少年少女世界文学全集』、『世界の名作図書館』等。2008年没、92歳。洋画、装填、挿絵、絵本

中井幸一 (なかい・こういち/1917～2020年)

京都生れ。日大卒、1951年電通に入社。デザイナーを経て、プランナー。アート・ディレクター、クリエイティブディレクターのシステム確立つとめた。73年東急グループの「創造開発」へうつり、各種事業を手がける。広告評論家、画家。日大教授。著作に「日本広告表現技術史」など、2020年没、103歳。デザイナー、アートディレクターやクリエイティブディレクターのシステム確立、広告評論家、洋画、美教

中井宗太郎 (なかい・そうたろう/1879～1966年)

京都生れ。東京帝大を卒業後、1909年新設の京都市立絵画専門学校の講師、1942年校長。退職後、立命館大教授。日本・東洋美術史の研究と評論で知られる。1966年没、86歳。著作に「絵画論」「永徳と山楽」など。1966年没、87歳。美教、美術史

永井 郁 (ながい・いく/1930年～)

長野県生れ。1949年多摩美術大学洋画科入学。絵画とともにグラフィックデザインも手掛け、54年東京日日新聞(現毎日新聞)全国観光ポスター展で一位、62年毎日新聞企業広告賞、68年全国パッケージ展で受賞、グラフィックデザイン界の草分け的存在として活躍。日本航空の鶴のマーク、昭和天皇ご訪欧時の機内食メニューなどを手掛けつつ、世界各地を取材。画家としても各種の個展を東京・長野などで開催。月刊誌『白鳩』誌(日本教文社刊)にて「古今吟遊」を連載。グラフィックデザイン、ポスター、木版

中井貞次 (なかい・ていじ/1932年～)

京都生れ。1953年日展入選。54年京都市立美術大学工芸科卒。56年京都市立美術大学専攻科修了。77年京都市立芸術大学教授。90年日展文部大臣賞。93年日本芸術院賞、日展理事。2008年日本芸術院会員。22年文化功労者。染織、美教

中井友子 (なかい・ともこ/1962年～)

1962年生れ。86年神戸大学教育学部卒。個展:2022年ギャラリー開(神戸)'21～'17,'15～'11,'09,'07,'06,'04。2000年ギャラリーYui(明石)。1995年樹樹画廊(名古屋)。94年ギャラリーほりかわ(神戸)ーグループ展ー、06年表現の位相ー6人の方法ー/ギャラリー開(神戸)、01年春陽展(大阪)'00,'95,'94に出品。洋画

永井久晴 (ながい・ひさはる/1875～1944年)

水戸市生れ。明治半ば、久保田米債に師事。1900年茨城県高等女学校で毛筆画講習会講師。その後一時、徳富蘇峰の『国民新聞』の画報担当。劇作家として活躍し、長唄の作詞や脚本執筆、劇団運営を行う。大正末年頃、一念発起し、絵画に専念、久晴を名乗る。東京都で没、69歳。劇作家、日本画、美教

中井芳瀧 (なかい・よしたき/1841～1899年)・里の家芳瀧(さとのや・よしたき)

1841年生れ。歌川芳梅(よしうめ)の門人。大坂の浮世絵師として知られ、役者絵、美人画たくみであった。のち和泉(いずみ)堺(さかい)にうつった。1899年没、59歳。幕末-明治時代の浮世絵師

中江悦子 (なかえ・えつこ/1955年～)

石川県生れ。1978年金沢美術工芸大学日本画科卒業。西山英雄に師事。78年京展入選受賞、以後出品を重ねる。81年、98年日春展奨励賞、2002年日春展日春賞。03年日展特選。日展会友。京都府在住。日本画

なかえ・よしを (なかえ・よしお/1940年～)

神戸市生れ。日本大学芸術学部美術科卒。広告代理店のデザイナーを経て絵本作家に。『いたずらララちゃん』(絵・上野紀子、ポプラ社)で第10回絵本にっぽん賞受賞。作品に『ねずみくんのチョコッキ』(絵・上野紀子、講談社出版文化賞・ポプラ社)、『こねこのクリスマス』(絵・上野紀子、教育画劇)、『ことりとねこのものがたり』(絵・上野紀子、金の星社)など多数。絵本

長江録弥 (ながえ・ろくや/1926～2005年)

愛知県生れ。1948年日展で入選。57年日彫展に出品。65年日展で特選。66年日展で菊花賞。76年文部大臣賞。84年高村光太郎大賞展で優秀賞。86年日展で文部大臣賞。91年日本芸術院賞。95年日本芸術院会員。96年日展常務理事。2005年没、79歳。彫刻

長尾華陽 (ながお・かよう/1823～1913年)

遠江生れ。江戸に遊学し、文学を大橋訥庵、書法を巻菱湖、画を椿椿山に学ぶ。山水・花鳥を能くした。1913年没、90歳。書画

長岡秀星 (ながおか・しゅうせい/1936～2015年)

長崎市生れ。1954年武蔵野美術学校デザイン科入学。55年イラストレーターとして作品を発表。73年カーペンターズ「ナウ・アンド・ゼン」レコードジャケットのイラストレーションで、圧倒的人気を獲得、アメリカにおける地位を確立。77年長岡秀星の名を世界的に高めた栄EW & F「太

陽神レコードジャケット制作。85年つくば科学博で政府出展パビリオン「宇宙コーナー」を担当制作。89年長崎「旅」博覧会ポスター3部作を制作。90年宇宙長編物語を発表。アペインターナショナルアートを版元として版画制作を開始。2015年没、79歳。**イラスト、ポスター、版画**

中尾 藝阿彌・芸阿弥 (なかお・げいあみ/1431～1485年)

足利將軍家に仕えた能阿弥の子として生まれる。家業を継いで、父と同じく同朋衆として画庫の管理や文化顧問を勤める傍ら、自らも画を描き能阿弥風に中国宋・元画の湿潤な趣をいれて独自の画法を確立。相阿弥の父、賢江祥啓の師としても知られている。1485年没、54歳。**鎌倉～室町時代の絵師**

中尾 淳 (なかお・じゅん/1917～2008年)

徳島県生れ。京都絵画専門学校卒。無所属。どの団体にも属さず現在まで活動を続けてきたため、目立った賞などは受賞していないが、現代美人画の雄として日本画壇に名を示す。氏の描く美人画は、繊細、淡麗さを独自の色彩感覚で表現しており、個展を中心に活躍中。2008年没、91歳。**日本画**

中尾 相阿彌 (相阿弥) (なかお・そうあみ/1459～1525年)

芸阿弥の子。室町幕府足利義政將軍の唐物奉行として仕えた。連歌、生け花、水墨画、茶、など多彩な才を発揮し、また書画、茶道具の鑑定なども手がける。中でも書画を得意とし、中国の書風を独自に研究、狩野派へとつなげた。祖父能阿弥、父芸阿弥と三代を総称して「三阿弥」という。1525年没、66歳。**室町時代の絵師、水墨、書画**

長尾 タダユキ (ながお・ただゆき/1930～2000年)

静岡県生れ。1958年日本版画協会展入選。80～99年静岡県美術家連盟理事就任。90、91年日本現代美術展優秀賞。95、96年静岡県芸術祭奨励賞。2000年没、70歳。**版画**

長尾 洵太 (ながお・とうた/1938年～)

東京生れ。1966年渡欧。68年サロンソシエテ ナショナル デ ボザール に出品。70年サロンアーティスト フランセーズ に出品、銀賞。71年サロンアーティスト フランセーズ に出品、金賞。会員。サロンド オートヌ ヌ に出品、会員。73年サロンソシエテ ナショナル デ ボザール に出品、

会員。サロンド オートヌ ヌ 会員、ル サロン (仏国展) 会員 サロン ナショナル デ ボザール 会員。**洋画**

中尾 能阿彌・能阿彌 (なかお・のうあみ/1396～1471年)

始めは越前朝倉氏に仕えていたが、後に、足利義政に仕えて能阿弥と称して、同朋衆の一人に数えられる。絵画制作、書画の鑑定・保存、表装、座敷飾りの指導、連歌、香道など幕府の芸能全般にわたり活躍を示し、特に画では牧谿に深く傾倒し水墨画を多く残して後に阿弥派と称される一家を形成。また、連歌師としても北野連歌会所奉行となるなどした。1471年没、75歳。**鎌倉時代の絵師、水墨**

中尾 誠 (なかお・まこと/1937年～)

福岡県生れ。1966年東京藝術大学美術学部絵画科卒(安宅賞)。68年東京藝術大学大学院美術研究科修了。横浜国立大学教育人間科学部(旧教育学部)教授。2003年退官。67、68年ルモン展(いとう画廊、銀座)。93年磯見輝夫・中尾誠2人展(ギャラリー伸、鎌倉)。2003年退官記念展覧会横浜国立大学教育文化ホール、横浜)。2009年横浜文化賞。**洋画、美教**

中 一弥 (なか・かずや/1911～2015年)

大阪生れ。1927年挿絵画家の小田富弥に入門。29年小田富弥の推薦で直木三十五の新聞連載小説「本朝野士縁起」の挿絵を描きデビュー。71年長谷川伸賞。93年菊池寛賞。96年勲四等瑞宝章。2009年朝日新聞全国版の朝刊小説「麗き花実」(乙川優三郎作)の挿絵。2014年吉川英治文化賞。三重県で没、104歳。山本周五郎、藤沢周平、海音寺朝五郎の作品、主に時代小説の挿絵。**挿絵**

中上 清 (なかがみ・きよし/1949年～)

静岡県生れ。1970年代末本格的にアクリル画に取り組む。近年はパリやニューヨークでも個展を開催。2008年「中上清展—絵画から湧く光」神奈川県立近代美術館 鎌倉。「モダン百花繚乱(大分世界美術館)」・「神々の黄昏」大分県立美術館(2015)、「琳派降臨—近世・近代・現代の『琳派コード』を巡って」京都市立美術館(2016)。**洋画、日本画**

中川邦彦 (なかがわ・くにひこ/1943～2017年)

新潟県生れ。1968年青山学院大学フランス文学科卒。、71年から73年まで映画記事等の記者としてフランスに滞在。73年から東京造形大学非常勤講師を務め、75年より同大学専任教員。81年にフランス政府給費研究員として、パリ第三大学にて映画学者ミシェル・マリー指導のもと映画記号学を専攻。88年には東京造形大学海外研究員として、パリ社会科学・言語学高等研究所にて映画記号論の先駆であるクリスチャン・メッツの指導を受けた。89年東京造形大学教授。映画理論や映画記号学による物語構造の研究や、自身による映像作品制作を続け、理論と制作の両面で後進の指導にあたった。2017年没、73歳。映像、美教、映画理論、映画研

中川信輔 (なかがわ・しんすけ/生没年不詳)

大坂の人。天保(てんぽう)嘉永(かえい)年間(1830-54)の作品がのこっている。通称は浪花(ななこわ)文雅堂。作品に「大坂大川難波橋より東を望図」など。江戸後期の銅版画家

中川宗弥 (なかがわ・そうや/1932年～)

朝鮮の京城府生れ。東京芸術大学美術学部絵画科油絵部卒。中川李枝子氏の夫。絵本の仕事に『とらたとおおゆき』ありこのおつかい、童話の挿絵に『ももいろのきりん』『ナンちゃん雲に乗る』(福音館書店刊)、『チムラビットのぼうけん』(童心社)など多数。絵本

中川忠順 (なかがわ・ただより/1873～1928年)

石川県生れ。1899年東京帝大を卒業後、引き続き大学院で東洋美術史を研究した。1918年文部省技師となり、帝室博物館学芸委員、御物管理委員会臨時委員を兼任。東洋美術史の権威として知られた。1928年没、55歳。美史

中川幸夫 (なかがわ・ゆきお/1918～2012年)

香川県生れ。池坊に属していた叔母のもとで生け花を始める。戦後、作庭家の重森三玲に認められ、世の注目を浴びる。1951年白菜をいけた作品がもとで、池坊脱退声明を表し流派を去る。いけ花を中心に、ガラス、書、写真、舞踏家等とのパフォーマンス。作品集『華』中川幸夫の花『魔の山』花人-中川幸夫の花・ガラス・書』がある(いずれも小社刊)。織部賞グランプリ、日本現代藝術振興賞、東川賞。香川県で没、93歳。前衛「いけ花」、パフォー

長州敏明 (ながさき・としあき/1948年～)

京都生れ。1992年繻・能装束(伝承の美・鬘帯の魅力)展(東京)。99年京都祇園祭・保昌山(見送り幕)修復。長崎おくんち・傘鉾(飾り幕)修復。2017年京都刺繍協同組合理事長就任。2023年国内最古の刺繍(ししゅう)作品とされる中宮寺(奈良県斑鳩町)の国宝「天寿国繻帳(てんじゅこくしゅうちょう)」を一部復元した衣服を制作同寺に奉納。伝統工芸、刺繍

長崎真人 (ながさき・ばくじん/1929年～)

富山県生れ。日本画家・岩崎巴人との親交を得て絵画の道に進む。富山大学在学中に富山県展に出品した油彩画が棟方志功に絶賛され、大学卒業後は専ら日本画家として、新興美術院展やアンデパンダン展を中心に活動。1960年代には岩崎巴人や谷口山郷とともに「日本表現派」を立ち上げた。日本画、水墨、洋画

中里三猿 (なかざと・さんえん/1869～1941年)

長崎県生れ。御用絵師・片山貫道に師事、また最後の御用絵師である田中南文(ともに生没年不詳)にも画を学び、陶画の修練。三川内焼中興の祖、豊島政治(1852-1919)らによって陶磁器意匠伝習所(1899-1917)が開設。三猿もその伝習所設立に参加して陶画の教師。1907年の村立陶磁器工業補習学校開校後も引き続き教師として三川内焼の伝統を守り、後進の指導にあたった。染付の陶画に秀れ、浮上げやひねり細工の技術も得意とした名工のひとり。1900年の皇太子御成婚大典に香櫃一對を献納。1941年没、72歳。陶画、美教

中里勝歳・十五代平戸松山 (なかざと・かつとし/1942年～)

長崎県生れ。1958年佐賀県立有田工業高等学校窯業科卒、家業の製陶業に専念。71、長崎国体開催に際し、佐世保市より依頼を受け(献上唐子大花瓶)を制作。81年長崎陶磁展で伝統工芸協会会長賞。97年佐世保市より無形文化財(献上唐子焼)の技術指定。2018年長崎県より無形文化財(三川内焼 染付技術)。陶磁、三川内焼

中里安吉郎 (なかざと・やすきちろう/1894～1985年)

三川内焼開祖の一人高麗媼(こうらいいばば)の流れを汲み(17代目)、宮内省御用達の中里陽山(森三郎)の子。若い頃から彫刻の技法を継承し、1973年佐世保市無形文化財保持者。

1985年没、91歳。陶芸、陶磁、三川内焼

中里陽山・末太郎（なかがと・ようさん・すえたろう/1897～1991年）

長崎県生れ。中里森三郎（初代陽山）の三男。有田工業学校陶画科や関西にて伝統技術の修得。1924年より実家の製陶業に従事。26年宮内省より貞明皇后御料茶碗、27年に昭和天皇即位大礼御饗宴用食器の絵付を担当し、宮内省御用達を拝命（1928—45年）。薄手白磁が得意。74年長崎県無形文化財保持者。90年地域文化功労者表彰。1991年没、94歳。陶芸、陶磁、三川内焼

長澤氏春（ながさわ・うじはる/1912～2003年）

京都市生れ。京都御所の庭を任される庭師の家に生まれる。幼少の頃に遠戚の能面師橋清吾に弟子入りして面打技法を学び、また独立後は独自の古面研究を通して優れた能面を次々に生み出し、特に女面を得意としてその表情や彩色は当代随一と高く評される。1979年国指定重要無形文化財（人間国宝）保持者の認定を受け、以降も現代能面師の代表的作家として活躍。2003年没、91歳。能面

中澤 茂（なかがわ・しげる/1932～2010年）

新潟県生れ。1956年東京芸術大学油画専攻科修了。57年一水会展で一水会賞。58年一水会展で会員。59年一水会展で会員佳作賞。60年一水会展で会員優賞。長岡市で個展。2007年中澤茂油絵作品集「黄金と碧水、ミャンマー・タイ・スリランカ」を光村印刷から出版。個展「黄金と碧水、ミャンマー・タイ・スリランカ」を東京銀座画廊美術館にて開催。2010年没、78歳。洋画

長沢 節（ながさわ・せつ/1917～1999年）

福島県生れ。文化学院美術科へ進学。1937年日本水彩画展で入選。39年日本水彩画会会員。43年水彩連盟会員。戦時下、新制作派協会展に出品、新作家賞。戦後水彩連盟展に出品スタイル画部門を創設。52年セツモードセミナーを設立し、その後ファッション界、広告界で活躍する第一線のクリエイター達を多数送り出す。95年国立近代美術館、日米水彩展招待出品。1999年没、82歳。水彩、デザイン

長澤伸穂（ながさわ・のぶほ/1960年～）

東京生れ。高校を卒業後、オランダ国立芸術アカデミー、ベルリン芸術大学、カリフォルニア・インスティテュート・オブ・ディ・アーツで学ぶ。カリフォルニア大学サンタクルーズ校で教職。2001年からニューヨーク州立大学ストーニーブルック校教授、同大学院ディレクターに就任。世界各地でパブリックアートやインスタレーションを手がけるようになる。アラブ首長国連邦やバングラデシュ、越後妻有アートトリエンナーレ、瀬戸内国際芸術祭などの国内外の国際展にも参加し、精力的な制作活動を行っている。パブリックアート、インスタ、美教

長澤英俊（ながさわ・ひでとし/1940～2018年）

中国黒龍江省生れ。1963年多摩美術大学インテリア・デザイン科卒。1966年日本出発、転車で東南アジア・中近東を横断。69年初個展以降、個展・展覧会・各地でインスタレーション多数。79年近代イタリア美術と日本（国立国際美術館）。93年個展「天使の影」（水戸芸術館）、Art in Japan Today 1985-1995（東京都現代美術館）、95年新宿アイランドに《プレアデス》制作、東京国際展示場に《七つの泉》制作。2006年現代日本彫刻展（宇部・大賞受賞）。2018年没、78歳。彫刻、インスタ

長沢秀之（ながさわ・ひでゆき/1947年～）

埼玉県生れ。1972年武蔵野美術大学造形学部産業デザイン学科卒。77年青木画廊（東京）で初個展開催。83年「第19回今日の作家展内面化される構造」（横浜市民ギャラリー）に出品。89年「現代美術への視点—色彩とモノクローム」（東京国立近代美術館他）に出品。91年武蔵野美術大学油絵学科非常勤講師（94年助教授、99年教授）。98年「長沢秀之展—風景の断面—」（網走市立美術館）開催。2008年「〈川越の美術家たち〉風景からフウケイへ—長沢秀之展」（川越市立美術館）開催。洋画、美教

中嶋一雄（なかじま・かずお/1934年～）

熊本県生れ。武蔵野美術大学で彫刻を学ぶ。主に木と金属を使った抽象彫刻を制作する。自由美術協会会員。日本大学、武蔵野美術大学、東北芸術工科大学などで講師、教授に着任。退官後は名誉教授となる。日本美術家連盟委員。彫刻、美教

中島多茂都（なかじま・たもつ/1900～1970年）

静岡県生れ。1920年前田青邨に師事。29年院展に入選。45年日本美術院賞。52年日本美術院同人。63年文部大臣賞。日本美術院評議員。1970年没、70歳。日本画

中島東洋 (なかじま・とうよう/1894～1977年)

金沢市生れ。1914年石川県立工業学校窯業科卒。19年東京美術学校彫刻科卒、北村西望に師事。22年帝展に入選、31、32年特選。戦後は日展に無鑑査出品。愛知県瀬戸市に転居し、57年名城大学講師。1977年没、83歳。彫刻、美教

50

中島有章 (なかじま・ゆうしょう/1837～1905年)

1837年生れ。円山派の画家中島来章の子。画を父に学ぶ。1855年の内裏造営に18歳にして加わり、『平安画家評判記』を著。『平安人物志』には67年に登場。73年京都博覧会では席上揮毫に参加。80年京都府画学校出仕拝命、88年改組後の同校において、絵手本の制作。84年内国絵画共進会で褒状。1905年没、68歳。日本画、美教

中島 敦 (なかじま・あつし/1909～1974年)

茨城県生れ。1936年東京美術学校彫刻科卒。46年日展で初入選(以後55年まで毎回入選)。49年茨城県美術展に招待出品、知事賞。52年日展で入選。年茨城県美術展で審査員。1974年没、65歳。彫刻

50

永島一信 (ながしま・かずのぶ/1927年～)

福島県生れ。1952年福島県中学校教員養成所修了。52年公立学校中学校教員。39年日本水彩画展で三宅賞。99年日本水彩画会会員。2004年公募ふるさとの風景展で準優賞。06年県展で美術奨励賞。県水彩画会、日本水彩画会、県美術協会、会津美術協会、喜多方美術協会、以上の会員。水彩、美教

長島鬼一 (ながしま・きいち/1891～1939年)

高沢幸次郎の長男。彫師長島政太郎の養子。師は秋田の松本銀蔵。1939年没、48歳。木版画彫師

中嶋一雄 (なかじま・かずお/1934年～)

熊本県生れ。武蔵野美術大学で彫刻を学ぶ。主に木と金属を使った抽象彫刻を制作する。自由美術協会会員。日本大学、武蔵野美術大学、東北芸術工科大学などで講師、教授に着任。退官後は名誉教授。日本美術家連盟委員。彫刻、美教

中島仰山 (なかじま・ぎょうざん/1832～1914年)

江戸生れ?一橋家付け切りの船橋半右衛門の次男、高橋由一と同時期、1862年頃から開成所に学んだと推測される。66年仰山は画学局設置の母体となった絵図調方で、教導職である絵図調出役。72年内務省博物館掛で出仕し、動物画を中心に博物図譜的な挿絵を多く描いた。日本の明治時代の絵師、一説に写真家。同時代の関根雲停や増山雪斎に並び、博物図譜的な動物画を数多く残した。洋画、博物図、挿絵、写真

中島清之 (なかじま・きよし/1899～1989年)

京都生れ。1916年安雅堂画塾に入門。24年再興院展で入選。43年安田靫彦に師事。30年日本美術院院友。37年再興院展で日本美術院賞第2賞(39年及び42年に同賞第3賞、50年同賞・白寿賞、52年同人、61年評議員)。52～55年東京芸術大学講師。68年再興院展で文部大臣賞。78年日本美術院理事。1989年没、90歳。日本画、美教

中島菜刀 (なかじま・さいとう/1902～1955年)

鳥取県生れ。17歳で京都に出て山元春挙の画塾「早苗会」で学び、2年後京都市立絵画専門学校に入学。養鶏場で働きながら苦学して24歳で卒業。この頃より「菜刀」と号し、富田溪仙に私淑。1929年院展に入選、以後院展に出品。1955年没、53歳。日本画

中嶋祥子 (なかじま・しょうこ/生誕年不詳～)

大連生れ。1976年渡欧。ウィーン国立造形大学油画科修了、修士号、マイスター賞。97年熊谷守一賞大賞。2000年文化庁特別派遣芸術家海外研修員としてNYに滞在。日本橋高島屋美術画廊、みゆき画廊、紀伊國屋画廊などで個展。90年以来、朝日カルチャーセンター湘南で「淡彩画講座」「基礎デッサン講座」を教える。バジルの会主宰。洋画

中島 宏 (なかじま・ひろし/1941年～)

佐賀県生れ。1967年日本伝統工芸展初入選。西部工芸展に出品受賞。68年武雄市弓

野の古窯跡に半地上式穴窯を築き独立。70年九州・山口陶磁展第一位(文部大臣賞)。77年日本伝統工芸展奨励賞。80年福岡岩田屋で作陶20周年記念展開催。81年西日本美術陶芸展大賞(文部大臣賞)。83年日本陶磁協会賞。87年東京高島屋で美術部創設80周年記念特別展開催。2007年重要無形文化財保持者に認定。陶芸

中島幹夫 (なかじま・みきお/1933～2017年)

岐阜県生れ。1959年東京藝術大学美術学部彫刻科卒。61年同大学専攻科修了。66～71年京藝術大学非常勤講師。85～89年同大学非常勤講師。95年現代彫刻美術館野外彫刻シンポジウム草津参加。2001年個展日本橋高島屋。2017年没、84歳。彫刻、美教

中島三雄 (なかじま・みつお/1919～2007年)

前橋市生れ。1939年群馬県師範学校卒。44年東京高等師範学校芸能科(現筑波大)卒。長崎県師範学校教諭。47年大潮会展特選。50年長崎大学助教授。53年創元会出品。創元会会友。56年一水会出品、一水会会員。69年長崎大学教授。84年長崎大学定年退官。長崎大学退官記念展開催。(長崎浜せんアートギャラリー)。85年長崎県展審査員。2007年没、88歳。洋画、美教

中島宣矩 (なかしま・よしのり/1930～1993年)

島根県生れ。島根大学美術研究室で井上善教の指導を受ける。卒業後は1985年までの35年間、県西部の小学校および島根大学附属小学校に勤務し、本県における美術教育に尽力した。51年来県していた喜多村知に出会って以来師と仰ぎ、国画会を中心に活躍、船岡賞、新人賞。1993年没、63歳。美教、洋画

中島快彦 (なかじま・よしひこ/1917～1983年)

佐賀市生れ。1940年文部省美術展覧会で入選、新生彫刻家協会を結成。41年東京美術学校彫刻科卒。43年文展で入選。47年農生会を結成。50年行動美術協会に彫刻部を新設、以後審査員として83年まで出品。53年秀作美術展(日本橋三越)。54年野外創作彫刻展(日比谷公園)以後毎年出品。60年集団60野外彫刻展(鎌倉近代美術館)。集団現代彫刻展(池袋西武)。61年宇部市野外彫刻展。1983年没、66歳。彫刻

中島来章 (なかじま・らいしょう/1796～1871年)

滋賀県生れ。渡辺南岳にまなび、のち円山応瑞の門にはいる。幕末の円山派の大家で、山水・人物・花鳥画をよくした。横山清暉、岸連山、塩川文麟とともに平安四名家と称された。門下に幸野楳嶺ら。1871年没、76歳。江戸後期の絵師

中住道雲 (なかずみ・どううん/1858～1943年)

鳥取市生れ。中住憲梁の子。名は憲明。祖父・虎岳について土佐派の画法を学び、のちに狩野派の藤岡神山に入門、ついで稲岡天真に南画を学び、さらに蓮井竹山に円山派を学んだという。全国絵画共進会で三等賞。各展で受賞。1943年没、86歳。日本画

中園孔二 (なかぞの・こうじ/1989～2015年)

神奈川県生れ。2012年東京藝術大学美術学部絵画科油画専攻卒。複数のレイヤーで画面を構成し、様々な表情を見せる絵画作品を制作。2012年「アートアワードトーキョー丸の内2012」に選出され、小山登美夫賞、オーディエンス賞。13年に小山登美夫ギャラリー個展。「お守りしてやっかー中園孔二 平井友紀」(LOOP HOLE、東京、2010)、500点の作品を残した。2015年没、26歳。洋画

中平卓馬 (なかひら・たくま/1938～2015年)

東京生れ。1963年東京外国語大学スペイン科卒、月刊誌『現代の眼』編集部勤務。65年同誌を離れ写真家、批評家として活動。66年森山大道と共同事務所を開設、「アレ・ブレ・ボケ」と評された、既成の写真美学を否定する過激な写真表現が目され、精力的に展開された執筆活動とともに、実作と理論の両面において当時の写真界に特異な存在感を示した。73年評論集『なぜ、植物図鑑か』では、一転してそれまでの姿勢を自ら批判、「植物図鑑」というキーワードをかみかぎ、「事物が事物であることを明確化することだけで成立する」方法を指すことを宣言。89年『新たな凝視』、『Adieu à X』などの写真集を刊行。2015年没、87歳。2003年横浜美術館、2024年東京近代美術館で個展。写真

長田雲堂 (ながた・うんどう/1849～1922年)

福井県生れ。京都で日根対山や中西耕石、のち長崎で鉄翁(てつとう)祖門にまなぶ。1870年、清(しん)(中国)にわたり、名画旧跡をたずねる。文人画をかみかぎ。1922年没、74歳。作品

に「柳桃飛燕図」など。日本画、文人

中 高一 (なかいたかいち/1891～1964年)

徳島県生れ。旧制徳島県立徳島中学校に学ぶ。1912年徳島市で紅燈会展に参加。写真愛好家のグループ展だが、県内の洋画家の作品や大下藤次郎らの作品も展示。中は飯田宗吉とともに、この展覧会で中心的な役割を果たす。14年渡瀬政近らと洋画の展覧会を徳島市で開いた。徳島青年美術家クラブに参加し、戦後間もない頃は、同クラブが主宰した春日橋洋画研究所で講師。1964年没、73歳。洋画

中田幾久治 (なかた・きくじ/1901～1982年)

東京生れ。川端画学校洋画科と本郷洋画研究所に学ぶ。1926年川端画学校卒。凸版印刷株式会社に入社(彫刻課)。紙幣や証券の銅原版作成に従事、エッチングを手がける。32年日本版画協会展に入選。32年春台美術展覧会に出品。34年帝展に入選。36年文展鑑査展、41年新文展に入選。40年日本エッチング作家協会会員。43年日本版画協会会員。戦後も日版会や光風会の会員。71年『エッチング画集＝中田幾久治』を出版。1982年没、81歳。版画

中谷翫古 (なかたに・がんこ/1868～1937年)

広島市生れ。1873年大阪に出、84年浮世絵や洋画などを手掛けた鈴木雷斎(年基)に洋画を学ぶ。父、省古に木彫を学ぶ。86年奈良博覧会会長の鳥居武平の下で仏像の研究に励み、90年第三回内国勸業博覧会に奈良東大寺三月堂の不動明王像の模刻を出品。91年日本美術協会展で褒状一等、92年同展に褒状二等。第7回東京彫工会展で褒状一等。93年上京し、竹内久一に師事。後関西に移った翫古は、引き続き東京彫工会展に出品。京都彫技会の委員。1911年日本彫刻会会員。1937年没、69歳。木彫

中谷省古 (なかたに・しょうこ・せいこ/1837～1912年)

広島県生れ。面打師に彫刻を学んだ後、広島藩に細工人として仕え、大阪で造幣局へ勤めた。千日前の興行用の生人形をはじめ、紙製の灯籠や石膏の標本、蟬細工や、蒔絵の改良など、多岐にわたる制作。千日前や名古屋で何度か行った生人形興行ではプロデューサー。生人形の制作面でも高い評判。子である翫古に多くの示唆を与えた。平櫛田中の最初

の師。1912年没、75歳。人形、木彫

中田熊峰 (なかた・くまほう/1814?～1886年)

和歌山県生れ。幼い頃から読書を好み、書画もよくした。泉州の日根対山に師事して南画の画法を学び、山水を得意とした。門人に小山雲泉がいる。1886年没、72歳。江戸後期の絵師、南画

仲築間英人 (なかづくま・ひでと/1939年～)

大分市生れ。1962年大分大学学芸学部卒。58年大分県美術展に入選。以後、同展を主舞台に活躍。60年別府市長賞、61年県議会議長賞。80年小川善規ら仲間たちとグループ「GEN」を結成。85年二紀会展に入選。89年二紀会同人。2013年二紀会会員、二紀会大分支部事務局長。洋画

中出信昭 (なかで・のぶあき/1964年～)

石川県生れ。1987年金沢美術工芸大学卒、89年同大学院修了。市原義之に師事。85年日展初入選、95、98年特選。87年青垣2001年日本画展佳作、93年大賞。93年日春展で日春賞。2000年2000石川県作家選抜美術展に出品。日展会員。日本画

長門佐季 (ながと・さき/1970年～)

神奈川県横浜市生まれ。聖心女子大学文学部哲学科卒。神奈川県立近代美術館主任学芸員。03年『彫刻家 堀内正和の世界展』(神奈川県立近代美術館)、08年『小宇宙(ミクロコスモス)への情熱 美浦康重版画コレクション展』(神奈川県立近代美術館)、編著『岸田劉生(新潮日本美術文庫41)』(新潮社、1998年)、共著『フランス美術基本用語』(大修館書店、1998年)、『大正期新興美術資料集成』(国書刊行会、2006年)、「新しい神話がはじまる。古賀春江の全貌」(石橋美術館・神奈川県立近代美術館、2010年)学芸員

長友啓典 (ながとも・けいすけ/1939～2017年)

大阪生れ。高校を卒業後デザインの道に進む。田中一光氏に師事。1964年に日本デザインセンターに入社、67年日宣美賞。同じ大阪出身の黒田征太郎氏と知り合い、69年に共同でデザイン会社「K2」を設立。数多くの雑誌、書籍、広告、イベントなど多彩な分野でアート

ディレクターとして活躍。84年と2006年講談社出版文化賞。手がけた雑誌には、週刊朝日、家庭画報、GORO などがある。週刊文春で連載中の伊集院静さんの「悩むか花」の挿絵。全日空の機内誌「翼の王国」でのエッセイ。公益社団法人「日本グラフィック・デザイナー協会」の理事、東京造形大学客員教授。2017年没、77歳。 **デザイナー、挿絵、美教**

中西耕石 (なかのこし・こうせき/1807～1884年)

福岡県生れ。陶工の家に生まれ、大坂で篠崎小竹(しょうちく)の門にはいる。のち京都で小田海僊(かいせん)にまなぶ。山水、花鳥にすぐれ、日根対山(ひねたいざん)、前田暢堂(ちやうどう)とともに「対暢耕」とよばれた。1884年没、78歳。 **江戸後期-明治の絵師**

中西夏之 (なかのこし・なつゆき/1935～2016年)

東京生れ。1958年東京藝術大学油画科卒。村松画廊などでの個展でペイントやエナメルに砂を混ぜた作品を発表。59年シェル賞展で佳作賞。61年東京国立近代美術館での「現代美術の実験」展に出品。金属を溶接した廃品彫刻を制作。身の事物をアクリル樹脂で固めた卵形のコンパクト・オブジェや、洗濯バサミを無数に取り付けた《攪乱現象》などの連作を制作。63年高松次郎、赤瀬川原平と「ハイレッド・センター」を組織。街頭や電車内でのパフォーマンスを行う。舞踏家・土方巽との交流を通じて「最も素朴で最も知的な、絵に想いを込めるようになって」、67年油彩作品を発表。89年西武美術館で回顧展を開催。95年土方巽のための舞台装置を主題とする個展を神奈川県立近代美術館で開催。97年東京都現代美術館で回顧展を開催。2016年没、81歳。 **現代美術、立体、オブジェ、パフォーマンス、洋画、パフォーマンス**

中野桂樹 (なかの・けいじゅ/1889～1965年)

青森県生れ。東京美術学校(現東京芸大)卒。早坂寿雲、藤井浩祐(こうゆう)にまなぶ。文展、帝展で活躍し、帝展無鑑査。1931年日本木彫会の創立に参加。戦後は日展委員などをつとめた。1965年没、76歳。作品に「恵雨」「転生」など。 **彫刻**

長野重一 (ながの・しげいち/1925～2019年)

大分県生れ。慶大卒。「週刊サンニユース」、岩波写真文庫のスタッフをへて、1954年フリー。映画、コマーシャルフィルムも手がける。60年日本写真批評家協会作家賞、86年伊奈信男賞。95年日本写真協会年度賞。写真集に「トリムエイジ」「遠い視線」など。2019年没、8

4歳。 **写真**

中野春翠 (なかの・しゅんすい/1838～1917年)

福岡県生れ。父の南強は柳河藩士で漢詩をよくした。幼いころから画を好み、斉藤末蔵、北島勝永に学んだ。1861年京都に出て、鈴木百年の門に入った。64年帰郷し、御広間御番をつとめた。維新後は、任一等黄隊伍長、陸軍軍曹給養掛、戸長、警察探索懸雇、町会議員、画塾を開き、門弟を教育。53歳から73歳まで高等小学校で図画教員。1917年没、80歳。 **画塾、美教、江戸後期～明治の絵師**

長野新一 (ながの・しんいち/1894～1933年)

大分県生れ。東京美術学校図画師範科卒業後、山口県師範学校、東京第五中学校等で教壇に立つ。1924年帝展に初入選。以後、帝展のほか中央美術展、春台美術展にも出品を続ける。29年東京美術学校助教授となるが、32年に辞職し、1933年没、39歳。 **美教、洋画**

中野水竹 (なかの・すいいち/1822～1886年)

名古屋市生れ。中林竹洞、山本梅逸に師事。1839年に尾州藩絵事御用掛となり、同門の岡本梅英と幕府献上の岐阜提灯に描いた。常に多くの仲間や門人と月次会を開いて研究し、老後は書画と詩歌を楽しんだ。1886年没、64歳。 **江戸後期の絵師、書画**

中野蒼穹 (なかの・そうきゅう/1925～1981年)

福島県出身。中村岳陵に師事、当初は院展にて出品、師の日展転向に際して、日展に出品。1960年に日展特選・白寿賞。64年に菊花賞。画風は、風景、花鳥を得意とした。1981年没、56歳。 **日本画**

長野草風 (ながの・そうふう/1885～1949年)

東京生れ。1899年頃田丹波に師事。1905年頃川合玉堂の長流画塾に入門。草風と号す。今村紫紅、安田靉彦らのやまと絵研究会・紅児会に参加。14年日本美術院再興に参加し、16年同人。以後院展で活躍。昭和初期には四条派風の軽快な筆致と装飾性豊かな表現を示した。1949年没、64歳。 **日本画、版画**

中野 将 (なかの・たかし/生没年不詳)

東京生れ。第3回現代日本彫刻展、第4回現代日本彫刻展。彫刻

中野竜志 (なかのりゅうし/1964年～)

新潟県生れ。1989年東京芸術大学美術学部油画科卒。91年同大学大学院壁画専攻修了。91～96年株式会社スペースワールド勤務。96～2003年三重大学非常勤講師。04年東京芸術大学非常勤講師。1996～株式会社現代壁画研究所勤務。クレーン熱海ゆがわら工房所長。ステンドグラス、美教

永野芳光 (ながの・よしみつ/1902～1968年)

1921年東郷青児の妻となった姉とともに渡仏。22年ベルリンに移り、村山知義と交友。イタリア未来派展、デュッセルドルフ国際展に出品。23年帰国。村山とともに「アウグスト・グループ」を結成。24年神戸の県工業試験場で個展。25年第2回無選首都展に出品。27年長谷川三郎らによる白象会の展覧会に出品。1968年没、66歳。洋画、未来派

中濱松香 (なかまはま・しょうこう/1857～1921年)

金沢市生れ。祖父は鶴汀、叔父は龍山、父は龍淵で、医者と画家を業とした家系。家代々の画風を学び、諸家の絵を研究、南画の研鑽に努める。花鳥図、梅竹図を得意とした。各種の展覧会や品評会に出品、たびたび褒賞を受けた。北陸絵画協会の審査員。1921年没、64歳。南画

中濱龍淵 (なかまはま・りゅうえん/1827～1897年)

金沢市生れ。中濱鶴汀の長男。南北合派と狩野派の絵を描いた父に絵を学ぶ。京都に出て、山本梅逸に師事、さらに長崎に遊学する。金沢に帰ってからは、唐・宋時代の中国古画を研究し、門下生に絵を教えた。1897年没、70歳。日本画

中林清淑 (なかまばやし・せいしゅく/1831～1912年)

1831年生れ(愛知県?)。名はくに。中林竹洞の娘。父に南画を学び、京都に住んだ。花卉、特に梅図を得意とした。1912年没、82歳。南画(文人)

中林竹洞 (なかまばやし・ちくどう/1776～1853年)

名古屋市生れ。寛政年間に入ってから尾張南画中興の祖・山田宮常と出会い師事、その後、パトロンである神谷天遊宅へ寄宿し修業。篆刻は天下一と讃えられた。各地を周遊し、1802年天遊の死を契機に山本梅逸とともに京都に出るが京都画壇で成功を収められず帰郷、13年後に再度上洛し、京都に住んだ。1853年没、77歳。江戸後期の文人画家、篆刻

中林竹溪 (なかまばやし・ちつげい/1816～1867年)

1816年生れ(愛知県?)。中林竹洞の長男。山本梅逸のもとで修業。すぐれた才能を持ち、父親譲りの品格ある画を描いたが、片意地で協調性がなく、才能を十分に発揮することができなかったとされる。1867年没、52歳。南画(文人)

中原浩大 (なかまはら・こうだい/1961年～)

岡山県生れ。京都市立芸術大学大学院美術研究科修了。京都市立芸術大学美術科彫刻専攻教授。活動初期に「源感情的」「神の業」と評されたユニークなフォルムを有し、原色で着色された巨大な立体や平面作品を次々と発表。1990年それまでのフォルムを継続したまま素材をレゴで制作した「レゴ・モンスター」を発表。映像やインスタレーション、パフォーマンス、インターネットサイトでの発表にも活動を広げ、既成の美少女フィギュアを使用した「ナディア」などはオタク・アートで知られる村上隆に絶大な影響を与えた。現代美術、彫刻、映像、インスタ、パフォーマンス

長原止水 (ながはら・しずい/1864～1930年)

岐阜県生れ。小山正太郎の不同舎のち原田直次郎に学ぶ。白馬会に参加。東京美術学校教授。坪内逍遙の小説『当世書生気質』の挿絵を描いた。1930年没、66歳。洋画、挿絵

中原仁市 (なかまはら・じんいち/1871?～没年不詳)

長州藩の家老職の家系に生まれ、萩焼の8代坂高麗左衛門に師事。後、大阪在住のドイツ人スキトモールの指導を受け、1906～54年長崎市に開窯。大正初め頃には、「長崎焼」と称していたが、22年に「長崎社頭焼」と称した。茶道具、酒器、花器、火入れなどから日用品まで製作し、「社頭焼」の由来ともなったように、諏訪神社のための雑器も製作。陶芸、長崎焼、愛宕焼

檜原長甫 (ながはら・ちようほ/1911～2005年)

大分県生れ。1927年大分県日田工芸学校描金科卒。京都の蒔絵師江馬長閑に師事。35年後独立し自営。1944年帰郷。46年日展に入選。68年以降日本伝統工芸展に出品。同年以降西部工芸展に出品。75年日本工芸会正会員及び日田市文化功労賞。83年「現代の名工」として労働大臣表彰。85年勲六等瑞宝賞。95年大分合同新聞文化賞。2005年没、94歳。 **工芸(漆芸)**

中平卓馬 (なかひら・たくま/1938～2015年)

東京生れ。1963年東京外国語大学スペイン科卒、65年に同誌を離れ写真家、批評家として活動を始める。66年には森山大道と共同事務所を開設、68年多木浩二、高梨豊、岡田隆彦を同人として季刊誌『PROVOKE』を創刊(森山は2号より参加、3号で終刊)。「アレ・ブレ・ボケ」と評された、既成の写真美学を否定する過激な写真表現が注目され、精力的に展開された執筆活動とともに、実作と理論の両面において当時の写真界に特異な存在感を示した。73年評論集『なぜ、植物図鑑か』では、一転してそれまでの姿勢を自ら批判、「植物図鑑」というキーワードをかかげて、「事物が事物であることを明確化することだけで成立する」方法を目指すことを宣言。翌年、東京国立近代美術館で開催された「15人の写真家」展には48点のカラー写真からなる大作《氾濫》を発表するなど、新たな方向性を模索する。そのなか、1977年に急性アルコール中毒で倒れ、記憶の一部を失い活動を中断。療養の後、写真家として再起し、『新たなる凝視』(1983)、『Adieu à X』(1989)などの写真集を刊行。2010年代始めまで活動を続けた。2015年没、77歳、**写真**

中町 進 (なかまち・すすむ/1930年～)

石川県生れ。1952年金沢美術工芸短期大学卒、池田遥邸に師事。53年日展入選、以後同展、日春展で活躍。青塔社会員、新聞社勤務を経て66年より金沢美術工芸大学で指導、現在名誉教授。日展会友。 **日本画、美教**

長町竹石 (ながまち・ちくせき/1757～1806年)

香川県生れ。池大雅、建部綾足に私淑、清(しん)(中国)の沈南蘋の画法を研究して一派をなした。山水画にすぐれ、野呂介石、僧愛石とあわせて三石といわれた。1806年没、50

歳。 **江戸中期-後期の画家(南画)**

永松 春洋 (ながまつ・しゅんよう/1850～1931年)

大分県生れ。山水画を杵築の十市王洋に、花鳥画を木下橋巢について学び、大阪に出て田能村直入の門に入る。多くの子弟を育成し、南画の再興に足跡を残した。1897年全国絵画共進会で3等銅牌。各地の絵画共進会や内国勸業博覧会、日本美術協会展、日本画会展で受賞を重ね、日本美術協会会員、日本画会会員、名古屋中央南宗画会会員。関西では南画界の泰斗とされ、育てた弟子たちは後日「雲療会」を組織。1931年没、81歳。 **南画**

100

長峰 勇 (ながみね・いさむ/1906～1986年)

大分県生れ。1924年東京美術学校岡田三郎助教室に学ぶ。28年中央美術展へ入選。29年白日出展へ入選。35年佐世保商業学校の美術教師となり終戦の年にやめる。51年光風会展に出品。64年光風会会員。1986年没、80歳。 **洋画、美教**

中牟田三治郎 (なかむた・さんじろう/1892～1930年)

福岡県生れ。1911年福岡工業学校建築科卒。南満州鉄道株式会社に数年間勤めるが、彫刻家を志し上京、武石弘三郎に師事。21年東京美術学校彫刻科卒。その卒業制作が帝展に入選。22年京都帝国大学工学部建築学科講師を務め、また27年に構造社に入会し、29年まで出品。時代を反映したナイーブな感性で将来を嘱望、1930年没、38歳。 **彫刻**

中村 功 (なかむら・いさお/1948年～)

東京生れ。1974年武蔵野美術大学基礎デザイン学科卒。76年創形美術学校版画研究科修了。75年同世代の版画家達展(真木画廊)、80年「メタファーとシンボル」東京国立近代美術館。87年「流動する美術-発熱する表面」福岡市美術館。2001年グローバル・ヴィジョン「1980年以降の美術」「日本の美術・世界の美術-この50年の歩み」東京都現代美術館に出品。島田画廊、ヒノギヤラリーにて個展多数。 **洋画、版画、現代美術**

中村一郎 (なかむら・いちろう/1918～1993年)

倉敷市生れ。1951年日展に入選。52年創元会展に入選し、会員。57年日展で特選。67～68年渡欧し、パリを拠点にイギリス、スペイン、イタリア、ドイツなど14カ国を回遊。71年玉

野市文化功労賞。73年岡山県文化奨励賞。77年日展審査員。78年サロン・ド・メールを同志と結成(のちに大洋会と改称)。92年日展評議員。1993年没、75歳。洋画

中村衍涯 (なかむら・えんかい/1921～1992年)

1921年生れ。36年小島与一門下の人形師高尾八十二に師事。76年伝統工芸士、83年国の卓越技能保持者に認定。古典人形を得意とし、88年に福岡県指定無形文化財博多人形製作技術保持者の認定。1992年没、71歳。人形

中村旭洋・牧平 (なかむら・きよくよう/1889～1972年)

弘前市生れ。父は郷土史家の中村良之進。洋画の雅号は牧平。1905年佐藤梅亭につき、その後野沢如洋に学んだ。09年東京美術学校日本画科に入学し、川端玉章に師事。2年後に退学し、六花会に参加。23年帰郷。洋画に転向し、石川寅治に指導を受けた。36～38年南画鑑賞展に出品し連続入選。39年南画鑑賞展で褒状。東奥展で特選、招待出品。1972年没、83歳。日本画、洋画、水彩

中村錦平 (なかむら・きんぺい/1935年～)

金沢市生れ。父は茶陶の名人として知られる中村梅山。金沢美術工芸大学彫塑科を中退、作陶を始める。オブジェばかりでなく、建築との関わりも深めた陶壁制作で国際的にも活躍する。1969年ロックフェラー財団より招聘され、帰国後も数多くの個展や陶壁の制作を精力的に行う。陶芸、現代美術、オブジェ、陶壁

中村蘭台 (なかむら・らんだい/1892～1969年)

東京生れ。初代中村蘭台の二男。父に篆刻を学ぶ。1928年萬華鏡社を創立し、澤田篁斎・荒木柳城・西川寧らと絵画・竹工芸・彫金等の展覧会を催す。37年謙慎書道会の審査員、48年日展審査員。横山大観、川合玉堂、武者小路実篤、東山魁夷、伊東深水等日本画家・文人の印を手がける。1961年日本芸術院賞。1969年没、77歳。篆刻

永倉江村人 (ながくら・こうそんじん/1881～1951年)

千葉県生れ。1906年東京美術学校日本画科卒、研究科に進むがすぐに中退し、県立中学修養館に教師として赴任。福岡医科大学標本描画嘱託、九州日報社社友。この間、27年

大東亜勸業博、36年博多築港博などに出品し、また西新町の自宅で文化人グループを結成、福岡で主に作家生活を行い、1951年没、70歳。日本画、美教

中丸金峯 (なかまる・きんぽう/1840～1895年)

甲府市生れ。京都で日根対山に南画を学び、1872年上京後川上冬崖に洋画を学ぶ。1874年陸軍に出仕、玉越与平に解剖学を学ぶ。陸軍文庫刊の『写景法範』『洋式画手本』の挿絵。83年軍の将官を描き肖像画家として画名を高め、84年大山巖、路利良らの肖像を描く。神田猿樂町に画塾をおこし、藤島武二、大下藤次郎ら門弟を育成。89年明治美術会創立に参加。白馬会会員の中丸精十郎は2代目。1895年没、55歳。洋画、南画、挿絵、画塾

中村左洲 (なかむら・さしゅう/1873～1953年)

三重県生れ。磯辺百麟に師事。文展入選。鯉の左洲。異画会会員。1953年没、80歳。日本画

中村重義 (なかむら・しげよし/生没年不詳)

中村英夫の父、中村慎一の祖父。山岡荘八氏から、製本、装丁に関わる機材を譲り受ける。現・八丁堀駅近くの東京都中央区入船で製本会社を設立。『坪内逍遙』『横光利一』『江戸川乱歩』等の装丁・製本を手がける。竹の子の皮や布、原稿を埋め込んだ装丁など数多くの作家を唸らせ、「日本一の装丁家」と言わせしめた。のち神奈川県茅ヶ崎や平塚、鎌倉に住む。装丁・製本

中村静勇 (なかむら・しずお/1942～2011年)

石川県生れ。一陽展、二科展出品後、1971年第一美術出品、準会員。75年同会委員。個展をほぼ毎年開き、83年グループ蒼蒼展を結成。スペイン・バルセロナ展、モンテカルロ現代国際美術賞展(第21回展カルゴア賞)など、海外展への出品も多い。2011年没、69歳。洋画

中村秋塘 初代 (なかむら・しゅうとう/1865～1928年)

石川県生れ。竹内吟秋に師事、家業の陶画業を継ぎ、広く古来の諸陶を研究する。自家用陶窯を築き独立、素地・上絵とも改良研究し、繊細ななかにも一種の雅致のある作風を創

作した。石川県実業功労者表彰。江沼九谷陶器同業組合長。明治・大正期の九谷上絵の名工。1928年没、63歳。陶芸(陶画)

中村春泥 (なかむら・しゅんでい/1904～1966年)

山口県生れ。画家を志して上京し、川端画学校へ入学します。卒業後は、荒井寛方のもとで日本画を学ぶ。1941年院展で入選。以後も院展で入選を重ねた。日本美術院院友となり、日本画家として認められた。1966年没、62歳。日本画、版画

中村春楊 (なかむら・しゅんよう/1891～1937年)

京都生れ。1907年山元春挙に師事し、同門下生を以て組織する早苗会の一員。1918年文展に入選、帝展を通じて入選10回に及んで居た。京都で没、46歳。日本画

中村信喬 (なかむら・しんきょう/1957年～)

福岡市生れ。博多人形師(県無形文化財)中村衍涯の長男。九州産業大学を卒業後、林駒夫、村田陶苑、北沢一念に師事。1989年伝統工芸人形展で東京都教育委員会賞。日本伝統工芸展にも出品を続け、89年高松宮記念賞、21年日本工芸会奨励賞。2006年福岡県文化賞(創造部門)。11年ローマ法王に謁見し作品を献上。22年福岡県無形文化財認定。人形

中村晋也 (なかむら・しんや/1926年～)

三重県生れ。東京高等師範学校卒。1950年日展入選。66～67、69～70年フランスに留学し、アペル・フェノサに師事。67、68年日展特選、69年菊華賞。84年文部大臣賞。88年日本芸術院賞、89年日本芸術院会員。94年日本彫刻会理事長就任。96年中村晋也美術館設立(後(公財))。2007年文化勲章。白日会彫刻部で活躍し、鹿児島大学教授。筑波大学名誉博士。彫刻、個人美術館、美教、ウィーン幻想派

中村成一 (なかむら・せいいち/1960年～)

東京生れ。資生堂宣伝制作部において広告制作や「花椿」誌などの撮影に携わる。2006年株式会社中村写真事務所設立。KODAK フォトサロン、ARTBOX ギャラリー、FireKing Cafeにて個展開催。電通賞部門賞、朝日広告賞、ADC賞、年鑑日本の広告写真優秀

賞。武蔵野美術大学非常勤講師。写真

永村茜山 (ながむら・せんざん/1820～1862年)

江戸生れ。幕府右筆、長谷川善次郎の子。11歳頃より渡辺崋山の画塾に通う。1838年崋山の推挙により、幕府の代官・羽倉簡堂に随行して伊豆七島を巡り、現地で実見した風物を作品として残す。39年蛮社の獄で崋山が捕えられた際、探究を逃れるため、諸国を遊歴。弘化年間、金谷に至り、遠江の組頭・永村金左衛門の養子となり、金谷宿の組頭職を継ぎ、組頭の仕事に没頭。絵画制作は減少。1862年没、42歳。江戸後期の絵師、南画

中村達郎 (なかむら・たつろう/1910～1991年)

岡山県生れ。1929年上京、川端画学校に学ぶ。30年光風会展、太平洋画会展に入選し、以後、出品を重ねる。31年帝展に入選。36年旺玄社同人。戦後は岡山県高梁市に戻り、旺玄会に出品、岡山県高梁中学校で教鞭。この頃、坂田一男の指導を受け。53年倉敷市に転居。59年画塾・子供のアトリエを開設し、晩年まで指導に励んだ。1991年没、81歳。洋画、美教、画塾

中村大三郎 (なかむら・だいざぶろう/1898～1947年)

京都生れ。西山翠嶂に師事。1918年文展に入選、19年帝展、20年、22年帝展で特選。早くから人物画題を好み、美人画も多い。26年回帝展「ピアノ」を機に現代風俗の美人画に転じた。33年画塾を創立し、後進の育成に努める。1947年没、50歳。日本画、画塾

中村智恵美 (なかむら・ちえみ/1955年～)

女子美術大学芸術学部美術学科洋画専攻卒。二紀会委員、女流画家協会委員、日本美術連盟会員。女流画家協会展第45回記念大賞。1989年二紀展二紀賞。神奈川県展等で多数の賞を受賞。個展、グループ展開催。洋画

中村 強 (なかむら・つよし/1921～1993年)

長崎県生れ。兄の中村清見に師事した。1946年有田町の製陶所に勤め、60～80年香蘭社(有田町)に勤務。勤務の傍ら作品の制作を行い、日本伝統工芸展を中心に白磁や青白磁の作品を発表。81年日本工芸会正会員。74、76年長崎県工芸展知事賞。81年日

本伝統工芸展入選、日本工芸会西部工芸展福岡市長賞、日本工芸会正会員。90年九州山口陶磁展 NBC 賞、国際陶芸展銀賞。1993年没、72歳。陶芸

中村 徹 (なかむら・とおる/1954年～)

金沢市生れ。1976年金沢美術工芸大学卒。奥田元宋に師事。74年日展初入選、87、91年特選。83、87年日春展で日春賞、85、90年奨励賞。92年東京美術倶楽部「ニューアーティストウェーブ」に出品。2000年石川県作家選抜美術展に出品。日展会員。日本画

中村秀雄 (なかむら・ひでお/1931～2001年)

石川県生れ。1952年金沢美術工芸短期大学洋画科卒。57年一陽展に初入選、58年特待賞。72年より3度にわたりフランスで個展開催。同年ビアリッツ国際展入賞、サロン・ドートンヌ入選。金城短期大学で美術科助教授として指導。一陽会会員、北陸支部長を勤める。2001年没、70歳。洋画、美教

中村芳中 (なかむら・ほうちゅう/生誕年不詳～1819年)

京都生れ、大坂に住み、尾形光琳の画風を学んだ絵師。寛政期(1789～1801)には、木村兼葭堂ら大坂の文人たちと交流を持ち、指頭画(しとうが)の名手。1799年江戸へ。1802年色摺絵本『光琳画譜』を刊行し、光琳風の絵を描く絵師。「たらし込み」を多用した琳派風の草花図、軽妙な俳画などを多く描いた。江戸後期の絵師、琳派、俳画

中村宗弘 (なかむら・むねひろ/1950年～)

神奈川県生れ。祖父は日本画家の中村岳陵。1965年中村岳陵の門下となり、画家修業に入る。68年春展で日春賞。68年秋の新日春展で特選・白寿賞。69年日春展で奨励賞。日展で無鑑査出品し、外務省買い上げとなる。岳陵没後、71年には、児玉希望の推挙により、東山魁夷の指導を受け、魁夷直伝の技法により幻想的な風景画を継承する。73年慶應義塾大学文学部東洋史学科卒。東山魁夷のもとで、さらなる研鑽を積み、76年日展会友。78年銀座・村越画廊での個展。78、80年日本橋三越、82年池袋西武で開催。日本画

中村蘭林 (なかむら・らんりん/1853～1938年)

山梨県生れ。甲府の学問所・徽典館を卒業後、滝和亭に師事。花鳥画を得意とした。188

9年の東京市青年絵画共進会展、95年の第4回内国勸業博覧会などに出品。1905年山梨県で開催された絵画展覧会で一等。1900年の皇太子行啓の際には「迎陽花鳥鶏」を献上した。1938年没、86歳。日本画

中村陸舟 (なかむら・りくしゅう/1820～1873年)

1820年生れ。家は代々遠見番で、家業を継ぎ長崎奉行組下遠見番役人。高島晴城について西洋の砲術を学び、ほかにも、造船学、航海学、機関学、算術などを修めた。その一方で、鉄翁祖門について南画を学んだ。1873年没、54歳。江戸後期・明治時代の絵師、南画

中谷美二子 (なかや・ふじこ/1933年～)

札幌市生れ。。日本女子大学附属高等学校卒、1957年ノースウェスタン大学美術科卒。パリとモドリッドで絵画を学ぶ。70年大阪万博のペプシ館で《霧の彫刻》を始めて制作。人工霧を使った環境作品やモニュメントを世界各地で発表、音楽家、舞踏家と霧を使ったコラボレーションも行う。70年代以降コミュニケーションをテーマとするビデオ作品を発表、ビデオギャラリー開設。96年 岡崎市美術博物館前庭、99年グッゲンハイム美術館(ビルバオ)に設置。01年 ヴァレンシア・ビエンナーレ(映像クリエイター 高谷史郎とコラボレーション、スペイン)、02年 舞踊家トリシャ・ブラウン(アンドヴァー他)、04年舞踏家田中泯(山梨)、07年音楽家ヨハン・ヨハンソン(日本未来科学館)とコラボレーションを行う。76年オーストラリア文化賞(シドニー・ビエンナーレ)、93年 吉田五十八賞特別賞。2022年文化功労章。24年芸術院会員。写真、霧の彫刻、音楽、舞踏家とコラボ、ビデオアート

中山岩太 (なかやま・いわた/1895～1949年)

福岡県生れ。1918年の東京美術学校写真科第1回卒業生。同年渡米、21年NY五番街にスタジオを開業。27年フランスを経て帰国し、以後兵庫県芦屋に在住。30年「国際広告写真展」で『福助足袋』が1等。30年前衛写真運動を開始。32年野島康三、木村伊兵衛、伊奈信男らと月刊誌『光画』の同人となり、新興写真運動に参加。シュルレアリスム的な作風と独特の肖像写真によって写壇に名をなした。1949年没、54歳。写真、昭和初期を代表する写真家、シュール

長山孔寅 (ながやま・こういん/1765～1849年)

秋田県生れ。京都にでて松村月溪(げつせい)に師事し、のち大坂にすむ。人物、花鳥画を得意とし、三条茂佐彦(もさひこ)の名で狂歌もよくした。狂歌集の挿絵のほか戯作(げさく)「食着(とんじゃく物語)」。1849年没、85歳。江戸中期、後期の絵師、挿絵、狂歌師

中山高陽 (なかやま・こうよう/1717～1780年)

高知県生れ。富永惟安(これやす)について儒学を学んだ。画は画論、画譜類による独学。1758年より江戸に住して井上金峨や沢田東江らの詩人儒者と交遊、高陽も詩画をもって聞こえた。72年奥羽へ旅行し、途中『象潟(きさがた)真景図』を制作。日本南画の先駆者の1人。『蘭亭曲水(らんでいきよくすい)図巻』『鳳凰図屏風(ほうおうずびょうぶ)』。画論『画譚鶏肋(かたんけいろく)』を著し、また旅行記『奥游日録』を残した。1780年没、63歳。江戸中期の絵師、南画の先駆者

中山秋湖 (なかやま・しゅうこ/1876～没年不明)

東京生れ。水野年方の門人。風俗画、美人画、仏教画を得意。1908年に伊東深水が入門。24年には池田輝方、池田蕉園、島成園らとともに11名合作の新版画「新浮世絵美人合」12枚揃のうち、秋湖が2点の版画を手がけた。「新浮世絵美人合十月紅葉」木版画がある。没年不詳。日本画、版画

中山ダイスケ (なかやま・だいすけ/1968年～)

香川県生れ。1988～90年武蔵野美術大学視覚伝達デザイン学科中退。演出家・館屋法水に師事、現代美術作家として独立。90年代中期には須田悦弘、中村哲也、小金沢健人、坂東慶一らと若手美術作家のグループ『スタジオ食堂』を結成、様々なイベントやプレゼンテーションを行った。97年から活動拠点をアメリカ合衆国に移し、98年NYのギャラリー「ダイチ・プロジェクト」において個展。美術作家として個展やグループ展を開催、ファッションショーの演出、舞台美術、店舗や商品のコンセプトマークなどを手がけ、講演やワークショップ活動。現代美術、舞美、イベント

中山武之 (なかじま・たけゆき/1912年～没年不詳)

熊本県生れ。1933年長崎師範学校卒。75年太平洋画会エドヤ賞。77年太平洋画会賞。永年にわたり美術教育に貢献する。県展審査員歴任。太平洋画会会員。洋画、美教

中山久 (なかやま・ひさし/生没年不詳)

明治生れ。東京日本橋の紙問屋の一人息子。1965年頃で70歳位。東京医科大学教授。関根正二の同級生。李朝の陶磁器、外国のタブロー、南画廊志水楠男、東京画廊山本孝、繭山龍泉堂の番頭林仙治とも親しい。日本で初めて米国のポップ・アートを収集したコレクター。ロイ・リキテンスタイン、アンディ・ウォーホル等。コレクター、美教

永山裕子 (ながやま・ゆうこ/1963年～)

東京生れ。1985年東京藝術大学油画科卒(安宅賞・大橋賞)。87年東京藝術大学大学院(彼末宏教室)修了。08年～10年・14年～16年、武蔵野美術大学非常勤講師。17年～嵯峨美術大学客員教授。初個展を86年真和画郎(東京)で開催、個展多数。水彩、美教

長山孔寅 (ながやま・こういん/1765～1849年)

秋田県生れ。秋田の那波呉服店に勤めていた20歳の頃京都に上り、松村呉春に師事。松村景文、岡村豊彦らとともに呉門十哲と称された。人物・花鳥図を得意とする。のち呉春門の上田公長に就いて大阪に移り、狂歌に長じていた公長の影響を受け、鶴の舎の門に入って狂歌を学び、三條茂佐彦と号した。『南畝帳』(文政7年)など多くの狂歌本の挿絵を担当。戯作本『勸善懲惡 貪弱物語』(嘉永元年)の著書。1849年没、84歳。日本画、挿絵

中山高陽 (なかやま・こうよう/1717～1780年)

土佐国生れ。京都に出て南画の先駆者彭城百川(さかきひやくせん)に学ぶ。山水画に長じ、描線に独得の風格がみられる。代表作「蘭亭曲水図」一巻。1780年没、63歳。江戸中期の絵師

長山はく (ながやま・はく/1895～1995年)

茨城県生れ。1915年女子美術学校卒。22年帝展で入選。23年茨城美術展で県賞。29～41年川合玉堂の推薦で北白川宮家に日本画講師として奉職、39年山口蓬春に師事。50年日展に委嘱出品。茨城県美術展や茨城県芸術祭美術展で活躍。水戸市で没、100歳。日本画、美教

中山文孝 (なかやま・よしたか/1888～1969年)

長崎市生れ。長崎県立五島中学校卒。日本画を独学。萩原魚仙、福田平八郎、小林観爾等日本画家との交友。1934年国際産業観光博覧会開催ポスター作成。38年紀元二千六百年記念日本万国博覧会ポスターで一等賞。51年日本宣伝美術会創立委員。県・市展審査員、長崎国際文化協会理事などを歴任、長崎県功労表彰、日本宣伝美術会功労賞、長崎新聞文化章。長崎凧文様、長崎くんちポスター、傘鉦図様が良く知られる。1969年没、81歳。ポスター、日本画、図案

永礼孝二・資朗 (ながれ・こうじ(しろう)/1901～1975年)

岡山県生れ。1919年上京し、岡田三郎助の本郷洋画研究所に学び、当初洋画を志すが、版画を始める。彫刻家石井鶴三の指導を受ける。1932～44年日本版画協会展に出品。47年日本版画協会会員。52年日本版画協会展、国会会展。日本版画院展に出品。55年イタリアトリエンナーレ国際展、日本版画協会展、日本版画院展に出品。1975年没、74歳。2005年「没後三十年記念永礼孝二展」勝央美術文学館、津山郷土博物館。版画

流 政之 (ながれ・まさゆき/1923～2018年)

長崎県生れ。1942年立命館大学法文学部へ進学。中退し、独学で彫刻を学び、63年に渡米。ニューヨーク近代美術館の永久保存作品として収蔵。64年にニューヨーク世界博覧会で壁画「ストーンクレージー」を展示し話題。67年TIMEにより、日本を代表する文化人の一人として紹介。75年ニューヨーク世界貿易センターのシンボルとして約250トンの巨大彫刻『雲の砦』をつくり国際的評価。67年香川県文化功労者。74年日本芸術大賞。78年中原悌二郎賞。82年吉田五十八賞。94年長野野外彫刻賞。87年日本経済新聞「私の履歴書」に自伝を掲載。2018年没、95歳。19年「ナガレスタジオ 流政之美術館」が開館。彫刻、作庭、個人美術館

名久井由蔵 (なくい・よしぞう?/生没年不詳)

青森県生れ。1939年二科会入選。40年二科会入選。渡辺貞一とは画友で、一時期その作風も似ていたという。41年国画会入選。61年文部省秀作選抜展出品。洋画

名草逸峰 (なぐさ・いっぽう/1821～1889年)

和歌山県生れ。京都にでて小田海隈にまなぶ。尊王攘夷をとなえ、大分県に私塾をひ

らく。1871年広島にうつり絵をおしえた。1899年没、69歳。江戸後期-明治の絵師、塾

南雲勝志 (なぐも・かつし/1956年～)

新潟県生れ。東京造形大学室内建築科卒。景観・土木、公共空間施設のデザインをはじめ、家具、インテリア、照明、プロダクトデザイン、人やまちづくりにおけるデザインの可能性を探る。2004年より「日本全国スギダラケ倶楽部」を設立し、木の文化を広げる活動を全国で展開。土木学会デザイン賞 最優秀賞、グッドデザイン賞受賞歴多数。2016年グッドデザインフェロー。デザイナー

南雲 龍 (なぐも・りゅう/1931年～)

群馬県生れ。1951年金沢美術工芸大学工芸専攻(陶磁)卒。63年日展入選、以後同展で特選を2回と文部大臣賞。自然と人間の営みを対比的に表現することをテーマに、立体作品と陶壁の制作を行う。現在、山梨県に陶窯を築いている。立体、陶壁、陶磁

南壽敏夫 (なす・としお/1930年～)

大分県生れ。大分県立別府第二高校で正井和行に師事して日本画を学ぶが、その後、洋画に転向し、江藤純平と藤本東一良のもとで研鑽を積んだ。光風会展に出品。1990年改組日展に入選し、以後、日展に出品。主にヨーロッパの美しい風景を描いて人気を博している。現在、日展会友、光風会会員。洋画

150

七尾英鳳 (ななお・えいほう/1884～1962年)

青森県生れ。円山四条派の画家対山の弟子であった祖父の影響で日本画家。作品を1924年の八戸大火で数百点が残った。「十和田湖の画家」と称されるほど、この景勝地の描写に傾倒した。47年昭和天皇の八戸御巡幸では「種差海岸図」が天覧の栄に浴した。「十和田湖君が代島」は八戸市から高松宮家へ献上。同年に現代の八戸市文化協会の前身といふべき春光会が結成され、その会長。1962年没、78歳。日本画

奈知安太郎 (なち・やすたろう/1909～1986年)岩手県統計課に勤務。岩手総合芸術連盟の結成に参加。31年独

立美術協会展入選、退職、上京、川口軌外に師事。37年渡仏。シャガールに会う。42年大

陸に渡る。47年東京で食品店や出版業を営む。制作活動再開。盛岡市で没、77歳。洋画

夏井 潔 (なつい・きよし/1868～没年不詳)

明治元年に生まれた夏井は、1891年カリフォルニア大学美術学校卒、明治後期から大正初期にかけて函館在住の洋画家として存在を知られた作家。洋画、美教

夏目利政 (なつめ・としまさ/1893～1968年)

東京美術学校日本画科専科卒、梶田半古が主宰する画塾にて修業を始め、油彩画に転向。専ら下宿屋を生業としながら作画する生活を続け、集中的に75歳で亡くなる直前の5年間集中的に描いた。自画像は見る者を圧倒する鬼気迫る。1968年没、75歳。2018年青梅市立美術館で回顧展。日本画、洋画

名取洋之助 (なとり・ようのすけ/1910～1962年)

東京生れ。名取和作の次男。慶応義塾普通部卒。ドイツのミュンヘン美術工芸学校でまなぶ。1933年木村伊兵衛らと日本工房を設立。のち海外向けグラフィック誌「NIPPON」を創刊。戦後は「週刊サンニュース」「岩波写真文庫」の企画・編集の中心となる。1962年没、52歳。写真集に「麦積山石窟(ばくせきざんせつくつ)」「ロマネスク」など、著作に「写真の読みかた」。写真

那波多目煌星 (なばため・こうせい/1905～1989年)

茨城県生れ。1933年茨城美術展で入選。その後木村武山、中村岳陵に師事。52年日展で入選(以後8回出品)。57年茨城県美術展に「委嘱出品(64年第19回展で「そさい」が茨城新聞社賞)。62年再興院展で入選、以後院展で活躍(64年院友、81年特待)。東京で没、84歳。日本画

並木 一 (なみき・はじめ/1947年～)

東京生れ。1965年彫刻家小倉茂に師事。建築彫刻、他、木彫りを学ぶ。74年日本彫刻家連盟に加盟。78年木版画を始める。83年全国各地で個展を開催(東京・沖縄・千葉・青森・他)。92～95年3回アメリカ・ウィスコンシン文化庁の招待で木版画講義。ジャポニフェスティバルで木版画のデモンストレーション。収蔵 ホワイトハウス、ウィスコンシン大学オークレア校、ロサンゼルス・カウンティ美術館。彫刻、版画

並木秀俊 (なみき・ひでとし/1979年～)

千葉県生れ。2003年東京藝術大学美術学部絵画科日本画専攻卒。08年同大学院美術研究科博士課程文化財保存学専攻保存修復日本画修了。同年より東京藝術大学文化財保存学専攻保存修復研究室教育研究助手および愛知県立芸術大学非常勤講師(～10)。10年春の院展奨励賞受賞、第95回再興院展奨励賞および第16回天心記念茨城賞受賞。日本画、美教

波の伊八 (なみのいやはち)・武志伊八郎信由(たけし・いやはちろうのぶよし/1751～1824年)

千葉県生れ。江戸時代中期には、建築様式として欄間を飾る彫刻が流行していた。初代伊八こと、武志伊八郎信由は、10歳の時から彫刻を始め、躍動感と立体感溢れる横波を初めて彫って以来、作風を確立し、同世代に活躍した葛飾北斎『富嶽三十六景』の代表作の一つ「神奈川沖浪裏」などの画風に強く影響を与えたといわれ、文政7年に没するまで意欲的に作品を造り続けた。1824年没、73歳。主に房総各地で約50の寺社に作品を納めた宮彫師。江戸後期の宮彫師、彫刻

浪花康弘 (なみはな・やすひろ/1933年～)

釜山市生れ。1956年長崎大学学芸学部工科学卒。64長崎県展長崎時事新聞社賞。76年長崎県展大村市長賞。79、85、87年長崎県展奨励賞。80、84、88年長崎県展長崎市長賞。82年光風会展入選(以後毎年入選)。86、89年長崎県展長崎市議会議長賞。90年長崎県展審査員。水彩

滑川公一 (なめかわ・こういち/1948年～)

東京生れ。高校時代に漫画を志す。1974～80年絵画の勉強のため渡仏。75～78年フランス・ヴェイトリー賞展入選。82年度日本漫画家協会優秀賞。日本美術家連盟・洋画部会員。洋画、漫画、イラスト

奈良原一高 (ならはら・いっこう/1931～2020年)

福岡県生れ。54年中央大学法学部卒、早稲田大学大学院芸術専攻(美術史)修士課程に入学。前衛美術に傾倒し、55年池田満寿夫、鬚ヶ原らが結成したグループ「実在者」に参

加。個展「人間の土地」が反響を呼び、写真家の道を進めた。58年日本写真批評家協会賞新人賞。59年東松照明・細江英公らと写真家によるセルフ・エージェンシー「VIVO」を結成(61年解散)。67年『ヨーロッパ・静止した時間』日本写真批評家協会賞作家賞、芸術選奨文部大臣賞、毎日芸術賞。86年『ヴェネツィアの夜』に対して、日本写真協会年度賞。87年東川賞国内作家賞。96年、紫綬褒章。2002年パリ写真美術館で、04年東京都写真美術館で回顧展。05年日本写真協会功労賞。06年旭日小綬章。東京で没、88歳。洋画、写真

成田一方 (なりた・いっぽう/1894~1973年)

愛媛県生れ。1915年京都市美術工芸学校卒、京都市立絵画専門学校に入学したが、龍村平蔵の研究室に入るため中退。龍村のもとで名物裂の復元、古画の模写を行ない、帯のデザインなどに従事。41年群馬美術協会の創立に参加。48年新制作派協会日本画研究所に所属。50年県展の委員、51年群馬美術家連盟を創設して日本画部の責任者、56年日本画府の理事。1973年没、79歳。日本画、模写、デザイン

成田克彦 (なりた・かつひこ/1944~1992年)

釜山生れ。1955年終戦に伴い熊本市出水に引き揚げる。69年多摩美術大学絵画科卒。在学中に高松次郎のアシスタント。69年「第6回パリ青年ビエンナーレ」パリ市立近代美術館(パリ、フランス/高松次郎、田中信太郎、関根信夫とともに「グループ・ボソット」として参加。コミッショナー:東野芳明)。77~78年文化庁芸術家在外研修員として渡欧。75年より東京造形大学専任講師、83年より助教授。1992年没、48歳。現代美術、モノ派、美教

名和晃平 (なわ・こうへい/1975年~)

大阪生れ。京都市立芸術大学大学院美術研究科彫刻専攻修了。Pixel(画素)とCell(細胞・器)が融合した「PixCell」の概念を基軸に、発泡ポリウレタン、ガラスビーズ、プリズムシートといった多彩な素材が持つ特性と最先端の技術をかけ合わせた彫刻制作、空間表現。鹿の剥製などをガラスビーズで覆った「PixCell」シリーズ、人体の3Dスキャンに様々なエフェクトを施すことで制作した彫刻作品シリーズ「Trans」シリーズ、「情報・物質・エネルギー」をテーマに、仮想の3次元空間の中で造形を行った、高さ13mにおよぶアルミニウム製の巨大彫刻《Manifold》(2013)。主な個展に「名和晃平-シンセシス」(東京都現代美術館、2011)、「名和晃平-SCULPTURE GARDEN」(鹿児島県霧島アート・森、2013)第14回アジア・アート・ビエ

ンナーレ・ソングラデシュ 2010 最優秀賞。(美術手帳)彫刻、立体

難波慶爾 (なんば・けいじ/1900~1924年)

岡山県生れ。児島虎次郎および多多羅茂雄に指導を受ける。岡山の菴羅社展に出品。中央美術展に入選2回。1922年二科展に《出品。マルケ風の風景画を描く。22年中川紀元、神原泰、古賀春江らとともに二科会系の前衛美術団体「アクション」の創立同人となる。一時、難波方に「アクション」の事務所が置かれる。関東大震災後、神戸の浅野孟府や岡本唐貴のアトリエに同居するが、病に倒れ、岡山で没、24歳。洋画、アクション

南部勝之進 (なんぶ・しょうのしん/1917~2005年)

富山県生れ。丸山不忘、高村豊周に師事。1935年陸軍航空技術学校に就職。48年金沢美術工芸専門学校(現金沢美術工芸大学)教官、82年定年退職した。50年日展に入選、以後同展に入選を重ねた。2005年没、88歳。金工、美教

に

新関八紘 (にいぜき・やっひろ/1943年~)

東京生れ。1968年東京芸術大学美術学部彫刻科卒業。作品は美ヶ原高原美術館(長野)「見牛・得牛」、北上市詩歌文学館「豊田玉荻詩碑」、江戸川文化センターのモニュメント「平和像」、柳津町立斎藤清美術館「会津の子ども達」等。彫刻

新妻 実 (にいづま・みのる/1930~1998年)

東京生れ。東京芸大卒。1957年モダンアート協会会員。59年渡米、以後ニューヨークで石による抽象彫刻を制作。72年コロンビア大助教授。81年ヘンリー・ムーア大賞。スミノミアン美術館、東京国立近代美術館フィルムセンターのモニュメントが有名。作品に「眼の城'65」な

ど1998年没、67歳。彫刻、美教

新居広治 (にいひろはる/1911～1974年)

東京生れ。青山学院中卒。岡田三郎助、前田寛治、牧野虎雄に師事し、戦前はプロレタリア美術家同盟中央委員、本部書記長代理などを務める。戦後は日本美術会、日本版画運動協会などの創設に参加。1950年以降、世界各国での版画展、茨城県の絵画展などに出品。日本美術会、美術家平和会議、美術茨城の各委員を歴任。1974年没、63歳。洋画、版画

新山榮朗 (にいやまえいろう/1930～2013年)

東京生れ。1953年茨城県展で知事賞。55年東京芸術大学美術学部工芸科鍛金部卒。56年日展で入選(以後出品)。57年東京芸術大学美術学部専攻科鍛金修了。61年東京芸術大学美術学部助手(83年講師、86年助教授、88年教授)。85年日展会員。95年日本新工芸展で内閣総理大臣賞。2013年没、83歳。鍛金、美教

牲川充信 (にえかわみつのぶ/生没年不詳)

大坂生れ。享保(きょうほう)(1716-36)ごろの大坂の人。狩野(かのう)派の鶴沢探山(つるざわたんざん)にまなび、独自の画風をひらいた。江戸中期の絵師

仁戸田秀吉 (にえだひできち/1909～1970年)

福岡県生れ。1927年上京、本郷絵画研究所に入所。39年頃より日本水彩画会展、東光会展等に出品。46年二科展に出品(54年特待賞、56年会友、63年会員)。47年水彩連盟展で会友推挙(49年会友奨励賞、50年会員)。67年東京大丸百貨店で個展。62～67年水彩連盟事務所代表。1970年没、61歳。水彩

仁尾鱗江 (におりんこう/1774～1833年)

高知県生れ。画を松村蘭台に学んで、人物画をよくした。幼い絵金(弘瀬洞意)に画の手ほどきをし、藩の御用絵師・池添楊齋に師事するようにすすめたとされる。1833年没、59歳。江戸後期の絵師

西井敬岳 (にしいけいがく/1880～1937年)

福井県生れ。1902年京都に出で山元春挙に師事、師の没後早苗会評議員と。旧文展の入選8回に及び、又同志と共に日本自由画壇展覧会を組織し、出品。自由画壇同人。文展第7回に「怒涛」を出陳、皇后宮御用品として御献上の光栄に浴した。1937年没、57歳。日本画

西内利夫 (にしうちとしお/1933～1981年)

京都生れ。日吉ヶ丘高校日本画科卒。晨鳥社に入塾。山口華楊の指導を受ける。以降、晨鳥社社展及び日展・新日展、京都市美術展などに出品。1956年京展にて市長賞。67年アメリカ・メキシコに留学。74年より毎年中国に取材旅行。1981年没、48歳。日本画、版画

西川祐信 (にしかわすけのぶ/1671～1750年)

京都出身。成人して西園寺致季公の御家人となった。絵は初め狩野派を狩野永納に、土佐派を土佐光祐に学んだ。菱川師宣や、吉田半兵衛の画風を取り入れ、京坂浮世絵界の第一人者となる。その活動は絵本が最も多かった。元禄後期から八文字屋本の挿絵を描きまくり、狂言本、評判記、浮世草子と、祐信の筆によらないものがないほど。『正徳雛形』(正徳3年刊行)や『西川ひな形』(享保3年刊行)などの雛形本も手がた。1723年に墨摺の風俗絵本『百人女郎品定』2冊(国立国会図書館、大英博物館所蔵)。1750年没、79歳。江戸中期の京都の浮世絵師、絵本、挿絵

西川正恒 (にしかわまさつね/1960～2013年)

松江市生れ。1988年東京藝術大学大学院修了。銅版画を専攻し、卒業制作は大橋賞。89年ヨーロッパを旅行し、板に石膏下地を施し描かれた絵画に感銘を受ける。テンペラと油絵具を重ねる混合技法で絵画を制作し始め、91年国画会入選、98年国画会新人賞。2007年以降、断続的にスペインに渡りアルティウム・エストゥディオ・ペーニャに学んだ。2013年没、53歳。版画、洋画

錦織恭一 (にしきりきょういち/1919～2009年)

島根県生れ。島根師範学校に入り油絵を描き始める。1940年独立美術協会展に入選。41年須田国太郎に師事し、京都にて絵画研究。43年独立展に無鑑査出品。50年独立美術

協会会友。64、71年独立美術協会選抜展に出品。74年独立美術協会を退会し、無所属。島根県立女子短期大学名誉教授。2009年没、90歳。洋画、美教

西澤千晴（にしざわ・ちはる/1970年～）

長野生まれ。東京造形大学造形学部美術学科絵画専攻卒。卒業後は版画を中心に制作。絵画へ移行。2003年オペランティアートギャラリーでの個展開催。を皮切りに、04年にVOCA展入賞、06年に香港とウルで個展が開催。平坦で現実味のないフラットな背景に、会社員や家族などの群衆を俯瞰構図で描く西澤の作品は、現代社会に対する不安感とユーモアが入り交じる。版画、洋画

西田一成（にしだ・いっせい/1942年～）

富山県生まれ。井波彫刻師である父の西田秀、後には北村西望に師事。1961年第4回日展入選、以後入選18回。日展会友。彫刻

西大由（にし・たいゆう/1923～2013年）

福岡県生まれ。県立築上中学を経て、東京美術学校工芸科鑄造部に学び、高村豊周、丸山不忘らに師事。1948年多治見製作所で鑄金技師を務めるが、53年東京芸術大学助手、のち講師、助教授となり、78～91年教授。日展で特選、菊華賞、会員となり審査員。日本新工芸作家連盟評議員。63年工芸では初の高村光太郎賞。2013年没、90歳。鑄金、美教

西田信一（にしだ・しんいち/1906～1964年）

神戸市生まれ。1929年安井曾太郎氏、熊谷守一に師事。37年自由美術協会設立に携わる。50年日本学生油絵会を初代会長安井曾太郎、創設者西田信一、猪熊弦一郎、林武、脇田和、鍋井克之、寺内萬治朗、須田国太郎の8人で設立。53年国立近代美術館主催「抽象と幻想展」に出品。日本アブストラクト・アート・クラブを長谷川三郎、山口長男、吉原治良等と設立。リバーサイド・ミュージアムで「日米抽象美術展」を行う。アメリカアブストラクトアート協会発行「世界のアブストラクトアート」世界の中の75人の1人に選ばれる。1964年没、58歳。洋画、日本学生油絵会創立

西田伸一（にしだ・しんいち/1950年～）

加賀市生まれ。73年金沢美術工芸大学油画研究科卒。92年改組日展初入選、03、10年日展特選。2008年金沢学院大学勤務、同大美術文化部教授。日展会員、光風会理事。洋画、美教

西田亨（にしだ・とおる/1920～2015年）

岡山市生まれ。1941年東京美術学校図画師範科卒。49年光風会展で入選、受賞。51年日展で入選。57年安井賞展入選。68年新日展で特選（78年委嘱、84年審査員、85年会員）。71～85年茨城大学教授。76年改組日展で特選。85年紺綬褒章。96年日展会員賞。東京で没、95歳。洋画、美教

西田洋一郎（にしだ・よういちろう/1948年～）

石川県生まれ。1973年二紀展初入選、82年まで出品。76年神戸市立外国語大学卒。76年シュル美術賞展佳作、77年3等賞、79年佳作、80年1等。82年ジャン・エンノ現代美術コンクール京都国立近代美術館賞。渡独、83年カッセル芸術大学入学。87年カッセルBBK展出品。88年同大学修了。現在はコンピュータを駆使して様々な形態の作品を創作する。洋画、コンピューター駆使し制作

西塚栄治（にしづか・えいじ/1943～2009年）

石川県生まれ。父誠一に師事。1969年日展（改組日展）入選、以後連続出品し、80年・93年特選。日展会員。日本現代工芸美術展では、69年現代工芸賞、71年十周年記念賞、78年会員賞。2009年没、66歳。漆工

西常雄（にし・つねお/1911～2011年）

東京生まれ。1932年東京芸術学校在学中に帝展入選。43年新制作派展で新作家賞。49年新制作派協会会員。71年中原悌二郎賞。77～82年多摩美術大学教授。97年個展・現代彫刻美術館。99年回顧展・調布市文化会館。2011年没、100歳。彫刻、美教

西敏彦（にし・としひこ/1953年～）

金沢市生まれ。1976年金沢美術工芸大学日本画科卒。西山英雄に師事。77年京展受賞（以後2回受賞）。82年日春展奨励賞。84年日春展日春賞。95年日展特選。日展会友。宝

塚造形芸術大学非常勤講師。京都府在住。日本画、美教

仁志出龍司 (にしで・りゅうじ/1952年～)

滋賀県生れ。1976年金沢美術工芸大学卒。西山英雄に師事。74年日展初入選、97年特選。80年京都府日本画選抜展出品。86、91年日春展で日春賞。92年日本画百人展京都府買上賞。99年五箇荘町歴史博物館で仁志出龍司展を開催。2000年石川県作家選抜美術展に出品。現在、金沢美術工芸大学教授。日本画、美教

西野久子 (にしひ・ひさこ/1914～2008年)

静岡県生れ。1940年代に茅ヶ崎に移り、絵画教室を開く。60～80年代南太平洋・アジア・アフリカ諸国を訪れ描き続けた。女流美術協会委員・独立美術協会委員、独立美術協会展、女流画家協会展で発表、個展も多数開催する(日本橋三越本店個展・札幌三越個展・京王プラザ個展・松坂屋個展・小田急百貨店個展・東京セントラル絵画館個展など)。2001年茅ヶ崎美術館にて「原色の世界～西野久子展」を開催。2008年没、93歳。洋画、絵画教室

西房浩二 (にしふさ・こうじ/1960年～)

石川県生れ。1982年日本大学芸術学部卒。2001年安田火災美術財団奨励賞優秀賞、前田寛治大賞展大賞。02・06年日展特選。03年文化庁芸術家在外研修制度によりチェコ・プラハに1年間滞在。10年光風会展文部科学大臣賞。16年改組新第3回日展東京都知事賞。現在光風会会員、日展会員。洋画

西巻茅子 (にしまき・かやこ/1939年～)

東京生れ。洋画家の山口猛彦の次女。1964年東京芸術大学工芸科卒。子どもに絵を教える「子どものアトリエ」を開く。66年日本版画協会展で新人賞、67年奨励賞。69年『わたしのワンピース』は187万刷を重ねるロングセラー絵本。78年『ふんふんなんだかいにおい』が青少年読書感想文全国コンクールの小学校低学年対象の課題図書。『ちいさなきいろいゆき』でサンケイ児童出版文化賞。『えのすきなねこさん』で講談社出版文化賞絵本賞。絵本、洋画、版画、イラスト

西 雅秋 (にし・まさあき/1946年～)

広島県生れ。1972年武蔵野美術大学彫刻科卒。84年相模原野外彫刻展で大賞。85年広島モニュメント彫刻コンペティションで最優秀賞。86年東京野外現代彫刻展で優秀賞。92年神戸須磨離宮公園現代彫刻展で東京国 立近代美術館賞・神奈川県立近代美術館賞。93年現代日本彫刻展で大賞。98年西雅秋+古郡弘展「御破算」(東京・佐賀町エキシビットスペース)、個展(広島市現代美術館)。2000年国際彫刻クワトロエンナーレリガ2000で大賞(ラトビア)。彫刻、インスタ

西村伊作 (にしむら・いさく/1884～1963年)

1884年生れ。奈良県吉野郡で山林業、材木商を営む資産家で北山銀行の大株主兼取締役。1915年に自ら設計した洋風の自邸を再び建て(現在の西村記念館)、与謝野鉄幹・与謝野晶子夫妻、画家の石井柏亭、彫刻家の保田龍門、陶芸家の富本憲吉といった芸術家たちを東京から招き、地元作家である佐藤春夫らも交えて、文化人との交流を深めていった。1963年没、79歳。文化学院の創立者、建築家、画家(独学)、陶芸、詩人、生活文化研究家

西村健次郎 (にしむら・けんじろう/1910～1972年)

青森県生れ。1928年県立八戸中学校卒業後、太平洋美術学校本科に進んだ。卒業後母校の八戸中学校で教鞭をとり、71年南郷村立中沢中学校の校長、退職。独立美術協会に第1回展から出品、連続12回入選、37年河北美術展で河北賞。49年独立展の会友。東奥展の審査員。1972年没、62歳。洋画、美教

西村重長 (にしむら・しげなが/1697?～1756年)

江戸生れ。奥村利信とほぼ同じ(1716～1756年)の頃、鳥居派、鳥居清信風の漆絵による役者絵を描いた。西川祐信や奥村政信風の漆絵美人画、浮絵、花鳥画、歴史画、風景画などの紅摺絵を手がけ、さらに赤本、黒本も描いた。浮世絵に関しては奥村政信の手法取り入れ、版元から出している。細判三枚続、石摺絵(白抜絵)、没骨(もっこつ)の水絵(墨線を使用せずに、紅、黄、緑、鼠色といった淡色をもって摺った版画をいう。無線絵の一種で、鈴木春信や西村重長の作品に多く見られる)など、当時の版画の版型や技法の面に新機軸。1756年没、59歳。江戸初期の浮世絵師、漆絵、紅摺絵、没骨水絵

西村昭二郎 (にしむら・しょうじろう/1927～1999年)

京都市生れ。1949年東京美術学校日本画科卒。第2回創造美術展で入選。74年創画会展53、57、59、60年新作家賞、61年会員、87年運営委員長)。74年創画会展出品。67年法隆寺金堂壁画再現模写事業に参加。82～91年筑波大学教授。千葉県で没、72歳。**日本画、美教**

西村駿一 (にしむら・しゅんいち/1930～2018年)

別府市生れ。1957年武蔵野美術専門学校卒。65年国画会展に入選。71年同展で野島賞、78年同会会友、86年同会会員。74年別府短期大学教授。89年別府大学理事長。2012～18年別府市美術館館長を務めた。2018年没、88歳。**洋画、美教、大学理事長、美術館長**

西村草文 (にしむら・そうぶん/1869～1940年)

京都市生れ。久保田米遷に師事、日本画を学ぶ。その後全国各地を遍歴し、1921年以降長崎に定住。長崎では大久保玉珉(1871～1946)、小波魚青(1844～1918)らと親交があった。1940年没、71歳。**日本画**

西村元三朗 (にしむら・もとさぶろう/1917～2002年)

神戸市生れ。1942年小磯良平に師事。川端画学校洋画科に在籍。44日本大学専門部芸術科卒。48年頌栄保育専攻学校(現・頌栄短期大学)の絵画講師。53年新制作展で新作家賞。58年新制作協会会員。71年兵庫女子短期大学教授。80年神戸市文化賞。神戸市で没、85歳。**洋画、美教**

西村盛雄 (にしむら・もりお/1960年～)

東京生れ。1985年多摩美術大学大学院美術研究科彫刻専攻修了。91年ドイツ政府給費留学生(DAAD)として渡独。95年にデュッセルドルフ美術アカデミーでマイスター・シューラーを取得。98年から1年間、文化庁派遣芸術家在外研修員としてヨハネス・ゲーテンベルグ・マインツ大学造形芸術学部文化精神学科に在籍し、宗教と現代美術について研究。その後2年半同学科で講師。**彫刻、美教**

ニエーロ・トローニ (Toroni Niele/1939年～)

スイス、ロカルノ・ムラルト出身。1959年からパリに在住。66年ダニエル・ビュレンヌらの

BMPT「マニフェスタシオンI」に参加。パリ市立近代美術館で30cm間隔に絵筆を押しあてる制作方法を公開。以後展覧会だけでなく、さまざまな場所でこの手法による制作を行う。92年山口県立美術館で「ニエーロ・トローニ展」を開催。**洋画**

西田陀宙 (にしだ・たちゅう/1896～没年不詳)

京都生れ。岡本大更に学ぶ。山本紅雲の紹介で竹内栖鳳に師事。1916年大阪美術展に入選。18年国展に出品。社会派的感觉で描いた。**日本画**

西田 亨 (にしだ・とおる/1920～2015年)

岡山市生れ。1941年東京美術学校区画画師範科卒。49年光風会展で入選、同展で受賞。51年日展で入選。57年安井賞展入選。68年新日展で特選(78年委嘱、84年審査員、85年会員)。71年茨城大学教授(85年退官)。76年日展で特選。85年紺綬褒章。96年日展会員賞。東京で没、95歳。**洋画、美教**

西 大由 (にし・だいゆう/1923～2013年)

福岡県生れ。東京美術学校工芸科鑄造部に学び、高村豊周、丸山不忘らに師事。1948年卒業後は一時多治見製作所で鑄金技師を務めるが、53年東京芸術大学助手に採用され、のち講師、助教授となり、78～91年教授。日展で特選、菊華賞を受賞、会員となり審査員も務め、日本新工芸作家連盟評議員。63年工芸では初の第6回高村光太郎賞を受賞。2013年没、90歳。**鑄金、美教**

西野陽一 (にしの・よういち/1954年～)

京都生れ。1978年京都市立芸術大学日本画科卒。熱帯雨林やアフリカなど自然と動物の世界を日本画で開拓し続けている。**日本画**

西村計雄 (にしむら・かずお/1909～2000年)

北海道生れ。1934年東京美術学校油画科卒。51年渡仏。53年パリで個展。57年個展。61年藤田嗣治と二人展。68年日本美術協会で個展。71年仏政府より芸術文化勲章。73年ベルギー国際展グランプリ。75年パリ・クリティック賞。78年仏政府よりユーマン・プログレ勲章。81年勲3等瑞宝章。東京で没、91歳。**洋画**

西村草文 (にしむら・そうぶん/1869～1940年)

京都生れ。久保田米遷に師事して日本画を学ぶ。その後全国各地を遍歴し、1921年以降長崎に定住。長崎では大久保玉珉(1871～1946)、小波魚青(1844～1918)らと親交。1940年没、71歳。日本画

西村俊郎 (にしむら・としろう/1909～2000年)

北海道生れ。1930年から本郷絵画研究所にて岡田三郎助に師事し人物を学ぶ。藤田嗣治の指導を受け海洋美術展に出品、49年光風会に所属し中村研一の指導を受ける。60年頃より人物画から風景画に転じ日本各地を写生旅行する。73年以降、フランス、ル・サロン等に出品。84年パリ市からヴェルメイユ章。横浜で没、91歳。洋画

西村富彌 (にしむら・とみや/1946年～)

佐賀県生れ。東京藝術大学大学院終了後、渡欧。1975年から78年までスペインに留学。1980年、90年代は東京のストライプハウス美術館、ミズマアートギャラリーで個展。アメリカ、ドイツ、ベルギーのグループ展に出品。2003年にはアメリカ、フィラデルフィアで個展開催。1999年には東京銀座に「ニッチ・ギャラリー」を開廊。画廊ディレクターとして国内外の現代アートを積極的に紹介。洋画、画廊

西村雅之 (にしむら・まさゆき/1885～1942年)

東京生れ。1912年木彫を林美雲に学び、その没後は高村光雲に師事した。松岡映丘について大和絵風の彩色を研究するところがあった。文展無鑑査、正統木彫家協会々員。1942年没、58歳。彫刻、木彫

西村屋与八(初代) (にしむらや・よはち I /生没年不詳)

宝暦-天明(1751-89)のころの人。江戸日本橋で開業。鈴木春信、鳥居清長、鳥文斎栄之らの錦絵を出版し、のちに江戸を代表する地本(じほん)問屋となった。姓は日比野。屋号は永寿堂。江戸中期の版元

西山完瑛 (にしやま・かんえい/1834～1897年)

1834年生れ。後藤松陰に儒学を、父の芳園(ほうえん)に絵をまなぶ。播磨(兵庫県)明石(あ

かし)藩につかえた。1897年没、64歳。江戸後期-明治期の絵師、儒者

西山進 (にしやま・すすむ/1928～2022年)

1928年生れ。福岡県北九州市や大分県宇佐市で育つ。1945年被爆。戦後、福岡県の炭鉱労働者や労組書記を経て、1953年に東京へ。漫画で一本立ちしたのは40歳を過ぎてから。日本原水爆被害者団体協議会(日本被団協)の運動に1970年代から関わる。連載漫画「おり鶴さん」をはじめ、被爆者援護法制定要求や原爆症認定訴訟支援のパンフレットやビラを描く。『はだしのゲン』で知られる中沢啓治さんが2012年に亡くなった後、「最後の被爆漫画家」と呼ばれた。日本漫画協会名誉会員。2022年没、94歳。漫画

西山芳園 (にしやま・ほうえん/1804～1867年)

大坂生れ。松村景文に四条風の画法をまなぶ。人物・花木・鳥獣の絵を得意とし、京坂地方で名が知られた。1867年没、64歳。江戸後期の絵師

西山松生 (にしやま・まつお/1941年～)

福井県生れ。1967年東京藝術大学院美術研究科修了。68年光風会展松田賞。81年改組日展特選。96年光風会展つばき賞。日展会員、光風会会員。洋画

仁平有美 (にたいら・ありよし/1913～1982年)

水戸市生れ。1925年菊池五郎に師事。30年日本美術学校彫塑科入学、翌年洋画科に移籍。47年国画会展に出品。49年茨城県美術展で初入選(50年「彼岸花」がいわはらき新聞社賞、51年無鑑査)。69年第三文明展で入選。71年第三文明展で第三文明賞。74年日仏現代美術展でル・サロン銅賞。1982年没、69歳。洋画

日光 (にっこう/生没年不詳)

生没年不詳。能が成立する以前の古い芸態を伝える儀式的な祝言「翁」の専用面。能では、翁面そのものが神性を帯びた神の面と考えられていました。白色尉の面は柔和な笑いの相で、切顎とするとところに特徴があります。面裏に江戸時代の面打、元休満茂(げんきゆうみつじげ)?(～1719)の「翁、日光(にっこう)作」の金泥極めがあります。日光は『申楽談儀』に「翁は日光打」と見える半ば伝説的な面打。翁面は多くが日光打ちと極められました。能面翁、白色尉、黒色尉等が遺されている。室町時代の面打作家

新田藤太郎 (にった・とうたろう/1888～1980年)

香川県生れ。東京美術学校(現・東京芸術大学)卒。文展、帝展で入選を重ね、1932年審査員。戦後は郷里の香川県に戻り製作に務める傍ら、香川県美術展の創立に尽力。79年四国新聞文化賞。代表作に「肉弾三勇士」、「菊池寛」などがある。1980年没、98歳。彫刻

新田 実 (にった・みのる/1909～1989年)

宮城県生れ。旭川師範学校卒、東京美術学校で学んだ。同期に柳原義達。1935年道展会員。47年日展で特選。49年自由美術協会彫刻部の創設にかかわり、同会会員。現代日本美術展、日本国際美術展に出品。1989年没、80歳。彫刻

蜷川実花 (にながわ・みか/生誕年不詳～)

東京生れ。2007年公開の『さくらん』では長編映画初監督。同作は国内だけでなく、第57回ベルリン国際映画祭及び第31回香港国際映画祭の正式出品特別招待作品。08年東京オペラシティアートギャラリーから始まり全国の美術館を巡回する大規模な回顧展「蜷川実花展地上の花、天上の色」を開催、18万人を動員。12年には『ヘルタースケルター』にて映画監督として第二作目を発表、同新藤兼人賞銀賞。ひとつぼ展グランプリ、木村伊兵衛写真賞、大原美術館賞(VOCA展)数々受賞。14、20年に開催される東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会理事に就任。毎年写真集を発表し、80冊近くを出版。写真、映画

二宮秀夫 (にのみや・ひでお/1933～1984年)

大分県生れ。大分大学学芸学部卒。1962年回行動美術協会展に入選。同展を主舞台に活躍。73年行動美術協会展で奨励賞、同協会会友、75年行動美術協会会員。85年山香町に「二宮秀夫記念館」がオープンし、展覧会やイベント等が行われ話題を集めたが、閉館した。1984年没、51歳。洋画、個人美術館

丹羽長国 (にわ・ながくに/1834～1904年)

福島県生れ。戊辰戦争時の藩主で、戦後いわゆる奥羽越同盟の罪を問われて、減封と謹慎の刑に処せられた。1869年許されて帰藩し、松岡寺に住したが、71年上京。なお、画をよくし、特に蘭を描き、蘭畹と号した。東京で没、70歳。68歳。日本画

丹羽光重 (にわ・みつしげ/1621～1701年)

江戸生れ。初代二本松藩主として入部。まず藩政の基を定め、さらに城の修改築、水路・道路の開削、郭内を侍屋敷、市街・寺社を郭外へと、城内外の整備を実施した。また茶人としても名があり半古庵と号し、さらに書画にも堪能で玉峯と号し、特に画は狩野派の流れをくみ評価が高い。福井県で没、80歳。藩主、江戸初期-中期の絵師

丹羽嘉言 (にわ・よしのぶ/1742～1786年)

尾張生れ。名古屋藩士竹中氏につかえる。文人画を独学、1776年退隠して川名村に謝庵をむすび画業に専念した。1786年没、45歳。作品に「神洲奇観図」「福善斎画譜」など。1786年没、44歳。江戸中期の絵師

忍頂寺静村 (にんちようじ・せいそん/1804, 5～1877年)

兵庫生れ。上田公長に学び、田能村竹田、貫名海屋に師事。文人画風を見に付け、写生画風の風景画、山水画を得意とした。1877年没、73歳? 南画(人文画)

ぬ

沼田一雅 (ぬまた・いちが/1873～1954年)

福井県生れ。竹内久一に木彫を学び、岡崎雪声に蝸型鑄金技法を学ぶ。1900年パリ万博で一等金牌。03年渡仏してセーヴル製陶所で洋風の陶器彫刻を研究。帰国後、官展に陶製彫刻を発表し、陶芸界に新分野をひらいた。東京美術学校で後進の指導。54年日本芸術院恩賜賞。1954年没、81歳。鑄金、工芸、陶彫、美教

貫名海屋・貫名菘翁 (ぬきな・かいおく・すうおう/1778～1863年)

徳島県生れ。文人画に傾倒、大坂では鼎春岳、濱田杏堂、京都では浦上春琴、中林竹洞、山本梅逸、青木木米ら、文人画家と親しく交流。また、儒者・文人とも親交を深めている。中国の明清画を学習しており、明清画を臨模した作品も多数残されている。長崎では祖門鉄翁から南画の画法を受けた。田能村竹田はその著『竹田荘師友画録』において「菘翁の『送行図鑑』を見、このような絵は読書をよくし、しかも画をよくする者でない」と描けないと評した。
儒学者・書家・文人画、江戸後期の絵師

沼田月斎・月斎歌政Ⅱ（ぬまた・げっさい/1787～1864年）

1787年生れ。牧墨僊及び葛飾北斎の門人。初め牧墨僊に絵を学び、のちに墨僊からその前名である月斎歌政の名を譲られ、二代目月斎歌政と称した。1812年名古屋滞在中の葛飾北斎からも墨僊とともに絵を学んでいる。文政のころ月斎を名乗り、18年刊行の『北斎画鏡』や、翌年刊行の『北斎漫画』九編などの奥付に、校合門人の一人として月斎歌政の名前が見られる。版本の作としては43年刊行の『繪本今川状』などがある。肉筆浮世絵では美人画を得意とした。天保以降は浮世絵から離れて張月樵・山本梅逸に師事して南画で一家を成し、53年画壇から退く。1864年没、78歳。門人に埴原月岬、大石真虎、川崎千虎、川崎美政、岩田古朴、服部月真、今井雪政らがいる。
江戸後期の浮世絵師、南画

3

ね

根市良三（ねいち・りょうぞう/1914～1947年）

青森県生れ。1927年青森中学入学。在学中に版画「殺人幻想」を新興版画展に出品、入選。関野準一郎と同級生。1931年第1回日本版画協会展で入選。33年上京し、文化学園美術に籍を置きながら石井柏亭に師事し油彩画を学ぶ。44年一木会会員として恩地孝四郎に私淑。日本版画協会の会員となります。根市は1枚の版木で多色版画を制作する

「圓の進み」を得意とし、花や鳥など叙情的なモチーフに心象世界を重ね合わせた詩情にあふれた作品を制作しました。1947年没、33歳。**版画、洋画**

根上富治（ねがみ・とみじ/1895～1981年）

山形県生れ、東京美術学校で日本画を学ぶ。師は結城素明であった。在学中の1921年帝展に入選し、美術学校を卒業した22年帝展で特選を受賞、23年から無鑑査出品。この後も帝展、新文展と出品を続けているが、38年日本画院創立に際しては、川崎小虎、望月春江、野田九浦、町田曲江らと共に創立同人として名を連ねた。37年頃より終戦頃まで、帝国美術学校(現武蔵野美術大学)で教鞭をとっている。戦後も、日展、日本画院に出品し、日展では49年の第5回展より依嘱出品となった。東京で没、86歳。**日本画、美教**

根岸芳郎（ねぎし・よしろう/1951年～）

長野県生れ。1973年武蔵野美術大学油絵科卒。76年ボストン美術館付属美術学校卒、77年同校研修課程卒。95、96年武蔵野美大ノリ賞でノリ滞在。**洋画**

根本愚洲（ねもと・ぐしゅう/1806～1873年）

福島県生れ。染屋に奉公し、衣紋書の名人として評判を得た。のち藩主丹羽長富に認められ、命により文政11年大原文林と共に谷文晁の門下生となり、すぐに師の代筆をも務めた。長崎に渡り、帰化僧鉄翁を師とし南画を極め、肥・薩2州を遍歴し画名を高めた。のち江戸藩邸に帰り、御側絵師として60石支給され藩主の寵遇は厚かった。維新後、小浜に戻り、のち二本松に住した。1873年没、67歳。**江戸後期の絵師、南画**

根本正（ねもと・しょう/1923～1980年）

茨城県生れ。1939年永田春水に師事。41年読画会展で入選。50年小林巢居人に師事。51年茨城県美術展で茨城新聞社賞。55年新興美術院会員。60年茨城県美術展運営委員。66年文部省主催全国県展選抜展で文部大臣賞。69年九月会創立。70年再興新興美術院展で文部大臣賞。1980年没、57歳。**日本画**

根本樵谷（ねもと・しゅうこく/1859～1913年）

千葉県生れ。初め宮川堤月に学び、洋画を習う。1885年杉溪雲樵に師事。雲谷派を修め

る。墨の馬や鯉の絵を得意とした。1913年没、53歳。日本画、水墨

根本雪蓬 (ねもと・せっぽう/1878～没年不詳)

千葉県生れ。父は日本画家、根本樵谷。初め横浜の矢内樵秀に学び、のち荒木寛畝に師事する。日月会の主任幹事。日本美術協会会員。文墨協会委員をつとめ、孔雀の絵を得意とした。日本画、水墨

7



能阿弥 (のうあみ/1397～1471年)

阿弥派の祖で、三阿弥の一人。真能とも称した。將軍足利義教・義政に仕えた同朋衆で、水墨画・連歌・花道・香道のほか、唐物の鑑定や屋敷飾りなどで活躍。「君台観左右帳記」(くんだい かんそうちょうき)の著者と伝える。作「白衣観音図」など。1471年没、74歳。室町中期の絵師、水墨、連歌師

能島征二 (のうじま・せいじ/1941年～)

東京生れ。1962年日彫展で入選(2006年理事・委員長、07年常務理事、10年理事長)、第5回日展で入選。64年茨城大学教育学部美術科卒、小森邦夫に師事。69年改組日展で特選(71年、2000年文部大臣賞、07年常務理事)。06年日本芸術院会員。07年茨城県特別功績者表彰。08年水戸市文化栄誉賞。10年「能島征二の軌跡展」(水戸芸術館開催)。彫刻、日彫展理事長

能島和明 (のうじま・かずあき/1944年～)

東京生れ。1962年奥田元宋に師事。66年多摩美術大学日本画科卒。1962年奥田元宋に師事。63年大学在学中に日展に初入選。72、75年日展特選を2回、82年日展会員賞、2

009年日展文部科学大臣賞、宮城県教育文化功労者、13年日本芸術院賞。河北美術展顧問、日春展委員、日展評議員を務める。日本画

能島浜江 (のうじま・はまえ/生誕年不詳～)

1990年日展初入選。92年東京セントラル美術館日本画大賞展佳作賞。93年日春展奨励賞('94'95'05'06)。94年多摩美術大学大学院修了、神奈川県美術展県議会議長賞。98年日春展日春賞。2004年日展特選。11、15年日展審査員。22年日展東京都知事賞。日展会員。日本画

納富介次郎 (のうとみ・かみじろう/1844～1918年)

佐賀県生れ。1873年ウィーン万国博覧会で政府随員として渡欧し、オーストリア帝国・ボヘミアのエルボーゲン製陶所で伝習生として陶磁器の製造を学んだ。フランスのセーブル製陶所を見学した後、75年帰国。石川県立工業高等学校、富山県立高岡工芸高等学校、香川県立高松工芸高等学校、佐賀県立有田工業高等学校を創立し、校長。1918年没、74歳。日本画、工業デザイナー、窯業技術の育成、4工芸学校創立、校長

野上邦彦 (のがみ・くにひこ/1943年～)

富山市生れ。富山中部高校卒、日本大学芸術学部美術学科卒(最優秀賞)。糸苑三郎に師事。受賞歴:富山県展、ジャンピン大賞展、人間賛歌大賞展、国際美術大賞展。出品歴:毎日現代展、セントラル大賞展、日仏現代展、伊藤廉賞展、独立展(元会友)・個展:紀伊國屋文藝春秋画廊、他 個展、グループ展に出品。現在:立軌会同人、土日会会員、オリーブ会会員、日本美術家連盟会員。洋画

野上零大 (のがみ・れいだい/1925年～)

東京生れ。都立片倉高校美術科卒、東京造形大学大学院造形研究科美術研究領域了(最優秀賞)。舟越桂に師事。受賞歴:大学院修士終了展でZOKEI賞。出品歴:第20回金沢現代彫刻展、「大草原展」。Gallery KINGYO、「第1回花とみどり・いのちと心」国営昭和記念公園、花みどり文化センター、「東京造形大学 俊英彫刻家 特集」新宿小田急美術館廊・アートサロン。個展:[Immanent]—内在するかたち Azabujuban Gallery。彫刻

野際白雪 (のぎわ・はくせつ/1773～1849年)

1773年生れ。文人画を野呂介石にまなび、狩野派の画法もおさめて生地の紀伊和歌山で藩絵師となる。山水画にすぐれ、殿中の絵画制作にあたった。1849年没、77歳。江戸後期の画家

野口嘉光 (のぐち・かこう/1913～1976年)

金沢市生れ。1932年県立工業学校窯業科卒、名古屋・埼玉で製陶技術・硝子原料研究を行う。41年二科展に入選、53年特待受賞。富山県に転居し、50年より金沢美術工芸専門学校に勤務、金沢美術工芸大学教授。二科会会員、31年二科会北陸支部を結成し、支部長。1976年没、63歳。彫塑、陶芸、美教

野口謙次郎 (のぐち・けんじろう/1898～1947年)

佐賀県生れ。1923年東京美術学校日本画科卒。21年帝展以後官展に出品、40年帝展で特選。1947年没、50歳。日本画

野口哲哉 (のぐち・てつや/1980年～)

香川県生れ。2003年広島市立大学芸術学部油絵科卒、05年同大学院修了。鎧兜を着た人物をモチーフに、立体作品や絵画を制作。作品は一見古びて見えるが、樹脂やアクリルなど現代的な素材で作られている。14年「野口哲哉展—野口哲哉の武者分類図鑑—」・練馬区立美術館・アサヒビール大山崎山荘美術館。現代美術、立体、洋画

野口幽谷 (のぐち・ゆうこく/1825～1898年)

江戸生れ。1891年ごろ椿椿山に南画を学ぶ。72年ウイーン万博「雌雄軍鶏」、77年第1回内国勸業博覧会展「竹石図」(褒状)、82年内国絵画共進会「菊花図」、88年日本美術協会展「矮竹子母鶴図」(銀牌)など国内外の展覧会に出品・受賞。89年には滝和亭らと青年絵画協会を結成、93年帝室技芸員。渡辺華山、椿椿山と続く、謹直な画風で花鳥図、人物図などを得意とした。門下には松林桂月。1898年没、73歳。日本画

野口三四呂 (のぐち・みよろ/1901～1937年)

静岡県生れ。韮山中学校(韮山高校)から、上京、1928年日本橋三越にあった早撮り写真

の技師。29年に朝鮮博覧会が京城(ソウル)で開催され(9～10月)、三四郎は写真技師として派遣。この年三四郎は大量のスケッチ画(水彩)を残しています。朝鮮舞を舞う官伎(宮廷付きの踊り手)のスケッチ。生来芸術家肌の三四郎は三越をやめ、表現方法を模索して、出会ったのが張子の技法です。1937年没、36歳。三四呂人形の作者、水彩、デッサン

野崎 貢 (のざき・みつぐ/1916～2001年)

東京生れ。川端画学校卒。山本丘人に師事。1950年創造美術展に初入選。のち新制作協会会員、創画会会員。作品に「森の太陽」「方向」など。2001年没、85歳。日本画

野崎利喜男 (のざき・りきお/1909～1985年)

横浜市生れ。1929年本郷絵画研究所、二科技塾などで洋画を学ぶ。30年裕伊之助に師事。37年フランスに渡り、40年に帰国するまでアンリ・マチスに師事。40年一水会展に出品し、47年一水会会員。52年同展出品して会員佳作賞(1賞)。58年同志数名と斑会を結成。66年渡仏し、66年ニース南仏展でグランプリ金賞。67年のカンヌ・ビエンナーレ国際美術展でグランプリ・カンヌ市賞。68年帰国、三越等で滞欧作展を開く。東京で没、75歳。洋画

野沢久右衛門 (のざわ・きゅうえもん/生没年不詳)

肥前長崎の人。生島藤七の門人で、螺鈿(らでん)細工にたくみだった。生島藤七は長崎で西洋画法を習ったと伝えられている。江戸時代前期の漆工、洋風画派

野沢秀湖 (のざわしゅうこ/1908～1994年)

水戸市生れ。1922年介川芳秀に師事。30年茨城工芸会の設立に参加、30年第1回展より出品。38年茨城工芸展で県賞、戦後茨城県美術展の審査員。76年日宝連コンクールで労働大臣賞。80年伝統工芸士。84年東京都優秀技能者表彰。86勲7等青色桐葉章。93年東京都台東区・無形文化財保持者。東京で没、86歳。彫金

野沢如洋 (のざわ・じょよう/1865～1937年)

青森県生れ。1892年京都に出て、独力画法を研究、日本美術協会に毎回出陳して屢々受賞、95年1等賞を受領宮内省御買上の栄に浴した。1904年支那に渡り、各地を巡歴、在留8年に及ぶ。19年欧米美術行脚の途につき、20年帰朝、30年東京に転住し、爾後数次

個展。36年弘前市に於ける秩父宮殿下御仮邸に伺候、御前揮毫の榮に浴した。1937年没、72歳。日本画

野沢提雨 (のざわ・ていう/1837～1917年)

江戸琳派の流れを汲む最後の画家のひとり。池田孤邨に絵を学ぶかたわら国学も学び、活動の幅は広い。酒井抱一に私淑し、書道、茶道、華道に励む一方俳句にも親しみ、志野流の香道では多くの門人をかかえていた。着色、水墨の両方に優れた感覚を示し、平明穏健な中に写実性を加味した瀟洒な作風で知られる。中村岳陵の最初の師としても重要。1917年没、80歳。江戸後期-明治期の絵師、江戸琳派、水墨

野沢二郎 (のざわ・にろう/1957年～)

茨城県生れ。1979年個展「風景いくたび」(筑波大学会館ギャラリー)。82年筑波大学大学院芸術研究科修了。97年アジア・アート・ビエンナーレ・バンガラディッシュで名誉賞。2004年損保ジャパン美術財団選抜奨励展(東郷青児美術館)出品。10年明星大学教育学部教。洋画、美教

野島康三の写真作品群

日本の近代写真におけるピクトリアリズムを代表する写真家の野島康三(1889 - 1964)による活動の全貌を伝える約260点からなる作品・資料群。野島康三遺作保存会から寄贈されました。ブロンズオイル印画(プリント)などの古典技法による貴重なオリジナル・プリントや、ドイツ新興写真に触発された銀塩写真(ゼラチン・シルバー・プリント)のほか、岸田劉生や富本憲吉など同時代の芸術家のために自邸で開催した展覧会の記録写真などの関連資料をも含んでいます。国立京都近代美術館。写真

野島青茲 (のじま・せいじ/1915～1971年)

静岡県生まれ。16歳の頃、松岡映丘の画塾、木之華社に入塾。東京美術学校日本画科卒。1936年文展に入選。39年日本画院展で日本画院賞。41年高山辰雄、浦田正雄らと、日本が研究団体「一采社」を結成。42年中村岳陵に師事。戦後からは日展に出品。49、51年に日展特選、60年に菊花賞、65年には文部大臣賞。1971年没、56歳。日本画

能島芳史 (のじま・よしふみ/1948年～)

富山市生れ。1971年金沢美術工芸大学油絵科卒。52～55年ベルギー王立セント美術大学修復科でフランドル絵画技法を修得、ボッシュ作品を模写。97年熊谷守一大賞展出品。2009富嶽ビエンナーレ展大賞。10年「ボッシュからの展開・能島芳史展」(朝日町ふるさと美術館主催)。15世紀フランドル技法を現代に甦らせ、透明感と輝きのある色彩で幻想的と抒情溢れる作品を描く。13年石川県立美術館主催で「能島芳史展—15世紀フランドル絵画からの展開—」開催。洋画

野生司香雪 (のーす・こうせつ/1885～1973年)

香川県生れ。香川県工芸学校金属工芸科卒業後、東京美術学校予備課程の金属工芸科に入る。20歳の時、東京美術学校制度改革による日本画科に入る。英国から帰国した下村観山が担任。1907年東京勸業博覧会美術展覧会に出品、入選。08年東京美術学校日本画科卒。東京銀座の三上呉服店に図案描きとして就職。11年橋本閑雪らと美術研精会の正会員。美校に東台画会が結成され、以後研精研究会や東台画会で作品を発表。14～45年淑徳高等女学校図画講師。再興日本美術院研究会員。1973年没、88歳。仏画、日本画

野中ユリ (のなか・ゆり/1938年～)

東京に生まれる。都立駒場高校卒。1953年頃関野準一郎、駒井哲郎に学びながらもほぼ独学で銅版画を習得し、瀧口修造の知遇を得て57年、瀧口氏企画のグループ展「銅版画展」に出品。57年東京国際版画ビエンナーレ展のほか、現代日本美術展、東京国際美術展などの展覧会、画廊の企画展に作品を発表。銅版画のほか、コラージュ、油彩、オブジェなどを手がけ、書籍の装丁、新聞・雑誌・単行本の挿画でも優れた才能を発揮している。版画、洋画、コラージュ、オブジェ、装丁

野々内保太郎 (ののうち・やすたろう/1902～1985年)

島根県生れ。堀江有聲・国井応陽・小村大雲らに学んだ後、1930年京都市立絵画専門学校に入学し、中村大三郎に師事。在学中の32年帝展に入選、大三郎没後は西山翠嶂に師事、58年西山翠嶂が没すると、同志と牧人社を結成し、西山英雄に師事。花鳥画を得意とし、文展・日展で入選。戦後日展に厚塗りの大作を発表する一方、細密描写による軸装の、色鮮やかな花鳥画を数多く制作した。京都市で没、83歳。子に、日本画家の野々内良樹・井

上稔・野々内宏。日本画

野々内良樹 (ののうち・よしき/1930年～2009年)

京都生れ。父は、野々内保太郎。1950年京都市立美術専門学校卒、西山英雄に師事。51年日展入選。57年朝日新人展招待。66年日展特選・白寿賞、日春展入選。80年日展特選。85年日展審査員。2009年没、79歳。日本画

野々村仁清 (ののむら・にんせい/生誕年不詳～1694年頃)

京都生れ。京都栗田口(あわたぐち)、尾張(おわり)(愛知県)瀬戸でまなび、正保(しょうほ)4年ごろ京都仁和寺門前に窯をひらく。金森宗和の指導のもとに唐物、瀬戸写しの茶入れなどをつくり、京焼色絵陶器を大成した。1694年頃没。作品に「色絵藤花図茶壺」「色絵雉子(きじ)香炉」など。陶芸、江戸時代前期の陶工

野島耕之介 (のばた・こうのすけ/1933～1993年)

金沢市生れ。1956年金沢美術工芸短期大学彫刻科、58年金沢美術工芸大学油画科を卒業、矩幸成に師事。65年日展に入選、80、81年連続特選。75、78年日本彫刻会展で日彫賞。一貫して肉体の内面と表情の質感美を基調とした男性像を制作。日本彫刻会会員。日展評議員。1993年没、60歳。彫刻

信近春城 (のぶちか・しゅんじょう/1885～1910年)

岡山県生れ。深田直城、菊池芳文、橋本雅邦に師事。各種の絵画共進会や内国勸業博覧会で活躍。1907年国画玉成会の結成に参加し、07年文展で3等賞。歴史画を得意とした。1910年没、26歳。日本画

昇 外義 (のぼり・がいぎ/1925～1995年)

富山県生れ。京都市立絵画専門学校に入学、小野竹喬や近代的、上村松篁らの下で日本画を学びました。卒業後は神戸に移住して神戸市立入江小学校で教職を務めながら画技の研鑽をします。38歳の時に退職をして画業に専念。県の文化賞などを受賞。画壇には属さず、個展主義を通しており、1987年には中国の天津美術学院でも個展を開き、国際的にも活躍しました。1995年没、70歳。日本画、美教

野町和嘉 (のまち・かずよし/1946年～)

高知県生まれ。写真家杵島隆に師事後、1971年からフリー。72年サハラ砂漠に旅し、過酷な風土を生き抜く人々の営みや祈りをテーマに地球規模の取材。サハラ、シナイ半島、ナイル、チベット、メッカ、エチオピアを長期にわたって取材した写真集は、数カ国の国際出版。現在はアンデス高地に取り組む。米国報道写真家協会年度賞銀賞(雑誌部)、講談社出版文化賞、土門拳賞など受賞多数。写真

野村玉溪 (のむら・ぎよつげい/1785～1857年)

1785年生れ。幼い頃から画を好み、1807年に京都に出て呉春(松村月溪)の画僕をしながら画を学んだ。5年後に帰郷して画を業とし、多くの門人を養成して「名古屋四條派の祖」と称された。田中訥言、小島老鉄、秦鼎、植松茂岳らと親しく交わり、俳諧も巧みだった。1857年没、73歳。江戸後期の絵師

野村淡泉 (のむら・たんせん/1838～1878年)

1838年生れ。通称は野村修齋。前村洞泉に狩野派を学び、才能があった。1878年没、40歳。江戸後期-明治の絵師

野村春江 (のむら・はるえ/1889～1936年)

高知市生れ。柳本素石に四条派を学んだ。1910年林区署の雇員をつとめ、製図などを描いていた。36年は勤続26年の農林大臣表彰を受けている。龍や鷹、鯉を得意とした。土陽美術会にも参加し、島内松南や下司凍月らと親しく交友した。1936年没、48歳。日本画

野村 博 (のむら・ひろし/1923～2008年)

名古屋市生れ。1947年帝国美術学校西洋画科卒。47年戦後の新興紙「夕刊新東海」(新東海新聞社)の記者、横浜市に転居。61年まで東京で別の新聞社の記者。1960～70年代を中心に精力的に版画を制作した。日本版画協会展、東京国際版画ビエンナーレ展や、リュブリアナ国際版画ビエンナーレなどに出品。69～82年名古屋造形芸術短期大学の非常勤講師(洋画コース)として、後進を育成した。神奈川県で没、85歳。版画、美教、ジャーナリスト

野村俊彦 (のむら・としひこ/1904～1987年)

東京生れ。木村荘八に絵を学ぶ。1923年木村荘八が描く「荒都図絵の会」を起こし、絵はがきサイズの震災風景『荒都図絵』シリーズを多色摺(或は墨摺に手彩色)木版画にする。その彫を担当。23年『荒都図絵』第一集を出版。24年彫師宮田六左衛門に入門し修業。藤巻充寛(彫秀)にも学ぶ。木村荘八宅に住み込み 春陽会等の事務手伝をしながら版画制作。公募展へは、26年春陽会展に木版画入選。27年日本創作版画協会展に入選、会友。28年帝展に入選。31年日本版画協会に会友、32年会員。創作版画誌は27年洋画家の土屋義郎・久泉共三・横堀角次郎らの原画に基づき、野村が調り・摺りを担当。1987年没、83歳。 **版画、彫り、摺り**

野村 仁 (のむら・ひとし/1945年～)

兵庫県生れ。1969年京都市立芸術大学専攻科修了、同年美大作品展で段ボールによる構造物が重力によって崩壊していく作品〈Tardiology〉を発表。75年月の運行を五線譜上の音符に見立てた写真による作品〈‘moon’core:since 1975〉の制作。83年には「現代美術における写真—1970年代の美術を中心として—」(東京国立近代美術館)、85年には「第2回アジア美術展」(福岡市立美術館)、1987年「現代美術になった写真」(栃木県立美術館)、「現代美術としての映像表現」(目黒区美術館)、「動きの表現」(埼玉県立近代美術館)、「現代日本美術の動勢—絵画part2」(富山県立近代美術館)、90年「移行するイメージ—1980年代の映像表現—」(京都国立近代美術館、東京国立近代美術館) 1988年より京都市立芸術大学助教授、96年教授。 **現代美術、写真、映像、美教**

野村文挙 (のむら・ぶんきよ/1854～1911年)

京都生れ。四条派の画家・塩川文麟に師事、円山四条派の画法を学ぶ。1877年京都府画学校開校、教鞭を取る。89年学習院の教授。「写生画復興」の旗印のもと、展覧会に次々と大作を出品して受賞、画家としての地位を確かなものとする。森寛斎のもとで円山派の真髓を極めようとつとめる。円山・四条派の写生画に、写実を重んじる近代的描法を加味した風景画作品を得意とする。その神髓は、彼の弟子である山元春挙らへと引き継がれてゆき、近代京都画壇の基礎を作った。1911年没、58歳。 **日本画、美教**

野村芳国 (のむらよしくに/生誕年不詳～1898年)

大坂生れ。一陽亭芳信の門人。役者絵を手掛けたが、明治になると芝居小屋や見世物小屋の集まる大阪千日前で看板絵を描いた。作は役者絵2点と肉筆画2点が伝わる。芳国には常松(二代目芳国)と野村芳光といふふたりの養子がいたが、その気性の激しさから、芳光は入門して二年後に芳国のもとを離れ、京都にいた二代目芳国のところで仕事をするようになったという。 **大坂の浮世絵師**

野村芳国・二代目 (のむらよしくに II/1855～1903年)

初代野村芳国の門人で養子。常松は大阪の初代のもとを離れ京都に移り、芳国を名乗って俗名も與七と改めた。1885年錦絵の揃物「京坂名所図絵」を版行。京都で芝居の絵看板を描く傍ら、都をどりの舞台背景を製作したり、パノラマ館で見せる戊辰戦争や日清戦争のパノラマの絵を描いた。晩年には活動写真の興行もした。息子に野村芳亭こと桑蔵がおり、父芳国の没後、三代目芳国の名を継ぎ芝居絵の製作に従事したが、のちに映画界に身を投じ映画監督。1903年没、48歳。 **浮世絵師**

埜谷次郎 (のや・じろう/1913～1995年)

石川県生れ。1947年金沢美術工芸専門学校研修生修了。53年二紀展初入選、以後69年まで出品、56・58年褒賞、63年同人賞、70年退会。渡辺の後、79年一創会創立に参加、会員、80年退会。以後無所属。セロファンやアクリルを用いて幾何学的抽象作品を制作。風景画に転じ、晩年はヨーロッパに毎年取材し、古い街並みを描き続けた。1995年没、82歳。 **洋画**

野呂介石 (のろかみ いせき/1747～1828年)

和歌山県生れ。10歳のころより伊藤蘭岬について儒学を修め、のち画事を好んで京へ遊学。47歳で紀州藩に出仕し、銅山方などを歴任。画は21歳のときに池大雅についたが、大雅の影響はほとんどなく、温和で理の勝った山水画は正統的な南宗画様式に近い。那智滝図を好んで描き、また『紅玉芙蓉(ふよう)図』のような異色の作もある。1828年没、83歳。 **江戸後期の南画家**

は

売茶翁 (はい さおう/1675～1763年)

佐賀県生れ。僧号月海、煎茶人して知られ、煎茶の中興といわれ、また本朝煎茶の茶神とまで称賛される。12歳のとき肥前竜津寺で同寺開山の化霖道竜につき出家、ついで化霖の師万福寺の独湛性瑩に師事し禅の修行に励んだ。その後諸国行脚(あんぎや)の志をたてて旅に出、陸奥仙台の万寿寺で月耕道稔に参じたのをはじめ広く臨済、曹洞の禅僧に参禅し、のち竜津寺化霖のもとに帰った。1763年没、88歳。煎茶人、江戸中期の黄檗宗の画僧

灰谷正夫 (はい たに・まさお/1907年～1985年)

広島県生れ。高等小学校卒業後の1922年就職先の印刷所で巖光、野村守夫と出会う。大阪に出て新燈社美術研究所に学ぶ。1926年上京。1929年「1930年展」に入選。30年二科展入選。37年山路商らと広島フォルム美術協会を結成。戦後、自由美術協会を舞台に活躍。シュルレアリスムを追究。上京時代の1928年以後、古賀春江に師事。1985年没、78歳。洋画

梅堂小国政・五代 (はい どう・こくにまさ V/生没年不詳)

四代国政長男。梅堂の号を用いたが、1889年より29年の間、小国政と称し、91年頃、国政をついで五代国政となる。作画期:明治20年代(1887-1896)～明治(1868-1912)末。明治期の浮世絵師

羽下修三 (はが・しゅうぞう/1891～1975年)

新潟県生れ。1921年東京美術学校彫刻科木彫部卒、帝展で活躍、29年から二年連続で特選、33年永久無鑑査。36年から母校の助教授に迎えられ後進の指導に当たった。後は帰郷し、新潟県文化祭美術展(県展)の審査や新潟大学教育学部非常勤講師、新潟県文化

財調査審議委員を務めるなど、彫刻制作の傍ら地方文化活動の振興に尽力した。68年勲五等双光旭日章受章。伝統的な木彫技法と近代的な意識の融合した作品を制作した。1975年没、84歳。彫刻、美教

芳賀日出男 (はが・ひでお/1921年～)

大連市生まれ。1944年慶應義塾大学文学部卒。46年日本通信社に入社。50年日本写真家協会創立メンバーの一人。70年大阪万国博覧会<お祭り広場>プロデューサー。89年紫綬褒章。95年勲四等旭日小綬章。97年日本写真協会功労賞。2009年オーストリア国より科学・芸術功労十字章。著作に『田の神』(平凡社、1959年)、『日本の祭』(保育社、1991年)、『写真民俗学 東西の神々』(KADOKAWA、2017年)、など約70冊にのぼる。ジャーナリスト、写真

萩森久朗 (はぎもり・ひさお/1913～没年不詳)

三重県生れ。大阪美術学校卒。カンサス美大卒業。斎藤与里に師事する。元律動美創立会員。二紀賞2回受賞。洋画

萩谷勝平 (はぎや・しょうへい/1804～1886年)

水戸市生れ。彫金を主として実兄に学ぶ。1877年内国勸業博覧会で鳳紋賞牌。81年内国勸業博覧会に出品。色絵象嵌や薄肉彫を得意とした。教育者としてもすぐれ、門人から海野勝珉ら優れた彫金家を輩出。1886年没、82歳。彫金、美教

萩尾望都 (はぎお・もと/1949年～)

福岡県生れ。1969年『レルとミ』でデビュー以来、SFやファンタジーなどを取り入れた壮大な作風で名作を生み出し続けている。76年『ポーの一族』『11人いる!』で小学館漫画賞、97年『残酷な神が支配する』で手塚治虫文化賞マンガ優秀賞、2006年『バルバラ異界』で日本SF大賞ほか受賞多数。12年には少女マンガ家として初の紫綬褒章を受章。17年朝日賞を受賞。19年文化功労者、24年芸術院会員。漫画

萩原楽一・光観 (はぎわら・らくいち・こうかん/1925～2007年)

東京生れ。洋画を野間仁根に、版画を関野準一郎に師事する。一陽会運営委員・常任審

査員を務める。日光輪王寺に「福河童」の大作が奉納されるなど、ライフワークとしてかっぱの絵を多く描いた。2007年没、82歳。版画

白雲 (はくうん/1764～1825年)

生地不詳、京都生れ?浄土宗の僧で、出家して1781年頃須賀川の十念寺に入り、88年住職となる。白河藩主松平定信に召し抱えられ、白河松平家の菩提寺である東林寺、常宣寺などの住職も務めた。松平定信の命により谷文晁とともに《集古十種》作成に当たり、97～1800年の間に京都、高野山、紀伊、備前、讃岐など各地を旅して調査を行った。その際に洋画の手法を取り入れた風景写生を試み、写生帖数種が残っている。24年六郷の本覚寺に移り住職となった。1825年没、61歳。江戸後期の画僧

朴 栖甫 (Park Seo-Bo/1931年～)

韓国の尚北道生れ。1954年弘益大学美術学部絵画科卒。61年ソウル滞在を経て、モノクロームの線画や韓紙の質感を活かした作風。韓国現代美術の先駆的存在であり、韓国単色画(Dansaekhwa)を代表する作家。洋画

朴 南姫 (ぱく・なんひ・PAK Nan-hee/1950年～)

韓国生まれ。ソウル大学校美術大学絵画科卒、同大学院卒。大学美術史科博士課程:美術史学博士。個展4回。90年韓国美術協会展・全国国立大学芸術大学教授作品展・大邱美術協会展等出品。91年鳳城画廊開館記念招待展・青白女流画家展・韓国、中国交流展出品。92年碧芽美術館招待青白女流画家展出品。慶北大学校芸術大学美術学科教授。洋画、美教

箱崎睦昌 (はこざき・むつまさ/1946年～)

大分県生れ。1972年京都市立芸術大学日本画専攻科を修了、同年シェル美術賞展で受賞。山種美術館賞展、セントラル美術館日本画大賞展、両洋の眼・現代の絵画展に出品、受賞。84～93年「横の会展」に参加。無所属で個展、グループ展等を発表の舞台とし、スケールが大きく、完成度の高い現代水墨画や日常生活に取材した《情景》シリーズを発表。京都嵯峨芸術大学教授。日本画、水墨、美教

礪 西涯 (はざま・せいがい/1811～1878年)

山口県生れ。小田海僊(かみ・せん)に文人画をまなぶ。花鳥・山水・人物をえがいた。1878年没、68歳。江戸後期-明治の絵師

端館紫川 (はしだて・しせん/1855～1921年)

三重県生れ。川端玉章に師事。フェノロサの鑑画会、内国勸業博覧会で活躍し、川端画学校教授、女子美術学校教授。花鳥・山水画を得意とした。1921年没、67歳。日本画、美教

橋 秀文 (はし・ひでぶみ/1954年～)

兵庫県生れ。早稲田大学大学院博士課程(美術史専攻)を経て、1984年神奈川県立近代美術館に勤務。同館企画課長兼普及課長。手掛けた展覧会は「佐伯祐三と佐野繁次郎展パリのエスプリ」(神奈川県立近代美術館 葉山、2007年)、「浜田知明の世界展版画と彫刻による哀しみとユーモア」(神奈川県立近代美術館葉山、2010年)。著書に『カラー版 水彩画の歴史』(美術出版社、2001年)、編著に『小倉遊亀(現代の日本画4)』(学習研究社、1991年)、『安田靉彦 永遠の女性像(巨匠の日本画7)』(学習研究社、1994年)「新しい神話がはじまる。古賀春江の全貌」(石橋美術館・神奈川県立近代美術館、2010年)の企画。図録に「古賀春江の初期のスケッチブックー北原白秋への憧憬から旅立ちへー」を寄稿。美術館学芸員

橋本永邦 (はしもと・えうほう/1886～1944年)

橋本雅邦の二男として生れ、雅邦・下村観山に師事、1907年文展で3等賞。文展、爾来院展に出品、21年美術院同人。日本美術院同人・文展無鑑査。1944年没、59歳。日本画

橋本 治 (はしもと・おさむ/1948～2019年)

東京生れ。1967年東京大学文学部国文学科入学。2年次に駒場祭(学校祭)に発表したポスター「とめてくれるなおっかさん 背中のいちょうが立っている 男東大どこへ行く」で注目。73年、同学を卒業し、イラストレーターとして活動。77年、小説『桃尻娘』で第29回小説現代新人賞佳作を受賞しデビュー。数々の著書を発表、受賞。93年から05年にわたり、『芸術新潮』に「ひらがな日本美術史(1～7)」(全119回、1995～2007年までに単行本全7巻を刊行)を連載。2019年没、70歳。美評、ポスター、イラスト

橋本 潔 (はしもと・きよし/1930年～)

京都生れ。1952年NHKテレビ実験放送とともに入局、テレビ美術、照明の開発に参加。56年日本最初の長編アニメ映画『白蛇伝』美術監督。谷桃子・ソリエ団『白鳥の湖』『ジゼル』ほか。各局テレビのドラマ、ドラマスペシャルの美術デザイン。日本舞台美術協会理事、井上バレエ団理事。元日本工学院専門学校演劇科講師(1989～2002)。美術監督、舞台美、版画

橋本聖太郎 (はしもと・けんたろう/1930～2021年)

東京生れ。1953年東京芸術大学彫刻科卒業(平櫛田中に師事)。54年日展入選、66年日展特選。宝仙学園短期大学助教授、73年東京学芸大学助教授、82年教授。90年日展評議員、92日展文部大臣賞。96年日本芸術院賞。日展理事・日本彫刻会理事。96年日本芸術院会員。2000年日展理事長、日本彫刻会理事長。11年文化功労者。2021年没、91歳。彫刻、美教、日展理事長、日本彫刻会理事長

橋本高昇 (はしもと・こうしょう/生誕年不詳～1985年)

福井県生れ。上京して三木宗策について修業。1925年帝展に入選、32、53、54年に特選、53年は朝倉賞も受賞。58日展会員、64年日展評議員、70年日展参与。日展会員・日本美術家連盟会員。鹿の彫刻を得意とした。東京で没。彫刻

橋本貞秀・歌川貞秀 (はしもと・さだひで/1807～没年不詳)

若年より多くの挿絵をこなし、特に馬琴の「南総里見八犬伝」終編の挿絵を英泉・重信とともに任された。風景画家としても全国の名所を訪ね歩き、優れた作品を描いた。幕末期、新開港場としてにわかに栄えた横浜を題材にした風景・風俗画である横浜絵。1868年パリ万国博覧会に出品。作画期は1826～1875年。国貞門下で幕末期に足跡を残した絵師。幕末期の絵師、挿絵、横浜絵

橋本シャーン (はしもと・シャーン/1943～2019年)

徳島県生れ。1973年新劇俳優から画家、イラストレーターに転向。1979～89年サンフランシスコに滞在。92年日本橋高島屋で「橋本シャーン・アート展」を開催。池袋の西武百貨店と銀座プラザンタでも個展。93年淡彩スケッチで新境地を開く。旅のスケッチとエッセイの仕事

を中心に、高島屋、朝日新聞、紀伊国屋書店、挿絵、ポスター、装画などの仕事多数。98年に「橋本シャーンのスケッチ教室」開設。2010年大谷焼の田村栄一郎との合作。2019年没、77歳。挿絵、イラスト、ポスター、装画

橋本小霞 (はしもと・しょうか/1813～1879年)

高知県生れ。土佐高知藩士。江戸で春木南湖、広瀬台山人の門にはいり文人画をまなぶ。のち中国の元(げん)・明(みん)の画風を折衷して一家をなした。維新後は高知藩大参事。1879年没、67歳。江戸後期-明治の絵師、文人

橋本正司 (はしもと・しょうじ/1933年～)

京都生れ。1955年京都市立美術大学彫刻科卒。54年モダンアート協会展出品、以後88年まで出品。78～92年日本金属造型作家展出品。79年「橋本正司の彫刻」出版記念展(お茶の水画廊)。85年長野野外彫刻賞。91年現代作家シリーズ(神奈川県民ホールギャラリー)。彫刻

橋本雪蕉 (はしもと・せっしょう/1802～1877年)

岩手県生れ。八重樫豊澤を師事。雪蕉の「幽霊図」が八戸の豪商、橋本昭方の目にとまり、援助を受け、画人としての道を歩む。京都の南宗画派、浦上春琴の門人となり、画技を磨く。江戸、鎌倉等に滞在し、江戸に画楼を作る。山水画が多い。小野寺周徳、八重樫豊澤と共に花巻三画人の一人。1877年没、75歳。江戸後期-明治の絵師

岩手美術研究所入所。54年自由美術家協会展初入選。63～69

年前衛美術家集団「集団N39」を結成。69年家業に専念するため、制作を一時中断。78年個展(MORIOKA 第一画廊)開催。盛岡市で没、71歳。洋画

橋本朝秀 (はしもと・ちょうしゅう/生誕年不詳～1960年)

福島県生れ。橋本重治の四男。生家は代々彫物師。1919～28年山崎朝雲に師事。25年帝展入選以来常連となり、30、31年連続特選。43年以後、文展・日展審査員。54年日展で日本芸術院賞。日展評議員・日本彫塑クラブ委員等就任。福島在県美術家協会の創立にも参画、新進の指導育成にもつとめた。東京で没。彫刻

橋本禎造 (はしもと・ていぞう/1904～1991年)

10歳で江戸風を作り始め、77年間風作りに打ち込んだ。浮世絵師歌川国芳の流れをくみ、晩年は東京都無形文化財にも指定され、世界的にも知られた。没後は後継者もなく“最後の江戸風師”と呼ばれる。著書に「江戸風三代」がある。1991年没、87歳。**江戸風師**

橋本 照 (はしもと・てる/1927～2014年)

東京生れ。喜多方中学校卒、会津地域の小学校に勤務しながら絵筆をとり、1958年会津美術展(現会津総合美術展)、福島県総合美術展、59年水彩連盟展へ出品。小学校教諭として美術教育に尽力。福島県総合美術展で運営委員。水彩連盟会津支部の支部長・顧問。新潟・西会津を経て猪苗代町を拠点に活動した水彩画家。2014年没、87年。**水彩、美教**

橋本統陽 (はしもと・とうよう/1885～1948年)

茨城県生れ。東京美術学校(彫刻)を卒業。帝展に入選したが、剣道家を志して有信館(中山博道)の門を叩いた。腕を上げた橋本は、宮内省皇宮警察、東京美術学校、成蹊高等学校、三菱等の剣道教師を務め、昭和天覧試合にも出場した。居合は中山に代わって指導するほどの腕前であった。有信館の幹事長。1948年没、63歳。**武道家、彫刻**

橋本独山 (はしもと・どくざん/1869～1938年)

新潟県生れ。少年の頃画家を志し、富岡鉄斎に師事。中年出家して峨山和尚の法を嗣ぎ1909～33年相国寺派管長。南苑、流芳、対雲等と号し、其の禅余に揮毫せる書画は夙に世の重んずるところとなつてゐた。臨済宗相国寺派前管長。1938没、70歳。**日本画、画僧**

橋本夏夫 (はしもと・なつお/1953年～)

東京生れ。1983年東京藝術大学大学院彫刻専攻修了。山村学園短期大学教授。**彫刻、美教**

蓮尾辰雄 (はすお・たつお/1904～1988年)

福岡県生れ。三池中学を経て、東京美術学校日本画科卒。はじめ松岡映丘に師事し、帝展に出品。映丘没後は前田青邨に師事し、1948年に院展に入選。院友や特待に推挙。ま

た青邨のもと、法隆寺金堂壁画や高松塚古墳壁画の模写事業に参加。1988年没、84歳。**日本画**

長谷川晶 (はせがわ・あきら/1925～2005年)

北海道生れ。北海道大学理学部臨教数学課へ進学。菊地精二に師事。卒業後、1946年函館高等女学校の数学教師。田辺三重松と出会い師事。全道展、行動展に出品。50年代後半から60年代前半頭角を現し、国内の美術展で大賞。サンパウロ・ビエンナーレ等の国際展にも招待出品。62～70年武蔵野美術大学で非常勤講師。70年からはイラストレーターを養成する講談社フェーマススクールのインストラクター。「こども美術学園」の本部指導責任者、幼児美術教育の指導者の育成や講演に長年携わった。2005年没、80歳。**洋画、美教**

長谷川久蔵 (はせがわ・きゅうぞう/1568～1593年)

石川県生れ。桃山時代の画家で、長谷川等伯の長男として父に教えを受ける。将来を囑望される豊かな天分を示したが、夭折。1553年没、25歳。**桃山時代の絵師**

長谷川清 (はせがわ・きよし/1939年～)

石川県生れ。1962年石川県金沢美術工芸大学洋画科卒。福田新生に師事。72年渡欧。73年一水会展佳作賞、75年同展有島奨励賞、92年同展北水賞。日展に91年入選、以後連続入選。一水会会員・日展会友。日本美術家連盟会員。加賀美術作家協会理事長。加賀市美術館館長。**美術館長**

長谷川玉純 (はせがわ・ぎょくじゅん/1863～1920年)

京都生れ。長谷川玉峰の長男。1887年新古美術会で天皇御用品として買い上げ。91年京都青年絵画共進会で審査員、3等賞。93年米国シカゴ万国博覧会で受賞。95年回内国勧業博覧会で褒状。96年日本絵画協会共進会で2等褒状。96年大津で小学校の図画教師。門下に疋田春湖がいる。1920年没、58歳。**日本画、美教**

長谷川玉峰 (はせがわ・ぎょくほう/1822～1879年)

1822年生れ。京都の人。画家の長谷川玉純の父。四条派の松村景文の門にまなび、花

鳥画を得意とした。1879年没、58歳。日本画

長谷川健司 (はせがわ・けんじ/1953年～)

新潟県生れ。1979年東京芸術大学美術学部油画専攻卒、81年東京芸術大学大学院修了(油画技法・材料研究室)。83～84年オーストリア政府会費留学、ウィーン国立応用美術大学給費留学、ヴォルクガング・フッター教授に師事。86年東京芸術大学大学院博士後期課程修了。87～91年同大学非常勤講師。89年～池袋コミュニティカレッジ「油絵」講座講師。2000年～多摩美術大学非常勤講師。洋画、ウィーン幻想派、美教

長谷川昂 (はせがわ・こう/1909～2012年)

千葉県生れ。1931年から佐々木大樹、内藤伸に師事。日本木彫会に参加。36年年文展鑑査展に入選、文展で特選、無鑑査、日展審査委員。37年サイゴン国際美術展で金賞。東京湾観音や釜石大観音など仏像の大作を制作した。89年文部大臣表彰(地域文化功労)。2012年没、102歳。彫刻(木彫)

長谷川光一 (はせがわ・こういち/1963年～)

愛知県生れ。2003年春陽展に入選。04年中部春陽展(名古屋市博物館)で中日賞。07年春陽展(国立新美術館)で奨励賞(同'08,'09)。14年個展(ギャラリー惣、銀座)(同'18)15年個展(ギャラリーUG、東京)(同'16'17'18)。19年個展(兵庫県立美術館原田の森ギャラリー7GATES)。青木繁記念大賞ビエンナーレ優秀賞。春陽会会員。洋画

長谷川小信・初代小信・二代目貞信 (はせがわ・このぶ I /1848～1940年)

大阪生れ。初代長谷川貞信の長男。父貞信に絵の手ほどきを受け、父の勧めで歌川芳梅に師事。1867年頃から「初代小信」を、75年から「二代目貞信」を名乗る。役者絵を主とし、京阪神の開花期の風俗や風景画、錦絵新聞を手かいた。木版のほかに銅版画の制作。1940年没、92歳。江戸末期から明治～昭和の浮世絵、版画

長谷川小信・二代 (はせがわ・このぶ II /1859～1886年)

初代長谷川貞信の門人。初代長谷川貞信の次男。二代目長谷川貞信の弟。14、15歳の頃から父に学び、兄の初代長谷川小信が1875年に二代目長谷川貞信を襲名した後、二代目小信を継いでいる。錦絵、小摺物、絵本などが残されている。1886年没、28歳。門人に中

村貞以、3代目長谷川貞信らがいる。江戸末期から明治の大阪の浮世絵、絵本

長谷川貞信・三代 (はせがわ・さだのぶ III /1881～1963年)

2代目長谷川貞信の門人で長男。父に浮世絵を学び、1894～95年3代目長谷川小信の落款で作画。31年上方郷土研究会が設立、その機関誌の郷土研究誌『上方』の表紙の大半を父の2代目長谷川貞信とともに担当。40年3代目長谷川貞信を襲名した。歌舞伎や文楽の人物画を得意としており、主に道頓堀各座の番付、役者の似顔絵集の他、立川文庫の口絵などを手掛けている。42年真珠湾攻撃を描いた戦争絵を大阪で出版。1963年没、83歳。浮世絵、口絵

長谷川貞信・初代 (はせがわ・さだのぶ I /1809～1879年)

大阪生れ。長谷川小信(このぶ)の父。上田公長(こうちょう)、貞升(ていしょう)にまなぶ。美人画、役者絵などもかいたが、風景画で知られる。作品に初代安藤広重の画風にちかひ、「東海道五十三次」「近江八景」などがある。1879年没、71歳。日本画、挿絵

長谷川清吉 (はせがわ・せいきち/1982年～)

三代目長谷川一望斎春洸の長男。2001年ロンドンチェルシー美術大学彫刻科入学。03年同大学中退。父春洸の下で鍛金と彫金の修行に入る。14、16、20年当苑にて個展。18年興福寺中金堂落慶法要にて千宗屋氏による献茶道具として皆具を制作。2023年超絶技巧、未来へ展(岐阜県現代陶芸美術館 長野県立美術館、三井記念美術館)に選抜。鍛金、彫金

長谷川雪旦 (はせがわ・せったん /1778～1843年)

江戸生れ。長谷川雪堤の父。はじめ彫刻大工だったが、雪舟の画風をしたい、長谷川等伯の末流を自称して画工となる。「江戸名所図会(ずえ)」「東都歳事記」の挿絵をかいた。晩年に法橋(ほつきょう)。1843年没、66歳。江戸後期の絵師、挿絵

長谷川雪堤 (はせがわ・せつてい /1819～1882年)

江戸生れ。長谷川雪旦(せったん)の長男。父にまなび、名所絵にすぐれた。父とともに「東都歳事記」に挿絵をかいた。1882年没、64歳。一説に1913年生れとも。江戸後期の絵師

長谷川大治郎 (はせがわ・だいじろう/1950年～)

金沢市生れ。1972年金沢美術工芸大学彫刻科卒業。はじめ二紀展に出品し、77年より

二科展に出品。81年二科展で特選。現代美術展(石川)や金沢彫刻展などに出品。金沢美術工芸大学で後進の指導にあたり、木という材質を生かした造形を進めている。2016年石川県立美術館主催「長谷川大治郎・梶本良衛木彫二人展」開催。金沢美大名誉教授。父は彫刻家長谷川八十。彫刻、木彫、美教

長谷川誠 (はせがわ・まこと/1958年～)

秋田市生れ。1981年岩手大学教育学部特設美術科卒。盛岡大学短期大学部に勤務。82年盛岡で個展。以後東京、盛岡で個展を行う。2004年「シリーズX[岩手の現代作家]長谷川誠・菅原清美」展(萬鉄五郎記念美術館)を開催。12年個展「白い森の足跡」(岩手町立石神の丘美術館)を開催。洋画、美教

50

長谷川宗広 (はせがわ・むねひろ/生没年不詳)

上方の浮世絵師。嘉永元～慶応3に活躍。長谷川貞信門人か。中判役者絵を描く。江戸後期の浮世絵

長谷川八十 (はせがわ・やそ/1909～1982年)

金沢市生れ。1935年東京美術学校工芸科鑄金部卒、高村豊周に師事。30年二科展に入選、35年特待、38年推奨。41年退会。53年より二紀会に出品。45年高光一也らとともに石川県美術文化協会、46年金沢美術工芸専門学校の設立に加わる。金沢美術工芸大学を定年で退官するまで教授。金沢市文化賞受賞。1982年没、73歳。彫刻、美教

長谷川陽三 (はせがわ・ようぞう/1931～2006年)

福岡県生れ。1949年飯塚商業学校卒、嘉穂町の小学校に図画教師。89年まで山田市や福岡市の小中学校の美術教師。52年二科展に入選し、同展で受賞。60年二科展で特選、93年内閣総理大臣賞。72年二科会々員、のち理事。62年福岡県美術協会会員、76年福岡県美術協会展で県知事賞。同協会では幹事、理事、理事長を歴任。2006年没、75歳。美教、洋画、版画、水彩

長谷川義起 (はせがわ・よしおき/1892～1974年)

富山県生れ。1915年東京美術学校彫刻科本科卒。20年帝展に入選以来官展に出品

し、30年帝展で推薦となり、以後無鑑査。戦後は日展で審査員、評議員、日本彫塑クラブ理事、日本陶彫会委員長、北陽美術会理事などを歴任した。74年紫綬褒章。作品に『四ツ(梅ヶ谷、常陸山)』『両構(力士)』『大鵬像』などがある。1974年没、82歳。彫刻、彫塑

畠山一清 (はたけやま・いっせい/1881～1971年)

石川県出身。1906年(明治39)東京帝国大学工科大学機械工学科卒業。20年荏原(えばら)製作所を設立し、専務に就任。34年(昭和9)社長、62年(昭和37)会長となった。事業のかたわら、即翁と号して能楽と茶の湯を嗜み、長年にわたり美術品の蒐集に努めました。戦後、国宝の「林檎花図」「煙寺晚鐘図」をはじめ、大名茶人松平不昧の茶道具や加賀前田家伝来の能装束など、今日の畠山記念館の中核をなす美術品の蒐集がおこなわれました。尾形光琳、尾形乾山、酒井抱一琳派の代表作家の蒐集も。昭和39年10月に財団法人畠山記念館が開館しました。1971年没、90歳。コレクター

畠山錦成 (はたけやま・きんせい/1897～1995年)

金沢市生る。1921年東京美術学校日本画科卒。18年文展入選。結城素明に師事。帝展で入選を重ね、28、29年帝展で特選。帝展で後無鑑査出品。36年文展招待展に出品。37～44年東京女子美術専門学校の講師。38年日本画院の創立に参加。金沢に疎開し、54～64年金沢美術工芸専門学校(現・金沢市立美術工芸大学)の教授。60年回新日展で審査員。1995年没、98歳。日本画、美教

畠山三朗の油絵に興味を持ち絵筆をとる。1971年陸前高田市の美術団体、彩光会に入会。75年新制作展に入選。行木正義に師事。83年回新制作展で新作家賞。1984年猪熊弦一郎の勧めにより、グランドキャニオンにスケッチ旅行。95年「欧州美術クラブ現代日本美術選抜20人展」(パリ、第6区区役所)に出品。同区役所に作品が収蔵。2001年「シリーズVIII[岩手の現代作家]畠山孝一・五十嵐彰」展(萬鉄五郎記念美術館)を開催。2020年没、87歳。洋画

畠山三朗 (はたけやま・さびろう/1903～1933年)

岩手県生れ。1925年上京し岡田三郎助の門下生。新境地を目指しパラオを訪れた。帰国後、東京に念願のアトリエを建た。エコール・ド・パリやアメリカン・シーンの時代に、南の島に憧れた多くの日本人画家がミクロネシアの島々(南洋群島)に取材。1933年没、31歳。洋画

畠山直哉 (はたけやま・ないおや/1958年～)

岩手県生れ。筑波大学芸術専門学群で大辻清司に師事。1984年同大学院芸術研究科修士課程修了。自然・都市・写真のかかわり合いに主眼をおいた、一連の作品を制作。国内外の数々の個展・グループ展に参加。作品は以下に収蔵。国立国際美術館(大阪)、東京国立近代美術館、東京都写真美術館、ヒューストン美術館、イェール大学アート・ギャラリー(ニューヘブレン)、スイス写真財団(ヴァンタートゥーア)、ヨーロッパ写真館(パリ)、ヴィクトリア・アンド・アルバート美術館(ロンドン)。写真

畑 尚治 (はた・しょうじ/1931～2020年)

神戸市生れ。終戦時、白山市に転居。1965年二紀展初入選。山口操助、吉田富士夫に師事。68年二紀展褒状。70年佳作。71年同人。98年会員推挙。2008年二紀会委員推挙。ポップな顔を画面に配し、独自の曼荼羅を描き続けている。2020年没、89歳。洋画

畑 仙齡 (はた・せんれい/1865～1929年)

京都生れ。岸竹堂のち鈴木百年に師事。今尾景年、久保田米僊、鈴木松年とともに百年門下の四天王。日本画会幹事。富山県立工芸学校に赴任、また彩雲画塾を設けて後進の育成にあたる。1929年没、63歳。日本画

幡 恒春 (はた・つねはる/1883～1944年)

1883年生れ。1906年大阪朝日新聞に入り、16年間挿絵を担当した。小説家村上浪六の挿絵に独自の筆致を認められていた。1944年没、62歳。挿絵

畑中 優 (はたなか・ゆう/1950年～)

岐阜生れ。新潟大学美術科卒 東京芸術大学大学院修了。1982年行動美術協会展で新人賞。83年行動美術協会展で安田火災財団奨励賞。(98年同展出品作文化庁買上)。86年個展(岐阜県美術館)、行動美術協会展で行動美術賞。94年銀座大賞展で大賞。95年海の大賞展で銅賞、87年海の大賞展で大賞。96年多摩秀作美術展で大賞。98年行動美術協会展出品/文化庁買上。2007年小磯良平大賞展で優秀賞。09年個展ゆう画廊。洋画

畑野織蔵 (はたの・おりぞう/1908～1992年)

神奈川県生れ。神奈川県立工業学校図案科に学び、1930年代に畦地梅太郎を知り、木版画の制作を始める。35年NOVA美術協会展に出品、国画会展入選。38年「造型版画協会」に出品、新版画家賞。小野忠重の「畑野織蔵君の版画」と「口絵の木版画」に[無署名・榎崎宗重か]が掲載。39年造型版画協会会員。39年新興美術家協会展に入選。戦後は日本美術会展に出品。1992年没、84歳。版画

八野田博 (はちのだ・ひろし/1921～1993年)

石川県生れ。1942年石川県師範学校本科卒、以後76年まで七尾市内の小中学校に勤務し、七尾市の美術振興につくす。57年一水会展初入選、以後毎回入選。同32年日展初入選。中村琢二に師事。84、90年特選。生活感を感じる人物を写実に徹して描き続けた。1993年没、72歳。洋画、美教

八田古秀 (はった・こしゅう/1760～1822年)

京都生れ。円山応挙の門人で、花鳥人物画をよくし、法橋(ほつきょう)となった。一説に村上東洲の門人ともいう。1822年没、63歳。作品に「古秀画譜」。江戸後期の絵師

八田 隆 (はった・たかし/1952年～)

鹿児島市生れ。多摩美術大学大学院彫刻専攻修了1998年鹿児島県庁への作品制作で4ヶ月鹿児島へ帰省したことを機に鹿児島に拠点を移す。横浜ビエンナーレ横浜彫刻展奨励賞、第14回神戸須磨離宮公園現代彫刻展 神奈川県立近代美術館賞。出展・設置歴:95～2017年宮崎国際現代彫刻・空港展、98年「ブラック・スパイラル」(鹿児島県庁舎庭園・鹿児島市)、2000年「プライベート・ガーデン」(霧島アートの森湧水町)、01年モニュメント「石景」(倉吉パークスクエア 鳥取県倉吉市)、04年九州新幹線開業記念野外彫刻。04年鹿児島県歴史資料センター黎明館前庭。15年 EXPO RAINBOW in SAKURAJIMA (レインボー桜島鹿児島市)、彫刻

八田 哲 (はった・てつ/1943年～)

京都生れ。1961年京都市立日吉ヶ丘高校日本画科卒。73年青塔社に入塾し、池田遙邨に師事。75年日展入選。84年特選、会友。85年個展(京都、三条祇園画廊)開催。8

6年日展出品をやめ、無所属。87年横の会展に招待出品(88年会員、93年解散)。日本画

服部有恒 (はっとり・ありつね/1890～1957年)

名古屋市生れ。1915年東京美術学校日本画科卒。松岡映丘に師事。1921年帝展で入選。24年6回展、28年同9回展で特選。その後も官展に歴史画を出品、新文展、日展で審査員。35年松岡映丘を盟主とする国画院結成に参加。36年武蔵野美術学校教授。38年日本画院を設立、同人として出品を続けた。1957年没、67歳。日本画、美教

服部五老 (はっとり・ごろう/1869～1930年)

山形県生れ。1869年旧庄内藩士・服部大策の長男。絵の修業のため京都に移住、田能村直入に入門、田能村一門の高弟。日本南画院の同人。1920年自宅に甥の齋藤真成が移住。橋本関雪や竹内栖鳳と並び称される程になる。酒におぼれ豪遊し乱れた生活を送る様になる。1930年没、62歳。南画

服部雪斎 (はっとり・せつさい/1807～没年不詳)

1807年生れ。谷文晁門下で田安家の家臣遠坂文雍の弟子。没年は不明。作品に記された年代から1887年までは生存が確認。『目八譜』(武蔵石壽編)、『半魚譜』(森沢園編)、『千蟲譜』(栗本丹州編)、『有用植物図説』(田中芳男・小野職憲編)幕末から明治中期にかけて関根雲停等とともに活躍。幕末-明治期の博物画

服部仁郎 (はっとり・にろう/1895～1966年)

徳島県生れ。父とともに鳥養家(元京都大学総長・鳥養利三郎の実家)に寄寓。父は「鬼貞」と呼ばれる鬼瓦など細工物をつくる秀れた職人。志を立て東京美術学校彫刻科に入学、苦学の末、1926年30歳を過ぎてから卒業。第5回帝展、文展、日展に入選・特選を繰り返す、無鑑査、鑑査員。弟子に宮本光庸がいる。晩年は木彫に進み、救世観音、如意輪観音などの名作を生んだ。1966年没、71歳。彫塑、木彫

服部波山 (はっとり・はざん/1827～1894年)

江戸に住し、鈴木鷺湖に従い、のち一家を成した。信濃や紀伊などに旅をして自然を写生。大沼枕山、中根半嶺らと交遊した。1894年没、67歳。幕末から明治の絵師

服部冬樹・ハットリフユキ (はっとり・ふゆき/1955年～)

札幌市生れ。1978年日本大学芸術学部写真学科卒。77年在学中に初の個展を開催(日本大学芸術学部図書館ギャラリー)1980年代からは主としてツァイト・フォト・サロンなどで発表活動を続ける。チェコスロヴァキアの写真家ヨゼフ・ステクの静物写真から影響を受け、花や花瓶を題材として制作。その後ヌード作品のシリーズを手がける。「快樂やエロティシズムを漂わせる肉体」という別の対象に移行しても、人体を「静物」として捉えるアプローチは、一貫している。写真

花井青巖 (はなゐ・せいがん/生没年不詳)

愛知県生れ、高森碎巖に師事、20世紀のなかまに活躍。特に仏画を得意とした画家。「知られざる巨匠」とも言われています。日本画

花井祐介 (はなゐ・ゆうすけ/1978年～)

神奈川県生れ。50～60年代のカウンターカルチャーの影響を色濃く受けた作風で、日本の美的感覚とアメリカのレトロなイラストレーションを融合した独自のスタイルを形成。米、仏、豪、伯、台、英で作品を発表し、VANS、NIXON、BEAMSなどへのアートワークの提供。2006年ザ・サーフ・ギャラリー(米、CA。)で展示。主な個展に「IT WILL BE ALL RIGHT」(GALLERY TARGET、東京、2017)。09年ブラジルの Santos Surf Museum にて収蔵。現代美術、版画、洋画、立体、インスタ

花崎宏志 (はなさき・ひろし/1936～2023年?)

大分県生れ。中津南高校で版画家・武田由平に学ぶ。大分大学学芸学部卒業後、県内で美術教員。1960年より大分県美術展、中津美術協会展に作品を発表。65年より白日会展、日本版画協会展に出品を始め、69年日本版画会新人賞、白日会六光社賞、75年白日会会員。78年日本版画協会会員。98年日本版画会記念展で文部大臣奨励賞。99年日本版画会審査員。2023年?没、87歳。美教、版画

羽根万象 (はね・ばんしょう/1919～2011年)

石川県生れ。伊東深水・杉山寧に師事。1930年上京し、朗峯画塾に学ぶ。47年日展入

選、60、62年特選、65年菊華賞。73年新星路会展を主宰。84年鎌倉美術家協会代表。89年能都町に羽根万象美術館開館。日展評議員。2011年没、92歳。日本画、個人美術館

端名 清 (はな・きよし/1932～2011年)

石川県生れ。1955年金沢大学教育学部卒。57年水彩連盟展、一水会展初入選。60年日展入選、荒谷直之介に師事。63年一水会展佳作賞、83年会員優賞。エーゲ海を中心とする南ヨーロッパの風景を描く。一水会常務委員、水彩連盟会員。2008年石川県文化功労者賞。2011年没、79歳。水彩

花輪和一 (はなわ・かずいち/1947年～)

埼玉県生れ。1970年雑誌や書籍のイラストレーターとして活躍し始める。71年『月刊漫画ガロ』(青林堂)7月号掲載の「かんのむし」で漫画家としてデビュー。74年演劇実験室◎天井桟敷「盲人書簡上海篇」のポスターを手がける。映画「田園に死す」(脚本、監督・寺山修司)の意匠、ポスターデザインを担当する。77年『花輪和一作品集』(青林堂)刊行。85年単行本『赤七夜』(青林堂)刊行。98年『マンガの鬼 AX アックス』(青林工藝舎)創刊。2000年『刑務所の中』(青林工藝舎)刊行。02年に映画化(監督・崔洋一)。漫画、イラスト、ポスター

埴原久和代 (はこわら・くわよ/1879～1936年)

山梨県生れ。女子美術学校卒業後、二科会展に出品し、女流画家として最初の二科会々友であった。元駐米大使埴原正直の妹である。東京で没、58歳。洋画

羽石光志 (はねいし・こうじ/1903～1988年)

栃木県生れ。1919年川端画学校に入学。33年帝展で入選。36年安田靱彦に師事。41年再興院展で入選。44～51年年東京美術学校講師。64年から法隆寺金堂壁画などの模写事業に参加。68年回再興院展で内閣総理大臣賞。68～78年名古屋造形芸術短期大学顧問。東京で没、85歳。日本画、美教

波々 伯部金洲・奥村捨四郎 (はまかべ・きんしゅう/1862～1930年)

明治から大正にかけて、三間印刷の画工として、三越呉服店の美人画ポスターを多数手がける。姓のヨミは諸説あり。1930年没、58歳。石版、ポスター

馬場 忍 (ばば・しのぶ/1937年～)

台湾生れ。1956年佐賀大学教育学部特設美術科入学。佐賀・長崎・福岡県展、西日本美術展、佐世保洋画会展、時事美展等に受賞、入選。60年佐賀大学教育学部特設美術科卒。長崎県展・西日本美術展、西日本新人秀作展、朝日油絵コンクール展、長崎非具象作家展、新協美術会等に出品受賞、入選。新協美術会会員、長崎県美術協会会員。69年アルバカーキー市(米)の名誉市民賞。海外での個展3回。長崎県展審査員、実行委員、佐世保市美術振興会常任委員。洋画

馬場のぼる (ばば・のぼる/1927～2001年)

青森県出身。戦後職を転々とするが、絵勉強を始め、映画館などのポスターや看板を描く。1948年赤本漫画『怪盗カッポレ団』を出版。小学館の「小学一年生」のイラストを担当。50年集英社の「おもしろブック」で野球漫画『ポストくん』を連載し、児童漫画家。54年連載『ブウタン』で第1回小学館漫画賞。漫画から絵本にシフト、64年『きつね森の山男』で産経児童出版文化賞。67年とらねこ大将と10ぴきの仲間の愉快な冒険物語『11ぴきのねこ』をこぐま社より刊行し、手塚治虫、福井英一とともに「児童漫画界の三羽ガラス」と称された。「11ぴきのねこ」シリーズ全6巻は250万部を越すロングセラー。外国語にも翻訳され、'85「11ぴきのねこマラソン大会」がボローニャ国際児童図書展エルバ大賞。日本漫画家協会賞文部大臣賞。2001年没、74歳。漫画、絵本、イラスト、童話作家、ポスター

濱口富治 (はまぐち・とみじ/1922～2009年)

高知県生れ。1946年より山脇信徳に師事。53年美術文化会員。松沢宥らと共にアルファ一芸術陣を結成、松村画廊にて発表。滝口修造氏と親交を結ぶ。57年新象作家協会大会賞、会員。60年前衛美術団体の土佐派を結成。82年高知県文化賞、97年高知県展理事長。2009年没、87歳。洋画、前衛美術団体土佐派

浜島月濤 (はまじま・げつとう/1812～1892年)

愛知県生れ。知多を巡遊していた張月樵に師事。月樵没後は高弟の貝谷采堂に南北合法の画法を学んだ。采堂没後は家督を継ぎ庄屋となり、職業画家をやめ多くの文人墨客と交流し、多くの粉本・書画帖を残している。1892年没、81歳。江戸後期-明治の絵師、粉本、書

画

濱田嘉代 (はまだ・かよ/1919～2006年)

神奈川県生れ。二紀展第1回女流画家奨励佐伯賞。二紀展同人努力賞。二紀展鍋井賞。二紀展同人賞。二紀会会員。2006年没、87歳。洋画

浜田杏堂 (はまだ・きょうどう/1766～1815年)

大坂れ。医師の浜田氏の養子、名医としてきこえた。画を福原五岳にまなび、のち元・明時代の中国の画をまねて山水人物花鳥をこのんでえがいた。行書も得意とした。1815年没、49歳。江戸後期の医師、絵師、大坂南画

濱出青松 (はまで・せいしろう/1912～1989年)

石川県生れ。1936年帝国美術学校卒、川端龍子に師事。31年第3回青龍展に入選し、以後青龍展に出品して会友。58、59年同展で奨励賞。青龍社解散後は日府展に参加し理事をつとめた。67年日府展日府賞。1989年没、77歳。日本画

濱野彰親 (はまの・あきちか/1926～2020年)

東京生れ。48年創設された「日本出版美術家連盟」に最年少で参加。若手挿絵画家たちと「挿美会」を結成し『さしる』を創刊するなど挿絵の発展に尽力。68年挿絵画家として不動の人気を確立。松本清張「黒革の手帖」、山崎豊子「大地の子」他、火野葦平、川上宗薫、菊村到、近藤啓太郎、黒岩重吾、三好徹、森村誠一、深田祐介、山村美紗、ねじめ正一、逢坂剛、津本陽など作品の挿絵を手がた。2001年日本出版美術家連盟の会長。2020年没、94歳。挿絵

濱野年宏 (はまのとしひろ/1937年～)

高松市生れ。1961年多摩美術大学洋画科卒。91年欧州の主要な都市で個展開催。92年セビリア万博日本館貴賓室に作品招聘。99年スロヴェニア国立リュブリアナ大学より授会名誉理事。2002年ポーランド共和国文化功労賞。文部科学大臣地域文化功労者表彰。07年パリ・ユネスコ本部にて個展開催。08年山陽新聞社より文化功労賞。日本画、洋画、版画、壁画、彫刻

早川幾忠 (はやかわ・いくただ/1897～1983年)

東京生れ。「アララギ」の島木赤彦らの指導を受け、歌壇にデビュー。1914年松倉米吉らと「行路詩社」を結成、28年「高嶺」を創刊し主宰。48年「高嶺」を二宮冬鳥にゆずる。50年から京都に移った。短歌と同時に絵、書、篆刻もよくした。錦心流琵琶も免許皆伝で、多才な文人として知られた。国語問題協議理事。著書に歌集「紫塵集」のほか「頭註古今和歌集」「中院歌論」「実感的国語論」「七十有七年」「八十有八年」などがある。1983年没、86歳。歌人、篆刻、画家(日本画)

林 清納 (はやし・きよの/1936年～)

富山県生れ。1960年金沢美術工芸大学油絵科卒。高光一也に師事。創元展に出品、60年創元会次賞。安井賞展入選(以後14回入選)。65年在外研修員として1年間渡欧。61年創元会会員、68年審査員。その後立軌会、風土会に参加し、中心作家として活躍。大画面にカラフルな色彩で女性群像を描く「ナザレの女」シリーズ、「インドの女」シリーズがよく知られる。洋画

林 鼓浪 (はやし・ころろう/1887～1965年)

徳島市生れ。1907年神戸・大阪において演劇・活動写真関係の手伝い。守住貫魚の高弟である森魚淵(1830-1909)に絵画を教わり、郷土研究を吉田東洲(1856-1916)に教わった。1910年眉山保勝会の役員として眉山公園の絵画を描く。17年芸術写真愛好家達とともに「徳島ベスト会」を創立。30年阿波郷土研究会を創立し、30年光慶図書館光読会を創立。30年徳島市史談会会員、徳島県文化財保護委員(後に徳島県文化財専門委員)。社会教育功労者として、文化財功労者として表彰。徳島市人間文化財(第一号)に指定される。1965年没、78歳。日本画、日本の郷土史家

林 司馬 (はやし・しめ/1906～1985年)

京都生れ。土田麦僊の山南塾にまなぶ。1927年京都市立絵画専門学校の卒業制作「山茶花」が国画創作協会展で入選。入江波光の指導で古画の模写をはじめ。36年柏舟社を結成、公募展を拒否してグループ展出品をつづけた。42年から法隆寺金堂壁画、大覚寺襖絵などの模写に専念。63年京都市立芸大教授。1985年没、79歳。日本画、美教

林 正三 (はやし・しょうぞう/1893～1947 年)

水戸市生れ。1914、15年光風会展に入選。17年東京美術学校卒、中学校の同窓生橋孝三郎が営む水戸の農場に暮らしていた林は、24年菊池五郎・寺門幸蔵らと白牙会を創立。25～32年水戸市大成女学校図画教員。29年年愛郷会に参加(31年愛郷塾副塾長)。32年5・15事件に参画した愛郷塾のメンバーとして逮捕され、出所後は笠間市に農場を拓いた。1947年没、54歳。洋画、美教

林 忠彦 (はやし・ただひこ/1918～1990 年)

山口県生れ。1938年オリエンタル写真学校卒。42年華北弘報写真協会を結成し、報道カメラマンとして北京へ渡る。71年『日本の作家』(主婦と生活社、1971年)で日本写真協会年度賞。『カストリ時代』(朝日ソノラマ、1980年)『日本の家元』(集英社、1983年)『茶室』(婦人画報社、1986年)『東海道』(集英社、1990年)写真集を発表。84年紫綬褒章。88年勲四等旭日小綬章。1990年没、72歳。写真

林 半窓 (はやし・はんそう/1822～1906 年)

徳島県生れ。天保7年から10年間、守住貫魚について住吉派を学んだ。元藩の掃除坊主。徳島助任の人。1884年の内国絵画共進会に出品。晩年は表具屋をしていたという。1906年没、85歳。江戸後期-明治期の絵師

林 美雲 (はやし・びうん/1862～1912 年)

江戸生れ。高村東雲、高村光雲に師事。1895年京都市美術工芸学校教諭、98年東京美術学校助教授。1900年東京彫工会競技会やパリ万国博で受賞。近代性をとり入れた木彫を制作。1912年没、51歳。彫刻、美教

林 闔苑 (はやし・ろうえん(りょうえん)/生没年不詳)

大坂生れ?幼少より画を好み、長じて池大雅の高弟・福原五岳に師事する。このときの同門・黒田綾山と画友となる。東東洋や木村兼葭堂、維明周奎などと交友。1773年から4年間、維明に請われて京都相国寺にある狩野孝信の障屏画修復に携わり、寺院に収蔵される名画を実見し研究。また堺の豪商の収蔵する中国・明の画を臨模して画業を研鑽。「唐

画師」として活躍。闔苑の中国志向が窺える。40歳未満で夭折。江戸中期の絵師、唐画師

100

林 和一 (はやし・わいち/1951 年～)

静岡県生れ。1974年金沢市立美術工芸大学日本画科卒。75年日本版画協会展新人賞。春陽会展新人賞。77年静岡県芸術祭展芸術祭賞。1979年ブラッドフォード・ビエンナーレ受賞(英国)。2007年春陽会岡鹿之助賞。春陽会会員・浜松美術協会会員。木版画、陶磁器、水墨画を中心に制作、展覧会、個展等発表。版画、水墨、陶芸

早田三四郎 (はやた・さんしろう/生没年不詳)

金沢の士族の家柄に生れ、初めは南画を学び、東京に出て五姓田義松らに洋画を学び、1893年に帰郷して活躍した、石川県で初のプロの洋画家。渡米してホプキンス美術学校で学び、その後渡欧して長くヨーロッパで13年間活躍。2023年横山家 16代隆昭氏より寄贈の横山隆平肖像(明治27年、早田三四郎・画、油彩)が小松市に寄贈。洋画

早田楽斎 (はやた・らくさい/1872～1946 年)

金沢市生れ。幼時青山観水に南画を学ぶ。1886年石川県専門学校に入学、得田耕に才能を認められ、得田について洋画を学ぶ。90年上京して研鑽を積んだのち、1901年よりアメリカ・フランス・イギリスなどの各都市で個展を開いたほか、背景画(パノラマ画)を描き、13年帰国、東京において動物画やパノラマ画の大家として活躍する。1946年没、74歳。洋画、パノラマ画

濱谷 浩 (はやま・ひろし/1915～1999 年)

東京生れ。1933年二水実用航空研究所に入所、航空写真家として活動。同年オリエンタル写真工業株式会社に就職。37年同社退職。兄・田中雅夫と「銀工房」を設立。38年土門拳らと「青年写真報道研究会」を結成、瀧口修造を中心とした「前衛写真協会」設立に参加。41年東方社に入社。太平洋通信社の嘱託社員として日本の文化人を取材。60年寄稿写真家。1999年没、84歳。写真

速水史朗 (はやみ・しろう/1927 年～)

香川県生れ。1949年徳島大学工学部機械工学科卒、中学校教師を務めながら独学で彫

刻を始める。53年二紀展に出品、以後第20回展まで毎年彫刻を出品。73年彫刻の森美術館大賞展で優秀賞。74年神戸須磨離宮公園現代彫刻展で須磨離宮公園賞。76年同展にて東京都美術館賞。77年現代日本彫刻展で宇部市野外彫刻美術館賞。80年神戸須磨離宮公園現代彫刻展で東京国立近代美術館賞。81年びわこ現代彫刻展およびヘンリー・ムーア大賞展で優秀賞。91年香川県文化功労者。彫刻

浜田杏堂 (はまだ・きょうどう/1766～1815年)

大坂の人。医師の浜田氏の養子となり、名医としてきこえた。画を福原五岳(ごがく)にまなび、のち元(げん)・明(みん)(中国)の画をまねて山水人物花鳥をこのんでえがいた。行書も得意とした。1815年没、49歳。江戸後期の絵師、医師

濱田増治 (はまだ・ますじ/1892～1938年)

大阪生れ。1914年東京美術学校に彫刻を学び、在学中より雑誌に挿絵漫画を執筆。16年頃同士と赤鳥社を組織して絵画を発表し、又太平洋画会に抽象表現主義の作品を出品。19年コードモ雑誌の編集主任、又会社に入り、広告図案、装飾設計等。21年図案事務所を経営、後新聞社に入り漫画挿絵を担当、又美術批評を執筆。26年年商業美術家協会を有志と共に創立し、その創作展を逐年東京府美術館に開催。28年現代商業美術全集の編集委員長、二年を費して二十四巻を完成、29年銀座に商業美術研究所を創立。著述は商業美術総論(アルス発行)、商業美術教本上下二巻(富山房発行)、商業美術教科書上下二巻(富山房発行)、商業美術大意及び読本(高陽書院発行)等がある。1938年没、46歳。デザイン(商業美術)、洋画、彫刻、挿絵、図案、商業美術研究所

浜西勝則 (はまにし・かつのり/1949年～)

北海道生れ。1973年東海大学教養学部芸術学科を卒業。82年グレンヘン国際色彩版画トリエンナーレで最高賞。多くの国際版画展で受賞を重ねる。1989年カナダ交換芸術家としてカナダに滞在後には、ニューヨークなど、海外でも個展を開催した。版画

濱野年宏 (はまの・としひろ/1937年～)

高松市生れ。1961年多摩美術大学洋画科卒。91年欧州の主要な都市で個展開催。92年セビリア万博日本館貴賓室に作品招聘。99年スロヴェニア国立リュブリアナ大学より教授

会名誉理事。2002年ポーランド共和国文化功労賞。文部科学大臣地域文化功労者表彰。2007年パリ・ユネスコ本部にて個展。08年山陽新聞社より文化功労賞。洋画

濱谷白雨 (はまや・はくう/1886～1965年)

富山県生れ。1910年東京美術学校日本画科卒。13年文部省美術展覧会で褒賞。帝国絵画協会、国民美術協会、東台画会等の会員。1965年没、79歳。日本画

濱谷 浩 (はまや・ひろし/1915～1999年)

東京生れ。桑原甲子雄とは幼馴染。1933年関東商業学校卒業後、オリエンタル写真工業入社。37年フリーランスの写真家。実兄・田中雅夫と共に「銀工房」を開設。40年より民衆の生活に注目して新潟県桑取谷を撮影。写真雑誌推薦作家として満洲取材。43年に太平洋通信社のカメラマン。戦後はフリーランス。60年国際的な写真家集団マグナム・フォトに参加。毎日出版文化賞(1958年)、日本芸術大賞(1981年)、国際写真センター巨匠賞(アメリカ、1986年)、ハッセルブラット国際写真賞(スウェーデン、1987年)日本写真協会功労賞(1988年)ほか。著書は、『裏日本』(新潮社、1957年)、『怒りと悲しみの記録』(河出書房新社、1960年)、多数。1999年没、84歳。写真

早川俊二 (はやかわ・しゅんじ/1950年～)

長野県生れ。1973年創形美術学校卒。74年渡仏、74～81年パリ国立美術学校入学。彫刻家Marcel・Giliに師事。92年アスクエア神田ギャラリーで個展。洋画、彫刻

早川良雄 (はやかわ・よしお/1917～2009年)

大阪生れ。1936年大阪市立工芸学校図案科卒。37年三越百貨店大阪支店に入社。ショーウィンドーのディスプレイを担当。51年瑛九を中心にデモクラート美術家協会が結成され、泉茂らと参加。日本宣伝美術会を創設し、中央委員。53～70年京都市立美術大学の非常勤講師。54年早川良雄デザイン事務所(大阪・心斎橋)を開設。55年毎日産業デザイン賞で作品賞。国際グラフィック・デザイナー連盟初の日本人会員。朝日広告賞の審査委員。57年ADC賞で銅賞、63年会員。58年日宣美展で会員賞。81年講談社出版文化賞でブック・デザイン賞。88年勲四等旭日小綬章受章。2010年早川良雄“顔”と“形状”-(東京国立近代美術館)。11年早川良雄ポスター展(国立国際美術館)。2009年没、92歳。版画、グラフィック

ク・デザイン、デモクラ、ポスター

林 明子 (はやし・あきこ/1945年～)

東京生れ。横浜国立大学教育学部美術科卒。『こんとあき』の作者、『はじめてのおつかい』の共著者として知られる。『魔女の宅急便』挿絵。1973年『かみひこうき』を出版。福音館書店の月刊絵本『こどものとも』に、筒井頼子との共作で『はじめてのおつかい』(1976年)。83年『おふろだいすき』サンケイ児童出版文化賞美術賞。2013年新刊『ひよこさん』(征矢清・作)を、月刊『こどものとも 0.1.2.』(2013年3月号)より出版。絵本、挿絵

林 雲溪 (はやし・うんけい/1903～1990年)

徳島県生れ。四国八十八箇所藤井寺本堂の天井絵には雲溪の描いた雲龍が描かれている。現在、鴨島町の吉野川市立森山小学校に雲溪の記念碑が建てられている。1984年に南画に優れた功績を挙げた第一人者として徳島県文化賞。1990年没、87歳。日本画、南画

林 鼓浪 (はやし・ころう/1887～1965年)

徳島県生れ。「阿波踊り」の名付け親であり。1907年神戸・大阪において演劇・活動写真関係の手伝い。森魚淵(1830-1909)に絵画を教わった。1910年眉山公園の絵画を描く。17年芸術写真愛好家達とともに「徳島ベスト会」を創立。27年光慶図書館(現・徳島県立図書館)にて展覧会。30年阿波郷土研究会を創立し、30年光慶図書館光誦会を創立。52年徳島県教育功労者、60年文化財功労者。64年丸新百貨店ギャラリーにて作品展を開く。65年徳島市から徳島市人間文化財に指定。1965年没、78歳。徳島市人間文化財指定。日本画

林 正三 (はやし・しょうぞう/1893～1947年)

水戸市生れ。1914、15年光風会展に入選。17年年東京美術学校西洋画科卒。24年菊池五郎・寺門幸蔵と水戸に「白牙会」結成。25～32年水戸市大成女学校図画教員。29年愛郷会に参加(31年愛郷塾副塾長)。32年5・15事件に参画した愛郷塾のメンバーとして逮捕され、出所後は笠間市に農場を拓いた。1947年没、54歳。洋画、美教

林 潤一 (はやし・じゅんいち/1943年～)

京都生れ。1968年京都市立美術大学専攻科卒。69年日本画総合展出品作を京都府買

い上げ。75年シェル美術展賞展受賞。77年京展市長賞。84年横の会展出品、嵯峨美術短期大学教授。日本画、美教

林 棕林 (はやし・そうりん/1814～1898年)

三重県生れ。上部苗齋(うわべせっさい)にまなぶ。江戸で大老井伊直亮(なおあき)の知遇をえて谷文晁、渡辺崋山らと交遊。門人に磯部百鱗らがいる。1898年没、85歳。江戸後期-明治の絵師

林 武史 (はやし・たけし/1956年～)

岐阜県生まれ。東京藝術大学大学院美術研究科修了1998-99年文部省在外研究員としてパリに滞在し、のち東京藝術大学で教授。2012年には「第六回円空大賞展 大地と共鳴-創造の原風景」で円空賞。林の彫刻の特徴は、複数の石を配置して抽象的な空間を創造することにあつ。さまざまな形状の石を複数用いることで、石と石、さらには石と空間の関係性を追求するアーティストです。彫刻

林 稚麿・松林山人 (はやし・ちせん/生誕年不詳～1792年)

長崎の人。熊代熊斐(くましろゆうひ)にまなぶ。京都から大坂をへて江戸で名をあげる。沈南蘋(しんなんびん)流の花鳥画をよくした。1792年没。号は松林山人。江戸中期-後期の絵師

林 美雲 (はやし・びうん/1862～1912年)

江戸生れ。高村東雲、高村光雲に師事。1895年京都市美術工芸学校教諭、1908年東京美術学校助教授。33年東京彫工会競技会やパリ万国博で受賞。近代性をとり入れた木彫を制作。1912年没、51歳。彫刻、美教

林 文穂 (はやし・ぶんどう/1882～1966年)

京都生れ。山本春挙に師事。春挙の主催する早苗会の中心メンバーとして活躍。1914年文展で入選。井口華邨、池田桂仙らと日本自由画壇を結成。1966年没、84歳。日本画

林 義明 (はやし・よしあき/1890～1973年)

和歌山県生れ。1908年和歌山師範学校本科入学。14年東京美術学校師範科に主席で入学し、17年、同校を卒業。東京池袋の成蹊中学校、宇都宮中学校を経て、20年「期待される指導者」として三重県立津中学校で37年間勤務。美術教育者として果たした役割は小さくない。絵を描く技術を教えられたという人は少数と言ってよい。「絵を制作する心を学んだ」とか「偉大なる人格者に接した」というような言葉を誰もが述べている。1978年没、84歳。美教、水彩、洋画

林 閔苑 (はやし・ろうえん/生没年不詳)

大坂の人。福原五岳にまなび、堺(さかい)で中国の明(みん)・清(しん)画を研究。文人画家で人物花鳥画にすぐれ、とくに美人画を得意とした。天明(1781-89)ごろ40歳未満で没。江戸中期の絵師

早田三四郎・楽斎 (はやた・さんしろう/1872～1946年)

金沢市生れ。青山観水に入門して南画を学び、1886年石川県専門学校に入学、得田耕に師事。90年上京し五姓田義松・小山正太郎らから洋画の指導を受けた。93年帰郷し、専業の洋画家として活躍。アメリカに渡りホプキンス美術学校で学び、各地で個展を開催、ヨーロッパに渡り、背景画を多数手がけたほか、多くの弟子を指導、活躍。1913年帰国。背景画の大家として内外の博覧会などで数多く制作。1946年没、74歳。洋画

早瀬蘭川 (はやせ・らんせん/1777～1837年)

福井県生れ。越前(えちぜん)の人。京都の原在中(ざいちゅう)の門下。美人画を得意とした。1837年没、61歳。江戸後期の絵師

原 在照 (はら・ざいしょう/1813～1872年)

1813年生れ。原在明の娘婿。画法を養父にまなび、原派3代をつぐ。安政の内裏造営のとき障壁画をえがいた。1872年没、59歳。江戸後期-明治の絵師

原菊太郎 (はら・きくたろう/1889～1972年)

徳島県生れ。1972年没する。徳島県立徳島中学校卒、盛岡高等農林学校に学ぶが、中退し家業の木材業を継ぐ。大一木材、四国林業の社長。1942年、徳島市議会議員に当選。

1948年に徳島市長に就任。1955年には徳島県知事に当選し、3期連続当選。青年時代から洋画を学び、1937年徳島青年美術家クラブを創立し会長に就任。徳島県の美術界の発展に尽力した。1972年没、83歳。洋画。

原 在謙 (はら・ざいけん III/1813～1883年)

京都生れ。原在中を始祖とする原派の三代目。原家文書(京都府立総合資料館蔵)によれば、右馬大允として官位につき馬の絵を得意とし、馬具等の有職にも通じていたという。倉敷市の法輪山一等寺の襖絵八面「松に人物図」、岡山県総社市総社宮の絵馬二面ほか、備中地区に作品を何点か残している。1883年、70歳。江戸後期-明治期の絵師、日本画

原田圭岳 (はらだ・けいかく/生没年不詳)

愛知県生れ。鈴木南嶺にまなぶ。四条派。江戸にすみ、天保(てんぽう)(1830-44)の頃に活躍した。江戸後期の絵師

原 健 (はら・たけし/1942年～)

名古屋市生れ。1969年東京藝術大学大学院絵画科油画専攻修了。72年東京国際版画ビエンナーレ展で京都国立近代美術館賞。73年東京造形大学講師(87年教授、2008年名誉教授)。74年個展「ストロークス」シリーズを始める。75年文化庁芸術家在外研修員として欧米に滞在。81年世界の現代版画25年展に出品。版画、美教

原田 潤 (はらだ・じゅん/1910～没年不詳)

静岡県生れ。独立美術京都研究所に入所、1935年新日本洋画協会の結成に参加。35年独立美術協会展に入選。以後41年の第11回展まで出展。第1回展を開催した京都市展にも、41年第5回展まで続けて参加。没年不詳。洋画

原田新八郎 (はらだ・しんぱちろう/1916～1989年)

福岡県生れ。1934年東京美術学校彫刻科本課に入学、38年新文展に入選。以後官展に出品。構造社にも参加して斎藤素巖に師事。39年東美校を卒業。40年紀元2600年奉祝展で入選。42年東京府立青年学校教諭。戦後は郷里福岡に住む。56年日展で特選、57年同展に無鑑査出品作で再度特選。60年新日展で菊華賞、63年日展会員。53年福岡教育

大学講師、62年同大助教授、71年7月同大教授。76年福岡教育大学附属中学校校長。のち私立近畿大学で教鞭をとった。85年福岡市文化賞。1989年没、72歳。彫刻、美教

原田太乙 (はらだ・たいいつ/1906～1983年)

金沢市生れ。1929年京都市立絵画専門学校本科卒、玉井敬泉に師事。42年大輪画院展松村賞、会員。46年日展入選、以後日展と金島桂華主宰の衣笠会展に出品し、75年衣笠会展京都府知事賞。47年より金沢美術工芸専門学校(現、金沢美術工芸大学の講師をつとめ、後同大教授。74年金沢市文化賞受賞。1983年没、77歳。日本画、美教

原田正路 (はらだ・まさみち/1931～1999年)

大連生れ。1955年長崎に移住。63年フリーカメラマンとして活動。71年共著『世界史の中の長崎』(木耳社)刊行。74年共著『台湾美の心』(おりじん書房)刊行。福岡に移住。86年個展「水滴が刻む」(INAXギャラリー、東京)開催。横浜に移住。横浜で没、68歳。写真

原 武典 (はら・たけのり/1933～2017年)

福岡県生れ。東京藝術大学彫刻科卒業、同専攻科修了(石井鶴三、山本豊市教室)。パブリックコレクション;九州大学、市川市、飯塚市、直方市、田川市 他多数。2017年没、84歳。彫刻

原田和周・原田恭平 (はらだ・わしゅう/1895～1936年)

静岡県生れ。1914年日本美術院洋画部の研究員となり数回院展に出品、17年同院々友。この頃原田恭平と称す。22年以降春陽会展第1回より毎回出品し、聚文と号したが、33年和周に改めた。春陽会会友。1936年没、42歳。洋画。

原 覚 (はら・さとる/1910～1995年)

長崎市生れ。1930年長崎県師範学校卒。34年大潮会に入選。35年西日本美術展に入選。39年二科展入選。42年個展、岡政にて開催。46年長崎洋画家クラブ結成に参加。49年県内中学校に勤務(美術)。70年退職。80年長崎県水彩画協会結成(副会長)また、図工・美術科を通して美術教育の面から後進の育成等貢献。1995年没、85歳。洋画、水彩、美教

原 鵬雲 (はら・ほううん/1835～1879年)

1847年徳島藩の御用絵師守住貫魚に入門し住吉派の絵を学んだ。62年幕府が派遣した遣欧使節団に賄方兼小遣者として随行。渡欧の間、各地で写生を行った。イギリス、ロシア、エジプトなどで描いた写生が遺されていたという。パリ滞在中にルーブル宮を訪ね、アングルの〈グランド・オダリスク〉を描き写したことは注目に値する。維新後は画学の教員となり、1870～74年徳島県広島師範学校に勤務した。1879年没、44歳。美教、日本で最も早く、ヨーロッパで西洋美術を目にした画家

原 之夫 (はら・ゆきお/1938～2003年)

長崎市生れ。1956年佐賀大学特設美術科入学。68年東京銀座三人展。73年 個展、以後多数個展開催。75年自由美術協会展出品。76年日本・アジア・アフリカ・ラテンアメリカ美術家会議参加。他平和をテーマにした版画集、小説を出版。2003年『原之夫銅版画作品集』(原之夫銅版画作品集刊行会編、同時代社、東京)刊行。2003年没、65歳。版画

原 芳市 (はら・よしち/1948～2019年)

東京生れ。千代田写真専門学校中退。1970年代から1980年代にかけてストリップ劇場で働く踊り子を撮影した作品を数多く発表。82年刊行した写真集『ストリッパー図鑑』(でる舎)で第17回準太陽賞。2011年『光あるうちに』08年『現の闇』(いずれも蒼穹社刊)で第24回写真の会賞受賞。15年日本写真協会賞作家賞。2019年没、71歳。写真

張間禧一 (はりま・きいち/1902～1981年)

石川県生れ。1926年年東京美術学校漆工科卒業後、六角紫水の研究所助手となる。石川県商品陳列所商工技手、石川県立工業学校教諭を経て、静岡県工業試験場商工技師、同所長を歴任する。42年第5回文展特選受賞。52年重要無形文化財保持団体輪島塗技術保存会二代会長に就任。漆工、美教、美普

晴山 英 (はれやま・えい/1924～2011年)

盛岡市生れ。1950年岩手美術工芸学校を経て赤松俊子の誘いを受け上京。神奈川県藤沢市にあった丸木位里・俊夫妻のアトリエに通う。51年自由美術家協会展に出品。52～62年女流画家協会会員。前衛美術展(のちの齋展)70年出品。「丸木夫妻の画室を通った画

家たち晴山英」展(原爆の凶丸木美術館)を開催。2000年「シリーズⅦ[岩手の現代作家]柵山龍司・晴山英」展(萬鉄五郎記念美術館)を開催。東京で没、87歳。洋画

春木南華 (はるき・なんか/1819～1866年)

江戸生れ。祖父は画家の春木南湖、父も画家である春木南溟、嗣子長男。父祖の画法を習得し、山水・花鳥画にすぐれた。同年代の探検家で浮世絵師の松浦武四郎と親交があり、武四郎のスケッチを元に最後の清書をした絵師という縁もある。摩周湖湖畔に「松浦武四郎著の久摺日誌を読んだの碑」という春木南華の碑が建っている。1866年没、47歳。江戸後期の絵師

春木南湖 (はるき・なんこ/1759～1839年)

1759年生れ。江戸の人。木村兼葭堂に、のち長崎で清(しん)(中国)人にまなぶ。山水・花鳥画を得意とし、文人画家として当時谷文晁とならび称される。伊勢(いせ)(三重県)長島藩主増山正賢につかえた。1839年没、81歳。著作に「西遊日簿」など。江戸中期-後期の絵師、南画

春木南溟 (はるき・なんめい/1795～1878年)

江戸生れ。画家の春木南湖の嗣子長男。別号に耕雲漁者、呑山楼などがある。父の画法をついで山水・花鳥画を得意とした。1877年内国勸業博覧会に『日光霧降滝図』を出品。1878年没、83歳。弟は春木西湖、子は春木南華、孫は春木南溪、曾孫は春木南江。全員画家として活躍。1878年没、83歳。江戸後期～幕末の絵師

春田安喜子 (はるた・あきこ/1921～2006年)

鹿児島市生れ。海老原喜之助、吉井淳二に学び1939年鹿児島県立第二高等女学校卒。女子美術専門学校高等科西洋画部を首席卒。43年鹿児島二高女、併設の鹿児島女子師範学校で教える。46年南日本美術展で奨励賞。48年同展で南日本新聞社賞、51年招待作家。47年二科展初入選、58年会友推挙、63年会員推挙、二科会評議員、理事を歴任。南日本女流美術展の審査員。地元洋画壇の発展にも寄与。地元鹿児島県の女流洋画壇振興に大きく貢献。2006年没、85歳。洋画、美教、美普

春村ただを (はるむら・ただお/1901～1977年)

千葉県生れ。関西における創作版画運動の作家の一人。1915年ロスアンゼルス国際版画展に出品。29年川西英・北村今三等と神戸で版画グループ三紅会を結成。神戸に住み連刊版画誌『HANGA』(神戸版画の家 大正一三年～昭和五年)や『きつつき』(創作版画俱樂部 昭和五～六年)などに作品を発表。きつつき同人。32年日本版画協会会員。戦後千葉に戻り、役場に勤めた。1977年没、76歳。版画、創作版画

番浦有爾 (ばんうら・ゆうじ/1935年～)

京都生れ。1956年新制作展出品。59年朝日新人展出品。62年現代日本美術展出品。64年新制作展で新作家賞。69年現代日本美術展出品。新制作協会会員。71年昭和会展で優秀賞。82年京都の彫刻と版画9人展出品。89年六甲アイランド CITY 彫刻展出品。90年神戸須磨離宮公園現代彫刻展出品。彫刻

150

判 三教 (ばん・さんきょう/1931年～)

石川県生れ。1956年金沢美術工芸大学油画科卒。北陸現代作家集団に参加。66年一陽展出品、以後毎回出品。73年一陽展で特待賞。77年北陸中日美術展で大賞。79年一陽会会員。81年一陽展審査員。85年辰口町博物館企画個展開催。2006年画業50年記念個展を開催。洋画

伴 敏子 (ばん・としこ/1907～1992年)

東京生れ。明治、大正、昭和の時を生き、生涯ロマンに満ちた表現を続けた。中村忠二芸術の最大の理解者で、世に忠二の名を知らせ高めた。中村忠二夫人、水彩連盟顧問。著書に『画家忠二との生活』、『断層 自立への脱皮を栗かえした画家の自伝』。1992年没、85歳。水彩

坂内青嵐 (ばんない・せいらん/1881～1936年)

福島県生れ。酒井三良の師。東京美術学校日本画科本科で寺崎広業に学び、1908年卒業。10年東京帝大資料編纂所で歴史画を描き、東京歯科専門学校教授として人体デッサンなどを教え、そのかわり制作を続けた。17年文展に入選、以後も文展、帝展に出品した。34年には日本赤十字の加盟国巡回展に参加、ついで36年には外務省の委嘱を受けて

「上杉謙信」「和氣広蟲」を制作した。19年創設の福陽美術会で幹事長。1936年没、56歳。

日本画、美教

阪野智啓 (はんの・ともひろ/1975年～)

名古屋市生れ。2002年愛知県立芸術大学大学院研究科日本画専攻修了。03年再興第88回院展で入選(10年院友)。16年愛知県立芸術大学准教授。17年再興第102回院展で「山鉾巡行」が奨励賞。第23回天心記念茨城賞。日本画、美教

番場三雄 (ばんば・みつお/1953年～)

新潟県生れ。1979年今野忠一塾「龍生会」に入る。79年院展入選。81年院展院友。94年今野忠一塾「旅人会」に入る。97、99、02、03、04、06、08年院展、春の院展で奨励賞、07、12年院展日本美術院賞(大観賞)。17年日本美術院同人。日本画

158

ひ

日影 圭 (ひかげ・けい/1965年～)

岐阜県生れ。1963年全関西美術展入選。1989年金沢美術工芸大学卒。90年石川義に師事。日春展入選。91年日展入選。8年日春展奨励賞、99年・2002年日春展日春賞。2000年・02年日展特選。01年高山市学芸功労表彰。08年日展審査員。現在日展会員。「グループ玄」代表。京都市立芸術大学准教授。日本画、美教

東 弘治 (ひかし・こうじ/1955年～)

熊本県生れ。1978年熊本大学教育学部美術科卒、浜田知明に師事。80年版画グランプリ展出品。81年日動版画グランプリ展でグランプリ受賞。84年日動版画展に出品。99年山本鼎版画大賞で準大賞。版画

東平哲弥 (ひがしひら・てつや/1935年～)

長崎市生れ。1951年東光会展に入選。1953年長崎東高校在学中、野口彌太郎に師事、独立美術展に入選。54年高校卒業と同時に浜屋デパートで個展、上京。55年水彩連盟展に出品受賞、中村忠二と伴敏子に出会う、63年フランスへ留学、パリ国立美術学校に学ぶ、ル・サロン、パリ・アンデパンダン展に出品、67年帰国、翌年、帰国展を銀座文芸春秋ギャラリーで開催、中村忠二と伴敏子との親交、69年画家仲間3人と青樹会を創立し、東京日本橋高島屋にて、7年連続の展覧会。以後、無所属。2013年「祈りの丘絵本美術館」にて東平哲弥交流展～中村忠二・伴敏子」を開催。中村忠二の遺作を伴敏子夫人から引き継ぐ。水彩、洋画

東山琴堂 (ひがしやま・きんどう/1847～1912年)

椒村光明寺の住職。名は義賢。幼い頃から画を好み、井爪丹岳に師事して南画を学んだ。四君子を得意とした。1912年没、65歳。南画

費 漢源 (ひ・かんげん/生没年不詳)

中国湖州府吳興県の人。1734年来舶。南京船主として56年までの間、数回来泊。商人であったが山水図・花卉図・人物図などを得意とし、建部凌岱や楊利藤太に画法を伝授。後に建部凌岱は自著『漢画指南』(1779年)の「山水位置之法」において費漢源の画法を論じている。鈴木芙蓉の模刻による画譜『費氏山水画式』が87年刊行。滞在期間と比べ漢源の伝存作品は少ない。日本に渡来し南宗画様式の画技を伝える。来舶四大家の一人。清の商人・画家、南宗画派(文人画派)

疋田春湖 (ひきた・しゅんこ/1961年～)

滋賀県生れ。初め長谷川玉峰の子・玉純に学び、のち山元春挙の門に入る。風景画に優れ、日本美術協会展で活躍した。戦後は滋賀県美術作家協会の責任者となり、郷土の美術会復興に尽力した。1961年没、71歳。日本画

疋田芳沼 (ひきた・ほうしょう/1877～1934年)

愛知県生れ。菊池芳文の門に学ぶ。1931年帝展推薦。京都に住した。1934年没、57歳。

日本画

樋口益次郎（ひぐち・えきじろう/1915～1988年）

福岡県生れ。1940年東京美術学校工芸科図案部卒。三菱長崎造船所に勤務。新田丸、あるぜんちゃん丸などの豪華客船や戦艦大和、武蔵など、船室内の装飾設計に従事。80年三菱長崎造船所を退職。長崎県展に入選。81年長崎県水彩画協会事務局長。82年日本水彩画展に入選(以後連続入選)。86年長崎の浜せんギャラリーで個展。長崎県美術協会会員・長崎水彩クラブ会員。1988年没、73歳。水彩

樋口佳絵（ひぐち・かえ/1975年～）

仙台市生れ。1997年東北生活文化大学生活美術科卒。テンペラと油彩の混合技法による詩的な具象絵画で注目。2005年リアスアーク美術館、西村画廊(東京)などで個展。05年宮城県芸術選奨新人賞。洋画

樋口真嗣（ひぐち・しんじ/1965年～）

東京生れ。茨城県立古河第三高等学校卒。ガイナックス、GONZO、Motor/lieZを経てオーバーロード所属。IT企業のユビキタスエンターテインメントにおいてチーフ・ビジョナリー・オフィサー。2006年『日本沈没』を監督。07年茨城県古河市の「古河大使」に就任。15年『シン・ゴジラ』で、監督と特技監督。15年『進撃の巨人 ATTACK ON TITAN』を監督。17年『シン・ゴジラ』が第40回日本アカデミー賞最優秀作品賞。同作で総監督の庵野秀明とともに最優秀監督賞。また同作で、庵野とともに日本SF大賞特別賞。特技監督・映画監督・映像・装幀

樋口猛彦（ひぐち・たけひこ/1914～1982年）

青森市生れ。戦前は洋画家の松木満史の青森美術研究所で素描を学ぶ。戦後は八戸市に居を移した。八戸市内の学校で美術教師。挿絵画家としても活躍し、新聞『デーリー東北』での連載小説「想う如く」の挿絵を担当。洋画家の渡辺貞一、戦後八戸市で版画家の棟方志功(1903～1975)、洋画家の名久井由蔵(なぐいよしぞう)(1917～1979)らと交友。1953年樋口・名久井ら画家5名で五玄会を結成。69年美術グループ「脈」のメンバー1982年没、68歳。水彩挿絵、美教

久泉共三（ひさい・いずみ・きょうぞう/1899～1993年）

高岡市生まれ。1916年上京し、改井徳寛、村井盈人らと交流。改井の下宿で中川一政と知り合った。23年春陽展で春陽会賞。30年春陽会会友、39年退会。28年富山市に転居。40年私塾「玉翎会」を結成し主宰、会は翌年「富山洋画協会」に発展解消。40年富山文化協会の結成に参加、中心人物。46年富山県美術文化協会の創立に尽力、第1回展で審査員。また、東一雄らが設立した一線美術協会などで指導。1993年没、94歳。洋画、塾

久永 強（ひさなが・つよし/1917～2004年）

熊本県生れ。1931年大連に渡る。45～49年シベリア抑留。77年油絵を始める。92～94年「シベリアシリーズ」制作。96年世田谷美術館に全作43点が収蔵、97年熊本県文化懇話会賞。99年シベリアシリーズが画集『「友よねむれ」として福音館書店より出版。2004年没、87歳。洋画

久野大正（ひさの・ひろまさ（1913～1987年）

福岡市生れ。1930年福岡商業学校卒。31年頃から数年間南画家の小柴春泉に師事。35年頃三岸節子に師事。上海に渡り終戦とともに帰国し、福岡に住む。47年宇治山哲平、山田栄二、上田宇三郎、赤星孝らと朱貌社を結成する。48年創造美術展に入選。65年から水墨画の如月会を主宰する。洋画を一時試みた後、朱貌社以降は水墨による抽象的な造型を手掛けた。1987年没、74歳。南画、洋画、水墨

久松知子（ひさまつ・ともこ/1991年～）

三重県生れ。2017年東北芸術工科大学大学院修士課程日本画領域修了。14年の作品で絹谷幸二賞奨励賞を、15年岡本太郎現代芸術賞岡本敏子賞。18年には大原美術館(岡山)のレジデンスプログラム「ARKO」に招聘され、個展を開催。2022年公益財団法人ポーラ美術振興財団の在外研修員に採択。米国にて研修。個展;「300円絵画」(NADiffWindow Gallery、東京、2021/はねとくも、埼玉、2020)、「美のある暮らし」(トライギャラリーおちやのみず、東京、2019)、「久松知子絵画展」(日本橋三越、東京、2019)。現代美術

土方稲嶺（ひじかた・とうれい/1741～1807年）

鳥取県生れ。江戸で南蘋派の絵師・宋紫石に師事。天明初年頃に京都に転居したとき

れ、円山応挙や谷文晁との親交が伝えられている。妙心寺(京都)や和歌山県などの寺院に障壁画を遺している。1798年鳥取藩主・池田斎邦に仕え御用絵師となった。多くの門人を育て、因幡画壇の祖に位置づけられている。1807年没、66歳。江戸中-後期の絵師

菱川師宣 (ひしかわ・もろのぶ/生誕年不詳~1707年)

安房国生れ。縫箔を家業とする家に生れる。1661~73年頃画家を志して江戸に出てから死没(一説に数え年77歳)まで、菱川派の祖としてその配下の画工たちと、150種にも上る絵本、挿絵本、一枚絵の組物といった版画作品(好色本)、遊楽の場面を描いた多くの肉筆画を制作。墨摺本と呼ばれる墨一色の世界に、明暦の大(1657)以後、文化的な欲求を高め活気を呈してきた当時の江戸の庶民の生活や、風俗を表現している。美人のタイプは「菱川様の吾妻おもかげ」と呼ばれ、広く普及した。主要作品は版画で『伽羅枕』(61~73)、『秘戯図』、肉筆画で『北楼及演劇図巻』(72~89、東京国立博物館)、『見返り美人図』(93頃、同)。1707年没、77歳? 江戸前期の浮世絵師、浮世絵の元祖、菱川派の祖、絵本、挿絵、版画

日高鉄翁 (ひだか・てつおう/1791~1872年)

長崎の春徳寺住持で晩年は雲竜寺に隠棲した。石崎融思、江稼圃に師事し、山水図や墨蘭図を得意とした。木下逸雲、三浦梧門とともに長崎の三名家といわれ、門下から滝和亭、安田老山など明治初期画壇の俊才が多く出た。主要作品に《谿山雪斎図》(1854)、《秋景山水図》(1856)などがある。1872年没、81歳。江戸後期-明治の臨濟宗の僧、南画

日高頼子 (ひだか・よりこ/1937年~)

東京生れ。1957年東京都立駒場高等学校芸術科卒、東京芸術大学美術学部彫刻科菊池教室に入学、60年東京芸術大学美術学部彫刻科卒。卒業制作展にて安宅賞。62年二科展初出品特選、東京芸術大学彫刻専攻科修了、65年迄副手として研修。66年二科展金賞。67年二科会員。86年長野市野外彫刻賞。87年文化庁買い上げ、二科会評議員就任。2008年二科会理事。彫刻

日高理恵子 (ひだか・りえこ/1958年~)

東京都生れ。1985年武蔵野美術大学大学院造形研究科美術専攻修了。東京を拠点に制作活動。95、96年文化庁芸術家在外研修員としてドイツに滞在。主な個展に、国立

国際美術館(大阪、1998年)、アートカイトミュージアム(デットモルト、ドイツ、2003年)、「空と樹と」(ヴァンジ彫刻庭園美術館、静岡、2017年)など。主なグループ展に、「Chikaku: Time and Memory in Japan」(クンストハウス・グラーツ、オーストリア、他巡回、2005-06年)、など。洋画

左甚五郎 (ひだり・じんごろう、ひだの・じんごろう/1584~1651年)

兵庫県生れ。左甚五郎作と伝えられる作品も各地にある。日光東照宮の眠り猫をはじめ、甚五郎作と言われる彫り物は全国各地に100か所近くある。しかし、その製作年間は安土桃山時代から江戸時代後期まで300年にも及び、出身地もさまざまであるので、左甚五郎とは、一人ではなく各地で腕をふるった工匠たちの代名詞としても使われたようである。逸話などでその存在さえも疑われているが、実在の人物として記述している文献も見られる。

左甚五郎は足利家臣・伊丹左近尉正利を父として、播磨国明石に生まれた。ただし、紀伊国根来東坂本(岩出市)に生まれたとする説もある。父親の亡き後、叔父である飛騨高山藩士・河合忠左衛門宅に寄寓。慶長1606年京伏見禁裏大工棟梁・遊左法橋与平次の弟子となった。19年江戸へ下り、将軍家大工頭・甲良宗広の女婿となり、堂宮大工棟梁として名を上げた。江戸城改築に参画し、西の丸地下道の秘密計画保持のために襲われたが、刺客を倒し、34年底護者である老中・土井利勝の女婿で讃岐高松藩主・生駒高俊のもとに亡命。その後、40年に京都に戻り、師の名を継いで禁裏大工棟梁を拝命、法橋の官位を得た後、42年高松藩の客文頭領となったが、1651年頃没、58歳。

名工・左甚五郎のモデル、岸上一族の一人である初代・岸上甚五郎左義信は1504年に誕生し、66歳で没したとされている。江戸時代、腕利きの大工の代表として「大和大工に飛騨匠」と称されており「飛騨の甚五郎」が訛ったものとする説がある。別の一説によると左利きだったからという説がある。講談では地元の大工に腕の良さを妬まれて右腕を切り落とされたため、また、左利きであったために左という姓を名乗ったという。そのほか、16歳の時に多武峯十三塔その他を建立し、その時の天下人に「見事である。昔より右に出る者はいない。」「それでは甚五郎は左である。」「左を号すべし。」と言わしめた。そのお達しにより、位(号)として“左”を名乗ったともいわれている。実在の人物であり貝塚生まれであるということを実証する資料として西光寺(香芝市)鳳凰の欄間がある。1651年没、66歳。彫刻、木彫

人見淇堂（ひとみ・きどう/1816～1894年）

1816年生れ。幕臣の人見甚四郎（先代）の息子。『文武高名録』によれば幼少より絵を好み、11歳で大岡雲峰に入門、のちに椿椿山の門に入る。一時期、葛飾北斎の門下。1829年父の家督を継ぎ小普請、30年書院番となる。以後、近習番や広敷用人などを歴任。明治から画業に専念。1894年没、79歳。江戸後期～明治期の幕臣、絵師

日名子金一郎（ひなご・きんいちろう/1943年～）

大分市生れ。1966年大分大学学芸学部卒。62年記念大分県美術展に入選。65年県美術展で文部大臣賞。67年自由美術協会展に入選。以後、同展で活躍。70年自由美術協会会員。2009年自由美術協会展で平和賞。17年大分県美術協会第11代会長。洋画、美普

日根対山・日根對山（ひね・たいざん/1813～1869年）

大坂生れ。はじめ土佐派をまなぶ。のち京都の貫名海屋に学問、書画の指導をうけ、文人画山水を得意とした。京都で没、57歳。弟子には猪瀬東寧、野口小蘗、跡見花溪、中丸金峯（清十郎）。作品に「楓林停車図」「嵐山図」など。1869年没、56歳。江戸後期の絵師

日ノ下淳市（ひのした・じゅんいち/1923年～）

三重県生れ。1941年京都市立美術工芸学校卒、43同絵画専門学校を卒業。初め郷里の中学校で教鞭を執った。49年京都に戻る。教師の仕事をしながらか、三上誠、下村良之介ら絵画専門学校の卒業生を中心に結成された革新的日本画団体ペンリアル美術協会に参加。第二回展から出品、59年退会。71～935年京都府立鴨沂高校で教師。美教、日本画、ペンリアル

日比野克彦（ひびの・かつひこ/1958年～）

岐阜市生れ。1982年東京芸術大学美術学部デザイン学科卒。84年同大学大学院修士課程修了。80年代に領域横断的、時代を映す作風で注目される。2003年大地の芸術祭越後妻有アートリエンナーレにて明後日新聞社文化事業部を設立。05年水戸芸術館「HIBINO EXPO」、06年岐阜県美術館「HIBINO DNA AND」、07年金沢21世紀美術館「ホーム

→アンドーアウェー」方式、熊本市現代美術館など個展を開催。2007年東京芸術大学美術学部先端芸術表現科教授、16年より美術学部長に就任。現在、日本サッカー協会社会貢献委員長。15年岐阜県美術館の館長。2022東京芸術大学学長。美術家、美教、学長

日比野白圭（ひびの・はつらい/1825～1914年）

名古屋市生れ。九歳、画を竹田景甫に学び、十歳の頃更に鈴村景山の門に入り、十七歳にして森高雅に従ふ。師法のみを墨守せず、諸家を涉獵して別に一家を為す。最も古代の人物を寫すに長ず。1882年絵画共進会天覧の際、白圭画く所の元禄風俗の図を嘉し給ひ、命じて画を徴せらる乃ち斎戒思を凝し、揮毫して之を獻る。1914年没、90歳。日本画

氷見宗忠（ひみ・むねただ/生没年不詳）

越中（富山県）氷見の僧。喜多七大夫古能（ひさよし）の「仮面譜」では十作（じっさく）のひとりにあげられる。やせた面相を得意とした。宝生家（ほうしょうけ）所蔵の姥（うば）面に文亀（ぶんき）4年（1504）の銘があり、氷見の作とつたえられる。日米とも。戦国時代の能面師

姫島竹外（ひめしま・ちくがい/1840～1928年）

福岡県生れ。はじめ村田東圃、のち石丸春牛に師事、南宗画を学ぶ。幕末は国事に奔走するが、1878年上京、83年大阪。98年南宗画会を結成、1900年全国南画共進会で受賞、日本美術協会に会員として参加。18年竹外南画院を設立、後進の育成にあたり、すぐれた門人を輩出した。大阪南宗画壇の重鎮として活躍した。1928年没、88歳。南画、日本画

兵部紹仙・曾我紹仙（ひょうぶ・しょうせん/生没年不詳）

越前（えちぜん）の人。曾我蛇足（じゃそく）の子とされる。京都を中心に大永（たいえい）天文（てんぶん）（1521-55）のころ活躍、兵部墨溪（ひょうぶ・ぼつがい）や周文の流れをくむ水墨画をえがく。「一休宗純像」「山水図」などで知られる。通称は兵部。戦国時代の絵師、水墨

兵部墨溪（ひょうぶ・ぼつがい/生誕年不詳～1473年）

越前（えちぜん）の人。朝倉氏の庇護をうけたが、のち京都におもむき、周文の弟子となる。親交のあった一休宗純より墨溪の号をうけ、曾我（そが）派の創始者とされる。1473年没。作品に「一休自賛像」「一休賛達磨（だるま）図」など。室町時代の画僧

平井一男 (ひらい・かずお/1929～2004年)

東京生れ。1956年国画展に出品、新人賞、最優勝賞、会員、81年退会。61年近代造形学院設立、学園長。80年ミニチュアプリント展グランプリ。90年神奈川・向上学園の大壁画制作。2004年没、75歳。洋画、学園長

平井顕斎 (ひらい・けんさい/1802～1856年)

静岡県生れ。掛川藩の御用絵師・村松以弘(1772～1839)に学ぶ。1827年江戸に出て谷文晁の門下に入る。その後遊歴し、帰郷。35年再び江戸に出、福田半香に渡辺崋山を紹介してもらい、崋山門下で画を学ぶ。38年まで江戸と諸国遍歴、帰郷を繰り返すが、再び江戸で文晁、崋山らに学ぶ。山水画を得意とし、崋山画をはじめ、文晁一派において規範とされた山水画の図様の模写を多く残す。1856年没、54歳。南画

平井房人 (ひらい・さんど/1903～1960年)

福島県生れ。宝塚少女歌劇団美術部に勤務のかたわら叙情絵はがきを出版。1938年から「大阪朝日新聞」に「家庭報国・思ひつき夫人」を連載。「大阪パック」の編集にもかかわった。1960年没、57歳。作品「花百合ダン子」。漫画、挿絵、ポスター

平井為成 (ひらい・ためなり/1890～1979年)

香川県生れ。平井は、在学中に同期生の萬鉄五郎、山下鉄之輔らとともにアブサント会を結成、卒業後は岸田劉生らと合流し、フェウザン会を結成した。1928年新構造社に絵画部設立、第2回展に出品。青森県八戸中学を経て松山中学に在職、晩年は香川に帰郷して指導者として美術教育に専念した。1979年没、89歳。洋画、美教

平井直水 (ひらい・ちよくすい/1861～(1912～1925)年)

大坂生れ。30才で画を志し、深田直城の門に学ぶ。山水花鳥をよくし特に孔雀の画に秀でる。大正年間(1912～1925)没、51～64歳。日本画

広井 力 (ひろい・つとむ/1925～2022年)

東京生れ。東京高師卒。1949年自由美術家協会展に入選。50年イサム・ノグチに師事。52年モダンアート協会会員。54年国際アートクラブ会員となる。73年東京学芸大教授、90年

跡見学園女子大教授。夙(たご)の研究でも知られる。作品に「標的と人」など。著作に「夙一空の造形」など。2022年没、97歳。彫刻、美教

平出雪耕 (ひらいで・せっこう/1749～1823年)

栃木県生れ。壬生藩の専属絵師として仕えるかたわら、特技の医術をもって多くの病人の救済にあたったとも言われています。また雪耕の門人には、世に關東の四大家の一人と称される南画家高久靄厓がいた。晩年は金井の生家に住んでいましたが、1823年没、75歳。江戸中期-後期の絵師

平岩長四郎 (ひらいわ・ちょうしろう/1902～1987年)

東京生れ。1927年東京美術学校日本画科卒。39年新興美術院展で奨励賞第2席、院友。53年再興新興美術院展で入選。56～82年再興院展に出品。58年日本美術院院友。91年再興院展で奨励賞。77年日本美術院特待。1987年没、86歳。日本画

平岡靖弘 (ひらおか・やすひろ/1943年～)

京都生れ。1968年京都市立美術(芸術)大学卒業制作展で受賞。70年毎日現代美術展招待出品。92年独立展で独立賞、のち会員。93年安井賞展で安井賞、都市芸術新人賞受賞、第27回現代美術選抜展(文化庁)出品、個展(京都・ギャラリー三条)。96年平岡靖弘挿絵原画展(京都・ギャラリー陶谷)、個展(大阪・心斎橋フジギャラリー、東京・紀伊國屋画廊、ギャラリー宮脇)第50回京展京展賞受賞、第20回日本秀作美術展(東京、仙台、大阪、名古屋)。洋画

平川滋子 (ひらかわ・しげこ/1953年～)

福岡県生れ。1975年東京女子大学文理学部史学科日本史専攻卒、80年東京藝術大学美術学部絵画科油画専攻卒。83～86年フランス政府給費留学生。83～86年パリ国立美術学校在籍。87年フランスのアーティスト・ステータス取得。89年アダン賞受賞、サロン・ド・ラ・ジュヌ・シンチュール(パリ、グラン・パレ)。92年コンクール《町の中の彫刻家達、アンリ・ゴードイエ・ブルゼスカへのオマージュ展》でプロジェクト賞(サン・ジャン・ド・ブレイ)。2003年日本文化庁特別派遣芸術家在外研修員、ニューヨーク出向。06年ポロック・クラブナー・ファンデーション、グラント受賞(アメリカ)。環境アート、インスタ

平川清蔵（ひらかわ・せいぞう/1897～1964年）

広島県生れ。1920年日本創作版画協会展に木版画が入選。木口木版を得意とした。37年ごろ玉村方久斗らの新興美術家協会の版画部門で活躍。作品に「牛と男」などがある。1964年没、67歳。版画

平木孝志（ひらき・たかし/1951年～）

金沢市生れ。74年金沢美術工芸大学卒。81年大学院修士課程修了。西山英雄に師事。99年・2003年日春展日春賞。05年・10年日展特選。10年日春展奨励賞。日展会友。金沢学院大学教授。日本画、美教

平桜和正（ひらざくら・かずまさ/1931～2009年）

金沢市生れ。1951年金沢美術工芸専門学校卒、54年同短期大学日本画専攻科修了。山口華揚に師事。56年日展に入選、以後入選を重ねる。晨鳥社に入る。72年日春展外務省買い上げ。金沢美術工芸大学名誉教授。日展会友。2009年没、78歳。日本画、美教

平澤熊一（ひらさわ・くまいち/1908～1989年）

新潟県生れ。1927年工学院を卒業。在学中に絵画の面白さに目覚め、28年川端画学校で本格的に絵画を学ぶ。ここで柿手春三や井上長三郎と親しくなる。33～37年台湾に渡り、スケッチなど絵画の修行を行う。帰国後は阿佐ヶ谷、王子、要町などを転々とし、池袋付近に集まっていた一群の画家たちと交流する。38年独立美術協会展に入選。43年美術文化展で奨励賞。50年宇都宮にアトリエを構え、以後、自由美術展に出品。55年自由美術協会会員。1990年没、81歳。2012年練馬区立美術館で「特集展示平澤熊一展」が開催。洋画

平沢貞通・不朽（ひらさわ・さだみち/1892～1987年）

東京生れ。1911年日本水彩画研究所に入所。12年小樽中学校卒。13年日本水彩画会結成に石井柏亭・磯部忠一らと参画。14年二科展に入選。横山大観の門を叩き、「大暲」という雅号。21年光風会展で今村奨励賞。28年に岡田三郎助らと「テンペラ画会」を結成。その後、無鑑査・テンペラ画会会長。30年日本水彩画家会委員。56歳帝銀事件で囲囿(いご)の人となった。戦後の占領下、確認も無く戦後最大の毒殺事件の「死刑囚」に処された平沢の作品は、捜査の目的で押収される、所蔵者が作品を手放す、散逸。1987年没、95歳。水

彩、テンペラ画(洋画)

平沢淑子（ひらさわ・よしこ/1939～2017年）

満州国生れ。秋田市に住む。慶應大学文学部卒、NHKアナウンサーを経て、1973年渡仏し画家を志す。75年リヨンのアートセンター国際現代美術展大賞。76年カーニュ・シュル・メール美術館第8回国際絵画フェスティバル特別奨励賞。2005年「瀧口修造・夢の漂流物展」(世田谷美術館)出品、「Yosiko in PARIS～平沢淑子・アートの軌跡」(秋田市立千秋美術館)開催。2017年没、78歳。洋画

平沢理紀夫（ひらさわ・りきお/1928～2009年）

秋田市生れ。1948年秋田鉱山専門学校金属材料科卒。近所に住む葛西康に油絵を学ぶ。仙台の商工省工芸指導所東北支所に入り、50年までに金属に着色する研究。日本大学芸術学部美術科に編入学、卒業後は、都内の中学校の美術教諭。61～64年自由美術展に出品。65年主体美術展に出品し、以後、継続して出品し、68年佳作作家賞、会員。2009年没、81歳。洋画、美教

平田玉蘊（ひらた・ぎょうん/1787～1855年）

備後(びんご)生れ。福原五岳、八田古秀(はった-こしゅう)にまなぶ。また詩歌をこのみ、頼山陽らと親交があった。尾道市福善寺本堂の襖(ふすま)絵「雪景松竹梅」などの作品がある。1855年没、69歳。江戸後期の絵師

平田郷陽（ひらた・ごうよう/1903～1981年）

東京生れ。人形師平田恒次郎(初代郷陽)の長男。父について修業。写実的なマネキンや生き写し人形を制作。27年米国から贈られた青い眼の人形への答礼作品審査会で第一位。戦前は文展や万国博に出品し、童人舎人形塾を開設し指導。戦後は対象をデフォルメした独特な人形を制作。日展や日本伝統工芸展で活躍。55年国指定重要無形文化財保持者、56年門下生を中心に陽門会を発足、衣装人形の芸術的向上と後継者の養成に尽力。1981年没、78歳。人形

平野 明（ひらの・あきら/1961年～）

京都生れ。1984年大阪芸術大学美術科卒。83～89年大阪で絵画制作・個展。92年岐阜県飛騨市にて移住。高山・北陸・大阪・九州各地・東京にて個展。79年エンバ美術コンクールで京都国立近代美術館賞。80年日本国際美術展で神奈川県立近代美術館賞。**洋画**

平野 明 (ひらの・あきら/1971年～)

東京生れ。1990年東京都立工芸高等学校デザイン科卒。93年創形美術学校版画科卒。95年印刷会社企画デザイン課退社。95年こんどはことばの展覧会(水戸芸術館)。96年都版画大賞展(都画廊 兵庫)。**版画、洋画**

平野逸郎 (ひらの・いつろう/1907～1999年)

茨城県生れ。1925年菊池五郎に師事。27年旧制水戸中学校卒。48年創元会展に入選。また第1回茨城県美術展に委員として出品。49年日展で入選。50年創元会会員。70年勝田市美術協会発足、会長。75年創元展に出品。97年茨城県芸術祭美術展に出品、中村彝賞。1999年没、92歳。**洋画**

平野杏子 (ひらの・きょうこ/1930年～)

神奈川県生れ。大久保作次郎、三岸節子に師事。1962年より平塚市にアトリエを構え、初期は具象的な風景や静物に才能を見せながら、次第に仏教に傾倒し、抽象的な作風の大作を発表するようになる。**洋画、造形**

平野甲賀 (ひらの・こうが/1938～2021年)

京城生れ。1957年武蔵野美術学校デザイン科入学。60年日宣美展で特選、61～63年高島屋宣伝部入社。63年フリーのグラフィックデザイナー。64～91年装丁、晶文社の装丁のほとんどを担う。66年「六月劇場」の舞台装置、衣装、宣伝美術を手がける。68～82年「演劇センター68」を結成(後の「黒テント」)。同集団のデザインを担当。73年雑誌『ワンダーランド』(後の『宝島』)のアートディレクター。84年講談社出版文化賞・ブックデザイン賞。85年東京芸術大学美術学部デザイン科非常勤講師。90年『平野甲賀 装幀の本』(リプロポート)刊行。2013年平野甲賀の仕事1964-2013展(武蔵野美術大学 美術館・図書館)。毎日デザイン賞特別賞。2021年没、83歳。**グラフィック・デザイナー、装丁、舞美**

平野五岳 (ひらの・ごがく/1811～1893年)

大分県生れ。豊後(ぶんご)の真宗大谷派専念寺の住職。広瀬淡窓に詩文をまなび、のち田能村竹田(たのむらちくでん)の影響を受けて文人画をえがく。書にもすぐれた。1893年没、83歳。作品に「白雲青松図」など。1893年没、82歳。**江戸後期-明治期の画僧、文人**

平野四郎 (ひらの・しろう/1904～1983年)

青森県生れ。1924年青森師範学校卒、七戸で教壇に立った。30年に上京し川端画学校や小西正太郎塾で学んだ。一旦帰郷、37年再上京して都内の小学校で教諭。39年大潮展で入選を続け46年会員。75年蒼樹会の結成に参加し、第1回展で評論家協会賞、79年同展文部大臣賞。1980年没、79歳。**洋画、美教**

平野千恵子 (ひらの・ちえこ/1878～1939年)

新潟県生れ。東京女高師、津田英学塾を経て米国シーモーカレッジに入り、英文学と図書館学を学び、1896年ボストン美術館に勤務。爾来同館東洋部にあって蔵品及び図書書の整備に従った。1920年浮世絵師清長の研究に専念し、英文の著述「清長」が米国で公刊。1939年没、61歳。**版画、美研**

平野長彦(ひらの・ながひこ/1903～1975年)

鹿児島県生れ。大阪に出、矢野橋村に師事。1928年帝展に入選、以後帝展に入選。36年秋の文展鑑査展、42、43年新文展入選。46年春、秋の日展に入選、また日本画院展に出品、大阪美術協会理事。1947年大阪府文芸賞。1975年没、72歳。**日本画**

平野白峰 (ひらの・はくほう/1879～1957年)

京都生れ。独学で浮世絵や様々な日本画の画風を研究。1932年渡辺版画店より、浮世絵の研究成果を生かした新版画「湯上り」、「鏡の前」という美人画2点を発表。白峰の美人画は5点が知られている。浮世絵版画に影響を受けていることが顕著。36年アメリカ合衆国のトレド美術館で開催された第2回日本現代版画展に前述の2点の作品を出品している。1957年没、78歳。**版画、日本画**

平野政吉 (ひらの・まさきち/1895～1989年)

秋田市の商人町で米穀商を営み、県内有数の資産家でもあった平野家の三代目。青年期から浮世絵、骨董、江戸期の絵画などに興味を持ち、生涯を賭けて美術品を蒐集。1929年藤田嗣治の一時帰国時の個展を見た。34年東京の二科展の会場で、平野と藤田は出会う。36年藤田の妻・マドレーヌの急逝その鎮魂のために美術館の建設を構想。藤田の大作を多数、購入し、藤田の壁画制作も進めた。67年財団法人平野政吉美術館を設立、平野政吉コレクションを展覧する秋田県立美術館が開館し、現在に至っています。1989年没、94歳。**コレクター**

平野 充 (ひらの・みつる/1929～2021年)

水戸市生れ。茨城県立水戸中学校卒。1948年早稲田大学入学(中退)、詩作に専念。52年山本太郎、清水正吾、金井直らと同人誌『零度』発行。64年自由美術協会展に初出品、以後5回出品。66年初個展(シロタ画廊、東京)。68年個展(養清堂画廊、東京)。72年スペインをはじめヨーロッパへ旅行。東京で没、92歳。**版画**

平野米三 (ひらの・よねぞう/1949年～)

東京生れ。1977年現代日本彫刻展:宇部市。79、84年行動展・奨励賞。80年日本国際美術展(同82・84・86・88年)。81年現代日本美術展(同85年・87年)。83年神奈川県美術展・神奈川県立近代美術館賞。89年神戸六甲アイランドCITY彫刻展(90年設置)。2006年雨引きの里と彫刻 2006、桜川市。**彫刻**

平福徳庵 (ひらふく・すいあん/1844～1890年)

秋田県生れ。平福百穂の父。円山四条派の武村文海にまなぶ。1880年秋田勸業博覧会で一等賞。90年内国勸業博覧会で妙技二等賞。門下に寺崎広業ら。1890年没、47歳。**日本画**

平福百穂 (ひらふく・ひやくすい/1877～1933年)

秋田県生れ。幼少より父徳庵に画技を学び、のち川端玉章に師事する。東美校卒。結城素明ら同志と无声会・金鈴社を創立、のちには帝展審査員を務めた。「アララギ」派の歌人としても知られる。1933年没、57歳。**日本画、水彩、挿絵**

平松輝子 (ひらまつ・てるこ/1921～2019年)

東京生れ。1923年関東大震災ののち岡山県真備町に移住。49年から坂田一男が主宰したA・G・O(前衛岡山美術協会)に同人として参加。51年上京。タケミヤ画廊、日本橋画廊などで個展。61、62年読売アンデパンダン展に出品。65年渡米。ニューヨーク、ロサンゼルスに滞在、65年帰国。67年国際青年美術家展に出品。72～81年ドイツのクレフェルトに滞在。この間、クレフェルト、ケルン、ニュールンベルグ、ハーゲン、ハイデルベルグ、ミュンヘンで個展開催。81年デュッセルドルフ美術大学の講師。帰国後は東京都国立市で制作。2019年没、98歳。**洋画、前衛美術**

平山成翠 (ひらやま・せいすい?/生没年不詳)

島成園門下の女性画家で、東京の日本女子大学在学中に、成園の《宗右エ門町の夕》(1912年)を見て憧れ、卒業後に大阪へ。成園の家の前に住んだ。**日本画**

蛭田二郎 (ひるたじろう/1933年～)

茨城県生れ。1958年茨城大学教育学部卒。第6回日彫展に入選。62年日彫展で奨励賞(63年会員)。66年新日展で特選(70年日展会員、90年評議員)。72年岡山大学教育学部講師(73年助教授、79年教授、95年名誉教授)。95年倉敷芸術科学大学芸術学部長。96年改組日展で文部大臣賞。2005年日本芸術院会員。**彫刻、美教**

晝間 弘 (ひるま・ひろし/1916～1984年)

東京生れ。1940年東京美術学校彫刻科木彫部卒。39年新文展に入選、卒業制で正木記念賞。40年東邦彫塑院展で彫塑院賞。北村西望に師事。47年第3回、5、6、7回展で特選。第5回展出品作「希望」は政府買上げ。58年社団法人日展会員。80年日展常務理事。64年日展出品作で文部大臣賞、70年改組日展出品作で日本芸術院賞。80年日本芸術院会員。初期の木彫から塑像、ブロンズ等へと領域を広げ、日本彫塑会(同72年理事)にも所属し、76～79年筑波大学教授。東京で没、68歳。**彫刻、美教**

広川泰士 (ひろかわ・たいし/1950年～)

神奈川県生れ。写真集『sonomama sonomama』『STILL CRAZY nuclear power plants as

seen in Japanese landscapes』『SOUNDS FROM THE PLANET -惑星の音-』『TIMESCAPES -無限旋律-』『Whimsical Forces -時のかたち-』『BABEL-ORDINARY LANDSCAPES』『Fuji Sun』『Bus Stops in L.A. 1974-75』。講談社出版文化賞、NY.ADC 賞、文部科学大臣賞、経済産業大臣賞、日本写真協会年度賞、東川町国内作家賞。ロサンゼルスカウンティ美術館、プリンストン大学美術館、サンフランシスコ近代美術館、東京都写真美術館、東京国立近代美術館で作品が収蔵。写真

広川松五郎 (ひろかわ・まつごろう/1889~1952年)

新潟県生れ。1913年東京美術学校図案科卒。1925年パリ万国現代装飾美術工芸博覧会で銀賞。26年工芸団体「牙型」(むいれい)を創立、同人。27年帝展で特選、28年無鑑査。以後帝展、新文展に出品をつづけ、帝展審査員。32年東京美術学校助教授、35年同校教授、49年東京芸術大学教授。25年日展参事。50年染織研究団体「示風会」を創立。蠟染、友禅染、染め革など様々な技法を駆使し、新しい染色工芸における様式を作り出した戦前工芸界の重鎮。1952年没、63歳。染色、画家、美教

広島晃人・新太郎・晃甫 (ひろしま・こうと/1889~1951年)

徳島市生れ。本名新太郎。晃甫。1907年香川県立高松工芸学校、12年東京美術学校日本画科卒。白馬会洋画研究所に通い、萬鉄五郎らとアブサント会を結成。16年版画家長谷川潔、永瀬義郎と日本版画倶楽部を結成、グループ展を開催。やがて版画棄て、これまで用いていた新太郎から晃甫の雅号を用いて日本画家まる。19、20年帝展で特選。26年帝展委員。帝展に出品を重ねて審査員。30年明治神宮聖徳記念絵画館の壁画「外国使臣謁見の図(各国公使招見)」を制作。30~32年日独美術展委員としてドイツを訪れ、ベルリン民俗学博物館、ロンドンの大英博物館、パリのギメ博物館で中央アジアの壁画模写を行ない、ヨーロッパ各地を廻って帰国。1951年没、62歳。日本画、版画

広島晃甫 (ひろしま・こうぼ/1889~1951年)

徳島市生れ。香川県立工芸学校、東京美術学校日本画科卒。1909年に白馬会洋画研究所に入り、後に画家の萬鉄五郎らとアブサント会を興す。12年東京美術学校日本画科卒。その後、長谷川潔、永瀬義郎と共に日本版画倶楽部を結成。第1回帝展、第2回帝展で特選になり名がられるようになる。帝展審査員、新文展審査員などを歴任した。1951年

没、62歳。版画、日本画

広瀬花隠 (ひろせ・かゐん/生誕年不詳)

京都の人。はじめ狩野派をまなぶ。のち三熊花真(みくまかてん)の門にまゐり、の花真となじく桜花の絵を得意とした。1824年京都から江戸へ。作品に「花隠桜花帖」など。江戸後期の絵師

広瀬きよみ (ひろせ・きよみ/1949年~)

東京生れ。女子美術大学卒業。佐藤太清に師事。1970年日展入選。86、89年日展特選。96年菅楯彦大賞展準大賞。日展会員。95年に女子美術大学教授。14年女子美術大学を退職。日本画、美教

広瀬操吉 (ひろせ・そうきち/1895~1988年)

兵庫県生れ。姫路師範卒、関西芸術院、本郷洋画研究所に学んだ。はじめ千家元麿の「詩」同人となり、1921年からその後継誌「詩の家」の編集に従事した。牧歌的な詩風で詩集「雲雀」「空色の国」のほか美術評論書がある。1988年没、93歳。詩人、洋画

広瀬台山 (ひろせ・たいざん/1751~1813年)

岡山県生れ。津山藩士。大坂で福原五岳にまなぶ。藩主の近習として江戸詰めとなり、谷文晁(ぶんちょう)、大窪詩仏(おおくぼしぶつ)らと交際した。作品に「山静日長図」がある。1813年没、63歳。江戸中期-後期の絵師、武士

広瀬東畝 (ひろせ・とうぼ/1875~1930年)

高知県生れ。はじめ天野瘦石に、のち荒木寛畝(かんぼ)に師事、25歳ごろから文展、帝展などに出品。東京高工、京女高師教授をつとめた。1930年没、56歳。作品に「よぶかたへ」「谷間の雪」など。日本画、美教

廣瀬不可止 (ひろせ・ふかし/1903~1983年)

福岡県生れ。福岡中学を中退、上京してヲリルレロ玩具製作所で人形を製作し、その後帰郷して博多人形師に一時入門。独学で彫刻を学ぶ。1933年二科展入選、以後会友、会員。

二科西人社創立に参加。戦前の築港博覧会や福岡美術会、戦後の西部美術展に出品。40年県美術協会創設、49年同協会再興に創立会員、のち副会長。戦前の具象彫刻から、戦後は抽象に転じ、独自の表現を追求。1983年没、80歳。人形、彫刻

広瀬通秀 (ひろせ・みちひで/1920～2015年)

大分県生れ。旧制日本大学専門学部芸術科で柳亮、海老原喜之助、岡田謙三らに師事。1948年独立美術協会会友。69年同会員。県美術協会委員として県内美術振興。県立別府緑丘高校、県立芸術短期大学、大分大学等で永く教鞭を取り、多くの後進を育成した。この間、独立展を中心に国際形象展、個展等を通じて作品を発表し、68年には独立賞。80年アジア現代美術展に招待出品。81年渡欧してイタリア、フランスを歴遊し、以後、宗教的テーマに取り組むようになった。2015年没、95歳。洋画、美教

広瀬臺山 (ひろせ・たいざん/1751～1813年)

大坂生れ。津山藩士の子。大坂文人画壇の重鎮であった福原五岳に就いて画法を学ぶ。1781年江戸定府を命ぜられ、以後、江戸で活躍、50歳頃から、関東の文人たちとの交友を深めるとともに、作品数も増えていく。住み慣れた江戸を離れ津山に戻る際には、交友の深った増山雪斎・谷文晁・大窪詩佛・僧雲室等が送別の書画を贈っていることが、現存作品より知られる。臺山は、『八種画譜』や『芥子園画伝』といった中国の画譜の方法論を学ぶ。細密な筆致で謹厳な印象を受ける格調高い作例が多い。1813年没、62歳。江戸後期の絵師

広田百豊 (ひろた・ひゃくほう/1876～1955年)

石川県生れ。1897年石川県師範学校卒、江沼郡内の小学校に勤務。1907年に動橋(いぶりばし)小学校校長、08年京都の小学校に転勤。11年教職を辞し竹内栖鳳に師事。11年文展で文部大臣褒状、宮内省買い上げ。16年まで連続入選。18年の文展改組に際して同志と文展を離脱し、日本自由画壇を設立。22年にヨーロッパ遊学。金城画壇の特別会員、36年兼六園内の金沢霊沢の天井に竜の絵を描く。1955年没、79歳。日本画、教

廣長威彦 (ひろなが・たけひこ/1935～2021年)

福島県生れ。英国ロンドンの大英博物館に2作品が所蔵。日本各地の民家を中心に、失われていく日本の原風景を描き続けました。自刻・自刷の美しい木版画を中心に、油彩・水彩

と60年の画業をかけ追求めた、2021年没、85歳。版画、水彩、洋画

平林真砂 (ひらばやし・まさ/1938～2016年)

東京生れ。1960年早稲田大学教育学部国文科卒。67年神奈川県女流美術家展で会員。86年行動展で会友、2015年会員。2016年没、78歳、洋画

平福穂庵 (ひらふく・すいあん/1844～1890年)

秋田県生れ。四条派の画家竹村文海に学び、1861年に京都に上り、社寺に伝わる古画の模写や風物写生により自己研鑽。帰郷後の72年函館を訪れてアイヌの暮らしや風俗にひかれ、アイヌをモチーフとした作品を描いた。80年秋田勸業博覧会で1等賞。その後、東洋画会の学術委員、86年に上京。東陽堂の美術雑誌『絵画叢誌』の編集。90年内国勸業博覧会で妙技2等賞、宮内庁買い上。四条派を基調に、写実表現をさらに追及した作品は近代日本画のなかでも先駆的であり、荒木寛畝、橋本雅邦らと並び東京画壇の十大家と称された。1890年没、46歳。日本画

広井力 (ひろい・つとむ/1925～2022年)

東京生れ。1945年東京高等師範学校芸能科卒。50年イサム・ノグチに師事。59年カルフォルニア美術工芸大学で構成および彫刻の指導・研究。62～63年にオハイオ州立大学、72～73年にデンパー大学。61～62年ホテルオークラの石彫壁・木彫壁・セラミック壁・プール等を設計制作。65年川島織物市原工場内メモリアル・ポールの設計、石彫制作。第1回現代日本彫刻展 2回も、3回で宇部市野外彫刻美術館賞。85年モダン・アート協会展で作家大賞。88年東京学芸大学教授、同附属世田谷小学校を定年退官。東京学芸大学名誉教授。91年長野市野外彫刻賞。2022年没、97歳。彫刻、美研、美教

広川松五郎 (ひろかわ・まつごろう/1889～1952年)

新潟県生れ。1913年東京美術学校図案科卒。25年パリ万国現代装飾美術工芸博覧会銀賞。25年パリ万国現代装飾美術工芸博覧会で銀賞。26年工芸団体「无型」(むいけい)を創立、同人。27年帝展で特選、28年無鑑査、以後帝展、新文展に出品をつづけ、帝展審査員。32年母校東京美術学校助教授、35年同校教授。50年日展参事。50年染織研究団体「示

風会」を創立。蠟染、友禅染、染め革など様々な技法を駆使し、新しい染色工芸における様式を作り出した戦前工芸界の重鎮。代表作に「蔦染文武紋壁掛」「手織つむぎ友禅壁掛」。1952年没、63歳。染色、日本画、美教

広瀬 憲 (ひろせ・けん?/1908~1948年)

1908年生れ。自由美術家協会々員。抽象絵画に特異な個性をもち甘味ある色彩を示していた。1948年没、40歳。洋画

弘瀬洞意・絵金 (ひろせ・どうい・えきん/1812~1876年)

高知県生れ。土佐で狩野派を学び、江戸に出て土佐藩御用絵師の前村洞和に師事。土佐藩家老家・桐間家の御用絵師となるが、やがて「贋作事件」で失脚し、町絵師に下った。絵金が様式を確立した「芝居絵屏風」は、地元の祭礼に奉納され、祭りのたびに飾る文化が現代にまで受け継がれる。「絵師金蔵」を略した通称「絵金」は、絵師全般を指す言葉としても流布した。1876年没、64歳。江戸後期-明治の絵師

廣瀬東畝 (ひろせ・とうほ/1875~1930年)

高知県生れ。南画を天野瘦石に学ぶ。1898年上京して荒木寛畝に日本画を学ぶ。文展入賞6回、その作品は数回宮内省に買い上げ。27、29年帝展無鑑査。た東京高等工業学校教授などを歴任し、土陽美術会本部会員。1930年没、56歳。日本画、美教

広瀬弘幸 (ひろせ・ひろゆき/1964年~)

神奈川県生れ。2011年「第47回神奈川県美術展」神奈川県民ホールギャラリー12, '13, '14, '15, '16, '17, '18, '19)。13年「上野の森美術館大賞展」上野の森美術館。15年「神奈川県美術展」神奈川県民ホールギャラリー、神奈川県(神奈川県立近代美術館賞)。18年「FACE展2018 損保ジャパン日本興亜美術賞展」東郷青児記念損保ジャパン日本興亜美術館。洋画

廣瀬義男 (ひろせ・よしお/1925~2017年)

1925年生れ。独立美術協会会員。神奈川県立近代美術館に作品収蔵。2017年没、92歳。洋画

広津雲仙 (ひろつ・うんせん/1910~1989年)

長崎県生れ。1951年辻本史邑に学ぶ。56年日展特選。59年これ以後日展審査員を続ける。72年日本芸術院賞。兵庫県文化賞、長崎県文化功労者表彰。1989年没、79歳。日本画、墨画

廣長威彦 (ひろなが・たけひこ/1935~2020年?)

福島県生れ、24歳の時に合掌造りの写生をしたことをきっかけに、全国各地にある民家をスケッチしはじめました。79歳になっても各地をバイクで走り続け、スケッチだけでも1万点を超す。地元の福島県の雑誌『文化福島』の表紙や解説を長く勤めていて、日本の生活文化を次の世代につなぐことにも力を入れていました。2020年没、85歳。? 版画

広 信 (ひろのぶ/生没年不詳)

嘉永から明治はじめに活躍。広貞の門人。上方の浮世絵師。五葉亭・五浦亭・白水などと号す。上方の浮世絵

広橋 勲 (ひろはし・いさお/1953年~)

長崎市生れ。九州産業大学デザイン科を中退後、福岡市内でグラフィック・デザイナーとして活動。1989年現代美術作家のグループ展に出品し、以後現代美術家として作品の発表。90年福岡市天神のイムズ主催による現代美術公募展「九州コンテンポラリーアートの冒険」に入選。2005年には三菱アルティアム(福岡市)で個展を開催。近年はインクジェットプリント等も用いながら、絵画を成立させる色面とイリュージョンの関係を探っている。現代美術

広吉研介 (ひろよし・けんすけ?/1938年~没年不詳)

熊本県生れ。1957熊本県立熊本工業高等学校電気科卒。59年観光会展で観光賞、会員。60年東光会展で斎藤与里賞。美術評論家の土方定一は、館長でもあった鎌倉近代美術館に1973年から続けて3年、彼の一連の作品「魚のある静物」を買い上げた。77年熊日総合美術展でグランプリ。洋画

広渡一湖 (ひろわたり・いっこ/1644~1702年)

熊本県生れ。長崎で広渡心海にまなび、その姓をつぐ。のち来日中の清(しん)(中国)の陳清齋や渡辺秀石に師事した。元禄(げんろく)12年長崎奉行により唐絵目利(からえめきき)兼絵師にえらばれ、渡辺派とともに長崎画壇の中心となった。1702年没、59歳。江戸前期の絵師、長崎漢画派

広渡心海 (ひろわたり・しんかい/1596～1685年)

佐賀県生れ。肥前武雄の人。狩野洞雲の門人。武雄鍋島家の絵師となり、長崎で末次小左衛門(のちの広渡一湖)に画法をおしえる。延宝2年御所造営のとき、師の洞雲とともに障壁画をえがいた。法橋(ほつきょう)。1685年没、90歳。江戸前期の絵師

102



傅益瑤 (フーイーヤオ/1947年～)

南京生れ。1980年来日、武蔵野大学、東京芸大で学ぶ。90年倫雅美術奨励賞。95年神道文化奨励賞特別賞。傅抱石画伯の娘傅益瑤:日本留学から10年余、現代中国画壇の巨星傅抱石(1904-65)を父に持ち、水墨山水画の世界を描く。日本では平山郁夫画伯の研究室で勉強。水墨

風外本高・風外 (ふうがい・ほんこう/1779～1847年)

伊勢生れ。9才で得度。この頃画僧月僊の粉本を盛んに模写。19才で但馬の龍満寺玄樓奥龍の会下に参じ、名を本高と改め、風外と号した。30才で玄樓より大法を嗣承。1833年三河香積寺の住職。12年から出雲への来遊は6度に及ぶ。池大雅の作品に感化され画風を転換。大雅風の柔らかい筆致と淡彩による人物画や山水画を当地に多く残した。26年来雲の折には、勝部家で『芥子園画伝』を講義。横山雲南(後の黄仲祥)がこれを聴講し、文人画家を志す契機となった。1847年没、68歳。江戸後期の画僧、文人画

深井清華 (ふかい・せいけい/1827～1888年)

深井家は代々吉田藩主大河内家の家老職で、廃藩当時は御中老だった。明治初期に写真家で画家の下岡連杖に師事し、はじめて豊橋に写真術を移入、大手に深井写真館を開業。渡辺小華が豊橋に来たのを機に、小華について画を学んだ。1888年没、62歳。写真、日本画

深江蘆舟 (ふかえ・ろしゅう/1699～1757年)

京都生れ。京都銀座年寄筆頭役深江庄左衛門の長男。父の同僚中村内蔵助(くらのすけ)が尾形光琳(こうりん)の庇護(ひご)者であったことから、光琳や宗達(そうたつ)派の画風をまなぶ。1757年没、59歳。作品に「鶯の細道図屏風」など。江戸中期の絵師、琳派

深尾庄介 (ふかお・しょうすけ/1923年～)

東京生れ。1941年東京美術学校入学。47年毎日新聞社主催連合展・第11回新制作協会展以後'81年まで出品。49年読売アンデパンダン展。52年新制作作家賞。55年シュル美術賞展佳作・第1回個展(村松画廊)以後個展。75年東京展創立参加、以後毎回出品。76～79 インド・ネパール・インドネシア・中国旅行。2001年没、78歳。東京展にて顕彰故展。洋画

深作秀春 (ふかさく・ひではる/1953年～)

横浜市生れ。1981年国立滋賀医科大学卒。87年横浜市深作眼科開院、同院院長。2012年多摩美術大学院修了、アート・スチューデント・リーグ・オブ・ニューヨーク就学。14年深作眼科六本木院開院 Hideharu Fukasaku Gallery Roppongi を開設。FEI PRINT AWARD 大賞を開催。メセナ、開業医、洋画

深瀬昌久 (ふかせ・まさひさ/1934～2012)

北海道生れ、日本大学芸術学部写真学科卒。日本デザインセンターや出版社勤務などを経て1968年独立。60年代初頭よりカメラ雑誌を中心に、身近な人々や私生活を撮影した写真作品を多数発表。74年米国ニューヨーク近代美術館で開催された企画展「New Japanese Photography」に出品し、海外で注目。77年第2回伊奈信男賞、92年第8回東川賞特別賞。201

2年没、78歳。2023年東京都写真美術館で個展。写真

深田直城（ふかだ・ちよくじょう/1861～1947年）

滋賀県生れ。森川曾文(そぶん)にまなぶ。内国勸業博覧会、全国絵画共進会に出品。1907年正派同志会展審査員。大阪にすみ、後進を指導した。1947年没、87歳。日本画

深水公道（ふかみ・こうどう/1922～1992年）

福岡県生れ。東京美術学校で藤島武二、南薫造に学び、1945年同校卒業。自由美術家協会展に出品し、56年に会員。64年主体美術協会に創立会員として参加、主体展を活躍の場とする。83年以降、国際形象展に3回招待出品し、個展を数多く開催。また、和泉短大や玉川学園女子短大などで教授を務めた。繊細な色感と力強いタッチにより、箱根や九州の山々など雄大な風景を描いた。1992年没、70歳。洋画、美教

深水賀秀（ふかみ・がしゅう/1953年～）

熊本県生れ。長崎を経て、福岡在住。大学卒業後、畦地梅太郎・浅野竹二の作品に出会い木版画をはじめ。作品は、人や猫、鳥や魚、果物など身近な生き物たち。日常のよろこびにあふれた心象の世界が表現され、懐かしいぬくもりにみち、やがて訪れる歓びの予感にもつながっている。版画(木版)

深見 隆（ふかみ・たかし/1926～2007年）

長崎県生れ。1946年長崎県師範学校卒。48年上京、1952年行動展に入選。54年四人展(他に田中稔之、朝比奈隆、前川桂子)を養清堂画廊で開催。55年行動四人展(他に田中稔之、朝比奈隆、前川桂子)を上記画廊にて開催。55行動展で行動美術新人賞、会友。56年朝日新聞社選抜秀作美術展(会場、日本橋三越)に出品。56年行動展で行動美術賞、59年行動美術協会の会。60年安井記念賞。川崎市で没、81歳。洋画

深海竹治（ふからみ・たけじ/1849～1898年）

1849年生れ。深海平左衛門の次男。肥前有田(佐賀県)の人。画を柴田花守にまなび、のち長崎にでて鉄翁祖門(てつとうそもん)に師事。彫刻にもすぐれ、兄墨之助(すみのおすけ)をたすけて染め付けの技術に工夫をこらした。1897年明治30年有田徒弟学校の教師となる。1

898年没、50歳。陶芸、染め付け、彫刻

府川一則 3代（ふかわ・かずのり III/1870～1934年）

江戸生れ。初代府川一則の四男。彫金術は兄の二代目府川一則に学ぶ。1899年内国勸業博覧会へ鉄製の鐺を出品。金工家の関口一也に就いて絵画を学び、伊藤勝見に教えを受け、特に刀剣装具の製作に熱中。98年小さな手釘に日光陽明門の神橋を彫刻するにあたり、日光へ実地踏査を行った。実地で写すことにこだわり、その写生帳は数十冊に達する。1923年三代目府川一則を襲名した。1934年没、65歳。彫金

吹田文明（ふきた・ふみあき/1926年～）

徳島県生れ。1947年徳島師範学校卒。1957年日本版画協会展・恩地賞。65年アメリカ・ノースウェスト国際版画展・大賞。67年サンパウロ・ビエンナーレ・版画部門最高賞。69年多摩美術大学教授。86年モダンアート'86・作家大賞。94年日本版画協会理事長。2004年日本美術家連盟理事長。日本版画協会理事、日本美術家連盟理事長。版画

福井 勇（ふくい・いさむ/1908～1988年）

京都生れ。1928年京都府師範学校本科卒、京都市立下鳥羽小学校教員。30年間京都府内の小、中学校教員。33年関西美術院研究科を修了し、33年二科展に入選。43年同会解散を前に会友。31年全関西展に、35年より京都市展に出品し、たびたび受賞。戦後は行動美術協会の結成に参加、46年同展に出品し、また、46年京都市展に出品。京都市展、大阪市関西総合展、京都洋画総合展などで審査員。69年より関西美術院理事となり、院の経営、指導。68年より京都精華短期大学教授、理事長。1988年京都で没、80歳。2023年星野画廊で遺作展。美教、洋画、京都精華短期大学理事長、美教

福井市郎（ふくい・いちろう/1893～1965年）

奈良県生れ。大正時代は芦屋浜に住み、1921年神戸で洋画家グループ「コルボオ」を結成。銅版画を始め、21年の日本創作版画協会展に出品。25～28年に渡仏、サロン・ドートンヌに2回入選。28年国画会に出品。29年川西英らと「三紅会」結成。30年兵庫県美術家連盟創立に参加。35年無所属。その後「神戸絵画館」という画廊を主宰した。銅版画に秀作が多い。1965年没、72歳。版画、洋画、画廊

福井謙三（ふくい・けんぞう/1904～1938年）

神戸市生れ。1924年東京美術学校洋画科に入り、長原孝太郎、小林万吾、岡田三郎助に師事、在学中帝展に入選。25～32年渡仏。34年銀座資生堂に帰朝個展を、翌年新宿ノーヴにて第2回帰朝展を開いた。春陽会には第7、12、13、15回等に出品。「福井謙三画集」（造形文化協会発行）がある。1938年没、34歳。洋画

福井江亭（ふくい・こうてい/1866～1937年）

江戸生れ。1878年洋画を学び、後南画を学ぶ。84年川端玉章に師事し同門下の俊才。1801年日本美術協会で1等賞、03年青年絵画共進会で1等褒状。98年日本画会の設立と共に審査員、99年平福百穂、結城素明等と無声会を組織。03年名古屋高等工業学校教授。09年東京美術学校教授、16年同校教授を辞し、31年在支5年間の作品展を丸ビルに開催。1937年没、71歳。日本画、美教

福井爽人（ふくい・さわと/1937年～）

北海道生れ。日本大学芸術学部を中退、1961年東京芸術大学に入学。67年東京芸術大学大学院を修了。芸大助手となり法隆寺金堂壁画再現模写に参加。73年イタリア初期ルネサンス壁画調査団員として初渡欧。84年東京芸術大学で教鞭、91年日本画科の教授。2002年日本美術院理事。05年東京芸術大学を退任。日本画、美教

福井良之助（ふくい・りょうのすけ/1923～1986年）

東京生れ。1936年聖学院中学校に入学し、光風会会員島野重之に師事。44年東京美術学校工芸科鍍金部卒。46年太平洋画会展に入選、一等賞。54年自由美術家協会展で佳作賞。59年日本橋画廊で孔版版画による個展を開きアメリカの画商らに認められた。63年米・NYのウエイ画廊で個展。61年より日本国際美術展、62年より現代日本美術展、東京国際版画ビエンナーレ展、63年リュブリアナ国際版画展に出品。65年より国際形象展、72年より潮音会展に油絵を出品。『福井良之助作品集』（43年美術出版社、48年求龍堂、56年講談社）、素描集『鎌倉の道』（58年日本経済新聞社）が刊行。神奈川県で没、62歳。洋画、版画

福王寺法林（ふくおうじ・ほうりん/1920～2012年）

山形県生れ。1936年に画家を志し上京。49年日本美術院展覧会入選。51年田中青坪に師事。60年日本美術院賞・大観賞。同人。74年から毎年ヒマラヤ、ネパールを旅し、取材作品を発表。77年芸術選奨文部大臣賞、84年日本芸術院賞。94年に日本芸術院会員、98年文化功労者、2004年文化勲章。2012年没、92歳。日本画

福岡青嵐（ふくおか・せいらん/1879～1954年）

熊本県生れ。1903年東京美術学校日本画科選科卒。19年矢野橋村らと美術文芸の研究をめざす主潮社を結成、24年橋村や洋画家斎藤与里らと私立の大阪美術学校を創設。青龍社社人、青龍社展に出品。連作など歴史人物画を得意とする。1954年没、75歳。日本画

福岡道雄（ふくおか・みちお/1936～2023年）

堺市に生まれる。1955年堺市立工業高校建築科卒。大阪市立美術研究所で彫刻を学ぶ。58年大阪の白鳳画廊で初個展。砂型に石膏を流し込んだ《SAND》シリーズを発表。以後、樹脂を風船状にふくらませることによって空気を彫刻化することを試みた《ピンクバルーン》や、アトリエの周囲の日常的光景を黒い直方体の上に再現する風景彫刻を制作。77年中原悌二郎賞優秀賞。98年頃から黒いプラスチック板に「何もすることがない」などの小さな文字を一面に刻んだ作品を発表。反芸術、前衛。2000年伊丹市立美術館で「福岡道雄新作展」を開催。2023年没、87歳。彫刻

福士朋子（ふくし・ともこ/1967年～）

青森県生れ。女子美術大学付属高等学校、女子美術大学芸術学部洋画科油絵専攻卒。東京芸術大学大学院美術研究科絵画専攻油画修士課程修了。文化庁芸術家在外研修員としてペンシルベニア美術アカデミー(Pennsylvania Academy of the Fine Arts)へ留学し修士課程修了。2005年東京芸術大学大学院美術研究科博士後期課程美術専攻油画修了。東京芸術大学に博士論文「境域をうつす絵画：《絵画-マンガ》」往還による多視点・意識・身体の考察を提出し博士(美術)の学位を取得。東京芸術大学美術学部非常勤講師を経て2008年女子美術大学芸術学部美術学科洋画専攻准教授。15年同教授。専門の油彩画の他に漫画も描いている。美教、洋画

福島 繁太郎 (ふくしま・しげたろう/1895～1960年)

東京生れ。株式仲買人で、日露戦争による相場急騰で財を成した福島浪蔵の子。1921年東京帝国大学法学部政治学科卒。22年までイギリスに留学し、23年にフランスへ渡り、長くパリに滞在、滞仏期間中に同時代の多くの画家と交流し、特にジョルジュ・ルオーと親しく交際し。多数の絵画を収集して、いわゆる「福島コレクション」を形成し、その多くを日本にもたらした。28、29年パリでジョルジュ・ワルドマー (George Waldemar) を中心とする美術評論誌『フォルム (Formes)』を創刊した。33年暮れに帰国した前後からコレクションの展覧会を企画するとともに、帰国後は美術評論家として活動。、銀座にフォルム画廊を開いた1960年没、65歳。66年ブリヂストン美術館で「旧福島コレクション展」が催され、ルオー、マチス、ドラン、ピカソなどの作品49点が一堂に展示。 **画商、美評**

福島善三 (ふくしま・ぜんぞう/1959年～)

福岡県生れ。小石原焼の窯元に生まれる。朝倉高校から福岡大学に進み、1982年卒業後、家業を継ぐ。91年、2001年と西部工芸展で、03年日本伝統工芸展で、最高賞。2000年福岡県文化賞(奨励部門)を、04年 MOA 岡田茂吉賞優秀賞。陶土や釉薬などはすべて地元で採取した原材料から作り出し、飛鉋など小石原焼の伝統技法も用いながら、鉄釉や赫釉、あるいは中野月白瓷など多彩な技法を駆使してシャープでシンプルな造形を生み出す。17年小石原焼で重要無形文化財保持者に認定。 **陶芸、小石原焼**

福島隆壽 (ふくしま・たかし/1931年～)

岡山県生れ。1955年東京藝術大学美術学部卒。1984、85年光風会展安田火災美術財団奨励賞。91、98年改組日展特選。92年岡山県芸術顕彰(大賞)。日展会員、光風会会員。 **洋画**

福嶋則夫 (ふくしま・のりお/1949年～)

石川県生れ。1963年頃より、建具の修業を始める。独立後、75年頃より展覧会出品を始め、金沢市工芸展、石川の伝統工芸展で入選、受賞を重ねる。85年(1985)伝統工芸木竹展、日本伝統工芸展に入選。2015年伝統工芸木竹展において、文部科学大臣賞。神代杉を中心に、素材の肌合いと色、木目を活かした、端正で温かみのある作風を確立し、柱目材に板目材を象嵌した作品で新しい境地を拓いている。 **工芸(木竹)**

福島秀子 (ふくしま・ひでこ/1927～1997年)

東京生れ。1951年文化学院卒、51年秋山邦晴、北代省三、山口勝弘、鈴木博義、武満徹、福島和夫とともに前衛集団「実験工房」を結成、参加。第1回発表会では、美術を山口、北代とともに担当。その後福島は、舞台衣裳を担当。戦後から抽象表現を試みていた福島は、画家としても、絵筆をつかわず、円形の型を推して画面を構成する抽象絵画を制作。東京で没、70歳。 **洋画、音楽**

福島 誠 (ふくしま・まこと/1932～2020年)

東京生れ。1960年武蔵野美術大学西洋画科卒。61年新制作協会会員、日本美術家連盟会員。62年日本道路公団広報室嘱託(非常勤)～'03。65年東京電気大学建築学科非常勤講師～'08。70年多摩美術大学油画科 助教授、88年同大学教授。洋画。2020年没、88歳。 **洋画、美教**

福島瑞穂 (ふくしま・みずほ/1936年～)

広島県生れ。1956年女子美術大学芸術学部洋画科卒。60年女流画家展 女流画家協会賞、独立展 奨励賞(65、71)、61年マリー・オクシリアトリス修道会よりフランスへ留学、彫刻家オジップ・ザッキンに師事。その間サロン・ド・オートヌ出品、個展(マルセル・ベルネーム画廊)、ル・サロン出品 オル賞。67年独立展 独立賞、昭和会展。72年独立美術協会会員。73年女流画家協会委員。92年「福島瑞穂、熱狂の近作 1985-1992」展(スライブハウス美術館)。99年「福島瑞穂の世界」展(池田 20世紀美術館)。 **洋画**

福島柳圃 (ふくしま・りゅうほ/1820～1889年)

埼玉県生れ。江戸で四条派の柴田是真に師事し、のち文人画に転じる。雪景色を得意とした。1889年没、70歳。 **江戸後期-明治の絵師**

福勢喜一 (ふくせ・きいち/1905～没年不詳)

青森県生れ。東京美術学校卒、1928年福田寛、西村健次郎とともに「躍陽社」を結成。「躍陽社」は10年ほどの活動で八戸の美術会の開拓と形成に大きな役割を果たした。福勢は「牧羊会」の主宰として水彩画展を開催。独自に精力的に制作活動を続け、数々の賞を

受けるとともに後進の指標となった。八戸市美術館で福勢喜一展。**洋画、水彩**

福田 寛（ふくだ・かん/1901～1950年）

青森県生れ。県立八戸中学校卒、1921年東京美術学校卒。香川県高松高等師範学校、函館女子校を経て八戸に帰り、八戸高等女学校、青森女子師範学校、そして、44年八戸中学校につとめた。34年十和田湖風景画会を組織、東奥展審査員などもつとめ、後輩の育成、指導、帝展にも数度入選。1950年没、50歳。**洋画、美教**

福田啓二（ふくだ・けいじ/1890～1964年）

東京生れ、1914年東京帝国大学造船科卒。日本の造船工学者、海軍軍人。海軍技術中將正四位勲二等（旭日重光章・瑞宝章）。第二次世界大戦終結後は、チャーチル会に属して大和など戦艦の油彩画や素描を描き、晩年には戦艦建造に関する執筆もおこなった。1964年没、74歳。**洋画**

福田浩湖（ふくだ・こうこ/1883～1959年）

東京生れ。佐竹永湖に師事、南画を学ぶ。日本美術協会展で受賞、文展・帝展にも多数入選。日本南画院の再興に尽力、最長老の同人。東京で没、76歳。**南画**

福田剛三郎（ふくだ・こうざぶろう/1886～1977年）

青森県生れ。1890年福田家の養子。1905年小石川の水道町で水彩画研究所を主宰する大下藤次郎のもとで学んだ。さらに黒田清輝らが結成した白馬会に入会、07年頃には中村不折、中川八郎らとともに展覧会を開催。のちに帰郷し当時日本画が盛んだった八戸市で最初に油彩画を始め、普及につとめた。1977年没、91歳。**水彩、洋画**

福田繁雄（ふくだ・しげお/1932～2009年）

東京生れ。1956年東京芸術大学美術学部図案科卒。会社員を経て58年に独立。1970年開催の日本万国博覧会（大阪万博）公式ポスター、75年にポーランドで開催された戦勝30周年記念国際ポスター・コンクールで最高賞『VICTORY』などポスターやシンボルマーク、イラストレーションで知られる。85年国際科学技術博覧会（つくば科学博）「子供広場・さがし絵の森」や「UCC館」の展示、オブジェ、玩具、彫刻を手がける。2000年から日本グラフィッ

ク・デザイナー協会会長。72年ワルシャワ国際ポスタービエンナーレで金賞、86年毎日芸術賞、87年ニューヨーク・アートディレクターズクラブ ADC の「名誉の殿堂賞」。97年紫綬褒章。東京で没、77歳。**グラフィック・デザイナー、オブジェ、玩具、彫刻**

福田新生（ふくだ・しんせい/1905～1988年）

福岡県生れ。1922年福岡県豊津中学校卒。25、26年光風会展で光風賞。26年川端画学校修了。26年帝展に入選。29～34年槐樹社の解散により旺玄社の会員。40年より一水会展に出品、40年岡田賞。46年一水会会員。50年会員佳作賞、52年同賞を受け同年一水会委員。48年日展で特選。55年渡欧し翌年帰国。日展審査員、60年日展会員。70年改組日展で内閣総理大臣賞。80年日展参与。東京で没、82歳。**洋画**

福田翠光（ふくだ・すいこう/1895～1973年）

京都生れ。祖父は豪商福田理兵衛。京都市立美術工芸学校卒、西山翠嶂に、のち岡神泉に学ぶ。青甲社展、帝展、日展を中心に活躍。花鳥画を中心に四条派の伝統を生かした写実中心の厳しい画風を作りあげた。1973年没、77歳。**日本画**

福田太華（ふくだ・たいか/1796～1854年）

熊本生れ。村井蕉雪に学んだ。熊本藩の馬医だったが、故実学をよくし武器書画などの御用を仰せつかったと思われる。元寇での竹崎季長の活躍を描いた《蒙古襲来絵詞》を模写で知られ、「肥後土佐派の祖」と称されている。1854年没、59歳。**江戸後期の絵師**

福田 亨（ふくだ・とおる/1994年～）

北海道生れ。2013年北海道おといねっふ美術工芸高校卒。2015年京都伝統工芸大学校木工専攻卒。木象嵌技法の立体表現を開始。2023年岐阜県現代陶芸美術館、長野県立美術館、三井記念美術館で「超絶技巧未来へ展」17名に選抜。**彫刻(木彫)、木象嵌技法**

福田半香（ふくだ・はんこう/1804～1864年）

静岡県生れ。1813年頃から掛川藩の御用絵師で、谷文晁の門人の村松以弘(1772～1839)に絵を学んだ。20代から30代見付と江戸を行き来し、各地を遊歴し文人と交友した。尾

張出身で中林竹洞の門人、勾田台嶺にも画技を学んだ。江戸に居住。33年と考えられる渡辺崋山との出会いは、半香の画業に影響を与えた。崋山は三河の田原に蟄居中の身であったが、半香によせた信頼は厚く、かれに宛てた書簡も多い。1864年没、60歳。江戸後期の
絵師

福田美蘭（ふくだ みらん/1963年～）

東京生れ。父はグラフィック・デザイナーの福田繁雄。1987年東京藝術大学大学院修士課程美術研究科絵画専攻(油画)修了、87年現代日本美術展で佳作賞。88年個展(ギャラリーユマニテ、東京)。89年回安井賞展で安井賞。91年インド・トリエンナーレ(ニューデリー)で金賞。94年「VOCA展1994」でVOCA賞。2014年芸術選奨文部科学大臣賞(美術部門)。洋画

福田玲子（ふくだ・れいこ/1946年～）

茨城県生れ。87年主体美術協会会員。87年武蔵野美術短期大学卒。2006年常陽藝文センター郷土作家シリーズ・福田玲子個展。2009年「福田玲子展—生きているということ」つくば美術館。洋画

福地桜痴（ふくち・おうち/1841～1906年）

長崎生れ。儒医・苟庵の子、オランダ通事名村八右衛門に蘭語、江戸で守山多吉郎に英語を学ぶ。1859年幕府の通弁御用となり、61、64年随員として渡欧。68年わが国最初の新聞とも称すべき江湖新聞を発刊。70年伊藤博文、71年岩倉具視に随行して渡米。74年東京日日新聞を主宰し、初めて「社説欄」を設け執筆する。その後、東京府会議長に推されたり、明治の演劇改良に乗り出し歌舞伎座を創設。1904年東京府選出衆議員。1906年没、65歳。マスコミ、墨画、歌舞伎座を創設

福富太郎（ふくとみたろう/1931～2018年）

東京生れ。東京府立園芸学校へ進学。銀座通りの喫茶店で働きはじめる。57年キャバレーを開店して独立、64年銀座ハリウッドをオープン、全盛期には直営店29、チェーン店15を誇った。最初鎌木清方の「祭さじき」を購入。50年代後半からは浮世絵の蒐集に着手、69年『写楽を捉えた』(画文堂)を刊行。次第に浮世絵版画から一点ものの肉筆浮世絵、さらには近

代美術へと移っていく。63年河鍋曉斎作品の蒐集。64年には鎌木清方の作品を蒐めた。池田蕉園・輝方夫妻の作品も蒐集しはじめる。64年に日動画廊がオープンしたのをきっかけに洋画のコレクションを開始、吉田博の「笹川流れ」をはじめ、明治中期の作品を購入。73年岡田三郎助の「あやめの衣」を購入。「あやめの衣」は切手になった。熟慮の末、この作品を97年に手放した。73年に「福富太郎コレクション 日本美人画展」(新宿・伊勢丹)、82年に「異色の日本美術展」(東京セントラル美術館)、93年に「描かれた美しき女性たち 近代美人画名作展—福富太郎コレクション—」(銀座・松坂屋)。著書に『絵を蒐める 私の推理画説』(新潮社、1995年)、『描かれた女の謎 アート・キャバレー 蒐集奇談』(新潮社、2002年)。2018年没、86歳。コレクター

福富雷童（ふくとみらいどう/1896～1986年）

1896年生れ。幼少より絵画を好み、1925年に米国ワシントン大学に留学した折に美術を修めた。29年渡欧してもっぱら絵画を研究、「サロン・ドードンヌ」に入選。世界的作家オットン・フリエズ・マルクシャガールと親交。独自の絵の世界を切り開いた。1986年没、90歳。福富雷童記念江畑美術館。洋画、僧侶、個人美術館

福永公美（ふくなが・こうび/1872～1934年）

東京生れ。南宗派の中村芳谷に師事。明治20年代の半ばには日本銀行に勤める。役者絵で知られた浮世絵師の豊原国周に師事。その後、尾形月耕を慕って門下、1894年の日本青年絵画協会・第3回絵画共進会で三等褒状。95年日本青年絵画協会・第4回絵画共進会で三等褒状。1901年鎌木清方や山中古洞、須藤宗方らとともに烏合会を結成、その展覧会に意欲的に参加し計18回作品を出品。01年日本絵画協会・日本美術院連合絵画共進会に出品一等褒状を、02年春の同会で二等褒状、04年セントルイス万国博覧会にて一等銀牌。内国勸業博覧会でも極賞、褒賞を。1934年没、62歳。日本画

福原五岳（ふくはら・ごがく/1730～1799年）

京都に上り、池大雅に入門。大雅門第一位と評される。同門には青木夙夜・池野観了など。大坂に移り、大雅の画風を広め、大坂画壇の隆盛に一役買った。人物画は壺城百川以来の名手と評され、山水画も得意とした。懐徳堂や混沌詩社の名流と交友。三宅春楼・中井竹山・片山北海・頼春水・木村兼葭堂・葛子琴・細合半斎・慈雲・葩関月などである。

1799年没、70歳。門下に林閔苑・岡熊嶽・浜田杏堂・鼎春嶽・黒田綾山・岡本豊彦・広瀬臺山・平田玉蘊、松本奉時などがいる。1799年没、69歳。江戸中期の文人画家、大坂南画

福原義春（ふくはら・よしはる/1931～2023年）

東京生れ。資生堂創業者・福原有信の孫。1953年慶應義塾大学経済学部卒業後、資生堂入社。1987年社長、東京都写真美術館館長、企業メセナ協議会名誉会長（前理事長、前会長）、日仏経済人クラブ日本側議長、日伊ビジネスグループ日本側議長、世界らん展日本大賞組織委員会会長、テレビ東京番組審議会委員長など公職多数。銀座通連会前会長、日本広告主協会前会長なども務めた。近々では、公益法人制度改革に関する有識者会議座長を務めた。慶應義塾評議員。2018年文化功労章。2023年没、92歳。コレクター、企業メセナ協議会名誉会長（前理事長、前会長）

福本敦市（ふくもと・かずいち/1908～1989年）

長崎県生れ。幼少の頃から平戸藩の絵師であった今村豊寿に日本画を学ぶ。1918年この頃から家業の製陶業を手伝い磁器の下絵付を修得した。祖父の福本久市に三川内焼伝統の細工物を習い、今日の白磁透彫を完成。73年佐世保市無形文化財。その作陶歴は70年近くにもなり、三川内焼の伝統を伝える一人。玉泉窯第13代目の当主。1989年没、80歳。陶芸

福本達雄（ふくもと・たつお/1926～2021年）

兵庫県生れ。1952年西山英雄に師事し、青甲社にまなんだ。54年日展に入選、62、68年が特選・白寿賞。以後も日展を中心に活躍する。91年宝塚造形芸大教授。2007年日展参与。兵庫県出身。2021年没、95歳。日本画、美教

藤井霞郷（ふじい・かきょう/1898～1949年）

東京生れ。小学校卒業後、川合玉堂の門下絵を学び、1922年「下萌会」展覧会に出品。24年帝国美術院展覧会に入選、毎年特選候補として入選。日支事変のころから妻の故郷小形山に住み、作画の傍ら農業にも従事。1949年没、51歳。日本画

藤井庚子（ふじい・かのえこ/生誕年不詳～）

福井県生れ。福島大学学芸学部（美術副専攻）卒。第57回日本水彩画会展に入選（第90回展で会友推挙・第98回展で会員）。第48回福島県美術協会展で特選、第2回ふるさとの風景展入選（以降19回展まで10回入選）、第52回福島県水彩展で会員奨励賞。第61回福島県総合美術展で佳作。日本水彩画会会員、福島県美術協会会員。水彩

藤井浩一朗（ふじい・こういちろう/1963年～）

大阪生れ。1988年東京造形大学美術学科彫刻卒、90年同研究室修了。97、98年（財）ポーラ美術振興財団在外研修員としてニューヨーク滞在。92年東京野外現代彫刻展大賞。93年横浜彫刻展横浜美術館賞。95年国民文化祭野外彫刻展審査員特別賞。97年昭和シェル現代美術展入賞。彫刻

藤井多鶴子（ふじい・たづこ/1922年～）

神戸市生れ。1943年明石女子師範学校卒。53年北陸現代美術展市長賞。55年行動美術協会展、女流画家協会展初入選。58年女流画家協会会員。60年行動美術協会会員。女流画家協会毎日賞。64年女流画家協会委員。68～69年渡米。80年 VIRIDIAN Gallery (New York) のメンバー。洋画

藤井 肇（ふじい・はじめ/1933～2014年）

東京生れ。1955年金沢美術工芸大学油画科卒。62年文化庁主催県展選抜展出品。69年北陸中日美術展で大賞。70年シェル美術賞佳作。同年銀座村松画廊で個展以後毎年開催。76年日本海造型会議結成。日本海造型美術展を毎年開催。事務局長として企画・運営を担当。97年藤井肇サーカス インスタレーションを金沢市民芸術村で開催。2006年藤井肇白峰メルヘン展開催。2014年没、81歳。洋画、インスタ

藤岡紫峰（ふじおか・しほう/生誕年不詳～1956年）

茨城県生れ。1900年日本絵画協会日本美術院連合絵画共進会で3等褒状。この頃異画会の会員。11年文展で入選（その後文展4回、帝展1回入選）。23年茨城美術展に出品（以後6回出品、35年茨城会館開館記念美術展では無鑑査）。48年常北美術協会結成に賛助会員。1956年没。日本画

不二木阿古（ふじき・あこ/1896～1943年）

兵庫県生れ、15、6歳の頃島御風に師事、故北野恒富門に入り10余年の後、堂本印象門に転じた。旧帝展文展に数度入選。1937年文展で特選、41年文展無鑑査となり、印象塾東丘社に重きをなした。1943年没、48歳。日本画

藤木喜久麿（ふじき・きくまる/生誕年不詳～1961年）

1916年「ふじき美術店」(神田)を開く。19、20年日本創作版画協会展に出品。神戸の版画誌『HANGA』第4輯(1924.12)に発表。橋口五葉が版画制作をおこなっていた大正期の赤坂居住時代に、五葉の没年(1921年)まで、橋口五葉のもとで助手。五葉の《手持てる女》は五葉最期の版画作品だが、五葉が病床から指示を出し、それを藤木が受けて摺師に伝えて完成した遺作。五葉没後は「五葉の弟子」を自称。1961年没。版画、版元？

藤倉明治（ふじくら・めいじ/1934年～）

熊本市生れ。1957年成城大学卒後、フリーの写真家。60年「ネオ・ダダ」のパフォーマンスや篠原有司男のボクシング・ペインティングを撮影。65年創刊した雑誌『話の特集』の写真を手がける。『話の特集』で永六輔と「芸人」シリーズなどを連載。66年『ビートルズ・レポート』(話の特集増刊)。85年個展「ペンジュラム・フォト」(コダック・フォト・サロン東京)。98年「ネオ・ダダ JAPAN1958-1998」(アートプラザ、大分)出品。2005年篠原有司男展「ボクシング・ペインティングとオートノミー彫刻(神奈川県立近代美術館)」に写真を出品。2017年、「ギョウちゃん、”前衛の道”爆走60年(刈谷市美術館、愛知)」に写真を出品。写真、ネオタダ

藤島亥治郎（ふじしま・かいじろう/1899～2002年）

岩手県生れ。京城高工教授をへて、1933東京帝大教授。のち芝浦工大教授。四天王寺、中尊寺、法隆寺など古建築の修理を手がけた。68年芸術院恩賜賞。90年建築学会大賞。2002年没、103歳。岩手県出身。建築史家、美教

藤島淳三（ふじしま・じゅんぞう/1903～1990年）

1917年花の写生をはじめた。日本画家であった父より草花の描き方の手ほどきを受けた藤島は、牧野富太郎より教を受けたことをはじめとして、菌類学者今関六也(1904-1991)らのもとで植物を描く仕事に就いた。退職後打ち込んだボタニカルアート作品を作成。ボタニカ

ルアート協会を同志とともに創設。1990年没、87歳。日本画、ボタニカルアート

藤田 謙（ふじた・けん/1890年～1980年）

盛岡市生れ。染色技術を習得するため京都に游学、帰郷し南部紫根染の復興に尽くす。1918年中村治兵衛により、南部紫根染研究所が開設。藤田は研究所主任、染色技術の復興と新しい技術の開発に努めた。33年紫根染専門の店「草紫堂」を紺屋町に開店させた。藤田は独立後も紫根染めの研究を重ね、国内外で数々の賞を受賞。作品は皇后陛下へ岩手県から献上された。1980年没、90歳。染色、美研

藤谷庸央（ふじたに・つねお/1896～1963年）

愛媛県生れ。1916年愛媛師範学校卒。在学中から塩月桃甫の薫陶を受け、19年東京美術学校に入学。卒業後、佐賀県三養基中学を経て、1924年母校愛媛師範に帰任。29年帝展の出品作「金扇」はそうした中で好評を博した。愛媛師範は大学に移行し、彼は定年までの三〇余年間、多くの後進を指導し、人材輩出。55年愛媛県教育文化賞。1963年没、68歳。美教、洋画

藤田 弘（ふじた・ひろし/1930年～）

小松市に生まれる。教員生活のかたわら油絵を描きはじめ、1982年一水会展入選。97年一水会展金沢展北水賞。同年日展入選。13年一水会会友。一貫して枯れた向日葵をテーマとし、新たな生命の萌出るさまを力強く表出する。洋画

藤田不美夫（ふじた・ふみお/1933年～）

愛知県生れ。1956年武蔵野美術大学油絵科卒。63年武者小路実篤著「人生論シリーズ」、萩原井和泉著「芭蕉鑑賞」等の表紙、装丁。65年「鳥」「化石」「仮面」などの木版画シリーズを発表。80年武蔵野美術大学木版画グループ展に参加・巡回。87年小田急カルチャースクール木版画部門の専任講師。96年伊勢丹(松戸)・日本橋丸善・新宿三越にて個展。版画、表紙絵、装丁、美教

藤田文蔵（ふじた・ぶんぞう/1861～1934年）

鳥取県生れ。国沢新九郎の彰技堂をへて、1876年工部美術学校に入学、ラグーザに彫

刻をまなぶ。肖像彫刻で知られ、東京美術学校教授や女子美術学校初代校長。1934年没、74歳。作品に「陸奥宗光像」など。1934年没、73歳。彫刻、女子美校長

藤田隆治・平明（ふじた・りゅうじ/1907～1965年）

山口県生れ。はじめ高島北海に学び、のち上京して野田九浦に師事する。戦前は日本画会や新日本画会、青龍社展などに出品し、1936年にはベルリン・オリンピック芸術競技で銅メダル。戦後、北九州八幡に移り中央画壇から遠ざかるが、1960年代に入って再び奮起し東京で個展を開催。1965年没、58歳。日本画

藤戸竹喜（ふじと・たけき/1934～2018年）

北海道生れ。父・竹夫は彫師。65年木彫製品作成コンクールで北海道知事賞。71年札幌ソビエト領事館の依頼により「レーニン胸像」を、72年東海大学の依頼により、「東海大学総長松前重義像」を制作。75年には自身のアトリエ兼住居の藤戸民芸館が完成。99年「ANIU: Spirit of a Northern People」(スミノエ国立自然史博物館)。2014年には釧路市文化賞、15年北海道文化賞。16年地域文化功労者(芸術文化分野)。17年大規模個展「現れよ。森羅の生命—木彫家藤戸竹喜の世界」(札幌芸術の森美術館、国立民族学博物館)が開催。2018年没、84歳。彫刻、アイヌ民族彫刻家

藤浪理恵子（ふじなみ・りえこ/1960年～）

千葉県生れ。1983、85年セントラル版画大賞展に出品。、83、85年日動版画グランプリ展に出品。84年東京造形大学卒、86年多摩美術大学大学院修了。不忍画廊で個展。版画、パステル

藤野天光・舜正（ふじの・てんこう・しゅんせい/1903～1974年）

群馬県生れ。1928年東京美術学校彫刻科塑造部卒。北村西望に師事し、29年帝展で入選。38年文展特選。47年日本彫刻家連盟設立に参加。48年千葉県美術会を結成、常任理事、66年理事長。70年会長を兼任。62年日展文部大臣賞。65年日本芸術院賞。69年日展理事、73年評議員。千葉県立美術館建設に尽くした。写実主義的な作風で、師の西望が長崎市に「平和記念像」を制作する際に筆頭助手を務めた。75年勲三等瑞宝章、1974年没、71歳。彫刻

藤彦衛門（ふじ・ひこえもん/1897～1968年）

岡山県生れ。1923年東京美術学校西洋画科卒、同校研究科に進み、24年修了。25年帝展に入選。以後、帝展、日展を通して出品。37年「皇后陛下横須賀海軍病院行啓」が宮内省の買上となる。39年光風会会友となる。40年紀元2600年奉祝展に入選。42年からは高梁市に戻り制作。43年光風会会員。56年日展で委嘱、60、61年日展委嘱出品。1968年没、71歳。洋画

藤 米岳・雅三（ふじ・べいかく・まさぞう/1853～1916年）

大分県生れ。帆足杏雨に師事。名は雅三、号は米岳。1876年上京し、国沢新九郎の画塾「葦枝堂」に入門後、工部美術学校で学ぶ。83年同校廃校に伴い、工部省に出仕し官吏となる。85年、官命によりフランスに留学。黒田清輝や久米桂一郎らとともにラファエル・コロンに師事。88年のサロンに出品し入選。同地でフランス人女性と結婚後、NYに渡り、一度も帰国せずに逝去した。1916年没、63歳。洋画

藤宮 史（ふじみや・ふひと/1964年～）

2005年アックスマンガ新人賞漫画雑誌「アックス」青林工藝舎(主宰)で木版による漫画が南伸坊個人賞。08年コミック Fantasy・ファンタジー・コミック大賞、木版漫画が佳作入選。08年化庁メディア芸術祭で木版漫画集が審査委員会推薦作品。09年文化庁メディア芸術祭、木版漫画集が審査委員会推薦作品。09年にいかにマンガ大賞で木版漫画が最優秀作品賞、魔夜峰央賞。13年文化庁メディア芸術祭において、木版漫画集(青林工藝舎刊)が審査委員会推薦作品に選出。99～02年漫画家永島慎二の銅版画制作の助手。版画、漫画

藤森兼明（ふじもり・かねあき/1935年～）

富山県生れ。1958年金沢美術工芸大学油画科卒。高光一也に師事。光風会展、日展に入選。59～63年渡米。80年・84年改組日展で特選。89年愛知県芸術文化選奨文化賞。92年光風会展でつばき賞(評議員賞)。以後光風会展で96年辻久記念賞、99年田村一男賞。95年改組日展に審査員と。96年日展会員。2001年改組日展で会員賞。04年光風会理事、日展評議員。第36回改組日展で内閣総理大臣賞。08年日本芸術院賞受賞。09年日本芸術院会員。12年富山県立近代美術館「藤森兼明展 永遠の祈り」開催。洋画

藤森桂谷 (ふじもり・けいこく/1835～1905年)

長野県生れ。幼いころから和歌や書を学び、20歳頃に古曳盤谷に師事した。その後京都に上り、詩画、和歌などの学問を深めながら、勤皇の志士とも親交を結んで帰郷した。明治維新後は、郷土の教育に尽力、小学校校長などをつとめたが、1885年教育界を去って画業に専念、菱田春草や横山大観らと交流して、近代日本画への道を進んだ。**日本画、教**

藤山鶴城 (ふじやま・かくじょう/1870～没年不詳)

京都生れ。京都府画学校卒。幸野樸嶺、野村文挙に師事して四条派を修める。日本美術協会にて銅賞数回、内外博覧会、共進会、展覧会褒賞状十数回、1905年岡侍従武官長に從い、満鮮戦地を視察し写生絵巻4巻を描く。帝国絵画協会会員。没年不詳。**日本画**

藤原信一 (ふじわら・しんいち/1846～1930年)

大坂生れ。1882年山崎年信の門人。『土陽新聞』で小説の挿絵を描いた年信が土佐を去るとその後任に選ばれ、89年頃まで『土陽新聞』で挿絵を描いた。大阪に出て『東雲新聞』の挿絵を手掛ける。さらに黒岩涙香が『萬朝報』の挿絵を描いた。涙香の小説の口絵を担当し、挿絵のほか錦絵も残している。1930年没、85歳。門人に沖野一秋がいる。1930年没、74歳。**江戸後期-明治の浮世絵師、挿絵、口絵**

藤原新也 (ふじわら・しんや/1944年～)

福岡県生れ。東京藝術大学美術学部絵画科油画専攻中退。アフリカ、中近東、インド、東南アジア、台湾、東京、アメリカ、アイルランドなどを対象に、写真とエッセイを組み合わせた作品を発表。1972年の処女作『印度放浪』は単行本になる前にアサヒグラフで連載され、インド放浪記として大きな反響呼び、当時の学生運動の終息後、精神的支柱を失った青年層のバイブル的な存在。77年『逍遙游記』で木村伊兵衛写真賞。81年『全東洋街道』で毎日芸術賞。83年『東京漂流』は、大宅壮一ノンフィクション賞及び日本ノンフィクション賞に推挙されたが、本人の意思により辞退。同じ年に発表された『メモトモリ』(ラテン語で”死を想え”)は現代に生きる私たちのおぼろげなる「生」を強烈に覚醒させるほどのインパクトをあたえた。2008年『メモトモリ』21世紀エディションとして再編集して再発刊。2022年北九州市立美術館にて「祈り・藤原新也」展開催。22年世田谷美術館にて「祈り・藤原新也」展開催。**写真、洋画、ド**

ローイング

藤原経隆・土佐経隆 (とさ・つねたか/生没年不詳)

はじめ有房を名のる。土佐権守(ごんのかみ)となり、のち土佐派の始祖といわれる。1251年 建長3年、内裏の紫宸殿(しんでん)に賢聖障子(けんじょうのそうじ)をかく。絵所預(えどころあずかり)。従五位下、中務大輔(なかつかさのたいふ)。**鎌倉時代の絵師、土佐派の始祖**

藤原留吉 (ふじわら・とめきち/1883～1940年)

福島県生れ。”独学の名工”職人の秘伝書で研究を続け、彫刻の技術の向上に努めた。留吉の作品として、広濟寺の仁王尊や同寺本堂向拝の唐獅子、龍、鳳凰の彫刻、新堀金剛寺の鬘頭廬、八幡の八幡宮の十二支などがある。神仏の彫刻以外にも個人印や団体印などの彫刻も行った。1940年没、58歳。**彫刻**

藤原隆能・2世 (ふじわら・の・たかよし II/生没年不詳)

平安末期の画家。大和絵に長じ、当代の代表的画家であり、現存の「源氏物語絵巻」の作者と伝えられる。また、鳥羽の金剛心院扉絵を描いた功により、久寿元年(一一五四)に正五位下に、翌年三河守に任ぜられている。生没年未詳。**平安末期の絵師、土佐派2世**

富士原 房 (ふじわら・ふさ/1940年～)

1940年生れ。東京で富士原は赤坂次郎・柘岡良・斎藤無沙史の3人と共に版画誌『きつき』(木津津木会 全2冊)を発行。その第1号(1940.3)に《宵桜》《花と裸婦》《独楽(蔵書票)》、第2号(1940.7)夏の巻に《[抽象]》《決心話》《花と裸婦》を発表。**版画、蔵書票**

藤原基光 (ふじわらのもともつ/生没年不詳)

珍海の父。奈良東大寺にすみ春日基光ともいわれた。宮廷絵師で、従五位上、内匠頭(たくみのかみ)となる。応徳(1084-87)のころ高野山灌頂(かんじょう)堂で性信(しょうしん)入道親王の肖像をえがいたといふ。土佐派の祖とされてきたが、確実ではない。初名は盛光。**平安後期の絵師、土佐派の祖?**

藤原吉志子 (ふじわら・よしこ/1942～2006年)

東京生まれ。1969年東京芸術大学大学院鑄金科修了後、79年渡米。86年ロダン大賞展エミリオ・グレコ特別優秀賞。93年長野市野外彫刻賞。童話のような物語性をもった親しみのあるブロンズ彫刻で知られている。《侵略の方程式》や《公害はニョキニョキ芽を出しスクスク育つ》といった、時に社会批判をはらんだ作品も制作。パブリックアートの制作、代表作は長野県美ヶ原高原美術館「草の上の午餐」、東京ウィメンズプラザ「本日の定食」。2006年没、64歳。彫刻

布施英利（ふせ・ひでと/1960年～）

群馬県生れ。1984年東京芸術大学美術学部芸術学科卒。89年同大学院美術研究科・博士後期課程修了（美術解剖学専攻）。88年著作『脳の中の美術館』を出版。博士論文「人体解剖図譜の研究」で、学術博士。大学院修了後の90年より東京大学医学部解剖学教室助手、養老孟司の下で研究生活に従事。東大助手時代の著書『死体を探せ！』（法蔵館、1993年）は、死体ブームの火付け役となる。95年批評家として独立。2021年東京芸術大学美術学部教授。著書に『体の記憶』（2006年）、『美の方程式』（2010年）、『遠近法がわかれば絵画がわかる』（2016年）。美教、美評、解剖学者

二木紫石（ふたぎ・しせき/1893～1978年）

石川県生れ。石川県立工業学校図案科に学び、のちに陶工の初代武腰善平に陶画を習い「紫石」の号を受けた。1913年から関西方面に遊歴し、岡本大更、北野恒富、橋本関雪に師事した。帰郷後に金城画壇展で会員となって活躍した。1978年没、85歳。陶画、日本画

淵上旭江（ふちがみ・きよこ/1753～1816年）

岡山県生れ。明和年間、備前・備中に来遊した大西酔月に師事。大坂で円山四条派からも影響を受け、さらに諸国を遊歴しつつ種々の画法を学び、1800年には諸国の景勝を描いて『山水奇観』を刊行。大分の地に南画がスタートをきる時期に訪れており、岡山の画人たちに種々の画法を提示。1816年没、63歳。江戸後期の絵師

淵野桂僊（ふちの・けいせん/1814?～1871年?）

19歳で江戸へ遊学し、岡本秋暉に入門。その後京摂で、西本亀年・小田海仙に学ぶ。その後は帰郷して岡藩画員。1881年伊予の医師・谷世範を訪問。周りの多くの揮毫依頼に

疲弊し同時に病を得て、愛媛県で没、67歳? 江戸後期の絵師

文月恵津子（ふづき・えつこ/1955～2020年）

横浜市生れ。神奈川工業高校産業デザイン科グラフィックコース卒。企業デザイン室での勤務をへて、フリーランスのイラストレーターとして広告・出版・TVで制作。銅版画家の玉上恒夫に師事し、1992～94年にはそのアシスタント。海外在住邦人向け雑誌に掲載された宮沢賢治作品の挿絵に銅版画を用い好評を得ました。2001年の個展を皮切りに、国内外（ドイツ、イギリス、アメリカ、メキシコ、スペイン、ハンガリーなど）で銅版画とインスタレーションの発表。2020年没、65歳。イラスト、版画、インスタ

墨溪・兵部墨溪（ぼつげい/生誕年不詳～1473年）

越前(えちぜん)(福井県)の人。朝倉氏の庇護をうけたが、京都におもむき、周文の弟子となる。親交のあった一休宗純より墨溪の号をうけ、曾我(そが)派の創始者とされる。1473年没。作品に「一休自賛像」「一休賛達磨(だるま)図」など。室町時代の画僧、曾我派の創始者

不動立山（ふどう・りつざん/1886～1975年）

兵庫県生れ。1905年京都市立美術工芸学校卒。08年神戸小学校訓練、教鞭。12年京都市立絵画専門学校卒。21年西山翠嶂に師事し、青甲社の創立に参画。第6回文展に入選。帝展、新文展では無鑑査出品。京都で没、89歳。日本画、美教

舟木富治（ふなき・よしはる/1930～2006年）

福岡県生れ。1954年福岡学芸大学卒。同年自由美術家協会の創立に参加、糸園和三郎、平野遼らの感化を受けながら、63年退会するまで同会で活動。読売アンデパンダン展や九州派展などに出品。さまざまなグループ展活動を積極的に展開、地元美術振興に力を尽くした。73年からは福岡県美術協会理事を努め、県展や市美展審査員も歴任するなど後進の指導的役割も果たした。2006年没、76歳。洋画、九州派

舟越直木（ふなこし・なおき/1953～2017年）

東京生れ。父は舟越保武。1978年東京造形大学絵画科卒。83年東京で初個展。98年「インサイド/アウトサイド 日本現代彫刻の8人」(新潟県立近代美術館)に出品。2000年「シリ

ーズⅦ[岩手の現代作家]舟越直木・阿部陽子]展(萬鉄五郎記念美術館)を開催。03年「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ 2003」(新潟県)に出品。06年「開館 20 周年記念 世田谷美術展」(世田谷美術館)に出品。東京で没、64歳。彫刻

船越靈戒 (ふなこし・れい かい /1874～1947 年)

岩手県生れ。月浦山凌雲寺二十一世住職。達磨の靈戒と称され、達磨を得意とした。若い頃から画才に優れ、菊池黙堂に師事。戦時中は、曹洞宗本山布教師として全国を絵行脚。八戸にもたびたび訪れ多数の達磨図、蘭画などを残している。1947年没、73歳。画僧、日本画

古市金峨 (ふるいち・きんが /1805～1880 年)

倉敷市生れ。1822-23年頃、京都に出て岡本豊彦の内弟子となり四条派を学ぶ。郷里に帰り後進の指導にあたる。46年吉備津神社本殿内陣の扉絵「松鷹図」を制作。50年頃から55年まで出雲地方で制作しもともと充実した仕事を残す。晩年には南画を取り入れて新機軸を開き、倉敷市蓮台寺の「蘭亭曲水図」などを手がけた。1880年没、75歳。江戸後期-明治期の絵師

古川智次 (ふるかわ・としづ /1941 年～)

福岡市生れ。九州大学文学部哲学科美学美術史専攻卒。1966年福岡県文化会館学芸員。80年福岡大学人文学部助教授。85年福岡大学人文学部教授。2011年定年退職。前衛絵画の先駆者。異色画家として何回か回顧展が開かれてきたものの、不明な点が多かった古賀春江の未公開作品や資料・関連情報の調査に尽力し、75年大回顧展の際には企画・図録編集を手掛け、古賀芸術の全容を明らかにし、再評価への道を開く。並行して児島善三郎や中村研一、富田溪仙など福岡県出身の画家の研究を行う。90年代以降、主に富田溪仙の研究を進めている。その後、古賀研究の第一人者のポジションは森山秀子(石橋美術館学芸員)に引き継がれ、現在に至る。編著書に『近代の美術36 古賀春江』(至文堂、1976年)、『近代の美術59 児島善三郎』(至文堂、1980年)、古賀春江文集『写真と空想』(中央公論美術出版、1984年)など。美教、美史、今日の古賀春江研究の基礎を作った人

古川通泰 (ふるかわ・みちやす /1940～2009 年)

富山県生れ。1982年新制作展に出品、86、88・91年新作家賞。86年安井賞展出品。88年日米美術協会の主催により「上野泰郎・古川通泰2人展」をニューヨークで開催。フランクフルト、ベルリンなどでも個展を開催。98年「古川通泰展—北陸のこぼれ、世界のこぼれ—」(石川県立美術館)開催。2009年没、69歳。洋画

100

古川盛雄 (ふるかわ・もりお /1897～1983 年)

福島県生れ。医師古川安正の長男。1907年頃、高村智恵子に絵ほどきを受ける。27年二本松町に古川産婦人科医院を開業。28年安達太良画会を創立し初代会長。39年上海医科大学教授、43年同大学学長、46年帰国し医院を再開業。53年国際医家美術展大賞、60年福島県美術協会会長。67年福島県文化功労賞。1983年没、86歳。医師、日本画、洋画、大学長

古郡 弘 (ふるごおり・ひろし /1947 年～)

埼玉県生れ。主な作品に、1988 年「四つの川」(佐賀町エキジビットスペース、東京)、2004 年「あり！あか！おう！」(中原悌二郎賞優秀賞、金津創作の森美術館、福井)、2005 年「盆景一竜」(INAX 世界のタイル博物館、愛知)2006 年「胞衣—みしゃぐち」(大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ、新潟)、「あるてみすのいちじく」(豊田市美術館、愛知)などがある。彫刻

古澤洋子 (ふるさわ・ようこ /1968 年～)

金沢市生れ。1993年金沢美術工芸大学美術研究科修士課程日本画専攻修了、日展入選。95年現代美術展で最高賞・美術文化特別賞。青垣 2001 年日本画大賞展で兵庫県文化協会賞。98年臥龍桜日本画大賞展で佳作賞。青垣 2001 年日本画大賞展で朝日新聞社賞。2000年日春展で奨励賞。03、07年日展特選。11年「古澤洋子 日本画展—大地の証言者—」三越巡回展開催。日本画

古嶋松之助 (ふるしま・まつのお /生没年不詳)

東城鉦太郎に師事。戦時中に満州、中国北部中部に従軍画家。東城鉦太郎の「三笠艦橋の図」「日本海海戦」のレプリカを北蓮蔵ともに制作。1941年聖戦美術展に出品。41、42、43、44年海洋美術展に出品。洋画、軍事絵葉書

古田 亮 (ふるた・りょう/1964年～)

東京生れ。1989年東京芸術大学美術学部芸術学科卒。93年同大学院博士課程中退、東京国立博物館美術課絵画室研究員。988年東京国立近代美術館勤務、2001年同主任研究官、2006年東京芸術大学大学美術館助教授、2007年准教授。2021年度より教授。日本の美術史学者。専門は近代日本美術史。美史、美教

古谷紅麟 (ふるや・こうりん/1875～1910年)

滋賀県生れ。京都へ移り鈴木万年に絵を学び、1892年からは神坂雪佳に図案を学ぶ。尾形光琳に対する敬慕から紅麟の号を用いて作品を発表。96年新古美術品展覧会に出品した指物図案が入賞。その後も新古美術品展覧会への出品と受賞を重ね、同展覧会の審査員。1900年京都市立美術工芸学校の嘱託技師、05年に同校助教授。神坂雪佳の後継者と目されており、近代における日本の琳派図案の継承者。紅麟は早くから図案集の編集に関与した。『松づくし』、『伊達模様花づくし』、『竹づくし』、『梅づくし』、『扇面図案とこなつ』、『はな筏』、『写生草花模様』、『こうりむもよう』など。また、芸艸堂から1906年(明治39年)に出版した『精英 三』の内「銀世界」などの木版画が見られるが、1910年没、35年。美教、琳派図案、版画

100

古屋正寿 (ふるや・せいじゅ?/1885～1943年)

山梨県生れ。1908年東京高等師範図案専修科を卒え、13年より5年間群馬師範に奉職した。高師在学中より山内多門につき、多門没後川合玉堂の門に入り、第1回院展に入選、帝展には第5回より引続いて入選、その間第10回には特選、34年帝展無鑑査。1943年没、59歳。日本画

古屋竹原 (ふるや・ちくげん/1788～1861年)

土佐生まれ。江戸で文人画を、大坂で医学・儒学をおさめ、郷里の土佐高知城下で塾をひらいた。山水、草木花得意とし、梅は「竹原の梅」と称された。1861年没、74歳。江戸後期の絵師、医師

109



別井鶴治 (べつい・つるじ/生没年不詳)

1922年日本創作版画協会展に木版画が入選。作品図版は4月の『版画』第1巻第3号(版画社)に掲載。出品時は東京に住む。23年『詩と版画』第2輯(詩と版画社)に木版画『降雪の日』を発表している。版画

別役月乃 (べつちやく・つきの/1901～没年不明)

高知県生れ。北野恒富の門人。美人画を専門とした北野恒富に師事。1920年帝展に入選。大阪美術展覧会に出品。22年白耀社展に発表。恒富の画塾には女性画家が多数所属していた。同門の星加雪乃、橋本花乃とともに恒富門の雪月花といわれていた。日本画

2



帆足杏雨 (ほあし・きょうう/1897～1931年)

大分市生れ。たびたび立ち寄る田能村竹田に接し、1824年竹田に正式に入門。浦上春琴、頼山陽など当時一流の文人にも接する。竹田の画によく倣ったやわらかな渴筆を中心とした描線で、情趣のある画を描き、やがて独自の画境を確立。幕末から明治期にかけては殊に画名が高まり、48年に山水図二幅を天覧に入れ、73年にはオーストリアの万国博覧会に出品。門人も数多い。1931年没、34歳。日本画

防須俊子 (ぼうす・としこ/1898～1925年)

長野県生れ。相馬愛蔵・黒光の長女。女子聖学院を経て女子学院を卒業。父の新宿中村屋に多くの芸術家たちが出入りしていた。1911年中村彝は相馬夫妻の厚意で中村屋の画室に住まわう。13年寄宿舎から週末帰ってきた俊子は敬愛する彝のアトリエを掃除し、モデルをつとめた。14年「少女裸像」東京大正博覧会美術展に出品。第8回文展の三等賞。18年インドのラス・ビハリ・ボースと俊子は結婚。1925年没、26歳。**相馬愛蔵・黒光の長女、大正期中村の彝の絵画モデル、亡命庇護者、ボースの妻**

方西園 (ほう・せいえん/1734～1789年)

1734年生れ。1780年安房(千葉県)千倉に漂着。本国送還のため海路長崎にいたる途中で富士山をえがき、清にかえってその絵が話題になった。1789年没、55歳。**中国(清)の文人画家**

朋誠堂喜三二 (ほうせいどう・きさんじ/1735～1813年)

江戸の人。秋田佐竹藩士。狂名は手柄岡持(からのおかもち)。親友恋川春町とともに、黄表紙(絵と文)の作風を確立した。寛政の改革の時、君侯の命で筆を絶つ。著「見徳一炊夢」「文武二道万石通」など。1813年没、78歳。**江戸後期の戯作者、狂歌師、表紙絵**

法邑利博 (ほうむら・としひろ/1948年～)

金沢市生れ。1967年金沢市立工業高校卒。74年二紀展出品・入選・褒賞。76年中町博志に師事し加賀友禅を学び83年に独立。斬新なモチーフの作品を制作。一時期油絵と友禅の制作を平行して行いが、後、絵画制作を主に活動。90年二紀選抜展奨励賞。91年二紀展で同人賞、安田火災美術財団奨励賞、2002年二紀会会員、03年会員賞、13年田村賞。14年石川県立美術館主催「法邑利博ー加賀の幻想ー」開催。**洋画、染色**

保坂 毅 (ほさか・たけし/1980年～)

福島県生れ。2005年武蔵野美術大学大学院造形研究科美術専攻油絵コース修了。2018年個展(双ギャラリー)グループ展に、「状況／判断」(アキバタマビ21、2016年)、「引込線 2015」(2015年)、「Primary Field II」(神奈川県立近代美術館 葉山、2010年)などがある。**造形、洋画**

星 兼雄 (ほし・かねお/1938～2020年)

新潟県生れ。NHKに勤務する傍ら絵を描き始め。神奈川県美術展で準大賞3回、神奈川県立近代美術館賞(作品買上げ)2回。東京セントラル美術館'86裸婦大賞展で優秀賞(亀谷美術館作品買上げ)、ジャパン大賞展で佳作賞。現在、国画会会員、日本美術家連盟会員、NHK学園講師。2020年没、82歳。**洋画**

星加雪乃 (ほしか・ゆきの/1900～没年不明)

大阪生れ。北野恒富の門人。永松春洋の門下の画家、星野鴨東の長女。兵庫県に住んだ。恒富が1914年に結成した画塾「白耀社」において活躍、同門の別役月乃、城田花乃、四夷星乃とともに恒富門下の「雪月花星」といわれている。1921年の帝展に出品した「お伽噺」が入った。**日本画**

星 忠伸 (ほし・ただのぶ/1947～2018年)

福島県生れ。福島県立勿来工業高等学校卒。1967年銀座の石井三柳堂に勤務し、中川一政をはじめ多くの画家と出会う。72年自宅営業の美術商として開業。77年今東光を通じて美術史家の田中一松と知り合う。一番星画廊が関わった山形県酒田市の本間美術館での展覧会の仕事なども、田中が同館の相談役を務めていた機縁によるという。87年古美術商の組田昌平の協力のもと、東京日本橋に株式会社一番星画廊を設立し、公立美術館への作品納入を中心に画廊経営をおこなう。屋号の「一番星」は中川一政の命名によるもので、開廊記念として中川一政展を開催した。96～2010年日本画家・小泉淳作による建長寺法堂天井画および建仁寺法堂天井画の雲龍図や東大寺本坊障壁画等の制作プロジェクトに関わった。2013年没、71歳。**一番画廊創設**

星野文良 (ほしの・ぶんりょう/1798～1846年)

福島県生れ。白河藩絵師。白河藩絵師・久松(服部)南湖、巨野泉祐らに絵の手ほどきを受け、のちに白河藩主・松平定信の命によって谷文晁の門に入った。文政末年から天保年間にかけて文良が席画を仰せ付けられたり、絵の御用に関わった。定信の桑名藩転封に従い桑名に移った。1846年没、49歳。**江戸後期の絵師**

星野道夫 (ほしの・みちお/1952～1996年)

千葉県生れ。1976年慶応義塾大学を卒業後、動物写真の田中光常氏の助手を2年間務める。78年より4年間アラスカ大学野生動物管理学部に留学。第3回アニメ賞、第15回木村伊兵衛写真賞、日本写真協会賞・特別賞(没後)等受賞多数。1996年ロシア・カムチャツカ半島クリル湖へテレビ番組の取材に同行中、事故により没、44歳。写真

細井種生 (ほそい・たねお/生没年不詳)

銅版師・石版業を営んでいた細井松夫の子。父は松田緑山の弟子ともいわれ、『日光山小誌』の細密な銅版画や1892年の石版同業者組合創立の建議者として参加。種生はその父の下で育ち、本多錦吉郎の彰技堂画塾に学び、父の後を継いで石版業を営んだ。印刷技術が発展する中で次第に時代に乗り遅れていく石版印刷技術の進歩を図るため、細井が発起人となり、1907年東京印刷株式会社社長星野錫を会頭に仰ぎ、石版技術教育団体「虹交会」を結成し、事務局を務める。08年に虹交会報誌『虹』を発刊し、編集兼発行者となる。『虹』は高名な画家の石版画を掲載するものではなく、『美術園』や『印刷雑誌』のように石版印刷所に従事する若い石版画工のための啓蒙雑誌であり、石版画工の各種石版投稿や美術論・時論を掲載し、「斯道の木鐸ならん」ことを目的とした雑誌で、10年頃まで発刊。細井は虹交会と雑誌発行に献身的な役割を果たし、自身も第1巻1号(1908.2)に単色石版画《虹》、第1巻8号(1908.9.)に多色石版画《市場》を発表。その後『虹交会報告』と改名し、13年細井が神田区千代田町から本所区亀沢町に移転すると共に自然消滅したと思われる。(引用 版画堂)版画

細川林谷 (ほそかわ・りんこく/1780～1843年)

讃岐の人、江戸時代後期の日本の篆刻家・漢詩人である。1843年没、63歳。江戸後期の篆刻

細木原青起 (ほそきばら・せいき/1885～1958年)

岡山県生れ。日本美術院卒。明治の中期、京城で「京城日報」「朝鮮パック」などに鳥越静岐の名で漫画を描いた。1909年日本に帰り「東京パック」「東京日日新聞」「中外商業新聞」「大阪朝日新聞」などに漫画を描き、漫画スケッチ、時代もの、文芸漫画、さらにユーモア小説も手がけた。02年ごろから「日本俳句」「ホトギス」などに投句、のち「日本俳句」に専念した。

著書に「日本漫画史」「晴れ後曇り」「ふし穴から」などがある。1958年没、73歳。漫画、日本画、俳人

細谷三郎・而楽 (ほそや・さぶろう/1875～1940年)

群馬県生れ。東京美術学校で高村光雲に師事、奈良の美術院で仏像修理に携わる。新薬師寺の国宝・十二神将像は、一躯が失われていて現代(1931年)の復元製作像。この復元、波夷羅大将の制作者が、細谷而楽です。1940年没、65歳。彫刻、仏像修理

細谷立斎 (ほそや・りっさい/1831～1911年)

1831年生れ。讃岐(さぬき)の人。貫名海屋(ぬきな・かい・おく)にまなぶ。山水、草花の彩色画にすぐれた。兵庫県明石にすんだ。1911年没、81歳。幕末-明治期の絵師

保尊良朔 (ほだか・りょうさく/1897～1953年)

長野県生れ。1922年日本美術院研究所入所、第9回再興院展で入選、後日本美術院院友。37年小林巢居人ら院友12人と日本美術院を脱退、新興美術院を創設。50年新興美術院の再興に参画、51年再興新興美術院展に「七面鳥」を出品。1953年没、56歳。日本画

堀田霞岳 (ほった・かみかく/1897～1931年)

紀州海草郡内海町の人。15歳頃に青木梅岳の門に入り、さらに小室翠雲の門に入って学んだ。帰郷してからは藤白山麓に住んで醉山荘主と称した。1931年没、35歳。日本画

堀田正敦 (ほった・まさあつ/1758～1832年)

仙台生れ。江戸後期の若年寄。1789年大番頭、90年若年寄、勝手掛となり寛政改革の財政を担当。1807年ロシア船来航により蝦夷地に赴く。『寛政重修諸家譜』編纂を総括するなど幕府の系譜編纂事業に寄与。また屋代弘賢、林述斎、大槻玄沢、谷文晁ら学者、文人と交際、彼らの学問、芸術の庇護者となる。自らも博物学者として近世最大の鳥類図鑑『観文禽譜』を編纂した。1832年没、74歳。博物学者、江戸幕府寛政改革の財政を担当

堀内康司 (ほりうち・こうじ/1932～2011年)

東京生れ。松本で宮坂勝のサロンに参加、草間彌生らとグループ展に参加し、初個展も開

く。1952、53年国画会新人賞。美術評論家でフォルム画廊主の福島繁太郎の支援を受け、証券会社で働きながら創作。池田満寿夫の絵に感激し、グループ「実在者」を池田、真鍋博、齋藤と結成するが2年で解散。その後数度の個展を開くが、絵筆を折る。後、岩波書店の「世界」をはじめとする雑誌のカット制作、競馬記者、写真や挿絵の仕事をしなから、美術愛好家として浜田知明、藤牧義夫らのほか晩年は若い画家たちの絵を購入、制作を支援。2011年没、79歳。2013年画集『堀内康司の遺したもの』刊行。同年東京のフォルム画廊、ギャラリー川船、2014年東御市梅野絵画記念館で回顧展が開催。洋画、カット、挿絵

堀江友声 (ほりえ・ゆうせい/1802~1873年)

島根県生れ。1817年京都で山本探淵に師事。また四条派の柴田義董に私淑した。20代で伯耆、備後、美濃など諸国を遊歴し、萩の毛利家で多くの作品を描く。36年数年を丹後国宮津で過ごし、52年広瀬藩九代藩主・松平直諒の下で御用絵師となり、横山雲南(後の黄仲祥)・上代英彦ら多くの門人を指導し、堀江家からは養子の友節(二代)以降も有聲(三代)・和聲(四代)と画家を輩出した。1873年没、71歳。江戸後期-明治の絵師

堀江有聲 (ほりえ・ゆうせい/1859~1922年)

島根県生れ。祖父友聲、父友節より絵を学び、また山村勉齋について漢学並びに詩文を修めた。県立師範学校を卒業して教鞭を執った。1882、84年絵画共進会に出品。祖父友聲以来の筆法を伝え、写実的な花鳥や山水を得意とした。1922年没、63歳。日本画、美教

堀江和声 (ほりえ・わせい?/1887~1954年)

1954年生れ。堀江有聲の子。東京美術学校を卒業後、1913年に広瀬町に帰って画塾を開いた。花鳥を得意とした。1954年没、66歳。日本画、画塾

堀尾一郎 (ほりお・いちろう/1946年?~)

1946?年生れ。1980年二科展絵画部特選。84年社団法人二科会絵画部会友。90年二科展絵画部会友賞。98年社団法人二科会絵画部会員。2009年二科展絵画部会員賞。洋画、版画

堀尾実 (ほりお・みのる/1910~1973年)

名古屋市生れ。日本画家の森村宜稲に師事、土佐派の技法を学ぶ。1930年京都市立絵画専門学校に入学、34年に中退、上京。伝統的な日本画から出発しながら、一方で福沢一郎や瀧口修造らとの交遊を通じて抽象やシュルレアリスムに関心を抱き、日本画における抽象表現の可能性を探求した。40年に帰郷し、美術文化協会で日本画部を創設。同協会の内紛により退会后、55年に前衛絵画グループ・匹亜会を結成、東京や名古屋を中心に活発に活動した。名古屋で没、63歳。日本画

堀川達三郎 (ほりかわ・たつさぶろう/1921~2014年)

秋田県生れ。小谷津任牛に師事し、1956年院展に入選。66年から奥村土牛に師事。70年横山津恵らと秋田県日本画家協会を設立し、79年まで理事。74年日本画研究グループ(蒼樹会)を設立し、後に主宰。76年特待推挙。89年秋田県文化功労賞。96年本荘市東光館内に堀川達三郎美術館開館。99年春の院展で春季展賞。2003年再興院展で日本美術院賞。自身が出会った心に残る風景のイメージを画面に定着させ、光の効果を生かした叙情的な作品づくりに取り組んだ。2014年没、94歳。日本画、個人美術館

堀口正子 (ほりぐち・まさこ/1927~2009年)

東京生れ。1948年長崎に住する。73年堀野美沙子氏より絞り染めの手ほどきを受ける。75年竹田耕三氏に入門し、天然塗料・伝統的な絞り染めの技術を伝授。長崎県工芸展知事賞。西部工芸展への入選や、新聞社主催展への出品依頼。天然染料の抽出から、独自の染色方法で作品を制作。2009年没、82歳。染色

堀研 (ほり・けん・みがく/1948年~)

山口県生れ。1973年多摩美術大学(グラフィックデザイン科)卒。74年宇部女子高等学校美術教諭。75年西日本新人ビエンナーレで大賞。81年行動展で行動美術賞。82年安井賞展で佳作賞。83年昭和会賞、84年日動画廊本店、銀座で個展、以降日動で個展開催。行動美術協会会員、日本美術家連盟会員、広島市立大学芸術学部名誉教授。洋画、美教

堀越隆次 (ほりこし・たかじ/1916~1984年)

茨城県生れ。1939年東京高等工芸学校卒、名古屋市の日本陶磁に勤務、以後名古屋

に住む。43年二科展で初入選、その後も同展で受賞。51年美術団体連合展に出品。71年中部国際形象展(毎日新聞社)に招待出品。79年中日展に招待出品。1984年没、68歳。

洋画

堀友三郎 (ほりともさぶろう/1924～2014年)

大阪生れ。1941年多摩美術専門学校図案科入学、木村和一に師事。44年光風会展入選。56年日展入選、60年日展特選、北斗賞。インゾーブル染料による糊染めと洗いを繰り返す、多層構造の空間表現を確立。奥行きや広がりを感じさせる、詩情豊かな風景作品を発表している。光風会名誉会員。日展参与。2014年没、90歳。染色

堀場良夫 (ほりばよしお/1920～2006年)

石川県生れ。1943年石川師範学校専攻科(美術)卒。応召を経て、戦後公立学校教諭。47年二紀展初入選。宮本三郎、山口操助に師事。51年二紀展褒賞、72年同展同人賞、77年二紀会会員。86年二紀会40周年記念賞、95年同展会員賞、2003年同展成井賞。一貫して輪島を中心とした能登の風土風物を描く。2006年没、86歳。洋画、美教

堀 義雄 (ほりよしお/1917～2016年)

金沢市生れ。1940年多摩帝国美術学校卒。吉田三郎に師事。49年日展入選、55年二紀会に出品、以後連続して出品し、73年文部大臣賞。戦後の一時期金沢市内の教員として勤務、のち埼玉県へ移住して作家活動に専念する。赤・青などの彩漆を用い、生命の源泉をテーマとした乾漆彫刻で知られる。二紀会評議員。2016年没、99歳。彫塑、美教

堀 柳女 (ほりりゅうじょ/1897～1984年)

東京生れ。日本画を荒井紫雨、洋画を西脇順三郎に学ぶ。竹久夢二との出会いが、人形制作への方向を決定づける。その後、独学を重ね、1936年帝展初入選以後、日展・日本伝統工芸展で活躍。55年に衣裳人形で重要無形文化財保持者となる。旺盛な研究心と鋭い感覚による幻想的情趣に富んだ作風である。1984年没、87歳。人形

堀 和平・杏邨 (ほりわへい/1841～1892年)

岡山県生れ。備中松山藩の御用達を勤めるほどの富商であった家業を継ぎ、反物を商

うなど実業家として活躍。1879～80年まで県会議員。神戸での仕事の合間に外国人から油絵の技法を学んだと言われる。菅原道真を描いた「天神像」や「母子像」など、日本的な画題に陰影や立体表現など洋画の技法を取り入れた作品を残し、岡山の洋画史の草分けとして重要な位置にある。満谷国四郎の従兄。1892年没、51歳。杏邨と号して日本画も描いた。1892年没、51歳。洋画、日本画

本阿弥光悦 (ほんあみこうえつ/1558～1637年)

京都の人。本阿弥家は足利尊氏(たかうじ)に仕えたと伝える初祖明本(みょうほん)以来、刀の磨礪(とぎ)・浄拭(ぬぐい)・鑑定(めきぎ)の三事を業として栄えてきた有力な上層町衆。光悦は7代光心の長女妙秀を母とし、光心の養嗣子(しし)となって分家した光二を父とする。1615年徳川家康より拝領の鷹峯(たかがみね)に一族や多くの工芸家とともに移住し、光悦村とよばれるいわば芸術村を開き、近世初頭の日本美術史上に偉大な足跡を残した総合プロデューサー。1637年没、79歳。桃山から江戸初期の芸術、絵師、工芸家、陶芸、琳派の創始者

本田真吾 (ほんだしんご/1944～2019年)

新潟県生れ。1964～68年多摩美術大学で斉藤義重に学ぶ。70年代にはジャン・アート・フェスティバル、「1970年8月:現代美術の一断面」(東京国立近代美術館)、「今日の作家'70年展」(横浜市民ギャラリー)などに出品し、「もの派」の作家のひとりとして位置づけられる。69年田村画廊で初めての個展を開き、村松画廊、ギャラリー手、サンフランシスコ・ソーカー・ケイスマンギャラリー等でも個展を開催。84年ロサンゼルスに移住し、アメリカや日本で絵画を中心に発表を続ける。2019年没、75歳。モノ派、版画、洋画

本田 健 (ほんだたけし/1958年～)

山口県生れ。1977年山口県立萩工業高等学校卒。94年金山平三記念美術展で金山平三賞。99年文化庁派遣芸術家在外研修員として翌年に初めて1年間ニューヨークに滞在。2002「自然を見つめる作家たち 現代日本の自然表現と伝統」展(徳島県立近代美術館)に出品。洋画

本保義太郎 (ほんぼぎたろう/1875～1907年)

高岡市生れ。1893年アメリカのシカゴで行われたコロンブス博に仏像を出品、受賞。1901

年東京美術学校彫刻科卒。02年には同校彫刻研究科に進学し、03年日本美術会の会員。04年セントルイス万博の商工調査を委嘱されてアメリカに渡米。ニューヨークで彫刻家ボーグラムに入門し助手。05年には農商務省より「海外実業練習生」に命じられニューヨークから、憧れのパリに渡りました。パリでの義太郎はフランス国立美術学校彫塑科に入学、製作と研究とに励む。渡仏から約一年半を経た07年義太郎の彫刻作品が彫刻家ロダンの眼にかない、日本人の彫刻作品でははじめてサロン展に出品。1907年パリで没、32歳。彫刻

ホンマタカシ (ほんま・たかし/1962年～)

東京生れ。写真集『東京郊外』(光琳社出版)など、画一的な開発が進む都市の風景を叙情性を排した視点でとらえた写真作品で知られている。1999年『東京郊外』で第24回木村伊兵衛写真賞。著書に『ホンマタカシの換骨奪胎—やってみてわかった!最新映像リテラシー入門—』(新潮社、2018)、作品集に『Tokyo and my Daughter』(Nieves、2006)『THE NARCISSISTIC CITY』(MACK、2016)『Looking Through: Le Corbusier Windows』(窓研究所/カナダ建築センター/Koenig Books、2019)。写真

ま

舞田文雄 (まいた・ふみお/1904～1999年)

岩手県生れ。1920年盛岡地方裁判所雇員。27年盛岡地方裁判所書記。美術団体「素顔社」の結成に参加。32年独立美術協会展に出品。36年日本版画協会展に出品。80年同協会会員。40年大審院書記に補され東京に移る。46年に同職を辞し、盛岡に帰郷。64年現代美術展に出品。盛岡市で没、95歳。版画

眞板雅文 (まいた・まさふみ/1945～2009年)

満州生れ。1966年の個展開催以降、公募展へ出品、国内外の美術館、ギャラリーなどで

作品展。71～73年シュルター・ロック財団奨学金でフランスに滞在。85年以降、同国文化省の招きでパッサージュ現代アートセンターで個展、ランス美術学校でパフォーマンスによるビデオ作品、伊サント・バーバラ美術館招請による鉄の彫刻などを制作、2005年全国都市緑化ふくおかフェア・アイランド花どんたく芸術の道に竹の作品を制作。2009年没、64歳。版画、パフォーマンス、ビデオ、彫刻、インスタ

米原雲海 (まいばら・うんかい/1869～1925年)

出雲生れ。初め大工をしていたが仏像に触発されて彫刻を志す。1890年上京、高村光雲に入門し雲海と号した。その刀技は山崎朝雲と共に、光雲門下の双璧と称せられた。東京彫工会、日本美術協会展などで受賞を重ね、1895年東京美術学校助教授。1907年岡倉天心を会頭に、山崎朝雲、平櫛田中らと日本彫刻会を結成。文展・帝展審査委員なども務めた。代表作に《仙丹》《竹取翁》などがある。1925年没、56歳。彫刻、木彫、美教

前川五嶺 (まえかわ・ごれい/1805～1876年)

京都生れ。初め柴田義董に学び、のち松村景文の門に入った。人物・花鳥を能くする。1876年没、72歳。幕末-明治の絵師

前田光一 (まえだ・こういち/1936年～)

東京生れ。1961年日本版画協会展初入選、以後79年まで出品。80年春陽展入選、以後連続入選。2001年春陽展奨励賞。02年「前田光一・海野光弘二人展」を分館で開催(島田市)。春陽会会友、日本美術家連盟会員、静岡県版画協会会員。版画、洋画

前田さなみ (まえだ・さなみ/1930～2015年)

東京生れ。1952年金沢美術工芸短期大学油絵科卒。高光一也・清水鍊徳に師事。52年独立美術協会展入選、83、84年小林賞、88年独立賞、89年独立美術協会会員。57年女流画家協会へ出品、以後69年O氏賞、71年ババ賞受賞、78年女流画家協会委員。2010年石川県立美術館で「見透せぬ窓 前田さなみ展」開催。2015年没、85歳。洋画

前田照雲 (まえだ・しょうん/1879～1924年)

秋田県生れ。父の早坂常吉は七条左京派の仏師。父より彫刻の手ほどきを受ける。のち

上京して彫刻家高村光雲に師事、特に躍動感を重んじた馬体彫刻を得意として明治時代末期から頭角を現し、たびたびその作品が宮内省に買い上げられた。文部省展覧会にも入選。1916年には劇作家秋田雨雀や洋画家今純三ら青森出身の若手芸術家とともに六花会を興して後進の指導にも当たり、中野桂樹、工藤敬三らをそだてた。1924年没、45歳。彫刻

前田舜敏（まえだ・しゅんぴん/1932年～）

宮崎県生れ。1955年東京芸術大学美術学部修了。加山四郎に師事。58年春陽会展に出品。59年春陽会賞、安井賞展に出品。64年渡欧、イタリア・ローマに滞在。93年帰郷。
洋画

前田真三（まえだ・しんぞう/1922～1998年）

東京生れ。東京府立織染学校、拓殖大学を経て、1948年に日綿實業株式会社に入社。67年株式会社丹溪を設立。写真活動を始める。74年写真集『ふるさとの四季』（毎日新聞社）を出版。風景写真の分野で独自の作風を確立する。87年美瑛町に写真ギャラリー「拓真館」を開設。日本写真協会賞年度賞（1984年）、毎日出版文化賞特別賞（1985年）。1998年没、76歳。写真、写真ギャラリー

前田剛志（まえだ・たけし/1977年～）

奈良県生れ。2002年京都市立芸術大学大学院美術研究科造形構想専攻修了。在学中にパリ国立高等美術学校（エコール・デ・ボザール）へ留学。現在、京都嵯峨芸術大学非常勤講師、同志社女子大学嘱託講師。大学卒業後、仙台メディアテーク、金沢 21 世紀美術館等で映像やパフォーマンス作品を発表。2007年からメディアアートユニット SZ のメンバーとして活動し、「virtual/actual」（京都芸術センター）、「深川国際水墨双年展」（中国・深川画院）等で作品を発表。音楽家とのコラボレーションでは、シアターピース「生命の舟」（しが県民芸術創造館）、モノオペラ「邪宗門」（京都青山音楽記念館）バロックザール、ザ・フェニックスホール、いずみホール）、音楽＋映像＋茶会「奏でる水」（京都芸術センター）の舞台映像を担当。造形、舞美、音楽、映像とのコラボ、美教

前田竹房齋（まえだ・ちくぼさい/1872～1949年）

大阪生れ。1887年頃土壁の網代を編んでいたところ、三世早川尚古齋にその巧みさを認

められ、以後独学で竹芸を修行。1913年浪華籃友会結成に参加。大正期後半から皇族への献上品や皇室の外国への贈答品を度々制作。竹の地下茎や枝の自然な曲がりを利用した作品を制作し、名工として知られた。1949年没、77歳。工芸(竹)

前田竹房齋（二代）（まえだ・ちくぼさい/1917～2003年）

大阪生れ。父初代竹房齋に学び、1935年二代竹房齋を襲名した。戦後大阪工芸展や関西美術展で入選、入賞を重ね、53年以降日展や日本現代工芸美術展に出品。59年以降は日本伝統工芸展に出品し、74年受賞。95年「竹芸」の重要無形文化財保持者に認定された。2003年没、86歳。工芸(竹)

前田暢堂・半田（まえだ・ちやうどう/1817～1878年）

徳島県生れ。京都にて中島来章、山本梅逸の門でまなぶ。山水・花鳥画を得意とした。1878年没、62歳。江戸後期-明治の絵師

前田貫業（まえだ・つらなり/1840～没年不詳）

1840年生れ。山名貫義の弟。1871年工部省に在り、77年パリ万博事務局雇となったほか、勸商局、大蔵省、博物局などに勤務。82、84年の内国絵画共進会に出品し受賞。作品に「花卉」「人物」など。幕末-明治期の日本画

前田直衛（まえだ・なおえ/1915～2008年）

鳥取市生れ。小学6年生の時、祖父母をたよって大阪に出て、3年後に洋画家の松原三五郎の紹介で菅楯彦の内弟子となった。さらに楯彦の推薦により橋本関雪に師事、関雪に就いて最後の弟子となった。1960年院展に入選、以後院展に出品。2008年没、93歳。日本画

前田半田・暢堂（まえだ・はんてん/1817～1878年）

京都生れ。中島来章から日本画を学ぶ。その後、貫名菘翁・山本梅逸を師として、京都を中心に活躍。1872年前田暢堂から前田半田と改名したとされる。田能村直入に入門した児玉果亭に画法を説いている。1878年没、62歳。江戸後期-明治期の絵師

前田 齊 (まえだ・ひとし/1939～2021 年)

長崎市生れ。1964年武蔵野美術学校卒。東京救心製菓株式会社の広告課にデザイナーとして勤務。その後、フランス留学およびアメリカ滞在を経験し、69年にサンパウロ・ビエンナーレで鮮烈なデビューを果たした。74～2008年長崎を拠点に活動。2021年没、82歳。
洋画

前田守一 (まえだ・もりかず/1932～2007 年)

浜松市生れ。1959年日本版画協会賞、モダンアート新人賞。67年シェル美術賞佳作。85年文化庁芸術家特別派遣事業で渡米。92～2000年日本版画協会理事。2007年没、75歳。
版画

前村洞泉 (まえむら・とうせん/生没年不詳)

元の名は前田泉太郎。土佐藩御用絵師。前村洞和の門人で前村の姓を継ぎ、土佐で活躍した。弘瀬洞意(絵金)の兄弟子にあたる。河田小龍とも親交があり、門人も多い。
江戸後期-明治期の絵師

前村洞和 (まえむら・とうわ/生誕年不詳～1841 年)

江戸本郷にすむ。狩野洞白にまなび、土佐山内家の絵師となる。門下に河鍋曉斎。1841年没。
江戸後期の絵師

勾田香夢 (まがた・こうむ/生没年不詳)

名古屋の人。勾田台嶺の妻。白猫の美人画で知られる。四君子や浅降山水も得意とした。
江戸後期の絵師

勾田台嶺 (まがた・たいれい/1772～没年不詳)

1772年生れ。名は寛宏、字は文饒。中林竹洞に師事し、のちに江戸に出て広瀬臺山に師事した。花鳥、水墨ともに品格ある画を描いた。嘉永頃死去。
江戸後期の南画(文人)

牧田嘉一郎 (まきた・かいちろう/1894～1956 年)

松山市生れ。北予中学卒業後、叔父の和田英作をたより上京。同舟舎で小林万吾の指導

を受け、帰郷後松山商業学校図画教師・松山高等学校講師。1925年二科展に入選。28年三好計加、越智恒孝らと「青鳥社」を結成。愛媛の洋画は塩月桃甫の影響を受けた藤谷庸夫を中心とする官展系(師範系)が次第に勢力をもち主流を形成していく。それに対し、彼らを中心とする在野系も劣らず、互いに対立・融合を繰り返しながら飛躍的な発展をとげる。彼は、いわばその一方の旗頭として、愛媛洋画の発展に大きい功績を残す。52年愛媛県美術会創立とともに名誉会員、60年愛媛県教育文化賞。1956年没、63歳。
洋画、美教

牧 俊高 (まき・としたか/1879～1940 年)

東京生れ。能姿の木彫を得意とし、帝展に連年出品、文展の無鑑査に推され、又東邦彫塑院の会員であった。三越で遺作展が開かれた。1940年没、62歳。
彫刻

牧野永昌 (まきの・えいしょう/1747～1823 年)

秋田県生れ。はじめ本荘の鈴木梅山に学び、のちに江戸に出て狩野梅笑に師事し、法橋に叙され、本荘藩のお抱え絵師となった。1823年没、77歳。
江戸後期の絵師

牧野雪僊 (まきの・せっせん/1820～1904 年)

秋田県生れ。牧野梅僊の子。3歳で父梅僊と祖父永昌を失ったが、その年、藩主の特別の計らいで二人扶持を受け、画道に精進するように将来を期待された。10歳で母を亡くし、藩財政悪化のため一時扶持を減らされたが、絵師として修業に専念した。45歳で江戸勤めとなり、江戸木挽町の狩野永恵に師事した。1904年没、84歳。
日本画

牧野妙子 (まきの・たえこ/生誕年不詳～)

東京生れ。1965年頃より油絵。73年木口木版をはじめ。76年神田スルガ台画廊にて個展。2004年から毎年。イギリスと日本の木口木版画展(主催ありす ギャラリー悠玄/銀座) 05年イギリス木口木版画協会展(イギリス国内巡回)。
版画、洋画

牧野富太郎 (まきの・とみたろう/1862～1957 年)

高知県生れ。植物の分類に興味をもち、独学で世界的な鑑識学者となった。幼くして両親を失い、小学校も中途退学して、以後独学。1878年頃博物学を教えていた永沼小一郎と知り合い、その影響で植物学を研究。東京大学教授の矢田部良吉に認められ、東京大学に奉

職し、1950年日本学士院会員。57年文化勲章を授けられた(追贈)。新種の記載は500種をこえ、1940年『牧野日本植物図鑑』をはじめ植物分類学に関する著書多数がある。東京で没、95歳。植物分類学者、博物画

牧野梅僊 (まきの・ばいせん/1778～1823年)

1823年生れ。牧野永昌の養子。養父永昌に狩野派を学び、中年になって京都に上り狩野永岳に師事し、のちに松村景文に私淑した。京都では青蓮院に出入りし、力量が認められて法眼の位を得た。その後江戸勤めとなり、本荘藩のお抱え絵師となった。1823年没、46歳。江戸後期の絵師

牧 墨僊 (まき・ぼくせん/1775～1824年)

1775年生れ。尾張名古屋藩士。喜多川歌麿、葛飾北斎に浮世絵をまなぶ。「瘍科精選図解」などの挿絵を銅版画で制作した。月斎峨眉丸(かびまる)と同一人物とする説がある。1824年没、50歳。江戸後期の浮世絵師、銅版画

真葛長造 (まぐず・ちょうぞう/1796～1851年)

京都の知恩院で樂焼を作っていた宮川家の11代目。9代香斎が釉薬の商いを行い、製陶を生業とし始めたという。長造は最初は仁清風の焼物を学び、いったん江戸に出たが帰郷して、青木木米の門下に入った。のちに祇園真葛原に築窯し、主に茶器を制作したという。晩年には知恩院門跡より香山の号を受ける。1851年没、55歳。陶芸(樂焼11代目)

曲子明良 (まがし・あきら/1947年～)

石川県生れ。1970年京都教育大学特修美術科日本画卒。西山英雄に師事。67年日展入選、84、87年特選。68年日春展初入選、以後同展で日春賞、奨励賞。四季折々に様々な姿を見せる日本の自然を、色調の微妙な変化によって捉え、詩情豊かな画面を形成している。日展会友。日本画

馬越舛太郎 (まごし・ますたろう/1899～1987年)

愛媛県生れ。1914年太平洋画会研究所に入所。15年日本美術院研究所に入りました。16年院展に入選。21～25年渡仏し、パリでアカデミー「コラロッシ」に学び、シャルル・グランに

師事。アカデミー「スカンディナーヴ」のオットン・リエスに学ぶ。26年二科展に入選。27年帝展に入選。その後、帝展、旺玄社、国画会などで活躍。53～65年国画会に出品。のち、公募展に出品せず、創作に没頭しています。1987年没、88歳。洋画

正井和行 (まさい・かずゆき/1910～1999年)

兵庫県生れ。京都市立絵画専門学校に学び、福田平八郎らに師事。同校研究科在学中の1944年帝展に入選。37年大分市に転居。大分県立別府第二高校で教鞭をとるかたわら大分県美術協会で作品を発表した。50年京都に戻り、画壇に復帰。日展を中心に日春展、青塔社展などで活躍した。72年改組日展、82年改組日展で特選。89年京都市芸術功労賞。90年京都府文化功労賞。1999年没、89歳。日本画、美教

益子昭雄 (ましこ・あきお/生誕年不詳～1989年)

水戸市生れ。1951年慶応義塾外国語学校卒、県展に初入選。52年一水会展で入選、55年一陽会展で入選。66年渡欧(3ヵ月)、茨城県芸術祭美術展に委嘱出品。69年オーケストラシリーズを始める。75年亜細亜現代美術展奨励賞。80年パリで個展。88年安田火災美術財団新作秀作賞。1989年没。洋画

真島直子 (まじま・なおこ/1944年～)

名古屋市長生れ。東京藝術大学油画科卒。東京の現代美術を扱う主要な画廊での個展開催、グループ展出品、多数。現代美術の工藤哲巳の晩年に、数回2人展を開催。2002年のバンガラディッシュ・ビエンナーレでグランプリ受賞。以降、海外での展覧会も多数行われ、高い評価を受けている。洋画

柘岡 良 (ますおか・りょう/1905～没年不詳)

京都生れ。1925年上京。印刷会社へ勤める傍ら版画を独習。43年帰省。私刊書票集「浪漫荘玩具絵蔵書票茜集」(1946年)。おもちゃ絵の版画作品や蔵書票。版画、蔵書票

増田 孝 (ますだ・たかし/1936～1997年)

福井県生れ。1954年二科展初入選、以後連続入選。60年金沢美術工芸大学洋画科卒

。65年二科50周年記念協賛賞。67年フランス留学。69年より金沢美術工芸大学に勤務、後教授。76年二科会会員、同北陸支部長推挙。86年評議員。87年サロン・ドートンヌ会員。1997年没、61歳。洋画、美教

増田正和（ますだ・まさかず/1931～1992年）

兵庫県生れ。京都市立美術大学西洋画科卒。石彫りに進み、1960年朝日新人展(大阪)に出品。61、62年集団現代彫刻展に出品。行動美術協会に所属し同66年彫刻部会員。68年小豆島石彫シンポジウムに企画参加し、制作グループ「環境造形Q」を結成(同63年解散)。75年現代日本彫刻展(宇部)で京都国立近代美術館賞。76年神戸須磨離宮公園現代彫刻展で宇部市野外彫刻美術館賞。81年現代日本彫刻展で大賞。82年神戸須磨離宮公園現代彫刻展で神戸市公園緑地協会賞。88年大阪中之島緑道彫刻コンペでは優秀賞。86年に塚本英世記念国際海外研修員としてイタリアへ赴いた。神戸で没、61歳。彫刻、石刻

益田義信（ますだ・よしのぶ/1905～1990年）

東京生れ。慶應義塾大学卒。梅原龍三郎に師事する。パリ留学後、国画会に所属、会員。日本自動車連盟(JAF)のマークは、益田がデザインした。父と同じく、戦時中も洋行するほどの放蕩ぶり、祖父・益田孝(三井物産、日本経済新聞社創業者)の築いた巨額の財産を使い果たしたことで知られる。ヴェネツィア・ビエンナーレなど国際展のコミッショナー。1966年ユネスコの国際造型芸術連盟(IAA)会長。益田農事株式会社取締役。妻の桑子は、洋鉄を最初に扱った鋼鉄商の森岡平右衛門娘。1990年没、85歳。国際展のコミッショナー、デザイナー、洋画、版画

増原宗一（ますはら・そういち/生没年不詳）

山口県生れ。鏑木清方の門人。1917、8、9年第1～3回芸術社展に出品。21年日本橋倶楽部において増原宗一自作展覧会が開催され、『宗一画集』が出版。22～26年郷土会展出品。28年日本橋三越において開催された第13回の郷土会展には宗一の遺作として出品。同年頃、死去したといわれる。2006年に星野画廊において、「増原宗一遺作展」が開催。日本画

真隅太双（ますみ・たそう/1893～1972年）

福岡県生れ。東筑中学卒業後の1909年上京し、太平洋画会研究所に学ぶ。11年福岡市初の画家グループ・アカシア会を設立。西日本南方社、改組福岡美術会、二科西人社等の結成に参加す。福岡画壇の中心人物の一人。23年から約20年間、九州帝国大学農学部にて描画嘱託として勤務、植物などを正確に描写し、学術資料とする仕事に従事する。同時に同大美術部員の指導にもあたった。40年福岡県美術協会の結成に参加、戦前戦後を通じて県展に出品を重ねた。1972年没、79歳。洋画、学術資料(植物画)

増山雪齋（ますやま・せっさい/1754～1819年）

伊勢生れ。風流人として名高く、詩、書画をよくし、特に絵は明清画を研究して沈南蘋風の花鳥画や人物画を得意とし専門家の域に達した。また学を好み、藩に十時梅厓を招いて文礼館という藩校を設置。主要作品『伐木詩意図』、『孔雀図』(1814)、『虫豸帖(ちゅうちじょう)』(東京国立博物館)。1819年没、65歳。江戸後期の絵師、伊勢国長島藩主

又木啓子（またき・けいこ/1952年～）

宮崎県生れ。1976年女子美術大学芸術学部洋画科卒、後スペインに渡る。81年スペイン王立サンフェルナンド美術大学絵画・油絵科卒。スペイン国立応用美術学校石版画科、銅版画科修了。スペイン国立陶芸学校修了。99年北泉橋(都城)のデザイン担当。2000年絨毯デザイン(スペイン王立タピストリー財団マドリッド)、ふるさと切手デザイン(日本郵政省)。17年襖絵“光臨”昌龍寺(日之影)。洋画、版画、デザイン

町田源三郎（まちだ・げんさぶろう/1914～1974年）

埼玉県生れ。1934年川越中学校卒業。39年東京高等師範学校図画手工専修科卒業。40年沼津高等女学校教諭。43年浦和第二高等女学校教諭、埼玉師範学校教諭、48年埼玉師範学校教官。49年日本水彩画会会員。51年埼玉大学助教授。55年白日会会員。61年埼玉県美術教育連盟長。63年白日会委員。66年埼玉大学教授。文部省教育課程審議会専門委員、文部省指導要領編集委員。67年日展水彩作家協会会員。1974年没、59歳。(左)美教、水彩

松井えり菜（まつい・えりな/生誕年不詳～）

岡山県生れ。多摩美術大学油絵科卒、東京藝術大学大学院美術研究科油画専攻を修

了。2004年自画像『えびちり大好き』でGEISA#6の金賞。同作品はカルティエ現代美術館のコレクションとして収蔵。現在はスペインのジョアン・ミロ美術館での個展をはじめとして海外での展示も多く、またNTTドコモやモレスキン主催の展覧会に参加するなど活動の幅は広い。

現代美術

松井乗運（まつい・じょうん/1815～1887年）

金沢市生れ。代々仏師の家柄で、修業のため京に上り、片岡友輔について彫法を学ぶ。18歳のころ金沢に帰り家業を継ぐ。1880年京都大谷本願寺阿彌陀堂の建築彫刻には、石川県から選ばれて参加したほどの名工として知られる。1887年没、72歳。彫刻・木彫

松井智恵（まつい・ちえ/1960年～）

大坂生れ。1984年京都市立芸術大学大学院美術研究科修士課程工芸専攻（染織）修了。80年代より本格的なインスタレーションを手掛ける作家として注目。90年代を通して、ニューヨーク近代美術館、サイト・サンタフェ等海外で紹介される。大掛りな空間造形と、微細なオブジェが融合した作品は高い評価。2000年以降映像作品を制作しはじめ、映像作家としても知られるようになる。2005年横浜トリエンナーレでは有名な寓話を大胆にモチーフに取り入れたHeidiシリーズを発表。2013年加須屋明子が芸術監督を務めた「龍野アートプロジェクト2013 刻の記憶」でHeidi 53“echo”を発表。14年「大原美術館平成26年春の有隣荘特別公開 松井智恵プルシヤ」開催。インスタ、空間造形、オブジェ

松浦和子（まつうら・かずこ/1940年～）

長崎県生れ。1979年長崎市展初出品市長賞。80年長崎県展奨励賞。80年日本水彩画会連続入選（'86年迄）。86年長崎県展奨励賞。88年日本水彩画会奨励賞。91年日本水彩画会三宅賞。日本水彩画会会友。水彩

松浦莫章（まつうら・ばくしょう/1910～1998年）

三重県生れ。師：辻永。光風会会員。日展特選受賞。日展無鑑査、三重県立美術館所蔵には唐招提寺金堂、唐招提寺本堂の作品がある。関西大学にも作品が所蔵。1998年没、88歳。洋画

松浦舞雪（まつうら・まいせつ/1886～1970年）

広島県生れ。1908年京絵専卒。北野恒富に師事。08年文展入選、15年文展入選。1970年没、84歳。日本画

松浦 満（まつうら・みつる/1908～1998年）

島根県生れ。上京し、近代南画の代表的な画家松林桂月の門に入り、日本画を修行。1934年帝展に入選。47年日展で特選、50年日展で白寿賞、51年日展で特選。日展会員。審査員も務めた。特に海や鯉など水にちなんだ作品を得意とする。晩年は、港で生活する人々の暮らしを数多く描いた。1998年東京で没、90歳。日本画

松浦安弘（まつうら・やすひろ/1937年～）

福岡市生れ。武蔵野美術大学に進み、新制作に所属していた内田武夫の薫陶を受け、在学中から新制作に入選。36歳時に初渡欧し、モランディの影響を受け、翌年からは頻繁にイタリアに滞在して制作を続ける。1976、79年新制作で新作家賞、76年会員。76年に安井賞展にも選ばれた。イタリアや地中海沿岸域の石造建築の並ぶ街角を、揺るぎのない構図と乳白色や灰白色の色調により手堅い写実にまとめ上げる作風に定評がある。洋画

松江泰治（まつえ・たいじ/1963年～）

東京生れ。東京大学理学部地理学科卒業。1996年東川賞新人作家賞。2002年木村伊兵衛写真賞。主な作品集に『LIM』（青幻舎、2015年）『jp0205』（青幻舎、2013年）『cell』（赤々舎、2008年）などがある。2017年2月に軍艦島＝端島（Hashima）の廃墟をとらえた作品集『Hashima』を刊行。写真

松枝玉記（まつえだ・たまき/1905～1989年）

福岡県生れ。1882年祖父・松枝光次に久留米緋の染と織の初歩的な手ほどきを受け、1922年旧制八女中学校卒業後、本格的に久留米緋の道に入り、1927年頃修業期を終え。藍染と図案づくりを専門とし、57年重要無形文化財久留米緋の藍染の技術保持者に認定。59年後久留米緋の重要無形文化財保持者代表に就任。福岡県展や日本伝統工芸展等に出品し、70年日本工芸会正会員。81年東京・西部百貨店、84年東京・和光で個展。81年『藍生

—松枝玉記作品集』を刊行。85年西日本文化賞。1989年没、84歳。工芸(藍染)

松岡吉平・珠道 (まつおか・きちへい/1842?～1903年)

きゆう漆を永井余三兵衛に学び、後には肉合研出蒔絵など蒔絵の各技法にも秀でる。1882年金沢で描金工同盟申合規則が結ばれた際には筆頭人の一人として名を連ねる。81年の内国勸業博覧会以後、同博覧会には90年第3回、95年第4回とも連続出品。93年のシカゴ・コロムブス万国博覧会に出品。1903年没、61歳? 漆工

松岡正雄(太和) (まつおか・まさお/1894～1978年)

奈良県生れ。1917年東京美術学校師範科卒。長野県飯田中学で教鞭をとった。八雲会の指導者(目黒区八雲が丘に府立高等学校)。二科会には、第3回展「山上より」「村の子供」、第4回展「国旗のある風景」「黒猫のゐる風景」「故郷の春」を出品した。17年光風会展出品作は宮内省の御用。1978年没、84歳。2018年宇陀市文化会館で松岡太和遺作展開催。洋画(漆画)、美教

松尾晃華 (まつお・こうか/1893～1983年)

福岡市生れ。高等小学校卒業後日本画を学び、1911年上京、巽画会の梶田半古に師事。16年巽画会美術展で銅賞、20年中央美術展にて金賞。22年院展に入選、日本美術院研究生。26年院友、横山大観の指導を受ける。28年美術院脱退後、松岡映丘の門下となり、帝展入選を重ねる。33年筑前美術会創立に参加、35年帰郷し福岡市展理事に就任。40年には福岡県美術協会結成にも参加する。戦後は同協会常任理事や市展運営委員。画塾松尾塾(晃華塾)を主宰した。1963年没、90歳。日本画、画塾

松尾薫明 (まつお・くんめい/1924～1998年)

長崎市生れ。1939年三菱重工長崎造船入社。モダンアート展毎年出品第1回～5回、朝日西部美術展出品第3回大賞。73年長崎美術家連盟展創立委員(～13回)モダンアート協会会員。1998年没、74歳。洋画

松尾多英 (まつお・たえ/1947年～)

1947年生れ。1970年 École nationale supérieure des Beaux-Arts 修了(フランス・パリ)。71～20

13年東京造形大学勤務。73～82年テーマ『自画像』の個展発表を開始。1982～95年砂丘との衝撃的な出会い、個展。95年イフワークとして『砂』100号連作の個展発表開始。日本画、美教

松尾朝春 (まつお・ちようしゅん/1885～1930年)

福岡県生れ。山崎朝雲(ちよううん)の門にはいり、木彫をまなぶ。1925年「瞑想の悉達(した)」で帝展特選。29年帝国美術院審査員。1930年没、46歳。彫刻

松尾光伸 (まつお・みつのぶ・こうしん/1943年～)

熊本県生れ。東京藝術大学美術学部卒。基礎造形研究家、中国中央美術学院教授、中国清華大学美術学院彫塑学科客座教授。彫刻、造形研究、美教

松川英俊 (まつかわ・ひでとし/1938年～)

北九州市生れ。1977年「九州制作会議10年展」(北九州市立美術館)に出品。77～2010年「行動展」に出品、行動展会員。84、86年「日本国際美術展」に入選。84年再興された「九州制作会議」に参加し、84年の第1回展より毎回出品。86年「現代日本美術展」に入選。85年「日韓展」に入選。87年「九州現代美術—創造の変革」(福岡県立美術館)出品。パネル、画布、ゴムシートを用いた支持体と一体化した、黒とグレーの色彩による抽象絵画を制作。洋画、立体

松木平吉・5代目 (まつき・へいきち V/1871～1931年)

東京生れ、1885年、4代目大黒屋平吉から家督を継いでおり、91～1930年地本問屋を営業、相撲絵や能楽絵を多く出版している。小林清親、土屋光逸、尾形月耕、小川耕一、尾形月山、山本昇雲、森田華香、坂巻耕漁、小原古邨らの錦絵などを出版。1909年度版の図書目録が現存。大正以降には主に古邨の花鳥画、耕漁の能画、昇雲の美人画の木版絵葉書を版行。古版木による複製版画の版行が主流。1931年没、62歳。版元

松崎卯一 (まつざき・ういち/1895～1972年)

福岡県生れ。1921年東京美術学校師範科卒。1927年長崎市立高等女学校で図画教育に専念。晩年は坂本繁二郎に私淑する。長崎県審査員などを歴任。1972年没、77歳。

美教、洋画、版画

松崎啓三郎 (まつざき・けいざぶろう/1937年～)

1937年生れ。52年上京、松村三井系の技術を受け継ぐ、台東区の木版画摺師の高木省治氏に弟子入りして技術修得。4年間の修業の後、現在地で独立。復刻浮世絵のほか、のし紙、菓子の懸紙(かかけがみ)、千社札(せんしゃふた)など様々な摺物を製作。2011年度、荒川区指定無形文化財保持者に認定。木版画摺師、復刻浮世絵、のし紙

松崎 滋 (まつざき・しげる/1950年～)

神奈川県生れ。1973年明治学院大学法学部卒。74年ペン画を始める。81年シロタ画廊にてペン画の個展、この頃銅版画を始める。83年「CARNIVAL」岡本工房・銅版画集刊行。85年「夢草花図」銅版画集刊行。86年「三賢人」岡本工房・銅版画集刊行。88年スペイン、バルセロナ・サラガウディ画廊にて個展、以後バルセロナに定住。版画

松崎十朗 (まつざき・じゅうろう/1960年～)

金沢市生れ。1979年金沢美術工芸大学入学、85年同大学大学院修了。西山英雄に師事。98年日展、2001年日展で特選。現在日展会員、金沢美術工芸大学日本画教授。日本画、美教

松崎政雄 (まつざき・まさお/1912～没年不詳)

京都府生まれ。八笑亭とも呼ばれる。生家は印刷業を営む。1929年平安中学校卒、在学中は絵画クラブに所属し、南素行の指導を受けた。独立美術京都研究所に入所、機関紙『TOILE』の編集部員として尽力。35年独立美術協会展に入選。35年朝日新聞社京都支局新社屋(朝日会館)の外壁に計画された巨大壁画の制作。新日本洋画協会に参加。戦後は無所属となり児童画の指導。洋画、美教

松下久信 (まつした・ひさのぶ/1941年～)

金沢市生れ。奥田憲三、滝川武雄に師事。67年一水会展入選。以後同会に出品。77年松下絵画研究所開設。85年一水会展山下奨励賞。85年日展入選。2000年一水会会員。0

3年日展特選、08年日展特選。一水会会員、日展会員。洋画、絵画研究所

松島芝谷 (まつしま・しばや?/1883～1950年)

新潟県生れ。小坂芝田に師事。日本南画院を中心に発表し、最高賞、特選。明治末には大東南宗院同人。1917年小坂芝田が急逝すると、絵行脚の旅に出る。県南(八戸、三戸、五戸、七戸)などに多くの南画の作品を残しており、津軽、秋田県北にも多く見られることからこの地方を遊歴したとみられる。東京で没、67歳。日本画

松島白虹 (まつしま・はっこう/1895～1937年)

岡山市生れ、1921年東京美術学校日本画科卒業後、結城素明に師事。18年文展に入選し、帝展に9回入選。36年新文展に「占茶」を出品した。21年女子美術専門学校教授。東京で没、42歳。日本画、美教

松島治基 (まつしま・はるき/1935年～)

栃木県生れ。1954年～春陽展出品。57年研究賞、第2～3回現代ふらんすクリティク賞。63年春陽会会員。73～77年渡仏アカデミーグランドシヨミエール等で研修。77～86年国際形象展招待出品。79年春陽会賞、車木工房でリトグラフ・銅版画制作。81年個展(ギャラリー上田)。96年松島治基自選展(東京国際美術館)。2004年日本橋三越本店で個展。05年横浜美術短期大学退職記念展(work1953～2005)。12年個展(ギャラリー一物)洋画、美教

松島 政吉 (まつしま・まさきち/生没年不詳)

松島房次郎の弟子。松嶋彫政、彫工政、彫政、英斎と号す。歌川芳艶、豊原国周の錦絵を出版。慶応当時、板木屋仲間の行事を勤める。江戸後期の浮世絵版木の彫師

松添 健 (まつぞえ・けん?/生没年不詳)

経歴不詳。海洋画を好んで描き、雑誌の挿絵も描いた。1942年従軍画家として南方に赴いている。戦争画の作品として「主力艦隊航行図」がある。戦争美術関係の展覧会では、1939、40、41、42、43、44年海洋美術展に出品。洋画、挿絵

松田敦朝 (まつた・あつとも/1837～1903年)

京都生れ。銅版師初代玄々堂松本保居の長男。1849年ごろ松田姓。父に銅版画を学び、幕末ごろまでは名所図などを手がけた。68年二条城で太政官札(だじょうかんさつ)を製造。翌年大蔵省紙幣寮(しへいりょう)御用となって東京に移り、紙幣や切手、証券などを製作する。74年玄々堂彫刻社を設立して銅・石版画の普及に尽くす。また高橋由一、中丸精十郎、亀井至一ら数多くの洋画家を庇護(ひご)した功績も大きい。1903年没、66歳。幕末-明治期の絵師、銅版画、紙幣や切手、証券、玄々堂彫刻社

松平修文 (まつだいら・おさふみ/1945～2017年)

北海道生れ。1966年東京藝術大学美術学部へ入学し日本画を専攻、その後同大学院に学ぶ。83年青梅市立美術館の開設準備に学芸員として関わり、開館後数々の展覧会を企画、副館長等を経て2009年の退職。手がけた展覧会「佐藤多持代表作展」(1986年)や「長崎莫人展」(1988年)、また佐藤が所属する知求会の歩みを紹介「或るグループ展の軌跡」(1991年)等といった戦後の日本画家、あるいは「夏目利政展」(1997年)や「大正日本画の新風目黒赤曜会の作家たち」展(2004年)といった明治末～大正期に活躍した画家等、近現代日本画の流れの中でも革新的な試みを行った画家達に注目し、その評価に果たした役割は大きい。2017年没、71歳。学芸員、副館長、企画展、日本画、美普

松平雪江 (まつだいら・せつこう/1834～1914年)

水戸市生れ。水戸藩士松平信順の三男。立原杏所に学び、父雪山に師事、母の弟、酒井喜熙は日本画家横山大観の祖父。南宗画を主に研究。水戸藩次いで茨城県に出仕し製図係として地図の作製に携わり、1886年に職を辞し画業に専念。85年『茨城常磐公園攬勝圖誌』を編集。82年内国絵画共進会で出品。84年内国絵画共進会で褒状。明治天皇銀婚祝献上作品「追鳥狩絵図」(水戸市役所の依頼)。1914年没、80歳。日本画

松平頼恭 (まつだいら・よりたか/1711～1771年)

江戸中期の大名、讃岐国高松藩主。藩政の刷新に力を注ぎ殖産興業を奨励し、栗林荘内に薬園を設けて薬草を栽培するとともに、藩の御蔵番という下級家臣であった平賀源内を薬坊主の格で登用するなどして産物の開発に努めた。また向山周慶に砂糖作りを研究させて成果をあげ、梶原景山には塩田を振興させるなど、讃岐三白の形成に貢献した。博物学者としても一流で、彼が画家三木文柳に描かせた魚譜『衆鱗図』、禽譜『衆禽画帖』、草木譜『衆芳画

譜』といった博物図譜は写実の極を示す逸品である。1771年没、60歳。本草学(植物絵)

松田霞城 (まつだ・かじょう/1859～1931年)

秋田県生れ。父は佐竹東家の家臣那珂市右衛門。叔母の家を継ぎ松田氏を名乗る。武藤鬼城に南画、武田泉斎に狩野派を学ぶ。1885年上京して平福穂庵に就き、その後京都に出て南画家として立った。94年から全国で日本画速成講習会を開設、速成法の著作もある。1931年没、72歳。日本画(南画)

松田喜三郎 (まつだ・きさぶろう/1917～1996年)

茨城県生れ。1937年小倉右一郎に師事。43年新文展で入選。52年藤井浩祐に師事。58年太平洋美術会彫刻部を再興、第6回日彫展で努力賞、59年第7回展で同賞。60年第8回展で日彫賞。61年新日展で特選。66年日展会員。70年名古屋芸術大学教授。鎌倉市で没、79歳。彫刻、美教

松田正己 (まつだ・まさみ/1939年～)

東京生れ。1966年東京芸術大学大学院美術研究科修了。66年日展で入選(以後出品)。67年日本現代工芸美術展に出品。67年茨城大学に助手として赴任(74年助教授、85年教授)。73年日本現代工芸美術展で現代工芸賞、読売新聞社賞。83年文化庁在外研究員として西ドイツ、ハンブルク工芸博物館で工芸研究。金工、鍛金、美教

松田松雄 (まつだ・まつお/1937～2001年)

岩手県生れ。1956年宮城県気仙沼高等学校卒、地元の漁業会社に入社。69年芸術生活画廊第3回公募コンクールに入選。盛岡市で初個展。以後盛岡、福島県、宮城県などで個展を行う。78年シェル美術賞展で3等賞。2001年没、64歳。2015年「松田松雄」展(岩手県立美術館)を開催。洋画

松田実・諦晶 (まつだ・みのる・ていしょう/1886～1961年)

福岡県生れ。久留米高等小学校で図画教師森三美の教えを受ける。1900年久留米商業学校に入学、学業の傍ら盛んに絵を描く。10年太平洋画会展に入選。この頃から古賀春江に絵を手解きする。14年第1回二科展から連続入選。13年郷里で結成した来目洋画会の中

心メンバーとして後進の育成に努め、31年久留米洋画研究所を開設。また、母校・久留米商業学校で図画教師も務めた。61年久留米市文化功労賞。1961年没、75歳。洋画、美教、松田塾

松田 豊 (まつだ・ゆたか/1942～1998年)

大阪生れ。大阪芸術大学の前身である浪速短期大学美術科卒。66年具体美術展に出品し、67年「具体美術協会」会員。最後の具体美術展である第21回展まで連続出展し、日本におけるキネティック・アート(機械仕掛けで動く作品)の草分けとして注目された。松田の作品は、純粋な幾何学的構成でありながら、どこか親しみやすいユーモラスさと禅の精神が共存。「空間から環境へ展」(1966)や日本万国博覧会みどり館(1970)に出展。84年文星道場・ギャラリーdoを開設し、後進の育成にも尽力。90年ジャパンエンバ美術コンクール優秀賞。1998年没、56歳。立体、具体、キネティック・アート

松田安生 (まつだ・よしお/1936年～)

長崎市生れ。1959年長崎大学学芸学部中学4年課程図工科卒。73年彫塑グループ『彫樹会』を結成。77年改組日展入選。78年日本彫塑会会友。82年日本彫刻会会員。彫刻、彫塑

松田緑山・2代玄々堂 (まつだ・ろくざん/1837～1903年)

京都生れ。銅版画で知られた初代松本玄々堂の長男。2代玄々堂と号し。父に学び、京都名所図などの銅版画を出版。紀州(和歌山県)、水戸(茨城県)などの藩札を製作。その技術を認められ、1870年明治政府から太政官札の印刷を命じられた。74年政府の依頼による紙幣印刷。石版技術を学んで玄々堂銅石版工房を組織。近代的な印刷業経営を進め、銅版・石版印刷の普及や、松田龍山、春水堂、若林長英、中村文山、森琴石、石田有年、石田旭山などの実に多数の門弟を育成。銅版から石版への橋渡しをした。油絵も描き、第1回内国勸業博覧会(1877)に出品した油絵で花紋賞1903年没、66歳。銅版画、石版画、洋画、印刷業草分け

松永冠山 (まつなが・かんざん/1894～1965年)

福岡県生れ。1911年京都市立美術工芸学校絵画科に入学。14年京都市立絵画専門学

校本科に入学、18年同校研究科に進み20年卒。17年文展に入選。22年京都の菊池契月塾に入門。その後官展に入選を重ね、47年日展委員。44年に帰郷し西部美術協会委員、県美術協会常任理事。福岡県の日本画壇の主導者として活躍。1965年没、71歳。日本画

松永天章 (まつなが・てんしょう/1879～没年不詳)

岐阜県生れ。河村光文に四条派を学び、のち川端玉章に師事し、円山派を修めた。花鳥、鯉魚に長ずる。受賞数十回。御用品数回。帝国絵画協会会員。美術研精会、日本画会、日本美術協会、巽画会、天真会の会員。茶道にも通じた。没年不詳。日本画

馬継紀子 (まつなぎ・のりこ/1941年～)

1963年横浜国立大学学芸学部美術科卒。65年横浜美術協会賞。89、95年新制作展新作家賞。96年新制作協会会員。2018年神奈川県女流展 神奈川県近代美術館賞(会員賞)。洋画

松野霞城 (まつの・かじょう/1867～1927年)

江戸生れ。母は椿椿山の門人。野口幽谷に師事。幽谷塾和楽堂の塾長をつとめる。日本画会委員。東京で没、59歳。日本画

松野良治 (まつの・りょうじ/1934～2019年)

大分県生れ。大分県立緑丘高等学校卒。1952年国画会展に入選。以後、同展を主舞台に活躍。66年国画新人賞。69年国画会会友優作賞・サントリー賞。75年、国画会会員。80年潮流の会に参加。95年宇治山哲平美術館で個展が開催。2019年没、85歳。洋画

松橋宗明 (まつはし・むねあき/1871～1922年)

盛岡市生れ。1889年東京美術学校(現:東京藝術大学)鑄金科に進み、岡崎雪声と大島如雲に師事。1914年南部鉄器振興のため「南部鑄金研究所」を開設、所長として招かれ、南部鉄器の改良と指導にあたった。松橋はデザインや技術の改良指導にあたるとともに、職人の意欲の発揚を図るため、中央の展覧会への出品を奨励した。20年審査員。鑄金家の大島如雲、香取秀真といった中央の一流作家を招き、盛岡で全国金工品共進会が開催。南部鉄器の復興に大きく貢献。1922年没、52歳。鑄金、南部鑄金研究所長、美普

松林雪貞（まつばやし・せつてい/1880～1970年）

福島県生れ。野口幽谷の画塾「和楽堂」で、桂月と同門であった。1908年「秋圃図」が文展に入選。桂月と結婚後は展覧会への出品も減っていくが、椿椿山から野口幽谷に引き継がれる写生を重視したしなやかで、伸びやかな女性らしい描線と色彩で描かれる。1970年没、90歳。日本画

松原新助（まつばら・しんすけ/1846～1899年）

石川県生れ。若杉安右衛門、川尻嘉平に製陶を学ぶ。素地業と上絵付け業との分離が進むなかで、素地の専門的生産を始める。磁器改良所の設置の際、納富介次郎とともにフランス式石炭窯を創設し、教師として生徒を養成、貿易用の素地を盛んに生産し、松本佐平などに良質の素地を供給した。1899年没、53歳。陶芸、美教

松原龍夫（まつばら・たつお/1941年～）

富山県生れ。1965年北陸中日美術展・高岡市商工会議所会頭賞。68年現代日本美術展・コンクール賞、第7回北陸中日美術展・中日大賞。77年富山県15人展・北日本美術賞。北美30周年記念展・北美グランプリ受賞。北陸を中心とした美術展に出展、また個展などで活動続ける。水彩、版画

松原直子（まつばら・なおこ/生誕年不詳～）

京都生れ。京都美術大学でリッチ教授の薫陶を受ける。1960年同大学卒業後、フルブライト奨学金を得て、アメリカ、ピッツバーグのカーネギー工科大学（現在カーネギーメロン大学）の大学院芸術科に留学。1962年修士学位取得後、ロンドンのロイヤル・カレッジ・オブ・アーツに特待生として短期留学、さらにヨーロッパ、アジア諸国を訪れ、1963年帰国。65年に再び渡米し、プラット大学、ロードアイランド大学などで教える。北米、ヨーロッパ各地で60回以上の個展。1976年から77年にかけて、棟方志功との二人展がカナダ各地を巡回。1994年には大英博物館における『現代日本版画展 1912-1989』に招待出品。作品収蔵先；大英博物館、シカゴ美術館、スミソニアン美術館、ローヤルオンタリオ美術館、京都国立近代美術館。版画、美教

松久朋琳（まつひさ・ほうりん/1901～1987年）

1901年生れ。10歳より仏像彫刻をはじめ、70年余りの間仏像を彫り続けた。代表作は大坂四天王寺仁王像、京都鞍馬寺魔王尊像、奈良法華寺十一面観音御前立像。京都で活躍。佐賀県本福寺の本堂両脇の千手観音・地藏菩薩も朋琳によって彫刻。晩年は京都仏像彫刻研究所を主宰、創作活動の傍ら仏像彫刻の普及に勤めた。1987年没、86歳。仏師、彫刻研究所

松村景文（まつむら・けいぶん/1779～1843年）

京都生れ。京都の人。松村月溪の異母弟。優麗な花鳥画にすぐれ、月溪の後継者として四条派の発展に貢献した。代表作に「花鳥図襖」など。1843年没、64歳。江戸後期の絵師

松村月溪・松村呉春、呉春（まつむら・げつけい/1752～1811年）

京都生れ。のち画姓を呉、画名を春（しゅん）とし、呉春と称した。四条派の祖。与謝蕪村に南画を、円山応挙に写生画を学び、両者を折衷して詩趣に富む花鳥画・風景画を描いた。1811年没、59歳。江戸後期の絵師、四条派の祖

100

松村呉春・松村月溪（まつむら・ごしゅん/1752～1811年）

京都生れ。江戸中～後期の画家で四条派の創始者。京都金屋の年寄役松村匡程の子で、はじめ家業を継ぎ金屋平役となり、大西酔月、次いで与謝蕪村に俳諧・画を学ぶ。家業の都合で画家として立ち、池田（大阪）に移り姓を呉、名を春と改める。天明頃には画風を蕪村から応挙風に転じ、平明で写実的な作風に、俳諧的な洒脱味を加えた新様式を興し、それは応挙没後の京都画壇に盛行した。呉春や一門は京都四条に住したので四条派と呼ばれた。1811年没、59歳。江戸後期の絵師、四条派の祖

松村禎夫（まつむら・さだお/1916～1990年）

1916年生れ。高輪台小学校の図画教諭。1956年春陽会会員。精緻な六角形の絵がほとんどであった。黄金比の研究者でもあり、黄金比の本も出版されていた。1990年没、74歳。洋画

村松秀太郎（まつむら・しゅうたろう/1935～2018年）

静岡県生れ。1961年東京藝術大学卒。新制作協会展初入選(以後 37 回まで毎年出品)。63年東京藝術大学専攻科卒。70年「村松秀太郎展」(松坂屋静岡店)以後、個展を多数開催。74創画会結成後は創画展に出品(78年創画会会員)。77年山種美術館賞展出品。88年筑波大学芸術学系助教(1991～1998 年教授)。2000～2008年大阪芸術大学教授。千葉県で没、83歳。日本画、美教

松原 潤 (まつばら・じゅん/1959 年～)

東京生れ。1984 年日本大学芸術学部卒。88年多摩美術大学大学院美術研究科修了。83年～独立展出品。86年独立美術協会展 新人賞、88年奨励賞。90年独立賞。94年個展(池袋西武)。2002年独立美術協会展で会員。独立美術協会会員 拓殖大学工学部デザイン学科講師。洋画、美教

松村梅叟 (まつむら・ばいそう/1885～1934 年)

京都生れ。円山派の今尾景年にまなび、京都市立絵画専門学校卒。文展でたびたび褒状をうける。のち日本自由画壇の同人。1934年没、50歳。作品に「画室の花」など。日本画

松村秀夫 (まつむら・ひでお/1911～1986 年)

石川県生れ。1935年文化学院美術科(洋画)を卒業し、38年より研究科に学ぶ。在学中に二科展に入選、その後一水会に出品を続ける。戦時中京都で古美術と石仏を研究。戦後現代美術展(金沢)に第1回展より招待出品。54年渡欧。56年一水会展でプルプー賞。57年一水会会員。81年小松市文化賞受叙情的な風景の他、石仏や野仏を好んで描く。1996年没、75歳。洋画

松浦 満 (まつむら・みつる/1908～1998 年)

島根県生れ。上京し萩出身の松林桂月入門した。1934年帝展に入選。戦後は日展に出品し、47年日展特選、50年日展白寿賞、51年日展特選。審査員もつとめ日展会員。特に海や鯉など水にちなんだ作品を得意とし、港で生活する人々の暮らしを多く描いた。1998年没、90歳。日本画

松村蘭台 (まつむら・らんだい/1760～1820 年)

高知市生れ。別号に南洋の釣徒快石叟がある。楠瀬南溟に狩野派を学び、南溟が福原五岳について画風を改めた際に、蘭台も師にこらい南画に改めた。1801年豊興公に虎の画の数々を献上。19年山内豊策から書画指出に指名され土佐南画界の第一人者となった。門人に島本蘭溪、仁尾鱗江らがいる。1820年没、61歳。江戸後期の絵師、南画

松室重剛 (まつむろ・しげただ/ 1851～1929 年)

1851年生れ。工部美術学校で学び、学習院中等科でも石膏像を用いた図画教育を取り入れた。は明治から大正期にかけて活動していた洋画家であり教育者。学習院中等科で西洋画の指導を行っていた。1929年没、78歳。洋画、美教

案本一洋 (まつもと・いちよう/1893～1952 年)

京都生れ。染色図案を営む家の長男。弟も日本画家の案本武雄。1910年京都市立美術工芸学校に進学。卒業。12年京都市立絵画専門学校に進み、15年卒。卒業後山元春挙の画塾早苗会に入門。春挙死後は川村曼舟に師事、同会の重鎮となり歴史画を得意とした。27、28年帝展で特選。帝展・新文展では無鑑査、審査員。24年京都府立美術工芸学校教授、25年京都市立絵画専門学校助教授、36年同校教授。43年早苗会を解散、新たに耕人社を結成。50年日展運営参事。1952年没、58歳。日本画、美教

松本 薫 (まつもと・かおる/1952 年～)

兵庫県生れ。1976 年京都彫刻美術展で新人賞。77年年京都選抜展で京都府買い上げ賞、京都インターナショナル美術学校専攻科卒業、京都府海外研修にて中南米滞在。79年ヘンリー・ムア大賞展で優秀賞、現代日本美術展で大賞(15 回で佳作賞、17 回でいわき市立美術館賞)。80年アート・ナウ(兵庫県立近代美術館)、日本国際美術展(14 回で東京国立近代美術館賞)、ジャパン・エンバ大賞展(4 回で優秀賞、8 回も出品)、神戸須磨離宮公園現代彫刻展(11 回で神戸須磨離宮公園賞、12 回で国立国際美術館賞、13 回で三重県立美術館賞)。82年長野市野外彫刻賞。88年三田彫刻コンペティションで大賞。89年六甲アイランド CITY 彫刻展で優秀賞。2003年桜の森彫刻コンクールで大賞。彫刻

松本玄々堂(初代)・保居 (まつもと・げんげんどう I・やすおき/1786～1867 年)

京都生れ。数珠商の家に生まれる。1cm から 3cm 四方の画面に地図や千字文を刻ん

で拡大鏡で見せる微塵銅版、日本各地の名所旧跡を題材にした銅版画まで多数制作。精緻ではあっても芸術的価値はさほどでもないが、大量印刷によって、医学解剖書などに限られていた銅版画の複数生産の機能をそれ以外の実用、娯楽の分野にまで拡大、一般に銅版画を流通させた点、上方を代表する作家。長男松田緑山が玄々堂2代を称した。1867年没、81歳。江戸後期の銅版画家、銅版画導入普及

松本佐平 (まつもと・さへい/1851～1918年)

石川県生れ。父松屋菊三郎に陶技、徳田寛所に絵をまなぶ。赤絵、青九谷をつくり、釉料や築窯に改良をくわえた。1918年没、68歳。陶磁

松本孝之 (まつもと・たかゆき/1926～2011年)

長崎県生れ。1948年長崎師範学校卒。佐々中学校に勤務この間光風会展に出品。65年東光展初出品以後毎年出品。66年日展初出品以後毎年出品。68年東光会賞。70年安井賞展入選。73年現代新人秀作展招待出品。73年年画業に専念のため教職を辞す。75年東光会40周年記念大賞・東光会員賞。77年ヨーロッパ取材。80年イタリア・フランスに游学。84年フランスに留学サロン・ドートヌ展他出品。85年アメリカ国際美術展で第5席。94年紺綬褒章。2011年没、85歳。洋画、美教

芥元武雄 (まつもと・たけお/1901～1996年)

京都生れ。兄は日本画家の芥元一洋。京都市立美術工芸学校中退。菊池桂月塾に入門。1927年帝展に入選。帝展・新文展・日展に出品。戦後は、京都御所などの障壁画模写を手がける。1976-81年桂離宮の大改修に際し、狩野探幽(漁村山水図)などを模写。復元・模写の技術で高く評価された。1996年没、95歳。日本画、復元・模写

松本昇 (まつもと・のぼる/1931～2009年)

石川県生れ。1952年金沢美術工芸短期大学油絵科卒。高光一也に師事。52年日展入選。63年光風会展入選、以後光風会展に出品、69年ホルベイン賞、74年会員推挙。87年高光一也賞、92年中沢光弘賞。93年「松本昇自選展」(東京セントラル絵画館)、小松市教育賞。88年、96年日展特選。98年北國文化賞。2000年小松市文化賞。2009年没、78歳。日展会員。光風会評議員。洋画

松本奉時 (まつもと・ほうじ/生没年不詳)

大坂の人。与謝蕪村(よさぶそん)の画風をまなび、蝦蟇(がま)をこのんでかいた。通称は周助。号は奉時道人。江戸後期の絵師

松本勝 (まつもと・まさる/1943年～)

東京生れ。武蔵野美術大学卒業。1967年院展入選(以後毎年出品)。68年奥村土牛に師事。69年日本美術院院友。81年院展出品作品山種美術館買上げ。83年春の院展出品作外務省買上げ('89年も)。90年横浜Iデッサ美術交流「横浜美術展」(オデッサ市東西美術館)。99年高島屋で個展。日本美術院特待。日本画

松本明慶 (まつもと・みょうけい/1945年～)

京都生れ。慶派に属するとされる椿井仏所の流れを汲み、「平成の名仏師」と称される。1964年京仏師の野崎宗慶に弟子入り。80年京都仏像彫刻展で京都市長賞。85年京都仏像彫刻展で京都府知事賞。98年パリギメ東洋美術館の仏像100体を修理。91年大仏師の称号を受ける。2006年京都市上京区に松本明慶佛像彫刻美術館が開館京都仏像彫刻家協会会長。仏師、個人美術館

松本保居・初代玄々堂 (まつもと・やすおき・げんげんどう I /1786～1867年)

京都生れ。数珠商の家に生まれる。1cmから3cm四方の画面に地図や千字文を刻んで拡大鏡で見せる微塵銅版、日本各地の名所旧跡を題材にした銅版画まで多数制作。精緻ではあっても芸術的価値はさほどでもないが、大量印刷によって、医学解剖書などに限られていた銅版画の複数生産の機能をそれ以外の実用、娯楽の分野にまで拡大、一般に銅版画を流通させた点、上方を代表する作家。長男松田緑山が玄々堂2代を称した。1867年没、81歳。江戸後期の銅版画家、銅版画導入普及

松本裕子 (まつもと・ゆうこ/1957年～)

大阪生れ。1981年京都教育大学大学院修了。京都美術展で新人賞。海外で研修、第8回創画展で入選(2000年創画会賞、07、09年も同賞、09年会員)。82年文化庁芸術家国

内研修員となる。83年山種美術館賞展に出品(91、93、95、97年も出品)。90年京都新聞日本画賞展に出品(91、92、94、96年も出品、98年優秀賞)。2001年現代美術選抜展(文化庁主催)に出品。11年個展(ギャラリー青い風、京都)開催。日本画

松本陽子 (まつもと・ようこ/1936年～)

東京生れ。1960年東京藝術大学美術学部油画科卒。60年代アメリカ滞在でアクリリック(アクリル絵の具)に出会い。一貫して抽象作品を制作。91年国立国際美術館で個展を、2005年に神奈川県立近代美術館鎌倉で二人展、また09年に国立新美術館でも二人展を開いている。洋画、版画

松本竜山・3代目玄々堂 (まつもと・りゅうざん・げんげんどう III/1853～1907年)

初代の玄々堂松本保居の八男。2代玄々堂の弟。3代目玄々堂を称す。明治初期に兄とともに東京へ移住し、水路局で海図の製作に当たった。また、銅版画による風景画を残している。1907年没、55歳。版画

松本零士 (まつもと・れいじ/1938～2023年)

福岡県生ま。代表作に『男おいどん』『宇宙戦艦ヤマト』『銀河鉄道999』SF漫画作家として知られるが、少女漫画、戦争もの、動物ものなど様々なジャンルの漫画を描いている。アニメ制作にも積極的に関わり、1970年代半ばから1980年代にかけては松本アニメブームを巻き起こした。宝塚大学特任教授、京都産業大学客員教授、デジタルハリウッド大学特任教授を歴任。旭日小綬章、紫綬褒章、フランス芸術文化勲章シュブリエ受章。2023年没、85歳。漫画、アニメ、美教

松山しげき (まつやま・しげき/1973年～)

1973年生れ。98年よりイラストレーターとして広告やプロダクトのイラスト制作を手がける。2011年以降はよりコンセプチュアルな作品制作を行うためにアーティストへ転身。国内外のギャラリーにて、タブローやインスタレーション作品を中心に発表。主な個展に、「Portrait of Dazzle」(GR gallery、ニューヨーク、2022)「Portraits II」(GALERIE OVO、台北、2022)「アイジエンは世界を二次元で見る」(MA2ギャラリー、東京、2021)「Portraits」(ロイドワークスギャラリー、東京、2021)、グループ展に、「Fifty Shades of Grey」(Maison Ozmen、パリ、2022)、「Duality」(Urban

Spree、ベルリン、2021)など。現代美術、洋画、インスタ

松山修平 (まつやま・しゅうへい/1955年～)

東京生れ。1976年イタリアに渡る。79年ペルー・ジャ・プリーオリ美術館で個展。93年以降「SHIN-ON」展をベネチアで隔年開催。ミラノ在住。洋画、現代美術

真野暁亭 (まの・ぎょうてい/1874～1934年)

東京生れ。河鍋暁斎の元で画を学び、山水画、人物画を得意とした。1894年日本青年絵画協会第3回絵画共進会に《虎図》で三等褒状。1907年には東京勸業博覧会にて三等賞牌。また文展創設の際には正派同志会(旧派)結成に評議員として参加。1934年没、60歳。日本画

真野 広 (まの・ひろし/1919～2010年)

東京生れ。1948年二紀展褒賞、中部二紀展賞。49年。マッカーサー夫人主催のサロン、プランタン展に出品、ニューヨーク・タイムズ社買い上げ。52年東京高円寺にフォルム洋画研究所設立、49年二紀会同人。71年二紀展同人賞、同人努力賞。75年二紀展会員。77年二紀展委員。2010年没、91歳。洋画

真野 満 (まの・みつる/1901～2002年)

東京生まれ。尾竹竹藪に絵の指導を受ける。佐藤日梵の勧めで日本画研究団体、青樹社に参加。22年青樹社の一員として第一作家同盟に参加するが、第一回展ののちに脱退。27年京都市立絵画専門学校卒業。再び上京し、23年安田牧彦に師事。24年院展に入選。26年より法隆寺金堂壁画模写に従事し、五号壁画を担当。41年院展で日本美術院第三賞。戦後も院展で活躍し、57年院展で日本美術院賞、同人。71年文部大臣賞、80年内閣総理大臣賞。2002年没、101歳。日本画、模写

馬淵明子 (まぶち・あきこ/1947年～)

神奈川県生れ。1964年東京教育大学附属中学校・高等学校卒、72年東京大学教養学部フランス科卒、78年同大学院人文科学研究科美術史博士課程満期退学。パリ第4大学に留学。東大文学部助手、国立西洋美術館学芸課主任研究官、青山学院女子短期大学

助教授、日本女子大学助教授、同教授を経て、同名誉教授。93年『美のヤヌス』でサントリー学芸賞。98年『ジャポニスム 幻想の日本』でジャポニスム学会賞、同学会会長。2013年国立西洋美術館館長ならびに独立行政法人国立美術館理事長、文化審議会委員。美史、美教、国立西洋美術館館長

真村蘆江 (まむら・ろこう/1755～1795年)

長崎県生れ。南蘋派の熊代熊斐(くましろうゆうひ)のち清(中国)の方西園(ほうせいえん)にまなび、独自の画風をたてた。門下に唐絵目利の渡辺鶴洲がいる。子の真助は唐絵目利の荒木家の養子となり荒木君瞻と名乗り画を画いた。1795年没、42歳。江戸中期-後期の絵師

繭山順吉 (まゆやま・じゅんきち/1913～1999年)

富山県生れ。父・繭山松太郎、母・美代(共に同墓)の長男。1916年父の松太郎が東京に繭山龍泉堂店舗を構えた。東京市立第一中学校(九段高校)に通う。父が店主を務める同店に入店。修行に励む。35年父の松太郎が54歳で他界。21歳にして母の美代を助け、4人の妹弟が進学できるよう家業に勤む。父の松太郎の切り開いた道から更に力強く進み、信頼を引き継ぎ数々の名品を取り扱う。終戦後は積極的に鑑賞美術を海外に紹介し、欧米からは「MAYUYAMA」として知られるようになった。中国鑑賞陶磁器の黄金期を生きた、昭和を代表する日本の古美術商。76年名品を集録した『龍泉集芳』、'88順吉著の『美術商のよここび』、'98(H19)順吉が編集し『古美術商繭山松太郎と鑑賞陶器の世界』を刊行。株式会社繭山龍泉堂社長のちに会長、東京美術倶楽部取締役、東京美術商協同組合理事長、相談役を歴任。1999年没、85歳。古美術商(繭山龍泉堂)二代目

繭山松太郎 (まゆやま・まつたろう/1882～1935年)

1905年北京崇文門内に渡り「龍泉堂」北京支店を開業、古美術商を始める。龍泉堂という屋号は「龍泉窯青磁」に因んで名づけた。青磁の鑑定は最も難しいとされ、青磁の目利きは美術商としての信頼であるとされていた。主に中国の古い陶磁器を買い付ける店であり、また当時の北京では鉄道工事の際に多くの美術品が出土し世界的に注目されていた。北京での古美術売買の知識を有し、茶道具中心の道具商や骨董商しかなかった日本に、美術商という新しいジャンルを持ち込む決意を固める。16年東京銀座に繭山龍泉堂を創業。20年京

橋に移転。23年帝国ホテル開業に伴いホテル内にジュエリー専門店を開設した。昭和に入ると、国内で鑑賞陶器が流行し繭山龍泉堂は注目され日本で指折りの古美術商の地位を築くことになった。北京で同時期に古美術商をし、同じく日本に進出した山中定次郎の山中商会とともに日本の二大中国古美術商とされる。1935年没、53歳。古美術商(繭山龍泉堂)創業者

丸井金貌 (まるい・きんげい/1909～1979年)

愛知県生れ。1928年東京美術学校日本画科卒。30年国際美術協会主催第1回美術展覧会入選、首席。戦時下となった20代後半に画業を離れ、48年神奈川工業高校工芸図案科教諭として後進のデザイン教育に尽力する。晩年再び画筆をふるうも1979年没、69歳。2008年一宮市博物館で個展。デザイン、日本画、美教

丸山石根 (まるやま・いわたね/1918～1999年)

入江波光・中村岳陵に師事。日展特選、大阪芸術賞受賞。京絵を得意とした。関西美連会長。1999年没、80歳。日本画

円山応鶴 (まるやま・おうかく/1883～1943年)

女史は1883年生れ。円山応挙末孫七世。盆画と鶴の絵に秀でていた。1943年没、61歳。日本画

円山応挙 (まるやま・おうきょ/1733～1795年)

京都府生れ。圓山應舉、15歳頃、京都に出て鶴沢派の石田幽江に師事。近現代の京都画壇にまでその系統が続く「円山派」の祖であり、写生を重視した親しみやすい画風が特色である。蘇州版画の影響を受ける。円満院、三井家、宮中などの庇護を受け、多くの門人とともに近代の京都画壇にことどもらず近代「日本画」をつくりだす重要な要素となった。1795年没、62歳。江戸中期-後期の絵師、円山派の祖

円山応震 (まるやま・おうしん/1790～1838年)

1790年生れ。円山応挙の孫。木下応受の子。伯父円山応瑞の養子となる。山水、人物、花鳥にたくみだった。1838年没、49歳。江戸後期の絵師

丸山応立（まるやま・おうりゅう/1817～1875年）

京都の人。丸山応震の養子となり、丸山派をつぐ。安政の内裏造営にくわわった。人物、花鳥にすぐれた。1875年没、59歳。江戸後期・明治の絵師

丸山応瑞（まるやま・おうずい/1766～1829年）

1766年生れ。丸山応挙の長男。寛政の内裏造営の際、父とともに障壁画の制作にくわわった。1829年没、64歳。江戸中期・後期の絵師

丸山浩司（まるやま・こうじ/1953年～）

栃木県生れ。1977年多摩美術大学美術学部絵画科油画専攻卒。79年東京芸術大学大学院美術研究科修了。多摩美術大学在学中に吹田文明に師事し、木版画を始める。79年東京芸術大学大学院美術研究科修了。野田哲也・中林忠良に師事、福島大学にて教員養成の仕事に従事し、教科書編集や鑑賞教育、現代美術研究。多摩美術大学教授（社）日本版画協会理事、東京藝術大学美術教育研究会運営委員、大学版画学会運営委員。83年～福島大学教育学部助教授。95年愛知県立芸術大学助教授。2004年多摩美術大学美術学部教授。版画、美教、美普

丸山素屋（まるやま・そおく/1844～1911年）

松本市生れ。別号に山外、自笑、無心草廬がある。古叟盤谷に師事。1886年東洋絵画共進会で褒状を受けた。90年の浪速画会、99年の全国絵画共進会、1900年の大阪における南宗画会、01年の大阪南宗画会でともに二等賞。1911年没、68歳。日本画

丸山不忘（まるやま・ふぼう/1890～1970年）

山形県生れ。高松工芸学校教諭をへて東京で鑄金工場を経営。1946年母校東京美術学校（現東京芸大）の教授。高村光雲・光太郎の原型による鑄造作品を制作、また奈良薬師寺東塔相輪などを修理した1970年没、80歳。代表作に法隆寺金堂本尊前大卓。鑄金、美教

丸山雅秋（まるやま・まさあき/1952年～）

長野県生れ。1975東京造形大学彫刻家卒、佐藤忠良に師事。78年東京造形大学彫刻研究室修了、渡伊。78年イタリア国立ミラノ・ブレラ美術学校彫刻科入学。（エンリコ・マンフ

リーニ師事）。82年イタリア国立ブレラ美術学校彫刻科卒業・同絵画科入学。90年バーデン・ニュールンベルグ州アーティスト協会入会（ドイツ）。96年長野に帰国。彫刻

丸山正武（まるやま・まさたけ/1913～1987）

長野県生れ。東京帝国大学薬学科卒。オルガン株式会社創業者。丸山は晩年、会社を譲り、銀座に「彩壺堂」という美術の店をひらき、多くの画家の個展サロンを開催した。また、1963年『鑑賞美術』を柳亮と共著で刊行。1987年没、74歳。「彩壺堂」オーナー

萬代比佐志（まんたい・ひさし/1897～1961年）

岡山県生れ。幼少時に名古屋に移り住む。愛知県立工業学校図案科卒。名古屋ガス会社の嘱託社員として図案などを描く。1907年愛知県立第五中学校の物理化学の教員（30年まで）。17年大澤鉦一郎、宮脇晴、藤井外喜雄らと7人で愛美社を結成。21年第3回愛美社展に出品。第3回帝展に入選。40年大阪で肖像画の店を構える。44年名古屋市に転居。46年名古屋市のディスプレイ会社に勤める。1961年没、63歳。洋画、美教

147

み

三浦愛子（みうら・あいこ/1974年～）

神奈川県生れ。1998年東京藝術大学美術学部日本画専攻卒。2000年東京藝術大学大学院美術研究科日本画修士課程修了、臥龍桜日本画大賞展で大賞。01年再興院展入選（09年奨励賞、13年奨励賞および天心記念茨城賞）。02年春の院展入選。東京藝術大学非常勤講師。日本画、美教

三浦梧門（みうら・ごもん/1808～1860年）

1808年生れ。肥前長崎の町役人、長崎会所の目付役。画は渡辺鶴洲(かくしゅう)、石崎融思にまなび、明清(みんしん)画を研究。木下逸雲、鉄翁祖門(てつとうそもん)とともに長崎文人画の三大家と称された。1860年没、53歳。江戸後期の絵師、南宗画派(文人画派)

三尾呉石（みお・ごせき/1885～1952年）

東京生れ。戦前日本一の「虎の呉石」と称えられた。岐阜の動物書家、大橋翠石の元に送られ専心画道への精進、翠石に師事して四条派を学ぶ。東京勸業博覧会に三等賞、文展に入選、院展、文展、日本美術協会展出展、入選。日月会幹事、巽画会、浦和土曜会の会員。長男に日本画家三尾正豊、東京美術学校を首席で卒業後、横山大観に可愛がれ師事。1952年没、67歳。日本画、浦和画家

三木恒山（みき・こうざん/1811～1891年）

徳島県生れ。京都に出て医業を学ぶ傍ら岸駒について画を学び、のち、医業をやめて画に専念した。虎および人物に秀でたといわれる。その後諸国を遊歴し画技を磨いた。1884年東京の内国絵画共進会に出品し褒賞。1891年没、80歳。江戸後期から明治の日本画

右田年英（みぎた・としひで/1862～1925年）

大分県生れ。1877年代頃上京し、月岡芳年入門。1887年頃から新聞挿絵や錦絵を描き始める。91年青年絵画研究会で三等賞。92年青年絵画共進会に、審査員として参加。94年天皇・皇后両陛下大婚25年に対する日本青年絵画協会の献画に際し、「養老図」を献上。1906年真美会絵画展覧会の委員。浮世絵版画や日本画のほか、国沢新九郎につき洋画も学ぶ。1925年没、63歳。挿絵、日本画、洋画

三木多聞（みき・たもん/1929～2018年）

東京生れ。父は、彫刻家の三木宗策。1952年早稲田大学第二文学部芸術学科卒。52～82年国立近代美術館勤務、事業課長、美術課長、企画課長。72年同美術館の開館20年を記念「現代の眼-近代日本の美術から」展が開催、74年記念図録を刊行。81年同美術館において「1960年代-現代美術の転換期」展を企画担当し、国内外で活躍する日本の美術家72名を網羅し、日本の現代美術を横断的に俯瞰した。82年文化庁文化財

保護課企画官に異動。86年国立国際美術館館長。92～97年徳島県立近代美術館長。95～2000年東京都写真美術館長。01年勲三等旭日中綬章。75年アントワープ・ミデルハイム国際彫刻ビエンナーレ展コミッショナー。70年代から80年代にかけては美術評論の分野で重きを置いていた。90年柏市文化フォーラム104主催で第1回TAMON賞展(会場、=島屋、千葉県柏市)が開催。同展は、現代絵画の分野で若手美術家を育成する目的で、三木多聞の単独審査による公募展であった。『近代の美術 第7号 高村光太郎』(至文堂、1971年)父三木宗策(1891-1945)の作品集『三木宗策の木彫』(アートオフィス星野編、2006年)を自家出版した。また没後、遺族より東京文化財研究所に「三木多聞氏関係資料」が寄贈された。資料は、図書、カタログの他、自筆原稿を含む著述ファイル、展覧会案内状等によるスクラップブック、写真アルバム、手帖等であり、現在同研究所にて公開、活用に向けて整理が進められている。2018年没、89歳。美評、美術館長

三木文柳（みき・ぶんりゅう/1716～1799年）

徳島県生れ。阿波藩士。京都からやがて江戸に出て、宋紫石に学んだ。1762年頃から小豆島で活動した画家。平賀源内とも交流があり、源内の著書『物類品隲』の広告に挿絵を描いた画工として楠本雪溪(宋紫石)とともに、三木文柳の名が記されている。高松松平家伝来の博物図譜『衆鱗図』『衆芳画譜』等の作者とされている。1799年没、83歳。日本画、挿絵、博物画

三国慶一（みくに・けいいち/1889～1960年）

青森県生れ。近所に住んでいた彫刻家・早坂寿雲の影響を受けて彫刻の道を志す。1913年上京し、鈴木寿川、前田照雲に師事。16年文展に17歳の若さで入選。1926年東京美術学校卒。朝倉文夫から塑造を学んだ。帝展で入選を重ね、29、31年日展で特選。33年上位にあたる帝展推薦。新文展になると、38年「清唱」が政府買上げとなり、41年審査員。委嘱出品を続け、日展評議員を経て、参与。1960年没、71歳。彫刻

三坂耿一郎（みさか・こういちろう/1908～1995年）

福島県生れ。1937年東京美術学校彫塑科卒、39年東京美術学校研究科修了。72年日展文部大臣賞、79年日本芸術院賞、83年勲四等旭日小綬章。92年勲三等瑞宝章。37年文展に入選。68年国学院栃木短期大学教授、70～80年立教女学院短期大学教授。日展

参事、常務理事を経て、顧問。1995年没、87歳。彫刻、美教

三坂 制 (みさか・せい/1949～2013年)

東京生れ。父は彫刻家の三坂耿一郎。1972立教大学卒。父と同じ彫刻の道を歩み、日展会員。1981、87年日展で特選。89年福島県大沼郡三島町内にある彫像を中心にまとめられた写真集『石の譜 三坂制の世界』が三島町教育委員会を出版社として刊行。作品は野外彫刻が多く、練馬区光が丘の春の風公園に建つ『あそぶ』(1985設置)、練馬区東大泉の大泉井頭公園内に建つ『吹く』(1986.10.16設置)2000.1.28(H12)母校の立教大学創立125周年記念事業で『立教学院発祥の地』記念碑を制作し、東京都築地の聖路加国際病院の敷地内に建立された。デザイン学校でデッサン講師を務め後進の指導も行った。2013年没、64歳。彫刻、美教

三熊花顔 (みくま・かてん/1730～1794)

石川県生れ。京都にすみ、とくに桜花の写生で知られた。伴蒿蹊(ばんこうけい)と「近世畸人(きじん)伝」を企画し、挿絵を担当。続編は花顔が文を、妹の三熊露香が絵をかいた。1794年没、64歳。江戸中期-後期の絵師、挿絵

三熊露香 (みくま・ろこう/生誕年不詳)

三熊花顔(かてん)の妹。京都鳴滝の人。松村月溪にまなび、桜花の写生を得意とした。1798年刊「続近世畸人(きじん)伝」の挿絵を担当。画集に「倭花(やまどのはな)名品」。江戸中期-後期の絵師、挿絵

三沢厚彦 (みさわ・あつひこ/1961年～)

京都生れ。東京芸術大学美術学部彫刻科卒。1989年同大学院美術研究科修士課程修了。代表作は樟を素材とした木彫で動物を表現した「ANIMALS」シリーズ。全国の公立美術館にて展覧会を開催している。2000年西村画廊にて個展。01年平櫛田中賞。05年タカシマヤ美術賞。07年長野市野外彫刻賞。全国5ヶ所の公立美術館で『三沢厚彦 ANIMALS+』開催。19年「Animal 2018-01」が中原悌二郎賞。武蔵野美術大学特任教授。23年千葉市美術館で個展。彫刻、美教

三澤 忠 (みさわ・ただし/1935年～)

長野県生れ。桜井慶治に師事。1963年光風会展で初入選、65年入選。71年の白日会展で白日会会員。83、86年特選。93年日展会員、文部大臣賞。信州の雪を描く作家として白日会、日展で活躍。洋画

水内平一郎・杏平 (みずうち・へいいちろう・きょうへい/1909～2001年)

京都市生れ。26年京都市立美術工芸学校漆工科卒、蒔絵を迎田秋悦に、洋画デッサンを鹿子木孟郎に師事。35年京都市美術館展(1935～1944)を中心に帝展・日展などの漆工芸部門に、戦後は主に京展・日展に出品し、70年新匠工芸展に所属、会員。46年日吉ヶ丘高校の漆芸科教諭、79年帝塚山短期大学の講師、86年退職。京都工芸美術作家協会理事長。のち顧問。83年京都府文化賞功労賞、2000年には日本漆工協会の漆工功労賞。著書には『茶の漆器』(淡交社 1981)『漆庵空語』(光琳社 1987)などがある。93年姫路市にある圓山記念 日本工芸美術館で特別展「水内杏平の世界」が開催。京都で没、92歳。漆芸、版画、美教

水木しげる (みずき・しげる/1922～2015年)

大阪生れ。鳥取県境港市入船町育ち。ペンネームは、紙芝居作家時代に兵庫県神戸市の水木通り沿いで経営していたアパート「水木荘」から名付けた。1958年に漫画家デビュー。代表作『ゲゲゲの鬼太郎』『河童の三平』『悪魔くん』。2015年没、93歳。漫画

水越松南 (みずこし・しょうなん/1888～1985年)

神戸市生れ。京都市立美術工芸学校、次いで京都市立絵画専門学校に学ぶ。卒業後、富岡鉄斎の画風に私淑し南画に傾倒する。1921年日本南画院展に入選、23年に同院の同人となる。この頃、画塾「松声会」を主宰。30年兵庫県美術家連盟の結成に加わったほか、南画家・小室翠雲に随行してドイツ政府主催の現代日本画展を視察。帰国後、日本南画院展出品作がアンドレ・マルローやジャン・コクトーらヨーロッパの芸術家から高い賞賛を受ける。戦後は無所属で活動した。1985年没、97歳。日本画、南画

水越 武 (みずこし・たけし/1938年～)

愛知県生れ。東京農業大学林学科中退後、ナチュラリスト・山岳写真家 故田淵行男

に師事し写真を始める。山と森林をテーマとする数多くの著書を発表し、日本写真協会年度賞、土門拳賞、芸術選奨文部科学大臣賞など多くの賞を受ける。また、作品は国内外の博物館、美術館にも収蔵されている。写真

水島 清 (みずしま・きよし/1907～1991年)

新潟県生れ。若くして上京し林武に師事、1933年東京美術学校卒。29年二科展に出品。戦時中に盛岡陸軍予備士官学校機関銃中隊長として盛岡に赴任していた。55年独立展で活躍、会員。60年～62年渡欧。構図、色彩、タッチとも独特の力強さがあります。発表を重ね、1991年没、84歳。洋画

水島爾保布 (みずしま・におう/1884～1958年)

東京生れ。東京美術学校(現東京芸大)卒。1915年大阪朝日新聞社に在る。のち長谷川如是閑(こよぜかん)の雑誌「我等」に参加。風刺文、挿絵、世相漫画などで活躍。1958年没、74歳。著作に「新東京繁昌(はんじょう)記」など。日本画、挿絵、漫画、随筆

水田慶泉 (みずた・けいせん/1914～1997年)

大阪生れ。父は南画家の水田竹圃。1932年京都市立美術工芸学校卒業。父竹圃の画塾「菁莪会」に入り、水墨画を学ぶ。33年帝展に入選。以後、帝展、新文展に出品。47年日展に入選以来、日展に出品を続けた。初期は水墨による写実的な風景表現を模索したが、戦後は色彩による堅固な風景画を展開した。56年堂本印象の画塾「東丘社」に入る。63、64年新日展で特選・白寿賞。81年仁和寺の高松宮記念書院の襖絵 32 面を揮毫。87年金閣寺天井絵の復元事業に参加。京都で没、83歳。日本画、水墨

水田硯山 (みずた・けんざん/1902～1988年)

大阪生れ。兄は南画家水田竹圃・水田黄牛。兄竹圃の指導を受け、京都に移住日本南画院の再興に参加、理事、監事となる。1988年没、86歳。日本画、南画

水田竹圃 (みずた・ちくほ/1883～1958年)

大阪市生れ。1897年大阪で姫島竹外の門に入って南画を学び、1912年文展で入選、褒状。16年文展で特選。19年京都に居を移し、21年河野秋邨らと日本南画院を創立。日

本南画院展には35年解散するまで毎年出品し、26年帝展で委員。21年より画塾菁莪会を主宰し南画の指導、興隆に尽力。水田硯山は実弟、水田慶泉は長男である。京都で没、75歳。日本画、南画

水谷章人 (みずたに・あきと/1940年～)

長野県生れ。1965年東京総合写真専門学校卒業後、フリーランスの写真家として活動。山岳写真を経てスキー写真の分野に移行。その後、スポーツ全般の撮影を手がけ、オリンピックや各種スポーツの世界選手権を多数取材。「水谷塾」の塾長を約20年にわたって務める。主な写真集に『極限の形象』(スキージャーナル、1976年)、『白銀の閃光』(パワーライフ、1980年)、81講談社出版文化賞写真賞、2002年藤本四八写真文化賞、07年日本写真協会賞作家賞、12年ヤマハ発動機スポーツ振興財団スポーツチャレンジ賞、功労賞。写真

水谷武彦 (みずたに・たけひこ/1898～1969年)

東京生れ。1916年東京美術学校図案科第二部(後の建築科)に入学、岡田信一郎に学ぶ。21年卒、母校の助教授。23年早稲田大学大隈記念講堂の建築設計競技で2等入選。27年文部省給付留学生として渡独。28年デュサウのバウハウスに入学。基礎課程でカンディンスキーらに学んだ後、家具工房に入りマルセル・ブロイヤーに学ぶ。2年間の留学期間を延長し、建築科でハルネス・マイヤーに学んだ後、31年帰国。東京美術学校建築科に復職後、「構成原理」の講義を受け持ち、吉村順三らの後進を育成する。川喜田煉七郎の新建築工芸学院でも教育を実践。44年に退官。戦後も東京芸術大学講師、東京都立大学講師(工学)。1969年没、71歳。美教、建築、日本で最初(バウハウスへ留学)

水溜米室 (みずため・べいしつ/1817～1882年)

伊勢市生れ。1845年この頃水溜吉太夫の養嗣子となる。京都に出て岡村鳳遷さらに横山清輝に就いて四条派を学ぶ。1882年没、65歳。幕末・明治期の絵師

水野花陰 (みずの・かみん/1850～1887年)

1850年生れ。三州田原藩主三宅泰直の三女。幼い頃に渡辺華山の妻たかめ守役として仕え、長じて紀州新宮藩主の水野家に嫁いだ。画を好み、椿椿山、渡辺小華に学び、1887

年に小華の没後は滝和亭に師事した。1887年没、37歳。日本画

水野欣三郎 (みずの・きんざぶろう/1904～1996年)

静岡県生れ。東京美術学校彫刻科に学んだ。1950年浜松市立図書館の前庭に彫刻「フローラ」(花の女神の意)を制作。50年浜松市立東小学校のために「少年と小鳥」、54年浜松市立高校講堂にレリーフ「母子像」、55年西遠女子学園のために「愛の灯」を制作。浜松市美術展覧会(市展)、浜松市労働美術展の審査員。二紀会同人努力賞、二紀会委員、75年二紀会幹事、84年評議員。92年浜松市美術館で個展。1996年没、92歳。彫刻

水野忠暁 (みずの・ただとし/1767～1834年)

江戸生れ。旗本水野守政の長男。園芸技術と変異研究の進歩により草木の珍種鑑賞が盛んなころで、父も園芸を好んだことから若年より文武の余暇に園芸をたしなむ。1829年『草木錦葉集』全7巻を刊行。当時の斑入り植物を網羅したこの図説は、動植物画家として著名な大岡雲峰と関根雲停が図を描き、青山の種樹家増田金太郎の『草木奇品家雅見』(1827)と並び江戸期を代表する木版の奇品図集。〈著作『小おもと名寄』実生小不老草奇品寄』1834年没、67歳。動植物画、木版、園芸家

水野 浩 (みずの・ひろし/1944年～)

長野県生れ。1961～68年独立展出品。66年武蔵野美術大学中退。71年第三文明展奨励賞受賞・文明賞優秀賞。73年ヨーロッパ研修旅行／関東新人展招待・飛翔展招待。75年シエル美術賞展出品。76年現代精鋭展銅賞。81年国際扇面展大賞受賞／国際扇面展栄達賞。91年ティアス(Tokyo International Art Show)に出品。海外の作家、コレクターに大好評を得る。版画

水谷鏡也 (みずのや・てつや/1876～1943年)

長崎県生れ。号は佳園、奈良で森川社園に木彫を、和田貫水に絵を学ぶ。1897年東京美術学校に入学。99年新設された塑造部へ移る。1902年同校を卒業。03～33年同校で塑造を教えた。10年3年間ヨーロッパへ留学、作品としては鳴滝塾にある「シーボルト胸像」が知られている。1943年没、67歳。彫刻、彫塑、美教

三瀬夏之介 (みせ・なつのすけ/1973年～)

奈良県生れ。京都市立芸術大学美術学部美術科日本画専攻卒業後、同大学大学院美術研究科絵画専攻修了。岩絵具、和紙を画材とし、自身が生活する土地や現代的、時事的な事象、大仏、日の丸などを繁殖的に結合させたモチーフを描画。2009年より、ともに東北芸術工科大学で教鞭を執る画家の鴻崎正武と共同で「東北画は可能か?」と題したプロジェクトをスタート。日本のアートシーンが首都圏に集中するなか、東北においてその地域名を冠した絵画が成立する可能性を探る試みとして、同大学の在学学生、卒業生を中心にフィールドワークや作品展示を行っている。現在、東北芸術工科大学芸術学部美術科教授。主な個展に「三瀬夏之介個展 ぼくの神さま」(青森公立大学国際芸術センター青森、2013)、「日本の絵」(鶴岡アートフォーラム、2017)など。日本画、美教

溝田コトエ (みぞた・ことえ/1931年～)

神奈川県生れ。1956年女子美術大学芸術学部美術学科洋画科卒。59年私学研修福祉会の助成金を得て東京藝術大学で美術解剖学を学ぶ。61年東京・中林画廊で個展。同年より女子美術大学芸術学部の専任講師、76年助教授、87～97年教授。64年パリ国立高等装飾美術学校に編入学。74年文化庁現代美術選抜展出品。88年女子美術大学の海外研修として渡伊。国内に限らず、ウィーン、ニューヨークなど海外でも個展を開催。女子美術大学名誉教授。美教、洋画

三谷永錫・狩野永錫 (みたに・えいしゃく/生誕年不詳～1822年)

福岡県生れ。1785年狩野家に入門し、狩野の姓をゆるされる。1793年法眼となった。1822年没。江戸後期の絵師

三谷勝波方信 (みたに・かつなみ・まさのぶ/1805～1869年)

1805年生れ。三谷第一分家六代。父は大島氏で、三谷永就資信の養子となった。理由は明らかではないが、本家二代の安俊以来代々師事し続けていた中橋狩野家を離れ、木挽町狩野家の伊川院栄信のもとに入門した。1831年に法橋に叙され、のちには法眼の位にも叙された1869年没、65歳。江戸後期—明治期の絵師

三谷吾一 (みたに・ごいち/1919～2017年)

石川県生れ。1933年沈金師・蕨舞洲に師事、38年前大峰に師事、41年沈金職人として独立。42年新文展入選、65年日本現代工芸美術展で現代工芸大賞読売新聞社賞、66年日展で特選北斗賞。70年改組日展で特選北斗賞。77年輪島塗技術保存会会員。88年日本芸術院賞。89年日展理事。93年勲四等旭日小綬章。94年日展理事、社団法人現代工芸美術家協会常務理事、輪島塗技術保存会副会長。、2002年芸術院会員。15年文化功労者。2017年没、98歳。漆芸

三谷長博 (みたに・ながひろ/1902~1983年)

松江市生れ。1926年東京美術学校西洋画科卒。一年後輩には小磯良平や牛島憲之らがいいた。帝展、文展などに出品入選していたが、戦後は旺玄会会員、新世紀美術協会会員などを経て、58年新協美術会に創立メンバーとして参加。71年文部大臣賞。油絵のほか水彩画にも秀で、昭和20年代には松江水彩画会を発足するなど活動は多岐に及んだ。1983年没、81歳。洋画、水彩

三谷三雄義信 (みたに・みつお/1834~1880年)

1834年生れ。三谷勝浦友信の三男。中橋狩野家の狩野永徳立信に入門したと伝わる。妻は川辺御楯の妹。虎次郎、繁記、主道などと名乗り、中年から狩野左京之進、楽山亭永錫などと号した。当時の世評は高く、「生き絵書きの三雄」などと称されたという。1880年没、47歳。江戸後期-明治期の絵師

三田村峻右 (みたむら・しゅんゆう/1936年~)

岐阜県生れ。1964年東京教育大学(現・筑波大学)芸術学科彫塑専攻卒。65年スウェーデン王立美術院大学及びイタリア・フィレンツェ美術アカデミー留学(~70年)。76年筑波大学芸術学系講師(79年助教授、87年教授、95年芸術学群長)。2000年退官。87年アーティスト・イン・レジデンス・アワード(ホログラフィー美術館、アメリカ)及び国際交流基金芸術家派遣により渡米。2000年「三田村峻右と〈総合造形〉展」(茨城県つくば美術館開催)／2016年「奇想天外！アートと教育の実験場 筑波大学〈総合造形〉展」(茨城県近代美術館)出品。ガラス工芸、造形

御手洗賢司 (みたらい・けんじ/1934年~)

宮崎県生れ。武蔵野美術専門学校中退後、開学当初の大分県立芸術短期大学で学ぶ。大分県美術展では、1966年会員努力賞、84年20周年記念賞・OG賞。その後、宇治山哲平の勧めで、85年国画会展に出品し新人賞。98年国画会展で安田火災美術財団奨励賞、国画会会員。独特のフォルムと鮮やかな色彩による絵画作品は、高い評価を得ている。洋画

三井飯山 (みつい・はんざん/1881~1934年)

香川県生れ。初め大分の十市王洋に南画を学び、のち京都で田能村直入に師事する。日本南画協会会員となり、1921年池田桂仙・河野秋邨・田近竹邨・水田竹圃・山田介堂らと日本南画院を結成した。1934年没、53歳。南画

三井 壽 (みつい・ひさし/1921~1988年)

京都生れ。三井飯山(日本画家・南画家)が父。京都市立美術学校を出、松林桂月(日本画)の塾に入った。戦後、1949年日本版画運動協会の創立に参加。鈴木賢二、小野忠重、上野誠、滝平二郎、新居広治、太田耕士、呉柄学 等と。美術家平和会議の前身、美術家懇談会の発足に努力し、中谷泰、西常雄、高柳博也、らと共に、平和美術展を軌道にのせるために奮闘。日本美術会にも所属し、日本アンデパンダン展に出品する。職美協(職場美術協議会)には、都庁美術部や、年賀状作りの木版画の講師として、ほぼ10年間つとめる。1988年没、67歳。版画

光岡 亮 (みつおか・りょう/1918年~)

中国大連生まれ。京都市立絵画専門学校を卒業し、研究科を1936年修了後、40年奉祝展に初入選。46年日美展入選以来10回入選。57年年「春塔社」池田遥邨に師事。68年から日春展連続3回入選。69年改組日展に連続3回入選。71年関西展審査員。京展で活躍。日本画

光安浩行 (みつやす・ひろゆき/1891~1970年)

福岡県生れ。県立中学修猷館を卒業後上京、1912年太平洋画会研究所に入り中村不折に学ぶ。26年から帝展に入選を重ね、31年新文展無鑑査、50年日展特選。57年日展審査員を歴任、67年評議員。29年太平洋美術学校教授を務める。47年示現会創立に参加。

32年筑前美術協会結成に加わる。写生を基本に独自の単純化、装飾化を試み、明快かつ重厚な色調の婦人像や風景を得意とした。晩年は水墨画にも手を染め、現代水墨画会展に出品。1970年没、79歳。洋画、美教、水墨

三露千鈴 (みつゆ・ちすず/1904~1926年)

大阪生れ。父は船場で木綿問屋・三露商店を営んでいた。1918年頃、母の千萩とともに毎週金曜日に庭山耕園の画塾に通い花鳥画を学ぶ。その後、母と妹と共に、木谷千種に師事する。23年日本美術展覧会に入選し、久邇宮家に献上。23年白耀社展に《コドモノクニ》を出品、24年第3回展に出品26年洗礼を受けキリスト教に入信し、大阪市東区神崎町(現・中央区)の基督信徒集会所に通う。1926年没、22歳。27年心齋橋そごうで千鈴追悼の八千草会展が開催。日本画

水戸岡鋭治 (みとおか・えいじ/1947年~)

1947年生まれ。STUDIO SILVICOPPOLA(イタリアミラノ)を経て、72年東京にドーンデザイン研究所設立。JR九州の車両、駅舎などを多数デザインし、多くの賞を受賞している。現在、JR九州デザイン顧問、両備グループデザイン顧問。デザイナー

緑川廣太郎 (みどりかわ・こうたろう/1904~1983年)

横浜市生れ。1920年より本郷洋画研究所に学ぶ。小島善太郎の門をたたき師事。33年独立展に初入選し、以後同展に出品を続ける。40年独立賞。49年同会員。43、44年文展、戦時特別展で特選。63年日本国際美術展に招待出品。66年独立展で児島賞。69年からシルクロードを訪れ以降たびたび同地に取材してその風景を描き続けた。77年紺綬褒賞。東京で没、78歳。洋画

緑川俊一 (みどりかわ・しゅんいち/1947~2022年)

東京生れ。67年絵を始める。71年小笠原諸島、72年北海道、77年東京、88~91年NYに住む。マエダ画廊(名古屋)、現代画廊、ギャラリー川船、空想・ガレリア、ギャラリー汲美、羽黒洞木村東介(東京)、たいけうち画廊(新潟)などで個展。ほかグループ展多数。2001・09年個展新潟絵屋で開催。2013年に吉田淳治との素描2人展を開催。2022年没、75歳。洋画

緑川洋一 (みどりかわ・よういち/1915~2001年)

岡山県生れ。日本大学専門部歯科医科学学校卒。1937年岡山市内で歯科医院を開業。38年アマチュア写真家として活動を開始し、親友となる植田正治らと共に『中国写真家集団』で活動。47年秋山庄太郎、植田正治、林忠彦らと『銀龍社』を結成。62年写真集『瀬戸内海』(美術出版社)で、日本写真批評家協会賞作家賞、日本写真協作家賞、岡山県文化賞。代表的な写真集に『国立公園』(東京中日新聞出版局、1967)、『日本の山河』(矢来書院、1975)、『皇居 自然と造形』(集英社、1981)、『海のメルヘン』(ぎょうせい、1988)。90年勲四等瑞宝章受章。92年岡山県西大寺に「緑川洋一写真美術館」を開館(現在は閉館)。97年日本写真協会功労賞。2001年没、86歳。写真

50

皆川淇園 (みなかわ・きえん/1735~1807年)

京都生れ。「易経」をもとに字義、音声、文脈の関連を研究する「開物(かいぶつ)学」を独創し、門人に教授。晩年に私学弘道館をひらく。詩文、書画にもすぐれた。弟に富士谷成章(なりあきら)。子に皆川篁齋(こうさい)。1807年没、74歳。著作に「名嘯(めいしゅう)」「淇園詩話」など。江戸時代中期~後期の儒者、書画

水口温清堂 (みなぐち・ゆせいどう?/1833~1909年)

1833年生れ。土佐郡に住んでいた。15歳の時に土方洞甫に狩野派を学び、1850年師の後を継いで山内家の絵師をつとめ、師の没後は前村洞泉の門に入った。1909年没、77歳。土佐派の絵師

皆島万作 (みなしま・まんさく/1923~1997年)

北海道生れ。福岡県に移住し、1941年県立中学修猷館卒。55年の第5回から第10回までモダン・アート展に出品。前衛美術運動グループ「九州派」とかかわり、55年九州派から離れた斎藤秀三郎らと「グループ西日本」を結成。65年に渡米、西海岸を中心に作家活動を展開、73年「アメリカの日本人作家展」(京都・東京国立近代美術館)に招待。87年帰国後は大牟田に居住し、地元のみならずアメリカ、韓国などでも展覧会を開催。晩年は曼陀羅をテーマに大作の絵画に打ち込み、独自の世界を築いた。1997年没、74歳。洋画、九州派

南大路一 (みなみおうじ・はじめ/1911～1994年)

東京生れ。1929年18歳の頃、画技指導を受けていた長谷川昇の勧めにより、春陽会洋画研究所に入所。同所に36年まで在籍し、木村荘八、中川一政、裕伊之助らに学ぶ。春陽会展の出品を中心に制作を行う。47年アヴァンギャルド芸術クラブの創立に参加。独自の画家活動も行う。60年代からは現代美術展優秀賞、春陽会展中川一政賞、国際形象展愛知県美術館賞。84、89年紺綬褒章。1994年没、84歳。洋画

南 聡 (みなみ・さとる/1965年～)

大分市に生まれる。多摩美術大学絵画科日本画専攻に学び、1990年改組日展に入選。以後、日展で作品を発表する一方、東京日本画新鋭選抜展や東山魁夷記念日経日本画大賞展などの各種コンクール展にも選抜され、次代を担う日本画家として注目。2012年にはホルトホール大分の緞帳原画を手がけた。現在、日展会員、九州産業大学教授。日本画、美教

南島 隆 (みなみしま・たかし/1957年～)

長野県生れ。1981年武蔵野美術大学造形学部彫刻学科卒。83年武蔵野美術大学大学院美術専攻彫刻コース修了。79年中日展[準大賞]。95年朝日チューリップ展準大賞。2003年国民文化祭美術展実行委員会長賞。05年愛・地球博アートギャラリー展グルジア賞。彫刻、美教、デザイン

南 静山 (みなみ・せいざん/生誕年不詳)

備後国福山の人。幼い頃より書画彫刻を好み、楳本翁に指導を受けた。1878年淵野桂仙に画を学び、後に各地を漫遊して修業した。90年以降、内国勸業博覧会、日本美術協会展覧会、日本美術協会大阪支会等に出品して優賞を受けた。94年北白川宮殿下の命を受け御印を刻し、95年再び同殿下の命で彫刻彩漆の印色器を制作、95年同殿下の命で天皇陛下への御獻納の御硯函を制作した。98年1月には日本美術協会大阪支会技芸員となった。日本画、彫刻、篆刻

南屋音彦・合田好道 (みなみや・おとひこ/1910～2000年)

香川県生れ。29年画家を志し、上京。29年春陽会展に木版画が入選。春陽会洋画研究所に入り、3年ほど学ぶ。料治熊太を知り、料治が計画していた版画誌『白と黒』の編集同

人。32年春陽会展に油彩画を出品。木版画の蔵書票を発表。東京で伊東安兵衛と喫茶をかねた工芸店「門」を開業。「合田好道」の名を使い春陽会展、新文展に入選。43年国画会展に出品し、国画奨励賞、会友。46年に濱田庄司を頼り、益子に移住。47年頃から作陶を始め、後に円道寺成井窯などで絵付けの仕事に就き、作陶と画業を続けた。81年合田陶器研究所を設立。作陶に励み、95年栃木県文化功労賞。99年地域文化功労者文部大臣表彰。栃木県で没、90歳。版画、蔵書票、洋画、陶芸

峯田敏郎 (みねた・としろう/1939年～)

山形県生れ。東京教育大卒。新海竹蔵に師事。東京芸大で舟越保武に師事。昭和会展優秀賞。高村光太郎大賞展優秀賞。ロダン大賞展彫刻の森美術館賞。新海竹蔵・峯田敏郎彫刻展。平櫛田中賞。田中美術館運営委員、選考委員。長野市野外彫刻賞。個展:せいほう。彫刻

嶺田 弘 (みねだ・ひろし/1900～1965年)

東京生れ。白馬会葵橋洋画研究所に学ぶ。黒田清輝に師事。多くの雑誌の挿絵を手掛け、吉屋信子「家庭日記」、広津和郎「女給」、中村武羅夫「白蛾の舞」などを描いた。1936年小田富弥、斉藤五百枝などと雑誌「画ともたち」を発刊している。戦後は『少年倶楽部』など児童もの挿絵、講談社の『世界名作全集』などの絵本を描いた。『黒将軍快々譚』謎の暗号』なども有名。1965年没、65歳。挿絵、絵本

三島上龍 (みはた・じょうりょう/生没年不詳)

京都の人。天保年間(1830～1843年)を中心に活躍。初め四条派の岡本豊彦に学んだといわれ、四条派風の花鳥描写を衣装に取り入れた華麗な美人画で人気を得た。天保年間の書物で、よく風俗の情態を描き世の人情を動かす、として江戸の国貞と並び称されている。多くの弟子たちや垂流の画家たちにより、上龍風の美人画は明治に至るまで京都で大きな影響力を持った。江戸後期の絵師

壬生水石 (みづ・すいせき/1790～1872年)

1790年生れ。土佐高知藩家老酒井勝作の与力。詩歌、書画にすぐれ、印刻をこのむ。中年をすぎて三雲仙嘯(せんしょう)の門人となり、諸名家から雅印をもとめられてその名を知られ

た。1872年没、82歳。著作に「水石印譜」など。篆刻

御船綱手 (みふね・つなて/1876～1941年)

倉敷市生れ。円山派の木村応春に、ついで大阪の渡辺祥益に学ぶ。上京し、川端玉章に師事。1896年東京美術学校に編入、橋本雅邦に師事。97年日本絵画協会共進会で2等褒賞。99年東京美術学校日本画科卒、大阪で画業に励む。1910年日英博覧会に際して欧米を旅行。ハワイからアメリカ合衆国を横断してヨーロッパに渡り、イギリス、フランス、イタリア、スイス、ドイツ、オランダ、ノルウェーを経て、ロシアからシベリア鉄道で帰国した様子を、13年「世界周遊実写 欧山米水帖」として描いた。晩年は、自宅に植物園を造り、植物の研究を深めて週刊朝日に「百花画譜」を発表。1941年没、65歳。日本画

三村博司 (みむら・ひろし/1950年～)

静岡県生れ。1989年国展で新人賞。90年国展に出品し会友。94年国展に出品し会友優作賞、会員。94年文化庁主催現代美術選抜展に出品。2002年企画展「三村博司・海野光弘二人」展を開催。2005年「第3回創作版画展」に出品(駿府美術館)。版画

宮川香山・初代 (みやがわ・こうざん I/1842～1916年)

京都生れ。京都で楽焼を専門とする家業を継いだ。1871年横浜に出て、輸出陶磁器を製する真葛焼を興す。初期には写実に徹した細工物を得意としたが、後に科学的釉薬の開発に取り組み、新釉薬による精密華麗な作品を制作。1876年フィラデルフィア万国博覧会に出品された真葛焼は、世界で絶賛され真葛焼と宮川香山の名を知らしめた。内外の博覧会で受賞、96年帝室技芸員となった。1916年没、74歳。陶芸、真葛焼

宮川香山・二世 (みやがわ・こうざん II/1859～1940年)

京都生れ。初代香山の長子。京都に生れ、1873年父と共に横浜に移り、長年の間陶磁器製作に専心し、真葛焼を完成した。帝国美術院展覧会に第四部が置かれ、その審査員に推され、又日本美術協会委員として斯界に重きをなした。1940年没、82歳。陶芸、真葛焼

宮川春水・勝川春水 (みやがわ・しゅんすい/生没年不詳)

江戸の深川、芳町に住んだ。宮川長春の門人、師同様に肉筆美人画の制作を中心に活

動。地味な作風を旨とする。作画期は寛保(1741～44)ごろから明和期(1764～72)までだが、宝暦(1751～64)末から明和はじめにかきけて、版刻武者絵本を若干例手がけている。江戸中期の浮世絵師

宮城音蔵 (みやぎ・おとぞう/1921～2004年)

東京生れ。東京府立第二中学校在学中、春陽会の画家倉田三郎に指導を受けた。1947年造形美術学園に入学。29歳の時に、立川美術展を開き、以後出品を続ける。50代以降はヨーロッパ、アジアを周遊し、60歳を過ぎるとチベットやネパールを題材とする作品を次々と発表した。武蔵野美術大学教授、1990年武蔵野美術大学美術資料図書館で個展。東京で没、83歳。洋画、美教

宮北千織 (みやきた・ちおり/1967年～)

東京生れ。1992年東京藝術大学美術学部絵画科日本画専攻卒(同97年、大学院博士課程満期修了)、2000年福井爽人に師事。94年再興院展で入選(98年院友、02年特待、04年招待、01、03年奨励賞、02、04年日本美術院賞)。96年東京日本画新鋭選抜展に出品。04年再興院展第10回天心記念茨城賞。日本画

三宅呉暁 (みやけ・ごぎょう/1864～1919年)

京都生れ。四条派の森川曾文(そぶん)にまなぶ。内国勸業博覧会、文展などで受賞。京都市美術工芸学校でおしえた。1919年没、56歳。日本画、美教

宮崎珠太郎 (みやざき・しゅたろう/1932年～)

東京生れ。母の郷里熊本に帰る。1950年熊本県立人吉職業補導所竹工科卒。53年上京し、通産省工業技術院産業工芸試験所雑貨意匠竹工技術研究生。54年より自営。55年頃から生活工芸展に出品、60年日展入選、以後入選8回。63年より日本クラフトデザイン協会会員。64年以降日本現代工芸美術展に数回入選。65年今日のクラフト展金賞、74年74クラフト展金賞。75年4年間九州クラフトデザイナー協会理事長。67年大分県別府産業工芸試験所主任研究員として赴任、91年まで別府と日田で産業工芸の指導と研究に従事する。工芸、クラフトデザイナー、美教

宮崎準之助 (みやざき・じゅんのすけ/1930～1989年)

福岡市生れ。1956年京都学芸大学彫塑科卒業後、福岡県立小倉聾学校に美術教師として赴任。教鞭をとりながら、57年より九州派に参加。福岡県美術、九州アンデパンダン展、読売アンデパンダン展等に絵画やオブジェを出品。反芸術的活動の後、クスの木を材料とした抽象彫刻を数多く手がけている。1989年没、59歳。彫刻、洋画、オブジェ、九州派、美教

宮崎青谷 (みやざき・せいこく/1811～1866年)

1811年生れ。津藩士。斎藤拙堂に従って学び養正寮句読師、画は米村醉翁に学び、「出藍の誉れあり」と賞賛された。のちに藩主・藤堂家が所蔵していた王建章の画法を学んで一家をなし、名は一時にして高まった。斎藤拙堂が大和の月ヶ瀬に遊んだ際には青谷らも従って行き、帰ってから著した拙堂の代表作である『月瀬記勝』には、青谷が描いた梅溪の図が掲載されている。1866年没、56歳。江戸後期の絵師

宮崎 豊 (みやざき・ゆたか/1903～1991年)

大分県生れ。1927年東京美術学校師範科卒。36年新文展に入選。39年大分中学校に勤務。40年、初個展を丸百貨店で開催。53～56年大分県立別府緑丘高校の校長。63年一水会展に入選。以後、9回入選。67年大分県美術協会第2代会長。75年勲四等瑞宝章受章。郷土の美術の発展と後進の育成に努めた。1991年没、88歳。洋画、美普

宮迫千鶴 (みやさこ・ちずる/1947～2008年)

広島県生れ。県立広島女子大学卒。1984年エッセイ集『超少女へ』で注目、上野千鶴子との対談を刊行。絵のほか、多くの女性論のエッセイを刊行。96年婦人之友の表紙絵担当。2008年没、61歳。洋画、表紙絵

宮廻正明 (みやさこ・まさあき/1951年～)

松江市生れ。1975年東京芸術大学美術学部デザイン科入学。大藪雅孝に師事、79年同大学卒。81年同大学院修士課程修了、東京芸術大学大学院美術研究科保存修復技術研究室非常勤助手、平山郁夫に師事。94年日本美術院賞(大観賞)。95年東京芸術大学大学院美術研究科文化財保存学日本画助教授。2000年同教授。09年東京芸術大学学長特命社会連携センター長。18年東京芸術大学を定年退職し、同名誉教授。84年日本美術院

院友。95年日本美術院同人。2006年日本美術院評議員。日本美術院同人・常務理事。公益財団法人文化財保護・芸術研究助成財団理事長。日本画、美教

宮島資雄 (みやじま・つぐお/1912年～没年不詳)

長崎市生れ。旧制佐世保中学校卒。旧帝美(現武蔵野美大)油絵彫刻科卒。清水多嘉示に師事。1967年現代美術家協会、日府展理事を経て、この年より二紀展に彫刻を出品する。(55才)。68年二紀展へ出品、受賞。二紀会同人。68年個展(油絵中心)佐世保市産業会館。・個展(油絵・彫刻)長崎県立美術博物館。代表作「裸婦」熊野駅広場、「お吉観音」下田。彫刻、洋画

宮武東洋 (みやたけ・とうよう/1895～1979年)

香川県生れ。1909年アメリカ合衆国へ移住。21歳の時に当時高名だった日系人のハリー重田から写真を学び、寝食を忘れて熱中する。23年ロサンゼルスのリトル東京で、トーヨースタジオを開く。32年朝日新聞社に委嘱されロサンゼルスオリンピックの写真を撮影。41年日米開戦に伴いアメリカでの日系人の収容が始まり、宮武の一家6人もマンザナー強制収容所に収容され写真撮影。戦後再びリトル東京へと戻り、スタジオを開いて日系新聞「羅府新報」などで活躍。1979年没、84歳。写真

宮田洞雪 (みやた・どうせつ/1828～1897年)

高知市生れ。はじめ横川洞雪と名乗った。1858年に江戸に出て、駿河台狩野八代の狩野洞春陽信に師事、東京、大坂、京都、四国各地を歴遊、絵馬や軸物を各地に残している。特に南国市十市の琴平神社にある絵馬「川中島両雄相打ち図」は傑作とされる。1897年没、70歳。江戸後期・明治の絵師

宮地景樹・志行 (みやち・かげき/1891～1936年)

岐阜県生れ。1909年岐阜県立東濃中学校卒。岡清一に師事。大日本水彩画会研究所で研究し、13年日本水彩画会創立に参加。22年太平洋画会准会員、30年日展覧会会友。昭和初期から高間惣七・中村不折に師事し、NHKラジオ雑誌、時事新報社『少年』『少女』、主婦之友社、興文社、『国定教科書』等の挿絵を手がけた。1931年(昭和6年)母校日吉第一尋常高等小学校を設計したほか、土雛・半原操り人形浄瑠璃の道具も制作。東京で

没、45歳。洋画、水彩、挿絵

宮地志行・景樹 (みやち・しこう/1891～1936年)

岐阜県生れ。1909年岐阜県立東濃中学校卒。岡清一に師事。大日本水彩画会研究所で研究し、13年日本水彩画会創立に参加。22年太平洋画会准会員、30年日展覧会会友。昭和初期から高間惣七・中村不折に師事し、NHK ラジオ雑誌、時事新報社『少年』『少女』、主婦之友社、興文社、『国定教科書』等の挿絵を手がかった。土雛・半原操り人形浄瑠璃の道具も制作した。東京で没、45歳。洋画、水彩、挿絵

宮永東山 (みやなが・とうざん/1868～1941年)

石川県生れ。7代錦光山とまじわり1901年その工房に参加。独立して京都粟田口(あわたぐち)、のち伏見に開窯、青磁を得意とした。帝展無鑑査。子に宮永友雄(2代東山)、孫に理吉。1941年生れ。74歳。陶芸

宮本光庸 (みやもと・こうよう/1913～2001年)

徳島県生れ。帝国美術学校彫刻科に学び、清水多嘉示、建皇大夢に師事。1936年文展に入選し、以降文展、文展、日展を発表の場とする。1938年東方彫塑院文化賞、47年日展特選、53年、54年日展特選、朝倉賞。55年日展委嘱、57年会員、67年評議員となり56年から6度にわたり審査員。日本彫刻会展で審査員、運営委員。1973年自由学園女子短期大学で後進の指導にあたる。徳島県に彫刻教室を開き、1968年徳島県出身美術家展の開催に尽力するなど徳島の美術の振興に力をそそぎ、81年徳島県文化賞。1996年よんでん芸術文化賞。2001年没、88歳。彫刻

宮本三平 (みやもと・さんぺい/生没年不詳)

東京生れ。川上冬崖の門人。1862年川上冬崖のもと、洋書調所において絵図調役を務めた。明治期、「大日本国産童蒙一覽」など物産関係の版画の版下絵を描いたほか、文部省の印行によって78～79年刊行した『小学普通画学本』20冊や79年刊行の『鉛筆画手本』、『改正小学画本』などを残している。また、自画版行による石版画を描いている。「大日本国産童蒙一覽」では三平は養蚕手引草を描いた。洋画、石版

宮本理三郎 (みやもと・りさぶろう/1904～1998年)

1904年生れ。京都で三谷光月に学ぶ。04年上京し、佐藤朝山に入門。29年再興日本美術院展に入選。以降は蛙をはじめ、蜥蜴や蟹などの小動物をモチーフに木彫作品を制作。院展を中心に活動する一方、戦後には寺院に奉納する仏像も手掛けた。1998年没、94歳。彫刻

明珍清春 (みょうちん・きよはる/江戸時代、18、19世紀)

戦国期に発達した鎧甲冑師達が江戸期初期)に彼等の仕事が無くなった事から鎧甲冑製作の代わりに、自在置物を作り始めたのが最初と言われている《明珍》とは平安時代より連続と続く日本で一番有名な鎧甲冑制作集団の流派江戸時代の自在置物作家はその多くが明珍派の甲冑師で、その名は江戸末期まで、代々受け継がれた。自在鷹置物(東京国立博物館蔵)、自在龍置物。明珍派の甲冑師、立体、金工

明珍宗幸 (みょうちん・そうこう/生没年不詳)

明珍は甲冑師の一流派で、その源流は鎌倉時代まで遡る。宗幸は明珍氏江戸時代後期の甲冑師である。明珍氏はこのように紀姓を称し、宗の字を冠した名を持つ者が多い。この一派は幕末に至るまで全国に繁栄し、甲冑・具足・馬具・鉄工品などの製作を行った。金工

明珍恒男 (みょうちん・つねお/1882～1940年)

長野県生れ。東京美術学校卒。高村光雲に師事。日本美術院にはいり1935年奈良美術院主事。仏像の保存修理にあたり、創作では京都の東寺食堂十一面観音など。古美術の論文もおおい。1940年没、59歳。「仏像彫刻」。彫刻、仏像修復

三好賢古 (みよし・けんこ/1839～1919年)

徳島県生れ。14歳で守住貫魚に入門し、住吉広賢に師事した。高野山で仏画の研究にも従事した。指絵にも長じていた。東京生活が長かったが、各地に遊歴し、神戸の須磨寺、京都の南禅寺、徳島の立江寺などの襖絵、また京都八坂神社拜殿の三十六歌仙図を描いた。勝海舟、山岡鉄舟らの師遇を得た。1919年没、80歳。江戸後期-明治期の絵師、仏画

三輪田俊助 (みわた・しゅんすけ/1913～2015年)

愛媛県生れ。1940年帝国美術学校西洋画科卒。水彩画家中西利雄と知り合い水彩画を始める。97年久万美術館で「三輪田俊助回顧展」開催。98年愛媛新聞社賞。2001年よんでん芸術文化賞受賞(よんでん文化振興財団 高松市)。2015年没、102歳。水彩

三輪美津子 (みわ・みつこ/1958年～)

名古屋市生れ。1981年愛知県立芸術大学デザイン科卒。95年VOCA展'95でVOCA賞。96, 97年フィリップ・モリス財団からの奨学金によりKunstlerhause Bethanien(ベルリン)に滞在。98年International Artists' Studio Program in Sweden (IASPIS)のゲストアーティストとしてストックホルムに滞在。洋画、現代美術

三輪龍作 (みわりょうさく/1940年～)

山口県生れ。十一代休雪の長男。1958年東京芸術大学彫刻科に入学、傍ら油彩画も制作。67年同大学大学院陶芸家を終了。68年初個展で前衛的なオブジェ陶を発表し注目を浴びる。以後も個展で独自の作風を展開し、国際展にも度々出品。79～85年走泥社同人。74年萩市上野に開窯。80年茶陶の制作も開始。2003年十二代休雪を襲名。陶芸、彫刻、オブジェ、洋画

明兆 (みんちょう/1352～1431年)

兵庫県生れ。諱(いみな)は吉山。別号は破草鞋(はそうあひ)。大道一以の法弟として東福寺に在る。殿司(でんす)職になったので兆殿司と称される。宋・元の画風を学んで独得な強い筆致と濃い色彩とを調和させた仏画画風を形成。また絵仏師の立場ではあったが、水墨山水画をも描いていたと考えられている。代表作に「五百羅漢図」「涅槃図」など。1431年没、80歳。室町時代前・中期の臨済宗の画僧、仏画、水墨、山水

92

む

武蔵石寿 (むさし・せきじゅ/1766～1861年)

1766年生れ。幕臣。甲府勤番ののち隠居し、博物学に専念。貝類1000種ほどを分類し、部雪斎の彩色図に解説をくわえて弘化(こうか)元年「目八(もくはち)譜」15巻をあらわした。ほかに「貝譜群分品彙」「介殻稀品撰」などものこす。1861年没、95歳。江戸後期の武士、博物学者

六崎敏光 (むつぎき・としみつ/1938年～)

満州生れ。1960年茨城県展でいばらき新聞社賞(62年にも受賞)。62年茨城大学美術科卒。第8回一陽展で特待賞(以後連続出品、68年会友賞、1970年会員、88年委員、90年特別賞)。66年初個展(相馬画廊、水戸市)。62～70年塊土社展出品。71年茨城県芸術祭美術展で特別賞、第1回木内克賞。85年現代日本具象彫刻展大賞。2013年回顧展(しもだて美術館。彫刻)

武藤完一 (むとう・かんいち/1892～1982年)

岐阜県生れ。川端画学校洋画科に入学、藤島武二に師事。1925年大分県師範学校の図画教師として着任し、美術教育に従事。そのかわら、平塚運一の講習会を機に木版画の制作を始め、31年日本版画協会展に入選。同年版画誌『彫りと擧り』(のち『九州版画』と改題)創刊。この頃からエッチングを制作、官展に出品。39年日本版画協会会員。翌年には日本エッチング協会創立に参加。1982年没、90歳。洋画、版画、美教

武藤順九 (むとう・じゅんきゅう/1950年～)

仙台市生れ。1973年東京芸術大学を卒、ヨーロッパに渡る。イタリアのローマと彫刻の町ピエトラサンタにアトリエを構えて、大理石の彫刻を中心に抽象的なテーマの彫刻を制作。97

年ピエトラサンタでヴェルシリア賞国際グランプリ作品「風の環(わ)・PAX 2000」は、2000年カステル・ガンドルフオにあるローマ教皇の避暑用の離宮に永久設置。19年昭島市の昭和の森内に大理石彫刻園を開園。2008年～風の環・PAX 2008 - アメリカ合衆国のワイオミング州にあるデビルスタワーというアメリカ合衆国ナショナル・モニュメント内に永久設置。彫刻、画家

武藤夜舟 (むとう・やしゅう/1892～1974年)

東京生れ。日本画家川端玉章に師事。1913年陸軍士官学校卒。31～32年陸軍省の命により満州事変・上海事変の記念絵画制作のため出張。33年陸軍歩兵少佐、予備役編入。36年『満州事変絵巻』が完成し天覧。37年読売新聞社の嘱託特派員、同月帰国。40年日本橋三越百貨店にて「武藤夜舟大陸風物画展」、40年新日本美術文化連盟理事。1974年没、82歳。日本画

村井盈人 (むらい・えいじん/1899～1976年)

高岡市生れ。富山県立工芸学校図案科在学中に中島秋圃に日本画を学び、1914年同校を卒業後に上京し中川一政に師事して洋画に転じた。17年改井徳寛らと北国洋画協会を結成。19年二科展、21年二科展に出品したが、その後は中央展での出品をやめ、29年結成の穹玄社、翌年結成の丹緑社で活動し、48年散木社を結成した。40年頃から水墨画をはじめた。49年高岡市美術作家連盟の創立に尽力した。1976年没、77歳。洋画、水墨

年多摩美術大学大学院修了、89年東京藝術大学大学院修了。88年東京で初個展。以後東京、盛岡で個展を行う。94年「VOCA展 1994 現代美術の展望 - 新しい平面の作家たち -」(上野の森美術館)に出品。97年「今日の日本画第14回山種美術館賞」展(東京・山種美術館)に出品。2004年「シリーズX [岩手の現代作家] 村井俊二 溝口昭彦展」(萬鉄五郎記念美術館)を開催。09年「岩手県所蔵美術作品選」(岩手県立美術館)に出品。

村井芳雲 (むらい・ほううん/1909～1979年)

青森県生れ。日本画家の村井芳流の二男。父の影響で早くから作家の道を進み、上京して加藤景雲の内弟子となる。戦時中は武器の木型工場などに動員され、戦後は帰郷した。作品は朔日町の来迎寺観音像など、無記名のものが多く詳細はつかめない。1979年没、70歳。彫刻

村井芳流 (むらい・ほうりゅう/1880～1953年)

青森県生れ。東京美術学校で日本画を学び、藤島静村に師事。日光東照宮の塗り替え作業に従事したと伝えられる。作品は長者山、神明宮の奉納額、襖絵など、八戸市を中心に多く残されている。1953年没、73歳。日本画

村井喜次 (むらい・よしつぐ/1924～2018年)

長崎市生れ。1943年長崎県瓊浦中学校卒。58年日本水彩画展入選。(以後連続入選)。78年日本水彩画会会員。長崎県展審査員。(以後数回歴任)。84年日本水彩画会展審査員。(以後数回歴任)。87年日本水彩画会 75周年記念展で内閣総理大臣賞。2018年没、94歳。水彩

村岡応東 (むらおか・おうとう/1873～1946年)

東京生れ。松本楓湖の門人。山水画及び花鳥画を得意としており、異画会や鳥合会で活躍した。鳥合会には1903年から参加。1946年没、73歳。日本画

村岡三郎 (むらおか・さぶろう/1928～2013年)

大阪生れ。1950年大阪市立美術研究所彫刻部修了。二科展に第35回～52回出品。6年現代日本彫刻展でK氏賞。3回展で大賞。68年神戸須磨離宮公園現代彫刻展。72年現代国際彫刻展(箱根彫刻の森美術館)。87年村岡三郎 1970-1986展(大阪府現代美術センター)。90年第44回ヴェネツィア・ビエンナーレ STUCKI 2(バーゼル) SAVOIR-VIVRE、SAVOIR-FAIRE、SAVOIR-ETRE(モンリオール現代美術国際センター)。92年語り出す鉄たち(東京都美術館)97年第2回光州ビエンナーレ 村岡三郎展(東京国立近代美術館他)。2013年没、85歳。彫刻

村上暁人 (むらかみ・ぎょうじん/1911～1998年)

広島県出身。国鉄鷹取工場に勤めながら新美術協会に属し、日本画、油絵を中心に制作。復員後は「暁人」と名乗り、版画に転じた。日本版画運動協会で活動、棟方志功にも私淑。明石市を拠点に生涯にわたって漁師や農家の働く姿や子どもたちを描き続けた。《米国黒人ラングストン・ヒューズの詩》(作品13)はハーレム・ルネサンスの代表的な詩人の肖像を

描き、《土地を掠奪された農民》(作品 14) は米軍が北富士演習場で土地を接収された農民が主題です。1998年没、87歳。版画

村上 健 (むらかみ・けん/1891～1964 年)

秋田市生れ。秋田中学の先輩である舞踏家の石井漠に影響をうけ、洋画家を志す。上京して白馬会研究所で油彩画を、三宅克己に水彩画を学ぶ。確かなデッサン力と構成力に支えられたリアリズム描写による叙情的な作風で知られる。1964年没、73歳。洋画、水彩

村上新一郎 (むらかみ・しんいちろう/1924～2013 年)

長崎県生れ。1943年旧制 佐世保中学校卒。45年長崎模範学校卒。45～83年県下で教職。54年二紀展に入選 以後毎年出品。64年渡欧。69年二紀会同人。80年原爆絵本 6 巻執筆。83年原爆絵本が世界児童優良図書受賞。84年原爆紙芝居 5 巻執筆。佐世保市民展審査員・長崎県展審査員歴任。2013年没、89歳。美術、洋画、絵本

村上東洲 (むらかみ・とうしゅう/生誕年不詳～1820 年)

京都の人。望月派の僧麓山(ごうざん)、または大西酔月の門人。山水・人物をえがいた。1820年没。江戸後期の絵師

村上松次郎 (むらかみ・まつじろう/1897～1962 年)

東京生れ。洋画家武内鶴之助に師事。昭和初期から、現代小説、冒険小説、軍事小説の挿絵を手掛け、軍艦や海戦をテーマにした写実的な絵を描いた。講談社の雑誌『少年倶楽部』で連載していた平田晋策「昭和遊撃隊」「新戦艦高千穂」や、雑誌『キング』の山岡荘八「御盾」、南洋一郎「聖火の島」などの挿絵。1962年没、65歳。挿絵

村上康成 (むらかみ・やすなり/1955 年～)

岐阜県生れ。1974年愛知県立芸術大学美術学部美術科デザイン専攻入学。78年すばる書房に嘱託として『月刊絵本』の編集。80年フリーランス。86年『ピンクとスノーじいさん』(福武書店)でポーロニャ国際児童図書展グラフィック賞。88年、89年同賞受賞。91年『ピンク！パール！』(福武書店)でブラティスラヴァ世界絵本原画展金牌。97年村上康成美術館(静岡県伊東市)開館。2002年、『なつのいけ』(文・塩野米松、ひかりのくに)で日本絵本賞大賞。1

0年村上康成絵本ギャラリー(沖縄県石垣市)開設。2020年刈谷市美術館で個展。絵本、個人美術館

村雲大樸子・毅一 (むらくも・たいぼくし/1893～1957 年)

東京生れ。1915年慶応義塾大学中退。プロレタリア文学研究、演劇美術の研究を志し、洋画研究所にも学んだ。14年名古屋の石川柳城に南画を学び、16～18年まで南画研究のため中国各地を遍歴。帰国後は塩川文鵬を師とする一方、プロレタリア美術運動など美術、演劇の運動に従った。31年川合玉堂の門に入り、長流画塾、戊辰会展に作品を発表、官展にも出品。42年青鸞社を起して同展に出。点々会の創立に加わり出品、日ソ親善協会、アジア連帯委員会、日中友好協会に関わるなど、左翼の立場から国際文化交流に尽した。1957年没、64歳。日本画、南画

村越其栄 (むらこし・きえい/1808～1867 年)

江戸の人。琳派(りんぱ)の鈴木其一(きいつ)の門人。1867年没、60歳。江戸後期の絵師、琳派

村瀬義徳 (むらせ・ぎとく/1877～没年不詳)

愛知県生れ。上京して東京美術学校で洋画を修め、寺崎広業に師事して狩野派を研究すること多年、特に花鳥、山水、人物を能くする。帝国絵画協会会員。画道の外六芸に通ずると伝う。日本画、洋画

村瀬玉田 (むらせ・ぎよくだん/1852～1917 年)

京都生れ。村瀬双石の養子。山水・花鳥画を得意とし、内国絵画共進会などで受賞。京都から東京にうつり、皇室御用画を制作、内外の博覧会に出品。1917年没、66歳。日本画

村瀬魚親 (むらせ・ぎよしん/1824～没年不詳)

徳島県生れ。旧藩士。村瀬興国の子。守住貫魚について住吉派を学んだ。1982、84年の内国絵画共進会に出品。江戸後期-明治期の絵師

村瀬秋水 (むらせ・しゅうすい/1794～1876 年)

岐阜県生れ。村瀬藤城(とうじょう)の弟。美濃(みの)(岐阜県)上有知(こうずち)の人。張月樵(ちやうげつしやう)、野呂介石(のりよけいしつ)にまなび、郷里で書画に専心した。1876年没、83歳。書画集に「秋水山人墨戯」。江戸後期の絵師

村瀬雪峽 (むらせ・せつきやう/1827～1879年)

画を父・村瀬秋水に学ぶ。江戸で佐藤一斎に学び、京で頼山陽らと交わる。維新後は名古屋に出て私塾を開いた。1879年没、52歳。江戸後期-明治の絵師

村瀬双雙石・双石 (むらせ・そうせき/1822～1877年)

はじめ松村景文に画を学ぶ。景文没後、横山清暉の門に入る。養嗣子とした門人の村瀬玉田が明治画壇で活躍した。1877年没、55歳。江戸後期-明治期の絵師

村田恵理子 (むらた・えりこ/1988年～)

富山県生れ。2012年武蔵野美術大学大学院造形研究科日本画コース修了。2016年Derby展平面部門(GALLERY KINGYO)。17年神奈川県美術展 県立近代美術館賞。19年上野の森美術館大賞 入選。日本画

村田 閑 (みらた・かん/生誕年不詳～)

東京生れ。安田鞞彦に師事。1941年再興院展で入選。43年再興院展に「霊地」を出品、院友推挙。73年頃までの活動が知られる。日本画

村田香谷 (むらた・こうこく/1831～1912年)

福岡県生れ。文人画家村田東圃の子。貫名海屋に師事。長崎で鉄翁祖門らにまなび、清(中国)にも3度わたった。晩年は大阪にすむ。高橋草坪の「集古名公画式」を補訂・刊行。1912年没、82歳。日本画

村田茂樹 (むらた・しげき/1946～2018年)

京都生れ。1966年京都市日吉ヶ丘高校日本画科卒。68年新制作協会展で入選(74年創画展に参加)。72年シェル美術賞展で佳作賞。78年個展(三条祇園画廊、京都)を開催。81年無所属と。83年山種美術館賞展に出品(85、87、89年も出品)。84～93年横の会結成。20

09年京都日本画新展選考委員。京都市で没、74歳。日本画

村田秋江 (むらた・しゅうこう/1836～1890年)

1836年生れ。村田東圃に学んだ。1890年没、55歳。日本画、南画

村田 猛 (むらた・たけし/1918～1999年)

茨城県生れ。1948年塗装会社を経営する傍ら日本画を描き始める。62年再興院展に入選(以後24回入選、59年院友、84年特待)。59年酒井三良の紹介により日本画家奥村土牛に師事。茨城県で没、81歳。2001年茨城県天心記念五浦美術館で遺作展を開催。日本画

村田東圃 (むらた・とうぼ/1802～1865年)

福岡生まれ。村田香谷の父。はじめ狩野派を学び、斎藤秋圃に師事し、京都に出て松村景文に四条派を学んだ。のちに元明の南宗画家を敬慕し、南画に転じた。50歳を過ぎた頃、京都で修行をしていた子の香谷が一時帰郷したのを機に、親子三人で京都に出て10年余り京都で活動、晩年は帰郷し子弟の教育にあたった。門人に村田香谷、村田秋江、姫島竹外、松尾耕雲らがいる。1885年没、64歳。江戸後期の絵師、南画

村田林蔵 (むらた・りんぞう/1954年～)

岩手県生れ。1973年岩手県盛岡市立高等学校卒。78年東京藝術大学美術学部日本画科卒。師・平山郁夫。90年春の院展、再興院展に入選。以後出品。93年再興院展で、日本美術院院友。97年奈良県明日香村橋寺(聖徳太子生誕の地)に天井画奉獻。99年芝・増上寺に天井画奉獻。2000年春の院展入選作外務省買い上げ。平泉・中尊寺「金色堂」の切手原画制作。09年「村田林蔵日本画展」(日本橋・高島屋)開催。14年「村田林蔵・山田宏子二人展」開催(岩手町・石神の丘美術館)。日本画

村松以弘・村松笠斎 (むらまつ・いこう/1772～1839年)

遠州生れ。伊勢の僧・月僊に学び、長じると江戸に出て谷文晁の画塾・写山楼に入門。文晁が東海道を往来するとき、以弘の家に滞在したという。渡辺華山にも画の指導を受けている。画力を認められ、時期は不明だが掛川藩御用絵師となった。同藩の儒者・松崎謙堂と交流。門下に福田半香・平井顕斎・村松弘道・僧思玄(尊永寺住持)・小栗松靄(浜松の庄

屋)などがいる。1839年没、67歳。江戸後期の南画家・歌人

村松弘道 (むらまつ・こうどう/1795～1862年)

1795年生れ。静岡県小笠郡和の人。和歌をよくし、はじめ石川依平の門に国学を学び、当時の名士と往来した。また絵画は、はじめ村松以弘に学び、のちに江戸に出て谷文晁の門に学んだ。門人に大庭峰翠がいる。文久2年、68歳で死去。江戸後期の絵師

村松秀太郎 (むらまつ ひでたろう/1935～2018年)

静岡県生れ。1961年東京藝術大学卒。新制作協会展初入選(以後37回まで毎年出品)、63年東京藝術大学専攻科卒。70年「村松秀太郎展」(松坂屋静岡店)以後、個展を多数開催。74年創画会結成後は創画展に出品(78年創画会会員)。88年筑波大学芸術学系助教授(1991～1998年教授)。2000年大阪芸術大学教授(～2008年)。千葉県で没、73歳。日本画。美教

村山和子 (むらやま・かづこ/1944年～)

徳島県生れ。1965年朱葉会入選。74年示現会入選。75年朱葉会会員。85年示現会会員。89年朱葉会委員。91年日展入選。2001年朱葉会理事、示現会退会、朱葉会理事長。朱葉会展・東京都知事賞、文部科学大臣賞。洋画、朱葉会理事長

村山きおえ /むらやま・きおえ/1941年～)

愛知県生れ。1963年日本大学芸術学部油絵科卒。72～80年女流画家協会展受賞3回受賞。82年文化庁在外研修員として1年間フランス派遣。85年白日展特別賞T賞。88年白日展文部大臣賞。90年白日展内閣総理大臣賞。91年愛知県芸術文化選奨文化賞。2011年白日展中沢賞。洋画

村山琢磨 むらやま・たくま/1912～2003年)

長崎県生れ。1931年帝国美術学校(現・武蔵野美術大学)本科洋画科入学。卒業後、37年まで在京。37年瓊浦女学校勤務。56年外海町教育委員会に勤務。62～74年外海町教育長。74年長崎市立山町に居を移す。2003年没、91歳。洋画、美教

村山春菜 (むらやま・はるな/1985年～)

大阪生れ。2007年京都市立芸術大学美術学部日本画専攻卒。09年京都市立芸術大学大学院美術研究科絵画専攻日本画領域修了。日影圭氏に師事。08年上野の森美術館大賞展に入選、日展に入選。09年京都市立芸術大学卒業制作学内展、京都市立芸術大学修了制作展で奨励賞【京都市美術館】。2021年第41回日展 特選。24年東山魁夷記念日経日本画大賞。日本画



目賀多雲川守息 (めかた・うんせんもりやす/1641～1714年)

1641年生れ。目賀多洞雲の長男。南目賀多家の祖。承応年中、江戸に上り狩野探幽に師事。明暦年間に帰藩し、絵師として召し抱えられ、延宝8年雲川と号した。元禄4年法橋に叙せられた。宝永5年隠居。1714年没、74歳。江戸初期-中期の絵師

目賀田介庵 (めがた・かいあん/1812～1880年)

1812年生れ。清水家の用人。谷文晁の門人となり、花鳥山水を得意とした。1880年没、68歳。日本画

42

2

も

毛利梅園 (もうり・ばいえん/1798～1851年)

江戸生れ。幕臣で書院番をつとめた。「梅園草木花譜」「梅園介譜」のほか、鳥、魚、菌類などの正確な写生図譜をのこした。1851年没、54歳。江戸後期の博物画

黙庵靈淵 (もくあん・れいえん/生没年不詳)

見山崇喜(けんざん・すうき)の弟子。嘉暦(か)りやく(1326-29)のころ元(げん)(中国)にわたり、楚石梵琦(そせき・ぼんき)らに師事して首座(しゆそ)にのぼった。貞和(じょうわ)元(げん)興国6年(1345)ごろ客死。その水墨画は中国僧の作品として日本にもたらされた。作品に「布袋(ぼてい)図」(月江正印賛)、「四睡図」(祥符紹密賛)など。鎌倉-南北朝時代の画僧、水墨

木喰 (もくじき/1718～1810年)

山梨県生れ。1731年出奔(家出)。39年出家、木喰を名乗る。日本全国におびただしい数の遺品が残る、62年師の木食観海から木食戒(もくじきかい)を受けた「木喰仏」(もくじきぶつ)の作者。木喰五行上人、木喰明満上人などとも称する。特定の寺院や宗派に属さず、木喰は遊行僧の典型であり、日本全国を旅し、訪れた先に一木造の仏像を刻んで奉納した。1810年没、92歳。彫刻(木彫)

持田卓人 (もちた・たくじん/1906～1995年)

鳥取県生れ。1925年京都市立絵画専門学校卒、富田溪仙に師事。29年院展に入選。38年大阪朝日新聞社の従軍画家として北支戦線に派遣。38年関西院展派の中堅と「白御会」を結成。日本画教室を主宰。1995年没、89歳。日本画、美教

望月 桂・犀川凡太郎 (もちづき・かつら/1887～1975年)

長野県生れ。1910年東京美術学校西洋画科卒。17年民衆本位の民衆美術運動を唱し、平和美術研究会、ついで平民美術協会を主宰。19年黒耀会結成に参加し、大震災まで毎年展覧会を開いた。20年演説会で検束され、以後しばしば検束。同年日本社会主義同盟に参加。多くの機関紙誌に挿絵。26年「小作人」を編集・発行。28年から読売新聞に漫画家犀川凡太郎として主に漫画の世界で活躍。38年漫画雑誌「バクショー」編集人。戦後は東筑農民組合連合会の会長、かたわら社会活動、美術活動をした。1975年没、88歳。洋画、挿絵、漫画

望月玉泉 (もちづき・ぎよくせん/1834～1913年)

京都生れ。望月玉川の子。幸野樸嶺らと京都府画学校の創設を建議、1880年の開校で東宗(大和絵)担当の教員となる。内外の博覧会で受賞、37年帝室技芸員。1913年没、80歳。幕末-明治時代の絵師、美教

望月玉蟾 (もちづき・ぎよくせん/1673～1755年)

京都生れ。初め印籠蒔絵に従事、のち土佐光成、山口雪溪に絵を習い、また狩野元信に私淑して癖のある筆勢の強い水墨画や細密な着色山水画を描いた。若年の池大雅とともに漢画の再興を企てる。京都画壇における異色な存在で望月派の祖。京都で没、82歳。江戸中期の絵師、水墨

望月玉川 (もちづき・ぎよくせん/1794～1852年)

京都生れ。望月玉仙の子。京都の人。村上東洲、岸駒(か)んく)にまなぶ。のち四条派の松村月溪の画風をしたい、一家をなした。1852年没、59歳。江戸後期の絵師

望月玉仙 (もちづき・ぎよくせん/1744～1795年)

1744年生れ。望月玉蟾(ぎよくせん)の子。父の画法をつぐ。はじめ玉蟾、また誠齋と号し、父と区別して玉蟾誠齋とよばれた。1795年没、52歳。江戸中期の絵師

望月通陽 (もちづき・みちあき/1953年～)

静岡市出身。県立静岡工業高校工藝科卒。染色、陶芸、ガラス絵、紙版画、リトグラフ、木彫、ブロンズなど多様な手法を用いて独自の作品世界を築いている。「宮本輝全集(全14

巻)など装幀も多く手がけ、1995年講談社出版文化賞ブックデザイン賞。画文集「道に降りた散歩家」で2001年ポーロニャ国際児童図書賞次席。作品集に『円周の羊』などがある。**美術家、版画、染色、造形、装填、ブックデザイナー**

泉二勝磨 (もとじ・かつま/1905～1944年)

東京生れ。1929年東京美術学校卒。31～39年フランスに留学、フランス汽船「ホルマンデー」の装飾に師デュナン氏と共に従事し、ギリシャ、エトリュスク、仏中世の絵画彫刻を主に研究39年二科展に出品、40年二科展に出品、41年二科展に「東郷大将バルチック艦隊を睨む」を出品して注目され、41年二科会員。文展無鑑査。多摩帝国美術学校に彫刻図案を講た。1944年没、40歳。**彫刻**

本宮健史 (もとみや・たけし/1959年～)

東京生れ。1982年多摩美術大学絵画科卒、84年多摩美術大学大学院美術研究科修了、渡欧86年以降スペイン・バルセロナ在住。学際的な日本人アーティスト。彼のキャリアを通して、彼は絵画、彫刻、彫刻を含むさまざまな視覚芸術の分野で活動してきた。テクスチャーと自然な顔料の色の作品を特徴とする。**洋画、版画、彫刻**

本山二郎 (もとやま・じろう/1971年～)

奈良県生れ。1963年金沢美術工芸大学大学院(油絵)修了。2000年改組日展入選。08年光風会会員。09年現代美術展で美術文化大賞。13年改組日展で特選。16年光風会展損保ジャパン日本興亜美術財団賞。17年光風会展 T氏会員賞。改組新日展特選。光風会評議員、日展準会員。金城大学短期大学部美術学科准教授。**洋画、美教**

本山白雲 (もとやま・はくうん/1871～1952年)

高知県生れ。1888年上京し、高村光雲の門弟となり彫刻を学んだ。94年東京美術学校彫刻本科卒、同校の講師。95年岩村通俊より維新の志士たちの彫像製作をすすめられ、板垣退助や伊藤博文らの銅像を次々と製作して銅像製作の第一人者となった。1907年土陽美術会の結成に参加。28年高知県の桂浜に坂本龍馬像を製作。1952年没、80歳。**彫刻**

物部隆一 (ものべり・りゅういち/1935年～)

京都生れ。京都学芸大学在学中より日本画を制作。1958年朝日新人展(招待)に出品し、以後日本画から現代絵画へ転向した。59年新制作協会を退会し、前衛美術集団『ケラ美術協会』の結成に参加。主にラッカーやエナメル、水彩などを用いた抽象表現主義絵画を発表する。71年頃から転じてシルクスクリーンを用いた制作を開始。以後、クラコウ国際版画トリエンナーレ、大阪府現代版画コンクール、高知国際版画トリエンナーレなど内外の美術コンクールに出品入選、入賞。**現代絵画、洋画、版画、水彩**

桃田柳栄 (もまた・りゅうえい/1647～1698年)

大阪生れ。狩野(か)のう)探幽門下四天王のひとり。薩摩島津家の絵師。作品に「狩野探幽像」がある。江戸にすんで医術もよくした。1698年没、52歳。**江戸前期の絵師**

森 一鳳 (もり・いっぽう/1798～1871年)

1798年生れ。大坂で円山派の森徹山に学び、その養子となる。兄弟弟子に森寛斎がいる。肥後熊本藩に仕えた。写生画風の作品を描いて人気を博し、藻荇(もか)の舟の画題で知られ、「藻を茹る一鳳(もうかる一方)」として大坂の商家に喜ばれた。1871年没、73歳。**日本画**

森 鷗外 (もり・おうがい/1862～1922年)

石見国生れ。東京大学医学部卒業後、陸軍軍医となりドイツ留学。陸軍軍医総監、留学中、西欧文学の素養を深め、帰国後訳詩集「於母影」、評論雑誌「しがらみ草紙」を出す。西洋の芸術理論の日本への紹介、美術評論、東京美術学校で教え、文展尾審査主任。帝室博物館総長、帝国美術院長など歴任。「舞姫」等の小説を発表。以後、翻訳、評論、創作に旺盛な活動を示し、浪漫主義的立場に立ち日本近代文学の形成に大きく関与した。明治四〇年代には「スバル」に拠り反自然主義の雄として活躍、晩年は歴史小説、史伝に健筆をふるった。小説「舞姫」「青年」「雁」「阿部一族」「高瀬舟」、史伝「渋江抽斎」「伊沢蘭軒」、翻訳「即興詩人」「ファウスト」など。1922年没、60歳。**美評、美教、小説家、翻訳家、軍医、帝室博物館総長、帝国美術院長**

森岡完介 (もりおか・かんすけ/1941年～)

名古屋生れ。愛知学芸大学美術科卒。名古屋在住の版画家、森岡完介版画展が、2021年東京・シロタ画廊、名古屋画廊で開催。**版画**

森 霞巖 (もり・かげん/1842～1908年)

前橋市生れ。森東溪の長男。紺屋町(現在の前橋市千代田町)に寺子屋を開いた。桃井小が創設されると、稲毛六郎以下5人の教員のうちのひとり選ばれた。しばしば東京に出て、川端玉章、橋本雅邦と交友した。長子の広陵が同じく画家になって東京で寺崎広業の門下となってからは、前橋の玉泉寺で絵筆をとった。晩年中風を病み、1908年没、66歳。日本画

森川翠水 (もりかわ・すいすい/1945年～)

1945年生。内山雨海に師事。墨の芸術展雨海賞4回。現代水墨画協会理事・NHK水墨画教室講師を経て現水展文部大臣賞。モナコ・ジャポン芸術祭にて「つり革に眠る青春」カムユーク賞。パリのベルシー博物館、タイルアート「セニョン」永久保存。OASIS2012大阪&ローマ展「雪国の温泉宿」大阪市長賞。水墨・翠水舎主宰

森川曾文 (もりかわ・そぶん/1847～1902年)

京都生れ。初め前川五嶺の門に学び、のち長谷川玉峰に師事する。京都府画学校教諭を務め、内国勸業博覧会・絵画共進会や海外の博覧会で受賞する。四条派の正統を継ぎ、山水花鳥を得意とした。門人に三宅呉暁・深田直城らの俊才がいる。1902年没、56歳。日本画

森川杜園 (もりかわ・とえん/1820～1894年)

奈良県生れ。奈良一刀彫を独習、春日有職(かすがいゆうそく)奈良人形師となる。鹿や能・狂言に取材した木彫作品にすぐれ、内国勸業博、カゴ万博などで受賞。1881年内国勸業博で妙技一等賞。正倉院宝物や古彫刻の模作にも従事した。1894年没、75歳。木彫、人形

森 寛齋 (もり・かんさい/1814～1894年)

山口県生れ。長州藩士石田道政の第三子として萩に生まれた。名大阪に出て森徹山に師事し、のちにその養子となって寛齋と号した。幕末には尊王派として国事に奔走。維新後は京都で如雲社に参加し、塩川文麟没後、その中心的存在となった。また京都府画学校の教授を務め、京都画壇の重鎮として、野村文挙・山元春挙らの門人を育成した。1894年没、

80歳。江戸後期～明治期の絵師

森 琴石 (もり・きんせき/1843～1921年)

兵庫県生れ。3歳で大阪の森家の養子となる。鼎金城と忍頂寺静村に南画(文人画)を学び、明治初期、東京で高橋由一に洋画の教えを受けた。大阪に戻り、明治・大正の大阪画壇の指導者として、また銅版画家としても活躍した。「九十七時二十分間月世界旅行」(ジュール・ベルヌ著)の挿絵も描いた。1921年没、78歳。日本画、銅版画、挿絵

森口邦彦 (もりぐち・くにひこ/1941年～)

京都生れ。1963年京都市立美術大学日本画科卒、フランス政府給費留学生として渡仏。66年パリ国立高等装飾美術学校卒。95年:京都府指定無形文化財保持者認定。2007年重要無形文化財「友禅」保持者。14年三越百貨店の新しいショッピングバッグ(三越「実り」紙手提袋)をデザイン(同作はグッドデザイン賞。20年京都国立近代美術館にて展覧会「人間国宝 森口邦彦 友禅/デザイナー—交差する自由へのまなざし」開催。92年芸術選奨文部大臣賞。20年文化功労者。21年フランスレジオンドヌール勲章コマンドゥール。染色、デザイン

森口宏一 (もりぐち・ひろかず/1930～2011年)

大阪生れ。関西大学経済学部卒。1954年より行動美術展に出品。作品は絵画からレリーフ的な作品に移行し、66年から立体作品へと展開。68年「現代日本美術展」で優秀賞。アルミニウムやステンレスといった近代的な工業用素材を用いて、幾何学的構造による一連の作品を発表。関西の抽象彫刻を牽引。80年津高和一が組織した「架空通信テント美術館展」(夙川公園)でも中心的な役割をつとめた。95年国立国際美術館(大阪)で「森口宏一展 理知的造形 40年の軌跡」を開催。2011年没、81歳。洋画、立体、彫刻

森 高雅 (もり・こうが/1791～1864年)

名古屋市生れ。吉川一溪、中林竹洞、牧墨僊にまなぶ。浮世絵風の風俗画を得意とし、門人がおおかった。のち土佐派もまなぶ。1864年没、74歳。江戸後期の絵師

森 広陵 (もり・こうりょう/1874～没年不詳)

前橋市に生まれた。はじめ父・森霞巖に学び、後に寺崎広業に師事し、狩野派の画風を研究し、諸所の展覧会で十数回の受賞を重ねた。美術研精会会員、独立絵画会会員、大東絵画協会幹事。文展に「逍遙」を出品。日本画

森下慶三 (もりした・けいぞう/1944~2003年)

福岡県生れ、19歳でイタリアに渡り、ミラノの国立ブレラ美術専門学校彫刻科でマリノ・マリニに学んだ。在学中にサン・フェレーデ賞展に招かれ受賞、スタジオ・マルコーニで個展開催。イタリア美術界に認められた。以来、ミラノに三十年余暮らす。日本では1979年に初めて個展を開いた。2003年ミラノで没、59歳。洋画、水彩、版画

森 周峰 (もり・しゅうほう/1738~1823年)

長崎又兵庫県生れ。森狙仙の兄。父(森如閑齋)に、のち狩野派の吉村周山、月岡雪鼎に師事。1776年前後には法橋に叙せられ、1802年までには法眼位を得て、森派の中心的存在として活躍。弟狙仙とは一線を画し、狩野派の伝統的画法を駆使しつつも、山水画などでは没骨法を用いて新しい局面を拓いた。1823年没、86歳。江戸中期-後期の絵師

森 守明 (もり・しゅめい/1892~1951年)

京都生れ。西山翠嶂の門下。京都市立絵画専門学校卒。1927年、30年帝展で特選。師の画塾青甲社の中心作家として活躍。京都市立美術工芸学校、京都市立絵画専門学校(現京都市立芸大)でおしえる。1951年没、59歳。日本画、美教

森省一郎 (もり・しょういちろう/1936年~)

鹿児島県生れ。1956年独立美術協会展に入選。61年独立美術協会展で独立賞。サンパウロ国際ビエンナーレ出品(サンパウロ近代美術館)。米、墨、伯を経て仏遊学、69年までパリで創作活動。66年現代日本美術展出品(東京都美術館)文化庁買い上げ。66年個展(日本橋・白木屋百貨店)。65年パリ青年ビエンナーレ 外国人作家最優秀賞(フランス政府主催)。66年現代日本美術展優秀賞。洋画

森 眞吾 (もり・しんご/1937~2023年)

愛知県生れ。1958年愛知学芸大学在学中、行動展に入選。64年現代日本美術展でシ

ェル美術賞展・佳作賞。65~69年行動美術賞、同会会員。70年以降ギャラリー上田(東京)、名古屋画廊(名古屋)、ギャラリーユマニテ(名古屋)で発表。2014年碧南市藤井達吉現代美術館にて「森眞吾展-汽水域に生きる-」が開催。2023年没、86歳。洋画

守末利宏 (もりすえ・としひろ/1937~2022年)

大分県生れ。1960年大分大学学芸学部卒。56年大分県美術展に入選。76年行動美術協会展に入選。同展を主舞台に活躍。97年行動美術協会展で会友賞、同会会員。大分で潮流の会、新潮流展、現代美術の潮流展等にも積極的に参加し話題作を発表。郷里を思う抒情性豊かな作品は、高い評価。2022年没、85歳。洋画

守住周魚 (もりずみ・ちかぢま/1859~1925年)

徳島県生れ。徳島藩御用絵師守住貫魚(つらな)の娘。父に住吉派の画をまなぶ。1879年岩野新平と結婚するが、80年離婚。のち両親と大阪こうつる。男性的な作風の武者絵や、趣味であつめた郷土玩具をえがいた作品などがある。1925年没、67歳。日本画

守住貫魚 (もりずみ・つらな/1809~1892年)

徳島市生れ。1824年上京、渡辺広輝に入門。34年住吉広定・弘貫の門に入る。35年一橋公の命を受けてその寝殿の障壁画を描いた。子に守住勇魚、守住周魚がいる。44年阿波藩の御用絵師、藩命による「全国名勝絵巻」10巻(徳島県指定文化財)や、アメリカから帰ってきた漂流者初太郎の記録「亜墨漂流新話」の挿絵を描いた。82年内国絵画共進会に銅印、84年同展で金賞。90年日本美術協会展覧会で金牌。90年橋本雅邦、高村光雲らとともに帝室技芸員。大阪で没、84歳。江戸後期-明治期の絵師

貫魚自身が書き残した「門弟名面」という記録によれば総勢70数名と非常に多く、小沢輝興、林半窓、村瀬魚親、岸魚躍、森魚淵、原鵬雲、小沢魚興、三好賢古、上田魚行、森崎桃春、森崎春潮などが知られている。日本画

森 狙仙 (もり・そせん/1747~1821年)

大坂生れ?大坂に住んだことは確かで、同地で兄の陽信、周峰とともに狩野派画風を学ぶ。のち円山派を加味した写生的様式に移り、動物画、さるのさまざまな姿態を得意、60

歳頃から祖仙改め狙仙の号を用いた。主要作品『風雨桜花五猿画』『月夜山谿猿猴図』『秋山遊猿鹿図』(東京国立博物館),『白猿図』、『猿図絵馬』(天王寺庚申堂)。1821年没、74歳。江戸中・後期の絵師

森田りえ子 (もりた・えりこ/1955年～)

神戸市生れ。1980年京都市立芸術大学日本画専攻科修了。86年川端龍子大賞展大賞。90年菅橋彦大賞展で準大賞・市民賞。97年タカシマヤ美術賞。2000年京都市芸術新人賞。11年京都府文化功労賞。13年京都市立芸術大学客員教授。日本画

森 堯茂 (もり・たかしげ/1922～2017年)

愛媛県生れ。1944年東京美術学校彫刻科、学徒出陣。52～60年自由美術協会会員。55年アートクラブ会員。56年前衛美術の15人展(東京国立近代美術館)。57年野外創作彫刻展(日比谷公園)。58年野外彫刻展(鎌倉近代美術館)。61年日本国際美術展に7回、8回展、宇部市野外彫刻展。89年洲之内徹コレクション展(宮城県美術館他)。91年松山三越で個展。2017年没、95歳。彫刻

森田訓司 (もりた・くんじ/1939～1987年)

広島県生れ。グラン・ショミエールに学ぶ。太平洋美術展太平洋賞。国画展、独立美術展。無所属で個展中心に発表。スペインを愛した画家。スペインで没、48歳。洋画

森田慶一 (もりた・けいいち/1937年～)

福島県生れ。1986年水彩連盟展初入選。95年県総合美術展初入選。99年県総合美術展奨励賞。2003年会津美術展初受賞。07年水彩連盟会津支部長。08年水彩連盟会員。14年県総合美術展奨励賞。水彩

森田 茂 (もりた・しげる/1907～2009年)

茨城県生れ。1925年茨城県師範学校本科第二部卒。31年熊岡洋画研究所に入所。35年東会絵画展に入選。36年文展に入選。38年東光会会員。38年新文展で特選。56年日展審査員、東光会委員。70年改組日展出品作品で日本芸術院賞。71年日展理事。76年日本芸術院会員。80年東光会初代理事長。93年文化勲章受章、茨城県名誉県民。黒川能

を描いた、2009年没、101歳。洋画

森田樵眠 (もりた・しょうみん/1795～1872年)

松山市生れ。京都に出て岡本豊彦に師事し四条派の画法を修め、故郷に戻り三津に絵屋を開いた。中予地方一帯の寺社には豪商や町人たちの求めに応じて、樵眠が描いた絵馬が多く奉納。1873年没、78歳。江戸後期の絵師

森田子龍 (もりた・しりゅう/1912～1998年)

兵庫県生れ。1947年上田桑鳩らと書道芸術院を創設。48年『書之美』を発刊。抽象画家長谷川三郎と交友を深め、50年『書之美』に絵画を含めた実験作品を公募α部を設けて、長谷川にその選評をゆだねた。51年書芸術総合誌『墨美』を創刊、同誌は海外の前衛美術を積極的に紹介し、津高和一や吉原治良ら関西の抽象画家達に大きな影響を与えた。52年井上有一らと墨人会を結成。現代美術懇談会(ゲンピ)が52年発足、参加。NY近代美術館の「日本の建築と書」展(53年)、カーネギー国際美術展(58年)、フライブルグ書展(同60年)、モントリオール万国博美術展(同67年)等に出品し、書と西洋美術の交流に貢献した。80年京都市文化功労者として表彰、85年京都新聞文化章、86年京都市美術館で「今日の作家森田子龍」展が、また92年に兵庫県立近代美術館で「森田子龍と『墨美』」展が開催。大津で没、86歳。書

森田緑雲 (もりた・りよくうん/1853～1913年)

愛知県生れ。父光尋について神職となった。1876年から小華に学び、華椿系南画を受け継ぎ、小華なきあとには、晩翠、衣洲らとともに三河における小華門を盛り上げた。多くの展覧会に出品しており、1884年の第2回内国絵画共進会には、原田圭岳、長尾華陽、深井清華、稲田耕山、鈴木拳山らとともに出品。84年三ツ相栄昌寺観音堂天井画作成に大河戸晩翠、植田衣洲らと小華一門として参加。90年には内国勸業博覧会で褒状、91年日本青年絵画共進会で一等。1913年没、61歳。日本画、南画

森 徹山 (もり・てつざん/1775～1841年)

大坂生れ。森狙仙の次兄で狩野派の絵師である森周峰の子。狙仙の養子となって絵を学んだのち、京都にでて応挙に入門した。応挙一門で最も若い二十歳代で大乘寺障壁画制

作に加わり応門十哲の一人に数えられる。禁裏や肥後細川公などの御用を勤め上げ、晩年は養父狙仙とともに大坂に住み、大坂に写生主義を広めた功績がある。1841年没、67歳。

江戸後期の絵師

森戸果香 (もりと・かこう/1898～1992年)

広島県生れ。1918年上京、小堀鞆音に師事。24年広島県内で写真館開業。29年写真館を廃業し、再上京、画業に専念。29年回帝展に入選(以後52年第8回日展まで12回出品)。38年新文展で特選。歴史人物画を得意とした。1993年没、94歳。日本画

森戸國次 (もりと・くにじ/1907年～没年不詳)

東京生れ。京都絵画専門学校に入学、同研究科卒業。西村五雲のち安田鞆彦に師事。日展特選、依属、日月社委員。動物が得意。日本画

森 豊一 (もりとよいち/1965～1988年)

金沢市生れ。1925年県立工業学校窯業科卒。29年院展初入選、以後毎回出品。33年より母校の窯業科で教鞭をとり、40年退職して上京し、作家生活に入る。新文展にも出品したのち院展彫刻部解散後は一時期、日展に出品。65年元院展の有志とともに日府展を創設し、副理事長、72年退会。日本陶彫会副会長。彫塑、美教

守長雄喜 (もりなが・ゆうき/1934年～)

広島県生れ。1954年広島県立工業高校卒。69年広島県美術展文部大臣賞。93年光風会展つばき賞。2001、03年改組日展特選。日展会員、光風会会員。洋画

森 魚淵 (もりなぶち/1830～1909年)

徳島市生れ。守住貫魚の指導をうけ、貫魚から魚淵の雅号を与えられた。1882年内国絵画共進会、84年内国絵画共進会で褒状、内国勸業博覧会で1890年褒状(妙技賞)を、95年で褒状。85私立絵画共進会では1等賞。84年大坂私立品評会で褒状と3等賞。龍池会の求めに応じて「佛國へ出品」。また宮内庁の御用を命じられ。93年「京都中学校毛筆教科書」の版下を描く。1909年没、79歳。日本画

森野泰明 (もりの・たいめい/1934年～)

京都生れ。京焼きの陶芸家森野嘉光の子。京都市立美術大学陶磁器科、同大学専攻科卒。1960年日展特選・北斗賞。62年よりシカゴ大学で陶芸を講じる。68年日本現代工芸美術展会員賞外務大臣賞。69年日展会員。83年日本新工芸展で文部大臣賞。96年京都府文化賞功労賞。2007年日本芸術院賞。10年日本芸術院会員、日本陶磁協会賞金賞。19年旭日中綬章受章。21年文化功労者。陶芸、美教

森 鳳声 (もり・ほうせい/1867～没年不詳)

京都生れ。彫刻を独修して京都美術学校の教師となる。内国勸業博覧会、仏国巴里万国大博覧会、米国市俄古世界博覧会、同聖路易万国博覧会に出品して受賞。第1回文展「聖章」、第3回文展「信玄謙信」、第11回文展「百川卿」を出品。彫刻、美教

森 正洋 (もり・まさひろ/1927～2005年)

佐賀県生れ。多摩造形芸術専門学校(現・多摩美術大学)で学んだ後、長崎県の白山陶器に入社。プロダクト・デザイナーとして、シンプルで洗練されたデザインと優れた機能性を組み合わせた現代的感性の息づく陶磁器作品を生み出し続けた。デザイン性に優れながらも、大量生産を利用し日常に密着した「生活の道具」としての森作品は高く評価、1960年《G型しょうゆさし》に代表される食器群でグッドデザイン賞。晩年は株式会社無印良品から、使いやすく姿も美しく、しかも安価な食器類を次々と発表した。2005年没、78歳。陶磁、デザイナー

森村宜稲 (もりむら・ぎとう/1871～1938年)

名古屋市長生れ。幼くして木村雲溪の門に入り、後また日比野白圭に就て大和絵を学んだ。古くより日本美術協会に出品し、後同会の審査員となり、又文展に出品して、1931年帝展推薦。主として大和絵の手法を継承し、又雪舟、探幽に私淑し、殊に晩年は田中納言、浮田一蕙の研究に従ひ、自らは多く省筆の作に特色を発揮し小品を得意とした。代表作には展覧会出品画の外に聖徳記念絵画館の壁画がある。尚稲香画塾を開いて門下の養成に当つて居た。名古屋で没、68歳。日本画、壁画、画塾

森村宜永 (もりむら・よしなが/1906～1988年)

50

名古屋生れ。東美校日本画科卒。日本画家森村宜稲の子。名は行雄、初めは稲門とも号す。松岡映丘に師事し、大和絵の第一人者となる。帝展・新文展・日展で入選を重ねた。日本画院顧問。1988年没、81歳。 **日本画**

森本完介 (もりもと・かんすけ/1941年～)

愛知県生れ。1964年愛知教育大学美術科卒。70年銀座・シロタ画廊で個展。79年クリエブランド美術館の「現代日本版画展」に出品。80年西ドイツの第6回フレヘン国際版画トリエンナーレに出品、以後国内外の版画展に出品。2007年瀬戸市美術館で個展開催。 **版画**

森本紀久子 (もりもと・きくこ/1940年～)

大阪生れ。金沢美術工芸大学彫刻科卒業。60年代より動物や植物を彷彿とさせる模様を極彩色で描いている。絵画作品に加え、自然光やブラックライトを取り入れた立体作品も多数手がける。全国の美術館やギャラリーでの個展、グループ展、多数。 **洋画**

森本香谷 (もりもと・こうこく/1867～1937年)

松江市生れ。1882年頃、小豆澤碧湖に洋画の技法を学ぶ。松江師範学校を卒業後、県内小中学校の教員。長野に赴任し中学の生徒と共に水彩画研究グループを結成。長野において丸山晚霞が講師をつとめた水彩画講習会に参加。1912年松江に帰郷し、松江高等女学校に勤務。16年日本水彩画会員。13年松江において絵画研究グループワカバ会を結成し、第1回夏期講習会には石井柏亭、第2回には丸山晚霞を迎えて水彩画の講習を行う。21年頃より松江洋画研究所の開設に奔走する。1937年没、70歳。 **水彩、洋画、美教**

森本千絵 (もりもと・ちえ/1976年～)

青森県生れ。武蔵野美術大学視覚伝達デザイン学科を経て博報堂入社。2007年株式会社 goen^o を設立。現在、広告の企画、演出、商品開発、ミュージシャンのアートワーク、本の装丁、映画・舞台の美術や、動物園や保育園の空間ディレクションを手がけるなど活動は多岐にわたる。ニューヨーク ADC 賞、東京 ADC 賞グランプリ、伊丹十三賞、日本建築学会賞。武蔵野美術大学視覚伝達デザイン学科客員教授。 **アートディレクター・コミュニケーションディレクター、装丁、美舞、美教**

森本東閣 (もりもと・とうかく/1977～1947年)

京都生れ。幸野樞嶺の長男。幸野西湖は弟。父樞嶺の門人菊池芳文に師事し、また菊池契月の画塾にも参加する。東閣画塾をひらき、入江波光など多くの子弟を育てた。のち森本後凋の養子となり家を継いだ。1947年没、70歳。 **日本画**

森本仁平 (もりもと・にへい/1911～2004年)

石川県生れ。1932年東京美術学校師範科卒。美術教師を勤めるかたわら、日本アンデパンダン展、自由展などに出品。自由美術協会会員となるも、75年退会。73年新鋭選抜展、77年日本画壇の全貌展出品。個展を中心に活躍した。2004年没、93歳。 **洋画、美教**

森本有泉 (もりもと・ゆうせん/1917～1988年)

兵庫県生れ。中村貞以に師事、再興院展に入選、日本美術院院友となり、以後院展で入選を重ねる。1988年没、71歳。 **日本画**

森谷譲太郎 (もりや・じょうたろう/1907～1972年)

水戸市生れ。本郷洋画研究所に学ぶ。1937年二科展で初入選(以後40年を除き、43年第30回二科展まで出品)。47年栗原信に誘われて、二紀会の結成から出品、のち同人。48年茨城県美術展(第2部洋画)に出品(499は招待出品、57年審査員として出品、以後71年までほぼ毎年招待、もしくは委嘱出品)。茨城県で没、65歳。 **洋画**

守屋松亭 (もりや・しょうてい/1890～1972年)

京都生れ。東京に出て白山松哉に師事。品格ある蒔絵と研出蒔絵に優れ、繊細で美しい独自の世界感で表現している。1972年没、82歳。 **工芸(漆芸)**

森山一信 (もりやま・いっしん/1929～2008年)

長崎県生れ。1950年佐世保美術研究所にて市山時一郎に師事。55年阿佐ヶ谷総合美術研究所にて北川正に師事。58年帰郷、絵画研究所を開く。75年創元美術回展会員。78年西日本美術展受賞(2点)。79年安井賞展入賞(賞候補)。82年創造美術会展会員賞。91年創造美術会展文部大臣奨励賞。2008年没、79歳。 **洋画**

守山泮帆 (もりやま・しょうはん/1818～1901年)

長崎市生れ。鉄翁(1791～1871)について画を学び、その、妙技を鉄翁から深く愛されて南画の真髄を教授され、守山家の養子となった。花鳥、人物、山水、いずれも巧みであったが、特に山水に長じていた。幕末越後に3年滞在し、その画名は広まったという。文人墨客の交友も多かった。文久年間に徐雨亭が来舶すると、画法、書法を学んだ。1901年没、83歳。幕末、明治の絵師。

森山大道 (もりやま・だいどう/1938年～)

大阪生れ。写真家・岩宮武二と細江英公に師事。1964年に独立し、「カメラ毎日」に発表した「につぼん劇場」シリーズが評価、67年日本写真批評家協会新人賞。68年同シリーズを収録した写真集『につぼん劇場写真帖』を発表。フィルムの粒子が際立つことによる画面の荒れや、手ぶれ。ピントのボケなどを特徴とする「アレ・ブレ・ボケ」と呼ばれる作風。2012～13 William Klein + Daido Moriyama (テート・モダン、ロンドン)、11年「オン・ザ・ロード 森山大道写真展」(国立国際美術館、大阪)、08年「森山大道展 I.レトロスペクティヴ 1965-2005 / II.ハワイ」(東京都写真美術館)。カルティエ現代美術財団(パリ)、サンフランシスコ近代美術館などで個展を開催。03年毎日芸術賞、04年ドイツ写真家協会賞。グラフィックデザイナー、写真

森山朝光 (もりやま・ちようこう/1897～1962年)

水戸市生れ。1912年立志上京し山崎朝雲に師事した。24年日本美術協会展で銅賞首席。27年帝展入選以来毎年入選。帝展から文展へ、戦後の日展へと終始師朝雲から修得した日本伝統木彫の刀技を生かした穏健な木彫作品を出品。57年日展会員、木彫界の中堅作家。水戸市で没、65歳。彫刻

森山秀子 (もりやま・ひでこ/1957年～)

長崎県生れ。1982九州大学文学研究科修士課程修了(日本近代美術専攻)。82年石橋美術館に勤務。現在、石橋美術館学芸課長。青木繁、坂本繁二郎、古賀春江、高島野十郎など、筑後出身の洋画家を主な研究対象としており、特に古賀の研究にかけては第一人者と目されている。手掛けた展覧会図録は『古賀春江—前衛画家の歩み』(石橋美術館・ブリヂストン美術館、1986年)、『麗しき前衛の時代—古賀春江と三岸好太郎』(石橋美術館・茨城県近代美術館、1996年)、『古賀春江 創作の原点 作品と資料でさぐる』(ブリヂストン美術館・石

橋美術館、2001年)、『坂本繁二郎展 石橋美術館開館50周年記念』(石橋美術館・ブリヂストン美術館、2006年)、『新しい神話がよばれる。古賀春江の全貌』(東京新聞、2010年)、『青木繁展 没後100年よみがえる神話と芸術』(毎日新聞社、2011年)、『高島野十郎 里帰り展』(石橋美術館、2011年)など。学芸員

森 陽信・永春斎 (もり・ようしん/1736～1808年)

大坂の人。森周峰、森狙仙の兄。榎橋(くしはし)栄春斎に狩野派の画をまなんだ。1808年没、73歳。江戸中期の絵師

森 蘭斎 (もり・らんさい/1731～1801年)

新潟県生れ。長崎で医学をまなぶかたわら熊代熊斐(くましろうゆうひ)に師事し、南蘋(なんぴん)流の花鳥画をよくした。大坂で医を業とし、のち江戸にうつる。1801年没、71歳。著作に「蘭斎画譜」。江戸中期-後期の絵師

森 洋一 (もり・りょういち/1950年～)

大分県生れ。高校時代は熊井淳に、多摩美術大学時代には仲本達弥に師事する。大分県美術展のほか、日展、光風会展、水彩連盟展を中心に作品を発表し、1981年光風会奨励賞、2005年水彩連盟展で文部科学大臣賞。長く漁港の情景を題材。光風会会員、水彩連盟会員。水彩

毛呂桑陰 (もろ・そういん/1854～1930年)

1854年生れ。武蔵川越範士・樋口茂登次の二男。12歳の時に藩主の転封に従って父とともに前橋に移り住んだ。藩校博諭堂に入り、遠藤快象、中西弘造らに経史を、画を皆川柳涯、河野東寧に、書法を戸井田研斎に学んだ。18歳の時に小学校教員、栃木県師範学校に入り、卒業して栃木県小学校教師。田崎草雲に師事。21歳の時に毛呂家に入婿。4年後上京し、安田老山、滝和亭に学び、成瀬大域にも師事。1930年没、76歳。美教、日本画

諸橋政範 (もろはし・まさのり/1891～1979年)

新潟県生れ。1917年東京美術学校国画師範科卒。新潟師範学校の美術教師になり、指導にあたるかたわら制作し、37年文展に入選した。戦後も同校の後身である新潟大学教育

学部籍をおいたが、のちに新潟青陵女子短期大学に勤務した。1979年没、88歳。美教、洋画

文寿礼三 (もんじゅ・れい・ぞう/1915～没年不詳)

京都生れ。15歳彫刻の道に入る。1979年京都府伝統産業優秀技術者として知事表彰。
彫し

門田篁玉 (もんでん・こぎよく/1916～2021年)

広島県生れ。1933年別府市の門田二篁に師事。35年から大分県美展で知事賞を3回連続受賞。39年商工省工芸展覧会に出品。45年福山に帰郷。73年から日展、75年から日本現代工芸展に出品。79年第1回日本新工芸展で日本新工芸賞。87年から日本伝統工芸展に出品。99年広島文化賞受賞。2004年「百寿記念 門田篁玉 竹芸展」を開催。高度な技術で、伝統的な千鳥編を用いた緻密な編組の作品、多数の細長いひごを束ねた独自の造形的な作品など多彩な作品を制作。2021年没、105歳。工芸(竹細工)

79



八重樫豊澤 (やえがし・ほうたく/1763～1842年)

岩手県生れ。寺子屋八重樫塾の家に生まれる。花巻の画壇小野寺周徳の元で絵を学び、江戸に上り周徳の師である谷文晁に絵を学んだ。三国志の名軍師を書いた「諸葛孔明図」、花巻三画人の一人。伊藤鶏路を描いた「鶏路図」は花巻市指定文化財として指定。1842年没、79歳。江戸後期の絵師

矢岡 勲 (やおか・いさお/1928年～)

別府市生れ。1948年大分県師範学校本科卒。50年岩尾秀樹らとグループ「ネギ」の結

成に参加。上京し、現展や独立美術協会展に出品。52年国画会展に入選。58年国画賞。59年友友優作賞。63年国画会会員。大田区美術協会理事。洋画

八百谷冷泉 (やおたに・れい・せん/1887～1959年)

鳥取市生れ。地元の中住道雲に師事、京都に出て山元春挙に入門した。大阪美術学校で後進の指導にあたりとともに、矢野橋村、小杉放庵、福田平八郎、菅楯彦らと「墨人会」を結成して技術向上につとめた。1959年没、72歳。日本画、美教

八神和敏 (やがみ・かずとし/1942年～)

名古屋生れ。愛知県立愛知工業高等学校図案科卒。株式会社ヤガミパブリシティ主宰。ポスター・パンフレット・壁画、デザインを手掛ける。ライフワークとして版画・写真・日用食器の絵付け。主な受賞歴:第八回ジャパンエンバ美術コンクール・国立国際美術館賞、第十一回クラコウ国際版画ビエンナーレ(ポーランド)・審査員特別賞、第五回北九州絵画ビエンナーレ・優秀賞、第八回オーバーン紙の美術展(アメリカ)・買上賞、第十一回中日展・大賞、八十九ヴェルナ国際版画ビエンナーレ(ブルガリア)・買上賞、第十三回ジャパンエンバ美術コンクール・京都国立近代美術館買上賞、第一回エジプト国際版画トリエンナーレ展・銀賞、第十三回現代版画コンクール・優秀賞、第九回あかり百人百灯展・優秀賞。ポスター、壁画、デザイン、版画、写真

八木 明 (やぎ・あきら/1955年～)

京都生れ。陶芸家の祖父八木一艸、父八木一夫の長男として生まれる。1977年より父一夫のもとで陶芸を学ぶ。清新な青白磁は国内外で高く評価されている。京都造形芸術大学教授。陶芸、美教

八木岡春山 (やぎおか・しゅんざん/1879～1941年)

東京生れ。下條桂谷に師事。日本美術協会理事・審査員。東京で没、61歳。日本画

八木一艸 (やぎ・いっそう/1894～1973年)

大阪生れ。八木一夫の父。大正8年楠部弥次、河村熹太郎(きたろう)らと赤土社を創立新陶芸運動を展開。戦前は帝展などで活躍、戦後は無所属、中国宋代の陶磁器を研究。青磁にすぐれた。1973年没79歳。陶芸

八木彩霞 (やぎ・さいか/1886～1969年)

松山市生れ。愛媛県師範学校卒業、県内で教壇に立ち、1917年横浜に転出。ドイツ人画家リデルスタインに師事。25年フランスに留学、ソルボンヌ大学、グランシヨミール美術院に学び、サロン入選三回。帰国後は無所属作家として活躍、宮中の御用命も数度に及び、旧久松邸(現、愛媛県立美術館分館)の壁画も彼の作。1969年没、84歳。洋画

八木なぎさ (やぎ・なぎさ/1961年～)

神奈川県生れ。1985年女子美術大学芸術学部洋画専攻 卒。87年多摩美術大学美術研究科(版画) 修了。87年版画展(日本版画協会賞)。91年具象版画展(グランプリ受賞)。女子美術大学短期大学部准教授、日本版画協会会員、版画学会会員。版画、美教

柳生周三郎 (やぎゅう・しゅうざぶろう/生没年不詳)

1922年日本創作版画協会展に木版画が入選。出品時は東京に住む。『版画』第1巻第3号(版画社 1922.4)に収録。版画社の研究部会員。23年の『詩と版画』第2輯(1923.4)に木版画《風景》の図版が掲載。版画

薬師寺章雄 (やくしじ・あきお/1956年～)

岡山県生れ。1981年多摩美術大学美術学部絵画科卒、83年多摩美術大学大学院美術研究科絵画修了。2012年阿波紙と版画表現展(文房堂ギャラリー)。14年 Beautiful Days-(版画からの眺め)。薬師寺章雄展(晩翠画廊)。16年文化庁海外研修制度ミラノ滞在。版画協会会員、共立女子大学非常勤講師。版画

屋慶名政賀 (やけな・せいが/1737～1800年)

首里生れ。座間味庸昌について絵を学び、22歳の時に絵師として登用され、貝摺奉行者に勤務。1767年画技を磨くために中国に留学することを計画、2年後に王府に願い出て許され渡唐、北京で学んだ。帰国後の1773年、王世子・尚哲の従者として薩摩に赴き、黄冠に叙せられた。その後は仕上座大屋子、給地御蔵大屋子などをつとめた。現存作品に「山水図」「雪景山水図」「関帝王」などがある。1800年没、63歳。江戸後期の沖縄の絵師

矢沢弦月 (やざわ・げんげつ/1886～1952年)

長野県生れ。1911年東京美術学校卒。久保田米僊、寺崎広業に師事。松屋百貨店意匠部に務めながら作画、13年文展褒章。19年帝展特選。以来官展系作家として帝展、日展審査員4回、50年日展参事となり、川崎小虎、蔦谷竜岬らと「霜天会」を創立。29年には文部省在外研究調査員として欧州留学、また美校、東京女子高師各講師、日本美術学校教授。「山湯初夏」「糸雨」「水園戯」がある。1952年没、66歳。日本画、美教

矢島群芳 (やじま・ぐんぼう/1798～1869年)

1798年生れ。上野高崎藩士。大西圭斎、椿椿山にまなび、花鳥画を得意とした。のち藩をいはなれ諸国を遊歴、名声をおしまれて召還された。1869年没、72歳。江戸後期の絵師

八島久恵 (やしま・ひさえ/1941年～)

多摩美術大学絵画科卒。1976年「第19回新象展」(東京都美術館、名古屋、京都、大阪)で奨励賞。78年神奈川県立近代美術館賞受賞(収蔵)、神奈川県流美美術家協会会員。(社)日本建築美術工芸協会会員。日本コミュニウム研究会会員 HeART プロジェクト「森のゆうびん局」主宰。洋画、モニュメント

矢代幸雄 (やしろ・ゆきお/1890～1975年)

横浜生れ。東京帝国大学英文科卒。東京美術学校教授として西洋美術史を担当、1921～25年欧米に留学。ハーバード大学講師、イギリス諸大学派遣教授、帝国美術院幹事、付属美術研究所所長。文化財保護委員、大和文華館館長。62年日本芸術院会員。70年文化功労者。主著は、ロンドンで出版された『サンドロ・ボティチェリ』Sandro Botticelli (1925), 『日本美術の特質』(43), 『東洋美術論考』。平塚で没、84歳。美史、美評、水彩、美術館長

安井仲治 (やすい・なかぢ/1903～1942年)

大阪生れ。明星商業卒。1922年大阪の浪華(なごわ)写真倶楽部(クラブ)に入会。おおくの写真展に入賞する。30年上田備山らと丹平(たんぺい)写真倶楽部を創立。関西写真界で若手をそだてた。安井の作品は、多彩を極め、初期のピクトリアリズムから、ストレートフォトグラフィ、フォトモンタージュ、街角のスナップにまで及ぶ。1942年没、38歳。作品に「水」「犬」「流氓(りゅうぼう)ユダヤ」など。写真

安嶋雨晶 (やすじま・うしゅう/1907～1973年)

石川県生れ。西山翠嶺に師事。1930年青甲社へ入門。31年金城画壇出品、画壇賞受賞。以後京都市展、自由画壇展に入選・受賞。36年文展入選、37年京都市立絵画専門学校専科卒。46年日展入選、以後18回出品。67年金沢で個展。1973年没、66歳。73年金沢市観光会館で遺作展。日本画

安田育代 (やすだ・いくよ/1949年～)

大阪生れ。1973年京都市立芸術大学美術学部日本画科卒、75年京都市立芸術大学日本画専攻科修了。82年春季創画展春季展賞、京都美術展奨励賞受賞。85、97年山種美術賞展。93年個展(高島屋/京都、大阪、東京、横浜) 菅橋彦大賞展市民賞。個展:95年PHP表紙絵原画展(東京、大阪)。98年 第1回NEXT展(高島屋/京都、以後連続出品～'07個展(高島屋/京都、東京、横浜、大阪)。三越で個展、02、06、11、14。17年、(日本橋三越本店、三越仙台店、大丸京都店)。日本画、表紙絵

安田 謙 (やすだ・けん/1911～1996年)

京都生れ。1929年京都市立美術工芸学校図案科卒。33年独立美術京都研究所入所。35年独立美術協会展に入選。35年朝日新聞社京都支局新社屋(朝日会館)の外壁に巨大壁画。新日本洋画協会の結成に参加。43年立命館第一中学校に勤務。47年独立美術京都研究所を再開、指導員として尽力。立命館高等学校や京都市立日吉ヶ丘高等学校、京都立美術大学で教鞭をとり、60年安田謙デザイン・スタジオを設立。1996年没、85歳。洋画、デザイン、美教

保田善作 (やすだ・ぜんさく/1897～1992年)

大分県生れ。1911年宮崎県立尋常高等小学校高等科卒。洋画家を志して研鑽。1924年帝展に入選。以来、佐伯地方の風物や身近な人々を題材とした堅実な作風で、43年までの間に帝展、新文展に5回入選。戦後は日展委員となって活躍、地元では大分県美術協会の審査員や佐伯市美術協会の第二次会長、地域文化の発展や後進の育成にも尽力。1992年没、95歳。洋画

保田春彦 (やすだ・はるひこ/1930～2018年)

和歌山県生れ。1952年東京美術学校彫刻科卒。58年渡仏、ザッキンに師事。60年ヨーロッパ各地で制作活動を行う。68年帰国、翌年武蔵野美術大学専任講師(72年助教授、75年教授、98年退任)。71年サンパウロ・ビエンナーレでビエンナーレ賞。95年中原悌二郎賞。97年綬褒章。2007年平櫛田中賞。1918年神奈川県で没、88歳。彫刻

安田半圃 (やすだ・はんぼ/1889～1947年)

新潟県生れ。水田竹圃にまなび、文展11、12回に入選、帝展に10回出品して推薦。南画院の同人として南画山水を主とし、新文展にも出品。日展無鑑査。熱海市で没、58歳。南画

安田義孝 (やすだ・よしたか/1926年～)

福岡県生れ。1948年中学校美術教師保田善作(洋画家・元日展委員)に師事。55年上京し、画家・イラストレーターとして制作。制作活動の様子がメディアに取り上げられテレビ・ラジオ等に出演。「時間の堆積を刻む・その風情を描く」をテーマにした作品が話題。99年大分県へ帰郷し、東京銀座の画廊を中心に個展。洋画、鉛筆、イラスト

安田雷洲 (やすだ・らいしゅう/?～1859年)

江戸生れ。オランダの画家ルカス・ヴァン・ライデンにあやかり Willem van Leiden とも称した。はじめ葛飾北斎に学び、天保年間には洋風画家として活躍。1814～58年読本・人情本の挿絵、銅版画、肉筆の洋風画を制作。銅版画では《東都勝景真図》(1821)のシリーズ15点、《東海道五十三駅図》(1844頃)、肉筆画では《赤穂義士復讐図》、《江之島図》(1856)、《富士箱根遠望図》(1858)などの作例が知られている。1859年没。江戸後期の洋風絵師、版画、銅版画導入

安田老山 (やすだ・ろうざん/1830～1883年)

岐阜県生れ。長崎で鉄翁祖門にまなび、1864年清(しん)(中国)にわたり、胡公寿に師事。73年帰国、東京にすむ。奥原晴湖と文人画の覇をきそった。1883年没、54歳。日本画

安永良徳 (やすながよしのり/1902～1970年)

横浜市生れ。県立中学修猷館卒、1919年東京美術学校彫刻科に入学、朝倉文夫に学ぶ。27年同校卒業後サトウハチローらと共同生活を送る。31年構造社展に入選、32年構造社賞。以後構造社の代表作家として活躍。シベリア抑留後、47年に復員してからは福岡市に居住。文展でも活躍し、戦後日展委員。1970年没、68歳。彫刻

安本亀八・初代（やすもと・かめはち I/1826～1900年）

1826年生れ。郷里肥後熊本の地蔵祭で等身大の写実的な生き人形を製作・展示、松本喜三郎と腕をきさそう。1852年大坂難波(なんば)新地で「いろは比喩(たとえ)」を興行。維新後は東京団子坂の菊人形や人気役者の似顔人形、「東海道五十三駅(つぎ)」などを製作。1900年没、75歳。幕末-明治時代の人形師

矢田一嘯（やだ・いっしょう/1859～1913年）

横浜市生れ。アメリカでパノラマの描法を研究。1890年東京上野のパノラマ館開設に際し白河戦争の大場面をえがく。94年から福岡市に定住。油絵の「蒙古軍襲来絵図」や銅像台座の日蓮法難図原画を制作。博多人形の品質向上にも貢献した。1913年没、56歳。洋画

谷田川卓（やたがわ・たかし/1935年～）

茨城県生れ。1954年武蔵野美術学校卒。57年二科展で入選、67年新構造展で岡田賞、以後も同展で数々の賞を受賞。70年新構造社会員。76年日動版画グランプリ展に出品(翌年も)。80年茨城県芸術祭美術展で中村彝賞。85年東京セントラル美術館版画大賞展出品。87年『松尾芭蕉鹿島詣色紙版画集』刊行。版画

矢田清四郎（やた・せいしろう/1900～1977年）

島根県生れ。1919年石橋和訓を頼って上京、師事。本郷洋画研究所に通い日本画、洋画を学ぶ。22年東京美術学校西洋画科に入学、岡田三郎助、小林萬吾らに師事。第7回帝展で入選。27年卒業後、美校同級生の小磯良平、牛島憲之らと「上社会」を結成、以後同展に毎年出品。終戦後に帰郷。出雲美術研究所の創立や島根光風会の結成に尽力、郷土における洋画の発展と普及に努めた。1977年没、77歳。洋画

矢田安史郎（やた・やすしろう/1911～1975年）

島根県生れ。1931年島根師範学校卒、69年の退職まで38年間教職に従事し、美術教諭として長らく後進の指導にあたった。48年東光会委員の佐藤一章を招いて開催された洋画講習会に参加し、薫陶をうける。50年東光会に出品し、奨励賞2席を受賞。会員として出品を続け60年審査員。1975年没、64歳。美教、洋画

柳川重信・初代（やながわ・しげのぶ I/1787～1833年）

江戸生れ。葛飾北斎の門にあり、長女と結婚したがのち離縁。「南総里見八犬伝」などの読み本の挿絵や肉筆美人画をかく。1822年大坂にゆき、柳川派をひろめた。1933年没、46歳。江戸後期の浮世絵師、挿絵

柳川貴司（やながわ・たかし/1957～）

埼玉県生れ。1980年東海大学教養学部芸術学科卒。92、94年現代日本具象彫刻展(千葉県立美術館)。96年小田原アートフォーラム'96(旧小田原市立城内小学校/神奈川県)。97年ふれる彫刻100展(神奈川県立生命の星・地球博物館)。99年個展(村松画廊/東京都)。彫刻

柳悦博（やなぎ・えつひろのぶひろ/1917～1995年）

戦後急激に衰えた民芸織物や工芸的染織を育て上げた。民藝運動の創始者・柳宗悦の甥であり、染織界の大御所。国画会系の人よりも、琉球の染織家などの伝統工芸の作家まで現在活躍する染織家の殆どが何らかの形で柳悦博の薫陶を受けている。1995年没、78歳。染織

柳源吉・高橋源吉（やなぎ・げんきち/1858～1913年）

江戸生れ。高橋由一の養嗣子。1883～84年柳姓を名乗っており、柳源吉とも呼ばれる。天絵学舎に学ぶ。1876年工部美術学校に学び、フォンタネージに師事。78年同校を中退。十一字会結成。80年日本初の美術雑誌「臥游席珍」を創刊。89年明治美術会創立、会員。明治美術学校で教鞭。明治美術会改組で晩年放浪、山形を訪問。1913年没、55歳。洋画、美教

柳沢淇園（やなぎさわ・きえん/1704～1758年）

奈良県生れ。大和郡山藩の重臣。父と兄は家老を務めた。生来多能多芸の天才で、書画をはじめ詩文、篆刻、音楽、医学などにすぐれ、特に絵画は日本南画の先駆者として評価される。谷口元淡に朱子学を学び、荻生徂徠・服部南郭・梁田蛻巖とも交友があった。祇園南海、彭城百川とともに南画の先駆者的役割を果たした。1758年没、54歳。**江戸中期の儒者、文人画家、南画の先駆者**

柳沢京子 (やなぎわさ・きょうこ/生誕年不詳～)

信州大学教育学部美術学科卒。1977年「一茶かるた」刊行。以来、独自のきりえ創作で、日本は元より、ドイツ各地、ニューヨークなど個展多数。長野県を本来の美しい風土にしたい、と情熱を燃やし続ける。「ふるさと研究所」をNPO法人として発足。長野県のランドデザインを描き、興す活動は、きりえ創りにも通ずる潔さがある。長野県在住。**デザイン、切り絵**

柳沢正人 (やなぎさわ・まさと/1955年～)

長野県生れ。1981年東京芸術大学大学院修了。89年山種美術館賞展(同'91 '93 '95)、成川美術館・佐久市立近代美術館・倉吉博物館等作品収蔵。91年島記念文化賞・フレンチ海外研修。92～96年両洋の眼「現代の絵画」展・個展(イタリア)。98菅橋彦大賞展大賞、90年同展で佳作賞)。95年個展(箱根芦ノ湖成川美術館(同'98)・資生堂ギャラリー)。96年住健美術館・田沢湖高原美術館・成城学園等作品収蔵。97年メディチリカルディー宮殿作品収蔵・個展(フランス)。**日本画**

柳宗理 (やなぎ・そうり/1915～2011年)

東京生れ。柳宗悦と母・兼子の長男。1940年東京美術学校洋画科卒。日本輸出工芸連合会の嘱託となり、当時輸出工芸指導官として来日していたシャルロット・ペリアンの日本視察に同行。日本各地の伝統工芸に触れる。42年坂倉準三建築研究所の研究員。20世紀に活動した日本のインダストリアルデザイナー。戦後日本のインダストリアルデザインの確立と発展における最大の功労者。代表作は「バタフライズソール」(天童木工製作)。ユニークな形態と意外な実用性を兼ね備えた作品が多く知られた。2002年文化功労章。2011年没、96歳。**インダストリアルデザイン、オブジェ**

柳原睦夫 (やなぎはら・むつお/1934年～)

高知市生れ。1960年京都市立大学陶芸器専攻修了。富本憲吉に師事。60年モダンアート展協会賞。66年ワシントン大学講師、アルフレッド大学助教授として招聘。86年大阪芸術大学陶芸科教授。2003年日本陶芸協会賞金賞。05年京都文化賞。**陶芸、美教**

柳原良平 (やなぎはら・りょうへい/1931～2015年)

1931年生れ。京都市立美術大学工芸科図案専攻卒。「アンクルトリス」をはじめとする人気のイラストを多数生み出したほか、アニメーション作家、漫画家、エッセイストとしても活躍。無類の船好きとして知られ、船のデザインや船の本の執筆などに積極的に携わり、海運各社より名誉船長の称号を贈られている。2015年没、84歳。**イラスト、アニメ、漫画、エッセイスト**

柳本素石 (やなぎもと・そせき/1867～1918年)

高知県生れ。土佐藩御用絵師・柳本圭吾(洞素)の子に生まれる。父に狩野派を学び、1889年京都に出て国分文友に師事、松村景文派の画法を学び、更に諸家の画風を研究。94年父が死去して以来郷里を出ず、四条派を広めた。南部錦溪・河野棹舟らと土佐美術協会を創立し、別役春田を会長にして新風の振興に努め、高知県尋常師範学校、土佐高等女学校などの嘱託もした。69年土陽美術会高知支部発足に際し、率先して幹事を務め、近代画を目指す谷脇素文・島内松南・下司凍月・浜口松堂らが入門。画風は花鳥・人物ともに秀で、中でも「猿図」が有名。作品は膨大な物を描き、博覧会・共進会などに出品し20回余り受賞、多くの門弟を養った。1918年没、53歳。**日本画**

柳本洞素 (やなぎもと・そどう/1838～1894年)

1838年生れ。幼いころから画をたしなみ、弘瀬洞意(絵金)に学び、1850年には駿河台狩野七代・狩野洞白陳信に入門、57年には20歳にして山内家の絵師に抱えられた。現在の高知県香我美町西川の出身で、洞素の作品はこの地に多く伝わっている。1894年没、57歳。**江戸末期-明治の絵師**

柳 幸典 (やなぎ・ゆきのり/1959年～)

福岡県生れ。武蔵野美術大学大学院造形研究科修了後、イェール大学大学院美術学部彫刻科修了。1990年代初より、色砂でかたどられた国旗が蟻の巣づくりによって侵食されていく「ザ・ワールドフラッグ・アント・ファーム」シリーズを発表。92年直島コンテンポラリー・アー

ト・ミュージアム(当時)の開館を記念した個展に招待された際、銅の精錬所の遺構がある犬島と出会い、95年「犬島プロジェクト(当時)」を着想。尾道市百島の廃校を活用し、柳幸典と協働者たちによる創作活動を通して離島の創造的な再生を試みるアートセンター「アートベース百島」のディレクターを務める。2008年明治の近代産業遺産と、自然エネルギーの技術、それらを活用した三分一博志の建築、日本の近代化に警鐘をならした三島由紀夫をモチーフとした柳の作品を融合させた美術館「犬島精錬所美術館」を完成させる。93年にイェール大学フェローシップ美術学部優秀賞、95年五島記念文化財団美術新人賞。現在は、広島県を拠点に活動する。主な個展に「柳 幸典〜ワンダリング・ポジション」(BankART Studio NYK、神奈川、2016)。**現代美術、立体**

柳瀬俊雄 (やなせ・としお/1910~1977年)

大阪生れ。17歳の時に本郷絵画研究所に入り、岡田三郎助に師事。1933年文展に入選。この頃中村研一に師事し、人物画の基礎を学ぶ。51年に日展特選。東京を拠点に光風会・日展等で活躍。「出雲出身」を自負し、帰京後もたびたび出雲で洋画の指導・普及にあたった。1977年没、67歳。**洋画**

矢野橋村 (やの・きょうそん/1890~1965年)

愛媛県生れ。小学校を卒業して南画家永松春洋塾に入る。大正年間に美術文芸研究を目的として直木三十五らと主潮社を起し、個展を主張して審査をうける展覧会への出品を中止したこともある。斎藤与里らと私立大阪美術学校を設立し、日本南画院の設立にも関与した。1959年大阪市民文化賞。61年日本芸術院賞。64年日本南画院会長。著書に「浦上玉堂」「南画初歩」がある。1965年没、75歳。**日本画、南画、私立大阪美術学校を設立**

矢野彩仙 (やの・さいせん/1899~1969年)

鹿児島県生れ。矢野氏の祖先は藤原姓で、のち薩摩の島津家に仕えて3万石といわれる矢野出羽守の直系の後裔。母方の関家は備中国新見城主の分家で、その子孫には島津斉彬の信望厚かった学者関勇助があり、西郷隆盛や大久保利通などがその門人であった。若くして徳富蘇峰について国史と国文学を修め、歴史学者として知られ、著者には「日羅上人伝」や「芦北郡史」などがあり、また九州における古い石橋の研究者としてその数千枚の原稿も残っている。油絵については、鹿児島の洋画家大牟礼南島氏について学び、特に肖像

画が得意であった。1969年没、70歳。**洋画**

矢野茂安 三代 (やの・しげやす III/1673~1752年)

1673年生れ。矢野吉安の子。1689年に藩絵師となり60余年画職をつとめた。98年公儀絵図改に際し肥後および豊後国内の細川領内の絵図を制作した。1706年藩絵奉行になった。12年狩野派への流儀替を仰せ付けられ、正徳3年狩野派への流儀替がならず矢野派は一代限りとし渡された。1752年没、80歳。**江戸中期の絵師**

矢野誠一 (やの・せいいち/1885~1929年)

香川県生れ。東京美術学校彫塑科卒、文展、帝展で活躍した彫刻家。1925年帝国美術展覧会(初夏=特選)。26年帝国美術展覧会(長瀬裕日=特撰)。27年帝国美術展覧会(短夜=無鑑査)。1828 帝国美術展覧会(雲の峰=無鑑査)。1929 帝国美術展覧会(審査員)。1929年没、44歳。**彫刻、木彫**

50

矢野雪叟 (やの・せつそう/1714~1777年)

1714年生れ。肥後熊本藩細川家の絵師矢野茂安に師事してその養子となり、矢野家4代をつぐ。矢野派様式を確立して同派を復興した。65年法橋(まつきょう)。1777年没、64歳。作品に「山水図屏風(びょうぶ)」など。**江戸中期の絵師**

矢野鉄山 (やの・てつざん/1894~1975年)

愛知県生れ。小室翠雲にまなび、叔父矢野橋村の私立大阪美術学校にはいる。日本南画院同人となり、1929年、33年帝展で特選。戦後日展審査員、会員。68年全日本水墨画協会を創立した。1975年没、81歳。**日本画**

矢野秀徳 (やの・ひでのり/1907~1996年)

香川県生れ。1929年東京美術学校彫刻科卒。師 北村西望。30年日本美術院、入選。33年帝展初入選、以後、連続入選。35、37年日本美術協会展にて、銀賞。42年文展に無審査。48年県展にて、文部大臣賞。57、58年日彫賞。63年日展委属。68年日展、菊花賞。71年日展審査員・会員。1996年没、88歳。97年文化功労者。**彫刻**

矢野良勝・5代 (やの・よしかつ V/1760～1821年)

熊本県生れ。肥後細川藩御用絵師矢野家第5代で、雪叟安良の子。矢野家は雲谷派の画系であるが、良勝は堂々たる筆致による独自の様式の開拓、雲谷派の革新に努め、矢野派全盛時代を築いた。同じく肥後細川藩の絵師であった衛藤良行の兄弟子にあたり、柳川藩御用絵師北島勝永の師匠にあたる。1821年没、61歳。**江戸後期の絵師、雲谷派の革新に努め、矢野派全盛時代を築いた。**

矢野良敬 (やの・よしたか/1800～1858年)

1800年生れ。矢野家六代。右膳と称し、のちに左膳と称した。藩画府根役。1858年没、59歳。**江戸後期の絵師**

籾内佐斗司 (やぶうち・さとし/1953年～)

大阪生れ。1978年東京藝術大学美術学部彫刻科卒。80年同大学院美術研究科修了。82年東京藝術大学大学院美術研究科保存修復技術研究室助手。87年、New Trends in Contemporary Sculpture 5 Japanese Artist's (Salvatore Ala Gallery, ニューヨーク)。88年個展 (Alexander F. Milliken INC., ニューヨーク)。93年個展 (日本橋・高島屋、刈谷市美術館、他)。97年現代日本彫刻展で宇部興産株式会社賞。99年個展 (三越エトワールノリ、日本橋・三越、他)。第21回平櫛田中賞受賞。2004年、東京藝術大学大学院美術研究科文化財保存学教授。2013年、個展 (福井市美術館、他)。**彫刻**

籾内正幸 (やぶうち・まさゆき/1940～2000年)

大阪生れ。1959年高校卒業と同時に上京。図鑑画を描くため福音館書店に入社し、図鑑・絵本の画を担当する。他社からの画の依頼が増えたため、71年にフリーランスに転身。動物画家として図鑑、絵本、広告など幅広い分野で活躍する。動物たちへの温かい眼差しで描かれた作品は一万点以上遺されている。2000年没、60歳。**図鑑、絵本、個人美術館**

養父清直 (やぶ・きよなお/1905～1965年)

茨城県生れ。1930年聖徳太子奉讃美術展に出品。30年日本画会展に出品、39年日本画院展に出品。41年日本画院展で奨励賞。41年紀元二千六百年奉祝展に出品、50年茨城県美術展で教育長賞。51年第1回再興新興美術院展で奨励賞、会友。53年新興美術

院会員。56年新興美術院理事。1965年没、60歳。**日本画**

藪野繁夫 (やぶの・しげお/1940年～)

甲府市生れ。立軌会同人。東京芸大油画科助手を経て、十騎会を結成。新鋭選抜展、国際形象展などに出品。フォルム画廊で個展。**洋画**

山内神斧 (やまうち・しんぷ/1886～1966年)

大阪生れ、18歳で梶田半古に入門、前田青邨と二人で半古の画塾に寄宿し、先輩小林古徑、後輩奥村土牛らとともに日本画を学ぶ。東京美術学校日本画科卒、1911年大阪に戻り、小美術店「吾八」を開き大津絵、泥絵、絵馬、ガラス絵、郷土玩具などを扱う。16年文展初入選。18年芸艸堂より「寿々I・II」発刊。扉絵に里見とん、小林古徑なども協力。世界各国の人形や玩具の絵を描く。1966年没、81歳。**版画**

山内哲也 (やまうち・てつや/1962年～)

多摩美術大学グラフィックデザイン科卒。科学館、美術館での光の作品展示の他、JR名古屋駅「WINTER GALA TOWERS LIGHTS」東京スカイツリー「LIGHT ART ENTERTAINMENT」でクリスマスイルミネーション、箱根・星の王子さまミュージアムでは光の演出&プロジェクトを企画を手掛ける。第4回ハイテクノロジーアート展グランプリ、第9回ハンズ大賞グランプリ他。**彫刻、メディアデザイン**

山岡孫吉 (やまおか・まごきち/1888～1962年)

滋賀県生れ。高等小学校卒。大正・昭和期の発明家、実業家 ヤンマーディーゼル社長。笠間日動美術館、2000年には山岡孫吉 (ヤンマー創業者) が収集した洋画コレクションも加わり。高橋由一の鮭図、鯛図から、黒田清輝、藤島武二、青木繁などの黎明期の日本人画家に影響を与えた外人達の作品も交えて、数多くの貴重な作品が集められている。この山岡コレクションの特長は、洋画の黎明期だけに絞って集めていることである。そして作品の質の高さも文句なしである。司馬江漢、五姓田義松、チャールズワーグマン、川村清雄などの作品を含めて、板や紙などに油絵具を使ってかかれたものも多い。笠間市の笠間日動美術館に「山岡孫吉コレクション」として収蔵されている。現在のヤンマー株式会社の山岡淳男会

長は孫吉氏の長男である。父親の残されたコレクションを戦後の困難な混乱の時代に、大切に維持し、更に充実されたのは至難の快挙である。1962年没、74歳。[コレクター](#)

山岡米華（やまおか・べいか/1867～1913年）

高知県生れ。名草逸峰(なぐさいつほう)、川村雨谷(うごく)にまなび、書は長三洲(ちようさんしゅう)に師事する。日本南画会をへて1906年日本南宗画会の創立に参加した。1913年没、47歳。[日本画](#)

山岡良文（やまおか・りょうぶん/1911～1970年）

東京生れ。京都市立絵画専門学校(現京都市立芸大)中退。川端竜子に師事。1934年福田豊四郎らと新日本画研究会を結成。38年歷程美術協会に参加するなど前衛画家として知られた。1970年没、59歳。作品に「山霊の合歓」など。[日本画](#)

山鹿清華（やまが・せいけい/1885～1981年）

京都生れ。軍学者山鹿素行の子孫。西陣織に従事していた四番目の兄の影響で、小学校卒業後、織図案家の西田竹雪の内弟子になり、並行して日本画の勉強もする。10年間の年期奉公があけると、図案家として当時の第一人者であった神坂雪佳に師事し、明治末期から大正にかけて、関西図案会・新工芸院・京都図案家協会などの創立に尽くした。現代のファイバーアートのはしりを行く染織美術作品を、撚糸や染など広く内外の染織技法の研究を続けて独自の手織錦を考案、1925年パリ万国装飾美術工芸博で手織錦「孔雀」がグランプリ。27年の帝展で手織錦「オランダ舟」で特選、第7回日展出品の「無心壁掛」及び撚糸染法の新生面開拓によって51年芸術院賞。日展などの審査員をつとめ、工芸作家の第一人者といわれた。57年芸術院会員、69年文化功労者。74年勲二等瑞宝章。1981年没、96歳。[染色](#)、[ファイバーアート](#)

山川永雅（やまかわ・えいが/1878～1947年）

東京生れ。佐竹永湖門下に入り、さらに約2年後には小堀鞆音に師事し、大きな影響を受けました。1898年安田靱彦、今村紫紅らの紫紅会(のちに紅児会に改名)創立に参加し、己の芸術の探求にいっそう没頭します。東京勧業博覧会で褒状を受け、日本絵画協会、日本美術院、異会展などでも活躍。戦後は、1946年日展に出展。1947年没、69歳。[日本画](#)、[版](#)

[画](#)

山川孝次・初代・山屋八十吉（やまかわ・こうじ I/1828～1882年）

天保年間頃江戸から金沢へ、横谷宗珉風の技術を伝えた柳川春茂(内田甚三郎ともいう)に入門、技術を修める。その上達が極めて著しく、加賀宗珉とうたわれる名工となる。1862年加賀藩の白銀師となる。江戸末期の金工、特に彫金の名工。文久年間に孝次と改名。1882年没、54歳。[彫金](#)

山川忠義（やまかわ・ただよし/1902～1983年）

福島町(現福島市)茂庭生れ。22年福島県師範学校卒。小学校、県立福島中学校勤務のあと44年より67年まで福島県師範学校、福島大学で美術科を担当。その後、福島女子短期大学に勤務、五十一年にわたり教職を務める。その間、41年第4回新文展入選、以後、日展、一水会展に出品。53年第9回日展で特選、朝倉賞受賞。64年福島県美術協会会長。83年没、享年81歳。(左)[洋画](#)

山岸光代（やまぎし・てるよ/1936年～）

金沢市生れ。1960年金沢美術工芸大学油絵科卒。64年二科展初入選。70年初個展開催。71、72年ヨーロッパ研修旅行。80年二科展65回記念賞。81年二科会会友推挙。88年二科展会友賞。93年二科展会員推挙。97年二科会北陸支部長就任。2000年二科会評議員。[洋画](#)

山口雪溪（やまぐち・せつげい/1644～1732年）

京都生れ。狩野永納にまなんだとする説もあるが、室町時代の水墨画に傾倒。雪舟等楊と牧谿の画風をしたい、雪溪と号した。1732年没、89歳。作品に「桜楓図屏風」など。[江戸前期-中期の絵師](#)

山口操助（やまぐち・そうすけ/1913～2003年）

愛知県生れ。大正末年に九谷焼の上絵師であった父の出生地辰口町に転居。小松中学在学中に宮本三郎に師事。1937年二科展初入選、戦後二紀会に出品し、50年同人賞。県内の小中学校の教諭を勤めたのち、58年埼玉県に移る。71年NHK朝の連続ドラマ「繭子一

人」のタイトル画を描く。72・80年二紀展で菊華賞受賞。二紀会参与。2003年没、90歳。**洋画、美教**

山口艸平（やまぐち・そうへい/1882～1961年）

大阪生れ。国学院専門部卒、独学で日本画を習得した。1921年頃から「サンデー毎日」や「朝日新聞」の連載小説挿絵画家として活躍した。1955年大阪府芸術賞。1961年没、79歳。**日本画、挿絵**

山口ソガ（やまぐち・つが/1879～1946年）

長崎県生れ。活水女子学院卒業後に上京して黒田清輝邸に寄宿し、赤坂洋画研究所に学ぶ、一時、美術学校で教鞭をとる。1905年渡米して美術学校へ入学。11年卒業とともにパリに居を移し、パリ画壇で活躍。35年郷里諫早に戻る。1946年没、67歳。**洋画**

山口正美（やまぐち・まさみ/1949年～）

1949年生れ。長崎県で山口正右エ門窯を開く。白磁陰刻を得意とする。近年、波佐見青磁の復興に努めている。74～77年長崎県展連続入選。77年長崎工芸展知事賞。79年長崎工芸展招待出品81年日本現代工芸展入選(1982年・1983年・1986年)。86年日展入選。三笠宮殿下へ〈白磁彫牡丹文花瓶〉献上。86年長崎県陶磁器展知事賞。90年国際陶芸展金賞。91年伝統工芸士に認定。**陶芸**

山口幹雄（やまぐち・みきお/1915～2001年）

長崎県生れ。1937年上京し、二科美術研究所に入所。鈴木千久馬に師事。52年創元会展に入選。戦時中より中断されていた壱岐美術協会展を同士とともに再興。73年壱岐文化協会発足、初代文化協会長。(12年間在任)。創元会会員。日本美術家連盟会員。壱岐郡美術協会名誉会員。2001年没、86歳。**洋画**

山口蓼洲（やまぐち・りょうしゅう/1886～1966年）

京都生れ。京都市生。大蔵流狂言師の家系に生まれ、のち本願寺に狂言方としてつかえた山口家の養子となる。狂言は十世茂山千五郎、十一世千五郎に師事。また谷口香嶺に絵を学び、能画、狂言画を得意とする1966年没、80歳。**狂言師、日本画、版画**

山崎覚太郎（やまざき・かくたろう/1899～1984年）

富山県生れ。東京美術学校卒。パリ万国装飾工芸美術博、帝展などで受賞。1943年東京美術学校教授。色漆の使用や斬新な構図で現代の漆芸界をリードした。芸術院会員。66年文化功労者。1984年没、84歳。作品に「三曲衝立(ついで)」、風炉先屏風(ふるさきびょうぶ)「猿」など。1984年没、85歳。**漆芸、美教**

山崎和國（やまざき・かずくに/1934～2018年）

長崎県生れ。1958年武蔵野美術学校卒。長崎市立式見小学校勤務。60年東長崎中学校勤務。68年同校退職。ヤマサキデザイン室開設。73年長崎日本大学高等学校講師、86年長崎大学教育学部講師。89年展特選。2018年没、84歳。**美教、彫刻**

山崎坤象（やまざき・こんぞう/1907～1993年）

父は近代彫刻の巨匠である山崎朝雲。本郷洋画研究所入学。1925年東京美術学校入学。1928年帝展初選。以降、官展にたびたび入選し、合計11回入選。作品としては28年「パオ風景」、38年「S軍曹」、新文展、59年「閑」日展などがある。**洋画**

山崎 脩（やまざき・しゅう/1929年～）

東京生れ。京都市立芸術大学名誉教授。出品展＝日本現代美術展・毎日選抜美術展・ピッツバーグ「カーネギー国際美術展」・ニューヨーク、オスグッド画廊「14人の日本人作家展」・彫刻の新世代展・現代美術の動向展等、その他各地で個展・グループ展。調査暦＝京都市立美術大学インドネシア総合調査隊員・同大学中近東美術工芸調査隊員・同大学中南米美術工芸調査隊員及び文部省在外研究員等数次にわたり宗教遺跡、建造物及び美術工芸の実態調査と写真撮影を行う。**美教、美研、彫刻**

山崎修二（やまざき・しゅうじ/1910～2001年）

鳥取県生れ。少年期より翻訳書でコロとセザンヌに傾倒する。1927年松江洋画研究所の講習で斎藤与里に才能を認められ、以後師事することとなる。34年島根県立浜田高等女学校講師となり、以後浜田を拠点とする。帝展、日展などにも入選を続け、47年東光会山陰支部山光会の結成に際し推されて会長となる。67年以降たびたび渡欧。身近な人物や風景

を明るい光と色彩の中に描いた。2001年没、91歳。洋画

山崎昭二郎（やまさき・しょうじろう/1927～1993年）

兵庫県生れ。1950年東京美術学校工芸科図案部卒。54～56年宇治平等院鳳凰堂の彩色文様の復元に従事。56年主任として社寺建築の文様復元、59年京都市醍醐寺五重塔彩色文様の復元。60年広島県明王院五重塔、61年京都府海住山寺五重塔、63年奈良県興福寺北円堂等91年京都府岩船寺三重塔、92年奈良県興福寺三重塔の彩色文様復元図を作製した。これらは建築彩色文様の一部を復元したものであるが、この他に同75年正倉院御物「粉地彩絵八角几」模造に復元彩色を施す等の仕事もした。79年国指定建造物彩色選定保存技術認定保持者に認定。彩色文様復元図の多くは文化庁や東京国立博物館の所蔵になり、これらを展示した「日本建築の装飾彩色」展が90年国立歴史民俗博物館で行なわれた。1993年没、66歳。保存技術「建造物彩色」保持者、工芸

山崎 祥琳（やまさき・しょうりん/1951年～）

1951年生まれ。京都の大谷大学大学院修了。宗学の傍ら仏像彫刻を学ぶ。真宗大谷派無量山浄覚寺住職。長岡市・新潟市で仏像彫刻教室を主催。「仏像美術展」を新潟市で定期開催。各地の寺院等に仏像や仏画を納入。日本画において新潟県芸術展で奨励賞を受賞。仏師、日本画

山崎誠一（やまさき・せいいち/1958年～）

東京生れ。1980年日本大学芸術学部彫刻家を卒業後、造形家レイ・フランセンに師事。陶板レリーフ、モザイクなど様々な素材による壁画の制作や彫刻・モニュメントなどの制作活動に従事。現在山崎ステンドグラス造形工房代表。造形、壁画、彫刻、モニュメント

山崎 猛（やまさき・たけし/1930～1998年）

茨城県生れ。1954年茨城大学教育学部美術科卒。57年一陽展で特待賞（64年会員、73年委員）。78年茨城大学教授、イタリア政府給費留学生として渡伊。84年高村光太郎大賞展で美ヶ原美術館賞。85年神戸具象彫刻大賞展で読売賞。86年ロダン大賞展で特別優秀賞、88年で優秀賞。水戸市で没、68歳。洋画、美教

山崎哲一郎（やまさき・てついちろう/1945年～）

大分市生れ。1967年大分大学教育学部卒。64年二紀会展に入選。以後、同展を主舞台に活躍。96年二紀会会員。2001年、会員賞。09年会員優賞。10年二紀会委員。青木繁大賞公募展をはじめとする各種コンクール展にも出品し数多くの賞を受賞。97年文化庁芸術家在外派遣研究員として英国に留学。2017年大分県美術協会副会長。洋画

山崎秀雄（やまさき・ひでお/1907～2005年）

福岡市生れ。高等小学校卒業後、まず博多で堀祐峰に木彫を学ぶ。1927年に上京し大叔父にあたる山崎朝雲に入門、36年修行を終えたが、その後も師が没するまで、助手として仕え師の制作を助けた。32年には帝展に初入選し、以後も様々な人物像で入選を重ね、また、福岡県展創設に参加し、筑前美術会展にも出品した。戦後は主に日彫展で、穏やかで写実的な作風の動物を主題とした作品を発表。また、如悦と号して、肖像彫刻や香合などの茶道具も制作した。2005年没、98歳。彫刻、茶道具

山崎 博（やまさき・ひろし/1946年～）

長野県生れ。1968年日本大学芸術学部を中退し、翌年から写真家として活動。当初は舞台写真や現代美術の撮影を手がけていたが後にコンセプチュアルな写真作品を制作。83年長時間露光で太陽を撮影した「海と太陽」で「第33回日本写真協会新人賞」。83年山崎博写真集「HELIOGRAPHY」（青弓社）出版。89年写真集「水平線採集」（六耀社）出版。2001年のニコソロンでの個展「桜花園」で「第26回伊奈信男賞」。写真

山崎正明（やまさき・まさあき/1910～1938年）

長崎県生れ。長崎市商卒後大分高商入学。中退。1932年以後、第2回、4回独立美術展入選。34年西日本美術展福日賞受賞。瓊浦高等女学校図画担任。1938年没、29歳。洋画、美教

山崎百々雄・外郷（やまさき・ももお/1913～1971年）

金沢市生れ。1933年上京、前衛日本画家・玉村方久斗に師事し、新日本画運動の「はくと社」に参加、以後独自の画風を展開。49年以降は日本美術会会員として山崎外郷（がひきょう）名で油絵をアンデパンダン展に出品。池波正太郎の「忍者 丹波大介」、大岡昇平の「天

誅組」、子母沢寛「次郎長と勝蔵」、司馬遼太郎「風神の門」「梟の城」、柴田錬三郎の「決闘者」「英雄ここにあり」、村山知義の「真田忍者群」、など3000点を超える挿絵を描き、挿絵画家として揺るぎない地歩を確立した。1971年没、57歳。挿絵、水彩、素描、洋画

山崎 豊 (やまざき・ゆたか/1900～1981年)

京都市生れ。1916年竹杖会に入り、竹内栖鳳に師事。19年帝展で入選、26年聖徳太子奉讃美術展および30年同第2回展に出品。34年川端龍子に師事、同年より青龍社展に出品、Y氏賞(36年第8回展でY氏賞、36年社友、38年社人)。54年青龍社春季展から大作の発表を続ける。66年青龍社解散後は無所属。1981年没、81歳。日本画

山崎芳直 (やまさき・よしただ/1931～2005年)

大分県生れ。1956年九州大学経済学部卒。銀行員として務める傍ら、1966年自由美術協会展に入選。67年同会会員。80年潮流の会結成に参加。96年新潮流の会代表。99年アートプラザで「山崎芳直インスタレーション(特別参画)風倉匠」が開催。2005年没、74歳。洋画、インスタ

山里永吉 (やまざと・えいきち/1902～1989年)

1902年生れ。日本美術学校中退、田河水泡、村山知義と交遊。「MAVO」同人となる。27年郷里の沖縄にかえり、脚本や新聞小説をかく。戦後は琉球博物館長、琉球芸能連盟会長。1989年没、86歳。脚本に「首里城明渡し」、著作に「沖縄人の沖縄」など。洋画、作家、博物館長

山下 巖 (やました・いわお/1898～1977年)

鹿児島市生れ。1914年上京、川合玉堂門下の山内多門に師事。日本画会展などで受賞を重ね、帝展・文展に入選。師多門没後、玉堂の長流画塾に入門、のち児玉希望の戊辰会に参加、また三光会を結成。1977年没、78歳。日本画

山下 清 (やました・きよし/1954年～)

富山県生れ。1973年彫刻家辻志郎に師事。75日展入選(1975年以降毎年出品、入選23回)。77年日彫展入選(1977年以降毎年出品、賞4回)。97、99年日展特選。2000年

アートタウン三好彫刻フェスタ2000グランプリ受賞。01年日彫展西望賞。06個展(画廊若林)。08年日展彫刻部門審査員。彫刻

山下慶助 (やました・けいすけ/1913～1977年)

徳島県生れ。徳島商業卒。毎日新聞大坂本社入社。1967～69年独学で木版画を学び、第一期ポスタを私家版刊行。全5冊、別冊2冊。70～75年第二期ポスタ全5冊を私家版刊行。1977年没、64歳。版画

山下皎嶽 (やました・こうがく/1877～1935年)

石川県生れ。1899年石川県立工業学校図案絵画科卒。東京美術学校に学び、後京都に出る。1900年日本絵画協会・日本美術院連合絵画共進会に入選、三等褒状。久保田米僊、竹内栖鳳に師事。04年郷里に帰り、実家の旅館経営(山下屋)に励む。かたわら、絵を描き、書をたしなんだ。1935年没、58歳。日本画

100

山下新太郎 (やました・しんたろう/1881～1966年)

東京生れ。1904年東京美術学校西洋画科卒、東京外国語学校、暁星高等学校でフランス語を学び、05年パリに渡って初めラファエル・コランに、ついで国立美術学校に入りフェルナン・コ尔蒙 Fernand Comon(1845—1924)の指導を受ける。スペイン、イタリアに旅行のほか、サロンに出品。ベラスケス、とくにルノワールの強い感化を受け、明治末の日本に本格的な印象主義を反映した。10年帰国し、10年と11年の文展で連続三等賞、14年同志と二科会を創立。31～32年再渡仏。35年に帝国美術院会員となり、二科会を退会し、36年同志と一水会を創立。55年文化功労者。61年日展顧問。1966年没、85歳。洋画、版画

山下竹斎 (やました・ちくさい/1885～1973年)

京都生れ。山元春挙にまなぶ。1911年文展に「漁歌」が初入選、16年が特選。27年帝展委員となる。春挙ゆずりの風景画を得意とした。1973年没、88歳。日本画、版画

100

山下鉄之輔 (やました・てつのすけ/1887～1969年)

福岡県生れ。東京美術学校で和田英作に師事。在学中に萬鉄五郎とアブサト会同人展開催。1912年フーザン会の設立に参加。12年東京美術学校卒。16年片多徳郎の紹介で

大分中学校に赴任。教え子に佐藤敬がいた。大分県立女子師範学校、第二高等女学校に勤め、県美術教育に貢献。24、25、30年帝展入選。一水会に作家。1989年没、82歳。洋画、美教

山下晴子（やました・はるこ/1952年～）

石川県生れ。1979年金沢美術工芸大学美術学科彫刻専攻卒。フランスに留学しピエール・セカリーに師事。オーストリア・リンダブルン国際彫刻シンポジウムなどヨーロッパ各国の国際彫刻シンポジウムに参加。86年帰国。石を素材とし、緻密に計算された理知的構成美を示す作風が多い。彫刻

山下裕二（やました・ゆうじ/1958年～）

広島県生れ。東京大学文学部美術史学科卒。同大学院修了。東京大学では辻惟雄に師事し、日本美術史を専攻し室町時代の水墨画を研究。1990年より明治学院大学文学部芸術学科で教鞭、同大学教授。96年赤瀬川原平と「日本美術応援団」を結成し団長。『日本美術全集』全20巻(小学館)の編集委員。山下が監修した2019年の東京都美術館での展覧会「奇想の系譜展 江戸絵画ミラクルワールド」では、東大時代の恩師の辻惟雄を特別顧問として招聘。美史・美評

山下良平（やました・りょうへい/1973年～）

福岡県生れ。1994年ストリート絵師開始。96年九州芸術工芸大学画像設計科卒。2002年「現代絵師」設立 イラストレーターデビュー。08年初個展開催。09年ライブペイントパフォーマンス参加。15年アートフェア「UNKNOWN ASIA」で「イープラス賞」。現代美術、イラスト、パフォーマンス

山科杏亭（やまなし・きょうてい/1900～1984年）

金沢市生れ。1914年14歳の時に木村杏園について画を学びはじめたが、師の杏園が京都に移ったため、15年大西金陽の門に入った。15年北陸絵画協会に入会し、のち幹事。24年結成された金城画壇にも幹事として参加し、ここを舞台に精力的に作品を発表した。43年新文展に入選。46年日展に入選し、以後入選。また、日本南画院展に出品。一方で、石川県や金沢市の文化財保護審議会委員となるなど文化財の調査と保存に貢献した。1984年

没、84歳。日本画

山瀬晋吾（やませ・しんご/1935年～）

石川県生れ。1958年金沢大学教育学部美術専攻卒。65年日展に入選、83、84年連続して特選。少年・少女をモチーフとし、清楚で純真な子どもたちの、ロマンあふれる夢の世界を追求している。またテラコッタによる制作も展開。日展評議員、日本彫刻会会員。彫刻、テラコッタ、洋画

山田介堂（やまだ・かみどう/1869～1924年）

福岡県生れ。各地を遊歴し、福岡鉄斎、細谷立斎、平野五岳らにまなぶ。文展で受賞をかさね、1921年田近竹邨、池田桂仙らと日本南画院を創立した。1924年没、56歳。日本画、南画、版画

山田勝明（やまだ・かつあき/1932～2021年）

石川県生れ。山口操助、宮本三郎に師事し油絵を学ぶ。武蔵野美術大学卒。同大で版画を学ぶ。69年二紀展奨励賞、75年二紀会同人推挙、95年同人賞、97年会員推挙。2000年会員賞。油彩とテンペラによる混合技法で、女性と様々な擬人化された動物をモチーフに、幻想溢れる世界を描く。2021年没、89歳。洋画、版画

山高信離（やまたか・のぶあきら・のぶつら・しんり/1842～1907年）

江戸生れ。幕末から明治時代の武士(旗本)、官吏。位階および勲等は正四位・勲二等。1867年パリ万国博覧会に参列する徳川昭武に随行する。維新後はウィーン万国博覧会など、各地の万博に派遣されて事務局などに勤めた。後年は帝国博物館長、京都・奈良帝国博物館長を歴任。また椿椿山に学び、文人画を描いた。1907年没、65歳。万博担当事務局、文人画

山田鬼斎（やまだ・きさい/1864～1901年）

福井県生れ。仏師の父に彫刻を学び、1886年同郷の岡倉天心を頼って上京。88年岡倉に同行し奈良で宝物調査を行い、寺社の古仏を研究。90年より東京美術学校(東京芸大)雇となり、96年同校彫刻科教授となった。日本の伝統的彫技を生かして西洋風の写実的表現を

試み、皇居前の「楠公像」制作に高村光雲らと共に参加したほか、93年シカゴ万博に出品した浮彫「平治物語図額」(東京国立博物館蔵)など、歴史的主題の作品を多く残した。1901年没、37歳。彫刻、木彫、美教

山田 疆一 (やまだ・きょういち/1938年～)

愛知県生れ。1960年愛知教育大学美術科卒。81年エンバ賞美術展優秀賞。82年「第5回現代日本絵画展」で優秀賞(宇部市)。84年現代版画コンクール(大阪府立現代美術センター)。85年和歌山版画ビエンナーレで大賞。2007年個展開催(イサム・アート・ギャラリー、名古屋)。現代美術、洋画、版画、立体

山田 宮常 (やまだ・きゅうじょう/1747～1794年)

名古屋生れ。京都でまなんだのち郷里の名古屋にこもる。中国の元(げん)・明(みん)時代の古画を手本とし、山水・花鳥画にすぐれた。門人に張月樵(ちやうげつしやう)、中林竹洞(ちくとう)、山本梅逸(ばいいつ)がいる。1794年没、47歳。江戸中期-後期の絵師

山田 皓齋 (やまだ・こうさい/1906～1997年)

兵庫県生れ。東京美術学校に学び、在学中から青木大乗に師事、影響を受けた。青木の主宰する新燈社や大日美術院に加わり、1930年代は洋画・日本画いずれの作品も発表。戦後は新美術協会の設立(1954)に尽力し、その代表。芦屋市美術協会が1948年に創設されたときからの会員で、協会主催の芦屋市展では第1回目から日本画部門の審査員、以後1996年の第49回に及ぶまでその任にあたった。1997年没、91歳。日本画、洋画、彫刻

山田 佐保子 (やまだ・さほこ/1970年～)

京都生れ。1992年同志社女子大学英文学科卒。99年嵯峨美術短期大学総合美術研究所研究生修了。2006(平成18)京都市立芸術大学大学院美術研究科後期博士課程修了(博士号取得)。94年「第13回今立現代美術紙展」で準大賞。以後グループ展に多数出品する。98年「キリンコンテンポラリーアワード'98」奨励賞。山田の作品は、身の回りにあるものをモチーフに、その一部を撮影した写真をつなぎあわせて全体を立体的に再構築し、視覚と触覚の揺らぎを生み出している。2000年西宮市大谷記念美術館で「2.5D 印画紙と日常の

あいだ」を開催。造形、立体

山田 修市 (やまだ・しゅういち/1948年～)

新潟県生れ。1973年東京芸術大学大学院絵画科壁画研究室修了(大橋賞)。78年埼玉県知事賞。84年独立展で独立賞。個展(東京・紀伊國屋画廊)。89年ジャパン大賞展 大賞、人間讃歌大賞展北里研究所賞上げ賞。90年文化庁芸術家在外研修員として渡仏。91年第26回昭和会賞展 昭和会賞、93年個展(銀座・日動画廊)。独立美術協会会員、日本建築美術工芸協会会員、東北芸術工科大学教授。洋画、美教

山田 真山 (やまだ・しんざん/1885～1977年)

1885年生れ。福岡へ出た後、工芸家峰岸宝哉に師事、20歳で東京美術学校に入り山田泰雲に塑像を学び養子となった。卒業後、北京の美術学校で教え、帰国して小堀鞆音に日本画を学んだ。1924年明治神宮絵画館の壁画「琉球藩設置の図」を描いて名をあげた。戦前「真人団」という芸術家集団を組織して世界政府建設運動を進めた。戦後は世界平和をめざし平和慰霊像の建立に力を注いだ。世界100カ国の霊石を集め、57年から高さ21メートルの観音像の制作を始め、90歳を越えて完成に努めた。作品には他に「降魔之図」「定山溪之図」などの日本画がある。「郷土の文化を守る会」の会長として文化遺産の収集、再興に尽力した。1977年没、92歳。日本画、彫刻

山田 星村 (やまだ・せいそん?/生没年不詳)

色紙、風俗画、美人画、明治大正昭和期の画家、肉質画。大和絵巻 巻長さ7m。挿絵、日本画、舞台美術

山田 宗美 (やまだ・そうび/1871～1916年)

石川県生れ。父に象嵌・鍛金を学ぶ。1891年延展性の乏しい一枚の薄い鉄板から置物や花瓶などを成形する鉄打出の技法を考案。96年日本美術展覧会、1900年パリ万国博覧会、06年セントルイス万国博覧会など多くの博覧会で受賞。16年帝室技芸員に内定しながら発表前に亡くなる。1916年没、45歳。金工(鍛金)

山田 毅 (やまだ・つよし/1966年～)

兵庫県生れ。63年全関西展受賞(以後出品、受賞)。89年金沢美術工芸大学卒。松崎良太に師事。99年京展紅賞。2004年臥龍桜大賞展奨励賞。青垣日本画展大賞文部科学大臣賞。日展特選。08年「遠き道展」出品。日展会友。宝塚造形芸術大学常勤講師。日本画

山田道安 (やまだ・どうあん/生誕年不詳～永禄12年頃没)

大和国生れ。大和の筒井氏の一族で、大和の山田城主。山田順貞・順清・順知の三代にわたって道安と号した。初代は周文・雪舟を師とし、また宋画を学びその画風を伝えたといわれる。順貞は果物・人物を多く描いたと伝えられる。三代とも筒井家並び筒井順慶の大和国制王・支配に沿ったかたちで、春日大社への石灯籠寄進や、松永久秀焼き打ちによる大仏焼亡の仏頭仮修理に際し、資材を当てるなどしている。戦国末期～桃山時代の武人画家

山田宏子 (やまだ・ひろこ/1953年～)

愛知県生れ。愛知県立碧南高等学校卒業後、東京藝術大学日本画科で平山郁夫に学ぶ。村田林蔵と結婚。截金(きりかね)による仏画や植物を描いた作品を多く制作し、作品は橘寺(奈良県)、鶴岡八幡宮(神奈川県)など各地の寺院等におさめられている。日本画

山田真巳 (やまだ・まさみ/1938年～)

東京生れ。1956年東京教育大学附属中学校・高等学校、東京芸術大学美術学部日本画科卒。東京芸術大学日本画科大学院修士課程修了。2006年東京アムカクラブ、14年在日インド大使館にて個展を開催。後者には来日中のナレンドラ・モディ第十八代インド首相が訪れた。日本画

山田良定 (やまだ・りょうじょう/1931～2002年)

大津市生れ。1954年滋賀大学教育学部卒。62年日本芸術院会員富永直樹に師事。63年日展初入選、以後毎年出品する。75年日展で特選。76年展で無鑑査・連続特選。81年日展審査員。日展会員。滋賀大学教育学部教授。2002年没、71歳。彫刻、美教

山寺重子 (やまでら・しげこ/1932～2017年)

横浜市生れ。1993～'64年国画会新人賞・国画賞。63年シェル佳作賞。79～'89年女流画家協会展受賞4回。1993～'05年埼玉近代美術館C・A・F展参加。1997～'99年妙

義山麓美術館個展、他G展3回 ソウル市立美術館K+J展。2002～'04年駒ヶ根高原美術館個展。2004年ハフナボルグ美術館、アイスランド現代美術展。国画会会員、女流画家協会委員。2017年没、85歳、洋画

大和和紀 (やまと・わき/1948年～)

札幌市生れ。北星学園女子短期大学卒。代表作に『はいからさんが通る』、『ヨコハマ物語』、『N.Y.小町』、『あさきゆめみし』など。1977年第1回講談社漫画賞少女部門受賞。漫画

山中古洞 (やまなか・こどう/1869～没年不詳)

東京生れ。月岡芳年(よしとし)、熊谷直彦らにまなび、人物画を得意とした。1895年内国勸業博覧会に出品。烏合(うごう)会、国画玉成会などに参加。また新聞、雑誌に挿絵や口絵をえがいた。41年「挿絵節用」をあらわす。作品に「遠征を想ふ」など。日本画

山中散生 (やまなか・ちるう/1905～1977年)

愛知県生れ。名古屋高商(現名大)卒。NHKにつとめる。1929年前衛詩誌を主宰。エリュアール、ブルトンらと交流して日本のシュルレアリスム運動を推進し、国際的に知られた。1977年没、72歳。著作に「山中散生詩集」「シュルレアリスム資料と回想」など。1977年没、72歳。シュルレアリスム運動推進、詩人

山中定次郎 (やまなか・ていじろう/1864～1936年)

大坂生れ。少時より家業たる美術骨董商に従ひ、1894年日清役の際渡米して紐育市に山中商会を設立。後ボストン、倫敦等に支店を設置し、18年株式組織に改め社長となった。爾来東洋新古美術品の輸出紹介の事業に依り世界に名を知られ、美術界に貢献するところ多大であつた。1928年緑綬褒章、仏独政府からも勲章を贈られた。1936年没、72歳。東洋新古美術品の輸出商社山中商会社長

山中徳次 (やまなか・とくじ/1913～2000年)

松江市生れ。島根師範学校卒業後、1935年に独立美術協会展に入選する。須田国太郎、高島達四郎らに師事。45年島根洋画会創立に関わり、初代事務局長。66年から「呪詛シリーズ」を展開、独立展で奨励賞を連続受賞。このシリーズは雑誌「朝日ジャーナル」の表

紙を飾った。80～94年島根洋画会の常任委員長として島根の洋画振興に尽力。2000年没、87歳。**洋画**

山中信夫（やまなか・のぶお/1948～1982年）

大阪生れ、1969年多摩美術大学油絵科に入学。大学紛争により、美術家共闘会議を結成し、70年より「美術史評」の同人、同誌の編集。70年多摩美術大学を除籍。71年多摩川の川面に川の流れを撮った16ミリ映画を映写する「川に川を写す」という作品を発表し、注目される。72年、第2次美術史評社に参加。同年ピンホール・カメラによる作品を発表。74年、第2次美共闘 REVOLUTION 委員会に参加し、1年間制作・発表を中止するが、翌年より活発に個展を行ない、ピンホール・カメラによる作品を展開させる。76-77年パリに、79-80年ブラジルに住む。82年パリ・ビエンナーレに出品して好評をた。1982年NYで没、34歳。**洋画、ピンホールカメラ、現代美術**

山中嘉一（やまなか・よしかず/1928～2013年）

大阪市生れ。1947～53年にかけて大阪市立美術館付設の美術研究所洋画科で赤松麟作、小磯良平、須田国太郎に学んだ。戦後は堺市に移り、54年「デモクラート美術家協会」に参加。瑛九や泉茂とともにグループの中心として活躍した。57年の同会解散後はグループに所属することなく、大阪芸術大学美術学科や浪速短期大学デザイン美術科で教鞭をとり、定年後も非常勤講師として後進の指導にあたった。晩年まで作品制作を行っていたが、2013年没、85歳。油彩画のほか、リトグラフやシルクスクリーンなどの版画、ガラス絵など様々な分野の作品を手がた。**版画、洋画、美教、ガラス絵、デモクラート**

山名義海（やまな・ぎかい/1865～没年不詳）

江戸生れ。はじめ住吉廣賢に、のちに住吉派の父・山名貫義に学び、帝室博物館技手監査掛、美術部絵画主任などを務めた。大和絵および絵画の鑑定に長じ、博覧会、展覧会などの受賞も多い。**日本画、美行**

山名貫義（やまな・つらよし/1836～1902年）

東京生れ。紀州藩絵師山名弘政の子。住吉弘貫に学ぶ。1877年内国勸業博覧会事務取扱となり、第1、第2回内国絵画共進会審査官を経て89年から全国宝物取調局鑑査掛

嘱託。96年帝室技芸員、翌年には古社寺保存会委員となり、98年からは東京美術学校教授。住吉派の正系に学んで大和絵の復興と古美術保存に力を尽くし、これを次代に伝えた。前田貫業(つらなり)は弟、山名義海はその子である。1902年没、66歳。**日本画、古美術保存、美教**

山内金三郎・神斧（やまのうち・きんざぶろう/1886～1966年）

大阪生れ。梶田半古の門下となり、前田青邨と二人で半古の画塾に寄宿。1910年東京美術学校日本画専科卒。大阪に「吾八」を開店、大津絵、泥絵、絵馬、ガラス絵、郷土玩具などを扱う。19年上京。「主婦の友」の挿絵、こま絵などを描く。石川武美社長に請われて「主婦の友」に正式に入社、やがて編集と事業企画に参画。37年「阪急美術」の編集長。大津絵蒐集の仲間でもあった中井浩水も後に編集に加わった。山内には「主婦の友」編集時代の人脈があり、寄稿者も豊富で、「阪急美術」は先行の他の百貨店のPR誌に遜色のない充実した内容となった。表紙は和紙、装丁は小磯良平(洋画家)、鍋井克之(洋画家)、芹沢銈介(染色家)、棟方志功(版画家)、川西英(版画家)らが担当して凝った造りの雑誌となった。おもちゃ絵集『寿寿(joujou)』。大正時代から昭和初期にかけて、当時の趣味人たちの間で、郷土玩具収集ブームがおこり、民芸的な玩具に熱いまなざしが注がれていました。その“おもちゃ画集”を『寿寿』(フランス語でおもちゃはjouet/joujouは子ども言葉)と名づけました。描かれた玩具の多くは、浅井忠や小林古径ら海外への留学経験のある画家たちの協力によってもたらされた。1966年没、80歳。**美普、画廊、美術雑誌編集、玩具、挿絵**

山内春暁人（やまのうち・しゅんぎょうしん/1904～1991年）

徳島市生れ。高間惣七、中村貞以に師事する。日本美術院院友、春泥会委員となり、淡路千草会を主宰する。マイクロネシア群島、中国北部方面を写生旅行する。兵庫県半田文化賞、現代美術賞などを受賞。1991年没、87歳。**洋画、日本画**

山内豊喜（やまのうち・とよき/1911～1991年）

茨城県生れ。1929年川端画学校に学ぶ。30年二科展で初入選。32年日本美術学校西洋画科修了。51年自由美術家協会会員(62年退会)。64年渡仏。57年国際青年美術家展

運営委員。60年新宿伊勢丹で滞欧作品展。71年茨城県芸術祭美術展に審査員として出品。74年水戸市の京成志満津で個展。東京で没、80歳。洋画

山野辺義雄（やまのべ・よしお/1936～2016年）

福島県生れ。1963年東京芸術大学版画専攻科修了。72年日動版画グランプリに出品。76年ブラッドフォード国際版画ビエンナーレ（イギリス）に出品。77年個展開催（ギャラリー・ワタリ、東京）。78年イビザ・ビエンナーレ（スペイン）で受賞。84年「現代東北美術の状況展」に出品（福島県立美術館）。2016年没、80歳。版画

山林文子（やまばやし・ふみこ/1910～没年不詳）

大阪生れ。日本画を土田麦僊に学び、主に大阪で発表。大阪美術展・大阪女流画家展（1933）などに出品、木版画は琴塚英一に指導を受け、1935年春陽会展、第4回日本版画協会展に入選。36年日本版画協会展に入選。以後同展へ出品。36年サンフランシスコ・ロンドンなど欧米9都市を巡回した「日本現代版画展」に出品。40年会員、協会が企画した43年、44年のカレンダーも担当。36、40年新興美術展出品。同会の会友。43年「日本版画奉公会」会員。45年武井武雄の主宰する年賀状交換会である第11回「榛の会」の会員。46～64年日本版画協会展に出品。版画

山柁儀重（やまます・のりしげ/1888～1937年）

鳥取県出身。京都帝大文科を卒業後、師範学校教諭、大阪視学に歴任、鳥取新聞社長。1924年代議士に選出されて民政党に属し、岡田内閣当時は松田文相の下に文部参与官に任ぜられた。36年故紀淑雄の後を承けて日本美術学校長に就任。1937年没、49歳。美教、日本美術学校長

山村徳太郎（やまむら・とくたろう/1926～1986年）

兵庫県西宮市で山村硝子（現：日本山村硝子）を経営していた実業家。1955年社長に就任した頃から国内外のモダンアート作品の蒐集。戦後の日本人アーティストの作品を対象を絞った後、1986年の死の直前までコレクション。1 当初蒐集していたミロ/エルンスト/デュビュッフェ/レジェ/ポロックら海外の大家の作品は、66年国立西洋美術館に寄贈。2 収集した68作家、167点の作品が、それらは20世紀後半の日本美術を代表する作品群。いま世

界的に価値を高めている『具体 GUTAI』を中心に『ネオ・ダダ』のアーティストたち、80年代のニューウェイヴ。戦後美術史を語るうえで欠かさない重要作品が含まれている。87年兵庫県立美術館に収蔵。1986年没、60歳。コレクター

山村秀一（やまむら・ひでいち/1896～1989年）

山口県生れ。小学校卒業後、松林桂月に私淑し日本画を習う。山口師範学校本科を卒業し、女子師範学校の教諭などを経て、1926年県立中学明善校の美術教諭として久留米に赴任。帰省していた古賀春江と親交を深めた。水彩画の制作を続け、日本水彩画会会員、西部水彩画協会を設立して水彩画の発展と普及にも力を注ぐ。また、明善校の美術教諭として定年まで勤め、多くの美術家を世に送り出した。1989年没、93歳。美教、水彩、洋画

山本安曇（やまもと・あずみ/1885～1945年）

長野県生れ。旧制京北中学卒業後、郷里の小学校で教鞭をとり、研成義塾で井口喜源治の薫陶を受け、1907年東京美術学校鑄金科に入学。成績優秀で香取秀真の信望を受け、また在学中から同郷の荻原守衛（礪山）と親交を深め、その作品の鑄造に着手。12年卒業。13年青壺会、18年金人会、24年光燼会、25年工芸済々会などの結成に参加。27年帝展に入選し、32年帝展で審査員。36年改組後の帝展に出品作品が文部省の指定買上げ。文部省美術展覧会鑑査展に委員委嘱。1945年没、60歳。鑄金

山本永暉（やまもと・えいき？/1865～1952年）

大坂生れ。1877年四条派の西山完瑛に絵を学ぶ。狩野探美門から、後に橋本雅邦を師友として研鑽。89年皇居豊明殿の格天井画の制作に加わったといい、1902年頃から北陸路や中国・四国地方を中心に各地を遊歴。1913年氷見の灘浦海岸から雨晴を訪れて「有磯勝地撰寫」を写生し、これを元に氷見の景勝地を選んで「有磯八景」として作品に仕上げた。1952年没、87歳。日本画

山本英春（やまもと・えいしゅん/生誕年不詳～1942年没）

父は浮世絵の彫師山本信司。右田年英の門人。大正期に大阪から刊行された本に多くの口絵を描いている。同門に鱒崎英朋、河合英忠らがいる。1942年没。明治・大正の浮世絵師、口絵

たが、後新聞界に入り、神戸新聞、大阪時事新報等に関係した。久しく兵庫県美術協回を主宰し、兵庫県新美術聯盟結成幹事。1942年没、56歳。美評、記者、新美術聯盟結成

山本暁邦 (やまもと・ぎょうほう/1887～没年不詳)

宇都宮市生れ。佐竹永湖、真野暁亭に師事。山水、人物を描く。受賞有。貴族より御用命を拝する。帝国絵画協会の会員。大正時代東京に住す。日本画

山本琴谷 (やまもと・きんこく/1811～1873年)

島根県生れ。石見和野藩家老の多胡逸斎(たごいっさい)に学び、江戸で桜間青涯、渡辺崋山に師事。人物、山水を得意とし、1853年津和野藩絵師。1873年没、63歳。江戸後期の絵師

山本桂右 (やまもと・けいすけ/1961年～)

大阪生れ。1986年金沢美術工芸大学大学院修了。93年さっぽろ国際現代版画ビエンナーレ大賞。95年文化庁在外研修員としてイタリアへ留学。98年現代日本美術展和歌山県立近代美術館賞。日本版画協会会員。版画

山本光一 (やまもと・こういつ/1843～1905年)

江戸生れ。江戸琳派の祖である酒井抱一の弟子・山本素堂の長男。酒井鶯蒲の養子・酒井鶯一に絵を学ぶ。1874年に設立した日本の貿易会社の起立工商会社において製品の下絵・図案を作成。東京芸術大学大学美術館には749点もの図案が残っている。77年内国勸業博覧会で、漆器図案で花紋賞。後に金沢へ居を移し、富山県工芸学校(現在の県立高岡工芸高等学校)で教鞭をとり、金沢で拈華会を主宰し若手作家の育成に尽力した。岡本光谿、伊藤光雲、下村光鳳、石崎光瑤等。1905年没、62歳。日本画、江戸後期、明治の琳派の絵師、美教

山本紅雲 (やまもと・こううん/1896～1993年)

兵庫県生れ。竹内栖鳳に師事。文展・帝展などに入選多数。京都市文化功労賞。京都で没、97歳。日本画

山本広洋 (やまもと・こうよう?/1888～1942年)

兵庫県生れ。1912年東京美術学校日本画科卒業、12年より神戸一中の図画教師を勤め

山本若麟 (やまもと・じゃくりん/1721～1801年)

河村若元の長男で、芦塚若鳳は弟。父に画を学び、とりわけ虎の図を得意とした。唐館公用支配人を務めた。息子の牛島若融、上野若瑞も絵師。若瑞の子に上野若龍がおり、その次男が日本最初期の写真家・上野彦馬である。1801年没、80歳。江戸中期・後期の絵師、長崎漢画派、漢画派(北宗画派)

150

山元春挙 (やまもと・しゅんきよ/1872～1933年)

大津市生れ。幼名寛之助。はじめ、四条派の野村文挙に入門し、その後、森寛齋に師事。1886年京都青年絵画研究会で褒状。日本青年絵画共進会、内国勸業博覧会で受賞を重ねた。91年竹内栖鳳、菊池芳文らと青年絵画懇親会を結成。1904年文展が開設第1回展から審査員。17年帝室技芸員、19年帝国美術院会員、竹内栖鳳とともに京都画壇を代表する画人として一時代を築いた。1933年没、61歳。日本画

山本昇雲 (やまもと・しょううん/1870～1965年)

高知県生れ。土佐の絵師、柳本洞素および河田小龍に学び、大阪での仕事をを経て、1888年東京に出て、南画家、滝和亭に師事する。雑誌『風俗画報』、『東京名所図会』の挿絵画家「松谷」として一躍有名になり、報道画家として活躍したほか、明治末期において江戸期から続く分業制の多色刷り木版のシリーズを多数手がけた。日本画家として文展に出品するほか「土陽美術会」の会員としても活躍した。モダンで可憐な女性像の描写に長じたことで知られる。1965年没、95歳。日本画、挿絵、木版

山本真輔 (やまもと・しんすけ/1939年～)

愛知県生れ。東京教育大卒。日展入選、内閣総理大臣賞、日本芸術院賞など。日本芸術院会員。日展理事。名古屋市立大学名誉教授。彫刻、美教

山本瑞雲 (やまもと・ずいうん/1867～1941年)

熱海生れ。16歳で高村光雲に師事。「小野小町」の小像で光雲に認められ、1889年東

京美術学校創設では光雲に従い同校助手。90年年京都、奈良に遊び、5年間滞在、国宝修理にも従った。1900年上京、作品を日本美術協会、東京彫工会競技会、内国博覧会などに出品、「鷹匠」「三番叟」が受賞、またシカゴ万国博に「桓野王」出品。17年梅檀社を創立、新しい木彫の振興に努めた。代表作は他に茨城県安楽寺の「如意輪観音」、東京・本郷大円寺の「不空羂索観音」などがある。1941年没、74歳。彫刻、木彫

山本 進（やまもと・すすむ/1951～2016年）

愛媛県生まれ。1976年木口木版による連作「水葬歌」を日本版画協会展に出品。以後木口木版画を続ける。77年日和崎尊夫らと「鑿の会」を結成。メンバーと詩画集『水夢譚』（沖積社）刊行。79年鑿の会で詩画集『鑿』創刊号（形象ギャラリー）刊行（83年V号まで毎年刊行）。81年版画集『夢の祝祭・魂の影』（形象ギャラリー）刊行。93年『夢忘の鯉魚』（図書出版）刊行。86～2004年美学学校講師。93年「日本の木口木版画—明治から今日まで—」展（板橋区立美術館）。15年「山本進木口木版画展」（画廊宮坂、銀座）開催。2016年没、64歳。版画、美教

山本倉丘・山本橋村（やまもと・そうきゅう/1893～1993年）

高知県生まれ。京都に出て、山元春拳の画塾早苗会に入る。1925年帝展にて初入賞を果たし、以後も出品入選を繰り返す。33年回帝展で特選。早苗会解散後は、堂本印象の画塾東丘社にも属す。65年新日展で日本芸術院賞。昭和の京都画壇で活躍した。代表作に「たそがれ」「焰陽」「黎明」「菜園の黎明」など。尚、子息には日本画家山本知克。1993年没、100歳。日本画

山本素軒（やまもと・そけん/生誕年不詳～1706年）

山本素程の子。画を狩野探幽の門に学び、法橋に叙せられる。尾形光琳の画事の師として知られる。1706年没。江戸中期の狩野派の絵師

山本素程（やまもと・そてい/生誕年不詳～1674年）

京都生まれ。狩野探幽にまなび、法橋（ほつきょう）にすすむ。茶人の藤村庸軒（ようけん）愛用の香合（こうごう）に絵をつけたといわれる。1674年没。名は守次。通称は理兵衛。別号に釣雪。江戸前期の絵師

山本素堂（やまもと・そどう/生没年不詳）

江戸生れ。山本緑陰の次男。山本学半の弟。父に折衷（せつちゅう）学をまなび、「論語抄」をあらわした。江戸後期の儒者

山本 隆（やまもと・たかし/1949年～）

石川県生れ。1973年金沢美術工芸大学美術学科日本画専攻卒。西山英雄に師事。75年日展に初入選、86年特選。日春展、京展で受賞。京都画壇日本画秀作展、山種美術館賞展、菅橋彦大賞展等に出品。日展会友。日本画

山本太郎（やまもと・たろう/1974年～）

熊本県生れ。1999年日本の古典文学・芸能をベースに、現代風俗を融合させた「ニッポン画」を提唱する。これまで国内外で数多くの美術展に参加し、2015年には琳派400年を記念して明治～昭和に活動した日本画家・神坂雪佳との2人展「琳派からの道 神坂雪佳と山本太郎の仕事」を開催し、時代を超えた共演は大きな反響を呼んだ。近年は日本各地の地域に根差したプロジェクトを行うなど精力的に活躍の幅を広げている。日本画

山本探川・五代（やまもと・たんせん V/1721～1780年）

江戸時代から昭和時代の初期まで京都に続いた、狩野派の画系につながる山本家の五代目の絵師である。1755年法橋、69年法眼。山本家の絵師のうち、初代の宗泉については不詳であるものの、二代の素程と三代の素軒はともに狩野探幽に学び、とくに素軒については、宮中や公家の画用を務め、また光琳が若い時に師事したことが知られている。四代の宗川は、法橋・法眼となり、養父の跡を継いで宮中の用を務めているが、五代の探川（宗川の養子は、同じく法橋・法眼となっているものの、その画業は不詳である。六代の守礼・七代の規礼は、ともに円山応挙に学んでいる。このように山本家は、京都のそれぞれの時代の主要な画派や絵師と関係を持つことによって長く続いた画派で、探川を含む各絵師の作風についてはまだ検討すべき課題が多い。1780年没、59歳。江戸中期の山本家の絵師

山本直武・山本蘭村（やまもと・なおたけ・らんそん/1907～1977年）

東京生れ。文化学院卒。駿河台洋画研究所に学ぶ。藤田嗣治、野間仁根に師事。二科展に出品。1935年黒色会の設立に参加。35年津田洋画塾出身のオノサト・トシブ、野原隆

平、浅野恒、山本直武と4名で黒色洋画展を結成。38年二科会内の九室会に参加。個展中心に発表。67年日動サロン個展。新樹会会員。文化学院で指導に当たる。東京で没、70歳。
洋画

山本梅逸 (やまもと・ばいいつ/1783~1856年)

名古屋の彫刻師の家に生まれる。はじめ山田宮常、山本蘭亭らに画を学び、のち名古屋の豪商神谷天遊のもとに寄寓し、中林竹洞らと古画の模写・研究に努めた。22歳の時竹洞とともに京都に出るが、やがて諸国を巡って名古屋に戻り、尾張藩の御用絵師格に任ぜられた。尾張南画を代表する画人のひとりで、特に華麗な彩色の花鳥画を得意とした。1856年没、73歳。
江戸後期の絵師

山元文子 (やまもと・ふみこ/1921~1999年)

那覇生れ。1938年沖縄県立第二高等女学校卒。69年光陽会展(東京都美術館)で入選。81年「新生美術協会」設立、役員就任。94年沖縄県文化功労賞(美術)。1999年没、78歳。
洋画、機織り

山本亡羊 (やまもと・ぼうよう/1778~1859年)

京都生れ。山本錫夫(せきふ)、山本溪愚の父。儒医のかたわら本草学を小野蘭山にまなび、京都本草学の中心として活躍。自宅の読書室でおしえ、薬草園をつくり、物産会をひらいた。1959年没、82歳。著作に「百品考」「救荒本草記聞」など。
江戸後期の本草家、医師

山本美智代 (やまもと・みちお/1941年~)

大阪生れ。19歳より東京都在住。多摩美術大学平面デザイン科卒。雑誌表紙、造本デザインを1000冊以上手がける。舞台美術、国際扇面展、磁器制作、エッセイ執筆等、友情を大切に幅広い活動を展開。国内外での展覧会・講義多数。海外では特にポーランドとの親交が深い。画集「Silvering」(’70)、「Mirroring」(’75)、「全景・山本美智代の世界」(’96)、「本の造形」(’03)など。
雑誌表紙、造本デザイン、版画・水彩・ドローイング・コラージュ・紙の造形・舞美

山本六三 (やまもと・むつみ/1940~2001年)

神戸市生れ。1972年生田耕作の翻訳書の挿絵を手がけ、70年代にはサボト館や湯川書房が発行した限定本の挿画を担当する。2001年没、61歳。
版画、洋画、挿絵

山本基 (やまもと・もとゝい/1966年~)

広島県生れ。1995年金沢美術工芸大学卒。長年「塩」を用いたインスタレーションを制作。展示後は作品を鑑賞者とともに壊し、その塩を海に還すプロジェクトを実施。緻密な平面作品や企業とのコラボレーションも精力的に手がけている。主な展覧会に「First Steps: Emerging Artists from Japan」(MoMA PS1、ニューヨーク、2003)、「21世紀の出会い—共鳴、ここから」(金沢21世紀美術館、石川、2004~05)、「MOT アニュアル 2010:装飾」(東京都現代美術館)、「Mono No Aware: Beauty of Things」(エルミタージュ美術館、サンクトペテルブルク、2013~14)、「瀬戸内国際芸術祭 2016」など。個展に「山本基しるきもりへ—現世の杜・常世の杜—」(彫刻の森美術館、神奈川、2011~12)、「Return to the Sea」(Halsey Institute of Contemporary Art、チャールストン、Mint Museum、シャーロットほか米国を巡回、2012~14)。
インスタ、現代美術

山本行雄 (やまもと・ゆきお/1902年~1962年)

北海道生れ。1920年中学校卒業後に独学で油彩画を学び、20年二科展に出品入選。有島武郎の知遇を得、一時東京で川端画学校などに学んだ。第8回二科展に入選。この頃から中川紀元と交友を始めた。22年東京に居を定め、中川、神原泰、古賀春江らとともに二科会系の前衛美術団体「アクション」の創立同人。「アクション」解散後は横山潤之助らと「ヴェルム」を結成した他、二科展や中央美術展などに出品。30年山本御之の号で新興大和絵会展に出品。複数のペンネームで小説、演劇評を執筆する他、さまざまな事業を手掛けた。42年、大東亜戦争美術展に日本画を出品して、朝日新聞社賞。戦後は新制作展などに再び油彩画を発表する他、政治活動、各種の事業、小説、文芸雑誌の挿絵など多様な分野で活動した。1962年没、60歳。
洋画、挿絵

山本蘭亭 (やまもと・らんてい/1763~没年不詳)

1763年生れ。狩野友竹及び駒新の門人。作画期は文化から嘉永の頃にかけてで、天保の頃には浮世絵のほか、大須の真福寺、七ツ寺などの市中の神社仏閣の扁額を多く描いた。大須観音には毎年7月10日の夜に、太閤記の絵柄の大懸行灯を掲げた。90歳まで生きたといわれる。門人に鈴村景山、貝谷采堂、山本梅逸。
江戸後期の名古屋の絵師

山本力吉（やまもと・りきち/1898～1977年）

石川県生れ。彫師のもとで主に欄間制作を行う。池田瑞月に日本画を学び、金城画壇展に日本画を出品、入選する。1932年佐藤朝山に師事し、36年第1回帝国美術院展・再興第23回院展入選、以後院展に、また解散後は日展に木彫・塑像・乾漆等を出品。金沢美術工芸専門学校から大学まで講師をつとめる。1977年没、79歳。彫刻、美教

山本利兵衛（やまもと・りへえ/1688～1766年）

丹波の人で、宝永のころ京都に上り、吉文字屋某に漆工芸を学んだ。1746年桃園天皇即位に際し漆器を製作。1766年没、78歳。江戸中期の漆工

山本利兵衛・3世（やまもと・りへえ III（1770～1838年）

父に蒔絵まきえを、吉野元陳に狩野派の絵を学んだ。1817年仁孝天皇即位の調度に蒔絵を施し、また宮中の屏風(びょうぶ)に山水を描いたこともある。1838年没、68歳。江戸後期の漆工

山 六郎（やま・ろくろう/1897～1982年）

高知県生れ。京都高等工芸学校卒業後、中山太陽堂入社。1922年にプラトン社に出向し、4月より山が装丁・タイトルロゴ・扉絵等を担当した雑誌『女性』が刊行された。雑誌のほか、単行本の装丁など多彩な活動をした。戦後の高知帰郷後、美術の教育普及活動や県展などで活躍した。1982年没、85歳。イラスト、装丁

山脇晴雲（やまわき・こうん/1875～1945年）

鳥取県生れ。東京美術学校日本画科に入学し、狩野友信、高村光雲、のちに橋本雅邦に師事。日本絵画協会・日本美術院連合絵画共進会に入選・入賞。1896年の同校卒業後は、岡倉天心の勧めで石川県工業学校図案絵画科の教師。1900年東京に戻ったが、18年に再び金沢に戻り復職して教頭となり、27～35年校長をつとめた。画業では同校卒業生の沢村冬岳、玉井敬泉らと六耀会を結成し、日本画の研究と展覧会を開催するなど金沢の日本画の発展に貢献した。1945年没、69歳。日本画、美教

山脇東暉・紀 広成（やまわき・とうき/1777～1839年）

京都の人。松村月溪(げつげい)に入門し、四条派の画風をまなぶ。人物花鳥画を得意としたが、師の没後は仏画をこころざした。1839年没、63歳。江戸後期の絵師

山脇百合子（やまわき・ゆりこ/1941～2022年）

東京生れ。上智大卒。児童文学作家・中川李枝子の妹。学生時代から明るく楽しい挿絵を描きはじめる。姉と組んだ「いやいやえん」で1963年サンケイ児童出版文化賞・野間児童文芸推奨作品賞、「ぐりとぐらのおきやくさま」で67年児童福祉文化賞。他の作品に「なぞなぞえほん」「やまわきゆりこのあかちゃん日記」など。2013年中川李枝子とともに菊池寛賞。旧姓は大村。2022年没、81歳。絵本

八幡白帆（やわた・しらほ/1893～1957年）

東京生れ。平福百穂及び伊東深水の門人。文展や帝展に作品を出品した他、大正期に入ってから雑誌『新小説』の木版口絵や江見水蔭の単行本の木版口絵を描いており人物を大きく描く点が特徴であった。1957年没、64歳。日本画、口絵

ゆ

湯浅桑月（ゆあさ・そうげつ/1878～1929年）

徳島市生れ。謡曲家・湯浅小太由の次男。住吉派の佐香美古に日本画を学び、兄弟子に山本鼎湖、須木一胤がゐる。19歳の時大阪へ出て深田直城、中山芦月に師事した。さらに土佐、狩野、円山、南宗の諸大家と交流し、一派を立てる。1904年徳島に帰り、大工町に住み画筆を揮う。画風は新しい写生派の日本画で、人物、花鳥、山水、その他いづれも達筆、徳島県内に多くの作品が残っている。1929年没、52歳。日本画

湯川玉儼 (ゆかわ・ぎょくせん/1812～没年不詳)

岩手県生れ。「鷹図」の画題を得意とし、盛岡市法華寺などのほか、石鳥谷町内の寺院や個人宅に見られる。画家としてだけでなく教育の面にも尽力し、1871年から約一年間、八幡・好地・新堀・石鳥谷の四ヵ村を管轄する郡長を務め、以後は寺子屋の師匠として教育にあたった。七十余歳で亡くなった。江戸後期の盛岡藩の絵師、教育

湯川玉流 (ゆかわ・ぎょくりゅう/生誕年不詳～1808年)

岩手県生れ。狩野春信に絵を学び、特に人物画を得意とした。盛岡藩内のお抱え絵師の中でも郡を抜いていたと言われている。盛岡市永泉寺の「出山釈迦図」や同天満宮の「能図額」、同千手院の「愛染明王像」などの作品がある。1808年没。江戸後期の絵師

幸寿 (ゆき・ひさし/1911～2003年)

大分県生れ。早稲田大学中退後、独学で絵を学んだ。1936年独立展に入選。3年間出品。その頃はピカソの影響を受けていたが、したいにシュールレアリスムの画風にかわった。40年美術文化協会展に出品し、43年受賞し会員。56、57年2年間大分の精神病院に起居し「狂女シリーズ」を描いて特異な画風を確立。58年に新象作家協会の創立に参加。60年現代日本美術展に出品したのをはじめ東京、九州各地で精力的に個展開催。2003年没、92歳。洋画

幸松春浦 (ゆきまつ・しゅんぼ/1897～1962年)

大分市生れ。佐久間竹浦や秦米陽に南画を学んだ後、大阪に出て姫島竹外、さらに京都の水田竹圃に師事。1920年帝展に入選。第7、8回帝展で連続特選。以後無鑑査、推薦。日本南画院に出品していた中期には自然の情趣をよくとらえた写实的傾向の作品が多くみられる。後年には、新日本画の影響を感じさせる作品ものこしている。1962年没、65歳。日本画、南画

油野誠一 (ゆの・せいいち/1912～2009年)

大分県生れ。早稲田第二高等学院を病気で中退し、独学で絵を学ぶ。1942年独立美術協会展に入選、美術文化協会に入選。48年大分の前衛美術団体「スミレ会」の結成に参加。49年新制作協会展に入選。53年新作家賞。53年アートクラブ会員。56年秀作展、59

年「みつゑ選抜展」で2位を受賞。60年現代日本美術展に出品、61年「ACC展」で神奈川県立近代美術館賞。71、74年に渡欧。その他個展などで活躍。洋画

湯原和夫 (ゆはら・かずお/1930年～)

東京生れ。1957年東京芸術大学彫刻専攻科修了。58年新制作協会展で新作家賞。63年渡仏、以後数年おきに日本と欧米に滞在。65年パリ青年ビエンナーレに出品。67年グッゲンハイム国際彫刻展に出品。69年サンパウロ・ビエンナーレに出品。72年中原悌二郎賞で優秀賞。82年神奈川県立近代美術館で個展開催。彫刻

湯村光 (ゆむら・ひかる/1948年～)

鳥取県生れ。1971年東京芸術大学彫刻科卒。渡仏、国立パリ美術学校に留学～72年。75年行動美術協会展に出品、以後毎年出品、奨励賞2回、会友賞、安田火災美術財団奨励賞、行動美術賞。83年現代日本彫刻展で神戸須磨離宮公園賞、12回で神奈川県立近代美術館賞、第13回で宇部興産賞、第14回で東京国立近代美術館賞・埼玉県立近代美術館賞。85年ヘンリー・ムア大賞展で優秀賞。86年安田火災美術財団奨励賞展で優秀賞、第10回で銀賞。86年神戸須磨離宮公園現代彫刻展で土方定一記念賞、第11回で都立近代美術館賞。87年長野市野外彫刻賞。彫刻

由良哲次 (ゆら・てつじ/1897～1979年)

奈良市生れ。滋賀県立師範学校に進学。教員となり、大津市南尋常小学校で2年間の教員。1918年東京高等師範学校に入学した。東京高等師範学校で、三宅米吉と峰岸米造のもとで古代史と考古学を修めた。24年京都帝国大学哲学科に入学。西田幾多郎と田辺元に師事して哲学を修め、哲学雑誌「理想」に論文を発表。28年シベリア鉄道経由でドイツに留学。ベルリンでドイツ語を学んだ後、ハンブルク大学に入学。エルンスト・カッシーラーのもとで博士論文「精神科学と意志法則」を完成させる。このドイツ滞在中、ハイデッガーやフッサールを訪問。31年日本に帰国。東京高等師範学校で哲学を教えた。39年「政界往来」の懸賞論文に応募して第一席、近衛公爵賞。40年日本大学芸術科教授。国家主義哲学者としてナチス・ドイツに範を求め、日本固有の道德思想に基づく民族教育の徹底を主張していたが、日本の敗戦により教職を辞し、46年自宅に出版社「富士書店」を設立。戦後は在野の研究者として古代中世の日本史と近世の日本美術史に関する論文を執筆した。1979年没、82

歳。奈良県美にコレクション寄贈。日本史、美史、浮世絵蒐集家(コレ)

由里本出 (ゆりもと・いずる/1939年～)

京都生れ。1962年金沢美術工芸大学美術学科日本画専攻卒、堂本印象に師事。63年日展に入選。82, 85年特選。日春展、関西総合展、京展、京都画家協会選抜展で受賞。92年京都画壇日本画秀作展優秀賞。日展会友。日本画

10

よ

遥 山人・池田遙邨 (よう・さんじん、いけだ・ようそん/1895～1988年)

岡山県生れ。1910年大阪に出て、天彩画塾で洋画を学ぶ。14年文展で水彩画が入選。日本画に関心を持ち、小野竹喬をたよって京都に出て、竹内栖鳳に師事。21年京都市立絵画専門学校に入学。28, 30年帝展で特選。30～40歳代に全国を写生、53年画塾青塔社を設立。洋画風の写実表現から大和絵風の現代的な表現に移り、戦後は文人的な独自の画風を完成。76年日本芸術院会員、87年文化勲章。1988年没、93歳。水彩、日本画、洋画、パステル、画塾

楊洲周延 (ようしゅう・ちかのぶ/1838～1912年)

越後生れ。彰義隊とともに上野戦争、函館戦争に参加。国芳および三代豊国に画を学ぶ。後、豊原国周に師事。明治期にはかつての江戸城での武士や女官の生活を作品化し、「官女絵」と呼ばれる分野を確立した。当時の最新の風俗を細やかに描き、洋装美人や女学生など美人画においても著名であった1912年没、74歳。幕末-明治期の浮世絵師

横井金谷 (よこい・きんこく/1761～1832年)

滋賀県生れ。京都金谷山(きんこくさん)極楽寺の住職で、金谷上人とよばれた。与謝蕪村の画風をまなんだとされる。諸国を旅したのち名古屋にすみ、ずからの放浪と奇行をかめた「金谷上人御一代記」をのこす。金谷焼とよばれる陶器もつくった。1832年没、72歳。江戸中期-後期の画僧、陶芸

横尾深林人 (よこお・しんりんじん/1898～1979年)

新潟県生れ。小坂芝田(しでん)、小室翠雲らに学んだ。日本南画院展などに出品したのち、1918年文展入選。1929年帝展で特選。61年現代日本墨画海外展に出品した。1979年没、81歳。日本画

横尾龍彦 (よこお・たつひこ/1928～2015年)

福岡県生れ。東京藝術大学日本画科卒。1965年シトー会修道院より奨学金、渡欧、中世美術の研究を行う。72年、イタリア、ローマに滞在。75年からは、古典油彩技法研究のため、ベルギー、ドイツへ旅行、ウィーンに滞在。77年ドイツ、スペインにてボッシュに傾倒、78年シュタイナー研究の高橋巖セミナーに参加。80年ドイツへ移転、オスナブリュックに居住。85年ケルン郊外に居住し、ベルリンと秩父にアトリエ。98年春秋社より画集「横尾龍彦 1980-1998」を刊行。2004年ベルリン市主催により、シャルロッテンブルグ宮殿にて個展。2015年没、87歳。美研、洋画

横尾芳月 (よこお・ほうげつ/1899～1990年)

福岡県生れ。郷里の四条派画家西村草文に、画のほだきを受ける。1917年に上京、本格的に池田輝方の下で修行を重ね、帝展などに出品する。また、大和絵の技法を鶯谷龍岬に、輝方の没後は、深水にそれぞれ師事して浮世絵と大和絵の技法を交えて、清楚さと気品が漂う美人画を展開した。1990年没、91歳。日本画

横河民輔 (よこがわ・たみすけ/1864～1945年)

兵庫県生れ。1889年帝国大学工科大学造家学科建築学卒。三越本店や旧帝国劇場などの建築にたずさわった。現在の横河電機、横河ブリッジホールディングスなど横河グループの創設者。中国陶磁の収集家としても世界的に著名。新石器時代から清時代(1644～1912)まで、さまざまな種類の土器・陶磁器を体系的に集め、質・量と

もに世界最大規模のコレクションを築きあげました。その総数は5000点に及んだとも伝わり、厳選されたおおよそ1100点が1932年東京帝室博物館(現在の東京国立博物館)に寄贈。1945年没、81歳。**土器・陶磁器のコレクター**

横須賀幸男 (よこすか・ゆきお/1954年～)

水戸市生れ。1976年茨城県芸術祭美術展覧会出品(以後3回出品)。78年茨城大学教育学部美術専攻卒。県立高等学校で教鞭。84年個展(コバヤシ画廊、東京)開催。個展多数。90年「10月展(水戸芸術館現代美術ギャラリー)出品。2005年「われらの時代」(水戸芸術館現代美術ギャラリー)出品。2006年「ダイアログ展」(茨城県立県民文化センター)出品。14年「第8回現代茨城作家美術展」出品。15年「6つの個展」(茨城県近代美術館)出品。**洋画、美術教**

横田仙草 (よこた・せんそう/1895～1962年)

東京生れ。早稲田実業学校卒。五島耕畝や織田観潮に日本画の手ほどきを受ける。京都を経て1922年大阪・高島屋宣伝部にこつとめるが、2年ほどで帰京、小林古径に師事、また速見御舟に指導を受ける。日本美術院院友、院展などに入選を重ねる。1962年没、67歳。**日本画**

横田 稔 (よこた・みのる/1942年～)

長崎県生れ。プライベート出版社「草原社」を主宰し、エッチング等の版画が入った本を出版。1977年『月光とピエロ』(詩・堀口大樹／草原社)でライプチヒ国際図書展イラストレーション部門銅賞、82年『はなののびるおさま』(福武書店)で同展絵本部門銀賞を受賞(本データはこの書籍が刊行された当時に掲載されていたものです)。**版画、イラスト、絵本**

横山雲南 (よこやま・うんなん/1813～1880年)

1813年生れ。父の医師・宗甫について儒学を修めた。また、易学、彫刻、詩書、歌をよくした。画は堀江友声の門に入って学んだが、たまたま風外禪師が来遊した際に画法を習い、南画に転じた。1838年に京都に出て貫名海屋の門に入った。江戸に遊び、椿椿山、松岡環翠、福田鳴鷺らと交遊した。59年江戸から京都に行き、山水画家として称賛された。1880年没、68歳。**江戸後期-明治の絵師、南画**

横山華山 (よこやま・かざん/1781～1874年)

京都出身(越前出身説あり)。福井藩松平家の藩医の家に生まれる。白井華陽著『画乗要略』によれば、西陣織業を営む横山家の分家横山惟馨の養子となり、本家が支援した曾我蕭白に私淑。始めは養父の師である狩野派の絵師江村春甫や村上東洲(こつ)いたとされるが、直接師事した形跡はなく、養父惟馨から学んだと推測される。長じて岸駒に師事、のちに円山応挙や四条派の呉春の影響を受けた。一般に絵師は晩年になると筆力が衰えるとされるが、華山は例外で最晩年に至るまで雄渾な大作を手がけている。本画以外にも、俳諧摺物も手がけている。1874年没、93歳。**江戸後期の絵師**

横山清暉 (よこやま・せいき/1792～1864年)

1792年生れ。松村景文の弟子で、中島来章、岸連山、塩川文麟らと共に、幕末画壇の「平安四名家」と評された。1864年没、72歳。**江戸後期の絵師**

横山豊介 (よこやま・とよすけ/1930～2023年)

富山県生れ。1952年金沢美術工芸短期大学彫刻科卒。在学中の49年日展入選、67、68年日展で特選。70年日展菊華賞。75年富山県文化功労賞。83年日展評議員。91年地域文化功労者文部大臣表彰。2010年日展で文部科学大臣賞。井波彫刻でも活躍し、作品は木彫、塑像、陶など多彩である。2023年没、93歳。**彫刻、木彫、陶芸**

横山津恵 (よこやま・つえ/1916～2007年)

秋田市生れ。1936年秋田県女子師範学校卒、小学校教諭となる。46年から高橋萬年に師事し、51年日本美術院展に入選。以後出品を続け、54年院友、73年特待。56年には文部省内地研究員として東京芸術大学日本画科前田青邨教室に学んだ。萬年没後59年からは郷倉千靱に師事。75年「日本画の女流展」(山種美術館)、80年「日本画の裸婦展」(毎日新聞社主催)などに出品される。81年「第6回山種美術館賞展-今日の日本画-」に出品。52年秋田大学に勤務し、74～82年教授。62年からは日本画研究会<恵花会>を主宰し後進の指導に当たっている。76年秋田県芸術選奨受賞、78年秋田県文化功労者表彰。88年地域文化功労者として文部大臣表彰。93年「横山津恵日本画展」(秋田県総合生活文化会館)が開催された。2007年没、91歳。**日本画、美術教**

横山守寿・竹林斎（よこやま・もりとし/生誕年不詳～1781年）

土佐高知藩に足軽としてかかえられ、江戸で狩野探常(かのうたんじょう)の門にはいる。帰藩後、絵師となり、延享2年高知城二の丸新築にあたり桜の間のふすま絵をえがいた。1781年没。**江戸中期の絵師**

横山隆一（よこやま・りゅういち/1909～2001年）

高知県生れ。横山泰三の兄。高知城東中学卒。1932年近藤日出造、杉浦幸雄らと新漫画派集団(現漫画集団)を結成。36年から「朝日新聞」に連載の「江戸ッ子健ちゃん」は「フクちゃん」とあらためられ、戦後は「毎日新聞」にひきつがれて46年までつづいた。アニメーション映画も製作。94年文化功労者。2001年没、92歳。**漫画、アニメ**

横山了平（よこやま・りょうへい/1933年～）

満州国生れ。(山形県出身)。1955年独立展に出品。56年東京芸術大学卒、同校副手。58年春陽展に出品。61年春陽会賞。63年春陽会会員。66年安井賞展に出品(東京国立近代美術館)。68年安井賞展に出品(西武美術館)。75年セントラルサロンにて個展。99年自選展(東京国際美術館)。東京学芸大学名誉教授。**洋画、水彩、美教**

与謝野晶子（よさの・あきこ/1878～1942年）

大阪生れ。旧姓鳳(ほう)。本名しよ。堺女学校卒。1900年与謝野鉄幹の新詩社の社友となり《明星》に短歌を発表。翌年処女歌集《みだれ髪》を出して世の注目を集めた。同年鉄幹と結婚、《明星》の中心的存在となった。初期の情熱的な歌風は次第に唯美的・幻想的となり、《小扇》、《毒草》(鉄幹と共著)、《恋ごろも》(山川登美子らと共著)、《舞姫》などの歌集を出した。日露戦争中の反戦的な詩《君死にたまふことなかれ》も反響を呼んだ。また古典の現代語訳を試み《新訳源氏物語》を刊行。大正期には広く女性問題、社会問題等の評論にも活躍、《青鞥》運動を助けたり、母性保護論争に参加するなどした。遺歌集《白桜集》がある。1942年没、64歳。**歌人、洋画、朱葉会命名者**

吉井信夫（よしい・のぶお/1940年～）

福島県生れ。日本水彩画会 第59回 福島県総合美術展 美術奨励賞。第53、54、55回

福島県水彩画展 特選。第96回日本水彩画会展 石井賞(第97回展 奨励賞)。第75、77回 福島県美術協会展 特選。第85～90回 白日会 入選 個展(ギャラリー岩田)。日本水彩画会 会友、県水彩画会会員、県美術協会会員、アブドゥの会・卯月会・会津美術協会委員。**水彩**

吉岡逸成（よしおか・いっせい?/1872～1933年）

高知県生れ。1897年高知師範学校卒。古屋紫竹に南画を、柳本素石に四条派を学んだ。上京後は下村観山に師事し、また梶田半古にも学んだとされる。高知市立第四小学校などの小学校に勤務した。壬生水石の顕彰に尽力し、『壬生水石印譜集』を刊行した。1933年没、61歳。**日本画、美教**

吉岡徳仁（よしおか・とくじん/1967年～）

佐賀県生れ。1986年桑沢デザイン研究所卒。倉俣史朗と三宅一生のもとでデザインを学び、2000年吉岡徳仁デザイン事務所を設立。グローバル企業のデザインを数多く手がけ、ISSEY MIYAKEをはじめ、カルティエ、スワロフスキー、ルイ・ヴィトン、エルメス、TOYOTAなどと、コラボレーション。毎年イタリアで開催されるミラノサローネ国際家具見本市(Salone del Mobile Milano)でKartell、Moroso、Glas Italia、Driadeなどの家具ブランドと新作を発表。作品は、ニューヨーク近代美術館、ポンピドゥー・センター(国立近代美術館)、ヴィクトリア・アンド・アルバート博物館所蔵。アメリカ Newsweek 誌による「世界が尊敬する日本人 100人」に選出。Design Miami/Designer of the Year、Elle Deco International Design Awards/Designer of the Year、Maison & Objet/Creator of the Year 受賞。**デザイナー、建築、現代美術**

吉加江 清（よしがえ きよし/1909～1993年）

宮崎市生れ。後に京司(きょうし)としても活躍する。1932年津田青楓洋画塾に入塾、画塾解散後は独立美術京都研究所に参加する。35年に設立した新日本洋画協会にも参加。38年独立美術協会展に入選。40年美術文化協会の会員。45年戦況の悪化により宮崎に帰郷、高岡町で疎開生活を送る。46年宮崎出身の瑛九らとともに宮崎美術協会を設立。1993年没、84歳。**洋画、美教**

吉賀大眉（よしか・たいび/1915～1991年）

山口県生れ。東京美術学校彫刻科卒。萩焼作家協会会長、山口芸術短期大学教授を務

めた。1971年日本芸術院賞。82年日本芸術院会員。86年勲三等瑞宝章、90年文化功勞者。1991年没、76歳。陶芸、美教

吉川一溪 (よしかわ・いつせい/1763～1837年)

愛知県生れ。父吉川養悦にまなび、仏画を描いた。門人に森高雅、小島老鉄、大石真虎(まるとら)、渡辺周溪らがいる。1837年没、75歳。江戸中期-後期の絵師

吉川華優 (よしかわ・かづゆう/1932年～)

金沢市生れ。1952年金沢美術工芸短期大学日本画科卒。65年日展工芸部染色部門で入選、68年洋画に転じて宮本三郎に師事し、二紀展に出品する。77年渡欧、78年スイスビエンナーレ展出品。81年フランスソシエテ・ナショナル・デ・ボザール展入選。日本画、洋画

吉川観方 (よしかわ・かんぼう/1894～1979年)

京都生れ。8歳で四条派の西堀刀水に絵を学び、また浮世絵研究を始め、中学校卒業後役者似顔の小版画づくり、1914年京都市立絵画専門学校予科に入学し、在学中木版役者絵を刊行。同じく在学中の17年文展に入選、18年絵専本科を卒業。18年松竹合名会社に入社し、舞台意匠顧問となった。20年同校研究家を卒業し、21年前回りに引つぎ浮世絵を刊行。25年より故実研究を中心に風俗研究及びその資料蒐集をすすめ晩年に至る。主著「観方創作版画集」「衣服と紋様」上、下「2600年風俗図史」「写真日本風俗史」三巻ほか。72年奈良県文化会館で作品展。浮世絵などの近世絵画、染織をはじめとする工芸品など約2,000点からなります。江戸から明治にかけての服飾史・風俗史をたどることができるコレクションで、当館(奈良県立美術館)設立のきっかけとなりました。京都で没、84歳。版画、日本画、美研、コレクター

吉川恍陽 (よしかわ・こうよう/1914～1991年)

1937年東京写真研究会展初入選、38、39、40年受賞。41年審査員。42年モダンアート協会展初入選、57年会員。63年日本前衛美術展(ニューヨーク)招待。67、70年大樋年郎・吉川恍陽・勝本富士雄三人展(版画)。モダンアート協会北陸支部長、石川県美術文化協会常任理事、北国写真連盟理事長等を歴任、石川県の写真界を牽引した。1991年没、75歳。写真、版画

吉川素竹 (よしかわ・そちく?/生没年不詳)

絵金の弟子だった吉川金太郎の孫。父の馬太郎は紺屋。幼いころから画を好み、祖父の友人・彼末堤馬に学んだのち、柳本素石に師事して「素竹」の号をもらった。紺屋のかたわら日本画を描き、土陽美術会などに出品した。日本画

吉川英信 (よしかわ・ひでのぶ/1726～1801年)

愛知県生れ。知信の子なり。画法を父に受けて、家業と為す。尾張藩の絵師。1801年没、76歳。江戸中期-後期の絵師

吉川陽一郎 (よしかわ・よういちろう/1955年～)

鹿児島県生れ。1980年多摩美術大学美術学部彫刻学科卒。1996～2002年Bゼミスクーリングシステム講師。01～07年 武蔵野美術大学造形学部彫刻学科非常勤講師。07年多摩美術大学美術学部彫刻学科非常勤講師。17年「平成29年度彫刻学科教職員展」多摩美術大学彫刻棟ギャラリー(東京)、「うたげと孤心 連画のいざない II」Art Studio DANGEON(東京)。16年「横浜の森美術展9」横浜動物の森公園予定地(神奈川)、「第9回 GAW展 路地から路地へ 2016 in 日坂」(静岡)彫刻、美教

芳澤一夫 (よしざわ・かずお/1954年～)

神奈川県生れ。東京セントラル美術館日本画大賞展、上野の森美術館絵画大賞展、第三文明展、ブロードウェイ新人賞展等、公募展、コンクール展にて入選・入賞。文部省選定教科書の表紙、日本の歳時記(小学館刊)巻頭エッセイ大岡信氏の口絵担当等、多くの書籍に作品が使われる一方、さだまさし氏のジャケット画、小田原駅内のスタンドグラス原画制作、立花学園創立80周年記念壁画制作、小田原市・白秋の道タイル原画制作など多方面で活躍。洋画、表紙絵

吉澤雪庵 (よしざわ・せつあん/生誕年不詳～1889年)

江戸生れ。遠坂文雍とおざか-ぶんようの門にまなび、山水・花鳥を得意とした。1889年没、八十余歳。江戸後期-明治の絵師

吉澤美香 (よしざわ・みか/1959年～)

東京生れ。多摩美術大学卒、大学院進学し絵画を学ぶ。横浜市民ギャラリーや世田谷美術館でのグループ展の出演、東京日本橋の駒井画廊で個展の開催。20代にして、世界的な美術の祭典であるドクメンタ8(ドイツ、カッセル)やサンパウロ・ビエンナーレに出展。港区にあるギャラリーアートアンリミテッドの所属作家であるほか、現在は、多摩美術大学の油画専攻の教授。洋画、インスタ、美教

吉澤照子 (よしざわ・てるこ/1929年～)

東京生れ。1951年東京美術学校日本画科卒。安田靫彦、小林古徑、奥村土牛らに学ぶ。58年院展奨励賞(以後13回受賞)。山種美術館賞展、現代の女流画家展に出品。87年前田青邨賞。日本美術院招待。日本画

吉田朝太郎 (よしだ・あさたろう/1902～1978年)

京都生れ。京都絵画専門学校で日本画を学ぶが、在学中に鳥瞰図で活躍していた吉田初三郎を知り、師事。1932年師とともに十和田取材の途中、鮫の石田屋に宿泊したのを機に、八戸種差に居を構え、京都の師との間を往来する生活を44年まで続けた。京都で没、76歳。日本画

吉田稼雲 (よしだ・からん/1827～1875年)

愛知県生れ。兄の吉田蘇川(そせん)とともに詩画を学び、幕末期藤本鉄石に従って北濃はじめ各地を歴遊、名を広めた。門人には石川柳城・森半逸などがあり、一宮出身の漢詩人森春濤とも交遊が厚かった。1875年没、48歳。江戸後期-明治期の書画

吉田嘉三郎 (よしだ・かさぶろう/1861～1894年)

大分県生れ。版画家の吉田博の義父であり、先祖代々続く芸術家一家「吉田ファミリー」の祖。1889年～92年、福岡県立尋常中学修猷館の教諭を務めた。著書に「大成習画帖」など。1894年没、33歳。洋画

吉田貫三郎 (よしだ・かんざぶろう/1909～1945年)

兵庫県生れ。神戸商業卒。1932年横山隆一らの新漫画派集団に参加。挿絵に転じ、怪

奇推理小説、現代小説、時代小説手がけ、代表作に吉川英治「大都の春」、久生十蘭「魔都」等。中国で没、37歳。挿絵

吉田克朗 (よしだ・かつろう/1943～1999年)

埼玉県生れ。多摩美術大学で斎藤義重に師事する。1968年現代日本美術展に初入選し、「モノ派」の作家の1人として注目を集め、70年パリ青年美術家ビエンナーレに出品。73年文化庁派遣在外研修員として渡米。1970年代から版画制作も始め、70年ソウル国際版画ビエンナーレ東亜大賞。その他東京、リュブリアナ、クラコウなどの国際版画ビエンナーレに多数出品。風景や人物のスナップショットを用い、自らのイメージを表現。1999年没、56歳。版画、モノ派

吉田曉禾 (よしだ・ぎょうこ/1917～1995年)

水戸市生れ。1932年後藤良に師事。1947年日展で入選。48年茨城県美術展に招待出品。50年茨城県彫刻家協会結成に参加。51年茨城県美術展で教育長賞。53年第8回展、54年第9回展で審査員。66～72年マロン・ギャラリー(水戸)で個展。73年タキタ画廊(水戸)で個展。水戸で没、78歳。彫刻

吉田公均・広均 (よしだ・こうきん/1804～1880年)

富山県生れ。京都に上り、紀広成、山脇東暉に師事し、広均と号す。広成の死後に広均と号し、のち松村景文に師事する。また貫名海屋に南画を学ぶ。1856年御所學問所の杉戸に描いた『花車図』は、孝明(こうめい)天皇の意にかなったという。中国風の彩色方式を取り入れた写生画を得意とした。1880年没、76歳。日本画

吉田清志 (よしだ・きよし/1928～2010年)

盛岡市生れ。1950年東京藝術大学美術学部油画科入学、梅原龍三郎教室に学ぶ。58年国画家新人賞、62年会員。62年盛岡市の川徳デパートの画廊で個展を開く。以後、東京のほか盛岡でも個展多数。82年日本大学芸術学部絵画研究所教授。88年京から岩手県紫波町に転居。2010年没、82歳。洋画、美教

吉武研司 (よしたけ・けんじ/1948年～)

佐賀市生れ。東京藝術大学大学院修了。1984、85年「独立展」独立賞。明るい色彩と自由な造形により、暖かく、エネルギー溢る画面が生まれる。95年青木繁大賞展奨励賞。2010年女子美術大学教授、独立美術協会会員。洋画、美教

吉田公均 (よした・こうきん/1804～1876年)

富山県生れ。京都で山脇東暉(とうき)らにまなび、貫名海屋(ぬきなかいおく)について文人画をおさめた。花鳥山水を得意とし、京都御所が新築されたとき、学問所の杉戸に「花車図」をえがいた。1876年没、73歳。江戸後期-明治の絵師、文人画

吉田秋光 (よした・しゅうこう/1887～1946年)

金沢市生れ。1905年石川県立工業学校図案絵画科卒業、10年東京美術学校日本画科卒業。寺崎広業の薫陶を受ける。17年第11回文展に初入選、以後同展・帝展・新文展に入選を重ね、22年特選受賞。結城素明らと日本画院同人として活躍。一時期金城画壇特別会員として出品する。山形県で没、59歳。日本画

吉田璋也 (よした・しょうや/1898～1972年)

鳥取市生れ、新潟医学専門学校卒、医師。学生時代より白樺派の文学芸術活動に憧れ、校友らと共に雑誌『アダム』を創刊し、白樺派の柳宗悦の知遇を得て民藝運動に参加。吉田璋也は柳宗悦が見出した民藝の美を現代の日常の生活に取り入れることを願い、31年故郷で医院を開業すると同時に新たな事業を起します。日常の生活雑器を作っていた牛ノ戸窯で、その伝統を生かしながら自ら新しくデザインしたものを指導し製作させ、更に陶芸のみならず木工・金工・竹工・染織・和紙など多岐に渡る工人を指導し、デザイン・生産・流通・販売・消費に至る組織を作り上げたのです。工人の集団として「鳥取民藝協団」を、販売組織として「たくみ工芸店」等を次々と設立しましたが、これらの先駆的な活動は後になって新作民藝運動と呼ばれ、吉田璋也は「民藝のプロデューサー」を自認。1949年鳥取民藝美術館を創設。1972年没、74歳。民芸、デザイナー、民藝美術館

吉田誠子 (よした・せいこ/1946年～)

札幌市生れ。1978～99年独立展出品。79～99年女流画家協会展出品。86、87、88

個展(ギャラリーセンターポイント)。89、98、99年現代日本美術展。91、93、95年村松画廊で個展。独立美術協会会友。洋画

吉田大象 (よした・たいぞう/1920～2009年)

東京生れ。1943年東京藝術大学彫刻科卒。新制作展入選。60年新制作協会会員。63年上野学園ホール壁面にレリーフ制作設置。80年鳥取市文化センターホールに「早春像」設置。81年同上センターに「足跡像」「海風像」制作設置。83年東郷中学校(鳥取)に立像制作設置。86年個展(鳥取大学退官記念)鳥取大丸美術画廊。2009年没、89歳。壁画、彫刻

吉田 隆 (よした・たかし/1953年～)

石川県生れ。1975年金沢美術工芸大学彫刻科を卒業。同校研究科を経てイタリアへ留学。国立ローマアカデミア、クロチェッティ教室に学び、85年帰国。美ヶ原高原美術館の第2回ロダン大賞展で箱根彫刻の森美術館賞。アルパ(竖琴)をモチーフとし、神話的な人物像に特徴。彫刻

吉谷華圃 (よしたに・かほ/1882～1961年)

金沢生れ。12歳のとき、南画家の岸浪柳溪に師事する。1903年養母が亡くなり、師の後を追って横浜に出る。横浜では、原三溪をはじめ当地の財界・文化人の援助を受け制作。寺院の依頼による仏画を描いたほか、平安時代以降の仏教絵画の模写を数多く行った。また、横浜の古美術の調査にも貢献した。関東大震災の折には、金沢に帰郷し地元の古美術を調査。43年横浜市民博物館評議会評議員。1961年没、79歳。日本画、模写

吉田初三郎 (よした・はつさぶろう/1884～1955年)

京都生れ。友禅図案の工員として奉公した後、洋画家を目指して関西美術院長の鹿子木孟郎に入門。パリ帰りの鹿子木から商業美術を勧められ、鳥瞰図を描き始めたとされる。絵画工房・観光社を経営、観光地図やポスターなどを制作。鳥瞰図の観光地図だけでも1000種類以上を残し、「大正の広重」として知られた。1999年親交のあった知多自動車創立者の一人・内田佐七宅で観光地図や雑誌「旅と名所」など遺作約200点が見つかる。弟子に金子常光。1955年没、71歳。鳥瞰図の観光地図、八戸市に街かどミュージアム

吉田半兵衛 (よしだ・はんべえ/生没年不詳)

京都の人で、上方版の大衆向け出版物に挿絵を描き、貞享(じょうきょう)から宝永(1684～1711)のころに活躍した。ことに井原西鶴との共作が目され、その浮世草子の名作『好色五人女』『好色一代女』(ともに1686)や『日本永代蔵(こっぽんえいたいぐら)』(1688)などに生彩に富む風俗描写を提供した。ほかに『好色訓蒙図彙(きんもうざい)』(1686)、『女用(おんなよう)訓蒙図彙』(1687)などの木版絵本もある。江戸中期の上方の浮世絵師、挿絵、絵本

吉田富士夫 (よしだ・ふじお/1929～2001年)

金沢市生れ。1921年石川県立工業学校図案科卒業。22年日本硬質陶器株式会社図案科入社。24年二紀展入選、25年同展佳作賞、26年同展褒賞、宮本三郎に師事。29年から4年間陶芸技術が評価されてスペインに招かれ指導。44年二紀会会員。45年以降二紀会北陸支部長。51年第30回記念二紀展宮本三郎賞、55年二紀展文部大臣賞。90年同展菊華賞94年栗原賞、96年第50回記念賞。二紀会評議員。2001年没、72歳。洋画

吉田芳明 (よしだ・ほうめい/1875～1943年)

東京生れ。彫刻家・吉田白嶺の弟。島村俊明に牙彫、木彫を学ぶ。島村俊明から彫刻を学んだ吉田芳明は東京彫工会や日本美術協会などに作品を出品し、1924年帝展審査員。高い技術力から日本木彫作家最後の人と言われている。1943年没、69歳。彫刻

吉田正浪 (よしだ・まさなみ/1936～2011年)

広島県生れ。1963年広島大学美術科卒業 新制作展初入選。67、77年新制作展で新作家賞。78年新制作協会会員、受賞作家展(銀座)。81年新制作協会の会員、受賞作家展(銀座)。82年比沼山女子短期大学教授(～'07年)。2005年ひろしま文化賞受賞。07年広島県教育賞受賞。2011年没、75歳。彫刻、美教

ヨシダミナル (よしだ・みのる/1935～2010年)

大阪生れ。1959年京都市立美術大学西洋画科卒。モダンアート展や個展で絵画作品を発表した。65年白髪一雄を介して具体美術協会に参加し、会員。66年現代日本美術展でコ

ンクール賞。同年、ヨシダミナル個展(グタイピナコテカ)。67年日本国際美術展で大原美術館賞。67年ステンレス、プラスチック、蛍光塗料などの新素材を駆使した立体作品に転じた。70年代渡米し、7年間ニューヨークに住む。在米中は《シンセサイザー・ジャケット》を着用したパフォーマンスなど、音響や身体による表現に移行した。2010年没、75歳。洋画、具体、立体、パフォ

吉田芳明 (よしだ・ほうめい/1875～1943年)

東京生れ。彫刻家・吉田白嶺の弟。島村俊明に牙彫、木彫を学ぶ。島村俊明から彫刻を学んだ吉田芳明は東京彫工会や日本美術協会などに作品を出品し、1924年帝展審査員。高い技術力から日本木彫作家最後の人と言われている。1943年没、69歳。彫刻(木彫)

吉田柳外 (よしだ・りゅうがい/1878～1942年)

岐阜県生れ、1894年美術肖像画を専門に創業、1909年京都美術肖像画学校を開設して今日に至った。京都で没、64歳。洋画(肖像画)

吉嗣鼓山 (よしつぐ・こざん/1879～1957年)

吉嗣梅仙ら先代によって築かれた南画の系譜を継承し、その作品は太宰府天満宮等に伝わっている。1957年没、78歳。南画

吉嗣拝山 (よしつぐ・はいざん/1846～1915年)

福岡県生れ。南画家吉嗣樸(偃梅仙)の子として生まれる。日田の広瀬青邨に漢学を習い、さらに1867年京都に上り、中西耕石について南画を学ぶ。維新後、倉敷県令となるが翌年上京。大学昌平校に通学のかたわら、亀谷塾で塾生の世話にあたる。71年台風による災害で右手を切断し、これを機に画道に専念する。77年には中国に渡り南画の研鑽を積む。地方の名家として名をなした。1915年没、69歳。江戸後期-明治の絵師、南画

吉富朝次郎 (よしとみ・あさじろう/1868～1941年)

岡山県生れ。幼少時堀和平が油絵を描くのを見て興味を抱き、1885年京都府画学校に入学。89年に卒業した後、岐阜の大垣中学校、岐阜師範学校で教鞭をとる。1907年岡山県男子師範学校に転任、写生を重視した美術指導に尽力した。牛を得意とし、水彩画・油

絵のほか、40歳頃から洋画風の南画を研究し新機軸をだす。31年退職後は仏画や文人画の制作に熱中した。号を観石という。1941年没、73歳。美教、洋画、水彩、仏画、文人

吉野朔実 (よしの・さくみ/1959～2016年)

大阪生れ。短期大学卒業。1980年「ウツよりソウがよろしいの!」(『ぶけ』、集英社)でデビュー。85年「少年は荒野をめざす」(同上)が本格的連載。88年「ジュリエットの卵」(同上)、91年毎月50頁のオムニバスの連載「いたいけな瞳」(同上)、93年心理カウンセラーの女性と双子の男性を軸にした「エキセントリックス」(同上)などで人気を不動とする。小学館のメディアに発表を続け、2001年大学卒業後就職しない女性1名、男性2名の関係を描いた「瞳子」(『週刊ビッグコミックスピリッツ』)、03年現代の家族をテーマにした「period」(『月刊IKKI』)は、14年までの長期連載。2016年没、57歳。漫画

芳野満彦 (よしの・みつひこ/1931～2012年)

東京生れ。旧制の早稲田中学校入学。1948年早稲田中学2年の17歳のとき八ヶ岳の主峰赤岳で遭難して両足指をすべて欠くが、不屈の精神で登山を続けた。57年の前穂高岳IV峰正面壁積雪期初登攀など多くの初登攀を記録。日本の登山家・RCC IIの創立同人・画家。63年大倉大八とともにアイガー北壁に日本人として初挑戦。65年渡部恒明とともにマッターホルン北壁の日本人初登攀を達成し、アルプスの岩峰への先鞭をつけた。新田次郎の小説『栄光の岩壁』の主人公のモデルである。一方で、画家としても活躍。2012年没、80歳。版画、登山家

吉野もも (よしの・もも/1988年～)

東京生れ。2012年多摩美術大学油画専攻卒。14年にロイヤルアカデミースクール(イギリス)での交換留学を経て、15年東京藝術大学大学院油画専攻修士課程を修了。視覚的なかまけを利用し、目前まで迫るようなトリッキーな平面作品や、二次元の絵が周囲の環境と干渉し合い、非日常の異空間を発生させる絵画インスタレーションを手がけている。近年の個展に、「being」(rinartassociation、群馬、2018)、「Link」(美術画廊 功 館内、西武渋谷店、東京、2017)、「Metamorphose」(SHOWROOM、台北、2017)など。「台湾・日本・現代絵画の未来と可能性」(東京藝術大学大学美術館 陳列館、2016)、「黄金町通路 再訪」(高架下スタジオ Site-A ギャラリー、神奈川、2014)。現代美術、洋画、インスタ

吉水快聞 (よしみず・かみもん/1982年～)

奈良県生れ。東京芸術大学美術学部彫刻科卒。学士(美術)の学位を取得。東京芸術大学大学院美術研究科文化財保存学専攻にて、快慶作東大寺俊乘堂阿彌陀如来立像の想定復元模刻研究を行う。2011年博士(文化財)の学位を取得。卒業後は仏像制作や文化財修復に携わりながら、その技術や技法を応用し、動植物をモチーフとした木彫作品を発表。大正大学客員教授、龍谷大学非常勤講師を兼任し、浄土宗の僧侶でもある。22年個展「吉水快聞展—幻夢—」高島屋 東京日本橋、大阪、京都、横浜、名古屋。彫刻、仏師、文化財修復家、僧侶、美教

吉村佳映 (よしみら・かえい/1942年～)

東京生まれ。1952年版画グランプリ展賞候補。59年版画日動展。62年日動画廊にて個展。以降、個展多数。静寂で神秘的な内なる光明と闇を表現。版画

吉村和敏 (よしみら・かずとし/1967年～)

松本市生れ。高校卒業後、東京の印刷会社で働く。退社後、1年間のカナダ暮らしをきっかけに写真家としてデビューする。絵心ある構図で光や影や風を繊細に捉えた叙情的な風景作品、地元の人の息づかいや感情が伝わってくるような人物写真は人気が高い。2003年カナダメディア賞大賞。07年日本写真協会賞新人賞。15年東川賞特別作家賞。写真集に『プリンス・エドワード島』『フランスの最も美しい村 全踏破の旅』(講談社)、『BLUE MOMENT』『MORNING LIGHT』(小学館)、『光ふる郷』(幻冬舎)、『あさ／朝』(アリス館)、などがある。写真

吉村孝敬 (よしみら・こうけい/1769～1836年)

1769年生れ。吉村蘭洲の長男。円山応挙に学び、花鳥・人物画にすぐれた。応挙門十哲の一人。西本願寺の本如(ほんにょ)に仕え、同寺に障壁画が伝わる。1836年没、67歳。江戸後期の絵師

吉村周山 (よしみら・しゅうざん/生誕年不詳～1776年)

大坂生れ。狩野派の牲川充信(にまなぶ。根付け彫刻で知られ、中国の「山海経(せんかい)

きょう)などの神話・伝説からとった怪奇な題材をヒノキの古材にほり、彩色した。1776年没。

江戸中期の絵師、根付(ねつけ)師、木彫

吉邨二郎 (よしむら・じろう/1899～1942年)

長崎県生れ。1922年東京美術学校図案科卒。22年二科展に入選。22年中川紀元、神原泰、古賀春江らとともに二科会系の前衛美術団体「アクション」の創立同人。25年「造型」に参加。26年佐藤八郎(サトウハチロー)著『爪色の雨』(金星堂)を装幀。27年帝国劇場における「藤蔭会」公演の洋楽3作の舞台装置と衣裳を担当。28年斎藤佳三、峰岸義一、渋谷修らの「主情派美術展」に出品。29年多田北鳥らの実用版画美術協会第1回展に出品。後年は挿絵画家として活動。『少年倶楽部』などの子供向け雑誌の挿絵を数多く担当した。1942年没、43歳。洋画、挿絵、舞美、装填

吉村忠夫 (よしむら・ただお/1898～1952年)

福岡県生れ。幼時期に一家をあげて上京。東京美術学校に図書係として勤務。1915年同校日本画科に推薦入学し松岡映丘に師事。18年文展に初入選。19年同校を首席で卒業し研究科に進む。21年正倉院御物研究のため特別拝観の許可を得て以後10年間研究に励む。30年審査員となるなど官展の重鎮として活躍。39年日本画院を創設。大和絵の伝統を生かした歴史風俗画を多く描いた。1952年没、54歳。日本画、美研

義村朝義 (よしむら・ちようぎ/1866～1945年)

琉球王国末期に生まれた琉球王族であり、義村御殿4世当主。書道や絵画をよくし、また、空手(唐手)家としても知られる。1945年没、79歳。沖縄の絵師

吉村蘭洲 (よしむら・らんしゅう/1739～1816年)

吉村孝敬の父。石田幽汀、のち円山応挙に学び、西本願寺絵師となる。人物・花鳥画を得意とした。1816年没、77歳。江戸中期から後期の絵師

吉村孝敬 (よしむらこうけい/1769～1836年)

吉村蘭洲の長男。円山応挙に学び、花鳥・人物画にすぐれた。応挙門十哲の一人。西本願寺の本如(まんこよ)に仕え、同寺に障壁画が伝わる。1836年没、67歳。江戸後期の絵師

吉本伊織 (よしもと・いおり/1978年～)

富山県生れ。劇団「わらび座」や「劇団四季」などで舞台美術の製作を手がけ、「自在関内オフィス」「nitehi works」「MZ arts」などの横浜のアートスペースで展示を行ってきた。2010年第46回神奈川県美術展で「県立近代美術館賞」(平面・立体部門)。舞美、洋画、水彩

吉本尚二 (よしもと・しょうじ/1916～1979年)

福岡県生れ。1934年県立福岡中学卒業後、京都に上り同郷の松永冠山に師事。35年京都市立絵画専門学校に入学。在学中に京都市展などで入選。40同校を卒業して帰郷。兵役ののち地元にて定住し、西部美術協会展、福岡県美術協会展などで活躍。63年松永冠山らとともに日本画グループ「玄霜会」を結成。1979年没、63歳。日本画

依田順子 (よだ・じゅんこ/1943年～)

徳島県生れ。1962年高松第一高等学校を卒業し、67年武蔵野美術大学油絵専攻科を修了。69年からニューヨークに在住。80年ニューヨークのザプリスキー画廊で個展を開催し、ニューヨーク・タイムズ紙やアート・マガジンで好評を得る。84年パリのザプリスキー画廊で個展を開催。86年ブルックリン美術館での「ブルックリンのアジアの芸術家たち展」の10人の中に選ばれ出品。88年サンディエゴ美術館での「Cultural Currents」展に外国人作家13人の中に選ばれ出品。国内では、86年に東京画廊でグループ展を、1989・1991・1994・1999年に村松画廊で個展を開催。洋画

依田竹谷 (よだ・ちっく/1790～1843年)

江戸の人。谷文晁(ぶんちよう)にまなび、山水・人物・花鳥画を得意とした。1843年没、53歳。江戸後期の絵師

依田寿久 (よだ・としひさ/1940年～)

静岡市生れ。1965年武蔵野美術大学実技専修科修了。66年ニューヨークに移住し、ブルックリン美術館付属美術学校(1967-69)、アート・スチューデントズ・リーグ(1970)に学ぶ。68年以降、パークシャー美術館、オードリッチ現代美術館、西武美術館、オルターネイティヴ美術館などの企画展に出品。87年静岡県立美術館とギャラリー岡崎(京都)で個展を開いた。線

のタッチに基づくモノクローム調のオールオーバー構成を特徴とし、ミニマル・アート後の美術動向を推進している。ニューヨーク在住。洋画

四谷シモン（よつや・しもん/1944年～）

東京生れ。タンゴの楽師である父、ダンサーの母という芸能一家で育ち、10代半ばで人形作家・川崎ブツペを訪ね、17歳の時に一時、ぬいぐるみ人形作家・水上雄次の内弟子になる。歌手のニーナ・シモンが好きだったことから「シモン」の渾名がつく。65年、雑誌『新婦人』に掲載されていた、澁澤龍彦の紹介によるハンス・ベルメールの球体関節人形を見て衝撃を受け、それまでの人形制作方法を捨てる。人形とは「人のかたち」であり関節で動くもの、人形とは人形そのものであると悟り、以後、独学で球体関節人形の制作を始め、新しい人形表現の地平を切り拓いた。人形、役者

米川勝衛（よねかわ・かつえ/1912～1971年）

茨城県生れ。1939年二科展で入選。42年独立展で入選。48年茨城県美術展(第2部洋画)に出品(翌年いばらき賞、50年招待出品、51年より65年第20回展まで無鑑査出品)。67年茨城県芸術祭美術展に委嘱出品(以後69年まで出品)。茨城県で没、59歳。洋画

米沢弘正（よねざわ・ひろまさ/1851～1923年）

金沢市生れ。父清右衛門、鈴木嘉平に師事。1873年高岡の間屋金森宗七が金沢に開店した銅器製造の宗金堂に勤める。77年設立の銅器会社に職工監として入社、のち職工棟取となる。89年自家で銅器製造の青泓堂を経営。1904年セントレイス万国博覧会で銀賞、各種の博覧会で受賞。1923年没、72歳。金工

米田和（よねだ・かず/1949年～）

岡山県生れ。1976年より作陶を始める。91日本伝統工芸展初入選、95年日本工芸会正会員。石川の伝統工芸展で、96年石川県知事賞、97年北國新聞社長賞を連続受賞。その後も入選、受賞を重ね、14年日本伝統工芸展で朝日新聞社賞。15年同展出品作が宮内庁買上となる。筆の勢いを活かした、自由闊達な採描が高く評価されている。陶芸

米林勝二（よねばやし・かつじ/1911～2002年）

金沢市生れ。1932年石川県立工業学校窯業科卒、朝倉彫塑専門学校に学び、朝倉文夫に師事。39年第3回新文展初入選、戦後は日展に出品。45年第1回現代美術展で金沢市長賞。69年日彫展日彫賞。金沢大学教育学部教授、77年退官。78年文化庁創設10周年記念文化行政功労者表彰。2002年没、91歳。彫刻、美教

米林雄一（よねばやし・ゆういち/1942年～）

東京生れ。1964年金沢美術工芸大学彫刻科卒、66年東京芸術大学大学院彫刻科修了。80年東京芸術大学にて教鞭。2009年東京芸術大学名誉教授。JAXA国際宇宙ステーション「きぼう」にて「宇宙手形」「宇宙モデリング」などを提案、実施。65年二紀展で二紀賞。79年現代日本美術展で国立近代美術館賞。81年記念二紀展で文部大臣賞。87年平櫛田中賞。2001年記念二紀展で記念展大賞。08年米林雄一退任記念展(東京芸術大学美術館)、18年個展「宇宙への眼差し展」(館山市美術館)。日本美術家連盟理事、日本建築美術工芸協会理事。彫刻

米原雲海（よねはら・うんかい/1869～1925年）

島根県生れ。初め大工をしていたが仏像に触発されて彫刻を志す。1890年上京、高村光雲に入門し雲海と号した。その刀技は山崎朝雲と共に、光雲門下の双璧と称せられた。東京彫工会、日本美術協会展などで受賞を重ね、95年東京美術学校助教授。1907年岡倉天心を会頭に、山崎朝雲、平櫛田中らと日本彫刻会を結成。文展・帝展審査委員なども務めた。代表作に《仙丹》《竹取翁》などがある。1925年没、56歳。彫刻、木彫

米原智（よねはら・さとし/1924年～）

島根県生れ。1944年年島根師範学校卒。島根洋画会にて活躍を続け、52年同会常任委員となる。53年独立展にて独立賞。独立美術協会会友。59年島根大学教育学部講師となり、のち教授。独立展に出品しながら、一貫して郷土の美術振興に努め、島根の洋画界を牽引している。洋画、美教

米山朴庵（よねやま・ぼくあん/1864～1928年）

山梨県生れ。8歳の時に米山喜七の養子となった。境尋常小学校を卒業後、時期は定かではないが滝和亭に入門した。和亭とともに千葉県野田醤油醸造業の茂木宅に寄寓して

絵を描き以後親交を深めた。谷村の小池宅にも出入りし作品を残している。1928年没、64歳。 **日本画**

寄田九峯 (よした・きゅうほう/生誕年不詳～1839年)

尾張藩士。名は保延、通称は清太郎。別号に水竹居がある。張月樵に学び、のちに宮崎さん圃に南宗の画法を受けた。また元明諸家の画を模して金氏画譜を翻刻した。1839年没。 **日本画**

ら

頼山陽 (らい・さんよう/1780～1832年)

大坂生れ。1781年父が広島藩の藩儒に登用広島に移住。97年に江戸に游学、儒学・詩文を学んだ。1800年広島藩を脱藩、京都などを巡遊した。福山藩の儒官菅茶山の廉塾の門下となりその後塾長。11年再び京都にて私塾を開校。詩文、書、絵に優れ著書に「日本外史」「日本政記」「日本楽府」、詩文集に「山陽詩鈔」「山陽遺稿」。また、文人・画家・詩人と数多く交友を持ち著名な人物では画家の田能村竹田、浦上玉堂、江馬細香、儒者の梁川星巖、大塩平八郎。1832年没、52歳。 **江戸後期の歴史家・思想家・漢詩人・文人画も描いた。**

頼助 (らいじょ/1054～1119年)

定朝の孫で覚助の実子または直系の弟子として多数の造像に携わる。興福寺を中心に主に奈良で活躍したため、頼助の系統は御寺仏師、奈良仏師と呼ばれ、運慶ら優れた仏師を輩出した。子に金剛峯寺所蔵「絹本着色両界曼荼羅図」(血曼荼羅)を描いた常明がいる。1103年興福寺の落慶供養に際して法橋。10年再び興福寺諸像の修理を指導。16年興福寺と関係が深い春日大社西塔の仏像を造立。1119年没、65歳。 **平安時代後期に活躍した奈良仏師**

90

ヴィンチェンツォ・ラゲーザ (Vincenzo Ragusa/1841～1927年)

1876年開校した工部美術学校に招かれ、日本にはじめて西洋彫刻を伝えた。ラゲーザは82年帰国しますが、その間日本でも積極的に制作し近代日本彫刻の基礎を作った。33年、来日中および帰国後の作品が妻清原玉から東京美術学校に寄贈され、コレクションは明治初期の西洋彫刻受容の経緯を知るうえで貴重な存在。1927年没、86歳。 **彫刻、美術、日本にはじめて西洋彫刻を伝えた伊の彫刻家**

楽宗入・五代 (らく・そうにゅう V/1663～1716年)

4代の養子で、楽家の5代。尾形光琳・乾山兄弟の従兄弟。1688年に楽家の系図をまとめた「宗入文書」を書き残しているが、楽家の文書としては最も重要なものである。伝統的な楽家の陶法を守り、初代長次郎を倣ってかせ釉の黒楽を特徴とする。1716年没、53歳。 **陶芸**

蘭英齋芦国 (らんえいさい・あしくに/生誕年不詳～1820年)

江戸時代の大坂の浮世絵師。 **江戸後期の浮世絵師**

蘭好齋 (らん・こうさい/生没年不詳)

流光齋如圭の門人、大坂の人で作画期は文化の頃とされる。作に細判錦絵の3枚続「から木政右衛門・七世片岡仁左衛門」、「いしどめ武助・初世嵐猪三郎」、「沢井又五郎・浅尾工左衛門」があり、1805年角の芝居で上演された『伊賀越道中双六』に取材している、これは1793年版行の如圭の作品を首だけ改刻したものである。 **江戸時代の大坂の浮世絵師**

6

り

李公麟 (りこうりん/1049～1106年)

安徽省の人。名家の出身で、進士となり諸官を歴任後、竜眠山に隠棲(いんせい)。博学多才で書にすぐれ、絵も諸家の長所をとり入れ一家をなしが特に馬の絵にすぐれた。五馬図巻がある。1106年没、61歳。中国、北宋の文人画家

李 鎮雨 (Lee JinWoo/1959年～)

ソウル市生れ。1983年世宗大学卒業後、86年渡仏し、パリ第8大学造形美術学卒、パリ国立高等美術大学卒。イタリアのストロンボリー島で火山の噴火を偶然目撃し、火山灰を持ち帰り、自身の作品モチーフとした。炭を撒いた上に韓紙を乗せ、鉄のブラシで叩くという作業を何層にもわたって繰り返すことで、特有の質感をもったモノクロームの画面を作り出した。李の作品は、国際的再評価の機運がある韓国の単色画(Dansaekhwa)の「行為の反復」「修行」「精神性」という要素にも一致。韓国の現代美術

陸 儼少 (りく・げんしょう/1909～1993年)

1909年生れ。26年無錫美術専科学校入学、27年無錫美専に入学し、27年王同愈から詩文、書道を学ぶ。翌年、馮超然に絵を学び、吳湖帆と知り合う。56年上海中国画院画師を務める。1993年没、84歳。現代の中国人画家

李 庚 (りこう/1950年～)

父は水墨画家・季可染、母は彫刻家・鄒佩珠。1970年の来日以降、関西を拠点に各地で作品を発表し活躍。京都造形芸術大学教授などを勤める。現代の中国人画家、美教

利 渉 重 雄 (りしょう・しげお/1948年～)

千葉県生れ。1983年フレッケン国際版画トリエンナーレ(西ドイツ)・第3席84年ノルウェー国際版画ビエンナーレ・ビエンナーレ賞。85年版画「期待の新人作家」大賞展・大賞、ロックフォード国際版画ビエンナーレ・買上賞。1985日本の版画(栃木県立美術館)。1986年クラコウ国際版画ビエンナーレ(88、91、97年も)。1988年第11回グレンヘン国際版画トリエンナーレ。現代日本版画特別展(スイス)。版画

梁 基 (りょうき/生誕年不詳、1718～1764年?)

清代の画家。沈南蘋の弟子と伝えられているが、詳細は不明。《長春富貴図》(神戸市博物館)などの作例がある。1764年没? 清代の画家

流光齋如圭 (りゅうこうさい・じょけい/生誕年不詳～1810年)

薊関月の門人。大坂に住む。1777年頃から狂歌本や絵本の挿絵を描いた。月岡雪鼎没後の上方を代表する浮世絵師。1784年『旦生言語備』(やくしゃものいらい)で50名の役者を描いて江戸の勝川春英や勝川春好の役者絵の影響を受けた独自の上方絵を確立。72年頃から細判一枚摺の役者絵も出すようになり、上方役者絵流行の基礎を築いた。如圭の役者絵は細判・大判ともに理想化されやすい。江戸の錦絵に比べてより個人的で写実的な精神が貫かれ、これが上方絵に深い影響を与えることとなった。江戸後期の上方の浮世絵師

流光齋子健 (りゅうこうさい・しけん/生没年不詳)

流光齋如圭の門人。如圭の子。一説には兄ともいわれる。2代目流光齋と号した。堀江に住んでいたが壮年に没す。文化期に作画しており、肉筆画及び挿絵を描いている。江戸後期の上方の浮世絵師

流光齋如圭 (りゅうこうさい・じょけい/生没年不詳、没年は1810年?)

大坂の人。薊関月(しとみかんげつ)にまなぶ。上方様式の役者絵を確立、1790年ごろから役者錦絵をかく。芝居関係本や読み本などの挿絵も手がけた。1810年没? 作品に「画本行潦(こわたずみ)」など。1810年没? 江戸中期-後期の浮世絵師、錦絵、挿絵

柳 齋 重 春 (りゅうさい・しげはる/1802～1852年)

長崎県生れ。江戸末期の上方浮世絵師。のちに柳川重信に学ぶ。幕末期に春梅齋北英と並んで、上方浮世絵界の中心となる。装飾性の強い中判役者絵を築く。看板絵・挿絵等も多く描いた。1852年没、50歳。江戸後期の上方の浮世絵、挿絵、看板絵

料 治 朝 鳴・料 治 熊 太 (りょうじ・ちようめい/1899～1982年)

岡山県生れ。関西中学卒業後、1919年上京国学院大学で折口信夫の講義を受講。20年翌年雑誌記者として研究社に入社。大震災後、博文館の雑誌「太陽」の編集に携わる。28年博文館退社後著述活動。会津八一の門下、古美術の研究に専念。29～41年版画雑誌「白と黒」、「版芸術」、棟方志功、前川千帆、谷中安規らと親交。戦後は古美術の評論に専念、

「茶わん」等の諸雑誌に執筆する。また、民俗雑器の収集家。著書に『会津八一の墨戯』『日本の土俗面』『古陶の美』『そば猪口』など。東京で没、82歳。雑誌記者、評論、版画、著

良全・良詮 (りょうぜん/生没年不詳)

九州もしくは渤海出身。本覚寺所蔵の良全筆『仏涅槃図』(重要文化財)に嘉暦3年(1328年)の款記が発見され、可翁仁賀よりも前の世代に属する絵仏師。東福寺の乾峯土曇による賛が付いた作品が多く、東福寺所蔵絵画の模倣作品も多いことから同寺ゆかりの人物。後活躍する東福寺の画僧・明兆の前任者的な画僧。仏画と水墨画、共に作品を残すなど幅広く活躍。李龍眠様などの伝統的な図様に依りながらも、新たに請来された中国仏画や水墨画法を取り入れており、古代的な絵仏師と中世的な画僧への移行期に属する絵師と考えられている。鎌倉・南北朝時代に東福寺を中心として活躍した画僧

柳々居辰催 (りゅうりゆうきょう・しんさい/生没年不詳)

北斎の門人で、別に柳花園と号す。作画期は寛政末から文政期で、作域は狂歌摺物を中心に、読本挿絵、錦絵、肉筆画など幅広い。錦絵では師北斎から引き継いだ独特の洋風風景画を得意とし、『近江八景』などが知られている。また肉筆美人画にも佳作をのこしている。江戸後期の絵師

林良 (りんりょう・Lin Liang/生没年不詳)

広東の人。水墨の花鳥画を得意とし、弘治年間(1488~1505)に仁智殿に奉職。呂紀の写生的着色画風に対し、写意派の代表的画人となった。代表作『鳳凰図』(京都、相国寺)、『山茶白羽図』(上海博物館)など。中国、明の画院画家

京都生れ。京狩野家・狩野永岳の弟永泰の子。狩野派のみならず、大和絵を学び古画研究を行う。当時「伴大納言絵巻」を所有していた小浜藩主・酒井忠義の許を訪れて原本の模写を行っており、酒井家との間に交流関係があった。為恭は官位を授かり朝廷との結びつきも強かった為、幕府側との交流は攘夷派からの誤解を招き、浪士によって殺害された。1864年没、41歳。江戸後期の復古大和絵の絵師

ろ

六反田英一 (ろくたんだ・えいいち/1957年~)

石川県生れ。82年金沢美術工芸大学油絵科卒。95年上野の森美術館・日本の自然を描く展「馬の在る空間」フジテレビ賞。2005年二紀展同人。11年現代美術展美術文化大賞。12年二紀展準会員賞。13年春季二紀展奨励賞、二紀展会員推挙。14年日本芸術センター第7回絵画公募展審査員賞。15年アートオリンピック2015展(2019展)出品、第28回東京二紀展二紀会の仲間たち10人出品。18年二紀展田村賞受賞。洋画

六角紫水 (ろっかく・しすい/1867~1950年)

広島県生れ。岡倉天心らと渡米し、ボストン美術館などにつとめる。1916年母校東京美術学校(現東京芸大)の教授。実作のほか朝鮮の楽浪(らくろう)漆器、彩漆の製法を研究した。31年芸術院会員。1950年没、83歳。著作に「東洋漆工史」。漆芸

れ

冷泉為恭・岡田為恭 (れいぜい・ためちか/1823~1864年)

15

1

2

わ

若井兼三郎 (わか井・かぬさぶろう/1834～1908年)

江戸生れ。成人して美術骨董商として独立。1873年のウィーン万国博覧会に際し政府随員として道具商の資格をもってヨーロッパに渡る。茶商であった松尾儀助が社長を務めた貿易商社「起立工商会社」を浅草蔵前に設立、同社の副社長に就任。76年のフィラデルフィア万国博覧会に参加した後、78年開催のパリ万国博覧会にも参加、「起立工商会社」パリ支店を開設。また、佐野が会頭を務める龍池会にも参画した。パリでは折からのジャポニスムブームにのって日本美需品は飛ぶように売れた。「起立工商会社」の方針に反発して82年に同社を辞任、84年林忠正とともに共同で「若井・林商会」を設立、若井は日本から浮世絵版画など日本の美術品をパリへ取り寄せて同地において錦絵を販売、若井おやじとして知られた。86年に林は独立。1908年没、75歳。美術商

若尾瀾水 (わかお・らんすい/1877～1961年)

高知県生れ。1906年東京帝国大学法科大学政治学科卒。1918年高知新聞記者。土佐の南画家中山高陽などを研究。書画鑑識の大家としても知られた土佐文人研究者。1961年没、84歳。俳人、新聞記者、日本画、書画鑑識

若杉五十八 (わかすぎ・いそはち/1759～1805年)

長崎県生れ。長崎会所請払役を勤めたが、経歴も洋風画伝習経路も不明である。1791年京都の今宮神社に奉納された懸額『オランダ船図』のほか、西洋銅版画に基づく西洋風俗図数点を残しており、その油彩技法は鎖国体制下ではもっとも進歩している。ただし、司馬江漢を代表とする江戸系洋風画家のようには、創作的な日本的題材の洋風画を残していない。1805年没、46歳。江戸後期の長崎の洋風画家

若林佳代子 (わかばやし・かよこ/1960年～)

京都生れ。1985年京都市立芸術大学美術学部大学院油画終了。10代よりイラストレーションの仕事を手掛け、以後、グラフィックデザイン、出版の仕事に従事しながら、水彩画を発表。イラスト、デザイン、水彩

若林佳代子 (わかばやし・かよこ/生誕年不詳～)

長野県生れ。1999年東京芸術大学美術学部油画科卒。2001年同大学大学院版画研究科修了。02年同大学大学院版画研究科に研究生として在籍。07年飛騨高山現代木版画ビエンナーレ。Contemporary Artist 4 JAPAN(キングラデシユ)。04年あおもり版画トリエンナーレ2004展。版画

若林利重 (わかばやし・としげ/1919年～)

三重県生れ。東京大学医学部を卒業し、東京警察病院の外科部長、副院長などを歴任。本業の傍ら絵に親しみ、30歳の頃からデッサンを安井曾太郎に、油彩を田崎広助に師事した。75年一水会会員優賞、85、92年日展特選。一水会常任委員、日展委嘱。深沢省三・紅子夫妻との交流も深く、深沢紅子野の花美術館で開催されている一水会選抜展の際には盛岡に足を運んでいる。洋画、ウィーン幻想派

若林 稔 (わかばやし・みのる/1919～1998年)

岡山県生れ。1945年東京美術学校卒。寺内万治郎に師事。50年光風会展入選(以後毎回出品)。52年日展入選(以後18回入選)。72年フランスを中心に欧州6ヶ国研修旅行(3ヶ月)。77年日展特選。文化庁主催現代美術選抜展招待出品。85年長崎大学教授を退官。長崎大学教授退官記念展開催。光風会会員。日展会友。日本美術家連盟会員。1998年没、79歳。洋画、美教

和歌山静子(わかやま・しずこ/1940年～)

京都生れ。武蔵野美術大学デザイン科卒。日本児童出版美術家連盟会員。1980年『あいうえおうさま』(文・寺村輝夫、理論社)で絵本にっぼん賞、82年『おおきなちいさいぞう』(文研出版)で講談社出版文化賞絵本賞。主な作品に「王さま」シリーズ(文・寺村輝夫、理論社)、『おかあさんどこ?』『ぼくのはなし』(童心社)、『てんてんてん』(ひ

まわり』(福音館書店)、『おーいはいーい』(ポプラ社)などがある。神奈川県逗子市で「アジア絵本ライブラリー」を運営。**絵本、絵本ライブラリー**

脇坂秀樹 (わきさか・ひでき/1930年～)

大分県生れ。1954年大分大学学芸学部美術科卒。県内の中・高等学校で教鞭をとる一方、本格的に油彩画の制作に取り組み、光風会展、後、東光会展を中心に活躍を続け、59年東光会展に入賞。60年東光会会友、64年東光会会員。62年安井賞展に選抜出品。2001～04年第7代大分県美術協会会長。**美教、洋画、美普**

脇 正人(わき・まさと/1926年～)

大分市生れ。1947年大分師範学校卒。54年自由美術協会展に入選。以後、同展を主に活躍。66年自由美術協会会員。86年自由美術平和賞。89年自由美術賞。91～2001年大分県美術協会第6代会長。01年大分県芸術文化振興会議会長。県下では、大分前衛美術会、七人の会、潮流の会等に出品。**洋画、美普**

浦田利之 (わくた・としゆき/1955年～)

札幌市生れ。1979年武蔵野美術大学造形学部油絵学科卒。84年個展(ギャラリーアミア・南青山、90年も)、住友版画ミニアチュール展・優秀賞。87年インターグラフィック(ベルリン)、オーバーン紙の美術展(アメリカ)、台湾国際版画展、ロッズ版画展(ポーランド)。88年ソウル国際ミニアチュール版画展(韓国)・佳作賞。95年個展(ガレリア・グラフィカ bis・銀座)。2000年個展(ガレリア・グラフィカ・銀座、スペースガレリア・千葉)。**版画**

鷺見和紀郎 (わしみ・わきろう/1950年～)

1972年に現代美術の寺子屋Bゼミスクールを修了。ブロンズやワックスなど多様な素材を使いながら、彫刻の始源のような幾何学的形態から有機的な形態まで、幅広い表現。「垂直性」と「水平性」の問題に一貫して取り組むなど、「彫刻のスタンダード」な課題を継続的に誠実に追求。「ポストもの派」の彫刻家。ポストもの派とは、先行するもの派やミニマルズムが美術表現をゼロにまで還元した後を受け、もういちど「美術」「絵画」「彫刻」を一から再構築しようとしたアーティストたち。**造形、彫刻、ポストもの派**

和田 彰 (わだ・あきら/1955年～)

和歌山県生れ 横浜国立大学教育学部美術科卒。神奈川県青年美術家展準大賞、神奈川県美術展県立近代美術館賞、毎日現代美術展入選、岡本太郎記念現代芸術大賞展入選、神奈川県立近代美術館所蔵。**洋画**

和田 章 (わだ・あきら/1944年～)

大坂生れ。1964年京都市美術大学彫刻科入学。辻普堂・八木一夫・堀内正和に師事。69年毎日美術コンクール。70年彫刻の森美術館大賞展。80年アジア現代美術展。**彫刻**

和田京子 (わだ・きょうこ/生誕年不詳～)

福島県生れ。2007年県水彩展 特選。08年県美協展 特選(福島市長賞)。09年県美協展特選(福島教育長賞)、10年会津展(若松市長賞)、県展(美術奨励賞)、県水彩展 特選(水彩画会賞)、12年会津展(若松市長賞)、県水彩展(水彩画会賞)、日水展(奨励賞)。14年日水展会友。会津美術協会委員、イーゼル会所属。**水彩**

和田邦坊 (わだ・くにぼう/1899～1992年)

香川県生れ。1926年東京日日新聞社入社し、記者や風刺漫画家。新聞漫画家としては朝日新聞社の岡本一平と並ぶ絶大な人気を誇った。小説家としても活躍し、『うちの女房にや髭がある』(1936年)は同年に日活で映画化。38年香川県で画家やデザイナーとして活動。「灸まん」「名物かまど」「ひょうげ豆」など多数の香川県名物のパッケージデザインを手がけ、「うどん本陣 山田家」を設立時、総合プロデュース。64年香川県、『文化功労者』。65年讃岐民芸館(栗林公園内)の初代館長。灸まん本店の運営する「灸まん美術館」内に、和田邦坊の画業を記念する「和田邦坊画業館」。1992年没、93歳。灸まん本店の運営する「灸まん美術館」内に和田邦坊の画業を記念する「和田邦坊画業館」。**漫画、小説、デザイナー、画家、個人美術館**

渡瀬政近 (わたせ・まさちか/1891～1957年)

徳島県生れ。旧制徳島県立富岡中学校卒、京都高等工芸学校図案科に学ぶ。1914年中高一らと徳島洋画研究会を結成。42年徳島県洋画協会発足、常任幹事。1957年没、6

6歳、1958年徳島県青年美術家クラブ主催で遺作展開催。洋画

和達知男 (わたち・ともお/1900～1925年)

愛知県生まれ。1921年東京帝国大学入学後、ほどなくしてベルリンに留学。「シュトゥルム」などに入出入りする。22年村山知義、永野芳光とイタリア未来派と交流。デュッセルドルフ国際展と同時に開催された国際会議に参加。23年ベルリン無鑑査展に4点を出品。神奈川県立近代美術館に24作品が収蔵。1920年没、25歳。洋画、水彩、コラージュ

渡邊長男 (わたなべ・おさお/1874～1952年)

大分県生まれ。彫刻家・朝倉文夫の実兄。旧制大分中学校卒。東京美術学校予備課で木彫と日本画を学び、彫刻科では特待生として山田鬼斎、長沼守敬らに師事。1897年には、高村光太郎らと青年彫塑会を結成し、新進彫刻家として日本美術協会展覧会で受賞。東京彫工会第一副部長、日本美術協会彫塑部委員。万国博覧会で高い評価。記念碑や肖像彫刻に手腕を発揮し、代表作として「明治天皇騎馬像」「菅原道真公像」「日本橋獅子麒麟橋飾」、我が国の彫刻界草創期を代表する一人として活躍。1952年没、78歳。彫刻

渡辺おさむ (わたなべ・おさむ/1980年～)

山口県生まれ。2003年東京造形大学デザイン学科卒。2007年長野県信濃美術館「五感でアート展」に於いて美術館デビュー。同年、MOCA(上海現代美術館)「ECO×DESIGN展」にて海外美術館デビュー。08年以降、北京での個展を皮切りに、上海、ミラノ、ベルギー、トルコ、香港と立て続けに海外で作品を発表。09年大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレに選出。09年 MOCA(上海現代美術館)アニマミックスビエンナーレに選出。12年大原美術館での個展、渡辺おさむ OHARA-DECO 清須市はるひ美術館。現代美術

渡辺鶴洲・秀実 (わたなべ・かくしゅう/1778～1830年)

長崎県生まれ。渡辺秀詮の子。幼くして父秀詮に画法を学び、また真村蘆江に師事して、南蘋風および方西園風の画法を修めた。1802年父の跡を継いで唐絵目利になり、同時に渡辺家7代の家督を継いだ。長崎画人伝の著者として知られる。1830年没、53歳。江戸後期の絵師、唐絵目利

渡辺香奈 (わたなべ・かな/1980年～)

岩手県生まれ。1999年群馬県立高崎女子高等学校卒。2005年慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科修士課程修了。09年昭和会展松村謙三賞(第2席)。二紀展で優賞。11年日動画廊で個展。12～14年文化庁新進芸術家海外研修員の資格などでスペインのマドリッド・コンプルテンセ大学3年間学ぶ。二紀会準会員。群馬県美術会会員。洋画

渡部菊二 (わたなべ・きくじ/1907～1947年)

福島県生まれ。会津中学校卒、地元小学校の教員を勤めながら絵画制作に励み、1936年文展(鑑査展)に入選、水彩画家としての地位を確立。水彩画特有の明快な色彩に、モダンな構成を備えた作品は当時から高い評価を受け、日本の水彩画の歴史に足跡を残した。春日部たすくらとともに洋画団体彩光会を結成、竹久夢二を招くなど積極的な活動を展開した。1947年没、40歳。水彩

渡辺記世 (わたなべ・きよ/1947年～)

徳島県生まれ。1985年徳島県芸術祭優秀賞。2000年二紀展で奨励賞。03年二紀会同人、関西二紀展、〇賞。05、07年二紀展同人賞。08年女流画家協会展、資生堂賞、リキテックス賞、会員。13年神戸女子賞。14年上野の森美術館賞。13年二紀展会員。14年とくしま芸術文化賞。洋画

渡辺恭英 (わたなべ・きょうえい/1936年～)

大分県生まれ。1960年大分大学学芸学部卒。63年の大潮展以降、新象作家協会展、二科展、新制作協会展等の全国公募展に積極的に挑戦を続け、数多く受賞。94年大分大学教育学部教授。2000～05年朝倉文夫記念館館長。05～09年大分県美術協会第8代会長。10年大分県芸術文化振興会議理事長。生涯を通じて“紙襷”による表現を追求。洋画、色紙、美教、美術館長

渡辺清 (わたなべ・きよし/1778～1861年)

縫箔屋利平の子として生まれた。14歳で吉川英信門に入り、狩野派の絵を学ぶ。1802年、中林竹洞、山本梅逸と共に上京、土佐光貞に入門し、田中訥言に出会ったと考えられる。名古屋に戻ったが、兄弟子の訥言が名古屋に来ると、訥言に学んだ。名古屋で人気を博

し、80歳で士分に取りたてられた。1861年没、83歳。江戸後期の復古大和絵派の絵師

渡部憲司 (わたなべ・けんじ/1928～2017年)

福島県生れ。福島師範学校卒。荒川三郎、佐藤辰治らに水彩画、油彩画を学ぶ。県展、日本水彩展や独立展、大潮展など県内外の美術展に精力的に作品を発表。地域の美術振興にも取り組み、会津美術協会の会長。2017年没、89歳。水彩、洋画

渡辺玄対 (わたなべ・げんたい/1749～1822年)

江戸生れ。養父(渡辺湊水)、中山高陽に絵を学び、沈南蘋(しんなんぴん)の画風を習う。山水画、花鳥画にすぐれ、江戸画壇で一家をなし、谷文晁らに多大の影響を与えた。画譜類の制作も多い。その子の田穀、忠茂、内田玄輝も画才を発揮した。主要作品『武陵桃源図』(東京国立博物館)。江戸で没、73歳。江戸後期の絵師

渡辺公観 (わたなべ・こうかん/1878～1938年)

天津市生れ。1894年京都美術工芸学校に入り、95年退学、森川曾文に師事す。1902年曾文長逝後他門に入らず独自研究を続けた。文展には第1回及び第8回より12回迄出品、19年井口華秋、広田百豊と共に日本自由画壇を創立し、爾後毎年同展に出品した。同展第13回出品の「放牧」二曲一雙は代表作に推される。1938年没、61歳。日本画

渡辺光徳 (わたなべ・こうとく/1887～1945年)

福島県生れ。須賀川尋常高等小学校卒、兵役後に上京し、太平洋画会研究所、葵橋洋画研究所、川端画学校で学び、中村彝らと親交を深めた。亜欧堂田善を尊敬し、自らも銅版画を制作。1927年版画の出品が認められた帝展に入選し、以後帝展で4年連続入選。29年織田一磨らの提唱で結成された洋風版画会にも同人参加。主としてエッチングの技法による細密な表現を得意とした。1945年没、58歳。版画、洋画

渡辺禎雄 (わたなべ・さだお/1913～1996年)

東京生れ。日本の民芸の伝統の中で描かれた彼の聖書の版画で有名であった。染織の巨匠・芹沢銈介の弟子として、民藝運動に携わっていた。芹沢に紅型染色技法を教わり、1947年にそれを応用して、型染め版画の処女作「ルツ物語」を制作。これにより日本民藝館賞、

国画賞。1993年にキリスト教功労者。1996年没、83歳。版画

渡辺始興 (わたなべ・しこう/1683～1755年)

京都生れ。1708年ごろから近衛家熙(いえひろ)に仕える。絵は初め狩野派を学び、光琳の影響を受けてその装飾画風をも得意とし、両者を巧みに使い分ける。ことに光琳様式の継承者としては、江戸を中心に栄えた後期琳派のなかで、ひとり京都でその伝統を保持した画家。狩野風の達者な筆遣いを示した水墨画が多く、また奈良・興福院(こんぶいん)の障壁画もよく知られる。琳派風のものであれば、京都・大覚寺の障壁画(耕作図杉戸絵や兎図障子腰板絵、『燕子花図屏風』(クリーブランド美術館)、『吉野山図屏風』)などが代表的。『春日権現靈驗記』20巻を模写するなど、大和絵の素養をもち、さらに『鳥類真写図巻』のような写生画を描いて、円山応挙に影響を与えた。1755年没、72歳。江戸中期の絵師、水墨、琳派

渡辺祥益 (わたなべ・しょうえき/1848～没年不詳)

大阪生れ。父梁益に学ぶ。子は祥英。四条派。渡辺祥英・小出檜重・上島鳳山等の師。日本画

渡辺秀乾 (わたなべ・しゅうかん?/1809～1829年)

1809年生れ。渡辺鶴洲の嫡子。父鶴洲の指導を受け、宋元明清諸大家の作品を臨模した。また渡辺家伝来の画風以外、沈南蘋、費漢源、方西園など来舶の諸大家の筆致にも十分意を留め、特に南蘋流の花鳥を得意とした。1829年没、21歳。江戸後期の絵師

渡辺周溪 (わたなべ・しゅうけい/1778～1861年)

尾張生れ。吉川英信、土佐光貞の門にはいり、のち田中訥言に大和絵をまなぶ。有職故実にくわしく、精緻な画風を特色とした。尾張(おわり)名古屋藩主徳川斉温(なりはる)にもちいられ、殿中の襖絵(ふすま)などをかいている。1861年没、84歳。江戸後期の絵師

渡辺秀実 (わたなべ・しゅうじつ/1778～1830年)

長崎県生れ。父渡辺秀詮(しゅうせん)や真村蘆江(まむらゝろう)にまなび、1802年父の跡をついで唐絵目利(めくらえめきぎ)となる。「長崎画人伝」をのこした。1830年没、53歳。江戸後期の絵師

渡辺秀実 II (わたなべ・しゅうじつ/1778～1830年)

唐絵目利の渡辺秀詮の息子。父が43歳のときに生まれた。画はこの父に学び、かたわら南蘋派の真村廬江にも教えを受ける。南蘋派の華麗な画風と北宗画の力強い画風を併せ持つ画風であった。1802年唐絵目利職に就任。同時に渡辺家7代の家督を世襲した。しかしなぜか御用絵師にはなっていない。先輩の石崎融思とは対照的で「性狷介にして妄りに交わるを喜ばず」と評されている。両者にはなにかの確執があったものと推定される。渡辺家初代秀石とその師の小原慶山を生涯にわたって敬慕した。『長崎画人伝』・『歴代画家提要』(1825年)を著している。門弟に荒木千洲・村田鶴阜などがいる。1830年没、52歳。江戸後期の絵師

渡辺秀石 (わたなべ・しゅうせき/1639～1707年)

1639年生れ。黄檗宗の逸然まなび、写生の画法をくわえて長崎漢画の一派をたてた。1692年長崎奉行近藤五左衛門より唐絵目利(からえめきき)兼御用絵師に任命され、代々この職をついだ。1707年没、69歳。江戸前期-中期の絵師、長崎漢画、漢画派(北宗画派)

渡辺秀詮 (わたなべ・しゅうせん?/1735～1824年)

渡辺秀彩の子。猛虎を能くした。1824年没、89歳。江戸後期の絵師

渡辺俊明 (わたなべ・しゅんめい/1937～2005年)

静岡県生れ。独学で絵を描き続ける。絵と言葉で表現する墨彩詩書画を描くようになる。1980年に漂泊の俳人 種田山頭火の句、百句を題材として木版画を制作。油絵から木版画・墨彩画にいたる絵画作品をはじめ、石彫・絵付陶磁器・作庭などその表現方法は多岐。1972年浜松芸術祭典 芸術大賞。『高山の朝一(油絵50号)』(美術館買上)。78年日中美術交換展 招待出品(中国国立歴史博物館収蔵)、2000年[個展] 島根・今井美術館 5周年記念 渡辺俊明自選展。2005年没、68歳。洋画、版画、石彫、絵付陶磁器

渡辺晨敏 (わたなべ・しんきゆう/1867～1938年)

福島県生れ。荒木寛敏の門に花鳥を学ぶ。日本画会、日本美術協会々員、孔雀の絵を得意とした。1918年支那に漫遊、北京に於て日華聯合絵画研究会を組織し、21、24年に日

華聯合展を開催、34年には新京に日滿聯合展を開催した。滿洲国皇帝の知遇を辱ふし、日滿支三国美術の交驛に貢献せる処大であった。尚、東方絵画協会幹事。1938年没、72歳。日本画

渡辺湊水 (わたなべ・そうすい/1720～1767年)

江戸生れ。長崎で南蘋(なんぴん)派の画をまなび、花鳥画を得意とした。渡辺玄対(げんたい)を養子とする。1767年没、48歳。画集に「辺氏画譜」。江戸中期の絵師

渡辺卓熙 (わたなべ・たかあき/生没年不詳)

宇都宮市生れ。1943年東京美術学校彫刻科塑造部卒。51年日展で入選、51年茨城県美術展で教育長賞。52年茨城県美術展で茨城新聞社賞。53年小森邦夫らとグループ「セルバン」結成。58年茨城県美術展で審査員。彫刻

渡辺直堂 (わたなべ・ちよくどう/1886～1954年)

秋田市生れ。秋田中学を卒業後、上京し寺崎広業の門をたたくが、長沢蘆雪に強く傾倒しており、作風も蘆雪風だといわれる。旅に明け暮れ山水画を描いたが、のちに武者絵に移っていった。晩年上北郡百石町に10年ほど逗留、武者絵を中心に多くの作品を残している。1954年没、68歳。日本画

渡部常好 (わたなべ・つねよし/1931～1998年)

福島県生れ。新潟大学教育学部在学中から二紀展や福島県総合美術展に出品し、受賞を重ねた。豊かな色彩と動感のあるタッチが特徴で、会津地方の自然やヨーロッパ・中東・インドなどの街角を描いた作品のほか、抽象画も手がけています。1998年没、67歳。洋画、水彩

渡辺南岳 (わたなべ・なんがく/1767～1813年)

京都生れ。初め源琦に師事し、のち円山応挙に学んだ。人物・花鳥、また獣や魚などもよくした。師の厳格な写実からはやや外れたが、光琳の装飾性にもひかれてこれを折衷し、一家をなした。応門十哲の一人に数えられる。晩年の1803年から足掛け3年ほど江戸に滞在し、円山派をはじめ関東に伝え、大いに人気を得た。谷文晁はその噂を聞いて養子文一をや

って学ばせ、大西椿年、鈴木南嶺などの弟子もこの時に就いた。1813年没、46歳。江戸後期-明治期の絵師

渡辺信子 (わたなべ・のぶこ/1948年～)

東京生れ。1971年相愛女子大学音楽学部ピアノ科卒。72年大阪の藤美画廊で個展。94年芦屋市展で芦屋市立美術博物館買い上げ賞。97年ABC美術コンクールで優秀賞。99年吉原治良賞美術コンクールで大賞。近年はドイツ、フランスなど海外でも個展開催。作品は、木枠に布を張り込むという絵画的な要素を持ちながら、布の張力を利用した立体造形として成り立っている。鮮やかな、ときに繊細な色彩の対比を見せながら、緊張感と柔らかさのある独特の形態を生み出している。立体、彫刻

渡辺信喜 (わたなべ・のぶよし/1941年～)

京都生れ。1964年京都市立美術大学日本画科卒、山口華揚に師事。71、84年日展特選。77年山種美術館賞展出品(同'79年'81年'83年'91年)。84年横の会展(～'93年最終展)。個展(日本橋・大阪三越)。日展会員。京都精華大学教授。日本画、美教

渡辺秀彰 (わたなべ・ひであき?/1821～1870年)

1821年生れ。鮫目利頭取富田惣太夫の子で渡辺家の養子になった。鶴洲の門人村田鶴阜に画法を学び、渡辺鶴洲の後を継いで唐絵目利になった。1870年没、50歳。江戸後期の絵師

渡邊 博 (わたなべ・ひろし/1938年～)

新潟市生れ。熊谷喜代治にデッサンを学び、後、笹岡良一に師事。日展、光風会に出品。66～68年光風会会員。紀伊国屋画廊、美術ジャーナル画廊、現代画廊、ギャラリー汲美等で個展。91年新潟伊勢丹、2002、05、08、12年新潟絵屋で個展。洋画

渡辺広輝 (わたなべ・ひろてる/1778～1838年)

徳島市生れ。父と共に大阪に出て、画の修行をした。叔父にあたる徳島寺町の善福寺住職の下で同居し、画を学んだ。また、藩の狩野派絵師(矢野栄教)に師事。1796年矢野栄教の推薦により、江戸の(住吉 内記広行)に入門し、広輝と改名。1809年『土佐流御絵師』

江戸で没、61歳。江戸後期の絵師

渡辺美知夫 (わたなべ・みちお/1912～1975年)

埼玉県生れ。1935年茨城県に移住。41年木村武山に師事。43年奥村土牛に師事。47年茨城美術会創立会員。48年再興院展で初入選、以後院展、春の院展で活躍。53年城県美術展に無鑑査出品。67年茨城県芸術祭美術展に委嘱出品(以後10回展での遺作出品まで出品、第9回展で審査員)。1975年没、63歳。日本画

50

渡部百合子 (わたなべ・ゆりこ/1907～1998年)

北海道生れ。北海道室蘭高等女学校卒業後に上京、日本水彩画展に参加。渡部菊二と結婚。菊二の絵のモデルをつとめる一方、自身も制作を続け、菊二が亡くなった後も、日本水彩画展や二科展を主な発表の場として活躍。当初から大胆な筆致を特徴としていた。戦後になると、さらに抽象的な表現を展開していきました。1998年没、91歳。水彩

渡辺洋一 (わたなべ・よういち/1951年～)

名古屋市生れ。71年木版画研究に没頭。75年浮世絵版画手摺師・加藤由太郎に摺りの指導を受ける。82年月刊なごやに「僕の名古屋十二景」を通算39回連載。書票集「子ども飯茶碗の絵・26葉」吾八書房刊。中国版画蔵書票展に書票・子ども飯茶碗の絵出品(中国人民美術出版社・收藏)。86年季刊「銀花」六十八号(文化出版局)に書票・子ども飯茶碗が紹介。88年季刊「版画芸術」62号(阿部出版)にて、オリジナル添付作品を制作(8,575枚)。94年季刊「銀花」100号(文化出版局)百を寿く木版画制作(5,000枚)に参加。95年中山道木曾路十一宿(12回)完成。96年山のかたちシリーズ制作を始める。(1987年～2010年までに山の版画、約60回を制作)。05年 第50回 CWAJ 現代版画展(東京アメリカンクラブ)・「白い花-3」を出品・米国議会図書館に收藏。版画、蔵書票

渡辺義雄 (わたなべ・よしお/1907年～2000年)

新潟県生れ。東京写真専門学校卒。国際文化振興会に参加し、スナップ写真、建築写真を撮る。「日本写真家協会」設立の発起人となり、1957年から23年間会長を務めた。東京都写真美術館の初代館長。写真集に「帝国ホテル」「伊勢神宮」など。2000年没、93歳。写真、「日本写真家協会」の会長。東京都写真美術館の初代館長

渡辺 力 (わたなべりき/1911～2013年)

東京生れ。1936年東京高等工芸学校木材工芸学科卒。群馬県工芸所にてブルーノ・タウトに師事。40年東京高等工芸学校助教授。43年東京帝国大学農学部林学科選科(森林利用学)修了。同大学助手(航空研究所出向)。49年渡辺力デザイン事務所を設立(東京・銀座)。59年クラブ・センター・ジャパンの設立に参加。66年東京造形大学室内建築科の教授。剣持勇・柳宗理らと共に日本におけるモダンデザインの礎を創った。2013年没、102歳。**デザイナー、美教**

綿引明浩 (わたびきあきひろ/1960年～)

1960年生れ。84年東京藝術大学美術学部主席卒。卒業作品が同大学買上。84年西武美術館版画大賞展優秀賞。86年同大学大学院修了。大学院在学中から銅版画を中心に作家活動を始める。透明アクリル板の裏面から描く独自の絵画技法「クリアグラフ」を考案。2015年からはショートアニメーションを手掛けるなど表現の幅を更に広げている。**版画、アニメ**

綿引司郎 (わたひきしろう/1904～1977年)

水戸市生れ。1923年上京し、北村西望に師事。29年回帝展で入選。52、53年で特選、朝倉賞。61年日展会。68年日展評議員。千葉県で没、73歳。**彫刻**

和田 誠 (わだまこと/1936～2019年)

多摩美術大学を卒業後、広告制作会社ライトパブリシティに入社し、1968年に独立。『週刊文春』の表紙をはじめ、200冊以上の本のイラストや装丁を手がけ、エッセイスト、映画監督、作詞家としても活躍。90年代に銅版画家・山本容子(1952生まれ)からエッチングを学び、本格的な銅版画制作を開始。愛猫を題材にした作品18は、和田が銅版画に取り組むきっかけとなった作品。作品19は、山本との二人展「二人のシネマ」のために制作されたシリーズで、和田にとって思い入れの深い映画が表されています。2019年没、83歳。**グラフィック・デザイナー、表紙絵、イラスト、装丁**

和田 貢 (わだみつぎ/1927年～)

広島県生れ。1945年広島師範学校(現・広島大学教育学部)入学。48年福山美術協会

設立に参加。52年東光展、日展初入選。58年東光会福山グループ設立に参加。60年ミモザ(福山)にて個展。以後多数個展。93年福山市立女子短期大学名誉教授。東光会理事。2001年日展で審査員。2003年日展会員賞。**洋画、美教**

和田守弘 (わだもりひろ/1947～2007年)

高松市生れ。1973年多摩美術大学絵画科油画専攻卒。在学中に「国際青年美術家展」で受賞、「ジャパン・アート・フェスティバル」によって作品が海外にも紹介。当初、セメント・金属等の物質感の強い素材を使って作品を作っていた。1971年頃から、ビデオを用いたインスタレーションやパフォーマンスなどの実験的な試みを数多く発表。その先駆的な仕事は、美術界に大きな影響を与えた。ビデオ作家の集団「ビデオひろば」に参加し、活動の幅をひろげた。80年代に入ると、金属を支持体とした絵画的要素を含む立体作品も制作。90年代には、キャンバスを使用した絵画の制作。ニューヨーク近代美術館の〈NEW VIDEO: JAPAN〉、シカゴ美術館の〈VIDEO ART〉、ドイツでの〈他文化との遭遇—非ヨーロッパ現代美術展〉など、海外で発表。ビデオ・インスタレーション・パフォーマンス・立体・絵画など、複数のメディアを自在に横断する独自の表現方法を確立した。さらに新しい表現に向かう途中、2007年没、59歳。**彫刻、洋画、ビデオ・インスタレーション・パフォー・立体**

和田悠成 (わだゆうせい/1901～1997年)

松江市生れ。和田翠雲の長男。1919年に水郷社を結成、松江城山興雲閣で第1回展を開催し、新日本画研究の道に進んだ。31年山陰書道会を設立、松江毛筆授産場を運営し、松江筆の製作指導にあたった。62年横山大観夫人のすすめで、61歳で堅山南風に入門し、66年再興院展に初入選、69年院展院友。島根県日本画協会理事、島根県展日本画審査員をつとめ、地元の日本画普及に大きく貢献した。1997年没、95歳。**書、日本画**

渡会純价 (わたらいじゅんすけ/1936年～)

北海道生れ。1955年小樽緑陵高校卒。58年武蔵野美術学校中退(通信)。駒井哲郎に銅版画習う(のちに深沢幸雄に師事)。59年北海道版画協会創立('73年退会)。61年全道展出品('67年会員)。62年日本版画協会出品('73年会員)。63年春陽会出品('74年会員)。2017年北海道文化賞。オーケストラやコンチェルトの演奏風景など、音楽をモチーフに、洒落た色使いとリズムカルな画風で人気が高い。以後、全国各地で個展開催北海道の銅版画の草分けのひとり。日本版画協会北海道支部長。**版画**

62
計 4025名

3 2024年4月 積み残し、漏れ落ち作家のピックアップ目的に4000名の作家略歴 計9500名を達成。(物故洋画・水彩・彫刻・版画・江戸時代前を含む日本画家、現存作家も加えた作家の200文字略歴)

参考

- 1 赤字の数字は作家のあいさつお順別に於けるカウント(合計)数です。
- 2 作家当たりの文字数 750, 872文字÷4026名=187文字/名

<4000名 作家略歴原稿制作の履歴>

- I 2206名 2023年3月29日 (2022年12月の時点で5500名略歴から500名積み残しあり)
- II 2370名 2023年04月20日 (漏れ落ち作家ピックアップ)
- III 3193名 2023年09月18日 (孫引き本格化)
- IV 4000名 2024年4月15日 (作成者による一次校正)
- V 2024年4月30日 続 画家4000名の略歴の原稿が出来、計9500名となった。「あーと・わの会」HPに掲載
(物故洋画・水彩・彫刻・版画・江戸時代前を含む日本画家に現存作家も加えた作家の200文字略歴。「あーと・わの会」HPに掲載)

2 編集後記、感想

200文字という短文字数の略歴は「あーと・わの会」で利用度が高く、例えば2004年～「わの会」コレクション展、2012年～「わの会の眼」発刊、2004年～放談会記録に使用され、企画展開催時にはキャプションに使用され、放談会や会誌のレポートに参考にされてきています。2010年「あーと・わの会」の顧問、現代美術資料センター主宰の笹木繁男さんより、3000名画家略歴作成の夢を野原宏さんとともに頂きました。200文字作家略歴編集は先ず、「わの会」コレクション展の200名からはじめ、その後、放談会紹介作家や「わの会の眼」、会誌に紹介作家も一部加え、3507、5500名と増やしてきました。5500名略歴を2023年12月発刊後、10,000名作家略歴に目標を定め、2024年4月4000名の略歴を完成。計9500名の作家略となった。都度、会の理事会の承認をいただきその判断に添い、要請に応える様にしてきたと思います。慎重にトライアル段階を経て～第一段階から第三段階へと推進してきました。さて、画家略歴の短い纏めは簡単ではありません。例えばある作家の20の業績を200文字に収める為、例えば6件、8件の業績に纏める作業を想像して見て下さい。困難が伴うことが容易に想像出来ます。
* どの略歴情報を採用するのか？選択がポイントです。* 業績ベスト6、8を選抜すること自体に問題が潜みます。* 略歴の制作者はその内容は時に人によって違い、一方略歴を求める方々の目的、内容はそれぞれ違います。“制作者側”と“利用者側”で違い、ミスマッチは避けて通れません。制作、編

7 制作の履歴、編集後記、制作者、奥付

1 4000名 作家略歴原稿制作の履歴

- 1 2023年4月30日「あーと・わの会」より 画家5500名の略歴(物故洋画家・彫刻家中心に作家200文字略歴)が発刊。
- 2 2024年1月 10,000名の作家略歴の制作を決意

集の立場として、発生するミスマッチや差について云々せず、恐れずに作成しています。これらの想定される課題は把握、認識し、制作、編集にあたってきました。キッカケ、出来はどうであれ、慰めとする処は作家に対して、真摯に向き合い、活動実績には極力客観性、(優れた複数のネット上の情報を比較、取捨選択、縮小作業を通じ)を求め作成、簡便性を重視しています。100点を求めることは困難です。

01 小人数での作成

02 掲載方法を統一

03 会員、関係者のみの限定配布

04 公平に心掛け、忝意、好悪、是非、好み、私心を極力抑え、作成

05 200文字数前後に制限 どちらかと言えば高名、大家の作家略歴はマスコミ、美術史家、美術学者、学芸員、美術館、美術図書、雑誌に溢れる様に紹介されているので極力必要最小限、200文字に抑え、知名度の低い ①世に埋もれた作家や ②地方の作家は内容、文字数を調整(少し多め)し作成

06 (1) 明治維新前後、それ以前の作家も区切ることなく加え (2) 現存作家も多くはありませんが加えています。(3) 現代美術については、材料、技法、平面に拘らず、動き(パフォーマンス、ヴィデオ、ダンスとの融合等)の既存の壁を越えて作成されてきている場合もあり、極力紹介

07 現存作家は略歴が時間の経過で実績は追加、更新されてゆきますが、本を制作した場合、簡単に更新しにくい欠点があります。当略歴はあくまで現時点2024年3月末の略歴です。

08 美術史家、美術普及家、画材屋、画廊、修復家、美術館関係者、コレクター等 作家のサポート的役割を担っている方々の略歴は余り、紹介されていない方々の存在があります。東文研、ウキペディア、コトバンクの資料を中心に参考、引用、短縮し作成させていただきました。

09 略歴制作者、校正者はともにベテランコレクターですが、作家略歴作成に当たっては、専門家ではなく、素人による制作。又編集、校正に於いては、プロのご意見、期間、予算の都合の関係で、外部に依頼出来せず、会員による編集、校正を実施。

10 5500名作家略歴は10年間強を掛け、平均すると550名/年のペースで作成してきています。コツコツ積み上げてきた結果です。会員の皆様のご協力、ご理解、会の承認の元、作成推進されてきています。

11 夢は広がり、5500名作家略歴から漏れ落ちた作家を含め「続 4000名作家略歴」の制作に至りました。幕末以前の作家、工芸、写真、絵本作家、現存作家も加えています。日本画、彫刻作家も洋画家並みにピックアップのレベルをアップを目指しました。

12 作成者を小人数に絞った理由は100人いよいよ100通りの略歴が出来、混乱する可能性がある

からです。美学を修めたこともなく、能力不足で、間違いは少なくないと認識しています。一方で作家数を増すとともに職人芸の如く、極力一貫した姿勢、統一条件下の作成に心掛けてきました。13 略歴作成の背景にはこの10年間の間にネット上では作家に関する様々な情報が飛躍的に増加してきています。参考させていただくとともに、最新情報が必要な場合にはネット上情報もご参考いただくと良いと思います。

3 200文字 略歴制作者 校正者 順不同・敬称略

当略歴は冒頭に示した既存の優れた情報源から、選択、例えば20項目ほどの作家の実績があるとする6、8項目位に短く加工した作家略歴です。コツコツ時間を掛け、手作りで略歴を200文字へ文字数を制限、纏めてきた経緯があります。仮に、200文字に短縮した当該略歴に所有権があるとするれば、2022年4月30日までは あーと・わの会と略歴制作された方にあります。2022年6月の理事会、総会の決議により、2024年5月1日以降、所有権は、管理責任とともに柏わたくし美術館に移管されます。4000名の略歴は事務局担当、柏わたくし美術館が作成しています。

4 主な略歴制作者 柏わたくし美術館 堀良慶

編集・校正(一校)

堀良慶

5 奥付

名称

『続 4000名の作家略歴』

物故洋画・水彩・彫刻・版画・江戸時代前を含む日本画家に現存作家も加えた作家の200文字略歴
初版の5500名の作家略歴に加え合計9500名の作家略歴

ホームページ掲載 2024年4月「あーと・わの会」のHPに掲載 (HP担当上村真澄)

代表 理事長 平園賢一

企画・制作・編集 堀良慶

問合せ 連絡先 「あーと・わの会」事務局

〒277-0871 千葉県柏市若柴 1-358 柏わたくし美術館内

Tel ; 04-7134-8293 E-mail ; ryokeihori@yahoo.co.jp

添付参考資料

<言葉の説明>

1 日本史の時代区分は主に原始時代、古代、中世、近世、近代、現代である。

1 原始時代は、旧石器時代、縄文時代、弥生時代をさす。

2 古代は、大和時代、飛鳥時代、奈良時代、平安時代をさす。

3 中世は、鎌倉時代、南北朝時代、室町時代、戦国時代、安土桃山時代をさす。

4 近世は、江戸幕府の創立 (1603 年) から明治維新による東京遷都 (1869 年) まで、あるいは関ヶ原の戦い (1600 年) から大政奉還 (1867 年) に至る間をさす。

5 近代は、封建制廃止以後の時代、明治維新から現代に至る間をさす。

6 近代の終期、現代の始期については、世界史的な帝国主義段階に入る 1900 年 (明治 33 年) 説、社会主義国ソ連の出現の 1917 年 (大正 6 年) 説、第二次世界大戦終了の 1945 年 (昭和 20 年) 説がある。人間の意識が社会によってどのように規定されたのか、逆に人間の意識がどのように社会を変えたのかを考えると、今日、私達がおかれている状況を再認識することができる。ここでは 1945 年説を採用。

2 江戸時代

江戸生れは生まれた時期が江戸時代であれば江戸生れとした。東京でも可
江戸時代の初期、中期、後期とは

初期; 1603 年～1691 年

中期; 1692 年～1779 年

後期; 1780 年～1867 年 (大政奉還)

(幕末; 1853 年～)

以上

3 絵巻物 (えまきもの) は、日本の絵画形式の 1 つで、紙もしくは絹を水平方向につないで、長大な画面を作り、情景や物語などを連続して表現したもの。「絵巻」とも言う。絵画とそれを説明する詞書が交互に現われるものが多いが、絵画のみのももある。現存する最古の絵巻物は、奈良時代に制作された『絵因果経』とされ、室町時代までは盛んに制作され、江戸時代や明治時代にも作例がある。紙・絹などを横方向につないで、水平方向に長大な面を作り、終端に巻き軸をつけ、収納時には軸を中心にして巻き収めることができるようにした装丁形式を「卷子装」(かんすそう) と言い、このような装丁で作られた書物、経典、絵画作品などを「卷子本」、より一般的には「巻物」という。卷子本は中国、朝鮮半島、日本などの東アジアにおいて盛んに作られた。また、日本美術史用語における「絵巻物」とは、日本で制作された、やまと絵様式の作品を指すことが多い。中国で制作された巻物の絵画作品は「画卷」「図巻」等と呼ぶのが普通であり、日本人作品であっても、雪舟『山水長巻』(毛利博物館蔵) のような「唐画」作品については、「絵巻物」と呼ばれないのが普通である。日本四大絵巻といわれる『源氏物語絵巻』『信貴山縁』

起『鳥獸戯画』および『伴大納言絵詞』といわれていますが、この中の『伴大納言絵詞』は、平安京内裏における放火事件を素材とした現存の絵巻物の中で、第一級に属する秀作といわれています。

4 やまと絵 (やまとえ)

倭絵、大和絵、和絵とも書く。日本絵画史における基本的用語の一つとして、平安時代以来現在まで広く用いられたが、その概念は歴史的に何段階かに変化した。平安時代には、中国的な主題を扱った唐絵(からえ)に対するものとして、日本の風景や風俗を描いた絵、特に月次絵(つきなみえ)、名所絵などの屏風障子絵に対して用いられた。すなわち当初の語義は主題上の区別であり、様式的な概念は含まれていなかった。しかし鎌倉時代後期から宋元絵画の舶載が盛んになると、これらの中国画を唐絵と呼び、さらにその影響を受けた新様式の日本画、特に水墨画に対しても唐絵の語が用いられた。すると反対概念である「やまと絵」も内容を変化拡大させ、平安時代以来の伝統的な風俗画や風景画を広く意味するようになった。室町時代以降この種の伝統的絵画は宮廷の絵所(えどころ)、ことに土佐家(→土佐派)の人々によって世襲され、禅林を中心とする水墨画家や、和漢融合を意図する狩野派と対立するに及んで、やまと絵は流派的意義を含んだ様式概念となった。江戸時代においては住吉派や復古やまと絵の画家などにも継承され、明治以後新しい日本画を生む基盤の一つとなった。(コトバンク)

5 復古やまと絵派 (ふっこやまとえい)

江戸時代後期に古典的なやまと絵の復興を唱えた画家たちの総称。やまと絵の伝統の継承者である土佐派、住吉派などが精彩を失い形式化した時期に、平安、鎌倉時代のやまと絵復古を試みた田中訥言(とつげん)、浮田一蕙(いっけい)、冷泉為恭(れいぜいためちか)らからをさす。この派の画家は幕末の尊王思想、討幕運動と密接なつながりを持ち、波乱の多い生涯であったことも特色の一つ。画風はいずれも古典的なやまと絵の手法を身につけ、有職故実に基づく画題を好んで描き、大画面の作品に力作を残した。

5 土佐派(とさば)とは、

日本画の流派の一つ。巨勢派の巨勢公望の門人春日基光を遠祖とし、数々の名手を世に送り出した流派。本画派は、純日本的ないわゆる大和絵の伝法を樹立し、14世紀南北朝時代の藤原行光を祖とし、室町時代のおよそ200年の長きにわたって朝廷の絵所を世襲し、伝統と権勢を誇った。特に土佐光信の時代には、宮廷や将軍家と密接な関係を持ち、最盛期といえる。しかし、室町時代末期、光信直

系の孫土佐光元が但馬攻めで戦死したことにより絵所領職を失ってしまう。織豊政権の頃より狩野派の躍進を受け土佐派の勢いは減衰し桃山時代に門人土佐光吉が堺に拠点を移し一時は狩野派の下請け業者同然にまで衰退するも、江戸時代光吉の後継者土佐光則がその子土佐光起と共に京都に戻り、承応3年(1654年)光起が絵所領に復帰。流派は再興され、以後幕末までその地位を維持した。また、光吉、光則の門人である住吉如慶は江戸に行き住吉派をたて、子の住吉具慶の時に幕府の御用絵師となり、土佐派と同様に幕末まで続いた。光起は従来の土佐派の画風に加え唐絵や狩野派・琳派の技法を取り入れるなど新たな表現手法を積極的に用いていた。しかし光起・具慶以後は、新規の画題や表現に取り組むことはあまりなかった。

丁寧で繊細な作風が特徴である。土佐派は朝廷の御用絵師という立場上、浮世絵に対し否定的だったが、浮世絵師にとって土佐派が描く日本の伝統的なモチーフは、画題や様式の基盤であり、浮世絵を正統たらしめる大義、拠り所であった。岩佐又兵衛は土佐光信末流と記しており、菱川師宣も他の流派にならんで土佐派を学んだことに言及している。(ウキペディア)

6 住吉派 (すみよしは/江戸初期～幕末)

日本画の一派。江戸時代の初め、土佐派の正系土佐光吉の子(弟子とも)如慶が、後西天皇の勅によって住吉家を名乗り、鎌倉中期の画家、住吉住人慶忍(慶恩とも)を遠祖と仰いで京都に一派を興した。如慶の長男、具慶は、幕府の御用絵師となって江戸に移り、土佐家と相並んで幕末に至るまで栄えた。太政官(1915)〈上司小剣〉三「床には住吉派の絵師の書いた見事な清少納言の大幅が(略)掛かっていた」

7 巨勢派 (こせは)は、平安時代初期から室町時代を経て、明治時代まで連なる絵師の一族。この流派は他の流派のように統一した画風を表すものではなく、あくまで巨勢金岡に始まる家系・一門の画系を指す。元は宮廷絵師であったが、第十二世永有が興福寺大乘院の絵仏師になって以降、子孫と絵仏師として家系を繋いだ。大乘院の絵仏師としての巨勢家は室町末期までしか確認できないが、江戸時代に入っても巨勢家が大乘院の絵仏師の任にあったと思われる。巨勢公望の門人春日基光は土佐派の流祖となった。

8 狩野派 (かのうは/室町中期(15世紀)から江戸末期)

日本画の流派の一つ。室町後期、狩野正信に始まる。中国の北宋画を基礎にし、抑揚の強い水墨画的線と土佐派的な濃い彩色法が調和した画風で、桃山・江戸時代を通じて画壇の中心的勢力を維持

した。元和七年(一六二一)守信(探幽)が御用絵師となって以来、宗家を中橋狩野と呼び、分家の鍛冶橋、木挽町を合わせて狩野三家、また、これに浜町を加え奥絵師四家という。狩野流。(コトバンク)
狩野派 II (かのうは)は、日本絵画史上最大の画派であり、室町時代中期(15世紀)から江戸時代末期(19世紀)まで、約400年にわたって活動し、常に画壇の中心にあった専門画家集団である。室町幕府の御用絵師となった狩野正信(狩野氏の祖・藤原南家工藤茂光の子の狩野宗茂の子孫)を始祖とし、その子孫は、室町幕府崩壊後は織田信長、豊臣秀吉、徳川将軍などに絵師として仕え、その時々権力者と結びついて常に画壇(かたん)の中心を占め、内裏、城郭、大寺院などの障壁画から扇面などの小画面に至るまで、あらゆる分野の絵画を手掛ける職業画家集団として、日本美術界に多大な影響を及ぼした。(ウキペディア)

9 長崎派 (ながさき・は/江戸時代)

江戸時代、長崎を中心に興った絵画の諸流派の総称。舶載の西洋画を模倣した若杉五十八・川原慶賀らの洋画派、中国化された西洋風写実の黄檗画派、渡来黄檗僧逸然の弟子である渡辺秀石や広渡一湖らによる漢画派、伊孚九いふきゅうらの南画派、沈南蘋によって伝えられ熊代熊斐くましろうひ)によって栄えた写生的な花鳥画派など、多様な展開を示した。(コトバンク)

長崎派 II (ながさきは/江戸時代) (ウキペディア)

江戸時代鎖国体制下において、オランダ・清朝との交渉があった長崎で生まれた、諸画派の総称。この諸画派は、漢画派(北宗画派)・黄檗派・南蘋派・南宗画派(文人画派)・洋風画派・長崎版画の6つに分けられる。長崎を通じて流入した新様式が、上方や江戸の画壇に広まり、新興絵画を生む契機となった。とりわけ南蘋派の影響は大きく、写実性を追求する姿勢が芽生えた。長崎には、頻りに画僧・画人が清朝から渡来した。正保年間(1644-48年)、黄檗僧逸然性融の来日が嚆矢となり、以後沈南蘋・伊孚九・費漢源などが来日した。鎖国後の絵画史は以下の2つの時期に分けられる²⁾。

<第1期>ポルトガル人退去後、明末清初(17世紀中頃から終わり)の戦乱を逃れて、亡命した中国人によってもたらされた中国文化、とりわけ黄檗文化が伝播した時期。

<第2期>19世紀初頭の文化文政期に、唐絵目利の画家や町民画家と清朝の画風が混ざり合って相互に影響した時期。

200年以上にわたり、海外からの文化を真っ先に受けた長崎の特異な土壌が、長崎派を形成した。しかし開国後は、南宗画(文人画)系の祖門鉄翁・木下逸雲らが人気を博したものの、長崎派はまたいに衰え、明治に入り、その役割を終えた。

10 漢画派 (北宗画派)

この画派は**長崎漢画**もしくは**唐絵**と呼ばれ、主に明清画の影響が色濃い。宋元代の絵画様式を模倣した、室町時代の水墨画とは別系統の漢画である。1642年(正保2年)に来日した黄檗僧逸然性融は、長崎漢画の祖と呼ばれ、羅漢・達磨・布袋像などの道釈人物画を多く描いた。逸然以前にも范道生・陳瓚・陳玄興といった渡来画人が作画している。また陳賢の道釈人物図が、渡来僧によって幾たびか持ち込まれた。逸然の門弟に河村若芝・渡辺秀石などが育ち、北宗画風の漢画を善くした。逸然のほかにも絵画をたしなむ黄檗僧は多く、この画派は長崎派の主流とされる。河村若芝は一家をなし、門下に上野若元・山本若麟・牛島若融らがつらなり幕末まで続いた。

11 黄檗派

黄檗宗の渡来僧がもたらした黄檗美術のうちでも、頂相は、濃厚な色彩表現と顔貌の正面性、その陰影法に特徴がある。これは明代に江南地方で活躍した肖像画家曾鯨の流れを汲む様式である。隠元が日本にもたらした「費隠通容像」は、曾鯨の門弟のひとり張琦の作で、当時の画家に衝撃をもって迎えられた。同じく曾鯨門とされる楊道真は隠元に随行してきた画人で、主に隠元像を手がけた。その弟子となった喜多長兵衛は隠元・木庵・即非頂相を中心に制作した。道矩の子の喜多元規は黄檗派の代表格に挙げられ、黄檗僧に限らず、在留唐人や大名など各地に200以上の肖像画を残している。「隠元禅師像」・「独立和尚像」・「鍋島直条像」などがある。黄檗画像の表現法は、のちの鶴亭や片山楊谷などが受け継がれ南蘋派などと混交して独特の画法を生んだ。またその写実的表現は長崎版画(長崎絵)にも影響を与えた。

12 南蘋派

1731年享保16年に来日した、清朝の画家沈南蘋と、その一派による画派。細密な彩色花鳥画に特長がある。円山応挙や伊藤若冲など新興の画家の台頭を惹起した。

13 南宗画派(文人画派)

1720年(享保5年)に伊孚九が来船し、長崎に南宗画を伝えた。池大雅・桑山玉洲などの多くの画家が私淑した。続いて1734年(享保19年)に来日した費漢源、張秋穀(1786年・天明6年)、江稼圃(1804年・文化元年)と合わせて**来船四大家**と呼ばれる。このほかにも宋紫岩・徐雨亭・陳逸舟など多くの清人が長崎に南宗画を伝えている。別系統で日本に伝わっていた南画と渾然一体となり、全国に広まっていた。長崎の南宗画派からは幕末に鉄翁祖門・木下逸雲などの文人画家を輩出した。

14 洋風画派

オランダ人によって西洋画法が持ち込まれるなどして、他に先駆けて生島三郎左や野沢久右衛門などの、蛮流と呼ばれる初期の洋風画家が誕生している。その後、18世紀後半に若杉五十八、ついで荒木如元・石崎融思、シーボルトのお抱え絵師である川原慶賀などが現れた。

15 長崎版画

1645年(正保2年)に刊行された木版画『万国総図』が知られるが、初期のものは大半が作者不明である。およそ安永(元号)、天明年間(1772-1789年)頃から作品の数が増加し始め、最盛期は文化文政期(1804-30年)であった。大半は唐人屋敷に住んでいた唐人、出島屋敷に住んでいたオランダ人を描いたものである。

16 歌川派 (うたがわは/江戸後期～明治期)

歌川一門ともいひ、江戸時代後期から明治にかけて大きな勢力を持った浮世絵師の一流派である。芝居小屋や役者にとって、歌川一門は似顔絵を錦絵にしてもらう宣伝効果があり持つつ持たれつとの関係にあった。歌川派の浮世絵はゴッホなど印象派の画家にも影響を与えた。浮世絵版画に西洋の遠近法を取り入れた歌川豊春から始まり、歌川豊国、歌川豊広が弟子となった。幕末には、美人画を得意とした歌川国貞(三代目豊国、豊国の門人)や、武者絵の歌川国芳、風景画の歌川広重がいる。明治期にも国貞と国芳の各一門は一大勢力であったが、浮世絵の需要は新しい写真技術などによってかわられていくことになった。(ウキペディア)

17 琳派 (りんぱ)

桃山時代後期に興り近代まで活躍した、同傾向の表現手法を用いる造形芸術上の流派、または美術家・工芸家らやその作品を指す名称である。本阿弥光悦と俵屋宗達が創始し、尾形光琳・乾山兄弟によって発展、酒井抱一・鈴木其一が江戸に定着させた。

本阿弥光悦(1558～1637年)、俵屋宗達(江戸初期)、俵屋宗雪(江戸前期)、喜多川相説(江戸前期)、尾形光琳(1658～1716年)、尾形乾山(1663～1743年)、渡辺始興(1683～1755年)、深江芦舟(1699～1757年)、中村芳中(生年不詳～1819年)、酒井抱一(1761～1828年)江戸琳派とも、鈴木其一(1796～1858年)、池田孤邨(1801～1866年)、酒井鶯菰(1808～1841年)、村越其栄(1808～1867年)、山本光一(1843年?～1905年?)、尾形月耕(1859～1920年)、神坂雪佳(1866～1942年)

18 法印(第一位)、法眼(第二位)、法橋(第三位)とは?

法印 (ほういん) 僧侶(そうりよ)の位階(僧位)の最上位で、僧綱(そうごう)位(僧階)の僧正(そうじょう)にあたり、法印大和尚(たいわじょう)位僧正といふ。その下が法眼(ほうげん)和尚位僧都(そうず)、法橋上人(ほっきょうしょうにん)位律師(りっし)である。したがって本来は僧侶の取締りにあたる役人的僧侶の敬称で、定まった定員があったが、時代とともにその数を増し、のちに仏師や絵師の敬称にまで用いられるようになった。とくにこの僧位を乱用したのは修験道(しゅげんどう)であって、先達(せんだつ)であれば法印権大僧都(ごんたい そうず)を許された。したがって山伏の別称としていまも「法印さん」とよばれている。

法眼 (ほうげん)

日本の僧位の一つ。僧綱(そうごう)の中級位。法眼大和尚(かしょう)位とも。僧都に授けられる位で、官位でははじめ正3位に相当。864年(延暦2年)に叙せられたのが最初。中世・近世では法印、法橋(ほっきょう)と同じく僧以外の医者や絵師、連歌師などにも与えられた。

法橋 (ほっきょう)

1 《「法橋上人位」の略》僧位の第三位。法眼に次ぐ。僧綱の律師に相当し、五位に準ぜられた。

2 中世以後、医師・仏師・絵師・連歌師などに僧位に準じて与えられた称号。

法橋上人位の略。律師の僧綱に授けられる僧位で、法印、法眼とともに貞観6(864)年2月に制定された。のちに一般の僧にも授けられるようになり、人数も次第に増加し、さらに仏師や絵師にも叙任されるにいたった。

19 画家と絵師

明治以降は、絵師とは言わず**画家**と表示し、江戸時代以前を**絵師**と表示しています。

絵師と云うのは

1 浮世絵では絵を描く人は絵師、版を彫る人は彫り師、刷る人は刷り師と云うような分業でやられたようです。

2 今でも伝統的な日本美術分野では絵師と云う場合があると思います。明治以降絵師とは言わず画家と云うようになったのではないかと思います。明治以降は画家と云うようになったようです。

江戸後期から明治期に活躍した作家は絵師と表示しました。

3 現代では「絵師(えし)」とは、「イラスト(絵を描く人・描いた人)」のことを意味している言葉です。

「絵師」の元々の意味は「画家・画工・浮世絵の下絵を描いた人」や「日本の古代から中世にかけて、公

的機関で絵画を描いていた一定の技術者集団」ですが、現代では「主にクライアントの依頼を受けて、美少女キャラなどのさまざまなイラストを描いている人」という意味合いで用いられています。

当略歴では2項を参考に、明治以降絵師とは言わず**画家**と表示し、江戸時代以前を**絵師**と表示しています。

絵師（えし）

画師とも書く。現在用いられている「画家」と同意語であるが、もとは宮廷の絵事をつかさどる技術者の職名であった。『日本書紀』推古(すいこ)天皇 12年(604)9月条に寺院や仏像を荘厳(しょうこん)するため、黄文(きぶみ)画師、山背(やましろ)画師、實秦(すけあき)画師、河内(かわち)画師、檜(ひの)画師などを定め、その戸課を免じたとあるのが初見である。これによると、画師は寺や仏像を装飾するため文様をかくのが主であったらしい。奈良時代になると、中務(なかつかき)省に画工司(えたくみのつかさ)があり、そこに画師4人が置かれている。平安時代になると、内匠(たくみ)寮に縮小して画工司が移されて宮廷画所(えどころ)となり、その画所の預(あずかり)が画師または絵師と称されるようになった。鎌倉時代以降は、職名とは関係なく、絵を専門とする者を画師または絵師と呼び習わすようになった。江戸時代になると、幕府の職名として復活し、御用絵師のなかで、狩野(かのう)の中橋(なかはし)、木挽町(きびきちよう)、鍛冶橋(かじはし)、浜町の四家を奥絵師とよんだ。

20 画僧の表示

絵仏師(えぶっし)とは、僧籍にあって、主に仏教絵画の制作や仏像の彩色などに従事した専門職。中国北宋もしくは日本鎌倉時代以後に、主に水墨画を描く禅僧(例外あり)を特に**画僧**(がそう)と呼んで、他の絵仏師と区別される場合もあるが、両者が混用される場合もあり、厳密な区別がある訳ではない。当略歴では画僧を主に使用していますが絵仏師表示も可。

21 院派（いんぱ/平安時代後期から室町時代の仏師の一派）

七条大宮仏所、六条万里小路仏所を形成し、足利將軍家の仏師となった。祖は、定朝の孫とされる院助。鎌倉時代、新様式と言う点では慶派の作品が目立つが、記録によると貴族の世界では院派、ついで円派の仏師が前代からの基盤を受け継いで活躍した。ただし、旧来の伝統を引いて、仏像に銘記を施す例が慶派に比べて少なく、仏師個人の作例を追っていくことが比較的難しい。14世紀に入ると、真言律宗や禅宗との関わりが生まれ、律宗が東国に教線を伸ばし、禅宗が北条氏の菩提寺になるのに従い、院派も東国へ進出した。南北朝時代に入ると、室町幕府といち早く結びついた。院吉は、等持院大仏師職と丹波国分寺地頭職を安堵され、その子院広はそれを継いで広範に活躍した。彼らの作

風は、「唐様」とも言うべき独特の形式美をもつもので、他派や後世に少なからぬ影響を与えた。平安時代後期から室町時代の仏師の一派

22 円派（えんぱ）

平安時代中期から鎌倉時代の仏師の一派。祖は定朝の弟子長勢、三条仏所を形成し京都を中心に活躍。仏師号に「円」の一字を持つことから名付けられ、同じく仏師号の一字に由来する慶派・院派とともに京都に仏所を構え、造仏活動を行う。円派は明円以降、奈良、鎌倉に主流が移り衰微する。

23 内国勸業博覧会(ないこくかんぎょうはくらんかい)は明治時代の日本で開催された博覧会である。国内の産業発展を促進し、魅力ある輸出品目育成を目的として、東京(上野)で3回、京都・大阪で各1回の計5回を政府主導で開催し、最後のが最も規模が大きい。

明治時代は近代化促進のために数多くの展覧会が開かれたが、内国勸業博覧会はその中でも代表的な博覧会である。「内国」と付くのは、第一回内国博を主導した大久保利通の意向による。これは国内物産の開発・奨励を第一義の目的としていたという意味もあるが、外国人の治外法権と内地通商権の不許可という事情にもよる。他に、明治期の日本には万国博覧会を開催するだけの国力がまだなかったことも大きい。

明治初期の内国博の役割は、物品を一堂に集めることで優劣を明らかとし、出品者の向上心や競争心を刺激して、産業増進を達成することであった。明治中期日清戦争を経ると、精神的部分に国家的団結の場としての効果が期待された。そのシンボルは天皇であり、明治天皇はしばしば内国博に行幸している。そもそも内国博を開くのは天皇の重要な役割で、第4回を除く開場式に臨幸し勅語を發した。第2回以降総裁・副総裁職が設けられるが、実務は副総裁が担当するものの、総裁には皇族が選ばれた。

しかし、会を重ねるごとに内国博の効果に疑問を持つ人々が増えるようになる。そもそも博覧会の効果は即効性がなく目に見えにくい。そこで博覧会の効果としては副次的であるが、わかりやすい博覧会入場者もたらず経済効果に注目が集まった。入場者を増やすために娯楽的な会場も増え効果もあったが、内国博の本来の目的である国家を富強に導くプロジェクトとしての色合いが薄まり、興行やお祭りに近い娯楽イベントになっていった。また、20世紀に入ると政府が主導しなくとも、内国博レベルの勸業諸会であれば、地方自治体あるいはその連合体で開催可能となっていたことも大きい。こうなると日露戦争後の財政難の政府には、規模増大を続ける内国博は手に負えない事業となった。第6回内

国博に相当する博覧会を「日本大博覧会」の名で開催する勅令が1907年(明治40年)3月に公布されたものの、まもなく延期となり、同年11月には中止が決定した。(ウキペディア)

24 内国絵画共進会(ないこくがまがきょうしんかみ) 1882年(明治15)と84年に開催された官営の展覧会。維新とそれに続く文明開化の風潮は、日本固有の美術を衰微させたが、やがて反省が起こり伝統保存の機運が高まった。端緒になったのは1877年に開催された内国勸業博覧会の成功と79年に創立した竜池会(古美術の鑑賞と調査のため、佐野常民らによって組織された)の運動であった。東京大学に招聘(しょうへい)されたアメリカ人フェノロサが竜池会で講演し、洋画を排して日本画を尊重すべきことを説いたことが、その機運をいちじるしく助長した。こうして絵画共進会開催の運びとなるが、当局は規則に洋画の出品拒否を掲げた。また管轄が農商務省であったことは、伝統美術工芸の保護がなお殖産興業策につながっていたことを物語る。82年秋の第1回は上野公園で開かれて約2000人が出品し、橋本雅邦、狩野探美、田崎草雲、森寛斎らが銀賞、84年春の第2回には1500余人が出品し、守住貫魚(つらな)が金賞、川辺御楯、山名貫義(つらよし)、滝和亭(かてい)、幸野煤嶺、雅邦らが銀賞を受賞した。(コトバンク)

25 白牙会 1924(大正13)年に水戸で生まれた美術グループ「白牙会」は、県内に美術館もギャラリーも、県展も無かった時代に、茨城出身の若手洋画家3人が集まり、公会堂などを間借りしながら全県的な公募展を開催した。会を支えたのは、ひとえに会員の情熱と努力であった。前年の関東大震災により帰郷した彼らは、洋画をめぐる環境が東京と大きく隔たることを実感し、その普及に努めることを決意したのである。初期には、県ゆかりの中村彝、辻永ら東京で活躍中の作家の家を訪ね、彼らの作品を借用するなど工夫を重ねたところ大いに話題を呼び、連日多数の来場者で賑わった。会の活動は、1953(昭和28)年に第23回展を開催して幕を閉じたが、約30年の歴史の中で500名以上の作家が出品したことを挙げても、本県美術界に与えた影響は少なくないと言える。

26 龍池会(りゅうちかみ)は、明治時代初期の美術団体。「竜池会」と書かれる場合もある。明治20年(1887年)に「日本美術協会」(にほんびじゅつきょうかみ)へと改称した(日本美術協会は現在も存続している)。明治初年には急激な西洋化の結果、従来の美術作品は価値を落とし、作家も需要を失って窮乏していた。このような状況を危惧した佐野常民、河瀬秀治、九鬼隆一らは明治11年(1878年)3月、上野の天龍山生池院(弁天堂)に集まった。これが後の「龍池会」の始まりである。会頭は佐野、副会頭は河瀬が担当し、古美術品の鑑賞会(「観古美術会」)や同時代の作品の品評会を主な活動とし、

上野で会合を行った。当初は旧来の美術をそのままに保護しようという方針であったが、重要なプレーンであったフェノロサは狩野芳崖を通じて和洋折衷の新しい日本画の創出を目指すようになり、内部での対立を生み出した。この結果、同17年(1884年)に九鬼や岡倉覚三(天心)、今泉雄作ら文部省組が離反して新たに「鑑画会」を発足させ、この運動は明治20年(1887年)の東京美術学校の設立へと到る(同校の授業開始は明治22年)。明治18年(1885年)6月に『龍池会報告』を創刊し、龍池会が日本美術協会と改称する同20年(1887年)12月まで、ほぼ毎月毎に刊行した。新興勢力の鑑画会の革新運動に危機感をいだいた龍池会側は宮内省との関係を深め、明治20年(1887年)に有栖川宮熾仁親王を総裁に迎えて「日本美術協会」へと改称する。純粋な伝統絵画を保存しようという方針の下に伝統画派の重鎮が集まり、鑑画会系の革新派が新派と呼ばれたのに対して、龍池会側は旧派と呼ばれた。(ウキペディア(Wikipedia))

27 粉本 (ふんぼん)

① 東洋画で、絵の下書。したえ。古く、胡粉を用いて下絵を描き、のち墨を施したところからいう。〔世説新語補・巧芸〕

② 後日の研究や制作の参考として模写した絵画。随筆・好古小録(1795)書画「賢聖障子粉本。〔割注〕画者姓名不伝。但正和前粉本也」

③ 参考とするもの。手本となるもの。模範。

西国立志編(1870-71)〈中村正直訳〉二「これを粉本(注)タネとして、更に改補」

28 博物画(はくぶつが、英: natural history illustration)もしくは図鑑絵・図譜・画譜とは、動物・植物および鉱物などの観察対象の姿を詳細に記録するために描かれる絵である。植物画(英: botanical art)と動物画(英: zoological art)に大別され、動物画はさらに外形を描く肖像画(英: portrait)と内部を描く解剖画(英: anatomical art)に区分される。博物画 と動植物画は博物画で統一

29 本草学(ほんぞうがく)

動・植物学、鉱物学等にわたる壮大な学問であり、ほぼ博物学に相当する。中国渡来のこの学問は、江戸期に日本独自の本草学を創成し、小野蘭山、畔田翠山により、その研究は頂点へと達した。明治期、本草学は欧米流学問の奔流に呑み込まれていくが、その成果は生物学、民俗学、方言学等に継承された。学問史に異彩を放つ日本本草学の消長。

「Kunstchronik」誌(1997年2月)には、「美術史家という自由業のすすめ」および「美術史家と出版社」のガイド記事が掲載されている。「美術史家」の仕事像については、ミュンヘンの中央美術史研究所の協力で改訂された手引書が出されており、その仕事内容全般にわたる詳しい情報が記されている。ニュルンベルクの連邦労働局が1998年に発行した「職業知識のための冊子」も参考のこと。

34 「大阪」と「大坂」の違いは

「大阪」は、もともと近世までは、「大坂」と表記されていましたが、「坂」の文字は「土に返る」という意味にも取れ、縁起が悪いという理由から、明治5年に「大阪」と書かれるようになったといわれています。

35 大阪美術協会 由来 戦中から戦後にかけて大阪では、竹内無憂樹主宰の新樹社(昭和16年)が結成され、日本画の公募展(新樹社展)が大阪市立美術館で開催されていた。戦後、文化復興と大阪における日本画の発展をめざして、竹内無憂樹の呼びかけにより、当時大阪画壇で活躍していた矢野鐵山ら日本画家により、昭和26年に大阪美術協会が結成された。創立委員は、矢野鐵山、菅楯彦、生田花朝女、福田芳穂、平野長彦、山口艸平、久保田耕民、赤松雲嶺、竹内無憂樹(いずれも故人)の9名であった。昭和26年大阪北区未生会館で研究会が重ねられていた。昭和27、28年には第一回、第二回の創立委員による大美会展が、大阪大丸百貨店で開催された。創立6年後の昭和31年3月18日に、公募展として第一回大美会展が大阪市立美術館で開催されることとなった。その後、今日まで毎年大阪市立美術館において開催されてきた。

36 「彫塑」とは石や木などの硬いものを彫って像を作ることと、粘土などの柔らかく形を変えやすいもので像を作ることとを合わせた言葉です。石や木で像を作ることと粘土などで像を作るとは別の創作活動ですが、像を作るという点で一纏めにした言葉と言えます。また石や木は一度失敗するとやり直できませんが粘土などの柔らかいものであれば失敗しても調整したり作り直せるため、石や木で像を作る前に目安として完成形を粘土で作ったものの呼び名も「彫塑」です。

37 「彫刻」とは石や木のような硬いものを彫って刻むことで造形しながらの像を作ることや、それによって出来上がった作品です。石や木以外にも金属を使うこともあれば土で作られる「彫刻」もあります。基本的に一つの塊を削り取って造形を進めていくので失敗すると取り返しがつきにくい芸術です。そのため最初に完成形を決めておき紙に設計図を書いたり粘土などで像を作って確認できるようにしてから実際に彫り始めることもあります。

38 牙彫 (げちよう)動物の牙を用いた細工物。光沢があって美しいので象牙が主として用いられる。奈良時代からみられ、流行したのは江戸中期以降で、殊に根付(ねつけ)に細密な技巧が施された。明治以降その技巧が外国人にも喜ばれ、さらに盛んに彫刻的なものも作られた。げまり。

39 陶彫 我が国における陶を用いた造形は、古代の呪術や地母神信仰用の土偶に端を発し、続いて古墳時代における葬送儀礼用の生き物や器財を象った埴輪や、中世の信仰主題の狛犬等を経て、近世では仏教主題の陶作品や、香炉や置物へと展開、発展していった。さらに、近代における西洋の美術教育制度や美術・芸術の諸概念、諸技法の導入によるあらゆる面での急速な革新、展開期を経て、現代では窯芸家が陶土を用いて立体の具象作品やオブジェを制作したり、彫刻家が、作品の素材として陶土を用いたりすることは珍しいことではなくなった。つまり、陶工と呼ばれる職人だけでなく、芸術家がジャンルを超えて表現の1素材として陶土を使用するようになったと言える。それは、生き物の生と死の還元を象徴する「土」を用いて作品を制作するという行為や、人間の技術だけでなく、「火」という自然の要素が加わることによって作品が完成される過程に意義を見出しているからである。そして現在、陶土の特性や特質が活かされた優れた立体作品は数多く存在し、日々生み出されてもいる。また、そうした状況と併行して、現在の日本の窯芸界や美術界では、陶土を素材として制作された彫刻作品やオブジェを指す言葉として、「陶彫」という用語を当てるのが一般化していると言える。筆者は、彫刻制作者として陶彫制作を幾度も経験する中で、素焼きされた陶土が呈する茜色や紅樺色、炭化した煤色等の多様な色調や、施釉された作品のガラス質の表面がもつ独特の柔らかな肌合いに魅了された。また、それと同時に、窯芸技法や素材に関する深い知識なしには、自身の完成予想像に近づけるのが困難であることにも、逆に醍醐味を感じた。そして、現代作家の陶彫や陶土を素材としたインスタレーション作品を数多く観る中で、作品の素材としての陶土の可能性は極めて大きいと確信するようになった。以上のような自身の経験から、筆者は「陶彫」に興味を覚え、長い歴史的展開を見せた「陶」が、「窯芸」において、呪術や信仰、葬礼、茶道、装飾といった目的から離れて純粋に作品の素材として使用され始める時期や、その転換が何に起因しているのかについて、また、「陶彫」という用語がいつ誰によって使用され始めたのかについて次第に疑問を持つようになった。しかし、それらの問題は未解明であるどころか、「陶彫」に関する研究自体が皆無に近いことが分かった。そこで筆者は、本論文において、以下の構成に従って、未解明の「陶彫」の創始者が誰であり、何故、またいつ陶彫が創始されたのかを解明するとともに、現在幅広く使用されている「陶彫」という用語の定義を試み、さらに開始期から現在に至る

までの展開を寺内と沼田の弟子や孫弟子、日本陶彫会会員の作品の概観を中心に跡付けることで、今後の彫刻制作者、研究者として筆者がとるべき方向性を見極めることにした。

出典； 崇城大学芸術学部研究紀要 西村加奈子

40 インターメディア (intermedia)

光・音響・色彩などの表現と、身体の動きなどが、新しい形で合流した芸術表現。1960年代のヌーボー・リアリズムや日本の具体グループの動向をさす。→メディアアート

で表示。

03 作家略歴は、100人の略歴作成者がいれば100人の略歴が出来るのが実態です。略歴に求める情報、知識、経験にも相違があります。無理に統一せず。相違していてもそのまま掲載。一方、略歴を求める方の内容も各々相違があると認識。

04 <国、地域の漢字の表示> アジア； 亜、国際； 際、フィリピン； 比、アメリカ； 米、スペイン； 西、ブラジル； 伯、フランス； 仏、イギリス； 英、インド； 印、オーストラリア； 豪、オランダ； 蘭、イタリア； 伊、ヨーロッパ； 欧、カナダ； 加、ベルギー； 白、ドイツ； 独、メキシコ； 墨、ソ連； ソ、ロシア； 露 中国； 支 等を使用。ヨーロッパ、仏に巡遊した場合； 「渡欧」、「渡仏」、フランスに滞在； 「滞仏」、ヨーロッパに「滞在」、「滞欧」に略統一表示。

<都市名> カルフォルニアか？カリフォルニアは「カリフォルニア」とします。ニューヨークは「NY」表示も可。(文字数減の為)、ロスアンゼルス、ロサンゼルスは「ロサンゼルス」に統一、「ロス」「LA」表示も可。サンフランシスコは「シスコ」表示も可。

マルセイユ、マルセーユは「マルセイユ」で表示。ベネチア、ヴェネチア、ヴェネティアは「ヴェネツィア」で統一、「ヴェネツィア」は伊語、「ベニス」は英語です。ベニス表示も可。

05 美術団体・公募団体(洋画、彫刻中心)の表示

I 二科展、二科会展は「二科展」で表示。二科会員、二科会会員は「二科会会員」で表示。同様に「二科会会友」で表示。

II 「第二紀会」は1947年～52年活動。1953年、第7回展より「二紀会」に改称。二紀展、二紀会展は「二紀展」で表示。

III 1889～1901年「明治美術会」の後進が1902～56年「太平洋画会」、1957年「太平洋美術会」に改称。

1904～28年「太平洋画会研究所」は1929年「太平洋美術学校」に改称。1957年に再開し、現在は太平洋画会研究所 注意：太平洋画研究所は間違い、会を挿入。「太平洋画会研究所」表示。展覧会は「太平洋展」表示。

IV 独立美術協会展・・・「独立展」に統一(文字数減の為) 独立賞と協会賞の区別をすること「例示：独立展で独立賞、独立展で協会賞」表示又は「独立賞」単独表示も可。

1928年「一九三〇年協会」洋画研究所を開設。「独立美術研究所」は1931年2月に開設。

「1930年協会」表示”は他の年代表示と間違ふ可能性があり、区別する為、「一九三〇年協会」、「一九三〇年協会」展 表示とする。

V ヒュウザン会か？フユウザン会か？はどちらも可、発足当初1、2年はヒュウザン会、その後フユウザン会に変更。明確でない場合「ヒュウザン会(のちフユウザン会)」で表示。

VI 1936年「新制作派協会」発足、1951年～「新制作協会」に改称。展覧会表示は「新制作派協会展」は文字数減対策もあり「新制作展」表示も可とした。賞の種類は、「協会賞」と「新作家賞」

<以下は画家5500名略歴に掲載文をコピー掲載>

略歴作成に於ける文字の簡略化、言葉の統一について

01 極力200文字略歴で統一。200文字に収まらぬ場合、長くなるケースも容認。

02 掲載内容が異なる場合には“略歴作成者が違い、やむをえず”2つ、3つの略歴が併存、「II、III」

が設けられているが、事実上、「新作家賞」が唯一の賞だといえる。受賞者は直ちに「新制作協会協友」に推挙される。これは他の団体でいうところの「会友」に該当。51年5月創造美術は新制作派協会と合流、新制作協会日本画部(派が消滅)となり、9月に第15回「新制作展」が開催。

VII 「旺玄社」は戦前名、1947年「旺玄会」は戦後に改称。展覧会は「旺玄展」

VIII 国画会展と国展はあるが国画創作協会の第一部は1928年で解散。国画会となり、展覧会の呼称は「国展」と呼ぶ。「国展」で表示。

IX 「槐樹社」は1924～1934年設立。「新槐樹社」は1958年設立。

X 美術(洋画・水彩・版画・彫刻中心)関係の会・公募展の表示

「大潮会」、「大潮展」で表示。「白日会」、「白日会展」で表示。「東光会」、「東光展」で表示。「光風会」、「光風会展」で表示。「一水会」、「一水会展」で表示。「モダンアート協会」、「モダンアート展」で表示。「春陽会」、「春陽展」で表示。「立軌会」、「立軌展」で表示。「美術文化協会」、「美術文化展」で表示。「行動美術協会」、「行動展」又「行動美術展」で表示。「自由美術協会」、「自由美術展」で表示。「主体美術協会」、「主体展」で表示。「大調和会」、「大調和展」で表示。「新槐樹社」、「新槐樹社展」で表示。「創元会」、「創元展」、で表示。「示現会」、「示現会展」で表示。「二科会」、「二科展」で表示。「二紀会」、「二紀展」で表示。「太平洋美術会」、「太平洋展」で表示。「独立美術協会」、「独立展」で表示。「一九三〇年協会」、「一九三〇年協会」展」で表示。「新制作協会」、「新制作展」で表示。「東光会」、「東光展」で表示。「旺玄会」、「旺玄展」で表示。「国画会」、「国展」で表示。「光陽会」、「光陽展」で表示。「青枢会」、「青枢展」で表示。「日洋会」、「日洋展」で表示。「新樹会」、「新樹会展」で表示。「安井賞展」、「安井賞候補新人賞」で表示。「青樹社」、「青樹社展」で表示。「朱葉会」、「朱葉会公募展」で表示。「汎美術協会」、「汎美展」で表示。「新世紀美術協会」、「新世紀展」で表示。「国際文化カレッジ」、「日美展」で表示。「日本山岳画協会」、「日本山岳画協会」で表示。「日本水彩画会」、「日本水彩展」で表示。「水彩連盟」、「水彩連盟展」で表示。「日本版画協会」、「版画展」で表示。「日本板画院」、「板院展」で表示。「日本彫刻会」、「日本彫刻会展覧会」又は「日彫展」で表示。「日本陶彫会」、「陶彫展」で表示。「構造社」、「構造展」及び「新構造社」、「新構造展」で表示。注意;日本画中心の異画会の展覧会は「異画会展」で表示。

06 美術研究所の表示

1998年白馬会研究所(正式には白馬会洋画研究所)に学んだ画家は小林萬吾、白滝幾之助、湯浅一朗らがいる。文字数を少しでも削るため、「白馬会研究所」で統一。洋画は極力削除しています。

白馬会葵橋洋画研究所は「葵橋洋画研究所」で統一(文字数減の為)、(1923年まで存続)学んだ画家は和田三造、岸田劉生、木村莊八、牧野虎雄、川路柳虹らがいる。

当初は白馬会会員の菊池鑄太郎の私宅に置かれ、1899年赤坂、溜池の合田清の工房に移された。後に、菊坂、駒込に第2、第3の研究所が設置(菊坂研究所)されるに至り、「白馬会溜池研究所」と称した。「白馬会溜池研究所」を表記も可としています。

- (1) 1904～28年「太平洋画会研究所」は1929年「太平洋美術学校」に改称。1957年に再開し、現在は太平洋画会研究所。太平洋画研究所は間違いで会を挿入。……「太平洋画会研究所」で表示 展覧会は「太平洋展」。
- (2) 日本水彩画研究所は間違い、会を入れる。……「日本水彩画会研究所」で表示
- (3) 1928年「一九三〇年協会」洋画研究所を開設、「独立美術研究所」は1931年2月に開設された。
- (4) 本郷洋画研究所、のち1923年本郷絵画研究所と改称。本郷美術研究所とされている場合もあり、本郷岡田三郎助美術研究所いずれの表記も可。極力「本郷洋画研究所」で表示
- (5) 川端絵画研究所、川端画学校は、どちらも表示可、当初は川端絵画研究所です、明確であれば表示。
- (6) 東京文化財研究所は「東文研」で表示。東京都美術館は「都美館」、東京国立近代美術館は「東近美」で表示も可(文字数減)。

07 戦前の京都市美術展覧会は「市展」、戦後の京都市美術展は「京展」と略して表示も可。

08 「安田火災東郷青児美術館」1976～2001年、「損保ジャパン東郷青児美術館」2002年に改称。

09 1919年資生堂ギャラリー開廊、表示は記録に従う。1943～44年資生堂画廊を名乗った。

10 MAVO、マヴォは「MAVO」で表示

MAVOについて：関東大震災直前の1923年ベルリンから帰国した美術家・村山知義の呼びかけで結成された。結成時のメンバーはこのほかに、旧未来派美術協会の美術家・柳瀬正夢、詩人の尾形龜之助、画家の大浦周蔵と門脇晋郎がいる。彼らは「ダダイスト」ならぬ「マヴォイスト」を自称。マヴォの語義には「同人の頭文字」や「撒き散らした紙片の文字」など諸説あるが定かではない。後に岡田龍夫、牧寿雄、戸田達雄および高見沢路直(のちの、田河水泡)、亡命ロシア人女性画家ブブワ、プロレタリア画家岡本唐貴が参加している。1925年解散。MAVO(マヴォ)とは、戦前日本のダダ(美術系統)のグループ。日本のダダ運動の先駆をなす。

11 賞の表示他の団体展でも受賞は「〇〇賞」とし、極力、受賞の文字は付けない。(文字数減の為)

12 美術大学、学校の科目は判る場合、文字数に余裕がある場合、極力、○○科卒と科名まで表示で表示。

13 固有名詞・言葉の表示

I アバンギャルド、アヴァンギャルド、アバシナルド、アヴァンガルドは「アヴァンギャルド」で極力表示。(但し、固有名詞は除きます)アバンギャルド、または、アヴァンギャルド(仏: avant-garde)、また漢語表現で「前衛」と呼ばれている。“横須賀市美術館では古賀春江、東郷青児らが主宰するアヴァンギャルド洋画研究所と表示しているが東京国立近代美術館、京都国立近代美術館、ウキペディアでは古賀春江、東郷青児らが主宰するアヴァンガルド洋画研究所と表示している。「アヴァンガルド洋画研究所」で統一。「アヴァンギャルド芸術運動体「世紀」(桂川寛展 熊谷守一美術館)と表示している。ナゴヤ・アヴァンガルト・クラブ、ナゴヤ・アバシナルド・クラブは固有名詞扱いで「ナゴヤアヴァンガルドクラブ」で表示。

II アート・ステューデンツ・リーグで統一。短縮しない。

III 英語“シュールレアリスム”、仏語“シュルレアリスム”がありますが「シュルレアリスム」で統一。(文字数減)

IV ディスプレイとディスプレイは「ディスプレイ」で統一。英語のスペルからいると、ディスプレイが正しい。

V ブリジストン美術館、ブリヂストン美術館は「ブリヂストン美術館」が正しい。

VI マチス、マティスは「マティス」で統一。

VII 「レジオンドヌール勲章」で極力統一。極力等級を明示。「シュヴァリエ」が多い。

<参考>レジオンドヌールには等級があり、高位から『グランクロワ』(Grand-Croix, 大十字)、『グラントフィシエ』(Grand-Officier, 大将校)、『コマンドゥール』(Commandeur, 司令官)、『オフィシエ』(Officier, 将校)、『シュヴァリエ』(Chevalier, 騎士、勲爵士)の5階級に分かれる。さらにこれより上位に、「名誉軍団」総長たるフランス大統領には頸飾が与えられる。フランス人の場合はシュヴァリエから順番に階級が上がるが、オールド外となる外国人の場合はその限りではなく、功績次第でいきなり上位章を受ける事もある。

VIII アーチスト、アーティストは「アーティスト」に統一。

IX 「アカデミー・ドラ・グラン・シヨミエール」「グラント・シヨミエール」「アカデミー・グラン・シヨミエール」は「アカデミー・グラン・シヨミエール」で表示。

14 分類の為の簡略表示(赤の簡略化は検索の為です)洋画:洋画家、版画:版画家、水彩:水彩画家、彫刻:彫刻家、日本画:日本画家、立体:立体作家、南画:南画家、装幀・装丁:装幀家、装丁家、

童画:童画家、挿絵:挿絵作家、水墨:水墨画家、浮世絵:浮世絵師、美教:美術教育 インスタ:インスタレーション、パフォー:パフォーメンス作家、ハブ:ハブニング作家、イラスト:イラストレーター。グラフィック:グラフィック・デザイナー、オブジェ:オブジェ作家、メディア:メディア・アーティスト、映像作家、ビデオ:ビデオ・アーティスト、舞美:舞台美術、漫画:漫画家、アニメ:アニメーション作家、SPリア:スーパーリアリズム、環芸:環境芸術、鉛筆:鉛筆画家、パス:パステル作家、カラー:カラー・ジュ、ペン:ペン画家、ガラス:ガラス絵作家、壁画:壁画作家、パノラマ:パノラマ画家。表紙:表紙絵、ルポ:ルポルタージュ、書:書家、造形:造形作家、作家、絵師:絵師浮世絵の原画を描くことを職業とする人間のこと。絵描き、画工とも言う。町絵師、浮世絵師など。当略歴では江戸時代以前の絵描きを絵師、又は画家と表示。修復:絵画修復家、美研:美術研究者、美評:美術評論家、美史:美術史家、美普:美術普及家、美政:美術行政、キュー:学芸員、大学長:美術大学長、美所:美術研究所、東文研:東京文化財研究所、写真:写真家、陶芸:陶芸家、工芸:工芸家、人形:人形師、人形作家、漆芸:漆芸家、図案:図案家、染色:染色家、作家、修復:修復家

一部美術協会、画派、グループ等の簡略表示について:「具体」:具体美術協会・具体・GUTAI、「九州派」:50~60年代活躍した前衛グループ、「モノ派」:モノを主体とした表現グループ。「パンリアル」:パンリアル美術協会。「デモクラート」:デモクラート美術家協会 等の団体については特別に赤字で分類を記入した。

この分類・表示統一は後の整理、検索の為です。また分離の為に、事務局に於いて単独で実施されたものです。分類には不確実性、漏れ落ち、間違いの可能性が残り、再チェックが必要であることを承知下さい。

以上